禪林象器箋序

五葉結果之後、稟承祖胤者、多附居律寺而已矣。百丈和尚創意而設禪居、震耀儀表規矩、以謀令法久住。乃覩有師徒焉、有堂舍焉、有禮則焉、有器服焉、以義定名。論云、語於名轉、名於義轉。止此。名義既穪矣。須是抽繹其義、而發明其名也。忠顓蒙、有志于茲。大凡佛教儒典、諸子歴史、詩文小説、目之所及、意之所詣、遠蒐近羅、或對斜陽、或挑殘燈、多累歳月、稍覺無遺漏焉。且輟簡、而題其稟以禪林象器箋矣。易曰、見乃謂之象、形乃謂之器。如今所謂象器者、名義之所競趣也。

寛保元年辛酉秋九月　日

葆雨堂主八十九翁道忠無著題

＊

禪林象器箋序

五葉、果を結ぶの後、祖胤を稟承する者、多く律寺に附居するのみ。百丈和尚、意を創めて禪居を設け、儀表規矩を震耀して、以て「令法久住」を謀る。乃ち覩る、師徒有り、堂舍有り、禮則有り、器服有り、義を以て名を定む〔ることを〕。論に云く、「語は名に於いて轉じ、名は義に於いて轉ず」と。此こに止まる。名義既に穪し。須く是れ其の儀を抽繹して、其の名を發明すべし。忠顓蒙〔なるも〕、茲こに志有り。大凡そ佛教・儒典、諸子・歴史、詩文・小説、目の及ぶ所、意の詣ずる所、遠く蒐し近く羅して、或いは斜陽に對し、或いは殘燈を挑げ（＝かき立てる）、多く歳月を累ねて、稍や遺漏無きことを覺ゆ。且く簡を輟めて、其の稟に題するに禪林象器箋を以てす。易に曰く、「見わるる乃ち之を象と謂い、形する乃ち之を器と謂う」と。如今の所謂る象器は、名義の競い趣く所なり。

寛保元年辛酉秋九月　日

葆雨堂主八十九翁道忠無著題

＊

禪林象器箋序

〔達磨大師が、〕「五葉が果を結ぶだろう」〔と予言して〕後、祖師の後継ぎ〔の位〕を稟承だ者たちは、多くの場合、律宗の寺に附居しているにすぎなかった。百丈〔懐海〕和尚は、創意して禪居を設立し、儀表となる規矩を〔天下に〕震耀にし、〔『法華経』にいわゆる〕「〔仏〕法を永久に存続するようにさせる」ことを図った。そこで、〔百丈が定めた『清規』に拠れば、禪寺には〕師匠や徒弟がおり、大小のお堂があり、礼節・規則があり、器物や衣服があって、〔それぞれ〕意義によって名目が定められていることが分かる。『瑜伽師地論』に、「語は名によって転れ、名は義によって転れる」〔〔引用文は〕ここまでで終わり〕と言っている〔通りである〕。〔その後〕名目や意義が非常に数多くなったので、その儀を抽繹して、その名目〔の意義〕を発明らかにしなくてはならなくなった。忠は顓蒙ではあるが、志をおこし、およそ仏教や儒教の書物、諸子百家や歴史書、詩文や小説など、目が届き、考えが及ぶかぎり、遠近をとわず蒐集して網羅し、ある時は斜陽にむかい、ある時は消えかけた灯火をかきたて、長い歳月を積んで、ようやく遺漏がないと感じるようになった。〔そこで〕ひとまず〔資料を〕簡びだすのをやめ、その原稿に『禪林象器箋』という題をつけた。『易経』に言っている、「〔形が〕具現したものを『象』とよび、〔『象』にもとづいて〕形づくられたものを『器』とよぶ」と。今、〔題目に〕いわゆる『象器』とは、名目と意義とが競って〔集まり〕趣いているところなのである。

寛保元年（一七四一）辛酉秋九月　日

葆雨堂主、八十九翁、道忠無著題す

＊

（1）五葉結果＝初祖達磨大師が二祖慧可に与えたとされる伝法偈の後半二句、「一華開五葉、結果自然成（一輪の花に五枚の花びらが開き、果実は自然に結ばれる）」（『景徳伝燈録』巻三・T51-219c）を踏まえ、省略したもの。

（2）祖胤＝『祖庭事苑』巻六「祖胤」の項に「継嗣なり」（Z113-76b）とある。「胤」一字で「子孫」の意であるから、「祖師の後継者」を指す。

（3）稟承＝『六祖壇経』「付嘱第十」に「恵能は是れ三十三祖為り。従上の諸祖、各おの稟承有り。汝等向後、遞代流伝、毋令乖誤）」（T48-361c）とあるように、祖師の位を順次受け継ぐこと。

（4）多附居律寺而已矣。百丈和尚創意而設禪居＝百丈懐海の禅林創設についてのこの記述は、楊億（九七四～一〇二〇）が景徳元年（一〇〇四）に撰述した「古清規序」（『勅修百丈清規』巻八附著・T48-1157c～1158b）に基づいたものと思われ、同序には「多居律寺」（1157c）や「創意別立禅居」（1158a）と、ここと類似した表現の文章が見える。尚、「古清規序」は『景徳伝燈録』巻六「百丈懐海禅師」条の後に、「禅門規式」（T51-250c～251b）として附録されているが、撰者名や撰述年の記載は無い。

（5）震耀＝『漢語』に「①雷声震動、電光閃耀。極言其威猛之状。②震動。顕耀。③震耳耀目」（第一一冊・p.696）とあるが、何れにしても「其の光明震耀す（其光明震耀）」（『金剛経会解了義』Z39-210b）など、一般的には自動詞として用いられている。目的語を取る場合もあるが、「声光赫赫として海内を震耀す（声光赫赫震耀海内）」（『天如惟則禅師語録』巻二・Z122-417d）、「臨済の道をして、天下に震耀せしむ（使臨済之道、震耀天下）」（『了菴清欲禅師語録』巻九・Z123-394d）、「終に大器と成り、末法に震耀す（終成大器、震耀末法）」（『御選語録』巻一三・Z119-250c）、「能く仏の慧命を続いで、古今に震耀す（能続仏慧命、震耀古今）」（Z125-475b）など、対象目的語ではなく場所目的語に限られている。ここでは「儀表規矩」が「震耀」の対象目的語となっており、訳し難いが、恐らく「儀表規矩」を「世界」「禅門」「仏教」の中で「震耀」させたという意味であろう。

（6）令法久住＝『法華経』「見宝塔品第十一」（T9-33c～34a、岩波文庫本㊥ p.192）の偈に二箇所見える語。本文は音読しているが、書き下すと「法をして久しく住せしむ」となる。

（7）乃覩有師徒焉、有堂舎焉、有禮則焉、有器服焉、以義定名＝（4）に挙げた「古清規序」の中に、「長老」「方丈」「法堂」「僧堂」「掛搭道具」「入室請益」「上堂陞座」「斎粥」「普請」「寮舎」「維那」などが列挙されているのを踏まえたものであろう。

（8）禮則＝『左伝』文公六年の伝に「之を導くに礼則を以てす（導之以礼則）」とあり、『会箋』は「礼則とは猶お礼法と曰うがごときなり（礼則猶曰礼法也）」（漢文大系本・巻八・p.40）と注している。『漢語』の「礼則」条にも、「猶礼法・礼制。礼節法則」（第七冊・p.960）とある。

（9）以義定名＝意義と名目。たとえば、宋・四明知礼の『観無量寿経疏妙宗鈔』巻一に、「名に拠りて義を求むれば、万に一も得る無し。義を以て名を定むれば、万に一も失う無し（拠名求義、万無一得。以義定名、万無一失）」（T37-196b）とある。

（10）論云、語於名轉、名於義轉＝『瑜伽師地論』巻七三（T30-704a）にそのまま見える。『瑜伽論記』巻一九に「語を以て名を説き、義を詮す（以語説名、詮於義）」（T42-760b）とあるように、言葉によって名目が付けられるが、その名目は意義を示したものだということ。

（11）穊＝ぎっしり詰まっていること。混み合っていること。「稠密」の意（『大漢和』巻八・p.622）。

（12）易曰、見乃謂之象、形乃謂之器＝『易経』「繫辞伝上」（岩波文庫本㊦ p.241）にそのまま見える。

（13）葆雨堂＝照冰堂と共に無著禅師が用いていた号（『続近世禅林僧宝伝』第一輯巻中・p.163）。「照冰」の号は、「寒風、水を激して冰と成し、杲日、冰を照らして水と成す。冰水本自り無情にして、各各、時に応じて至る。世間の万物皆な然り。不用強いて擬議を生ずることを用いざれ（寒風激水成冰、杲日照冰成水。冰水本自無情、各各応時而至。世間万物皆然。不用強生擬議）」（『五燈会元』巻一七「潜庵清源禅師」条・Z138-333b、『続伝燈録』巻一六・T51-575b など）の語に拠ったものと思われるが、「葆雨」は典拠未詳であり、熟語して辞書類にも挙げられていない。「葆」は形容詞としては「茂る」「貴重な」の意。動詞では「守る」「保つ」の意で、「葆守」（『管子』度地篇）・「葆真」（『荘子』田子方篇）などの用例がある。号の使用時期について、「照冰」は、『小叢林略清規』三巻の「自叙」に、「貞享改元（一六八四）甲子臘月書于洛西照氷之室」（T81-688b）とあり、龍華院に在った三十二歳の時に既に用いていたことが知られる。「葆雨」については、『虚堂録犂耕』末尾の跋文に「三住正法山七十七翁道忠無著、漫識于華園龍華葆雨堂」（禅文化研究所影印本㊦ p.1216）、『葛藤語箋』の「叙」に「九十二翁葆

雨忠題」（中文出版社影印本・p.869）とあり、この「禅林象器箋叙」の「葆雨堂主八十九翁道忠」という記述も合わせ考えれば、老境に入って以後、使用されたものと思われる。

（14）寛保元年辛酉秋九月日葆雨堂主八十九翁道忠無著題＝『禅林象器箋』全二十巻は、無著禅師六十三歳の正徳五年（一七一五）の撰述とされる（『続近世禅林僧宝伝』第一輯巻中・p.169）。ただ、『禅林象器箋 緒餘』の末尾に付された識語に拠れば、「自元禄十年丁丑正月朔資始撰次、到明年戊寅六月十二日断手。　此是旧撰十巻者」（中文出版社影印本・p.867）とあり、四十五歳の元禄十年（一六九七）正月から翌年の六月にかけて、十巻本の『禅林象器箋』を編纂していたことが知られる。また、『禅林象器箋』巻二〇の末尾識語に、「『禅林象器箋』全二十巻　校譌、寛保元年辛酉三月朔日資始、毎日二十紙、至五月廿六日闋功。八十九翁無著道忠識」（中文出版社影印本・p.846）とあり、最終的に、八十九歳の寛保元年（一七四一）の三月から五月のほぼ三ヶ月をかけて、毎日二十丁ずつの校正を行い、九月に完成したことになる。前後四十四年をかけた大著である。尚、無著禅師の思想については、柳田聖山「無著道忠の学問」（中文出版社影印『勅修百丈清規左觿・庸峭餘録』下冊附録・p.1335~1376）に詳しい。また、その年譜と著述紹介として『学聖　無著道忠』（禅文化研究所・一九八六）がある（同論文は二〇〇五年七月二十九日に花園大学国際禅学研究所のＨＰ上に掲載されており、簡単に見ることができる。http://iriz.hanazono.ac.jp/newhomepage/muchaku_report/index.htm）。

※西村惠信著『禅林象器箋抄釈』（梅蔭禅寺・平成四年）＝『正法輪』に三十五回にわたって連載されたものを纏めて出版。全一二三項、一五一頁。

『禪林象器箋』卷第一　　神京妙心龍華沙瀁道忠無著甫輯

○第一類　區界門（區界類）

●叢林

『智度論』云、僧伽秦言衆。多比丘一處和合、是名僧伽。譬如大樹叢聚、是名爲林、一一樹不名爲林、除一一樹亦無林。如是一一比丘不名爲僧、除一一比丘亦無僧。諸比丘和合、故僧名生。

『祖庭事苑』云、梵語貧婆那、此云叢林。『大論』云、如上所引。又『大莊嚴論』云、如是衆僧者、乃是勝智之叢林。一切諸善行、運集在其中。又『雜阿含』二十五、佛告阿難、汝遙見彼青色叢林否。唯然已見。是處名曰優留曼荼山。如來滅後百歲、有商人子、名優波掘多。當作佛事。教授師中最爲第一。即四祖優波毬多。梵音楚夏爾。以祖師居之、今禪庭稱叢林也。

忠曰、優留曼荼山在摩偸羅國、見『雜阿含』。又以優波毬多所居青山叢林、今禪庭稱叢林者、睦菴附會也。固無根據矣。

『寶積經』菩薩見實會云、過去有王、名曰尼彌。了達諸法、如法爲王。乃至。三十三天欲得見彼尼彌王。帝釋天主即告御臣名摩多梨莊嚴千馬寶車、往閻浮提鞞提呵國迎尼彌王。乃至。爾時摩多梨又復將王到須彌頂。爾時尼彌王遥見青茂叢林、告摩多梨言、彼林定是不顛倒衆生所居之處。摩多梨言。大王。此是忉利諸天善法之堂。廣說如彼。

『宋高僧傳』石霜諸禪師傳云、諸得石霜山便議終焉之志。云云。堂中老宿。長坐不臥。屹若椔杌。天下謂之石霜枯木衆、是也。南方謂之叢林者翻禪那爲功德叢林也。

『大乘義章』云、禪者是其中國之言。此飜名爲思惟修習。亦云功德叢林。乃至。功德叢林者、從果爲名。智慧神通四無量等是其功德。衆德積聚說爲叢林。定能生之因從果目。是故說爲功德叢林。

『中峯本禪師東語西話』云、世稱叢林者蓋取喻於草木也。法道之所寄材器之所從出焉。然草木培植則豐沾濡則榮霜雪則彫斧斤則敗。叢林以無上大道爲培植、以慈悲喜捨爲沾濡、以偸安利養爲霜雪、以貧欲瞋恚爲斧斤。主叢林者不諳其培植之道沾濡之理則草木病矣。況偸安利養之霜雪貧欲瞋恚之斧斤時時斫伐而殞穫之。故其草木區萌芽蘖猶不暇而欲望叢林之盛材器之萃。難矣哉。

『聯燈會要』智門光祚禪師章云、示衆云、汝等諸人、横擔拄杖、出一叢林、入一叢林。你道、叢林有幾種。或有梅檀叢林、梅檀圍繞。或有荊棘叢林、荊棘圍繞。或有荊棘叢林、梅檀圍繞。或有梅檀叢林、荊棘圍繞。只如四種叢林、是汝諸人、在阿那箇叢林裏、安身立命。若無安身立命處、虛踏破草鞋。閻羅王、徵你草鞋錢、有日在。

忠按、四種叢林出『智度論』說。彼荊棘作伊蘭。『智度論』云、如梅檀譬喻經中說、有梅檀林伊蘭圍之。有伊蘭林梅檀圍之。有梅檀梅檀以爲叢林。有伊蘭伊蘭自相圍遶。佛諸阿羅漢亦復如是。佛住善法解脱中。諸阿羅漢亦住善法解脱中。住法相應眷屬莊嚴。佛以大衆圍遶如須彌山王十寶山圍遶。如白香象王白香象圍遶。如師子王師子衆圍遶。佛亦如是。佛爲世間無上福田。與諸弟子圍遶共住。

『華嚴經』淨行品云、若見叢林當願衆生諸天及人所應敬禮。

『長阿含經』世記經閻浮提洲品說、閻浮樹邊空地種種叢林名。

＊

●叢林

(a)『智度論』云、僧伽秦言衆。多比丘一處和合、是名僧伽。譬如大樹叢聚、是名爲林、一一樹不名爲林、除一一樹亦無林。如是一一比丘不名爲僧、除一一比丘亦無僧。諸比丘和合、故僧名生。

＊『大智度論』巻三

僧伽、秦言衆。多比丘一処和合、是名僧伽。譬如大樹叢聚、是名為林、一一樹不名為林、除一一樹亦無林。如是一一比丘不名為僧、除一一比丘亦無僧。諸比丘和合、故僧名生。（T25-80a）全く同文

(b)『祖庭事苑』云、梵語貧婆那、此云叢林。『大論』云、如上所引。又『大莊嚴論』云、如是衆僧者、乃是勝智之叢林。一切諸善行、運集在其中。又『雑阿含』二十五、佛告阿難、汝遙見彼青色叢林否。唯然已見。是處名曰優留曼荼山。如來滅後百歳、有商人子、名優波掘多。當作佛事。教授師中最爲第一。即四祖優波毬多。梵音楚夏爾。以祖師居之、今禪庭稱叢林也。

＊『祖庭事苑』巻二の「叢林」条に、「梵語貧婆那、此云叢林。『大論』云、【僧伽、秦言衆。多比丘一処和合、是名僧伽。譬如大樹叢聚、是名為林、一一樹不名為林、如一一比丘不名為僧。諸比丘和合故。僧聚処得名叢林。】又『大莊厳論』云、如是衆僧者、乃是勝智之叢林。一切諸善行、運集在其中。又『雑阿含』二十五、仏告阿難、汝遙見彼青色叢林否。唯然已見。是処名曰優留曼荼山。如来滅後百歳、有商人子、名優波掘多。当作仏事。教授師中最為第一」。即四祖優波毬多。梵音楚夏爾。以祖師居之、今禪庭稱叢林也」（Z113-15a）『大智度論』以外は、全く同文。『大智度論』からの引用は『禅林象器箋』では省略されているが、(a)と異同がある。

＊『大莊厳論経』巻一《偈の一節》

如是衆僧者、勝智之叢林、一切諸善行、運集在其中。（T4-262b27-29）

＊『雑阿含経』巻二五

爾時、世尊（＝仏）告〔尊者〕阿難、〔「此摩偸羅国、将来世当〕有商人子、〔名曰掘多、掘多有子、〕名優波掘多。〔我滅度後百歳、〕当作仏事、〔於〕教授師中最為第一。〔阿難、〕汝遙見彼青色叢林不（＝否）」。〔阿難白仏、〕「唯然、已見。〔世尊〕」。「〔阿難、是処名為優留曼荼（＝茶）山。如来滅後百歳、〔此山当有那吒跋置迦阿蘭若処、此処随順寂黙最為第一〕」。（T2-177b15-22）『祖庭事苑』は「有商人子…最為第一」の部分を倒置して引用している。

＊cf『雑阿含経』巻二三

仏臨般涅槃時、降伏阿波羅龍王、陶師旃陀羅、瞿波梨龍。詣摩偸羅国、告阿難曰、「於我般涅槃後、百世之中、当有長者、名瞿多、其子、名曰優波崛多。当出家学道、無相仏教授於人、最為第一、当作仏事」。仏告阿難曰、「遙見彼山不」。阿難白仏、「見也。世尊」。仏告阿難、「此山名優留曼荼（＝茶）、是阿蘭若処名那荼（＝茶）婆低、随順寂静」。

（T2-165b21-29）

《梵音楚夏爾》楚夏の用例

＊隋天竺三蔵闍那崛多訳『仏本行集経』巻三二「二商奉食品第三五」

前代訳称提謂波利、此蓋婆羅門楚夏耶。未知孰是。（T3-802b3）

＊智顗『維摩経玄疏』巻二

一翻名者、外国人語自有不同。猶如此土楚夏之別。（T38-524b28-29）

＊『肇論』「涅槃無名論第四」

僧肇言、泥曰、泥洹、涅槃，此三名前後異出。蓋是楚夏不同耳。云涅槃、音正也。（T45-157b）

※泥曰、泥洹、涅槃、此の三つの名が前後異って出てくるが、思ふにこれは中夏と辺疆との語の不同にすぎない。涅槃といふのが、音が正しい。（塚本善隆編『肇論研究』p.59、法蔵館・昭和三〇年）

＊『肇論疏』巻三

言楚夏不同者、夏是中國、楚是辺国。書（『論語』八佾第三）云、「夷狄之有君、不如諸夏之亡」。注云、「諸夏、中國也」。所以夏稱中国者、皇甫士安帝王世紀云、禹受封為夏伯、在禹貢豫州方外之南。於秦漢前、属潁川。本韓地。今河南陽翟、是也。避舜子於陽城潁川。今河陽城也。夏受禅於平陽。或在安邑。玄湜謂、疏主雖引爾許古迹、以釈中夏。此但是外書。周孔典籍。論此九州之大唐中夏殊。未消論意也。何者、論主肇公言泥曰等三名之別何也。只道西方五天竺國、呼喚不同。雖名目有殊、而其義一也。所以楚夏者、謂五天語。亦比此大唐楚夏之別也。如大唐呉児、喚火為燬、詔水為錘、呼來為離。呼喚雖殊、義皆一也。豈可以葱嶺之東為中國乎。（T45-191c13-27）

＊『肇論新疏』巻三

泥曰、泥洹、涅槃、此三名前後異出。蓋是楚夏不同耳。云涅槃音正也。　西來梵僧五竺不同。郷音成異。亦猶此方楚夏輪重。（T45-229c15-17）

＊『一切経音義』巻一

西牛貨洲（古云瞿伽尼、或云倶耶尼、或云瞿陀尼。皆梵音楚夏不同也。正梵云過嚩捉。此義翻為牛貨）。（T54-314c20）

＊『一切経音義』巻五

髑髏（上音独、下音婁。『説文』云、髑髏、頂骨也。埤蒼云頭骨也。『字書』云、脳蓋也。或作髑髏、或名頭顱、或名［宅＊頁］、徒各反、顱音盧、皆一義。亦由楚夏音殊、軽重訛転耳）。（T54-334c14-15）

＊『大唐内典録』後漢伝訳仏経録第一

窃観上代有経已来賢徳筆受、毎至度語無不称云訳胡為漢。且東夏九州名西域為天竺者、是総名也。或云身毒。如梵称此方為脂那、或云真丹、或作震旦。此蓋承声有楚夏耳。若当称漢、漢止劉氏両代一号。已後禅譲魏晉不同。須依帝王称謂甄別。今為此録悉改正之。（T55-224a9-15）

＊『歴代三宝紀』巻四

一号且九州地喚於西方、総言天竺。故漢書言、身毒国也。身毒即天竺。有中天竺。即仏生処天竺地也。有東有西有南有北。故云五天。而彼五天、目此東国、総言脂那、或云真丹、或作震旦。此蓋取声有楚夏耳。若当称漢。漢止劉氏。前漢後漢両代一号。後漢禅魏。魏弱三分政有呉蜀。魏雖呑蜀還復禅晋。自晋統馭十割九州地各有主。訳経依処人処既異、翻則不同。須依帝王称謂甄別。今為此録悉依正之。」（T49-53a23-b7）

＊蓋音有楚夏者、土風之乖也。（『文選』巻六・左太沖「魏都賦」、子部、類書類、宋・祝穆撰『古今事文

類聚』続集巻二「居処部・古今文集・雑著」四庫全書本・20b、顧炎武『日知録』巻二九「方音」左思魏都賦、四庫全書本・13a）

＊序曰、楚夏声異、南北語殊。搜訪異同、撰集為六経三伝訳文。（宋王応麟撰『玉海』巻四二「唐経典釈文」四庫全書本・40b）

＊文有磨滅、言有楚夏、出有先後。（『玉海』巻四三「芸文・讎正五経石経」1b）

＊音隔楚夏。（『南史』子部、類書類、明董斯張撰『広博物志』巻二六、42a）

＊楚夏殊音。（史部、編年類、晋袁宏撰『後漢紀』巻九・3a）

（c）忠曰、優留曼荼山在摩偸羅國、見『雑阿含』。又以優波毬多所居青山叢林、今禪庭稱叢林者。睦菴附會也。固無根據矣。

＊『景徳伝燈録』巻一

第四祖優波毬多者、吒利国人也。亦名優波崛多。又名鄔波毬多。姓首陀。父善意。十七出家、二十證果。随方行化、至摩突羅国。得度者甚衆。（T51-207b1-4）

＊『翻梵語』巻九

優留曼荼山（訳曰優留者大、曼荼者第一）　商人子経。（T54-1044a9-10）

（d）『寶積經』菩薩見實會云、過去有王、名曰尼彌。了達諸法、如法爲王。乃至。三十三天欲得見彼尼彌王。帝釋天主即告御臣名摩多梨莊嚴千馬寶車、往閻浮提鞞提呵國迎尼彌王。乃至。爾時摩多梨又復將王到須彌頂。爾時尼彌王遥見青茂叢林、告摩多梨言、彼林定是不顛倒衆生所居之處。摩多梨言。大王。此是忉利諸天善法之堂。廣説如彼。

＊『大宝積経』一二〇巻・巻六一～七六「菩薩見実（菩薩見実経）」・巻七六「四転輪王品・第二六」

過去有王、名曰尼弥。了達諸法、如法為王。（T11-431c17-18）

＊『大宝積経』巻七六「四転輪王品第二六」

三十三天…〔我等在此〕欲得見彼尼弥〔大〕王。〔爾時〕帝釈天主、即告御臣名摩多梨〔言、汝当前来。可〕疾（＝荘）厳〔備諸天〕千馬宝車、往閻浮提鞞提呵国《迎》尼弥王〔所〕。（T11-432a11・26~b1）

＊『大宝積経』巻七六「四転輪王品第二六」

爾時摩多梨、又復将王到須弥頂。爾時尼弥王、遙見青茂叢林、告摩多梨言、彼林定是不顛倒衆生所居之処。（T11-432b23-26）

（e）『宋高僧傳』石霜諸禪師傳云、諸得石霜山便議終焉之志。云云。堂中老宿。長坐不臥。屹若椔杌。天下謂之石霜枯木衆、是也。南方謂之叢林者翻禪那爲功德叢林也。

＊『宋高僧伝』巻一二「唐長沙石霜山慶諸伝」

得石霜山便議終焉之志。（T50-780c21）

＊『宋高僧伝』巻一二

堂中老宿長坐不臥、屹若椔杌。天下謂之石霜枯木衆、是也。南方謂之叢林者、翻禅那為功徳叢林也。（T50-780c27~781a1）

(f)『大乗義章』云、禪者、是其中國之言。此飜名爲思惟修習。亦云功徳叢林。乃至。功徳叢林者、從果爲名。智慧神通四無量等是其功徳。衆徳積聚説爲叢林。定能生之、因從果目。是故説爲功徳叢林。

＊『大乗義章』巻一三「八禅定義四門分別」

禅者、是其中国之言。此翻名為思惟修習。亦云功徳叢林。（T44-718a7-8）

＊『大乗義章』巻一三

功徳叢林者、従果為名。智慧神通四無量等是其功徳。衆徳積聚説為叢林。定能生之。因従果目。是故説為功徳叢林。（T44-718a12-14）

(g)『中峯本禪師東語西話』云、世稱叢林者、蓋取喻於草木也。法道之所寄、材器之所從出焉。然草木培植則豐、沾濡則榮、霜雪則彫、斧斤則敗。叢林以無上大道爲培植、以慈悲喜捨爲沾濡、以偸安利養爲霜雪、以貧欲瞋恚爲斧斤。主叢林者、不諳其培植之道、沾濡之理、則草木病矣。況偸安利養之霜雪、貧欲瞋恚之斧斤、時時斫伐而殞穫之。故其草木區、萌芽蘖、猶不暇、而欲望叢林之盛材器之萃、難矣哉。

＊『天目中峰和尚広録』巻二〇「東語西話続集下」

世稱叢林者、蓋取喻於草木也。法道之所寄、材器之所從出焉。然草木培植則豊、沾濡則栄、霜雪則彫、斧斤則敗。叢林以無上大道爲培植、以慈悲喜捨爲沾濡、以偸安利養爲霜雪、以貪欲瞋恚爲斧斤。主叢林者、不諳其培植之道、沾濡之理、則草木病矣。況偸安利養之霜雪、貪欲瞋恚之斧斤、時時斫伐而殞穫之。故其草木區、萌芽蘖、猶不暇、而欲望叢林之盛材器之萃、難矣哉。（和刻本・37b~38a、校訂蔵経本・659b）

(h)『聯燈會要』智門光祚禪師章云。示衆云、汝等諸人、横擔拄杖、出一叢林、入一叢林。你道、叢林有幾種。或有栴檀叢林、栴檀圍繞。或有荊棘叢林、荊棘圍繞。或有荊棘叢林、栴檀圍繞。或有栴檀叢林、荊棘圍繞。只如四種叢林、是汝諸人、在阿那箇叢林裏、安身立命。若無安身立命處、虛踏破草鞋。閻羅王、徵你草鞋錢、有日在。

＊『聯燈会要』巻二七「隋州智門光祚禪師（凡十二〔之第一〕）」

示衆云、汝等諸人、横担拄杖、出一叢林、入一叢林。儞道、叢林有幾種。或有旃檀叢林、旃檀圍繞。或有荊棘叢林、荊棘圍繞。或有荊棘叢林、旃檀圍繞。或有旃檀叢林、荊棘圍繞。只如四種叢林、是汝諸人、在阿那箇叢林裏、安身立命。若無安身立命処、虛踏破草鞋、閻羅王、徵儞草鞋銭、有日在。（Z136-443b）

＊cf『五燈会元』巻一五「随州智門光祚禅師」

上堂。汝等諸人、横担拄杖、出一叢林、入一叢林。你道、叢林有幾種。或有旃檀叢林、旃檀圍繞。或有荊棘叢林、荊棘圍繞。或有荊棘叢林、旃檀圍繞。或有旃檀叢林、荊棘圍繞。祇如四種叢林、是汝諸人、在阿那箇叢林裏、安身立命。若無安身立命処、虚踏破草鞋、閻羅王、徴你草鞋銭、有日在。（Z138-291d）

(i)

忠按、四種叢林出『智度論』説。彼荊棘作伊蘭。『智度論』云、如梅檀譬喩經中説。有梅檀林伊蘭圍之。有伊蘭林梅檀圍之。有梅檀梅檀以爲叢林。有伊蘭伊蘭自相圍遶。佛諸阿羅漢亦復如是。佛住善法解脱中。諸阿羅漢亦住善法解脱中。住法相應眷屬莊嚴。佛以大衆圍遶如須彌山王十寶山圍遶。如白香象王白香象圍遶。如師子王師子衆圍遶。佛亦如是。佛爲世間無上福田。與諸弟子圍遶共住。

＊『大智度論』巻三「序品」

如『梅檀譬喩經』中言、「有梅檀林、伊蘭圍之。有伊蘭林、梅檀圍之。有梅檀、梅檀以為叢林。有伊蘭、伊蘭自相圍繞。」仏諸阿羅漢、亦復如是。仏住善法解脱中、諸阿羅漢亦住善法解脱中、住法相応、眷属荘厳。仏以大衆圍繞、如須弥山王、十宝山圍繞。如白香象王、白香象圍繞。如師子王、師子衆圍遶。仏亦如是。仏為世間無上福田、与諸弟子圍繞共住。（T25-83a）

(j)

『華嚴經』淨行品云、若見叢林當願衆生諸天及人所應敬禮。

＊八〇巻本『大方広仏華厳経』巻一四「浄行品第十一」

若見叢林、当願衆生、諸天及人、所応敬礼。（T10-70c）

(k)

『長阿含經』世記經閻浮提洲品説閻浮樹邊空地種種叢林名。

＊三十七種類の叢林…『長阿含経』巻一八「第四分世記経第十一　閻浮提洲品第一」

去大金剛山不遠有大海水。海水北岸有大樹王、名曰閻浮。圍七由旬、高百由旬、枝葉四布五十由旬。其邊空地復有叢林、名菴婆羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰閻婆、縱廣五十由旬。復有叢林名曰娑羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰多羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰那多羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為男、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為女、縱廣五十由旬。復有叢林名曰男女、縱廣五十由旬。復有叢林名曰散那、縱廣五十由旬。復有叢林名曰梅檀、縱廣五十由旬。復有叢林名曰佉訓羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰波椶婆羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰毗羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰香椶、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為梨、縱廣五十由旬。復有叢林名曰安石留、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為甘、縱廣五十由旬。復有叢林名呵梨勒、縱廣五十由旬。復有叢林名毗醯勒、縱廣五十由旬。復有叢林名阿摩勒、縱廣五十由旬。復有叢林名阿

摩犁、縱廣五十由旬。復有叢林名梓、縱廣五十由旬。復有叢林名甘蔗、縱廣五十由旬。復有叢林名葦、縱廣五十由旬。復有叢林名竹、縱廣五十由旬。復有叢林名舍羅、縱廣五十由旬。復有叢林名舍羅業、縱廣五十由旬。復有叢林名木瓜、縱廣五十由旬。復有叢林名大木瓜、縱廣五十由旬。復有叢林名解脱華、縱廣五十由旬。復有叢林名瞻婆、縱廣五十由旬。復有叢林名婆羅羅、縱廣五十由旬。復有叢林名修摩那、縱廣五十由旬。復有叢林名婆師、縱廣五十由旬。復有叢林名多羅梨、縱廣五十由旬。復有叢林名伽耶、縱廣五十由旬。復有叢林名葡萄、縱廣五十由旬。(T1-116a~b)

【一】叢林

①『智度論』[三ノ十六丈]云、僧伽、秦言衆。多比丘一處和合、是名僧伽。譬如大樹叢聚、是名爲林、一一樹不名爲林、除一一樹亦無林。如是一一比丘不名爲僧、除一一比丘亦無僧。諸比丘和合、故僧名生。

＊

『智度論』[三の十六丈]に云く、「僧伽は秦(＝中国)に衆と言う。多くの比丘一處に和合す、是れを僧伽と名づく。譬えば大樹の叢がり聚まる、是れを名づけて林と爲し、一一の樹を名づけて林と爲さざるも、一一の樹を除きて亦た林無きが如し。是くの如く、一一の比丘を名づけて僧と爲さざるも、一一の比丘を除けば亦た僧無し。諸もろの比丘和合す、故に僧の名生ず」と。

＊

○『智度論』[三ノ十六丈]云…故僧名生＝『大智度論』巻三(T25-80a)に全く同文が見える。

②『祖庭事苑』[二ノ二丈]云、梵語貧婆那、此云叢林。『大論』云、如上所引。又『大莊嚴論』云、如是衆僧者、乃是勝智之叢林。一切諸善行、運集在其中。又『雜阿含』二十五[一丈]、佛告阿難、汝遙見彼青色叢林否。唯然、已見。是處名曰優留曼荼山。如來滅後百歲、有商人子、名優波掘多。當作佛事。教授師中最爲第一。即四祖優波毬多。梵音楚夏爾。以祖師居之、今禪庭稱叢林也。

＊

『祖庭事苑』[二の二丈]に云く、「梵語に貧婆那、此こに叢林と云う。『大論(＝大智度論)』に云く、上に引く所の如し。又た『大莊嚴論』に云う、『是くの如きの衆僧は、乃ち是れ勝智(＝勝れた智慧)の叢林なり。一切諸もろの善行、運集(＝多く集まる)して其の中に在り』と。又た『雜阿含』二十五[一丈]に、『佛、阿難に告ぐ、「汝遙かに彼の青色の叢林を見るや否や」と。「唯、然り、已に見る」。「是の處を名づけて優留曼荼山と曰う。如來滅後百歲、商人の子有り、優波掘多と名づく。當に佛事(＝仏教教化)を作すべし。教授師の中に、最も第一爲り」』と。即ち四祖の優波毬多なり。梵音の楚夏(＝発音の違い)のみ。祖師、之に居るを以て、今の禪庭を叢林と稱するなり」と。

＊

○『祖庭事苑』[二ノ二丈]云、梵語貧婆那…今禪庭稱叢林也＝『祖庭事苑』巻二の「叢林」条(X64-327 a～b)に、『大智度論』からの引用(本文中では「如上所引」として省略)以外は、全く同文が見える。文中の引用のうち、『大智度論』は「『大論』云、如上所引」とあるように、この条では省略されている。ちなみに、①に引用された『大智度論』の文章は原文そのままであるが、『祖庭事苑』に引かれた文章は、

次の様になっており、削除変更が加えられている。「『大論』云、「『僧伽、秦言衆。多比丘一処和合、是名僧伽。譬如大樹叢聚、是名為林、一一樹不名為林、如一一比丘不名為僧。諸比丘和合故。僧聚処得名叢林』。」（X64-327a）また、「『大荘厳論』云、如是衆僧者…運集在其中」の部分は、『大荘厳論経』巻一の偈の一節に「如是衆僧者、勝智之叢林、一切諸善行、運集在其中」（T4-262b）とある。二句目の「乃是」は『祖庭事苑』が加筆したもの。『雑阿含経』からの引用である「又『雑阿含』二十五［一丈］、仏告阿難、汝遙見彼青色叢林否…教授師中最為第一」の部分は、『雑阿含経』巻二五の次の一段を踏まえるが、削除改変されており、一部は前後の文章を倒置している。（＝　）は『祖庭事苑』で削除された部分、〈＝　〉は変更された部分。）「爾時、世尊〈＝仏〉告《尊者》」阿難、『《此摩偸羅国、将来世当》有商人子、《名曰掘多、掘多有子、》名優波掘多。《我滅度後百歳、》当作仏事、《於》教授師中最為第一。《阿難、》汝遙見彼青色叢林不〈＝否〉』。《阿難白仏、》『唯然、已見。《世尊》』。『《阿難、》是処名為優留曼荼山。如来滅後百歳、《此山当有那吒跋置迦阿蘭若処、此処随順寂黙最為第一》。」（T2-177b）尚、優波崛多については、『雑阿含経』巻二三に、類似した次の様な一段も見える。「仏臨般涅槃時、降伏阿波羅龍王、陶師旃陀羅、瞿波梨龍。詣摩偸羅国、告阿難曰、『於我般涅槃後、百世之中、当有長者、名瞿多、其子、名曰優波崛多。当出家学道、無相仏教授於人、最為第一、当作仏事』。仏告阿難曰、『遙見彼山不』。阿難白仏、『見也。世尊』。仏告阿難、『此山名優留曼荼、是阿蘭若処名那荼婆低、随順寂静』。」（T2-165b）

登場人物である「四祖優波掬多」については、『景徳伝燈録』巻一に「第四祖の優波掬多は、吒利国の人なり。亦た優波崛多と名づけ、又た鄔波掬多と名づく。姓は首陀。父は善意。十七にして出家し、二十にして果を証す。随方行化して、摩突羅国に至り、得度する者甚だ衆し（第四祖優波掬多者、吒利国人也。亦名優波崛多、又名鄔波掬多。姓首陀。父善意。十七出家、二十証果。随方行化、至摩突羅国、得度者甚衆）」（T51-207b1-4）とある。終わり近くにある「梵音楚夏爾」という語は、「楚夏」は、楚（中国の周辺国）と夏（中国）という地域の違いによって同じ言葉でも発音が違うことをいう。「楚夏、音を殊にす（楚夏殊音）」（晋・袁宏撰『後漢紀』巻九、四庫全書本・3a）、「字に古今有り、音に楚夏有り（字有古今、音有楚夏）」（明・楊慎『升庵集』巻五三「上林賦連綿字」8a）などとあり、『肇論疏』巻三に「楚夏同じからずと言うは、夏は是れ中国、楚は是れ辺国なり（言楚夏不同者、夏是中國、楚是辺国）」（T45-191c）と述べている。梵語の訳語の差異については、たとえば『仏本行集経』巻三二に「前代、訳して提謂波利と称するは、此れ蓋し婆羅門の楚夏ならんや。未だ孰れか是なるかを知らず（前代訳称提謂波利、此蓋婆羅門楚夏耶。未知孰是）」（T3-802b）とあり、また『肇論』「涅槃無名論第四」に「泥曰・泥洹・涅槃、此の三名、前後異出す。蓋し是れ楚夏同じからざるのみ。涅槃と云う、音正しきなり（泥曰・泥洹・涅槃、此三名前後異出。蓋是楚夏不同耳。云涅槃、音正也）」（T45-157b）とあり、『一切経音義』巻一にも「西牛貨洲は、古には瞿伽尼と云い、或いは倶耶尼と云い、或いは瞿陀尼と云う。皆な梵音の楚夏同じからざるなり。正梵には過嚩抳と云う。此の義を翻じて牛貨と為すなり（西牛貨洲、古云瞿伽尼、或云倶耶尼、或云瞿陀尼。皆梵音楚夏不同也。正梵云過嚩抳。此義翻為牛貨）」（T54-314c）などとある。

③ 忠曰、優留曼荼山在摩偸羅國、見『雑阿含』［廿五ノ一丈］。又以優波掬多所居青色叢林、今禪庭稱叢林者、睦菴附會也。固無根據矣。

＊

忠曰く、「優留曼荼山は摩偸羅國に在り、『雑阿含』［廿五の一丈］に見ゆ。又た優波掬多の所居、青色叢林なるを以て、今の禪庭を叢林と稱するは、睦菴の附會なり。固とに根據無し。

＊

○優留曼荼山＝『翻梵語』巻九に「優留曼荼山。訳して曰く、優留とは大なり、曼荼とは第一なり（優留曼荼山。訳曰優留者大、曼荼者第一）」（T54-1044a）とある。一番大きな山の意。文中の「睦菴」は、『祖庭事苑』八巻の編者である、宋の睦菴善卿を指す。

④『寶積經』［七十六ノ十六丈］菩薩見實會云、過去有王、名曰尼彌。了達諸法、如法爲王。乃至。三十三天欲得見彼尼彌王。帝釋天主即告御臣名摩多梨、莊嚴千馬寶車、往閻浮提鞞提呵國、迎尼彌王。乃至。爾時摩多梨、又復將王到須彌頂。爾時尼彌王遙見青茂叢林、告摩多梨言、彼林定是不顛倒衆生所居之處。摩多梨言、大王、此是忉利諸天善法之堂。廣説如彼。

＊

『寶積經』［七十六の十六丈］の「菩薩見實會」に云く、「過去に王有り、名づけて尼彌と曰う。諸法を了達して、如法、王と爲る。乃至。三十三天、彼の尼彌王を見ることを得んと欲す。帝釋天主、即ち御臣、名は摩多梨に告ぐ、『千馬寶車を莊嚴し、閻浮提の鞞提呵國に往きて、尼彌王を迎えよ』と。乃至。爾の時、摩多梨、又た復た王を將いて須彌の頂に到る。爾の時、尼彌王、遙かに青茂の叢林を見て、摩多梨に告げて言く、『彼の林は定めて是れ不顛倒の衆生の所居の處なり』と。摩多梨言く、『大王よ、此れは是れ忉利の諸天、善法の堂なり』と」と。廣説すること彼（＝『寶積經』の原文）の如し。

＊

○『寶積經』［七十六ノ十六丈］菩薩見實會云、過去有王、名曰尼彌。…＝『大宝積経』一二〇巻の巻六一～七六は「菩薩見実（菩薩見実経）」であり、その巻七六は「四転輪王品・第二六」となっている。引用は、全体が「乃至」で仕切られて三段に分けられており、第一段（T11-431c）と第三段（432b）は経典からそのままの引用であるが、第二段は次の様に字句の加減がある。（《　》は『禅林象器箋』で削除された部分、［　］は付加された部分。）

三十三天…《我等在此》欲得見彼尼弥《大》王。《爾時》帝釈天主、即告御臣名摩多梨《言、汝当前来。可》荘厳《備諸天》千馬宝車、往閻浮提鞞提呵国［迎］尼弥王《所》。（T11-432a~b）

⑤『宋高僧傳』［十二ノ十一丈］石霜諸禪師傳云、諸得石霜山便議終焉之志。云云。堂中老宿、長坐不臥、屹若椔杌。天下謂之石霜枯木衆、是也。南方謂之叢林者、翻禪那爲功德叢林也。

＊

『宋高僧傳』［十二の十一丈］石霜の諸禪師の傳に云く、「諸、石霜山を得て、便ち終焉の志を議す。云云。堂中の老宿、長坐不臥、屹として椔杌（＝立ち枯れた木の切り株）の若し。天下、之を「石霜の枯木衆」と謂う、是れなり。南方、之を叢林と謂う者は、禪那を翻じて功德叢林と爲すればなり」と。

＊

○『宋高僧伝』巻一二「唐長沙石霜山慶諸伝」（T50-780c）からの引用。途中を「云云」で中略したことを除けば、全て同文である。

⑥『大乘義章』［十三ノ一丈。又『維摩義記』一本ノ廿八丈］云、禪者、是其中國之言。此飜名爲思惟修習。亦云功德叢林。乃至。功德叢林者、從果爲名。智慧神通四無量等是其功德。衆德積聚説爲叢林。定能生之、因從果目。是故説爲功德叢林。

＊

『大乘義章』［十三の一丈。又た『維摩義記』一本の廿八丈］に云く、「禪とは、是れ其の中國の言。此こに飜じて名づけて思惟修習と爲す。亦た功德叢林と云う。乃至。功德叢林とは、果に從えて名と爲す。智慧神通、四無量等、是れ其の功德なり。衆德積聚するを、説いて叢林と爲す。定は能生の因、果に從えて目づく。是の故に説いて功德叢林と爲す」と。

＊

○『大乘義章』云、禪者…是故説爲功德叢林＝『大乘義章』巻一三「八禪定義四門分別」（T44-718a）からの引用。「乃至」で省略された部分があるのを除けば、全て同文。『維摩義記』巻一本は類似しているものの異文であり、「言禪定者、禪那胡語。此翻名為思惟修習。上界静法審観方成名思惟修。又亦名為功德叢林。此乃従其所生為名。能生多德。是故為功德叢林」（T38-428b）とある。

⑦中峯本禪師『東語西話』[『録』二十ノ八丈]云、世稱叢林者、蓋取喩於草木也。法道之所寄、材器之所從出焉。然草木培植則豐、沾濡則榮、霜雪則彫、斧斤則敗。叢林以無上大道爲培植、以慈悲喜捨爲沾濡、以偸安利養爲霜雪、以貪欲瞋恚爲斧斤。主叢林者、不諳其培植之道、沾濡之理、則草木病矣。況偸安利養之霜雪、貪欲瞋恚之斧斤、時時斫伐而殞穫之。故其草木、區萌芽蘖、猶不暇、而欲望叢林之盛材器之萃、難矣哉。

＊

中峯本禪師の『東語西話』[『録』二十の八丈]に云く、「世に叢林と稱するは、蓋し喩えを草木に取るなり。法道の寄する所、材器（＝優秀な人材）の從りて出る所なり。然るに草木は培植（＝栽培）すれば則ち豐かに、沾濡（＝水を掛ける）すれば則ち榮え、霜雪には則ち彫み、斧斤（＝おの）には則ち敗る。叢林は無上の大道を以て培植（＝栽培）と爲し、慈悲喜捨を以て沾濡（＝水を掛ける）と爲し、偸安（＝サボリ）利養（＝蓄財）を以て霜雪と爲し、貪欲（＝むさぼり）瞋恚（＝怒り）を以て斧斤（＝おの）と爲す。叢林を主る者、其の培植（＝栽培）の道、沾濡（＝水を掛ける）の理を諳んぜざるときは、則ち草木病みぬ。況や偸安（＝サボリ）利養（＝蓄財）の霜雪、貪欲（＝むさぼり）瞋恚（＝怒り）の斧斤（＝おの）、時時に斫伐（＝切断）して之を殞穫（＝喪失）するをや。故に其の草木、區萌芽蘖（＝小さな芽生え）すら、猶お暇あらずして、叢林の盛んに、材器（＝優秀な人材）の萃まるを望まんと欲するも、難いかな」と。

＊

○中峯本禪師『東語西話』云、世稱叢林者、…難矣哉＝『天目中峰和尚広録』巻二〇「東語西話続集下」（校訂藏経本・659b）にそのまま同文が見える。寛永二十（一六四三）年癸未開板の二條通玉屋町村上平楽寺本では巻二〇の三十七丁裏～三十八丁表であるが、寛文十三（一六七三）年癸丑村上平楽寺の重彫鼇頭本では巻二〇の八丁表～裏であり、無著禪師が見た『中峰広録』は寛文刊本であったことが知られる。

⑧『聯燈會要』[廿七ノ十三丈。又『古宿』卅九ノ五丈]智門光祚禪師章云、示衆云、汝等諸人、横擔拄杖、出一叢林、入一叢林。你道、叢林有幾種。或有梅檀叢林、梅檀圍繞。或有荊棘叢林、荊棘圍繞。或有荊棘叢林、梅檀圍繞。或有梅檀叢林、荊棘圍繞。只如四種叢林、是汝諸人、在阿那箇叢林裏、安身立命。若無安身立命處、虚踏破草鞋。閻羅王、徵你草鞋錢、有日在。

＊

『聯燈會要』[廿七の十三丈。又た『古宿』卅九の五丈]「智門の光祚禪師」の章に云く、「衆に示して云く、『汝等諸人、横に拄杖を擔い、一叢林を出て、一叢林に入る。你道え、叢林に幾種か有る。或いは梅檀叢林、梅檀の圍繞する有り。或いは荊棘叢林、荊棘の圍繞する有り。或いは荊棘叢林、梅檀の圍繞する有り。或いは梅檀叢林、荊棘の圍繞する有り。只だ四種の叢林の如き、是れ汝諸人、阿那箇（＝いずれ）の叢林の裏に在ってか安身立命する。若し安身立命の處無くんば、虚しく草鞋を踏破す。閻羅王、你が草鞋錢を徵すること、日在ること有らん』と」と。

＊

○『聯燈會要』[廿七ノ十三丈。又『古宿』卅九ノ五丈]智門光祚禪師章云、示衆云、汝等諸人…有日在＝『聯燈会要』巻二七「隋州智門光祚禪師（凡十二〔之第一〕）」条（X79-236b）にそのまま同文が見える。『五燈会元』巻一五「随州智門光祚禪師」条（X80-318b）にも同文が見えるが、出だしの「示衆云」が「上堂」となっている。『古尊宿語録』巻三九「智門祚禪師語録」（X68-255b）は「上堂」となっている上に、文字の異同がある。

⑨

忠按、四種叢林出『智度論』[三ノ廿七丈]説。彼荊棘作伊蘭。『智度論』云、如『栴檀譬喩經』中説、有栴檀林、伊蘭圍之。有伊蘭林、栴檀圍之。有栴檀、栴檀以爲叢林。有伊蘭、伊蘭自相圍遶。佛諸阿羅漢、亦復如是。佛住善法解脱中。諸阿羅漢、亦住善法解脱中。住法相應、眷屬莊嚴。佛以大衆圍遶、如須彌山王、十寶山圍遶、如白香象王、白香象圍遶、如師子王、師子衆圍遶。佛亦如是。佛爲世間無上福田。與諸弟子圍遶共住。

＊

忠按ずるに、四種の叢林は『智度論』の説に出づ。彼には荊棘を伊蘭に作る。『智度論』[三の廿七丈]に云く、「『栴檀譬喩經』の中に説くが如し。栴檀の林を伊蘭、之を圍む有り。伊蘭の林を栴檀、之を圍む有り。栴檀を栴檀以て叢林と爲る有り。伊蘭を伊蘭自ら相圍遶せる有り。佛と諸もろの阿羅漢も亦た復た是くの如し。佛、善法解脱の中に住したもう。諸もろの阿羅漢も亦た善法解脱の中に住す。住法相應して、眷屬莊嚴せり。佛、大衆を以て圍遶すること、須彌山王を十寶山の圍遶するが如く、白香象王を白香象の圍遶するが如く、師子王を師子衆の圍遶するが如し。佛も亦た是くの如し。佛は世間無上の福田爲り。諸もろの弟子の與めに圍遶せられて共に住す』と」と。

＊

○『智度論』云、如『栴檀譬喩經』中説、…與諸弟子圍遶共住＝『大智度論』巻三「序品」（T25-83a）に同文が見える。ただし、「如『旃檀譬喩經』中説」の「説」が、『大智度論』は「言」になっている。

⑩

『華嚴經』[十四ノ廿六丈]淨行品云、若見叢林、當願衆生、諸天及人、所應敬禮。

＊

『華嚴經』[十四の廿六丈]「淨行品」に云く、「若し叢林を見れば、當に願うべし、衆生諸天及び人、應に敬禮すべき所なり」と。

＊

○『華嚴經』[十四ノ廿六丈]淨行品云、若見叢林、當願衆生、諸天及人、所應敬禮＝八〇巻本『大方広仏華厳経』巻一四「浄行品第十一」（T10-70c）に同文が見える。

⑪

『長阿含經』[十八ノ七丈]世記經閻浮提洲品説閻浮樹邊空地種種叢林名。

＊

『長阿含經』[十八の七丈]の「世記經」の「閻浮提洲品」に、閻浮樹邊の空地、種種の叢林の名を説く。

＊

○『長阿含經』[十八ノ七丈]世記經閻浮提洲品説閻浮樹邊空地種種叢林名＝三十七種類の叢林。『長阿含經』巻一八「第四分世記経第十一　閻浮提洲品第一」に次のような三十七種類の叢林の名前が挙げられている。「去大金剛山不遠有大海水。海水北岸有大樹王、名曰閻浮。圍七由旬、高百由旬、枝葉四布五十由旬。其邊空地復有叢林、名菴婆羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰閻婆、縱廣五十由旬。復有叢林名曰多羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰那多羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為男、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為女、縱廣五十由旬。復有叢林名曰男女、縱廣五十由旬。復有叢林名曰散那、縱廣五十由旬。復有叢林名曰梅檀、縱廣五十由旬。復有叢林名曰佉訓羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰波椶婆羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰毗羅、縱廣五十由旬。復有叢林名曰香椶、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為梨、縱廣五十由旬。復有叢林名曰安石留、縱廣五十由旬。復有叢林名曰為甘、縱廣五十由旬。復有叢林名呵梨勒、縱廣五十由旬。復有叢林名毗醯勒、縱廣五十由旬。復有叢林名阿摩勒、縱廣五十由旬。復有叢林名阿摩犁、縱廣五十由旬。復有叢林名椶、縱廣五十由旬。復有叢林名甘蔗、縱廣五十由旬。復有叢林名葦、縱廣五十由旬。復有叢林名竹、縱廣五十由旬。復有叢林名舍羅、縱廣五

十由旬。復有叢林名舎羅業、縦廣五十由旬。復有叢林名木瓜、縦廣五十由旬。復有叢林名大木瓜、縦廣五十由旬。復有叢林名解脱華、縦廣五十由旬。復有叢林名瞻婆、縦廣五十由旬。復有叢林名婆羅羅、縦廣五十由旬。復有叢林名修摩那、縦廣五十由旬。復有叢林名婆師、縦廣五十由旬。復有叢林名多羅梨、縦廣五十由旬。復有叢林名伽耶、縦廣五十由旬。復有叢林名葡萄、縦廣五十由旬。」（T1-116a~b）

（野口善敬）

【二】五山

①支那五山者、一徑山興聖萬壽寺 在杭州臨安府。二阿育王山鄮峯廣利寺 在明州慶元府。三太白山天童景徳寺 在明州慶元府。四北山景徳靈隠寺 在杭州臨安府。五南山淨慈報恩光孝寺 在杭州臨安府武林縣。

支那の五山は、一に徑山興聖萬壽寺。杭州臨安府に在り。二に阿育王山鄮峯廣利寺。明州慶元府に在り。三に太白山天童景徳寺。明州慶元府に在り。四に北山景徳靈隠寺。杭州臨安府に在り。五に南山淨慈報恩光孝寺なり。杭州臨安府武林縣に在り。

＊

○支那五山者…＝中国における五山十刹の制度は、南宋の史衛王によって始められたもので、その確立した時期は南宋の嘉定年間（一二〇八～一二二三）であろうと考えられている。今枝愛真『中世禅宗史の研究』（東京大学出版会・一九七〇）第二章第二節収載の「中国禅林の官寺制度」（一四一頁）、石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究（一）～（四）」（駒沢大学仏教学部論集・第一三～一五号・一九八二～八五）、西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』（第七章・日中の五山之上、吉川弘文館・一九九九）等を参照。五山に配当された寺院に異同があったことについては、野口善敬「元代における五山十刹の位次」（『元代禅宗史研究』二〇〇五、所収）に詳しい。五山という形式の典拠は、インドの王舎城の「五精舎」であったとされ、『大智度論』巻三「序品」に、「王舎城…坐禅の精舎多きを以ての故に。餘処には有ること無し。竹園、鞞婆羅跋恕、薩多般那求呵、因陀世羅求阿、薩簸恕魂直迦鉢婆羅の如し。王舎城に五精舎有り。竹園は平地に在り。餘国には此の多精舎無し（王舎城…以坐禅精舎多故。餘処無有。如竹園、鞞婆羅跋恕、薩多般那求呵、因陀世羅求阿、薩簸恕魂直迦鉢婆羅。王舎城有五精舎。竹園在平地。餘国無此多精舎）」（T25-77c）と述べられている。

（本庄悦子）

②宋濂護法録［一上ノ六丈］覺原禪師遺衣塔銘序曰、浮圖之爲禪學者、自隋唐以來、初無定止。惟借律院以居。至宋而樓觀方盛。然猶不分等第。惟推在京鉅刹爲之首。南渡後、始定江南、爲五山十刹。俾其拾級而升。黄梅曹溪諸道場、反不與其間、則其去古也益遠矣。元氏有國、文宗潛邸在金陵。及至臨御、詔建大龍翔集慶寺獨冠五山。蓋矯其弊也。國朝因之。錫以新額、就寺建官、摠轄天下僧尼。

＊

宋濂が『護法録』［一上の六丈］「覺原禪師の遺衣塔の銘の序」に曰く、「浮圖（＝仏教）の禪學を爲す者、隋唐自り以來、初めより定止（＝定住すること）無し。惟だ律院（＝律僧の住する寺院）を借りて以て居すのみ。宋に至って樓觀（＝楼閣）方に盛なり。然れども猶お等第（＝等級）を分かたず。惟だ京に在る鉅刹を推して之が首と爲すのみ。南渡の後、始めて江南を定めて、五山十刹と爲す。其れをして級を拾って升らしむ。黄梅、曹溪の諸道場、反って其の

間に與からざるときは、則ち其の古を去ることや益ます遠し。元氏、國を有つ、文宗の潛邸（＝天子が即位以前に住んでいた屋敷）、金陵に在り。臨御（＝天下を治める）に至るに及んで、詔して大龍翔集慶寺を建てて、獨り五山に冠たらしむ。蓋し其の獘を矯めんとなり。國朝之に因る。錫うに新額を以てし、寺に就いて官を建てて、天下の僧尼を摠轄（＝全体を管理）す」と。

＊

○宋濂護法録「一上ノ六丈」覺原禪師遺衣塔銘序曰…摠轄天下僧尼＝正式名称は『宋文憲公護法録』。一〇巻。宋濂（景濂）著。宋濂（一三一〇～一三八一）は、明初の官僚で儒者。『明史』の編纂を行なったことで知られる。詩文集として『宋学士文集』『潛溪集』などがある。『護法録』は、宋濂の著述の中から仏教に関係する詩文を抜粋したもの。雲棲袾宏編、銭謙益訂で、万暦四十四年（一六一六）年序刊。『嘉興大蔵経』所収本や、「梅村彌右衛門・柳田六左衛門蔵版」の和刻本がある。引用の文章は、『護法録』巻一上の「天界善世禪寺第四代覚原禪師遺衣塔銘」の冒頭部分で、和刻本の六丁表にそのままある。宋濂の思想については、荒木見悟「思想家としての宋濂」（『明代思想研究』創文社・一九七二、所収）、三浦秀一『中国心学の稜線―元朝の知識人と儒道仏三教』（研文出版・二〇〇三）参照。

（白川邦與）

③虎關錬和尚曰、唐土五山、起於大慧已後。當時靈隱寺兄弟、會于直指堂 在法堂傍 議定五山。非朝廷之制矣。一徑山二靈隱等也。或問、靈隱何因得獨議定耶。答曰、靈隱之在京都内也如日本平安城有北山。徑山則隔遠。如平安於東大寺。故靈隱兄弟、得專定之。又徑山本小刹、至大慧初爲巨刹。此時王都在杭州也。

＊

虎關錬（師練）和尚曰く、「唐土の五山、大慧（宗杲・一〇八九～一一六三）已後に起これり。當時、靈隱寺（杭州）の兄弟、直指堂 法堂の傍に在り に會して五山を議定す。朝廷の制に非ず。一に徑山、二に靈隱等なり」と。或いは問う、「靈隱、何に因ってか獨り議定することを得たるや」と。答えて曰く、「靈隱の京都の内に在るや、日本の平安城（平安京）に北山有るが如し。徑山は則ち隔遠なり。平安の東大寺に於けるが如し。故に靈隱の兄弟、專まに之を定むることを得たり。又た徑山は本と小刹、大慧に至って、初めて巨刹と爲れり。此の時、王都、杭州に在るなり」と。

＊

○虎關錬和尚曰…此時王都在杭州也＝典拠未詳。虎関師錬（一二七八～一三四六）の『元亨釈書』三十巻、『済北集』二十巻の中には見えない。その他、虎関の著述としては、『〔虎関和尚〕十禅支録』二巻、『〔虎関和尚〕続十禅支録』一巻（語録）、『仏語心論』十八巻（『楞伽経』の注釈書）、『禅儀外文集』二巻（四六駢儷文の作法）、『聚分韻略』五巻（日本最初の韻書）などがあるが、未見。

（澤守豊文）

④中峯［録十一ノ中ノ二丈］本禅師、山房夜話云、及達磨東邁、百丈未生、牛頭横出一枝、南北宗分派、皆腰鎌荷鍤、火種刀耕、執爨負舂、鶉衣丐食。鐵石身心、氷霜懷抱。以佛祖大事因縁、一肩負荷、了無畏怯。蓋行處既親所到必的矣。彼時、安有五山十刹之廣居、三玄五位之奇唱、放收殺活之異作、拈頌判別之殊音。不加雕琢、而玉本無瑕。安用規模。而眼元自正。自百丈建叢林已来、廣田大宅、指顧如意。其奈正因日墜、謬妄日滋、紀綱日繁、禮義日削。

＊

中峯［『録』十一の中の二丈］の本禅師（一二六三～一三二三）の「山房夜話」に云く、「達磨、東邁して、百丈（懐海・七四九～八一四）未だ生ぜざるに、牛頭（法融・五九四～六五七）、横に一枝を出し、南北の宗、両派を分かつに及びて、皆な鎌を腰にし鍤を荷いて、火種刀耕、爨（＝かまど）を執り、春（＝うす）を負い、鶉衣丐食するなり。身心を鐵石にし、懐抱を氷霜にして、佛祖の大事因縁を以て、一肩に負荷して、了に畏怯無し。蓋し行處既に親しければ、到る所必ず的なり。彼の時、安くんぞ、五山十刹の廣居、三玄五位の奇唱、放收殺活の異作、拈頌判別の殊音、有らん。雕琢を加えざれども、而も玉本と瑕無し。安くんぞ規模を用いん。而も眼元と自ら正し。百丈、叢林を建てし自り已来、廣田、大宅、指顧（＝すぐに）、意の如し、其れ奈せん正因、日に墜ちて、謬妄、日に滋く、紀綱、日びに繁くして、禮義、日びに削らるることを」と。

＊

○中峯「録十一の中の二丈」本禅師山房夜話云、及達磨東邁、…禮義日削＝『天目中峯和尚廣録』巻一一「山房夜話　中」（寛文十三年鼇頭本・二丁裏～三丁表）に同文が見られる。

（児嶋文憲）

⑤敕修清規遊方参請云、住持遇名勝相看、就送客位回禮。云々。而五山大方則不回禮。

＊

『敕修清規』「遊方参請」に云く、「住持、名勝（＝名刹・勝刹）の相看（＝相見）に遇わば、就て客位に送りて回礼すべし。云云。而も五山の大方は、則ち回礼せず」と。

＊

○敕修清規遊方参請云…而五山大方則不回禮＝『勅修百丈清規』巻五「遊方参請」（T48-1140b）に同文が見える。「云云」の部分には、「上座相看、就法堂下間。迎伺住持回禮、免煩降重」の十九字がある。

（小林玄地）

⑥日本皇都五山者、一靈龜山天龍資聖寺 五山第一 。開山夢窓疎石 嗣高峯 號正覺心宗普濟玄猷佛統大圓國師。二萬年山相國承天寺。勸請夢窓爲開山。春屋妙葩 嗣夢窓 爲第二世、號智覺普明國師。三東山建仁寺。開山明菴榮西 嗣虚菴 號千光祖師。四慧日山東福寺。開山圓爾辨圓 嗣無準 號聖一國師。五京師山 又名九重山 萬壽寺。兩開山十地覺空上人及東山湛照寶覺禪師 同嗣聖一 。瑞龍山太平興國南禪寺 五山之上 。開山無關普門 嗣聖一 號大明國師。此山爲五山之冠矣。蓋準中華天界大龍翔集慶寺冠於五山也。

＊

日本皇都（＝天皇の住む都。ここでは京都の意。）の五山は、一に靈龜山天龍資聖寺 五山第一 、開山（＝寺院を草創した僧の敬称）は夢窓疎石（一二七五～一三五一）高峯（＝高峰顕日・一二四一～一三一六）に嗣ぐ、正覺心宗普濟玄猷佛統大圓國師（＝国師は僧の尊称で、国の師表という意。）と號す。二に萬年山相國承天寺、夢窓を勸請（＝形式的に高僧を請い迎えて住職とすること）して開山と爲す。春屋妙葩（一三一一～一三八八）夢窓に嗣ぐを第二世と爲す、智覺普明國師と號す。三に東山建仁寺、開山は明菴榮西（一四一一～一二一五）虚菴（＝虚庵懐敞・生没年不詳）に嗣ぐ、千光祖師と號す。四に慧日山東福寺、開山は圓爾の辨圓（一二〇二～一二八〇）無準（＝無準師範・一一七八～一二四九）に嗣ぐ、聖一國師と號す。五に京師山 又た九重山と名づく 萬壽寺、兩開山（＝二人の開山）なり。十地の覺空上人（生没年不詳）、及び東山の湛照寶覺禪師（生没年不詳）同じく聖一に嗣ぐ。瑞龍山

太平興國南禪寺 五山の上、開山は無關普門（一二一二～一二九一） 聖一に嗣ぐ、大明國師と號す。此の山、五山の冠爲り。蓋し中華の天界大龍翔集慶寺、五山に冠するに準ず。

＊

○文中の語句のうち、「開山」は【三八】、「国師」は【二六八】に、それぞれ立項されている。

（西川秀敏）

⑦日本鎌倉五山者、一巨福山建長興國寺、開山蘭溪道隆 嗣無明。號大覺禪師。二瑞鹿山圓覺興聖寺、開山子元祖元 自號無學、嗣無準。號圓滿常照國師佛光禪師。三龜谷山金剛壽福寺、開山明菴榮西 嗣虛菴。四金峯山淨智寺、開山大休正念 嗣石溪。號佛源禪師。準開山南洲宏海 嗣兀菴。號眞應禪師。五稻荷山淨妙寺、開山退耕行勇 嗣明菴。

＊

日本鎌倉五山は、一に巨福山建長興國寺、開山は蘭溪道隆（一二一三～一二七三） 無明（＝慧性・一一六二～一二三七）に嗣ぐ。大覺禪師と號す。二に瑞鹿山圓覺興聖寺、開山は子元の祖元（一二二六～一二八六） 自ら無學と號し、無準（＝師範・一一七七～一二四九）に嗣ぐ。圓滿常照國師・佛光禪師と號す。三に龜谷山金剛壽福寺、開山は明菴の榮西 虛菴（＝懐敞・生没年不詳）に嗣ぐ。四に金峯山淨智寺、開山は大休正念（一二一五～一二八九） 石溪（＝心月・？～一二五四）に嗣ぐ。佛源禪師と號す。準開山（＝中興開山）は南洲の宏海（？～一三〇三） 兀菴（＝普寧・一一九七～一二七六）に嗣ぐ。眞應禪師と號す。五に稻荷山淨妙寺、開山は退耕の行勇（一一六三～一二四一） 明菴（＝榮西）に嗣ぐ。

＊

○文中の語句のうち、「禅師〔号〕」は【二七〇】、「準開山」は【二三一】に、それぞれ立項されている。

（白川邦與）

⑧夢巖應和尚『旱霖集』［六十八丈秀峯説］云、應子從容曰、二三子、欲聞五山十刹之故乎。五山之稱、古無今有。今有何。貴寺不貴人也。古無何。貴人不貴寺也。古者、雖窮鄉遠地、蟒巖虎穴、有有道之人處、則有志之士、四方萬里麇至、王公大人、望山而拜。過者、不敢唾其地、如佛之所住。何寺院大小之問乎。厥後檀信競造大寺、擇名德主之。人以爲道德之所在、而食之豐約、衆之多寡、不較矣。今者乃官差住持、僧園加富、而費用殷繁。五山之稱由此而著。彼方乃呉越錢王置之、後世沿焉不革。此方乃關東平元帥置之、平氏亡、南朝先皇陞南禪爲第一。近代又加天龍、餘如並舊。法運將季、外衞者不視不擇。由此妄庸之徒、垂涎聲利、以機巧、以狐媚。濫膺竊據、紛焉沓然、成風成俗也。雖謂聚學者、但以濡沫小惠、羈縻其心。學者又貌敬腹非、上下交相欺。蓋牙儈履狶之不如也。遂使古佛叢林、忍詢于柳柳州鐵爐歩志者、蓋斯輩歟。不思五山位名之弊、臻于此極。嗚呼、堯舜如在井、則以爲黿黽乎。黿黽如在天、則以爲蛟龍乎。果無此理、則託物焉欲身之立名之揚者、不亦甚惑乎。浮光幻影、須臾變謝。来報之説不誣、則吁可恐哉。二三子、一日意行出通衢、偶見禪衲有遠行之色者。問之何往。曰京師南禪。或曰相陽建長。住持者誰歟。曰不知。或曰某人。某人言可爲法行可爲師否。三種住持十科僧業具闕何如。曰不知。且其人與子親舊而省覲耶。又以富囊褚好施予有所干求耶。曰並無之。若爾遠趨奚爲。曰天下之望刹也。濫廁僧倫、不一日掛錫於其間不亦恨乎。主人賢否何恤。遂行。余自語曰、甚哉後生之無識也。假如嘯此等之族、千百圍遶、鐘鼓闐鞳飯氣饋餾、但是一閧之市、而住持蓋其平也。豈佛祖建立永延

慧命之本意也耶。

＊

夢巖の應和尚（＝夢巖祖応・？～一三七四）の『旱霖集』[六十八丈、「秀峯説」]に云く、「應子（＝私）從容として曰く、二三子（＝お前たち）、五山十刹の故を聞かんと欲するや。五山の稱、古に無く今に有り。今有るは何ぞ。寺を貴びて人を貴ばざればなり。古に無きは何ぞ。人を貴びて寺を貴ばざればなり。古は窮郷遠地（＝遠い僻地）、蟒巖虎穴（＝大蛇、虎が住む岩穴）と雖も、有道の人有る處には、則ち有志の士、四方萬里より麇がり至り、王公大人（＝国の重臣）も、山を望みて拜す。過る者（＝通りかかった者）は敢えて其の地に唾せざること、佛の所住の如し。何ぞ寺院の大小をか之問わんや。厥の後、檀信（＝檀越信徒）競って大寺を造り、名徳を擇びて之を主らしむ。人、以爲く、道徳の在る所にして、食の豐約（＝豊殺・豊ととぼしい）、衆の多寡（＝多いと少ない）は較（＝問題にする）せず。今は乃ち官、住持を差わして僧園、加ます富みて、費用殷繁（＝非常に多い）なり。五山の稱、此れに由りて著わる。彼の方（＝中国）は乃ち呉越（＝中国五代十国時代の国）の錢王（呉越を支配した五世代の王）之を置き、後世沿って革めず。此の方（＝日本）は乃ち關東の平の元帥（＝足利尊氏）、之を置き、平氏亡びて、南朝の先皇（＝足利義満）、南禪を陞らしめて第一と爲す。近代又た天龍を加え、餘は、並びに舊の如し。法運將に季ならんとし、外衛（＝仏教を外護すべき官吏）の者、視ず擇ばず。此れに由りて妄庸の徒、涎を聲利（＝名声と利益）に垂れ、機巧を以てし、狐媚（＝取り入って人を惑わす）を以てし、濫りに膺け、竊かに據り、紛焉沓然（＝ごたごたと物事入り乱れる）として風を成し俗を成すなり。學者（＝修行者）を聚むと謂うと雖も、但だ濡沫（＝泡）の小惠を以て其の心を羈縻（＝束縛）す。學者又た貌（＝表面的）に敬し、腹（＝本心）に非として、上下交々相い欺く。蓋し牙儈（＝周旋屋）履狶（＝鑑定業）にだも之如かざるなり。遂に古佛の叢林をして、詢（＝恥）を柳州（＝柳宗元・七七三～八一九）が『鐵爐歩志』に忍ばしむる者は、蓋し斯の輩か」と。思わざりき、五山位名の弊、此の極に臻らんとは。嗚呼、堯舜（＝中国古代で徳をもって天下を治めた聖天子の堯と舜）如し井に在れば、則ち以て鼃黽（＝かえる）と爲らんや。鼃黽如し天に在れば、則ち以て蛟龍（＝水中にすみ、天に昇り龍となる動物）と爲らんや。果たして此の理無くんば、則ち物に託して、身の立ち名の揚がらんことを欲する者、亦た甚だ惑わざらんや。浮光幻影、須臾（＝たちまち）にして變謝す。来報の説、誣いず（＝いつわらず）、則ち吁、恐るべきかな。二三子、一日意行して通衢（＝街道）に出て、偶たま禪衲の、遠行の色有る者を見ん。之に問う、『何くに往くや』と。曰く、『京師（＝京都）の南禪』と。或いは曰く、『相陽（＝鎌倉）の建長』と。『住持者のは誰か』と。曰く、『知らず』と。或いは曰く、『某の人』と。『某の人の言、法と爲す可く、行い師と爲す可きや否や。三種の住持、十科の僧業、具闕何如ん』と。曰く、『知らず』と。『且つ其の人、子と親舊にして省覲するや。又た囊褚に富みて施予（＝ほどこし）を好むを以て、干求（＝もとめる）する所有るや』と。曰く、『並びに之れ無し』と。『若し爾らば、遠くへ趨きて奚か爲ん』と。曰く、『天下の望刹なり。僧倫に濫廁して、一日、錫を其の間に掛けずんば、亦た恨みならずや。主人の賢否、何ぞ恤えん』と。遂に行る。余、自ら語りて曰く、『甚だしいかな、後生の識無きや。假い如し此れ等の族を嘯き、千百圍遶（＝取り囲む）し、鐘鼓闐（Mojikyo M108 溺）鞳、飯氣饋餾するも、但だ是れ一閧（＝ちまた）の市にして、住持は蓋し其の平なり。豈に佛祖建立、永く慧命を延ばすの本意ならんや』と」と。

＊

○夢巖應和尚『旱霖集』〔六十八丈秀峯説〕云、應子從容曰…蓋斯輩歟＝夢巖祖応『旱霖集』「秀峯説」の冒頭から三分の一ほどの引用。同集は『五山文学全集』第一巻に収載されており、当該部分は八五一～八五二頁に見えるが、文字に異同があり、「麋至」の「麋」が「麋」に、「費用殷繁」が「貴用敷繁」に、「杳然」が「杳然」に、「詢」が「詬」になっている。「詬」は「詢」と同意であり問題ないが、それ以外は『五山文学全集』本の誤植であろう。無巖は、東福寺の第四十世。その伝は『五山禅僧伝記集成』（六五二頁）などに見える。文中の「呉越銭王」とは、中国の五代十国の時代（九〇七～九七八）に盟主として呉越（浙江省と福建省の一部）を支配した銭鏐以下、銭元瓘・銭弘佐・銭弘倧・銭弘俶の五代を指す。歴代の呉越王は皆な仏教信仰篤く、最後の王、銭弘俶は仏塔八万四千を作り経典を封じて領内に配ったとされる。また「鉄爐歩志」は、唐宋八大家の一人として知られる柳柳州こと柳宗元（七七三～八一九）の文章の題名であり、正式には「永州鉄爐歩志」である（『増広註釈音辯唐柳先生集』巻二八、四部叢刊本・5b~6b）。「鉄爐歩」とは、永州（湖南省）にある「歩（船着き場）」の名前であるが、柳宗元の時代、すでに「鉄爐（鍛冶屋）」は無く、その名称の由来が分からなくなっていた。柳宗元が、この「鉄爐歩」という文章でテーマとしているのは、名称と内実が伴っていない、つまり「位があっても徳が無ければ、家を盛んにすることはできない（位存焉而徳無有、猶不足以大其門）」（6a）ということである。夢巖は、五山の堕落した様を、柳宗元の指摘通りだと言うのであろう。仮設問答中に出てくる「三種住持」は笑隠大訢の「南禅裕長老請賛」に、「叢林の三種の住持は、説法・供衆・修造なり（叢林三種住持。説法・供衆・修造）」（『笑隠大訢禅寺語録』巻三・X69-713c）とある。「十科僧業」は、『僧高僧伝』に「僧と為りて十科に応じて仏に事えざれば、徒に百載（＝一生）を消すのみ（為僧不応十科事仏、徒消於百載）」（巻三〇・T50-899c）として挙げられた次の十項。「一、訳経。二、解義。三、習禅。四、明律。五、護法。六、感通。七、遺身。八、読誦。九、興福。十、雑科声徳」（T50-710a）。尚、文中の「住持」は、『象器箋』の【三六五】に立項されている。

（本庄悦子・澤守豊文）

⑨ 忠曰、天竺亦有五山名。或言準之立支那五山、我未見其本説。今且録於茲。

＊

忠曰く、「天竺に亦た五山の名有り。或いは之に準じて支那五山を立すと言うは、我未だ其の本説を見ず。今且く茲に録す」と。

⑩ 智度論〔三ノ七丈〕云、問曰、佛何以多住王舍城。答曰、以坐禅精舍多故。餘處無有。如竹園、鞞婆羅跋恕、薩多般那求呵、因陀世羅求呵、薩簸恕魂直迦鉢婆羅、耆闍崛五山中、有五精舍。竹園在平地。

＊

『智度論』〔三の七丈〕に云く、「問いて曰く、『佛、何を以てか多く王舍城に住したまうや』と。答えて曰く、『坐禅の精舍多きを以ての故に。餘處には有ること無し。竹園と鞞婆羅跋恕と、薩多般那求呵と、因陀世羅求呵と、薩簸恕魂直迦鉢婆羅と、耆闍崛との五山中に、五の精舍有るが如し。竹園は平地に在り』と」と。

＊

○『智度論』〔三の七丈〕問曰、…竹園在平地。＝本文では「五精舍」とあるが、無著は六個所に「ト」を打って六精舍に区切っている。精舍の名称には諸説があり、『望月』は、鞞婆羅跋恕・薩多般那求呵・因陀世羅求呵・薩簸恕魂直迦鉢婆羅・耆闍崛の五山を五精舍としている（p.1230）。引用は、『大智度論』巻三の次の一段を踏まえるが一部改変されている。（《　》は『禅林象器箋』で削除された部分、〈　〉は『禅林象器箋』で加筆された部分、〔＝　〕は『禅林象器箋』で削除変更された部分。）

問曰、《已知多住王舍城、舍婆提因縁、於此二城、》〈佛〉何以多住王舍城。答曰、《以報生地恩故、

多住舍婆提、一切衆生皆念生地。如偈説。一切論議師、自愛所知法、如人念生地、雖出家猶諍。以報法身地恩故、多住王舍城、諸佛皆愛法身故。如偈説。過去、未來、現在諸佛、供養法身、師敬尊重。法身於生身勝故、二城中多住王舍城。復次、》以坐禅精舍多故。餘處無有。如竹園、鞞婆羅跋恕、薩多般那求呵、因陀世羅求阿、薩簸恕魂直迦鉢婆羅、《王舍城、》〔＝耆闍崛五山中、〕有五精舍、竹園在平地。（T25-77b）

⑪

法華文句［一之一ノ七十四丈］云、有五精舍。鞞婆羅跋恕、此云天主穴。薩多般那求訶、此云七葉穴。因蛇世羅求訶、此云蛇神山。薩簸恕魂直迦鉢婆羅、此云少獨力山。五是耆闍崛山。　又云、耆闍崛山者、此翻靈鷲。亦曰鷲頭、云狼跡。

＊

『法華の文句』［一之一の七十四丈］に云く、「五の精舍有り。鞞婆羅跋恕は、此こに天主穴と云う。薩多般那求呵は、此こに七葉穴と云う。因陀世羅求呵は、此こには蛇神山と云う。薩簸恕魂直迦鉢婆羅は、此こには少獨力山と云う。五に是れ耆闍崛山なり」と。　又た云く、「耆闍崛山は、此に靈鷲と翻す。亦た鷲頭と曰く、狼跡と云う」と。

＊

○法華文句［一之一ノ七十四丈］云…五是耆闍崛山＝『妙法蓮華経文句』巻一上「序品第一」の次の一段を踏まえる。文字の異同は無い。

有五精舍、鞞婆羅跋恕、此云天主穴。薩多般那求訶、此云七葉穴。因陀世羅求訶、此云蛇神山。薩簸恕魂直迦鉢婆羅、此云少獨力山。五是耆闍崛山。（T34-5c）

○又云、耆闍崛山者…云狼跡＝同じく『妙法蓮華経文句』巻一上からの引用であり、前項の引用文の少し前に出ているが（九十四字省略）、一部変更されている。（＜＝　＞は『禅林象器箋』で変更された部分、《　》は加筆された部分、［　］は削除された部分。）

《＝又云》耆闍崛山者、此翻〈＝飜〉靈鷲、亦云〈＝曰〉鷲頭、［亦］云狼跡。（T34-5c）

（児嶋文憲）

【三】十刹（サツ）

①忠曰、刹者刹竿之義。寺前樹刹竿。故稱寺爲刹也。刹竿見器物類。

＊

忠曰く、「刹は刹竿（＝仏寺の堂塔・門前に立てる幡の長い竿。上端に焔形の宝珠をつける）の義なり。寺前に刹竿を樹つ。故に寺を稱して刹と爲すなり。刹竿は『器物類』に見ゆ」と。

○刹竿＝文中にあるように「器物類」の【一五〇六】に見える。

（小林玄地）

②支那［位次依中峯十一中ノ鈔］十刹者、一中天竺山天寧萬壽永祚寺　在杭州臨安府。二道場山護聖萬壽寺　在湖州烏程縣。三蔣山太平興國寺　在建康上元府。四萬壽山報恩光孝寺　在蘇州平江府。五雪竇山資聖寺　在明州慶元府。六江心山龍翔寺　在温州永嘉縣。七雪峯山崇聖寺　在福州侯官縣。八雲黄山寶林寺　在婺州金華縣。九虎丘山雲巖寺　在蘇州平江府。十天台山國清教忠寺　在台州

天台縣。

支那［位次は『中峯』十一中の鈔に依る］の十刹は、一に中天竺山天寧萬壽永祚寺　杭州（浙江省）の臨安府に在り。二に道場山護聖萬壽寺　湖州（浙江省）の烏程縣に在り。三に蔣山太平興國寺　建康（江蘇省）の上元府に在り。四に萬壽山報恩光孝寺　蘇州（江蘇省）の平江府に在り。五に雪竇山資聖寺　明州（浙江省）の慶元府に在り。六に江心山龍翔寺　温州（浙江省）永嘉縣に在り。七に雪峯山崇聖寺　福州（福建省）侯官縣に在り。八に雲黄山寶林寺　婺州（浙江省）の金華縣に在り。九に虎丘山雲巖寺　蘇州の平江府に在り。十に天台山國清教忠寺　台州（浙江省）の天台縣に在り。

＊

○位次依中峯十一中ノ鈔＝鼇頭本『天目中峰和尚広録』巻十一之中（三丁表）の欄外注を参照。

③日本十刹者暦應五年所定。一淨智寺〈在相模〉、二禪興寺〈在相模〉、三聖福寺〈在筑前〉、四萬壽寺〈在山城〉、五東勝寺〈在相模〉、六萬壽寺〈在相模〉、七長樂寺〈在上野〉、八眞如寺〈在山城〉、九安國寺〈在山城〉、十萬壽寺〈在豐後〉。

＊

日本の十刹は、暦応五年（一三四二）に定むる所なり。一に淨智寺〈相模（＝神奈川県）に在り〉、二に禪興寺〈相模に在り〉、三に聖福寺〈筑前（＝福岡県西部）に在り〉、四に万寿寺〈山城（＝京都府南部）に在り〉、五に東勝寺〈相模に在り〉、六に万寿寺〈相模に在り〉、七に長楽寺〈上野（＝群馬県）に在り〉、八に真如寺〈山城に在り〉、九に安国寺〈山城に在り〉、十に万寿寺〈豐後（＝大分県）に在り〉。

④康暦年中重議定。一萬年山等持寺〈在山城、一山號鳳凰〉、開山夢窓疎石。二靈龜山臨川寺〈在山城〉、開山夢窓疎石。三安國山聖福寺〈在筑前博多〉、開山明菴榮西。四萬年山眞如寺〈在山城〉、開山子元祖元。五神鷄山安國寺〈在山城、舊號北禪寺〉、開山大同。六蔣山興聖萬壽寺〈在豐後〉、開山直翁智侃。七巨鰲山興國清見寺〈在駿河〉、開山關聖。八瑞雲山定林寺〈在美濃〉、開山高峯顯日。九覺雄山大福田寶幢寺〈在山城〉、開山春屋妙葩。十龍嶋山崇禪寺〈在出羽〉、開山春屋妙葩。

爾後歷代沿革不得悉記。

＊

康暦年中（一三七九～一三八〇）、重ねて議定す。一に万年山等持寺〈山城に在り、一に山、鳳凰と号す〉、開山は夢窓の疎石なり。二に霊亀山臨川寺〈山城に在り〉、開山は夢窓疎石なり。三に安国山聖福寺〈筑前博多に在り〉、開山は明庵栄西なり。四に万年山真如寺〈山城に在り〉、開山は子元の祖元（＝無学祖元）なり。五に神鷄山安国寺〈山城に在り、旧は北禅寺と号す〉、開山は大同（＝大同妙喆）なり。六に蔣山興聖万寿寺〈豊後に在り〉、開山は直翁の智侃（一二四五～一三二二）なり。七に巨鰲山興国清見寺〈駿河（＝静岡県）に在り〉、開山は関聖（＝無伝聖禅）なり。八に瑞雲山定林寺〈美濃に在り〉、開山は高峰の顕日（一二四一～一三一六）なり。九に覚雄山大福田宝幢寺〈山城に在り〉、開山は春屋妙葩（一三一二～一三八八）なり。十に龍嶋山崇禅寺〈出羽（＝山形県と秋田県）に在り〉、開山は春屋妙葩なり。

爾の後、歴代の沿革、悉く記すを得ず。

（西川秀敏）

【四】甲刹（カッサツ）

十刹之外甲於禪刹者爲甲刹。支那甲刹有龍翔山集慶寺華藏山顯報寺等。不得盡録。

日本甲刹有平安山佛心寺靈龜景徳寺等。不得盡録。

＊

十刹の外、禪刹に甲たる者を甲刹と爲す。支那の甲刹に、龍翔山集慶寺、華藏山顯報寺等有り。盡くは録することを得ず。

日本の甲刹に、平安山佛心寺（いあんざんぶっしんじ）、靈龜景徳寺（れいきけいとくじ）等有り。盡くは録することを得ず。

＊

○『扶桑五山記』・『和漢禪刹次第』（『続群書類従』第二八輯上・巻八二一・三八三～四頁）

（白川邦與）

【五】鄰封

忠曰、隣寺隣山言隣封。封者封疆也。

敕修清規［上二ノ廿六丈］尊宿遷化有鄰封遺書。

＊

忠曰く、隣寺、隣山を隣封と言う。封とは、封疆なり。

『敕修清規』［上二の廿六丈］尊宿遷化に鄰封の遺書有り。

＊

○敕修清規［上二ノ廿六丈］尊宿遷化有鄰封遺書＝『勅修百丈清規』巻三「遷化」条の「遺書之式」に「鄰封」（T48-1127b）の語が見えている。

（白川邦與）

【六】山隣

①忠曰、大徳寺・妙心寺稱山隣矣。吾聞諸先師。蓋爲其在五山之隣封也。或曰、五山僧、自稱叢林、貶大徳・妙心稱山林。故五山僧製大徳・妙心長老入寺疏、多用山林兩字。意在輕侮。謂我輩居公方官寺、渠自居山林也。余謂此説差矣。夫大徳妙心天子敕願寺。豈可貶稱哉。五山亦各有山號而各稱叢林。豈非山林耶。故支那五嶽亦有以山稱之者。居頂圓菴集木菴再住天童京城方外交疏云。聖人同一心。豈分竺乾洙泗。天下無二道。何論鐘鼎山林。〈止此。〉蓋鐘鼎謂儒在朝廷、山林謂釋在佛寺。又愚菴及禪師録［下ノ小参八丈］淨慈冬至小參云、千載南屏古道場、目前無法可論量。羣陰銷盡陽生也、四海同瞻化日長。如是則鐘鼓山林依舊太平氣象維新。〈止此。〉夫天童淨慈皆居五山之一。住天童疏而居頂有此詞。淨慈小參而愚菴有此言。則山林之目何在貶抑。故其説無謂矣。又敕修清規聖節疏語曰、山林鐘鼓樂化日之舒長。草木昆蟲被膏澤之滲漉。〈止此。〉此之疏五山大方蕞刹巨刹可皆通用而取蘇軾句成山林鐘鼓之語。五山亦可稱山林矣。又叢林者凡衆僧所集處之稱。五岳何得專稱而令他不稱哉。

＊

忠曰く、「大徳寺・妙心寺を山隣と稱す。吾れ諸を先師に聞く。蓋し其の五山の隣封に在るが爲なり。或いは曰く、『五山の僧は自ら叢林と稱し、大徳・妙心を貶して山林と稱す」と。故に五山の僧、大徳・妙心の長老入寺の疏を製するに、多く山林の兩字を用ゆ。意は輕侮に在り。謂えらく、「我が輩は公方の官寺に居し、渠は自ら山林に居す」と』と。余謂うに、此の説は差えり。夫れ大徳・妙心は天子の敕願寺（＝天皇の発願により建てられた寺）なり、豈に貶稱す可けんや。五山に亦た各々山號有りて、各々叢林と稱せば、豈に山林に非ずや。故に支那の五嶽にも、亦た山林を以て之を稱する者有り。居頂（？＝～一四〇四）の『圓菴集（霊谷円極居頂禅師円庵集）』に『木菴（＝木庵安永・？～一一七三）再び天童に住する、京城方外交の疏』に云く、『聖人、一心を同じくす、豈に竺乾（インドの仏教）洙泗（中国の儒教）を分かたんや。天下に二道無し。何ぞ鐘鼎・山林を論ぜん』と。〈此こに止まる。〉蓋し鐘鼎は儒（＝儒教）の朝廷に在るを謂い、山林は釋（＝仏教）の佛寺に在るを謂う。又た『愚菴及（＝愚菴智及・一三一一～一三七八）禪師録』［下の小参八丈］の淨慈（＝報恩光孝寺）の冬至の小參に云く、「千載南屏の古道場、目前に法の論量すべき無し。群陰銷盡（＝消え尽くす）して陽生ぜり、四海同に瞻る化日の長きことを。是くの如くんば、則ち鐘鼓山林は舊に依り、太平の氣象維れ新たなり」と。〈此こに止まる。〉夫れ天童淨慈は、皆な五山の一に居り天童に住する疏にして、居頂に此の詞有り。淨慈の小參にして愚菴に此の言有り。則ち山林の目を何ぞ抑（＝おとす）に在らん。故に其の説謂われ無しかな。又『敕修清規』（「五山」に前述）聖節の疏語に曰く、「山林鐘鼓、化日の舒長（＝のびのびする）を樂しみ、草木昆蟲膏澤（＝恵み・潤い・恩沢）の滲漉（＝にじみ出て、した たり落ちる）を被る」と。此こに止む。此の之疏、五山の大方蕞刹巨刹（＝小寺、大寺）皆通用すべくして蘇軾（＝東坡居士、蘇東坡）が句を取って山林鐘鼓の語を成す。五山も亦た山林と稱すべしか。又叢林とは凡そ衆僧所集の處の稱なり。五岳何ぞして他をして稱せざらしむことを得んや。

＊

○圓菴集木菴再住天童京城方外交疏云…蓋鐘鼎謂儒在朝廷、山林謂釋在佛寺＝『円菴集』は未見。『禅籍目録』等にその名が見えない。無著禅師の『正法山誌』第七巻の「山隣」条に、ここと同じ『円菴集』からの引用があり、次の様に述べられている。「玄極『円菴集』、木菴再住天童、京城方外交疏云、聖人同一心、豈分竺乾洙泗。天化無二道、何論鐘鼎山林。［止此］蓋鐘鼎謂濡在城闕、山林謂釋在仏寺也。（玄極の『円菴集』に、『木菴、天童に再住する、京城方外交の疏』に云く、『聖人は一心を同じく す、豈に竺乾・洙泗を分けんや。天化に二道無し、何ぞ論鐘鼎・山林を論ぜん』と。［此こに止まる。］蓋し鐘鼎は儒の城闕に在るを謂い、山林は釋（＝釋の誤字）の仏寺に在るを謂うなり。）」（思文閣・昭和十三年、p.169～170）

○又愚菴及禪師録［下ノ小参八丈］淨慈冬至小參云…太平氣象維新＝『愚菴智及禪師録』巻六（X71-681c）にそのまま同文が見える。愚菴智及（一三一一～一三七八）は、字は以中、別号は西麓。臨済宗大慧派の禅僧で、元叟行端の法嗣。径山などに住持した。

○又敕修清規聖節疏語曰…草木昆蟲被膏澤之滲漉＝『勅修百丈清規』巻一「祝釐章第一」の「聖節疏語」（T48-1114b）にそのままの文章が見える。

② 東坡贈清涼寺和長老詩云、老去山林徒夢想。雨餘鐘鼓更清新。

＊

東坡［四の五十三丈］「清涼寺の和長老に贈る詩」に云く、「老い去って山林徒に夢想するのみ。雨餘の鐘鼓更に清新なり」と。

＊

○東坡贈清涼寺和長老詩云…雨餘鐘鼓更清新＝東坡は、蘇軾（一〇三六～一一〇一）のこと。中国、北宋の政治家・文学者。眉山（四川省）の人。字は子瞻（しせん）、号は東坡居士。唐宋八家の一人。父の蘇洵、弟の蘇轍と合わせて三蘇と呼ばれる。引用は『集註分類東坡先生詩』巻四「釈老上」（32a）に見える同題七言律詩の第五句と第六句。字句の異同は無い。

（本庄悦子）

【七】十方刹

①忠曰、請諸方名宿住持、不拘甲乙、故爲十方刹也。

＊

忠曰く、「諸方の名宿を請じて住持せしめ、甲乙に拘わらず。故に十方刹と爲すなり」と。

＊

○文中、【三六五】住持は、『象器箋』の中に立項されている。

②敕修清規［上二ノ十四丈］請新住持云、凡十方寺院、住持虚席、必聞于所司、伺公命下、庫司會兩序勤舊茶議、發專使。修書製疏茶湯榜。請書記爲之。

＊

『敕修清規』［上二の十四丈］「新住持を請する」に云く、「凡そ十方の寺院、住持、席を虚しくすれば、必ず所司（＝上座・寺主・維那の三綱の称）に聞して、公命の下るを伺って、庫司・兩序・勤舊を茶に會して、議して專使を發す。書を修し、疏・茶湯の榜を製す。書記を請じて之を爲さしむ」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十四丈］請新住持云…請書記爲之＝『勅修百丈清規』巻三「請新住持」の「發專使」（T48-1123c）に、全く同文が見える。

○文中、【四四四】庫司・【二八八】勤舊・【五四六】專使・【三九六】書記は、『象器箋』の中に立項されている。

③義堂信禪師日工集［二ノ卅六丈］云、上杉兵部來和會報恩永式。堂曰、昔十方諸檀、爲先師造寺。不可勝計。特以天龍爲十方刹。兵部曰、吾聞臨川以下、大小寺院、皆爲度弟院。今此瑞泉亦然。

＊

義堂信禪師（＝義堂周信　臨済宗夢窓派・一三二五～一三八八）の『日工集』［二の卅六丈］に云く、「上杉兵部來り、報恩の永式を和會す。堂曰く、『昔、十方の諸檀、先師の爲に寺を造ること、勝げて計う可からず。特に天龍を以て十方刹と爲す』と。兵部曰く、『吾れ聞く、臨川以下、大小の寺院は、皆な度弟院爲り、と。今、此の瑞泉も亦た然り』と」と。

＊

○義堂信禪師日工集［二ノ卅六丈］云…今此瑞泉亦然＝『日工集』は、『空華日用工夫集（空華日工集）』広本四十八巻であるが散逸。弟子等による抜書『空華日用工夫略集』四巻がある。『空華日用工夫略集』

巻二「永和元年九月十八日」の項に、「管領主上杉兵部來問病。且就和會報恩永代之儀式。余曰、宜早辨後事。兵部曰、新寺之事、一切任師意。余曰、昔十方諸檀、為先師造寺、不可勝計。特以天龍則為十方刹。兵部曰、吾聞、臨川以下、大小寺院、皆為度弟院。今此瑞泉亦然也」（辻善之助著・太洋社・一九三九）とある。

○文中、【九〇〇】和會・【八】度弟院は、『象器箋』の中に立項されている。

④空華集云、天龍資聖寺以本備十方之居、故先師不允徒弟者掛搭。〈詳職位門淨頭處〉。

＊

『空華集（＝義堂周信著）』に云く、「天龍資聖寺は、本と十方の居に備うるを以ての、故に先師、徒弟の者掛搭するを允さず」と。〈職位類淨頭の處に詳らかなり〉

＊

○空華集云、天龍資聖寺以本備十方之居、故先師不允徒弟者掛搭。＝『空華集』巻一一「序賀淨頭頌軸」（『五山文学全集』第二巻・p.761）に全く同文が見える。

○詳職位門淨頭處＝指摘されている通り、『象器箋』【五三八】「淨頭」条に、「…義堂空華集［十一ノ二丈］賀淨頭頌軸序云…賜天龍資聖之額。仍命先師、為開山祖。然以寺本備十方之居故、先師不允徒弟者掛搭。…」とある。

○文中、【六七三】掛搭は、『象器箋』の中に立項されている。

⑤飜譯名義集［七ノ一丈］云、裕師寺誥云、寺是攝十方一切衆僧修道境界。法爲待一切僧經游來往、受供處所、無彼無此、無主無客。僧理平等同護佛法故、其中飲食衆具、悉是供十方、凡聖同有。鳴鐘作法、普集僧衆、同時共受、與檀越作生福之田。如法及時者、皆無遮礙。是宜開廓遠意、除蕩鄙懐、不恡身財護持正法。

＊

『飜譯名義集』［七の一丈］に云く、「裕師の『寺誥』に云く、『寺は是れ十方一切衆僧を攝して、修道せしむる境界なり。法、一切の僧の、經游來往して、供を受くるを待つ處所爲り。彼も無く此も無く、主も無く客も無し。僧の理は平等にして、同じく佛法を護するが故に、其の中の飲食衆具、悉く是れ十方に供して、凡聖同じく有す。鐘を鳴らし法を作し、普く僧衆を集め、同時に共に受けて、檀越の與に生福の田と作し、法の如くして時に及ぶ者には、皆な遮礙（＝さえぎること）無し。是れ宜しく遠意を開廓し、鄙懐（＝いやしい思い）を除蕩して、身財を恡まず、正法を護持すべし』と」と。

＊

○飜譯名義集［七ノ一丈］云、裕師寺誥云…不恡身財護持正法＝『翻譯名義集』巻七「寺塔壇幢篇第五十九」（T54-1166c）に、全く同文が見える。裕師は隋の靈裕法師（五一八～六〇五）のこと（『仏光大辞典』p.6939）。『寺誥』十篇は靈祐の著述である。『釈氏要覧』巻一「造伽藍法」に、「斉靈裕法師造『寺詰』十篇」（T54-263c）とあり、『大唐内典録』巻一〇「隋朝相州大慈寺沙門釈靈裕撰論記三十巻（別集八巻）」の中に、「塔寺記（一巻并寺誥）」（T55-332a）とある。

○文中、【三三八】檀越は、『象器箋』の中に立項されている。

⑥　忠曰、寺誥十方義、與請十方僧住持少異焉。然寺通十方、則其義同。

＊

忠曰く、「『寺誥』の十方の義は、十方僧に請じて住持せしむると少しく異なり。然れども寺、十方に通ずることは、則ち其の義同じなり」と。

（澤守豊文）

【八】度弟院（ッチエン）

①忠曰、未詳何義。對十方刹爲言、則己所度之。弟子令住持之。甲乙［物初九ノ四丈］而傳者〈又見稱呼類度弟處〉。

＊

忠曰く、「未だ何の義なるかを詳かにせず。蓋し十方刹に對して言を為せば、則ち己れが度する所の弟子を之に住持せしめて、甲乙［『物初』九の四丈］傳うる者（もノ）なり〈又た「稱呼類」度弟の處に見ゆ〉。

＊

○甲乙［物初九ノ四丈］＝「物初」は『禅林象器箋援書目録』に「物初観録」とあるが、『物初大観禅師語録』は一巻本であり、「甲乙」の文字は見えない。恐らく『物初賸語』二十五巻からの引用であろう。

○又見稱呼類度弟處＝称呼類【三一五】度弟を参照。

②義堂日工集［二ノ四十六丈］云、神崎某、以寺施與。余堅却之曰、凡今時以度弟院爲資者、天下皆是也。余則不然。以有三寶互用之誡也。　又［二ノ五十九丈］云、府君賜東榮寺爲度弟院。　又［三ノ五十九丈］云、承新規、改度弟院爲十方、則許預十刹。余伏以臨川已爲十刹首。是度弟也。當寺及普門、亦皆度弟。諸方以爲何如哉。府君僧録、皆領之。

＊

義堂の日工集［二の四十六丈］に云く、「神崎某、寺を以て施與す。余之を堅く却（しりぞ）けて曰く、『凡そ今時、度弟院を以て資けと為す者、天下皆な是れなり。余は則ち然ず。三寶互用の誡有るを以てなり』と」と。　又た［二の五十九丈］云く、「府君、東榮寺を賜いて、度弟院と為す」と。　又た［三ノ五十九丈］云く、「承わる、『新規、度弟院を改めて十方と為さば、則ち十刹に預ることを許す』と。余伏して以（おもん）みるに、臨川已に十刹の首（た）為り。是れ度弟なり。當寺及び普門も亦た皆な度弟なり。諸方以て何如んとか為（せ）ん。府君・僧録、皆な之を領す」と。

＊

○義堂日工集［二ノ四十六丈］云、神崎某、以寺施與。…以有三寶互用之誡也＝『空華日用工夫略集』巻二「永和二年十二月二十日」条に、「神崎二郎左衛門、以寺而施与。余堅却之曰、凡今時以度弟院為資者、往々天下皆是也。余則不然。以三宝互用之誡也」（辻善之助編・太洋社・一九三九）とある。

○又［二ノ五十九丈］云、府君賜東榮寺爲度弟院＝『空華日用工夫略集』には見えない。

○又［三ノ五十九丈］云、承新規、改度弟院爲十方…府君僧録、皆領之＝『空華日用工夫略集』には見えない。

（小林玄地）

【九】受業院（じゅごうノいん）

①首受出家業寺院也。［受業義見稱呼類受業師。］

＊

首（はじ）め出家の業を受くる寺院なり。［受業の義は稱呼類の受業師に見ゆ。］

＊

○割り注で指摘されている通り、「受業」の意味は『象器箋』【三〇三】「受業師」条で説明されている。

②傳燈録［九巻十五丈］云、福州古靈神讃禪師、本州大中寺受業。後行脚遇百丈、開悟却廻本寺。受業師問曰、汝離吾在外、得何事業。曰、並無事業。遂有蜂鑽窓紙因縁。

＊

『傳燈録』［九巻十五丈］云く、「福州古靈の神讃禪師、本州の大中寺にして受業す。後に行脚して百丈に遇い、開悟して本寺に却廻（＝戻る）す。受業の師、問いて曰く、『汝、吾れを離れて、外に在って何の事業をか得たる』と。曰く、『並びに事業無し』と。遂に蜂、窓紙を鑽する因縁有り」と。

＊

○傳燈録［九巻十五丈］云…曰、並無事業。遂有蜂鑽窓紙因縁＝『景徳伝燈録』巻九「福州古霊神賛禅師」（T51-268a）条に同じ文章が見える。

○遂有蜂鑽窓紙因縁＝『景徳伝燈録』巻九では、「其師又一日在窓下看経。蜂子投窓紙求出。師覩之曰、『世界如許広闊、不肯出。鑽他故紙、驢年去得』」（T51-268a）となっている。

○文中、【八七二】行脚は、『象器箋』に立項されている。

（西川秀敏）

【一〇】常住

①敕修清規副寺云、掌常住金穀錢帛米麥出入。　又［下一ノ七丈］典座云、護惜常住不得暴殄。又莊主云、有補常住而消禍未萌。　又［下一ノ三十一丈］辦道具濾水囊云、常住若不濾水罪歸主執之人。

＊

『敕修清規』の「副寺」に云く、「常住の金穀・錢帛・米麥の出入を掌どる」と。　又［下一の七丈］「典座」に云く、「常住を護惜（＝大切に）して暴殄（＝浪費）することを得ず」と。又た「莊主」に云く、「常住を補って禍を未萌に消する（＝事前に防ぐ）こと有り」と。又た［下一の三十一丈］「辦道具」の「濾水囊」に云く、「常住若し水を濾さざれば、罪は主執（＝係り）の人に歸す」と。

＊

○敕修清規副寺云、掌常住金穀錢帛米麥出入＝底本に巻数・丁数の書き入れがないが、『勅修百丈清規』巻四「副寺」章（T48-1132c）に、全く同文が見える。

○又［下一ノ七丈］典座云、護惜常住不得暴殄＝『勅修百丈清規』巻四「典座」章（T48-1132c）に、全く同文が見える。

○又莊主云、有補常住而消禍未萌＝ここにも巻数・丁数の書き入れがないが、『勅修百丈清規』巻四「莊主」章（T48-1133b）に、全く同文が見える。

○又［下一ノ三十一丈］辦道具濾水囊云、常住若不濾水。罪歸主執之人＝『勅修百丈清規』巻五の「辦道具」の章「濾水囊」の条（T48-1139c）に、全く同文が見える。

○文中、【四五一】「副寺」・【四五九】「典座」・【四九五】「莊主」・【一五八九】「濾水囊」は、『象器箋』に立項されている。

②忠曰、常住者行事鈔［中一ノ廿九丈］隨戒釋相篇云、僧物有四種。一者常住常住、謂衆僧舍宇

什物樹木田園僕畜米麥等物、以體局當處不通餘界、但得受用。不通分賣。故重言常住也。云云。〈器物類常住物處詳引四種。〉今禪林總轄常住僧物之所、又謂之常住。所謂千年常住也。〈二者十方常住、三者現前現前、四者十方現前。詳釋如彼。〉

＊

忠曰く、「常住とは『行事鈔』［中一の廿九丈］の『隨戒釋相篇』に云く、『僧物に四種有り。一には常住常住、謂らく、衆僧舍宇の什物・樹木・田園・僕畜・米麥等の物、體、當處に局って餘界に通ぜざるを以て、但だ受用を得るのみ。分賣に通ぜず。故に重ねて常住と言うなり。云云』と。〈「器物類」の「常住物」の處に、詳らかに四種を引く。〉今、禪林常住の僧物を總轄するの所、又た之を常住と謂う。所謂る千年常住なり」と。〈二には十方常住、三には現前現前、四には十方現前なり。詳釋すること彼の如し。〉

＊

○行事鈔［中一ノ廿九丈］隨戒釋相篇云、僧物有四種。一者常住常住…故重言常住也。云云＝『四分律刪繁補闕行事鈔』にそのままの文章は見えない。恐らく同書・巻中「隨戒釋相篇第一四」の、「然僧有四種。一者常住常住。謂衆僧厨庫寺舍衆具華果樹林田園僕畜等、以体通十方、不可分用。総望衆僧、如論断重。僧祇云、僧物者、縦一切比丘集、亦不得分。此一向準入重摂」（T40-55c~56a）を踏まえたものであろう。ただ、『釈氏要覧』巻三の「常住」の章（T54-302c）に、全く同文が見える。【一五〇二】「什物」は、『象器箋』に立項されている。

○器物類常住物處詳引四種＝『象器箋』巻一九「第廿八類器物門」の【一五〇一】「常住物」を参照。

○所謂千年常住也＝④参照。

○二者十方常住、三者現前現前、四者十方現前。詳釋如彼＝前注の『釈氏要覧』の文章に続いて、「二者十方常住。謂如一寺中供僧成熟飲食等。以体通十方唯局本処。善見律云、不打鐘食犯盗罪。三者現前常住。此有二種。一物現前。二人現前。但此物唯施此処現前僧故。四者十方現前常住。謂亡僧軽物施体通十方。唯局本処現前僧得分故」（巻三・T54-303a）とあるのを指す。

③釋氏要覽云、增輝記、梵云、拓鬬提奢、唐言四方僧物。但筆者訛、拓爲招、去鬬奢留提。故稱招提。即今十方住持寺院、是也。

＊

『釋氏要覽』に云く、『『增輝記』に『梵（梵語）に拓鬬提奢と云い、唐（中国語）に四方僧と言う。但だ筆者の訛りて、拓を招と爲し、鬬・奢を去って、提を留む。故に招提と稱す。即今十方住持の寺院、是れなり』と」と。

＊

○釋氏要覽云、增輝記梵云拓鬬提奢…即今十方住持寺院、是也＝『釈氏要覧』は、三巻。宋の道誠編で天禧四年（一〇二〇）に刊行された。引用部分は同書・巻一（T54-262c）に見えるが、「鬬」の字が「鬪」の字となっている。

④廣燈録［廿三ノ三丈］洞山聰禪師章云、僧問、無根樹子、向什麽處栽。師云、千年常住一朝僧。

＊

『廣燈録』［廿三の三丈］洞山聰禪師（＝曉聰禪師　雲門宗・?～一〇三〇）の章に云く、「僧問う、無根樹（＝情識を超越した境界のこと）子、什麽れの處に向かって栽えん」と。　師云く、「千年の常住、一朝の僧」と。

＊

○廣燈録［廿三ノ三丈］洞山聰禪師章云、僧問、無根樹子、向什麽處栽。師云、千年常住一朝僧＝『広燈録』は、正式名は『天聖広燈録』で三〇巻。宋の李遵勗編で紹興十八年（一一四八）刊行された。引用は同書・巻二三の「筠州洞山曉聡禪師」章（X78-536b）に見え、また『聯燈会要』巻二七「筠州洞山曉聡禪師」章（X79-240b）、『五燈会元』巻一五「瑞州洞山曉聡禪師」章（X80-320b）にも同文が見える。「無根樹子」の子は接尾語として用い、「す」と読み慣わす。

⑤羅湖野録［五十九丈］云、明州啓霞宏禪師、院之山林深秀、貴人卜葬所。親迎柩至。宏堅臥其穴不克喪事。郡守仇待制、遣人諭之曰、千年常住一朝僧、長老何苦爭耶。宏曰、不可以一朝僧壞千年常住。貴人亦賢者。善其言而改圖。

＊

『羅湖野録』［五十九丈］に云く、「明州啓霞の宏禪師、院の山林深秀（＝奥深く）にして、貴人有って葬所を卜す（＝賜う）。親から柩を迎えて至る。宏、其の穴に堅臥して喪事（＝葬儀）を克くせず。郡守の仇待制（＝宮廷の文物を官吏する官）、人を遣わし之を諭して曰く、『千年常住一朝の僧。長老何ぞ苦ごろに爭わんや』と。宏曰く、『一朝の僧を以て千年の常住を壞す可からず。貴人も亦た賢者なり』と。其の言を善しとして改め圖る」と。

＊

○羅湖野録［五十九丈］云、明州啓霞宏禪師、院之山林深秀、貴人卜葬所。…貴人亦賢者。善其言而改圖＝『羅湖野録』は、大慧宗杲の法嗣、曉瑩仲温の編。紹興二十五年（一一五五）に自序成り、同三十年（一一六〇）に同門の無著尼妙総長老の跋を得て刊行した。羅湖上に菴居して、当代禪門の逸話を集録したもの。引用は『羅湖野録』巻二「明州啓霞宏禪師」章（X83-392a）に見える。文中、【二七六】「長老」は、『象器箋』に立項されている。

⑥中峯本禪師山房夜話［録十一下ノ十七丈］云、今之芯蒭於所爲處、動背至理、惟務惡求。如片地之不獲、或多財以壓之、或重勢以臨之。或搆罪以恐之、或挾術以勝之。雖成就於一時、皆煩惱業根。豈福田利益者哉。競以千年常住一朝僧之説爲張本。殊不思千年常住苟非定慧資熏自他兼利、必何所從而得耶。或罔其所自、是猶捨池而招明月棄樹以集衆鳥。理豈然哉。

＊

中峯本禪師の『山房夜話』［録十一下の十七丈］に云く、「今の芯蒭（＝比丘）所爲の處に於いて、動もすれば至理（＝最高の真理を具現した悟りの境界）に背き、惟だ惡求を務むるのみ。如し片地（＝わずか）も之を獲ざれば、或いは多財以て之を壓し、或いは勢を重くして以て之に臨む。或いは罪を搆えて以て之を恐れしめ、或いは術を挾んで以て之に勝たんとす。一時に成就すと雖も、皆な煩惱の業根（＝作業根）なり。豈に福田の利益なる者ならんや。競って『千年常住一朝の僧』というの説を以て張本（＝そのもと）と爲す。殊に思わず、千年常住は、苟も定慧（＝禪定と智慧）の資熏、自他の兼利にあらずんば、必ず何の從う所にして得んや。或いは其の自る所罔くんば、是れ猶お池を捨てて明月を招き、樹を棄てて以て衆鳥を集むるがごとし。理、豈に然らんや」と。

＊

○山房夜話［録十一下ノ十七丈］云、今之芯蒭於所爲處・・・理豈然哉＝『山房夜話』三巻は、元の中峯明本の撰述。『中峰和尚広録』の巻三〇のうちの巻一一に収められている。引用部分と同文が寛永二十（一六

四三）年刊の和刻本『天目中峰広録』巻一一（和刻影印近世漢籍叢刊・思想四編・第一冊、p.531）に見える。

⑦ 禪林寶訓［下ノ廿三丈］云、妙喜曰、安著禪和子不過錢穀而已。時萬菴以謂不然。計常住所得善能撙節浮費用之有道錢穀不勝數矣。何足爲慮。然當今住持、惟得抱道衲子爲先。

＊

『禪林寶訓』［下の廿三丈］に云く、「妙喜（＝大慧宗杲・一〇八九～一一六三）曰く、『禪和子（＝禪坊主）を安著することは、錢穀に過ぎざるのみ』と。時に萬菴以謂らく、『然らず。常住の得る所を計って、善く能く浮費を撙節（＝控えめに）し、之を用うること道有らば、錢穀は數うるに勝えず。何ぞ慮りを爲すに足らん。然らば當今の住持、惟だ抱道（＝仏道修行に努力精進すること）の衲子（＝禪僧）を得るを先と爲すのみ』と」と。

＊

○禪林寶訓［下ノ廿三丈］云、妙喜曰：惟得抱道衲子為先＝『禪林宝訓』は、『禪門宝訓』ともいう。はじめ大慧宗杲と竹庵士珪が編集したものを、東呉の沙門淨善が増補改修し、淳熙年間（一三七八～一三八九）に完成した。先哲の遺著の中から、参禪修道者のために訓戒策励となるべき垂示の語句や、機縁等三百余編を選び、毎条、その出典を明記している。刊本によって内容に多少の異同がある。引用部分は同書・巻三（T48-1032c）にほぼ同文が見えるが、「時萬菴」の下に「在座」の二字がある。また、文末に典拠として「已上竝見『可菴集』」と付記されている。万菴は大慧の法嗣である万菴道顔のこと。その伝は、『続伝燈録』巻三二「江州東林万菴道顔禪師」（T51-686b）に見える。

⑧ 虛堂和尚徑山録［後ノ九ノ五十一丈］有朝廷、降賜度牒二十道、入常住修造上堂。

＊

『虛堂和尚徑山録』［後の九の五十一丈］に「朝廷、度牒（＝度縁。僧尼が得度の時、官より与えられる許可証）二十道を降賜して、常住に入れて修造する上堂」有り。

＊

○虛堂和尚徑山録［後ノ九ノ五十一丈］有朝廷、降賜度牒二十道、入常住修造上堂＝『虛堂和尚徑山録』は、『虛堂和尚語録』巻九を指す。虛堂智愚撰。咸淳五（一二六九）年に刊行された。虛堂智愚の径山住持時代の語録。妙源編。引用部分は同書（T47-1055b）に、全く同文が見える。

（白川邦與）

【一一】公界

○公界とは公共、「公」の概念を指す言葉。禪宗では、修行の場、僧侶を指す。

①公道之疆界也。

＊

公道（＝正しい道）の疆界なり。

②敕修清規［下一巻五十二丈］日用軌範云、不得以兩邊公界手巾、拭頭面。公界手巾、係著衣後淨手拭之、以披五條也。

＊

『敕修清規』［下一巻五十二丈］の日用軌範に云く、「兩邊公界の手巾を以て頭面を拭うこと

を得ざれ。公界の手巾は、著衣の後に、手を淨めて之を拭き、以て五條（＝五条衣）を披するに係るなり」と。

＊

○敕修清規［下一巻五十二丈］日用軌範云、…以披五條也＝引用は『勅修清規』巻六「日用軌範」（T48-1146a）にそのままの文章が見える。文中に見える「五条」は、安陀衣。（梵）antarvāsaの音写。中宿衣・内衣・下衣。三衣の一。五幅の布で作った最も略式の衣。『禅苑清規』巻八の「誡沙彌」に、「未披剃前、准備五條（正合披五條縵衣）・裙衫・鎮子・鞋靸。先受五戒、次受十戒」（X63-546a）とある。

（本庄悦子）

【一二】塔頭

①祖師塔處也。

＊

祖師の塔處なり。

＊

○文中の「塔処」は、その寺の住持の墓所のこと。

②臨濟玄禪録［五十一丈］云、到達磨塔頭。塔主云、長老先禮佛、先禮祖。師云、佛祖俱不禮。塔主云、佛祖與長老是什麼冤家。師便拂袖而出。

＊

『臨濟玄禪師の録』［五十一丈］に云く、「師、達磨の塔頭に到る。塔主（＝墓守）云く、『長老、先ず佛を禮せんか、先ず祖を禮せんか』と。師云く、『佛祖俱に禮せじ』と。塔主云く、『佛祖と長老と、是れ什麼の冤家ぞ』と。師便ち拂袖して出づ」と。

＊

○臨濟玄禪録［五十一丈］云、到達磨塔頭。塔主云、長老先禮佛、先禮祖。師云、佛祖俱不禮。塔主云、佛祖與長老是什麼冤家。師便拂袖而出＝『鎮州臨済慧照禅師語録』の「行録」（T47-506a、岩波文庫本・p.199）に、そのままの文章が見える。

（本庄悦子）

【一三】子院

叢林諸院、依附本寺者爲子院。

＊

叢林の諸院、本寺に依附する者を子院と爲す。

（本庄悦子）

【一四】都道場

①都道場者、毎郡縣、建祝壽道場、以爲一郡一縣聚會祈禱之處。義堂日工集［一巻］云、唐土、毎城裡有都道場、諸宗集會祝聖〈止此。〉、是也。

＊

都道場は、郡縣毎に、祝壽の道場を建てて、以て一郡一縣の聚會祈祷の處と為す。義堂の『日工集』［一巻］に云く、「唐土、城裡毎に都道場有り。諸宗集會して祝聖す」〈此こに止まる。〉と、是れなり。

＊

○都道場者、毎郡縣、…諸宗集會祝聖〈止此。〉、是也＝義堂日工集［一巻］云、唐土、毎城裡有都道場、諸宗集會祝聖＝文中、『日工集』からの引用は、『空華日用工夫略集』巻一の「貞治六年十一月五日」の項（辻善之助著・太洋社・一九三九、p.13）に、全く同文が見える。また、【九七三】「祈禱」は、『象器箋』の中に立項されている。

②敕修清規［上一ノ廿一丈右］聖節云、或住持赴郡縣都道場所歸時、鳴鐘集衆門迎、詣方丈問訊。

＊

『敕修清規』［上一の廿一丈右］「聖節」に云く、「或いは住持、郡縣の都道場の所に赴きて帰る時は、鐘を鳴らし衆を集めて門迎して、方丈に詣して問訊す」と。

＊

○敕修清規［上一ノ廿一丈右］聖節云、…詣方丈問訊＝『勅修百丈清規』巻一「祝釐章第一」の「聖節」（T48-1113c）に、全く同文が見える。文中、【三六五】「住持」・【四〇】「方丈」・【七二七】「問訊」は、『象器箋』の中に立項されている。

③僧史略［中ノ五十二丈］云、魏大武帝始光二年、立道場。至神麚四年、敕州鎮、悉立道場。慶帝生日。〈節候類聖節詳引。〉

＊

『僧史略』［中の五十二丈］に云く、「魏の大武帝の始光二（四二五）年、道場を立つ。神麚四（四三二）年に至って、州鎮に敕して、悉く道場を立て、帝の生日を慶す」と。〈「節候類」の「聖節」に詳らかに引く。〉

＊

○僧史略［中ノ五十二丈］云、…敕州鎮悉立道場。慶帝生日。〈節候類聖節詳引。〉＝『大宋僧史略』巻中「内道場」に、「魏大武皇帝始光二年。立至神道場。神麚四年、勅州鎮、悉立道場。蓋帝王生此日也」（T54-247b）とある。末尾の割り注に〈節候類聖節詳引〉とある通り、『象器箋』の【九五二】「聖節」に、「僧史略［中ノ五十二丈］云、…魏大武帝…慶帝生日」と同文が見える。

（澤守豊文）

【一五】定額

①忠曰、朝廷定天下佛寺之數有限。此云定額。定額外、不許私建寺。〈凡定僧數、或定賦税數、皆稱定額。〉

＊

忠曰く、「朝廷、天下の佛寺の數を定むるに限り有り。此れを定額と云う。定額の外は、私に寺を建つることを許さず」と。〈凡そ僧の數を定め、或いは賦税の數を定むるを、皆な定額と稱す。〉

②本朝文粹［五ノ卅六丈］、前中書王、請以施無畏寺爲定額寺。状云、伏願、陛下鴻慈特降龍渙、

準之前例、列之定額。

＊

『本朝文粋』［五の卅六丈］に、「前の中書王、施無畏寺を以て定額の寺と爲さんことを請う」の状に云く、「伏して願わくは、陛下、鴻慈（＝大きなめぐみ・大恩＝鴻恩）、特に龍渙を降して、これを前例に準えて、之を定額に列したまえ」と。

＊

○本朝文粋［五ノ卅六丈］、前中書王、…列之定額＝『校訂本朝文粋』巻五・十五丁の「請被以施無畏寺為定額寺状　前中書王」章には、「伏願、陛下鴻慈特降龍渙、准之前例、列之定額」（第三冊・賜蘆書院・出版年不明）とあり、「準」ではなく「准」となっているが、あとは同文が見える。尚、『本朝文粋』は平安中期の漢詩文集。十四巻。藤原明衡撰。平安初期から中期の漢詩文四二七編を分類し収める。成立年代は康平年間と推定されている。本書編纂のために多くの公文書の記述使用が覗い知れるため、明衡が文章博士や東宮博士の要職に就いた晩年期の編纂であろうというのがその根拠。書名は宋の姚鉉の『唐文粋』に依ったか。『文選』に倣い三十九に分類しているが、日本独自の仏教関連の願文や、文章・和歌等もあり、わが国社会情勢に適したものに改めようとした意図が感じられる。主な作者は、大江匡衡・大江朝綱・菅原文時・紀長谷雄・菅原道真・源順・大江以言・兼明親王・都良香・紀斉名など。多くは四六駢儷文であり、また本邦初の文使用編纂書であり公文書が多数含まれている事から、故実典例として参考にされたが、江戸時代に至り駢儷文が否定されるようになると省みられなくなった。

（澤守豊文）

○殿堂類　上

【二〇】伽藍

①慧苑華嚴音義［二ノ一丈］云、僧伽藍。具云僧伽羅摩。言僧者衆也、伽羅摩者園也、或云衆所樂住處也。

＊

慧苑の『華嚴音義』［二の一丈］に云く、「僧伽藍。具さには僧伽羅摩と云う。僧と言うは衆なり。伽藍摩は園なり。或いは衆所樂住處と云うなり」と。

＊

○慧苑華嚴音義［二ノ一丈］…或云衆所樂住處也＝唐、慧苑『新訳大方広仏華厳経音義』二巻の巻上（A91-33 6b）に同文が見える。慧苑は、唐代の華厳僧。賢首大師法蔵の元で華厳教学を究め、山首門人と号した。『続華厳略疏刊定記』を出すに及んで師の法蔵と異なる学説を立て、後に清涼澄観から激しい非難を浴び、華厳学の異端とされた。『宋高僧伝』巻六「唐洛京仏授記寺慧苑伝」（T50-739c）条に立伝。

②忠曰、法堂、佛殿、山門、廚庫、僧堂、浴室、西浄為七堂伽藍。未知何據。各有表相如圖。

廚庫　左手　　浴室　左脚

法堂　頭　　佛殿　心　　山門　陰

僧堂　右手　　西浄　右脚

＊

忠曰く、「法堂、佛殿、山門、廚庫、僧堂、浴室、西浄を七堂伽藍と為す。未だ何に據るかを知らず。おの各表相有ること圖の如し」と。

	庫裡 左手		浴室 左脚
法堂 頭	佛殿 心	山門 陰	
	僧堂 右手		東司 右脚

③止觀輔行［二之一ノ四八丈］云、如大經云、頭為殿堂。

＊

『止觀輔行』［二之一ノ四八丈］に云く、「『大經』に云うが如きは、頭を殿堂と為す」と。

＊

○『止觀輔行』［二之一ノ四八丈］云…頭為殿堂＝唐、湛然『止観輔行伝弘決』巻二（T46-190c）に同文が見えるが、無著の書き込みにある［二之一］ではなく、［二之二］である。また原文は、「如大経云、頭為殿堂等」と「等」の字がある。文中の「大経」は『大般涅槃経』のこと。同経に「頭為殿堂、心王処中」（北本・巻一・T12-367b、南本・巻一・T12-606c）とある。

④摩訶僧祇律［三四巻○正法眼蔵六ノ八丈引］云、厠屋不得、在東在北、應在南在西。

＊

『摩訶僧祇律』［三四巻○『正法眼蔵』六の八丈に引く］に云く、「厠屋は東に在り、北に在ることを得ず、應に南に在り、西に在るべし」と。

＊

○摩訶僧祇律［三四巻○正法眼蔵六ノ八丈引］云、…應在南在西＝『摩訶僧祇律』巻三四（T22-504a）に同文が見える。また、無著が典拠として並挙している通り、道元『正法眼蔵』（T82-33b）に同文が見えており、ここの引用は、『摩訶僧祇律』の丁数が記されていないことから、『正法眼蔵』からの又引きであろうと思われる。尚、寺宇建立の方位について『四分律刪繁補闕行事鈔』巻三の注記に、「中国の伽藍門は、皆な東に向くが故に、仏塔廟宇は、皆な東に向かって開く。乃ち厨廁亦た西南に在るに至っては、彼の国、東北の風多きに由るが故なり（中国伽藍門、皆東向故、仏塔廟宇、皆向東開。乃至厨廁亦在西南、由彼国東北風多故）」（T40-134a、底本は寛文十年和刻本）とある。

⑤忠曰、此圖浄所在西南。則合僧祇律説。

＊

忠曰く、「此の圖の浄所は西南に在り。則ち『摩訶僧祇律』の説に合す」と。

（足立宜了）

【二一】招提

①増壹阿含經［十四ノ六丈］云、毘沙鬼白世尊曰、我今以此山谷施招提僧、唯願世尊與我受之。

＊

『増壹阿含經』［十四の六丈］に云く、「毘沙鬼、世尊に白して曰く、『我は今、此の山谷を以て、招提の僧に施さん。唯だ願わくは世尊、我が與に之を受けよ』と」と。

＊

○増一阿含經［十四ノ六丈］云…與我受之＝『増一阿含經』巻一四「高憧品第二四」（T2-616b）からの引用。「爾時世尊、与毘沙鬼、説微妙法、勧令歓喜。時、彼悪鬼、手擎数千両金、奉上世尊。白世尊曰、…」とあり、以下は同文である。

②悲華經［八ノ十四丈］云、智華無垢堅菩提尊王如来正法像法中間、諸比丘比丘尼、無慚無愧、或斷招提僧物、斷現前僧、衣服飲食臥具醫藥。

＊

『悲華經』［八の十四丈］に云く、「智華無垢堅菩提尊王如来の正法像法の中間に、諸もろの比丘比丘尼、無慚無愧にして、或いは招提の僧物を斷ち、現前の僧の衣服飲食、臥具醫藥を斷つ」と。

＊

○悲華經［八ノ十四丈］……衣服飲食臥具醫藥＝『悲華經』巻八「諸菩薩本授記品」（T3-219c）からの引用。多少省略などがある。原文は次の通り。「爾の時、仏、大悲菩薩に告ぐらく、『彼の仏、般涅槃の後、正法に世に住すること、満一千歳、正法滅し已わって、像法に世に住すること、亦た一千歳なり。大悲よ、彼の仏世尊は、若しくは世に在り、若しくは涅槃、正法と像法と、此の中間に於いて、有諸もろの比丘及び比丘尼、法を非り戒を毀ちて、邪道を行い、法供養を断ちて、慚無く愧無く、或いは招提の僧物を断ち、現前の僧の衣服飲食、臥具医薬を断ち、衆僧物を取りて、以て己が有と為して自ら用い、人に与え及び在家者に与えん』と。（爾時、仏告大悲菩薩、彼仏般涅槃後、正法住世、満一千歳、正法滅已、像法住世、亦一千歳。大悲、彼仏世尊、若在世、若涅槃、正法像法、於此中間、有諸比丘及比丘尼、非法毀戒、行於邪道、断法供養、無慚無愧、或断招提僧物、断現前僧衣服飲食、臥具医薬、取衆僧物、以為己有自用、与人及与在家者。）」

③釋氏要覽［上ノ十九丈］云、招提增輝記、梵云拓闍提奢、唐言四方僧物、但筆者訛拓爲招、去闍奢留提。故稱招提。即今十方住持寺院、是也。

＊

『釋氏要覽』［上の十九丈］に云く、「招提は『増輝記』に、『梵には拓闍提奢と云い、唐には四方僧物と言う。但だ筆者、訛って、拓を招と爲し、闍奢を去って提を留む。故に招提と稱す。即今、十方住持寺院、是れなり』と」と。

＊

○釋氏要覽［上ノ十九丈］云…是也＝『釈氏要覧』上巻「住処」編（T54-262c）からの引用。同文である。

④飜譯名義集［七ノ二丈］云、「經音義云、梵云拓闍提奢、唐言四方僧物。但筆者訛稱招提。此翻別房施、或云對面施。或云梵言僧鬘、此翻對面施。音義云、體境交現曰對、輟己惠他、名施。後魏太武始光元年、造伽藍、創立招提之名。

＊

『飜譯名義集』［七の二丈］に云く、「『經音義』に云く、『梵には拓闍提奢と云い、唐には四方僧物と言う。但だ筆者訛って、招提と稱す。此ここに別房施と翻す。或いは對面施と云う』と。或いは云う、『梵に僧鬘と言い、此ここに對面施と翻す』と。『音義』に云く、『體境交

ごも現ずるを對と曰い、己を輟めて他に惠むを施と名づく』と。後魏の太武の始光元年に伽藍を造る。創めて招提の名を立つ」と。

＊

○飜譯名義集［七ノ二丈］云…創立招提之名＝『飜訳名義集』巻七「寺塔壇幢篇第五九」（T54-1167b）に同文が見える。

⑤ 杜子美、遊龍門奉先寺詩云、已從招提遊、更宿招提境。

＊

杜子美（＝杜甫）、「龍門の奉先寺に遊ぶ詩」に云く、「已に招提の遊に從う。更に招提の境に宿す」と。

＊

○杜子美、遊龍門奉先寺詩云…招提境＝杜甫の『分門集註杜工部詩』巻八（四部叢刊本・16b~17b）に見える同題の五言律詩の初二句。全文は、「已從招提遊、更宿招提境。陰壑生靈籟、月林散清影。天闕象緯逼、雲臥衣裳冷。欲覚聞晨鐘、令人発深省。」題目の「龍門」について、『御定全唐詩』巻二一六の同詩の注は、「龍門は即ち伊闕なり。一名、闕口。河南府の北四十里に在り（龍門即伊闕。一名闕口。在河南府北四十里）」（四庫全書本・4a）と言う。

⑥ 柳河東集［十ノ十一丈］衡山中院律師塔銘注云、凡官賜額者爲寺、私造者爲蘭若招提。

＊

『柳河東集』［十の十一丈］「衡山中院律師の塔の銘」の注に云く、「凡そ官より額を賜う者を寺と爲し、私に造る者を蘭若招提と爲す」と。

＊

○柳河東集［十ノ十一丈］…爲蘭若招提＝柳宗玄の『増広註釈音辯唐柳先生集』巻七「衡山中院大律師塔銘」（四部叢刊本・5b）の潘緯の注に同文が見えるが、「凡」の字が無い。

（小林秀嶽）

【二二】寺

①僧史略［上ノ十丈］云、寺者釋名曰寺嗣也。治事者、相嗣續於其内也。本是司名、西僧乍來權止公司。移入別居不忘其本、還標寺號。僧寺之名始於此也。

＊

『僧史略』［上の十丈］に云く、「寺は『釋名』に曰く、『寺は嗣なり。事を治むる者、其の内に相い嗣續す』と。本と是れ司の名にして、西僧乍ちに來たって權に公司に止まる。移って別居に入れども、其の本を忘れず、還って寺の號を標す。僧寺の名、此れに始まる」と。

＊

○僧史略云…僧寺之名始於此也＝『大宋僧史略』巻二（T54-236c）に全く同じ文章が見える。文中、漢・劉熙撰『釈名』からの引用は、同書・巻五「釈宮室第十七」（四部叢刊本・5a）に同文がある。

②釋氏要覽［上ノ一九丈］云、後漢明帝永平十年丁卯、佛法初至。有印度二僧摩騰法蘭。以白馬

駄經像屆洛陽。敕於鴻臚寺安置。〈鴻臚即司賓寺也〉。至十一年戊辰、敕於雍門外別建寺、以白馬爲名。即漢土佛寺始也。呉孫權立建初寺爲始也。

＊

『釋氏要覽』［上の一九丈］に云く、「後漢の明帝の永平十（六七）年丁卯、佛法初めて至る。印度の二僧、摩騰（＝摂摩騰）、法蘭（＝竺法蘭）有り。白馬を以て經像を駄せ、洛陽に届る。敕して鴻臚寺に於いて安置す。〈鴻臚は即ち賓を司る寺なり。〉十一（六八）年戊辰に至って、敕して雍門の外に於いて別に寺を建て、白馬を以て名と爲す。即ち漢土佛寺の始めなり。呉の孫權、建初寺を立つるを始めと爲すなり」と。

＊

○釋氏要覽［上ノ一九丈］云・・・呉孫權立建初寺爲始也＝『釋氏要覽』巻一（T54-262b）に見える文章であるが、『釈氏要覧』巻一では、割注の「鴻臚即司賓寺也」の後に、更に「胡広、釈して云く、『鴻は声なり。臚は伝うるなり。声を伝え道を賛する所以は九賓なり。秦に典客有り、漢は乃ち之に因る。唐に至り改めて同文寺と為す（胡広釈云、鴻声也。臚伝也。所以伝声賛道九賓也。秦有典客、漢乃因之。至唐改為同文寺）」と割注が続けられている。

③大日經一行疏［上ノ廿七丈］云、寺者毘訶羅、此方譯爲住處。

＊

『大日經一行疏』［上の廿七丈］に云く、「寺は毘訶羅（＝出家者の僧院）、此の方に譯して住處と爲す」と。

＊

○大日經一行疏［上の廿七丈］云、寺者毘訶羅此方譯爲住處＝善無威が講述し、弟子の一行が筆録した『大毘盧遮那成佛経疏』巻一一「悉地出現品第六」（T39-695a）に全く同じ文章が見える。

（古川周賢）

【二三】山門

①忠曰、山門者、山對城市之言、城市俗、山林眞。凡蘭若反俗居。本宜在山。所謂遠離處也。〈蘭若、智度論翻遠離處。〉故縱在城市者、亦用山號。夫歸向眞道者、當由此而入。故言山門也。

忠曰く、「山門とは、山は城市に對するの言なり。城市は俗、山林は眞なり。凡そ蘭若は俗居に反す。本と宜しく山に在るべし。所謂る遠離處なり。〈蘭若は、『智度論』に遠離處と翻す。〉故に縱い城市に在る者も、亦た山號を用う。夫れ眞道に歸向する者、當に此れに由りて入るべし。故に山門と言うなり」と。

＊

○文中、割り注の「蘭若智度論翻遠離処」の部分は、『翻訳名義集』巻七に「阿蘭若、或名阿練若。『大論』翻遠離処」（T54-1167b）とあるのを踏まえている。

②　或援劉熙曰、山産也、産生物也〈釋名〉、蓋今、謂産生叢林法材也。忠曰、此解幾乎附會。不可取也。

＊

或るひと、劉熙の「山は産なり、生物を産するなり」（『釋名』）と曰うを援いて、「蓋し今、叢林の法材を産生するを謂うなり」と。忠曰く、「此の解、附會に幾し。取る可からざるなり」と。

＊

○文中、「或援劉熙曰、山産也、産生物也」の部分は、漢・劉熙撰『釈名』巻一「釈山第三」（四部叢刊本・5b）に同文を載せる。

③臨濟玄禪師録［四十六丈］云、師、栽松次、黄檗問、深山裏栽許多、作什麼。師云、一與山門作境致、二與後人作標榜。

＊

『臨濟玄禪師録』［四十六丈］に云く、「師、松を栽うる次いで、黄檗問う、『深山裏に許多を栽えて、什麼か作さん』と。師云く、『一には山門の與に境致と作し、二には後人の與に標榜と作さん』と」と。

＊

○臨濟玄禪師録［四十六丈］云…二與後人作標榜＝『臨済録』「行録」（T47-505a）に同じ文章が見える。

④又有山門爲本寺總稱者。　傳燈録［四ノ十五丈］牛頭慧忠禪師章云、威禪師、以門付屬訖出居延祚寺。

＊

又た山門を本寺の總稱と爲す者有り。　『傳燈録』［四の十五丈］「牛頭の慧忠禪師」の章に云く、「威禪師、山門を以て付屬し訖わりて、出でて延祚寺に居す」と。

＊

○文中、『伝燈録』からの引用は、『景徳伝燈録』巻三（T51-229a）に、同文が見える。

⑤又有闔山住持已下大衆稱山門者。敕修清規［下一ノ三十七丈］諸方名勝掛搭云、首座、請知事等、白住持發批、山門相送之意。〈詳疏榜類送榻位批處。〉

＊

又た闔山、住持已下大衆を山門と稱する者有り。『敕修清規』［下一の三十七丈］、「諸方名勝の掛搭」に云く、「首座、知事等を請じて、住持、批（＝決済文）を發し、山門相い送るの意を白す」と。〈「疏榜類」の「榻位に送る、批」の處に詳らかなり。〉

＊

○文中、『勅修清規』からの引用は、『勅修百丈清規』巻五「諸方名勝掛搭」に、「或いは方丈、榜頭を発して、首座を煩わせて送らんことを請わば、則ち首座、堂司の行者をして、知事一人、維那侍者、及び受送の人を請わしめて、同に寮に至り、首座、焼香献茶して、『住持、批を発し、山門相い送る』の意を白す（或方丈発榜頭、煩首座請送、則首座令堂司行者、請知事一人維那侍者及受送人、同至寮、首座焼香献茶、白住持発批山門相送之意）」（T48-1141b）とあるのを踏まえる。文末の注の「疏榜類送榻位批処」とは、『象器箋』巻一五「第廿二類文疏門」の【一二〇四】「送榻位批」を指す。

（水野隆道）

【二四】三門

①山門之制、排列門有三。故亦稱三門。

＊

山門の制、門を排列して三つ有り。故に亦た三門と稱す。

②敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云、堂司備榜張三門之右。

＊

『敕修清規』［上一の十八丈］の聖節に云く、「堂司、榜を備え、三門の右に張る」と。

＊

○敕修清規［上一ノ十八丈］…三門之右＝『敕修百丈清規』巻一（T48-1113a）。「張三門之右」を「張于三門之右」とする。

③日用清規［八丈］云、藥石罷出寮、不得出三門。

＊

『日用清規』［八丈］に云く、「藥石罷わって寮を出でよ、三門を出づることを得ざれ」と。

＊

○日用清規［八丈］云＝『入衆日用』（『無量寿禅師日用小清規』）に、「食罷出寮、不得出三門」（X63- 946b）と出る。

④傳燈録［十二ノ十丈○会元四ノ四十七丈］睦州陳尊宿章云、一日有天使、問、三門俱開、從那門而入。師喚尚書。天使應諾。師云從信門入。〈『聯燈』［八ノ廿六丈］睦州章天使爲呉尚書。〉

＊

『傳燈録』［十二の十丈○『会元』四ノ四十七丈］「睦州陳尊宿」の章に云く、「一日、天使有り、問う、『三門俱に開く、那の門從りしてか入らん』と。師、『尚書』と喚ぶ。天使應諾す。師云く、『信門從り入れ』と」と。〈『聯燈』［八の廿六丈］睦州の章に、天使を呉尚書と爲す。〉

＊

○傳燈録［十二ノ十丈］…師云從信門入＝『景徳傳燈録』巻一二「陳尊宿」条（T51-291b）に同文。［会元四ノ四十七丈］は、『五燈会元』巻四「睦州陳尊宿」条（X80-147a）に見える。『五燈会元』は「從那門而入」を「從那門入」に作る。文末割り注の「『聯燈』［八ノ廿六丈］」の部分、『聯燈会要』巻八「睦州陳尊宿」条（X79-572a）には、「呉尚書至門」とある。

⑤五燈會元［九ノ十九丈］仰山章、陸希聲相公機語、與此因縁相類。

＊

『五燈會元』［九ノ十九丈］「仰山」の章、陸希聲相公の機語、此の因縁と相類す。

＊

○五燈會元［九ノ十九丈］＝『五燈会元』巻九「袁州仰山慧寂通智禅師」条（X80-325a）には、「公見即入山。師乃門迎。公纔入門、便問、三門俱開、從何門入。師曰、從信門入」と出る。

⑥釋氏要覽［上ノ廿四丈。教乗法数三ノ四十六丈引用］云、凡寺院有開三門者。只有一門亦呼爲三門者何也。佛地論云、大宮殿、三解脱門爲所入處。大宮殿喩法空涅槃也。三解脱門、謂空門、無相門、無作門。今寺院是持戒修道、求至涅槃人居之。故由三門入也。

＊

『釋氏要覽』[上ノ廿四丈。『教乗法数』三ノ四十六丈引用]に云く、「凡そ寺院に三門を開く者有り。只だ一門有るも亦た呼んで三門と爲す者は何ぞや。『佛地論』に云く、『大宮殿あり、三解脱門を所入の處と爲す』と。大宮殿は法空涅槃に喩う。三解脱門とは、謂く空門、無相門、無作門なり。今、寺院は是れ持戒修道して、涅槃に至ることを求め、人、之に居す。故に三門に由って入るなり」と。

＊

○釋氏要覽[上ノ廿四丈]…故由三門入也＝『釈氏要覧』巻一（T54-264a）に同文を載せる。また、[教乗法数三ノ四十六丈引用]とある通り、『教乗法数』巻八（『大日本校訂大蔵経』纂集部 露三上 p.56）にも見える。『教乗法数』では、「仏地論云」を「論云」に作る。『仏地経論』巻一に「大宮殿、三解脱門為所入処」（T26-295c）とそのまま見える。

⑦羅湖野録[下巻六十四丈]云、死心禪師、以大觀元年丁亥九月、從洪帥李景直之命住黄龍山。明年掲牓于門曰、仰門頭行者、賓客到來、劃時報覆。即不得容縱浮浪小輩、到此賭博。常切掃洒精潔、凡置三門者何也。即空、無相、無作、三解脱門。今欲登菩提場。必由此門而入。然高低普應、遐迩同歸。其來入斯門者、先空自心。自心不空、且在門外。戊子九月十八日、死心叟白。

＊

『羅湖野録』[下巻六十四丈]に云く、「死心禪師、大觀元（一一〇七）年丁亥九月を以て、洪の帥、李景直が命に從って黄龍山に住す。明年、牓を門に掲げて曰く、『門頭の行者に仰す、賓客到來せば、時を劃して報覆（＝取り次ぎ）せよ。即ち浮浪の小輩を縱にして、此こに到って賭博することを容すことを得ざれ。常に切に掃洒して精潔にせよ。凡そ三門を置く者は何ぞや。即ち空、無相、無作の三解脱門なり。今、菩提の場に登らんと欲す。必ず此の門に由って入る。然らば高低普く應じ、遐迩（＝遠近）歸を同じうす。其れ來たって斯の門に入る者、先ず自心を空ぜよ。自心空ぜずんば、且らく門外に在るべし。戊子（一一〇八）九月十八日、死心叟白す』と」と。

＊

○羅湖野録[下巻六十四丈]…死心叟白＝『羅湖野録』巻下（X83-998b）に同文が見える。

⑧ 護法録[四ノ廿丈]育王山碑銘序云、三解脱門、則僧伽智華作之。〈止此。〉即謂三門也。

＊

『護法録』[四の廿丈]「育王山の碑銘の序」に云く、「三解脱門は、則ち僧伽の智華、之を作る」と。〈此こに止まる。〉即ち三門を謂う。

＊

○護法録[四ノ廿丈]育王山碑銘序云…即謂三門也＝引用部分は『護法録』巻四「四明阿育王山広利禅寺碑銘」（J21-643c）に同文が見える。

⑨三門閣上、必設十六羅漢像。中安寶冠釋迦、以月蓋長者善財童子、爲挾侍。〈釋迦或爲觀音。〉

＊

三門の閣上に、必ず十六羅漢の像を設く。中に寶冠の釋迦を安じて、月蓋長者、善財童子を以て挾侍と爲す。〈釋迦、或いは觀音と爲す。〉

＊

⑩又有妥五百羅漢者。釋氏資鑑［十ノ三丈］云、宋元豐元年、天嘗久旱。帝禁中齋祷甚力。一夕夢、有僧乗馬馳空中。口吐雲霧。既覺、而雨大作。翌日遣中貴、道夢中所見物色。相國寺三門五百羅漢中、至十三尊、略彷彿。即迎入内觀之、正帝所夢也。

＊

又た五百羅漢を妥（＝安坐）する者有り。『釋氏資鑑』［十ノ三丈］に云く、「宋の元豐元（一〇七八）年、天嘗て久しく旱す。帝、禁中に齋祷（＝潔齋して祈る）すること、甚だ力めたり。一夕、夢むらく、僧有り馬に乗って空中を馳す。口、雲霧を吐く。既に覺めて、雨大いに作る。翌日、中貴（＝宦官）を遣わして、夢中に見る所を道って物色（＝人相によって捜す）す。相國寺の三門、五百羅漢の中、十三尊に至って、略ぼ彷彿（＝さも似たり）す。即ち迎えて内に入れて之を觀るに、正に帝の夢むる所なり」と。

＊

○釋氏資鑑［十ノ三丈］云…正帝所夢也＝『釈氏資鑑』巻一〇（X76-192b）に載せる。『釈氏資鑑』は「宋元豊元年」を「元豊元年」に作る。

（芳澤勝弘）

【二五】隔子門

①忠曰、子助字。蓋方丈小門、隔外庭。故云隔子門。

忠曰く、「子は助字なり。蓋し方丈（＝本堂）の小門、外庭を隔つ。故に隔子門と云う」と。

○文中、「方丈小門隔外庭」とあるのは、方丈前が塀などによって取囲まれ、外庭と隔たれている形態を指しているのであろう。【四〇】方丈も併せて参照のこと。

②雪竇顯禪師録［四ノ十四丈○又聯灯廿三ノ卅二丈］云、玄沙與地藏、在方丈説話、夜深。沙云、侍者關隔子門。汝、作麽生出得。地藏云、喚什麽作門。〈又聯燈玄沙章、傳燈［十八ノ十三丈］會元［七ノ四十丈］、並但作門。〉

『雪竇顯禪師録』［四の十四丈○又た『聯灯』廿三の卅二丈］に云く、「玄沙（＝玄沙師備・八三五～九〇八）、地藏（＝地藏院桂琛・八六七～九二八、玄沙の法嗣）と方丈に在りて説話して、夜深けぬ。沙云く、「侍者、隔子門に關（＝門を通して門を閉ざす琛）す。汝、作麽生か出得せん。」と。地藏云く、「什麽を喚んでか門と作す」と」と。〈又た『聯燈』の「玄沙章」、『傳燈』［十八の十三丈］『會元』［七の四十丈］は並びに、但だ門と作す。〉

＊

○雪竇顯禪師録［四ノ十四丈・又聯灯廿三ノ卅二丈］云…喚什麽作門＝『雪竇明覚禪師語録』巻四（T47-695c）に全く同じ文が見える。明覚は雪竇重顯の禪師号。また『聯燈会要』巻二三（X79-205b）にも同様の記述として、「師与地藏説話、夜深。師云、侍者関隔子門了。汝作麽生出得。藏云、喚甚麽作門（師、地藏と説話し、夜深けぬ。師云く、「侍者、隔子門に関し了われり。汝、作麽生か出得せん」と。藏云く、「甚麽を喚んでか門と作す」と）」とある。文末の割り注に「又聯燈玄沙章、伝燈［十八ノ十三丈］会元、並但作門」とあるうち、『聯燈会要』は上述のように巻二三にほぼ同文が見える。また、『伝燈』は、『景徳伝燈録』巻一八「福州玄沙宗一大師」条に、「師与地藏琛、在方丈内説話、夜深。侍者閉却門。師曰、門総閉了。汝作麽生得出去。琛曰、喚什麽作門（＝師、地藏琛と方丈内に在りて説話し、夜深けぬ。侍者却って門を閉ざす。師曰く、『門総て閉じ了われり。汝、作麽生か出去するを得ん）』と。琛曰く、「『什麽と喚んでか門と作す』と）」（T51-347a）とある。『会元』は、『五燈会元』巻七「福州玄沙備宗一禪師」条（X80-152b）に、『伝燈録』と全く同文が載せられている。

③無準範禪師録結夏小參云、佛殿裏隔子門、礙塞殺人。

『無準範禪師録』「結夏小參」に云く、「佛殿裏の隔子門、人を礙塞殺す」と。

○無準範禪師録結夏小參云…礙塞殺人＝『無準師範禪師語録』巻三（X70-250a）に全く同じ文が見える。無準師範（一一七七～一二四九）は、破菴祖先に参じ胡孫子の話を請益して契悟し法を嗣ぐ。法嗣に雪巖祖欽、

無学祖元、兀菴普寧、環渓惟一や入宋した東福円爾、性才法心などがある。楊岐派破菴派で理宗より仏鑑禅師号を賜る。文中の用語のうち、『象器箋』に立項されている【一六七】「結夏」、【八一四】「小参」、【二七】「仏殿」も併せて参照のこと。

（瀧玄浩）

【二六】偏門

①非正門也。有罪犯者、自此門驅出焉。

正門に非ず。罪犯の者有れば、此の門自り驅出す。

○禅門における「罪」については、巻十二「第十五類罪責門」などを参照のこと。

②禪苑清規［十ノ四丈］百丈規繩頌云、犯重焚衣鉢、應當集衆人、山藤聊示恥、驅擯出偏門。

『禪苑清規』［十の四丈］の「百丈規繩の頌」に云く、「重（＝殺盗婬妄の四重禁の罪）を犯せば衣鉢を焚いて、應當に衆人を集むべし。山藤もて聊か恥を示し、驅擯（＝追い出す）して偏門を出だす」と。

○禪苑清規［十ノ四丈］百丈規繩頌云…驅擯出偏門＝『禪苑清規』巻一〇（X63-550c）に全く同じ文が見える。「擯出」については【九三九】を参照。

③敕修清規［上二ノ八丈］肅衆云、或彼有所犯、即以拄杖杖之、集衆燒衣鉢道具、遣逐偏門而出者、示恥辱也。

『敕修清規』［上二の八丈］の「肅衆」に云く、「或いは彼れ犯す所有れば、即ち拄杖を以て之（＝罪犯者）を杖し、衆を集めて衣鉢道具を燒き、遣逐して偏門よりして出す者は、恥辱を示すなり」と。

○敕修清規［上二ノ八丈］肅衆云…示恥辱也＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1121c）に全く同じ文が見える。また、『景徳伝燈録』巻六「禅門規式」（T51-250c）にも同様の記述があるが、偏門の前に「従」の一字が加わる。尚、「肅衆」とは、僧衆に本分を護持させるため宗制・戒律を設け法を護る者を守護し悪者を擯罰し排除すること。

（瀧玄浩）

【二七】佛殿

①文字禪［廿一ノ十四丈］白鹿山靈應禪寺大佛殿記云、余聞、百丈大智禪師之訓曰、世尊遺教弟子、因法相逢、則當依法而住。飲食、服玩、經行、宴坐、必爲叢林。營建室宇、必先造大殿、以奉安佛菩薩像。使諸來者、知歸向故、晝夜行道、令法久住。報佛恩故。

『文字禪』［廿一の十四丈］「白鹿山靈應禪寺大佛殿の記」に云く、「余聞く、百丈大智禪師の訓に曰く、『世尊の遺教の弟子、法に因りて相逢うときは、則ち當に法に依りて住すべし。飲食、服玩、經行、宴坐、必ず叢林の爲にす。室宇を營建せば、必ず先ず大殿を造って、以て佛菩薩の像を奉安して、諸もろの來者をして、歸向を知らしむ。故に、晝夜行道、法をして久住せしむ。佛恩に報ずるが故に』と」と。

○文字禪［廿一ノ十四丈］白鹿山靈應禪寺大佛殿記云…報佛恩故＝覚範慧洪（一〇七一～一一二八）の詩文集である『石門文字禅』巻二一（J23-678c~679a）にまったく同じ文章が見える。無著が見た本は、万暦二十五（一五九七）年刊の『嘉興蔵』本、もしくはそれを覆刻した『黄檗版』と思われ、所引の文章は、書き入れ通り「巻二十一」の「十四丁」の表から裏にかけて載せられている。参考までに、宝永七（一七一〇）年に刻行された「調心軒蔵版」の和刻本では、同じ「巻二十一」であるが、「二十一丁」の表から裏に相

当する。

②傳燈録［十四ノ六丈］丹霞然禪師章云、一日石頭告衆曰、來日刻佛殿前草。

＊

『傳燈録』［十四の六丈］「丹霞然禪師」の章に云く、「一日、石頭、衆に告げて曰く、『來日、佛殿前の草を刻らん』と」と。

＊

○傳燈録［十四ノ六丈］丹霞然禪師章云…來日刻佛殿前草＝『景德伝燈録』巻四（T51-310c）にまったく同じ文章が見える。

③正宗贊［一ノ五十丈］徳山鑒禪師傳云、師凡住院、拆却佛殿、獨存法堂而已。〈傳燈録徳山章不載之。〉

＊

『正宗贊』［一の五十丈］「徳山鑒禪師の傳」に云く、「師凡そ住院するとき、佛殿を拆却して、獨り法堂を存するのみ」と。〈『傳燈録』徳山章に之を載せず。〉

＊

○正宗贊［一ノ五十丈］徳山鑒禪師傳云…獨存法堂而已＝『五家正宗贊』巻一（X78-582c）にまったく同じ文章が見える。

④忠曰、世謂、拆却佛殿獨存法堂、徳山獨有此作、殊不知、本是百丈立意也。傳燈［六ノ廿二丈］所載禪門規式云、不立佛殿、唯樹法堂、當代爲尊也。〈詳法堂處。〉蓋雖百丈本規、諸方猶立佛殿。而徳山特準其令爾。

＊

忠曰く、「世に謂えらく、佛殿を拆却して獨り法堂を存するは、徳山獨り此の作有りと。殊に知らず、本是れ百丈の立意なることを。『傳燈』［六の廿二丈］に載する所の『禪門規式』に云く、『佛殿を立てずして、唯だ法堂を樹つるは、當代を尊と爲すなり』と。〈法堂の處に詳し。〉蓋し百丈の本規なりと雖も、諸方猶お佛殿を立つ。而して徳山特に其の令に準ずるのみ」と。

＊

○文中、「伝燈［六ノ廿二丈］所載禪門則式云、不立仏殿、唯樹法堂」の部分は、『景德伝燈録』巻六からの節略での引用。原文は、「不立仏殿、唯樹法堂者、表仏祖親囑授当代為尊也（仏殿を立てず、唯だ法堂のみを樹つるは、表仏祖の親しく囑し当代に授けて尊と為すを表するなり）」（T51-251a）である。割り注の「詳法堂処」とは、【三六】「法堂」を指す。

⑤歴代三賓記［九ノ二丈］云、孝明帝熙平元年、靈太后胡氏、造永寧寺。〈乃至、〉浮圖北有佛殿一所。形如太極。中有丈八金像。

＊

『歴代三賓記』［九の二丈］に云く、「孝明帝の熙平元（五一六）年、靈太后胡氏、永寧寺を造る。〈乃至、〉浮圖（＝仏塔）の北に佛殿一所有り。形、太極の如し。中に丈八の金像有り」と。

＊

○歴代三寶記［九ノ二丈］云、孝明帝熙平元年、…中有丈八金像＝『歴代三宝記』巻九（T49-82b~c）に同じ文章が見える。但し、「乃至」の部分に二五四字の省略がある。

⑥空華集［十二ノ四丈］賀知殿頌軸序云、昔吾震旦之祖、自達磨至大寂之世、凡八葉、三百五十餘祀、未有禪居。故吾徒多栖律寺。及乎百丈祖興、創意別營禪宇、以居其徒。僧史所謂、利不百不變格。是也、然猶未立佛殿、以表佛祖親承當代爲尊也。而後祖師以懼吾徒去佛逾遠、而忘乃本也而乃有佛殿之制。既有佛殿矣。則不可無掌之者。於是置乎知殿之司。班于頭首之末矣。本朝當叢林盛時、尚置是職。而迩年稱稱而廢者何也。意以其班序庫、而吾徒不肯就焉耳。由是殿堂也。像設弗嚴、薌火弗裝、燈燭弗焔、塵埃也埇如。几案也闇如。管籥之啓閉也。弗謹。往來之瞻禮也。弗便。於虖致使吾覺皇賓殿、寂寂焉、而曾路旁古廟之不若。不亦可惜也哉。

＊

『空華集』［十二の四丈］「知殿を賀す頌軸の序」に云く、「昔し吾が震旦の祖、達磨自り大寂（＝馬祖道一）の世に至りて、凡そ八葉（＝八代）、三百五十餘祀、未だ禪居有らず。故に吾が徒多く律寺に栖す。百丈祖興こるに及んで、意を創めて、別に禪宇を營み、以て其の徒を居らしむ。僧史に所謂る『利百ならざれば格を變ぜざる』、是れなり。然も猶お未だ佛殿を立てず。以て佛祖の親承、當代を尊しと爲すことを表すればなり。而る後の祖師、吾が徒、佛を去ること逾いよ遠くして、乃の本を忘れんことを懼るるを以てなり。而も乃ち佛殿の制有り。既に佛殿有るときは、則ち之を掌る者無かる可からず。是こに於いて知殿の司を置きて、頭首の末に班す。本朝、叢林の盛時に當たって、尚お是の職を置く。而るに邇年稍稍として廢する者は何ぞや。意うに其の班序庫くして、吾が徒、肯えて就かざるを以てのみ。是れに由りて殿堂も也た、像設嚴ならず、薌火裝せず、燈燭焔えず、塵埃も也た埇如たり、几案も也た闇如たり。管籥の啓閉も也た謹ならず、往來の瞻禮も也た便ならず。於虖、吾が覺皇賓殿（＝仏殿）をして、寂寂焉として曾て路旁の古廟にだも之れ若かざらしむることを致す。亦た惜しむ可からざらんや」と。

＊

○空華集［十二ノ四丈］賀知殿頌軸序云…不亦可惜也哉＝『空華集』巻一二（『五山文学全集』第二巻・p.333）にまったく同じ文章が見える。

⑦聯燈會要［七ノ廿四丈］古靈神讚禪師章云、其師一日澡浴。命師去垢。師撫其背云、好所佛殿。只是無佛。〈傳燈［九ノ十五丈］作好所佛殿、而佛不聖。〉

＊

『聯燈會要』［七の廿四丈］「古靈の神讚禪師」の章に云く、「其の師一日澡浴す。師に命じて垢を去らしむ。師、其の背を撫でて云く、『好所の佛殿なれど、只だ是れ佛無し』と」と。

〈『傳燈』［九ノ十五丈］は「好所の佛殿なれど、佛、聖ならず」に作る。〉

＊

○聯燈會要［七ノ廿四丈］古靈神讚禪師章云…只是無佛＝『聯燈会要』巻七（X79-70a）にまったく同じ文章が見える。末尾の割り注の「伝燈［九ノ十五丈］作好所仏殿、而仏不聖」の部分は、『景徳伝燈録』巻九（T51-268a）にまったく同じ文章が見える。

⑧　忠曰、佛殿甎面。白土畫者、擬夏中楞嚴會行道。此亦律有據。見叢軌類經行處。

＊

忠曰く、「佛殿の甎面に、白土もて畫く者、夏中楞嚴會の行道を擬う。此れ亦た律に據るところ有り。「叢軌類」の「經行」の處に見ゆ」と。

＊

○文中の「叢軌類経行処」とは、『禅林象器箋』巻九「第九類叢軌門」の【六三五】「経行」の項を指す。

⑨ 西域佛殿名香殿。毘奈那雜事［二十六ノ十丈］佛爲外道現神通因緣云、世尊即以右足踏其香殿、是時大地六種震動。注、西方名佛所住堂、爲健陀俱知。健陀是香。俱知是堂。此是香室香臺香殿之義。不可親觸尊顏。故但喚其所住之殿。即如此方王階陛下之類。然名爲佛堂佛殿者、斯乃不順西方之意。

＊

西域には佛殿を香殿と名づく。『毘奈那雜事』［二十六の十丈］「佛、外道の爲に神通を現す因緣」に云く、「世尊即ち右足を以て其の香殿を踏みたまう。是の時、大地六種に震動す」と。注に「西方には佛所住の堂を名づけて、健陀俱知と爲す。健陀は是れ香、俱知は是れ堂なり。此れは是れ香室、香臺、香殿の義なり。親しく尊顏に觸るる可からず。故に但だ其の所住の殿を喚ぶ。即ち此の方の王階、陛下の類の如し。然るに名づけて佛堂、佛殿と爲る者は、斯れ乃ち西方の意に順わざるなり」と。

＊

○文中、『毘奈那雜事』からの引用は、『根本説一切有部毘奈那雜事』巻二六（T24-331b）に見える文章であるが、原文は引用された文章の前に「爾時世尊、遂便作意（爾の時世尊、遂に便ち作意して）」で始まる。注も含めて以下は同一。

（冨増健太郎）

【二八】佛壇

①敕修清規［上一ノ廿四丈］報恩章序云、於是設聖容、具佛壇場。

＊

『敕修清規』［上一の廿四丈］「報恩の章」の序に云く、「是こに於いて聖容（＝佛菩薩といった尊貴な人の姿）を設けて、佛の壇場に具なう」と。

＊

○敕修清規［上一ノ廿四丈］報恩章序云…具佛壇場＝『勅修百丈清規』巻一「報恩章第二」（T48-1114c）に全く同文が見える。

② 忠曰、居家必備、漳郡、張一棟、祭禮考云、古者、庶人無廟而祭於寢。注云、寢者前堂也。〈止此。〉余謂此方寺院、無佛殿處、則方丈設佛壇、而祭佛祖亡者。即是、無廟而祭於寢者也。

＊

忠曰く、「『居家必備』の「漳郡の張一棟が祭禮考」に云く、「古くは、庶人、廟（＝たまや）無くして、寢（＝奥座敷）に祭る」と。注に云く、「寢とは前堂なり。〈此こに止まる。〉」と。余謂えらく、此の方の寺院、佛殿無き處には、則ち方丈（＝寺院、住職の居間）に佛壇を設けて、佛祖亡者を祭る。即ち是れ『廟無くして寢に祭る』者なり」と。

＊

○忠曰…無廟而祭於寢者也＝『居家必備』は十巻・十二冊から成り、国立国会図書館の東京古典籍資料室に所蔵されている。この中の巻一・第一冊に明張一棟撰『居家儀礼』一巻とされる部分がある。また、「庶人無廟而祭於寢」については、周琦『東渓日談録』巻四「祭祀談上」（四庫全書）に同文が見える。「仏殿」については、『象器箋』の【二七】に立項されている。

（桐野祥陽）

【二九】撐天柱

※この条は、西村惠信『禅林象器箋抄釈』（禅文化研究所・p.19）に抄釈がある。

［恢門禾上云］凡殿堂正面左右二露柱、此謂撐天柱。

＊

［恢門禾上云く］凡そ殿堂正面の左右の二つの露柱（＝むきだしの円い柱）、此れを撐天柱と謂う。

＊

○［恢門禾上云］凡殿堂正面左右二露柱、此謂撐天柱＝「恢門禾上」の「恢門」は人名であろうが未詳。「禾上」は「和上（和尚）」のこと。また殿堂とは、佛祖の像を安置して、儀式行礼を修する建築物のこと。佛殿、法堂、僧堂等の七堂伽藍を指す。

（桐野祥陽）

【三〇】雨打

※この条は、西村惠信『禅林象器箋抄釈』（禅文化研究所・p.19）に抄釈がある。

①凡殿堂四壁與露柱之間曰雨打。蓋殿堂宇有二重。第一重爲正屋、第二重更足造者。若無第二重、則第一重簷霤、可零此處。故名雨打。

＊

凡そ、殿堂の四壁と露柱との間を雨打と曰う。蓋し殿堂の宇（＝のき）に二重有り。第一重を正屋と為し、第二重は更に足し造る者なり。若し第二重無くんば、則ち第一重の簷霤（＝のきの雨だれ）、此の處に零つ可し。故に雨打と名づく。

②義堂日工集［四ノ四十丈］云、三門兩廊雨打、既成。

＊

義堂の『日工集』［四の四十丈］に云く、「三門の兩廊と雨打、既に成る」と。

＊

○義堂日工集［四ノ四十丈］云…既成＝「義道」は義堂周信（一三二五～一三八八）のこと。夢窓疎石の法嗣。また『日工集』の引用は、辻善之助『空華日用工夫略集』巻四「至徳二年十月十五日」（p.216）に同文がみられる。また、蔭木英雄『訓注空華日用工夫略集－中世禅僧の生活と文学－』（p.342）にも同文がみられる。

（桐野祥陽）

【三一】月壇

※この条は、西村惠信『禅林象器箋抄釈』（禅文化研究所・p.19~20）に抄釈がある。

①凡殿堂壁外露壇、名月壇。蓋月光常到處也。

＊

凡そ殿堂壁外の露壇を月壇と名づく。蓋し月光常に到る處なり。

②［月溪禾上］東福寺入寺記云、新命過佛殿西月壇。

＊

［月溪禾上の］『東福寺入寺の記』に云く、「新命、佛殿の西の月壇を過ぐ」と。

＊

○［月溪禾上］東福寺入寺記云、新命過佛殿西月壇＝『東福寺入寺記』については未詳。文中の「月溪禾上」は、月溪聖澄（一五三六～一六一五）、東福寺第二百二十二世のこと。

③東坡詩集扈從景靈宮詩云、道人幽夢曉初還、已覺笙簫下月壇。

＊

『東坡詩集』「景靈宮に扈從（＝天子の乗り物の共をする事）する」詩に云く、「道人幽夢（＝ぼんやりしたゆめ）、曉に初めて還る、已に覺ゆ笙簫（＝ふえ）、月壇を下ることを」と。

＊

○東坡詩集扈從景靈宮詩云…已覺笙簫下月壇＝「扈從景靈宮」の詩は、蘇東坡の「次韻蔣潁叔二首」の第一首。七律の初二句である（『続国訳漢文大成』文学部第一八巻「蘇東坡詩集」第五巻・p.290、また『集注分類東坡先生詩』巻三・四部叢刊本・4a）。

④忠曰、近水戸侯〈光國〉造大學明倫堂。其壁外壇曰月臺。老者得乗輿到于此。〈水戸侯依清儒朱之瑜指揮、造二十分一之明倫堂云〉月臺即月壇也。

＊

忠曰く、「近ごろ水戸侯〈光國〉大學の明倫堂を造る。其の壁外の壇を月臺と曰う。老者は輿に乗りて、此ここに到ることを得。〈水戸侯、清（＝中国清代）の儒（＝儒者）朱之瑜が指揮に依り、二十分の一の明倫堂を造ると云う。〉月臺は即ち月壇なり」と。

＊

○忠曰、近水戸侯〈光國〉造大學明倫堂…月臺即月壇也＝江戸時代における「明倫堂」は、尾張藩・小諸藩・上田藩・高鍋藩・金沢藩・新庄藩・大洲藩・安志藩・琉球の久米村にそれぞれ設置されたが、水戸藩に設置された記録は見当たらない。更に、いずれも無著道忠が『禅林象器箋』を編纂した時期よりも後の年代に設置されており、これらの「明倫堂」の事を指しているとは言えない。また、中国における「明倫堂」は、「孔子廟側に設けた学校の名で、儒教を国教とした中国に於いて各地の學官に孔子を祀り、其の大殿を明倫堂と言った」（『大漢和』巻五・p.781）とある。明朝の遺民として知られる朱舜水こと朱之瑜（一六〇〇～一六八二）は、日本へ亡命した際、舜水を敬愛した第二代水戸藩主徳川光圀が『大日本史』の編纂所として設けた「彰考館」に招聘したとされ、恐らく文中の「明倫堂」とは「彰考館」の事を指していると考えられる。しかし、「彰考館」が中国の「明倫堂」の二十分一に当るかは未詳。

⑤永覺晩録［四ノ十五丈］重建鼓山湧泉寺記云、大殿乃謀再造。即命石工、甃殿前月臺、

及大庭石。

『永覺晩録』［四の十五丈］「重建（＝再建する事）鼓山（＝福建省）湧泉寺の記」に云く、「大殿、乃ち再造を謀る。即ち石工に命じて、殿前の月臺、及び大庭の石を甃にす」と。

＊

○永覺晩録［四ノ十五丈］重建鼓山湧泉寺記云…及大庭石＝『鼓山永覚禅師晩録』は、永覚元賢（一五七八～一六五七）の六十七歳から七十五歳に至る晩年の語録で、弟子太沖道順が編し、順治九（一六五二）年に刻行されたもの。中国刊本は現存しないが、連山交易（一六三五～一六九四）が旧刻二巻本を補成して六巻とし、首書して延宝七（一六七九）年の後跋を付し、天和二（一六八二）年に梓行した和刻本が存する（『和刻影印近世漢籍叢刊』思想四編・第九冊・中文出版社・一九八四、所収）。引用文は、無著の書き込み通り、和刻本の巻四、十五丁裏に見えるが、「重建」と「乃謀再造…」との間に、「為海風所刼、両角已崩、淋漓満地。雖仏像如生、而金碧亦且剥落矣」の二十六字が削除されている。尚、『晩録』は、永覚遷化後、為霖道霈重編『永覚和尚広録』三十巻に編入されており、『広録』巻一五（X72-470b）に同文が見える。

⑥ 無怨公案［五ノ廿九丈］搶劫類云、縣主卽起鄉夫七八人、抬其石而至、令放于月臺之下。

〈抬擊也。非義。恐訛扛、對擧也。〉

＊

『無怨公案』［五の廿九丈］の「搶劫（＝かすめとる）類」に云く、「縣主（＝県の行政長官）、卽ち鄉夫七八人を起こし、其の石を抬げて至り、月臺の下に放たしむ」と。〈抬は擊なり。義に非ず。恐るらくは、扛（＝持ち上げる）をの訛りて、對擧するなり。〉

＊

○無怨公案［五ノ廿九丈］搶劫類云…令放于月臺之下＝『無怨公案』は未詳。

⑦ 隋史遺文［二ノ廿六丈］云、秦叔寶販馬。到潞州二賢莊單雄信所。見主人立在簷前。只得站立於月臺傍邊。

＊

『隋史遺文』［二の廿六丈］に云く、「秦叔寶、馬を販う。潞州（＝山西省長治縣）二賢莊の單雄信が所に到り、主人、簷前に立在するを見る。只だ月臺の傍邊（＝そば）に站立（＝立つ）することを得たるのみ」と。

＊

○隋史遺文［二ノ廿六丈］云…只得站立於月臺傍邊＝『隋史遺文』は一二巻・一三冊、六十回からなり、明の袁于令（一五九二～一六七四）によって書かれ、見返し題に「新鐫繡像批評隋史遺文」とある。このうち巻二・第七回「三義坊当簡受腌臜　二賢莊売馬識豪傑」の廿六丈表に同文が見える。（早稲田大学古典籍総合データベース）

⑧ 忠曰、是農家、亦稱月臺。

＊

忠曰く、「是れ農家にも、亦た月臺と稱す」と。

⑨ 水滸傳［十三ノ五丈］云、梁中書起身。走出堦前來。從人移轉銀交椅。直到月臺欄干邊

放下。

*

『水滸傳』［十三の五丈］に云く、「梁中書、起身（＝立ち上がる）して、堦前に走り出で來たる。從人（＝主君の共をする人）銀交椅（＝脚が交叉して折りたためるようになった椅子）に移轉して、直に月臺の欄干（＝てすり）の邊に到り放下（＝捨てる）す」と。

*

○水滸傳［十三ノ五丈］云…直到月臺欄干邊放下＝『水滸伝』の第十三回「急先鋒東郭争功　青面獣北京門式」（人民文学出版社『水滸伝』上・p.167）に同文が見える。『水滸伝』は、施耐庵によって書かれた全百二十回にわたる明代（一三六八～一六四四）の長編小説で、「四大奇書（この他『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』がある）」の一つとされる。

（桐野祥陽）

【三二】祖師堂

※この条は、西村惠信『禅林象器箋抄釈』（禅文化研究所・p.20）に抄釈がある。

①祖師之堂、設于佛殿西邊。

*

祖師の堂は、佛殿の西邊に設く。

*

○「仏殿」は、本書【二七】参照。

②白雲端和尚禪録［龍門録四丈。備用一ノ九丈載。敕鈔三ノ廿丈引］祖堂綱紀序云、吾道盛於此土。初祖菩提達磨之綱焉。剏立禪林之制。百丈大智之紀焉。此實天下之共知。而柰何天下祖堂中、各以開山傳次者、爲其祖、殊不思乃宗乃祖、所傳所持之最者乎。嗚呼、教來、五百年後、達磨始來、嚮之諸家之賢者、豈不知性即乎聖。何爲竟自以性以聖之泥乎。乃須少林之後、猶彈指頃、不假文字語默有無、釋然亡其所待、而自得還其本。又古之巖居穴處者。但以法爲勝爲味、殊不慮今日其間者驕、獨大智禪師慮之、而廓以禪林之度。由是資之、而少林之風、至今藹然於天下。吾欲天下祖堂中以達磨大智正其位、以開山傳次者陪之。貴來者尊其始、而歸其大。豈不然乎。熙寧三年、歳次庚戌。十月初一日立。

*

『白雲端和尚禪録』［「龍門録」四丈。『備用』一の九丈に載る。『敕鈔』三の廿丈にも引く］「祖堂綱紀の序」に云く、「吾が道の、此土に盛なる、初祖菩提達磨之れ綱たり。禪林の制を剏立す、百丈大智之れ紀たり。此れ實に天下の共に知る。而るに天下祖堂の中に、各おの開山傳次の者を以て、其の祖と爲し、殊に乃宗乃祖、所傳所持の最なる者を思わざることを柰何せんや。嗚呼、教（＝経典）來って、五百年の後、達磨始めて來る。嚮の諸家の賢なる者、豈に性、聖に即することを知らざらんや。何爲れぞ、竟に自ら性を以て聖を以て之れ泥むや。乃ち少林を須ゆるの後、猶お彈指の頃に、文字・語默・有無を假りず、釋然として其の所待を亡して、自ら其の本に還ることを得。又た古の巖居穴處（＝世を離れて隠棲する事）する者、但だ法を以て勝と爲し、味と爲して、殊に今日其の間の者

の驕ることを慮らず。獨り大智禪師、之を慮りて廓（＝広める）にするに禪林の度を以てす。是れに由って之を資けて、少林の風、今に至るまで天下に藹然（＝さかんなさま）たり。吾、天下祖堂の中、達磨・大智を以て其の位を正しゅうし、開山傳次の者を以て之に陪せんと欲す。貴ぶらくは、來者（後世の人）、其の始めを尊びて、其の大に歸せんことを。豈に然ずや。熙寧三（一〇七〇）年歳庚戌（かのえいぬ）に次（やど）る、十月初一日立つ」と。

＊

○白雲端和尚禪録［龍門録四丈。備用一ノ九丈載。敕鈔三ノ廿丈引］祖堂綱紀序云…十月初一日立＝白雲端は、臨済宗楊岐方会の法嗣で楊岐派二世の白雲守端禪師（一〇二五～一〇七二）のこと。『白雲端和尚語廣録』巻一「舒州龍門山乾明禪院語録」の末尾に「祖堂綱紀序」が付録されており（X69-312b）、そこに同文が見える。無著の書き入れに「龍門録」とあるのはそれを指す。また、「備用一ノ九丈載」とあるように、『禪林備用清規』巻一（X63-625a）にもほぼ同文が見えるが、「熙寧三年、歳次庚戌、十月初一日立」という立石日月の記載はない。更に「敕鈔三ノ廿丈引」とあるように、『勅修百丈清規抄』巻三・二十丈（駒澤大学電子貴重書庫）にも同文が見える。

③林間録［上ノ廿七丈］云、白雲端禪師曰、天下叢林之興、大智禪師力也。祖堂當設達磨初祖之像於其中。大智禪師像西向、開山尊宿像東向、得其宜也。不當止設開山尊宿、而略其祖宗耳。

＊

『林間録』［上の廿七丈］に云く、「白雲端禪師の曰く、『天下の叢林の興ることは、大智禪師の力なり。祖堂に、當に達磨初祖の像を其の中に設くべし。大智禪師の像をば西に向へ、開山尊宿の像をば東に向へば、其の宜しきを得ん。當に止だ開山尊宿を設けて、其の祖宗を略すべからざるのみ』と」と。

＊

○林間録［上ノ廿七丈］云…而略其祖宗耳＝覚範慧洪の『林間録』巻一（X87-251a）に同文が見える。

④敕修清規［上一ノ卅四丈］訴笑隱尊祖章序云、海會端公謂、宜祀達磨於中、百丈陪于右、而各寺之開山祖配焉。見於祖堂綱紀序云。

＊

『敕修清規』［上一の卅四丈］訴笑隱（＝笑隱大訴禪師）の「尊祖の章の序」に云く、「海會の端公の謂く、『宜しく達磨を中に祀り、百丈を右に陪わしめ、各寺の開山祖を配すべし』と。「祖堂綱紀の序」に見ゆと云う」と。

＊

○敕修清規［上一ノ卅四丈］訴笑隱尊祖章序云…見於祖堂綱紀序云＝『勅修百丈清規』巻二「尊祖章第四」冒頭（T48-1117c）に同序文が見える。「祖堂綱紀序」は②に既出。

⑤忠曰、綱紀序無左右説。然清規言百丈陪于右。而今禪林安像。例而達磨南面、百丈在東。則陪于祖左也。臨濟在西。則陪于祖右也。依此舊説紛紜。或曰。林間録已言、大智像西向。是亦可約達磨南面。則陪于祖左明矣。故今右字寫訛。當改左字。即百丈配昭位。〈左東。〉某寺開山配穆位。〈右西。〉正爲當理也。或曰右宇不可改也。但某寺崇開山。故開山安祖左。〈東也。〉百丈安祖右〈西也。〉矣。

＊

忠曰く、「『綱紀（＝祖堂綱紀）の序』に左右の説無し。然るに『清規』に百丈、右に陪すと言う。今、禪林の像を安ずるに、例して達磨は南面す。百丈、東に在れば、則ち祖の左に陪すなり。臨濟、西に在れば、則ち祖の右に陪すなり。此れに依りて舊説紛紜（＝さかんなさま）たり」と。或いは曰く、「『林間録』に已に『大智の像、西に向う』と言う。是れ亦た達磨の南面に約す可ければ、則ち祖の左に陪すること明らけし。故に今の右の字は寫訛なり。當に左の字に改むべし。即ち百丈を昭位に配す。〈左は東なり。〉某寺の開山を穆位に配す。〈右は西なり。〉正に理に當ると爲すなり」と。或いは曰く、「右の字、改む可からず。但だ某寺、開山を崇ぶ。故に開山を祖の左に安じ〈東なり。〉、百丈を、祖の右に安ず〈西なり。〉」と。

＊

○忠曰、綱紀序無左右説。然清規言百丈陪于右。…百丈安祖右〈西也。〉矣＝「祖堂綱紀」は②に既出。また、「然清規言、百丈陪于右」の部分は④に、「林間録已言、大智像西向」の部分は③に既出。

⑥

或曰、右者、謂向眞人之右也。則北面向眞故、右則東也。合現今禪林安像法。

＊

或いは曰く、「右とは、眞に向かう人の右を謂うなり。則ち北面して眞に向うが故に、右は則ち東なり。現今の禪林の像を安ずる法に合す」と。

⑦

忠曰、向眞人之右之説甚失義也。何故。謂凡規制書、無此例。聖節榜張于三門之右者、言門西也。聖節上堂、侍者往法座左側立者、言座東也。儒禮亦然。文公家禮［一ノ十丈］云、凡屋制不問何向背、但以前爲南、後爲北、左爲東、右爲西。後皆倣此。〈止此。〉何遽作向眞人之左右説耶。其尊開山、抑百丈。固不足取焉。改左字者、義同林間。故不在痛削。然以余觀之、笑隱云陪于右、大有深意。蓋達磨爲太祖、二祖昭、三祖穆、如此次第配之。則百丈穆位、而在達磨之右。〈西也。〉笑隱之意。豈在茲乎。猶如周后稷爲祖、文王穆、武王昭矣。綱紀序本不言左右。覺範之配定、與改左字者、一狀領過。

或曰、今禪林以臨濟代開山配祖。若依其昭穆説、則臨濟亦當穆位。答曰、若置黄檗像、則固可如所論。然除黄檗但安臨濟。故可配左邊空位耳。不可爲此難。唯是安像法、本於清規百丈陪于右説。故臨濟可在左也。實與今禪林安位、相反焉。如今之配置、蓋依『林間録』而已。

＊

忠曰く、「眞に向かう人の右の説は、甚だ義を失するなり。何の故ぞ。謂く、凡そ規制の書に、此の例無し。聖節（＝セイセツとも）の『榜、三門の右に張る』とは、門の西を言うなり。儒禮もまた然り。『文公家禮』［一の十丈］に云く、「凡そ屋制、何の向背を問わず、但だ前を以て南と爲し、後えを北と爲し、左を東と爲し、右を西と爲す。後皆な此に倣え」と。〈此に止まる。〉何ぞ遽かに眞に向かう人の左右の説を作すや。其れ開山を尊びて、百丈を抑うるは、固とに取るに足らず。左の字に改むる者は、義、『林間』に同じ。故に痛く削るに在らず。然るに余（私）を以て之を觀るに、笑隱（〔尊祖章序〕）、『右に陪す』と云うは、大いに深意有り。蓋し、達磨を太祖と爲し、二祖昭、三祖穆、此くの如く次第に之を配せば、則ち百丈穆位にして、達磨の右に在り。〈西なり。〉笑隱（〔尊祖章序〕）の意、

豈に茲に在らんや。猶お周の后稷（＝中国の農業の神）を祖と爲し、文王（＝中国の周朝の始祖。武王の父）穆、武王（＝中国の周朝の創始者）昭なるが如し。『綱紀の序』に本と左右を言わず。覺範（『林間録』）の配定と、左の字に改むる者と、一状に領過す」と。　或いは曰く、「今の禪林、臨濟を以て開山に代えて祖に配す。若し其の昭穆の説に依らば、則ち臨濟も當に穆位なるべし」と。答えて曰く、「若し黄檗の像を置かば、則ち固とに論ずる所の如くなる可し。然れども黄檗を除き、但だ臨濟を安ず。故に左邊の空位に配す可きのみ。此の難を爲す可からず。唯だ、是の安像の法、『清規』の『百丈を右に陪する』の説に本づく。故に、臨濟、左に在る可し。實に今の禪林の安位と相反す。如今の配置は、蓋し『林間録』に依るのみ」と。

＊

○忠曰、向眞人之右之説甚失義也…蓋依『林間録』而已＝文中「聖節榜張于三門之右」の部分は、『勅修百丈清規』巻一「聖節」の「啓建之先一日、堂司備榜、張于三門之右」（T48-1113a）を、「聖節上堂、侍者往法座左側立」の部分は、同じく『勅修百丈清規』巻一「聖節」に「侍者往法座左側立、候衆集」（T48-1113a）とあるのを踏まえる。また「文公家礼［一ノ十丈］云…後皆倣此」の部分は、『文公家礼』巻一・十丈に同文が見える（早稲田大学古典籍総合データベース）。『文公家禮』は、中国南宋時代に成立した礼儀作法の書。『朱子家礼』ともいう。通礼，冠礼，昏（婚）礼，喪礼，祭礼の五章より成る。文公とは朱熹のこと。文中の語句のうち、聖節【九五二】「聖節」、【一一九五】「聖説黄榜」、【一三〇】「開山」は、それぞれ本書中に立項されている。

⑧羅湖野録［下ノ五十三丈。会元十九ノ六十五丈引］云、隆禪師及住虎丘、道大顯著。因追繹白雲端和尚立祖堂故事、乃曰、爲人之後、不能貌行遺訓、於義安乎。遂圖像奉安、題讚于上。達磨曰、闔國人難挽。西携隻履歸。只應熊耳月、千古冷光輝。百丈曰、迅雷吼破澄潭月。當下曾經三日聾、去却膏盲必死疾、叢林從此有家風。開山明教大師曰、春至百花觸處開。幽香旖旎襲人來。臨風無限深深意、聲色堆中絶點埃。嗚呼、百丈創立禪規以來、叢林卒不至於陁廢、實本于此。白雲、以百丈配享達磨。有識靡不韙其議。可謂知本矣。隆既能遵行奉先之禮、又從而爲讚、發明其道。有足多也。

＊

『羅湖野録』［下の五十三丈。『会元』十九の六十五丈にも引く］に云く、「隆禪師、虎丘（＝蘇州）に住するに及び、道、大いに顯著なり。因みに、白雲の端和尚の祖堂を立つる故事を追繹（＝後からたづねる）して、乃ち曰く、『人の後爲る、貌から遺訓を行うこと能わずんば、義に於いて安んぜんや』と。遂に像を圖し奉安して、讚を上に題す。達磨に曰く、『闔國（＝全国）の人挽き難し。西の方、隻履を携えて歸る。只だ應に熊耳（＝河南省）の月のみ、千古、光輝冷かるべし』と。百丈に曰く、『迅雷吼破す澄潭の月、當下に曾て三日の聾を經る、膏肓（＝身体の奥深いところ）必死の疾を去却して、叢林此れ從り家風有り』と。開山明教大師（＝仏日契嵩）に曰く、『春至りて百花觸處に開く、幽香旖旎として人を襲い來たる。風に臨み限り無き深深たる意、聲色堆中、點埃を絶す』と。嗚呼、百丈、禪規を創立してより以來、叢林、卒に陁廢（＝くずれ・すたれる）するに至らざるは、實に此れに本づく。白雲、百丈を以て達磨に配享（＝二つのものがあいあたる）す。有識、其の議を韙せざること靡し。謂いつ可し、本を知ると。隆、既に能く先を奉ずるの禮を遵行し、又た從って讚を爲して、其の道を發明す。多しとするに足れること有り」と。

＊

○羅湖野録［下ノ五十三丈。会元十九ノ六十五丈引］云…有足多也＝『羅湖野録』巻二（X83-390c）に同文が

見える。無著の書き入れに「会元十九ノ六十五丈引」とあるが、『五燈会元』巻一九に「因追繹白雲端和尚立祖堂故事、乃曰、為人之後、不能躬行遺訓、於義安乎。遂圖其像。以奉安之」（X80-405b）とあり、若干の違いが見られる。また、文中の「隆禪師」とは、臨済宗楊岐派の流れをくむ虎丘派（＝虎邱とも）虎丘紹隆禪師（一〇七七～一一三六）のこと。圜悟克勤（一〇六三～一一三五）の法嗣で、『虎丘隆禪師語録』一巻がある。

（冨増健太郎）

【三三】土地堂

①土地神、護法神之堂、設佛殿東邊。

＊

土地神、護法神の堂は、佛殿の東邊に設く。

○【二七】「仏殿」は本書に立項されている。

②南禪規式［下ノ四六丈］曰、或曰、宋國土地祖師二堂。在法堂左右。義堂云、但隨宜處立之。不必於法堂左右也。

＊

『南禪規式』［下の四六丈］に曰く、「或るひと曰く、『宋國の土地・祖師の二堂は、法堂の左右に在り』と。義堂云く、『但だ宜しき處に隨って之を立つ。必ずしも法堂の左右にあらず』と」と。

＊

○南禪規式［下ノ四六丈］曰…在法堂左右＝『南禪規式』は未詳。ただ、内題に「五山之上瑞龍山太平興国南禪寺規式」とある書物が、『南禪清規』上下二冊本として京都大学文学研究科図書館に所蔵されている。【三六】「法堂」は本書に立項されている。「義堂云…」の部分も『南禪規式』からの引用の続きと思われる。義堂周信（一三二五～一三八八）は、夢窓疎石の法嗣。引用の文章は、義堂の『空華集』二十巻（『五山文学全集』巻二所収）、『空華和尚日工略集』四巻、蔭木英雄著『訓注空華日用工夫略集―中世禪僧の生活と文学』（一九八二）には見えない。

③敕修清規［上三ノ六丈］住持章念誦云、侍者隨住持。到祖堂・土地堂大殿、燒香禮拜。

＊

『敕修清規』［上三の六丈］「住持」の章の「念誦」に云く、「侍者は、住持に隨いて、祖堂・土地堂の大殿に到って、燒香禮拜す」と。

＊

○敕修清規［上三ノ六丈］住持章念誦云…燒香禮拜＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1121a）に全く同じ文章が見える。

④三隱詩集［卅九丈］拾得録云。於土地堂壁上。書語數聯。

＊

『三隱詩集』［卅九丈］の「拾得録」に云く、「土地堂の壁上に、語數聯を書す」と。

＊

○三隠詩集［卅九丈］拾得録云…書語數聯＝『寒山詩』下「拾得録」六丈裏（花園大学図書館所蔵）に同文が見える。『寒山詩』を別名『三隠詩集』とも言い、三隠とは、天台山に隠れ棲む「寒山」「拾得」「豊干」を指す。唐末五代にその一部が知られ、宋代に入ってほぼ現形となる。

（古川周賢）

【三四】關廟

①關帝之廟也。關帝見于靈像類。

＊

關帝の廟なり。關帝は靈像類に見ゆ。

○本書【二六〇】「関帝」も参照のこと。

②佛祖通載［十九ノ廿五丈］無盡居士撰、玉泉皓長老塔銘序云、玉泉寺宇、廣大弊漏。悉壞法堂、方丈、寢堂、鐘樓、慈氏閣、關廟。而鼎新之。

＊

『佛祖通載』［十九の廿五丈］に無盡居士の撰する「玉泉の皓長老の塔の銘の序」に云く、「玉泉の寺宇、廣大にして弊漏す。悉く法堂・方丈・寢堂・鐘樓・慈氏閣・關廟を壞して、之を鼎新（＝古い物事を改める）す」と。

＊

○佛祖通載［十九ノ廿五丈］無盡居士撰、玉泉皓長老塔銘序云…而鼎新之＝『仏祖歴代通載』巻一九（T49-675a）に見える文章であるが、同書では「玉泉寺宇広大弊漏」に続けて「前後の主者は營葺をもって艱と為す。師曰く、『吾、山と縁有り。僧と縁無し。今世の寺を修めて後世の僧を待つのみ』と（前後主者以營葺為艱。師曰、吾与山有縁。与僧無縁。修今世寺待後世僧耳。）」とある。また、【三六】「法堂」・【四〇】「方丈」・【四四】「寢堂」は本書に立項されている。

（古川周賢）

【三五】祠堂

①居家、本設祠堂、而祭祖宗親族矣。今祭在家亡靈於佛寺者、爲祠堂。

＊

居家に、本と祠堂を設けて、祖宗親族を祭る。今、在家の亡靈を佛寺に祭る者を祠堂と爲す。

②漢書［七十二之十七丈］龔勝傳云、勝敕以棺斂喪事。衣周於身。棺周於衣勿隨俗動吾冢、種柏作祠堂。

＊

『漢書』［七十二の十七丈］「龔勝が傳」に云く、「勝、敕するに棺斂喪事を以てす。衣は

身に周くし、棺は衣に周くし、俗に隨って吾が冢を動かし、柏を種えて祠堂を作ること勿かれ」と。

＊

○漢書［七十二之十七丈］龔勝傳云…種柏作祠堂＝『前漢書』巻七二「王貢両龔鮑伝第四二」二十丈裏（花園大学図書館蔵、また中華書局校点本・p.3085）に同文が見える。『漢書』は、中国後漢、章帝の時、班固・班昭らによって編纂された前漢のことを記した歴史書で、二十四史の一つとされる。「本紀」一二巻、「列伝」七〇巻、「表」八巻、「志」一〇巻の計一〇〇巻から成る紀伝体で、前漢の成立から王莽政権までについて書かれた。『後漢書』との対比から『前漢書』ともいう。また、『史記』が通史であるのに対して、『漢書』は初めて断代史（一つの王朝に区切っての歴史書）の形式をとった歴史書である。『漢書』の形式は、後の正史編纂の規範となった。

③孔聖全書［十四巻十七丈］云、君子將營宮室、先立祠堂于正寢之東、爲四龕、以奉先世神主。高祖考妣居左、曾祖考妣居右、祖考妣居次左、考妣次右。祖考妣皆南向、考左妣石、置祭田具祭器。主人辰謁于大門之内、出入必告。正旦冬至朔望則參。俗節則獻以時食、有事則告。若無力之家、只擇明潔空室一間、以奉四世神主。再無別室。可於寢堂正間祀之。

＊

『孔聖全書』［十四巻十七丈］に云く、「君子將に宮室を營まんとすれば、先ず祠堂を正寢の東に立てて、四龕を爲り、以て先世の神主を奉ず。高祖考妣をば左に居き、曾祖考妣をば右に居き、祖の考妣をば次の左に居き、考妣をば次の右に居く。祖の考妣は皆な南に向かえ、考は左、妣は右なり。祭田を置き、祭器を具え、主人辰（早朝）に大門の内に謁して、出入に必ず告ぐ。正旦、冬至、朔望には則ち參ず。俗節には則ち獻ずるに時食を以てす。事有らば則ち告ぐ。若し無力の家は、只だ明潔の空室一間を擇んで、以て四世の神主を奉ず。再び別室無ければ、寢堂の正間にこれを祀る可し」と。

＊

○孔聖全書［十四巻十七丈］云…可於寢堂正間祀之＝『孔聖全書』三十五巻は、明の蔡復賞撰、張延庭補で、万暦十二（一五八四）年刊本が内閣文庫に存する。未見。国立国会図書館に寛文八（一六六八）年、武村三郎兵衛刊の和刻本『新刻孔聖全書』があるが、全十三巻（存巻八～一三）であり、著者も明の安夢松撰、黄大年校となっているから、内閣文庫本とは別本と思われる。ただ、ここの引用と全く同文が、明の章潢撰『図書編』巻一〇八「祠堂」（四庫全書本・3b）に見える。【四四】「寢堂」は本書に立項されている。

④後漢書［列傳十四ノ廿六丈］馬援傳云、更脩封樹、起祠堂。又李固傳［列傳五十三ノ七丈］云、新營祠堂。

＊

『後漢書』［列傳十四の廿六丈］「馬援傳」に云く、「更に封樹（＝墓に土をもり目印に木を植える事）を脩め、祠堂を起つ」と。また「李固傳」［列傳五十三の七丈］に云く、「新たに祠堂を營む」と。

＊

○後漢書［列傳十四ノ廿六丈］馬援傳云、更脩封樹、起祠堂。又李固傳［列傳五十三ノ七丈］云、新營祠堂＝「馬援伝」の引用は、『後漢書』巻五四「馬援列傳第一四」十八丈裏（花園大学図書館所蔵、ま

た中華書局校点本・p.852）に、「李固伝」の引用は『後漢書』巻九三「李杜列傳第五三」六丈表（花園大学図書館所蔵、また中華書局校点本・p.2078）に同文が見える。『後漢書』は、中国後漢朝について書かれた歴史書で、二十四史の一つに数えられる。本紀一〇巻、列伝八〇巻、志三〇巻の全一二〇巻からなる。成立は五世紀、南北朝時代の南朝宋の時代で、編者は范曄（三八九～四四五）。

（古川周賢）

【三六】法堂

①忠曰、演説大法之堂。故云法堂。故黄溍百丈山師表閣記［敕上一ノ十二丈］云。東陽嗣住是山、既新作演法之堂。〈止此。〉又宋景濂護法録、妙辨大師塔銘序云、元季、寺焚于兵。公奮然有爲。創演法堂。及方丈室。

＊

忠曰く、「大法を演説するの堂なり。故に法堂と云う。故に黄溍が『百丈山師表閣記』［『敕上』一の十二丈］に云く、『東陽、嗣いで是の山に住み、既に新たに演法の堂を作る』と。〈此こに止まる。〉又た宋景濂が『護法録』「妙辨大師の塔の銘の序」に云く、「元の季、寺、兵に焚く。公奮然として為ること有り。演法の堂、及び方丈の室を創む」と。

＊

○忠曰、演説大法之堂…及方丈室＝文中の引用のうち、「黄溍百丈山師表閣記［勅上一ノ十二丈］の部分は『勅修百丈清規』巻八（T48-1157b）に、また「宋景濂護法録、妙辨大師塔銘序」の部分は『護法録』巻一（J21-610b）に全く同文が見える。

②三才圖會［八帙宮室一ノ七丈］宮室部云、堂者當也。謂當正向陽之屋。〈玉海〉又堂明也。言明禮義之所。

＊

『三才圖會』［八帙宮室一の七丈］「宮室部」に云く、「堂とは當なり。謂く、正に當たり陽に向かうの屋なり。〈玉海〉又た堂は、明なり。言うこころは、禮義を明かにする所なり」と。

＊

○三才圖會［八帙宮室一ノ七丈］宮室部云…言明禮義之所＝『三才圖會』宮室巻一の八丁裏に同文が見える。（東京大学　東洋学研究情報センター　漢籍Web Deta Base　江戸・明・古代プロジェクト）また『事物起原』巻八（四庫全書・p.42）に同文が確認出来る。『三才圖會』は中国の類書で一〇六巻からなり、明の王圻によって一六〇七年に成立した。「三才」とは「天・地・人」を指し、あらゆる事物を十四部門に分類して図説したもの。日本ではこれを基に、江戸時代の寺島良安によって『和漢山才図会』が成立している。

③華嚴經［五ノ廿五丈］世主妙嚴品云、大智日勇猛慧菩薩説頌言、世尊凝眸處法堂。炳然照曜宮殿中。　又入法界品［七十五ノ四丈］無憂徳章云、善財童子、將升法堂。　又［七十六ノ八丈］摩耶夫人章云、時有守護菩薩法堂。羅刹鬼王。名曰善眼。　疏［十丈右］護正法堂也。

＊

『華嚴經』［五の廿五丈］「世主妙嚴品」に云く、「大智日勇猛慧菩薩、頌を説いて言く、

『世尊、凝眸して法堂に處し、炳然（＝あきらかなさま）として照曜す、宮殿の中に』と。又た『入法界品』［七十五の四丈］「無憂徳の章」に云く、「善財童子、將に法堂に升らんとす」と。　又た［七十六の八丈］「摩耶夫人の章」に云く、「時に、菩薩の法堂を守護する羅刹鬼王有り、名づけて善眼と曰う」と。　『疏』［十丈右］に「正法の堂を護るなり」と。

＊

○華嚴經［五ノ廿五丈］世主妙嚴品云…炳然照耀宮殿中＝『大方広仏華厳経』巻五「世主妙嚴品」（T10-24a）に全く同文が見える。

○又入法界品［七十五ノ四丈］無憂徳章云…將昇法堂＝『大方広仏華厳経』巻五七五「入法界品」（T10-406a）に同文が見える。

○又摩耶夫人［七十六ノ八丈］章云…名曰善眼＝『大方広仏華厳経』巻七六「入法界品」（T10-414b）に同文が見える。

○疏［十丈右］護正法堂也＝『大方広仏華厳経疏』巻五九（T35-414b）に同文が見える。

④大方等日藏經［一ノ六丈］云、於當來世、是中皆應起立塔寺、造作法堂、安置舍利・經法・形像。

＊

『大方等日藏經』［一の六丈］に云く、「當來世に於いて、是の中に皆な應に塔寺を起立し、法堂を造作し、舍利・經法・形像を安置すべし」と。

＊

○大方等日藏經［一ノ六丈］云…経法形蔵＝『大方等日蔵経』巻三四「日蔵分護持正法品」（T13-234b）に全く同文が見える。

⑤佛本行集經［五十ノ四丈］云、有諸比丘。或在露地。説法之時。或寒或熱。我許造堂。堂下説法。若雖有堂。露無四壁。風吹塵草。汚諸比丘。我今當聽起四壁障。遮諸塵草。時諸比丘。在説法堂。若地不平。應以種種。若麻若草泥塗其地。使令淨好。

＊

『佛本行集經』［五十ノ四丈］に云く、「諸もろの比丘あり、或いは露地に在り。説法の時、或いは寒く或いは熱ければ、我れ堂を造り、堂下に説法することを許す。若し堂有りと雖も、露わにして四壁無く、風、塵草を吹いて、諸もろの比丘を汚さば、我今、當に四壁障を起て、諸もろの塵草を遮るを聴すべし。時に諸もろの比丘、説法堂に在りて、若し地不平ならば、應に種種の、若しくは麻、若しくは草を以て、その地を泥塗して、淨好せしむべし」と。

＊

○佛本行集經［五十ノ四丈］云…使令淨好＝『仏本行集経』巻五〇「説法儀式品」（T3-883c）に全く同文が見える。

⑥毘奈耶雜事［三十七ノ十四丈］云、佛告阿難陀。此拘尸那城、往古有城、有（ママ）拘奢伐底、有王名大善見。國人奉諸金銀末尼等寶。王曰、如是諸寶、我自豐足、不受。國人置寶而去。王念。今此珍寶、非枉求。我今宜用修造法堂。時有八萬四千、諸城小王。聞之、咸詣王所白言、願不煩神慮。臣等望、爲王營造。再三請而許。諸王白王、於城東形勝地、興建法堂。〈莊嚴廣説。〉嚴飾既畢、願親臨幸。王念、此勝法堂、不應先自受用。宜請一切沙門

婆羅門、有徳行者、如法供養。〈略鈔。〉

＊

『毘奈耶雑事』［三十七の十四丈］に云く、「佛、阿難陀に告ぐ、『この拘尸那城（＝クシナガラ城）、往古に城有り、拘奢伐底（＝大善見転輪王の時代の都城）有（ママ）り【＝「有」は無著の誤写。経典の原字は「名」であり、「と名づく」が正しい】。王有り、大善見と名づく。國の人、諸もろの金銀・末尼等の寶を奉ず。王曰く、「此くの如き諸もろの寶、我自ら豐足すれば、受けず」と。國の人、寶を置きて去る。王念ずらく、今此の珍寶、枉げて求むるに非ず。我今、宜しく用いて法堂を修造すべし」と。時に八萬四千の諸城の小王有り。之れを聞いて、咸な王の所に詣りて白して言わく、「願わくは神慮（王の心）を煩わせざれ。臣等、望むらくは、王の爲に營造せん」と。再三請いて許す。諸王、王に白して、城東の形勝の地に於いて、法堂を興建す。〈莊嚴（立派さ）をば廣く説く。〉嚴飾既に畢わりて、親ら臨幸したまわんことを願う。王念ずらく、「此の勝れたる法堂、應に先ず自ら受用すべからず。宜しく一切の沙門、婆羅門の徳行有る者を請いて、如法に供養すべし」と』と」と。〈略鈔す。〉

＊

○［三十七ノ十四丈］云…如法供養略鈔＝『毘奈耶雑事』は『根本説一切有部毘奈耶雑事』四〇巻のこと。引用は同書・巻三七「第八門第十子摂頌説涅槃之餘」（T24-393a~c）に見えるが、文末に「略鈔」とあるように、大幅に削除節略されている。

⑦ 右法堂文字、出經律者。

＊

右は、「法堂」の文字の、經律に出ずる者なり。

⑧ 歴代三寶記［十二ノ二丈右］隋録云、法堂・佛殿、既等天宮。震旦神州、還同淨土。

＊

『歴代三寶記』［十二の二丈右］の「隋録」に云く、「法堂・佛殿、既に天宮に等しく、震旦の神州、還って淨土に同じ」と。

＊

○歴代三寶記［十二ノ二丈右］隋録云…既等天宮震旦神州還同淨土＝『歴代三宝記』巻一二「大隋録」（T49-102a）に全く同文が見える。

⑨ 六學僧傳［十七ノ廿四丈］隋羅雲傳曰、上明東寺法堂十二間。蓋道安・曇翼所造。

＊

『六學僧傳』［十七の廿四丈］「隋の羅雲の傳」に曰く、「上明東寺の法堂は十二間なり。蓋し道安・曇翼の造る所なり」と。

＊

○六學僧傳［十七ノ廿四丈］隋羅雲傳曰…蓋道安曇翼所造＝『六学僧伝』巻一七「隋羅雲」章（X77-219c）に同文が見える。

⑩ 唐高僧傳［十一ノ四丈］羅雲傳云、釋道安於上明東寺造堂七間、曇翼後造五間。連甍接棟。横列十二。

＊

『唐高僧傳』［十一の四丈］「羅雲」の傳に云く、「釋道安、上明東寺に於いて堂七間を造り、曇翼、後に五間を造る。連甍（＝屋棟の連なるをいう）接棟（＝続いている家のむね）、横に十二を列す」と。

＊

○唐高僧傳［十一ノ四丈］羅雲傳云…横列十二＝『続高僧伝』巻九「釈羅雲」章（T50-493b）に同文が見える。

⑪傳燈録［四ノ十五丈］牛頭慧忠禪師章云、衆請入城、居莊嚴舊寺。師欲於殿東、別創法堂。先有古木、羣鵲巣其上。工人將伐之。師謂鵲曰、此地建堂。汝等何不速法。言訖、羣鵲乃遷巣他樹。初築基、有二神人。定其四角、復潛資夜役。遂不日而就。繇是四方學徒、雲集座下矣。

＊

『傳燈録』［四の十五丈］「牛頭慧忠禪師（六八三～七六九）の章」に云く、「衆請じて城に入れ、莊嚴の舊寺に居らしむ。師、殿の東に於いて、別に法堂を創めんと欲す。先に古木有りて、羣鵲（＝かささぎのむれ）、その上に巣くう。工人將に之を伐らんとす。師、鵲に謂いて曰く、『此の地に堂を建つ。汝等何ぞ速やかに去らざる』と。言い訖わりて、羣鵲乃ち巣を他樹に遷す。初め基を築くに、二の神人あり。其の四角を定めて、復た潛かに夜役を資く。遂に日ならずして就る。是れに繇りて四方の學徒、雲のごとくに座下に集まる」と。

＊

○傳燈録［四ノ十五丈］牛頭慧忠禪師章云…雲集座下矣＝『景徳伝燈録』巻四「第六世慧忠禪師」章（T51-229a）に同文が見える。

⑫宋高僧傳［八ノ廿一丈］香育〈嗣神秀〉傳曰、州將韓閏、供施交駢。樹造法堂、嚴飾奇麗。時來問道。

＊

『宋高僧傳』［八の廿一丈］「香育〈神秀に嗣ぐ〉の傳」に曰く、「州將の韓閏、供施交ごも駢べ、法堂を樹造して、嚴飾奇麗なり。時に來たりて道を問う」と。

＊

○宋高僧傳［八ノ廿一丈］香育〈嗣神秀〉傳曰…時来問道＝『宋高僧伝』巻八「大仏山香育伝」章（T50-759c）に同文が見える。

⑬　右竝百丈已前、有法堂稱者。

＊

右は、竝びに百丈已前に、「法堂」の稱有る者なり。

⑭傳燈録［六ノ廿二丈］百丈章禪門規式云、不立佛殿、唯樹法堂。者。表佛祖親囑受、當代爲尊也。

＊

『傳燈録』［六の廿二丈］「百丈」の章の『禪門規式』に云く、「佛殿を立てずして、ただ法

堂を樹つることは、佛祖の親しく囑受（＝たのみうける）して、當代を尊と為ることを表すなり」と。

＊

○傳燈録［六ノ廿二丈］百丈章禪門規式云…當代爲尊也＝『景徳伝燈録』巻六（T51-251a）に同文が見える。

⑮ 徳山折却佛殿、獨存法堂。〈見于佛殿處。〉

＊

徳山、佛殿を折却して、獨り法堂を存するのみ。〈「佛殿」の處に見ゆ。〉

＊

○徳山折却佛殿、獨存法堂。〈見于佛殿處。〉＝本書【二七】「仏殿」を参照のこと。

⑯ 忠曰、竊以百丈制禪苑規繩、取意於朝制。其東西兩序、猶如文武排行。五參上堂、猶如五日一參。到法堂制造、亦是擬太極殿矣。予嘗聞日本大極殿之制。蓋一依中華法、地面碁布甎瓦、中央有高臺。皇帝即位、登此座、則可四方瞻禮之。由此觀今法堂之制、無一所異。而今法堂座後、有大板屏。非可移動者。蓋非古也。何以知之。清規上堂云、設罣罳法被。夫板屏罣罳也。若常在則何言設之。乃知。古制不造板屏。臨時設罣罳耳。既無板屏、則在座上者、可四方仰望之。然古有佛殿擬太極殿者。編年通論［七ノ六丈］云、魏胡太后作永寧寺。極土木之美。其佛殿如太極殿。三門如端門。僧房千楹。玉珠錦繡。駭人心目。〈前佛殿處、引歴代三寳記。〉予之法堂。形太極之説。殆得類證矣。

＊

忠曰く、「竊かに以るに、百丈、禪苑の規繩を制するに、意を朝制に取る。其の東西の兩序は、猶お文武の排行の如し。五參上堂は、猶お五日一參の如し。法堂の制造に到りては、亦た是れ太極殿に擬するなり。予嘗て日本の大極殿の制を聞く。蓋し一えに中華の法に依り、地面、甎瓦を碁布し、中央に高臺有り。皇帝の即位に、此の座に登るときは、則ち四方より之を瞻禮す可し。此れに由りて、今の法堂の制を観るに、一も異なる所無し。而今の法堂の座後に、大板屏有り。移動す可きものに非ず。蓋し古に非ざるなり。何を以てか之を知る。『清規』の「上堂」に云く、『罣罳（＝竹で作ったかご・ふるい）法被を設く』と。夫れ板屏は罣罳なり。若し常に在らば、則ち何ぞ之れを『設く』と言わんや。乃ち知んぬ、古制は板屏を造らず、時に臨みて罣罳を設くるのみ。既に板屏無くんば、則ち座上に在る者、四方これを仰ぎ望む可し。然るに古えに佛殿を太極殿に擬する者有り。『編年通論』［七の六丈］に云く、『魏の胡太后、永寧寺を作り、土木の美を極む。其の佛殿は太極殿の如く、三門は端門の如し。僧房千楹、玉珠錦繡し、人の心目を駭かす』と。〈前の「佛殿」の處には、『歴代三寳記』より引く。〉予の法堂、太極を形るの説、殆ど類證を得たり。

＊

○清規上堂云、設罣罳法被＝典拠未詳。「設罣罳」の三字に限れば、『禅林備用清規』巻二に「侍者令客頭、於寢堂或法堂、鋪設罣罳椅子、香几三隻、燭台三対、当椅前、一字間列」（X63-627c）という文章が見える。

○編年通論［七ノ六丈］云…駭人心目〈前佛殿處、引歴代三寳記。〉＝『隆興編年通論』巻七（X75-142b）にほぼ同文が見える。割り注の部分は、【二七】「仏殿」の⑤に、「歴代三寳記［九ノ二丈］云、孝明帝

熙平元年、靈太后胡氏、造永寧寺。〈乃至、〉浮圖北有佛殿一所。形如太極。中有丈八金像」とあるのを指す。

⑰ 或曰、禪刹法堂、象帝釋善法堂、故名法堂也。予謂不然。古人或命文命扁。只取類似。以資言藻。或上堂小參。亦臨時假借未可取以爲本義也。若實謂象帝釋之堂、則義不亦涸焉。師表閣記、明言演法之堂。何須別説。且掇古人以善法堂稱者、附見于此。

＊

或るひと曰く、「禪刹の法堂は、帝釋の善法堂を象る。故に法堂と名づくるなり」と。予謂えらく、然らず。古人或いは、文に命じ扁に命じ、只ただ類似を取りて以て言藻（＝言葉のあや）を資く。或いは上堂・小參も、亦た時に臨んで假借す。未だ取りて以て本義と為す可からざるなり。若し實に帝釋の堂を象ると謂わば、則ち義も亦た涉らず。「師表閣の記」に、明らかに「演法の堂」と言う。何ぞ別に説くことを須いん。且く古人、「善法堂」を以て稱する者を掇りて、此こに附見せん。

＊

○師表閣記、明言演法之堂＝『勅修百丈清規』巻八「百丈山大智壽聖禪寺天下師表閣記」に「既に新しく演法の堂を作る（既新作演法之堂）」（T48-1157b）とある。

⑱ 佛祖通載［十三ノ十六丈］唐張説法池院二法堂贊序云、法池西、三歸院二法堂。茲院、長老初上禪師所造也。三歸堂。以長安元年辛丑、子月望日癸卯立。善法堂以開元元年癸丑、丑月望日戊辰建。又云、至哉、初上人。建立善法堂、彩翠三世佛。

＊

『佛祖通載』［十三の十六丈］「唐の張説法池院の二法堂の贊の序」に云く、「法池の西、三歸院の二法堂。茲の院は、長老初上禪師の造る所なり。三歸堂は、長安元（七〇一）年辛丑、子の月（＝十一月）望日（＝陰暦十五日）癸卯を以て立つ。善法堂は、開元（七一三）元年癸丑、丑の月（＝十二月）望日戊辰を以て建つ」と。又た云く、「至れるかな、初上人。善法堂を建立し、三世佛を彩翠す」と。

＊

○佛祖通載［十三ノ十六丈］唐張説法池院二法堂贊序云…彩翠三世佛＝『佛祖歴代通載』巻一三（T49-592c）から節略での引用。前半は「序」の文章で、「又云」以下は「贊」文の一部である。

⑲ 廣燈録［二十ノ五丈］覺華普照禪師章云、僧問、如來以一音演説法。未審和尚、何法示人。師云、白雲無定止。出沒太虚中。進云。恁麼則善法堂前師子吼也。

＊

『廣燈録』［二十の五丈］「覺華の普照禪師」の章に云く、「僧問う、『如來、一音を以て演説法す。未審し和尚、何の法をか人に示す』と。師云く、『白雲に定止無し、太虚中に出沒す』と。進んで云く、『恁麼ならば則ち善法堂前に師（獅）子吼するなり』と」と。

＊

○廣燈録［二十ノ五丈］覺華普照禪師章云…善法堂前師子吼也＝『天聖廣燈録』巻二〇（X78-519b）に同文が見える。

⑳ 續燈録［十四ノ廿二丈］興化紹清禪師章云、上堂云、祖師門下、佛法不存。善法堂前、仁義休説。　又云、興化今日、不上天堂、不入地獄。於善法堂中、登王座上。爲母説法。

＊

『續燈録』［十四の廿二丈］「興化紹清禪師」の章に云く、「上堂して云く、『祖師門下、佛法存せず。善法堂の前、仁義説くを休めよ』と」と。　又た云く、「興化今日、天堂に上らず、地獄に入らず。善法堂中に於いて、王座上に登り、母の為に説法す」と。

＊

○續燈録［十四ノ廿二丈］興化紹清禪師章云…仁義休説＝『建中靖国続燈録』巻一四（X78-730c）に全く同文が見える。「又云…為母説法」の部分も同じ段落の終わりの方に見える。

21 葉縣省禪師録［古宿廿三ノ十六丈］云、問善法堂中、伸一問。未審師還接也無。師云、蜀地錦觀陶綿。

＊

『葉縣（＝河南省）省禪師録』［古宿廿三の十六丈］に云く、「問う、『善法堂中、一問を伸ぶ。未審し、師還って接せんや也た無しや』と。師云く、『蜀地の錦、觀陶の綿』と」と。

＊

○葉縣省禪師録［古宿廿三ノ十六丈］云…蜀地錦觀陶綿＝『古尊宿語録』巻二三（X68-154c）に全く同文が見える。

22 雲峯悅禪師法輪録云、開堂陞座。僧問。善法堂開於此日。第一義諦、請師宣。師云何不早問。

＊

雲峯の悅禪師『法輪録』に云く、「開堂陞座。僧問う、『善法堂、此の日に開く。第一義諦、請う師宣せよ』と。師云く、『何ぞ早く問わざる』と」と。

＊

○雲峯悅禪師法輪録云…師云何不早問＝『古尊宿語録』巻四〇「次住法輪語録」（X68-264a）に全く同文が見える。文中の雲峰悅禪師とは、雲峰文悅禪師（九九八～一〇六二）のことで、臨済下八世、大愚守芝禪師の法嗣。

23 石溪録［小參五丈］小參、頌趙州訪茱萸、上法堂、從東過西因緣云。善法堂前探淺淡、寒濤平地湧千尋。

＊

『石溪録』［小參五丈］「小參」に、趙州、茱萸を訪れ、法堂に上り、東より西に過ぐる因緣を頌して云く、「善法堂前に淺深を探り、寒濤平地に湧くこと千尋」と。

＊

○石溪録［小參五丈］小參…平地湧千尋＝『石溪心月禪師語録』（X71-47c）に同じ文章が見える。石溪心月禪師（？～一二五五）は、密菴下四世。

24 貞和集［三ノ廿三丈］北礀彰教建法堂頌云、善法堂傾法不傾、欲支一木要重新。

＊

『貞和集』［三ノ廿三丈］に、「北磵、彰教に法堂を建つ頌」に云く、「善法堂傾きて、法傾かず、一木を支えて重新を要せんと欲す」と。

＊

○貞和集［三ノ廿三丈］北磵彰教建法堂頌云…欲支一木要重新＝『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻三、二十三丈に同文が見える。（国立国会図書館デジタル化資料）また、文中の北磵とは、北磵居簡（一一六四～一二四六）、大慧下三世のことで、『北磵和尚語録』一巻、『北磵文集』十巻、『北磵詩集』九巻、『北磵外集』一巻があり、ともに五山の禅林に大きい影響をあたえた。

25　南堂欲禪師本覺録［五十七丈］小參云、從教靈山會上、退席五千。善法堂前。草深一丈。

＊

南堂欲禪師（＝了菴清欲・一二八八～一三六三）『本覺録』［五十七丈］の「小參」に云く、「從教れ、靈山會上、退席すること五千、善法堂前、草深きこと一丈なることを」と。

＊

○南堂欲禪師本覺録［五十七丈］小參云…草深一丈＝『了菴清欲禪師語録』巻二（X71-320a）に同文が見える。

26　大休念禪師録［佛事八丈］壽福寺、掛善法堂額佛事云、善法堂前雙樹陰、微風吹動奏清音。如來寶座親蹤跡。天上人間亘古今、所以釋迦世尊、初於普光明殿、成等正覺、不離菩提樹下、上昇忉利天宮。乃至七處九會、徧登寶華王座。一音演唱、隨類得解。一雨所霑、隨根受潤。而況壽福禪苑、古佛道場、標善法之名模、遵先覺之懿範。雷音大震、普示人天四衆。慈雲廣被、仰瞻天雨四花。

＊

『大休念禪師録』［佛事八丈］「壽福寺、善法堂の額を掛くる佛事」に云く、「善法堂前、雙樹の陰、微風吹き動かして清音を奏す。如來の寶座、親の蹤跡、天上人間、古今に亘る。所以に、釋迦世尊、初め普光明殿に於いて、等正覺を成じ、菩提樹下を離れずして、忉利天宮に上昇す。乃至、七處九會（＝説法の場所と回数のこと）、徧く寶華王座に登る。一音演唱すれば、類に隨いて解を得。一雨の霑す所、根に隨いて潤を受く。而るを況や壽福禪苑、古佛の道場、善法の名模を標し、先覺の懿範（＝美しい規範）に遵ぶをや。雷音大いに震いて、普く人天四衆に示し、慈雲廣く被いて、天雨四花を仰瞻す」と。

＊

○大休念禪師録［佛事八丈］壽福寺…仰瞻天雨四花＝『大日本仏教全書』禅宗部巻九六『念大休禪師録』「大小仏事」（p109）に同文が見えるが、「善法堂前双樹陰」が「喜法堂前双樹陰」となっている。大休正念（一二一五～一二九〇）は石渓心月の法嗣で、文永六年（一二六九）北条時宗の招きを受けて来朝し、禅興寺・建長寺・寿福寺・円覚寺等に住した。

27　忠曰、是已以善法命扁。故援世尊昇忉利。且實其事。然假借緣飾。非爲本義也。

＊

忠曰く、「是れ已に善法を以て扁に命ず。故に世尊、忉利に昇るを援きて、且くその事を實にす。然れども假借緣飾、本義と為るに非ざるなり」と。

28　清拙澄禪師録［小参十三丈］小參、引臨濟洞山等五尊宿因縁云、這五員老凍膿、只今同在善法堂上。大開鋪席、互顯家風。

＊

『清拙澄禪師録』［小参十三丈］「小參」に、臨濟・洞山等の五尊宿の因縁を引いて云く、「這の五員の老凍膿（＝道行を修せず大事を明らめず、徒に老いた者）、只今同じく善法堂上に在りて、大いに鋪席（＝むしろをしく）を開き、互いに家風を顯す」と。

＊

○『清拙澄禪師録』［小参十三丈］小參…互顯家風＝『清拙和尚語録』巻一、第一冊十三丈（東京大学史料編纂所・所蔵資料目録データベース・上村観光所蔵）に同文が見える。『清拙和尚語録』については、泰定元年（一三二四）に在元中に跋刊されたものと、明徳二年（一三九一）に刊された来朝以後のもの二本がある。また、明徳二年本の外に南北朝頃開版の五山版も存し、正徳二年（一七一二）刊行の活字本は三冊本である。清拙正澄（一二七四～一三三九）は、臨済宗楊岐派破菴派愚玉極智慧の法嗣で、嘉暦元年（一三二六）来日し、北条高時に信任され、建長寺・建仁寺・南禅寺などに住した。日本禅宗二十四派の一である清拙派、大鑑門徒の祖とされ、大鑑禅師と諡号される。

（桐野祥陽・水野隆道）

【三七】法座

①忠曰、演法之座、即須彌座也。

＊

忠曰く、「演法の座、即ち須彌座なり」と。

＊

○文中「須彌座」とは、法堂にある説法する座のことで、須弥山に擬して、こう呼ぶ。

②敕修清規［上一ノ十九丈ウ］聖節云、侍者、往法座左側立、候衆集。

＊

『敕修清規』［上一の十九丈ウ（裏）］「聖節」に云く、「侍者、法座の左に往き、側に立ち、衆の集まるを候す」と。

＊

○敕修清規［上一ノ十九丈ウ］聖節云…候衆集＝『勅修百丈清規』巻一（T48-1113a）に全く同じ文が見える。尚、【九五二】「聖節」は、今上皇帝の誕生日を指して言い、『象器箋』に立項されている。

（瀧玄浩）

【三八】開山塔

○この条は、題目だけで解説文が付されていない。開山塔については『百丈清規証義記』巻四に「唯開山塔、及嗣法師塔、説法。餘皆随宜」（X63-412a）とある。

（瀧玄浩）

【三九】享堂

①忠曰、安祖像牌之堂、設祭享於此。故云享堂也。今謂之照堂者、訛矣。〈詳照堂處。〉

＊

忠曰く、「祖像牌を安ずるの堂なり。祭享を此ここに設く。故に享堂と云うなり。今、之を照堂と謂う者は、訛れり」と。〈「照堂」の處に詳らかなり。〉

＊

○忠曰…訛矣詳照堂處＝【七七】「照堂」を参照のこと。なお、「享」は「まつる」の意。

②大鑑清規［五十六丈］末後事儀云、龕安正客殿。或卵塔前享堂、龕於此安之。本是饗堂。享同。祭享之堂也。日本人名照堂錯也。

＊

『大鑑清規』［五十六丈］の「末後の事儀」に云く、「龕をば正客殿に安ぜよ。或いは卵塔の前の享堂、龕を此ここに於いて之を安ぜよ。本と是れ饗堂なり。享と同じ。祭享の堂なり。日本人、照堂と名づくるは錯りなり」と。

＊

○大鑑清規［五十六丈］末後事儀云…照堂錯也＝『大鑑清規』とは『大鑑廣清規』のこと。清拙正澄が正慶元（一三三二）年に撰した法式の解説書。未見。

③忠曰、日本人、以開山享堂、謬稱照堂。蓋其轉謬有所由也。抑照堂、本在僧堂之後。而或處佛殿後、設開山塔、有似彼僧堂後之照堂。故稱佛殿後開山塔、爲照堂矣。遂不在殿後者、亦例謂照堂也。〈又照堂處辨之。〉

＊

忠曰く、「日本人、開山の享堂を以て、謬って照堂と稱す。蓋し其の轉謬に所由有るなり。抑そも照堂は、本と僧堂の後に在り。而して或る處に、佛殿の後に、開山塔を設け、彼の僧堂の後の照堂に似たる有り。故に佛殿後の開山塔を稱して、照堂と爲す。遂に殿後に在らざる者をも、亦た例して照堂と謂うなり」と。〈又た「照堂」の處に之を辨ず。〉

＊

○『象器箋』【七七】「照堂」を参照のこと。

④癸辛雜識別集［上ノ六丈・必十四ノ二］云、平江虎丘有虎十餘據之。同里葉氏墓舍在焉。其一大享堂、虎專爲食息之地。

＊

『癸辛雜識別集』［上の六丈・必十四の二］に云く、「平江の虎丘に虎十餘有りて之に據る（＝よりどころとする）。同里に葉氏の墓舍在り。其の一つの大享堂、虎專ら食息の地と爲す」と。

＊

○癸辛雜識別集［上ノ六丈・必十四ノ二］云…虎專爲食息之地＝宋の周密撰『癸辛雜識別集』巻上、「同

里虎」（四庫全書）に同文が見える。ここには有名な「虎の子渡し」の逸話などが収められている。

（瀧玄浩）

【四〇】方丈

①敕修清規［上一ノ十八丈左］聖節云、維那上方丈、請住持僉疏。

＊

『敕修清規』［上一の十八丈左］「聖節」に云く、「維那、方丈に上りて、住持に僉疏（＝敬白文などに著名すること）を請う」と。

＊

○敕修清規［上一ノ十八丈左］聖節…請住持僉疏＝『勅修百丈清規』巻一に「維那、用黄紙書疏、帯行僕、捧盤袱爐燭香合、上方丈請住持僉疏」（T48-1113a）と詳しい記述がある。また、『増修教苑清規』巻一「聖節」の条にも「維那、帯行僕、捧盤袱、上方丈行礼、請住持僉疏」（X57-301a）という記述が見える。尚、【九五二】「聖節」が『象器箋』の中で立項されている。

②傳燈録［六ノ廿二丈］禪門規式云、長老、既爲化主、即處于方丈、同淨名之室。非私寢之室也。

＊

『傳燈録』［六の廿二丈］「禪門規式」に云く、「長老は既に化主（＝住持）と爲り、即ち方丈に處す。淨名の室に同じ。私寢の室に非ざるなり」と。

＊

○傳燈録［六ノ廿二丈］禪門規式云…非私寢之室也＝『景德傳燈録』巻六には「凡具道眼有可尊之德者、号曰長老、如西域道高臘長、呼須菩提等之謂也。既為化主、即處于方丈。同淨名之室。非私寢之室也」（T51-251a）と類似の文が見えるが、『禅苑蒙求拾遺』巻一（X87-103a）では本文と全く同じ文が見える。また、『勅修百丈清規』巻八のには「凡具道眼者有可尊之德、号曰長老、如西域道高臘長呼須菩提等之謂也。即為化主、即処於方丈。同淨名之室。非私寢之室也」（T48-1158a）、『釈氏要覧』巻三には「凡具道眼有可尊之德者、命為長老、既為化主、即処于方丈。同淨名之室。非私寢也」（T54-301b）、『百丈清規証義記』巻一には「凡具道眼者、有可尊之德、号曰長老、西域道高臘長、呼阿闍黎等之謂也。即為教化主、処於方丈。同淨名之室。非私寢之室也」（X63-373a）などと、本文と類似する文が見える。尚、『仏法金湯編』巻一一（X87-1628c）にも同様の文が見えるが、「非私寢之室也」の六字が欠落している。

③祖庭事苑［六ノ廿三丈］云、今以禪林正寢爲方丈。蓋取則毘耶離城維摩之室、以一丈之室、能容三萬二千師子之座、有不可思議之妙事故也。唐王玄策、爲使西域過其居、以手版縱横量之、得十笏。因以爲名。

＊

『祖庭事苑』［六の廿三丈］に云く、「今、禪林の正寢を以て方丈と爲す。蓋し、則を毘耶離城（＝毘舎離・ヴァイシャーリー）の維摩の室に取る。一丈の室を以て、能く三萬二千の師子の座を容る、不可思議の妙事有るが故なり。唐の王玄策（＝太宗・高宗に仕えた文官）、西域に使いするが爲に其の居に過り、手版を以て縱横に之を量るに、十笏（＝天子に拝謁するとき手に持った板・竹簡の長さ）を得たり。因りて以て名と爲す」と。

＊

○祖庭事苑［六ノ廿二丈］云…因以爲名＝『祖庭事苑』巻六（X64-401b）に同文が見える。

④法苑珠林［卅八ノ十九丈］感通篇云、吠舍釐國、宮城周五里。宮西北六里、有寺塔。是説維摩經處。寺東北四里許、有塔。是維摩故宅基。尚多靈神。其舍壘甎。傳云、積石即是説法現疾處也。於大唐顯慶年中、敕使衞長史王玄策、因向印度、過淨名宅、以笏量基、止有十笏。故號方丈之室也。

＊

『法苑珠林』［卅八の十九丈］「感通篇」に云く、「吠舍釐（＝ヴァイシャーリー）國、宮城の周り五里。宮の西北六里に、寺塔有り。是れ『維摩經』に説き處なり。寺の東北四里許りに塔有り。是れ維摩の故宅の基なり。尚お靈神多し。其の舍、甎（＝煉瓦）を壘ねたるがごとし。傳に云く、『石を積めり』と。即ち是れ法を説き疾を現ぜし處なり。大唐の顯慶年中（六五六～六六一）に於いて、敕使・衞長史の王玄策、因みに印度に向かいて、淨名の宅に過り、笏を以て基を量るに、止だ十笏有り。故に方丈の室と號するなり」と。

＊

○法苑珠林［卅八ノ十九丈］感通篇云…故號方丈之室也＝『法苑珠林』巻二九（T53-501c）に多少削除されている所は見受けられるが、ほぼ同文が見える。また、唐の道宣が永徽元（六五〇）年に撰した『釈迦方志』巻一（T51-960c）にもほぼ同文が見える。尚、『法苑珠林』は唐の道世が撰文編して総章元（六六八）年に完成したとされており、『釈迦方志』には『法苑珠林』より詳細な記述が見られ、また成立年も早いことから、『法苑珠林』の文章は『釈迦方志』より引用されたものと推測される。

⑤釋氏要覽［上ノ廿二丈］云、方丈蓋寺院正寢也。〈引王玄策事。〉

＊

『釋氏要覽』［上の廿二丈］云く、「方丈は、蓋し寺院の正寢なり」と。〈王玄策の事を引く。〉

＊

○釋氏要覽［上ノ廿二丈］云、方丈蓋寺院正寢也＝『釋氏要覽』巻一（T54-263b）に同文が見える。

⑥忠曰、頭陀寺碑、有方丈字。先唐玄策、且附見。

＊

忠曰く、「頭陀寺の碑に『方丈』の字有り。唐の玄策に先だつ。且く附見す。

⑦文選［五十九ノ十三丈］王簡栖頭陀寺碑文曰、宋大明五年、始立方丈茅茨。以庇經象。註高誘曰、堵長一丈、高一丈、面環一堵、爲方丈。銑曰、宋孝武皇帝時也。言立方丈之室、覆以茅茨之草、以置經象也。

＊

『文選』［五十九の十三丈］の王簡栖の「頭陀寺の碑文」に曰く、「宋の大明五（四六一）年、始めて方丈の茅茨を立つ。以て經象を庇えり」と。　註に高誘曰く、「堵（＝垣）の長さ一丈、高さ一丈、面環一堵なるを、方丈と爲す」と。　銑曰く、「宋の孝武皇帝の時なり。言うこころは、方丈の室を立て、覆うに茅茨の草を以てして、以て經象を置くなり」と。

＊

○文選［五十九ノ十三丈］王簡栖頭陀寺碑文曰…以置經象也＝『六臣註文選』巻五九「碑文下」の王簡栖

「頭陀寺碑文一首」（四部叢刊本・9b~10a）に同文が見える。註の部分は節略である。尚、慶長十二年直江版翻印本『文選』では、「高曰…」と「銑曰…」の順序が入れ替わっている。『文選』は、武帝の長子、昭明太子蕭統により撰述された詩文集で三十巻からなり、註釈を加えた六十巻本もある。無著禅師が用いたのは六十巻本である。周から南朝梁代までの代表的な詩文約八百編を網羅する。

（瀧玄浩）

【四一】堂頭

①忠曰、方丈稱堂頭。住持人居處。

＊

忠曰く、「方丈を堂頭と稱す。住持の人の居處なり」と。

＊

○【四〇】方丈、【三六五】住持を参照のこと。

②禪苑清規［七ノ六丈］請尊宿云、專使、先看知事計會訖、上堂頭人事。

＊

『禪苑清規』［七の六丈］「請尊宿」に云く、「專使、先ず知事（＝禪林の運営を司る役位）を看て計會（＝考え合わせる）し訖わりて、堂頭に上りて人事す」と。

＊

○禪苑清規［七ノ六丈］請尊宿云…上堂頭人事＝『禪苑清規』巻七（X63-542a）に同文が見える。文中の「專使」は主要な用務で特に派遣する使者をいう。

③廣燈録［十二ノ五丈］三聖然禪師章云、師到道吾。道吾以緋袜額、持神杖。師見乃云、逐便祇候。道吾應諾。師參堂了、再上堂頭、人事。道吾却具威儀、方丈内坐。師纔近前。道吾云、有事相借問。得麼。師云、也是適來野狐精、便出去。

＊

『廣燈録』［十二の五丈］「三聖の然禪師」の章に云く、「師、道吾に到る。道吾、緋を以て額を袜して、神杖を持つ。師見て乃ち云く、『便を逐って祇候（＝謹んでご機嫌伺いすること）せよ』と。道吾應諾す。師參堂し了わって、再び堂頭に上って、人事す。道吾却って威儀を具して、方丈の内に坐す。師纔かに近前す。道吾云く、『事有り、相借問せん。得てんや』と。師云く、『也た是れ適來の野狐精なり』とたまいて、便ち出で去る」と。

＊

○『廣燈録』［十二ノ五丈］三聖然禪師章云…便出去＝『天聖広燈録』巻一二（X78-476a）に同文が見えるが、「袜」は「袜」、「神杖」は「袖杖」に作る。また『五燈会元』巻一一（X80-224c）、『五燈厳統』巻一一（X81-28c）・『五燈全書』巻二一（X81-604a）・『教外別伝』巻八（X84-252a）・『禅苑蒙求瑤林』巻一（X87-56b）にも「到道吾。吾預知、以緋抹額、持神杖於門下立。師曰、小心祇候。吾應喏。師參堂了、再上人事。吾具威儀、方丈内坐。師纔近前。吾曰、有事相借問。得麼。師曰、也是適來野狐精。便出去」と、同様の文が見える。尚、『禅苑蒙求瑤林』では「師」は「聖」に作り、文末の「便出去」の部分に「便」の一字がない。「神杖」、「袖杖」ともに意味が不明であるが、「拄杖」のことを指すとすれば、「拄（zhǔ）」と「袖（xiù）」との混同、「神」と「袖」は誤写もしくは誤植であろうか。

④聯燈會要［八ノ十五丈］香嚴閑禪師章云、造潙山。山問。我聞汝在百丈先師處。問一答十、問十答百。此是汝聰明靈利、意解識想、生死根本。父母未生時、試道一句來看。師茫然、不能加答。遂歸寮、將平日看過底文字、從頭檢尋、無一句可將酬對。乃自嘆云、畫餅不可充饑、屡上堂頭告潙山爲説。山云、我若説似你、你已後罵我去在。

＊

『聯燈會要』［八の十五丈］「香嚴の閑禪師」の章に云く、「潙山に造る。山問う、『我聞く、汝は百丈先師の處に在りて、一を問えば十を答え、十を問えば百を答うと。此れは是れ汝、聰明靈利にして、意解識想す。生死の根本なり。父母未生の時、試みに一句を道い來れ、看ん』と。師茫然として、答えを加うる能わず。遂に寮に歸り、平日看過する底の文字を將て、從頭に檢尋するに、一句の將て酬對す可き無し。乃ち自ら嘆じて云く、『畫餅は饑に充つ可からず』と。屡しば堂頭に上りて潙山に告げて、爲に説かしむ。山云く、『我れ若し你に説似せば、你已後に我を罵り去ること在らん』と」と。

＊

○聯燈會要［八ノ十五丈］香嚴閑禪師章云…你已後罵我去在＝『聯燈会要』巻八（X79-76c）に同文が見える。

（瀧玄浩）

【四二】正堂

①一山［傳燈鈔］曰、正堂、方丈室也。

＊

一山［『傳燈鈔』］曰く、「正堂は、方丈の室なり」と。

＊

○文中書き入れにある『傳燈鈔』は、『景德傳燈録』三十巻に対する注釈書である。著者（注者）は不詳であるが、一山一寧や東明慧日の学系に属する者によると考えられている。未見。

②傳燈録［八ノ十六丈］龜洋山無了禪師章云、師、告寂瘞于正堂

＊

『傳燈録』［八の十六丈］「龜洋山の無了禪師」の章に云く、「師、寂を告げて、正堂に瘞む」と。

＊

○傳燈録［八ノ十六丈］龜洋山無了禪師章云…瘞于正堂＝『景德伝燈録』巻八に「儼然告寂、瘞于正堂」（T51-260c）とある。

③酉陽雜俎［五ノ十一丈］云、嵩山普寂禪師、潔正堂、焚香端坐。未久忽聞叩門。連云、天師一行、和尚至矣。一行入詣寂作禮。云云。

＊

『酉陽雜俎』［五の十一丈］に云く、「嵩山の普寂禪師、正堂を潔め、香を焚きて端坐す。未だ久しからずして、忽ち（＝ふと）門を叩くを聞く。連りに云く、『天師の一行和尚に

至る』と。一行入りて寂（＝普寂）に詣りて作禮す。云云」と。

＊

○酉陽雜俎［五ノ十一丈］云…一行入詣寂作禮。云云＝『酉陽雜俎』巻五（四庫全書・子部・小説家類 p.12）に同文が見える。

（瀧玄浩）

【四三】衣鉢閣

①忠曰、藏住持衣財之處。此方所謂眠藏也。衣鉢義見于金寶類。

＊

忠曰く、「住持の衣財を藏むるの處。此方に所謂る眠藏なり。衣鉢の義は金寶類に見ゆ」と。

＊

○文中に述べられている「金宝類」という項目は、『禅林象器箋』には見えない。ただし、第二〇巻「銭財類」に【一六八六】「衣鉢」（イフあるいはエハツと読んでいる）がある。

②校定清規［敕修鈔五ノ四十二丈引。又鈔一ノ廿二丈忞公禅苑総要説同之］入院視篆云、住持看封。預都寺開封、呈過住持。就状先押字、次書日子。行者使印於日子處、状係都寺收。印子隨封押、歸衣鉢閣、付與衣鉢侍者、或親隨行者。

＊

『校定清規』［『敕修鈔』五の四十二丈に引く。又『鈔』一の廿二丈忞公禅苑総要説これと同じ］の「入院の視篆」に云く、「住持、封を看る。預め都寺、封を開て、住持に呈過す。状に就きて先ず押字し、次に日子（＝日付）を書す。行者、印を日子の處に使い、状は都寺の收むるに係る。印子は隨いて封押して、衣鉢閣に歸して、衣鉢侍者、或いは親隨の行者に付與す」と。

＊

○校定清規［敕修鈔五ノ四十二丈引。又鈔一ノ廿二丈忞公禅苑総要説同之］入院視篆云…或親隨行者＝『叢林校定清規総要』巻上（X63-597a）に同じ文章が見える。ただし、「預都寺開封」が「頭都寺開封」となっている。また、無著禅師の書き入れの通り、『勅修百丈清規抄』（駒澤大学電子貴重書庫）巻五の四十二丁表に「校定曰、住持看封。預都寺開封、呈過住持。就状先押字、次書日子。行者使印於日子処、状係都寺收。印子隨封押、帰衣鉢閣、付与衣鉢侍者、或親隨行者。云々」とあり、『勅修百丈清規抄』巻一の二十二丁表に「斉公禅苑曰、住持就状先押字、次書日子。行者使印於上、都寺収印、隨封押入衣鉢閣」とある。

③備用清規侍者云、密菴和尚赴靈隱。如侍者掌衣鉢閣。

＊

『備用清規』の「侍者」に云く、「密菴和尚、靈隱に赴く。如侍者、衣鉢閣を掌る」と。

＊

○備用清規侍者云…如侍者掌衣鉢閣＝本文には巻数・丁数の書き入れがないが、『禅林備用清規』巻七に「密庵和尚住華藏。松源岳司藏鑰。脾疾赴衆缺典。庵叱之。後赴霊隱、不得侍行。如侍者掌衣鉢

閣」（X63-647c）とある。

④又有閣作閣者。　校定清規［上ノ十五丈］新住持入院云、印子隨即封押、歸衣鉢閣、付與衣鉢侍者。又［十八丈］云、檢舊例、下嚫衣鉢閣貼嚫。　又［廿九丈］法嗣師忌辰云、就衣鉢閣、支羞設錢。

＊

又た閣を閣に作る者有り。　『校定清規』［上の十五丈］「新住持入院」に云く、「印子は隨いて即ち封押し、衣鉢閣に歸して、衣鉢侍者に付與す」と。又た［十八丈］云く、「舊例を檢じて、下嚫（＝施物を仏前に供えること）は、衣鉢閣の貼嚫（＝金銭による布施）なり」と。又た［廿九丈］「法嗣の師の忌辰」に云く、「衣鉢閣に就きて、羞設錢を支す」と。

＊

○校定清規［上ノ十五丈］新住持入院云…付與衣鉢侍者＝『叢林校定清規総要』巻上（X63-597a）に同じ文が見える。
○又［十八丈］云…下嚫衣鉢閣貼嚫＝『叢林校定清規総要』巻上（X63-598b）に同じ文が見える。
○又［廿九丈］法嗣師忌辰云…支羞設錢＝『叢林校定清規総要』巻下（X63-615a）に同じ文が見える。

（冨増健太郎）

【四四】寢堂

①住持［敕修鈔一ノ十四丈］正寢之堂也。　忠曰、蓋擬世之路寢。周禮［六巻八丈］註云、六寢者、路寢一、小寢五。玉藻曰、朝辨色始入。君日出而視朝、退適路寢。聽政、使人視大夫、大夫退、然後適小寢。釋服。是路寢以治事、小寢以時燕息焉。　疏云、路大也。人君所居、皆曰路。

＊

住持［『敕修鈔』一の十四丈］の正寢の堂なり。忠曰く、「蓋し世の路寢（＝天子の正殿）に擬す。『周禮』［六巻八丈］の註に云く、『六寢は、路寢一つ、小寢五つなり。『玉藻』に曰く、「朝に色を辨じて始めて入る。君、日出て朝を視、退いて路寢に適く。政を聽き、人をして大夫を視しめ、大夫退きて、然る後、小寢に適き、服を釋く」と。是れ路寢は以て事を治め、小寢は以て時に燕息するなり』と。疏に云く、『路は大なり。人君の居る所、皆な路と曰う』と」と。

＊

○住持［敕修鈔一ノ十四丈］正寢之堂也＝『勅修百丈清規抄』巻一の十四丁（駒澤大学電子貴重書庫）に同じ文が見える。
○周禮［六巻八丈］註云…皆曰路＝『周禮注疏』（『十三経注疏』（四）中華書局 p.1110-1111）に同じ文が見える。

②竺仙仙和尚宗門千字文［十九丈］自註云、寢廟者、前曰廟後曰寢。今之曰方丈者、謂之寢室、大者曰寢堂。室則幽奥深邃。堂乃堂堂明顯也。今法堂者、正謂之堂、佛殿可曰廟也。

＊

竺仙の仙和尚『宗門千字文』［十九丈］の「自註」に云く、「寢廟とは、前を廟と曰い、後えを寢と曰う。今の方丈と曰うは、之を寢室と謂い、大なる者を寢堂と曰う。室は則ち

幽奥深邃なり。堂は乃ち堂堂として明顯なり。今法堂は、正に之を堂と謂う。佛殿を廟と曰う可し」と。

＊

○竺仙仙和尚宗門千字文［十九丈］自註云…佛殿可曰廟也＝『宗門千字文』（『国訳禅宗叢書』第二輯第一巻・書き下し p.401・原文 p.448）に同じ文が見える。

③ 舊説［太岳禾上百丈清規冠注。碧古鈔九ノ二十一丈］曰、凡禪刹堂舍位置、法堂後有茶堂。接茶堂而有寢堂。連寢堂而有方丈。蓋寢堂者、住持講禮之處、今日本禪院、於丈室前、置禮間者、是也。

＊

舊説［太岳禾上『百丈清規冠注』。『碧古鈔』九の二十一丈］に曰く、「凡そ禪刹堂舍の位置は、法堂の後えに茶堂有り。茶堂に接して寢堂有り。寢堂に連ねて方丈有り。蓋し寢堂は、住持講禮の處、今、日本の禪院、丈室の前に於いて、禮の間を置くは、是れなり」と。

＊

○舊説［太岳禾上百丈清規冠注。碧古鈔九ノ二十一丈］曰…是也＝太岳禾上『百丈清規冠注』は未詳。『碧岩集古鈔』は、無著禪師の書き入れ通り、巻九の二十一丁表に「寢堂住持平居地也。茶堂必在法堂後寢堂前也。」（抄物小系18・VI、高羽五郎・一九八三）とある。

④ 忠曰、依此説。則日本方丈前、不別建寢堂。以方丈前一間、名禮間、充寢堂也。

＊

忠曰く、「此の説に依らば、則ち日本は方丈の前に、別に寢堂を建て、方丈前の一間を以て、禮の間と名づけ、寢堂に充つるなり」と。

⑤ 敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、上堂、住持於鼓初鳴、出寢堂坐。

＊

『敕修清規』［上一の十九丈］「聖節」に云く、「上堂に、住持は鼓の初鳴に於いて、寢堂に出でて坐す」と。

＊

○敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云…出寢堂坐＝『勅修百丈清規』巻一（T48-1113a）に同じ文章が見える。

⑥ 又小參［上二ノ二丈］云、小參初無定所。看衆多少、或就寢堂。或就法堂。

＊

又た「小參」［上二の二丈］に云く、「小參は初より定所無し。衆の多少を看て、或いは寢堂に就いてし、或いは法堂に就いてす」と。

＊

○又小參［上二ノ二丈］云…或就法堂＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1119c）に同じ文章が見える。また、「法堂」は『象器箋』の【三六】に立項されている。

⑦ 又遊方參請云、凡寢堂中、必設參椅、示尊師道也。新到相看、住持當居中位。令其挿香展禮、側坐受茶。於禮無損。

＊

又た「遊方參請」に云く、「凡そ寢堂の中に、必ず參椅を設けることは、師道を尊ぶことを示すなり。新到の相看ならば、住持當に中位に居るべし。其れをして挿香展禮、側坐して茶を受け、禮に於いて損なうこと無からしむ」と。

＊

○又遊方參請云…於禮無損＝『禅林象器箋』に典拠の巻数・丁数の書き込みがないが、『勅修百丈清規』巻五（T48-1140c）に同じ文章が見える。

（冨増健太郎）

【四五】輪藏

①設機輪、運轉法藏也。傳大士創造。

＊

機輪（＝回転するための仕掛け）を設け、法藏を運轉するなり。傳大士、創めて造る。

○傳大士（四九七～五六九）とは、浙江省義烏県の人。名は翕、姓は傅。「善慧大士」「叢林大士」「東陽大士」とも称せられる。達磨に会い、その指示に従って松山頂に棲んだ。その時「空手にして鋤頭を把り、歩行して水牛に騎る、人橋上より過ぎれば、橋流れて水は流れず。（空手把鋤頭、歩行騎水牛、人從橋上過、橋流水不流）」を頌した。昼は傭作夜は行道していたが、大通二年（五二八）無遮大法会を行い、同六年、書を梁高祖に呈し、自ら双林樹下当来解脱善慧大士といった。武帝に召されて問答また講経、大同五年（五三九）には松山下に双林寺を創立した。また大蔵閲覧の便を計り、一柱八面の輪蔵を建てたので、後世経蔵に傳大士と普建・普成二子を安置するようになった。（『禅学大辞典』p.1079 参照）尚、「傳大士」は『禅林象器箋』の【二四八】に立項されている。また、「普建・普成」【二四九】も参照のこと。

②釋門正統塔廟志〔三ノ三十七丈〕云、復次諸方梵刹、立藏殿者、初梁朝善慧大士。〈傳翕玄風〉愍諸世人、雖於此道、頗知信向、然於贖命法寶、或有男女生來、不識字者。或識字、而爲他縁逼迫、不暇披閲者。大士爲是之故、特設便方、創成轉輪之藏、令信心者、推之一匝、則與看讀同功。故其自誓曰、有登吾藏門者、生生不失人身。又能旋轉不計數者、是人所獲功徳。即與誦經無異。今稱龍宮海藏者。乃約龍樹入海而言。又稱天宮寶藏者、乃附慈氏居處而説。然一切如來、只令口誦心惟、轉我法輪、饒益羣品。今大士、特興慈悲、在在處處、創此機輪、運轉不息。欲俾一切含靈、同霑利益盡未來際、成等正覺。大哉神力、詎可思議耶。先民所謂、智者創物、大士其有焉。若先諸處、俱奉大士寶像於藏殿前。首頂道冠、肩披釋服、足躡儒履。謂之和會三家。佛印禪師〈了元〉爲王荊公贊其所收畫像曰、道冠儒履釋加沙、和會三家作一家。忘却率陀天上路、雙林癡坐待龍華。又列八大神將、運轉其輪。謂天龍八部也。又立保境將軍助香火之奉、謂是日烏傷宰也。茲三者、攷録無文。〈録六巻、弟子結集、進士樓穎修定。〉不能自決。

＊

『釋門正統』「塔廟志」〔三の三十七丈〕に云く、「復た次に諸方の梵刹に、藏殿を立つる者は、初め梁朝の善慧大士なり〈傳翕玄風（＝傳大士の別称）〉。諸もろの世人の、此の道に於いて、頗る信向することを知ると雖も、然れども贖命の法寶に於いて、或いは男女、生来、字を識らざる者有り、或いは字を識れども、他縁の為に逼迫せられ、披閲（＝書

物などを開いてよく見ること）するに暇あらざる者を愍れみて、大士、是れが為の故に、特に便方（＝物事をするのに便利な方法）を設けて、轉輪の藏を創成し、信心の者をして、之を推すこと一匝（＝ひとめぐり・一周）すれば、則ち看讀（＝経文を黙読すること）すると功を同じくせしむ。故に其の自誓（＝自分で自分に誓うこと）に曰く、『吾が藏門に登る者有らば、生生、人身を失わず。又た能く旋転すること、数を計らざる者は、是の人の獲る所の功徳、即ち誦経と異なること無し』と。今ま『龍宮（＝竜王の宮殿）海藏』と称する者は、乃ち龍樹の海に入ることに約して言う。又た、『天宮（＝帝釈天の支配する神々の世界）寶藏』と称する者は、乃ち慈氏（＝弥勒菩薩）の居処に附して説く。然れども一切の如來、只だ口に誦し心に惟いて、我が法輪を轉じて羣品（＝さまざまな衆生）を饒益せしむ。今ま大士、特に慈悲を興し、在在處處、此の機輪を創めて運轉して息まず、一切の含霊をして、同じく利益に霑い、未来際を尽くして、等正覺を成ぜしめんと欲す。大いなるかな神力、詎ぞ思議すべけんや。先民の所謂る『智者は物を創む』、大士其れ焉有り。若し夫れ諸処俱に大士の寶像を藏殿の前に奉じ、首に道冠を頂き、肩に釋服を披、足に儒履を躡む。之れを『和會三家』と謂う。佛印禪師（了元）（＝雲門宗仏印了元・一〇三二～一〇九八）、王荊公（＝王安石）の為に其の収むる所の画像に贊して曰く、『道冠・儒履・釋加沙（袈裟）、三家を和會して一家と作す。率陀天上の路を忘却して、雙林に癡坐（＝むなしく坐っているだけの坐禅）して龍華を待つ』と。又た、八大神将を列ねて、其の輪を運轉す。天龍八部を謂うなり。又た、保境將軍を立てて、香火の奉を助け、是れ在日（当時）の烏傷の宰（長官）を謂うなり。茲の三の者は、録を攷うるに文なし。（『録』六巻、弟子結集し、進士樓穎修定す。）自ら決すること能わず」と。

＊

○釋門正統塔廟志［三ノ三十七丈］云…不能自決＝『釈門正統』巻三「塔廟志」（X75-297b）に全く同文が見られる。但し、文末の注の「録六巻、弟子結集、進士樓穎修定」の「樓」が「桜」となっている。『録』六巻とは、樓穎の序文を付した『善慧大士語録』のことを指すと考えられるが、現存する『善慧大士語録』は四巻本である。その四巻本『善慧大士語録』の巻末に付録された『潜溪別集』第七「題善慧大士録後」という文章の引用中に、「唐国子進士樓穎所撰『善慧大士録』八巻」（X69-129c）とあることから「八巻」本が存したことが知られるが、「六巻」本の存在は知られていない。

③佛祖統紀［卌四ノ二丈］云、梁傅大士、愍世人多故、不暇誦經。及不識字、乃於雙林道場、創轉輪藏、以奉經巻、其誓有曰。有三登吾藏門者、生生不失人身。有能信心、推之一匝、則與讀誦一大藏經、正等無異。藏前相承列大士像。備儒道釋冠服之相者、以大士常作此状也。列八大神將者、八部天神也。保境將軍者。在日烏傷宰。發誓護藏者也。　注云、義烏縣、舊名烏傷。

＊

『佛祖統紀』［卌四の二丈］に云く、「梁の傅大士、卌人の多故（＝困難の多い事）にして、経を誦するに暇あらず、及び字を識らざるを愍みて、乃ち雙林道場に於いて轉輪藏を創め、以て經巻を奉ず。その誓に曰えることあり、『三たび吾が藏門に登る者有らば、生生、人身を失わず。能く信心有りて、之を推すこと一匝すれば、則ち一大藏経を読誦すると、正等にして異なること無からん』と。藏の前に相承して大士の像を列し、儒・道・釈の冠服の相を備うる者は、大士常に此の状を作すを以てなり。八大神將を列する者は、八部の天神なり。保境將軍とは、在日の烏傷の宰なり。誓を発して藏を護る者な

り」と。　註に云く、「義烏縣（浙江省）舊とは、烏傷と名づく」と。

＊

○佛祖統紀［卅四ノ二丈］云…發誓護藏者也＝『仏祖統紀』巻三三「法門光顕志第十六」（T49-318c）に同文が見られるが、原文「以大士常作此状也」と「列八大神将者尚」の間に、「仏印為王荊公讃其像曰、道冠儒履釈袈裟、和会三家作一家。忘却率陀天上路、双林痴坐待龍華（佛印、王荊公の為に其の像に讃して曰く、『道冠儒履釋袈裟、三家を和會し一家と作す。率陀天上の路を忘却して、雙林に癡坐して龍華を待つ』と）」という三十八字の注が入っている。これは、②の文中に既出の為、省いたと考えられる。また、文中最後の「注云、義烏県、旧名烏傷」の部分は、『佛祖統紀』（T49-318c）では「義烏県、旧名烏傷、詳見傳大士伝」となっている。尚、「八大神將」は『禅林象器箋』の【二五〇】に立項されている。

④善慧大士録［一巻廿五丈○稽古略二巻卅五丈引全同○神僧伝五巻一丈引全同］云、大士在日、常以經目繁多、人或不能遍閲。乃就山中、建大層龕、一柱八面、實以諸經、運行不礙。謂之輪藏。仍有願言、登吾藏門者、生生卅卅、不失人身。從勸卅人。有發菩提心者。志誠竭力。能推輪藏、不計轉數。是人即與持誦諸經功徳無異。隨其願心、皆獲饒益。今天下所建輪藏、皆設大士像、實始於此。

＊

『善慧大士録』［一巻廿五丈○『稽古略』二巻卅五丈、引きて全く同じ○『神僧伝』五巻一丈、引きて全く同じ］に云く、「大士在日、常に経目の繁多を以て、人或いは遍閲すること能わざれば、乃ち山中に就いて大層龕を建て、一柱八面、實るに諸經を以てし、運行して礙ず、之を輪藏と謂う。仍って願言あり、『吾が藏門に登る者は、生生卅卅、人身を失わず。從って卅人を勸む、發菩提心の者有りて、志誠に力を竭くし、能く輪藏を推して、轉數を計らざれば、是の人即ち、諸経を持誦すると功徳異なること無けん。その願心に随いて、皆な饒益を獲ん』と。今ま天下に建つる所の輪藏、皆な大士像を設くるは、實に此こに始まる」と。

＊

○善慧大士録［一巻廿五丈○稽古略二巻卅五丈引全同○神僧伝五巻一丈引全同］云…實始於此＝『善慧大士録』巻一（X69-109c）、『釈氏稽古略』巻二「高祖武帝」（T49-795b）にほぼ同文が見られる。また、『神僧伝』巻四「傅弘」（T50-975b）に同意の文が見られる。

⑤白氏文集［七十ノ廿三丈］蘇州南禪院千佛堂轉輪經藏石記云、堂之中、上蓋下藏。蓋之間、輪九層佛千龕。彩繪金碧以爲飾、環蓋懸鏡、六十有二。藏八面。面二門、丹漆銅鍇、以爲固。環藏敷座、六十有四。藏之内、轉以輪、止以柅。經函二百五十有六、經巻五千五十有八。

＊

『白氏文集』［七十の廿三丈］「蘇州の南禪院千佛堂の轉輪經藏の石記」に云く、「堂の中、上は蓋、下は藏なり。蓋の間に、輪九層・佛千龕あり、彩繪金碧を以て飾と爲し、蓋を環りて鏡を懸くること六十有二。藏八面なり。面ごとに二門、丹漆（＝あかうるし）銅鍇、以て固めと爲せり。藏を環りて座を敷くこと六十有四。藏の内、轉ずるに輪を以てし、止むるに柅を以てす。經の函、二百五十有六、經の巻、五千五十有八なり」と。

＊

○白氏文集［七十ノ廿三丈］蘇州南禪院千佛堂轉輪經藏石記云…經巻五千五十有八＝『白氏長慶集』巻

六一「蘇州南禅院千佛堂轉輪經藏石記」（『四部叢刊』集部・p.65~66）に同文が見られる。『白氏文集』とは、中国唐の文学者である白居易（七七二～八四六）の詩文集であり、全七五巻とされるが、現存しているのは七一巻のみである。また、『白氏文集』は前後集に分かれており、長慶四年（八二四）に元稹（七七九～八三一）が編纂した五〇巻を『白氏長慶集』、会昌五年（八四五）に『白氏長慶集』以後に編纂した二五巻を『白氏文集』と称する。この両者を合わせて『白氏文集』と総称する。内容は、詩を「諷諭」「閑適」「感傷」「律詩」に分類し、そのあとに「賦」と「散文」を収めている。日本には平安時代に伝えられ、『文集』と呼ばれ親しまれた。（『国史大辞典』巻一一・p.502~503）

⑥護法録［五ノ七丈］日本瑞龍山重建轉法輪藏禪寺記云、我佛如來、其正法之流通者、有三藏焉。一曰修多羅藏。二曰阿毘曇藏。三曰毘尼藏。惟此三藏、諄諄化導、使一切有情、滅妄趨眞。誠昏衢之日月。苦海之舟航也。琅函玉軸、多至五千四百四十八卷。衆生根鈍、莫能融貫。善慧大士、以方便力、造爲毘盧寶藏、函經其中。一運轉間、則與受持讀誦。等無有異。

＊

『護法録』［五の七丈］「日本瑞龍山、重ねて轉法輪藏禪寺を建つるの記」に云く、「我が佛如來、其の正法の流通する者に、三藏あり。一に曰く修多羅藏、二に曰く阿毘曇藏、三に曰く毘尼藏。惟だ此の三藏、諄諄（＝繰り返し教え諭すさま）として化導し、一切有情をして妄を滅し真に趨むかしむ。誠に昏衢（＝救いのない世の中）の日月、苦海の舟航なり。琅函玉軸、多くして五千四百四十八巻に至る。衆生根鈍にして、能く融貫すること莫し。善慧大士、方便力を以て、毘盧宝藏を造爲（＝作り上げる）して、經をその中に函る。一たび運轉する間、則ち受持讀誦と等しくして、異なり有ること無し」と。

＊

○護法録［五ノ七丈］日本瑞龍山重建轉法輪藏禪寺記云…等無有異＝『護法録』巻五「日本瑞龍山重建轉法輪藏禪寺記」（J21-648c）に同文が見られる。『護法録』全一〇巻は、元末から明初の居士である宋濂（一三一〇～一三八一）の文集より、雲棲袾宏（一五三五～一六一五）が仏教関係の作品を選び、翰林院編集虞山の銭謙益（一五八二～一六六四）が訂正したもの。万暦四十四年（一六一六）序刊。巻一～三には塔銘・碑銘、巻四には碑文、巻五には記、巻六～八には序、巻九には、誥・賛・銘・頌・偈・説、巻一〇には、題跋が収められている（『禅学』p.358 ～ 359）。

⑦　已下辨輪藏字義。

＊

已下、輪藏の字義を辨ず。

⑧北磵文集［三ノ五丈］金粟洞天三教藏記云、金粟洞天在泉南勝處。住山人凝雲黄去華、總三家之書于山中、寘諸大輪藏。所謂藏也者、藏也。涵藏之謂也。

＊

『北磵文集』［三の五丈］「金粟洞天の三教藏の記」に云く、「金粟洞天は泉南（＝福建省泉州の南）の勝處にあり。住山の人、凝雲黄去華、三家の書を山中に總べて、諸れを大輪藏に寘く。所謂藏とは、藏なり、涵藏の謂なり」と。

＊

○北磵文集［三ノ五丈］金粟洞天三教藏記云…涵藏之謂也＝應安七年（一三七四）刊行『北磵詩文集』（『北磵全集』とも）のうち、『北磵文集』巻三・三丁表（国立国会図書館デジタル化資料・ここでは『北澗詩集』となっている）の「泉州金粟洞天三教藏記」に同文が見られる。北磵とは、北磵居簡（一一六四～一二四六・臨済宗大慧派）のことで、『北磵文集』のほか、『北磵和尚語録』『北磵詩集』『北磵外集』等

が現存し、日本の五山文学に大きな影響を与えた。

⑨又澄心院藏記［三ノ廿丈］云、佛所説經、一味之雨、三草一木、所澤各異。根差性殊、豈雨之咎。車軸之滴、匪海莫容。大心溟渤、乃克堪受、涵攝其義、曰藏、運行其説、曰輪。舍藏無以蘊其奥。非輪無以發其用。第二義門、特出巧思、制成八觚。八窻玲瓏、面面層室、以貯琅函。以絢金碧、以擬覩史大莊嚴藏、樞正厥中、以靜以應、一機潛發、飄風疾旋、若翻地軸、使海水立。盪胸決眥、倏爾如砥。日此權道、會心以境。

＊

又た「澄心院の藏記」［三の廿丈］に云く、「佛、所説の經、一味の雨、三草一木、澤すところ各異なり。根差い性殊なるは、豈に雨の咎ならんや。車軸の滴、海に匪ざれば容るること莫し。大心溟渤（＝果てしなく広い海）、乃ち克く受くるに堪え、其の義を涵攝するを、藏と曰い、其の説を運行するを、輪と曰う。藏を舍てては以てその奥を蘊むこと無し。輪に非ざれば以て其の用を發すること無し。第二義門、特に巧思（＝巧みな考え）を出し、制して八觚を成す。八窻玲瓏、面面層室、以て琅函を貯ふ。以て金碧に絢き、以て覩史（＝覩史多天のこと。兜卒天と同意。）の大莊厳藏に擬す。樞、厥の中に正しく、以て靜かに以て應じ、一機潛かに發すれば、飄風疾く旋り、地軸を翻するが若く、海水をして立たしむ。胸を盪かし眥を決ぐり、倏爾（＝たちまち）として砥（砥柱）の如し。曰く、此れ權道（＝臨機応変な処置）にして、心に會するに境を以てす」と。

＊

○又澄心院藏記［三ノ廿丈］云…會心以境＝『北礀文集』巻三・十二丁裏～十三丁表（国立国会図書館デジタル化資料）に同文が見える。典籍の詳細については、上記⑧を参照のこと。

⑩釋氏要覽［卅丈］云、經律論、謂之三藏。又佛藏、菩薩藏、聲聞藏、名三藏。藏者攝也。謂攝人攝法故。　又［卅一丈］云、八藏、菩薩處胎經云、胎化藏、中陰藏、摩訶衍藏、戒律藏、十住菩薩藏、雜藏、金剛藏、佛藏、是爲釋迦文佛經法具足矣。若今安置經律論處、名藏者、梵云倶舍。此言藏、謂庫府之總稱也。

＊

『釋氏要覽』［卅丈］に云く、「經・律・論、之を三藏と謂う。又た佛藏、菩薩藏、声聞藏を三藏と名づく。藏は攝なり。謂えらく、人を攝し法を攝するが故なり」と。　又た［卅一丈］云く、「八藏とは、『菩薩處胎經』に云く、『胎化藏、中陰藏、摩訶衍藏、戒律藏、十住菩薩藏、雜藏、金剛藏、佛藏、是れを釋迦文佛の經法具足すと爲す』と。若し今、經律論を安置する處の藏と名づくる者は、梵には倶舍と云う。此こに藏と言うは、謂えらく、庫府（＝倉庫）の總稱なり」と。

＊

○釋氏要覽［卅丈］云…謂攝人攝法故＝『釈氏要覧』巻二「三藏」（T54-285b）に全く同文が見られる。『釈氏要覧』とは、三巻・宋の道誠の編。天禧四年（一〇二〇）刊。上巻に姓氏・称謂・居処・出家・師資・剃髪・法衣・戒法・中食の九篇を、中・下巻も九巻ずつ、総じて二七篇に分つ。各篇の下に仏教の故事、・名目等を集め、さらにその下に経典・祖録等を引き注釈を施したもので、仏教の故事成語辞典ともいうべきもの（『禅学』p.469）。

○又［卅一丈］云…謂庫府之總稱也＝『釈氏要覧』巻二「八藏」（T54-285c）に全く同文が見られる。また、『菩薩從兜術天降神母胎説広普経』巻七「菩薩処胎経出経品第三十八」（T12-1058b）に「胎化藏を第一と為し、中陰藏を第二、摩訶衍、方等藏を第三、戒律藏を第四、十住菩薩藏を第五、雜藏

を第六、金剛蔵を第七、仏蔵を第八とし、是れを釈迦文仏の経法具足と為すなり。（胎化蔵為第一、中陰蔵第二、摩訶衍、方等蔵第三、戒律蔵第四、十住菩薩蔵第五、雑蔵第六、金剛蔵第七、仏蔵第八、是為釈迦文仏経法具足矣。）」とあり、同意の文章が見られる。

⑪

文苑英華［八百二十ノ三丈］譚銖廬州明教寺轉關經藏記云。經心也。藏藏也。如心之含藏萬法者也。故曰、一心生萬法、萬法由一心。其動靜弛張在我、而寧窮其義。畧舉其大、斯藏也、本於一心。靈通無礙、動用自在。靜則萬法空寂、動則三界彌綸虛僞。唯心所造作、其在斯乎。周廻八角、角覺也。佛以眼爲八邪耳爲八患、鼻爲八苦、舌爲八難、廻八邪爲八覺、廻八患爲八解脱、廻八苦爲八安樂、廻八難爲八王子、指四八爲三十二相。由此八關、返邪歸正。成佛之境矣。止則寂然無用。引則轉而不窮。動雖有聲。靜乃無跡。〈云云。〉讚曰、修多羅教、函于藏輪、周廻八角、正道斯陳。動用一心。爲萬法因。忘因無法、得本歸眞。鐫于金石、用導迷人。

＊

『文苑英華』［八百二十の三丈］「譚銖廬州明教寺轉關經藏記」に云く、「經は心なり。藏は藏なり。心の萬法を含藏するが如くなる者なり。故に曰く、『一心、萬法生じ、萬法、一心に由る。其の動靜弛張、我れに在るも、寧ぞ其の義を窮めんや。畧して其の大を舉せば、斯の藏や、一心に本づく。靈通（＝相互に感応して通じ合うこと）無礙（＝何者にもとらわれない）にして、動用自在なり。靜なるときは則ち萬法空寂、動なるときは則ち三界彌綸（＝全体に満ちゆきわたること）虛僞なり。唯心の造作する所、其れ斯に在るか』と。周廻八角、角は覺なり。佛、眼を以て八邪と爲し、耳を八患と爲し、鼻を八苦と爲し、舌を八難と爲し、八邪を廻らして八覺と爲し、八患を廻らして八解脱と爲し、八苦を廻らして八安樂と爲し、八難を廻らして八王子と爲し、四八を指して三十二相と爲す。此の八關に由って、邪を返して正に歸するは、成佛の境なり。止むれば則ち寂然無用、引かば則ち轉じて窮まらず。動かば聲有りといえども、靜なれば乃ち跡無し。〈云云。〉」と。讚に曰く、「修多羅の教、藏輪に函れ、周廻八角、正道斯こに陳す。動用一心。萬法の因爲り。因を忘じて法無く、本を得て眞に歸す。金石に鐫って、用て迷人を導く」と。

＊

○文苑英華［八百二十ノ三丈］譚銖廬州明教寺轉關經藏記云…用導迷人＝『文苑英華』巻八二〇「廬州明教寺転関経蔵記」（四庫全書・p.4 ～ 5）にほぼ同文が見られる。『文苑英華』とは、中国の北宋代・太平興国七年（九八二）から雍熙四年（九八七）にかけて、宋代の太宗黄帝の勅命をうけて李昉、扈蒙、徐鉉、宋白ら十七名が編纂したもの。全一〇〇〇巻、目録五〇巻に及ぶ詩文集で、『太平広記』『太平御覧』『冊府元亀』と合わせて「宋四大書」と称せられる。その体裁は、梁代の昭明太子撰の六朝総集『文選』に倣い、梁末から唐末に至るまでの約二千二百人、二万編近くの詩文を中心に採録し、それらを「賦・詩・歌行・詞・辞・制・勅・策・書・序・頌・讃・記・祭文・哀詞」など三十八類（五十五類とも）に分類したものである。その詩文の九割が唐代のものであるが、採録された文献の多くが現存しておらず、唐代のものを今に伝えるという意味においては非常に重要な書物と言える。また、短期間の内に多人数で編纂した為、誤字・脱字などが無数にあるとされる。しかし、後の明・清代に編纂された『古詩紀』『全唐詩』はほぼ本書に拠って再録されるなど、現存する多くの詩文集の校訂にも用いられている。（『国史大辞典』巻一二・p.382）

⑫

忠曰、記中銖自謂、常學釋氏。然眼爲八邪已下、未知何據。

＊

忠曰く、「記中に銖（＝譚銖）自から謂く、『常に釋氏を學ぶ。然れども「眼を八邪と爲す」已下、いまだ何に據るか知らず』と」と。

＊

○『文苑英華』「廬州明教寺轉關經藏記」の中に、「常學釋氏…未知何據」の一文は確認出来なかった。

⑬法輪者、釋氏要覽［中ノ卅一丈］云、大毘婆沙論云、何名法輪。答是法所成故、法爲自性。故名法輪。如世間呼金輪等、輪是動轉不住義。捨此離彼義。能伏怨敵義。又圓滿義。謂轂輻輞三事具足故、輪體法、即八聖道支也。〈云云。〉

＊

法輪とは、『釋氏要覽』［中の卅一丈］に云く、「『大毘婆沙論』に云く、『何をか法輪と名づくる』と。答う、『是れ法所成の故に、法を自性と爲す。故に法輪と名づく』と。世間に金輪等と呼ぶが如きは、輪は是れ動轉不住の義、此を捨て彼を離るる義、能く怨敵伏すの義、又た圓滿の義なり。謂えらく、轂・輻・輞の三事を具足するが故に。輪の體法は、即ち八聖道支なり。〈云云。〉」と。

＊

○釋氏要覽［中ノ卅一丈］云…即八聖道支也＝『釈氏要覧』巻二「法輪」（T54-285c）に同文が見える。

○大毘婆沙論云…故名法輪＝『阿毘達磨大毘婆沙論』巻一八二「定蘊第七中不還納息第四之九」（T27-911b）に「問う、『何の故に法輪と名づく』と。答う、『此の輪は、是れ法所成の法を自性と為すが故に法輪と名づく』と（問、何故名法輪。答、此輪是法所成法為自性、故名法輪）」とあり、同意の文章が見られる。

⑭鐔津文集［十二ノ七丈］崇壽禪院輪轉大藏記云、夫轉輪藏者、非佛之制度。乃行乎梁之異人傳翕大士者。實取乎轉法輪之義耳。其意欲人皆預於法也。法也者生靈之大本、諸佛之妙道者也。諸佛以是而大明、羣生以是而大昧。聖賢乃推己之明、而正人之昧。故三藏之取諭者、諭於此也。五乘之所歸者、歸於此也。然其理幽微、其義廣博。殆非衆人槩然而輒得。故益其藏而輪之。姑使乎扶輪而轉藏者。欲其槩衆普得漸染佛法。而預其勝縁。則於道其庶幾乎。是亦至人攝化羣生之一端耳。其意遠且大矣。

＊

『鐔津文集』［十二の七丈］「崇壽禪院輪轉大藏の記」に云く、「夫れ轉輪藏は、佛の制度に非ず。乃ち梁の異人傳翕大士より行わるる者なり。實に轉法輪の義に取るのみ。其の意、人皆な法に預からんことを欲するなり。法なる者は、生靈の大本、諸佛の妙道なる者なり。諸佛、是れを以て大いに明らめ、羣生、是れを以て大いに昧し。聖賢乃ち己の明を推して、人の昧きを正す。故に三藏の諭えを取る者、此こに諭うるなり。五乘に歸す所の者、此こに歸するなり。然れども其の理、幽微にして、其の義、廣博なり。殆んど衆人槩然（＝悲しみに心が乱れるさま）として輒すく得るに非ず。故に其の藏にして之れを輪することを益す。姑く輪を扶けて藏を轉ぜしむる者は、其の槩衆普く佛法に漸染して、其の勝縁に預ることを得んと欲せば、則ち道に於いて其れ庶幾からんか。是れ亦た至人、羣生を攝化するの一端なるのみ。其の意遠くして且つ大なり」と。

＊

○鐔津文集［十二ノ七丈］崇壽禪院輪轉輪大藏記云…其意遠且大矣＝『鐔津文集』巻一二「無為軍崇寿禪院転輪大蔵記」（T52-711b）に同文が見られる。『鐔津文集』は、一九巻、目録等一巻。仏日契嵩（一

○○七～一○七二）撰。宋、契嵩の遺文の集録。著者は藤州鐔津（広西省梧州）出身であるからこの書名を用う。本書は契嵩の没後、南宋紹興四年（一一三四）に懐悟の編集になる。巻首に目録と契嵩の行業記をのせ、第一巻輔教篇上に原教、勧書并序共四篇、第二巻輔教篇中に広原教並序共二六篇、また第一九巻は付録諸師著述にして、懐悟の序等を載せている。版を重ねること二○余版におよび、明の永楽八年（一四一○）にも重刊された（『禅学』p.837）。

⑮備用清規［一ノ五丈］藏殿祝聖諷經云、住持領衆、繞藏行道三匝、以表法輪三轉。

＊

『備用清規』［一の五丈］「藏殿祝聖諷經」に云く、「住持、衆を領して、藏を繞りて行道すること三匝、以て法輪三轉を表す」と。

＊

○備用清規［一ノ五丈］藏殿祝聖諷經云…以表法輪三轉＝『禅林備用清規』巻一「藏殿祝聖諷經」（X63-623c）に同文が見られる。『禅林備用清規』とは、『至大清規』、『沢山清規』とも称せられ、至大四年（一三一一）に廬山東林の沢山一咸（＝臨済宗楊岐派・岐松源崇岳下三世・生没年不詳）の編で完成した。従来の禅宗清規の繁を改め、日用に備えんとしたもの。尚、『禅林象器箋』に【三六五】「住持」、【六三六】「行道」がそれぞれ立項されている。

⑯法輪三轉者、示勸證也。　俱舍論［頌疏廿四ノ十六丈］［本論廿四ノ十八丈］云、云何三轉十二行相。此苦聖諦。此應徧知。此已徧知。是名三轉。即於如是一一轉時、別別發生眼智明覺。說此名曰十二行相。

＊

法輪三轉は、示・勸・證なり。　『俱舍論』［頌疏廿四の十六丈］［本論廿四の十八丈］に云く、「云何が三轉十二行相。此れは苦聖諦なり。此れは應に徧知すべし。此れは已に徧知す。是れを三轉と名づく。即ち是くの如く一一に轉ずる時に於いて、別別に眼と智と明と覺とを發生す。此れを說いて名づけて十二行相と曰う」と。

＊

○俱舍論［頌疏廿四ノ十六丈］云…說此名曰十二行相＝『俱舍論頌疏論本』巻二四（T41-953a）に「問う、『云何が三転十二行相』と。答う、『此れは苦聖諦〈見道を顕らかにす〉。此れは応に遍知すべし〈修道を顕らかにす〉。此れは已に遍知す〈無学道を顕らかにす〉。是れを名三転と名づく。一一に転ずる時に、別別に眼と智と明と覚を発生す』と（問、云何三転、十二行相。答、此苦聖諦〈顕見道也〉、此応遍知〈顕修道也〉、此已遍知〈顕無学道〉、是名三転。一一転時、別別発生眼智明覚）」とあり、ほぼ同文が見られる。

○俱舍論［本論廿四ノ十八丈］云…說此名曰十二行相＝『阿毘達磨俱舍論』巻二四（T29-128b）に同文が見える。

⑰淨名略疏［二ノ廿一丈］云、三轉法輪者、即是趣波羅柰、說生滅四諦也。輪者、佛證四諦法、有可轉之義。故名爲輪。又解、能壞煩惱名之爲輪。如輪王寶、能壞怨敵。佛法輪寶、能壞煩惱。故名法輪。如來成道經三七日、方趣波羅梠。生生雖不可說、以悉檀方便、赴天人小機、而說四諦、轉入彼心、壞彼煩惱。故名轉法輪也。三轉者、一示轉、謂是苦是集是滅是道。二勸轉、謂苦應知、集應斷、滅應證、道應修。三證轉、謂苦我已知、集我已斷、滅我已證、道我已修。初轉示見道、勸轉示修道。證轉示無學道。是三轉十二行法輪。

＊

『淨名略疏』［二の廿一丈］に云く、「三轉法輪とは、即ち是れ波羅柰（＝古代インドの国

・釈迦が最初に説法を行った鹿野苑のこと）に趣き、生滅の四諦を説くなり。輪とは、佛、四諦の法を證するに、可轉の義有り。故に名づけて輪と爲す。又た解すらく、『能く煩悩を壞す、之を名づけて輪と爲す。輪王の寶の、能く怨敵を壞すが如し。佛法の輪寶、能く煩悩を壞す。故に法輪と名づく』と。如來成道して三七日を經て、方に波羅梛（はらな）に趣（おもむ）く。生生、不可説なりと雖も、悉檀（しったん）の方便を以て、天人小機に赴きて、四諦を説き、彼が心を轉入して、彼の煩悩を壞す。故に轉法輪と名づくるなり。三轉とは、一に示轉、謂（いわ）く、『是れ苦、是れ集、是れ滅、是れ道』と。二に勸轉、謂く、『苦應に知るべし、集應に斷ずべし、滅應に證すべし、道應に修すべし』と。三に證轉、謂く、『苦、我已に知る、集、我已に斷ず、滅、我已に證す、道、我已に修す』と。初轉に見道を示し、勸轉に修道を示し、證轉に無學道を示す。是れ三轉十二行法輪なり」と。

＊

○淨名略疏［二ノ廿一丈］云…是三轉十二行法輪＝『維摩経略疏』巻二（T38-586c）に同文が見える。「淨名」は「維摩」と同義。

⑱　大藏以千字文命函、見經録門大藏經處。

＊

大藏、千字文を以て函に命（な）づく。「經録門」大藏經の處に見ゆ。

＊

○『象器箋』「経録門」に【一一三五】「大蔵経」が立項されている。

（桐野祥陽・水野隆道）

【四六】東西藏

①敕修清規知藏云、後以衆多、列東西藏。

＊

『敕修清規（ちょくしゅうしんぎ）』の「知藏」に云く、「後に衆多きを以って、東西藏を列す」と。

＊

○敕修清規知藏云…列東西藏＝『勅修百丈清規』巻四（T48-1131）に全く同じ文章が見える。

（瀧玄浩）

【四七】十僧閣

①建長寺有十僧閣。

＊

建長寺に十僧閣（＝老尊宿を居らしめる寮舎）有り。

②禪居附録［四丈］清拙禪師塔銘序云、師居建長、起十僧閣、各立扁、以居大耆舊。

＊

『禪居附録』［四丈］「清拙禪師塔銘の序」に云く、「師、建長（＝建長寺）に居て、十僧閣を起こし、各おの扁（＝札）を立てて以て大耆舊（＝年老いた僧侶）を居らしむ」と。

＊

○禪居附録［四丈］清拙禪師塔銘序云…居大耆舊＝『禪居集附録』三丈裏から四丈表にかけてほぼ同文が見える（東京大学史料編纂所データベース）。清拙禪師とは、清拙正澄（一二七四～一三三九）のこと。臨済宗破庵派愚極智慧の法嗣、大鑑禪師と諡号。一三二六年に来日し、鎌倉末期から南北朝初期に活躍、日本禪宗二十四流の一つ清拙派（大鑑派とも）の派祖となり、建長寺、円覚寺、南禪寺、建仁寺等を歴住し、日本で初めて百丈忌を修した。『清拙和尚語録』『清拙大鑑清規』等がある。

（瀧玄浩）

【四八】千僧閣

①徑山有千僧閣。

＊

徑山に千僧閣（＝興聖万寿寺の僧堂）有り。

②大慧杲和尚年譜［卅五丈］云、紹興七年丁巳、師四十九歳、主徑山。又［卅九丈］云、十一年辛酉、師五十三歳、千僧閣成。師、遣介泉南、求記於李漢老參政。其略曰、〈云云〉。院去城百里、自唐國一禪師、始斬蓬藋、驅龍蛇、而居之。寺無常産、山之神龍、實助其縁化。公、至之、始衆纔三百、二年法席大興、衆將二千。而院有僧堂二、不足以容。剏意於寺之東、鑿山開址、建層閣十楹、以盧舍那南向、巋然居中、列千僧案位於左右、設連床、齋粥於其下。經始於十年春、越明年春、告成。〈云云〉。又云、一閣之成、在公何足道。而循襲齷齪之者、以爲奇特。不亦陋甚矣哉。

＊

『大慧杲和尚年譜』［卅五丈］に云く、「紹興七年丁巳（一一三七）、師四十九歳、徑山を主る」と。又た［卅九丈］云く、「十一年辛酉（＝一一四一年）、師五十三歳、千僧閣成る。師、介（＝間にはいってなかだちをする人）を泉南（＝径山）に遣わし、記（＝文書）を李漢老（＝李邴・一〇八五～一一四六）參政に求む。其の略に曰く、〈云云〉と。院、城を去ること百里、唐の國一禪師、始めて蓬藋（＝よもぎとあかざ）を斬り、龍蛇を驅りて之に居して自り、寺に常の産（＝一定の生業、恒産）無く、山の神龍、實に其の縁化（＝法縁勧化を受けたものからの施物）を助く。公、之に至るに、始め衆纔かに三百なるも、二年にして法席大いに興り、衆將に二千ならんとす。而して院に僧堂二つ有るも、以て容るるに足らず。意を剏めて、寺の東に於いて山を鑿り、址（＝土台）を開き、層閣十楹（＝棟）を建て、盧舍那を以て南に向け、巋然（＝たからかに）として中に居らしめ、千僧の案位を左右に列し、連床を設け、其の下に齋粥せしめんとす。十年の春に經始（＝物事を始めること）して、越えて明年の春、成るを告ぐ」と。〈云云〉又た云く、「一閣の成る、公（大慧）に在りては何ぞ道うに足らん。而れども循襲（＝真似をして）齷齪（＝こせこせするさま）の者、以て奇特と爲す。亦た陋なること甚しからずや」と。

＊

○大慧杲和尚年譜［卌五丈］云、十一年…主徑山＝『大慧普覺禪師年譜』（祖詠編・張掄序・宗演跋からなる）三十四丈表から三十五丈裏にかけて確認出来る（国立国会図書館デジタル化資料）。
○又［卌九丈］云…不亦陋甚矣哉＝『大慧普覺禪師年譜』三十九丈表から四十丈表にかけてほぼ同文が見られる（国立国会図書館デジタル化資料）。文中、「其略曰〈云云〉」の「云云」の部分には、「師於臨済為十二代孫。其道大故、其摂者衆。其門峻故、其登者難。其旨的故、其悟者親。其論高故、其聴者驚且疑。而同時者、譏毀嫌謗、不勝其忿。然四方学者、或自謂親証、或幾号罷参、皆肩摩袂属沓来於座下。而公所遇之、未嘗假詞気、接慇懃。拒之而不去、疏之而益親。至於水洒梃逐而戸外之屨常満。平時不喜者、亦皆鉗喙結舌、歎息其不可及。吾不知公之道自有以使之耶」の一四五字が省略されている。また、「告成」と「又云」の間の「云云」の部分には、「余嘗問道於公、聞之而歎曰、非成是閣之難、致其衆之難。非致其衆之難、道行而不能使其衆不至之難」の四〇字が省略されている。「大慧杲和尚」とは、大慧宗杲（一〇八九～一一六三）のことで、臨済宗楊岐派、圜悟克勤に参じ法を嗣ぐ。径山に住し宗風大いに振って臨済の再興と称された。孝宗帝の帰依を受け大慧禪師と賜り、後に普覚禪師と諡された。この段の「千僧閣」は、大慧宗杲住山の折に新築された。文中の「国一禪師」とは、牛頭宗径山派の祖で、径山法欽（＝道欽とも）禪師（七一四～七九二）のこと。

③

陸放翁渭南文集圜覺閣記云、淳熙十年某月某日、徑山興慶萬壽禪寺、西閣落成。〈云云〉東偏有千僧閣。紹興中、大慧禪師宗杲法門之傑。方住山時、衆溢千數。故以是名閣。

＊

陸放翁が『渭南文集』の「圜覺閣記」に云く、「淳熙十年（一一八三）某月某日、徑山興慶萬壽禪寺（＝杭州府〈浙江省〉余杭県西北にあり、中国五山第一）の西閣落成（＝建物が完成すること。落慶とも）す。〈云云〉東偏に千僧閣有り。紹興中に大慧禪師宗杲（一〇八九～一一六三）は、法門の傑（＝優れた人）なり。住山の時に方りて、衆は千數に溢る。故に是れを以て閣に名づく」と。

＊

○陸放翁渭南文集圜覺閣記云…故以是名閣＝『渭南文集』巻一八「圜覺閣記」十一丈裏及び十二丈裏から十三丈表にかけて同文が見える。（『四庫全書』集部 p.11 ～ 12・中國哲學書電子化計劃データベースからも確認出来る）陸放翁とは南宋の文人の陸游（一一二五～一二一〇）で、北宋の蘇東坡と並び称せられた。字は務観、号は放翁。『渭南文集』は全五十巻からなる。

④

虚堂愚和尚徑山録［後ノ六十四丈］、有千僧堂上梁上堂。又有開爐移衆僧單鉢、歸千僧閣上堂。　蓋度宗咸淳元年乙丑、八月虚堂住徑山。三年丁卯、冬十月、賜綾牒貳拾道、銀券等、一新僧堂浴室行堂也。

＊

『虚堂愚和尚徑山録』［後の六十四丈］に「千僧堂上梁の上堂」有り。又た「開爐に衆僧の單鉢を移して、千僧閣に歸する上堂」有り。　蓋し度宗の咸淳元年乙丑（一二六五）、八月に虚堂、徑山に住す。三年丁卯（一二六七）、冬十月、綾牒貳拾道、銀券等を賜りて、僧堂・浴室・行堂を一新するなり。

＊

○虚堂愚和尚徑山録［後ノ六十四丈］…銀券等一新僧堂浴室行堂也＝「千僧堂上梁上堂」は『虚堂和尚語録』巻九（T47-1057b）、「開爐移衆僧単鉢、帰千僧閣上堂」は『虚堂和尚語録』巻九（T47-1054c）に見える。また、「蓋度宗咸淳元年乙丑…銀券等一新僧堂浴室行堂也」の部分は、『虚堂和尚語録』巻一〇（T47-1063b）に同文が見られる。「虚堂愚」とは虚堂智愚のこと。楊岐派松源派で紹定二年（一二二九）に初めて興聖寺に住し、後、報恩・顕孝・瑞巌・延福・宝林・育王・浄慈・径山の諸刹に歴

住して、宋の理宗・度宗両朝の帰依を受け、教化は盛んなるものがあった。法嗣に大応国師南浦紹明がいる。『虚堂愚和尚徑山録』は、『虚堂和尚語録』（『虚堂録』とも）のうち、径山での説法を収めた部分を指す。咸淳五年（一二六九）刊で全十巻からなり、前七巻は在世中、後三巻は没後に編纂されており、『径山録』は巻三と巻九に見え、巻九の部分は「後録」と呼ばれている。禅門における重要な語録の一つとされ、『新纂禅籍目録』によれば、我が国には五山版に二種、ほかに木活版・版本があり、その他多くの抄物や注釈書が出ている。

（瀧玄浩）

【四九】三默堂〈浴室　僧堂　西淨〉

①相傳［敕修鈔十二ノ四十一丈。同十三ノ六丈］、浴室・僧堂・西淨、不許語笑。故此總曰三默堂。〈又見浴室西淨等處。〉

＊

相傳う［『敕修鈔』十二の四十一丈。同十三の六丈］、「浴室・僧堂・西淨（＝セイジョウとも）は、語笑を許さず。故に此れを總じて三默堂という〈又た、浴室・西淨等の處に見ゆ。〉」と。

＊

○相傳［敕修鈔十二ノ四十一丈。同十三ノ六丈］…故此總曰三默堂〈又見浴室西淨等處。〉＝『勅修百丈清規雲桃抄』（『敕修鈔』・『清規抄』とも）巻一二の四十丈裏から四十一丈表に「西浄ハ三默堂ノ中チャホトニ、モノヲ云ワヌ事ソ」とあり、巻一三の六丈表に「西浄・浴室ハ三默堂テアルソ」とある（駒澤大学電子貴重書庫）。なお、末尾の割り注にもあるように、「浴室」は【一〇五】、「僧堂」は【五〇】、「西淨」は【一一五】にそれぞれ立項されている。

②供養次第法［下ノ五十三丈］不可思議疏云、默然者、有三處。一食時、二大小便時、三洗浴時。

＊

『供養次第法』［下の五十三丈］の「不可思議疏」に云く、「默然とは三處有り。一には食時、二に大小便時、三に洗浴時なり」と。

＊

○供養次第法［下ノ五十三丈］不可思議疏云…三洗浴時＝『大毘盧遮那経供養次第法疏』巻下「真言事業品第五」（T39-807a）に全く同文が見える。

③　忠曰、浴室默然、不思議疏、洗浴時、又見『毘奈耶雑事』〈殿堂類浴室引。〉。僧堂默然、不思議疏、食時是也。西淨默然、不思議疏、大小便時、又見文殊經〈殿堂類西淨處〉。故三默堂。皆有據矣。

＊

忠曰く、「浴室の默然は『不思議疏』の『洗浴の時』なり。又た、『毘奈耶雑事』に見ゆ〈殿堂類「浴室」に引く。〉。僧堂の默然は、『不思議疏』の『食時』、是れなり。西淨の默然は『不思議疏』の『大小便時』なり。又た、『文殊經』に見ゆ〈殿堂類「西淨」の處なり。〉。故に三默堂、皆な據る有り」と。

＊

○浴室黙然、不思議疏、洗浴時、又見『毘奈耶雑事』〈殿堂類浴室引。〉＝割り注にあるように「第二類殿堂門下」の【一〇五】「浴室」条に、「毘奈耶雑事云、浴室内、漫為言話、仏言、不応漫話。然洗浴時、有二儀式。一者法語、二聖黙然（『毘奈耶雑事』に云く、『浴室の内、漫りに言話を為さば、仏言わく、「応に漫りに話すべからず。然れども洗浴の時に、二の儀式有り。一には法語、二には聖黙然なり）」とある。

○西淨黙然、不思議疏、大小便時、又見文殊經〈殿堂類西淨處〉＝同じく割り注にあるように「第二類殿堂門下」の【一一五】「西淨」条に、「緇門警訓云、文殊経曰、大小便時、身口状如木石、不得有声（『緇門警訓』（T48-1092a）に云く、『文殊經』に曰く、大小便の時は、身口の状、木石の如く、声有ることを得ざれ）」とある。なお、「僧堂」は【五〇】に立項されている。

（瀧玄浩）

【五〇】僧堂

①傳燈録禪門規式云、所裒學衆、無多少、無高下、盡入僧堂、依夏次安排。

＊

『傳燈録』の「禪門規式」に云く、「裒むる所の學衆、多少と無く、高下と無く、盡く僧堂に入りて、夏次（＝一夏九十日の安居を経た年数）に依りて安排（＝ものごとをほどよく処置する事）す」と。

＊

○傳燈録禪門規式云…依夏次安排＝『景徳伝燈録』巻六「禅門規式」（T51-251a）に同文が見える。ただ、『景徳伝燈録』では「所褒學衆」となっているが、同文は『勅修百丈清規』巻八「古清規序」（T48-1158a）などにも引かれており、全て「所裒学衆」となっている。

②敕修清規［下一ノ五十丈］日用軌範云、不得僧堂内聚頭説話。不得在僧堂中、看經看冊子。

＊

『敕修清規』［下一の五十丈］の「日用軌範」に云く、「僧堂の内に頭を聚めて説話（＝話をする事）することを得ざれ。僧堂の中に在りて、經を看じ冊子を看ずることを得ざれ」と。

＊

○敕修清規［下一ノ五十丈］日用軌範云…看經看冊子＝『勅修百丈清規』巻六「日用軌範」（T48-1145c）に全く同文が見える。

③北礀文集［二ノ十八丈］南翔僧堂記云、連長榻、敷廣座、容數千指、開單盍。必捜梁棟、選柱石、然後、可以帡幪震風陵雨。雖然非古也。古之人、一生打徹於塚間樹下。〈云云〉。

又［三ノ十三丈］慶寧僧堂記云、僧堂之作、非古人意。古無拓提、況堂耶。自枯木留香後、天下較奇策勝、翟飛炫耀、床榻窗几、惟恐不壯麗。耄耋疾疢、無霧霾風雨暴露之慘。既適既寧、精勵勝進、當倍蓰異時。塚間樹下、不三宿者、何反無聞焉。

＊

『北礀文集』［二の十八丈］「南翔僧堂の記」に云く、「長榻（＝長椅子）を連ね、廣座（＝多数の人が並び座っている座席）を敷き、數千指（＝指は人を数える単位）を容れて、單盍（＝鉢）を開く。必ず梁棟（＝材木）を捜り、柱石（＝礎石）を選んで、然る後、以て震風（＝突風）陵雨

（＝豪雨）を蛢幪（＝ふせぐ）すべし。然りと雖も古に非ざるなり。古の人、一生塚間樹下（＝墓の間・樹木の下）に打徹す。〈云云〉」と。　又た［三の十三丈］「慶寧僧堂の記」に云く、「僧堂の作は、古人の意に非ず。古は拓提（＝寺）無し、況や堂をや。枯木（＝枯木衆。石霜慶諸とその弟子が坐禅をしている姿を古株に例えた、呼び名）留香（＝雪峰の僧堂。⑨に出る）より後ち、天下、奇を較べ勝を策り、翟飛（＝華やか）炫耀（＝ひかりかがやく）し、床榻（＝腰掛け）窗几、惟だ壯麗ならざらんことを恐る。耄耋疾疢も、霧霾・風雨・暴露の慘み無し。既に適い、既に寧く、精勵勝進、當に異時に倍蓰すべし。塚間樹下、三宿せざる者、何ぞ反って聞くこと無き」と。

＊

○北礀文集［ニノ十八丈］南翔僧堂記云…一生打徹於塚間樹下＝『北礀文集』巻二「南翔僧堂記」（『禅門逸書』初編・第五冊・p.24）に全く同文が見える。
○又［三ノ十三丈］慶寧僧堂記云…何反無聞焉＝『北礀文集』巻三「慶寧僧堂記」（『禅門逸書』初編・第五冊・p.35）に全く同文が見える。

④興禪護國論［下十三］述宋國二十種勝事中云、經藏僧堂莊嚴、如淨土。

＊

『興禪護國論』［下十三］に宋國二十種の勝事を述ぶる中に云く、「經藏・僧堂の莊嚴、淨土の如し」と。

＊

○興禪護國論［下十三］…如淨土＝『興禪護國論』巻下（T80-15c）に全く同文が見える。

⑤雪峯存禪師録［下廿四丈］云、師示衆云、望州亭與你相見了也。烏石嶺與你相見了也。僧堂前與你相見了也。

＊

『雪峯存禪師録』［下廿四丈］に云く、「師、衆に示して云く、『望州亭（＝福州雪峰山中にある亭。山中二十三景の一つ）、你と相見し了われり。烏石嶺（＝福州侯官県の西南隅にある山。烏石山とも）、你と相見し了われり。僧堂前、你と相見し了われり』と」と。

＊

○雪峯存禪師録［下廿四丈］云…僧堂前與你相見了也。＝『雪峰真覚禅師語録』巻下（X69-83c）に全く同文が見える。雪峯存とは、唐末の禅僧、福州雪峰義存（八二二～九〇八）のこと。真覚禅師と諡号される。『雪峰真覚禅師語録』は、上下二巻の外に年譜および古版の序跋、「雪峰崇聖禅寺碑記文」「雪峰禅寺二十四景詩」などを付録する。明の林弘衍により崇禎十二年（一六三九）に序刊された。『雪峰義存禪師語録』や『雪峰廣録』ともいわれる。

⑥玄沙備禪師廣録云、我今問你、還見溪水麽、還見佛殿麽、還見僧堂麽。

＊

『玄沙備禪師の廣録』に云く、「我れ今、你に問う、還って溪水を見るや、還って佛殿を見るや、還って僧堂を見るや」と。

＊

○玄沙備禪師廣録云…還見僧堂麽＝『玄沙師備禪師廣録』巻一（X73-3c）に全く同文が見える。「玄沙備禪師」とは、玄沙師備（八三五～九〇八）のことで、雪峰義存の法嗣。その三卅に法眼宗を出す。『福州玄沙宗一禅師語録』ともいい三巻から成る。「仏殿」については、【二七】に立項されている。

⑦僧堂名、已著於西竺。　智度論云[二ノ五丈]、迦葉結集法藏時、以阿難殘結末盡、擯出。阿難入金剛定破諸煩惱、作大力阿羅漢。即夜到僧堂門、敲門而喚。

＊

僧堂の名、已に西竺に著わる。　『智度論』[二の五丈]に云く、「迦葉、法藏を結集せし時、阿難、殘結末だ盡くさざるを以て擯出（＝しりぞけること）す。阿難、金剛定に入りて、諸もろの煩惱を破り、大力の阿羅漢と作る。即ち夜に僧堂の門に到り、門を敲きて喚ぶ」と。

＊

○智度論云[二ノ五丈]…敲門而喚＝『大智度論』巻二（T25）にそのまま該当する箇所はない。後半の「阿難入金剛定破諸煩惱、作大力阿羅漢。即夜到僧堂門、敲門而喚。」に関しては、「阿難如是入金剛定、破一切諸煩惱山。得三明六神通共解脱、作大力阿羅漢。即夜到僧堂門敲門而喚」（T25-69a）とあり、ここを指すと考えられる。また、前半の「迦葉結集法藏時、以阿難殘結末尽、擯出」に関しては、「爾時諸天礼摩訶迦葉足、説偈言」（T25-67b）より「大迦葉於僧中手牽阿難出、語阿難言、『断汝漏尽、然後來入。殘結未尽、汝勿來也』。如是語竟、便自閉門」（T25-68b）の部分を、長いために無著がまとめたものであろう。

⑧禪林有設二僧堂者〈又見千僧閣處〉。又有設三僧堂者。

＊

禪林に二僧堂を設くる者有り〈又た「千僧閣」の處に見ゆ〉。又た、三僧堂を設くる者有り。

＊

○「千僧閣」は、【四八】に立項されている。

⑨無文印笑翁堪禪師行状云、雪峰僧堂二。曰留香曰衆香。師至、衆集如海。更闢妙香處之。

＊

『無文印』の「笑翁の堪禪師行状」に云く、「雪峰の僧堂二あり。曰く、留香、曰く、衆香。師至る。衆集まること海の如し。更に妙香を闢きて之に處らしむ」と。

＊

○無文印笑翁堪禪師行状云…更闢妙香處之＝『無文印』巻四の「育王笑翁禪師行状」（柳田文庫所蔵本）に、全く同文が見える。「笑翁堪禪師」とは、臨済宗楊岐派大慧派、笑翁妙堪禪師（一一七七～一二四八）のことで、霊隠寺、浄慈寺、天童寺、育王寺等の五山に歴住する。

⑩佛祖通載[廿二ノ廿三丈]雲峯高禪師傳云、遷保安江陰教忠霅川何山。雲衲四來三堂皆溢。〈止此。〉蓋此亦有三僧堂也。

＊

『佛祖通載』[廿二の廿三丈]「雲峰の高禪師の傳」に云く、「保安江陰の教忠、霅川の何山に遷る。雲衲四もより來たって三堂皆な溢る」と。〈此こに止まる。〉蓋し此れ亦た三の僧堂有るなり。

＊

○佛祖通載[廿二の廿三丈]雲峯高禪師傳云…雲衲四來三堂皆溢＝『仏祖歴代通載』巻二二（T49-721c）に全く同文が見える。

⑪僧堂、但在禪刹。而天台宗、有傚之者。　佛祖統紀［十七ノ十丈］了生法師傳云、謁東靈欽師。時效禪林、羣居僧堂。當元夕、衆往觀燈。欽師行香、見其危坐牀上。

＊

僧堂、但だ禪刹に在るのみ。而して天台宗に、之を傚う者有り。　『佛祖統紀』［十七の十丈］「了生法師の傳」に云く、「東靈の欽師に謁す。時に禪林に效いて、僧堂に羣居す。元夕（＝陰暦の正月十五日の夜）に當たり、衆往きて燈を觀る。欽師行香して、其の牀上に危坐（＝きちんと座る）するを見る」と。

＊

○佛祖統紀［十七ノ十丈］了生法師云、…見其危坐牀上＝『仏祖統紀』巻一八（T49-237b）に全く同文が見える。

⑫　僧堂十六板首鉢位圖、見圖牌類。

＊

僧堂十六板首鉢位の圖、圖牌類に見ゆ。

＊

○『禪林象器箋』巻一六に【一二六八】「鉢位圖十六板首」が立項されている。

⑬東福清規云、外僧堂東邊、亦上下間有床。歴兵亂、壞却之。故今則亡矣。

＊

『東福清規』に云く、「外僧堂の東邊にも、亦た上下間に床有り。兵亂を歴て、之を壞却す。故に今則ち亡し」と。

＊

○東福清規云…故今則亡矣＝『東福寺清規』九十一丈（「東海庵蔵・無著筆写本複製本」国際禅学研究所所蔵）に「外僧堂東方、上下間共、昔有床。一乱之時失却、今亡（外僧堂の東の方にも、上下間共に、昔は床有り。一亂の時失却して、今は亡し）」とあり、ほぼ同意の文が見られる。

⑭東福清規［九十一丈］云、後堂床之南床、曰汾洲也。〈忠按分手訛作汾洲。〉知客床、有暫到者、上古有下齋時、行脚僧、據此床受齋。故云暫到也。　又［百九丈］云、住持赴僧堂坐禪者、蓋爲點檢大衆也。故入堂、先巡堂一帀。是便檢衆之　儀也。又專主僧堂者、首座也。住持者非主僧堂。故僧堂無住持床。唯別設椅子而已。

＊

『東福清規』［九十一丈］に云く、「後堂床の南の床を、汾洲と曰うなり。〈忠按ずるに、分手を訛りて汾洲と作す。〉知客床に、暫到（＝客僧）有ることは、上古に下齋有る時、行脚の僧、此の床に據りて齋を受く。故に暫到と云うなり」と。　又た［百九丈］云く、「住持、僧堂の坐禪に赴くことは、蓋し大衆を點檢せんが爲なり。故に堂に入りて、先ず巡堂一帀す。是れ便ち衆を檢するの儀なり。又專ら僧堂を主る者は、首座なり。住持は僧堂を主るに非ず。故に僧堂に住持の床無し。唯だ別に椅子を設くるのみ。

＊

○東福清規［九十一丈］云…故云暫到也＝『東福寺清規』九十一丈（「東海庵蔵・無著筆写本複製本」国際禅学研究所所蔵）に「後堂床南方床、曰汾洲也（後堂床の南の方の床をば、汾洲と曰うなり）」、また、「排被位之中、知客床末、有暫到者。是上古有下齋時、行脚僧來受齋、拠其床喫也。是謂暫到（排被位

の中に、知客床の末に、暫到という者有り。是は上古下斎有りし時、行脚の僧の來て斎を受けて、其の床に拋て喫するなり。是を暫到と謂う）」とあり、ほぼ同意の文が見られる。

○又［百九丈］云…唯別設椅子而已＝『東福寺清規』百九丈（「東海庵蔵・無著筆写本複製本」国際禅学研究所所蔵）に「住持就僧堂入坐禅者、蓋為点検大衆也。故到僧堂先巡堂一匝。是点検大衆之儀也。住持者非専主于僧堂者也。住持者僧堂副物也。故僧堂無住持床。以故別設椅子也。僧堂者主座之所主也（住持僧堂に就て坐禅に入ることは、蓋し大衆を点検せんが為めなり。故に僧堂に到て先づ巡堂一匝す。是れ大衆を点検するの儀なり。住持は専ら僧堂に主る者のに非ずなり。住持は僧堂の副物なり。故に僧堂住持の床無し。故を以て別に椅子を設るなり。僧堂は主座の主る所なり）」とあり、ほぼ同意の文が見られる。

（冨増健太郎）

【五一】雲堂

①忠曰、僧堂亦曰雲堂。謂衆集如雲多也。　開福寧禪師録［卅九丈左］冬夜小參云、賴遇庫司置辦土儀果子。下座雲會堂中。大家東咬西咬。〈止此。〉字義可見。

＊

忠曰く、「僧堂は亦た雲堂と曰う。謂わく、衆の集まること雲の多きが如きなり」と。

『開福寧禪師録』［卅九丈左］「冬夜の小參」に云く、「賴に庫司の土儀（＝みやげもの）果子を置辦（＝こしらえおく）するに遇う。下座して堂中に雲會して、大家東咬西咬せん。〈此ここに止まる。〉字義、見るべし」と。

○『開福寧禪師録』［卅九丈左］冬夜小參云…大家東咬西咬＝『開福道寧禪師語録』巻下（X69-339b）に全く同文が見える。『開福道寧禪師語録』は、全二巻、開福道寧撰、善果編。宋代の淳熙六年（一一七九）重刊。詳しくは『潭州開福禪寺第十九代寧和尚語録』、『潭州開福報慈禪寺道寧師語録』とも呼ばれる。潭州（湖南省）開福禪寺における語録を集めたもので、巻首に昭山譚章の序、節度使華原郡王の大観三年（一一〇九）二月の開福禪寺への諸疏を載せ、巻上に開福開堂晋院拈香をはじめ、上堂・小参・垂示等、巻下には上堂・小参・偈頌等を収録している。応安六年（一三七三）刊の五山版も存する。開福道寧（？～一一一三）とは、臨済宗楊岐派、蒋山で五祖法演の法を嗣ぐ。文中の「庫司」は【四四四】に立項されている。

②敕修清規［上二ノ十三丈ヲ。○又下ノ二巻九丈十丈］受嗣法人煎點云、請云、來晨就雲堂、聊具菲供。伏望慈悲、特垂降重。

＊

『敕修清規』［上二の十三丈（表）を。○又た下の二巻九丈、十丈］「嗣法の人の煎點を受く」に云く、「請して云く、『來晨（＝翌早朝）、雲堂に就きて、聊か菲供を具えん。伏して望むらくは慈悲、特に降重を垂れよ』と」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十三丈ヲ○又下ノ二巻九丈十丈］受嗣法人煎點云…特垂降重＝『勅修清規』［上二ノ十三丈ヲ］については、『勅修百丈清規』上巻二冊目十三丈表に同文が見られる（T48-1123b）。また、［下ノ二巻九丈十丈］については、『勅修百丈清規』下巻二冊目「庫司四節特為首座大衆湯」の九丈裏の文中の注として、「今晩、雲堂に就いて、特に首座大衆の為に点湯す。伏して望むらくは慈悲、特に光降を垂れよ（今晩就雲堂、特為首座大衆点湯。伏望慈悲、特垂光降）」（T48-1152c）とある。また十丈表にも文中の注として、「今晩、雲堂に就いて、特に首座大衆の為に点湯す。伏して望むらくは和尚、特に降重を垂れよ（今晩就雲堂、特為首座大衆點湯。伏望和尚慈悲、特垂降重）」（T48-1152c）とあり、同意の文が見える。（駒沢大学電子貴重書庫データベース）

③ 諸祖偈頌［上之下卅五丈］阮中大仰山飯歌云、五更雲堂門尚閉。普供厨中人已起。

＊

『諸祖偈頌』［上の下卅五丈］阮中大「仰山飯の歌」に云く、「五更（＝午前三時～五時頃）雲堂の門、尚を閉づ。普供厨中（＝台所のなか）の人、已に起く」と。

＊

○諸祖偈頌［上之下卅五丈］阮中大仰山飯歌云…普供厨中人已起＝『禅門諸祖師偈頌』巻一（X66-739b）に全く同じ文章が見える。『禅門諸祖師偈頌』は、承応三年（一六五四）刊。四巻から成り、はじめ五老峰の子昇・如祐とによって共編され、ついで三山開元寺の道永が増補した。三人とも伝歴がわからないが、おそらく南宋頃の人であろう。諸祖の偈頌、および銘などの短篇作品を集める。過去七仏より、南岳・馬祖に至る仏祖の伝法偈、三祖の『信心銘』、洞山の『玄中銘』、円悟の『臨済正宗記』など、唐より宋末に及ぶ作品八十四篇を収めている。現存の本は、明の崇禎十七年（一六四四）の重刊である。

⑤ 大慧杲和尚鄭成忠請普説［下ノ七十七丈］云、齋雲堂清淨禪衆。請普説功徳。不爲別事。専用回向無上佛果菩提。

＊

大慧杲和尚、「鄭成忠が請する普説」［下の七十七丈］に云く、「雲堂清淨の禪衆に齋して普説を請す。功徳、別事の爲にせず。専ら用いて無上の佛果菩提に回向す」と。

＊

○大慧杲和尚鄭成忠請普説［下ノ七十七丈］云…無上佛果菩提＝『大慧普覚禅師普説』巻五「鄭成忠請普説」（M59-1015a）の段に全く同文が見える。『大慧普覚禅師普説』は、四巻、宋の大慧宗杲撰、慧然等編、紹熙元年（一一九〇）に祖慶が校勘し跋を付して刊行されている。大慧が学人提撕のために普説した法語を収録したもので、巻一は慧然・蘊聞が、巻二～四は道先が編し、終わりに諸学人に示した法語一巻が添えられている。また、黄文昌重編に係る同年刊行のものもあり、これは五巻本で、巻五は慧然編になる。『大慧普覚禅師語録』に編入された「普説」は、この巻五の部分に当たる。

（古川周賢）

【五二】禪堂

①忠曰、僧堂亦謂禪堂。言衆僧坐禪於此也。文字已出首楞嚴經［十ノ下ノ十一丈］。云、若諸末卅愚鈍衆生、未識禪那、不知説法、樂修三昧、汝恐同邪、一心勸令持我佛頂陀羅尼咒。若未能誦、寫於禪堂、或帶身上、一切諸魔、所不能動。

＊

忠曰く、「僧堂亦た禪堂と謂う。言うこころは、衆僧、此こに坐禪するなり。文字已に『首楞嚴經』［十の下の十一丈］に出づ。云く、『若し諸もろの末世の愚鈍の衆生、未だ禪那を識らず、説法を知らず、樂みて三昧を修せんとき、汝、邪に同ずるを恐るれば、一心に勸めて、我が『佛頂陀羅尼咒』を持せしむ。若し未だ誦すること能わざれば、禪堂に寫して、或いは身上に帶べば、一切の諸魔も動ずること能わざる所なり』と」と。

＊

○首楞嚴經［十ノ下ノ十一丈］云…所不能動＝『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞厳経』巻一○

（T19-154b）に全く同じ文章が見える。

②摩訶止觀［二之一 巻三丈］云、身開常坐、遮行住臥。或可處衆。獨則彌善。　輔行云、或可處衆者。謂禪堂中。別處最勝。故云彌善。

＊

『摩訶止觀』［二之一 巻三丈］に云く、「身は常坐を開して、行住臥を遮す。或いは衆に處す可し。獨りなれば則ち彌いよ善し。　『輔行』に云く、『或いは衆に處す可し』とは、謂く禪堂の中なり。別處は最も勝れたり。故に『彌いよ善し』と云う」と。

＊

○摩訶止觀［二之一 巻三丈］云…獨則彌善＝『摩訶止觀』巻二（T46-11b）に全く同じ文章が見える。
○輔行云…故云彌善＝『止觀輔行伝弘決』巻二（T46-182b）に全く同じ文章が見える。『止觀輔行伝弘決』は、天台智顗撰『摩訶止觀』に対して詳細な注釈を施したものとされる。

③續高僧傳［二十ノ三丈］後梁法聰法師傳云、聰住禪堂。毎有白鹿白雀、馴伏栖止。

＊

『續高僧傳』［二十の三丈］「後梁の法聰法師の傳」に云く、「聰、禪堂に住す。毎に白鹿白雀有り、馴伏（＝馴れしたがう）栖止（＝ねぐらとする）す」と。

＊

○續高僧傳［二十ノ三丈］後梁法聰法師傳云…馴伏栖止＝『続高僧伝』巻一六（T50-555c）に全く同文が見える。

④人天寶鑑［六十四丈］云、圓覺慈法師解行兼備。東掖虚席。能文二師、然指請師主之。慈至法席鼎盛。盛暑講罷、歸方丈偃息。而文適至。謂師曰、東掖道場、卅卅皆有道者主之。講罷不在懺室。即在禪堂。未有偃臥自恣者也。慈聞曰、敢不敬命。自後不少怠。

＊

『人天寶鑑』［六十四丈］に云く、「圓覺の慈法師、解行（＝教理の理解と実践的修行）兼ね備わる。東掖、席を虚しくす。能・文の二師、指を然して師を請じて之を主らしむ。慈、至って法席鼎に盛んなり。盛暑、講罷わって方丈に歸りて偃息（＝横になって休む）す。而して文、適たま至る。師に謂いて曰く、『東掖の道場は、世世皆な有道の者、之を主る。講罷わって懺室に在らざれば、即ち禪堂に在り。未だ偃臥（＝うつぶせで寝る）して自恣（＝自分の思うままにする）なる者有らざるなり』と。慈聞きて曰く、『敢えて命を敬わざらんや』と。自後少しも怠らず」と。

＊

○『人天寶鑑』［六十四丈］云…自後不少怠＝『人天宝鑑』巻一（X87-18c）に見える文章であるが、『人天宝鑑』には「東掖虚席」の前に「学者宗之」の四字が、「不少怠」の前に「祁寒溽暑殊」の五字がそれぞれある。『人天宝鑑』は、大慧宗杲下四世、四明曇秀の編で、紹定三年（一二三〇）に成る。

⑤僧寶正續傳［五ノ三丈］月菴果禪師傳云、初至鵝湖。宴坐禪堂。聞童子戲爭蒲團。其一擧起云。你道不見。遮箇是什麽。師恍然有省。

＊

『僧寶正續傳』［五の三丈］「月菴の果禪師の傳」に云く、「初め鵝湖（江西省上饒市鉛山県）

に至って禪堂に宴坐（＝坐禪）す。二童子の戯れに蒲團を爭うを聞く。其の一、擧起して云く、『你見ずと道う。遮箇是れ什麼ぞ』と。師恍然（＝心を奪われてうっとりするさま）として省あり』と」と。

＊

○『僧寳正續傳』［五ノ三丈］月菴果禪師傳云…師恍然有省＝『僧宝正続伝』巻五（X79-573c）に全く同じ文章が見える。月庵果禪師とは、月庵善果禪師（一〇七九～一一五二）のことで、臨済宗楊岐派信州（江西省）鉛山の人。

⑥柳河東集［四十三ノ卅三丈］巽公院五詠中、禪堂詩云、發地結青茆。團團抱虛白。山花落幽戸。中有忘機客。涉有本非取。照空不待析。萬籟俱縁生。窅然喧中寂。心境本同如。鳥飛無遺跡。

＊

『柳河東集』［四十三の卅三丈］「巽公の院の五詠」の中、「禪堂の詩」に云く、「地を發いて青茆を結ぶ。團團として虛白を抱く。山花、幽戸に落つ。中に機を忘るる客有り。有に渉れども本と取るに非ず。空を照して析つことを待たず。萬籟（＝風に吹かれて物の鳴る音）俱に縁生す。窅然（＝奥深い様）たり喧中（＝やかましい）の寂、心境本と同じく如なり。鳥飛んで遺跡無し」と。

＊

○『柳河東集』［四十三ノ卅三丈］巽公院五詠中…鳥飛無遺跡＝『柳河東集』『増広註釈音辯唐柳先生集』巻四三（四部叢刊本・13b）に同文が見られる。しかし、四部叢刊本および四庫全書本（集部 p.25-26）では「禪堂」ではなく「禪室」となっている。また、『全唐詞』（巻 353-16）の詩題「巽公院五咏」の中にも同文がみられるが、こちらは「禪堂」となっている。

（古川周賢）

【五三】前門　僧堂

①忠曰、佛殿法堂、皆有前後門。今擧僧堂者。

＊

忠曰く、「佛殿・法堂、皆な前後門有り。今は僧堂なるものを擧す」と。

＊

○文中の語について、『象器箋』に「仏殿」【二七】、「法堂」【三六】、「僧堂」【五〇】、「後門」【五四】、それぞれ立項されている。

②敕修清規［下一ノ卅五丈右］大掛搭歸堂云、參頭領衆、前門右手入堂、至聖僧前排立。

＊

『敕修清規』［下一の卅五丈右］の「大掛搭歸堂」に云く、「參頭、衆を領めて、前門の右手より堂に入り、聖僧の前に至って排立（＝ならび立つ）す」と。

＊

○『敕修清規』［下一ノ卅五丈右］大掛搭歸堂云…至聖僧前排立＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1141a）に全く同じ文章が見える。「聖僧」については【二三五】に立項されている。

③日用軌範［敕修下一ノ五十一丈］云、打定鐘後、不得於前門出入。

＊

『日用軌範』［『敕修』下一の五十一丈］に云く、「定鐘を打って後、前門より出入することを得ざれ」と。

＊

○日用軌範［敕修下一ノ五十一丈］云…不得於前門出入＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1146a）に、全く同じ文章が見える。「定鐘」については【一四三五】に立項されている。

（古川周賢）

【五四】後門　僧堂

①敕修清規［下一ノ卅五丈右］大掛搭歸堂云、參頭送維那出。註云。齋前後門。齋後前門。

＊

『敕修清規』［下一の卅五丈右］の「大掛搭歸堂」に云く、「參頭、維那を送って出づ。註して云く、『齋前には後門、齋後には前門なり』と」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅五丈右］大掛搭歸堂云…齋後前門＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1141a）に同文が見える。

（古川周賢）

【五五】前板〈僧堂〉

［敕修鈔八巻八丈］僧堂聖僧龕左右爲出入板。自出入板已前爲前板、亦曰前堂。即前堂首座管領之。自出入板已後爲後板、亦曰後堂。即後堂首座管領之。

＊

［『敕修鈔』八巻八丈］僧堂・聖僧の龕（＝仏像を安置する厨子）の左右を出入板と爲す。出入板自り已前を前板と爲し、亦た前堂と曰う。即ち前堂の首座、之を管領（＝とりしまる）す。出入板自り已後を後板と爲し、亦た後堂と曰う。即ち後堂の首座、之を管領す。

＊

○［敕修鈔八巻八丈］僧堂聖僧龕左右爲出入板…即後堂首座管領之＝『勅修百丈清規抄』巻八・八丈に「前板後板ハ上間下間ノヨウデハナイ。中ニ出入板カカリテ、ソノ前ト後トヲ分テ、後堂ハ出入板ヨリ下ヲ管領スルゾ」とあり、多少の変化はあるが文意としては凡そ同意である。（駒澤大学電子貴重書庫）尚、『禅林象器箋』に【五〇】「僧堂」、【二三五】「聖僧」がそれぞれ立項されている。

（古川周賢）

【五六】後板〈僧堂〉

説見于前板。

＊

説、「前板」に見ゆ。

＊

○『禅林象器箋』に【五五】「前板〈僧堂〉」が立項されている。

（古川周賢）

【五七】堂内三板頭

禪苑清規［三ノ二丈］維那章云、衆中新到掛搭禮、須勤重。諸方辨事、及名德人、別選上寮安排。退院長老、須依住持帖、及開堂疏内資次。於堂内三板頭、安排齋粥座位。

＊

『禪苑清規』［三の二丈］「維那」の章に云く、「衆中、新到の掛搭の禮は、須く勤重なるべし。諸方の辨事（＝禅宗の大寺院における役職に付随し、その雑務に任ずる僧）、及び名德の人ならば、別に上寮を選びて安排（＝ほどよくする）せよ。退院の長老は、須く住持の帖、及び開堂の疏の内の資次（＝位階）に依って、堂内の三板頭に於いて、齋粥の座位を安排すべし」と。

＊

○『禪苑清規』［三ノ二丈］維那章云…安排齋粥座位＝『禅苑清規』巻三（X63-530b）に全く同じ文章が見える。『禅林象器箋』に【三六五】「住持」、【六〇四】「開堂」、【六七三】「掛搭」が立項されている。

（古川周賢）

【五八】四板頭

①忠曰、首座板、後堂板、分手板、聖僧板也。〈又見禮則類、四處間訊處。〉

＊

忠曰く、「首座の板、後堂の板、分手の板、聖僧の板なり」と。〈又た「禮則類」の、「四處間訊」の處に見ゆ。〉

＊

○『禅林象器箋』の【七三七】に「四処間訊」が立項されている。

②敕修清規［下一ノ十七丈］方丈特爲新首座茶云、四板頭不安香几。無巡堂請茶。

＊

『敕修清規』［下一の十七丈］「方丈特爲新首座の茶」に云く、「四板頭に香几（＝香炉の台）を安ぜず。巡堂請茶無し」と。

＊

○『敕修清規』［下一ノ十七丈］方丈特爲新首座茶云…無巡堂請茶＝『勅修百丈清規』巻四（T48-1135c）

に全く同じ文章が見える。

（古川周賢）

【五九】首座板頭〈僧堂〉

①敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、維那於僧堂、往住持前問訊、從首座板起、巡堂一匝。

＊

『敕修清規』［上一の十九丈］「聖節」に云く、「維那、僧堂に於いて、住持の前に往きて問訊し、首座の板從り起して、巡堂一匝す」と。

＊

○『敕修清規』［上一ノ十九丈］聖節云…巡堂一匝＝『勅修百丈清規』巻一（T48-1113a）に見える文章であるが、『勅修百丈清規』では「維那於僧堂」と「往住持前問訊」の間に「早粥遍食椎後、再鳴椎一下云、（白大衆、粥罷聞鐘声、各具威儀、詣大仏宝殿、啓建天寿聖節謹白。）復鳴椎一下」という文章が見える。

②備用清規［三巻十三丈］方丈特爲茶云、侍者往特爲人前問訊、從龕後轉首座板頭、巡問訊一匝。

＊

『備用清規』［三巻十三丈］「方丈特爲茶」に云く、「侍者、特爲の人の前に往きて問訊し、龕後從り首座の板頭に轉じて、巡りて問訊一匝す」と。

＊

○『備用清規』［三巻十三丈］方丈特爲茶云…巡問訊一匝＝『禅林備用清規』巻三（X63-634a）に全く同じ文章が見える。

（古川周賢）

【六〇】西堂板頭〈僧堂〉

①忠曰、即是聖僧板頭也。

＊

忠曰く、「即ち是れ聖僧の板頭なり」と。

＊

○『禅林象器箋』に【二三五】「聖僧」が立項されている。

②東漸清規［三ノ七丈］勸舊鉢位圖云、内僧堂如有西堂、則一班聖僧板排之。

＊

『東漸清規』［三の七丈］「勸舊鉢位の圖」に云く、「内僧堂、如し西堂有らば、則ち一班聖僧の板に之を排す」と。

＊

○東漸清規［三ノ七丈］勸舊鉢位圖云…則一班聖僧板排之＝『東漸略清規』巻三・七丈表（「東海庵蔵無著

筆写本・複製本」国際禅学研究所所蔵）に「内僧堂、分書之、如有西堂、則一班聖僧板排之」とあり、ほぼ同文が見られる。

③敕修清規［上二ノ十六丈］専使特爲新命煎點云、於僧堂内、鋪設主席、西堂板頭排專使位。

＊

『敕修清規』［上二の十六丈］の「專使特爲新命の煎點」に云く、「僧堂の内に於いて、主席を鋪設し、西堂の板頭に專使の位を排すべし」と。

＊

○『敕修清規』［上二ノ十六丈］專使特爲新命煎點云…西堂板頭排專使位＝『勅修百丈清規』巻三（T48-1124b）に全く同じ文章が見える。『禅林象器箋』に【五四六】「專使」が立項されている。

（古川周賢）

【六一】聖僧板頭〈僧堂〉

①忠曰、聖僧前下間板、爲聖僧板頭。蓋聖僧侍者板也。〈見校定［上ノ四十二丈左］兄弟相看章。〉即前堂首座分手。亦名西堂板頭。〈見僧堂處、東福僧堂圖。〉

＊

忠曰く、「聖僧の前の下間の板を、聖僧の板頭と爲す。蓋し聖僧侍者の板なり。〈『校定』［上の四十二丈左］の「兄弟相看」の章に見ゆ。〉即ち前堂首座の分手なり。亦た西堂の板頭と名づく。〈「僧堂」の處、「東福僧堂」の圖に見ゆ。〉」と。

＊

○見校定［上ノ四十二丈左］兄弟相看章＝『校定』とは、『叢林校定清規総要』の事で、この巻一（X63-605b）の「兄弟相看礼儀」の章に、「聖僧侍者板頭を過ぐ（過聖僧侍者板頭）」とあり、同義の文が見える。

○見僧堂處、東福僧堂圖＝『禅林象器箋』【五〇】「僧堂」の「東福僧堂図」を見れば、西・後門辺・北側に「後板床」と見える。

②校定清規［上ノ四十二丈］兄弟相看禮儀章、新到歸堂云、參頭領衆僧堂前門下手入。〈乃至〉仍至聖僧前問訊。自末先移歩、過聖僧侍者板頭、進三兩位。次第而立。

＊

『校定清規』［上の四十二丈］「兄弟相看禮儀」の章、「新到歸堂」に云く、「參頭、衆を領して僧堂の前門の下手より入る。〈乃至〉仍って聖僧の前に至って問訊す。末より先ず歩を移して、聖僧侍者の板頭に過ぎて、進むこと三兩位。次第にして立つ」と。

＊

○『校定清規』［上ノ四十二丈］兄弟相看禮儀章…次第而立＝『叢林校定清規総要』巻一（X63-605b）に見える文章で同意であるが、これには、「參頭領衆僧堂前門下手入」と「仍至聖僧前問訊」の間に「聖僧前、看人多少、分作行数、立定。參頭於聖僧前、焼香一炷。復退身、同大衆立問訊、大展三拝。合掌、巡堂一匝」という文章が見える。

③敕修清規［上二ノ七丈ヲ］念誦云、住持入堂、前堂首座入。次名德西堂挿入、歸聖僧板頭立。　又大掛搭歸堂［下一ノ卅五丈］云、參頭領衆巡堂、排立問訊。從班尾先移歩、退聖僧板頭立。維那入堂燒香、上間立。

＊

『敕修清規』[上二の七丈を]「念誦」に云く、「住持、堂に入り、前堂首座入る。次に名德の西堂挿入して、聖僧の板頭に歸して立つ」と。　又た[下一の卅五丈]「大掛搭歸堂」に云く、「參頭、衆を領して巡堂し、排立問訊す。班尾より先ず歩を移し、聖僧の板頭に退いて立つ。維那、堂に入りて燒香し、上間に立つ」と。

＊

○『敕修清規』[上二ノ七丈ヲ]念誦云…歸聖僧板頭立＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1121a）に全く同じ文章が見える。

○[下一の卅五丈]大掛搭歸堂云…上間立＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1141a）に見える文章で同意であるが、「參頭領衆」と「從班尾先移歩」の間に「前門右手入堂。至聖僧前排立。參頭燒香、同衆大展三拜、巡堂一匝。自上堂至下堂、仍如前排立問訊」という文章が見える。

④　解云、維那與掛搭人、對立也。

＊

解して云く、「維那と掛搭の人と、對立するなり」と。

⑤又[下二ノ十一丈]結制禮儀云、次知事入堂、燒香大展三拜。巡堂一匝、至聖僧板頭排立。

＊

又た[下二ノ十一丈]「結制禮儀」に云く、「次に知事入堂し、燒香して大展三拜す。巡堂一匝して、聖僧の板頭に至って排立す」と。

＊

○結制禮儀[下二ノ十一丈]云…至聖僧板頭掛立＝『勅修百丈清規』巻七（T48-1153b）に全く同じ文章が見える。

（古川周賢）

【六二】後堂板頭〈僧堂〉

①[敕修鈔十二ノ廿六丈]僧堂後門上間、是後堂板頭也。即住持對面位也。

＊

[『敕修鈔』十二の廿六丈]僧堂の後門の上間、是れ後堂の板頭なり。即ち住持の對面位なり。

＊

○[敕修鈔十二ノ廿六丈]僧堂後門上間是後堂板頭也＝『勅修百丈清規抄』一二巻・二十六丈裏（駒澤大学電子貴重図書）に「後門ノ上間ハ後堂の板頭ノソバゾ」とあり、ほぼ同文が見える。

②敕修清規[上二ノ十八丈]專使特爲受請人煎點云、於僧堂内、住持對面、設新命位。〈止此。〉是新命位、即後堂板頭也。

＊

『敕修清規』[上二の十八丈]、「專使、特に請を受くる人の爲に煎點」に云く、「僧堂の内に於いて、住持の對面に新命の位を設く」と。〈此こに止まる。〉是の新命の位は、即ち

後堂の板頭なり。

＊

○敕修清規［上二ノ十八丈］専使特爲受請人煎點云…設新命位＝『勅修百丈清規』巻三（T48-1125a）に全く同文が見える。

（冨増健太郎）

【六三】立僧板頭〈僧堂〉

①［敕修鈔八巻四十二丈○又同九巻六丈］立僧床、此方曰分手板也。蓋僧堂後堂首座分手位也。

＊

［『敕修鈔』八巻四十二丈○又同九巻六丈］立僧床、此方に分手板と曰うなり。蓋し僧堂の後堂首座の分手位なり。

＊

○立僧床［敕修鈔八巻四十二丈○又同九巻六丈］…首座分手位也＝『勅修百丈清規抄』巻八・四十二丈に「立僧床ヲバ此［東福］ニハ分手板ト云ゾ」とある。また九巻・六丈には「立僧床ハ、後堂ノ分手ゾ。分手ト〈バカリ〉云テハ定ルマイゾ」とあり、ほぼ同意の文章が見える。（駒澤大学電子貴重図書）

②敕修清規［下一ノ六丈］兩序章云、維那鳴椎俟首座唱食、至第三句將畢、轉身退、至立僧板頭立。

＊

『敕修清規』［下一の六丈］「兩序」の章に云く、「維那、椎を鳴らし、首座の唱食、第三句に至りて將に畢わらんとするを俟ち、身を轉じて退きて、立僧の板頭に至りて立つ」と。

＊

○敕修清規［下一ノ六丈］兩序章云…至立僧板頭立＝『敕修百丈清規』巻四（T48-1132b）に同文がある。ただし、「維那鳴椎」は書かれていない。

（冨増健太郎）

【六四】立僧首座床

①即立僧板頭也。

即ち立僧の板頭なり。

＊

（冨増健太郎）

【六五】分手板

①忠曰、立僧板、又名分手板。言後堂之分手位也。

＊

忠曰く、「立僧板、又た分手板と名づく。言うこころは後堂の分手位なり」と。

②東漸略清規云、燒香首座板、後堂板、分手板、聖僧板。〈詳禮則類、四處問訊處。〉

＊

『東漸略清規』に云く、「首座の板、後堂の板、分手板、聖僧板に燒香す」と。〈禮則類、「四處問訊」の處に詳らかなり。〉

＊

○東漸略清規云…聖僧板＝注にある「四処問訊」（『禅林象器箋』【七三七】）を見れば、「『東漸略清規』［一ノ十丈］四節別式云」とあり、『叢林拾遺』の「四節別式」を見れば「都寺進前焼香、四処或七処、首座板、後堂板、分手板、聖僧板也」（「東海庵蔵無著筆写本・複製本」国際禅学研究所所蔵）とあり、同意の文章が見られる。『禅籍目録』によれば、正しくは『叢林拾遺略清規』といい、別名として『東漸清規』・『建位清規』を挙げている。また、東漸健易（一三四四～一四二三）は、臨済宗聖一派、遠江（静岡県）の人。七歳で東福寺の華峰僧一に参じて剃髪受法す。のち建長寺に掛搭し相国寺にあって首板となる。明徳年間（一三九〇～一三九四）遠江の華蔵・摂津の広厳・備中の瑞光の諸寺に歴住し、京の聖寿・安国・東福（六七世）・南禅（七三世）に昇る。遺著に『東漸和尚語録』・『東漸和尚法語集』がある。（『禅学』p.277）

③東福清規作汾洲床。依音近訛文。惑人多矣。

＊

『東福清規』は「汾洲床」に作る。音近きに依りて文を訛る。人を惑すこと多し。

＊

○東福清規作汾洲床…惑人多矣＝『東福寺清規』（「東海庵蔵無著筆写本・複製本」国際禅学研究所所蔵）の九十一丈には「後堂の床、南方の床を、汾洲と曰うなり（後堂床、南方床、曰汾洲也）」とある。また、「首座床、後堂床、聖僧床、知客床、都寺床、汾洲床、此外自餘床無名。然乎」とある。

（冨増健太郎）

【六六】出入板〈僧堂〉

①［鈔八ノ八丈］聖僧龕左右、爲出入板。前堂首座、領自出入板已前大衆。後堂首座、領自出入板已後大衆也。

＊

『鈔』八の八丈］聖僧の龕の左右を、出入板と爲す。前堂首座は、出入板自り已前の大衆を領す。後堂首座は、出入板自り已後の大衆を領す。

＊

○［鈔八ノ八丈］聖僧龕左右…領自出入板已後大衆也＝『勅修百丈清規抄』八巻・八丈には「前板後板ハ、上間下間ノヤウデハナイ。中ニ出入板ガアリテ、其前ト後トヲ分テ、後堂ハ出入板ヨリ下ヲ管轄スルゾ」とあり、ほぼ同意の文章がみられる。（駒澤大学電子貴重図書）

②敕修清規兩序進退云、知事一班〈云云〉、從聖僧左、出住持前、兩展三禮。〈乃至〉退身從聖僧右、出聖僧前、大展三拜。

＊

『敕修清規』「兩序進退」に云く、「知事一班〈云云〉、聖僧の左從り、住持の前に出て、兩展三禮。〈乃至〉退身して聖僧の右從り、聖僧の前に出て、大展三拜」と。

＊

○敕修清規兩序進退云…大展三拜＝『勅修百丈清規』巻四（T48-1134a）に全く同文が見える。

③備用清規［二巻一丈］坐禪云、如衆頭首起位抽解、惟前堂首座、從住持面前出入。其餘皆從出入板、出入。

＊

『備用清規』［二巻一丈］の「坐禪」に云く、「衆頭首の位を起ちて抽解するが如き、惟だ前堂首座、住持の面前從り出入す。其の餘は皆な出入板從り出入す」と。

＊

○備用清規［二巻一丈］坐禪云…出入＝『禪林備用清規』巻二（X63-626b）に全く同文が見える。

④敕修清規［下ノ一ノ四十一丈］坐禪云、頭首大衆、並從出入板往來。

＊

『敕修清規』［下の一の四十一丈］の「坐禪」に云く、「頭首大衆は、並びに出入板從り往來すべし」と。

＊

○敕修清規［下ノ一ノ四十一丈］坐禪云…並從出入板往來。＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1142c）に全く同文が見える。

⑤南禪規式僧堂圖、録出入板。〈忠曰、此圖、二三四等、是被位也。非十六板首圖。〉

＊

『南禪規式』僧堂圖に、出入板を録す。〈忠曰く、「此の圖、二三四等は、是れ被位なり。十六板首の圖に非ず」と。〉

＊

○南禪規式僧堂圖、録出入板＝『南禪寺規式』（『五山之上瑞龍山太平興国南禪寺規式』、あるいは『瑞龍山南禪寺規式』「東海庵蔵無著筆写本・複製本」国際禪学研究所所蔵）乾の八十七丈に全く同じ図（左）が見える。

（冨増健太郎）

【六七】床前三淨頭〈僧堂〉

①敕修清規［下一ノ五十丈］日用軌範云、床前一尺爲三淨頭。一展鉢、二安袈裟、三頭所向。［敕修鈔十二ノ四十三丈］解云、展鉢者、食時展鉢於此也。安袈裟者、臥時、函櫃在脚邊。不便置袈裟。故安於此也。然床椽或怕盗竊。故但安函櫃上、而作在枕邊之想念、爲妙。頭所向者、臥時、床縁爲枕也。

＊

『敕修清規』［下一の五十丈］の「日用軌範」に云く、「床の前一尺を三淨頭と爲す。一

に鉢を展べ、二に袈裟を安じ、三に頭の向かう所なればなり」と。　［『敕修鈔』十二の四十三丈］解して云く、「鉢を展ずるは、食時に鉢を此こに展ずるなり。袈裟を安ずとは、臥す時、函櫃（＝単の後ろのおしいれ）脚邊に在り。袈裟を置くに便ならず。故に此こに安ず。然れども床縁、或いは盗竊（＝密かに盗む）を怕る。故に但だ函櫃の上に安じて、枕邊に在るの想念を作すを妙と爲す。頭の向かう所は、臥す時、床縁を枕と爲すなり」と。

＊

○敕修清規［下一ノ五十丈］日用軌範云…三頭所向＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1145c）に全く同文が見える。

○［敕修鈔十二ノ四十三丈］解云…床縁爲枕也＝『勅修百丈清規抄』巻一二・四十三丈に「床前―一展開鉢処チヤソ。二安―臥時函櫃ノ方ヲバ趾ニモフムカ、床縁ヲハ枕ニスルホトニ、袈裟ヲ置ソ。自然子イツタラウ間ニ失タラバナントセウソナレハサラハ函櫃ノ上ニ置テ頭ノ上ニ置タ念ヲナセチヤソ。起キバヤカテ把テ枕ノ方ノ床縁ニ置ケソ。三頭―枕ニナル方チヤホトニソ」とあり、ほぼ同意の文章がみえる。（駒澤大学電子貴重図書）

（冨増健太郎）

【六八】三條椽〈僧堂〉

①續燈録［八ノ九丈］西禪繼圖禪師章云、上堂〈云云〉、一一法上一如來、一一塵中一彌勒。若也不知、且向三條椽下六尺單前、快須究取。

＊

『續燈録』［八の九丈］「西禪の繼圖禪師章」に云く、「上堂〈云云〉、一一法上に一如來、一一塵中に一彌勒。若し也た知らずんば、且く三條椽下、六尺單前に向かって、快やかに須く究取すべし」と。

＊

○續燈録［八ノ九丈］西禪繼圖禪師章云…快須究取＝『続燈録』巻八（X78-688b）に全く同文が見える。また、西禪継図禪師とは、南岳下十一世の浮山法遠禪師の法嗣。

②碧巖録［三ノ十八丈］第二十五則評云、你諸人若見得、與蓮花峯菴主同參。其或未然、三條椽下七尺單前、試去參詳看。

＊

『碧巖録』［三の十八丈］第二十五則の評に云く、「你諸人、若し見得せば、蓮花峯菴主と同參なり。其れ或いは未だ然らずんば、三條椽下、七尺單前に、試みに去りて參詳して看よ」と。

＊

○碧巖録［三ノ十八丈］第二十五則評云…試去參詳看＝『碧巖録』巻三（T48-166c）に全く同じ文が見える。また文中の蓮花峯菴主とは、蓮華峰祥庵主のことで、一生山中に居して遂に山を下らなかったという。そして、この公案は「蓮華峰拈拄杖」として、『碧巖録』のほか『五燈会元』や『禅林類聚』などに収録されており、庵主の全生涯を示す公案として知られている。（『禅学』p.1309）

③　忠曰、僧堂之床、毎人座位、横占可三尺許。乃各各頭上之椽有三條。故言三條椽下。

〈七尺單前箋于座位、類單位處。〉

＊

忠曰く、「僧堂の床、毎人の座位、横に占むること三尺許。乃ち各各頭上の椽は三條有り。故に三條椽下と言う」と。〈「七尺單前」は、座位類の「單位」の處に箋す。〉

＊

○「単位」は『禅林象器箋』【一三七】に立項されており、その中で「七尺単」が説明されている。

（瀧玄浩）

【六九】地爐〈僧堂〉

①臨濟玄禪師録［卅八丈］云、師一日與河陽木塔長老、同在僧堂地爐内座〈云云〉

＊

『臨濟玄禪師録』［卅八丈］に云く、「師一日、河陽・木塔の長老と、同に僧堂地爐の内に在りて座す〈云云〉」と。

＊

○臨濟玄禪師録［卅八丈］云…地爐内座＝『臨済録』巻一（T47-503b）に全く同文が見える。また、『古尊宿語録』巻四（X68-30a）、『広燈録』巻一〇（X78-466a）、『指月録』巻一四（X83-560a）にも同文が見える。文中の「河陽」「木塔長老」については、ともに伝記不明（岩波文庫本 p.156）。

②僧寶傳［一冊卅八丈］清涼益禪師傳云、與善脩洪進、自漳州抵湖外。將發而雨。谿壯不可濟。顧城隅、有古寺。解包、休于門下。雨不止。入堂、有老僧坐地爐。見益而曰、此行何之。曰行脚去。又問、如何是行脚事。對曰、不知。曰、不知最親。益疑之。〈老僧地藏琛禪師也。〉

＊

『僧寶傳』［一冊卅八丈］「清涼の益禪師の傳」に云く、「善脩・洪進、漳州自り湖外に抵る。將に發せんとして雨ふる。谿壯んにして濟る可からず。城の隅を顧みるに、古寺有り。包を解いて、門下に休む。雨止まず。堂に入るに、老僧有りて地爐に坐す。益を見て曰く、『此の行、何くにか之く』と。曰く、『行脚し去る』と。又た問う、『如何なるか是れ行脚の事』と。對えて曰く、『知らず』と。曰く、『不知、最も親し』と。益、之を疑う」と。〈老僧は地藏の琛禪師なり。〉

＊

○僧寶傳［一冊卅八丈］清涼益禪師傳云、與善脩洪進…益疑之＝『禅林僧宝伝』巻四（X79-500c）に全く同様の文が見られるが、「爐」は「鑪」となっている。また文中の「清涼益禪師」とは、法眼宗の祖、法眼文益禪師（八八五～九五九）のことで、江蘇省清涼寺に住した。（『禅学』p.1229 ～ 1230）また、文中の「琛禪師」とは、桂琛禪師（八六七～九二八）のことで、玄沙師備の法嗣。漳州（福建省）の西石山に建てられた地蔵院に住した。更に、羅漢院にも住して大いに宗要を説いたので「羅漢桂琛」とも呼ばれた。（『禅学』p.262）

③五分律［卅六ノ九丈］云、聽因地作火爐。

＊

『五分律』［廿六の九丈］に云く、「地に因って火鑪を作すことを聽す」と。

＊

○五分律［廿六ノ九丈］…作火鑪＝『五分律』巻二六（T22-171a）に全く同文が見える。

（瀧玄浩）

【七〇】明窓〈僧堂　又方丈〉

①［太岳禾上説］僧堂之制大、而復前後架屋。堂内闇矣。故當前板首座板頭、西堂板頭之上、屋上開窓。〈如今煙窓。〉故第一座板、言明窓下。

＊

［太岳禾上の説］僧堂の制、大にして、復た前後に屋を架す。堂内闇し。故に前板首座の板頭、西堂の板頭の上に當たって、屋上に窓を開く。〈今の煙窓の如し〉故に第一座の板を、明窓下と言う。

＊

○［太岳禾上説］僧堂之制大…言明窓下＝典拠など詳細不明。

②舊説［碧古鈔九ノ廿一丈］云、僧堂宏構掩蔽、故作窓受明、名明窓也。

＊

舊説［『碧古鈔』九の廿一丈］に云く、「僧堂、宏構（＝大きな建物）掩蔽（＝覆い隠す）、故に窓を作りて明を受くるを、明窓と名づくるなり」と。

＊

○舊説［碧古鈔九ノ廿一丈］云…名明窓也＝『碧古鈔』とは『碧巌集古鈔』のこと。その影印本である『無刊記　碧岩鈔』第六冊の巻九・二十一丁表「維摩不二法門第八十四則」の「垂示」の割り注に、「寝堂は住持の平居の地なり。茶堂は必ず法堂の後、寝堂の前に在るなり。宏構掩蔽、故に窓を作りて明を受くるを、明窓と名づくるなり。方丈は今の茶堂なり。住持の礼を行ずる処なり。（寝堂、住持平居之地也。茶堂、必在法堂後、寝堂前也。宏構掩蔽、故作窓受明、名明窓也。方丈、今茶堂也。住持行礼之処也）」とある。（抄物小系18・VI、高羽五郎・一九八三・花園大学図書館所蔵）

③五燈會元［十三ノ六十一丈○傳灯廿ノ五丈少異］佛日空禪師章云、師十七歳、參夾山問答。山曰、冷灰裏有一粒豆爆。乃喚維那、明窓下安排著。師曰、未審明窓、還解語也無。山曰、待明窓解語、即向汝道。〈忠曰、維那掌僧堂事、故特喚命之也。〉

＊

『五燈會元』［十三の六十一丈○『傳灯』廿の五丈は少異す］「佛日の空禪師」の章に云く、「師十七歳、夾山に參じて問答す。山曰く、『冷灰裏に一粒の豆有って爆く。乃ち維那を喚びて、明窓下に安排著せしむ』と。師曰く、『未審し、明窓、還って語を解すや、也た無しや』と。山曰く、『明窓の語を解せんを待って、即ち汝に向かって道わん』と。〈忠曰く、「維那は僧堂の事を掌る、故に特に喚びて之に命ずるなり」と。〉

＊

○五燈會元［十三ノ六十一丈○傳灯廿ノ五丈少異］佛日空禪師章云…即向汝道＝『五燈会元』巻一三（X80-277a）

に「師十七歳、参夾山問答」を除き同文が見られる。上記の引用文の前に「時始年十三、後四年、参夾山」とあり、これを「師十七歳、参夾山問答」と改変したと思われる。『景徳伝燈録』巻二〇の「杭州仏日和尚」条では、問答の部分が「〔夾山〕曰、冷灰裏有一粒豆子爆。喚維那來、令安排向明窓下著。師却問、燈籠還解語也無。夾山曰、待燈籠解語即向汝道」（T51-361c~362a）となっており、後半の「明窓」が「燈籠」に変わっている。仏日空禅師は、曹洞宗の仏日本空禅師（生没年未詳）のこと。雲居道膺禅師の法嗣であり、浙江省仏日山に住した。（『禅学』p.1161）

④虚堂愚和尚寶林録［二ノ廿八丈］結夏小參云、若得箇挿手處、莫待期滿、便請説看。何故。蓋老僧急欲明窻下安排。

＊

虚堂愚和尚『寶林録』［二の廿八丈］「結夏の小參」に云く、「若し箇の手を挿す處を得ば、期の滿ずるを待つこと莫かれ。便ち請う、説け看ん。何故ぞ。蓋し老僧、急に明窻下に安排せんと欲すればなり」と。

＊

○虚堂愚和尚寶林録［二ノ廿八丈］結夏小參云…明窓下安排＝『虚堂和尚語録』巻二（T47-996b）に全く同じ文が見える。また文中の「虚堂愚和尚」とは、臨済宗楊岐派松原派の虚堂智愚（一一八五～一二六九）のこと。運菴普巖の法嗣で興聖寺に住し、後に報恩、顕孝、瑞巌、延福、宝林、育王、浄慈、径山に歴住した。宋の理宗、度宗の帰依を受け、その教化は盛んであった。（『禅学』p.844）

⑤諸祖偈頌［下之下ノ十一丈］慈受箴規云、虚占案分、挂物明窓、不合律儀、叢林安許。

＊

『諸祖偈頌』［下之下の十一丈］「慈受の箴規」に云く、「虚しく案分を占め、物を明窓に挂け、律儀に合わずんば、叢林安くんぞ許さん」と。

＊

○諸祖偈頌［下之下ノ十一丈］慈受箴規云…叢林安許＝『禪門諸祖師偈頌』巻四（X66-752a）に全く同じ文が見える。また、『緇門警訓』巻六（T48-1070a）にも同文が見られる。また文中の「慈受」とは、雲門宗の慧林懐深（一〇七七～一一三二）のことで、長蘆崇信の法嗣。江蘇省の資福寺に出世した後、蔣山の西庵に住す。その後、勅により河南省大相国寺慧林禅院に住した。（『禅学』p.98）

⑥　忠按慈受所言、似明窓（ママ）在壁。

＊

忠、慈受の言う所を按ずるに、明窓、壁に在るに似たり。

⑦又方丈有明窓（ママ）。　傳燈録［十五ノ十六丈］石霜諸禪師章云、師居方丈、有僧在明窓（ママ）外問。咫尺之間、爲什麼不覩師顔。師曰、我道徧界不會藏。

＊

又た方丈に明窓有り。　『傳燈録』［十五の十六丈］「石霜の諸禪師」の章に云く、「師、方丈に居す。僧有って明窓の外に在って問う、『咫尺（＝非常に近い距離）の間なるに、什麼と爲てか師の顔を覩ず』と。師曰く、『我は道う、徧界、會つて藏さず』と」と。

＊

○傳燈録［十五の十六丈］石霜諸禪師章云…不會藏＝『景徳伝燈録』巻一五（T51-321a）に全く同じ文が見える。また文中の「石霜諸禪師」とは、石霜慶諸（八〇七～八八八）のことで、青原下の道吾円智の法嗣。石霜山に二十年留まり、横にならずひたすら坐禅に励んだ。その姿が切り株のようであることから枯木衆と称された。唐の僖宗より紫衣を与えられるが固辞し、寂後普会大師と勅諡される。

（『禅学』p.260）

⑧　忠曰、此亦明窓於壁開者也。

＊

忠曰く、「此れも亦た明窓、壁に開く者なり」と。

（瀧玄浩）

【七一】明楼［日件下ノ卅丈ノ点］

＊

明楼［『日件』下の卅丈の点］

①［敕修鈔七ノ七丈〇又四ノ廿五丈〇又九ノ七丈］在僧堂前也。僧堂廣深。又前有外堂。故堂内昏暗。乃於堂前外堂間、高架樓、開窓接明。此云明樓。

［『敕修鈔』七の七丈〇又た四の廿五丈〇又た九の七丈］僧堂の前に在るなり。僧堂廣深たり。又た前に外堂有り。故に堂内昏暗なり。乃ち堂前外堂の間に於いて、高く樓を架け、窓を開きて明を接す（＝明かりをとる）。此れを明樓と云う。

＊

○明樓［日件下ノ卅丈ノ点］＝『日件』とは『臥雲日件録』を指すと思われるが、『続史籍集覧』第三冊「臥雲日件録抜尤」（近世デジタルライブラリー）では確認出来なかった。『臥雲日件録』とは、全四七巻、臨済宗相国寺の瑞渓周鳳（一三九二～一四七三・臨済宗夢窓派・臥雲人と号す）の日記。相国寺を経て鹿苑院に入り、天下の僧録司となって足利義正・義政の帰依を受けた著者が、文安三年（一四四六）四月から文明五年（一四七三）に到るまで、二十八年間にわたって記録したもの。当時の情勢や五山の消息を知るには何よりの資料であったが、大部分を散逸し、今日では惟高妙安が抜抄した「抜尤」（二巻）が残っているにすぎない（『禅学』p.148）。また、瑞渓は、義堂周信を慕っており、その『空華日工集』にならっている。内容は、禅宗関係に止まらず、日本史一般，特に学芸史料が多く貴重な記録とされている。

○［敕修鈔七ノ七丈〇又四ノ廿五丈〇又九ノ七丈］在僧堂前也＝『勅修百丈清規抄』巻七・七丈裏に「僧堂前ト云ハ、明楼ノ辺テアラウソ。僧堂ノ内ハ造リ籠テ暗イホトニ、前ニ高クアケテ作リ、窓ヲアケルソ。是ヲ明楼ト云。後ニモ照堂ト云テアルソ。」とあり、また、『勅修百丈清規抄』巻四・二五丈裏に「照堂トハ僧堂ノ後テ暗処ナルホトニ高アケテアカリヲ取ソ。説法スル処ナル故ソ。故ニ照堂ト云ソ。前ニハ明楼ト云カアルソ。其レモアカリヲトラウトテ造ル故ソ。」また、『勅修百丈清規抄』巻九・七丈表に「照堂ハ僧堂ノウシロニアルソ」とあり、「明楼」が僧堂の前にあることが確認出来る（駒澤大学電子貴重書庫）。文中の事項のうち【七四】「外堂」は『象器箋』に立項されている。

②物初賸語［十ノ十六丈］育王庫閣陰記云、更其制為閣。五間三正兩挾。前後横廡。前後穿堂。以覆砌級。如明樓之制。

＊

『物初賸語』［十の十六丈］「育王（＝阿育王寺）の庫閣の陰記」に云く、「其の制を更めて閣と為す。五間三正兩挾、前後横廡（＝ひさし）、前後穿堂（＝自由に通り抜けの出来る室）。以て砌級（＝階段下の石畳）を覆う。明樓の制の如し」と。

＊

○物初賸語［十ノ十六丈］育王庫閣陰記云…如明樓之制＝『物初賸語』（＝二五巻・臨済宗大慧派・物初大

観・一二〇一～一二六八の詩文集）巻一〇・十五丈表に「育王庫閣陰記」の項があり、全く同文が見える。文中の事項のうち【九二】「穿堂」は『象器箋』に立項されている。

③枯崖漫録［下ノ五丈］泉山子愚初禅師、承天寺僧堂記云、擁以照堂。明樓在前。

＊

『枯崖漫録』［下の五丈］泉山（＝福建省）の子愚の初禅師、「承天寺（＝湖北省の大刹）僧堂の記」に云く、「擁するに照堂（＝僧堂と洗面所の間の廊下）を以てし、明樓、前に在り」と。

＊

○枯崖漫録［下ノ五丈］泉山子愚初禅師…明樓在前＝『枯崖漫録』（＝三巻・宋・枯崖円悟編）巻三（X87-40b）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち【七七】「照堂」は『象器箋』に立項されている。

④臥雲日件録［上ノ卅四丈］云、東福衆寮、請頌題於夢巖。巖與垈明樓三字。蓋時明樓將崩也。垈支也。　又［下ノ三十丈］云、相國寺明樓崩矣。

＊

『臥雲日件録』［上の卅四丈］に云く、「東福の衆寮、頌題を夢巖（＝聖一派・夢巖祖應）に請う。巖、『明樓を垈う』の三字を與う。蓋し、時に明樓將に崩れんとするなり。垈は支なり」と。　又た［下の三十丈］云く、「相國寺の明樓崩る」と。

＊

○臥雲日件録［上ノ卅四丈］云…垈支也＝『臥雲日件録抜尤』（＝七四巻・瑞渓周鳳著）第八冊・「文安六年三月廿日条」に「昔東福衆寮作頌、就夢岩乞題。丶曰、垈明樓。蓋時有明樓傾斜之事也。衆皆不知垈字義、問夢岩始知之。又『日工集』中載此字。曰、垈支也云々。夢岩所謂垈明樓、蓋此義也。明樓將崩、故以木支之」とある。

○又［下ノ三十丈］云、相國寺明樓崩矣＝『臥雲日件録抜尤』第四七冊・「寛正元年七月十八日条」に「一向晩、東北有振動迸去。蔭凉以箴首座來問此散之声、似雷非雷。良久、出官來報、明樓崩矣」とある。

（荒木泰量）

【七二】明堂

①敕修請規［上二ノ七丈左］念誦巡堂之圖、僧堂與外堂之間左右、題云明堂。

＊

『敕修請規』［上二の七丈左］「念誦巡堂（＝僧堂内を巡ること）の圖」に、僧堂と外堂との間の左右に題して「明堂」と云う。

＊

○敕修請規［上二ノ七丈左］念誦巡堂之圖…題云明堂＝『勅修百丈清規』巻七「衆寮結解特為衆湯」（T48-1150c）の項に図が示してあり、「明堂」と記されている。文中の事項のうち【九九八】「念誦」・【六五四】「巡堂」・【七四】「外堂」はそれぞれ『象器箋』に立項されている。

②　忠曰、僧堂正前、高架明樓。［敕修十四ノ九丈］明樓左右空處曰明堂也。

＊

忠曰く、「僧堂の正前に、高く明樓を架く。［『敕修』十四の九丈］明樓の左右の空處を明堂

と曰う」と。

○［敕修十四ノ九丈］明樓左右空處曰明堂也＝『勅修百丈清規抄』巻一四・九丈裏に「十六板首鉢位之図本ニ見タリ。其ノ図ニ明堂トアルハ僧堂ト明樓トノ間ノアイタ処ヲ云ソ。照堂ト云ハ僧堂ト後架トノ間ニアルソ。後ニアルモノソ。」とある。『禅学』(p.1199) によれば、「僧堂の正面、明樓（堂前と外堂の間の採光通風のための樓）の左右の空処をいう。」とあり、僧堂と明樓との間の空間が「明堂」であることが確認出来る。文中の事項のうち【七一】「明樓」は『象器箋』に立項されている。

＊

（荒木泰量）

【七三】内堂

虚堂愚和尚浄慈録［三ノ五十四丈］結夏小參云、竺土大仙、於九夏之月、布漫天網子。籠絡天下衲僧。謂之禁足護生、尅期取證。致於南山内堂外堂、排單下榻箇箇如生鐵橛。

＊

虚堂愚和尚『浄慈録』［三の五十四丈］の「結夏小參」に云く、「竺土（＝インド）の大仙（＝大仙人の略、釈尊）、九夏（＝「きゅうげ」とも。九旬安居、雨安居の九〇日間をさす。）の月に漫天の網子を布き（＝天を覆う網を張る、師家が周到な機用で天下の僧を接化する）、天下の衲僧を籠絡（＝他人を自分の手の内にまるめこむ）す。之を禁足護生（＝仏弟子としての生を全うする）、尅期取證（＝期日を限り辨道修行する）と謂う。南山の内堂外堂に於いて、單を排し（＝ひろげ）榻（＝椅子）を下して箇箇、生鐵橛（＝混じりけのない堅牢な鐵の杭のことからびくともせず、動かないこと）の如くならしむることを致す」と。

＊

○虚堂愚和尚［三ノ五十四丈］浄慈録結夏小參云…排單下榻箇箇如生鐵橛＝『虚堂和尚語録』巻三（T47-1009a）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち【七四】「外堂」・【一二一二】「単」は『象器箋』に立項されている。

（荒木泰量）

【七四】外堂

①在僧堂外面。故曰外堂。又［敕修鈔八ノ十六丈］曰外僧堂。凡暫到客僧、皆食於此。知客接不時賓客。故不食於内僧堂、而食於此。又凡知事不時有所辨。故並就外堂鉢位而食。

＊

僧堂の外面に在り。故に外堂と曰う。又た［『敕修鈔』八の十六丈］外僧堂と曰う。凡そ暫到（＝暫くの間寺に滞在し修行して去っていく僧）の客僧は、皆な此に食す。知客（＝賓客の接待係）は不時の賓客を接す。故に内僧堂に食せずして、此こに食す。又た凡そ知事（＝禅院の運営係）は不時に辨ずる所有り。故に並びに外堂の鉢位（＝僧堂内の食事の時の各自の坐席）に就いて食す。

＊

○又［敕修鈔八ノ十六丈］曰外僧堂＝『勅修百丈清規抄』巻八・十六丈裏に「又外僧堂ニツク暫到ヲモ

サハクルソ。客僧ハ外僧堂テ食ソ。サルホトニ知客ハ内僧堂ニハツカイテ外僧堂テ食ソ。捻シテ隙ノ人役者ハ皆外堂ニツクソ。此ノ僧堂前ト云ハ外堂ノ事ソ」とあり、ほぼ同意の文章がみられる。（駒澤大学電子貴重書庫）文中の事項のうち【三二七】「暫到」・【四〇四】「知客」・【四三六】「知事」・【一四〇】「鉢位」は『象器箋』に立項されている。

②敕修清規［下一ノ四十五丈］赴粥飯云、都監寺・維那・直歳・侍者等位、在外堂上間。知客・知浴・知殿・化主・堂主等位、在外堂下間。

＊

『敕修清規』［下一の四十五丈］「赴粥飯」に云く、「都監寺（＝事務の総鑑）・維那（＝堂内の衆務の監督役）・直歳（寺院の整備、什物の整理役）・侍者（＝住持の給仕、補佐役）等の位は、外堂の上間に在り。知客・知浴（＝浴主）・知殿（＝仏殿の総鑑）・化主（＝住持）・堂主（＝延寿堂主の略、又は堂内の総鑑）等の位は、外堂の下間に在り」と。

＊

○敕修清規［下一ノ四十五丈］赴粥飯云…在外堂下間＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1144a）に全く同じ文章が見える。文中事項のうち【四四一】「都監寺」・【五二五】「維那」・【五一七】「直歳」・【四〇八】「知浴」・【四一一】「知殿」は、それぞれ『象器箋』に立項されている。

（荒木泰量）

【七五】知客板頭　〈忠曰、在外堂後門内南邊。〉

＊

知客の板頭　〈忠曰く、「外堂の後門内の南邊に在り」と。〉

＊

○【七四】「外堂」は『象器箋』に立項されている。

敕修清規［上二ノ十三丈右］受嗣法人煎點曰、住持引手揖煎點人坐。位居知客板頭。　又［上二ノ十八丈］専使特爲受請人煎點云、住持對面設新命位、堂外知客板頭設専使位。

＊

『敕修清規』［上二の十三丈右］「嗣法の人の煎點（＝茶礼の儀式）を受く」に曰く、「住持手を引きて煎點の人を揖して坐せしむ。位、知客の板頭に居す」と。　又た［上二の十八丈］「専使（＝特別派遣の使者）、特に受請（＝拝請を受けること）の人の爲に煎點す」に云く、「住持の對面に新命の位を設け、堂外の知客の板頭に専使の位を設く」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十三丈右］受嗣法人煎點曰…位居知客板頭＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1123b）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【八七六】「嗣法」・【一三三九】「煎点」は『象器箋』に立項されている。

○又［上二ノ十八丈］専使特為受請人煎點云…堂外知客板頭設専使位＝『勅修百丈清規』巻三（T48-1125 a）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【五四六】「専使」は『象器箋』に立項されている。

（荒木泰量）

【七六】知客床

［敕修鈔五ノ卅九丈］即知客板頭也。

＊

［『敕修鈔』五の卅九丈］即ち知客の板頭なり。

＊

○［敕修鈔五ノ卅九丈］即知客板頭也＝『勅修百丈清規抄』巻五・三十九丈裏に「知客床ノ様十処テ解包ソ」とある（駒澤大学電子貴重書庫）。また前項【七五】「知客板頭」参照のこと。

（荒木泰量）

【七七】照堂

①舊説曰、［敕鈔七ノ七丈○同九ノ七丈］照堂在僧堂之後。若住持事繁、不遑上堂、則［敕鈔四ノ廿五丈］立僧首座、令掛牌、代住持、［敕鈔九ノ七丈］入室普説。皆於是處。故堂内架法座矣。此屋連僧堂邃闇。故高其制、而取敞明。因名照堂。後來此處構尿所、未知其是也。

＊

舊説に曰く、「［『敕鈔』七の七丈○同九の七丈］照堂、僧堂の後へに在り。若し住持事繁くして、上堂に遑あらざるときは、則ち［『敕鈔』四の廿五丈］立僧首座、牌を掛けしめて、住持に代わって、［『敕鈔』九の七丈］入室普説す。皆な是の處に於いてす。故に堂内に法座を架く。此の屋、僧堂に連なって邃闇（＝くらいこと）なり。故に其の制を高うして、敞明（＝あかるいこと）を取る。因りて照堂と名づく。後來、此の處に尿所を構う。未だ其の是なることを知らざるなり。

＊

○［敕鈔七ノ七丈・同九ノ七丈］照堂在僧堂之後＝『勅修百丈清規抄』巻七・七丈裏に「僧堂前ト云ハ、明楼ノ辺テアラウソ。僧堂ノ内ハ造リ籠テイホトニ。前ニ高クアケテ作リ、窓ヲアケルソ。是ヲ明楼ト云。後ニモ照堂ト云テアルソ」とあり、また『勅修百丈清規抄』巻九・七丈表に「照堂ハ僧堂ノウシロニアルソ」とあり同文が確認出来る。（駒澤大学電子貴重書庫）

○［敕鈔四ノ廿五丈］立僧首座、令掛牌、代住持＝『勅修百丈清規抄』巻四・廿五丈裏に「立僧首座代住持而説法スル処ソ。立僧首座ニハ住持ニモヲトラヌ人カナルモノソ」とある（駒澤大学電子貴重書庫）。

○［敕鈔九ノ七丈］入室普説＝『勅修百丈清規抄』巻九・六丈裏に「為衆入室モ普説モセウスホト二ソ」とあり、七丈表に「今此（僧堂）ニ小便所ヲ作ハヘステ定テアラウテハナイソ。僧堂ハ作リコウテ、内カ暗サニ前ニハ明楼ト云テ高アケテアカリテトヲルソ。後ニハ照堂トテ挙テ作ソ」とある（駒澤大学電子貴重書庫）。

②又［敕鈔九ノ八丈］今時有法堂後、造照堂者。固不足則也已。

＊

又［『敕鈔』九の八丈］今時、法堂の後へに、照堂を造るもの有り。固とに則とるに足らざるのみ」と。

＊

○又［敕鈔九ノ八丈］今時有法堂後…固不足則也已＝『勅修百丈清規抄』巻九・八丈表の上欄に「今時以昭堂、移設法堂後面者、大錯也。」という無著の書き込みがある（駒澤大学電子貴重書庫）。

③枯崖漫録［下ノ五丈］子愚初禅師、承天寺僧堂記云、擁以照堂、［九ノ八丈］明樓在前。

＊

『枯崖漫録』［下の五丈］子愚の初禅師、「承天寺僧堂の記」に云く、「擁するに照堂を以てし、［九の八丈］明樓は前に在り」と。

＊

○枯崖漫録［下ノ五丈］子愚初禅師…明樓在前＝『枯崖漫録』巻三（X87-0040a）に全く同じ文章が見える。

○［九ノ八丈］明樓在前＝『敕修百丈清規抄』巻九・八丈表の本文外に「僧堂前に明楼有り、後ろに照堂有り（僧堂前有明楼、後有照堂）」とあり、同意の文章が見える（駒澤大学電子貴重書庫）。

④勅修清規［下一ノ卅九丈］方丈特爲新掛搭茶云、至日侵晨洗面時、備卓子筆硯、列照堂請、各於名下書云、某甲謹拜尊命。

＊

『勅修清規』［下一の卅九丈］「方丈特爲新掛搭の茶」に云く、「日に至って侵晨（夜明け前）洗面の時、卓子（＝机）筆硯を備え、照堂に列して請す。各おの名の下に於いて書して云え、『某甲謹拜尊命』と」と。

＊

○勅修清規［下一ノ卅九丈］方丈特爲新掛搭茶云…某甲謹拜尊命＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1142b）に全く同じ文章が見える。

④破菴先禅師行状［録四十四丈○又枯崖中ノ二丈］云、至平江萬壽旦過、値天大雪、夜坐乃自念言、行脚十年矣。此回若不徹去、又是虚生浪死。正悶悶間、不覺鐘動趍後架、舉頭見照堂二字、疑情、頓釋、

＊

破菴先禅師（＝破菴祖先禅師・一一三六～一二一一、臨済宗楊岐派・破菴派の祖）「行状」［『録』四十四丈○又た『枯崖』中の二丈］に云く、「平江萬壽の旦過に至って、天大いに雪ふるに値う。夜坐、乃ち自ら念言すらく、『行脚すること十年。此の回、若し徹し去らずんば、又た是れ虚生（＝むなしくいきること）浪死（＝無駄に死ぬこと）なり』と。正に悶悶の間、覺えず鐘動きて後架に趍ぶ。頭を舉して照堂の二字を見て、疑情、頓に釋く」と。

＊

○破菴先禅師行状［録四十四丈○又枯崖中の二丈］云…疑情頓釋＝『破菴祖先禅師語録』（X70-0219b）に全く同じ文章が見える。また、『枯崖漫録』巻中（X87-0032a）に「此くの如く思量し、心中躁悶す。遂に行きて僧堂の後に入り去り、忽然として頭を挙して『照堂』の二字を見、従前の疑情、頓に釈す（如此思量、心中躁悶。遂行入僧堂後去、忽然挙頭見照堂二字、従前疑情頓釈）」という、ほぼ同意の文章が見える。

⑤　敕修清規［上二ノ六丈］念誦云、先鳴方丈板、照堂板

＊

『敕修清規』［上二の六丈］の「念誦」に云く、「先ず方丈の板、照堂の板を鳴らす」と。

＊

○敕修清規［上二ノ六丈］念誦云…照堂板＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1121a）に全く同じ文章が見える。

⑥

解者［鈔四ノ廿六丈］曰、僧堂後、衆寮後、皆有照堂。而今鳴衆寮之照堂板也。

＊

解者（げしゃ）『鈔（しょう）』四の廿六丈］曰く、「僧堂の後、衆寮の後に、皆な照堂有り。而今（いま）は衆寮の照堂の板を鳴らすなり」と。

＊

○解者［鈔四ノ廿六丈］曰…而今鳴衆寮之照堂板也＝『勅修百丈清規抄』巻四・二十五丈裏から二十六丈表に「照堂ハ衆寮ニモアラウス。僧堂ニモアラウスソ。僧堂ノ後ノ照堂ニハ（中略）此照堂ハ衆寮ノ照堂デアルベキソ。此ノ板ヲ鳴ス時、大衆報ズト心得テ集ソ」とあり同意の文章が見られる（駒澤大学電子貴重書庫）。

⑦

忠曰、但是僧堂有照堂。不用曲説。雲章解聖節巡廊鳴板曰、巡廊鳴板者、先鳴方丈板、次鳴照堂板、次鳴衆寮首座寮等板。〈此止。〉雲章已照堂之次、別言衆寮、則可知照堂板、但是僧堂後照堂板耳。故不用衆寮後有照堂之説。

＊

忠曰く、「但だ是れ僧堂に照堂有り。曲説を用いず。雲章（うんしょう）（＝雲章一慶・一三八六～一四六三・臨済宗聖一派）、『聖節（せいせつ）』の巡廊鳴板（じゅんろうめいばん）を解して曰く、『廊を巡りて板を鳴らすとは、先ず方丈の板を鳴らし、次いで照堂の板を鳴らし、次いで衆寮首座寮等の板を鳴らす』と。〈此こに止まる。〉雲章、已に照堂の次に、別に衆寮を言わば、則ち知るべし、照堂の板は、但だ是れ僧堂の後の照堂の板のみなることを。故に『衆寮の後に照堂有り』というの説を用いず」と。

＊

○雲章解聖節巡廊鳴板曰…次鳴衆寮首座寮等板＝『勅修百丈清規抄』巻一・二十三丈裏に同文が見える（駒澤大学電子貴重書庫）。文中の語句のうち【九五二】「聖節」は、本書中に立項されている。

⑧

舊説［敕鈔九ノ七、八丈○又四ノ廿六丈］曰、今時稱影堂爲照堂。實無本據。或云照當作昭。乃昭穆之謂也。本當謂昭穆堂、而畧稱昭堂。此説亦杜撰矣。

＊

舊説［『敕（ちょく）鈔（しょう）』九の七、八丈○又四の廿六丈］に曰く、「今時、影堂（えいどう）を稱して照堂と爲す。實に本據（ほんきょ）無し。或いは云く、『照は當に昭に作るべし。乃ち昭穆の謂（いわれ）なり。本（も）と當に昭穆堂（しょうぼくどう）と謂うべきも、畧して昭堂と稱す』と。此の説も亦た杜撰なり」と。

＊

○舊説［敕鈔九ノ七八丈○又四ノ廿六丈］曰…此説亦杜撰矣＝『勅修百丈清規抄』巻九・七丈裏～八丈表に「昭ノ字ナラバ昭穆ノ心デヨイソ。昭穆ハ大祖廟ニ合食スル時ノコトソ。穆ハ北ニ向テツツシムナリカアルソ。昭ハ南ニ向テ陽ノ方ヘ向ホトニソ。昭ハ尊テ、穆ハ畢テハヘシテナイ。文王ハ穆位、武王ハ昭位テアルホトニソ。誰ソ丁度モノ知リカ御影ノアル處ヲ照堂トカイタホトニ、ソレカラカク款ソ。是ハ聯火カアルホトニチカウタソ。衆寮ノ後ニモ照堂カアルトミヘタソ」とあり、また、『勅修百丈清規抄』巻四・二十六丈表に「照堂ト云ハ、マキレタケナソ。昭穆ヲヲク処テアルホトニ、昭穆堂ト云ヘキヲ畧シテ照堂ト云カ。ソレナラハ照ノ字テアルマイソ。此照堂ハ衆寮ノ照堂テアルヘキソ」とある（駒澤大学電子貴重書庫）。

⑨

忠曰、大應國師建長録［十八丈］、有新開昭堂陞座。乃作昭字。蓋日本禪林、有忌火字、去列火者。如照牌作昭牌。録者從作昭堂乎。此陞座語中、不亦見祖塔饗堂事。又無文

印癡絶行状曰、學徒中分遺骨、塔于照堂窣堵波之左。〈此止。〉癡絶録趙若琚撰行状、作中分其半、建塔徑山菖蒲田玉芝菴。〈此止。〉此亦非謂影堂也。故影堂曰照堂、訛矣。余辯復見享堂處。

＊

忠曰く、「大應國師（＝南浦紹明禅師・一二三五～一三〇九・臨済宗）『建長録』［十八丈］に、『新たに昭堂を開く陞座』有り。乃ち昭の字に作る。蓋し、日本禅林に、火の字を忌み、列火を去る者有り。照牌を昭牌に作るが如し。録する者、従りて昭堂に作る。此の陞座の語の中に、亦た祖塔饗堂（＝祖宗の木主を供養するところ）の事を見ず。又た『無文印』の『癡絶（＝癡絶道冲禅師・一一六九～一二五〇・臨済宗）の行状』に曰く、『學徒、遺骨を中分して、照堂窣堵波（＝卒塔婆）の左に塔す』と。〈此ここに止まる。〉『癡絶録』の趙若琚が撰する『行状』に、『其の半を中分して、塔を徑山の菖蒲田の玉芝菴に建つ』に作る。〈此ここに止まる。〉此れ亦た影堂を謂うに非ざるなり。故に影堂を照堂と曰うは訛れり。余が辨、復た『享堂』の處に見えたり」と。

＊

○大應國師建長録［十八丈］有新開昭堂陞座＝『開山録』（『円通大応国師語録』）「巨福山建長禅寺語録」巻下・九十三丈裏に同文が見える（国立国会図書館デジタル化資料）。

○又無文印癡絶行状曰…塔于照堂窣堵波之左＝『無文印』二十巻は、無文道璨（？～一二七一・臨済宗大慧派）の語録。同書には、全七冊本である宋刊本と、全二冊本（貞享二年（一六八五）寺西甚次郎刊本）の和刻本が存する。引用は、『無文印』巻四・十四丈表に全く同文が見える（国立国会図書館デジタル化資料）。

○癡絶録趙若琚撰行状…建塔徑山菖蒲田玉芝菴＝『癡絶道冲禅師語録』巻二（X70-75c）に全く同文が見える。文中の「享堂」は『象器箋』の【三九】に立項されている。

（彦坂宗俊）

【七八】後架

①［勅修鈔ノ十四ノ九丈］照堂之後、有後架。大衆洗面之處。

＊

［『勅修鈔』の十四の九丈］照堂の後に、後架有り。大衆洗面の処なり。

＊

○［勅修鈔ノ十四ノ九丈］照堂之後…大衆洗面之處＝『勅修百丈清規抄』巻一四・九丈裏に「照堂ト云ウハ、僧堂ト後架トノ間ニアルゾ。後ニアルモノソ」とあり、照堂の後ろに後架があると書かれている事が分かる（駒澤大学電子貴重図書）。

②永平正法眼藏［八丈］洗面章云、雲堂洗面處者、在後架裡。後架照堂之西。

＊

永平（＝永平寺開山の道元禅師のこと）の『正法眼藏』［八丈］の「洗面」の章に云く、「雲堂の洗面處は、後架裡に在り。後架は照堂の西に在り」と。

＊

○永平正法眼藏［八丈］洗面章云…堂之西＝『正法眼藏』洗面の章（T82-206c）に同文が見える。

③敕修清規［下一ノ四十六丈］日用範軌云、取手巾轉身下地、巾搭左手、念偈、云云。輕手揭簾。出後架。輕手取盆洗面。

＊

『敕修清規』［下一の四十六丈］の「日用軌範」に云く、「手巾を取りて、身を転じて地に下り、巾をば左手に搭せて、偈を念じて、云云。軽手に簾を掲げて後架に出で、軽手に盆を取りて洗面す」と。

＊

○敕修清規［下一ノ四十六丈］取手巾…盆洗面＝『勅修百丈清規』（T48-1144b）に全く同文が見える。

④瑩山清規［上ノ六丈］云、往後架洗面、往東司屎。

＊

『瑩山清規』［上ノ六丈］に云く、「後架に往きて洗面し、東司に往きて屎す」と。

＊

○瑩山清規［上ノ六丈］云…東司屎＝『瑩山清規』「日中行事」の章（T82-425c）に全く同文が見える。

⑤傳燈録［十二ノ廿四丈］興化存奬禪師章云、師謂衆曰、我只聞長廊也喝、後架也喝。諸子汝莫盲喝亂喝。

＊

『傳燈録』［十二の廿四丈］「興化の存奬禪師（＝臨済宗・八三〇～八八八）」の章に云く、「師、衆に謂いて曰く、『我只だ聞く、長廊にも也た喝し、後架にも也た喝すと。諸子汝、盲喝亂喝すること莫かれ』と」と。

＊

○傳燈録［十二ノ廿四丈］興化存奬禪師章云…諸子汝莫盲喝亂喝＝『景徳伝燈録』（T51-295b）に同文が見える。

⑥廁亦有後架。東淨處、引幻住清規。

＊

廁にも亦た後架あり、「東淨」の處に、『幻住清規』を引く。

＊

○「東淨」は『象器箋』の【一一六】に立項されている。

（水野隆道）

【七九】廊下

①聯燈會要［十ノ廿丈］興化存奬禪師章云、師謂衆云、我聞長廊下也喝、後架也喝。諸子莫盲喝亂喝。

＊

『聯燈会要』［十の廿丈］「興化存奬（＝臨済宗・八三〇～八八八）禪師」章に云く、「師、衆に謂いて云く、『我聞く、長廊下にも也た喝し、後架にも也た喝すと。諸子、盲喝乱喝す

ること莫かれ』と」と。

＊

○聯燈会要［十ノ廿丈］興化存奬禪師章…諸子莫盲喝亂喝＝『聯燈会要』巻一〇（X95-95a）に同文が見える。

②日用軌範［勅修下一ノ五十丈］云、不得衲祖歸僧堂。并廊下行。

＊

『日用軌範』［『勅修』下一の五十丈］に云く、「衲祖（＝普段着）して僧堂に歸り、并びに廊下に行くことを得ず」と。

＊

○日用軌範［勅修下一ノ五十丈］云…廊下行＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1146a）に全く同文が見える。

③佛祖通載［廿一ノ十一丈］海雲簡禪師傳云、一日於廊下、逢數僧。〈云云〉

＊

『佛祖通載』［廿一の十一丈］「海雲の簡禪師（＝海雲印簡・臨済宗・一二〇二～一二五七）の傳」に云く、「一日廊下に於いて、數僧に逢う。〈云云〉」と。

＊

○佛祖通載［廿一ノ十一丈］海雲簡禪師傳云…逢數僧＝『仏祖歴代通載』巻二一（T49-703c）に全く同文が見える。

④東海一漚集［十一丈］自暦譜云、延文二年冬、吉祥寺廊下庫司、災。

＊

『東海一漚集』［十一丈］「自暦譜」に云く、「延文二（一三五七）年冬、吉祥寺の廊下・庫司、災（＝火事）す」と。

＊

○東海一漚集［十一丈］自暦譜云…災＝『五山文学全集』第二巻・『東海一漚集』巻之五「自暦譜」（p.157）に同文が見られる。『東海一漚集』は、中巌円月（一三〇〇～一三七五・大慧派・東陽徳煇の法嗣）の著。全五巻からなり、巻一に古詩・律詩・絶句・賛、巻二に疏・説・上梁文・銘、巻三に表・書・記・論・雑文・祭文、巻四に中正子一〇篇と自跋、巻五に自暦譜と東陽徳輝等の諸偈、校者桂洲の跋を収める。（『禅学』p.909）

⑤外典亦有廊下。　説苑［八ノ十三丈］云、介子推、行年十五而相荊。廊下有二十五俊士、堂上有二十五老人。仲尼曰、合二十五人之智、智於湯武。并二十五人之力、力於彭祖。

＊

外典にも亦た廊下有り。　『説苑』［八の十三丈］に云く、「介子推（＝春秋時代の人）、行年十五にして荊（＝楚の古名）に相（＝大臣）たり。廊下に二十五の俊士あり、堂上に二十五の老人あり。仲尼の曰く、『二十五人の智を合せば、湯武（＝湯王と武王のこと）よりも智あらん。二十五人の力を并せば、彭祖（＝七百余歳まで生きた伝説の長寿者）よりも力あらん』と」と。

＊

○説苑［八ノ十三丈］云…力於彭祖＝『説苑』巻八（『四庫全書』p.14）にほぼ同文が見える。

⑥ 常朝録［白孔九十九ノ十四丈］云、元稹爲翰林承旨。朝退、行至廊下時、初日映九英梅、隙光射稹。

＊

『常朝録』［『白孔』九十九の十四丈］に云く、「元稹（＝唐代の詩人・七七九～八三一）、翰林（＝高名な学者を集め文学等の講究する役職名）承旨（＝天子の命を受けること）と為る。朝より退きて、行きて廊下に至る時、初日、九英梅（＝南京梅・蝋梅）に映じ、隙光（＝隙間から漏れる光）稹（＝元稹のこと）を射す」と。

＊

○常朝録［白孔九十九ノ十四丈］云…隙光射稹＝『白孔六帖』巻九九（『四庫全書』p.16a）に同文が見える。

（水野隆道）

禪林象器箋巻第二

神京妙心龍華沙懣道忠無著甫輯

○殿堂類下

【八〇】齋堂

○底本の巻二の巻頭二丁分は、書体が無著禅師の自筆ではなく補筆となっている。この「斎堂」条は全部が補筆分となっている。

①忠曰、齋堂即食堂也。食堂即僧堂也。今日本黄檗山、僧堂外別設齋堂。蓋大清禪林如是、非古也。

＊

忠曰く、「齋堂は即ち食堂なり。食堂は即ち僧堂なり。今、日本の黄檗山（＝京都宇治黄檗山万福寺）、僧堂の外に別に齋堂を設く。蓋し大清（＝中国）の禪林は是くの如し、古きにあらざるなり」と。

＊

○食堂は【八一】、僧堂は【五〇】に見える。

②佛祖統紀云、司馬光、暇日遊洛陽諸寺。廊廡寂寂、忽聲鐘代鼓。至齋堂、見沙門端坐黙黙方進匕箸。光欣然謂左右曰、不謂三代禮樂在緇衣中。

＊

『佛祖統紀』に云く、「司馬光、暇日に洛陽（＝河南省）の諸寺に遊ぶ。廊廡（＝回廊。建物の周囲）寂寂（＝ひっそり）たり、忽ち鐘を聲らし鼓を代つ。齋堂に至るに、沙門の端坐して黙黙として方に匕箸（＝サジとハシ）を進むるを見る。光（＝司馬光）欣然（＝嬉しげに）として左右（＝供の者）に謂いて曰く、『謂ざりき三代（＝聖人が国を治めた夏・殷・周の古代三王朝）の禮樂（＝秩序軌範）、緇衣（＝仏教）の中に在らんとは』と」と。

＊

○仏祖統紀云司馬光暇日遊洛陽諸寺…不謂三代礼楽在緇衣中＝『仏祖統紀』巻四五（T49-412c）に「暇日」以下、そのままの文章が見える。ただ、一字だけ文字の異同があり、底本では「聲鐘代鼓」となっているが、『仏祖統紀』では「伐鼓」に作っており、明らかに『禪林象器箋』の誤写である。よって、書き下し文では、「伐」の意味で「うつ」と読んだ。司馬光（一〇一九～一〇八六）、姓は司馬、

諱は光、字は君実。北宋の儒者で、官吏としては宰相にまでなった。新法党の王安石に反対した旧法党の一人として知られる。その著に『資治通鑑』二九四巻がある。尚、「三代の礼楽が仏教に具わっている」という、儒者が仏教を讃えたとされる発言としては、『勅修百丈清規』巻八付録の欧陽玄撰「勅修百丈清規叙」（至元二年・一三三六撰述）に、「程明道先生、一日、定〔林〕寺を過ぎり、偶たま斎堂の儀を見て、喟然として嘆じて曰く、『三代の礼楽、尽く是こに在り』と（程明道先生、一日過定〔林〕寺、偶見斎堂儀、喟然嘆曰、三代礼楽尽在是矣）」（T48-1159a）とあるように、明道先生こと、北宋の儒者である程顥（一〇三二～一〇八五）が吐いたとされる言葉が有名である。程顥が同様の発言をしたという記事は、明代に出された『帰元直指集』巻下「儒宗参究禅宗四四」（X61-460b）や『仏法金湯編』巻一二「程顥・頤」条（X87-423b）にも収載されている。

（矢多弘範）

【八一】食堂

○底本の巻二の巻頭二丁分は、書体が無著禅師の自筆ではなく補筆となっている。この「食堂」条では①～⑥が補筆分となっている。

①忠曰、禪林僧堂、本食堂也。食堂即齋堂也。

＊

忠曰く、「禪林の僧堂は、本と食堂なり。食堂は即ち齋堂なり。

＊

○僧堂は【五〇】、斎堂は【八〇】に見える。

②蒲室集揚雲巖居士作蒋山僧堂偈序云、寺古制、皆有僧堂。然惟會食而已。至於寢處、則有別室。如今教律院、猶然也。獨禪林、自唐開元中、百丈海禪師作清規、設長連牀於堂、率衆盡入居之。牀端爲木函盈赤、以貯三衣一鉢、外無餘畜也。坐臥起居有時。凡晨昏午夜、以及旦、長老首座、加巡警焉。惰者罰、不率教而擯之。至於禪寂、訖若枯株、湛然止水。衆千百肅如也。由貞元距今、六百年、他規盡廢、僧散處寺内外。甚者一己占屋數十間、積産業以萬計。輿馬僕從、擬巨室。冒刑法、汙宗教、有不可勝言者矣。而堂之規、猶獨得如古。使天下之凡若僧者、盡撤其私室、禁而私畜、而會之于一堂、申以吾祖之規教之、庸有如前所陳之敝乎。而僧者、能終身不越堂戸、繼之以不昏不亂、虚而照、寂而應、超生死、越三界。雖古聖賢、不出乎是也。

＊

『蒲室集』「揚雲巖居士、蒋山の僧堂を作る偈の序」に云く、「寺の古制、皆な僧堂有り。然れども惟だ會食するのみ。寢處に至りては、則ち別室有り。如今の教・律院、猶お然り。獨り禪林、唐の開元中（七一三～七四一）に、百丈の海禪師、清規を作りて自り、長連牀を堂に設け、衆を率いて盡く入れて之に居らしむ。牀端に木函の盈赤（美しい赤色）なるを爲りて、以て三衣一鉢を貯え、外か餘畜（蓄）無し。坐臥起居、時有り。凡そ晨昏午夜より、以て旦（夜明け）に及ぶまで、長老首座、巡警を加う。惰する者をば罰し、教に率わざるをば之を擯す。禪寂に至りては、訖として枯株の若く、湛然として止水のごとし。衆は千百なれども肅如たり。貞元（＝唐の年号・七八五～八〇五）由り今に距るまで、六百年、他の規は盡く廢し、僧は寺の内外に散處す。甚しき者は、一己に屋を占むること數十間、産業を積むこと萬を以て計る。輿馬僕從、巨室（＝権勢がある家）に擬（模倣）す。刑法を冒し、宗教を汙すこと、勝げて言う可からざる者有り。而して堂の規は、猶お獨り古の如く

なることを得たり。天下の凡そ僧の若くなる者をして、盡く其の私室を撤て、而の私畜を禁じて、之を一堂に會し、申ぬるに吾が祖の規を以て之を教えば、庸ぞ前に陳する所の如き敝有らんや。而して僧という者は、能く身を終うるまで堂戸を越えず、之に繼ぐに不昏不亂を以てし、虚にして照、寂にして應じ、生死を超え、三界を越ゆ。古の聖賢と雖も、是れを出でざるなり。

＊

○蒲室集揚雲巖居士作蒋山僧堂偈序云…雖古聖賢、不出乎是也＝底本に丁数の書き入れが無い。『蒲室集』は笑隠大訢（一二八四～一三四四）の詩文集である。至元刻本『蒲室集』十五巻・『書問』一巻・『疏』一巻・『笑隠和尚語録』不分巻は、北京図書館に所蔵されており、日本の大東急記念文庫や駒澤大学図書館にも元明の刊本が残されている。笑隠の詩文は、日本中世以降の禅門において珍重され、特に『蒲室集疏』は禅門における四六駢儷文の模範とされ、「蒲室疏法」として影響を与えた。そのため、日本でも翻刻されており、延文四年（一三五九）年跋刊の五山版の他、承応二年（一六五三）年や明和三年（一七六六）年の和刻本があり、その他、抄本や末釈が数多く残されている。駒澤大学所蔵の明初刊本は、「駒澤大学電子貴重書庫」の「禅籍善本図録」に画像が掲載されており閲覧が可能である。また、承応二年の和刻本の影印が『和刻影印近世漢籍叢刊・思想四編』第六冊（中文出版社・一九八四）に収載されている。ここに引かれている「揚雲巖居士作蒋山僧堂偈序」は、『蒲室集』十五巻の中の、巻七（明初刊本、承応刊本・8a～9a）に載せられてる同題の「偈序」の前半部分である。「擬巨室」の「擬」が元々「儗」となっているなど、異体字はあるが、全く同文である。終わり近くの「越三界」を底本は「三界を越え」と読んでいるが、和刻本の『蒲室集』は「三界を越ゆ」と返り点が付されており、前後の意味から言って和刻本の読みが正しい。よって読みを改めた。文中の事項のうち、【五〇】僧堂・【一三七六】三事衲（三衣）・【二七六】長老は、『象器箋』の中に立項されている。

③南山教誡律儀［賛行ノ中ノ廿五丈］二時食法云、初入食堂、隨門頰擧足。出時亦爾。

＊

南山『教誡律儀』［『賛行』の中の廿五丈］の「二時食の法」に云く、「初め食堂に入るに、門頰（＝門脇の壁）に隨いて足を擧ぐ。出ずる時も亦た爾り。

＊

○南山教誡律儀…＝南山律宗を開いた道宣（五九六～六六七）の著述である『教誡新学比丘行護律儀』一巻の「二時食法第八」全六十条の「十六」（T45-871c）に、全く同文が見える。和刻として、延宝七（一六七九）年、貞享三（一六八六）年、元禄三（一六九〇）年、延享二（一七四五）年の刊本が存する（『仏書解説大辞典』第二巻・p.263）。［賛行ノ中ノ廿五丈］とは、本朝の円鏡述『教誡律儀賛行鈔』三巻（『仏書解説大辞典』第二巻・p.263、『日本大蔵経』増補改訂・第六六巻・戒律宗章疏一、所収）の、巻中の二十五丁の意。

④釋氏要覽［下ノ卅四丈］云、毘奈耶云、給狐長者、造寺後作念、若不彩畫、便不端嚴。即白佛。佛言、隨意。未知畫何物。佛言、云云。食堂畫持餅藥叉。

＊

『釋氏要覽』［下の卅四丈］に云く、「毘奈耶に云く、『給狐長者、寺を造りて後、念を作すらく、「若し彩畫せずんば、便ち端嚴ならじ」と。即ち佛に白す。佛の言く、「意の隨せよ」と。未だ知らず、何物をか畫かん」と。佛言く、「云云。食堂には持餅の藥叉（＝夜叉）を畫け」と』と」と。

＊

○釋氏要覽［下ノ卅四丈］云…食堂畫持餅藥叉＝北宋の道誡集『釈氏要覧』巻三「雑紀」にある「寺院画壁」条（T54-303c）の文章。中略の「云云」以外はそのままである。典拠の「毘奈耶」は、義浄訳

『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻一七（T24-283a~b）を指しており、『釈氏要覧』は文字を節略しての引用である。『釈氏要覧』の「云云」の部分は、「於門両頰、応画執杖薬叉。次傍一面、画大神変、次一面、画五趣生死輪、簷下、画本生事、仏殿両頰、画持鬘薬叉、講堂画者説（門の両頰に於いて、応に執杖の薬叉を画くべし。次の傍の一面には、大神変を画き、次の一面には、五趣生死の輪を画き、簷下には、本生の事を画き、仏殿の両頰には、持鬘の薬叉を画き、講堂には者説を画け）」となっているが、末尾の「者説」の意味が不明である。続蔵本の底本は、寛永十（一六三三）年刊の和刻三冊本と考えられ（京都大学図書館『蔵経書院本』「蔵21－シ－1」）、無著禅師が見た本も同本である（影印が、蔵中進、蔵中しのぶ編『寛永十年版 釈氏要覧 本文と索引』和泉書院・一九九〇に掲載されている）。また明治十八（一八八五）年の刊本が国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」で公開されている。寛永十年本と明治十八年本は、「講堂画者説」の「者」と「説」の間に、一字分、将棋の駒形の、白抜きの五角形が描かれており（13b）、欠字を示すかと思われる。『根本説一切有部毘奈耶雑事』の該当個所は「於講堂処画老宿苾芻宣揚法要（講堂の処に於いて、老宿苾芻の法要を宣揚するを画く）」（T24-283b）となっており、『釈氏要覧』同様、この文章を引用した南宋・宗鑑集『釈門正統』巻三「塔廟志」は、「講堂画耆宿講説（講堂には、耆宿の講説するを画く）」（X75-298a）となっている。恐らく『釈氏要覧』は「耆宿講説」の「宿講」の二字が欠字となり、「耆」の字が「者」に誤ったものであろう。

⑤祇園圖經［下ノ卅丈］云、最巷北大院、名僧食所。自開三門、中門之北、有大食堂。堂前列樹。方維相對、交陰相接。渠流灌注、甚可觀閲。凡僧食者、多止此林。

＊

『祇園圖經』［下の卅丈］に云く、「最巷北の大院を、僧食所と名づく。自ら三門を開くに、中門の北に、大食堂有り。堂の前に樹を列ぬ。方維（＝あらゆる方向）相對して、交陰（＝枝々の木陰）相接わる。渠流（＝掘り割りの流れ）灌注して、甚だ觀閲す可し。凡そ僧の食する者、多く此の林に止まる」と。

＊

○祇園圖經［下ノ卅丈］云…多止此林＝『中天竺舍衛国祇洹寺図経』巻下の「次北有一仏堂鍾台周廓」条（T45-895a）に全く同文が見える。大正蔵本・卍続蔵本の底本となった刊本は、天和元（一六八一）年に上梓された和刻本である。

⑥酉陽雜俎續集［五ノ十二丈。必九集三］寺塔記云、平康坊菩提寺食堂前東壁上、呉道玄畫智度論色偈變 偈（ママ）。

＊

『酉陽雜俎續集』［五の十二丈。必九集三］「寺塔記」に云く、「平康坊の菩提寺の食堂の前の東壁の上に、呉道玄（唐代玄宗期の画家。生卒年未詳）、『智度論』の色偈の變（＝変相）偈（衍字）を畫く」と。

＊

○酉陽雜俎續集［五ノ十二丈。必九集三］寺塔記云…呉道玄畫智度論色偈變偈＝唐の段成式撰『唐段少卿酉陽雜俎續集』巻五「寺塔記上」の「平康坊菩薩寺」条（『四部叢刊初編』所収明刊本・10a）からの引用で、「食堂」に関する文章の前半部分。三字目の「前」字は原書に無い。無著禅師が見た『酉陽雜俎續集』は、［必九集三］という書き入れから、『津逮秘書』第九集の第三冊であったことが知られる（『京都大学人文科学研究所漢籍目録』p.765）。「必」は「秘」を省略したもの。無著禅師が叢書類を引用する際、略字を用いたことは、例えば【一四五】主位に引用された『因話録』に［四丈。孚廿三］とあり、これが『説郛』「弓第二十三」に収載された『因話録』一巻の四丁を指すことからも知られる。「孚」は「郛」の省略である。尚、『酉陽雜俎』二十巻・『続集』十巻には、元禄十（一六九七）年の和刻本も存しており（長澤規矩也輯『和刻本漢籍随筆集』第六集、所収）、また「寺塔記」だけ独立した一巻本も上野帝国図書館にあり、これは大正大蔵経に収載されている（T51-1023b）。引用文の末尾の「偈」の字は下文に続く文字であり、文章の切り間違いである。『酉陽雜俎続集』の原文

は次の通り。「食堂東壁上、呉道玄画智度論色偈変。偈是呉自題筆跡。筆跡遒勁如磔鬼神毛髪。次堵画礼骨仙人。天衣飛揚、満壁風動。（食堂の東壁の上に、呉道玄、『智度論』色偈の変を画く。偈は是れ呉の自題の筆跡なり。筆跡遒勁（＝力強い）なること、鬼神の毛髪を磔するが如し。次いで堵（土塀）に礼骨仙人を画く。天衣飛揚し、満壁風動す。）」（四部叢刊初編本・10a~b）文中、「変」は「変相」の意で、経典の記載によって、仏の本生譚や浄土の情景、地獄の相状などの絵を描画することを言う（『仏光大辞典』p.6912）。「色偈」は『大智度論』百巻の中の、どの偈を具体的に指すのか特定できないが、変相の画題となる内容が必要であるから、恐らく同書・巻九の、「青光琉璃茎、千葉黄金色。金剛為華臺、琥珀為華飾。茎軟不麁曲、其高十余丈、真青琉璃色、在佛臍中立。其葉広而長、白光間妙色、無量宝荘厳、其華有千葉。妙華色如是、従仏臍中出。…」（T25-124b~c）で始まる長偈を指すのであろう。

⑦ 不空三蔵奏代宗、天下食堂中、置文殊爲上座。詳見靈像類聖僧處。

＊

不空三蔵（七〇五～七七四）、代宗（李豫・七二六～七七九）に奏すらく、「天下の食堂の中に、文殊を置きて上座と爲さんことを」と。詳らかに靈像類「聖僧」の處に見ゆ。

＊

○不空三蔵奏代宗、天下食堂中、置文殊爲上座＝典拠が明示されていないが、『宋高僧伝』巻一「唐京兆大興善寺不空伝」に、「〔大暦〕四（七六九）年冬、〔不〕空、奏すらく、天下の食堂の中に文殊菩薩を置きて上座と為さんことを、と。之を制許す（四年冬、空奏天下食堂中置文殊菩薩為上座。制許之）」（T50-713a）とあり、その具体的日時が十二月十九日であったことなど詳しい経緯は、『代宗朝贈司空大辨正広智三蔵和上表制集』巻二「天下寺食堂中置文殊上座 制一首」条（T52-837a~b）、及び『貞元新定釈教目録』巻一六「大虚空蔵菩薩所問経八巻」条（T55-887b~c）などに見える。

○詳見靈像類聖僧處＝本書の巻三「第五類靈像門 上」にある【二三五】聖僧を参照。但し、この条の典拠などについては触れられていない。

⑧ 十誦律［廿三ノ一丈］自恣法中曰、掃灑食堂、掃除竟、入室坐禪。

＊

『十誦律』［廿三の一丈］「自恣法」の中に曰く、「食堂を掃灑し、掃除し竟わりて、室に入りて坐禪す」と。

＊

○十誦律［廿三ノ一丈］自恣法中曰、掃灑食堂、掃除竟、入室坐禪＝『十誦律』巻二三「七法中自恣法第三」（T23-165a）に全く同じ文章が見える。

⑨ 佛本行集經［六十ノ二丈］曰、爾時世尊、日在東方、著衣持鉢、共諸比丘、來至食堂、於所敷設、次第而坐。

＊

『佛本行集經』［六十の二丈］に曰く、「爾の時、世尊、日、東方に在り、著衣持鉢して、諸もろの比丘と共に、來りて食堂に至り、敷設する所に於いて、次第（順番）にして坐す」と。

＊

○佛本行集經［六十ノ二丈］曰…次第而坐＝『仏本行集経』巻六〇「摩尼婁陀品第五九」（T3-928b）に、全く同じ文章が見える。

⑩ 雜阿含經［十ノ廿三丈］曰、比丘低舍、與衆多比丘、集於食堂、語諸比丘言、諸尊、我

不分別於法、不樂修梵行、多樂睡眠、疑惑於法。佛廣呵責。　又［三十ノ十九丈］云、佛住舍衞國祇樹給孤獨園。前三月、夏安居竟。有衆多比丘、集於食堂、爲佛縫衣。

＊

『雜阿含經』［十の廿三丈］に曰く、「比丘低舍、衆多の比丘と、食堂に集まり、諸もろの比丘に語げて言く、『諸尊よ、我は法を分別せず、梵行を修するを樂しまず、多く睡眠を樂しみ、法を疑惑す」と。佛は廣く呵責す。　又た［三十の十九丈］云く、「佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住す。前三月、夏安居竟わる。衆多の比丘有り、食堂に集まりて、佛の爲に衣を縫う」と。

＊

○雜阿含經［十ノ廿三丈］曰…疑惑於法。佛廣呵責＝『雜阿含經』巻一〇・第二七一段（T2-71a）に、ほぼ同文が見える。相違は、引用の「比丘低舍」の部分が、『雜阿含經』では「爾時有比丘名曰低舍」となっており、また、末尾の「仏広呵責」の部分が原文には無い。「仏広呵責」は、引用に続く経文の取意要約である。

○又［三十ノ十九丈］云…爲佛縫衣＝『雜阿含經』巻三〇・第八五七段（T2-218a）に全く同じ文章が見える。

⑪

三隱詩集閭丘胤序云、國清寺有拾得、知食堂。尋常收貯餘殘菜滓於竹筒内。寒山若來、即負而去。　又拾得録［卅八丈］云、拾得者、知庫僧靈熠、令知食堂香燈供養。忽於一日、與像對坐、佛盤同餐。

＊

『三隱詩集』の閭丘胤が序に云く、「國清寺に拾得と云うもの有り、食堂を知す。尋常、餘殘の菜滓を竹筒の内に收貯す。寒山若し來れば、即ち負いて去らしむ」と。又た『拾得録』［卅八丈］に云く、「拾得は、知庫の僧靈熠、食堂の香燈供養を知らしむ。忽ち一日に於いて、像と對坐して、佛盤にして同に餐う」と。

＊

○三隱詩集閭丘胤序云…即負而去＝『三隱詩集』は『寒山詩』の別名。『寒山詩』に豊干と拾得の詩が付録されていることから、こう呼ばれる。善本としては、宮内庁書陵部所蔵の宋版『寒山詩集一巻、豊干拾得詩附』や、『四部叢刊初編』所収の宋版影印『寒山子詩、附拾得詩』があり、五山版や江戸期の和刻本も存する。引用は閭丘胤撰「寒山子詩集序」（四部叢刊初編縮印本・第三五冊・1a）に全く同文が見える。

○又拾得録［卅八丈］云…佛盤同餐＝『寒山詩』に付録された「拾得録」からの引用であるが、「令知食堂」以下の二十字は同文だが、「拾得者、知庫僧靈熠」の部分は、原文の「拾得者、豊干禅師、因遊松径、徐歩於赤城道路側、偶而聞啼。乃尋其由、見一子可年十歳。初謂彼村牧牛之子。委問逗遛、云我無舍無姓。遂引至寺、付庫院、候人來認、數旬之間、絶其親鞠。乃令事知庫僧靈熠。経于三祀、頗会人言。令知食堂香燈供養。忽於一日、與像對坐、佛盤同餐」（四部叢初編縮印本・p.25a~b）から傍線部の八字だけを抜き出したものである。「知庫」は【四三五】に立項されている。

⑫

聯燈會要［十九ノ十一丈］藥山儼禪師章云、師問僧、甚處來。云、南泉。師云、在彼多少時。云、粗經冬夏。師云、恁麼則三十年後、成一頭水牯牛去也。云、某甲雖在彼中、且不曾上他食堂。師云、口飲南風那。云、和尚莫錯。自有把匙筯人在。

＊

『聯燈會要』［十九の十一丈］「藥山儼禪師（惟儼・七四五～八二八）」の章に云く、「師、僧に問う、『甚れの處より來るや』と。云く、『南泉』と。師云く、『彼に在ること多少

の時ぞ」と。云く、『粗ぼ冬夏を經たり』と。師云く、「恁麼ならば則ち三十年後、一頭の水牯牛と成り去らん』と。云く、『某甲、彼の中に在りと雖も、且つ曾て他の食堂に上らず』と。師云く、「口、南風を欲るや』と。云く、「和尚、錯る莫かれ。自ら匙筯を把る人の在ること有らん」と。

＊

○聯燈會要［十九ノ十一丈］藥山儼禪師章云…自有把匙筯人在＝『聯燈会要』巻一九「澧州薬山惟儼禪師」条（X79-164b）と一字異なるだけである。『聯燈会要』は「口欲南風那」の頭に「爾」の一字が入る。同書には、至元十二（一二七五）年の重刊本の他、康暦元（一三七九）年の五山版、元和六（一六二〇）年、元禄三（一六九〇）年の和刻本が存する（『禅籍目録』p.527）。

⑬

僧寳傳［六ノ十七丈］大通本禪師傳云、移住錢塘淨慈、繼圓照之後。食堂日千餘口。仰給於檀施、而供養。莊嚴之盛、游者疑在諸天。

＊

『僧寳傳』［六の十七丈］「大通本禪師（善本・一〇三五～一一〇九）」の傳に云く、「錢塘（浙江省杭州府錢塘県）の淨慈（報恩光孝禪寺）に移住して、圓照（慧林宗本・一〇二〇～一〇九九）の後に繼ぐ。食堂、日びに千餘口。給を檀施に仰いで、供養す。莊嚴の盛んなること、游ぶ者、諸天に在るかと疑う」と。

＊

○僧寳傳［六ノ十七丈］大通本禪師傳云…游者疑在諸天＝『禅林僧宝伝』巻二九「大通本禪師」条に、全く同文が見える。無著禪師の書き込みには［六ノ十七丈］とあるが、これは「六冊本の第六冊目の十七丁」の意であろう。『禅籍目録』（p.265）に拠れば、『禅林僧宝伝』三十巻は三冊本もしくは六冊本である。永仁三（一二九五）年頃の刊行である五山版（『禅学典籍叢刊』第五巻・臨川書店・二〇〇〇、所収）は十巻ずつ分冊された三冊本で、各冊ごとに通しの丁数が打たれており、大通の条は四十四丁にある。これを五巻ずつの六冊本に当てはめると、第六冊は巻二六～三〇となり、三冊本の巻二一～二五の二十七丁分を差し引くと、大通の条は十七丁目となり計算が合う。ちなみに嘉興蔵『禅林僧宝伝』も三冊本であるが、大通の条は六十七丁となっており、大きなズレがある。

⑭

儒家亦有食堂。　柳河東集［廿六ノ九丈］蟄屋縣新食堂記云、貞元十八年、五月某日、新作食堂于縣内之右。始會食也。又云、其上棟自南而北者、二十有二尺。周阿峻嚴、列楹齊同。又云、既成、得羨財。可以爲食本。月權其贏、羞膳以充。乃合群吏于茲新堂。升降坐起、以班先後。又云、惟禮食之來古也。今京師百官、咸有斯制。甸服亦王之内邑、且官有聯屬、則宜統會以齊之也。嚮之離、而今之合。其得失也遠甚。我是以肅焉而莊、衎焉而和。群疑以亡、嘉言以彰。旨乎、其在此堂也。

＊

儒家も亦た食堂有り。　『柳河東集』［廿六の九丈］「蟄屋縣の食堂を新たにするの記」に云く、「貞元十八年、五月某の日、新たに食堂を縣内の右に作る。始めて會食す」と。又た云く、「其の上棟、南自りして北する者、二十有二尺。周阿峻嚴、列楹齊同なり」と。又た云く、「既に成りて、羨財を得たり。以て食本と爲つ可し。月づきに其の贏（＝クボサ。利益）を權りて、羞膳（＝ご馳走）以て充つ。乃ち群吏を茲の新堂に合す。升降坐起、班を以て先後す」と。又た云く、「惟みるに禮食の來ること古し。今、京師の百官、咸な斯の制有り。甸服も亦た王の内の邑にして、且つ官に聯屬有るときは、則ち宜しく統會して以て之を齊うべし。嚮の離れて、今の合う。其の

得失や遠きこと甚し。我れ是こを以て肅焉（＝恐れ慎む）として莊かに、衎焉（＝喜び楽しむ）として和す。群疑以て亡び、嘉言以て彰わる。旨かな、其れ此の堂に在ること」と。

＊

○柳河東集［廿六ノ九丈］盩厔縣新食堂記云…始會食也＝『柳河東集』四三巻（もしくは四五巻）は唐宋八大家の一人である柳宗元（七七三～八一九）の詩文集。明刊本の他、寛文四（一六六四）年などの和刻本も存する。引用の文章は、『増広註釈音辯唐柳先生集』巻二六「盩厔縣新食堂記」（四部叢刊初編本・3b）の冒頭の部分。文字に異同は無い。

○又云、其上棟自南而北者、二十有二尺。周阿峻嚴、列楹齊同＝同「記」（4a）に全く同じ文がある。

○又云、既成、得羨財…以班先後＝同前。

○又云、惟禮食之來古也…旨乎、其在此堂也＝同前。

（野口善敬）

【八二】茶堂

①［碧古鈔九ノ二一丈］茶堂必在法堂後、寢堂前也。今之茶堂、元是方丈也。住持行禮之處。

＊

［『碧古鈔』九の二一丈］茶堂は必ず法堂の後、寢堂の前に在るなり。今の茶堂は、元是れ方丈なり。住持行禮の處なり。

＊

○［『碧古鈔』九ノ二一丈］茶堂…住持行禮之處＝『碧岩集古鈔』巻九に、「茶堂必在法堂後、寢堂前也…方丈、今茶堂也。住持行礼之処也」（高羽五郎編『抄物小系』一八、二一丁表）とあるのを踏まえたものであろう。後半の文章は意味は同じであるが、変更されている。文中、【三六】法堂・【四四】寢堂・【三六五】住持は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

②芙蓉道楷禪師、唯置一茶堂、自去取用。詳飲啖類米湯處。［敕修鈔四ノ十八丈］校定清規告香云、齋退鳴鼓、特爲茶。或就法堂、或茶堂。首座相伴。特爲參頭。有飯。

＊

芙蓉の道楷禪師（＝曹洞宗・一〇四三～一一一八）は、唯だ一つの茶堂を置き、自ら去って取用す。飲啖類の「米湯」の處に詳らかなり。［『敕修鈔』四の十八丈］『校定清規』の「告香」に云く、「齋退（＝午時の食事の後・正午より三時頃まで）に鼓を鳴らし、特爲茶（＝特にある人のため、または大衆に対し、茶をたてて供すること）す。或いは法堂に就きて、或いは茶堂においてす。首座相伴す。特に參頭（＝新到の代表者、あるいは掛搭の諸式を弁ずる久参者）の為にす。飯有り」と。

＊

○芙蓉道楷禪師、唯置一茶堂。自去取用。＝『緇門警訓』巻七「芙蓉楷禪師小參」（T48-1074c）・『五燈会元』巻一四「東京天寧芙蓉道楷禪師」条（X80-292c）・『嘉泰普燈録』巻二五「天寧芙蓉楷禪師」条（X79-442c）などに同文が見える。

○詳飲啖類米湯處＝『象器箋』の【一三五三】米湯を指す。

○［敕修鈔四ノ十八丈］校定清規告香云…有飯＝『校定清規』は宋の惟勉編『叢林校定清規総要』二巻のこと。ここの引用は雲章一慶述、桃源瑞仙編『勅修百丈清規抄』十五巻（駒澤大学電子貴重図書）からの又引きとなっていおり、『勅修抄』巻四（十八丁表）に同文が見えている（但し、『敕修抄』は「告香云」が単に「曰」となっている）。おおもとの典拠は『叢林校定清規総要』は巻下「告香」（X63-607c）であり、ほぼ同文であるが、『勅修抄』の「斎退」が『校定』では「斎了」となっている。尚、『禪林象器箋』中に、【二〇一】斎退、【一三四九】特為茶、【四二八】参頭は立項されている。

③ 傳燈録［九ノ十八丈］東山慧和尚 嗣百丈海 章云、大于和尚、與南用、到茶堂、見一僧近前不審、云云。

＊

『傳燈録』［九の十八丈］「東山の慧和尚 百丈海（＝百丈懐海）に嗣ぐ」の章に云く、「大于和尚、南用と茶堂に到って、一僧の近前して『不審（＝こんにちは）』と云うを見る。云云」と。

＊

○『傳燈録』［九ノ十八丈］東山慧和尚 嗣百丈海 章云…見一僧近前不審＝『景徳伝燈録』巻九（T51-0268c）に全く同文が見える。

④ 又傳燈録［二十ノ二八丈］黄檗慧禪師 嗣疎山仁 章云、師下堂、参第一座。乃至 於言下頓省。禮謝、退於茶堂、悲喜交盈。

＊

又た『傳燈録』［二十の二八丈］「黄檗の慧禪師 疎山の仁（＝疎山匡仁）に嗣ぐ」の章に云く、「師、堂より下り、第一座に参ず。乃至 言下に於いて頓に省す。禮謝して、茶堂に退きて、悲喜交ごも盈（＝満）つ」と。

＊

○又、『傳燈録』［二十ノ二八丈］黄檗慧禪師 嗣疎山仁 章云…悲喜交盈＝『景徳伝燈録』巻二〇（T51-0368a）に全く同文が見える。疎山は洞山良价の孫弟子に当たる。『禪林象器箋』中に【三八八】第一座が立項されており、「下堂」については【一五一】上堂・下堂がある。

⑤ 廣燈録［八ノ十六丈］黄檗断際禪師章云、師一日、在茶堂内坐。南泉下来問、定慧等学、明見佛性。此理如何。師云、十二時中、不依倚一物、云云。

＊

『廣燈録』［八の十六丈］「黄檗断際禪師（＝黄檗希運・？～八五〇）」の章に云く、「師一日、茶堂の内に在って坐す。南泉下来して問う、『定慧等しく学して、明らかに佛性を見る。此の理如何』と。師云く、『十二時中、一物に依倚（＝もたれかかる）せず』と。云云」と。

＊

○『廣燈録』［八ノ十六丈］黄檗断際禪師章云…不依倚一物＝『天聖広燈録』巻八（X78-452a）に全く同文が見える。

⑥ 鼓山神晏國師録［古宿三七ノ二四丈］云、師見保福共僧、在茶堂説話。師云、莫葛藤。保福云、葛藤即不得。商量佛法、還得也無。師作掴勢。保福云、過在什麼處。師又行一掴。

＊

『鼓山神晏國師録』［『古宿』三七の二四丈］に云く、「師、保福（＝保福従展）の、僧と共に、茶堂に在って説話するを見る。師云く、『葛藤すること莫かれ』と。保福云く、『葛藤することは即ち得ず。佛法を商量することは、還って得てんや也た無きや』と。師、掴する勢を作す。保福云く、『過ち什麼れの處にか在る』と。師又た一掴を行ず」

と。

＊

○『鼓山神晏國師録』［古宿三七ノ二四丈］云…師又行一掴＝『古尊宿語録』巻三七（X68-244c）に、全く同文が見える。神晏は、雪峰義存（八二二～九〇八）の法嗣。保福従展（？～九二八）は雪峰の兄弟弟子であるから、神晏の法叔に当たる。

⑦ 玄沙備禪師廣録［上ノ二二丈］云、一日僧問訊云云。師云、你適来従什麼處來。云、某従茶堂裏来。師云、你今若去也従茶堂裏去。因什麼不識去来。

＊

『玄沙備禪師の廣録』［上の二二丈］に云く、「一日、僧問訊す。云云。師云く、『你、適来（＝先ほど）什麼れの處従りか来たる』と。云く、『某、茶堂裏従り来たる』と。師云く、『你今若し去らば、也た茶堂裏従り去らん。什麼に因ってか去来することを識らざる』と」と。

＊

○『玄沙備禪師廣録』［上ノ二二丈］云…因什麼不識去来＝『玄沙広録』に、「一日僧問訊（次、乃云、是什麼便与麼来去。僧云、只是者箇説話漢子去来。師云、因什麼不覓箇入路。僧云、不知和尚如何説去来。）師云、你適来従什麼処來。云、某従茶堂裏来。師云、你今若去、也従茶堂裏去、因什麼不識去来」（巻上、禅文化研究所・一九八七、p.108）とあり、〈　〉部分が『象器箋』では「云云」となっている以外は、全て同文である。玄沙師備（八三五～九〇八）は、雪峰義存の法嗣。

⑧ 『大慧杲禪師録』［九ノ六丈］歳節秉拂云、今日一隊奴僕、在茶堂裏、村歌社舞、弄些神鬼。

＊

『大慧杲（＝大慧宗杲、一〇八九～一一六三）禪師録』［九の六丈］「歳節（＝春節の前後）の秉拂」に云く、「今日、一隊の奴僕（＝下男）、茶堂の裏に在りて、村歌社舞して、些の神鬼を弄す」と。

＊

○『大慧杲禪師録』［九ノ六丈］歳節秉拂云…弄些神鬼＝『大慧普覚禪師語録』巻九（T47-0847b）に全く同文が見える。大慧宗杲（一〇八九～一一六三）は、圜悟克勤の法嗣で、看話禅の大成者として知られる。「秉払」は、住持に代わって払子を握って行う説法。住持になる前に行われる資格審査。玉村竹二著『五山禅僧伝記集成』の「用語解題」（p.745）に詳しい。また【八四八】秉払、参照。

（澤守豊文）

【八三】茶寮

焦竑類林［七ノ三六丈］云、僧寺茗所曰茶寮。

＊

焦竑（＝一五四〇～一六二〇・明末の儒者）が『類林』［七の三六丈］に云く、「僧寺に茗（＝茶）所を茶寮と曰う」と。

＊

○焦竑『類林』［七ノ三六丈］云、僧寺茗所曰茶寮＝明末の儒者である焦竑（一五四〇～一六二〇）の『焦氏類林』八巻の巻七上（粤雅堂叢書本・p.311）に全く同文が見える。

（澤守豊文）

【八四】寮舎

① 傳燈録禪門規式云、置十務、謂之寮舍。毎用首領一人、管多人營事。令各司其局也。［主飯者、目爲飯頭、主菜者、目爲菜頭。他皆倣此。］　又職位類、十務處。

＊

『傳燈録』の『禪門規式』に云く、「十務を置いて、之れを寮舍と謂う。毎に首領一人を用いて、多人の營事を管す。各おのをして其の局を司どらしむるなり。主飯の者を、目づけて飯頭と為し、主菜の者を、目づけて菜頭と為す。他は皆な此れに倣う」と。　又た職位類、「十務」の處。

＊

○傳燈録禪門規式　置十務、謂之寮舍…他皆倣此＝『景德伝燈録』巻六（T51-251a）に全く同じ文章が見える。

○又職位類、十務處＝巻七「第七類職位門　中」の【四六六】「十務」の条のこと。

② 丹鉛總録［六ノ三丈］云、左傳、同官爲寮、文選注、寮小窓也。宋王聖求號初寮、高似孫號疎寮、謝伋號靈石山藥寮。唐詩、綺寮河漢在斜樓。皆指窓也。古人謂同官爲寮、指其齋署同窓爲義。今士子同業、曰同窓。官先事、士先志。官之同寮、亦士之同窓也。

＊

『丹鉛総録』［六の三丈］に云く、「『左傳』に、『同官を寮と為す』、『文選』の注に、『寮は小窓なり』と。宋の王聖求は初寮と號し、高似孫は疎寮と號し、謝伋は靈石山の藥寮と号す。唐詩に、『綺寮（＝美しい窓）の河漢（＝天の川）は斜樓に在り』と。皆な窓を指すなり。古人、同官を謂いて寮と爲すは、其の齋署の同窓を指して義と爲す。今の士子は業を同じくするを、同窓と曰う。官（＝役人）は事を先にし、士（＝学者）は志を先にす。官の同寮は、亦た士の同窓なり。」

＊

○丹鉛總録［六ノ三丈］云…亦士之同窓也＝明の楊慎（一四八八～一五五九）撰『丹鉛総録』巻六・宮室類の「寮為小窓」（四庫全書本・5a）に全く同文が見える。同文は楊慎の詩文集である『升庵集』巻六三（8b~9a）にも収載されている。

○文選注、寮小窓也＝昭明太子撰『文選』に載せられた張平子「西京賦一首」の「綺豁以疏寮」の註に、「蒼頡篇曰、寮小窓也」（四部叢刊本『六臣註文選』巻二・12a）とある。『蒼頡篇』は秦の李斯（？～BC二〇八）の作で、一章六十字、全五十五章からなっていたとされる（唐・張懐瓘撰『書断』巻下、四庫全書本・1b）。

○左傳、同官爲寮＝『春秋左氏伝』文公七年、春三月己丑条（『左氏会箋』第八・p.51）に同文が見える。

○宋王聖求號初寮＝王安中（一〇七六～一一三四）、字は履道、号は初寮。その詩文集に『初寮集』七十六巻が有ったとされるが、現存するのは八巻本（静嘉堂所蔵抄本、四庫全書本）だけである。その伝は『宋史』巻三五二（中華書局校点本・p.11124）などに見える。また『宋人伝記資料索引』第一冊（p.276）参照。

○高似孫號疎寮＝高似孫（一一五八～一二三一）、字は続古、号は疎寮。著書に『剡録』十巻（四庫全書所収）、『子略』四巻（同前）、『硯箋』四巻（同前）、『騒略』三巻（『百川学海』己集、所収）などがある。その伝は、『欽定四庫全書総目』巻六八「剡録十巻」条（19b~21a）等に見える。また『宋人伝記資料索引』第三冊（p.1755）参照。

○謝伋號靈石山藥寮＝謝伋、字は景思、号は薬寮居士。『百川学海』所収の旧本『四六談塵』一巻の首題が「霊石山薬寮」となっていたとされる（『欽定四庫全書総目』巻一九五・33b）。その他、著に『薬寮

叢稿』二十巻があったとされる（『文献通考』巻二三九、四庫全書本・17b）。その伝は『宋詩紀事』巻四四（四庫全書本・14a-b）などに見える。また『宋人伝記資料索引』第五冊（p.4100）参照。
○唐詩、綺寮河漢在斜樓＝温庭筠（八一二～八六六？）の「初秋」という七言律詩の第二句（『唐詩鼓吹』巻七、四庫全書本・19b）。

③爾雅［一ノ十九丈］云、宋寮官也。　郭璞註、同官爲寮。　刑（ママ）昺疏、言同寮者、皆謂居官者。云同官爲寮者、左傳文七年、荀林父告先蔑之辭也。

＊

『爾雅』［一の十九丈］に云く、「宋（＝俸禄をうける土地）と寮とは官なり」と。　郭璞が註に、「同官を寮と為す」と。　刑（ママ）昺が疏（＝註の更に註）に、「同寮と言うは、皆な官に居する者を謂う。『同官を寮と爲す』と云うは、『左傳』の文が七年に、荀林父が先蔑に告るの辞なり」と。

＊

○爾雅［一ノ十九丈］云…荀林父告先蔑之辭也＝『爾雅注疏』十巻の巻一から節略での引用（『十三経注疏』本、16b）。刑昺の「刑」は「邢」の誤字。『爾雅注疏』は、『爾雅』に晋の郭璞（二七六～三二四）が注を付け、宋の邢昺（九三二～一〇一〇）が疏を施したもの。『佐伝』の引用は、②に既出。

④周祈名義考云、楊用修謂、寮爲小窓、以齋署同窓爲義。不知窓寮之寮、从穴、不从宀。説文、寮穿也。玉篇、寮舍也。後人遂以寮爲窓。是窓寮之寮、與采寮之寮、文既不同。義亦自別。安得以同窓釋同寮乎。宋采、俱音菜。宀音綿。

＊

周祈が『名義考』［五ノ十四丈］に云く、「楊用修謂わく、寮は小窓為り、齋署、窓を同じくするを以て義と為す」と。知らず、窓寮（＝まど）の寮は、穴（＝あなかんむり）に从い、宀（＝うかんむり）に从わざることを。『説文』に『寮は穿なり』、『玉篇』に『寮は舍なり』と。後人、遂に寮を以て窓と爲す。是れ窓寮の寮と、采寮の寮とは、文、既に同じからず。義、亦た自ら別なり。安くんぞ同窓を以て同寮と釋することを得んや。宋と采とは、俱に音は菜。宀、音は綿」と。

＊

○周祈名義考云…安得以同窓釋同寮乎。宋采、俱音菜。宀音綿＝明の周祈撰『名義考』巻五「寮」条の後半部の引用（四庫全書本・19b）。「楊用修」は②に引用された『丹鉛総録』の著者、楊慎のこと。『説文』は後漢の許慎が著した『説文解字』のこと。梁の顧野王が編纂した『玉篇』と共に有名な部首別漢字辞典である。

⑤　忠曰、周祈不取丹鉛同窓義、直取同官爲寮之義。則禪林亦可同職者爲寮也。

＊

忠曰く、「周祈は『丹鉛』の『同窓』の義を取らず、直に『同官を寮と爲る』の義を取る。則ち禪林も亦た同職の者を寮と爲す可し」と。

（細川晋輔）

【八五】四寮

①敕修清規［上二ノ十四丈］嗣法師遺書至云、両序、四寮、江湖、郷人、法眷、小師、辦事、

皆有祭。　又［上二ノ三十四丈］尊宿遷化遺書云、知客引専使巡寮。先庫司、次頭首寮、單寮、蒙堂四寮。　又云、兩序四寮、江湖辦事郷人、皆致祭。

＊

『敕修清規』［上二の十四丈］「嗣法の師の遺書至る」に云く、「兩序（＝寺院の役位）、四寮、江湖（＝名山大刹に住持していない尊宿）、郷人（＝同郷出身の人）、法眷（＝修行仲間）、小師（＝弟子）、辦事（＝雑務の諸寮）、皆な祭り有り」と。　又た［上二の卅四丈］「尊宿遷化」の「遺書」に云く、「知客（＝賓客の接待係）、専使（＝特別派遣の使者）を引きて巡寮（＝寮舎の挨拶廻り）す。先ず庫司（＝寺務を総監する都監寺）、次に頭首寮（＝西序の役位寮）、單寮（＝独居の寮）、蒙堂（＝退任した役位の寮）の四寮なり」と。　又た云く、「兩序、四寮、江湖、辦事、郷人、皆な祭りを致す」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十四丈］嗣法師遺書至云…皆有祭＝『敕修百丈清規』巻二（T48-1123b）に全く同じ文章が見える。「上二」とは、四冊本の上の二冊目の意であろう。文中に並列されている事項のうち、【二八五】江湖・【三二二】郷人・【三一三】法眷・【三一一】小師・【四六七】辦事は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。尚、無著禅師三十三歳の書き入れがある『敕修百丈清規抄』十五巻・十六冊が、駒澤大学図書館に所蔵されている（駒澤大学電子貴重書庫・禅籍善本図録）。

○又［上二ノ卅四丈］尊宿遷化遺書云…蒙堂四寮＝本来はここで改行して別に段を設けるべきであろうが、底本が一字空けで続けているのに従った。引用された文章は、『敕修百丈清規』巻三「住持章第五」の「遷化」にある「下遺書」（T48-1130a）の段に見えるが、「知客引専使巡寮」の「専使」の二字と、「次頭首寮、單寮、蒙堂四寮」の「單寮」の二字が『敕修百丈清規』には無い。文中の事項のうち、【四〇四】知客・【五四六】専使・【六五六】巡寮・【四四四】庫司・【三八四】頭首・【八八】單寮・【八六】蒙堂は、同じく『象器箋』の中に立項されている。

○又云、兩序四寮、江湖辦事郷人、皆致祭＝前段の少し後の、『敕修百丈清規』巻三「下遺書」（T48-1130a）に全く同じ文が見られる。底本は行頭が一字下がりとなっており、段改行のように見えるが、前段は前行の行末まで文字があるし、引用の内容が続いていて、典拠の記載が無いから、一字空画で繋いだものであろう。

②　義堂［敕鈔五ノ二十三丈］曰、蒙堂之四寮也。所謂佛國白、大覺璉、參寥潛、九峯韶、四人所居也。

＊

義堂［『敕鈔』五の二十三丈］曰く、「蒙堂の四寮なり。所謂、佛國の白、大覺の璉、參寥の潛、九峯の韶、四人の所居なり」と。

＊

○義堂曰［敕鈔五ノ二十三丈］、蒙堂之四寮也…四人所居也。＝義道は義堂周信（一三二五～一三八八）のこと。夢窓疎石の法嗣。文中の「仏国白」は、『建中靖国伝燈録』三十巻の撰者として知られる北宋の仏国惟白（生卒年不詳）、法雲法秀の法嗣。「大覚璉」は大覚懐璉（一〇〇九～一〇九〇）、泐潭懐澄の法嗣。「參寥潛」は参寥道潛（？～一一〇六？）、大覺懐璉の法嗣。「九峯韶」は九峯鑑韶（生卒年不詳）、泐潭懐澄の法嗣。四人共に雲門宗の僧。引用されている文章は、『敕修百丈清規抄』巻五（二十三丁裏）に、義堂の言の引用として同文が見える。但し、「義堂曰」の部分は「空花［義堂］云」となっている。「空花」は義堂の号の「空華道人」のこと。義堂の『空華集』二十巻（『五山文学全集』巻二所収）を指すとも考えられるが、同書内にはこのままの文章は見当たらない。後述する義堂の『勅修清規鈔』からの引用と思われる。又た『空華和尚日工略集』四巻、蔭木英雄著『訓注空華日用工夫略集―中世禅僧の生活と文学』（一九八二年）にもこの文章は見当たらない。『勅修百丈清規抄』十五巻は、雲章一慶（一三八六～一四六三）述、桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）編で、万治三（一六六〇）年の刊本がある。駒澤大学所蔵の同本（駒澤大学電子貴重書庫・禅籍善本図録）の第一冊目の表紙見返しには、次のような書き入れがある。「繁冗にして益無く、牽強にして理を失する者は、皆な墨抹勾下す。或いは臆解の後学を褫く可き者有らば、即ち傍らに塗注す。貞享二年春、道忠、『百丈清規諺解』の

巻端に書す。（繁冗無益、牽強失理者、皆墨抹勾下。或有臆解可褫後学者、即塗注于傍。貞享二年春、道忠書于百丈清規諺解巻端。）」 貞享二（一六八五）年は道忠三十三歳の年である。言に違わず、同本の中には無著禅師による訂正や書き込みが各処に施されている。尚、雲章編のこの『勅修百丈清規抄』とは別に、義堂に『勅修清規鈔』があったとされる。無著禅師の『勅修百丈清規左觿』巻首「勅修清規疏解」に「義堂勅修清規鈔」の項目があり、次のように述べられている。「義堂信禅師［『序鈔』の三丈。又た十二丈］は、中巌（＝東陽徳煇の法嗣、中巌円月・一三〇〇～一三七五）の口伝を受け、又た唐に在るの僧に遍問して、滞礙を疏通し、其の得る所、之を書（冊子）の上方に記し、遂に衆の為に講演す。後人、上方に書する所を以て、別に写して一本と為し、義堂の鈔と名づく。（義堂信禅師［序鈔三丈。又十二丈］、受中巌之口伝、又遍問在唐之僧、疏通滞礙、其所得、記之書上方、遂為衆講演。後人、以所書乎上方、別写為一本、名義堂鈔。）」（中文出版社影印本・53b） 文中の［序鈔三丈。又十二丈］とは、雲章編『勅修百丈清規抄』第一冊の序巻を指し、それぞれ、三丁裏には「義堂、諸（これ）を在唐の僧に問いて、始めて之を講ず。世に抄有り（義堂問諸在唐之僧、而始講之。世有抄）」、十二丁表には「勅修清規ヲ講（シ）始メアツタハ、慈氏和尚ノ権輿也（ナリ）。入唐（ノ）時、唐儒（ニ）御問アッテ、清規（ノ）本ノ首書（ニ）メサレタヲ、其（ノ）後、別（ニ）カキウツイテ、抄ト云ソ（注・無著禅師は「時、唐儒」の三字を墨で消し、「儒」の横に「僧」と訂正の文字を書き入れている）」とある。

③ 忠曰、昔四名徳、居蒙堂。後人慕之、存四寮名耳。

＊

忠曰く、「昔、四名徳（＝②に見える四人の名徳）、蒙堂に居す。後人（こうじん）（＝後世の人）これを慕（した）いて、四寮の名を存するのみ」と。

④ 舊説［敕鈔七ノ十六丈］曰、四寮者、庫司、頭首、單寮、蒙堂、是也。非別有名四寮者。止此。忠曰、此訛讀尊宿遷化章、先庫司、次頭首寮、單寮、蒙堂四寮之語者也。四寮義、可依義堂之説耳。

＊

舊説（くせつ）［『敕鈔』七の十六丈］に曰く、「四寮とは、庫司、頭首、單寮、蒙堂、是れなり。別に四寮と名づくる者有るに非ず」と。此こに止まる。忠曰く、「此れ訛（あやまつ）て、『尊宿遷化』の章の、『先ず庫司、次に頭首寮、單寮、蒙堂の四寮なり』の語を讀む者なり。四寮の義は、義堂の説に依るべきのみ」と。

＊

○舊説［『敕鈔』七ノ十六丈］曰、四寮者、…非別有名四寮者＝そのままの文章は見えないが、『勅修百丈清規抄』巻七に「四寮ト云カ（＝ガ）別ニアルカト思ヘハ（＝バ）、此文テ（＝デ）ミエタソ（＝ゾ）。庫司、頭単寮、蒙堂ノ四寮也（なり）」（十六丁裏～十七丁表）とある。「尊宿遷化」章の引用は、①に既出。「義堂の説」とは、②を指す。

⑤ 敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云、所封行李、首座、維那、知客、侍者 焼香侍者、四寮人力、擡歸堂司。

＊

『敕修清規』［下一の五十七丈］「亡僧（もうそう）」に云く、「封ずる所の行李（こうり）（＝亡僧の持ち物が入った荷物箱）は、首座（しゅそ）（＝禅林で衆僧中の首位に坐るもの）、維那（いの）（＝堂内の衆務を総覧する役位）、知客、侍者（じしゃ）焼香侍者なりの、四寮の人力（にんりき）（＝使用人）、擡（もた）げて（＝持ち上げて）堂司（どうす）（＝維那の居室）に歸（か）えす」と。

＊

○敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云、所封行李…擡歸堂司＝『敕修百丈清規』巻六「亡僧」の「抄劄

衣鉢」条（T48-1147c）に同じ文章が見える。但し、「焼香侍者」という四字の割り注は無い。『禅林備要清規』巻九「病僧円寂」条では、「行李を封じ畢わり、鎖匙（施錠）封（封印）僉して、首座の処に納る。衣鉢は四寮の人力、扛ぎあげて堂司に帰す（封行李畢、鎖匙封僉、納首座処。衣鉢四寮人力、扛帰堂司）」（X63-657a）となっている。文中の事項の内、【五二五】維那・【九六】【五二七】堂司・【三四四】人力は、『象器箋』の中に立項されている。

⑥ 雲章［敕鈔五ノ二十三丈］曰、四寮不足疑焉。清規亡僧章、明言、首座、維那、知客、侍者四寮、是也。又住持章、下遺書云、頭首寮 西單寮、單寮 東單寮、蒙堂 西蒙堂 東蒙堂、四寮。蒙堂分東西。此亦可稱四寮。

＊

雲章［『敕鈔』五の二十三丈］曰く、「四寮疑うに足らず。『清規』の『亡僧』の章に、明らかに言う、『首座、維那、知客、侍者の四寮と是れなり』と。又た、『住持』の章の、『遺書を下す」に云く、『頭首寮 西單寮、單寮 東單寮、蒙堂 西蒙堂 東蒙堂、四寮』と。蒙堂、東西に分くれば、此れ亦た四寮と稱すべし。

＊

○雲章［『敕鈔』五ノ二十三丈］曰、四寮不足疑焉…此亦可稱四寮＝『勅修百丈清規抄』巻五（二十三丁表～裏）では、文字の異同があり、次のようになっている。「章云、四寮異説惟多、不足疑之。亡僧章所謂『首座、維那、知客、侍者、是也』。又住持章下遺書云、『頭首寮［西単寮］、単寮［東ーー］、蒙堂［西ーー東ーー］、四寮 云云』。」論説の主が「雲章」ではなく「章」の一字となっているが、序巻表紙の見返しにある無著禅師の書き込みに、「此の抄に所謂『章曰く』とは、雲章の説なり（此抄所謂『章曰』者、雲章之説）」とある。『敕修百丈清規抄』の述者である雲章一慶（一三八六～一四六三）は、聖一派の禅僧で、奇山円然に嗣法した。一條経嗣の子で、一條兼良の兄に当たる。東福寺、南禅寺に住す。詳しくは玉村竹二著『五山禅僧伝記集成』（p.42）参照。文中、「亡僧」章の引用は⑤に、「住持」章の引用は①に既出。

⑦ 忠曰、雲章第二説、強以東西單寮、東西蒙堂、作四寮。不足信焉。

＊

忠曰く、「雲章の第二の説は、強いて東西の單寮、東西の蒙堂を以て、四寮と作す。信ずるに足らず」と。

⑧ 忠曰、清規四寮、蓋有二種。亡僧章四寮、即其所列首座、維那、知客、侍者、是也。嗣法師遺書章、兩序四寮、及遷化章蒙堂四寮、並可依義堂説。余曾清規［上二ノ十四丈］嗣法師遺書中、詳辨。

＊

忠曰く、「『清規』の四寮には、蓋し二種有り。『亡僧』の章の四寮は、即ち其の列ぬる所の首座、維那、知客、侍者、是れなり。『嗣法の師の遺書』の章の、兩序、四寮と、及び『遷化』の章の蒙堂、四寮は、並びに義堂の説に依る可し。余（＝私）曾て『清規』［上二の十四丈］『嗣法の師の遺書』の中に、詳かに辨ず」と。

＊

○『清規』［上二ノ十四丈］嗣法師遺書中、詳辨＝無著道忠著『勅修百丈清規左觿』巻八の「両序四寮」（中文出版社影印本・417a~418a）に見える説明を指す。尚、『勅修百丈清規左觿』二十巻は、無著禅師六十四歳の正徳六（一七一六）年正月に撰述が開始され、二年後の享保三（一七一八）年七月、六十六歳の年に完成している（巻二〇末尾「識語」・1042b）。

（桐野祥陽）

【八六】蒙堂

①忠曰、蒙堂名、昉于大覺故事。後來勤舊退職者安息處、乃稱蒙堂也。見稱呼門蒙堂處。又可與下蒙堂併看。

＊

忠曰く、「蒙堂の名、大覺（＝懷璉）の故事に昉まる。後來、勤舊退職の者の安息の處、乃ち蒙堂と稱するなり。稱呼類の「蒙堂」の處に見ゆ。又た「下蒙堂」と併せ看る可し」と。

＊

○大覺故事＝大覚は、大覚懐璉（一〇〇九～一〇九〇）のこと。北宋の雲門宗の僧。阿育王寺第六世住持。仁宗皇帝に召され大覚禅師と賜号された。具体的な故事は、②に見える。文中の「称呼門蒙堂処」とは【二九〇】を、「下蒙堂」とは【八七】を指す。

②宋景濂潛溪集［九巻、護法録四ノ十八丈］四明阿育王山廣利禪寺碑銘云、其主僧、自宣密素公、始可考見。宣密五傳、至大覺璉公、名振天下。乃至 大覺日與九峯韶公、佛國白公、參寥潛公、講道一室。扁曰蒙堂。叢林取則焉。又云、修演法之堂、并撤其房盧、爲下蒙堂、則白雲住山智珠營之。

＊

宋景濂が『潛溪集』［九巻、『護法録』四の十八丈］の「四明阿育王山廣利禪寺の碑の銘」に云く、「其の主僧、宣密の素公自り、始めて考え見つ可し。宣密五傳して、大覺の璉公に至りて、名、天下に振るう。乃至 大覺、日々に九峯の韶公、佛國の白公、參寥の潛公と、道を一室に講ず。扁して蒙堂と曰う。叢林、則を取る」と。又た云く、「演法の堂を修し、并びに其の房盧を撤して、下蒙堂と爲るは、則ち白雲の住山智珠之を營ず」と。

＊

○宋景濂潛溪集［九巻、護法録四ノ十八丈］四明阿育王山廣利禪寺碑銘云…智珠營之＝宋景濂は、宋濂（一三一〇～一三八一）のこと。景濂はその字。宋濂および『護法録』については、【二】五山の②に既出。『潛溪集』には諸種の版本があり（『宋濂全集』第一冊「前言」p.2~5、第四冊「編後記」p.2754、浙江古籍出版社・一九九九）、九巻本としては嘉靖十五年刊本が蓬左文庫にある（『日本現存明人文集目録』汲古書院・一九七八、p.100）。引用は和刻本『護法録』巻四の十八丁表～裏にそのまま見える。「乃至」で省略されているのは、「仁宗待以殊礼、作詩頌十七篇遺之。熙寧三年、大覚為搆宸奎閣、蘇文忠公軾、実記其成」の三十四字。引用文中に出てくる禅僧のうち、大覚懐璉（一〇一一～一〇九三）と九峯鑑韶（生卒年未詳）は、雲門宗の泐潭懐澄（生卒年未詳）の法嗣で、それぞれ『続伝燈録』巻五（T51-494b、495c）などに名前が見える。仏国禅師こと法雲惟白は法雲法秀（一〇二七～一〇九〇）の法嗣で、同じく『続伝燈録』巻一二（T51-536b）などに見えている。参寥道潛（一〇四三～?）は、本名は曇潛であったが蘇軾が道潛に改名させたとされる。字は参寥子で、禅鑒と号した。詩を以て知られ、『参寥詩集』十二巻（『四部叢刊』続編所収）がある。禅燈史類には名前が出てこないが、『雲臥紀談』巻上の「銭塘僧道潛」（X86-663b）の項に紹介がある。その伝については『宋僧録』下冊（p.845）参照。

○又云、修演法之堂…則白雲住山智珠營之＝同じく和刻本『護法録』巻四「四明阿育王山広利禅寺碑銘」の二十丁表～裏にそのままある。

③周易［註疏一ノ四十六丈］蒙卦彖云、蒙以養正、聖功也。疏云、能以蒙昧隱默、自養正道、

乃成至聖之功。

＊

『周易』［『註疏』一の四十六丈］の「蒙の卦」の彖に云く、「蒙は（ママ）以て正を養うは、聖の功なり」と。疏に云く、「能く蒙昧隠默を以て、自ら正道を養わば、乃ち至聖の功を成す」と。

＊

○周易［註疏一ノ四十六丈］蒙卦彖云…乃成至聖之功＝『十三経注疏』の中の文章。王弼の『周易』の注に、孔穎達が唐の太宗の命で疏を勅撰で付したもので、『周易正義』と呼ばれる。「蒙卦」は『周易』上下経六十四卦のうち、上経の四番目の卦。「彖」は『周易』中に付された「十翼」と名づけられた伝（注釈）の一つで、卦の文字の形からの解説をしたものである。該当部分は『十三経注疏』（嘉慶二十年重刊宋本）本の巻一（32b）に見える。『周易』の「彖伝」の意味については『易経』（岩波文庫本㊤・p.116）参照。

④ 月江印禪師育王録［八丈］大覺禪師忌拈香云、代圓通應詔而起、爲九峰草疏而來。對使者焚却龍腦之鉢。創蒙堂如筑黄金之臺。此是大覺老人、平生受用不盡底三昧。雖相去二三百載、而聲光煒燁、猶百千之迅雷。稽首僧伽眞古佛。鄮峯千古碧崔嵬。

＊

月江の印禪師（一二六七～？）『育王の録』［八丈］「大覺禪師忌拈香」に云く、「圓通に代わって詔に應じて起ち、九峰の爲めに疏を草して來る。使者に對して龍腦の鉢を焚却し、蒙堂を創めて、黄金の臺を筑くが如し。此れは是れ大覺老人、平生受用不盡底の三昧なり。相去ること二三百載と雖も、聲光煒燁たること、猶お百千の迅雷のごとし。稽首す僧伽、眞の古佛。鄮峯（＝育王）千古碧り崔嵬（＝聳え立つ）たり」と。

＊

○月江印禪師育王録大覺禪師忌拈香＝『月江正印禪師語録』巻上「月江和尚住四明阿育王山廣利禪寺語録」の「大覚禪師忌拈香」（X71-125a）に、そのままの文章が見える。月江正印（一二六七～？）は松源派の僧で、清拙正澄の俗兄。福州出身で虎巌浄伏に嗣法し、阿育王寺の住持となった。大覚禪師は②に出ている大覚懐璉を指す。文中「為九峯草疏而来」の部分の返り点が乱れており、無著禪師の書き込みでは、「九峰の為にして」もしくは「九峰の疏を草するが為にして」と「為」がどこまで係るのか明瞭ではない。ただ、前句の「代円通、応詔而起」と対句になっているから、同じように三字と四字で切って読むのが正しいと思われる。よって送り仮名も改めて読み替えた。

⑤ 又月江［録下偈頌六丈］賀友竹改牧石寮作蒙堂頌云。幽居改作蒙堂住。湖海高人不用招。大覺斷絃今復續。可無佛國與參寥。

＊

又た月江［『録』下の偈頌の六丈］の「友竹の牧石寮を改めて蒙堂を作るを賀す」の頌に云く、「幽居改めて蒙堂と作して住す。湖海の高人、招くを用いず。大覺の斷絃、今復た續ぐ。佛國と參寥と無かる可けんや」と。

＊

○又月江［録下偈頌六丈］賀友竹改牧石寮作蒙堂頌云…可無佛國與參寥＝『月江正印禪師語録』巻下「偈頌」の「賀友竹改牧石寮作蒙堂」（X71-148c）にそのままの偈が見える。

（千田たくま）

【八七】下蒙堂

玄極頂禪師圓菴集［六ノ五丈］阿育王山下蒙堂記云、四明阿育王山廣利禪寺沙門某、成下蒙堂有年矣。今住山弘辨裕禪師、圖記其事于石、而屬筆於某、辭弗獲、乃記曰、昔大覺璉禪師、嘗闢一室、列四榻。延其友九峯韶公・佛國白公・參寥潛公、相與居之。而榜曰蒙堂。蓋取蒙以養正之語也。是後禪林咸效爲之。今是堂之設于育王者有二。其一則大覺所居者、其一所謂下蒙堂者、即某始作也。初某之師雪窓光公、法席盛時、名緇鱗集。乃謀別創蒙堂以處之。未果而化去。於是述先志。損己貲。撤所居房廬而創焉。名下蒙堂。其屋凡若干楹、而爲室十有六。室置一榻。奉像設、肅賓客。與夫庖湢之舍、無不完。經始於戊戌之秋、落成於明年之冬。惟百丈起禪規、會衆僧於雲堂、食息咸在焉。而蒙堂由大覺禮賢增置。自非齒隆德優者、誠未易處也。然世降道衰、諸方往往、空其堂而不居。而吾人始勞於形生矣。嘗聞古之學道者、咸能忘其軀。是故日中一食、樹下不信宿。身愈窮、而道愈通。其果何術哉。今雲堂聚衆之規未復。是以某承其師志、益爲蒙堂、以養隱德晦行之士。不亦善用其心乎。然入是堂者、宜思蒙之爲義。及其身之安也、務深蓄其道德。使九峯佛國參寥三人者復生、吾不讓焉、則大覺始立之意、某氏別創之勤、斯無負矣。

＊

玄極の頂禪師の『圓菴集』［六ノ五丈］「阿育王山の下蒙堂の記」に云く、「四明阿育王山廣利禪寺沙門某、下蒙堂を成して年有り。今の住山弘辨裕禪師、其の事を石に記さんことを圖りて、筆を某に屬す。辭すれども獲ざれば、乃ち記して曰く、「昔し大覺の璉禪師（懷璉・一〇一一～一〇九三）、嘗て一室を闢て、四榻（榻＝長椅子）を列ぬ。其の友、九峯の韶公（鑑韶・生卒年未詳）・佛國の白公（惟白・生卒年未詳）・參寥の潛公（道潛・？～九六一）を延きて相與に之に居して、榜（立て札）して『蒙堂』と曰う。蓋し『蒙は以て正を養う』（『易經』蒙卦・彖伝）の語に取るなり。是れより後、禪林咸く效いて之を爲す。今、是の堂の育王に設くる者に二有り。其の一は則ち大覺（懷璉）の居する所の者、其の一は所謂る『下蒙堂』という者、即ち某始めて作れり。初め某の師、雪窓の光公（悟光・生卒年未詳）、法席盛んなりし時、名緇（＝名僧）鱗集す。乃ち謀りて別に蒙堂を創めて以て之に處す。未だ果たさずして［遷］化し去る。是こに於いて先志を述し、己貲（＝自分の財産）を損して、所居の房廬を撤［去］して創む。下蒙堂と名く。其の屋、凡そ若干楹、而して室を爲ること十有六。室ごとに一榻を置く。像設を奉じ、賓客を肅す。夫の庖湢（台所）浴（浴室）の舍と、完からずということ無し。戊戌（至正十八年・一三五八）の秋に經始し、明年の冬に落成す。惟だ百丈、禪規を起てて、衆僧を雲堂に會し、食息咸く在り。而して蒙堂は大覺（懷璉）、賢を禮して增置するに由る。齒（年齢）隆く德優なる者に非ざる自りは、誠に未だ處り易からざるなり。然れども世降り道衰え、諸方往往にして、其の堂を空くして居らず。而して吾人（我々）始めて形生に勞す。嘗て聞く、『古の道を學ぶ者、咸く能く其の軀（からだ）を忘る。是の故に日中（正午）一食、樹下（＝道ばたの木の下）に信宿（＝二晩宿泊）せず。身愈いよ窮て、道愈いよ通ず』と。其れ果たして何の術ぞや。今、雲堂、衆を聚むる規、未だ復せず。是こを以て某、其の師の志を承け、益して蒙堂を爲り、以て隱德・晦行の士を養う。亦た善く其の心を用いずや。然らば是の堂に入る者、宜しく蒙の義爲るを思うべし。其の身の安きに及ぶや、務めて深く其の道德を蓄え、九峯・佛國・參寥三人の者をして、復た生ぜしめば、吾れをして讓らざらしめば、則ち大覺（懷璉）始立の意、某氏別に創むるの勤め、斯れ負くこと無からん」

と。

＊

○玄極頂禪師圓菴集［六ノ五丈］阿育王山下蒙堂記云、四明阿育王山廣利禪寺沙門某…某氏別創之勤、斯無負矣＝明代初期の禅僧である円極居頂（？～一四〇四）の詩文集、『霊谷円極居頂禅師円庵集』一○巻のこと。無著道忠の写本が存する。門人自学編、永楽元（一四〇三）年癸未、戸部尚書王鈍跋。居頂は、恕中無慍（一三〇九～一三八六）の法嗣で、『続伝燈録』三六巻の編者として知られる。未見。「蒙堂」は【八六】に、「雲堂」は【五一】に、それぞれ立項されている。

（矢多弘範）

【八八】單寮

①忠曰、單寮者、獨寮也。〈詳于稱呼類、單寮處。〉寮義、見寮舍處。

＊

忠曰く、「單寮とは、獨寮（一人部屋）なり。〈稱呼類、單寮の處に詳らかなり。〉寮の義（意味）は、『寮舍』の處に見ゆ。

＊

○詳于稱呼類、單寮處＝『禅林象器箋』巻五「第六類称呼門 上」にある【二八九】「単寮」のことを指す。割り注に「寮義、見寮舍処」とあるように、【八四】「寮舍」参照。

②敕修清規［下一ノ卅六丈］西堂首座挂搭云、如大方名德、欲作住計、語次露意。住持度有單寮可處、及行坐位次、上下安順、則留之。

＊

『敕修清規（ちょくしゅうしんぎ）』［下一の卅六丈］「西堂首座挂搭」に云く、「如（も）し大方の名德、住計を作さんと欲せば、語次に意を露（あらわ）すべし。住持、單寮の可處す可き有るを度（はか）り、及び行坐の位次、上下安順なるときは、則ち之を留むべし」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅六丈］西堂首座挂搭云…則留之＝『勅修百丈清規』巻五「西堂首座掛搭」（T48-1141b）に全く同文が見える。

③人天寶鑑［六十三丈］云、無畏久法師、餘姚人。依慧覺璧公得旨、後徧歷禪會。嘗入徑山佛日之室。佛日夜坐、必召師至、命説天台旨趣、及楞嚴大意、深遇之。出世清修。學者雲集。師患後生單寮縱恣、闢屋爲衆堂。淨几明牕、蒲褥禪板、洒然有古叢社之風。

＊

『人天寶鑑（にんでんほうかん）』［六十三丈］に云く、「無畏（むい）の久法（きゅう）師は、餘姚（よう）（浙江省）の人なり。慧覺（えがく）の璧（へき）公に依りて旨を得（え）、後に禪會を徧歷す。嘗て徑山佛日（きんざんぶつにち）（＝大慧宗杲）の室に入る。佛日夜坐するに、必ず師を召して至らしめ、命じて天台の旨趣、及び『楞嚴』の大意を説かしめて、深く之を遇す。清修に出世す。學者雲のごとく集まる。師、後生の單寮にして縱恣なるを患（うれ）え、屋を闢（しりぞ）けて衆堂を爲（つ）くる。淨几明牕、蒲褥禪板、洒然として古叢社の風有り」と。

＊

○人天寶鑑［六十三丈］云、無畏久法師…洒然有古叢社之風＝紹定三年（一二三〇）序刊の『人天宝鑑』

（X87-18c）に「塔銘」からの引用として全く同文が見える。

（野口善敬）

【八九】侍者寮

①聯燈會要［四ノ十七丈］百丈懐海禪師章云、師契悟〈野鴨子因縁〉、浹背汗流。却歸侍者寮、哀哀大哭。〈云云〉。

＊

『聯燈會要』［四の十七丈］「百丈懐海禪師」の章に云く、「師契悟し〈野鴨子の因縁なり〉、背に浹くして汗流る。却って侍者寮に歸り、哀哀と大哭す。〈云云〉」と。

＊

○聯燈會要［四ノ十七丈］百丈懐海禪師章云、師契悟…哀哀大哭＝『聯燈会要』巻四「洪州百丈懐海禪師」全十六条の第二条（X79-40b）に同文が見える。

②虚堂愚和尚録［四ノ廿八丈］普説云、一日在侍者寮思之、古帆未掛、有甚難會〈云云〉。

＊

『虚堂愚和尚録』［四の廿八丈］「普説」に云く、「一日、侍者寮に在りて之を思う、古帆未だ掛けず、甚の會し難きこと有らん。〈云云〉」と。

＊

○虚堂愚和尚録［四ノ廿八丈］普説云、一日在侍者寮思之、古帆未掛、有甚難會＝『虚堂和尚語録』巻四「双林夏前告香普説」（T47-1014a）に同文が見える。

③侍者寮扁擇木。　大慧年譜［十七丈］云、師三十七歳、抵天寧挂搭。圜悟令居擇木堂、作不釐務侍者。〈左傳［林六十七ノ十三丈］哀十一年云、鳥則擇木。木豈能擇鳥。〉　大慧普説［下六十七丈］作擇木寮。

＊

侍者寮に「擇木」を扁す。　『大慧年譜』［十七丈］に云く、「師三十七歳、天寧に抵りて挂搭す。圜悟、擇木堂に居らしめて、不釐務侍者と作す。〈『左傳』［林六十七の十三丈］哀十一年に云く、「鳥は則ち木を擇ぶ。木豈に能く鳥を擇ばんや」と。〉　『大慧普説』［下六十七丈］には「擇木寮」に作る。

＊

○大慧年譜［十七丈］云、師三十七歳、抵天寧挂搭。圜悟令居擇木堂、作不釐務侍者＝嘉興蔵本『大慧年譜』十七丁表の宣和七（一一二五）年条の冒頭に「師三十七歳、四月、抵天寧挂搭」とあり、その後、続けて大慧の「礼侍者断七請普説」（『大慧禅師語録』巻一七・T47-883a）から文章が略引されており、十七丁裏に「遂令居択木堂、作不釐務侍者」とある。「不釐務侍者」は、侍者寮にいながら、実際には侍者の職務を行わない者のこと。【三七八】「不釐務侍者」条を参照。

○左傳［林六十七ノ十三丈］哀十一年云、鳥則擇木。木豈能擇鳥＝『左伝』哀公十一年条に見える孔子の語。［林六十七ノ十三丈］の「林」は、「禅林象器箋援書目録」に見える『左伝林堯叟註』のこと。宋の林堯叟著『音註全文 春秋括例始末左伝句読直解』七十巻（十五冊）は、寛文五（一六六五）年の和刻本が存し、鹿児島大学図書館などに所蔵されている。無著禅師が見たのもこの版本であろう。

○大慧普説［下六十七丈］作擇木寮＝和刻本『大慧普説』巻五下「礼侍者断七請普説」の六十六丁の表から裏にかけて、「老和尚却令我在択木堂、作不釐務侍者」とある。この普説は、上記『大慧年譜』の注に記したように、『大慧禅師語録』巻一七に編入されている。

④侍者寮扁小玉。　日本禅藍志、南禅寺侍者寮曰小玉。　〈聯燈［十六ノ十九丈］云、圜悟勤禅師、歸五祖、入侍者寮。偶五祖爲陳提刑、舉小艶詩云、頻呼小玉元無事、只要檀郎認得聲。師問答云云、忽然大悟。〉

＊

侍者寮に「小玉」を扁す。　『日本禅藍志』に、「南禅寺の侍者寮を『小玉』と曰う」と。　〈『聯燈』［十六の十九丈］に云く、「圜悟勤禅師、五祖に歸して、侍者寮に入る。偶たま五祖、陳提刑の爲に、『小艶詩』を舉して云く、『頻りに小玉を呼ぶも元より事無し、只だ要す檀郎の聲を認め得んことを』と。師問答すること云云、忽然として大悟す」と。〉

＊

○日本禅藍志、南禅寺侍者寮曰小玉＝『日本禅藍志』は不詳。『仏書総目録』や『禅籍目録』にもその名前が見えない。

○聯燈［十六ノ十九丈］云、圜悟勤禅師、歸五祖、入侍者寮。偶五祖爲陳提刑、舉小艶詩云、頻呼小玉元無事、只要檀郎認得聲。師問答云云、忽然大悟＝『聯燈会要』巻一六「成都府昭覚克勤禅師」全八条の第一条（X79-139c）から節略での引用。「小玉」の典拠として五祖法演が挙起した「小艶詩」を挙げているが、この圜悟の悟道因縁は『円悟仏果禅師語録』巻一三「告香普説」（T47-775b）や『大慧普覚禅師宗門武庫』（T47-946a）、『続伝燈録』巻二五「克勤仏果禅師」条（T51-634a）などにも見えている。尚、「小艶詩」のこの二句について、『禅語辞典』に次の様な口語訳と解釈が載せられている。「『しきりに腰元の小玉の名を呼ぶのは別に用があってではない、ただ（外にいる）檀郎が声に気付いてほしいからなのだ』。…そのひそかな呼び掛けを聴き取る耳がなくてはならぬ、という示唆。」（p.395）

（野口善敬）

【九〇】侍司

①侍者寮也。

＊

侍者寮なり。

＊

○侍者寮也＝前項【八九】「侍者寮」参照。

②敕修清規［上二ノ三丈］告香云、毎夏前告香。新歸堂者、推參頭一人。維那和會定、同衆詣侍司、稟云、新掛搭兄弟、欲求和尚告香普説。

＊

『敕修清規』［上二の三丈］「告香」に云く、「夏前毎に告香す。新歸堂の者、參頭一人を推す。維那和會し定めて、衆と同じく侍司に詣り、稟して云く、『新掛搭の兄弟、和尚に告香普説を求めんと欲す』と」と。

＊

○敕修清規［上二ノ三丈］告香云、毎夏前告香…欲求和尚告香普説＝『勅修百丈清規』巻二「告香」

（T48-1119c~1120a）に全く同文が見える。「告香」については、【八二六】「告香普説」を参照。

（野口善敬）

【九一】衆寮

①忠曰［敕鈔十一ノ十六丈亦云フ］、衆寮之制南向也。　敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云、新掛搭人、轉東邊、寮主轉西邊、又觸禮一拜。寮主引掛搭人、排列朝觀音問訊。〈止此。〉是可證南面之制也。

＊

忠曰く［『敕鈔』十一の十六丈にも亦た云う］、「衆寮の制は南向なり」と。　『敕修清規』［下一の卅五丈］「大掛搭歸堂」に云く、「新掛搭の人は東邊に轉じ、寮主は西邊に轉じて、又た觸禮一拜す。寮主、掛搭の人を引いて、排列して觀音に朝して問訊す」と。〈此こに止まる。〉是れ南面の制を證す可きなり。

＊

○忠曰［敕鈔十一ノ十六丈亦云フ］、衆寮之制南向也＝『勅修百丈清規抄』巻一一の十六丈表（駒澤大学電子貴重図書）に、「新掛―衆寮ハ南面ニアルト見ヘタリ…」とある。

○敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云…排列朝觀音問訊＝『勅修百丈清規』巻五「大掛搭帰堂」（T48-1141a）に、全く同文が見える。文中、【四二一】「寮主」・【七一〇】「触礼一拝」・【六七三】「掛搭」・【二三三】「観音」・【七二七】「問訊」は、『象器箋』の中に立項されている。

②敕修清規［下一ノ八丈］列職雑務云、寮元掌衆寮之經文什物之類。

＊

『敕修清規』［下一の八丈］「列職雑務」に云く、「寮元は衆寮の經文什物の類を掌る」と。

＊

○敕修清規［下一ノ八丈］列職雑務云、寮元掌衆寮之經文什物之類＝『勅修百丈清規』巻四「列職雑務」の「寮元」（T48-1132c）に、「掌衆寮之経文什物」とある。文中、【四一九】「寮元」・【一五〇二】「什物」は、『象器箋』の中に立項されている。

③禪居附録［四丈］清拙大鑑禪師塔銘〈東陵永璵撰〉云、大元泰定丙寅八月、至博多。明年正月、上京。關東使來、迎居建長。三月十二日入寺。檀信稟以大國禪林所宜行事、悉擧行之。師開堂告香普説、新造衆寮、規製如霊隱者、國中始有也。

＊

『禪居附録』［四丈］「清拙大鑑禪師（＝清拙正澄・一二七四～一三三九）の塔の銘」〈東陵永璵撰〉に云く、「大元の泰定丙寅（三年・一三二六）八月に、博多に至る。明年正月、京に上る。關東の使い來たりて、建長に迎え居らしむ。三月十二日、入寺す。檀信稟するに大國禪林の宜しく行うべき所の事をば、悉く擧して之を行わんというを以てす。師、開堂告香普説、新たに衆寮を造りて、規製、霊隱の如くなる者、國中に始めて有るなり」と。

＊

○禪居附録［四丈］清拙大鑑禪師塔銘〈東陵永璵撰〉云、大元泰定丙寅八月…國中始有也＝『禪居集』付録の第四丁にある「清拙大鑑禪師塔銘」を意味するものであろう。『禪居集』一巻は、正和四年の五山版、正徳二年の刊本があるとされるが（『禪籍目録』p.233）、未見。また、『五山文学全集』第一巻にも収載されているが、「塔銘」は付録されていない。ただ、「清拙大鑑禪師塔銘」は、『続群書類従』

第九輯下に収載されており、そのままの文章見えるが（昭和六三年訂正三版・四二二頁上）、「新造衆寮規製如霊隠者」の部分の読点が「新造衆寮規、製如霊隠者（新たに衆寮の規の、製すること霊隠の如くなる者を造る）」となっている。尚、【六〇四】「開堂」・【八二六】「告香普説」は、『象器箋』の中に立項されている。

④衆寮圖　諸書所載似有訛差今多依南禪規式之所圖。

＊

衆寮圖　諸書載する所、訛差有るに似たり。今、多く『南禪規式』の圖する所に依る。

＊

○『南禪規式』＝未詳。類似したものとして、『南禪清規』一冊の写本が史料編纂所にあるとされ、「霊源寺文書外四合」（『新纂禪籍目録』p.361）とされる。尚、この図については、『象器箋』【一二七〇】「衆寮図」に、「見殿堂門衆寮処（殿堂門の衆寮の処に見ゆ）」とある。

⑤鎌倉清規［六丈］衆寮圖〈廿八位者、結解小座湯圖也〉。

＊

『鎌倉清規』［六丈］衆寮圖〈廿八位は、結解小座湯の圖なり〉。

＊

○『鎌倉清規』＝『新纂禅籍目録』に拠れば、「一冊・妙心寺東海本庵蔵・無著道忠手澤本」（p.51）とあるが、未見。尚、【一三五九】「小座湯」は、『象器箋』の中に立項されている。

（澤守豊文）

【九二】穿堂〈衆寮〉

①衆寮。［勅修鈔十四ノ八丈。又同十丈右］観音龕後曰穿堂。乃衆寮之後堂名也。

＊

衆寮。［『勅修鈔』十四の八丈。又た同十丈右］観音の龕後を穿堂と曰う。乃ち衆寮の後の堂の名なり。

＊

○衆寮。［勅修鈔十四ノ八丈・又同十丈右］観音龕後曰穿堂。乃衆寮之後堂名也＝『勅修百丈清規鈔』巻一四の八丁裏に「穿堂ハ観音ノ後ヲ云ソ」とあり、「ノ」と「後」の間に「龕」という無著禅師の書き入れがある。また、同じく一〇丁表に「穿堂ト云ハ、観音龕後ヲ云ソ」とあり、「云ハ」と「観音」の間に、「衆寮ノ後堂ソ」という無著禅師の書き入れがある。

②日用軌範［勅修下一ノ五十丈左］云、僧堂、不得上下間行道、穿堂直過。〈此止〉又慈受箴規［諸祖偈頌］云、穿堂直過、豈不厚顔。〈此止。〉此等穿堂者、非堂名。謂、自前門穿過後門之義。

＊

『日用軌範』［『勅修』下一の五十丈左］に云く、「僧堂、上下間に行道し、堂を穿って直に過ぐることを得ず」と。〈此こに止まる。〉又た「慈受の箴規」［『諸祖偈頌』］に云く、「堂を穿って直に過ぐ。豈に厚顔ならずや」と。〈此こに止まる。〉此れ等の穿堂は、堂

の名に非ず。謂えらく、前門より後門に穿過するの義なり。

＊

○日用軌範［勅修下一ノ五十丈左］云、僧堂、不得上下間行道、穿堂直過＝『勅修百丈清規』巻六「日用軌範」（T48-1144b）に全く同文が見える。

○慈受箴規［諸祖偈頌］云、穿堂直過、豈不厚顔＝『禅門諸祖師偈頌』巻下之下「慈受禅師示衆箴規」（X66-751c）に全く同文が見える。

③勅修清規［下二ノ二丈］新掛搭人、點入寮茶云、瓶須從穿堂入。

＊

『勅修清規』［下二ノ二丈］「新掛搭の人、入寮の茶を點ずる」に云く、「瓶は須く穿堂從り入るべし」と。

＊

○勅修清規［下二ノ二丈］新掛搭人、點入寮茶云、瓶須從穿堂入＝『勅修百丈清規』巻七「新掛搭人、點入寮茶」（T48-1150b）に全く同文が見える。

④又［下二ノ二丈］衆寮結解特爲衆湯云、寮元、依戒排經櫃圖、茶湯問訊圖等。圖成大衆和南時、俱出於穿堂。

又た［下二ノ四丈］「衆寮結解特爲衆湯」に云く、「寮元、戒に依って經櫃の圖、茶湯問訊の圖等を排す。圖成って大衆和南する時、俱に穿堂より出す」と。

＊

○又［下二ノ二丈］衆寮結解特爲衆湯云…於穿堂＝『勅修百丈清規』巻七「衆寮結解特爲衆湯」（T48-1150c）に同文が見えるが、途中、「図等」と「図成」の間に、「清衆戒臘牌、入寮資次牌浄髪牌、夏中行茶湯瓶盞図〈兄弟結縁、随意書名〉」の二九字が省略されている。

（細川晋輔）

【九三】衣閣〈衆寮〉

①忠曰、蓋衆寮、安衆資具處。

＊

忠曰く、「蓋し衆寮、衆の資具を安く處なり」と。

②備用清規［十ノ五丈］日用清規云、衆寮、登衣閣白寮主上名、打板三下、上閣開籠。

＊

『備用清規』［十ノ五丈］の「日用清規」に云く、「衆寮、衣閣に登らば、寮主に白して、名を上ぼせ、板を打つこと三下して、閣に上って籠を開け」と。

＊

○備用清規［十ノ五丈］日用清規云…上閣開籠＝『禅林備用清規』巻一〇「日用清規」（X63-661c）に全く同文が見える。

（細川晋輔）

【九四】維那寮

＊

○維那寮＝題目のみ存し、典拠の引用文などは書き込まれていない。

（細川晋輔）

【九五】紀綱寮

①維那寮、又曰紀綱寮。

＊

維那寮を、又た紀綱寮と曰う。

②　毛詩［注疏十六之三ノ七丈］大雅、棫樸篇云、勉勉我王、綱紀四方。箋云、張之爲綱、理之爲紀。疏、説文云、綱網紘也。紀別絲也。然則綱者網之大縄。《略》以擧綱能張網之目。故張之爲綱也。紀者別理絲縷。故理之爲紀、以喩爲政。有擧大綱赦小過者。有理微細窮根源者。

＊

『毛詩』［『注疏』十六之三ノ七丈］「大雅」、「棫樸篇」に云く、「勉勉たる我が王、四方を綱紀す」と。箋に云く、「之れを張るを綱と爲し、之れを理するを紀と爲す」と。疏に、「『説文』に云く、『綱は網の紘なり。紀は別絲なり』と。然らば則ち綱は、網の大縄なり。綱を擧するを以て、能く網の目を張る。故に之れを張るを綱と爲すなり。紀は、別に絲縷を理す。故に之れを理するを紀と爲し、以て政を爲るに喩う。大綱を擧して小過を赦す者有り。微細を理して根源を窮むる者有り」と。

＊

○毛詩［注疏十六之三ノ七丈］大雅、棫樸篇云、勉勉我王、綱紀四方…有理微細窮根源者＝『毛詩注疏』は、『詩経』に後漢の鄭玄の注（箋）と、唐の孔穎達の疏を加えたものである。引用部分は、巻一六之三「大雅」所載「棫樸」詩の末尾にある「勉勉我王、綱紀四方」の八字と、それに対する注・疏の節略での引用である（阮元本・5a~6a）。

③　正字通［未中二丈］云、六書故、綱要而紀詳。綱以擧紀、紀以擧目。謂綱大紀小者非。

＊

『正字通』［未中の二丈］に云く、「『六書故』に、『綱は要にして紀は詳らかなり。綱は以て紀を擧げ、紀は以て目を擧ぐ。綱は大にして紀は小なりと謂うは非なり』と」と。

＊

○正字通［未中二丈］云、六書故、綱要而、紀詳…謂綱大紀小者非＝『正字通』十二巻は明の張自烈撰。十二巻を十二支に割り振って表記されている。引用文は『六書故』からの又引き部分である。『六書故』三十三巻は、宋の戴侗撰。該当部分は巻三〇（四庫全書本・30a）にそのまま見える。

④南禅規式［下ノ七四丈］録南禅諸寮名。曰、表率寮〈前板雲門〉望仰寮〈後板仰山〉龍蟠寮〈書記黄龍〉虎嘯寮〈東藏主虎丘〉結集寮〈西藏主虎丘〉紀綱寮〈維那應菴　或桃洞或悦衆〉　擇木寮〈焼香侍者〉思忠寮〈請客侍者〉小玉寮〈湯藥侍者〉内史寮〈書状侍者〉景雪〈知客〉

＊

『南禅規式』［下ノ七四丈］に、南禅の諸寮の名を録す。曰く、「表率寮〈前板　雲門〉、望仰寮〈後板　仰山〉、龍蟠寮〈書記　黄龍〉、虎嘯寮〈東蔵主　虎丘〉、結集寮〈西蔵主　虎丘〉、紀綱寮〈維那　應菴。或いは桃洞、或いは悦衆〉、擇木寮〈焼香侍者〉、思忠寮〈請客侍者〉、小玉寮〈湯薬侍者〉、内史寮〈書状侍者〉、景雪〈知客〉」と。

＊

○文中、前板は【五五】、後板は【五六】、書記は【三九六】、蔵主は【四〇〇】、維那は【五二五】、焼香侍者は【三七一】、請客侍者は【三七五】、湯薬侍者は【三七六】、書状侍者は【三七二】、知客は【四〇四】に、それぞれ立項されている。

⑤　忠曰、勅修清規維那云、綱維衆僧、曲盡調攝。〈此止〉維那寮名紀綱寮。本干此僧史略［依敕規所引］云、知事之三綱者、若網罟之巨縄、提之則百目正矣。〈此止〉若依此、則知事三綱総可稱紀綱耳。

＊

忠曰く、「『勅修清規』の「維那」に云く、『衆僧に綱維し、調攝を曲盡す』と。〈此こに止まる。〉維那寮を紀綱寮と名づくるは、此れに本づく。『僧史略』［『敕規』の所引に依る］に云く、『知事の三綱は、網罟の巨縄の若し。之れを提るときは、則ち百目正し』と。〈此こに止まる。〉若し此れに依らば、則ち知事の三綱、総じて紀綱と稱す可きのみ」と。

＊

○勅修清規維那云、綱維衆僧、曲盡調攝＝『勅修百丈清規』巻二「維那」（T48-1132b）に全く同文が見える。

○僧史略［依敕規所引］云、知事之三綱者、若網罟之巨縄。提之則百目正矣＝付記にあるように『勅修百丈清規悟』からの又引きである。『勅修百丈清規』巻四「東序知事、都監寺」（T48-1132a）に全く同文が見え、また『祖庭事苑』巻八（X64-431b）にも同文が見えるが、「僧史略」ではなく「僧史」となっている。

（細川晋輔）

【九六】堂司

［敕鈔九ノ廿二丈］堂司者維那寮也。若呼人為堂司。則維那是也。又見職位類。

＊

［『敕鈔』九の廿二丈］堂司とは、維那寮なり。若し人を呼んで堂司と為すときは、則ち維那、是れなり。又た職位類に見ゆ。

＊

○役位としての「堂司」は、『象器箋』巻八「第七類職位門　下」の【五二七】に立項されている。

（足立宜了）

【九七】藏司

①藏司者藏主寮也。若呼人為藏司。則藏主是也。又見職位類。

＊

藏司とは、藏主寮なり。若し人を呼んで藏司と為すときは、則ち藏主、是れなり。又た職位類に見ゆ。

＊

○役位としての「藏司」は、『象器箋』巻六「第七類職位門 上」の【四〇二】に立項されている。

②僧寶傳［二冊十三丈］雲居齊禪師傳云、法燈使知藏司。法燈偶見齊、呼曰、毎見擧祖師西來意話。藏主如何商略。齊曰、不東不西。法燈曰、若與麼會、了無交渉。曰、未審、尊意如何。法燈良久曰、西來有甚意。

＊

『僧寶傳』［二冊十三丈］「雲居の齊禪師の傳」に云く、「法燈、藏司を知らしむ。法燈偶たま齊を見て、呼びて曰く、『毎に「祖師西來意」の話を擧するを見る。藏主、如何が商略せん』と。齊曰く、『東ならず、西ならず』と。法燈曰く、『若し與麼に會せば、了に交渉無し』と。曰く、『未審し、尊意如何』と。法燈良久して曰く、『西來、甚の意か有らん』と」と。

＊

○僧寶傳［二冊十三丈］雲居齊禪師傳云、法燈使知藏司…西來有甚意＝宋の覚範慧洪撰『禪林僧宝伝』巻七の「南康雲居斉禪師」条（X79-507a）にそのまま同文が見える。

（足立宜了）

【九八】知客寮

＊

○知客寮＝題目のみ存し、典拠の引用文などは書き込まれていない。

（足立宜了）

【九九】客司

①［敕鈔八ノ十六丈。又同四四丈ウ］客司者、知客寮也。若呼人為客司、則知客是也。

＊

［『敕鈔』八の十六丈。又た同四四丈ウ］客司とは、知客寮なり。若し人を呼んで客司と為すときは、則ち知客、是れなり。

＊

○［敕鈔八ノ十六丈。又同四四丈ウ］客司者、知客寮也。若呼人為客司、則知客是也＝『勅修百丈清規鈔』巻一六の一六丁表に「客司ハ知客寮ソ」とあり、同じく四四丁裏に、「客司ハ知客寮也」とある。役位としての「知客」は、『象器箋』巻六「第七類職位門 上」の【四〇四】に立項されている。

②敕修清規［下一ノ三丈ヲ］知客云、官員尊宿相過者、引上相見、仍照管安下去處。如以次人客、只就客司相款。

＊

『勅修清規』［下一の三丈ヲ］の「知客」に云く、「官員尊宿過らば、引上相見し、仍って安下の去處を照管す。如し以次の人客ならば、只だ客司に就いて相款せよ」と。

＊

○敕修清規［下一ノ三丈ヲ］知客云、官員尊宿相過者…只就客司相款＝『勅修百丈清規』巻四「知客」条（T48-1131b）からの節略。原典には、「相過者」と「引上」の間に「香茶迎待、随令行者通報方丈。然後（香茶もて迎待し、随いて行者をして方丈に通報せしむ。然る後）」の十四字がある。

③密菴傑禪師録［五丈］小參云、佛眼、五祖會中在客司。因夜坐撥火、忽然猛省。〈應菴華禪師蔣山録［七丈］載之、作充知客。〉

＊

『密菴傑禪師録』［五丈］「小參」に云く、「佛眼（清遠・一〇六七～一一二〇）、五祖（法演・？～一一〇四）の會中、客司に在り。因みに夜坐して火を撥し、忽然として猛省す。〈『應菴華禪師蔣山録』［七丈］に之れを載せ、「知客に充つ」に作る。〉

＊

○密菴傑禪師録［五丈］小參云、佛眼、五祖會中、在客司。因夜坐撥火、忽然猛省＝『密菴和尚語録』巻一「小参」（T47-974b）からの引用。冒頭の「仏眼、五祖会中」の部分は取意による節略だが、「在客司」以下はそのままの引用。

○應菴華禪師蔣山録［七丈］載之、作充知客＝応菴曇華（一一〇三～一一六三）の『応菴曇華禅師語録』巻五「建康府蔣山太平興国禅寺語録」の「上堂」に、「後令充知客。因夜坐撥火、忽然猛省」（X69-525a）とある。

（足立宜了）

【一〇〇】前資寮

①忠曰、副寺巳下知事、退休者所歸寮也。

＊

忠曰く、「副寺巳下の知事、退休（隠退）の者の歸する所の寮なり」と。

②大慧普説［一ノ廿一丈］瑩上座請普説云、老和尚會裡、有元禪客。〈及至〉一日見元在前資寮裏坐、老漢拍他背云、來、同去鐘樓上看雪去。

＊

『大慧普説』［一の廿一丈］「瑩上座の請する普説」に云く、［老和尚の會裡に、元禪客有り。〈乃至〉一日、元［禪客］の、前資寮の裏に在りて坐するを見る。老漢、他の背を拍ちて云く、『来たれ、同に去って鐘樓上に雪を看去らん』と」と。

＊

○大慧普説［一ノ廿一丈］瑩上座請普説云、老和尚會裡、有元禪客…同去鐘樓上看雪去＝『大慧普覚禪師普説』巻一「瑩上座請普説」（M1540-15a）に同文が見える。

（小林秀嶽）

【一〇一】沙彌寮

敕修清規［下一ノ廿六丈］沙彌得度云、祇就沙彌寮安下、俟他時登壇受戒、謝戒。

＊

『勅修清規』［下一の廿六丈］「沙彌得度」に云く、「祇だ沙彌寮の安下に就きて、他時、登壇受戒を俟って、謝戒す」と。

＊

○敕修清規［下一ノ廿六丈］沙彌得度云、祇就沙彌寮安下、俟他時登壇受戒、謝戒＝『勅修百丈清規』巻五「沙彌得度」（T48-9b）に同文が見える。

（小林秀嶽）

【一〇二】客位

①忠曰、賓客、及新命安息室也。旦過外、別設焉。敕修清規［下一ノ卅三丈］遊方参請、初敘住持旦過回禮、又云、住持遇名勝相看、就送客位回禮。〈止此。〉可知、旦過之外、有客位也。若一則同回禮、何別舉之、謂旦過之外別設客寮、若名勝則送客寮也。

＊

忠曰く、「賓客、及び新命の安息の室なり。旦過の外に、別に設く。『勅修清規』［下一の卅三丈］「遊方参請」に、初め住持の旦過に回禮するを敘べ、又た云く、「住持は名勝の相看に遇わば、就きて客位に送って回禮すべし」と。〈此こに止まる。〉知る可し、旦過の外に客位有ることを。若し一ならば、則ち同じく回禮なり。何ぞ別に之を舉せん。謂く、旦過の外に別に客寮を設けて、若し名勝ならば、則ち客寮に送るなり」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅三丈］遊方参請、初敘住持旦過回禮、又云、住持遇名勝相看、就送客位回禮＝『勅修百丈清規』巻五「遊方参請」（T48-1140b）に同文が見える。

②敕修清規［上二ノ十丈］迎待尊宿云、湯罷、兩序勤舊、同送客位。

＊

『勅修清規』［上二の十丈］迎待尊宿に云く、「湯罷わりて、兩序・勤舊、同じく客位に送る」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十丈］迎待尊宿云、湯罷、兩序勤舊、同送客位＝『勅修百丈清規』巻二「迎待尊宿」（T48-1122b）に同文が見える。

③拈八方珠玉集［中ノ十一丈］云、寶蓋來訪漸源。源捲却簾子、在方丈内坐、蓋乃下却簾子、却歸客位。

＊

『拈八方珠玉集』［中の十一丈］に云く、「寶蓋（生卒年未詳）來って漸源（仲興・生卒年未詳）を訪ぬ。源、簾子を捲却し、方丈の内に在って坐す。蓋乃ち簾子を下却し、却って客位に歸る」と。

＊

○拈八方珠玉集［中ノ十一丈］云、寶蓋來訪漸源…却歸客位＝『拈八方珠玉集』巻中（X67-656c）に同文が見える。この文章は『五燈会元』巻五「潭州漸源仲興禅師」条では、「一日、宝蓋和尚来訪。師便捲起簾子、在方丈内坐。蓋一見乃下却簾、便帰客位」（X80-119c）とあり、『聯燈会要』巻二〇「潭

州漸源仲興禅師」条では、「師一日、捲簾、在方丈内坐。宝蓋和尚来見、乃下却簾子、帰客位」（X79-176a）となっている。

④明極俊和尚語要［上ノ十八丈］云、大慧會中、有一尼僧來参。送歸方丈客位歇。〈云云〉

＊

『明極俊和尚語要』［上の十八丈］に云く、「大慧會中に一人の尼僧有りて來参す。方丈の客位に送歸して歇ましむ。〈云云〉」と。

＊

○明極俊和尚語要［上ノ十八丈］云、大慧會中、有一尼僧來参。送歸方丈客位歇＝『明極俊和尚語要』は未詳。『新纂禅籍目録』（p.468）に拠れば、『明極楚俊和尚語録』としては、二巻二冊の五山版が岩崎文庫等に、三冊本の慶安四年刊本が内閣文庫に、五冊本の写本が史料編纂所に存する。

（小林秀嶽）

【一〇三】安下處

①忠曰、安下者安息税下行李也。賓客或新命、税駕之館、此名安下處。又名旦過。日本不特置安下者、借一子院、安息。謂之宿房［『敕修鈔』七巻十六丈左］。安下或作安駕、非也。下駕音近、轉訛也。

＊

忠曰く、「安下は安息して行李（＝旅の荷物）を税下（＝解き下ろす）するなり。賓客或いは新命、税駕（＝休息）の館、此れを安下處と名づく。又た旦過と名づく。日本特とに安下を置かざる者は、一の子院を借りて安息し、之を宿房［『敕修鈔』七巻の十六丈左］と謂う。『安下』或いは『安駕』に作るは、非なり。『下』『駕』音近うして轉訛するなり」と。

＊

○宿房［『敕鈔』七巻十六丈左］＝駒澤大学所蔵『勅修百丈清規抄』巻七の十六丁表に、『勅修清規』の「帰安下処」の注として「宿坊ヘカヱスソ」とあり、「安下処」を「宿坊」の意としているが、特に詳しい解説は付されていない。

②敕修清規［上二ノ十丈］住持章、受法衣云、専使相看、湯罷、兩序同送安下。　又［上二ノ卅四丈左］尊宿遷化、下遺書云、侍者燒香點湯、送專使、歸安下處。又遊方參請云、侍者云、且回安下處、容某通覆

＊

『敕修清規』［上二の十丈］「住持」の章、「法衣を受く」に云く、「專使相看、湯罷わって、兩序同じく安下に送るべし」と。　又た［上二の卅四丈左］「尊宿遷化」の「遺書を下す」に云く、「侍者、燒香點湯して、專使を送り、安下の處に歸らしむ」と。又た「遊方參請」に云く、「侍者云く、『且く安下處に回りて、某が通覆を容れよ』と」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十丈］住持章、受法衣云、専使相看、湯罷、兩序同送安下＝『勅修百丈清規』巻二「受法衣」条（T48-1122b）にほぼそのまま見える。文中の「專使」は本書【五四六】に見える。

○又［上二ノ卅四丈左］尊宿遷化、下遺書云、侍者燒香點湯、送專使、歸安下處＝『勅修百丈清規』巻三「下遺書」条（T48-1130a）にそのまま見える。文中の「通覆」は本書【八九八】に見える。

③東林雲門頌古［古宿四十七ノ卅五丈］云、琅琊和尚、問舉和尚、近離甚處、〔乃至〕琊遂去安下處、見問、莫便是舉師叔麽。〔云云〕。

＊

『東林雲門頌古』［『古宿』四十七の卅五丈］に云く、「琅琊和尚、舉和尚に問う、『近離甚（いず）れの處ぞ』と。〔乃至〕琊遂に安下處に去りて、見（まみ）えて問う、『便ち是れ舉師叔なること莫しや』と。〔云云〕」と。

＊

○東林雲門頌古［『古宿』四十七ノ三十五丈］云、琅琊和尚、問舉和尚、近離甚處、〔乃至〕琊遂去安下處、見問、莫便是舉師叔麽＝『古尊宿語録』巻四七（X68-331a）にほぼそのまま見える。「專使」は②の注でも述べたように、本書【五四六】に見える。

④　正法眼藏舉此話、安下處、作旦過堂。

＊

『正法眼藏』此の話を舉して、「安下處」を「旦過堂」に作る。

＊

○正法眼藏舉此話、安下處、作旦過堂＝『正法眼藏』巻一上（X67-557a）に「琅邪和尚問挙和尚、近離甚処。挙曰、両浙。船来陸来。曰、船来。船在甚麽処。曰、歩下。不渉程途一句、作麽生道。挙以坐具摵一摵曰、杜撰長老、如麻似粟。便払袖而出。琅邪問侍者、此是甚麽人。曰、挙上座。琅邪遂親下旦過堂、問、莫是挙上座麽」の文章が見え、本文に言うように「安下処」に当たる部分を「旦過堂」に作る。

⑤釋氏資鑑［一ノ廿丈］云、騰蘭二僧、於鴻臚寺安下、翻譯四十二章經。

＊

『釋氏資鑑』［一の廿丈］に云く、「騰（＝迦葉摩騰）・蘭（＝竺法蘭）の二僧、鴻臚寺の安下に於いて『四十二章經』を翻譯す。

＊

○釋氏資鑑［一ノ廿丈］云、騰蘭二僧、於鴻臚寺安下、翻譯四十二章經＝『歴朝釈氏資鑑』巻一（X76-142a）にほぼそのまま見える。

⑥龍舒居士淨土文［三ノ六丈］云、譬如人入大城中、必先覓安下處、却出幹事。

＊

『龍舒居士淨土文』［三の六丈］に云く、「譬えて人大城の中に入るが如し、必ず先に安下處を覓（もと）むるべし、却ち出（いで）て事を幹（な）す」と。

＊

○龍舒居士淨土文［三ノ六丈］云、譬如人入大城中、必先覓安下處、却出幹事＝『龍舒増広浄土文』巻三「普勸修持」五（T47-260b）に見える。

⑦　太平廣記［四百八十六ノ五丈］、薛調撰唐無雙傳云、劉震曰、汝易衣服、押領此物、出開遠門、覓一淡隙店安下。

＊

『太平廣記』［四百八十六の五丈］に、薛調が撰する唐の「無雙傳」に云く、「劉震曰く、『汝、衣服を易（か）へ、此物を押領して、開遠門を出て、一の淡隙の店（やど）を覓（もと）め安下せよ』

と」と。

＊

○太平廣記［四百八十六ノ五丈］、薛調撰唐無雙傳云、劉震曰、汝易衣服、押領此物、出開遠門、覓一滚隙店安下＝『太平広記』巻四八六（四庫全書本）にほぼ同文が見える。

⑧ 剪燈餘話［五ノ四十丈ウ］還魂記云、夫人曰、郎君毎還邸中。只在寒舎安下。

＊

『剪燈餘話』［五の四十丈ウ］の「還魂記」に云く、「夫人曰く、『郎君、邸中に還ること毎（なか）れ。只だ寒舎に在りて安下せよ』と」と。

＊

○剪燈餘話［五ノ四十丈ウ］還魂記云、夫人曰、郎君毎還邸中。只在寒舎安下＝明の李禎撰『剪燈餘話』五巻。和訳として、飯塚朗訳『剪燈余話』（中国古典文学全集二〇・一九五八、後に『中国古典文学大系』三九に収録）がある。未見。

⑨安下處或單言下處。隋史遺文曰、秦叔寶、領刑具、到下處、喫飯。

＊

安下處、或いは單に下處と言う。『隋史遺文』［一の六十五丈］に曰く、「秦叔寶、刑具を領（う）けて下處に到り、飯を喫す」と。

＊

○隋史遺文［一ノ六十五丈］曰、秦叔寶、領刑具、到下處、喫飯＝『隋史遺文』全六〇回は、明末の袁于令の著。校点本として劉文忠校点本（中国小説史料叢書・人文学出版社・一九八九）がある。未見。

（矢多弘範）

【一〇四】旦過寮

①忠曰、遊方人、到某寺、先税袱子、入旦過堂憩息、然後與師家相見。或謂、旦當作且。即暫時來過之義。妄説不足從。按陸放翁詩集［前集六ノ四丈］病中柬仲彌性詩云、心如澤國春歸鴈、身是雲堂旦過僧。〈止此。〉是以春對旦。又城西聯句［下ノ四十六丈］庚韻云、十載旦過軾、同時寒食翃。〈止此。〉是以寒對旦。故旦夕之旦、明矣。蓋夕來宿而旦過去也。

＊

忠曰く、「遊方の人、某寺に到れば、先ず税袱子（風呂敷）を税（と）き、旦過堂に入りて憩息し、然る後、師家と相見す。或るひと謂く、『旦は當に作且に作るべし。即ち暫時來過するの義なり』と。妄説にして從うに足らず。按ずるに『陸放翁詩集』［『前集』六の四丈］「病中、仲彌性に柬する詩」に云く、『心は澤國春歸の鴈如く、身は是れ雲堂旦過の僧なり』と。〈此ここに止まる。〉是れ春を以て旦に對す。又た『城西聯句』［下の四十六丈］「庚韻」に云く、『十載旦過の軾（＝宋の蘇軾）、同時寒食の翃（＝唐の韓君平）』と。〈此ここに止まる。〉是れ寒を以て旦に對す。故に旦夕の旦なること、明らけし。蓋し夕べに來り宿して、旦（あし）たに過ぎ去るなり」と。

＊

○按陸放翁詩集［前集六ノ四丈］病中柬仲彌性詩云、心如澤國春歸鴈、身是雲堂旦過僧＝『澗谷精選陸放翁詩集』前集巻六に見える「病中柬仲弥性・唐克明・蘇訓直」という七律の第三、四句。全詩は次

の通り。「移疾還家暫曲肱、依然耐久北牕燈。心如沢国春帰鴈、身是雲堂旦過僧。細雨佩壺尋廃寺、夕陽下馬弔荒陵。小留莫厭時追逐、勝社年來冷欲冰。」（四部叢刊本・4a）

○又城西聯句［下ノ四十六丈］庚韻云、十載旦過軾、同時寒食翃＝『城西聯句』二巻は別名『九千句』。策源周良等の聯句を韻字別に纏めたもの。元和四年（一六一八）刊の古活字版（鶴見大学図書館所蔵）や寛永五年刊本（東北大学付属図書館所蔵）などがある。寛永年間刊本が「国立国会図書館デジタル化資料」として公開されており、引用部分は巻下・四七コマ左に見える。

②禪苑清規［八ノ四丈］龜鏡文云、旦過寮、三朝權住。盡禮供承。

＊

『禪苑清規』［八の四丈］「龜鏡文」に云く、「旦過寮は、三朝權（か）りに住す。禮を盡くして供承せよ」と。

＊

○禪苑清規［八ノ四丈］龜鏡文云、旦過寮、三朝權住。盡禮供承＝『（重雕補註）禪苑清規』巻八（X63-544c）にそのまま見える。また、鏡島元隆他『訳注 禪苑清規』（曹洞宗宗務庁・一九七二、p.276）を参照。

③敕修清規［下一ノ三丈］知客云、其旦過寮床帳什物、燈油柴炭、常令齋整。　又［下一ノ卅一丈］裝包云、如遊山、到處將及門、下包捧入旦過。　又［下一ノ卅二丈］遊方參請云、遊方掛搭、初到旦過、推熟於叢林能事者一人爲參頭。

＊

『敕修清規』［下一の三丈］「知客」に云く、「其れ旦過寮の床帳什物、燈油柴炭は、常に齋整ならしむべし」と。　又た［下一の卅一丈］「裝包」に云く、「如（も）し遊山ならば、到る處に將に門に及ばんとすれば、包みを下ろし捧げて旦過に入る」と。　又た［下一の卅二丈］「遊方參請」に云く、「遊方掛搭、初めて旦過に到れば、叢林に熟し事に能（た）えたる者（もの）一人を推して參頭と為す」と。

＊

○敕修清規［下一ノ三丈］知客云、其旦過寮床帳什物、燈油柴炭、常令齋整＝『勅修百丈清規』巻四「知客」条（T48-1131b）にそのまま見える。『禅林備用清規』巻七「知客」条にも、「旦過寮は常に燈油柴炭を備えよ（旦過寮常備燈油柴炭）」（X63-647a）とある。

○又［下一ノ卅一丈］裝包云、如遊山、到處將及門、下包捧入旦過＝『勅修百丈清規』巻五「裝包」（T48-1140a）にそのまま見える。

○又［下一ノ卅二丈］遊方參請云、遊方掛搭、初到旦過、推熟於叢林能事者一人爲參頭＝『勅修百丈清規』巻五「遊方參請」条（T48-1140a）にそのまま見える。また、『増修教苑清規』巻一「遊方參請」条にも「初めて旦過に到らば、威儀を具し、叢林に熟し事を能くする者一人を推して參頭と為す（初到旦過、具威儀、推熟於叢林能事者一人為參頭）」（X57-323b）とある。

④又［下二ノ十六丈］月分須知云、四月初一日、鎖旦過。

＊

又た［下二の十六丈］「月分須知」に云く、「四月初一日、旦過を鎖（とざ）す」と。

＊

○又［下二ノ十六丈］月分須知云、四月初一日、鎖旦過＝『勅修百丈清規』巻七「月分須知」条（T48-1155a）にそのまま見える。また、『禅林備用清規』巻一〇「月分標題」条にも「四月旦、旦過の門を鎖す（四月旦、鎖旦過門）」（X63-663c）とあり、『叢林校定清規総要』巻二には、理由を添えて「四月分、初一日、規例に照らして、夏の禁足に入れば、旦過を鎖す（四月分、初一日、照規例、入夏禁足、鎖旦過）」（X63-615b）とある。

⑤　解者曰、自四月朔、止行脚。故鎖旦過也。

＊

解する者曰く、「四月朔自り、行脚を止む。故に旦過を鎖す」と。

⑥正法眼藏［一上ノ一丈］云、琅邪和尚問擧和尚、近離甚處。〈乃至〉琅邪問侍者、此是甚麼人。曰、擧上座。琅邪遂親下旦過堂。問、莫是擧上座麼。〈云云。〉

＊

『正法眼藏』［一上の一丈］に云く、「琅邪和尚、擧和尚に問う、『近離甚れの處ぞ』と。〈乃至〉琅邪、侍者に問う、『此れは是れ甚麼人ぞ』と。曰く、『擧上座』と。琅邪遂に親しく旦過堂に下りて問う、『是れ擧上座なること莫からんや』と。〈云云。〉」と。

＊

○正法眼藏［一上ノ一丈］云、琅邪和尚問擧和尚、近離甚處。〈乃至〉…問、莫是擧上座麼。〈云云。〉＝『正法眼藏』巻一之上の冒頭に見える一段で、大慧の長文の評語が付されている。評語を除いた全文は次の通り。（【　】が引用部分。）

【琅邪和尚問挙和尚、「近離甚処」。】挙曰、「兩浙」。「船来陸来」。曰、「船来」。「船在甚麼処」。曰、「歩下」。「不渉程途一句、作麼生道」。挙以坐具撼一撼曰、「杜撰長老、如麻似粟」。便払袖而出。琅邪問侍者、「此是甚麼人」。曰、「挙上座」。琅邪遂親下旦過堂、【問、「莫是挙上座麼。】莫怪適來相触忤」。挙便喝、復問、「長老何時到汾陽」。曰、「某時到」。挙曰、「我在浙江早聞你名。元来見解只如此。何得名播寰宇」。琅邪遂作礼曰、「慧覚罪過」。（X67-557a~b）

⑦大慧武庫［三丈］云、葉縣省和尚、嚴冷枯淡、衲子敬畏之。浮山遠・天衣懷、在衆時、特往參扣。正値雪寒。省訶罵驅逐、以至將水潑旦過。衣服皆濕。其他僧、皆怒而去。唯遠・懷併疊敷具整衣、復坐於旦過中。省到訶曰、你更不去、我打你。遠近前云、某二人、數千里、特來參和尚禪。豈以一杓水潑之、便去。若打殺也不去。省笑曰、你兩箇、要參禪。却去挂搭。

＊

『大慧武庫』［三丈］に云く、「葉縣の省和尚、嚴冷枯淡にして、衲子、之を敬畏す。浮山の遠・天衣の懷、衆に在りし時、特に往きて參扣す。正に雪の寒さに値う。省、訶罵驅逐せんとし、以て水を將て旦過に潑するに至る。衣服皆な濕る。其の他の僧、皆な怒りて去る。唯だ遠・懷、敷具を併疊して衣を整え、復た旦過の中に坐す。省到りて訶して曰く、『你更に去らずんば、我、你を打せん』と。遠近前して云く、『某二人、數千里、特に來たって和尚の禪に參ず。豈に一杓の水を以て之を潑せんに、便ち去らんや。若し打殺すとも也た去らず』と。省笑いて曰く、『你兩箇、參禪せんと要す。却って去りて挂搭せよ』と」と。

＊

○大慧武庫［三丈］云、葉縣省和尚…却去挂搭＝『大慧普覚禪師宗門武庫』第九条の前半部分（T47-944a）で、三個所の「你」を全て「爾」に作る以外、文字に異同は無い。

⑧大川濟天章録、開旦過上堂云、開門待知識、知識不來過。有箇來不入門、去不出戸。問他洞山麻三斤、趙州柏樹子、便惡發。吽。喫茶去。

＊

『大川濟天章録』「旦過を開く上堂」に云く、「門を開きて知識を待つも、知識、來過せず。箇の來るに門に入らず、去るに戸を出でざるもの有り。他に洞山の麻三斤、趙州の柏樹子を問わば、便ち惡發す。吽(うん)。喫茶去(きっさこ)」と。

＊

○大川濟天章録、開旦過上堂云、開門待知識、知識不來過。…喫茶去＝『大川普済禅師語録』の「紹興府蘭亭天章十方禅寺語録」（X69-762b）にそのまま見える。

⑨ 護法録［二上ノ二丈］會堂縁禪師塔銘序云、師道經寧海。日已暮、悲風號林莽間。師遑遑急走、欲求憩泊之地、竟不可得。夜行三里所、乃逢逆旅主人。破屋一間、不能蔽風雨。師竟夕不寐、明發指天自誓曰、所不能建菴廬、以延旦過者、有如日。

＊

『護法録』［二上の二丈］「會堂縁禪師塔銘序」に云く、「師、道、寧海を經(ふ)。日已に暮れて、悲風、林莽の間に號す。師遑遑として急に走りて、憩泊の地を求めんと欲するも、竟(つい)に得可からず。夜(よる)行くこと三里所(バカリ)、乃ち逆旅の主人に逢う。破屋一間、風雨を蔽うこと能わず。師夕竟寐(ヨモスガラい)ねず、明發(アクルコロオイ)天を指して自ら誓いて曰く、『菴廬を建てて、以て延旦過を延くこと能わざる所の者あらば、有らんこと日の如けん』と」と。

＊

○護法録［二上ノ二丈］會堂縁禪師塔銘序云、師道經寧海…有如日＝『護法録』巻二の最初に載せられた「仏心普済禅師縁公塔銘」の序文の一節。和刻本では巻二之上の二丁表、嘉興蔵本では巻二（J21-616b）に、冒頭の「師」の一字を欠く以外、そのまま見える。最後の「有如日」を和刻本は「日の如くなること有らん」と読んでいる。

⑩ 叢林盛事有旦過字。見稱呼門兄弟處。

＊

『叢林盛事』に「旦過」の字有り。見「稱呼門」の「兄弟」の處に見ゆ。

＊

○叢林盛事有旦過字。見稱呼門兄弟處＝『象器箋』巻五「第六類稱呼門 下」の【三一七】「兄弟」を指す。当該部分に引用された資料は、『叢林盛事』にある「宏智禅師」（X86-690b）の一段である。

⑪ 破菴先禪師録［四十四丈］行状云、至平江萬壽旦過、値天大雪。夜坐、乃自念言、行脚十年矣。此回若不徹去、又是虚生浪死。

＊

『破菴先禪師録』［四十四丈］「行状」に云く、「平江の萬壽の旦過に至るに、天の大いに雪ふらすに値(あ)う。夜坐して、乃ち自ら念言すらく、『行脚すること十年。此の回若し徹し去らずんば、又た是れ虚しく生じ浪りに死す』と」と。

＊

○破菴先禪師録［四十四丈］行状云、至平江萬壽旦過、値天大雪。夜坐、乃自念言、行脚十年矣。此回若不徹去、又是虚生浪死＝『破菴祖先禪師語録』の巻末に付された「行状」（X70-219b）にそのまま見える。

⑫ 清拙澄禪師日本録［三ノ四丈］晩參云、二十三上、出閩入浙、至淨慈。先佛心愚極和尚、

門庭高峻。旦過中八十餘人、不得相看。〈云云。〉　又［日本五ノ銘二丈］圓融寺鐘銘序云、大唐天目山中峯本禪師、行脚時、止金陵一小寺旦過寮。〈云云。〉

＊

『清拙澄禪師日本録』［三の四丈］「晩參」に云く、「二十三上にして、閩を出でて浙に入り、淨慈に至る。先の佛心愚極和尚、門庭高峻なり。旦過の中の八十餘人、相看することを得ず。〈云云。〉」と。　又た［『日本』五ノ銘二丈］「圓融寺の鐘の銘の序」に云く、「大唐天目山の中峯本禪師、行脚の時、金陵の一小寺の旦過寮に止まる。〈云云。〉」と。

＊

○清拙澄禪師日本録［三ノ四丈］晩參云、二十三上…不得相看。〈云云。〉＝『清拙和尚語録』一巻（国立国会図書館デジタル化資料）、及び『禅居集』（『五山文学全集』第一巻、所収）には見えない。

○又［日本五ノ銘二丈］圓融寺鐘銘序云、大唐天目山中峯本禪師…止金陵一小寺旦過寮。〈云云。〉＝『禅居集』（『五山文学全集』第一巻・p.90）にそのまま見える。

⑬　宋景濂護法録［一上ノ卅丈］淨慈逆川順公塔銘序云、師走閩之天寶山、參鐵關樞公。師欲住。公叱。師下旦過寮、潸然而泣。或憫之慰曰、善知識、門庭高峻。拒之即進之也。

＊

宋景濂『護法録』［一上の卅丈］「淨慈逆川順公の塔銘の序」に云く、「師、閩の天寶山に走りて、鐵關の樞公に參ず。師、住せんと欲す。公叱す。師、旦過寮に下りて、潸然として泣く。或るひと、之を憫れみて慰めて曰く、『善知識、門庭高峻なり。之を拒むは即ち之を進むるなり』と」と。

＊

○宋景濂護法録［一上ノ卅丈］淨慈逆川順公塔銘序云、師走閩之天寶山…拒之即進之也＝『護法録』巻一にある「仏性円辯禅師淨慈順公逆川塔碑銘」の一節。和刻本では巻一上の三十丁の表から裏にかけて、嘉興蔵本は巻一（J21-606b）に見える。節略であり、原文は「復走閩之天宝山、參鉄関枢公。公円悟八世孫也。授師以心要。遵而行之、似有階漸。欲依公而住。公叱曰、『丈夫不於大叢林与人相頡頏、局此蠡殼中邪』。拂袖而入。師下旦過寮、潸然而泣。或憫之慰曰、『善知識、門庭高峻。拒之即進之也』」となっている。

（野口善敬）

【一〇五】浴室

①敕修清規［下一ノ四丈］知浴云、其入浴資次、當刊掲浴室外。

＊

『敕修清規』［下一の四丈］「知浴」に云く、「其の入浴の資次は、當に刊（きざ）みて浴室の外に掲ぐべし」と。

＊

○敕修清規［下一ノ四丈］知浴云…當刊掲浴室外＝『勅修百丈清規』巻四「知浴」条（T48-1131b）に全く同文が見える。

②南海寄歸傳［三ノ七丈］云、世尊敎爲浴室。或作露地甎池。〈乃至〉洗浴者、竝須饑時。浴已方食、有其二益。一則身體清虚、無諸垢穢。二則痰癊消散、能餐飲食。飽食方洗、醫明所諱。

＊

『南海寄帰伝』[三の七丈] に云く、「世尊教えて浴室を為らしむ。或いは露地の甎池を作る。〈乃至〉洗浴は並びに須らく饑時なるべし。浴し已わりて方に食うに、其の二益有り。一には則ち身體清虚して、諸もろの垢穢無し。二には則ち痰癊消散して、能く飲食を餐う。飽食して方に洗うは、医明の諱む所なり」と。

＊

○南海寄歸傳 [三ノ七丈] 云…醫明所諱＝『南海寄帰内法伝』巻三「二十 洗浴随時」条（T54-220c~221a）に全く同文が見える。

③十誦律 [珠林四十五ノ七丈] 云、外國浴室、形圓猶如圓倉。開戸通煙。下作伏瀆出外。内施三擎閣、齊人所及處。以瓦盛水、滿三重閣。火氣上升、上閣水熱、中閣水暖、下閣水冷。隨宜自取用、無別作湯。故云淨水耳。

＊

『十誦律』[『珠林』四十五の七丈] に云く、「外國の浴室は、形円にして猶お円倉の如し。戸を開きて煙を通ず。下に伏瀆を作りて外に出す。内に三擎の閣を施して、人の及ぶ所の処に齊す。瓦を以て水を盛り、三重の閣に満つ。火気上升して、上閣は水熱く、中閣は水暖かに、下閣は水冷やかなり。宜に随って自ら取り用い、別に湯を作ること無し。故に浄水と云うのみ」と。

＊

○十誦律 [珠林四十五ノ七丈] 云…故云淨水耳＝書き入れに「珠林」云々とあるように『法苑珠林』巻四五「洗僧部」（四部叢刊本・7b~8a）に全く同文が見える。『大正新脩大蔵経』所収の『法苑珠林』では巻三三（T53-544a）に相当する。『十誦律』巻三七（T23-270b~c）の一段を踏まえた文章と思われるが、大きく形を異にしている。また、『諸經要集』巻八「洗僧縁第五」（T54-77c）にも、『法苑珠林』とほぼ同文が引かれている。

④増一阿含經 [廿八ノ一丈] 曰、爾時世尊、告諸比丘、造作浴室、有五功德。云何爲五。一者除風。二者病者得差。三者除去塵垢。四者身體輕便。五者得肥白。〈乃至〉若有四部之衆、欲求此五功德者、當求方便、造立浴室。

＊

『増一阿含經』[廿八の一丈] に曰く、「爾の時、世尊、諸もろの比丘に告げたまわく、『浴室を造作するに、五の功德有り。云何が五と爲す。一には風を除く。二には病者差ゆることを得。三には塵垢を除去す。四には身體輕便なり。五には肥白を得。〈乃至〉若し四部の衆有って、此の五の功德を求めんと欲せば、當に方便を求めて、浴室を造立すべし』と」と。

＊

○増一阿含經 [廿八ノ一丈] 曰…造立浴室＝『増一阿含経』巻二八「聴法品第三十六」（T02-703a）に全く同文が見える。

⑤浴室安跋陀婆羅像。説見霊像類。

＊

浴室に跋陀婆羅像を安ず。説、「霊像類」に見ゆ。

＊

○浴室安跋陀婆羅像。説見霊像類＝『象器箋』巻三「第五類霊像門 上」の【二三四】「跋陀婆羅」に詳しく見える。

⑥入浴法、毘奈耶雑事［三ノ十六丈］詳説。〈往看〉

＊

入浴の法は、『毘奈耶雑事』［三の十六丈］に詳らかに説く。〈往きて看よ。〉

＊

○入浴法、毘奈耶雑事［三ノ十六丈］詳説＝『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻三（T24-219a）に、入浴の法が見える。

⑦毘奈耶雑事［三ノ十七丈］云、浴室内、漫爲言話、佛言、不應漫話。然洗浴時、有二儀式。一者法語、二聖默然。

『毘奈耶雑事』［三の十七丈］に云く、「浴室の内、漫りに言話を為す。佛言わく、『應に漫りに話るべからず。然るに洗浴の時、二の儀式有り。一には法語、二には聖默然なり』と」と。

○毘奈耶雑事［三ノ十七丈］云…二聖默然＝『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻三（T24-219b）に全く同文が見える。

⑥六學僧傳［十ノ卅一丈］云、後唐智暉、姓高氏咸陽人。少從圭峰温禪師鬚髮。梁乾化四年、自江表來京邑、歴觀諸刹、以爲所須皆備。而獨於浴室、似有缺典。於是相攸洛汭、治屋若干楹。購山給薪。鑿沼儲水、輪汲而槽受。其湯之富、未易言、則瓶錫之侶、冠簪之倫、搢紳先生之流、其至者、日不暇給。而脱履則木舄承足、卸衣則枲裙障身。五日一開、開凡七十有二、而歳周矣。其所浴殆數萬人。不啻、又闢浴聖室於西廡、以象十六應眞、其内中則觀自在堂也。侍郎揚凝式、篤重暉爲作碑頌德。

＊

『六學僧傳』［十の卅一丈］に云く、「後唐の智暉、姓は高氏、咸陽の人なり。少くして圭峰の温禪師に従って鬚髮す。梁の乾化四（九一四）年、江表自り京邑に来りて、諸刹を歴観するに、以爲く、『所須（必要な物）皆な備れり。而れども独り浴室に於いて、缺典有るに似たり』と。是こに於いて攸を洛汭に相て、屋を治むること若干楹。山を購って薪を給す。沼を鑿ちて水を儲け、輪汲みて槽受く。其の湯の富むこと、未だ言い易からざれば、則ち瓶（仏教）錫の侶、冠（道教）簪の倫、搢紳（儒教）先生の流、其の至る者、日として暇給せず。履を脱するときは則ち木舄（履）、足を承け、衣を卸すときは則ち枲裙、身を障す。五日に一たび開き、開くこと凡そ七十有二にして歳周（一年が経つ）す。其の所浴、殆ど數萬人に不啻（等し）。又た浴聖の室を西廡に闢きて、以て十六の應眞を象り、其の内中は則ち觀自在の堂なり。侍郎（＝古代中国の官名）揚凝式（＝楊凝式。中国、五代の書家）、篤く暉を重んじて、爲に碑を作りて徳を頌う」と。

＊

○六學僧傳［十ノ卅一丈］云…篤重暉爲作碑頌德＝『新修科分六学僧伝』巻一〇「後唐智暉」条（X77-159b）に全く同文が見える。

⑦

又六學僧傳云、宋常覺、姓李氏、陳留人。遊盧山、投歸宗寺出家。〈乃至〉後唐天成三年、始得地於汴京麗景門右、治屋數間、以營浴事。毎月以三八日、一設。僧無遠近皆就浴。歳約費千萬緡、雖一出檀施、自非覺維持之力。疇克爾、尤與北海陶穀湘東張仲荀、厚善。皆有遺寄之文、可考。〈右二件、並宋高僧傳［廿八］載。今愛文簡明故引六學耳。〉

＊

又た『六學僧傳』に云く、「宋の常覺、姓は李氏、陳留（河南省開封）の人なり。盧山に遊び、歸宗寺に投じて出家す。〈乃至〉後唐の天成三（九二八）年、始めて地を汴京の麗景門の右に得、屋數間を治めて、以て浴事を營む。毎月、三八日を以て、一たび設く。僧、遠近と無く、皆な就きて浴す。歳々約するに費え千萬緡、一に檀施より出ずと雖も、覺の維持の力に非ざる自りは、疇か克く爾らん。尤も、北海の陶穀、湘東の張仲荀と、厚く善し。皆な遺寄の文有って、考う可し」と。〈右の二件は、並びに『宋高僧傳』［廿八］に載す。今、文の簡明を愛するが故に『六學』を引くのみ。〉

＊

○又六學僧傳云…可考＝『新修科分六学僧伝』巻一〇「宋常覚」条（X77-159c）に全く同文が見える。
○右二件、並宋高僧傳［廿八］載。今愛文簡明故引六學耳＝無著禅師の指摘通り、⑥⑦の『六学僧伝』の引用は、それぞれ『宋高僧伝』巻二八「後唐洛陽中灘浴院智暉伝」（T50-883c~884a）、及び同巻「宋東京普浄院常覚伝」（T50-886c~887a）の節略である。

（澤守豊文）

【一〇六】浴室頭首板頭（浴室の頭首の板頭）

①勅修清規［下一ノ四丈］知浴云、如住持有故、欲同頭首先浴、則不用設用屏障、不入小閤内、只頭首板頭解衣。

＊

『勅修清規』［下一の四丈］の「知浴」に云く、「如し住持、故有って、頭首と同じく先ず浴せんことを欲せば、則ち屏障を設くることを用いず、小閤の内に入らず、只だ頭首の板頭に衣を解くべし」と。

＊

○勅修清規［下一ノ四丈］知浴云、如住持…頭解衣＝『勅修百丈清規』巻四「知浴」条（T48-1131b）に全く同文が見える。

（細川晋輔）

【一〇七】廚庫

①臨濟玄禅師録［卅七丈］云、黄檗因入廚次、問飯頭、作什麼。飯頭云、揀衆僧米。

＊

『臨濟玄禅師録』［卅七丈］に云く、「黄檗、因みに廚に入る次いで、飯頭に問う、『什麼をか作す』と。飯頭云く、『衆僧の米を揀ぶ』と」と。

＊

○臨濟玄禅師録［卅七丈］云、黄檗因…揀衆僧米＝『鎮州臨済慧照禅師語録』「勘弁」冒頭（T47-503a、岩波文庫本・p.149）に全く同文が見える。

②雲門偃禅師録［中ノ四十一丈］云、古人道、人人盡有光明在。看時不見暗昏昏。作麼生是光明。代云、廚庫三門。

＊

『雲門偃禅師録』［中の四十一丈］に云く、「〔或るひと云く、〕『古人道（いわ）く、「人人盡く光明の在る有り。看る時には見えず暗昏昏なり」と。作麼生か是れ光明』と。代って云く、『廚庫三門』と」と。

＊

○雲門偃禅師録［中ノ四十一丈］云、古人道人人盡…廚庫三門＝『雲門匡真禅師語録』巻中「垂示代語」（T47-563b）に全く同文が見える。引用文の前に「或云」の二字が省略されており、「　」が付けづらいので補った。

③廚、品字箋［庚ノ百十四丈］云、烹飪之所也。

＊

廚（ちゅう）は『品字箋』［庚の百十四丈］に云く、「烹飪（ほうじん）の所なり」と。

＊

○廚、品字箋［庚ノ百十四丈］云、烹飪之所也＝『諧声品字箋』九集は清の虞徳升撰。康熙十六年（一六七七）刊本が京都大学人文科学研究所に所蔵されている。未見。烹も飪（飪の異体字）も共に煮炊きするの意。

④庫、釋名云、舍也。物所在之舍也。

＊

庫は『釋名（しゃくみょう）』云く、「舍なり。物の在る所の舍なり」と。

＊

○庫、釋名云、舍也。物所在之舍也＝『釈名』巻五「釈宮室第十七」（四部叢刊本・7a）にそのまま見える。

（細川晋輔）

【一〇八】槽廠

①六祖法寶壇經云、五祖云、這獦獠根性大利。汝更勿言。著槽廠去。慧能退至後院。有一行者、差慧能破柴踏碓。〈又見行者房處。〉

＊

『六祖法寶壇經』に云く、「五祖の云く、『這の獦獠、根性大いに利なり。汝更に言うこと勿かれ。槽廠に著き去れ』と。慧能退きて、後院に至る。一の行者有り、慧能を差して、柴を破り碓を踏ましむ」と。〈又た「行者房」の處に見ゆ。〉

＊

○六祖法寶壇經云、五祖云、這獦獠…破柴踏碓＝『六祖大師法宝壇経』「行由第一」（T48-348a）に全く同

文が見えるが、原文では「五祖」が「祖」の一字に省略されている。
○又見行者房處＝『禅林象器箋』巻二「第二類殿堂門 下」の【一一四】「行者房」を指す。

②
忠曰、舊解言行者寮非也。但是廚房邊、卑賤雑務之處。行者亦當服役于此耳。

＊

忠曰く、「舊解に行者寮と言うは非（間違い）なり。但だ是れ廚房の邊、卑賤雑務の處なり。行者も亦た當に此こに服役すべきのみ」と。

③
槽、正字通［辰中ノ九十八丈］云、音曹。説文畜獸食器。　品字箋［辛ノ三丈］云、槽草平聲、刳木令空曰槽。又酒槽、又以木槽飼馬、謂之馬槽。

＊

槽（そう）は『正字通』［辰中の九十八丈］に云く、「音は曹なり。『説文』に『畜獸の食器なり』」と。　『品字箋』［辛の三丈］云く、「槽は草の平聲、木を刳りて空しむるを槽と曰う。又酒槽、又木の槽を以て馬を飼う、これを馬槽（ばそう）と謂う」と。

＊

○槽、正字通［辰中ノ九十八丈］云、音曹。説文畜獸食器＝『正字通』十二巻は、明の張自烈撰。康熙二十四年（一六八五）刊本が京都大学人文科学研究所に存する。未見。『説文解字』は後漢の許慎の作。『正字通』の又引きである。
○品字箋［辛ノ三丈］云、槽草平聲…謂之馬槽＝『品字箋』は【一〇七】「廚庫」の③に既出。

④
廠、正字通［寅下ノ廿四丈］云、音敞。屋無壁、又音昌。義同。　篇海類編［十四ノ五丈］云、廠、昌兩切。音昶。馬屋。又露舍無壁。　品字箋［辛ノ三丈］云、棚廠薄有樗架、而覆不以瓦曰棚。雖以瓦覆、而門牕不設曰廠。廠、敞也。言其廠然高曠、不狹隘也。

＊

廠は『正字通』［寅下ノ廿四丈］に云く、「音（発音）は敞（しょう）。屋に壁無し。又た音は昌。義（意味）は同じ」と。　『篇海類編』［十四の五丈］に云く、「廠は昌兩の切（反切）。音は昶（しょう）。馬の屋なり。又た露舍にして壁無きなり」と。　『品字箋』［辛ノ三丈］に云く、「棚の廠は薄（ほ）ぼ樗架有って、覆うに瓦を以てせざるを棚と曰う。瓦を以て覆うと雖も、門牕を設けざるを廠と曰う。廠は敞なり。言うこころは其れ廠然（広々と）高曠として、狹隘（きょうあい）ならざるなり」と。

＊

○廠、正字通［寅下ノ廿四丈］云、音敞。屋無壁、又音昌。義同＝『正字通』は本条③に既出。
○篇海類編［十四ノ五丈］云、廠、昌兩切。音昶。馬屋。又露舍無壁＝『篇海類編』二十巻附一巻、明の宋濂撰、屠隆校。内閣文庫に明刊本および寛文九年（一六六九）の和刻本が存し、その他、『尊經閣文庫』『蓬左文庫』にも刊本が存する。未見。
○品字箋［辛ノ三丈］云、棚廠薄有樗架、而覆不以瓦曰棚。雖以瓦覆、而門牕不設曰廠。廠、敞也。言其廠然高曠、不狹隘也＝『品字箋』は【一〇七】「廚庫」の③、及び本条③に既出。

（細川晋輔）

【一〇九】磨院（からうすべや）

①正宗賛[一巻卅七丈]雪峯眞覺禅師傳云、師親書牌於磨院云、山前竟日無狼虎、磨下終年絶雀兒、至今虎雀絶無。

＊

『正宗賛』[一巻卅七丈]「雪峯眞覺禅師（雪峰義存・八二二～九〇八）の傳」に云く、「師、親しく牌を磨院に書きて云く、『山前竟日、狼虎　無く、磨下終年雀兒を絶す』と。今に至って虎雀、絶して無し。

＊

○正宗賛[一巻卅七丈]雪峯眞覺禅師傳云、師親書牌於磨院云、…至今虎雀絶無＝『五家正宗賛』巻一（Z135-461b）にそのまま見える。「磨院」は米つき小屋、「牌」は禅院で大衆への告知に用いられる掛札のこと。【一一〇】「水磨坊」条に、同じ雪峰の語が『雪峰義存禅師語録』巻下から引用されているが、字句に異同がある。

②大慧武庫[四十丈]云、五祖演和尚、依舒州白雲海會端和尚、咨決大事、深徹骨髓。端令山　前作磨頭、演逐年磨下収糠麩錢、解典出息。雇人工及開供外、剰錢入常住。毎被人於端處鬬諜是非。云、演逐日磨下飲酒食肉、及養莊客婦女。一院紛紜。演聞之、故意買肉沽酒。懸于磨院及、買坯粉與莊、客婦女搽畫。毎有禪和來遊磨院、演以手與婦女揶揄語笑、全無忌禪。端一日、喚至方丈問其故。演喏喏無他語。端劈面掌之、演顔色不動遂作禮而去。端咄云、急退却。演云、俟某筭計了請人交割。一日白端曰、某在磨下除沽酒買肉之餘、剰錢三百千入常住。端大驚駭、方知小人嫉妬。時秀圓通爲座元、受四面請、即請演爲第一座。

＊

『大慧武庫』[四十丈]に云く、「五祖演和尚（五祖法演・？～一一〇四）、舒州（安徽省）の白雲海會の端和尚（白雲守端・一〇二五～一〇七三）に依って大事を咨決し、深く骨髓に徹す。端、山前に磨頭と作さしむ。演、年を逐て磨下に糠麩錢を収め、解典、息を出す。人工を雇い、及び供を開くの外、剰錢を常住に入る。毎に人に端の處に於いて是非を鬬諜せらる。云く、『演、逐日磨下に酒を飲み肉を食し、及び莊客・婦女を養う』と。一院紛紜たり。演、之れを聞いての故に肉を買い酒を沽いて磨院に懸け、及び坯粉を買いて莊客・婦女に與えて搽畫せしむ。禅和有って、來りて磨院に遊ぶ毎に、演、手を以て、婦女と揶揄語笑し、全く忌禪無し。端、一日喚んで方丈に至らしめ、其の故を問う。演、喏喏して他の語無し。端、劈面に之を掌す。演、顔色動ぜず、遂に作禮して去る。端、咄して云く、『急に退却せよ』と。演云く、『某が筭計し了わって、人を請じて交割（＝私物と常住物とを分別）せんを俟て』と。一日、端に白して曰く、『某、磨下に在りて、酒を沽い肉を買うの餘を除き、剰錢三百千、常住に入る』と。端、大いに驚駭す。方に知る小人の嫉妬なることを。時に秀圓通、座元と爲り、四面の請を受く。即ち演を請じて第一座と爲すと。

＊

○大慧武庫[四十丈]云、五祖演和尚…即請演爲第一座＝『大慧普覚禅師宗門武庫』（T47-955b）にそのまま見える。

③　永平清規[下之十六丈]引演祖事云、磨下者、磨院也。稱磨司、椎米磨麺、之局也。寺邊五六町、若十餘町建之。磨院主一人請之。演祖之職掌乃是也。

＊

『永平清規』[下の十六丈]に演祖の事を引いて云く、「磨下は、磨院なり。磨司と稱す。米を椎き麺を磨すの局なり。寺邊、五六町、若しくは十餘町にして之を建つ。磨院の主、一人之を請す。演祖の職掌、乃ち是れなり」と。

＊

○永平清規［下之十六丈］引演祖事云、磨下者、磨院也。…演祖之職掌乃是也＝『永平元禅師清規』巻下（T82-336b）にそのまま見える。但し、大正蔵本は、「椎」を「碓」に作る。

（足立宜了）

【一一〇】水磨坊

①置水碓磨之房舎也

＊

水碓磨を置くの房舎なり。

②雪峯存禅師録［偈頌七丈］云、師在枯木菴坐禅、於水磨坊前晒麥。乃親題云、菴前永日無狼子、磨下終年絶雀兒。　註山中至今竝無狼虎。凡於磨坊前、晒麥亦無鳥雀。皆如師記耳。

＊

『雪峯存禅師の録』［偈頌七丈］に云く、「師、枯木菴に在りて坐禅し、水磨坊の前に於いて麥を晒す。乃ち親しく題して云く、『菴の前に永日、狼子無く、磨の下に終年、雀兒を絶す』と。註に、『山中、今に至るまで、竝に狼虎無く、凡そ磨坊の前に於いて麥を晒すも、亦た鳥雀無きこと、皆な師の記の如きのみ』と」と。

＊

○雪峯存禅師録［偈頌七丈］云、師在枯木菴坐禅…皆如師記耳＝雪峯義存（八二二～九〇八）の『雪峯義存禅師語録』巻下（X69-85b-c）から、註も含めてそのまま同文が見える。但し、「註」の一字は無著禅師の加筆である。【一〇九】「磨院」に同じ雪峯の語が『五家正宗賛』巻一から引用されているが、字句に異同がある。

（小林秀嶽）

【一一一】淨頭寮

大慧年譜［七丈］云、師二十五歳〈在寶峯湛堂處。〉在淨頭寮。因書雲峯悅和尚小參語於座右。一日廣道者至寮見之、乃私語湛堂曰、宣州杲兄、以雲峯小參爲警慕。非碌碌餘子之比。湛堂曰、此子他日必能任重到遠。〈淨頭義見職位類淨頭處。〉

＊

『大慧年譜』［七丈］に云く、「師、二十五歳。〈寶峯湛堂（＝湛堂文準・一〇六一～一一一五）の處に在り。〉淨頭寮に在り。因みに雲峯悅和尚（＝雲峰文悅・九九八～一〇六二）小參の語を座右に書す。一日、廣道者、寮に至って之を見、乃ち私かに湛堂に語って曰く、『宣州の杲兄（＝大慧宗杲・一〇八九～一一六三）、雲峯の小參を以て警慕を為す。碌碌たる餘子の比に非ず』と。湛堂云く、『「此の子、他日必ず能く重きを任じ、遠きに致さん」と。〈淨頭の義は「職位類」

の「淨頭」の處に見ゆ。〉

＊

○大慧年譜［七丈］云、師二十五歳〈在寶峯湛堂處。〉在淨頭寮。…此子他日必能任重到遠＝嘉興蔵本『大慧年譜』の七丁表、「政和三年癸巳（一一一三）」にそのまま見える。但し、割注の「在宝峯湛堂処」の六字は原文に無い。無著禅師の補筆であろう。

○淨頭義見職位類淨頭處＝『象器箋』巻八「第七類職位門 下」の【五三八】「淨頭」条を参照。

（小林秀嶽）

【一一二】行堂

①行者所居之堂、即行者寮也［勅修鈔五ノ五丈］。〈若呼人爲行堂、則行者是也。〉

＊

行者（＝役僧の下で、用務を行う者）の居る所の堂、即ち行者寮なり［『勅修鈔』五の五丈］。〈若し人を呼びて行堂と爲さば、則ち行者是れなり。〉

＊

○行者所居之堂、即行者寮也［勅修鈔五ノ五丈］＝『勅修百丈清規』巻二「住持章第五」の「訓童行」条に「凡そ旦望・五参の上堂罷わり、参頭行者は、喝食行者をして各局務に報ぜしめ、行堂の前に牌を掛けて衆に報ず（凡旦望五参上堂罷、参頭行者、令喝食行者、報各局務、行堂前掛牌報衆）」（T48-1122a）とあり、『勅修百丈清規抄』（駒澤大学電子貴重書庫）巻五の五丁表に、「［『各局務』トハ］各行者寮也。『報衆』トハ行者ノ衆ゾ」とある。

②敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、行堂前、掛牌報衆。　又沙彌得度［下一ノ廿一丈］云、自行堂鳴鈸、引剃頭人出。

＊

『敕修清規』［上二の九丈］の「訓童行」に云く、「行堂の前に、牌（＝告知板）を掛けて衆に報ず」と。　又た「沙彌得度」［下一の廿一丈］に云く、「行堂自り鈸（＝鐃鈸）を鳴らし、剃頭の人を引きて出づ」と。

＊

○敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、行堂前、掛牌報衆＝『勅修百丈清規』巻二「住持章第五」の「訓童行」条に同文が見える。①の注を参照。

○又沙彌得度［下一ノ廿一丈］云、自行堂鳴鈸、引剃頭人出＝『勅修百丈清規』巻五「大衆章第七」の「沙彌得度」条（T48-1136c）に同文が見える。

③又敕修清規［下二ノ十五丈］方丈點行堂茶云、節臘、僧堂茶罷、侍者同客頭、至行堂點茶。侍者至庫司、典座接入、參頭堂主、領衆行者門迎。

＊

又た『敕修清規』［下二の十五丈］の「方丈、行堂に點ずる茶」に云く、「節臘（＝節は、結夏・解夏・冬至・年朝（元日の朝）の四節、臘は年末）に、僧堂の茶罷わりて、侍者、客頭と同じく、行堂に至りて點茶す。侍者、庫司（＝内外の事務を総監する役）に至れば、典座接入（＝迎える）し、參頭堂主、衆行者を領（率いる）して門迎す」と。

＊

○『敕修清規』〔下二ノ十五丈〕方丈點行堂茶云、節臘…領衆行者門迎＝『勅修百丈清規』巻七「節臘章第八」の「方丈点行堂茶」条に、「節臘僧堂茶罷、侍者同客頭至行堂点茶。《客頭預報参頭、掛点茶牌報衆。焼湯出盞請典座光伴。方丈預送茶。》侍者至庫司、典座接入、參頭堂主領衆行者門迎」（T48-1154c）とあり、引用部分に文字の異同はないが、《　》内が省略されている。

④　忠曰、蓋行堂在庫司。故侍者至庫司也。

＊

忠曰く、「蓋し行堂は庫司に在り。故に侍者、庫司に至るなり」と。

⑤〔勅修鈔十四ノ四十丈〕東福寺扁行堂、曰選僧堂也。　忠曰、選箇中人、爲僧也。

〔『勅修鈔』十四の四十丈〕東福寺、行堂に扁して、選僧堂と曰う。　忠曰く、「箇中の人を選びて、僧と爲すなり」と。

＊

○〔勅修鈔十四ノ四十丈〕東福寺扁行堂、曰選僧堂也＝『勅修百丈清規抄』（駒澤大学電子貴重書庫）の巻一四の四〇丁には、引用の文章は見えない。同書・巻五の五丁表に「東福寺行堂寮ノ額ヲ選僧堂ト云、選以為レ僧之義也。選仏場ハ、亦選レ僧以為レ仏也」とあり、恐らくこの部分を指すのであろう。

（小嶋　孝）

【一一三】童行堂

①即是行堂也。

＊

即ち是れ行堂なり。

②禪苑清規〔勅修鈔五ノ六丈〕訓童行云、新到於庫司、參禮訖、將行李、入童行堂。

＊

『禪苑清規』〔勅修鈔五ノ六丈〕「訓童行」に云く、「新到、庫司に於いて、參禮し訖わって、行李を將りて童行堂に入る」と。

＊

○禪苑清規〔勅修鈔五ノ六丈〕訓童行云、新到於庫司、參禮訖、將行李、入童行堂＝『勅修百丈清規抄』（駒澤大学電子貴重書庫）巻五の六丁表に「訓童行之章、詳ニ于禪苑ニ」として『禪苑清規』から文章が略引されているが、その中の「投院状式」の部分にそのまま見える。なお、『禪苑清規』巻九「訓童行」の当該個所は以下の通りである。「童行初来投院。師主審問根源。若具正因方可容納。如其意図衣食、規避徭役、因事遁竄、及父母不允者、並不可留。　○投院状式　《投院童行姓某名某。年若干。本貫某州某縣某鄉某里人事〈或是郭下人事〉。在身並無彫青刑憲及諸般違礙。今為生死事大久慕空門、蒙父母情允、許捨入本院出家為童行〈如無父母、即云今欲投院出家為童行〉。伏乞堂頭和尚慈悲容納。謹状。年月日具。前位某押状送。如有父母。即連状書名。》住持人押状付知事。新到童行於庫司參礼訖、将行李入童行堂。《參礼堂主訖、堂主掛搭並指床位。至晩參、大衆行者巡堂

立定。堂主将新到礼参頭已下三礼或六礼。不答礼、巡堂一匝、下位立。今具規矩如後。≫」（X63-548b）

『勅修百丈清規抄』では、「投院状式」のうち、前後の《　》の部分が省略されている。

（小嶋　孝）

【一一四】行者房

①行堂也。

行堂（あん）なり。

＊

②傳燈録［十四ノ六丈］丹霞天然禪師章云、師抵南嶽。石頭曰、著槽廠去。師禮謝入行者房。隨次執爨役、凡三年。

『傳燈録』［十四ノ六丈］「丹霞（たんか）の天然禪師（てんねんぜんじ）」の章に云く、「師、南嶽（なんがく）に抵（いた）る。石頭（せきとう）曰く、『槽廠（そうシャウ）（＝精米する所）に著（つ）き去れ』と。師禮謝して行者房に入る。次に隨て爨（さん）（＝飯を炊ぐ）役を執ること、凡そ三年」と。

＊

○『傳燈録』［十四ノ六丈］丹霞天然禪師章云、師抵南嶽。石頭曰、著槽廠去。師禮謝入行者房。隨次執爨役、凡三年＝『景德伝燈録』巻一四「丹霞天然禪師」章に、「遽抵南嶽、還以前意投之。石頭曰、『著槽廠去』。師礼謝入行者房。隨次執爨役凡三年」（T51-310c）とある。『景德傳燈録』によれば、丹霞天然禪師は始め馬祖に見え、その指示で石頭に参じた。引用の文は、この時のものである。

（小嶋　孝）

【一一五】西淨（セイチン）

①西序所上之廁、曰西淨。

西序の上（のぼ）る所の廁を、西淨と曰う。

＊

②忠曰、和俗呼西淨、爲雪隱。謂雪淨之也［日用別山鈔］。見其稱西淨却爲怪焉。余謂、雪若淨之義、則隱又何義。按竺仙和尚説云、靈隱淨頭寮名曰雪隱。即今圓覺淨頭寮二草字、不知何人好事者模來〈淨智寺録〉。又按日本禪刹一覽、建仁寺亦掲雪隱字。皆用雪竇顯禪師會在靈隱、隱潛于淨頭職之事。然雪隱西淨、唐音適近。遂以爲雪隱、而失本名。隱者潛隱義、非取靈隱之隱也。況復雪隱、是淨頭寮扁字、而不宜扁于西淨。益見不當也。或有以西淨、爲廁通名、而其在東者亦呼西淨者。實訛稱而已。〈雪竇事見職位類淨頭處。〉

＊

忠曰く、「和俗、西淨を呼びて、雪隱と為す。謂（おも）えらく、雪は之を淨むるなりと［『日用別山鈔』］。其の西淨と稱するを見て却って怪と爲す。余謂（おも）えらく、『雪、若し淨の義ならば、則ち隱又た何の義ぞ』と。竺仙和尚の説を按ずるに、云く、『靈隱の淨頭寮を名づけて雪隱と曰う。即今、圓覺の淨頭寮の二草字、知らず何人の好事の者か模し来る』〈『淨

智寺の録』）と。又た『日本禅刹一覧』を按ずるに、建仁寺も亦た雪隠の字を掲ぐ。皆な雪竇の顯禪師（＝雪竇重顕・九八〇～一〇五二）に會して靈隠に在って、淨頭の職に隠潛するの事を用ゆ。然るに雪隠・西淨、唐音適（タマタマ）近し。遂に以て雪隠と爲して、本名を失す。隠は潛隠の義、靈隠の隠を取るに非ず。況や復た雪隠は、是れ淨頭寮の扁字にして、宜しく西淨に扁すべからず。益（ます）ます當たらざるを見るなり。或いは西淨を以て、廁の通名と爲して、其の東に在る者も亦た西淨と呼ぶ者有り。実は訛稱のみ」と。〈雪竇の事、職位類の淨頭の處に見ゆ。〉

＊

○文中に引用されている文献、『日用別山鈔』『淨智寺録』『日本禅刹一覧』は、何れも未詳。末尾の割り注に見える「淨頭」は【五三八】参照。

③舊説［敕鈔十二ノ四十一丈］曰、淨者謂廁易穢處、可以淨潔。故特以淨稱。

＊

舊説［『敕鈔』十二の四十一丈］に曰く、「淨は謂く、廁は穢れ易き處なりを以て淨潔なるべし。故に特に淨を以て称す」と。

＊

○舊説［敕鈔十二ノ四十一丈］曰、淨者謂廁易穢處、可以淨潔。故特以淨稱＝『勅修百丈清規抄』巻一二の四一丁裏に、「西淨ハ、何モ全体汚るるホトニ、淨ムル方カ本テ、何ニモ淨ノ字ヲツクルソ。西淨・東淨ナントト云ソ」とある。

④小補韻會［敬句卅九丈］云、史記、槭竇廁中行清器也。釋名、行清、即糞槽。謂之清者、以其穢濁當常清除之也。

＊

『小補（しょうほ）韻會（いんかい）』［敬句卅九丈］に云く、「『史記』に『槭竇は廁中の行清器なり』と。『釋名』に『行清は、即ち糞槽なり』と。之を清と謂う者は、其の穢濁、當（まさ）に常に之を清除すべきを以てなり」と。

＊

○小補韻會［敬句卅九丈］云、史記、槭竇廁中行清器也。釋名、行清、即糞槽。謂之清者、以其穢濁當常清除之也＝方日升編輯『古今韻会挙要小補』三十巻（正保五年・村上平楽寺、早稲田大学図書館所蔵）の巻二三の三九丁表に、そのまま見える。

⑤忠曰、舊説解淨、正合釋名。然今流行劉熙釋名語不同。唯云、廁或曰圊。至穢之處、宜常修治使潔清也。

＊

忠曰く、「『舊説』の淨を解する、正に『釋名』に合す。然れども今流行する劉熙が『釋名』、語同じからず。唯だ云く、『廁或いは圊と曰う。至穢の處、宜しく常に修治して潔清ならしむべきなり』と」と。

＊

○然今流行劉熙釋名語不同。唯云、廁或曰圊。至穢之處、宜常修治使潔清也＝漢の劉熙撰『釈名』の巻五（四庫全書本・8b）にそのまま見える。

⑥天竺精舎、廁院在西或南。故摩訶僧祇律［卅四十八丈。永平眼六ノ十三丈引］云、廁屋不得在東在北。應在南在西。小行亦如是。

＊

天竺の精舎は、廁院、西或いは南に在り。故に『摩訶僧祇律』［卅四・十八丈。永平『眼』六の十三丈に引く］に云く、「廁屋、東に在り北に在り得ず。應に南に在り西に在るべし。小行も亦た是くの如し」と。

＊

○摩訶僧祇律［卅四十八丈。永平眼六ノ三丈］云…小行亦如是＝『摩訶僧祇律』巻三四（T22-504a）に、「廁屋不得在東在北。應在南在西開風道」とある。典拠の書き入れにあるように、この語は『正法眼蔵』「洗浄」（岩波文庫本・第三冊・p.204）に引用されている。

⑦祇園圖經［下ノ卅六丈］云、次北第六院、名爲流廁。有大高屋、三重而立。飛橋雙上。甚自清淨、下施廁坑、砌以伏竇。天帝手作。上無臭氣、大渠。從大院北西注、南入廁院。伏流入竇、北出會於大河。人無見者。一切比丘皆此便利。余聞此説、深爲獲相。故江淮已南。諸古寺者、皆設都清一所。中已北、周屏繞院。臭處蓬勃。伊何可言。

＊

『祇園図経』［下の卅六丈］に云く、「次の北の第六院を、名づけて流廁と爲す。大高屋に有り、三重にして立つ。飛橋雙び上る。甚だ自ら清淨なり。下に廁坑を施し、砌するに伏竇を以てす。天帝、手ずから作る。上に臭気無し。大渠、大院の北西従り注いで、南のかた廁院に入る。伏流して竇に入り、北に出でて大河に會す。人、見る者無し。一切の比丘、皆な此こに便利す。余、此の説を聞くに、深く相を獲たりと爲す。故に江淮より已南の、諸々の古寺には、皆な都清一所を設く。中より已北は、屏を周らして院を繞る。臭處蓬勃たり。伊れ何ぞ言う可けん」と。

＊

○祇園圖經［下ノ卅六丈］云…伊何可言＝『中天竺舎衛国祇洹寺図経』巻二（T45-894b）に、全く同文が見える。

⑧　廁字義、見器物類廁籌處。

＊

廁の字義、器物類の「廁籌」の處に見ゆ。

＊

○「廁籌」は本書巻二〇【一六六八】を参照。

⑨緇門警訓［下ノ八十四丈］云、文殊經曰、大小便時、身口状如木石、不得有聲。

＊

『緇門警訓』［下の八十四丈］に云く、「『文殊經』に曰く、『大小便時、身口の状、木石の如く、聲有ることを得ず』と」と。

＊

○緇門警訓［下ノ八十四丈］云…不得有聲＝『緇門警訓』巻九（T48-1092a）に、全く同文が見える。

（澤守豊文）

【一一六】東淨

①東序之廁、曰東淨也

東序の廁を東淨と曰う。

＊

②幻住菴清規營辨云、後架乃糞穢之聚、其稱爲東淨西淨者、其淨在人、不在境也。

＊

『幻住菴清規』の「營辨」に云く、「後架は乃ち糞穢の聚なり。其れを稱して東淨・西淨と爲す者は、其の淨、人に在って、境に在らざればなり」と。

○『幻住菴清規營』云、後架乃糞穢之聚、其稱爲東淨西淨者、其淨在人、不在境也＝『幻住菴清規』「營備」の「修葺治畳」条（X63-580c）に同文が見られる。

（小林秀嶽）

【一一七】東司

①東淨又東司也。或以東司為廁通名、而在西者亦■爲東司、實訛言也。〔如下引武庫。〕

＊

東淨は又た東司と曰う。或いは東司を以て廁の通名と爲して、西に在る者をも亦た東司と為すは、實は訛言なり。〔下引の『武庫』の如し。〕

＊

○原文「亦■爲東司」の「■」の一字は誤字を墨で消している。書き損じであろう。『武庫』は④参照。

②敕修清規〔下一ノ卅一丈左〕辦道具濾水囊云、僧行東司、亦皆濾水。

＊

『敕修清規』〔下一の卅一丈左〕「辦道具」の「濾水囊」に云く、「僧行東司も亦た皆な水を濾す」と。

＊

○『敕修清規』〔下一ノ卅一丈左〕辦道具濾水囊云、僧行東司、亦皆濾水＝『勅修百丈清規』巻五「濾水囊」（T48-1139c）に同文が見られる。

③又慈覺龜鏡文〔下一ノ五十五丈〕云、涕唾墻壁、狼籍東司、非所以報淨頭也。

＊

又た『慈覺龜鏡文』〔下一の五十五丈〕に云く、「墻壁に涕唾し、東司に狼籍たるは、淨頭に報いる所以に非ず」と。

○『慈覺龜鏡文』〔下一ノ五十五丈〕涕唾墻壁、狼籍東司、非所以報淨頭也＝『禅苑清規』巻八（X63-543c）などに同文が見られる。但し『禅苑清規』は単に「亀鏡文」（X63-543c）と題するだけで、撰述者名を

載せていない。『勅修百丈清規』巻六も題目は「亀鏡文」とするが、本文の出だしに「慈覚大師賾公述」（T48-1146b）と明記しているし、『緇門警訓』巻六には「「長蘆慈覚頤禅師亀鏡文」（T48-1069a）と具名が付されている。

④大慧武庫[廾一丈]云、銭弋郎中訪眞淨、説話久。欲登溷、淨令行者引従西邊去。銭蘧云、既是東司。爲什麼却向西去。淨云、多少人向東邊討。

『大慧武庫』[廾一丈]に云く、「銭弋郎中、眞淨を訪れ、説話すること久し。溷に登らんと欲す。眞淨、行者をして引きて西邊従り去らしむ。銭蘧かに云く、『既に是れ東司。什麼と爲てか却って西に向かって去る』と。眞淨云く、『多少の人は東邊に向かって討ぬ』と」と。

○『大慧武庫』[廾一丈]云、銭弋郎中訪眞淨…淨云、多少人向東邊討＝『大慧普覚禅師宗門武庫』（T47-949b）に同文が見られる

⑤釋氏要覧[下ノ廾一丈]云、屏廁、或曰圊圊清也。至穢之處、宜潔清故。今南方釋氏呼東司、未見其典。

＊

『釋氏要覧』[下の廾一丈]に云く、「屏廁、或いは圊と曰う。圊は清なり。至穢の處、宜しくを潔清にすべきが故に、今南方の釋氏、東司と呼ぶも、未だ其の典を見ず」と。

＊

○『釋氏要覧』[下ノ廾一丈]云、屏廁、或曰圊圊清也…未見其典＝『釋氏要覧』巻三（T54-300a）に同文が見られる。

⑥事物異名[和尓雅二ノ廾四丈]云、登司同郭登。廁神也。、登主也。、今人誤曰登司。　忠曰、東訛作登、更隨作廁神之義。轉誤矣。

＊

『事物異名』[『和尓雅』二の廾四丈]に云く、「登司は郭登に同じ。廁の神なり。登は主なり。今人、誤って登司と曰う」と。　忠曰く、「東、訛して登に作り、更に隨って廁神の義と作す。轉た誤れり」と。

＊

○『事物異名』[和尓雅二ノ廾四丈]云、登司同郭登…轉誤矣＝「事物異名」以下「今人誤曰登司」までが、『和爾雅』からの引用。『和爾雅』八巻は貝原好古著で元禄七年（一六九四）大井七郎兵衛刊。引用部分は同書の巻二・二四丁表の「登司」条に見える（早稲田大学古典籍総合データベース）。

⑦無住雑談集[七ノ十二丈]云、東司可誦烏芻沙摩眞言。是即不動明王垂迹、而號不淨金剛。人上東司時、或有鬼惱人、則此金剛、誓護念矣。

＊

無住『雑談集』[七の十二丈]に云く、「東司に烏芻沙摩眞言を誦すべし。是即ち不動明王の垂迹。而も不淨金剛と號ぶ。人は東司に上る時、或は鬼有りて人を惱ます。即ち此の金剛、誓って護念す」と。

＊

○無住『雑談集』［七ノ十二丈］云、東司可誦鳥芻沙摩眞言…誓護念矣＝『雑談集』十巻は、無住道暁（一二二六～一三一二）が著した説話集。和訳として山田昭全著『雑談集（中世の文学）』（三弥井書店・一九九七）がある。未見。

⑧　忠曰、不動化不淨金剛、見『大日經一行疏』［九ノ六十丈］。

＊

忠曰く、「不動の不淨金剛に化するは、『大日經一行疏』［九の六十丈］に見ゆ」と。

＊

○見『大日經一行疏』［九ノ六十丈］＝唐の一行（六八三～七二七）記『大毘盧遮那成仏経疏』二十巻のこと。同書の巻九「息障品」に「時に不動明王…即ち受触金剛と化す［即ち是れ不浄金剛なり］（時不動明王…即化受触金剛［即是不浄金剛也］）」（T39-679a）とある。

⑨　『大威力烏樞瑟摩明王經』下巻［廿一二丈］云、復次鳥樞瑟明王教法、不拘淨穢、恒示忿怒相、誦滿三十萬徧得驗。　又云、復次不拘淨穢、誦三十萬、鳥油麻和酥、進火中、一千八徧得驗。

＊

『大威力烏樞瑟摩明王經』下巻［廿一二丈］に云く、「復た次に鳥樞瑟明王の教法は、淨穢に拘わらず、恒に忿怒の相を示し、誦すること三十萬徧に滿すれば驗を得」と。
又た云く、「淨穢に拘わらず三十萬を誦し、鳥油麻に酥を和して火中に進むれば、一千八徧にして驗を得」と。

＊

○『大威力烏樞瑟摩明王經』下巻［廿一二丈］云、復次鳥樞瑟明王教法…誦滿三十萬徧得驗＝大正蔵本の『大威力烏樞瑟摩明王経』巻下（T21-156c）に同文が見える。
○又云、復次不拘淨穢…一千八徧得驗＝同じく大正蔵本の『大威力烏樞瑟摩明王経』巻下（T21-157a）に同文が見える。

⑩　忠曰、世傳、凡人懸佛像於頸者、書烏樞瑟摩明王名號加之、則不蒙穢罪。然未得經律本據、烏樞瑟摩經説、但如右耳。

＊

忠曰く、「世に傳う、『凡そ人、佛像を頸に懸くる者、烏樞瑟摩明王の名號を書して之に加えれば、則ち穢罪を蒙らず』と。然れども未だ經律の本據を得ず。『烏樞瑟摩經』の説、但だ右の如くなるのみ」と。

（小林秀嶽）

【一一八】起止處

①忠曰、起止處者、正屙糞之處也。呉越春秋［三ノ廿一丈］云、盛夏之時、人食生瓜。起居道傍子復生秋霜。［止此。］所謂起居屙屎也。

＊

忠曰く、「起止處は、正に糞を屙する處なり。『呉越春秋』［三の廿一丈］に云く、『盛夏の時、人、生の瓜を食い、道の傍らに起居す。子、復た秋霜に生ず』と。［此こに止まる。］

所謂る『起居』は屎を屙するなり」と。

＊

○起止處＝廁、便所のこと。『呉越春秋』は、後漢の趙曄の著で、もと十巻。寛延二年（一七四九）の六巻本の和刻本が存する。未見。

②毗尼母經〔百廿四套『、、、論』六〔廿九丈〕の文。今、『諸経要集』二十〔三丈〕の所引を引く〕云、上廁有二處。一者起止處、二者用水處。用水處坐起褰衣。一切如起止處無異。

＊

『毗尼母經』に云く、「廁に上るに二處有り。一には起止處、二には用水處なり。用水處の坐起、衣を褰（あ）ぐること一切、起止處の如く異なること無し」と。

＊

○『毗尼母經』＝大正蔵本『毘尼母経』巻六（T24-838b）に同文が見える。また、典拠注にあるように、『諸経要集』巻二〇（T54-189c）にも、そのまま引用されている。

③僧祇律〔三十四ノ十九丈。又廿二ノ卅三丈〕云、作廁屋、若坑底有水出者、當使淨人先起止中、然後此丘行。

＊

『僧祇律』〔三十四ノ十九丈。又廿二ノ卅三丈〕に云く、「廁屋を作るに、若し坑の底に水出づること有らば、當に淨人をして先ず中に起止せしめて、然る後に比丘行くべし」と。

＊

○『僧祇律』＝大正蔵本『摩訶僧祇律』巻三四の「従從今已後、応作廁屋。廁屋不得在東在北。応在南在西開風道、作法者。若作坑、若依高岸、若坑底有水出者、当使浄人先起止中、然後比丘行」（T22-504a）とある部分からの節略引用である。

（足立宜了）

【一一九】用水處

忠曰、屙屎已、正洗淨之處。見起止處處。

＊

忠曰く、「屎を屙し已（お）わって、正に洗淨するの處。『起止處』の處に見えたり」と。

（足立宜了）

【一二〇】尿闥

①續宗門統要〔十九ノ十三丈〕云、明招謙禅師到招慶。〔乃至〕招云、是你諸人、一時縛作一束、倒卓向尿闥下、來日相見。

＊

『續宗門統要』〔十九の十三丈〕に云く、「明招の謙禅師、招慶に到る。〔乃至〕招云く、『是れ你諸人、一時に縛して一束と作し、倒（さかし）ま尿闥の下に卓して、来日相見せん』」と。

＊

○『續宗門統要』＝永楽北蔵本『宗門統要続集』では巻一九ではなく巻一七（P155-138a）からの節略での引用。同文は、次の②の割り注にもあるように『禅苑蒙求瑤林』巻下（X87-81c~82a）にも引かれており、その他、『嘉泰普燈録』巻二六（X79-458c~459a）や『宗門拈古彙集』巻三八（X66-223c）などにも見えている。

②　正字通［戌上ノ八十四丈］云、凡士民所居門内曰闥。〔統要作蹧。正字通云、蹧俗字。禪苑瑤林［下ノ三丈］作闥。今从之。〕

＊

『正字通』［戌上の八十四丈］に云く、「凡そ士民の所居の門の内を闥と曰う」と。〔『統要』は蹧に作る。『正字通』に云く、『蹧は俗字なり』と。『禪苑瑤林』［下の三丈］は闥に作る。今、之に从う。〕

＊

○『正字通』は、明末の張自烈が編纂した十二巻からなる字書。未見。文中、「『統要』は『蹧』に作る」とあるように、もともと『宗門統要続集』は「蹧」に作るが、①の文章では「闥」に変えられている。『禪苑蒙求瑤林』巻下では、指摘通り「闥」（X87-82a）となっている。

（足立宜了）

【一二一】安楽堂

見于次延壽堂。

＊

次の延壽堂に見ゆ。

（足立宜了）

【一二二】延壽堂

①禪林寶訓音義［上二ノ廿五丈］云、延壽堂、撫安老病之所也。古者、叢林老僧、送安樂堂、病者、送延壽堂也。又今涅槃堂是。

＊

『禪林寶訓の音義』［上二の廿五丈］に云く、「延壽堂は、老病を撫安するの所なり。古は、叢林の老僧をば、安樂堂に送り、病者をば、延壽堂に送るなり。又た今の涅槃堂是れなり」と。

＊

○禪林寶訓音義［上二ノ廿五丈］云、延壽堂…又今涅槃堂是＝明末の崇禎八（一六三五）年の序を冠した大建較『禪林宝訓音義』（X64-451b）にそのまま見える。続蔵本は不分巻であるが、寛文三（一六六三）年、京都飯田忠兵衛刊の和刻二冊本が駒澤大学に所蔵されている。

②校定清規［上の十九丈］住持入院云、古者、建立叢林、爲老病設。所以命堂主、司以藥餌。戒常住、足其供需。此先佛規制也。又況八福田中、直病爲第一。今諸方延壽堂、有名無實。衲子遇病、如囚其間。良可憫也。萬一鄉曲、無人看虧、公界當差人直之。速期病安。惟是天童、凡一病僧、差一小僕供過。爲住持者、當推菩薩慈悲之心、留意於此。

＊

『校定清規』［上ノ十九丈］の「住持入院」に云く、「古は、叢林を建立するに、老病の爲に設く。所以に堂主に命じて、司るに藥餌を以てす。常住に戒て、其の供需を足す。此れ先佛の規制なり。又た況や八福田の中に、直病を第一と爲す。今、諸方、延壽堂、名有りて實無し。衲子、病に遇えば、其の間に囚せらるるが如し。良に憫れむ可し。

萬一、鄉曲、人の看虧する無ければ、公界より當に人を差して之に直すべし。速やかに病安を期す。惟だ是れ天童、凡そ一たび病僧あれば、一の小僕を差して供過す。住持爲る者、當に菩薩慈悲の心を推して、意を此こに留むべし」と。

＊

○校定清規［上ノ十九丈］住持入院云、古者、建立叢林…當推菩薩慈悲之心、留意於此＝『叢林校定清規総要』巻上「二十六　新住持入院」（X63-598c）に同文が見える。

③行事鈔［下四之一ノ七丈］瞻病送終篇云、若依中國本傳云、祇桓西北角、日光沒處、爲無常院。若有病者、安置在中。以凡生貪染、見本房内衣鉢衆具、多生戀著、無心厭背。故制令至別處。堂號無常、來者極多、還反一二。即事而求、專心念法。其堂中置一立像。金薄塗之、面向西方。其像右手舉、左手中繫一五綵幡。脚垂曳地。當安病者、在像之後。左手執幡脚、作從佛往淨刹之意。瞻病者、燒香散華、莊嚴病者。乃至若有屎尿吐唾、隨有除之。亦無有罪。

＊

『行事鈔』［下四の一の七丈］「瞻病送終の篇」に云く、「若し中國本傳に依るに、云く、『祇桓の西北の角、日光の沒處を、無常院と爲す。若し病者有れば、安置して中に在く。以凡は貪染を生じ、本房の内の衣鉢衆具を見て、多く戀著を生じて、厭背に心無し。故に制して別處に至らしむ。堂を無常と號することは、來る者は極めて多く、還反するものは一二なり。事に即して求むるに、心を專らにして法を念ずべし。其の堂中に一の立像を置く。金薄をもって之を塗り、面、西方に向かう。其の像、右の手を舉げ、左の手中に一の五綵の幡を繫く。脚垂れて地に曳く。當に病者を安じて、像の後に在くべし。左の手に幡の脚を執り、佛に從いて淨刹に往くの意を作さしむ。瞻病の者、燒香散華して、病者を莊嚴すべし。乃至、若し屎尿吐唾有らば、有るに隨いて之を除くべし。亦た罪有ること無し』と」と。

＊

○行事鈔［下四之一ノ七丈］瞻病送終篇云、若依中國本傳云…亦無有罪＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻下之四「瞻病送終篇第二十六」（T40-144a）に同文が見える。

④釋氏要覽［下ノ四十四丈］云、西域傳云、祇桓西北角、日光沒處、爲無常院。若有病者、當安其中。意爲凡人内心貪著房舍衣鉢道具、生戀著心、無厭背故、制此堂、令聞名見題、悟一切法、無有常故。〈今稱延壽堂・涅槃堂者、皆後人隨情愛名之也。〉

＊

『釋氏要覽』［下の四十四丈］に云く、「西域傳に云く、『祇桓の西北角の、日光沒處を、無常院と爲す。若し病者有れば、當に其の中に安ずべし。意は爲凡人の内心、房舍衣鉢道具に貪著し、戀著の心を生じ、厭背無きが爲の故に、此の堂を制し、名を聞き題を見て、一切の法、常有ること無きを悟らしむるが故に』と」と。〈今、延壽堂・涅槃堂と稱する者は、皆な後人、情愛に隨いて之に名づくるなり。〉

＊

○釋氏要覽［下ノ四十四丈］云、西域傳云…無有常故。〈今稱延壽堂…皆後人隨情愛名之也。〉＝『釈氏要覧』巻下「無常院」条（T54-306b）に同文が見える。

⑤庚溪詩話［下巻］云、唐以前、僧寺中、或僧有疾病者、未有安養之所。唐末一山寺有僧、臥病久。因自題其戸曰、枕有思郷涙、門無問疾人。塵埋牀下履、風動架頭巾。適有部使者、經從過寺中、見其題、因詢其詳、惻然憐之、邀歸墳菴、療治之。其後部使者貴顯、因言於朝、遂令天下寺院、置延壽寮、専安養病僧也。

＊

『庚溪詩話』［下巻］に云く、「唐より以前、僧寺の中、或いは僧に疾病の者有るも、未だ安養の所有らず。唐の末に一の山寺に僧有り、病に臥すること久し。因りて自ら其の戸に題して曰く、『枕に思郷の涙有るも、門に疾を問うの人無し。塵は埋む牀下の履、風は動かす架頭の巾』と。適たま部使者有り、經從して寺中を過り、其の題を見て、因りて其の詳を詢い、惻然として之を憐れみ、邀えて墳菴に歸りて、之を療治す。其の後、部使者貴顯、因りて朝に言い、遂に天下の寺院をして、延壽寮を置き、専ら病僧を安養せしむるなり」と。

＊

○庚溪詩話［下巻］云、唐以前…専安養病僧也＝『庚溪詩話』二巻は宋の陳巖肖撰。引用部分は、巻下の第二二段の全文。

⑥羅湖野録［下巻四十二丈］曰、佛眼禪師、住舒州龍門、嘗題語于延壽壁間曰、佛許有病者當療治。容有將息所也。禪林凡有數名。或曰涅槃。見法身常住、了法不生也。或曰省行。知此違縁、皆從行苦也。或曰延壽。欲得慧命、扶持色身也。其實使人了生死處也。多見少覺微恙、便入此室、不強支吾、便求補益。及乎久病、思念郷閭、不善退思、滅除苦本。先聖云、病者衆生之良藥。若善服食、無不瘥者也。又尊宿云、須知有不病者。故明書示、以告後來。觀其規詠風巾塵履者、豈特令退思苦本而已。抑欲使遵乍可有戒而死之訓。其明切精審、可謂藥石之言矣。嗚呼、是大醫王、其佛眼之謂乎。

＊

『羅湖野録』［下巻四十二丈］に曰く、「佛眼禪師、舒州の龍門に住し、嘗て語を延壽の壁間に題して曰く、『佛、病有る者は當に療治すべしと許す。容に將息の所有るべきなり。禪林に凡そ數名有り。或いは涅槃と曰う。法身の常住を見、法の不生を了するなり。或いは省行と曰う。此の違縁を知り、皆な行苦に從うなり。或いは延壽と曰う。慧命を得て、色身を扶持せんと欲するなり。其の實は人をして生死を了せしむる處なり。多くは見る、少しく微恙を覺すれば、便ち此の室に入り、強いて支吾せず、便ち補益を求む。久病に及んで、郷閭を思念し、善く退き思いて、苦本を滅除せず。先聖云く、「病は衆生の良藥なり。若し善く服食せば、瘥えざる者無し」と。又た尊宿云く、「須く病まざる者有るを知るべし。故に明らかに書示して、以て後來に告ぐ」と。其の風巾塵履を規詠する者に觀うるに、豈に特り苦本を退思せしむるのみならんや。抑も「乍ろ戒有りて死す可くとも」という訓に遵わしめんと欲す』と。其の明切精審、藥石の言と謂う可し。嗚呼、是れ大醫王とは、其れ佛眼の謂か」と。

＊

○羅湖野録［下巻四十二丈］曰、佛眼禪師…其佛眼之謂乎＝『羅湖野録』巻下（X83-387b）に同文が見える。「…無不瘥者也」までの部分は、『五燈会元』巻一九（X80-399b）および『続伝燈録』巻二五（T51-637b）の「舒州龍門清遠仏眼禪師」条にも引かれている。続蔵本は「乍」の字について、「乍疑寧（乍は疑

うらくは寧ならん)」という欄外注が付されている。文中、「先聖云…」「又尊宿云…」の典拠は未詳。

⑦ 忠曰、延壽爲目、道誠以情愛貶、趙令矜以鄙俚彈。〈見省行堂處。〉至佛眼、有慧命扶持之説。不但令名美、抑義亦深矣。

＊

忠曰く、「延壽の目爲る、道誠は情愛を以て貶し、趙令矜は鄙俚を以て彈す。〈省行堂の處に見ゆ。〉佛眼に至りて、慧命扶持の説有り。但だに名をして美ならしむるのみにあらず、抑も義も亦た深し」と。

＊

○文中、「道誠」は④に引かれた『釈氏要覧』の編者。「趙令矜」は「南嶽法輪寺省行堂記」(『緇門警訓』巻二・T48-1051c)の選者で割り注に「見省行堂処」とあるように、【一二三】「省行堂」に見える。

⑧ 北礀文集〔三ノ十三丈〕妙湛延壽堂記云、疾病相扶持、無憾於養生送死。以明王道之本。佛世寖古建幢刹、棲冷灰槁株、蠟穹德茂者、却塚間桑下、嵐昏霧蝕之患。又爲省行堂、以別不老不病、欲其循省日用事。若學之正偏、業之勤荒、行之缺全、思之沈掉、好惡之失中、喜怒之或私、利養是崇、進修是怠、應病授藥。法惟一味以治其内、劑砭鍼艾以攻其外。正命小康、幻體亦寧。或又謂之延壽堂。延壽云者、延此者也、壽此者也。非人間世短脩延趣之謂也。今者反是、樂便安者、巧圖其居、耽燕佚者、曲求其處、先之以貨賂、申之以強援、弗知廉與遜爲何物。盡巧致曲。疇知志於道者、袖手傍顧、泚顙芒背、忍死不爲也。一念之忍、傲睨黄髪鯢齒、累然困踣於其外。祖宗成憲、遂爲具文。往往大叢林亦如之。今妙湛鼎新斯堂。故書近世叢林墜典以告。覆車在前。冀革斯轍。雖然、水沫巴焦、匪石匪金。燕安鴆毒、少壯勿恃。美疢惡石、老病無忽。作如是觀、以度生死、則住山月巖某之宰制、耆舊執事某之裁割、勤勞百囊、不徒其爲。是役也、作於紹定三年仲夏晦、落之於冬書雲。

＊

『北礀文集』〔三の十三丈〕「妙湛の延壽堂の記」に云く、「疾病相扶持し、生を養い死を送るに憾無し。以て王道の本を明らむ。佛世寖古、幢刹を建てて、冷灰槁株、蠟穹く德茂する者を棲ましめ、塚間桑下、嵐昏霧蝕の患を却く。又た省行堂を爲りて、以て不老不病を別ち、其の日用の事を循省せんと欲す。若しくは學の正偏、業の勤荒、行の缺全、思の沈掉、好惡の中を失し、喜怒の私或り、利養是れ崇く、進修是れ怠る、病に應じて藥を授く。法は惟だ一味にして以て其の内を治め、劑砭鍼艾、以て其の外を攻む。正命小康、幻體も亦た寧し。或いは又た之を延壽堂と謂う。延壽と云うは、此れを延ぶる者なればなり、此れを壽する者なればなり。人間世の短脩延趣の謂には非ざるなり。今は是れに反し、便安を樂しむ者、巧みに其の居を圖り、燕佚に耽る者、曲げて其の處を求め、之に先んずるに貨賂を以てし、之に申ぬるに強援を以てし、廉と遜との何物爲るかを知らず。巧を盡くし曲を致む。疇か、道に志す者、手を袖にして傍らに顧み、顙に泚し背に芒し、死を忍んで爲さざることを知らん。一念の忍、黄髪鯢齒、累然として其の外に困踣するを傲睨す。祖宗、憲を成し、遂に爲に文を具文。往往に大叢林も亦た之の如し。今、妙湛、斯の堂を鼎新す。故に近世叢林の墜典を書して以て告ぐ。覆車、前に在り。冀わくは斯の轍を革めん。然りと雖も、水沫巴焦、石に匪ず金に匪ず。

燕安は鴆毒なれば、少壯、恃むこと勿かれ。美疢は惡石なれば、老病、忽せにすること無かれ。是くの如き觀を作して、以て生死を度さば、則ち住山月巖某の宰制、耆舊執事某の裁割、勤勞百藿、其の爲すを徒らにせず。是の役や、紹定三（一二三〇）年仲夏晦に作して、之を冬の書雲に落とす。

＊

○北礀文集［三ノ十三丈］妙湛延壽堂記云、疾病相扶持…落之於冬書雲＝四庫全書本『北礀集』巻三（15a~16a）に同文が見えるが、題目の「妙湛延寿堂記」の下に「平江」の二字があり、また、次の様に文字の異同が若干存する。（異同がある文字の横に傍線を引き、四庫全書本の文字を［　］内に示した。）

…延壽云者、延此者也、壽此者也。非人間世短脩［修］延趣［促］之謂也。今者反是、樂便安者、巧圖其居、耽燕佚者、曲求其處、先之以貨賂、申之以強援、弗知廉與遜爲何物。盡巧致曲、疇知志於道者、袖手傍［旁］顧、泚顙芒背、忍死不爲也。…作如是觀、以度生死、則住山月巖某之宰制、耆舊執事某之裁割、勤勞百藿［艱］、不徒其爲。是役［役］也、作於紹定三年仲夏晦、落之於冬書雲。

⑨橘洲文集［五ノ二丈］焦山延壽堂記云、叢林老病菟裘之地也。百丈憫此、剏爲延壽堂。床敷厚温、牖戸寛爽、供給使令、左右畢出。惟少與健者、不得而與也。自都城下京口、兩峯屹立波面。所謂山圍屋者、焦山也。山故海窟、世世皆有道者尸之、四方鼎來、如水雲合。今住山朴菴性公、赴太守待制陳公之招、周旋逾年。眎山之壽老堂、自靖康至今、多歷年所、屋有震風凌雨之患。過者未嘗問焉。公於是命執事、相與經營、輪奐一新。老者居之、如入寶所、病者得之、如飲良藥。有來觀者、心目適悅。朴菴曰、吾道蓋是也。使余撾鼓掉舌、號令佛祖、指撝人天、而老病有時乎不聞。今此堂、朝明夕昏、夏凉冬燠、木章竹箇、皆代余説法時也。所得與法喜禪悅等。豈不壯哉。朴菴書來、屬余記之。因書以爲記。

＊

『橘洲文集』［五の二丈］「焦山の延壽堂の記」に云く、「叢林は老病菟裘の地なり。百丈、此れを憫みて、剏めて延壽堂を爲る。床敷厚温、牖戸寛爽にして、供給使令、左右に畢く出づ。惟だ少きと健者と、得て與らざるなり。都城自り京口に下れば、兩峯、波面に屹立す。所謂る「山、屋を圍む者」は、焦山なり。山故と海窟にして、世世皆な有道の者、之に尸し、四方鼎來すること、水雲の合するが如し。今、住山の朴菴性公、太守待制陳公の招きに赴き、周旋、年を逾ゆ。山の壽老堂を眎るに、靖康自り今に至るまで、多く年所を歷、屋に震風凌雨の患有り。過る者、未だ嘗て問ず。公、是こに於いて執事に命じて、相與に經營し、輪奐一新す。老者之に居て、寶所に入るが如く、病者之を得て、如飲良藥を飲むが如し。來觀する者有れば、心目適悅す。朴菴曰く、『吾が道、蓋し是れなり。使余をして鼓を撾し舌を掉して、佛祖に號令し、人天に指撝せしむとも、老病は時として聞かざること有らん。今、此の堂は、朝明夕昏、夏凉冬燠、木章竹箇、皆な余に代わりて説法する時なり。得る所、法喜禪悅と等し。豈に壯ならずや』と。朴菴の書來り、余に屬して之を記せしむ。因りて書して以て記と爲す」と。

＊

○『新纂禪籍目録』に拠れば、『橘州文集』は、宋代の橘州宝曇撰で、もともと十巻本である。元禄十一年、織田重兵衛刊の二冊本が駒澤大学に所蔵されている。未見。

⑩清拙澄和尚圓覺寺延壽堂題亡僧名牌［天龍行事上ノ六十一丈。本録不収］云、十方聚會、生死任縁。既同歸寂滅之場。尚沒記雪泥之爪。圓覺延壽堂置牌、以紀亡僧名。或臨終有遺偈之類、悉詳書之。或親知眷義、尋訪遺蹤、庶幾知其死所。雖然如是、名在這裡。且道、人在甚麼處。涅槃堂裏事猶危、妙在全機獨脱時。火後莖眉如拾得、不刊名字有人知。〈雪泥之爪、用東坡詩中事。〉

＊

清拙澄和尚、圓覺寺の延壽堂に亡僧の名牌に題して［『天龍行事』上の六十一丈。本録不収］云く、「十方聚會、生死、縁に任す。既に同じく寂滅の場に歸す。尚お雪泥の爪を記すること沒し。圓覺の延壽堂に牌を置きて、以て亡僧の名を紀す。或いは臨終に遺偈有るの類、悉く詳らかに之を書す。或いは親知眷義、遺蹤を尋訪して、庶幾わくは其の死所を知らん。然も是くの如しと雖も、名は這裡に在り。且く道え、人は甚麼れの處にか在る。涅槃堂の裏事猶お危うし、妙は全機獨脱の時に在り。火後の莖眉、如し拾得せば、名字を刊らざるも人の知ること有らん」と。〈雪泥の爪は、東坡詩中の事を用う。〉

＊

○『天龍行事』は未詳。『新纂禅籍目録』等には見えない。文末の割り注に見える「東坡詩中事」とは、『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』巻一六「懐旧上」の「詩二十三首」の第一首「和子由澠池懐旧」（四部叢刊本・26a-b）を指す。全詩は次の通り。

人生到処知何似、応似飛鴻踏雪泥。泥上偶然留指爪、鴻飛那復計東西。老僧已死成新塔、壊壁無由見旧題。往日崎嶇還記否、路長人困蹇驢嘶。

⑪　又與職位類延壽堂主、雑行類看病併看。

＊

又た職位類の「延壽堂主」、雑行類の「看病」と併わせ看よ。

＊

○「延寿堂主」は巻八「第七類職位門下」【五四〇】、「看病」は巻一二「第十四類雑行門」【九三六】にそれぞれ見える。

（野口善敬）

【一二三】省行堂

①即延壽堂也。

＊

即ち延壽堂なり。

②黄檗清規云、省行堂者、有病比丘、攝養之所也。

＊

『黄檗清規』に云く、「省行堂は、病比丘有れば、攝養するの所なり」と。

＊

○黄檗清規云、省行堂者、有病比丘、攝養之所也＝『黄檗清規』「礼法章第八」（T82-777c）にそのまま見える。

③幻住菴清規云、身屬報縁。誰無老病。百丈建立、意在於斯。古宿扁延壽堂、爲省行、使其省察行苦、而興悲智。

＊

『幻住菴清規』［五十三丈］に云く、「身は報縁に屬す。誰か老病無からん。百丈の建立、意、斯こに在り。古宿、延壽堂に扁して、省行と爲し、其れをして行苦を省察して、悲智を興さしむ」と。

＊

○幻住菴清規云、身屬報縁。…使其省察行苦、而興悲智＝『幻住菴清規』「攝養」章(X63-585a)にそのまま見える。

④北礀文集説、見于延壽堂。

＊

『北礀文集』の説は、延壽堂に見ゆ。

＊

○北礀文集説、見于延壽堂＝『北礀文集』とは北礀居簡禅師の文集。『北礀文集』（和刻本中國古逸書叢刊51巻・p.175、鳳凰出版社）に次のようにある。「妙湛延壽堂記。疾病相扶持、無憾於養生送死、以明王道之本…又為省行堂。以別不老不病、欲其循省日用事。」全文は【一二二】「延寿堂」参照。

⑤緇門警訓［上ノ卅三丈。諸祖偈頌下下ノ五丈］超然居士趙令矜撰、南嶽法輪寺省行堂記云、嘗謂、諸苦之中、病苦爲深。作福之中、看病爲最。是故古人、以有病爲善知識。曉人以看病爲福田。所以叢林、爲老病之設。今叢林聚衆、凡有病使歸省行堂。不唯修省改行以退病、亦欲人散夜靜、孤燈獨照之際、究索大事。豈徒然哉。既命知堂、以司藥餌。又戒常住、以足供須。此先佛之規制。近世不然。堂名延壽、鄙俚不經。病者不自省咎。補貂乖方。湯藥妄投、返成沈痼。至有酷疾不參堂、以務疎逸者、大失建堂命名之意也。知堂名存實廢。或同路人。常住急於日用、殊不存撫。又復失優波待老病之意也。由是病人呻吟痛楚、日益增極。過、在彼此。非如來咎。縱有親故問病、率皆鄉曲故舊。心既不普、事忽有差。今、法輪病所、奐然一新。蓋有本分人、是事色色成辨。無可論者。惟有病人、宜如何哉。省貂念罪。世之有識者、皆能達此。衲僧分上、直截機縁、當於頭痛額熱之時、薦取掉動底、於聲冤叫苦之際、領略徹困心。密密究思。是誰受病人。既不見病從何來。人病雙亡。復是何物。直饒見得分明、正好爲他將息。

＊

『緇門警訓』［上の卅三丈。諸祖偈頌下下の五丈］超然居士趙令矜が撰する、「南嶽法輪寺の省行堂の記」に云く、「嘗て謂えり、諸苦の中には、病苦を深と爲す。作福の中には、看病を最と爲す。是の故に古人、有病を以て善知識と爲す。人に曉すに看病を以て福田と爲す。所以に叢林は、老病の爲に之を設く。今の叢林の衆を聚むる、凡そ病有れば省行堂に歸せしむ。唯だに修省して行を改め以て病を退くるのみならず、亦た人散じ夜靜かにして、孤燈獨照の際、大事を究索せんと欲す。豈に徒然ならんや。既に知堂に命じて、以て藥餌を司らしむ。又た常住に戒めて、以て供須を足す。此れ先佛の規制なり。近世は然らず。堂を延壽と名づけ、鄙俚にして不經なり。病者自ら咎を省みず。貂を補い方に乖く。湯藥妄りに投じて、返って沈痼を成す。酷疾有りて參堂せず、

以て疎逸を務むる者に至りては、大いに堂を建て名を命づくるの意を失うなり。知堂は名のみ存して實廢す。或いは路人に同じ。常住は日用に急にして、殊に存撫せず。又復た優波の老病に待するの意を失す。是れに由って病人呻吟痛楚して、日々に益ます極を増す。過、彼此に在り。如來の咎に非ず。縱い親故の病を問う有るも、率ね皆な鄉曲の故舊なり。心既に普からざれば、事忽ちに差うこと有り。今、法輪の病所、奐然として一新す。蓋し本分の人有り、是の事色色成辨す。論ず可き者無し。惟るに病有る人、宜しく如何がすべきや。躯を省し罪を念ず。世の有識の者は、皆な能く此れに達す。衲僧分上、機縁を直截して、當に頭痛額熱の時に於いて、掉動底を薦取し、冤と聲し苦と叫ぶの際に於いて、徹困の心を領略すべし。密密に究思せよ。是れ誰か病を受く人と。既に病何れ從り來るかを見ず。人病雙亡せん。復た是れ何物ぞ。直饒い見得すること分明なるも、正に好し他の爲に將息せん。

＊

○緇門警訓［上ノ卅三丈。諸祖偈頌下下ノ五丈］超然居士趙令矜撰、南嶽法輪寺省行堂記云…正好爲他將息＝同文は『緇門警訓』巻二（T48-1051c~1052a）及び『禅門諸祖師偈頌』巻下之下（X66-750b）に見える。大正蔵本『緇門警訓』では、「看病為最」が「省病為最」に、「不唯修省」が「不准修省」に作っている。文中に見える超然居士趙令矜は、字は表之、号は超然居士。圜悟克勤の法嗣で、『続伝燈録』巻二八（T51-659b~c）、『五燈会元』巻一九（X80-411c）などに伝が見えるが、諱は「令矜」ではなく「令衿」となっている。

⑥　忠曰、堂名延壽。鄙俚不經者、此即貶不言省行而稱延壽也。

＊

忠曰く、「堂を延壽と名づく。『鄙俚不經なり』とは、此れ即ち省行と言わずして延壽と稱するを貶するなり」と。

（小嶋　孝）

禪林象器箋巻第二

神京妙心龍華沙懣道忠無著甫輯

○座位類

【一三三】座前

①敕修清規［上一ノ十九丈］聖節上堂云、頭首領衆出堂、至法座前、列一行問訊。歸西序立。〈又見座下處。〉

＊

『敕修清規』［上一ノ十九丈］の聖節（＝今上天皇の誕生日）の上堂に云く、「頭首（＝西序に位置する叢林の熟達者）、衆を領して堂に出でて、法座の前に至りて、一行に列して問訊す。西序（＝禅院の仏殿・法堂に役職が並ぶ時の中央に向かって西〈左〉側）に歸りて立つ」と。〈又た「座下」の處に見ゆ。〉

＊

○『敕修清規』［上一ノ十九丈］聖節上堂云…歸西序立＝『勅修百丈清規』巻一「聖節」（T48-1113a）の条に見える文章であるが、「頭首領衆出堂」を「頭首下床、聖僧前問訊、領衆出堂」と作っていて、削除変更が加えられている。なお、文中に見える事項のうち、【九五二】「聖節」・【八〇〇】「上堂」・【八〇五】「聖節上堂」・【三八四】「頭首」・【三八三】「東序・西序」は、それぞれ『象器箋』の中

に立項されている。文末に「又見座下処」という付注があるが、「座下」は次項【一三四】に立項されている。

②　忠曰、凡清規言座前、即樽天柱之間也。

＊

忠曰く、「凡そ『清規』に座前と言うは、即ち樽天柱（＝殿堂の正面の左右にある二本の露柱。円柱）の間なり」と。

＊

○忠曰…即樽天柱之間也＝文中の「樽天柱」は【二九】に見える。

（荻須慈海）

【一三四】座下

①敕修清規［上一ノ廿丈］聖節上堂云、待住持斂衣趺坐、侍者先末班、引過座下、列一行問訊。焼香侍者引班歸位。次首座領班出列座前問訊。

＊

『敕修清規』［上一の廿丈］「聖節（＝今上天皇の誕生日）の上堂」に云く、「住持（＝住職）、衣を斂めて趺坐（＝足背を股の上に置いて坐すこと）するを待ちて、侍者、末班（＝末席）を先にして、引きて座下を過ぎ、一行に列して問訊す。焼香侍者、班を引き位に歸る。次に首座（＝僧堂の第一位にすわる僧）、班を領して出でて、座前に列して問訊す」と。

＊

○敕修清規［上一ノ廿丈］聖節上堂云…座前問訊＝『勅修百丈清規』巻一（T48-1113b）に全く同じ文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【九五二】「聖節」・【八〇〇】「上堂」・【八〇五】「聖節上堂」・【三六五】「住持」・【七二七】「問訊」・【六一三】「焼香」・【三七一】「焼香侍者」・【一三三】「座前」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。また「侍者」は【三六七】「五侍者」などに、「首座」は【三八七】「前堂首座」・【三八八】「第一座」・【三八九】「座元」・【三九〇】「禅頭」・【三九一】「首衆」などに見える。

②　忠曰、凡清規言座下、即須彌座直下也。

＊

忠曰く、「凡そ『清規』に座下と言うは、即ち須彌座（＝須弥壇に同じ。法堂で住持が説法をする壇上の座）の直下なり」と。

（堀　祥岳）

【一三五】住持轉位〈東序上首〉（住持の轉位〈東序の上首〉）

①舊説［敕鈔一ノ十五丈右］曰、都寺立班、宜在後堂對面位。若其前堂對面位、乃是住持轉位也。

＊

『舊説』［敕鈔一の十五丈右］に曰く、「都寺（＝寺の総監）の立班、宜しく後堂の對面位（＝寝

堂などにて住持の高座に向かい、住持に対面する位置）に在るべし。若し其の前堂の對面位は、乃ち是れ住持（＝住職）の轉位なり」と。

＊

○『旧説』［敕鈔一ノ十五丈右］曰、都寺立班…住持転位＝雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規抄』巻一には「都寺立班、亘在後堂対面位。前堂対面、乃住持」（一五丁表）とあり、後半の文章が異なっている。「住持転位」の語は、無着道忠撰の『小叢林清規』（T81-711b）の割り注の中にも見える。なお、【三六五】「住持」・【三八三】「東序・西序」・【四四〇】「都寺」・【一四九】「対面位」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

②敕修清規［下一ノ五十九丈］亡僧大夜念誦云、龕前念誦、知事先燒香、上茶湯。住持至燒香、居東序上首立。維那出燒香請鎖龕佛事。受請人出班。

＊

『敕修清規』［下一の五十九丈］「亡僧の大夜念誦（＝僧侶の葬儀前夜、誦文をとなえること）」に云く、「龕前の念誦、知事（＝禅門寺院の運営責任者）先ず燒香し、茶湯（＝仏祖の神前および亡者の霊に毎朝、または法要などに供する湯茶）を上ぐる。住持至りて燒香して、東序（＝禅院の仏殿・法堂に役職が並ぶ時の中央に向かって東〈右〉側）の上首（＝上位）に居して立つ。維那（＝叢林で、僧衆の修行を督励、監視し堂内の衆務を総覧する係）出でて燒香して、鎖龕（＝蓋棺、龕の蓋をとざすこと）の佛事を請す。受請の人、班を出づ」と。

＊

○『敕修清規』［下一の五十九丈］龕前念誦…受請人出班＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1148b）に全く同じ文章が見える。「下一」とは四冊本の下の一冊目の意であろう。文中に見える事項のうち、【二一一】「大夜」・【一一〇三】「龕前念誦」・【四三六】「知事」・【六一三】「焼香」・【一〇六五】「茶湯」・【五二五】「維那」・【一〇七〇】「鎖龕」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

③忠曰、住持避鎖龕人中立。故轉居東序上首也。故知、住持若離中位立班、則必居東序右邊也。

＊

忠曰く、「住持、鎖龕人の中立を避く。故に轉じて東序の上首に居す。故に知んぬ、住持、若し中位を離れて立班するときは、則ち必ず東序の右邊に居することを」と。

④又［下一ノ五十九丈左］云、知客平舉楞嚴咒、回向〈云云〉。住持仍歸東序上首立。江湖道舊。鄉人法眷。次第設祭。

＊

又た［下一の五十九丈左］云く、「知客（＝賓客の接待係）、『楞嚴咒』を平舉（＝題目抜きで直ちに経の本文を読むこと）し、回向（＝功徳を他にめぐらし、さし向けること）す〈云云〉。住持、仍りて東序の上首に歸りて立つ。江湖（＝名山大刹に住持していない尊宿）の道舊（＝旧友）、鄉人（＝同郷出身の人）、法眷（＝修行仲間）、次第に祭を設く」と。

＊

○又［下一五十九丈左］云…次第設祭＝『勅修百丈清規』巻六の「大夜念誦」の条に、「知客平挙楞厳呪、回向云、住持仍帰東序上首立。江湖道旧、郷人法眷、次第設祭」（T48-1148b）と、ほぼ同じ文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【四〇四】「知客」・【一一三九】「楞厳呪」・【二八五】「江湖」・【二九九】「道旧」・【三一三】「郷人」・【三一一】「法眷」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

⑤　忠曰、此是住持、避江湖等設祭中立也。

＊

忠曰く、「此れは是れ住持、江湖等祭を設けて中立するを避くるなり」と。

⑥鎌倉清規［四丈ウ］衆寮諷経云、住持入焼香、而立都寺上位。時寮元從西序班末。知客之側。出焼香。

＊

『鎌倉清規』［四丈ウ］「衆寮（＝禅院で僧伽〈和合衆〉のいる寮舎）諷経（＝声を出して経文を読誦すること）」に云く、「住持入りて焼香して、都寺の上位に立つ。時に寮元（＝衆寮内の諸事を総掌する係）、西序（＝禅院の仏殿・法堂に役職が並ぶ時の中央に向かって西〈左〉側）の班末、知客の側ら從り、出でて焼香す」と。

＊

○『鎌倉清規』［四丈ウ］衆寮諷経云…出焼香＝『鎌倉清規』は、『新纂禅籍目録』（p.51）に拠れば、全一巻、妙心寺塔頭の東海庵に所蔵される無著道忠手沢本のようであるが、詳細は不明。『勅修百丈清規』巻七「衆寮結解特為衆湯」条に「両序、寮に入れば、首座・都寺、各おの焼香し、班位に帰して立つ。寮元、門外に右立し、伺いて住持を迎えて入り、焼香立定す。寮元、西序の班末に後立し、出でて焼香礼拝して楞厳頭を挙呪す。回向畢われば、寮元、住持を送りて出づ。七月十二日の礼も同じ。（両序入寮、首座都寺、各焼香帰班位立。寮元於門外右立、伺迎住持入、焼香立定。寮元於西序班末後立、出焼香礼拝楞厳頭挙呪。回向畢、寮元送住持出。七月十二日礼同。）」（T48-1151b）といった文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【九一】「衆寮」・【九九〇】「諷経」・【四四〇】「都寺」・【四一九】「寮元」・【三八三】「東序・西序」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

⑦　忠曰、此是住持、避寮元中立焼香也。

＊

忠曰く、「此れは是れ住持、寮元の中立焼香を避くるなり」と。

（白川邦與）

【一三六】入牌小師班位（居浴司右）（入牌に小師班位（浴司の右に居す））

①前住入祖堂［敕修鈔七ノ七丈。講云ト云々］、小師居浴司班右邊、出位焼香問訊、向住持請安牌佛事。

＊

前住（＝前の住職で現在、東堂にある者）の入祖堂（＝祖師の牌を祖師堂に入れること）［『敕修鈔』七の七丈。講に云うと云々］に、小師（＝弟子）、浴司班の右邊に居し、位を出でて焼香問訊（＝香を焚いて合掌低頭すること）し、住持に向かいて安牌の佛事を請す。

＊

○前住入祖堂…安牌佛事＝駒澤本『勅修百丈清規抄』巻七に、「講曰、前住入祖堂、住持挿香展拝焼香喫茶起身禀意。又擬（日？）曰祖堂供鳴鐘衆集、小師居浴司班右辺、出位焼香問訊。入牌見于下『遺書』章末。小師到寺具（見？）侍者、請住持安牌仏事、親呈牌而退」（七丁表）とある。なお、文中に見える事項のうち、【二七七】「前住」・【九六七】「入牌祖堂」・【三一一】「小師」・【六一三】「焼香」・【七二七】「問訊」・【三六五】「住持」・【八五二】「仏事」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

②南禅規式［下ノ八十丈］前住入祖堂云、小師親度牌於侍者。小師在浴主後立。法語畢、侍者接牌、度於都寺。

＊

『南禅規式』［下の八十丈］の「前住入祖堂」に云く、「小師親から牌を侍者に度す。小師、浴主（＝浴室を掌る役。知浴）の後に在りて立つ。法語（＝香語）畢わりて、侍者、牌を接して、都寺（＝寺の総監）に度す」と。

＊

○『南禅規式』は未詳。文中に見える事項のうち、【四〇九】「浴主」・【一一五四】「法語」・【四四〇】「都寺」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

③清拙小清規云、入祖堂、孝子僧、従頭首之末進爐前問訊、焼香了、向長老請佛事。

＊

清拙の『小清規』に云く、「入祖堂、孝子の僧、頭首（＝西序に位置する叢林の熟達者）の末従り、爐前に進みて問訊し、焼香了わりて、長老（＝住持）に向かいて佛事を請す。

＊

○清拙小清規云…向長老請佛事＝清拙正澄『大鑑禅師小清規』一巻（T 81所収）には見当たらない。なお、文中に見える事項のうち、【三八四】「頭首」・【二七六】「長老」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

（森　宗圭）

【一三七】單位

①敕修清規［下一ノ五十一丈］日用軌範云、昏鐘鳴、須先歸單位坐禪。

＊

『敕修清規』［下一の五十一丈］「日用軌範」に云く、「昏鐘鳴（＝昏鐘の鳴る時）に須く先ず單位に歸りて坐禪すべし」と。

＊

○『敕修清規』［下一ノ五十一丈］「日用軌範」云、昏鐘鳴、須先歸單位坐禪＝『敕修百丈清規』巻六「日用軌範」に「昏鐘鳴、即合掌黙念。偈云、聞鐘声煩悩軽、智慧長菩提生、离地獄出火坑、願成仏度衆生。須先帰単位坐禅」（T48-1146a）とあって、削除変更が加えられている。「下一」とは、四冊本の下の一冊目の意であろう。「昏鐘鳴」は「こじめ」と読み（『大漢和』巻五・p.785）、「昏鐘のひびき。また昏鐘の鳴るとき」をいう（『禅学』p.367）。ここは後者の意ととる。

②　忠曰、單者、用小紅紙片、題衆僧名、貼各各位上壁。別源東歸集云一單一鉢標一名〈止此〉、是也。有己名單之位、此謂單位也。又僧堂床前之板曰單。濶八寸。日用軌範言床前一尺、蓋依周尺也。凡言七尺單前者、非帳帷之長。謂自床後至前六尺〈日本謂之一間〉、更加單板一尺、合成七尺也。〈又見文疏類單處。○東福僧堂、床深六尺、前單板一尺。〉

＊

忠曰く、「單とは、小紅紙片（＝紅い小さな紙片）を用い、衆僧の名を題して、各各の位

上の壁に貼ず。別源の『東歸集』に、『一單一鉢、一名を標す』〈此こに止まる〉と云う、是れなり。己れが名單有るの位、此れを單位と謂うなり。又た僧堂床前の板を單と曰う。濶さ八寸（＝約二十四センチ）。『日用軌範』に『床前一尺』と言うは、蓋し周尺に依れり。凡そ『七尺單前』と言う者は、帳帷（＝とばり）の長さに非ず。謂えらく、床後自り前に至るまで六尺〈日本には之れを一間と謂う〉、更に單板一尺を加え、合わせて七尺と成るなり」と。〈又た「文疏類」の「單」の處に見ゆ。○東福の僧堂は、床の深さ六尺、前の單板一尺なり。〉

＊

○忠曰…前單板一尺＝同じく無著道忠の手に成る『虚堂録犂耕』巻上の「排単」の条に、次の様な類似した説明がある。「名を以て単片紙に書す。故に単と言うなり。僧堂の単は、紅紙小片に各位の名を書す。一紙に一名、各位の床上の壁の外面に貼ず。別源の『東帰集』［廿二丈］の『太虚侍者の聖僧に侍するを賀する偈』に曰く、『五湖四海、堂内の客、一単一鉢、一名を標す』〈此こに止まる〉と、是れなり。又た僧堂の床前の板を単と曰う。所謂る『七尺単前』とは、謂えらく、床後自り前に至るまで六尺、更に単板一尺を加う。今ま已に『排す』と言うときは、則ち名単のみ。（以名書単片紙。故言単也。僧堂単者、紅紙小片書各位名。一紙一名、貼各位床上壁外面。別源東帰集［廿二丈］賀太虚侍者侍聖僧偈曰、五湖四海堂内客、一単一鉢標一名〈止此〉、是也。又僧堂床前之板、曰単。所謂七尺単前、謂自床後至前六尺、更加単板一尺也。今已言排、則名単而已。）」（禅文化本・p.404）文中、「別源東帰集云、一単一鉢標一名」の部分、「別源」は、曹洞宗宏智派の別源圓旨（一二九四～一三六四）のこと。越前の人。別に縦性と称する。鎌倉の円覚寺に在った曹洞宗の東明慧日（一二七二～一三四〇）に嗣法する。さらに元応二（一三二〇）年に入元し、古林清茂・雲外雲岫・中峰明本・霊石如芝・無見先覩・古智慶哲・竺田悟心・南楚師説・龍岩徳真・絶学世誠に歴参し、正中二（一三二五）年に古林清茂に印可される。帰朝後、越前の朝倉広景の請に応じて帰郷し、足羽の弘祥寺を開創し、また同国に善応寺・吉祥寺を開く。さらに延文二（一三五七）年に山城の真如寺、貞治三（一三六四）年には、足利義詮の招請により建仁寺に住した。同年十月八日、建仁寺現住のまま示寂した（『五山禅僧伝記集成』p.585~587・『禅学』p.111、参照）。著書に『南游集』と『東帰集』という詩偈集があり、前者は別源が在元中のもの、後者は帰朝後のものを集めたものである。引用されている「一単一鉢標一名」の部分は、『東帰集』「竺仙和尚、大虚侍者の聖僧に侍するを賀す韻を和す（和竺仙和尚賀大虚侍者侍聖僧韻）」（上村観光編『五山文学全集』第一巻・p.771）という詩偈の中に見える。また、文中の「日用軌範言床前一尺、蓋依周尺也」の部分は、『敕修百丈清規』巻六「日用軌範」の「床前一尺為三浄頭」（T48-1145c）とあるのを指す。「三浄頭」とは、『禅苑清規』巻一の「赴粥飯」の条に「以て護浄を明らかにす。〈一には袈裟を安んじ、二には鉢盂を展じ、三には頭の向かう所、是れを三浄と名づく〉（以明護浄。〈一安袈裟、二展鉢盂、三頭所向、是名三浄〉）」（X63-525a、訳注本・p.43~44）とある通り、清浄にしておくべき、鉢をのべ、袈裟を置き、頭の向かう、単の牀縁のこと。『象器箋』【六七】「床前三浄頭・僧堂」に、無著による解説がある。「周尺」は、中国の周代に用いられた尺度のことで、周代の一尺は約二二・五センチ。また、文中の「凡言七尺單前者…合成七尺也」の部分、「七尺単前」は、③にも見えているように、「三條椽下、七尺単前」の形で、『碧巖録』第二五則・頌評唱（T48-166c）など、禅録に頻出する。文末の細注にある「又見文疏類単処」の部分は、『象器箋』【一二一二】「単・名単」を指す。なお、文中に見える事項のうち、【一二一二】「単・名単」以外に、【五〇】「僧堂」・【一六二五】「鉢」も、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

③七尺單　碧巖録［三ノ十八丈］云、三條椽下、七尺單前、試去參詳看。

＊

七尺單　『碧巖録』［三の十八丈］に云く、「三條椽下、七尺單前に、試みに去きて參詳して看よ」と。

＊

○『碧巖録』［三ノ十八丈］云…試去參詳看＝上述した通り、『碧巖録』第二五則・頌評唱の中に見える語。「三条椽下、七尺単前」は、禅堂で、各自が坐禅をする場所のこと。横が三尺で縦が七尺。横三尺の下には三本の椽がある（末木本㊤ p.423、参照）。また『象器箋』【六八】「三条椽・僧堂」に、無著

による解説がある。なお、大智實統撰『碧巌録種電鈔』では、この語に「僧堂単位に去きて、須く死工夫を下して看るべし（去僧堂単位、須下死工夫看）」（禅文化本・p.108）と注している。

④又有稱六尺單。蓋除單板。爲六尺乎。　續燈録［八ノ九丈］西禪繼圖禪師章云、且向三條椽下、六尺單前、快須究取。

＊

又た「六尺單」と稱する有り。蓋し單板を除きて六尺と爲るか。　『續燈録』［八ノ九丈］「西禪の繼圖禪師」章に云く、「且く三條椽下、六尺單前に向かいて、快に須く究取すべし」と。

＊

○續燈録［八ノ九丈］西禪繼圖禪師章云…快須究取＝『続燈録』巻八「無為軍廬江西禅継禅師」条（X78-688b）に同文が見える。

⑤晦菴光禪師録・石菴玿禪師録〈並續古尊宿録〉、皆有六尺單前語。

＊

『晦菴の光禪師録』・『石菴の玿禪師録』〈並びに『續古尊宿録』〉、皆な六尺單前の語有り。

＊

○晦菴光禪師録、石菴玿禪師録…皆有六尺單前語＝『続古尊宿語要』巻五「亀山晦菴光状元和尚語」の「法語　拈古」条に「十字街頭、浩浩塵中、与三条椽下、六尺単前、亦何有異」（X68-464a）とあり、同上「石菴玿和尚語」の「上堂」条に「若也不会、三条椽下、六尺単前、竪起脊梁、各自討箇安楽処始得」（X68-482b）とある。

⑥又有稱五尺單。蓋亦六尺單、用周尺則得四尺八寸。存大數言五尺也。　佛果擊節録［上五丈］雪竇普請話評云、也須是三根椽下、五尺單前、靜坐究取始得。

＊

又た「五尺單」と稱する有り。蓋し亦た六尺單、周尺を用うるときは則ち四尺八寸を得。大數（＝概数）を存して五尺と言うなり。　佛果『擊節録』［上五丈］「雪竇普請」の話の評に云く、「也た須く是れ三根椽下、五尺單前に、靜坐究取して始めて得べし」と。

＊

○佛果擊節録…靜坐究取始得＝圜悟克勤の『仏果擊節録』第二則「雪峰普請」（X67-228a）の、圜悟による評の中に同文が見える。「雪竇」は「雪峰」の誤り。

（廣田宗玄）

【一三八】鄰單

①忠曰、己之單位左右也。

＊

忠曰く、「己れが單位の左右なり」と。

＊

○単位＝前項の【一三七】を参照

②敕修清規［下一ノ四十六丈］日用軌範云、以枕子安脚下。未要拗。恐驚隣單。　又云［四十八丈］、喫食之法、不得抓頭耶。恐風屑落鄰單鉢中。　又云［五十一丈］、不得與鄰單語話。鄰單生疎、當以善言誘喩。不得生嫌惡心。

＊

『敕修清規』［下一の四十六丈］の「日用軌範」に云く、「枕子（＝まくら）を以て脚下（＝足もと）に安ず。未だ拗せんことを要せず。恐るらくは鄰單を驚かさん」と。　又た云く［四十八丈］、「喫食の法（＝食事時の作法・その時の用心）、頭を抓くことを得ざれ。恐るらくは風屑（＝頭のフケ）の鄰單の鉢中に落ちんことを」と。　又た云く［五十一丈］、「鄰單と語話（＝会話）することを得ざれ。鄰單、生疎（＝坐作進退が粗野で如法でないこと）ならば、當に善言（＝良い誡めの言葉）を以て誘喩（＝誘導説諭、導き諭す）すべし。嫌惡の心（＝相手を忌み嫌う、憎しみの情）を生ずることを得ざれ」と。

＊

○敕修清規［下一ノ四十六丈］日用軌範云…恐驚隣單＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1144b）に同文が見えるが、一字だけ「以」を「将」に作ってる。「下一」とは、四冊本の下の一冊目のことであろう。文中に見える事項のうち、【一五九三】「枕子」、【一六二五】「鉢」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

○又云［四十八丈］、喫食之法、不得抓頭耶。恐風屑落鄰單鉢中＝同じく『勅修百丈清規』巻六（T48-1145a）に同文が見えるが、「不得抓頭」の下に「耶」の一字が入っている。

○又云［五十一丈］、不得與鄰單語話…不得生嫌惡心＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1146a）に同文が見えるが、「隣」を「鄰」に作っている。

（佐野泰典）

【一三九】被位

①日用軌範［敕下一ノ四十六丈］　云、上被位、眠單収一半坐定。

＊

『日用軌範』［敕下一の四十六丈］に云く、「被位（＝単）に上り、眠單（＝夜具）をば一半（＝半分）を収めて坐定す」と。

＊

○日用軌範［敕下一ノ四十六丈］云上被位…坐定＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1144c）に全く同じ文章が見える。「下一」とは、四冊本の下の一冊目の意であろう。また、『禅林備用清規』巻一〇（X63-660c）にも同じ文章があり、他に『入衆日用』巻一（X63-556c）・『叢林校定清規総要』巻二（X63-617b）・『入衆須知』（X63-559c）にも同様の文章が見えるが、『入衆日用』『叢林校定清規総要』は「被位」の前に「帰」が入り、更に「眠單」の前に「将」の一字が入る。また『入衆須知』は「被位」の前に「帰」の一字が入り、更に「披位」に作る。また「眠單」の前に「将」の一字が入る。文中の事項の内、【一四〇四】「眠單」は、『象器箋』の中に立項されている。

②敕修清規［下二ノ三丈］出圖帳云、寫被位圖・鉢位圖。

＊

『敕修清規』［下二の三丈］「圖帳を出す」に云く、「被位の圖・鉢位（＝僧堂内で食事をする時

の各自の単）の圖を寫（うつ）す」と。

＊

○敕修清規［下二ノ三丈］出圖帳云…鉢位圖＝『勅修百丈清規』巻七（T48-1150c）に「堂司依戒臘、写楞厳図・念誦巡堂図・被位図・鉢位図（式前後互見）・戒臘牌」とある。文中の事項の内、【一二六〇】「楞厳図」・【一二六一】「念誦巡堂図」・【一二六九】「被位図」・【一二六八】「鉢位図」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

③　舊説［敕鈔十四ノ九丈］曰、被位是大衆〈平僧〉排僧堂之位。鉢位是蒙堂衆、排僧堂之位。

＊

舊説［敕鈔十四の九丈］に曰く、「被位（ひい）は是れ大衆〈平僧〉、僧堂に排するの位なり。鉢位（ほい）は是れ蒙堂（もうどう）（＝勤旧退職者の安息するところ）の衆、僧堂に排するの位なり」と。

＊

○舊説［敕鈔十四ノ九丈］曰…排僧堂之位＝『勅修百丈清規抄』巻一四に「被位図ハ大衆ノ位ソ、鉢位ハ蒙堂ノ位ソ」（九丁表）とある。文中の事項の内、【三三一】「大衆」・【五〇】「僧堂」・【一四〇】「鉢位」・【八六】「蒙堂」は、『象器箋』の中に立項されている。

④　忠曰、按敕修清規［下二ノ四丈］鉢位圖注云、被位倣此。不分板首。〈止此。〉蓋鉢位分板首。〈十六板等〉被位不分板首。以爲異也。其分不分圖、見圖牌門、被位圖處。

＊

忠曰く、「『敕修清規（ちょくしゅうしんぎ）』［下二の四丈］の『鉢位圖（ほいず）』を按ずるに、注（ちゅう）して云く、『被位（ひい）は此れに倣え。板首（＝十六板などと呼んで、役位、大衆の序列をいう）を分かたず』と。〈此こに止まる。〉蓋（けだ）し鉢位（ほい）は板首を分かつ〈十六板等なり〉。被位（ひい）は板首を分かたず。以て異と爲すなり。其の分不分の圖は、圖牌門の「被位（ひい）」の圖の處に見ゆ」と。

＊

○按敕修清規［下二ノ四丈］鉢位圖注云…板首＝『勅修百丈清規』巻七（T48-1150c）の「十六板首鉢位之図」のなかに「被位倣此」と「不分板首」の語句が見える。文中の事項の内、【一二六八】「鉢位図（十六板首）」・【一二六九】「被位図」は、『象器箋』の中に立項されている。

⑤敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云、或有留被在堂、不随衆者。

＊

『敕修清規（ちょくしゅうしんぎ）』［下一の四十一丈］の「坐禪」に云く、「或いは被を留（とど）め、堂に在（オ）いて衆に随わざる者（もノ）有り」と。

＊

○敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云…不随衆者＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1142c）に全く同じ文章が見える。

⑥　忠曰、被者、是坐禪之單也。

＊

忠曰く、「被とは、是れ坐禪の單なり」と。

（藤原良敬）

【一四〇】鉢位

①見于被位處。圖見圖牌類。

＊

被位の處に見ゆ。圖は「圖牌の類」に見ゆ。

＊

○見于被位處。圖見圖牌類＝「被位」は前条【一三九】を参照のこと。「図牌類」は、『象器箋』巻第十六の第廿四類のこと。

②敕修清規［上二ノ廿丈］入院云、大衆先歸鉢位立定。

＊

『敕修清規』［上二の廿丈］の「入院」に云く、「大衆先ず鉢位に帰りて立定（＝しっかりと立ち動かないこと）す」と。

＊

○敕修清規［上二ノ廿丈］入院云、大衆先歸鉢位立定＝『勅修百丈清規』巻三に「大衆先帰鉢位立定」（T48-1125b）とある。

③又日用規範［下一ノ四十七丈］云、或歸衆寮喫湯藥、或茶堂經行、次第歸鉢位。

＊

又た『日用軌範』［下一ノ四十七丈］に云く、「或いは衆寮（＝禅院で僧伽〈和合衆〉のいる寮舎）に歸して湯藥（＝食事・湯・茶・薬などをいう）を喫し、或いは茶堂（＝住持の行礼のところ）に経行（＝まっすぐに往復すること）し、次第に鉢位に帰せよ」と。

＊

○又日用規範［下一ノ四十七丈］云…次第歸鉢位＝『入衆日用』巻一に「或帰衆寮喫湯薬或茶堂、経行次第帰鉢位」（X63-556c）とあり、また『勅修百丈清規』巻六にも「或帰衆寮喫湯薬、或茶堂経行次第帰鉢位」（T48-1144c）とある。なお、文中の事項のうち、【九一】「衆寮」・【八二】「茶堂」・【六三五】「経行」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

④忠曰、永平清規［七丈］辨道法云、粥了歸衆寮喫茶喫湯。或復被位打坐。〈止此。〉此即以規範鉢位、又爲被位。可知、被位・鉢位非別。余謂、僧堂大衆粥齋坐位故謂鉢位。其坐禪則謂之被位而已。但鉢位分板首、被位不分板首、以爲異也。

＊

忠曰く、「『永平清規』［七丈］の「辨道法」に云く、『粥了わらば衆寮に歸りて喫茶喫湯せよ。或いは被位に復りて打坐す』と。〈此こに止まる。〉此れ即ち規範の鉢位を以て、又た被位と爲す。知る可し、被位・鉢位は別に非ざることを。余謂えらく、僧堂の大衆粥齋の坐位なるが故に鉢位と謂う。其の坐禪には、則ち之を被位と謂うのみ。但だ鉢位は板首を分かち、被位は板首を分かたず、以て異と爲すなり」と。

＊

○『永平清規』巻上に「粥了帰衆寮喫茶喫湯。或復被位打坐」（T82-324b）とある。

（荻須慈海）

【一四一】副鉢位

①敕修清規［下二ノ三丈］出圖帳云、舊以送蒙堂者、排副鉢。後因爭競不排。

＊

『敕修清規』［下二の三丈］「圖帳を出す」に云く、「舊とは蒙堂（＝退任した役位の寮）に送る者を以て、副鉢に排す。後に爭競に因りて排せず」と。

＊

○敕修清規［下二ノ三丈］出圖帳云…後因爭競不排＝『勅修百丈清規』巻七の「出図帳」（T48-1150c）に全く同じ文章が見える。なお、文中の事項のうち、【八六】蒙堂は、『象器箋』の中に立項されている。

②忠［予勅修鈔］曰、副鉢者、鉢謂十六板頭也。副相亞之意也。今言、只今但以單寮西堂首座勤舊、排副鉢位。古者蒙堂、亦排副鉢。遂有爭競。故停之。與大衆同、依戒次排之也。〈副鉢位圖、見圖牌類、被位圖處。〉

＊

忠［予の『勅修鈔』に］曰く、「副鉢とは、鉢は謂く十六板頭なり。副は相い亞ぐ（＝側から助ける）の意なり」と。今ま言うこころは、只だ今は但だ單寮（＝一人で住む寮舎にいる役寮）・西堂（＝他の寺院の前住職がそのまま居住している場合の呼称）・首座（＝多くの修行僧の主席。僧堂の第一位にすわる僧）・勤舊（＝その職を退いた、東序の諸知事、西序の諸頭首）を以て、副鉢位に排するのみ。古えは蒙堂（＝監寺以下の退職した者）をも、亦た副鉢に排す。遂に爭競有り。故に之を停めて、大衆と同じく、戒次（戒臘の次第）に依りて之を排するなり。〈副鉢位の圖は、「圖牌類」の「被位」の圖の處に見ゆ。〉

＊

○忠［予勅修鈔］曰…被位圖處＝万治三年刊『勅修百丈清規抄』十五巻十六冊（駒澤大学所蔵）は無著禅師旧蔵本だが、同書の巻頭・見返し・巻中への書き入れは無著禅師三十三歳時の直筆である（白石虎月氏の見解による）。この十四巻（節臘章第八）九丁に『叢林校定清規総要』巻上の「僧堂鉢位十六板首之図」に対する頭注として、「副（鉢脇カ）。鉢者、十六板頭也。副者、相亜之意也」との書き込みがある。ここでの引用においては、脱字の補訂がなされている。援書名の「予勅修鈔」は、無著禅師所蔵の刊本を指すとみられる。なお、『勅修百丈清規』巻七（T48-1150c）にも「十六板首鉢位之図」が所収されており、同図は『象器箋』【一二六八】「鉢位図十六板首」に転写されている。「副鉢位」の語釈としては『象器箋』【一二六九】「被位図」に「板首の側の一位は是れ副鉢位なり（板首側一位、是副鉢位也）」とあるのが簡潔でわかりやすい。また、『象器箋』【一二六九】「被位図」に「僧堂被鉢位図」がみえる。同図は『禅林備用清規』巻三「被鉢位図」（X63-631c）に無著禅師が「副鉢位」を書き加えた独自の図である。文中の事項のうち、【二八九】「単寮」・【二八一】「西堂」・【三八七】「首座」・【二八八】「勤旧」・【二九〇】「蒙堂」は、『象器箋』の中に立項されている

③校定清規［雲桃勅修鈔節臘ノ六丈］圖云、或六出・八出・十二出。隨僧堂大小、衆之多寡。又各排副鉢一位。其餘並依戒次循轉。

＊

『校定清規』［雲桃『勅修鈔』「節臘」の六丈］圖に云く、「或いは六出・八出・十二出。僧堂の大小、衆の多寡に隨う。又た各おの副鉢の一位を排す。其の餘は並びに戒次に依りて循

轉す」と。

○校定清規「雲桃勅修鈔節臘ノ六丈」圖云…其餘並依戒次循轉＝『叢林校定清規総要』巻上「僧堂鉢位十六板首之図」（X63-594a）に全く同じ文章がみえる。援書名にみえる「雲桃勅修鈔」は、雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規抄』の写本を指すと思われる。駒澤大学所蔵の万治三年刊本に同図は所収されておらず（巻十四「節臘」の「六丈」にも該当する図は見当たらない）、無著禅師は自筆の書き込みのある刊本以外に写本を参照したとみられる。写本には、東大史料編纂所本（『勅規桃源鈔』、両足院蔵本写一冊）、龍谷大学本（妙心寺隣華院蔵本写四冊）、松ヶ岡文庫本（『百丈清規雲桃抄抄録』、一冊）、隣華院本（『別抄』二巻・『雲桃抄』十巻、永禄十年恵璨写十二冊）などが確認されるが、どの写本であるかは調査を要する。なお、原本では「小」の字に朱の斜線が引かれている。無著は「小」の字を削除する意図があったかもしれないが、『叢林校定清規総要』巻上「僧堂鉢位十六板首之図」（X63-594a）には「小」字があり「僧堂の大小、衆の多寡に随い（随僧堂大小衆之多寡）」と訓める。ここは校本に従う。

＊

（堀　祥岳）

【一四二】四案位（衆寮）

①敕修清規［下二ノ五丈］衆寮結解特爲衆湯云、大衆依戒四案位。

＊

『敕修清規』［下二の五丈］「衆寮結解特爲衆湯」に云く、「大衆は戒に依りて四案位」と。

＊

○衆寮結解特爲衆湯云、大衆依戒四案位＝『勅修百丈清規』巻七の「衆寮結解特為衆湯」（T48-1151b）に全く同じ文章が見える。「下二」とは、四冊本の下の二冊目の意であろう。なお、文中に見える事項のうち【九一】「衆寮」・【一四三】「特為（位）」はそれぞれ『象器箋』に立項されている。

②忠曰、四案位、如僧堂四板頭。備用清規［十ノ四丈］日用清規云、歸衆寮、鳴大板三下。問訊、不歸、輕侮大衆。入門分四版頭、依位立定止此。此謂衆寮四版頭。即今四案位也。

＊

忠曰く、「四案位は、僧堂の四板頭（＝僧堂内部の四種の板で首座板・後堂板・分手板・聖僧板の首位をいう）の如し」と。『備用清規』［十の四丈］の「日用清規」に云く、「衆寮に歸り、大板を鳴らすこと三下す。問訊（＝掌を合わせ、体を曲げて頭を低く垂れる敬礼の仕方）し、歸らざれば、大衆を輕侮（＝軽く見て、ばかにする）す。門に入りて四版頭に分かれて、位に依りて立定（＝しっかりと立ち動かないこと）す」と。〈此こに止まる。〉此れは衆寮の四版頭を謂う。即今の四案位なり。

＊

○忠曰…即今四案位也＝『備用清規』の正式な書名は『禅林備用清規』。「備用清規［十ノ四丈］日用清規云、帰衆寮…依位立定」については、『禅林備用清規』巻一〇の「女　日用清規」（X63-661c）の章に「板」が「版」となってる以外、全く同じ文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【五八】「四板頭」・【七二七】「問訊」・【一三〇〇】「點湯（牌）」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

③　又衆寮結解點湯行禮圖。見圖牌類。

＊

又た衆寮結解點湯行禮の圖、「圖牌（＝禪門の寺院に掲げる諸行事の図）類」に見えたり。

＊

○又衆寮…見圖牌類＝「衆寮結解點点湯行礼図」は、【一二六四】「茶湯問訊図」に見え、また、【一三〇〇】「點湯（牌）」は、『象器箋』の中に立項されている。

（白川邦與）

【一四三】特爲位（〈特爲の位〉）

①敕修清規［下二ノ八丈］方丈小座湯云、第一座分二出。特爲東堂・西堂、請首座光伴。

＊

『敕修清規』［下二ノ八丈］「方丈の小座湯」に云く、「第一座、二出に分かつ。東堂・西堂を特爲（＝特別待遇）し、首座を請して光伴（＝列席する）す」と。

＊

○敕修清規方丈小座湯…請首座光伴＝『勅修百丈清規』巻七「方丈小座湯」（T48-1152b）に、そのまま見える。また、ここの「特為東堂西堂」には訓点が付けられていないが、【一六一】「小座湯二出座 四出座 六出座」に同じ文言が見え、そこでは無著は「東堂・西堂に特為す」と「特為」を動詞として訓んでいる。ここもこれに倣って動詞として読み、「東堂・西堂」を目的語としたが、目的語に付く格助詞は、意味あいから「に」を「を」に改めた。なお、文中に見える事項のうち、【四〇】「方丈」・【一三五九】「小座湯」・【二七九】「東堂」・【二八一】「西堂」・【六五二】「光伴」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

②舊説［敕鈔一四ノ廿二丈］曰、方丈特爲位者、主之對面位、是也。光伴位者、主之分手位、是也。二出者、除主伴外、分二出也。〈圖、見二出座處。〉

＊

舊説［『敕鈔』一四の廿二丈］に曰く、「方丈の特爲の位は、主の對面位、是れなり。光伴の位は、主の分手位（＝左右の座）、是れなり。二出とは、主伴を除いて外に、二出を分かつなり」と。〈圖、「二出座」の處に見ゆ。〉

＊

○舊説曰…分二出也＝『勅修百丈清規抄』第一五冊・巻一四・二十二丁裏の「特為」の条に、「特為位ト云ハ主ノ対面位ソ。光伴ノ位ハ分手位ソ」とあり、また「第一座」の条に「幾出ト云ニハ主位ト光伴トヲ除ト云ソ。二出ノ時モ主位ト光伴トヲ除テ二出ソ」とある。また、文末注の「図、見二出座処」とは、【一六一】「小座湯二出座 四出座 六出座」のこと。なお、文中に見える事項のうち、【一四四】「光伴位」・【一四七】「分手位」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

③又［敕鈔十四ノ廿四丈左］曰、若僧堂、則分手床頭、立特榻矣。

＊

又た［『敕鈔』十四の廿四丈左］曰く、「若しくは僧堂には、則ち分手床の頭らに特榻を立つ」と。

＊

○又曰若僧堂…立特榻矣＝『勅修百丈清規抄』第一五冊・巻一四・二十四丁裏の「焼香」条に、「光伴香ヲ焼ソ。僧堂テハ分手床ノ頭ニ特榻ヲ立ルソ」とある。

④　又特爲照牌、見圖牌門。

＊

又た特爲照牌（＝特別に人を招いて茶湯を献ずる時に座位を表示した札）は、「圖牌門」に見ゆ。

＊

○又特爲照牌、見圖牌門＝「特為照牌」は、『象器箋』巻第一六「第廿四類図牌門」の中（【一三〇一】）に見える。

（森　宗圭）

【一四四】光伴位

舊説［敕鈔十一ノ廿七丈］曰、方丈光伴位者。住持右邊。即是住持分手位也。〈又見特爲位處。〉

＊

舊説［敕鈔十一の廿七丈］に曰く、「方丈光伴（＝賓客の相手をすること。またその係）の位とは、住持の右邊、即ち是れ住持の分手位（＝左右の座）なり」と。〈又た「特爲の位」の處に見ゆ。〉

＊

○舊説［敕鈔十一ノ廿七丈］曰…即是住持分手位也＝『勅修百丈清規抄』巻一一・二十七丈表には、「光伴ハ住持ノ右テ分手位ソ」とある。なお、文中に見える事項のうち、【六五二】「光伴」・【四〇】「方丈」・【三六五】「住持」・【一四七】「分手位」・【一四三】「特為位」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

（廣田宗玄）

【一四五】主位

①忠曰、室南鄕者、以東爲主位、以西爲寶位。〈如方丈。〉室東鄕者、以北爲主位、以南爲賓位。〈如僧堂。〉室西鄕者以南爲主位、以北爲賓位。〈如庫司。〉

＊

忠曰く、「室の南に鄕う者は、東を以て主位（＝住持・主人の座処）と爲し、西を以て寶位（＝賓客の就くべき位置・座処）と爲す。〈方丈の如し。〉室の東に鄕う者は、北を以て主位と爲し、南を以て賓位と爲す。〈僧堂の如し。〉室の西に鄕う者は、南を以て主位と爲し、北を以て賓位と爲す。〈庫司の如し。〉」と。

＊

○賓位＝次項【一四六】を参照。

②禮記［一ノ九丈］曲禮云、主人入門而右。客入門而左。主人就東階。客就西階。客若降等則就主人之階。主人固辭、然後客復就西階。

＊

『禮記』［一の九丈］の「曲禮」に云く、「主人は門に入るに右よりす。客は門に入るに左よりす。主人は東階に就く。客は西階に就く。客、若し等（＝位階）を降るときは、則ち主人の階に就く。主人固辭して、然る後に客復た西階に就く」と。

＊

○禮記曲禮云…然後客復就西階＝『礼記』「曲礼 上」（新釈本㊤p.23）に全く同じ文章が見える。

③鶴林玉露［人集一ノ十八丈］云、四方以西爲尊。〈云云。〉今朝廷之上、羣臣皆自東階而升。不敢升自西階。非特嫌若賓主敵體。亦以西爲尊也。班孟堅西都賦曰、左城右平。左東也。東則爲城。若世所謂澁道。乃羣臣所由登降之階也。右西也。西則爲平、而不爲城也。凡賓主之席、主東而賓西。亦所以尊賓也。非謂東尊於西、而使賓次主也。故禮客降一等、則就主人之階。蓋客不敢自西階。爲賓主禮。欲自東階隨主人而升也。主人辭、客乃復位。蓋主人不許客。然後自西階升也。

＊

『鶴林玉露』［人集一の十八丈］に云く、「四方、西を以て尊と爲す。〈云云。〉今、朝廷の上、羣臣皆な東階自りして升る。敢えて西階自り升らざるは、特だに賓主敵體の若くなるを嫌うのみに非ず、亦た西を以て尊と爲ればなり。班孟堅が『西都の賦』に曰く、『左は城（＝階段）にして右は平なり』と。左は東なり。東は則ち城と爲す。世に所謂る澁道（＝花紋が刻まれた石のスロープ）の若し。乃ち羣臣、由りて登降する所の階なり。右は西なり。西は則ち平と爲して、城と爲さざるなり。凡そ賓主の席は、東を主として西を賓とす。亦た賓を尊ぶ所以なり。東は西より尊しと謂いて、賓をして主に次がしむるに非ざるなり。故に『禮』（＝『礼記』「曲礼 上」）に、『客、一等を降るときは、則ち主人の階に就く』と。蓋し客、敢えて西階自りせざるは、賓主の禮爲り。東階自り主人に隨いて升らんと欲するなり。主人辭す、客、乃ち位に復る。蓋し主人、客に許さずして、然る後、西階自り升るなり」と。

＊

○鶴林玉露…亦以西爲尊也＝『鶴林玉露』は、十六巻、南宋の羅大経（生没年不詳）の撰。天地人の三集に分かれ、一集各六巻。引用個所は、人集の巻一（四庫全書本・p.14a~15a）に見える。「班孟堅」は班固（三二~九二）のこと。『西都賦』は、『文選』（「左城右平」は、新釈本㊤p.35）の中に収められており、また『礼』は『礼記』のことで、「客降一等、則就主人之階」の語は、「曲礼 上」の「客若降等、則就主人之階」（新釈本㊤p.23）の引用。

④唐趙璘因話録［四丈。孚二廿三］云、人道尚右。以右爲尊、先賓客。故西讓客、主人在東。蓋自卑也。今人東讓客。豈禮哉。

＊

唐の趙璘が『因話録』［四丈。『孚』廿三］に云く、「人道は右を尚ぶ。右を以て尊と爲して、賓客を先んず。故に西を客に讓りて、主人は東に在り。蓋し自ら卑んずるなり。今人、東を客に讓る。豈に禮ならんや」と。

＊

○唐趙璘因話録云…豈禮哉＝『因話録』は、全六巻、唐の趙璘の撰。本文は『因話録』巻五（四庫全書本・p.9b）に見えるものであるが、文中注に「孚廿三」とあることから、ここは『説孚』の中に収められたものから引用している。『説孚』は、叢書の名。百巻本で、元末明初の陶宗儀（生没年不詳）の撰。経書・諸史・随筆・伝記の類を数百種収録したもので、簡録したり、分抄したりしている。なお、『因話録』は、『説孚』巻二三上「東讓客非礼」（四庫全書本・p.4b~5a）に見える。

⑤ 文選［四十四ノ三丈］司馬長卿、喩巴蜀檄云、位爲通侯。處列東第。 註善曰、東第甲

宅也。居帝城之東。故曰東第。張揖曰、列東第、在天子下方。翰曰、第次也。西爲尊、東爲下。言爲通侯、列在天子之下次。

＊

『文選』［四十四ノ三丈］の、司馬長卿（＝司馬相如・紀元前一七九？～紀元前一一七）、巴蜀（＝巴と蜀。現在の四川省重慶と成都）を喩す檄に云く、「位、通侯（＝諸侯）と爲りて、處、東第（＝王侯の邸宅）に列せり」と。　註に善（＝李善）曰く、「東第は甲宅（＝立派な邸宅）なり。帝城の東に居す。故に東第と曰う。張揖が曰く、『東第に列すとは、天子の下方に在るなり』と。翰曰く、『第は次（＝官舎）なり。西を尊と爲し、東を下と爲す。言は通侯（＝古代中国の爵位）と爲り、天子の下次に列在するなり』」と。

＊

○文選…列在天子之下次＝『文選』は、三十巻、梁の蕭統（昭明太子）撰。周から梁までの約千年間の作家百数十人の詩賦文章約八百篇を選び集めたもので、現存する詩文集の最古のもの。「注善」とは、李善による『文選注』のこと。六十巻で、『文選』の注の中で最もすぐれたものとされる。また、唐の呂延済・劉良・張銑・呂向・李周翰の五人の注を呂延祚が集めて一書とし、玄宗の開元六（七一八）年に奉った五臣注と合刊したものを六臣注文選と呼ぶ（『中国文芸大事典』p.763、参照）。引用個所は、『六臣注文選』巻四四（四庫全書本・p.3b）に見える。なお、「司馬長卿」は、司馬相如（紀元前一七九？～紀元前一一七）のこと。「長卿」は字。幼名を犬子というが、蘭相如を慕って相如と改めた。

（佐野泰典）

【一四六】賓位

①見于主位。

「主位」に見ゆ。

＊

○見于主位＝「主位」は、前項を参照のこと。

②顧元慶簷曝偶談云、古者賓位尚右。史記陳平願以右丞相讓周勃語云、無能出其右者。及行尚西。禮記曰、主人就東階、客就西階。諺呼主人爲東道。則古人坐讓右、行尚西。亦甚明矣。後世不察。遂以東左爲尊耳。

＊

顧元慶（生没年不詳）が『簷曝偶談』に云く、「古は賓位、右を尚ぶ。『史記』に、『陳平、願わくは右丞相を以て周勃に讓らん』と。語に云く、『能く其の右に出る者無し』と。行に及びては西を尚ぶ。『禮記』に曰く、『主人は東階に就き、客は西階に就く』と。諺に『主人を呼びて東道と爲す』と。則ち古人、坐は右を讓り、行は西を尚ぶこと、亦た甚だ明らけし。後世、察せず、遂に東左を以て尊しと爲すのみ」と。

＊

○顧元慶簷曝偶談云…＝顧元慶（生没年不詳）は、明の長洲（江蘇省）の人。字は大有、大石先生と称せられる。『簷曝偶談』一巻は顧元慶の撰。『続説郛』弐第一七所収。『史記』からの引用は「陳丞相世家 第二六」に、「平曰、高祖時、勃功不如臣平。及誅諸呂、臣功亦不如勃。願以右丞相讓勃」（中華書局本・p.2061、新釈本⑦ p.1097）とあるのを踏まえる。「語云、無能出其右者」の部分は、『漢書』巻一

下「高帝劉邦 紀第一下 九年」（中華書局本・p.67）に「漢廷臣無能出其右者」とある。『礼記』の引用は「曲礼 上」（新釈本㊤ p.23）に見える。「主人為東道」は、主人となって、客の案内や世話をすること。元来『春秋左氏伝』「僖公三十年」に「若舍鄭、以為東道主、行李之往来、供其乏困、君亦無所害」（新釈本・p.431）とあるのにもとづいたもの。

③　佛經尊右卑左

觀佛三昧經［六ノ十一丈］云、佛母摩耶、生忉利天。佛從閻浮提上忉利天、爲母説法。龍王爲佛、作三道寶階。上忉利宮、梵天釋提桓因等、侍左階、聲聞菩薩、大衆、侍右階。佛處其中。〈取意〉

＊

佛經、右を尊しとし左を卑しとす。

『觀佛三昧經』［六の十一丈］に云く、「佛母摩耶、忉利天（＝三十三天。欲界の六天のうち第二で、須弥山の頂にある）に生ず。佛、閻浮提（＝須弥山の南方にある大陸、四大洲のこと）從り忉利天に上りて、母の爲に説法す。龍王、佛の爲に、三道寶階（＝七宝で作った階段）を作る。忉利宮に上るに、梵天・釋提桓因（＝帝釈天の別名）等、左階に侍り、聲聞・菩薩、大衆、右階に侍る。佛、其の中に處す」と。〈取意〉

＊

○觀佛三昧經［六ノ十一丈］云…佛處其中＝『仏説観仏三昧海経』巻六「観四威儀品」（T15-677a~c）の中に見える。ただし、末尾に「取意」とある通り、無著の引用は抄録である。

④　又佛説海龍王經［三ノ四丈］云、佛愍龍王、受其請。龍王從海邊、化作三道寶階。金銀瑠璃、下至其宮。佛昇寶　階陟於中階。諸菩薩衆、住右階、諸大聲聞、住在左階。〈略鈔〉

＊

又た『佛説海龍王經』［三の四丈］に云く、「佛、龍王を愍れみて、其の請を受く。龍王、海邊從り三道寶階を化作す。金・銀・瑠璃、下も其の宮に至る。佛、寶階を昇りて中階に陟む。諸菩薩衆、右階に住まり、諸大聲聞、住まりて左階に在り」と。〈略鈔〉

＊

○『佛説海龍王經』［三の四丈］云…住在左階＝『仏説海龍王経』巻三「請仏品」（T15-144b~145b）に見える。ただし、末尾に「略抄」とある通り、無著の引用は抄録である。

⑤　長阿含經遊行經［二ノ六丈］云、世尊到巴連弗城。諸清信士、起大堂舍。世尊與大衆俱、詣彼講堂。　處中而坐。時諸比丘、在左面坐。諸清信士、在右面坐。

＊

『長阿含經』の「遊行經」［二の六丈］に云く、「世尊、巴連弗城に到る。諸もろの清信士、大堂舍を起こす。世尊、大衆と俱に、彼の講堂に詣り、中に處して坐したまう。時に諸もろの比丘、左面に在りて坐す。諸もろの清信士、右面に在りて坐す」と。

＊

○『長阿含經遊行經』［二の六丈］云…在右面坐＝『長阿含経』巻二「遊行経」の次の個所を踏まえるが一部改変されている。「於是、世尊即従座起、著衣持鉢、与大衆俱詣彼講堂、澡手洗足、処中而坐。時諸比丘在左面坐、諸清信士在右面坐」（T1-12b）。

⑥　忠曰、尊比丘、卑諸信士、則左右與前二經違。

＊

忠曰く、「比丘を尊び、諸もろの信士を卑うするときは、則ち左右、前の二經と違う」と。

（藤原良敬）

【一四七】分手位

①舊説［敕鈔五ノ十八丈］曰、分手己之左右也。　又［鈔九ノ六丈］曰、分手不可定也。有住持之分手、有後堂之分手。

＊

舊説［『敕鈔』五の十八丈］に曰く、「分手は己れが左右なり」と。　又た［『鈔』九の六丈］に曰く、「分手は定む可からず。住持の分手有り、後堂（＝後堂首座の略）の分手有り」と。

＊

○舊説［敕鈔五ノ十八丈］曰、分手己之左右也＝『勅修百丈清規抄』巻五に「分手トハ左右ナリ」（十八丁裏）とある。

○又［鈔九ノ六丈］曰…有後堂之分手＝『勅修百丈清規抄』巻九に「立僧床ハ後堂ノ分手ソ。分手ト云ハ定マイソ。住持ノ分手モアラウスホトニソ」（六丁表）とある。また文中に見える事項のうち、【三六五】「住持」に、「後堂」は【三九五】「後堂首座」として、『象器箋』に立項されている。

②　忠曰、但分手依或並向内、或竝向外者言之。若己左右班、相對向者、不稱分手。自此名垂手耳。

＊

忠曰く、「但だ分手は或いは並びに内に向かい、或いは竝びに外に向かう者に依りて之を言うのみ。若し己れが左右の班、相対向する者は、分手と称さず。自ら此れを垂手と名づくるのみ」と。

＊

○自此名垂手耳＝「垂手」は【一四八】参照。

③敕修清規［上二ノ十二丈］施主請陞座云、僧堂内設施主位、與住持分手。

＊

『敕修清規』［上二の十二丈］の「施主、陞座（＝師家が説法の時に高座に登ること）を請う」に云く、「僧堂の内に施主の位を設け、住持と分手す」と。

＊

○『敕修清規』…與住持分手＝『勅修百丈清規』巻二「施主請陞座斎僧」（T48-1123a）に全く同じ文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【五〇】「僧堂」・【三六五】「住持」は『象器箋』に立項されている。

④又［上二ノ廿四丈］請留兩序云、客頭先報。迎住持入分手坐。

＊

又た［上二の廿四丈］「留請両序（＝両班）」に云く、「客頭先報す。住持を迎えて入れて分手に坐せしむ」と。

＊

○又…迎住持入分手坐＝『勅修百丈清規』巻三（T48-1126c）に全く同じ文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【三六五】「住持」、並びに「両序」は【三八三】「東序西序」として『象器箋』に立項されている。

⑤ 忠曰、左右坐曰分手坐。今須住持主位、知事賓位。

＊

忠曰く、「左右に坐するを分手に坐すと曰う。今ま須らく住持は主位、知事（＝禅門寺院の運営責任者）は賓位なるべし」と。

＊

○忠曰…知事賓位＝【三六五】「住持」・【一四五】「主位」・【四三六】「知事」・【一四六】「賓位」は『象器箋』に立項されている。

⑥又［上二ノ卅二丈］唱衣云、首座與主喪分手、兩序大衆次第而坐。

＊

又た［上二の卅二丈］「唱衣（しょうえ）」に云く、「首座（しゅそ）は主喪と分手し、両序・大衆は次第にして坐す」と。

＊

○又…次第而坐＝『勅修百丈清規』巻三「唱衣」（T48-1129a~b）に全く同じ文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【一〇九九】「唱衣」・【五八六】「主喪」に立項されている。

（荻須慈海）

【一四八】垂手位（すいしゅい）

① 忠［敕鈔七ノ八丈云向法座、非也］曰、在主席前、東西對向。如垂左右手然。

＊

忠［『敕鈔』七の八丈に「法座に向く」と云うは非なり］曰く、「主席の前に在りて、東西に對向す。左右の手を垂らすが如く然り」と。

＊

○敕鈔七ノ八丈云向法座、非也＝無著禅師旧蔵本である駒澤大学所蔵『勅修百丈清規抄』をみると、巻七の八丁に無著禅師による書き入れが複数みられる。まず「法堂ナラハ主喪ハ法座ノ方ヘムイテ（中略）首座モ法座エムイテ」の「法座ノ方ヘムイテ」「法座エムイテ」の二箇所に傍線が付され、前者に「忠云く、此の説大いに人を誤る（忠云、此説大誤人）」との注記を施している。また、「『備用』ニ両班垂手座トアルハ、トレモ法堂エ可向歟ソ」に対して後段を抹消して「東西対向スルソ」と訂正している（「法堂」も「法座」に訂正）。以上のような無著禅師の見解が、ここでの記述に反映されていると考えられる。また文末の「然」は文末に置き、決定や強い判断の語気を表すことば。普通は訓読しないで置き字扱いにする（『漢辞海』p.877）。

②備用清規［九ノ六丈］唱衣云、主喪首座分手、兩班垂手坐。

＊

『備用清規』［九の六丈］「唱衣」に云く、「主喪と首座とは分手し、両班は垂手にして坐す」と。

＊

○備用清規［九ノ六丈］唱衣云…両班垂手坐＝『禅林備用清規』巻九「唱衣」（X63-654c）に全く同じ文章がみえる。文中の事項のうち、【一〇九九】「唱衣」・【五八六】「主喪」・【三八七】「首座」・【一四七】「分手」・【三八二】「両班」は、『象器箋』の中に立項されている

（堀　祥岳）

【一四九】對面位

敕修清規［上二ノ十六丈］山門管待新命并専使云、寢堂中、敷住持高座。専使附位于右。両序如常、列左右。勤舊對面位、侍者知事下位。

＊

『敕修清規』［上二の十六丈］の「山門管待新命并びに専使」に云く、「寢堂（＝住持の正寢の堂）の中に、住持の高座を敷く。専使（＝ある用務の為だけに派遣される使者）は位を右に附し、両序は常の如く、左右に列す。勤舊（＝退職した東序・西序など）は對面位、侍者・知事（＝禅門寺院の運営責任者）は下位なり」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十六丈］山門管待新命并専使云…侍者知事下位＝『勅修百丈清規』巻三「山門管待新命并専使」（T48-1124b）に全く同じ文章が見える。文中の【二三】「山門」・【五四六】「専使」・【四四】「寢堂」・【三六五】「住持」・【二八八】「勤舊」・【四三六】「知事」は『象器箋』に立項されており、「両序」は【三八三】「東序西序」として立項されている。

（白川邦與）

【一五〇】上板　下板

①僧堂上間板頭、下間板頭也。

＊

僧堂の上間の板頭（＝牀縁）、下間の板頭（＝牀縁）なり。

＊

○僧堂上間板頭、下間板頭也＝文中に見える事項のうち、【五〇】「僧堂」・【一五二】「上間」・【一五三】「下間」は『禅林象器箋』に立項されている。

②補僧寶傳雲巖新禪師傳云、一日默坐下板、會知事捶行者。新聞杖聲、忽大悟。

＊

『補僧寶傳』「雲巖の新禪師の傳」に云く、「一日、下板に默坐するに、會たま知事（＝禅門寺院の運営責任者）、行者を捶つ。新、杖聲を聞きて、忽ち大悟す」と。

＊

○補僧寶傳雲巖新禪師傳云…忽大悟＝舟峰庵沙門慶老撰『補禅林僧宝伝』は、覚範慧洪（一〇七一～一一二八）撰『禅林僧宝伝』三十巻の巻三〇の巻末に付録されており、「五祖演禅師」「雲巖新禅師」「南嶽石頭志庵主」の三条からなる。引用は「雲巖新禅師」条（X79-554c）に全く同じ文章が見える。その他、『禅苑蒙求拾遺』「死心甲科　晦菴状元」条も「『補僧宝伝』曰…」（X87-109c）とあり、同じ文章を『補僧宝伝』から引用している。「雲巖新」は臨済宗黄龍派の死心悟新（一〇四三～一一一四）のこと。なお【四三六】「知事」は『禅林象器箋』に立項されている。

③禪林寶訓［下廿四丈］云、萬菴曰、先師竄衡陽。賢侍者録貶詞。掲示僧堂前。衲子如失父母。涕泗愁嘆。居不遑處。音首座詣衆寮。白之曰。人生禍患。不可苟免。使妙喜。平生如婦人女子。陸沈下板。緘黙不言。故無今日之事。

＊

『禪林寶訓』［下廿四丈］に云く、「萬菴の曰く、『先師（＝大慧宗杲）、衡陽（湖南省）に竄せらる。賢侍者、貶詞を録して、僧堂の前に掲示す。衲子、父母を失うが如くにして、涕泗愁嘆す。居、處るに遑あらず。音首座、衆寮に詣して、之に白して曰く、「人生の禍患、苟に免る可からず。妙喜（＝大慧宗杲）をして平生、婦人女子の如くにして、下板に陸沈して、緘黙して言わざらしむれば、故より今日の事無けん』と」と。

＊

○禪林寶訓［下廿四丈］云…故無今日之事＝『禅林宝訓』巻三（T48-1032c）に全く同じ文章が見える。「万菴」は万庵（卍庵）道顔（一〇九四～一一六四）のこと。また、「先師」とは、万庵（卍庵）の嗣法の師である大慧宗杲（一〇八九～一一六三）のこと。「妙喜」は大慧の号。大慧は、紹興一一（一一四一）年に起こった、いわゆる「神臂弓事件」で流罪となり、湖南省衡州に、紹興二十（一一五〇）年に広東省梅州に移されるまで留まっている。「賢侍者」「音首座」は共に未詳。なお、文中に見える事項のうち、【五〇】「僧堂」・【九一】「衆寮」は『禅林象器箋』に立項されている。

④　文字禪［十ノ九丈］石臺夜坐詩云、故郷乃有此叢林。下板何妨著寂音。

＊

『文字禪』［十の九丈］「石臺夜坐の詩」に云く、「故郷に乃ち此の叢林有り。下板何ぞ妨げん寂音（＝覚範慧洪）を著くることを」と。

＊

○文字禪［十ノ九丈］石臺夜坐詩云…下板何妨著寂音＝『石門文字禪』巻一〇「石臺夜坐」第一首（J23-620c）に全く同じ文章が見える。「寂音」は『石門文字禪』の著者である覚範慧洪（一〇七一～一一二八）のこと。なお、【一】「叢林」は『禅林象器箋』に立項されている。

（森　宗圭）

【一五一】上堂　下堂

①僧堂之上間・下間也。［敕修鈔十二ノ二十六丈］

＊

僧堂の上間・下間なり。［『敕修鈔』十二の二十六丈］

＊

○僧堂之上間下間也。［敕修鈔十二ノ二十六丈］＝『勅修百丈清規抄』巻一二の二六丈裏に「上堂トハ上間ぞ。後門ノ上間ハ後堂板頭ノソバゾ。ウラカラ入ホドニ後堂床ソバカラ入ラバ、左足ヲ先ヅ入ヨ。ナゼニト云ニ、先ヅ上間ノ方ヘイクニハ順路ナリ。右足ヲ入レバ、左足ガホウタテニ、カタリ

トアタラウゾ」とある。また、「僧堂」は【五〇】に、「上間」は【一五二】に、「下間」は【一五三】に、それぞれ立項されている。

②敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云、參頭燒香、同衆大展三拜、巡堂一帀。自上堂至下堂、仍如前排立問訊。

＊

『敕修清規』［下一の卅五丈］の「大掛搭歸堂」に云く、「參頭の燒香、衆と同じく大展三拜、巡堂一帀す。上堂自り下堂に至り、仍りて前の如く排立問訊す」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云…仍如前排立問訊＝『勅修百丈清規』巻五「大掛搭帰堂」（T48-1141a）に全く同じ文章が見える。なお、文中に見える事項のうち、【四二八】「參頭」・【六一三】「燒香」・【七〇〇】「大展三拜」・【六五四】「巡堂」・【七二七】「問訊」に、それぞれ立項されている。

③又日用軌範［下一ノ四十六丈］云、在上堂、左足先入、在下堂、右足先入。［忠曰、此約僧堂後門出入、而言其左右也。］

＊

又た『日用軌範』［下一の四十六丈］に云く、「上堂に在らば、左足を先に入れ、下堂に在らば、右足を先に入る」と。［忠曰く、「此れは僧堂の後門の出入に約して其の左右を言うなり」と。］

＊

○又日用軌範［下一ノ四十六丈］云…右足先入＝『勅修百丈清規』巻六「日用軌範」（T48-1144b~c）に全く同じ文章が見える。

④禪苑清規［四ノ二丈］浴主云、入浴之法、老宿上堂、後生下堂。

＊

『禪苑清規』［四の二丈］の「浴主」に云く、「入浴の法、老宿は上堂においてし、後生は下堂においてす」と。

＊

○禪苑清規［四ノ二丈］浴主云…後生下堂＝『禪苑清規』巻四「浴主」（X63-533a）に全く同じ文章が見える。なお、「老宿」は【三〇二】に立項されている。

⑤　忠曰、此浴室、言上堂下堂也。

＊

忠曰く、「此れは浴室に、上堂・下堂を言うなり」と。

＊

○浴室＝【一〇五】に立項されている。

【一五二】上間

（廣田宗玄）

①忠曰、凡人郷堂、己身右爲上間、法堂方丈〈南向〉則東、僧堂〈東向〉則北、庫司〈西向〉則南、此曰上間。

＊

忠曰く、「凡そ人の堂に郷うに、己が身の右を上間と爲す。法堂・方丈〈南向き〉には則ち東、僧堂〈東向き〉には則ち北、庫司〈西向き〉には則ち南、此れを上間と曰う。

＊

○忠曰…此曰上間＝文中に見える事項のうち、【三六】「法堂」・【四〇】「方丈」・【五〇】「僧堂」・【四四】「庫司」は『象器箋』の中に立項されている

②　敕修清規大掛搭歸堂云、維那入堂燒香上間立。

＊

『敕修清規』の「大掛搭歸堂」に云く、「維那、堂に入りて燒香して上間に立つ」と。

＊

○敕修清規…維那入堂燒香上間立＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1141a）に全く同じ文章が見える。なお文中に見える事項のうち、【五二五】「維那」・【六一三】「燒香」は『象器箋』の中に立項されている。

（佐野泰典）

【一五三】下間

①忠曰、凡人郷堂、己身左爲下間。法堂方丈、則西、僧堂則南、庫司則北、此曰下間。

＊

忠曰く、「凡そ人の堂に郷うに、己れが身の左を下間と爲す。法堂・方丈には則ち西、僧堂には則ち南、庫司には則ち北、此れを下間と曰う。

＊

○忠曰…此曰上間＝文中に見える事項のうち、【三六】「法堂」・【四〇】「方丈」・【五〇】「僧堂」・【四四】「庫司」は『象器箋』の中に立項されている

②敕修清規[上二ノ四丈]告香云、參頭領衆、法堂下間、謝維那侍者、觸禮一拜。

＊

『敕修清規』[上二の四丈]の「告香」に云く、「參頭（＝新到の中から選ばれた、旧参で礼楽に通じた者）、衆を領して、法堂の下間に維那・侍者を謝し、觸禮（＝坐具を展べずに手に持ち、地面に置いて行う礼拝法）一拜す」と。

＊

○敕修清規[上二ノ四丈]告香云…觸禮一拜＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1120b）に全く同じ文章が見える。なお文中に見える事項のうち、【四二八】「參頭」・【三六】「法堂」・【五二五】「維那」・【七〇九】「触礼」・【七一〇】「触礼一拜」は『象器箋』の中に立項されている。

③　校定清規書之云、衆人隨參頭、於法堂西北角、謝維那侍者、觸禮一拜。

＊

『校定清規』に之を書して云く、「衆人、參頭（＝新到の中から選ばれた、旧参で礼楽に通じた者）に隨い、法堂の西北の角に於いて、維那・侍者を謝し、觸禮一拜す」と。

＊

○校定清規書之云…觸禮一拜＝『叢林校定清規總要』卷二（X63-607 c）に全く同じ文章が見える。なお文中に見える事項のうち、【四二八】「參頭」・【三六】「法堂」・【五二五】「維那」・【七〇九】「触礼」・【七一〇】「触礼一拜」は『象器箋』の中に立項されている。

（藤原良敬）

【一五四】左間　右間

①敕修清規受法衣云、嗣法師、已遷化、法堂右間設靈几。

＊

『敕修清規』の「受法衣」に云く、「嗣法の師、已に遷化せば、法堂の右間に靈几を設く」と。

＊

○敕修清規受法衣云…法堂右間設靈几＝『勅修清規』巻二（T48-1122b）に全く同じ文章が見える。【三六】「法堂」は『象器箋』の中で立項されている。

②忠曰、右間即下間也。身南面鄉堂外時、右邊爲下間。故言右間也。〈法堂則西也。〉反之、可上間言左間也已。

＊

忠曰く、「右間は則ち下間（＝堂に向かって左側）なり。身、南面して堂外に鄉う時、右邊を下間と爲す。故に右間と言うなり。〈法堂には則ち西なり。〉之に反すれば、上間（＝堂に向かって右側）を左間と言う可きなるのみ」と。

＊

○忠曰…可上間言左間也已＝文中に見える事項のうち、【一五三】「下間」・【一五二】「上間」は『象器箋』の中で立項されている。

（荻須慈海）

【一五五】上肩　下肩

①忠曰、己之上位爲上肩、己之下位爲下肩、不拘己之左右矣。譬如東序人、以佛座爲上、則其在己之右肩者爲上肩、在己之左肩者爲下肩。

＊

忠曰く、「己れが上位を上肩と爲し、己れが下位を下肩と爲し、己れが左右に拘わらず。譬えば東序の人の如き、佛座を以て上と爲せば、則ち其の己れが右肩に在る者を上肩と爲し、己れが左肩に在る者を下肩と爲す」と。

＊

○忠曰…在己之左肩者爲下肩＝「上肩下肩」については、「呼称門」の【三五九】、「身肢門」の【五九五】「上肩」・【五九六】「下肩」にも見え、「東序」は【三八三】に見える。

②敕修清規［上二ノ六丈ウ］念誦云、暫到於侍者下肩立。　又［下一ノ十八丈左］兩序交代茶云、西序請茶、則知事分手座、於同列頭首中、請肩下一人光伴。如肩上人赴坐位相妨。　又［下一ノ卅八丈左］謝挂搭云、參頭立於侍者下肩。　又［下一ノ四十八丈右］日用軌範云、聞徧食椎看上下肩、以面相朝揖食。〈此與上肩順轉之上肩別。〉

＊

『敕修清規』［上二の六丈ウ］「念誦」に云く、「暫到（＝暫時に某寺に留まる僧）は侍者の下肩（＝下位）に於いて立つ」と。　又た［下一の十八丈左］「兩序交代の茶」に云く、「西序、茶に請せば、則ち知事（＝禅門寺院の運営責任者）の分手座（＝主席の左右の座位）、同列の頭首（＝西序に位置する叢林の熟達者）の中に於いて、肩下（＝下位）一人を請じて光伴（＝同席）す。如し肩上（＝上位）の人赴けば、坐位相い妨ぐ」と。　又た［下一の卅八丈左］「謝挂搭」に云く、「參頭（＝新到の中から選ばれた、旧参で礼楽に通じた者）は侍者の下肩（＝下位）に於いて立て」と。　又た［下一の四十八丈右］「日用軌範」に云く、「徧食椎（＝食事の給仕が完了した合図の槌）を聞きて上下肩を看れば、面を以て相い朝して（＝向かい合う）食を揖る」と。〈此れ「上肩順轉」の「上肩」と別なり。〉

＊

○敕修清規［上二ノ六丈ウ］念誦云…下肩立＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1121a）に全く同じ文章が見える。
○又［下一ノ十八丈左］兩序交代茶云…坐位相妨＝『勅修百丈清規』巻四（T48-1136a）に全く同じ文章が見える。
○又［下一ノ卅八丈左］謝挂搭云…侍者下肩＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1142a）に全く同じ文章が見える。
○又［下一ノ四十八丈右］日用軌範云…揖食＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1145a）に全く同じ文章が見える。ただし、「徧」は「遍」に作る。
○文中に見える事項のうち、「暫到」は【三二七】に、「両序」は【三八三】「東序西序」として、「知事」は【四三六】に、「分手位」は【一四七】に、「分手座」は【七八七】に、「頭首」は【三八四】に、「肩上・肩下」は【三六〇】に、「謝掛搭」は【六七七】に、「參頭」は【四二八】に、「上肩順転」は【七九二】に見える。

③　若己身左爲上肩。右爲下肩。別見身肢門。

＊

若しくは己身の左を上肩（＝上位）と爲し、右を下肩（＝下位）と爲るは、別に「身肢類」に見えたり。

＊

○若己身左爲上肩…別見身肢門＝「身肢類」は、『象器箋』巻八に含まれる。「上肩」は【五九五】に、「下肩」は【五九六】に見える。

（堀　祥岳）

【一五六】肩次

①下肩也。下位也。

下肩なり。下位なり。

＊

○下肩也。下位也＝【五九六】「下肩」は『象器箋』の中に立項されている。

＊

②敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云。副參趲向前。接聯參頭肩次。伺住持至。

＊

『敕修清規』［下一の卅八丈］「謝掛搭」に云く、「副參（＝參頭の補佐）、趲じて（＝急いで）向前して、參頭（＝新到の中から選ばれた、旧参で礼楽に通じた者）の肩次（＝下位）に接聯（＝連なる）して、住持の至るを伺う」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云・・・伺住持至＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1142a）に同文が見える。文中の【六七七】「謝掛搭」・【四三〇】「副參」・【五六五】副參・【四二八】「參頭」・【五六四】「參頭行者」は『象器箋』に立項されている。

（白川邦與）

【一五七】上手　下手

①敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云、參頭居末至衆寮門外、下手立。〈云云。〉參頭門外轉上手立。　又［上二ノ廿九丈］住持遷化、掛眞擧哀云、有親書遺言、喪司行者貼法堂中間上手幙上。

＊

『敕修清規』［下一の卅八丈］「謝掛搭」に云く、「參頭（＝新到の中から選ばれた、旧参で礼楽に通じた者）は末に居して衆寮の門外に至り、下手に立つ。〈云云。〉參頭は門外に上手に轉じて立つ」と。　又た［上二の廿九丈］「住持遷化、掛眞（＝没後に制作された頂相のこと）擧哀（＝葬儀終了後、参集僧が悲しみを表現すること）」に云く、「親書・遺言有らば、喪司の行者は、法堂の中間、上手の幙（＝幕）の上に貼すべし」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云…參頭門外轉上手立＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1142a）に「參頭居末、至衆寮門外、下手立。副參引衆、從右辺入寮内下間、旋転量衆多寡。不拘行転、副參趲向前、接聯參頭肩次、伺住持至、与衆俱迎問訊、転入寮内。衆当前後相顧、成行進退歩趨。參頭転身、至炉前対、触礼一拜。詞云、〈移刻恭惟、堂頭和尚尊候起居多福。某等重荷収録。礼合拜謝茲蒙降尊。下情不勝感激之至。〉衆同送出。參頭門外転上手立」とある。文中に見える事項のうち、【六七七】「謝掛搭」・【六七三】「掛搭」・【四二八】「參頭」・【九一】「衆寮」は『象器箋』の中に立項されている。

○又［上二ノ廿九丈］住持遷化、掛眞擧哀＝『勅修百丈清規』巻三（T48-1128b）に「移龕就法堂、鎖龕已、請掛真仏事。畢如有親書遺言、侍者捧呈主喪人及首座大衆云、〈堂頭和尚臨終遺言、呈似首座大衆。〉主喪人、躬接遞与首座。以所書、香炉上熏、授維那読過。喪司行者、貼法堂中間上手幕上」とある。文中に見える事項のうち、【三六五】「住持」・【一〇六六】「遷化」・【一〇七二】「掛真」・【一〇七三】「挙哀」・【五八九】「喪司行者」・【三六】「法堂」は『象器箋』の中に立項されている。

②備用清規結制行禮云、巡寮〈云云。〉庫司、蒙堂、前資、衆寮、列門外下手立、接住持入。

＊

『備用清規』［三の十二丈］「結制行禮（＝制中に入るにあたり行う儀式）」に云く、「巡寮（＝住持が山内の諸寮を点検して回ること）〈云云。〉庫司（＝庫院［台所や備品庫］にて寺務を行う役職）・蒙堂（＝勤旧退職の者が安息する場所。またはそれを管理する役職）・前資（＝以前寺院の運営を補佐したものの敬称）・衆寮（＝修行僧が経や語録を読み、修行を深める自習用の場所。またはそこを管理する役職）は門外の下手に列なりて立ち、住持を接して入る」と。

＊

○備用清規結制行禮云…接住持入＝『禅林備用清規』巻三（X63-633c）に「次第俟巡寮、侍者設椅卓於法堂上間、鳴方丈板三下、住持出従東廊巡至西。候至寮前、粛入挿香、住持答香、送出。聴叫収所挿香、即移香几於門前。随後接巡去、侍者小師、寮内不当答香。庫司・蒙堂・前資・衆寮、列門外下手立」とある。文中に見える事項のうち、【六一八】「結制」・【六五六】「巡寮」・【四四四】「庫司」・【八六】【二九〇】「蒙堂」・【二九二】「前資」・【九一】「衆寮」は『象器箋』の中に立項されている。なお、『禅林備用清規』は【四三】「輪蔵」に既出。

（森　宗圭）

【一五八】左手　右手

①敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云、參頭退左足、側轉身、於香几右手空處出、行過復位。

＊

『敕修清規』［下一の卅八丈］の「謝掛搭」に云く、「參頭（＝新到の中から選ばれた、旧参で礼楽に通じた者）、左足を退けて、身を側轉し、香几（＝香炉などを載せる机）の右手の空處に於いて出でて、行き過ぎて位に復る」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云…行過復位＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1141a）に「参頭進住持前稟云（請和尚趺坐）、退左足側転身、於香几右手空処出、行過復位」とある。文中に見える事項のうち、【六七七】「謝掛搭」・【六七三】「掛搭」・【四二八】「参頭」は『象器箋』の中に立項されている

②　忠曰、反之、可言左手也。

＊

忠曰く、「之に反して、左手と言う可し」と。

（廣田宗玄）

【一五九】團座　合座

［敕修鈔十一ノ廿六丈ウ。古鈔有圖］圓形坐者、此名團座。圓形坐而開一方者、此名合座。　此圖、見敕修清規雲桃解方丈特爲新掛搭茶處。

＊

［敕修鈔十一ノ廿六丈ウ。古鈔に有圖］圓形に坐する者、此れを團座と名づく。圓形に坐して一方を開く者、此れを合座と名づく。　此の圖、『敕修清規』の『雲桃解』、「方丈特爲新掛搭の茶」の處に見ゆ。《図は省略》

＊

○圓形坐者、此名團座…此名合座［敕修鈔十一ノ廿六丈ウ。古鈔有圖］＝『勅修百丈清規鈔』巻一一・二十六丈裏に「マンマル居ヲハ円座ト云ソ。又マンマルニ居テ、入リロハカリアケタヲハ合座ト云ソ」とある。割り注の中の「古鈔」は不明。

○此圖見敕修清規雲桃解方丈特爲新掛搭茶處＝「雲桃解」は『百丈清規雲桃抄（＝勅修百丈清規鈔）』のことであろうか。ただし、『勅修百丈清規鈔』にはこの図は見えない。

（佐野泰典）

【一六〇】第一座　第二座

①饗禮第一筵、謂之第一座、第二筵、謂之第二座。

＊

饗禮（＝客を招待して饗応する礼式）の第一筵を、之を第一座と謂い、第二筵を、之を第二座と謂う。

②敕修清規［上一ノ卅八丈］嗣法師忌云、如有三五人西堂、則分作兩座。第一座西堂喫湯、住持行禮。第二座兩序喫湯、侍者行禮。

＊

『敕修清規』［上一の卅八丈］「嗣法師忌」に云く、「如し三五人の西堂（＝叢林で他山の前住の人）有らば、則ち分けて兩座と作す。第一座は西堂喫湯（＝叢林における茶湯の行礼で湯を喫すること）、住持行禮（＝堂頭和尚が主宰して喫茶の席を設けること）。第二座は兩序（＝両班に同じ）喫湯、侍者行禮なり」と。

＊

○敕修清規［上一ノ卅八丈］嗣法師忌云…侍者行禮＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1119a）に全く同じ文章が見える。なお文中に見える事項のうち、【九六五】「嗣法師忌」・【二八一】「西堂」は『象器箋』の中に立項されている。

（藤原良敬）

【一六一】小座湯二出座　四出座　六出座（小座湯の二出座　四出座　六出座）

①『敕修清規』［下二ノ八丈］方丈小座湯云、四節講行、按古有三座湯。第一座分二出。特爲東堂西堂。請首座光伴。第二座、分四出。頭首一出、知事二出、西序勤舊三出、東序勤舊四出。西堂光伴。第三座位、多分六出。本山辦事、諸方辦事、隨職高下分座。職同者次之。首座光伴。

＊

『敕修清規』［下二ノ八丈］「方丈の小座湯（＝方丈で住持が便宜に茶を振る舞う儀式）」に云く、「四節（＝結夏・解夏・冬至・年朝の四つの節目）の講行は、古を按ずるに三座湯有り。第一座は二出に分かつ。東堂・西堂に特爲（＝特別に行う）す。首座を請じて光伴す（＝列席させる）。第二座は四出に分かつ。頭首（＝西序に位置する叢林の熟達者）は一出、知事（＝寺院の運営責任者）は二出、西序の勤舊（＝知事退職者）は三出、東序の勤舊は四出。西堂（＝他山の前住職）光伴す。第三座位は、多くは六出に分かつ。本山の辦事（＝山内の雑務に住従事する人。ここは本寺の知事退職者）、諸方の辦事、職の高下に隨いて分座す。職同じき者は之に次ぐ。首座光伴す」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云…行過復位＝『勅修百丈清規』巻七（T48-1152b）に全く同じ文章が見える。文中に見える事項のうち、【四〇】「方丈」・【一三五九】「小座湯」・【一六五】「四節」・【二七九】「東堂」・【二八一】「西堂」・「【六五二】「光伴」・【三八四】「頭首」・【四三六】「知事」・【三八三】「東序西序」・【二八八】「勤旧」・【四六七】「辨事」・【八四九】「分座」は『象器箋』の中に立項されている

②　忠曰、出者特也。蓋取首出傑特之義。

＊

忠曰く、「出とは特なり。蓋し首出傑特の義に取る」と。

③　正字通［子下四十二丈］云、出特也。過人之稱徐穉傳、角立傑出宜穉爲先。

＊

『正字通』［子の下四十二丈］に云く、「出は特なり。人に過ぎたるの稱なり。徐穉が傳に、『角立傑出、宜しく穉を先と爲すべし』と」と。

＊

○正字通［子下四十二丈］云、出特也。過人之稱徐穉傳、角立傑出宜穉爲先＝『正字通』「子集」の「出」の項に「出又特也。過人之称徐穉傳、角立傑出宜穉為先」とある。『正字通』十二巻は明の張自烈撰。「子」とあるのは、十二巻を十二支に割り振って表記しているからで、つまり第一巻のこと。文中の「徐穉伝」からの引用は、もともと『後漢書』巻五三「徐穉」条に「至於穉者、爰自江南卑薄之域、而角立傑出、宜当為先」（中華書局校点本・p.1747）とあるのに拠る。

④　［敕修鈔十四ノ廿二丈］凡幾出者、皆除主位、及光伴位、而論之。

＊

［『敕修鈔』十四の廿二丈］凡そ幾たび出とは、皆な主位、及び光伴位を除きて之を論ず。

＊

○［敕修鈔十四ノ廿二丈］凡幾出者…而論之＝『勅修百丈清規鈔』巻一四・二十二丁裏に「幾出ト云ニハ主位ト光伴トヲハ除ト云ソ」とある。

⑤　［敕修鈔十四ノ廿五丈］

＊

［『敕修鈔』十四の廿五丈］　《図は省略》

＊

○［敕修鈔十四ノ廿五丈］＝『勅修百丈清規鈔』巻一四・二十五丁表から裏に、以下の図を載せる。

（廣田宗玄）

【一六三】特爲茶六出

校定清規［敕修鈔四ノ十九丈。同十一ノ廿六丈］夏前。住持特爲新掛搭茶、六出之圖。

＊

『校定清規』［『敕修鈔』四の十九丈。同十一の廿六丈］夏前。住持特爲新掛搭の茶、六出の圖。

《図は省略》

＊

○校定清規…六出之圖＝『叢林校定清規総要』巻上「十 夏前住持特為新挂搭茶六出坐位之図」（X 63-594c）にほぼ同じ図が見え、また『勅修百丈清規鈔』巻四・十九丁表にも、ほぼ同じ図が見える。文中の【三六五】「住持」・【六七三】「掛搭」・【一三四九】「特為茶」は『象器箋』に立項されている。なお、以下に『勅修百丈清規鈔』巻四の図を載せる。

（白川邦與）

【一六四】特爲茶八出座

校定清規［敕修鈔十一ノ廿十八丈］、知事、頭首、特爲新掛搭茶、八出之圖。

＊

『校定清規』［『敕修鈔』十一の廿十八丈］知事（＝寺院を運営する東序の役職名）・頭首（＝西序に位置する叢林の熟達者）、特爲（＝特別の）新掛搭の茶、八出の圖。

《図は省略》

＊

○校定清規…八出之圖＝『勅修百丈清規鈔』巻一一・二十八丁裏にそのまま見える。文中に見える事項のうち、【四三六】「知事」・【三八四】「頭首」・【六七三】「掛搭」は『象器箋』の中に立項されている。なお、以下に『勅修百丈清規鈔』巻十一の図を載せる。

禪林象器箋巻第三

神京妙心龍華沙懣道忠無著甫輯

（森　宗圭）

○節時類

【一六五】四節

※「四節」は、西村惠信『禅林象器箋抄釈』（禅文化研究所・p.43）に抄訳がある。

①結夏、解夏、冬至、年朝、謂之四節。

＊

結夏（＝四月十五日）、解夏（＝七月十五日）、冬至、年朝（＝年始）、之を「四節」と謂う。

②義堂日工集［二ノ六十丈。○敕鈔十四ノ六丈、意同。］云、凡稱四節、乃百丈叢林也。結解則天竺佛制。冬年則中華俗節。百丈以隨方毘尼、禮貴同俗、遂有四大節之儀。

＊

義堂『日工集』［二の六十丈。○『敕鈔』十四の六丈、意同じ。］に云く、「凡そ『四節』と稱するは、乃ち百丈の叢林（＝『百丈清規』）なり。結（＝結夏）・解（＝解夏）は則ち天竺（＝インド）の佛制にして、冬（＝冬至）・年（＝年朝）は則ち中華の俗節なり。百丈（＝百丈懐海）、隨方（＝地域差に随うの意。通方の反対）の毘尼を以て、禮は俗に同じうすることを貴び、遂に四大節の儀有り」と。

＊

○義堂日工集［二ノ六十丈。○敕鈔十四ノ六丈、意同。］云…遂有四大節之儀＝「日工集」とは、義堂周信（一三二五～一三八八）の日記『空華日用工夫略集』のこと。全四十八巻は既に失われ、現存するのは略本四巻である。『空華日用工夫略集』巻二の「永和五年己未　正旦」条に同文が見える。蔭木英雄『訓注　空華日用工夫略集』（思文閣出版・一九八二・p.193）参照。また、雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』巻一四の六丁表・裏（万治三年刊本）に、同様の記述が見える。『勅修百丈清規雲桃鈔』は、万治三年刊本が、駒澤大学禅籍善本図録で公開されている。

③校定清規［敕鈔四ノ十二丈引。］云、今時叢林、毎遇解結冬年四節小参。蓋爲敍謝兩班及大小職務。

＊

『校定清規』［『敕鈔』四の十二丈に引く。］に云く、「今時の叢林、解・結・冬・年の四節に遇う毎に小参（＝住持が随時・随処で衆僧に対して説法すること）す。蓋し兩班及び大小の職務に敍謝せんが爲なり」と。

＊

○校定清規［敕鈔四ノ十二丈引。］云…蓋爲敍謝兩班及大小職務＝『叢林校定清規総要』巻下「上堂普説小参」条（X63-607a）に全く同じ文章が見える。『勅修百丈清規雲桃鈔』巻五の十二丁表（万治三年刊本）に、「今時叢林…大小職務」の同文が見える。

④敕修清規［下二］節臘章云、今禪林結制、以四月望、解以七月望者。若先一日、講行禮儀。〈乃至〉中土以冬爲一陽之始、歳爲四序之端。物時維新。人情胥慶。禮貴同俗。化在隨宜。故以結解冬年爲四大節。周旋規矩、聳觀龍象之筵、主賓唱酬、兼聞獅子之吼。

＊

『敕修清規』［下二］「節臘」の章に云く、「今、禪林の結制は、四月望（＝十五日）を以てし、解は七月望を以てする者なり。若しくは先だつこと一日、禮儀を講行せんと〔する〕なり。〈乃至〉中土（＝中国）は、冬を以て一陽の始めと爲し、歳を四序の端と爲す。物時、維れ新たなり。人情、胥い慶す。禮は俗に同じからんことを貴ぶ。化は宜しきに隨うに在り。故に結・解・冬・年を以て四大節と爲す。周旋規矩、観るものを龍象の筵に聳し、主賓唱酬、兼ねて獅子の吼を聞く」と。

＊

○敕修清規［下二］節臘章云…兼聞獅子之吼＝『敕修百丈清規』巻七「節臘章第八」（T48-1150a~b）に見える文章であるが、「乃至」で中略されているのは、「而期内得専志於道。故略繁文、亦隨方毘尼。或議不如法、而不知其得法外意也」の三十一字である。

⑤杜氏通典［七十ノ六丈］云、漢高帝、十月定秦。遂爲歳首、七年長樂宮成。制諸侯羣臣朝賀儀。又云［七丈］、後漢歳首正月、爲大朝受賀。

＊

『杜氏通典』［七十の六丈］に云く、「漢の高帝（＝高祖劉邦）、十月に秦（＝秦朝）を定む（＝平定する）。遂に歳首と為し、七年（＝高祖七年・紀元前二〇〇年）に長樂宮（＝前漢の都、長安にあった宮殿）成る。諸侯・羣臣の朝賀の儀（＝皇帝が元日の朝に皇太子以下の文武百官の拝賀を受ける行事）を制す」と。又た云く［七丈］、『『後漢』に『歳首正月、大朝を爲して賀を受く』と」と。

＊

○杜氏通典［七十ノ六丈］云…為大朝受賀＝杜佑（七三五～八一二）が編纂した『杜氏通典』に同様の文章が見られるが、筑波大学貴重書コレクション本では「七十の六丈」ではなく、「七十の五丈」に同文が見られる。『通典』に引用されている「後漢」とは、『後漢書』のこと。『後漢書』巻一五《志・礼儀中》「朝会」に「毎歳首正月、為大朝受賀」（中華書局校点本・p.3130）とある。

⑥居家必用［辛ノ廿二丈］引之云、賀正名、自此始。

＊

『居家必用』［辛の廿二丈］之を引きて云く、「『正を賀する（賀正）』の名、此れ自り始まる」と。

＊

○居家必用［辛ノ廿二丈］引之云、賀正名、自此始＝『居家必用字類全集』が、国立国会図書館デジタル化資料で公開されている。巻一五「辛集」二二丁表「聖節」の項目に、⑤の『通典』の文章が引用されており、続いて「其名自此始」と記されている。

⑦ 居家必用［辛ノ廿二丈］云、賀冬、漢雑事曰、冬至陽生。君道長。故賀也。

＊

『居家必用』［辛の廿二丈］に云く、「冬を賀するは、『漢雑事』に曰く、『冬至、陽生ず。君道、長ず。故に賀するなり』と」と。

＊

○居家必用［辛ノ廿二丈］云…君道長故賀也＝『居家必用字類全集』巻一五「辛集」二二丁表「聖節」の項目に同文が見える。『漢雑事』については不明。『旧唐書』巻四六「経籍上」（中華書局校点本・p.1995）や『新唐書』「芸文二」（同・p.1464）に見える『後漢雑事』十巻のことか。

⑦ 杜氏通典［七十ノ十三丈］云、大唐開元八年十一月、中書門下奏曰、伏以、冬至一陽始生、萬物潜動。所以自古、聖帝明王、皆此日、朝萬國、觀雲物。禮之大者、莫逾是時。〈云云。〉從之因敕。自今以後、冬至日、受朝。永為恒式。

＊

『杜氏通典』［七十の十三丈］に云く、「大唐開元八（七二〇）年十一月、中書門下奏じて曰く、『伏して以れば、冬至、一陽始めて生じ、萬物潜かに動ず。所以に古自り、聖帝明王、皆な此の日に、萬國を朝し、雲物（＝雲の色や変異のこと）を觀る。禮の大なる者、是の時に逾ゆる莫し。〈云云。〉之に從り、因りて敕す。今自り以後、冬至の日、朝を受けん。永く恒式と為さん』と」と。

＊

○杜氏通典［七十ノ十三丈］云…永為恒式＝『杜氏通典』は、筑波大学貴重書コレクションで公開されている。『象器箋』は「七十の十三丈」と記すが、筑波大学所蔵本では「七十の十一丈」に見える文章である。また、筑波大学所蔵本では、「伏以冬至一陽始生」の「生」字が無く、「皆此日朝萬國」の「國」を「朝」に作る。また、「禮之大者莫逾是」の個所は、「禮之者大莫逾是」となっており、「自今以後冬至日受朝」の「冬至日」は、「冬至」となっていて「日」字が無い。

（千坂成也）

【一六六】夏安居

※「夏安居」は、西村惠信『禅林象器箋抄釈』（禅文化研究所・p.44）に抄釈がある。

①安居義、見于叢軌類。

＊

安居の義は、「叢軌類」に見ゆ。

＊

○安居義、見于叢軌類＝『象器箋』巻九「第九類叢軌門」の【六一七】「安居」参照。

②四分律藏［三十七ノ一丈］安居捷度法云、佛在舍衛國祇樹給孤獨園時、六群比丘、於一切時春夏冬、人間遊行。時夏月、天暴雨、水大漲、漂失衣鉢坐具針筒、蹈殺生草木。時諸居士見、皆共譏嫌、沙門釋子不知慙愧。蹈殺生草木、自言、我知正法。如是何有知正法。〈乃至〉諸外道法、尚三月安居。此諸釋子、而於一切時春夏冬、人間遊行〈云云〉。諸比丘、以此因縁、具白世尊。世尊以無數方便、訶責六群比丘已、告諸比丘、從今已去、聽諸比丘三月夏安居。白所依人言、我於此處夏安居。長老一心念、我比丘某甲、依某甲聚落、某甲僧伽藍、某甲房、前三月夏安居。房舎破修治故。如是第二第三説、後三月夏安居法亦如是。

＊

『四分律藏』［三十七の一丈］の「安居捷度法」に云く、「佛、舍衛國の祇樹給孤獨園（＝祇園精舎）に在ます時に、六群比丘（＝六人の威儀正しからざる比丘衆）、一切時の春夏冬に於いて、人間に遊行す。時に夏月、天、暴雨にして、水、大いに漲りて、衣鉢・坐具・針筒を漂失し、生草木を蹈殺す。時に諸もろの居士は見て、皆な共に譏嫌すらく、『沙門釋子は、慙愧を知らず。生草木を蹈殺するも、自ら言く、「我れ正法を知る」と。是くの如くにして、何ぞ正法を知ることか有らん。〈乃至〉諸もろの外道の法すら、尚お三月安居す。此の諸もろの釋子、而るに一切時の春夏冬に於いて、人間に遊行す〈云云〉』と。諸もろの比丘、此の因縁を以て、具に世尊に白す。世尊、無數の方便を以て、六群比丘を訶責し已わり、諸もろの比丘に告ぐ、『今ま從り已去、諸もろの比丘に三月（＝九十日間）の夏安居を聽す。所依の人に白して言え、「我れ此の處に於いて夏安居せん」と。長老、一心に念じたまえ、「我れ比丘某甲、某甲の聚落、某甲の僧伽藍、某甲の房に依り、前三月（＝四月十六日から七月十五日まで）夏安居せん。房舎破れば修治するが故に」と』と。是くの如く第二、第三説く。後三月（＝五月十六日から八月十五日まで）の夏安居の法も亦た是くの如し」と。

＊

○四分律藏［三十七ノ一丈］安居捷度法云…後三月夏安居法亦如是＝『四部律』巻三七「安居捷度」（T22-830b~c）に同様の文を確認することができるが、「乃至」で「於一切時春夏冬、人間遊行、夏天暴雨水大漲、漂失衣鉢坐具針筒、蹈殺生草木断他命根」という一文が中略されているほか、全体にわたって省略や表現の変更が見られる。「六群比丘」とは、「仏弟子のうち、常に一群となって修行僧にふさわしからぬ事を行ない、そのために制戒の因縁となった六人の悪行比丘のこと」（『中村』p.1450）。「針筒」とは、「針を入れる筒。比丘は自分の袈裟を自ら縫うべきであるから、釈尊がまだ世にあった時、すでにこれを所持することを許可した」（同・p.779）。

③　又見安居處。

＊

又た安居の處に見ゆ。

＊

○又見安居處＝『象器箋』巻九「第九類叢軌門」の【六一七】「安居」参照。

④西域記［二ノ三丈］云、如來聖教、歳爲三時。正月十六日至五月十五日、熱時也。五月十六日至九月十五日、雨時也。九月十六日至正月十五日、寒時也。　又云、印度僧徒、依佛聖教、坐雨安居。或前三月、或後三月。前三月、當此從五月十六日至八月十五日。後三月、當此從六月十六日至九月十五日。前代譯經律者、或云坐夏、或云坐臘。斯皆邊裔殊俗、不達中國正音、或方言未融、而傳譯有謬。

＊

『西域記』［二の三丈］に云く、「如來の聖教には、歳を三時と爲す。正月十六日より五月十五日に至るまでは、熱時なり。五月十六日より九月十五日に至るまでは、雨時なり。九月十六日より正月十五日に至るまでは、寒時なり」と。　又た云く、「印度の僧徒は、佛の聖教に依り、雨安居に坐す。或いは前三月、或いは後三月なり。前の三月は、此の五月十六日從り八月十五日に至るに當たる。後の三月は、此の六月十六日從り九月十五日に至るに當たる。前代の經律を譯する者、或いは「坐夏」と云い、或いは「坐臘」と云う。斯れ皆な邊裔（＝辺境）の俗（＝習俗）を殊にすれば、中國の正音に達せず、或いは方言、未だ融ずして、傳譯に謬有るなり」と。

＊

○西域記［二ノ三丈］云…而傳譯有謬＝「如来聖教…寒時也」「印度僧徒…而伝訳有謬」については、『大唐西域記』巻二（T51-876a）にそれぞれ同文が見える。水谷真成訳『大唐西域記』（《中国古典文学大系22》平凡社・一九七一・p.58~59）参照。「坐夏」とは、「夏の雨季九十日間、諸の修行者が一か所に定住して修行すること。安居に同じ」（『中村』p.441）、「坐臘」には、「出家して具足戒を受けた後の年数（法臘）」の意味もあるが、「坐夏」という意味もある（『中村』p.441）。

⑤又［八ノ廿九丈］云、印度僧徒、依佛聖教、皆以室羅伐拏月前半一日、入雨安居。當此五月十六日。以頞濕縛庾闍月後半十五日、解雨安居。當此八月十五日。印度月名依星而建。古今不易、諸部無差。良以方言未融、傳譯有謬、分時計月、致斯乖異。故以四月十六日入安居、七月十五日解安居也。

＊

又た［八の廿九丈］云く、「印度の僧徒、佛の聖教に依りて、皆な室羅伐拏月（＝Śravaṇa・シラーヴァナ・インド暦の第五月）の前の半ばの一日を以て、雨安居に入る。此の五月十六日に當たる。頞濕縛庾闍月（＝Aśvayuja・アシュバユジャ・インド暦の第七月）の後の半ばの十五日を以て、雨安居を解く。此の八月十五日に當たる。印度の月の名は星に依りて建つ。古今易わらず、諸部、差うこと無し。良に以みれば、方言未だ融わず、傳譯に謬り有り、時を分かち月を計うるに、斯の乖異を致す。故に四月十六日を以て安居に入り、七月十五日に安居を解くなり」と。

＊

○又［八ノ廿九丈］云…七月十五日解安居也＝『大唐西域記』巻八末尾（T51-918c）に同文が見える。水谷真成訳『大唐西域記』（p.275）参照。

⑥善見律［十七ノ十二丈］云、梵本律、五月十六日爲前安居、六月十六日後安居。若安居中、有因縁、移去無罪。不成安居。

＊

善見律［十七の十二丈］に云く、「梵本の律に、五月十六日を前安居と為し、六月十六日を

後安居とす。若し安居の中に、因縁有りて、移り去るは罪無し。安居を成ぜず」と。

＊

○善見律［十七ノ十二丈］云…不成安居＝『善見律毘婆沙』巻一七（T24-793b）に同文が見える。

⑦行事鈔［上四ノ二丈］安居策修篇云、律通制三時。意存據道。文偏約夏月、情在三過。一無事遊行、妨修出業。二損傷物命、違慈寔深。三所為既非、故招世謗。以斯之過、教興在茲。　又云、春冬過少。〈又見叢軌類安居處。〉

＊

『行事鈔』［上四の二丈］の「安居策修」の篇に云く、「律には通じて三時を制す。意、道に據ることを存す。文に偏えに夏月に約することは、情、三の過（＝あやまち）に在り。一には事無うして遊行すれば、出業を修することを妨ぐ。二には物命を損傷すれば、慈に違すること寔に深し。三には所為既に非なり。故に世の謗りを招く。斯の過を以て、教の興こり茲に在り」と。　又た云く、「春冬は過少なし」と。〈又た「叢軌類」の「安居」の處に見ゆ。〉

＊

○行事鈔［上四ノ二丈］安居策修篇云…春冬過少＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上の四「安居策修篇第十一」にそれぞれ「律通制三時…教興在茲」（T40-38a）、「春冬過少」（38b）の文章が見える。末尾の割り注については、『象器箋』巻九「第九類叢軌門」の【六一七】「安居」参照。

⑧忠曰、三時春夏冬也。天竺立三時、盡一年。故一時各有四箇月。

＊

忠曰く、「三時は春夏冬なり。天竺には三時を立てて、一年を盡くす。故に一時に各おの四箇月有り」と。

⑨又［上四ノ八丈］云、初四月十六日是前安居。十七日已去至五月十五日名中安居。五月十六日名後安居。故律中有三種安居、謂前中後也。〈又見叢軌類安居處。〉

＊

又た［上四の八丈］云く、「初めの四月十六日は是れ『前安居』なり。十七日より已去、五月十五日に至るまでを『中安居』と名づく。五月十六日を『後安居』と名づく。故に律の中に三種の安居有り。謂く、前・中・後なり」と。〈又た「叢軌類」の「安居」の處に見ゆ。〉

＊

○又［上四ノ八丈］云…謂前中後也＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上の四「安居策修篇第十一」（T40-38b）に同文が見える。末尾の割り注については、『象器箋』巻九「第九類叢軌門」の【六一七】「安居」参照。

⑩忠曰、事鈔［上四ノ二ノ七丈］安居篇資持記云、一時四月、約過是同。〈止此。〉按西域記、自五月十六日、至九月十五日、都四箇月爲雨時、乃佛教立三時。然即前安居者開後一月、以五月十六日結、至八月十五日解。然事鈔云、前安居自四月十六日。此猶在熱時、則爲跨熱雨二時、豈得言一時耶。亦不可稱唯雨安居矣。是故以四月十六日結、順傳譯乖謬也。若自五月十六日結、則一時四月之言無爽、亦稱雨安居無失。其後安居者、以六月十六日結、至九月十五日解。亦是在一雨時内、可稱唯雨安居矣。

＊

忠曰く、『『事鈔』［上四の二の七丈］の安居篇の資持記に云く、『一時四月（＝四か月）、約と過と是れ同じ』と。〈此こに止まる。〉『西域記』を按ずるに、五月十六日自り、九月十五日に至るまで、都て四箇月を雨時と爲し、乃ち佛教は三時を立つ。然らば即ち『前安居』という者、後の一月に開き、五月十六日を以て結して、八月十五日に至りて解く。然るに『事鈔』に云く、『前安居は四月十六日自りす』と。此れ猶お熱時に在れば、則ち熱雨の二時に跨がると爲す。豈に一時と言うを得んや。亦た唯だ『雨安居』と稱す可からず。是の故に、四月十六日を以て結するは、傳譯の乖謬に順うなり。若し五月十六日自り結するときは、則ち『一時四月』の言、爽うこと無し。亦た『雨安居』と稱すること失無し。其の後の安居の者は、六月十六日を以て結して、九月十五日に至りて解す。亦た是れ一の雨時の内に在れば、唯だ雨安居と稱す可し」と。

＊

○忠曰、事鈔［上四ノ二ノ七丈］安居篇資持記云…可稱唯雨安居矣＝「一時四月、約過是同」は、『四分律行事鈔資持記』巻上の四「釈安居篇」（T40-239c）に同文が見える。「按西域記…乃仏教立三時」については②参照。

⑪四部律云、爾時舍利弗目連、欲共世尊安居、十五日從所住處往、十七日乃至、不知當云何、即白諸比丘。諸比丘以此事白佛。佛言後安居聽、有二種安居。有前安居、有後安居。若在前安居、應住前三月。若後安居、應住後三月。

＊

『四部律』に云く、「爾の時、舍利弗と目連は、世尊と共に安居せんと欲し、十五日に所住の處從り往きて、十七日に乃ち至るも、當に云何がすべきを知らざれば、即ち諸もろの比丘に白す。諸もろの比丘、此の事を以て佛に白うす。佛、『後安居を聽るす』と言えば、二種の安居有り。前安居有り、後安居有り。若し前安居に在らば、應に前三月に住すべし。若し後安居ならば、應に後三月に住すべし」と。

＊

○四部律云…應住後三月＝『四分律』巻三七「安居捷度」（T22-832a）に同文が見える。

（千坂成也）

【一六七】結夏

①忠曰、結夏安居之制也。又名結制。〈又見叢軌類安居處。〉

＊

忠曰く、「夏安居の制を結するなり。又た結制と名づく」と。〈又た「叢軌類」の「安居」の處に見ゆ。〉

＊

○忠曰…又名結制＝文中の事項のうち、【一六六】「夏安居」・【六一八】「結制」は、『象器箋』の中に立項されている。文末の細注の「又見叢軌類安居處」の部分は、『象器箋』巻九「第九類叢軌門」に立項されている【六一七】「安居」を参照。

②禪苑清規［二ノ五丈］結夏云、行脚人、欲就處所結夏、須於半月前掛搭。所貴茶湯人事、不至倉卒。

＊

『禪苑清規』［二の五丈］の「結夏」に云く、「行脚の人、處所に就いて結夏せんと欲せば、須く半月の前に於て掛搭すべし。貴ぶ所は、茶湯人事、倉卒に至らじ」と。

＊

○禪苑清規［二ノ五丈］云…所貴茶湯人事不至倉卒＝『禪苑清規』巻二「結夏」の条（X63-528b）に見える文章。原文には「須於半日前掛搭」とあって、『象器箋』では、「須於半月前掛搭」となっている以外は同文である。鏡島元隆他『訳注 禪苑清規』（曹洞宗宗務庁・一九七二・p.85）参照。文中の事項のうち、【八七二】「行脚」・【六七三】「掛搭」・【一〇六五】「茶湯」・【七七一】「人事」は、『象器箋』の中に立項されている。

③中峯雑録［上ノ十三丈］示衆云、若以至理言之、最初發心向道時、此夏已曾結了也。十二時中、看箇所參底無義味話頭、未即決了、便是坐夏時。三十年二十年、推到神消識盡、冷地裏忽爾猛省得著、便是解夏是時、自恣之日。豈以區區九十日爲限哉。

＊

『中峯雑録』［上の十三丈］の示衆に云く、「若し至理を以て之を言はば、最初に發心して道に向かうの時、此の夏、已に曾て結し了わるなり。十二時中、箇の參ずる所の無義味の話頭（＝文脈や論理に沿った理解が通用しない話頭）を看て、未だ即ち決了せざれば、便ち是れ坐夏の時なり。三十年・二十年、推して神消え識盡きて、冷地裏に忽爾に猛省得著するに到れば、便ち是れ解夏の時にして、自恣の日（＝夏安居の最終日で、修行中のことを互いに反省し、罪を告白懺悔する日）なり。豈に區區たる九十日を以て限りと爲んや」と。

＊

○中峯雑録云…豈以區區九十日爲限哉＝『天目明本禪師雑録』巻一「示衆」（X70-716c）にそのまま同文が見える。文中の事項のうち、【六一九】「坐夏」・【一七二】「解夏」・【一七三】「自恣日」は、『象器箋』の中に立項されている。

（堀野真澄）

【一六八】一夏九旬

①忠曰、從四月十五日、至七月十五日、都九十日爲一夏。復有禪祖、不拘時月、只數九十日爲一夏者。傳燈録［十七ノ十二丈］曹山本寂禪師章云、師曰、曹山一生行脚、到處只管九十日爲一夏。

＊

忠曰く、四月十五日從り、七月十五日に至るまで、都て九十日を一夏と爲す。復た禪祖に、時月に拘らず、只だ九十日を數えて一夏と爲す者有り。『傳燈録』［十七の十二丈］「曹山の本寂禪師」の章に云く、「師曰く、『曹山、一生行脚し、到る處に只管九十日を一夏と爲す』と」と。

＊

○傳燈録［十七ノ十二丈］曹山本寂禪師章云…爲一夏＝『景德伝燈録』巻一七（T51-337a）に全く同じ文章が見える。「行脚」は、『象器箋』【八七二】に立項されている。曹山本寂（八四〇～九〇一）は、俗姓は黄氏、福建の人である。洞山良价に嗣法し、この洞山・曹山の法系が曹洞宗である。

②普燈録［十四ノ廿一丈］雪庭元淨禪師章云、死心和尚道、山僧行脚三十餘年、以九十日爲一夏。增一日也不得、減一日也不得。取不得、捨不得、不可得中只麼得。

＊

『普燈録』［十四の廿一丈］「雪庭の元淨禪師」の章に云く、「死心和尚道く、『山僧（＝わたし。僧侶の謙遜の自称）行脚すること三十餘年、九十日を以て一夏と爲す。一日を增すことも也た得ず、一日を減ずることも也た得ず。取ることも得ず、捨つることも得ず、不可得の中に只麼に得たり』と」と。

＊

○普燈録［十四ノ廿一丈］雪庭元淨禪師章云…不可得中只麼得＝『嘉泰普燈録』巻一四（X79-380b）に全く同じ文章が見える。このうち、「取不得、捨不得、不可得中只麼得」という表現は、『永嘉証道歌』の一節（T48-396b）を踏まえたもので、「取ることもなく、捨てることもなく、不可得の［状態の］うちに、ただ得るのみである」という意味。雪庭元淨（十一世紀末～十二世紀中葉）は臨済宗楊岐派の禪僧。『碧巖録』の著者である圜悟克勤（一〇六三～一一三五）に師事した。一方、「死心和尚」こと死心悟新（一〇四四～一一一五）は臨済宗黄龍派の禪僧であり、晦堂祖心の弟子である。

③有以八十日爲期者。　中峯和尚雜録［上ノ十一丈］冬安居示衆云、以八十日立爲長期、欲諸人屏除心念、蕩滌外縁、斷絶妄情、純一無雜、單單究此事。所云期者、廼相約之義。必期成佛作祖、必期及第心空、必期超越死生、必期續佛慧命。或不與所期相應、便是過此八十日之期、亦不肯懺懼而休。須做一回倒斷。

＊

八十日を以て期と爲す者有り。　『中峯和尚雜録』［上の十一丈］「冬安居の示衆」に云く、「八十日を以て、立てて長期と爲し、諸人の心念を屏除（＝押しのけ取り除く）し、外縁を蕩滌（＝洗い流し清める）し、妄情を斷絶して、純一無雜にして、單單に此の事（＝仏法の真理そのもの）を究めんことを欲す。所云る『期』とは、廼ち相い約するの義なり。必ず成佛作祖せんことを期し、必ず及第し心空ぜんことを期し、必ず死生を超越せんことを期し、必ず佛の慧命を續がんことを期す。或いは期する所と相い應ぜずんば、便是ち此の八十日の期を過ぐるも、亦た肯えて懺懼（＝慙愧、羞恥の意の俗語）して休まざれ。須く一回倒斷することを做すべし」と。

＊

○中峯和尚雜録［上ノ十一丈］冬安居示衆云…須做一回倒斷＝中峰明本『天目明本禅師雜録』巻上「冬安居示徒」（X70-716a）に全く同じ文章が見える。中峰明本（一二六三～一三六三）は臨済宗楊岐派の禅僧である。俗姓は孫氏、浙江の人である。幻住道人と号する。諡は智覚禅師・普応国師。その著述は『天目中峰和尚広録』三十巻として纏められ、入蔵されている。中峰が住した幻住庵の規約として定められたものに、『幻住庵清規』がある。儒仏の調和融合を説いたほか、浄土信仰者でもあり、「教禅一如」「禅浄一如」の思想家として知られる。

④覺浪禪師尊正規［下ノ廿五丈］云、結制之法、一年分爲四期。一期是九旬、今定八旬爲度。餘十日、寛其規矩、與學人、料理身分上事。或遷移別堂、及暫時告假幹辦等。

＊

覺浪禪師の『尊正規』［下の廿五丈］に云く、「結制の法は、一年を分かちて四期と爲す。一期は是れ九旬（＝九十日）なるも、今、八旬（＝八十日）を定めて度と爲す。餘の十日をば、其の規矩（＝僧堂の規則）を寛くして、學人の與に、身分上の事を料理（＝うまく取り計らう）せしむ。或いは別堂に遷移し、及び暫時（＝しばらく）假を告げて幹辦（＝用事を済ませる）する等なり」と。

＊

○覺浪禪師尊正規［下ノ廿五丈］云…及暫時告假幹辦等＝『天界覚浪盛禅師全録』巻二一に「尊正規序」（J34-710c~711a）と「尊正規小序」（711a）が収録されているが、『尊正規』の本文そのものは収録されていない。そのため、本書については、従来、その名が知られるのみであったが、昭和五十二年（一九七七）、永井政之氏によって、茨城県水戸市の曹洞宗祇園寺の経蔵で発見された。永井政之「祇園寺蔵・新出覚浪道盛〔尊正規〕について（1）（2）」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一〇号・一九七八、同・一一号・一九七九）で、その全文が掲載されており、下巻「結制」条に同文が見える。明代末期の禅僧、覚浪道盛（一五九二～一六五九）は、号は天界、曹洞宗門下、福建の人である。儒教・仏教・道教の三教合一の思想家として知られ、その門下に方以智を出したことでも有名である。永井政之「覚浪道盛伝考」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一二号・一九八〇）、荒木見悟『憂国烈火禅―禅僧覚浪道盛のたたかい』（研文出版・二〇〇〇）に詳しい。「結制」は『象器箋』【六一八】に、「規矩」は「説規矩」として【八二三】に立項されている。

⑤ 忠曰、八十日爲期、圓覺所謂下期也。

＊

忠曰く、「八十日を期と爲るは、『圓覺』に所謂る『下期』なり」と。

＊

○忠曰、八十日爲期、圓覺所謂下期也＝「圓覺」とは、『大方広円覚修多羅了義経』のこと。「下期」については、次の⑥段を参照のこと。

⑥ 圓覺經［下二ノ廿九丈］圓覺菩薩章云、若法末時、具大乘性、欲修行者、即建道場、當立期限。若立長期百二十日、中期百日、下期八十日、安置淨居。〈畧鈔。〉

＊

『圓覺經』［下二の廿九丈］「圓覺菩薩の章」に云く、「若し法末の時、大乘の性を具して、修行せんと欲する者は、即ち道場を建てて、當に期限を立つべし。若し長期を立てば百二十日、中期は百日、下期は八十日、淨居を安置せよ」と。〈畧鈔す（＝略して書き写す）。〉

＊

○圓覺經［下二ノ廿九丈］圓覺菩薩章云…安置淨居＝『大方広円覚修多羅了義経』に「若し法末の時に、諸もろの衆生有りて、大乘の性を具し、仏の秘密、大円覚心を信じて、修行せんと欲する者は、若し伽藍に在らば、徒衆を安処せよ。縁事有るが故に、分に隨って思察すべし。我れ已に説くが如し。若復し有ること無く、他事の因縁ならば、即ち道場を建てて、當に期限を立つべし。若し長期を立つれば百二十日、中期ならば百日、下期ならば八十日、淨居を安置せよ（若法末時、有諸衆生、具大乘性、信仏秘密、大円覚心、欲修行者、若在伽藍、安処徒衆。有縁事故、隨分思察。如我已説。若復無有、他事因縁、即建道場、当立期限。若立長期百二十日、中期百日、下期八十日、安置淨居）」（T17-921a）とある。

（桐山大幹）

【一六九】白夏

①禪林類聚［十四ノ二丈］云、世尊在摩竭陀國、爲衆説法。是時將欲白夏。乃謂阿難曰、諸大弟子、人天四衆、我常説法、不生敬仰。我今入因沙舊室中、坐夏九旬。忽有人來問法之時、汝代爲我説、一切法不生、一切法不滅。言訖掩室而坐。〈忠曰、此縁出諸佛要集經。〉

＊

『禪林類聚』［十四の二丈］云く、「世尊、摩竭陀國（＝マガダ国）に在って、衆の爲に説法す。是の時、將に白夏ならんと欲す。乃ち阿難に謂いて曰く、『諸もろの大弟子、人天（＝人間界と天上界）・四衆（＝比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）、我れ常に法を説けば、敬仰を生ぜざらん。我れ今ま因沙舊室（＝因陀羅窟・マダガ国にある洞窟）の中に入り、坐夏九旬せん。忽ちに人有って來たって法を問うの時、汝、代わって我が爲に説け、『一切の法は不生なり、一切の法は不滅なり』と。言い訖わって室を掩って（＝室を閉ざす）坐したまう」と。〈忠曰く、「此の縁は『諸佛要集經』に出づ」と。〉

＊

○禪林類聚［十四ノ二丈］云…言訖掩室而坐＝『禪林類聚』には見当たらない。『嘉泰普燈』巻一〇、『会元』巻一八「勝因咸静禪師」条の上堂（X79-348b、X80-377b）で、この話が取り上げられており、「因沙舊室」の「舊」字が「臼」字になっているほかは、字句は全て同じである。無著道忠は、この話の典拠を『諸仏要集経』であるとしており、恐らく同経の巻一に、「仏、阿難に告ぐ、『如来は当に因沙旧室に入りて、燕坐すること三月なるべし』（仏告阿難、如来当入因沙旧室、燕坐三月）」（T17-756c）などとある部分を指すのであろう。

②行事鈔［上四ノ二ノ五丈］安居策修篇云、安居上座、於一切僧集時、食時粥時漿時、應白言、爾許時已過、餘有爾許時在。若行此等行法者、是名僧父母亦名僧師。　資持記云、白法中〈云々〉、今準義加、於小食上、維那打槌告云、白大衆、安居已過一日、餘有八十九日在。當勤精進。謹慎莫放逸。〈餘日準此加減。〉

＊

『行事鈔』［上四の二の五丈］「安居策修」の篇に云く、「安居には、上座、一切の僧の集まる時、食時・粥時・漿時に於いて、應に白して言うべし、『爾許の時、已に過ぎて、餘り爾許の時在る有り』と。此れ等の行法を行ずるが若き者、是を『僧の父母』と名づけ、亦た『僧の師』と名づく」と。　『資持記』に云く、「白法の中に〈云々〉、今ま義に準じて加うるに、小食の上に於いて、維那、槌を打して告げて云く、『大衆に白す、安居已に一日を過ぎて、餘り八十九日の在る有り』と。當に勤めて精進すべし。謹慎しんで放逸なること莫かれ〈餘日は此に準じ加減せよ。〉」と。

＊

○行事鈔［上四ノ二ノ五丈］安居策修篇云…是名僧父母亦名僧師＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上（T40-38b）に同文が見える。

○資持記云…謹慎莫放逸〈餘日準此加減。〉＝『四分律行事鈔資持記』巻上「釈安居篇」（T40-239b~c）に同文が見える。

（千坂成也）

【一七〇】半夏

①忠曰、結夏與解夏之中間也。

＊

忠曰く、「結夏と解夏との中間なり」と。

＊

○忠曰…中間也＝文中の事項のうち、【一六七】「結夏」と【一七二】「解夏」は、『象器箋』の中に立項されている。

②臨濟玄禪師録云、師因半夏上黄檗。見和尚看經、師云、我將謂是箇人。元來是揞黒豆老和尚。住數日、乃辭去。黄檗云、汝破夏來。不終夏去。師云、某甲暫來禮拜和尚。黄檗遂打趁令去。師行數里、疑此事却回終夏。

＊

『臨済玄禪師の録』に云く、「師、因みに半夏に黄檗（＝黄檗山）に上る。和尚（＝黄檗希運）の看經するを見て、師云く、『我れ將に謂えり、是れ箇の人と。元來是れ揞黒豆（＝お経読み）の老和尚なるのみ。住すること數日にして、乃ち辭し去る。黄檗云く、『汝は夏を破り來たる。夏を終わらずして去らんや』と。師云く、『某甲、暫く來たって和尚を禮拜す』と。黄檗、遂に打って趁って去らしむ。師、行くこと數里にして、此の事を疑いて却回して夏を終う」と。

＊

○臨濟玄禪師録云…師行數里疑此事却回終夏＝『臨済録』「行録」（T47-505b、岩波文庫本・p.195）に全く同じ文章が見える。

（堀野真澄）

【一七一】破夏

①忠曰、不守禁足之制、出界外遊者。見半夏處。

＊

忠曰く、「禁則の制を守らず、界を出でて、外遊する者なり。『半夏』の處に見ゆ」と。

＊

○「半夏」は前項【一七〇】を参照。

②行事鈔［上四ノ三ノ五丈］恣宗要篇云、若破夏不安居人、雖不得歳、以舉罪義通、理必依衆恣僧治舉。　又［上四ノ三ノ四丈］云、問、十五日自恣已得出界不。答、不得。破夏、離衣、由夜分未盡故。

＊

『行事鈔』［上四の三の五丈］の「自恣宗要」の篇に云く、「若し破夏、不安居の人は、歳を得ずと雖も、舉罪の義通ぜるを以て、理、必ず衆に依りて僧の治舉を恣にすべし」と。

又た［上四の三の四丈］云く、「問う、『十五日自恣し已わりて、出界することを得るや不や』と。答う、『得ず。破夏なり、離衣なり、夜分未だ盡きざるに由るが故に』と」と。

＊

○行事鈔［上四ノ三ノ五丈］恣宗要篇云…理必依衆恣僧治舉＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上（T40-42c）に全く同じ文章が見える。

○又［上四ノ三ノ四丈］云…由夜分未盡故＝同じく『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上（T40-44b）に全く同じ文章が見える。

③ 北礀詩集［八之九丈］云、藉甚。參寥子臨平破夏歸。

＊

『北礀詩集』［八の九丈］に云く、「藉甚しきなり。參寥子、臨平、夏を破りて歸る」と。

＊

○北礀詩集［八之九丈］云、藉甚。參寥子臨平破夏歸＝『北礀詩集』九巻は南宋の北礀居簡（一一六四～一二四六）の詩集。国立国会図書館デジタル化資料に朝鮮刊本が掲載されているが、該当箇所に同じ文章は見えない。

④ 參寥子詩集［六ノ十一丈］臨平道中詩云、風蒲獵獵弄輕柔、欲立蜻蜓不自由。五月臨平山下路。藕花無數滿汀洲。

＊

『參寥子詩集』［六の十一丈］「臨平道中詩」に云く、「風蒲獵獵として輕柔を弄し、立たんと欲する蜻蜓、自由ならず。五月臨平、山下の路、藕花無數、汀洲に滿つ」と。

○參寥子詩集［六ノ十一丈］、臨平道中詩云、風蒲獵獵弄輕柔、欲立蜻蜓不自由。五月臨平山下路。藕花無數滿汀洲＝『參寥子詩集』は宋の釈潛撰、十二巻。文中の典拠の書き込みには巻六の十一丈とあるが、四部叢刊本では巻一の九丈表に同文が見える。

（池田織隆）

【一七二】解夏

①解夏安居之制也。又名解制。

＊

夏安居の制を解くなり。又た「解制」と名づく。

＊

○解夏安居…又名解制＝文中の事項のうち、【一六六】「夏安居」は、『象器箋』の中に立項されている。

②禪苑清規［二ノ七丈］之解夏云、七月十四日晚念誦煎湯、來日陞堂人事巡寮煎點、並同結夏之儀。

＊

『禪苑清規』［二の七丈］の「解夏」に云く、「七月十四日の晚の念誦・煎湯、來日（＝明日）の陞堂・人事・巡寮（＝住持が山内の諸寮を点検してまわる）・煎點（＝茶を入れて供する儀式）、並びに結夏の儀に同じ」と。

＊

○禪苑清規［二ノ七丈］云…並同結夏之儀＝『禪苑清規』巻二「解夏」の条（X63-528c）に全く同じ文章が見える。鏡島元隆他『訳注 禪苑清規』（曹洞宗宗務庁・一九七二・p.91）参照。文中の事項のうち、【九九八】「念誦」・【七七一】「人事」・【六五六】「巡寮」・【一三三九】「煎點」・【一六七】「結夏」は、

『象器箋』の中に立項されている。

（堀野真澄）

【一七三】自恣日

①行事鈔［上四之三ノ一丈］自恣宗要篇云、然九旬修道、精練身心、人多迷己、不自見過。理宜仰憑清衆、垂慈誨示、縱宣己罪、恣僧舉過。内彰無私隱、外顯有瑕疵。身口託於他人。故曰自恣。

＊

『行事鈔』［上四の三の一丈］の「自恣宗要」の篇に云く、「然るに九旬（＝一夏・九〇日）、道を修し、身心を精練するも、人、多く己れに迷いて、自ら過ちを見ず。理宜しく仰いで清衆に憑って、慈を垂れて誨示し、縱に己れが罪を宣べしめて、僧の舉過を恣にせしむべし。内には私隱無きを彰し、外には瑕疵（＝欠点）有るを顯す。身口を他人に託す。故に『自恣』と曰う」と。

＊

○行事鈔［上四之三ノ一丈］自恣宗要篇云…故曰自恣＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻上（T40-42b）に全く同じ文章が見える。この『行事鈔』の引用とほとんど同じ文章が『翻訳名義集』と『釈氏要覧』の各々②段・③段の引用文の直後に見受けられる。以下にその個所を示す。『翻訳名義集』巻四「故に『［四分律刪繁補闕行］事鈔』に曰く、『九旬に道を修し、身心を精練するも、人、多く己れに迷いて、自ら過ちを見ず。理宜しく仰いで清衆に憑って、慈を垂れて誨示し、縱に己れが罪を宣べしめて、僧の挙過を恣にせしむべし。内には私隱無きを彰し、外には瑕疵有るを顯す。身口を他人に託す。故に「自恣」と云う』と（故事鈔曰、九旬修道、精練身心、人多迷己、不自見過。理宜仰憑清衆、垂慈誨示、縱宣己罪、恣僧挙過。内彰無私隱、外顯有瑕疵。身口託於他人。故云自恣）」（T54-1123a）。『釈氏要覧』巻三に「『鈔』に云く、『九旬の内、人多く己に迷うて、自ら過ちを見ず。理宜しく仰いで清衆に憑って、慈を垂れて誨を示す。縱に己れが罪を宣べしめて、僧の挙過を恣にせしむべし。内には私隱無きを彰し、外には瑕疵有るを顯す。身口を他人に託す。故に「自恣」と曰う』と（鈔云、九旬之内、人多迷己、不自見過。理宜仰憑清衆、垂慈示誨。縱宣己罪、恣僧挙過。内彰無私隱、外顯有瑕疵。身口託於他人。故曰自恣）」（T54-299a）とある。ここで典拠とされている『鈔』は明記されてはいないが、この『行事鈔』を指す。

②飜譯名義集［四ノ四十一丈］云、鉢刺婆刺拏。音義指歸譯爲隨意。寄歸傳云、凡夏罷歲終之時、此日應名隨意。即是隨他於三事之中、任意舉發、説罪除愆之義。舊云自恣者、是義飜。然則自恣之言、涉乎善惡。今局善也。

＊

『飜譯名義集』［四の四十一丈］に云く、「鉢刺婆刺。『音義指歸』に譯して『隨意』と爲す。『寄歸傳』に云く、『凡そ夏（＝雨安居）罷わり歲（＝一年）終わるの時、此の日を應に「隨意」と名づくべし。即ち是れ他の三事の中に於いて、意に任せて舉發して、罪を説き愆を除くに隨するの義なり。舊（＝旧訳）に「自恣」と云うは、是れ義飜なり』と。然らば則ち自恣の言は、善惡に涉る。今は善に局るなり」と。

＊

○飜譯名義集［四ノ四十一丈］云…今局善也＝『翻訳名義集』巻四（T54-1123a）からの引用。『音義指帰』の部分が、「『音義指帰』に云く、訳して「隨意」と為す（音義指帰云、訳為隨意）」と、「云」の一字が入っている以外は同文である。文中、『寄帰伝』からの引用は、『南海寄帰内法伝』巻二（T54-217b）

に全く同じ文章が見える。「夏罷歳終」とは、雨安居の終わりを一年の終わりとする、仏教における一年の区切りかたで、所謂「法臘（出家者年齢）」である。森章司「原始仏教時代の暦法について」の第三節「印度暦と中国暦―1年の始まりと終わり」に「自恣の明くる日から1年がはじまり、次の年の自恣の日で終わるという1年である。言い換えれば雨安居が1年の締めくくりで、これを明ける日が新年というわけである」（『中央学術研究所紀要』モノグラフ篇 No.1・一九九七）と解説されている。

③釋氏要覽［下ノ十七丈］云、十誦［廿三ノ一丈］云、好惡相教、以三語自恣。注三語者、謂見聞疑。

＊

『釋氏要覽』［下の十七丈］に云く、「『十誦』［廿三の一丈］に云く、『好惡相い教えて、三語を以て自恣とす』と」と。注に「三語とは、謂く見・聞・疑なり」と。

＊

○釋氏要覽［下ノ十七丈］云…謂見聞疑＝『釈氏要覧』巻三（T54-299a）に同文が見える。「三語者、謂見聞疑」は、「十誦云、好惡相教、以三語自恣」の割注である。『釈氏要覧』のこの部分は、④に引用される『十誦律』巻二三の当該個所、もしくは、同・巻五六の「自恣法とは、安居の比丘、応に一処に和合し、衆僧、応に三種自恣すべし。若しくは見、若しくは聞、若しくは疑を問う。『何を以ての故に、仏は自恣を聴すや』。答う、『衆僧を摂するを以ての故に、好悪相い教化するが故なり』と（自恣法者、安居比丘、応一処和合、衆僧応三種自恣。若見、若聞、若疑問。何以故、仏聴自恣。答、以摂衆僧故、好悪相教化故）」（T23-414c）という個所を簡単に纏めたものであろう。

④十誦律［廿三ノ一丈］自恣法云、諸比丘、一處集、應三事求他説自恣。何等三。若見、若聞、若疑。〈乃至〉應差能作自恣人。〈廣説。〉應如是語。長老憶念、今僧自恣日。我某甲比丘、長老僧、自恣語。若見聞疑罪、語我。憐愍故。我若見罪、當如法除。

＊

『十誦律』［廿三の一丈］の「自恣法」に云く、「諸もろの比丘、一處に集まり、應に三事もて他の説を求めて自恣すべし。何等か三なる。若しくは「見」、若しくは「聞」、若しくは「疑」なり。〈乃至〉應に能く自恣を作す人を差す（＝選ぶ）べし。〈廣説す。〉應に是くの如く語るべし、『長老、憶念したまえ、今、僧の自恣の日なり。我れ某甲比丘、長老僧、自恣（＝思いのまま）に語りたまえ。若しくは見・聞・疑の罪、我に語りたまえ。憐愍の故に。我れ若し罪を見れば、當に如法に除くべし』と」と。

＊

○十誦律［廿三ノ一丈］自恣法云…當如法除＝『十誦律』巻二三「七法中自恣第三」（T23-165b~c）から要略して引用されている。もとの文章は次の通りである。

諸もろの比丘、一処に集まり、応に三事もて他に自恣を説くを求むべし。何等か三なる。若しくは見、若しくは聞き、若しくは罪を疑うなり。是くの如く応に自恣すべし。一心に僧を集め、僧を集め已われば、応に能く自恣を作す人を差すべし。応に是くの如く唱うべし、「誰か能く僧の為に自恣人と作る」と。是の中、若し「我れ能くす」と言うもの有らば、仏言く、「若し比丘、五悪法を成就せば、応に自恣人と作るべからず。何等か五なる。一には、愛もて自恣し、二には瞋もて自恣し、三には怖もて自恣し、四には愚もて自恣し、五には自恣すると自恣せざるを知らざるなり。比丘、五善法を成就せば、応に自恣人と作るべし。何等か五なる。愛もて自恣せず、瞋もて自恣せず、怖もて自恣せず、愚もて自恣せず、自恣すると自恣せざるを知るなり」と。爾の時、一比丘、応に僧中に唱えて言うべし、「大徳僧、聴け、是の某甲某甲比丘、能く僧の為めに自恣人と作らん。若し僧、時到らば、僧忍んで聴け。僧某甲某甲比丘を、当に僧の自恣人と作すべし」と。是くの如く白す。「大徳僧、聴け、是の某甲某甲比丘、能く僧の為めに自恣人と作さん。誰か諸長老某甲某甲比丘を、僧の為めに自恣人と作すを忍ずる者、是の長老は黙然せよ。誰か忍ぜざるものは便ち説け」と。某甲某甲比丘、僧の為めに自恣人と作り竟わる。僧忍じて

黙然するが故に。是の事、是くの如く持す。応に是くの如く自恣を作して羯磨すべし。「大徳僧、聴け、今日、僧、自恣す。若し僧、時到らば、僧忍んで聴け。僧一心に自恣を受けよ」と。是くの如く白す。是の時、諸もろの比丘、一切、坐従り起ちて地に跏跪せよ。若し自恣を作す人、是れ上座なれば、応に坐従り起ち、偏袒著衣して身を曲ぐべし。応に第二上座に語るべし、「長老、今日、自恣し来たる」と。是の時、第二上座、坐従り起ちて偏袒著衣し、跏跪して両手もて上座の足を捉え、応に是くの如く語るべし、「長老憶念せよ。今ま僧の自恣日なり。我れ某甲比丘に、長老僧、自恣して語れ。若し罪を見・聞・疑すれば、我れに語れ。憐愍の故に。我れ若し罪を見ば、当に法の如くに除くべし」と。第二に長老憶念せよ。今ま僧の自恣日なり。我れ某甲比丘に、長老僧、自恣して語れ。若し罪を見・聞・疑すれば、我れに語れ。憐愍の故に。我れ若し罪を見ば、当に法の如くに除くべし。第三に長老憶念せよ。今ま僧の自恣日なり。我れ某甲比丘に、長老僧、自恣して語れ。若し罪を見・聞・疑すれば、我れに語れ。憐愍の故に。我れ若し罪を見ば、当に法の如くに除くべし。第二に長老憶念せよ。今ま僧の自恣日なり。我れ某甲比丘に、長老僧、自恣して語れ。若し罪を見・聞・疑すれば、我れに語れ。憐愍の故に。我れ若し罪を見ば、当に法の如くに除くべし。第三に長老憶念せよ。今ま僧の自恣日なり。我れ某甲比丘に、長老僧、自恣して語れ。若し罪を見・聞・疑すれば、我れに語れ。憐愍の故に。我れ若し罪を見ば、当に法の如くに除くべし」と。（諸比丘、一処集、応三事求他説自恣。何等三。若見若聞若疑罪。如是応自恣。一心集僧、集僧已、応差能作自恣人。応如是唱、誰能為僧作自恣人。是中若有言我能、仏言、若比丘五悪法成就、不応作自恣人。何等五。一愛自恣、二瞋自恣、三怖自恣、四愚自恣、五自恣不自恣不知。比丘成就五善法、応作自恣人。何等五。不愛自恣、不瞋自恣、不怖自恣、不愚自恣、自恣不自恣知。爾時、一比丘、応僧中唱言、大徳僧聴、是某甲某甲比丘、能為僧作自恣人。若僧時到、僧忍聴。僧某甲某甲比丘、当作僧自恣人。如是白。大徳僧聴、是某甲某甲比丘、能為僧作自恣人。僧某甲某甲比丘、為僧作自恣人。誰諸長老忍某甲某甲比丘為僧作自恣人者、是長老黙然。誰不忍便説。某甲某甲比丘、為僧作自恣人竟。僧忍黙然故。是事如是持。応如是作自恣羯磨。大徳僧聴、今日僧自恣。若僧時到、僧忍聴。僧一心受自恣。如是白。是時諸比丘、一切従坐起跏跪地。若作自恣人是上座、応従坐起、偏袒著衣曲身。応語第二上座。長老、今日自恣来。是時第二上座、従坐起偏袒著衣、跏跪両手捉上座足、応如是語、長老憶念。今僧自恣日。我某甲比丘、長老僧自恣語、若見聞疑罪語我。憐愍故。我若見罪、当如法除。第二長老憶念。今僧自恣日。我某甲比丘、長老僧自恣語。若見聞疑罪語我。憐愍故。我若見罪、当如法除。第三長老憶念。今僧自恣日。我某甲比丘、長老僧自恣語。若見聞疑罪語我。憐愍故。我若見罪、当如法除。若下座作自恣人、応従坐起、偏袒著衣、跏跪合掌、応如是語上座、今日自恣来。上座亦応従坐起、偏袒著衣、跏跪合掌、応如是言、長老憶念、今僧自恣日。我某甲比丘、長老僧自恣語。若見聞疑罪語我。憐愍故。我若見罪、当如法除。第二長老憶念。今僧自恣日。我某甲比丘、長老僧自恣語。若見聞疑罪語我。憐愍故。我若見罪、当如法除。第三長老憶念。今僧自恣日。我某甲比丘、長老僧自恣語。若見聞疑罪語我。憐愍故。我若見罪、当如法除。）

⑤首楞嚴經［一上ノ廿二丈］云、屬諸比丘休夏自恣。　釋要鈔［二ノ廿四丈］云、自恣凡有二種五徳。一舉罪五徳。謂知時不以非時。如實不以虚妄。利益不以損減。柔輭不以麁獷。慈心不以瞋恚。二自恣五徳、謂不愛、不瞋、不怖、不癡、如自恣不自恣。然自恣通三日。七月十四、十五、十六。又修道安樂、亦通延日自恣。可延至八月十五日。〈忠曰、釋要、依行事鈔［上四ノ三ノ七丈］自恣宗要篇。〉

＊

『首楞嚴經』［一上の廿二丈］に云く、「諸もろの比丘の、夏を休めて自恣するに屬う」と。『釋要鈔』［二の廿四丈］に云く、「自恣に凡そ二種の五徳有り。一には罪を舉ぐるに五徳あり。謂く、『時を知りて非時を以てせず』、『實の如くにして（＝真実にかなって）虚妄を以てせず』、『利益して損減を以てせず』、『柔輭（＝柔軟）にして麁獷（＝粗野）を以てせず』、『慈心にして瞋恚を以てせざる』なり。二に自恣の五徳とは、謂く『不愛』と、『不瞋』と、『不怖』と、『不癡』と、『自恣の如くにして自恣ならざる』となり。然る

に自恣、三日を通す。七月の十四と、十五と、十六となり。又た道を修して安樂ならば、亦た通じて日を延べて自恣すべし。延べて八月十五日に至る可し。〈忠曰く、『釋要』は、『行事鈔』［上四の三の七丈］自恣宗要篇に依る」と。〉

＊

○首楞嚴經［一上ノ廿二丈］云…休夏自恣＝『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞厳経』巻一（T19-106b）に全く同じ文章が見える。荒木見悟『中国撰述経典二 楞厳経』（《仏教経典選14》筑摩書房・一九八六・p.5）参照。「釋要鈔云、自恣凡有二種五德」から「可延至八月十五日」に至るまでは、『楞厳経義疏釈要鈔』巻二（X11-101b）に全く同じ文章が見える。

○忠曰…自恣宗要篇＝自恣の二種の五德については『四分律刪繁補闕行事鈔』巻一に「『不愛（不）恚（不）怖（不）痴』、『自恣と不自恣を知る』、此れ『自恣の五德』と名づく。律文は又た差いて、『時を知りて非時を以てせず』、『実の如くにして虚妄を以てせず』、『利益して損減を以てせず』、『桑耎にして麤穬を以てせず』、『慈心にして瞋恚を以てせず』、此れ『挙罪の五德』と謂う（不愛恚怖痴、知自恣不自恣、此名自恣五德。律文又差、知時不以非時、如実不以虚妄、利益不以損減、桑耎不以麤穬、慈心不以瞋恚、此謂挙罪五德）」（T40-42c）とある。後半については⑥参照。

⑥行事鈔［上四ノ三ノ四丈。○輔教五ノ卅七丈引。］自恣宗要篇云、然律中、但明十四日、十五日自恣。及至急施衣中、次第増中、十六日自恣。増三中、三日自恣。律云、安居竟自恣、則七月十六日爲定。律又云、僧十四日自恣、尼十五日自恣。此謂相依問罪。故制異日。及論作法、三日通用。克定一期、十六日定。［敕修鈔十四ノ廿丈、依之定］。若有難者、如五百問中。一月自恣。

＊

『行事鈔』［上四の三の四丈。○『輔教』五の卅七丈にも引く。］「自恣宗要」の篇に云く、「然るに律の中には、但だ十四日、十五日の自恣を明らかにするのみ。急施衣の中、次第増の中に至るに及びては、十六日に自恣せしむ。増三の中には、三日自恣せしむ。律に云く、『安居竟わって自恣す』と。則ち七月十六日を定めと爲す。律に又た云く、『僧は十四日に自恣せば、尼は十五日に自恣すべし』と。此こは謂く、『相依して罪を問わしむ』と。故に異日を制す。作法を論ずるに及びては、三日通用す。一期を克定せば、十六日に定まれり［『敕修鈔』十四の廿丈、之に依りて定む］。若し難有らば、『五百問（＝五百問法出要律儀）』の中の如く、一月に自恣すべし」と。

＊

○行事鈔［上四ノ三ノ四丈。○輔教五ノ卅七丈引。］自恣宗要篇云…一月自恣＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻一（T40-42bc）に全く同じ文章が見える。『輔教』は、仏日契嵩『輔教編』のことであろうが、当該個所の引用は見当たらない。「律に云く」とされる「安居竟自恣」の一文は、『四分律』巻三七（T22-876b）に、「僧十四日自恣、尼十五日自恣」は、同・巻二九（T22-766b）にそれぞれ確認することができる。『五百問』とは、『行事鈔』の序文に見える『五百問法出要律儀』（T40-3b）のことと考えられるが、梁の武帝『準律集』に収録されるという本書に関しては未詳である。割り注の［勅修鈔十四ノ廿丈、依之定］の部分、『勅修鈔』とは、雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』のこと。巻一四の一丁裏に「言う所の『臘』は、経律中に、七月十六日は是れ比丘の五分法身（＝戒・定・慧・解脱・解脱知見という五つの徳性を具えた身体）の生来するの歳首なるを以てすれば、則ち七月十五日は是れ臘除なり（所言臘者、経律中、以七月十六日是比丘五分法身生来之歳首、則七月十五日是臘除也）」（万治三年刊本）とある。

⑦法苑珠林［六十ノ四丈］云、増一阿含經［廿四ノ十丈］云、爾時世尊、在舍衞國東、鹿母園中、與大比丘衆五百人俱。是時世尊、七月十五日、於露地敷坐。比丘僧、前後圍遶。佛告阿難曰、汝今速擊揵稚。今七月十五日、是受歳之日。阿難叉手、便説此偈、淨眼無與等。

無事而不練。智慧無染著。何等名受歳。世尊以偈報曰、受歳三藏淨身口意所作。兩兩比丘對、自陳所作短。還自稱名字。今日衆受歳。我亦淨意受。唯願原其過。是時阿難、聞已歡喜。即升講堂、手執揵稚、而説此偈、降伏魔力怨、除結無有餘。露地擊揵稚。比丘聞當集。諸欲聞法人、度流生死海。聞此妙響音、盡當雲集此。爾時阿難、擊揵稚已、至世尊所、白世尊言、今正是時。唯願世尊、何所敕使。是時世尊、告阿難曰、汝隨次坐。當坐艸座。時諸比丘、各坐艸座。是時世尊默然、觀諸比丘已、便敕諸比丘、我今欲受歳。我無過咎於衆人乎。又不犯身口意耶。如來説此語已、諸比丘默然不對。是時再三、告諸比丘已。時尊者舍利弗、即從座起、長跪白世尊言、諸比丘衆、觀察如來、無身口意過。世尊今日不度者度、不脱者脱、不般涅槃者令般涅槃、無救護者爲作救護、盲者爲作眼目、爲病者作大醫王。三界獨尊、無能及者。以此事縁、如來無咎於衆人、亦無身口意過。是時舍利弗、白世尊言、我今自陳。無咎於如來及比丘僧乎。世尊告曰、汝舍利弗、都無身口意所作非行。汝今智慧無能及者。汝今所説、常如法義、未曾違理。是時舍利弗、白佛言、此五百比丘、盡當受歳。盡無咎於如來乎。世尊告曰、亦不責此五百比丘身口意。此舍利弗、大衆之中。極爲清淨無瑕穢。今此衆中、最小下坐、得須陀洹、必當上及不退轉法。以是之故、我不恐責此衆。〈忠曰、所援増壹經第二十四卷［十丈］、善聚品文也。今以珠林略鈔簡明、依珠林所載耳。〉

*

『法苑珠林』［六十の四丈］に云く、「『増一阿含經』［廿四の十丈］に云く、『爾の時、世尊、舍衞國の東、鹿母園の中に在り、大比丘衆五百人と俱なり。是の時、世尊、七月十五日、露地に於いて敷坐す。比丘僧、前後に圍遶（＝ぐるりととり巻く）せり。佛、阿難に告げて曰く、「汝、今、速やかに揵稚（＝時刻や事件を知らせるために打つ法具）を擊て。今、七月十五日、是れ受歳の日なり」と。阿難、叉手して、便ち此の偈を説く、「淨眼、與等無し。事として練らずということ無し。智慧に染著無し。何等をか受歳と名づくる」と。世尊、偈を以て報じて曰く、「受歳とは、三藏に身口意の所作を淨む。兩兩の比丘對して、自ら所作の短を陳ぶ。還って自ら名字を稱す。今日衆、歳を受く。我も亦た意を淨うして受く。唯だ願わくば其の過を原ねよ」と。是の時、阿難、聞き已わって歡喜す。即ち講堂に升って、手に揵稚を執って、此の偈を説く、「魔力の怨を降伏して、結を除いて餘有ること無し。露地に揵稚を擊つ。比丘聞いて當に集まるべし。諸もろの聞法せんと欲する人、生死の海を度流す。此の妙なる響音を聞き、盡く當に此こに雲集すべし」と。爾の時、阿難、揵稚を擊ち已わって、世尊の所に至って、世尊に白して言さく、「今、正に是れ時なり。唯だ願わくば、世尊、何れの敕使する所ぞ」と。是の時に、世尊、阿難に告げて曰く、「汝、次に隨って坐せよ。當に艸座に坐すべし」と。時に諸もろの比丘、各おの艸座に坐す。是の時に、世尊、默然として、諸もろの比丘を觀じ已わり、便ち諸もろの比丘に敕す、「我れ今ま歳を受けんと欲す。我れ衆人に過咎無しや。又た身口意を犯さずや」と。如來、此の語を説き已わるに、諸もろの比丘、默然として對えず。是の時、再三、諸もろの比丘に告げ已われり。時に尊者舍利弗、即ち座從り起ち、長跪して世尊に白して言さく、「諸もろの比丘衆、如來を觀察するに、身口意の過無し。世尊、今日、度せざる者をば度し、脱せざる者を脱し、般涅槃せざる者をば般涅槃せしめ、救護無き者をば爲に救護と作り、盲の者には爲に眼目と作り、病める者の爲に大醫王と作りたまう。三界の獨尊にして、能く及ぶ者無し。此の事縁を以て、如來、衆人に咎無

く、亦た身口意の過も無し」と。是の時、舎利弗、世尊に白して言さく、「我れ今、自ら陳す。如來及び比丘僧に咎無しや」と。世尊告げて曰く、「汝、舎利弗、都て身口意の所作の非行無し。汝今、智慧の能く及ぶ者無し。汝今、説く所、常に法義（＝仏法の教義）の如くにして、未だ曾て理に違わず」と。是の時、舎利弗、佛に白して言さく、「此の五百の比丘、盡く當に歳を受くべしや。盡く如來に咎無しや」と。世尊告げて曰く、「亦た此の五百の比丘の身口意を責めざれ。此の舎利弗、大衆の中に、極めて清淨にして瑕穢（＝欠点）無しと爲す。今、此の衆中、最小の下坐も、須陀洹（＝預流果）を得、必ず當に上み不退轉の法に及ぶべし。是れを以ての故に、我れ此の衆を責めんことを恐れず」と』と。　〈忠曰く、「援くところの『増壹經』は第二十四卷［十丈］、善聚品の文なり。今、『珠林略鈔簡明』を以て、『珠林』に載るところに依るのみ」と。〉

＊

○法苑珠林［六十ノ四丈］云…我不恐責此衆＝『法苑珠林』巻四七（T53-643c~644a）からの引用。相違としては、「浄眼無与等」が「浄眼無餘等」、「受歳三蔵浄」が「受歳三業浄」、「尽当雲集此」が「尽当運集此」、「無救護者為作救護」が「無救者為作救護」となっているほかは同文である。また、文中の「揵稚」は【一四一七】に立項されている（『象器箋』では「犍稚」）。

○増一阿含經［廿四ノ十丈］云…我不恐責此衆＝『増一阿含経』巻二四（T2-676b~677b）からの引用であるが、部分的に省略されている。もとの文章は次の通りである。

一時、仏、舎衛国の東苑、鹿母園の中に在り、大比丘衆五百人と倶なり。是の時、世尊、七月十五日、露野地に於いて敷座し、比丘僧、前後に圍遶せり。仏、阿難に告げて曰く、「汝今、露地に於いて速やかに揵椎を撃て。然る所以は、今、七月十五日、是れ受歳の日なればなり」と。是の時、尊者阿難、右膝を地に著け、長跪叉手して、便ち此の偈を説く、「浄眼与に等しき無く、事として練らざる無し。智慧に染著無ければ、何等をか受歳と名づく」と。爾の時、世尊、復た偈を以て阿難に報えて曰く、「受歳は三業を浄む。身口意の所作なり。両両の比丘対して、自ら作す所の短を陳ぶ。還って自ら名字を称し、今日衆歳を受けん。我も亦た意を浄めて受けん。唯だ願くば其の過を原ねよ」と。爾時、阿難、復た偈を以て其の義を問うて曰く、「過去の恒沙の仏、辟支及び声聞、尽く是れ諸仏の法なりや、独り是れ釈迦文なりや」と。爾の時、仏、復た偈を以て、阿難に報えて曰く、「恒沙の過去仏、弟子清浄の心、皆な是れ諸仏の法にして、今の釈迦文に非ず。辟支に此の法無く、歳無く弟子無し。独り逝きて伴侶無く、他の与に法を説かず。当来の仏世尊、恒沙にして計る可からず。彼も亦た此の歳を受くること、今の瞿曇の法の如し」と。是の時、尊者阿難、此の語を聞き已わって、歓喜し踊躍し、自ら勝う能わず、即ち講堂に昇り、手に揵椎を執って、並びに是の説を作し、「我れ今、此の如来の信の鼓を撃たん。諸有の如来の弟子衆は、尽く当に普く集まるべし」と。爾の時、復た此の偈を説く、「魔力の怨を降伏し、結を除きて餘り有ること無し。露地に揵椎を撃たん。比丘、聞いて当に集まるべし。諸もろの法を聞かんと欲する人は、生死の海を度流し、此の妙なる響音を聞き、尽く当に此こに運集すべし」と。爾の時、尊者阿難、已に揵椎を撃ち、世尊の所に至って、頭面礼足し、一面に在って住まり、世尊に白して言う、「今ま正に是れ時なり。唯だ願わくば、世尊、何れの敕使する所ぞ」と。是の時、世尊、阿難に告げて曰く、「汝、次に随って坐せ。如来は自ら当に時を知るべし」と。是の時、世尊、草座に坐して諸もろの比丘に告ぐ、「汝等、尽く当に草座に坐すべし」と。諸もろの比丘、対えて曰く、「是くの如し、世尊」と。時に諸もろの比丘、各おの草座に坐す。是の時、世尊、黙然として諸もろの比丘を観じ已わり、便ち諸もろの比丘に勅す、「我れ今ま歳を受けんと欲す。我れ衆人に過咎無しや。又た身口意を犯さずや」と。如来、此の語を説き已わるに、諸もろの比丘、黙然として対えず。是の時、復た再三諸もろの比丘に告ぐ、「我れ今ま歳を受けんと欲す。然れども我れ衆人に過無しや」と。是の時、尊者舎利弗、即ち坐従り起ち、長跪叉手して、世尊に白して言さく、「諸もろの比丘衆は、如来に身口意の過無しと観察す。然る所以は、世尊、今日度せざる者を度し、脱せざる者を脱し、般涅槃せざる者を般涅槃せしめ、救い無き者の為めに救護を作し、盲者に眼目と作り、病める者の為めに大医王と作り、三界に独り尊くして能く及ぶ者の無く、最尊最上にして、未だ道意を起こさざる者をして道意を発さしめ、衆人の未だ寤めざるものをして、尊は之を寤めしめ、未だ法を聞かざる者をして之を聞かしめ、迷える者の為めに径路を作り、恒に正法を以てす。此の事縁を以て、如来は衆人に咎無く、亦た身口意に過無きなり」と。是の時、舎利弗、世尊に白して言う、「我れ今、如来に向かって自ら陳ぶ。然るに如来及び

比丘僧に咎無しや」と。世尊、告げて曰く、「汝今、舎利弗、都(すべ)て身口意の所作に非行無し。然る所以は、汝今、智慧の能く及ぶ者無し。種種の智慧、無量の智慧、無辺の智、無与等智、疾智、捷智、甚深の智、平等の智、少欲知足にして、静処を楽しみ、諸もろの方便多くして、念じて錯乱せず、総持三昧、根原具足し、戒成就、三昧成就、智慧成就、解脱成就、解脱見慧成就し、勇悍にして能く所説を忍し、悪無く非法を為さず、心性庠序にして、卒暴を行ぜざること、猶お転輪聖王の最大太子、当に王位を紹(つ)ぎ、法輪を転ずるがごとし。舎利弗も亦た是(か)くの如く、無上の法輪を転ず。諸天、世人及び龍・鬼・魔、若しくは魔天、本(も)と転ぜざる所なり。汝今ま説く所、常に法義の如く、未だ曾て理に違わざるなり」と。是の時、舎利弗、仏に白して言う、「此の五百の比丘、尽く当に歳を受くべし。此の五百人、尽く如来に咎無きや」と。世尊告げて曰く、「亦た此の五百比丘の身口意の行を責めず。然る所以は、此の舎利弗、大衆の中に極めて清浄為りて、瑕穢有る無し。今、此の衆中、最小の下坐も、須陀洹の道を得て、必ず当に上(か)み不退転の法に及ぶべし。是れを以ての故に、我れ此の衆を責むるを怨みず」と。（一時、仏在舎衛国東苑鹿母園中、与大比丘衆五百人俱。是時世尊、七月十五日、於露野地敷座、比丘僧前後圍遶。仏告阿難曰、汝今於露地速撃揵椎。所以然者、今七月十五日、是受歳之日。是時尊者阿難、右膝著地、長跪叉手、便説此偈、浄眼無与等、無事而不練。智慧無染著、何等名受歳。爾時世尊、復以偈報阿難曰、受歳三業浄。身口意所作。両両比丘対、自陳所作短。還自称名字、今日衆受歳。我亦浄意受。唯願原其過。爾時阿難、復以偈問其義曰、過去恒沙仏、辟支及声聞、尽是諸仏法、独是釈迦文。爾時仏、復以偈報阿難曰、恒沙過去仏、弟子清浄心、皆是諸仏法、非今釈迦文。辟支無此法、無歳無弟子。独逝無伴侶、不与他説法。当来仏世尊、恒沙不可計。彼亦受此歳、如今瞿曇法。是時尊者阿難、聞此語已、歓喜踊躍、不能自勝、即昇講堂、手執揵椎、並作是説、我今撃此如来信鼓、諸有如来弟子衆者、尽当普集。爾時、復説此偈、降伏魔力怨、除結無有餘、露地撃揵椎。比丘聞当集。諸欲聞法人、度流生死海、聞此妙響音、尽当運集此。爾時尊者阿難、已撃揵椎、至世尊所、頭面礼足、在一面住、白世尊言、今正是時、唯願世尊何所敕使。是時世尊、告阿難曰、汝随次坐。如来自当知時。是時世尊、坐于草座告諸比丘、汝等尽当坐于草座。諸比丘対曰、如是世尊、時諸比丘、各坐草座。是時世尊、黙然観諸比丘已、便敕諸比丘、我今欲受歳。我無過咎於衆人乎。又不犯身口意。如来説此語已、諸比丘黙然不対。是時復再三告諸比丘、我今欲受歳。然我無過於衆人乎。是時尊者舎利弗、即従坐起、長跪叉手、白世尊言、諸比丘衆、観察如来、無身口意過。所以然者、世尊今日不度者度、不脱者脱、不般涅槃者令般涅槃、無救者為作救護、盲者作眼目、為病者作大医王、三界独尊無能及者、最尊最上、未起道意者使発道意、衆人未寤尊令寤之、未聞法者使令聞之、為迷者作径路、恒以正法。以此事縁、如来無咎於衆人、亦無身口意過。是時舎利弗、白世尊言、我今向如来自陳。然無咎於如来及比丘僧乎。世尊告曰、汝今舎利弗、都無身口意所作非行。所以然者、汝今智慧無能及者。種種智慧、無量智慧、無辺之智、無与等智、疾智捷智、甚深之智、平等之智、少欲知足、楽静之処、多諸方便、念不錯乱、総持三昧、根原具足、戒成就、三昧成就、智慧成就、解脱成就、解脱見慧成就、勇悍能忍、所説無悪、不為非法、心性庠序、不行卒暴、猶如転輪聖王最大太子、当紹王位、転於法輪。舎利弗亦如是、転於無上法輪。諸天、世人及龍鬼魔、若魔天、本所不転。汝今所説、常如法義、未曾違理。是時舎利弗、白仏言、此五百比丘、尽当受歳。此五百人、尽無咎於如來乎。世尊告曰、亦不責此五百比丘身口意行。所以然者、此舎利弗、大衆之中極為清浄、無有瑕穢。今此衆中最小下坐、得須陀洹道、必当上及不退転法。以是之故、我不怨責此衆。

（桐山大幹）

【一七四】

【一七五】戒臘

①同法臘。

＊

法臘に同じ。

＊

○同法臘＝『象器箋』【一七四】「法臘」を参照のこと。

②忠曰、自受具足戒、同大僧、歸僧堂辨道、安居滿而受法歳。故凡爲僧者、從此年數去、言戒臘幾多。或言坐幾夏也。

＊

忠曰く、「具足戒（＝出家した比丘・比丘尼が守る戒）を受けて自り、大僧（＝具足戒を受けて比丘となった僧）に同じく、僧堂に歸して辨道（＝仏道を一心に修行すること）し、安居滿じて法歳（＝具足戒を受けて以後、安居を過ごした年数）を受く。故に凡そ僧と爲る者は、此の年從り數え去って、『戒臘は幾多』と言い、或いは『幾夏に坐す』と言うなり」と。

＊

○忠曰…或言坐幾夏也＝文中の事項のうち、【八七四】「辨道」・【六一七】「安居」・【一七六】「法歳」は、『象器箋』の中に立項されている。

③舊説曰、古者以安居禁足數幾臘。僧傳所謂、世壽若干、法臘若干、是也。今時不必然。但自剃度年數爲幾臘而已。

＊

舊説に曰く、「古は安居禁足（＝安居の僧が道場の外に出ることを禁ずること）を以て幾臘なるかを數う」と。僧傳に所謂る『世壽若干』『法臘若干』とは、是なり。今時は必ずしも然らず。但だ剃度（＝剃髪し得度すること）の年自り數えて幾臘と爲すのみ。

＊

○舊説曰…但自剃度年數爲幾臘而已＝典拠未詳。

④忠曰、從爲僧數夏臘、亦有例證。如雲峯悅禪師、七歳剃度。佛祖通載［十八ノ四十四丈］書云、住世六十六年、爲僧五十九夏。〈此止。〉豈七歳非年滿、而受具耶。

＊

忠曰く、「僧と爲りて從り夏臘（＝法臘）を數うるにも、亦た例證有り。雲峯の悅禪師の如きは、七歳にして剃度す。『佛祖通載』［十八の四十四丈］に書して云く、『住世六十六年、僧と爲りて五十九夏なり』と。〈此こに止まる。〉豈に七歳、［出家に適した］年滿つるに非ずして、受具せんや」と。

＊

○佛祖通載［十八ノ四十四丈］書云…爲僧五十九夏＝『仏祖歴代通載』巻一八「雲峰文悅」条（T49-668a）に全く同じ文章が見える。

（桐山大幹）

【一七六】法歳

①比丘以七月十五日、受法歳。見自恣處。義同法臘也。

＊

比丘、七月十五日を以て法歳を受く。「自恣」の處に見ゆ。義、「法臘」に同じ。

＊

○文中「自恣」は【一七三】、「法臘」は【一七四】に見える。

②釋氏要覽［下十七丈］云、夏臘即釋氏法歳也。凡序長幼、必問夏臘。多者爲長。故云　天竺以臘人為驗焉。經音疏、增輝記、皆云、臘接也。〈蔡邕獨斷云、臘者、歳之終也。晉博士張亮議云、臘接也。新故交接。〉俗謂臘之明日、爲初歳也。今釋氏自四月十六日前安居入制、至七月十五日、爲受臘之日、若俗歳除日也。至十六日、是五分法身生養之日。名新歳也。自夏九旬。統名法歳矣。

＊

『釋氏要覽』［下十七丈］に云く、「夏臘は即ち釋氏の法歳なり。凡そ長幼を序するに、必ず夏臘を問う。多き者を長と爲す。故に云く、『天竺は、臘人を以て驗と爲す』と。『經音疏』、『增輝記』、皆な云う、『臘は接なり』と。〈蔡邕の『獨斷』に云く、「臘は、歳の終わりなり」と。晉の博士、張亮議云く、「臘は接なり。新と故と交接す」と。〉俗に臘の明日を謂いて、初歳と爲す。今、釋氏、四月十六日の前安居自り制に入りて、七月十五日に至って、受臘の日と爲す。俗の歳除日の若し。十六日に至りて、是れ五分法身の生養の日なれば、新歳と名づく。夏九旬自り、統べて法歳と名づく」と。

○釋氏要覽［下十七丈］云、夏臘即釋氏法歳也…名新歳也。自夏九旬。統名法歳矣＝『釈氏要覧』巻下（T54-298c）に全く同文が見える。

③四分律［三十七ノ七丈］云、前安居者、欲自恣。後安居者、不知得自恣不、佛言聽受自恣、住待日足。前安居人、自恣已數歳。後安居人、不知得數歳不。佛言、不應三月未足。便數歳。

『四分律』［三十七の七丈］に云く、「『前安居の者、自恣を欲す。後安居の者、知らず、自恣を得てんや不や』と。佛言く、『自恣を受くるを聽す。住して日の足るを待て』と。『前安居の人、自恣已わりて歳を數う。後安居の人、知らず、歳を數うることを得んや不や』と。佛言う、『應に三月未だ足らずして、便ち歳を數うべからず』と」

○四分律［三十七ノ七丈］云…不應三月未足。便數歳＝『四分律』巻三七に、「前安居者、欲自恣。後安居者、不知得自恣不。《諸比丘以此事白佛。》佛言、聽受自恣。住待日足。前安居人、自恣已數歳。後安居人、不知得數歳不。《諸比丘以此事白佛。》佛言、不應三月未足便數歳」（T22-25b）と、《　》の部分以外、同文が見える。

（池田織隆）

【一七七】八朔

①鏡堂圓禪師、建仁録［廿二丈。○同廿六丈］八月旦上堂云、扶桑八月初一、古謂天中佳節。各祈妖怪潛蹤、皆願口舌消滅。〈云云。〉

＊

『鏡堂の圓禪師、建仁の録』［廿二丈。○同廿六丈］八月旦（＝一日）の上堂に云く、「扶桑（＝

日本）八月初一は、古より天中の佳節と謂う。各おの妖怪の潛蹤（＝湮滅する）せんことを祈り、皆な口舌の消滅（＝口舌によって生じる災いの消滅）を願う〈云云。〉」と。

＊

○鏡堂圓禪師、建仁録［廿二丈。○同廿六丈］八月旦上堂云…皆願口舌消滅、云云＝「鏡堂円禅師」とは、鎌倉時代に来日した臨済宗の中国人僧、鏡堂覚円（一二四四～一三〇六）のこと。無準師範の法嗣である環渓惟一に参じ、その法を嗣いだ。鎌倉円覚寺や建長寺、京都建仁寺に住した。『鏡堂和尚語録』「鏡堂和尚住山城州建仁禅寺語録（正安二年十二月）」（花園大学図書館所蔵本・Z1-406-1、今津文庫・4603号）に全く同じ文章が見える。『鏡堂和尚語録』は、早稲田大学「古典籍総合データベース」でも公開されている。

②　忠曰、八朔為天中節、蓋日本傳習耶。　月令廣義［正月五ノ十四丈］云、道書正月一日、天中節會之辰、獻壽之日。又［五月令十三丈］云、提要録五月五日午時、爲天中節。

＊

忠曰く、「八朔を天中節と爲すは、蓋し日本の傳習なるか」と。　『月令廣義』［正月五の十四丈］に云く、「道書（＝道教の書物）に、『正月一日の天中節會の辰、壽を獻むる（＝長寿を祝福する）の日なり』と」と。又た［五月令十三丈］云く、「『提要録』に『五月五日の午時（＝正午）、天中節と爲す』と」と。

＊

○月令廣義［正月五ノ十四丈］云…爲天中節＝引用のうち、「道書正月一日、天中節會之辰、獻壽之日」の部分は、『月令広義』巻五「正月令・日次」の「天中節」条（四庫全書存目叢書本）に、「提要録五月五日午時、爲天中節」の部分は、同・巻一〇「五月令・日次」の「天中節」条（同上）に、それぞれ同文が見える。「道書」は道教の書のことと考えられるが、具体的に如何なる書を指すのか、また、『提要録』が如何なる書であるのかは未詳。

③漢制攷［二ノ十九丈］云、法言膢臘注、膢八月旦也。今河東俗、奉以爲大節、祭祀先人也。

〈楊子法言　問道篇注、光曰、膢落侯切。〉

＊

『漢制攷』［二の十九丈］に云く、「『法言』の『膢臘』の注に、『「膢」は八月旦（＝一日）なり。今、河東（＝山東省）の俗は、奉じて以て大節と爲し、先人を祭祀するなり』と」と。

〈楊子『法言』「問道篇」の注に、「光曰く、『膢』は、落侯の切（＝反切）なり』と」と。〉

＊

○漢制攷云…祭祀先人也〈楊子法言…膢落侯切〉＝王応麟（一二二三～一二九六）の『漢制攷』巻二に全く同じ文章が見える（四庫全書本）。本書は、早稲田大学「古典籍総合データベース」で公開されており、早稲田大学所蔵本では、当該個所は「十五丁裏」である。『法言』は、前漢の揚雄（紀元前五三～後一八）の著書で、「論語」に擬し、問答形式で儒教思想を説く。「膢八月旦也…祭祀先人也」「光曰、膢落侯切」は、共に、『法言』巻三「問道篇」の「若牛羊用人、則狐狸螻蟘不膢臘也歟」に対する注釈に全く同じ文章が見える（四庫全書本）。

④月令廣義［八月ノ十五ノ十一丈］云、音義冀州北、八月朔作飲食爲膢。俗曰膢臘。

＊

『月令廣義』［八月の十五の十一丈］に云く、「音義に『冀州の北にては、八月朔に飲食を作すを『膢』と爲す。俗に『膢臘』と曰う』と」と。

＊

○月令廣義［八月ノ十五ノ十一丈］云…俗曰腰臘＝『月令広義』巻一五「八月令・日次」の「腰臘」条（四庫全書存目叢書本）に同文が見える。

⑤　忠曰、八朔腰之説、如此著矣。然公事根源云八朔風俗、此事更無本説。〈止此。〉何耶。

＊

忠曰く、「八朔の腰の説、此くの如く著し。然れども『公事根源』に『八朔の風俗、此の事、更に本説無し』〈此こに止まる。〉と云うは、何ぞや」と。

＊

○然公事根源云八朔風俗、此事更無本説＝『公事根源』は、室町時代に一条兼良（一四〇二～一四八一）によって書かれた有職故実の書。『公事根源』八月の章に「八朔風俗」という項があり、そこには、「この事はさらに本説なし。又た正礼にもあらず、堅固世俗之風儀なり」云々と記されている。本書は、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

（花岡博芳）

【一七八】授衣節

鏡堂圓禪師建仁録［廿一丈。○又十六丈］授衣節上堂云、人間九月授衣時、破綻禪和猶未知、趁暖急須先補綴、待寒方覺已遲遲。

＊

鏡堂圓禪師の『建仁録』［廿一丈。○又た十六丈］授衣節の上堂に云く、「人間の九月は授衣の時なるに、破綻（＝衣類の縫い目がほころびる）の禪和（＝修行僧）は猶お未だ知らず、暖を趁て急ぎ須く先ず補綴（＝衣類などの破れを繕う）すべし、寒を待ちて方めて覺ゆるも已に遲遲たることを」と。

＊

○鏡堂圓禪師建仁録授衣節上堂云…待寒方覺已遲遲＝鏡堂覚円（一二四四～一三〇六）は、蜀（四川省）出身の臨済宗の僧。詳しくは、【一七七】「八朔」の語注を参照。『鏡堂和尚語録』所収の「鏡堂和尚住山城州建仁禅寺語録（正安二年十二月）」（花園大学図書館所蔵本・Z1-406-1、今津文庫・4603号）に全く同じ文章が見える。早稲田大学「古典籍総合データベース」でも公開されており、閲覧が可能である（『鏡堂録』巻一・画像五〇）。

（桐山大幹）

【一七九】冬安居

①和漢禪林、夏安居之外、坐冬安居。即以十月十六日結、到明年正月十五日。以謂其便于禪坐、勝夏安居焉。既爲古矣。行事鈔云、律通制三時。〈前夏安居處引。〉故知佛制亦有冬安居也。

＊

和漢（＝日本と中国）の禪林、夏安居の外に、冬安居に坐す。即ち十月十六日を以て結して、明年の正月十五日に到る。以謂えらく、其れ禪坐に便あり、夏安居に勝れりと。既に古を爲す。『行事鈔』に云く、「律には通じて三時（＝春・夏・冬）を制す」と。〈前の夏安居

の處に引く。〉故に佛制にも亦た冬安居有るを知るなり。

＊

○行事鈔云、律通制三時＝【一六六】「夏安居」⑦で引用しているとおり、唐代の道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』巻一「安居策修篇第十一」（T40-38a）に拠る。

②梵網經［下巻］故入難處戒［第三十七戒］中云、若佛子、常應二時頭陀、冬夏坐禪、結夏安居。常用十八種物、〈經具列〉常隨其身。頭陀者、從正月十五日、至三月十五日、八月十五日、至十月十五日。是二時中、此十八種物、常隨其身、如鳥二翼。

＊

『梵網經』［下巻］「故入難處戒」［第三十七戒］の中に云く、「若佛子、常に應に二時（＝正月十五日から三月十五日までと八月十五日から十月十五日までの二時）に頭陀（＝托鉢）し、冬夏に坐禪し、結夏に安居すべし。常に十八種の物を用い、〈（梵網）經に具に列ぬ〉常に其の身に隨うべし。頭陀は、正月十五日從り、三月十五日に至るまで、八月十五日より十月十五日に至るまでにせよ。是の二時の中に、此の十八種の物、常に其の身に隨えんこと、鳥の二翼の如くにすべし」と。

＊

○梵網經［下巻］故入難處戒［第三十七戒］中云…如鳥二翼＝『梵網経』巻下（梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品第十巻下）（T24-1008a）に拠る。「十八種物」とは、「原始仏教の僧団以来、僧の故人所有物は六物とされていたが、大乘仏教の僧が常に身にしたがえるべき十八種の持ち物のことで、『梵網経』に述べられている」（『中村』p.660）。①楊枝 ②澡豆（手足や身体を洗うために用いる洗い粉）③大衣（説法などの時に着る九条以上の袈裟）④七条衣 ⑤五条衣 ⑥餅（手を清めるための水瓶）⑦鉢（応量器）⑧坐具 ⑨錫杖 ⑩香炉 ⑪漉水嚢（飲用の水を漉して虫などを除く布製の袋）⑫手巾 ⑬刀子 ⑭火燧（火打ち石）⑮鑷子（毛抜き）⑯縄床（折り畳み椅子）⑰経律 ⑱仏像と菩薩像、以上の十八種の持ち物。この条の引用では、「十八種物」の列挙が省略されているが、たとえば、永平道元の『正法眼蔵』「洗面」に引用される同文では「十八種物」を楊枝から菩薩形像まで略すことなく記述して引用している（T82-207c、岩波文庫本③ p.131）。

③忠曰、蓋言行頭陀、可於夏冬二安居之間。其云從正月十五日、便可知有冬安居也。冬安居了之明日、始頭陀也。

＊

忠曰く、「蓋し頭陀（＝托鉢）を行ずること、夏冬の二安居の間に於いてす可きことを言う。其の「正月十五日從り」と云えば、便ち冬安居有るを知る可きなり。冬安居了わっての明日（＝次の日）、始めて頭陀するなり」と。

④永平道元和尚［眼藏七十五ノ五丈安居章］云、梵網經中、雖有冬安居文、其法不傳。但九夏安居法傳焉。

＊

永平の道元和尚［『眼藏』七十五の五丈、安居章］云く、「『梵網經』の中に、冬安居の文有りと雖も、其の法傳わらず。但だ九夏安居の法のみ傳われり」と。

＊

○永平道元和尚［眼藏七十五ノ五丈安居章］云…但九夏安居法傳焉＝『正法眼蔵』「安居」（T82-262a、岩波文庫本③ p.428）にほぼ同文が見える。『禅学』の「正法眼蔵編輯一覧」（p.580）によれば、「安居」章が七十五章であるのは、卍山道白が貞享元年（一六八四）に加賀大乘寺で編輯開版した卍山本だけであ

り、これに拠ると思われる。

⑤榮西和尚興禪護國論［下ノ九丈］云、夏冬安居、謂四月十五日結夏、七月十五日解夏。又十月十五日受歳、正月十五日解歳。二時安居、竝是聖制也。不可不信行。我國此儀絶久矣。大宋國比丘者、二時安居無闕怠。不安居而稱夏臘之二名、佛法中可笑也。

＊

榮西和尚の『興禪護國論』［下の九丈］に云く、「夏冬の安居とは、四月十五日の結夏、七月十五日の解夏、又た十月十五日の受歳、正月十五日の解歳を謂う。二時（＝夏・冬）の安居は、竝びに是れ聖制なり。信行せざる可からず。我が國にては此の儀の絶すること久し。大宋國の比丘は、二時の安居闕怠すること無し。安居せずして夏・臘の二名を稱するは、佛法の中に笑う可きなり」と。

＊

○榮西和尚興禪護國論［下ノ九丈］云…佛法中可笑也＝『興禪護國論』（T80-14c~15a）にほぼ同文が見えるが、「仏法中可笑也」の部分は「仏法中所笑也（仏法の中にて笑う所なり）」（15a）となっている。

⑥　忠曰、言十月十五日受歳者、恐未曉增壹七月十五日受歳之説耶。

＊

忠曰く、「〔『興禪護国論』に〕『十月十五日の受歳』と言うは、恐らく未だ『増壹』の七月十五日の受歳の説を曉らざるか」と。

＊

○増壹七月十五日受歳之説＝『増壹阿含経』巻二四「善聚品第三十」に「是の時世尊、七月十五日、露野地に於いて座を敷き、比丘僧、前後に圍遶す。仏、阿難に告げて曰く、『汝今ま露地に於いて、速やかに揵椎を撃て。然る所以は、今ま七月十五日は是れ受歳の日なればなり』と（是時世尊、七月十五日、於露野地敷座、比丘僧前後圍遶。仏告阿難曰、『汝今於露地、速撃揵椎。所以然者、今七月十五日是受歳之日』）」（T2-676b~c）とあるのに拠る。「受歳」については、『中村』に「①比丘が夏安居を終えて一法臘を増すことをいう。また、安居の後の自恣をいう。雨安居の旧訳。②禅宗で、各安居の初めをいう」（p.638）とある。「可笑」は「嘲笑すべき」（『漢辞海』p.227）という意味。

⑦五燈會元［十一ノ二十九丈］第二世寶壽和尚〈失名。嗣寶壽沼。〉章云、在先寶壽爲供養主。壽問、父母未生前、還我本來面目來。師立至夜深、下語不契。翌日辭去。壽曰、汝何往。師曰、昨日蒙和尚設問、某甲不契。往南方、參知識去。壽曰、南方禁夏不禁冬。我此間禁冬、不禁夏。汝且作街坊過夏。若是佛法、闤闠之中、浩浩紅塵、常説正法。師不敢違。〈傳燈廣燈、第二世寶壽章、不收此縁。〉

＊

『五燈會元』［十一の二十九丈］「第二世の寶壽和尚〈名を失す。寶壽の沼に嗣ぐ。〉」章に云く、「先の寶壽に在って供養主（＝供養を施主に募る役職）と爲る。壽問う、『父母未生前、我に本來の面目を還し來たれ』と。師、立って夜深けに至るまで、下語するも契わず。翌日、辭し去らんとす。壽曰く、『汝、何にか往く』と。師曰く、『昨日、和尚の設問を蒙るも、某甲、契わず。南方に往きて、知識に參じ去らん』と。壽曰く、『南方には夏を禁じて冬を禁ぜず。我が此間は冬を禁じて夏を禁ぜず。汝、且らく街坊（＝山門外に出て勧化に当たる役職）と作って夏を過ぎよ。若し是れ佛法ならば、闤闠（＝街）の中の、浩浩たる紅塵、常に正法を説く』と。師、敢えて違わず」と。〈『傳燈』『廣燈』の「第二世寶壽」章、此の縁を收めず。〉

＊

○五燈會元［十一ノ二十九丈］…師不敢違＝『五燈会元』巻一一「宝寿和尚（第二世）」章（X80-228b~c）に同文が見える。末尾の割注の「伝燈」とは『景徳伝燈録』のことで、無著道忠の指摘通り、巻一二「第二世宝寿和尚」章（T51-299a）は、この話を収録していない。『廣燈』とは『天聖廣燈録』のこと。『廣燈録』巻一四「第二代宝寿禅師」章には「在先宝寿処為供養主、得数年。一日、宝寿問云、『汝不用下』」（X78-484b）とあって、「在先宝寿処為供養主」で始まる同様の文章が引用されているが、細部で異なる。第二世宝寿和尚の師である宝寿沼は、臨済義玄（？～八七六）の法嗣。「供養主」は、【五一二】に立項されている。

⑧大隋眞禪師録［古宿卅五ノ九丈］云、老僧行脚時、看他眼目稍似根性有些些器量、方欲過一夏或一冬。〈詳于參請門偏參處〉

＊

『大隋眞禪師録』［『古宿』卅五の九丈］に云く、「老僧行脚の時、他（＝指導者）の眼目、稍や根性に、些些（＝わずか）の器量有るに似たるを看て、方に一夏或いは一冬を過さんと欲す」と。〈「參請門」の「偏參」の處に詳らかなり〉。

＊

○大隋眞禪師録［古宿卅五ノ九丈］云…方欲過一夏或一冬＝「大隋真」とは、長慶大安の法嗣で大随山（四川省）に住した法真（八三四～九一九）のこと（『禅学』p.1135）。『古尊宿語録』巻三五「大随開山神照禅師語録」の「祇如老僧行脚時、不揀叢林有供養無供養処、祇要看他眼目稍似根性有些些器量、方欲過一夏或一冬」（X68-231a）に拠る。末尾の割注に「詳于參請門偏參処」とある通り、【八七三】「偏參」に更に詳しい引用が見られる。

⑨月江印禪師再住澱山録［七丈］解制上堂云、南方禁夏不禁冬、北方禁冬不禁夏。

＊

月江の印禪師の『再住澱山録』［七丈］解制上堂に云く、「南方には夏を禁じて冬を禁ぜず、北方には冬を禁じて夏を禁ぜず」と。

＊

○月江の印禪師再住澱山録［七丈］解制上堂云…北方禁冬不禁夏＝「月江印」とは、元代の月印正印（生卒年不詳）のこと。虎巌浄伏の法を嗣いだ臨済宗虎丘派の禅僧（『禅学』p.526）。『月江正印禅師語録』巻上に収められた「月江和尚再住澱山禅寺語録」に「石頭和尚云、『言語動用没交渉』。薬山和尚云、『直得非言語動用、亦没交渉』。南方禁夏不禁冬、北方禁冬不禁夏。一句子針箭不入、一句子石上栽花。雞寒上樹、鴨寒下水。一塵飛而翳天、一芥堕而覆地、一葉落而知秋。衲僧家、主丈頭上、青草連天、劉陽洞山、在你脚底」（X71-115a~b）とあるのに拠る。

⑩又覩貨邏國、以十二月十六日安居。　西域記［一ノ十四丈］云、覩貨邏國氣序既温、疾疫亦衆。冬末春初、霖雨相繼。故此境已南、濫波已北、其國風土、竝多温疾。而諸僧徒、以十二月十六日入安居、三月十五日解安居。斯乃據其多雨。亦是設教隨時也。

＊

又た覩貨邏國は、十二月十六日を以て安居す。『西域記』［一の十四丈］に云く、「覩貨邏國、氣序（＝気候）既に温にして、疾疫も亦た衆し。冬の末より春の初めまで、霖雨相い繼ぐ。故に此の境の已南より、濫波の已北までは、其の國の風土、竝びに温疾多し。而して諸もろの僧徒は、十二月十六日を以て安居に入り、三月十五日に安居を解く。斯れ乃ち其の雨多きに據りてなり。亦た是れ教を設くること時に隨うなり」と。

＊

○西域記［一ノ十四丈］云…亦是設教隨時也＝『大唐西域記』巻一に「鉄門（＝デルベントの北西）を出でて、覩貨邏国に至る。〈旧に『吐火羅国』と曰う。訛なり。〉其の地、南北千余里、東西三千余里なり。東は葱嶺（＝パミール）に阨がれ、西は波剌斯（＝ペルシア）に接す。南は大雪山（＝ヒンドゥークシュ）、北は鉄門に拠る。縛芻大河（＝アムダリヤ川）、中に境して西流す。数百年自り、王族、嗣を絶ち、酋豪、力めて競い、各おの君長を擅にし、川に依り険に拠り、分かちて二十七国を為す。野を画して区分すと雖も、総て突厥に役属す。気序は既に温にして、疾疫も亦た衆し。冬の末より春の初めまで、霖雨相い継ぐ。故に此の境の已南より、濫波（＝濫波国・北インド）の已北まで、其の国の風土、並びに温疾多し。而して諸もろの僧徒は、十二月十六日を以て安居に入り、三月十五日に安居を解く。斯れ乃ち其の雨の多きに拠り、亦た是れ教を設くるに時に随うなり（出鉄門、至覩貨邏国〈旧曰吐火羅国。訛也〉。其地南北千余里、東西三千余里。東阨葱嶺、西接波剌斯、南大雪山、北拠鉄門。縛芻大河、中境西流。自数百年、王族絶嗣、酋豪力競、各擅君長。依川拠険、分為二十七国。雖画野区分、総役属突厥。気序既温、疾疫亦衆。冬末春初、霖雨相継。故此境已南、濫波已北、其国風土、並多温疾。而諸僧徒、以十二月十六日入安居、三月十五日解安居。斯乃拠其多雨、亦是設教随時也）」（T51-872a）とあるのに拠る。水谷真成訳『大唐西域記』によれば、覩貨邏国の領域は、玄奘に従えば、今日のアフガニスタンの北部、東は葱嶺（＝パミール）、西は波剌斯（＝ペルシア）、北は鉄門（＝デルベントの北西）、南は大雪山（＝ヒンドゥークシュ）となるが、この範囲は決して一般的なものではなく、諸家の理解は必ずしも一定しているわけではない（《中国古典文学大系》第二二巻・平凡社・一九七一・p.33）。

⑪雲棲山房雑録［二ノ十六丈］即事詩云、春開講演席、掛鉢聲相鳴。秋結禪那期、孤存二三僧。

＊

雲棲の『山房雑録』［二の十六丈］の「即事」の詩に云く、「春に講演の席を開けば、掛鉢の聲相い鳴る。秋に禪那の期を結べば、孤り二三の僧を存す」と。

＊

○雲棲山房雑録［二ノ十六丈］即事詩云＝「雲棲」とは、明代末期の雲棲袾宏（一五三五～一六一五）のこと。『雲棲法彙』所収『山房雑録』巻二の「即事〈十首〉」其九に「春開講演席、掛鉢声相鳴。秋結禅那期、孤存二三僧。終身披輿図、曽不挙足行。嗟哉復嗟哉、真贋何時明」（J33-110a・近世漢籍叢刊本・p.4858）とあるのに拠る。

⑫　忠曰、由此雲棲結秋安居也。

＊

忠曰く、「此れに由れば雲棲は秋安居を結するなり」と。

（花岡博芳）

【一八〇】冬夜

①忠曰、冬至前夜也。

＊

忠曰く、「冬至の前夜なり」と。

②幻住清規［七丈］、十一月冬至云、其冬夜、土地堂念誦、及冬朝講禮。

＊

『幻住清規』［七丈］、「十一月冬至」に云く、「其の冬夜には、土地堂念誦（＝寺院を守る土

地神や伽藍神に対し、その加護を祈る諷経）、及び冬朝（＝冬至の日の朝）には禮を講ず（＝冬朝を賀する儀式を行う）」と。

＊

○幻住清規［七丈］十一月冬至云…及冬朝講禮＝『幻住庵清規』の「十一月」（X63-573b）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【三三】「土地堂」・【九九八】「念誦」は、『象器箋』の中に立項されている。

（堀野真澄）

【一八一】

【一八二】冬朝

①忠曰、冬至之朝也。見于冬夜。又賀冬義見四節處。

＊

忠曰く、「冬至の朝なり。『冬至』に見ゆ。又た冬を賀する義は『四節』の處に見ゆ」と。

＊

○忠曰…又賀冬義見四節處＝【一八〇】「冬夜」・【一六五】「四節」参照。

（千坂成也）

【一八三】分歳

①聯燈會要［廿七ノ廿七丈］北禪賢禪師章云、歳夜小參。示衆云、年窮歳盡、無可與諸人分歳。且烹箇露地白牛、炊黍米飯、向骨柮火、唱村田樂。何故免見倚他門戸、傍他牆、剛被時人喚作郎。便下座。

＊

『聯燈會要』［廿七の廿七丈］「北禪の賢禪師」の章に云く、「歳夜の小參。衆に示して云く、『年窮まり歳盡き、諸人と分歳す可き無し。且く箇の露地の白牛を烹て、黍米飯を炊き、骨柮の火に向かって、村田樂を唱う。何故ぞ、他の門戸に倚り、他の牆に傍って、剛いて時の人に喚んで郎と作さるることを見ることを免るる』と。便ち下座す」と。

＊

○聯燈會要［廿七ノ廿七丈］北禪賢禪師章云…便下座＝『宗門聯燈会要』巻二七（X79-240a）に同文が見える。また、文中の事項のうち、【八一四】「小參」が『象器箋』の中に立項されている。

（桐山大幹）

【一八四】年朝

①忠曰、正月朔日也。賀正義、見四節處。

＊

忠曰く、「正月朔日なり。正を賀する義は、『四節』の處に見ゆ」と。

＊

○忠曰…見四節處＝『象器箋』【一六五】「四節」⑤・⑥段を参照のこと。

（桐山大幹）

【一八五】善月

※「善月」は、西村惠信『禅林象器箋抄釈』（禅文化研究所・p.49）に抄釈がある。

①忠曰、此三箇月、特可修善。故正五九爲善月。

＊

忠曰く、「此の三箇月、特に善を修す可し。故に正（＝正月）・五（＝五月）・九（＝九月）を善月と為す」と。

＊

○忠曰…故正五九爲善月＝【一八六】「三長斎月」を併せて参照。

②敕修清規［上一ノ廿四丈］善月云、正五九爲善月。　又云、始由隋開皇三年、詔天下、正五九、并六齋日、各寺建祈祷道場。不得殺生命。取藏經中、有毗沙門天王、毎歳巡按四大部洲。正五九月、治南瞻部洲。故禁屠宰。而唐之藩鎮、毎上任、必犒士卒。不下數萬人、須大烹宰。故以正五九、不上官。爲禁殺也。而俗以爲忌者非。〈開皇詔、依三寶紀、見三長齋月處。〉

＊

『勅修清規』［上一の廿四丈］の「善月」に云く、「正・五・九を善月と為す」と。　又た云く、「始め隋の開皇三（五八三）年由り、天下に詔して、正・五・九、并びに六齋日（＝毎月の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日）に、各寺に祈禱道場を建つ。生命を殺すことを得ず。藏經の中に取るに、毗沙門天王有り、毎歳、四大部洲（＝須弥山の四方の海にある四大洲）を巡按す。正・五・九月は、南瞻部洲（＝四大部洲のうち南方にある人間世界）を治す。故に屠宰（＝家畜を殺して料理すること）を禁ず。而も唐の藩鎮（＝重要地域や辺境に配置された都督府や節度使）、任に上る毎に、必ず士卒を犒うこと、数万人に下らず。須く大いに烹宰（＝料理）すべし。故に正・五・九を以て、官に上らず。殺を禁ずるが為めなり。而るに俗、以て忌と為る者は非なり」と。〈開皇の詔は、『三寶紀』に依る。「三長齋月」の處に見ゆ。〉

＊

○敕修清規［上一ノ廿四丈］善月云…而俗以爲忌者非＝『勅修百丈清規』巻上「善月」条（T48-1114c）に同文が見える。原文では「正五九為善月」の後に「預先一日、維那令堂司行者覆住持報庫司、掛善月牌于殿門前、具経単輪差僧簿、毎日鳴大鐘登殿、看経祝賛終月而畢」とあり、その後に「始由隋開皇三年、詔天下、正五九…而俗以為忌者非」（同上）の文章が続く。文末の細注の〈開皇詔、依三寶紀、見三長齋月處〉の部分、『三宝紀』は『歴代三宝紀』のこと。詳しくは【一八六】「三長斎月」⑬を参照。

③　羣談採餘［十巻○初説出詢蒭録。後引］辨惑類云、正五九月、新官到任、今人多忌、不知所謂。考之、唐時以此三月、斷屠宰。上任必有大宴、宰割遍及下人。縁禁不便。故於正五九不

上任。非其利也。今無禁而不用、至於移居忌之、豈非因襲之弊耶。又一説［此胡汝嘉説、見于代醉。後引］、以正五九月建、乃寅午戌也。寅午戌屬火。臣音爲商。商屬金。恐火之尅於金。故忌之。未知是否。

＊

『羣談採餘』［十巻。初め説いて『詢蒭録』に出づ。後に引く］「辨惑類」に云く、「正・五・九月、新官、任に到る、今人、多く忌むも、所謂を知らず。之を考うるに、唐の時に此の三月を以て屠宰を斷ず。任に上るには必ず大宴有り。宰割（＝「屠宰」に同じ）、遍く下人に及ぶ。禁に縁りて便ならず。故に正・五・九に於いて、任に上らず。其の利に非ざればなり。今ま禁無うして用いざるも、居を移して之を忌むに至る。豈に因襲（＝昔からの慣例に従うこと）の弊に非ずや。又た一説［此れ胡汝嘉の説にして、『代醉』に見ゆ。後に引く］に、『正・五・九月の建、乃ち寅・午・戌なるを以てなり。寅・午・戌は火に属す。臣（＝臣下）の音、商（＝五音の一つ。強くさえて聞こえる音）為り。商は金に属す。火の金を尅せんことを恐る。故に之を忌む』と。未だ是否を知らず」と。

＊

○羣談採餘［十巻○初説出詢蒭録。後引］辨惑類云…未知是否＝明代の倪綰『群談採餘』巻一○「辨惑類」に同文が見える（四庫未収書輯刊本・三輯二九冊）。初出とされる『詢蒭録』一巻は、『説郛続』「弓第十六」、『今献彙言』の各所収本では「闕名撰」となっているが（『京都大学人文科学研究所漢籍目録』p.741・p.785）、明代の陳沂（一四六九～一五三八）が撰した書である（『四庫全書総目提要』）。『四庫全書存目叢書』子一○二・雑家類には、『今献彙言』本が収録されている（子102-308）。「後引」とあるように、【一八六】「三長斎月」⑲を併せて参照。文中に引用された「又一説［此胡汝嘉説、見于代醉。後引］…故忌之」の部分、胡汝嘉は、明代の人。字は懋礼、号は秋宇。江寧の出身。『代醉』とは、明代の張鼎思が撰した『瑯邪代醉編』のこと。『瑯邪代醉編』巻二に「胡太僕汝嘉（＝胡汝嘉）が『火は君の象なれば、臣下、宜しく避くべし』と謂うに至りては、尤も謂われ無し（至胡太僕汝嘉謂火君象、臣下宜避、尤無謂）」（和刻本漢籍随筆集7・汲古書院）とある。関係する全文は【一八六】「三長斎月」22に引かれている。

④

忠曰、寅午戌火、尅商金之説、儒家不曉三長齋月出于佛書、斷屠妨犒宴矣。

＊

忠曰く、「寅・午・戌の火、商金を尅するの説は、儒家、三長齋月は佛書に出でて、断屠、犒宴（＝労いの宴）を妨ぐることを曉さざるなり」と。

⑤教苑清規［上ノ十七丈］云、正五九月、爲三長齋。世稱善月。毎月建祈福道場。提謂經云、諸天、帝釋、太子使者、閻羅鬼神、俱用正五九月旦日、案行王民等爲善惡者。四時交代、歳終三覆、以校與四王。一月六奏、使無枉錯。覆校衆生罪福、作善降祥、不善降殃。自隋開皇三年、詔天下、正五九月、及六齋日、不得殺生命。唐武德二年。詔天下、正五九月、十齋日、不得行刑屠釣。逮今聖朝、遵行尤篤。各寺凡屈斯期、毋或怠也。

＊

『教苑清規』［上の十七丈］に云く、「正・五・九月を『三長齋』と為し、世に『善月』と称す。月毎とに祈福の道場を建つ。『提謂經』に云く、『諸天、帝釈、太子の使者、閻羅鬼神、俱に正・五・九月の旦日（＝一日）を用て、王の民等の善悪を為す者を案行す。四時交代し、歳終に三覆して、以て校べて四王に與う。一月に六たび奏し、枉錯（＝過ち）無からしめ、衆生の罪福を覆校す。善を作れば祥を降し、不善には殃を降す』と。隋の開皇三（五八三）年、天下に詔して、正・五・九月、及び六齋日に、生命を殺すこと得ざらしむ。唐の武德二（六

一九）年、天下に詔して、正・五・九月、十齋日（＝月の一・八・十四・十五・十八・二十三・二十四・二十八・二十九・三十日）に、行刑屠釣（＝刑の執行・屠殺・釣り）を得ざらしむ。今の聖朝（＝元朝）に逮びて、遵行尤も篤し。各寺、凡そ斯の期に屆りて、怠ること或ること毋かれ」と。

＊

○教苑清規［上ノ十七丈］云…毋或怠也＝『増修教苑清規』巻上「善月」条（X57-302c）からの引用である。但し、「毎月建祈福道場」の後、『提謂経』（『教苑清規』は『提爾経』に作る）の引用の前に、「先一日、堂司行者覆住持、両班并挂善月牌於殿前、具経単并置簿差、僧毎日鳴大鐘、登殿看経祝讃、至放鍾下殿、終月列経目具疏、満散」の五十三字が省略されており、『提謂経』も『提爾経』に作られている。『提謂経』は、現存しないが大蔵経の「目録類」に名前が見えており、一巻本と二巻本の二種があったとされる（『仏書解説大辞典』第七巻・p.513）。

（千坂成也）

【一八六】三長齋月

①即善月也。齋義、見雑行類持齋處。

＊

即ち善月（＝一月・五月・九月）なり。齋の義は、「雑行類」の「持齋」の處に見ゆ。

＊

○即善月也。齋義、見雑行類持齋處＝「善月」については、【一八五】を参照。「雑行類持斎処」とは、『禅林象器箋』の「第十四類雑行門」にある【九二七】「持斎」を指す。例えば、【九二七】で引用される『釈氏要覧』巻上「斎」条には「仏の教えでは正午を過ぎれば〔食べ物を〕食べないことを『斎』と名づける（仏教以過中不食名斎）」（T54-274a）とある。

②釋氏要覧［下ノ卅八丈］云、三長月、不空羂索經云諸佛神通之月。智論云、天帝釋、以大寶鏡、從正月照南郯部洲。二月照西洲、至五九月、皆照南洲、察人善惡。故南洲人、多於此月、素食修善。故經［梵網經也］云、年三長齋也。又一説、北方毗沙門天王、巡察四洲善惡、正月至南洲。亦如鏡照。至五九月、皆察南洲故。

＊

『釋氏要覧』［下の卅八丈］に云く、「三長月は、『不空羂索經』に『諸佛の神通の月なり』と云う。『智論（＝大智度論）』に云く、『天帝釋は、大寶鏡を以て、正月從り南郯部洲を照らす。二月に西洲を照らし、五・九月に至りて、皆な南洲を照らし、人の善惡を察す。故に南洲の人、多くは此の月に於いて、素食（＝魚や肉を食べないこと）して善を修む』と。故に經『梵網經』なり」に『年の三長齋』と云うなり。又た一説に、北方の毗沙門天王、四洲の善惡を巡察するに、正月は南洲に至る。亦た鏡の照らすが如し。五・九月に至りて、皆な南洲を察するが故に」と。

＊

○釋氏要覧［下ノ卅八丈］云…至五九月皆察南洲故＝『釈氏要覧』巻下「三長月」（T54-304c）からそのままの引用。文中、『不空羂索経』からの引用は、『不空羂索神変真言経』巻二「秘密心真言品」に「此の法を修むる者は、当に十方一切の諸仏の神通月に於いて修むべし。所謂る正月・五月・九月の、白月の一日より十五日に至るまで、如法清浄に、読誦受持すれば、即ち成就することを得ん（修此法者、当於十方一切諸仏神通月修。所謂正月五月九月、白月一日至十五日、如法清浄、読誦受持、即得成就）」（T20-235a）とあるのに拠る。「白月」は、「月が欠けてから満ちるまでの間。陰暦で各月の一日から十五日に至る間の月をいう」

（『中村』p.1142）。「神通月」については、【一八七】を参照。また、「『智論』に云く」との引用があるが、『大智度論』（T 25）には「六斎日」については見られるものの、「三長斎月」については言及がない。無著道忠による③の指摘を参照。『梵網経』からの「年三長斎」の引用については、同経巻二の「六斎日・年の三長斎月に於いて、殺生劫盗し、斎を破りて戒を犯すを作す者は、軽垢罪を犯すなり（於六斎日年三長斎月、作殺生劫盗、破斎犯戒者、犯軽垢罪）」（T24-1007b）とあるのに拠ったものであろう。

③ 忠曰、智度論無帝釋照鏡之文。〈智論但有六齋日説而已。見六齋日處。〉要覧妄引。

＊

忠曰く、「『智度論』に『帝釋、鏡を照らす』の文無し。〈『智論』には但だ『六斎日』の説有るのみ。『六斎日』の處に見ゆ。〉『要覧』妄りに引く」と。

＊

○忠曰…要覧妄引＝細注に〈見六斎日処〉とあるように、【一九三】「六斎日」を参照。

④ 梵網經［下巻○統紀卅四ノ八丈引之］詐親害生戒中云、於六齋日年三長齋月、作殺生劫盗、破齋犯戒者、犯輕垢罪。

＊

『梵網經』［下巻。『統紀（＝仏祖統紀）』卅四の八丈にも之を引く］「詐親害生戒」の中に云く、「六齋の日・年の三長齋月に於いて、殺生・劫盗、破齋・犯戒を作さば［作す者は］、輕垢罪（＝『梵網経』が説く大乗菩薩戒。三斎月や六斎日に神仏や長老を恭敬し、非法邪妄の事を行わないこと）を犯す」と。

＊

○梵網經［下巻○統紀卅四ノ八丈引］詐親害生戒中云…犯輕垢罪＝『梵網経』巻二に同文が見える（T24-1007b）。また、［統紀卅四ノ八丈引］とあるように、『仏祖統紀』巻三三にも、『梵網経』からの引用として同文が見える（「三長斎」条・T49-320b）。

⑤ 梵網傳奥疏［補忘八ノ廿七丈引］云、三長齋月者、智論説、天帝以大寶鏡、共諸天衆、從正月一日、照南洲、善惡具録。如是二月東、三月北、四月西、五月還至此。九月亦然。

＊

『梵網』傳奥の疏［『補忘（＝梵網経古迹記下巻補忘鈔）』八の廿七丈にも引く］に云く、「三長齋月とは、『智論』に説く、『天帝、大寶鏡を以て、諸もろの天衆と共に、正月一日從り、南洲を照らし、善惡具さに録す。是くの如く二月は東、三月は北、四月は西、五月は還た此に至る。九月も亦た然り』と」と。

＊

○梵網傳奥疏［補忘八ノ廿七丈引］云…九月亦然＝石壁寺沙門伝奥『梵網経記』巻下（X38-266a）に同文が見える。『補忘』とは、定泉『梵網経古迹記下巻補忘鈔』全十巻のこと（以下、『補忘鈔』と略す）。『日本大蔵経』第一九冊《律蔵部》「大乗律章疏」に収録されている。『補忘鈔』巻八「詐親害生戒第十」（日本大蔵経本・p.694b~695a）参照。

⑥ 梵網明曠疏［補忘八ノ廿七丈引］云、年三長月者、正月是衆生現生之初、五月是興盛之中、九月是斂藏之始。

＊

『梵網』明曠の疏［『補忘』八の廿七丈にも引く］に云く、「年の三長月とは、正月は是れ衆生現

生するの初め、五月は是れ興盛するの中、九月は是れ斂藏するの始めなり」と。

＊

○梵網明曠疏［補忘八ノ廿七丈引］云…九月是斂藏之始＝天台沙門の明曠が刪補した『天台菩薩戒疏』巻中（T40-595a~b）、『補忘鈔』巻八「詐親害生戒第十」（日本大蔵経本・p.695a）にも同文が見える。

⑦ 忠曰、釋門正統［四ノ廿一丈○勅修鈔一ノ卅八丈引］舉二説。正是用傳奥明曠疏耳。又明曠義、正依提謂經意。〈次下引。〉又通月令義。〈見于後引鼠璞中。〉斂藏、疏作欲藏、寫訛也。

＊

忠曰く、「『釋門正統』［四ノ廿一丈。『敕修鈔』一の卅八丈にも引く］に二説を舉ぐ。正に是れ傳奥と明曠の疏を用いるのみ。又た明曠の義は、正に『提謂經（＝提謂波利経）』の意に依る。〈次下に引く。〉又た『月令』の義に通ず。〈後に引く『鼠璞』の中に見ゆ。〉『斂藏』を、疏に「欲藏」に作るは、寫訛（＝誤写）なり」と。

＊

○忠曰、釋門正統［四ノ廿一丈○敕修鈔一ノ卅八丈引］舉二説…寫訛也＝『釈門正統』巻四「順俗志」（X75-307c）で「三長月」が取り上げられ、『梵網経記』と『天台菩薩戒疏』の二説が引用されている。『勅修鈔』とは、雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』のことで、その「善月」の項に言及が見える（万治三年刊本・巻一・38a~39b）。「又明曠義、正依提謂経意。〈次下引〉」の部分は、⑪所引の『法苑珠林』が引用する『提謂経』の文章を参照。『提謂経』については、山口大輔「宋代十一世紀にみえる『提謂波利経』の真偽問題」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第三一号・二〇〇九）などに詳しい。また、「又通月令義。見于後引鼠璞中」とあるが、「月令」とは、『礼記』「月令第六」のこと。21 所引の戴埴『鼠璞』が引用する文章を参照。末尾に「斂藏、疏作欲藏、写訛也」とあるのは、『天台菩薩戒疏』巻二の原文が、「九月是欲藏之始」（T40-595b）となっていることに拠る。

⑧梵網私記［補忘八ノ廿七丈引］云、年三長齋者、正月初半、五月上半、九月初半、並是也。

＊

『梵網私記』［『補忘』八の廿七丈にも引く］に云く、「年の三長齋とは、正月の初半、五月の上半、九月の初半、並びに是れなり」と。

＊

○梵網私記［補忘八ノ廿七丈引］云…並是也＝『梵網私記』とは、新羅の元暁が撰述した『梵網経菩薩戒本私記』のことであるが、本書は上巻が現存するのみである（X 38）。現存の上巻は、『梵網菩薩戒経』の初めより、「十重禁戒」の終わりまでを解する。『仏書解説大辞典』第一〇冊（p.238）参照。『補忘鈔』巻八「詐親害生戒第十」に同文が見える（日本大蔵経本・p.695a）。

⑨ 補忘鈔云、既云初半、乃知白月也。法苑珠林［百五ノ二十丈。次ニ引］亦云、從一日、至十五日。

＊

『補忘鈔』に云く、「既に『初半』と云えば、乃ち知んぬ、白月なるを。『法苑珠林』［百五の二十丈。次に引く］にも亦た云く、『一日從り、十五日に至る』と」と。

＊

○補忘鈔云…至十五日＝『補忘鈔』巻八「詐親害生戒第十」にほぼ同文が見える（日本大蔵経本・p.695a）。文中、『法苑珠林』からの「從一日至十五日」の引用は、同書の巻四「月宮部第四」に「初月の一日より十五日に至るまでを、名づけて『白月』と為す（初月一日至十五日、名為白月）」（T53-296c、中華書局校点本① p.110）とあり、また、巻八八「功能部第三」に「三長斎は、何を以てか正しく一日より十五日に至るまでを用ゆる（三長斎、何以正用一日至十五日）」（T53-932c、中華書局校点本⑥ p.2337）とある。無著禅師の書

き入れに［次ニ引］とあるように⑪を参照。

⑩資持記［鈔下三ノ四ノ廿丈］云、年三者、正五九月。冥界業鏡、輪照南洲。若有善惡、鏡中悉現。註或云、天王巡狩四天下、此三月對南洲。又云、此三月、惡鬼得勢之時。故令修善。

＊

『資持記』［『鈔』下の三の四の廿丈］に云く、「年の三とは、正・五・九月なり。冥界の業鏡、南洲を輪照す。若し善惡有れば、鏡中に悉く現ず」と。　註に、或るひと云く、「天王、四天下を巡狩し、此の三月は南洲に對す」と。又た云く、「此の三月は、惡鬼、勢を得るの時なり。故に善を修めしむ」と。

＊

○資持記［鈔下三ノ四ノ廿丈］云…故令修善＝宋代の元照『四分律行事鈔資持記』巻下三（T40-406c）からの引用。本書は、唐代の道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』（T 40）の注釈書であり、『行事鈔』が三巻三十篇になっているのを、そのまま踏襲している。引用部分は、巻下三の四に相当する第二四篇「釈導俗［化方］篇」に見える。［鈔下三ノ四ノ廿丈］の所謂「鈔」とは、和刻本未見のため確定し難いが、恐らく『四分律行事鈔資持記』を指すものと考えられる。『仏書解説大辞典』によれば、本書には、寛文十年と貞享三年の刊本がある（第四冊，p.224）。

⑪法苑珠林［百五ノ廿丈○統紀卅四　八丈畧引］云、提謂經云、提謂長者白佛言、世尊、歳三齋皆有所因。何以正用正月、五月、九月、六日齋用月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日。佛言、正月者、少陽用事。萬神代位、陰陽交精、萬物萌生、道氣養之。故使太子正月一日持齋、寂然行道、以助和氣、長養萬物、故使竟十五日。五月者、太陽用事。萬物代位、艸木萌類、生畢百物。懷妊未成、成者未壽、皆依道氣。故持五月一日齋、竟十五日、以助道氣、成長萬物。九月者、少陰用事。乾坤改位、萬物畢終、衰落無牢。衆生蟄藏、神氣歸本、因道自寧。故持九月一日齋、竟十五日。春者萬物生、夏者萬物長、冬者萬物藏。依道生没。天地有大禁。故使弟子樂善者避禁持齋。救神故爾。長者提謂白佛言、三長齋、何以正月一日至十五日。復言、如何名禁。佛言、四時交代、陰陽易位、歳終三覆以校、一月六奏。三界皓皓。五處録籍。衆生行異、五官典領、校定罪福行之高下、品格萬途。諸天帝釋、太子使者、日月鬼神、地獄閻羅、百萬神衆等、俱用正月一日、五月一日、九月一日、四布案行、帝王、臣民、八夷、飛鳥走獸、鬼龍行之善惡、知與四天王、月八日、十五日、盡三十日、所奏同、無不均天下、使無枉錯。覆校三界衆生罪福多少所屬。福多者、即生天上。即敕四鎮、五官、大王、司命、增壽益算。下閻羅王、攝五官、除罪名、定福祿。故使持是三長齋。是故三覆。八校者、八王日是也。亦是天帝釋、輔鎮、五官、四王、地獄王、阿須倫諸天、案行比校、定生注死、増減罪福多少、有道意無道意、大意小意、開解不開解、出家不出家、案比口數、皆用八王日。何等八王日。謂立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至、是謂八王日。天地諸神陰陽交代、故名八王日。月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、皆是天地用事之日。上下弦、望、朔、晦、皆録命上計之日。故使於此日自守持齋以還、自校使不犯禁、自致生善處。

＊

『法苑珠林』に［百五の廿丈。『統紀』卅四の八丈にも畧引す］云く、「『提謂經』に云く、『提謂長者、佛に白して言さく、「世尊よ、歳の三齋は皆な所因有るべし。何を以てか正しく正月、五月、九月を用い、六日齋に月の八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日を用ゆる」

と。佛の言く、「正月は、少陽、事を用ゆ。萬神、位を代え、陰陽、精を交え、萬物、萌し生ずれば、氣を道いて之を養う。故に太子をして正月一日に持齋して、寂然として道を行ぜしめ、以て和氣を助け、萬物を長養す。故に十五日を竟えしむ。五月は、太陽、事を用ゆ。萬物、位を代え、艸木、類を萌し、百物を生じ畢わる。懐妊は未だ成ぜず、成ずる者は未だ壽しからざるは、皆な道氣に依る。故に五月一日の齋を持して、十五日に竟わり、以て道氣を助けて、萬物を成長す。九月は、少陰、事を用ゆ。乾坤、位を改め、萬物、畢終り、衰落して牢きこと無し。衆生、蟄藏し、神氣、本に歸り、道に因りて自ら寧し。故に九月一日の齋を持して、十五日に竟わらしむ。春は萬物生じ、夏は萬物長じ、冬は萬物藏まる。道に依りて生没す。天地に大禁有り。故に弟子の善を樂しむ者をして避禁し持齋せしむ。神を救うが故に爾り」と。長者提謂、佛に白して言く、「三長齋、何を以てか正月一日より十五日に至れる」と。復た言さく、「如何ぞ『禁』と名づくる」と。佛の言く、「四時交ごも代わり、陰陽、位を易え、歳の終わりに三覆して以て校し、一月に六たび奏す。三界は皓皓たり。五處に籍を録す。衆生の行い異なれば、五官、典領して、罪福の行いの高下を校定し、萬途を品格す。諸もろの天帝釋、太子使者、日月鬼神、地獄の閻羅、百萬の神衆等は、俱に正月一日、五月一日、九月一日を用て、四に布きて、帝王、臣民、八夷（＝八方の異民族）、飛鳥走獣、鬼龍の行いの善惡を案行して、四天王に知らしめ與う。月の八日、十五日、盡三十日、奏する所同じうして、天下に均しからざる無く、枉錯無からしむ。三界の衆生の罪福の多少の屬する所を覆校す。福多き者は、即ち天上に生ず。即ち四鎮、五官、大王、司命（＝人の命数を司る神）に敕して、壽を增し算を益す。閻羅王に下し、五官を攝け、罪名を除き、福祿を定めしむ。故に是の三長齋を持せしむ。是の故に三覆す。八校とは、八王日是れなり。亦た是れ天帝釋、輔鎮、五官、四王、地獄王、阿須倫（＝阿修羅）の諸天、案行し比校し、生を定め死を注し、罪福の多少を增減す。道意有りや道意無きや、大意ありや小意ありや、開解せるや開解せざるや、出家せるや出家せざるやと、口數を案比するに、皆な八王日を用ゆ。何等か八王日。謂く、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至、是れを『八王日』と謂う。天地の諸神と陰陽、交ごも代わる、故に『八王日』と名づく。月の八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日は、皆な是れ天地、事を用ゆるの日なり。上下の弦、望、朔、晦は、皆な録命、計を上つるの日なり。故に此の日に於いて持齋を守る自り以還、自ら校して禁を犯さざらしめ、自ら善處に生ずることを致さしむ」』」と。

＊

○法苑珠林［百五ノ廿丈○統紀卅四 八丈畧引］云…自致生善處＝『法苑珠林』巻八八「功能部第三」に、ほぼ同じ文章が見える（T53-932b~933a、中華書局校点本⑥ p.2536~2538）。典拠の巻数表記には「百五」とあるが、『法苑珠林』は全百巻であり、［巻百五］は誤記かと思われる。文中の『提謂経』については、⑦の注を参照。文中の語句のうち、「五官」は、一般的に、十王のうち、妄語を治する冥官として知られるが、ここに所謂る「五官」とは、『法苑珠林』巻七「典主部第五」所引の『浄度三昧経』に「但し五官の名字を列ぬれば、一は鮮官殺を禁じ、二は水官盗を禁じ、三は鉄官婬を禁じ、四は土官両舌を禁じ、五は天官酒を禁ず（但列五官名字者、一者鮮官禁殺、二者水官禁盗、三者鉄官禁婬、四者土官禁両舌、五者天官禁酒）」（T53-327b、中華書局校点本① p.245）とあるように、殺・盗・婬・両舌・飲酒の五悪を制する冥官のことをいう。したがって、「五処録籍」の「五処」とは、具体的には、「鮮官・水官・鉄官・土官・天官の五冥官の処」を指すのであろう。

⑫　已下録三齋月斷刑屠。

已下は三齋月の刑屠（＝刑殺と屠殺）を斷つことを録す。

＊

⑬歴代三寶紀［十二ノ二十六丈〇稽古二ノ五十七丈引］大隋録云、開皇三年、降勅旨云、好生惡殺、王政之本。佛道垂教、善業可憑。稟氣含靈、唯命爲重。宜勸勵天下、同心救護。其京城及諸州官、立寺之所、毎年正月、五月、九月、恒起八日至十五日、當寺行道。其行道之日、遠近民庶、凡是有生之類、悉不得殺。

＊

『歴代三寶紀』［十二の二十六丈。『稽古』二の五十七丈にも引く］「大隋の録」に云く、「開皇三（五八三）年、勅旨を降して云く、『生を好み殺を惡むは、王政の本なり。佛道、教を垂る、「善業に憑む可し。稟氣含靈（＝生きとし生けるものたち）、唯だ命を重しと爲す」と。宜しく天下に勸勵して、心を同じくして救護すべし。其れ京城（＝長安）及び諸もろの州官の、寺を立つるの所、毎年正月、五月、九月、恒に八日より起こして十五日に至るまで、當寺に行道せよ。其の行道の日、遠近の民庶、凡そ是れ有生の類は、悉く殺すことを得ず』と」と。

＊

〇歴代三寶紀…悉不得殺＝『歴代三宝紀』巻一二「衆経法式」条（T49-108a）に同文が見え、『釈氏稽古略』巻二（T49-807c）にも引用されている。

⑭陸游老學菴筆記［八ノ十七丈］云、唐高祖實録、武德二年正月甲子、下詔曰、釋典微妙、淨業始於慈悲。道教沖虚、至德去其殘暴。況乎四時之禁、毋伐麛卵、三驅之禮、不敢順從。蓋欲敦崇仁惠、蕃衍庶物。立政經邦、咸率斯道。朕祗膺靈命、撫遂羣生、言念亭育、無忘鑒味。殷帝去網、庶踵前修、齊王捨牛、實符本志。自今毎年、正月、五月、九月、十直日、並不得行刑。所在公私、宜斷屠殺。此三長月、斷屠殺之始也。唐士大夫、如白居易輩、蓋有遇此三齋月、杜門謝客、專延緇流、作佛事者。今法至此月、亦減去食羊錢。蓋其遺制。

＊

陸游（一一二五～一二〇九）が『老學菴筆記』［八の十七丈］に云く、「唐の高祖（＝李淵・五六五～六三五）の『實録』、武德二（六一九）年正月甲子、詔を下して曰く、『釋典は微妙にして、淨業、慈悲に始まる。道教は沖虚（＝心に雑念がないさま）にして、至德、其の殘暴を去つ。況や四時の禁、麛（＝獣の子）卵（＝鳥の卵）を伐つこと毋く、三驅の禮、敢えて（ママ）順從せざらんや。蓋し敦く仁惠を崇び、庶物を蕃衍せんことを欲す。政を立て邦を經むるに、咸く斯の道に率う。朕、祗しみて靈命を膺け、羣生（＝生きとし生けるものたち）を撫遂し、言に亭育を念じて、鑒味を忘るること無し。殷帝、網を去る、庶わくば前修を踵まん、齊王、牛を捨くは、實に本志に符す。今自り毎年、正月、五月、九月、十直日、並びに刑を行うことを得ざれ。所在、公私に、宜しく屠殺を斷つべし』と。此れ三長月、屠殺を斷つの始めなり。唐の士大夫、白居易（七七二～八四六）が輩の如きは、蓋し此の三齋月に遇えば、門を杜じ客を謝し、專ら緇流（＝僧侶）を延いて、佛事を作す者有り。今の法、此の月に至りて、亦た食羊錢を減らし去る。蓋し其の遺制なり」と。

＊

〇陸游老學菴筆記［八ノ十七丈］云…蓋其遺制＝宋代の陸游『老学庵筆記』巻八（四庫全書本）に同文が見える。但だ、「況乎四時之禁、毋伐麛卵、三駆之礼、不敢順從」の「不敢順從」が、原典では、「不取順從」となっており、「敢」は「取」の誤りである。「取」を「敢」とした無著道忠の訓点では、「況や四

時の禁、麛卵を伐つこと毋く、三駆の礼、敢えて順従せざらんや」という訓みになっているが、「敢」を「取」に換え、「況や四時の禁、麛卵を伐つこと毋く、三駆の礼、順従するを取らざるをや（況乎四時之禁、毋伐麛卵、三駆之礼、不取順従）」と訓むのが正しい。文中、「四時之禁」については、『礼記』「月令第六」に「是の月（＝正月）や、楽正に命じて学に入り舞を習わしむ。乃ち祭典を脩め、命じて山林川沢を祀るに、犠牲に牝を用うる毋からしむ。伐木を禁止し、巣を覆すこと毋く、孩蟲・胎夭・飛鳥を殺すこと毋く、麛をとること毋く卵をとること毋く、大衆を聚むること毋く、城郭を置くこと毋く、骼を掩い胔を埋めしむ（是月也、命楽正入学習舞。乃脩祭典、命祀山林川沢、犠牲毋用牝。禁止伐木、毋覆巣、毋殺孩蟲胎夭飛鳥、毋麛毋卵、毋聚大衆、毋置城郭、掩骼埋胔）」（新釈本㊤ p.230）とある。「三駆之礼」については、『易経』「比」に「王用て三駆して前禽を失う（王用三駆失前禽）」（岩波文庫本㊤ p.141）とあるのが出典であり、『大漢和』「三駆」条に「先王田猟（＝狩猟）の制。三方は囲むが、一方は開いて完全には包囲しないこと」（巻一・p.121）とある。また、本文中、「殷帝去網、庶踵前修、斉王捨牛、実符本志」の部分の「殷帝去網」の出典については、未詳である。「斉王捨牛」については、『孟子』「梁恵王章句上」に「王、堂上に坐せるとき、牛を牽きて堂下を過ぐる者有り。王、之を見て曰く、『牛、何くにか之く』と。対えて曰く、『将に以て鐘に釁らんとす』と。王曰く、『之を舎け。吾れ其の觳觫若として罪無くして死地に就くに忍びざるなり』と（王坐於堂上、有牽牛而過堂下者。王見之曰、牛何之。対曰、将以釁鐘。王曰、舎之。吾不忍其觳觫若無罪而就死地）」（岩波文庫本㊤ p.50）とある。「十直日」は、毎月の一日・八日・十四日・十五日・十八日・二十三日・二十四日・二十八日・二十九日・三十日のこと（『唐律疏義』巻三〇・四庫全書本）。尚、引用文の終わり近くにある「食芊錢」の「芊」は、「羊」の本字である（『大漢和』巻九・p.55）。

⑮事物紀原［十ノ十三丈］云、斷屠、唐刑法志曰、武德二年詔、斷屠日不行刑。會要曰、武德二年、正月二十四日詔、自今後、毎年正月、五月、九月、及毎月十齋日、並斷屠。按此、則是斷屠之制、起於唐高祖也。杜佑集歴代沿革事、爲通典。前此無文、而首載武后聖暦二年事。驗此可知也。宋朝因之、臨時限日云。〈忠曰、十齋日者、佛祖統紀云、十齋經、於六齋日、加月旦、十八、二十四、二十八、四日也。今國律令、諸州十直日不得行刑、正據此義。〉

＊

『事物紀原』［十の十三丈］に云く、「斷屠は、唐の『刑法志』に曰く、『武德二（六一九）年、詔すらく、「斷屠の日、刑を行わざれ」と。『會要』に曰く、『武德二年、正月二十四日、詔すらく、「今自り後、毎年の正月、五月、九月、及び毎月の十齋日、並びに斷屠す」と』と。此を按ずれば、則ち是れ斷屠の制、唐の高祖より起こるなり。杜佑（七三五～八一二）、歴代の沿革の事を集めて、『通典』を爲くる。此より前き文無くして、首めて武后（＝武則天・六二四～七〇五）の聖暦二（六九九）年の事を載す。此を驗せば知んぬ可し。宋朝、之に因り、時に臨みて日を限ると云う」と。〈忠曰く、「十齋日とは、『佛祖統紀』に云く、『「十齋經」に、「六齋日に於いて、月旦と十八と二十四と二十八との四日を加うるなり」と。今ま國の律令に、諸州の十直日に刑を行うことを得ざるは、正に此の義に據る』と」と。〉

＊

○事物紀原［十ノ十三丈］云…臨時限日云＝宋の高承『事物紀原』巻一〇「律令刑罰部五十二」（四庫全書本）に同文が見える。文中、「唐刑法志曰…斷屠日不行刑」の部分は、『新唐書』巻五六「刑法志第四十六」（中華書局校点本・p.1408）とあるのに拠る。また、「会要曰…並斷屠」の部分は、宋の王溥『唐会要』巻四一「斷屠釣」条に「武德二年、正月二十四日、詔すらく、今自り已後、毎年の正月、五月、九月、及び毎月の十斎日に、並びに刑を行うことを得ざれ。所在の公私、宜しく屠釣を断つべし（武德二年、正月二十四日詔、自今已後、毎年正月、五月、九月、及毎月十斎日、並不得行刑。所在公私、宜断屠釣）」（四庫全書本）とあるのに拠る。杜佑の『通典』に関する記述については、『通典』巻一六九《刑法七》「禁屠殺贖生」条に「大唐武太后聖暦三年、屠殺を断つ（大唐武太后聖暦三年、断屠殺）」（四庫全書本）とあり、その経緯が記されている。但し、『事物紀原』では、「聖暦二年」と書き改められている。細注に見える〈仏祖統紀云…正拠此義〉の部分は、『仏祖統紀』巻三三（T49-320c）に同文が見えるが、「十斎経」が「一斎経」となっている。『十斎経』については未詳である。

⑯ 忠曰、老學菴筆記、事物紀原、并以唐高祖武德、爲善月斷屠之始制。蓋在唐此可爲始焉。若遠論之、隋文帝開皇、爲正五九月斷屠之始。見三寶記、勅修清規依之。〈見善月處。〉

＊

忠曰く、『老學菴筆記』『事物紀原』は、并びに唐の高祖の武德を以て、善月斷屠の始制と爲す。蓋し唐に在りては此れを始めと爲す可し。若し遠く之を論ずれば、隋の文帝の開皇を、正・五・九月の斷屠の始めと爲す。『三寶記』に見え、『勅修清規』は之に依る。〈「善月」の處に見ゆ。〉

＊

○忠曰…見善月處＝文中、細注の〈見三寶記…見善月處〉については、⑬及び【一八五】「善月」を参照。

⑰ 宋許觀東齋紀事［郛廿八 四丈］云、高承事物紀原、唐刑法志、武德二年詔、斷屠日、不行刑。會要曰、武德二年、正月二十四日詔、自今以後、毎年正月、五月、九月、及毎月十齋日、並斷屠。按此、則斷屠之始、起于唐高祖也。承所紀非也。隋高祖仁壽三年詔、六月十三日、是朕生日。宜令海内爲武皇帝后斷屠。則此制、隋已有之、不始於唐已。

＊

宋の許觀が『東齋紀事』［『郛（＝説郛）』廿八 四丈］に云く、「高承が『事物紀原』に、『唐の『刑法志』に、「武德二（六一九）年、詔して、屠るを斷ずる日、刑を行わず」と。『會要』に曰く、「武德二年、正月二十四日の詔に、今自り以後、毎年の正月、五月、九月、及び毎月の十齋日には、並びに斷屠す」と。此れを按ずれば、則ち斷屠の始めは、唐の高祖に起こるなり』と。承、紀す所は非なり。隋の高祖（＝楊堅・五四一～六〇四）の仁壽三（六〇三）年の詔に、『六月十三日は、是れ朕が生日なり。宜しく海内をして武皇帝后の爲に斷屠せしむべし』と。則ち此の制、隋に已に之有れば、唐に始まらざるのみ」と。

＊

○宋許觀東齋紀事［郛廿八 四丈］云…不始於唐已＝元末明初の陶宗儀『説郛』巻二八下に収録された『東齋紀事』（四庫全書本）に同文が見える。文中、「隋高祖仁寿三年詔…宜令海内為武皇帝后斷屠」の部分については、『隋書』巻二《帝紀二》「高祖下」に「六月十三日は、是れ朕の生日なり。宜しく海内をして武元皇帝と元明皇后の為めに屠るを断たしむべし（六月十三日、是朕生日。宜令海内為武元皇帝元明皇后斷屠）」（中華書局校点本・p.49）云々という記述が見える。武元皇帝とは、隋の文帝楊堅（五四一～六〇四）の父である楊忠（五〇七～五六八）のこと。元明皇后とは、その妻で楊堅の母である呂苦桃のこと。

⑱ 忠曰、東齋總論斷屠、言不始於唐、是也。其言始於隋仁壽、猶未是也。若論天子生日斷屠、則以隋仁壽爲始。若論正五九月斷屠、以隋開皇爲始。凡儒氏不得歴代三寶記説、往往失攷。

＊

忠曰く、『『東齋』總じて斷屠を論じて、『唐に始まらず』と言うは、是なり。其の隋の仁壽に始まると言うは、猶お未だ是ならざるなり。若し天子の生日の斷屠を論ぜば、則ち隋の仁壽を以て始めと爲す。若し正・五・九月の斷屠を論ぜば、隋の開皇を以て始めと爲す。凡そ儒氏は『歴代三寶記』の説を得ざれば、往往に攷えを失す」と。

⑲ 詢蒭録［続郛十六 四丈○有引、羣談依之］〈闕撰人名〉云、新官到任、多忌正五九三月、不知所謂。

唐以此三月、斷屠宰。節度使上任、必有大宴、宰割遍及下人、縁禁不便事。故於此三月不上任、非不利也。今無齋禁、而亦不用。豈非因襲之弊哉。

＊

『詢蒭録』［『続郛（＝続説郛）』十六　四丈。引くこと有り、『羣談』は之に依る］〈撰人の名を闕く〉に云く、「新官、任に到るに、多くは正・五・九の三月を忌むも、所謂を知らず。唐、此の三月を以て、屠宰を斷ず。節度使（＝唐代に地方の軍事・民政・財政をつかさどった軍職）、任に上るに、必ず大宴有りて、宰割、遍く下人に及べば、禁に縁りて事に便ならず。故に此の三月に於いて任に上らざるは、利あらざるには非ざるなり。今ま齋禁無くして、而も亦た用いず。豈に因襲の弊に非ざらんや」と。

＊

○詢蒭録［続郛十六　四丈○有引、羣談依之］〈闕撰人名〉云…豈非因襲之弊哉＝『詢蒭録』一巻の「正五九」条から、そのまま全文を引用している。『詢蒭録』について、無著道忠は「闕撰人名」と記しているが、本書は明代の陳沂が撰した書である。『説郛続』「弓第十六」本の四丁（『説郛三種』第九冊・上海古籍出版社・p.767）、及び『今献彙言』本の三頁（「叢書集成新編」第三九冊・p.421）に見える。【一八五】「善月」③を併せて参照。

⑳宋戴埴鼠璞［郛十四　上ノ六丈］云、「今俗人、食三長月素。按釋氏智論、天帝釋、以大寶鏡、照四大神洲、毎月一移、察人善惡。正五九月、照南贍部洲。唐人於此三月、不行死刑。曰三長月。節鎮因戒屠宰。不上官、是以天帝釋爲可欺也。妄誕可笑。然月令、於孟春言、無傷胎卵、毋聚大衆、不可稱兵。於仲夏言、君子齋戒、必掩身毋躁、薄滋味、節嗜慾、靜事毋刑。於季秋言、命衆百官、無不務内、以會天地之藏、無有宣出。豈時令當然耶。

＊

宋の戴埴が『鼠璞』［『郛（＝説郛）』十四　上の六丈］に云く、「今の俗人、三長月の素を食す。按ずるに、釋氏の『智論（＝大智度論）』に、『天帝釋、大寶鏡を以て、四大神洲を照らし、毎月一たび移り、人の善惡を察す。正・五・九月は、南贍部洲を照らす』と。唐人、此の三月に於いて、死刑を行なわず。曰く、『三長月』と。節鎮（＝節度使）、因りて屠宰を戒む。官に上らざるは、是れ天帝釋を以て欺く可しと爲るなり。妄誕（＝でたらめ）、笑う可し。然るに『月令』は、孟春に於いて言く、『胎卵を傷なうこと無く、大衆を聚むること毋かれ、兵を稱ぐ可からず』と。仲夏に於いて言く、『君子、齋戒して、必ず身を掩い躁しきこと毋かれ、滋味を薄くし、嗜慾を節し、事を靜めて刑すること毋かれ』と。季秋に於いて言く、『衆の百官に命じて、内を務めざる無く、以て天地の藏を會して、宣出すること有ること無かれ』と。豈に時令の、當に然るべきならんや」と。

＊

○宋戴埴鼠璞［郛十四　上ノ六丈］云…豈時令當然耶＝『鼠璞』巻上「正五九三長月」条（四庫全書本）、『説郛』巻一四上に収録された同書（同上）に同文が見える。文中、『礼記』からの引用が三個所続くが、「孟春」は、『礼記』「月令第六」に、「是の月や、楽正に命じて学に入り舞を習わしむ。乃ち祭典を脩め、命じて山林川沢を祀るに、犧牲に牝を用いること毋からしむ。伐木を禁止し、巣を覆すこと毋く、孩蟲・胎夭・飛鳥を殺すこと毋く、麛をとること毋く、卵をとること毋く、大衆を聚むること毋く、城郭を置くこと毋く、骼を掩い胔を埋めしむ（是月也、命楽正入学習舞。乃脩祭典、命祀山林川沢、犧牲毋用牝。禁止伐木、毋覆巣、毋殺孩蟲胎夭飛鳥、毋麛、毋卵、毋聚大衆、毋置城郭、掩骼埋胔）」（新釈本㊤ p.230）とあり、更に、「是の月や、以て兵を称ぐ可からず。兵を称ぐれば必ず天殃あり。兵戎起こさず、我従り始む可からず（是月也、不可以称兵。称兵必天殃。兵戎不起、不可従我始）」（同上）とある。「仲夏」は同じく、「月令第六」に、「君子斉戒して、処れば必ず身を掩い、躁ぐこと毋く、声色を止め、進む或ること毋く、滋

味を薄くし、和を致すこと毋く、耆欲を節し、心気を定む。百官、事を静かにして刑すること毋く、以て晏陰の成る所を定む（君子斉戒、処必掩身、毋躁、止声色、毋或進、薄滋味、毋致和、節耆欲、定心気。百官静事毋刑、以定晏陰之所成）」（同・p.245）とある。「季秋」も同じく、「月令第六」に、「是の月や、申ねて号令を厳にす。百官に命じて、貴賤務め内れざる無く、以て天地の蔵に会わせ、宣出する有る無からしむ（是月也、申厳号令。命百官、貴賤無不務内、以会天地之蔵、無有宣出）」（同・p.256）とある。

21

忠曰、如埴言、實十二月、只三月戒屠宰、而餘九月、否則爲欺天帝。汝若然、當全十二月、禁屠殺奉戒善。有何不可耶。若言不能之、則且帝釋親臨三月奉殺禁、猶優都無戒矣。譬如世人閒居汰傲、若君父來視、則改容示恭焉。

＊

忠曰く、「埴が言の如くんば、實に十二月、只だ三月のみ屠宰を戒めて、餘の九月は否れば、則ち天帝を欺くと爲す。汝、若し然らば、當に十二月を全うして、屠殺を禁じ、戒善を奉ずべし。何の不可か有らんや。若し之を能わずと言わば、則ち且く帝釋親しく臨むの三月に殺禁を奉ずるも、猶お都て戒無きに優れり。譬えば世人の、閒居して汰傲るも、若し君父來たり視れば、則ち容を改め恭を示すが如し」と。

22

瑯邪代醉編［二ノ十八丈］云、正五九月、不上官。戴埴云、釋氏智論、天帝釋以寶鏡、照四大神洲。毎月一移、察人善惡。此三月照南贍部洲。唐人以此不行死刑。曰三長月。節鎮因戒屠宰、不上官。後世因之。歐陽永叔、治平丁未三月、出知亳州。陛辭乞便、道過潁。許之。公與曾舍人書云、在潁無所營爲。所以少留者、蓋避五月上官爾。此老未能免俗、亦可笑也。王元美曰、宋人以是三月、食素誦經、已可笑矣。今人不斷屠宰、但不上任、尤爲無謂。或曰、宋朝火德。火生于寅、旺于午、墓于戌。此三月謂之灾月。官員例減禄料無羊。故又謂無羊之月。衆皆避之。似勝。但長生帝旺、禄命家所喜、何以謂灾。至胡太僕汝嘉謂火君象、臣下宜避、尤無謂。

＊

『瑯邪代醉編』［二の十八丈］に云く、「正・五・九月、官に上らず。戴埴が云く、『釋氏の『智論』に、「天帝釋、寶鏡を以て、四大神洲を照らす。毎月一たび移りて、人の善惡を察す。此の三月は南贍部洲を照らす」と。唐人、此れを以て死刑を行わず。曰く、「三長月」と。節鎮、因りて屠宰を戒め、官に上らず。後世、之に因る』と。歐陽永叔（＝歐陽脩・字は永叔）、治平丁未（＝一〇六七年）三月、出でて亳州に知（＝行政長官）たり。陛辭して便を乞い、道、潁に過ぎんとす。之を許す。公、曾舍人に與うるの書に云く、『潁に在りて營爲する所無し。少しく留まる所以の者は、蓋し五月の上官を避くるのみ』と。此の老、未だ俗を免るること能わざるは、亦た笑いつ可きなり。王元美（＝王世貞）曰く、『宋人、是の三月を以て、素を食らい經を誦むは、已に笑いつ可し。今人、屠宰を斷ぜず、但だ上任せざること、尤も謂われ無しと爲す』と。或いは曰く、『宋朝は火德なり。火は寅に生じ、午に旺んにし、戌に墓す。此の三月、之を灾月（＝災月）と謂う。官員、例して禄料を減じて羊無し。故に又た無羊の月と謂う。衆、皆な之を避く』と。勝（＝五行相勝説）に似たり。但だ長生（＝産声を上げて誕生するも保育を必要とする時期）と帝旺（＝頂点を極める時期）は、禄命家（＝占い師）の喜ぶ所なるも、何を以てか『灾』と謂う。胡太僕汝嘉（＝胡汝嘉）が『火は君の象なれば、臣下、宜しく避くべし』と謂うに至りては、尤も謂われ無し」と。

＊

○瑯邪代醉編云…尤無謂＝明代の張鼎思『瑯邪代酔編』巻二の十八丁（和刻本漢籍随筆集7・汲古書院・p.52）に同文が見える。【一八五】「善月」③を併せて参照。文中、欧陽脩に関する「公与曽舎人書云…亦可笑也」の部分は、『文忠集』巻一五〇「与曽舎人」に「昨て潁に在りて営為する所無し。少しく留まる所以は、蓋し五月に官に上るを避け、未だ俗を免るること能わざればなり（昨在潁無所営為。所以少留者、蓋避五月上官、未能免俗爾）」（四庫全書本）とある。また、明代の王世貞に関する「王元美曰…尤為無謂」という部分は、『弇州四部稿』巻一六三「宛委餘編八」に「宋人、多く是の三月を以て、素を食らい経を誦むは、已に笑う可し。今ま正・五・九月に於いて、屠宰を断ぜず、但だ任に上らざるは、尤も謂われ無きなり（宋人多以是三月、食素誦経、已可笑矣。今於正五九月、不断屠宰、但不上任、尤無謂也）」（四庫全書本）とある。「或曰…衆皆避之」の部分は、出典が未詳であるが、例えば、宋代の祝穆『古今事文類聚』前集巻一二「避正五九月」（四庫全書本）などにも同文が見える。「火君象、臣下宜避」の部分も出典は未詳である。

容齋随筆［十六ノ二丈］云、釋氏以正五九月爲三長月。故奉佛者、皆茹素。其説云、天帝釋以大寶鏡、輪照四天下、寅午戌月、王臨南贍部洲。故當食素以徼福。官司謂之斷月。故受驛券、有所謂羊肉者、則不支。俗謂之惡月、士大夫赴官者、輒避之。或人以謂、唐日藩鎮蒞事、必大享軍。屠殺羊豕至多。故不欲以其月上事、今之他官、不當爾也。然此説亦無所經見。予讀晉書禮志、穆帝納后、欲用九月、九月是忌月。北齊書云、高洋謀簒魏、其臣宋景業言、宜以仲夏受禪。或曰、五月不可入官。犯之、終於其位。景業曰、王爲天子、無復下期。豈得不終於其位乎。乃知此忌相承、由來已久、竟不能曉其義及出何經典也。

＊

『容齋随筆』［十六の二丈］に云く、「釋氏は正・五・九月を以て三長月と爲す。故に奉佛の者、皆な素を茹らう。其の説に云く、『天帝釋、大寶鏡を以て、四天下を輪照し、寅・午・戌の月は、王（＝毘沙門天王）、南贍部洲に臨む。故に當に素を食らいて以て福を徼むべし』と。官司、之を「斷月」と謂う。故に驛券（＝赴任の際に給付される宿場先で使用可能な食券）を受くるに、所謂る羊肉なる者有れば、則ち支かたず。俗に之を「惡月」と謂い、士大夫、官に赴く者、輒ち之を避く。或る人、以謂えらく、『唐の日（＝時代）、藩鎮、事に蒞むに、必ず大いに軍に享す。羊豕を屠殺すること至って多し。故に其の月を以て上事せんことを欲せざるも、今の他官、當に爾すべからざるなり』と。然れども此の説も亦た經見する所無し。予（＝洪邁）、『晉書』「禮志」を讀むに、『穆帝、后を納るるに、九月を用いんと欲するも、九月は是れ忌月なり』と。『北齊書』に云く、『高洋（＝のちの文宣帝）、魏（＝東魏）を簒わんことを謀るに、其の臣、宋景業が言く、「宜しく仲夏を以て受禪（＝先帝から帝位を譲り受けて即位すること）すべし」と。或るひと曰く、「五月は官に入る可からず。之を犯さば、其の位に終う」と。景業曰く、「王（＝斉郡王こと高洋）、天子と爲れば、復た下る期無し。豈に其の位に終わらざることを得んや」と』と。乃ち知る、此の忌、相い承くること、由來已に久しきも、竟に其の義及び何れの經典に出づるやということを曉る能わざるなり」と。

＊

○容齋随筆［十六ノ二丈］云…竟不能曉其義及出何經典也＝宋代の洪邁『容斎随筆』巻一六「三長月」条（中華書局校点本㊤・p.206）に同文が見える。文中、「予読晋書礼志…九月是忌月」の部分、『晋書』からの引用は、同書の巻二一《志第十一》「礼下」（中華書局校点本・p.669）に同文が見える。また、『北斉書』からの引用は、巻四九《列伝第四一》「宋景業」に、「顕祖（＝高洋）、景業をして筮せしむるに、乾の鼎に遇う。景業曰く、『乾は君天為るなり。易に曰く、「時に六龍に乗り以て天を御す」（『易』「乾」彖伝）と。鼎は五月の卦なり。宜しく仲夏の吉辰を以て、天を御し禅を受くべし』と。或いは曰く、『陰陽の書に

「五月は官に入る可からず」と。之を犯さば、其の位に卒す』と。景業曰く、『此れ乃ち大吉なり。王、天子と為れば、復た期を下ること無し。豈に其の位に終わらざることを得んや』と。顕祖、大いに悦ぶ（顕祖令景業筮、遇乾之鼎。景業曰、乾為君天也。易曰、時乗六龍以御天。鼎五月卦也。宜以仲夏吉辰、御天受禅。或曰、陰陽書五月不可入官。犯之、卒於其位。景業曰、此乃大吉。王為天子、無復下期。豈得不終於其位。顕祖大悦）」（中華書局校点本・p.676）とある。

野客叢書［五ノ十七丈］云、随筆云、齊書高洋謀簒魏、其臣宋景業言、宜以仲夏受禅。或曰、五月不可入官。犯之、不終於其位。景業曰、王爲天下。無復下期。豈得不終其位。乃知此忌相承已久、不曉其義。僕觀前漢張敞爲山陽太守奏、曰、臣以地節三年五月視事。其言如是。則知前漢之俗、未嘗忌五月也。然張敞在山陽、監護驕賀、其責甚難。卒以無事。其後徵爲膠東相、亦不聞有凶横之説。又觀後漢朔方太守碑、云、延嘉（ママ）四年九月乙酉、詔書遷衙令、五月（ママ）正月到官。乃知拘忌之説、起於兩漢之後。然又觀獨狐及集、有爲舒州到任表曰、九月到州訖。乃知唐人亦有不忌九月者。因考諸州唐人題名、見不避正五九處亦多。

＊

『野客叢書』［五の十七丈］に云く、「『随筆（＝容斎随筆）』に云く、『『齊書』に、高洋、魏を簒わんことを謀るに、其の臣、宋景業が言く、「宜しく仲夏を以て禪を受くべし」と。或るひと曰く、「五月は官に入る可からず。之を犯せば、其の位を終えず」と。景業が曰く、「王、天下を爲む。復た下る期無し。豈に其の位を終えざることを得んや」と。乃ち知んぬ、此の忌、相い承くること已に久しきも、其の義を曉らざることを』と。僕（＝王楙）、前漢の張敞、山陽の太守爲りて（＝底本の訓点は「山陽の太守の爲に」とあるが改めた）奏するを觀るに、曰く、『臣（＝張敞）、地節三（紀元前六七）年の五月を以て事を視る』と。其の言、是くの如し。則ち知んぬ、前漢の俗、未だ嘗て五月を忌まざるを。然れども張敞、山陽に在りては、驕賀（＝昌邑王劉賀）を監護し（＝底本の訓点は「監護驕賀し」とあるが改めた）、其の責、甚だ難し。卒に以て無事なり。其の後、徵されて膠東の相と爲るも、亦た凶横の説有ることを聞かず。又た後漢の朔方太守の碑を觀るに、云く、『延嘉（ママ）四（一六一）年九月乙酉、詔書して衙令に遷り、五月（ママ）正月、官に到る』と。乃ち知んぬ、拘忌の説、兩漢の後に起こるを。然らば又た獨狐及（七二五～七七七）が集を觀るに、舒州と爲りて任に到るの表有りて曰く、『九月、州に到り訖わる』と。乃ち知んぬ、唐人も亦た九月を忌まざる者有るを。因りて諸州の唐人の題名を考うるに、正・五・九を避けざる處を見ること亦た多し」と。

＊

○野客叢書［五ノ十七丈］云…見不避正五九處亦多＝宋代の王楙『野客叢書』巻一一「正五九到官」条に同文が見えるが、原文では、「不終於其位」の個所が「必終於其位」に、「王為天下」の個所が「王為天子」に、「五月正月到官」の個所が「五年正月到官」になっている。文中、「僕観前漢張敞…臣以地節三年五月視事」の部分は、『漢書』巻六三「武五子伝第三十三」に「臣敞地節三年五月視事」とあり、「敞」字が「以」字になっているほかは同文である。但し、「前漢張敞、為山陽太守」の個所を、無著道忠が、「前漢の張敞、山陽の太守の為めに」と訓んでいるのは誤りであろう。山陽太守であったのは張敞自身であり、ここは「前漢の張敞、山陽の太守爲りて」と訓むべきである。また「又観後漢朔方太守碑…五月正月到官」の部分は、欧陽脩が金文石刻の拓本を集めて解説を加えた『集古録跋尾』巻二に同文が見える（四庫全書本）。但し、原文には「延熹四年」「五年正月」とある。前者は『野客叢書』の誤りであり、後者は『象器箋』の誤りである。更に、「然又観独狐及集…九月到州訖」の部分に見える「独狐及の集」とは、唐代の独狐及の文集『毘陵集』のこと。同書巻五「表下」の「謝舒州刺史兼加朝散大夫表」に「今

ま九月二十七日を以て州に到りて上り訖わる（今以九月二十七日到州上訖）」（四部叢刊初編本）とある。

（本多道隆）

【一八七】神通月

①三長齋、又名神通月、神變月、神足月等。

＊

三長齋は、又た「神通月」、「神變月」、「神足月」等と名づく。

②『不空羂索神變眞言經』［二ノ五丈〇六十四套］云、修此法者、當于十方一切諸佛神通月修。所謂正月、五月、九月、白月一日至十五日、如法清淨、讀誦受持、即得成就。

＊

『不空羂索神變眞言經』［二の五丈。六十四套］に云く、「此の法を修する者は、當に十方一切諸佛の神通月に于いて修すべし（＝底本の訓点は「十方一切諸佛の神通月に當たりて修す」とあるが改めた）。所謂る正月、五月、九月の白月の一日より十五日に至るまで、如法清淨に讀誦受持すれば、即ち成就を得ん」と。

＊

○不空羂索神變眞言經［二ノ五丈〇六十四套］云…即得成就＝『不空羂索神変真言経』巻二「秘密心真言品」（T20-235a）に同文が見える。

③神變月　雜阿含經［四十ノ十九丈］云、於月八日、十四日、十五日、及神變月、受戒布薩。

＊

神變月　『雜阿含經』［四十の十九丈］に云く、「月の八日、十四日、十五日、及び神變月に於いて受戒布薩す」と。

＊

○雜阿含經［四十ノ十九丈］云…受戒布薩＝『雜阿含経』巻四〇に同文が見える（T2-295c）。

④神足月　雜阿含經［四十一ノ一丈］云、於法齋日、及神足月、受持齋戒、修功德。

＊

神足月　『雜阿含經』［四十一の一丈］に云く、「法齋日、及び神足月に於いて、齋戒を受持し、功德を修す」と。

＊

○雜阿含經［四十一ノ一丈］云…修功德＝『雜阿含経』巻四一には「於法斎日、及神足月、受持斎戒、修功德不」（T2-297b）とあり、末尾に疑問詞の「不（＝否）」が付いている。

（花岡博芳）

【一八八】四孟月

①敕修清規［下二ノ十六丈］月分須知云、正月、初一日、有處四孟月、大衆行道。諷經祈保。

＊

『敕修清規』［下二の十六丈］の「月分須知」に云く、「正月、初一日、有る處には四孟月に、大衆行道し、諷經して祈保す（＝保安・安全を祈る）」と。

＊

○敕修清規［下二ノ十六丈］月分須知云…諷經祈保＝『勅修百丈清規』巻七「節臘章第八」の「月分須知」条（T48-1154c）に同文が見える。

②羣書拾唾［一ノ五丈］云、四孟、孟春〈正月〉、孟夏〈四月〉、孟秋〈七月〉、孟冬〈十月〉。

＊

『羣書拾唾』［一の五丈］に云く、「四孟（＝四季のはじめ）は、孟春〈正月〉、孟夏〈四月〉、孟秋〈七月〉、孟冬〈十月〉なり」と。

＊

○羣書拾唾［一ノ五丈］云…孟冬〈十月〉＝『群書拾唾』は、明代の張九韶（字は美和）によって編纂された、名数を集めた著作である。「名数」とは、同類のものを幾つかまとめ、一定の数をつけて呼ぶもの。たとえば、「三筆」「四天王」など。明の万暦刊本を覆刻した和刻本（承応元年・一六五二）が、長沢規矩也「和刻本類書集成」第四輯（汲古書院・一九七七）に収録されている。巻一「天文造化 第一」の「四孟」の項目（五丁・a~b、汲古本・p.9）に同文が見える。

（花岡博芳）

【一八九】旦望

①敕修清規［上二ノ一丈ウ］住持日用云、凡旦望、侍者隔宿、稟住持云、来晨祝聖上堂。

＊

『敕修清規』［上二の一丈ウ］「住持日用」に云く、「凡そ旦望（＝毎月の一日と十五日）には、侍者、隔宿（＝前日）に、住持に稟して云く、『来晨（＝明朝）祝聖上堂』と」と。

＊

○敕修清規［上二ノ一丈］住持日用云…来晨祝聖上堂＝『敕修百丈清規』巻二《住持日用》「上堂」の条（T48-1119b）に見える文章である。文中の事項のうち、「隔宿」「住持」「上堂」は、『象器箋』の中に立項されている（【二〇九】【三六五】【八〇〇】）。

②幻住清規［二丈］云、一年十二月、遇初一十五。是謂朔望。須就粥前、諷大悲咒祝聖。

＊

『幻住清規』［二丈］に云く、「一年十二月、初一と十五日に遇わば、是れを朔望と謂う。須く粥前に就いて『大悲咒』を諷し祝聖すべし」と。

＊

○幻住清規［二丈］云…須就粥前諷大悲咒祝聖＝『幻住庵清規』巻一《月進》「正月」の条（X63-572a）に見える文章。原文には「但是一年十二月…須就粥前諷大悲呪祝聖」とあって、『象器箋』では、「但是」の二字が削除されているが、それ以外は同文である。文中の事項のうち、「大悲呪」は、『象器箋』の中に立項されている（【一一四一】）。

③興禪護國論云、報恩謂、毎月朔日、奉爲今上皇帝講般若經。十五日奉爲先皇講大涅槃經。有祈請句。

＊

『興禪護國論』に云く、「報恩とは、謂く、『毎月朔日は今上皇帝の奉爲に『般若經』を講ず。十五日には先皇の奉爲に『大涅槃經』を講ず。祈請の句有り』と」と。

＊

○興禪護国論云…有祈請句＝『興禪護国論』巻下（T80-15a）に全く同じ文章が見える。

④　忠曰、旦望禮儀亦是隨世俗焉。

＊

忠曰く、「旦望の禮儀も亦た是れ世俗に隨う」と。

⑤居家必用［辛廿二丈］云、朔望廣州記、尉陀立朝臺、朔望升拜。名此始也。

＊

『居家必用』［辛廿二丈］に云く、「朔望は、『廣州記』に、『尉陀（＝本名は趙陀。秦の滅亡後に自立して南越武王となる）、朝臺を立て、朔望に升り拜す』と。名、此れを始めとすと。

＊

○居家必用［辛廿二丈］云…名此始也＝『居家必用字類全集』が、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で公開されている（http://dl.ndl.go.jp/#classic）。本書「辛集」巻一五の二十二丁に、返り点を含めて同文が見える。裴淵撰『広州記』は逸書であるが、その一部が『漢書』などの諸書に引用されている。引用部分は、唐の欧陽詢『芸文類聚』巻六二、宋の李昉等撰『太平御覧』巻一七七・一九四・四八九、明の陳耀文撰『天中記』巻一五などにも見える（四庫全書）。該書に言及した論文として、渡邉宏「北堂書鈔所引裴淵南海記―廣州記考―」（『史学』第四〇巻、第二・三号、一九六七）がある。

⑥杜氏通典［七十ノ十五丈］云、大唐永徽二年、八月二十九日、下詔、來月一日、太極殿受朝。此後毎五日一度、太極殿視事、朔望朝即恆式。

＊

『杜氏通典』［七十の十五丈］に云く、「大唐の永徽二（六五一）年、八月二十九日、詔下る、『來月一日、太極殿にて朝を受けん』と。此の後、五日毎に一度、太極殿に事を視（＝執務する）、朔望の朝、即ち恆式（＝常に従うべき形式）と爲る」と。

＊

○杜氏通典［七十ノ十五丈］云…朔望朝即恆式＝筑波大学附属図書館「貴重書コレクション」（http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/rare.php）で公開されている、杜佑『通典』巻七〇の十二丁に「至二年八月二十九日、下詔。来月一日、大極殿受朝。此後毎五日一度、太極殿視事、朔望朝即恆式」（嘉靖刊本）とある。『通典』では、「大唐永徽二年」が「至二年」、最初の「太極殿」が「大極殿」となっているが、それ以外は全く同文である。

⑦旦謂朔日。　忠曰、清規朔日十五日爲旦望。或言月旦月望。〈見四齋日處。〉而韻書無朔日旦之訓。按西京雜記［六ノ五丈］云、月之旦爲朔。車之輈亦謂之朔。名齊實異。〈止此。〉又後漢書［列傳五十八ノ五丈］許劭、論鄉黨人物。毎月輒更其品題。故汝南俗有月旦評焉。〈止此。〉月令廣義［三ノ廿二丈］毎月令載此以係初一日。可證月旦爲月朔也。又葉隆禮遼志［十四丈］歳時雜記、題正旦、其中記正月一日事。

「旦」は朔日を謂う。　忠曰く、『清規』に朔日・十五日を旦望と爲す。或いは月旦・月望と言う。〈四齋日の處に見ゆ。〉而るに韻書（＝韻字で分類した字書類）に朔を『旦』と曰うの訓無し。按ずるに、『西京雜記』［六の五丈］に云く、『月の旦を朔と爲す。車の軿も亦た之れを朔と謂う。名齊うして實は異なり』と。〈此こに止まる。〉又た『後漢書』［「列傳」五十八の五丈］に『許劭、鄉黨（＝同鄉の人）の人物を論ず。毎月、輒ち其の品題（＝見出し）を更む。故に汝南の俗に、月旦の評有り』と。〈此こに止まる。〉『月令廣義』［三の廿二丈］の「毎月令」に、此れを載せて、以て「初一日」に係く。『月旦』を『月朔』と爲ることを證しつ可きなり。又た葉隆禮（＝宋、嘉興の人。淳祐の進士。『契丹国志』を著す）が『遼志』［十四丈］「歳時雜記」に、「正旦」と題して、其の中に正月一日の事を記す。

＊

○旦謂朔日。忠曰…其中記正月一日事＝文中の「清規朔日十五日…月旦月望」の部分は、【一九四】「四斎日」を参照。『敕修百丈清規』巻一「景命四斎日祝讃」に「景命の好日、月旦、月望、初八、廿三の四斎日には、隔宿に堂司の行者、衆に報じ諷経の牌を掛け…（景命好日、月旦、月望、初八、廿三、四斎日、隔宿堂司行者、報衆掛諷経牌…）」（T48-1114b）とある。同じく〈見四斎日処〉の部分は、【一九四】「四斎日」を参照。外典からの四つの引用文のうち、『西京雜記』は、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で公開されている、元禄三（一六九〇）年、日本橋須原屋市兵衛刊本の巻六・五十丁に、返り点を含めて同文が見える。『後漢書』は、《列伝》巻六八「郭符許列伝第五十八」に「好共覈論鄉党人物…有月旦評焉」（中華書局校点本・p.2235）とあり、引用の「許劭論鄉党人物」の部分が、『後漢書』では、「好共覈論鄉党人物」となっている以外は同文である。前文に「初劭与靖、俱有高名」とあり、「好共」とは、許劭と従兄の許靖を指す。本文中にある通り、許劭と許靖は、月に一度、人物評論会を開いており、その会合は「月旦評」と呼ばれた。『後漢書』は、明治新刻本が国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」で公開されている。『月令広義』は、同書・巻三「毎月令」の「日次」に「［初一日］月朔」という記載が見られ、その割注に「日月、会い度る（＝交差する）を『朔』と為す（日月会度為朔）」（四庫全書存目叢書本・廿一丁）とある。本書は、明の馮応京が撰し、戴任が続成した書物で、中国の伝統的な年中行事や儀式などを解説したもの。月令統記・歳令・毎月令・春令・正月令・二月令・三月令・夏令・四月令・五月令・六月令・土王令・秋令・七月令・八月令・九月令・冬令・十月令・十一月令・十二月令・閏月令・昼夜令・時令の項目から成り、巻首に、序由・編端・図説がある。『大漢和』巻一〇（p.1021）参照。『遼志』は、『契丹国志』巻二七「歳事雜記」の「正旦」条に「正月一日、帝、糯米飯・白羊髓を以て相い和し、団を為ること拳の如し（正月一日、帝以糯米飯白羊髓相和、為団如拳）」（四庫全書本）とある。

⑧望謂十五日。　品字箋［己八十七丈］云、塁説文月滿與日相望。如朝君也。从臣从月从壬。壬朝廷也。徐曰、假借作望。増韻今經典通作望。

＊

「望」は十五日を謂う。　『品字箋』［己八十七丈］に云く、「『塁』は、『説文』に月滿ちて日と相い望む。君に朝するが如くなり。臣に从い、月に从い、壬に从う。壬は朝廷なり。徐曰く、『假借（＝同一の発音を借りる）して望に作る』と。『増韻』に『今ま經典は通じて望に作る』と」と。

＊

○望謂十五日。品字箋［己八十七丈］云…増韻今經典通作望＝『品字箋』は、筑波大学附属図書館「貴重書コレクション」で公開されている、康熙十六（一六七七）年に刊行された虞徳升『諧声品字箋』のことで、同書の巻五七「己集」八十七丁に見える。末尾の「矣」の一字が削除されている以外は、『品字箋』と全く同文である。文中、『説文』は、後漢の許慎が著した『説文解字』の略称。『説文解字』第八篇・上「壬」部に同文が見える（四部備要本）。「从臣从月从壬」とは、「『臣』『月』『壬』から構成されるのが『塁』である」という意味。また、文中に「徐曰、假借作望」とあるが、「徐」とは、『説文解字』の注釈者である徐鍇のこと。『説文繫伝』巻一五に「『望』に作るは仮書なり（作望仮書也）」（四部備要本）

とある。『増韻』は、『増修互注礼部韻略』の通称で、宋の毛晃が『礼部韻略』を増注して編纂し、子の毛居正が校勘、増補した韻書である。全五巻。『大漢和』巻三（p.250）参照。但し、同書の巻四「去声四十一 漾」の「望」条に同文は見られない。

（堀野真澄）

【一九〇】五旦望

①［敕修鈔十二ノ十七丈］五參日、朔日、十五日、此謂五旦望也。皆有上堂。

＊

［『敕修鈔』十二の十七丈］五參日（＝五参上堂の日。五日、十日、二十日、二十五日）と、朔日と、十五日と、此れを「五旦望」と謂うなり。皆な上堂有り。

＊

○敕修鈔［十二の十七丈］五參日…皆有上堂＝『勅修百丈清規抄』巻一二に、「五旦望トハ、五参上堂ト、旦望上堂トソ。五参ハ五日一参。チヤホトニソ、五日、十日、十五日、二十日、二十五日ニアルソ」（17b・万治三年刊本・駒澤大学禅籍善本図録）という文章が見える。文中の事項のうち、【一九一】「五参日」は、『象器箋』の中に立項されている。

②敕修清規［下一ノ四十五丈］赴齋粥云、近時諸方住持、大鐘鳴時、先入堂坐。至堂前鐘鳴、方下地普同問訊。只遇五旦望、講行一次、新入衆者不知所自。

＊

『敕修清規』［下一の四十五丈］の「赴齋粥（＝粥座・斎座に赴く際の規則）」に云く、「近時、諸方の住持、大鐘鳴る時、先ず堂に入りて坐す。堂前の鐘鳴るに至りて、方に地に下りて普同問訊（＝大衆が一斉に問訊すること）す。只だ五旦望に遇いて、講行一次す。新たに入衆する者（＝新たに叢林に掛搭した僧）は、自る所を知らず」と。

＊

○敕修清規［下一ノ四十五丈］赴齋粥云…新入衆者不知所自＝『勅修百丈清規』巻六「赴斎粥」（T48-1144a）に見える文章であるが、原文では「大鐘」が「大鍾」、「鐘鳴」が「鍾鳴」、「五旦望」が「五但望」となっている。文中の事項のうち、【三六五】「住持」・【一四一八】「大鐘」・【七二八】「普同問訊」は、『象器箋』の中に立項されている。

（堀野真澄）

【一九一】五參日

①［敕修鈔十二ノ十七丈。○四ノ八丈ヲ。加十五日訛。］五日一參。故曰五參。即五日、十日、二十日、二十五日也。詳垂説類五參上堂。

＊

［『敕修鈔』十二の十七丈。○四の八丈ヲ。十五日を加うるは訛なり。］五日に一たび參ず。故に五參と曰う。即ち五日、十日、二十日、二十五日なり。「垂説類」の「五參上堂」に詳らかなり。

＊

○五日一參［敕修鈔十二ノ十七丈。○四ノ八丈ヲ。加十五日訛。］…詳垂説類五參上堂＝『敕修百丈清規鈔』巻一二「大衆章第七　赴斎粥」の「只遇」の項目に「五旦望トハ、五參上堂ト旦望上堂トゾ。五參ハ五日一參ヂヤホドニゾ。五日、十日、十五日、二十日、二十五日ニアルゾ」（一七丁裏・万治三年刊本）とあり、巻四「住持日用・上堂」の「五參」の項目に「旦望ノ外ニ四度ゾ。五日、十日、廿日、廿五日也」（八丁表）とある。「加十五日訛」とは、『清規鈔』巻一二の記述が、「五參」のうちに、望日、すなわち「十五日」を数えることについて、その誤りを指摘したもの。「五參」の詳細については、第十一類「垂説門」【八〇二】「五參上堂」参照。

②校定清規［敕修鈔四ノ八］［東漸三ノ二丈。南禅規下ノ六十三丈用之］云、如初五、初十、二十、二十五、此四日謂之五參。〈詳垂説類。〉

＊

『校定清規』［『敕修鈔』四の八］［『東漸』三の二丈。『南禅規』下の六十三丈、之を用う］に云く、「初五、初十、二十、二十五との如き、此の四日を、之を五參と謂う」と。〈「垂説類」に詳らかなり。〉

＊

○校定清規［敕修鈔四ノ八］［東漸三ノ二丈。南禅規下ノ六十三丈用也］云…此四日謂之五參＝『叢林校定清規総要』巻下（X63-606c）に同文が見える。『勅修百丈清規鈔』については、①の語注を参照。『東漸』とは、『東漸和尚略清規』（別名『叢林拾遺』）のことであり、『南禅規』とは、『南禅清規』のことである。『東漸和尚略清規』と『南禅清規』については、尾崎正善氏によって、「翻刻・京都大学文学部図書館蔵『叢林拾遺』（東漸和尚略清規）」（『鶴見大学紀要』第四部・人文・社会・自然科学編・二〇〇一）、「翻刻・京都大学文学部図書館蔵『南禅清規』」（一）（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第一四号・二〇〇九）、同（二）（同・第一五号・二〇一〇）として、京都大学文学部図書館蔵本が翻刻されている。京大所蔵本『東漸和尚略清規』巻三「五參上堂」条に「初五、初十、二十、二十五、此四日、謂之五參上堂」（二丁裏）とあり、同『南禅清規』巻下「上堂式」条に「五參上堂、初五、初十、二十、二十五、此四日謂也」（六三丁表）とある。

③　忠曰、準春明退朝録、則五日、十一日、二十一日、二十五日也。

＊

忠曰く、「『春明退朝録』に準（なぞら）えば、則ち五日、十一日、二十一日、二十五日なり」と。

＊

○忠曰…二十五日也＝『春明退朝録』全三巻は、宋代の宋敏求（一〇一九～一〇七九）が撰した書物で、当時の典制及び雑事雑録を記している。『春明退朝録』巻中に「武官五品以上は、仍お毎月五日、十一日、二十一日、二十五日に參ず（武官五品以上、仍毎月五日、十一日、二十一日、二十五日參）」（中華書局校点本・p.25）とある。

④密菴傑禪師靈隱録［七丈］上堂云、五日一參、諸方常例。不説少室單傳、不説靈山受記〈云云〉。

＊

密菴傑禪師『靈隱録』［七丈］上堂に云く、「五日に一たび參ずるは、諸方の常例なり。少室の單傳を説かず、靈山の受記を説かず〈云云〉」と。

＊

○密菴傑禪師靈隱録［七丈］上堂云…不説靈山受記〈云云〉＝密庵咸傑（一一一八～一一八六）の『密庵和尚語録』に収められた『臨安府景德靈隱寺語録』の「上堂」（T47-971a）に同文が見える。

⑤中巖月禪師崇福菴録［二丈ウ］云、五參衆立定、師出來。大衆如例問訊。師云、五日前、

山僧來到這裡、諸人恁麼問訊。今日來到者裏、亦是恁麼問訊。但恁麼去、有甚了期。便歸室。

＊

中巖の月禪師『崇福菴の録』［二丈ウ裏］に云く、「五參に衆、立定し、師、出で來たる。大衆、例の如く問訊す。師云く、『五日の前、山僧、來たりて這裡に到れば、諸人、恁麼に問訊す。今日、來たりて者裏に到れば、亦た是れ恁麼に問訊す。但だ恁麼にし去らば、甚（なん）の了期（りょうご）（＝ケリのつく時）か有らん』と。便ち室に歸る」と。

＊

○中巖月禪師崇福菴録［二丈ウ］云…便歸室＝中巖円月（一三〇〇～一三七五）の語録『中巖和尚語録』巻下に収めれた『仏種慧済禪師住藤谷山崇福禪菴語録』（花園大学図書館所蔵本・Z1-407-2、今津文庫・45900号）に同文が見える。

⑥　忠曰、可知日本此時有此規。

＊

忠曰く、「日本にても此の時に此の規有ることを知る可し」と。

（本多道隆）

【一九二】三八日

①［敕修鈔四ノ廿三丈。○又十四ノ廿五丈。○又一ノ廿三丈ウ。］古以毎旬三八日念誦。乃一月有六日。今以上八、中八、下八爲三八。乃一月有三箇八日也。故備用清規聖節云、聖節内遇八、佛殿念誦。〈又見諷唱類念誦。〉

＊

［『敕修鈔』四の廿三丈。○又た十四の廿五丈。○又た一の廿三丈ウ裏。］古は毎旬の三八日を以て念誦す。乃ち一月に六日有り。今は上八、中八、下八を以て三八と爲す。乃ち一月に三箇の八日有るなり。故に『備用清規』の「聖節」に云く、「聖節の内に八に遇わば、佛殿に念誦す」と。〈又た「諷唱類」の「念誦」に見ゆ。〉

＊

○［敕修鈔四ノ廿三丈…○又一ノ廿三丈ウ。］古以毎旬三八日念誦…又見諷唱類念誦＝『勅修百丈清規鈔』巻四「住持章第五・住持日用　入室」の「今時」の項目に「今ハ三八ノ念誦ノアル日、入室ガアルゾ。三ト八トナラバ、月ニ六度ナレドモ、今ハ初八、中八、下八ニ三度ゾ」（二三丁表・万治三年刊本）とあり、同巻一四「節臘章第八　四節土地堂念誦」の「与三」の項目に「旧ハ三ト八トナレドモ、後ニハ三度ノ八ニナッタゾ」（二五丁裏）とあり、同巻一「祝釐章第一　聖節」の「節内」の項目に「昔ハ三、十、八トテ、初三、十三、二十三、初八、十八、二十八トテ、一月ニ六度念誦ガアッタゾ。今ハ三度アルゾ」（二三丁裏）とある。また、「故備用清規聖節云、聖節内遇八、仏殿念誦」については、『禅林備用清規』巻一（X63-623a）に同文が見える。第十七類「諷唱門」【九九八】「念誦」を併せて参照。

②敕修清規［上二ノ六丈］念誦云、古規初三、十三、廿三、初八、十八、廿八。今止行初八、十八、廿八。

＊

『敕修清規』［上二の六丈］の「念誦」に云く、「古規には初三、十三、廿三、初八、十八、

廿八なり。今は止だ初八、十八、廿八を行う」と。

＊

○敕修清規［上二ノ六丈］念誦云…今止行初八、十八、廿八＝『勅修百丈清規』巻二「住持章第五・住持日用　念誦」（T48-1121a）に同文が見える。

③　蓋上八、中八念誦、祝禱帝道昌、法輪轉等。下八念誦、令衆觀無常。其意見敕修清規［上二ノ七丈右］念誦回向文。

＊

蓋し上八、中八の念誦は、帝道の昌んにして、法輪、轉ずる等を祝禱す。下八の念誦は、衆をして無常を觀ぜしむ。其の意は『敕修清規』［上二の七丈右］の「念誦」の回向の文に見えたり。

＊

○蓋上八、中八念誦…念誦回向文＝『勅修百丈清規』巻二「住持章第五・住持日用　念誦」に「上八と中八に云く…（上八中八云…）」として、「皇風、永く扇いで、帝道、遐に昌んなり。仏日、輝きを増し、法輪、常に転ず。伽藍・土地、法を護り人を護り、十方の檀那、福を増し慧を増す。如上の縁の為めに、清浄法身毘盧遮那仏を念ず。云云（皇風永扇、帝道遐昌。仏日増輝、法輪常転。伽藍土地、護法護人、十方檀那、増福増慧。為如上縁、念清浄法身毘盧遮那仏。云云）」（T48-1121a）とあり、「下八に云く…（下八云…）」として、「大衆に白す。如来大師、般涅槃に入る。今ま大元の重紀至元元年に至りて、已に二千二百八十四載を得たり。是の日已に過ぎれば、命も亦た随いて減ず。少水の魚の如し。斯に何の楽か有らん。衆等、当に勤めて精進し、頭然を救うが如くすべし。但だ無常を念じて、慎んで放逸なること勿れ。伽藍・土地、法を護り人を護り、十方の檀那、福を増し慧を増す。如上の縁の為めに、清浄法身の十号を念ず。云云（白大衆。如来大師、入般涅槃。至今大元、重紀至元元年、已得二千二百八十四載。是日已過、命亦随減。如少水魚。斯有何楽。衆等当勤精進、如救頭然。但念無常、慎勿放逸。伽藍土地、護法護人、十方檀那、増福増慧。為如上縁、念清浄法身十号。云云）」（同上）とある。

④敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云、節内遇三八日、佛殿念誦。

＊

『敕修清規』［上一の廿一丈］の「聖節」に云く、「節内に三八日に遇わば、佛殿に念誦せよ」と。

＊

○敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云…佛殿念誦＝『勅修百丈清規』巻一「祝釐章第一　聖節」（T48-1113c）に同文が見える。

⑤榮西興禪護國論［下ノ十丈］云、念誦謂毎月初三、十三、廿三、初八、十八、廿八、六箇日有儀式、念十佛名、奉祝皇風遠扇、帝道久潤、佛法永弘、利生廣大、兼報一草一葉施主恩矣。

＊

榮西の『興禪護國論』［下ノ十丈］に云く、「念誦とは毎月の初三、十三、廿三、初八、十八、廿八の、六箇日に儀式有り、十佛名を念じて、皇風遠く扇ぎ、帝道久しく潤い、佛法永く弘まり、利生廣大ならんことを祝し奉り、兼ねて一草一葉の施主の恩に報わんことを謂うなり」と。

＊

○榮西興禪護國論［下ノ十丈］云…兼報一草一葉施主恩矣＝栄西『興禅護国論』巻下（T80-15a）に同文

が見える。

⑥三八日入室。　敕修清規［上二ノ五丈］入室云、今時以三八入室者、備故事也。

＊

三八日に入室（＝師家の室に入り指導を受けること）す。『敕修清規』［上二ノ五丈］の「入室」に云く、「今時、三八を以て入室する者は、故事に備うるなり」と。

＊

○敕修清規［上二ノ五丈］入室云…備故事也＝『勅修百丈清規』巻二「住持章第五・住持日用 入室」の「但だ三下の鼓鳴るを聞けば、即ち趨りて入室す（但聞三下鼓鳴、即趨入室）」という文章に続く割注に同文（T48-1120d）が見える。

⑦三八普説。　西禪舜禪師上堂云、五日一參、三八普説。〈詳垂説類五參上堂。〉

＊

三八の普説。　西禪の舜禪師の上堂に云く、「五日の一參、三八の普説」と。〈「垂説類」の「五參上堂」に詳らかなり。〉

＊

○西禪舜禪師上堂云…三八普説＝『嘉泰普燈録』巻一二「福州西禪慧舜禪師」条（X79-368c）に同文が見える。第十一類「垂説門」【八〇二】「五參上堂」を併せて參照。

（本多道隆）

【一九三】六齋日

①忠曰、毎月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、此爲六齋日。名義集［七ノ廿丈］云、逋沙他、此云齋日。〈止此。〉　齋義、詳雜行類、持齋處。

＊

忠曰く、「毎月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、此れを六齋日と爲す。『名義集』［七の廿丈］に云く、『逋沙他、此こ（＝中国）に齋の日と云う』と。〈此こに止まる。〉　齋の義は、『雜行類』の「持齋」の處に詳らかなり」と。

＊

○名義集［七ノ廿丈］云、逋沙他、此云齋日＝『翻訳名義集』巻七（T54-1137a）からの引用。
○齋義、詳雜行類、持齋處＝「雜行類持齋処」とは、『禅林象器箋』の「第十四類雜行門」にある【九二七】「持齋」を指す。【一八六】「三長齋月」①の注を併せて參照。

②智度論［十三ノ廿七丈］云、問曰、何以故、六齋日受八戒、修福德。答曰、是日惡鬼逐人、欲奪人命、疾病凶衰、令人不吉。是故劫初聖人、教人持齋、修善作福、以避凶衰。是時齋法、不受八戒。直以一日不食爲齋。後佛出世、教語之言、汝當一日一夜、如諸佛、持八戒。過中不食。是功德、將人至涅槃。〈論詳説受八戒法。〉

＊

『智度論』[十三の廿七丈]に云く、「問うて曰く、『何を以ての故に、六齋日に八戒を受け、福德を修する』と。答えて曰く、『是の日、惡鬼、人を逐い、人命を奪わんと欲し、疾病凶衰もて、人をして不吉ならしむ。是の故に劫初（＝世界が成立した当初）の聖人、人に教えて持齋し、善を修めて福を作し、以て凶衰を避けしむ。是の時の齋法は、八戒を受けず。直だに一日食せざるを以て齋と爲すのみ。後に佛出世し、教えて之（＝人）に語げて言く、「汝、當に一日一夜、諸佛の如く、八戒と過中不食（＝正午を過ぎれば食事をとらない）とを持すべし。是の功德、人を將いて涅槃に至る」と。』」と。　〈『[大智度]論』に詳らかに八戒を受くる法を説く。〉

＊

○智度論[十三ノ廿七丈]云…將人至涅槃＝『大智度論』巻一三（T25-160a）に全く同文が見える。『大智度論』によると、「八戒」とは、①生きものを殺さない ②盗みをしない ③性交しない ④嘘をつかない ⑤酒を飲まない ⑥高く大きな床に腰かけない ⑦身を飾りたてたり化粧をしたりしない ⑧歌舞に興じない、という八つの戒のこと（T22-159b~c）。

③佛説四天王經[九十三套一丈。○諸偈類要略引。○勅修鈔一ノ卅五丈。○統紀卅四ノ八丈略引。]云、佛告諸弟子、齋日責心、愼身守口。諸天、齋日伺人善惡。須彌山上、即第二天。天帝名因。福德巍、典主四天。四天神王、即因四鎭王也。各理一方。常以月八日、遣使者下、案行天下、伺察帝王、臣民、龍鬼、蜎飛、蚑行、蠕動之類、心念口言、身行善惡。十四日遣太子下。十五日四王自下。二十三日使者復下、二十九日太子復下。三十日四王復自下。四王下者、日月五星、二十八宿、其中諸天僉然俱下。四王命曰、勤伺衆生施行吉凶。若於斯日、有歸佛歸法歸比丘僧、淨心守齋、布施貧乏、持戒忍辱、精進禪定、翫經散説、開化盲冥。孝順二親、奉事三尊、稽首受法、行四等心、慈育衆生者、具分別之、以啓帝釋。若多修德、精進不怠、釋及輔臣、三十二人、僉然俱喜。釋敕司命、增壽益算、遣諸善神、營護其身、隨戒多少。若持一戒、令五神護之、五戒具者、令二十五神、營衞門戸。凶疫衆邪、陰謀消滅、夜無惡夢、縣官盜賊、水火災變、終而不害。禳禍滅怪、唯斯四等五戒六齋耳。猶如大水而滅小火。豈有不滅者乎。臨其壽終、迎其魂神、上生天上。七寶宮殿、無願不得。若有不濟衆生之命、穢濁盜竊、姪犯他妻、兩舌惡罵、妄言綺語、猒禱咒詛、嫉妬恚癡、逆道不孝、違佛遠法、謗比丘僧、善惡反論。有斯行者、四王以聞。帝釋及諸天、僉然不悅、善神不復營護之。即令日月無光、星宿失度、風雨違時、以現世人、欲其改往修來、洗心齋肅、首過三尊、四等養親、忠于帝王、慈心諫諍、至誠無欺、反前修來、捐穢濁之操、就清淨之道。若有改邪行、就正眞者、帝釋四王、靡不歡喜、日月即清明、星宿有常、風雨順時、毒氣消歇、天降甘露、地出澤泉。水穀滋味、食之少病、華色奕奕、壽命益長。生不更牢獄、死得上天。

＊

『佛説四天王經』[九十三套一丈。○『諸偈類要』にも略引す。○『勅修鈔』一の卅五丈。○『統紀』卅四の八丈にも略引す。]に云く、「佛、諸弟子に告ぐ、『齋日には心を責めて、身を愼み、口を守れ。諸天、齋日に人の善惡を伺う。須彌山上は、即ち第二天なり。天帝（＝帝釈天）は因（＝提桓因）と名づけ、福德、巍として、四天を典主す。四天の神王は、即ち因（＝提桓因こと帝釈天）の四鎭の王なり。各おの一方を理む。常に月の八日を以て、使者を遣わし下

して、天下を案行し、帝王・臣民、龍鬼・蜎飛、蚑行・蠕動の類の、心念（＝心の思い）・口言（＝口にする言葉）・身行（＝身の行い）の善悪を伺察す（＝底本の訓みは「帝王・臣民、龍鬼・蜎飛、蚑行・蠕動の類の、心に念い口に言いて、身に善悪を行ずるを伺察す」となっているが改めた）。十四日には太子を遣わし下す。十五日には四王自ら下る。二十三日には使者復た下り、二十九日には太子復た下る。三十日には四王復た自ら下る。四王下れば、日月五星、二十八宿、其の中の諸天、僉然として倶に下る。四王、命じて曰く、「勤めて衆生の施行の吉凶を伺うべし。若し斯の日に於いて、帰佛・帰法・帰比丘僧し、浄心もて齋を守り、貧乏に布施し、持戒忍辱し、精進禪定し、経を翫い説を散じ、盲冥を開化し、二親に孝順にして、三尊を奉事し、稽首して法を受け、四等心（＝慈無量・悲無量・喜無量・捨無量）を行じ、衆生を慈育する者有れば、具さに之を分別し、以て帝釈に啓せ」と。若し徳を修し、精進して怠たらざること多ければ、〔帝〕釈及び輔臣三十二人、僉然として倶に喜ぶ。〔帝〕釈は司命に敕し、壽を増し算を益さしめ、諸もろの善神を遣わして、其の身を營護するに、戒の多少に隨わしむ。若し一戒を持すれば、五神をして之れを護らしめ、五戒具わる者は、二十五神をして、門戸を營衛せしむ。凶疫・衆邪、陰謀消滅し、夜に惡夢無く、縣官・盗賊、水火の災變、終に害せず。禍を禳い怪を滅するは、唯だ斯の四等・五戒・六齋のみ。猶お大水にして小火を滅するが如し。豈に滅せざる者の有らんや。其の壽の終わりに臨んで、其の魂神を迎えて、天上に上生せしむ。七寶の宮殿にては、願として得ずと云うこと無し。若し衆生の命を濟わず、穢濁・盗竊、他の妻を姪犯し、兩舌・惡罵、妄言・綺語、猒禱・咒詛、嫉妬・恚癡、逆道・不孝、佛に違い法に遠ざかり、比丘僧を謗り、善惡反論すること有り、斯の行い有る者をば、四王以て聞すれば、帝釈及び諸天、僉然として悦ばず、善神復た之を營護せず。即ち日月をして光無く、星宿をして度を失い、風雨をして時に違わしめて、以て世人に現じ、其の往（＝過去）を改め來（＝未来）を修め、心を洗い齋肅し、過を三尊に首げ、四等もて親を養い、帝王に忠にして、慈心もて諫諍し、至誠にして欺くこと無く、前を反（反省）し來を修め、穢濁の操を捐て、清浄の道に就かんことを欲す。若し邪行を改め、正眞に就く者の有れば、帝釈・四王、歡喜せざる靡く、日月は即ち清明にして、星宿に常有り、風雨は時に順い、毒氣は消歇し、天は甘露を降らし、地は澤泉を出だし、水穀の滋味、之を食せば病少なく、華色奕奕として、壽命益ます長く、生きては牢獄を更ず（＝経験しない）、死しては上天を得ん』と」と。

＊

○佛説四天王經［九十三套一丈。○諸偈類要略引。○勅修鈔一ノ卅五丈。○統紀卅四ノ八丈略引。］云…死得上天＝『仏説四天王経』（T15-118b~c）にほぼ同文が見え、雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』巻一（万治三年刊本・三十五丁裏）にも簡単な言及が見られる。『諸偈類要』は未詳。『仏祖統紀』巻三三にも、『仏説四天王経』の内容を要略した文章が見える（「六斎」条・T49-320b~c）。

④智度論［十三ノ廿八丈。○諸偈類要引四天王經、正依智命。○珠林ノ百五ノ十八丈引］云、如四天王經中佛説、月六齋日、使者太子及四天王、自下觀察衆生、布施持戒、孝順父母少者、便上忉利、以啓帝釈、帝釈諸天心皆不悦、説言、阿修羅種多、諸天種少。若布施持戒、孝順父母多者、諸天帝釈心皆歡喜、説言、増益諸天衆、減損阿修羅。是時釈提婆那民、見諸天歡喜、説此偈言、六日神足月、受持清浄戒、是人壽終後、功德必如我。佛告諸比丘、釈

提桓因、不應説如是偈。所以者何。釋提桓因、五衰三毒未除。云何妄言、持一日戒功德福報、必得如我。若受持此戒、必應如佛、是則實説。諸大尊天歡喜因縁故、得福増多。復次此六齋日、惡鬼害人、惱亂一切。若所在丘聚、郡縣國邑、有持齋受戒善人者、以此因縁、惡鬼遠去、住處安穩。以是故、六日持齋受戒、得福増多。問曰、何以故、諸惡鬼輩、以此六日惱害於人。答曰、天地本起經説、劫初成時、有異梵天王子、諸鬼神父。修梵志苦行、滿天上十二歳。於此六日、割肉出血、以著火中。以是故、諸惡鬼神、於此六日、輒有勢力。問曰、諸鬼神父、何以於此六日、割身肉血、以著火中。答曰、諸神中、摩醯首羅神、最大第一。諸神皆有日分。摩醯首羅一月有四日分、八日、二十三日、十四日、二十九日。餘神一月有二日分、月一日、十六日、月二日、十七日。其十五日、三十日、〈法苑珠林其字、在月二日上。〉屬一切神。摩醯首羅、爲諸神主、又得日多故、數其四日爲齋、二日是一切諸神日、亦數以爲齋。是故諸鬼神、於此六日、輒有力勢。復次諸鬼神父、於此六日、割肉出血、以著火中、過十二歳已、天王來下、語其子言、汝求何願。答言、我求有子。天王言、仙人供養法、以燒香甘果、諸清淨事。汝云何以肉血著火中、如罪惡法。汝破善法、樂爲惡事。令汝生惡子噉肉飲血。當説是時、火中有八大鬼出。身黒如墨、髪黄眼赤、有大光明。一切鬼神、皆從此八鬼生。以是故、於此六日、割身肉血、以著火中、而得勢力。如佛法中、日無好惡、隨世惡日因縁故、教持齋受戒。

＊

『智度論』［十三の廿八丈。○『諸偈類要』の『四天王經』を引くは、正に『智命』に依る。○『珠林』の百五の十八丈にも引く］に云く、「『四天王經』の中に佛説くが如きは、『月の六齋日に、使者太子及び四天王、自ら下って衆生を觀察するに、布施・持戒、父母に孝順なること少なきときは、便ち忉利（＝忉利天）に上りて、以て帝釋に啓するに、帝釋・諸天、心に皆な悦ばず、説きて言う、「阿修羅の種は多く、諸天の種は少なし」と。若し布施・持戒、父母に孝順なること多ければ、諸天・帝釋、心に皆な歡喜し、説きて言う、「諸もろの天衆を増益し、阿修羅を減損す」と』と。是の時、釋提婆那民（＝帝釋天）、諸天の歡喜するを見て、此の偈を説きて言く、『六日と神足月に、清淨の戒を受持すれば、是の人の壽、終わるの後ち、功德は必ず我が如くならん』と。佛、諸もろの比丘に告ぐ、『釋提桓因（＝帝釋天）は、應に是くの如き偈を説くべからず。所以の者は何ん。釋提桓因は、五衰・三毒未だ除かざればなり。云何が妄りに「一日戒を持する功德・福報、必ず我が如くなることを得ん」と言わん。若し此の戒を受持せば、必ず應に佛の如くなるべし、是れ則ち實説なり。諸もろの大尊天の歡喜の因縁なるが故に、福を得ること増ます多し』と。復た次に此の六齋日は、惡鬼、人を害し、一切を惱亂す。若し所在の丘聚、郡縣・國邑に、齋を持し戒を受くるの善人有らば、此の因縁を以て、惡鬼は遠く去り、住處は安穩なり。是れを以ての故に、六日に齋を持し戒を受くれば、福を得ること増ます多し。問うて曰く、『何を以ての故に、諸もろの惡鬼の輩、此の六日を以て人を惱害するや』と。答えて曰く、『『天地本起經』に説く、「劫初、成ずる時、異なる梵天王の子有り、

諸もろの鬼神の父なり。梵志の苦行を修めて、天上の十二歳を滿たす。此の六日に於いて、肉を割き血を出だして、以て火中に著く。是れを以ての故に、諸もろの惡鬼神、此の六日に於いて、輒ち勢力有り」と。問うて曰く、『諸もろの鬼神の父、何を以てか此の六日に於いて、身の肉血を割きて、以て火中に著く』と。答えて曰く、『諸神の中に、摩醯首羅神、最大第一なり。諸神に皆な日分有り。摩醯首羅は一月に四の日分有り、八日、二十三日、十四日、二十九日なり。餘神は一月に二の日分有り、月の一日と十六日となり、月の二日と十七日となり。其の十五日と三十日とは、〈『法苑珠林』は、「其」の字、「月の二日」の上に在り。〉一切の神に屬す。摩醯首羅は、諸神の主爲りて、又た日を得ること多し。故に、其の四日を數えて齋を爲し、二日は是れ一切の諸神の日なれば、亦た數えて以て齋を爲す。是の故に諸もろの鬼神、此の六日に於いて、輒ち力勢有り』と。復た次に諸もろの鬼神の父、此の六日に於いて、肉を割き血を出だして、以て火中に著く。十二歳を過ぎ已わって、天王、來たり下って、其の子に語げて言く、『汝、何の願をか求むる』と。答えて言く、『我れ、子有らんことを求む』と。天王の言く、『仙人の供養の法は、燒香・甘果、諸もろの清淨の事を以てす。汝、云何が肉血を以て火中に著きて、罪惡の法の如くする。汝、善法を破り、樂って惡事を爲す。汝をして惡子を生じ、肉を噉い血を飲ましめん』と。是れを説く時に當たって、火中より八大鬼有りて出づ。身の黒きこと墨の如く、髪は黄にして眼は赤く、大光明有り。一切の鬼神は、皆な此の八鬼從り生ず。是れを以ての故に、此の六日に於いて、身の肉血を割きて、以て火中に著けば、而ち勢力を得。佛法の中の如きんば、日に好惡無きも、世の惡日の因縁に隨う。故に、齋を持し戒を受けしむ」と。

＊

○智度論［十三ノ廿八丈…珠林ノ百五ノ十八丈引］云…教持齋受戒＝『大智度論』巻一三「釈初品中戒相義」（T25-160a~b）に同じ文が見える。『諸偈類要』『天地本起経』については未詳。『四天王経』からの引用については③参照。割注の「法苑珠林其字、在月二日上」については、『法苑珠林』巻八八「八戒部第五」に「其月二日十七日十五日三十日属一切神」（T53-932b、中華書局校点本⑥p.2536）とある。

⑤ 忠曰、諸偈類要、援四天王經、全依智論引彼經。撿此方藏中四天王經、無修羅增減文。按增壹阿含［十五ノ十六丈］高幢品、雜阿含第四十［十九丈］、樓炭經［四ノ十五六丈］忉利天品、正法念處經第六十八［四丈］、竝説六齋日。有修羅增減文。大同智論説。

＊

忠曰く、『『諸偈類要』に『四天王經』を援くは、全く『智論』に彼の經（＝『四天王經』）を引くに依る。此方の藏中の『四天王經』を撿ぶるに、修羅增減の文無し。按ずるに、『增壹阿含』［十五の十六丈］「高幢品」、『雜阿含』「第四十」［十九丈］、『樓炭經』［四ノ十五六丈］「忉利天品」、『正法念處經』「第六十八」［四丈］、竝びに六齋日を説く。修羅增減の文有り。大いに『智論』の説に同じ」と。

＊

○忠曰、諸偈類要、援四天王經…大同智論説＝『四天王経』からの引用については③参照。「修羅増減の文（修羅増減文）」とは、文中の「阿修羅の種は多く、諸天の種は少なし（阿修羅種多、諸天種少）」「諸もろの天衆を増益し、阿修羅を減損す（増益諸天衆、減損阿修羅）」という件（くだ）りのことで、無著道忠の指摘通り、確かに、大蔵経所収の『仏説四天王経』（T 15）には、この件りは確認することができない。『増一阿含経』巻一六「高幢品」に「減諸天衆、増益阿須倫衆」（T2-624c）、「増益諸天衆、減損阿須倫衆」（同上）、『雑阿含経』巻四〇に「諸天衆減、阿修羅衆当漸増広」（T2-295c）、「阿修羅衆減、諸天衆増広」（296a）、『大楼炭経』巻四「切利天品」に「減損諸天、増益阿須倫種」（T1-298b）、「増益諸天、減損阿須倫種」（同上）、『正法念処経』巻一九「畜生品」に「諸天衆減、増長阿修羅衆」（T17-109b）、「減損阿修羅、増益諸天衆」（同上）とある。

⑥智度論云［六十五ノ五丈］、從四天王乃至淨居天、是大力諸天來、小鬼避去。菩薩能生清淨大心。是故來隨逐法師。六齋日諸天來觀人心。十五日三十日上白諸天。復次是六齋日、是惡日、令人衰凶。若有是日受八戒、持齋布施聽法、是時諸天歡喜、小鬼不得其便、利益行者。

＊

『智度論』［六十五の五丈］に云く、「四天王從り乃至淨居天（じょうごてん）までに、是の大力の諸天來たれば、小鬼避け去る。菩薩は能く清淨の大心を生ず。是の故に來たって法師に隨逐す（＝付き従う）。六齋日に諸天來たって人心を觀ず。十五日・三十日に上（かみ）諸天に白（もう）す。復た次に是の六齋日は、是れ惡日にして、人をして衰凶せしむ。若し是の日に八戒を受け、持齋布施し聽法すること有れば、是の時、諸天歡喜し、小鬼其の便を得ず、行者を利益す」と。

＊

○智度論云、從四天王…利益行者＝『大智度論』巻六五「無作実相品」（T25-516a）に同文が見える。

⑦優婆夷墮釋迦經［八十七套。未校。敕修鈔一ノ卅五丈引］云、何等爲佛正齋法。是間有賢善人持戒、一月六齋。〈乃至〉齋日朝起、告家中言、今日我身齋。家中莫飲酒、莫鬬諍、莫道錢財。

＊

『優婆夷墮釋迦經』［八十七套。未校。『敕修鈔』一の卅五丈にも引く］云く、「何等をか佛の正齋法と爲す。是の間に賢善人有りて持戒すること、一月に六齋なり。〈乃至〉齋日に朝起きて、家中に告げて言う、『今日、我が身齋す。家中、酒を飲むこと莫かれ、鬬諍すること莫かれ、錢財を道（い）うこと莫かれ』と」と。

＊

○優婆夷墮釋迦經［八十七套。未校。敕修鈔一ノ卅五丈引］云…莫道錢財＝『優陂夷墮舍迦経』に「仏告墮舍迦、『仏正斎法有八戒。使人得度世道、不復墮三悪処、所生常有福祐、亦従八戒本因縁致成仏。何等為仏正斎法。是間有賢善人持戒、一月六日斎。月八日一斎、十四日一斎、十五日一斎、二十三日一斎、二十九日一斎、三十日一斎。斎日朝起、告家中言、『今日我身斎、家中今一日、且莫飲酒、莫鬬諍、莫道説銭財。家中事意所念、口所説、当如阿羅漢』。阿羅漢無殺意、斎日持戒亦当如阿羅漢、無殺意、無捶撃意。念畜生及虫蛾、使常生如阿羅漢意、是為一戒。今日与夜持殺意使不得殺、持意如是、為仏一戒』」（T1-912a~b）とある。傍線部は、「乃至」で中略されている部分。雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』巻一・三十五丁裏（万治三年刊本・駒澤大学禅籍善本図録）に『諸偈類要』からの引用として同文が見える。

⑧觀普賢行法經［六十七套十八丈。○釋門正統四ノ卅一丈引。○統紀卅四ノ八丈引］云、刹利居士、於六

齋日、敕諸境内、力所及處、令行不殺。

＊

『觀普賢行法經』［六十七套十八丈。○『釋門正統』四の廿一丈にも引く。○『統紀』卅四ノ八丈にも引く］に云く、「刹利・居士、六齋日に於いて、諸もろの境内の力の及ぶ所の處に敕して、不殺を行わしめよ」と。

＊

○觀普賢行法經［六十七套十八丈。○釋門正統四ノ廿一丈引。○統紀卅四ノ八丈引。］云…令行不殺＝『仏説観普賢菩薩行法経』に「第四懺悔者、於六斎日、勅諸境内力所及処、令行不殺。修如此法是名修第四懺悔」（T9-394b）とあり、『釈門正統』巻四「順俗志」に「普賢観経云、『若国王大臣、当勧令於六斎日、勅諸境内力所及処、令行不殺』」（X75-307c）、『仏祖統紀』巻三三「法門光顕志第十六」に「若国王大臣、於六斎日勅諸境内令行不殺」（T49-320c）とある。

（藤田宗裕）

⑨梵網經疏［諸偈類要引、未知誰疏。○敕修鈔一ノ卅五丈引］云、三齋六齋、並是鬼神得力之日。此日宜修善。〈乃至〉年三長齋月六齋齋、本爲在家。出家盡壽持齋、不論時節。

＊

『梵網經疏』［『諸偈類要』に引くも、未だ誰の疏なるかを知らず。○『敕修鈔』一の卅五丈にも引く］に云く、「三齋と六齋は、並びに是れ鬼神力を得るの日なり。此の日宜しく善を修すべし。〈乃至〉年の三長齋と月の六齋とに齋するは、本と在家の爲にす。出家は壽を盡くすまでに齋を持すれば、時節を論ぜず」と。

＊

○梵網經疏［諸偈類要引、未知誰疏。○敕修鈔一ノ卅五丈引］云…不論時節＝『諸偈類要』については未詳。雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』巻一・三十五丁裏～三十六丁表（万治三年刊本・駒澤大学禅籍善本図録）に全く同じ文章が見える。無著道忠は、『梵網経疏』が「未だ誰の疏なるかを知らず」と言うが、恐らく、智顗説・灌頂記『菩薩戒義疏』巻下の「三斎と六斎は並びに是れ鬼神力を得るの日なり。此の日宜しく善を修すべし。福、余日に過ぐるも、而も今ま好時に於いて虧慢すれば更に犯す。所犯の事に随い、篇に随い罪を結す。此の時、此の日、応に一戒を加うるを知らざるべからず。一に云く『七衆、倶に制す』と。皆な応に敬すべき時なり。二に云く『但だ在家を制す』と。年の三長斎と月の六斎に斎するは、本と在家の為にす。出家は寿尽くるまで斎を持すれば、時節を論ぜず（三斎六斎並是鬼神得力之日。此日宜修善。福過余日、而今於好時虧慢更犯。随所犯事、随篇結罪。此時此日、不応不知加一戒。一云七衆倶制。皆応敬時。二云但制在家。年三長斎月六斎斎、本為在家。出家尽寿持斎、不論時節）」（T40-578a）という件りからの引用であろう。傍線部は、「乃至」で中略された部分である。

⑩　提謂經説、見三長齋月處。

＊

『提謂經（＝提謂波利經）』の説、「三長齋月」の處に見ゆ。

＊

○提謂經説、見三長齋月處＝【一八六】「三長齋月」⑪参照。

⑪摩訶般若經［十四ノ十五丈。○智論六十五ノ一丈經］云、佛告須菩提、是善男子善女人、若六齋日月八日、二十三日、十四日、二十九日、十五日、三十日、在諸天衆前、説是般若波羅蜜義、是善男子善女人、得無量無辺阿僧祇不可思議不可稱量福德。何以故。須菩提、般若

波羅蜜是大珍宝。何等是大珍寶。是般若波羅蜜、能拔地獄畜生、餓鬼及人中貧窮、能與刹利大姓、婆羅門大姓、居士大家、能與四天王天處、乃至非有想非無想處、能與須陁洹果、斯陁含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提。

＊

『摩訶般若經』〔十四の十五丈。○『智論』六十五の一丈の經〕に云く、「佛、須菩提に告ぐ、『是の善男子、善女人、若し六齋日の、月の八日、二十三日、十四日、二十九日、十五日、三十日に、諸もろの天衆の前に在りて、是の般若波羅蜜の義を説かば、是の善男子、善女人、無量無辺、阿僧祇、不可思議、不可稱量の福德を得。何を以ての故に。須菩提よ、般若波羅蜜は是れ大珍宝なればなり。何等か是れ大珍寶なるや。是の般若波羅蜜は、能く地獄・畜生、餓鬼及び人中の貧窮を拔き、能く刹利大姓、婆羅門大姓、居士大家を與え、能く四天王天處、乃至非有想非無想處を與え、能く須陁洹果、斯陁含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を與う』と」と。

＊

○摩訶般若經〔十四ノ十五丈。○智論六十五ノ一丈經〕云…阿耨多羅三藐三菩提＝鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』巻一二「無作品第四十三」に「仏、須菩提に告ぐ、『是くの如し、是くの如し。是の善男子、善女人、若し六斎日、月の八日、二十三日、十四日、二十九日、十五日、三十日に、諸天衆の前に在りて、是の般若波羅蜜の義を説かば、是の善男子、善女人、無量無辺、阿僧祇、不可思議、不可称量の福德を得。何を以ての故に。須菩提よ、般若波羅蜜は是れ大珍宝なればなり。何等か是れ大珍宝。是の般若波羅蜜は、能く地獄・畜生、餓鬼及び人中の貧窮を拔き、能く刹利大姓、婆羅門大姓、居士大家を与え、能く四天王天処、乃至非有想非無想処を与え、能く須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支仏道、阿耨多羅三藐三菩提を与う。…〔以下略〕…』と（仏告須菩提、『如是、如是。是善男子善女人、若六斎日月八日、二十三日、十四日、二十九日、十五日、三十日、在諸天衆前、説是般若波羅蜜義、是善男子善女人、得無量無辺阿僧祇不可思議不可称量福德。何以故。須菩提、般若波羅蜜是大珍宝。何等是大珍宝。是般若波羅蜜、能拔地獄畜生、餓鬼及人中貧窮、能与剎利大姓、婆羅門大姓、居士大家、能与四天王天処、乃至非有想非無想処、能与須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支仏道、阿耨多羅三藐三菩提」（T8-310c）とある。また、『大智度論』巻六五「無作実相品」の「経」（T25-515a）に同文が見える。

⑫四分律〔三十五ノ十五丈〕云、佛在羅閲城。時城中諸外道梵志、三時集會。月八日、十四日、十五日、衆人大集來往周旋、共爲知友給與飲食、極相愛念。經日供養。時瓶沙王在閣堂上、遥見問左右人。〈乃至〉瓶沙王即下閣堂、往詣世尊所、頭面禮足、白佛言、羅閲城中梵志、三時集會。善哉、世尊。今敕諸比丘令月三時集。〈乃至〉我及群臣亦當來集。時世尊默然受王語、集比丘僧告、八日、十四日、十五日、大衆集、瓶沙亦將群臣來集。諸長者、欲聞説法、佛聽比丘説契經。〈略鈔〉

＊

『四分律』〔三十五の十五丈〕に云く、「佛、羅閲城（＝王舎城・マガダ国の首都）に在り。時に城中の諸もろの外道梵志、三時に集會す。月の八日、十四日、十五日に、衆人、大いに集まりて來往周旋し、共に知友の爲に飲食を給與し、極めて相い愛念す。日を經て供養す。時に瓶沙王、閣堂の上に在りて、遥かに見て左右の人に問う。〈乃至〉瓶沙王（＝頻婆娑羅・マガダ国王ビンビサーラ）、即ち閣堂を下り、世尊の所に往き詣りて、頭面禮足し、佛に白して言く、『羅閲城中の梵志、三時に集會す。善き哉、世尊。今ま諸もろの比丘に敕して、月の三時に集まらしめよ。〈乃至〉我れ及び群臣も亦た當に來集すべし。時に世尊、默然として王の語を受け、比丘僧を集めて告げて、八日、十四日、十五日に、大衆集まり、瓶沙も亦た群臣を將いて來集す。諸もろの長者、説法を聞かんと欲すれば、佛、比丘の契經

（＝経典）を説くことを聴す」と。〈略鈔〉

＊

○四分律［三十五ノ十五丈］云…佛聽比丘説契經＝「略鈔（＝省略して抜き書きする）」とあるように、『四分律』巻三五「説戒揵度 上」の次の件りを簡略にまとめたものである。全文は次の通りである（傍線部は、「乃至」で中略された部分である）。

爾の時、仏、羅閲城に在り。時に城中の諸もろの外道梵志、月に三時に集会す。月の八日、十四日、十五日に、衆人、大いに集まりて来往周旋し、共に知友の為に飲食を給与し、極めて相い愛念し、日を経て供養す。時に瓶沙王、閣堂の上に在りて、遥かに大衆の梵志の聚会の処に往詣するを見、即便ち左右の人に問うて言く、「今ま此の諸人、何所にか至らんと欲せんと為る」と。答えて言く、「王、今ま之を知れ。此の城中の梵志は、月に三たび集会す。八日、十四日、十五日に、衆人、来往周旋して、共に知友の為に飲食を給与し、極めて相い愛念す。是の故に衆人、梵志の聚集の処に往詣す」と。時に瓶沙王、即ち閣堂を下り、往きて世尊の所に詣り、頭面に礼足し已わりて一面に在りて坐し、仏に白して言く、「今ま此の羅閲城中の諸もろの梵志、月に三時に集会す。八日、十四日、十五日に、周旋往返して、共に知友の為に飲食を給与す。善き哉、世尊。今ま諸もろの比丘に勅し、月に三時に集会せしむること、八日、十四日、十五日とせん。亦た当に衆人をして周旋往来し、共に知友の為に飲食を給与せしむべし。我れ及び群臣も亦た当に来集すべし」と。時に世尊、黙然として王瓶沙の語を受く。王、世尊の黙然として語を受くるを見已わり、即ち座従り起ちて、頭面礼足し、遶り已わりて去る。時に世尊、此の因縁を以て比丘僧を集めて告げて言く、「今ま此の羅閲城中の諸もろの梵志、月に三時に会す。八日、十四日、十五日に、共に相い往来周旋し、共に知友の為に飲食を給与し、極めて相い愛念す。汝も亦た月に三時に会し、八日、十四日、十五日に集まれ。亦た衆人をして来往周旋し、共に知友の為に飲食を給与せしめよ。瓶沙王及び群臣も亦た当に来集すべし」と。答えて言く、「是くの如し、世尊よ」と。時に諸もろの比丘、教を受け已わりて、月に三時に集まる。八日、十四日、十五日なり。時に大衆集まりて、周旋往来し、共に知友の為に飲食を給与す。王瓶沙も亦復た諸もろの群臣・大衆を将いて来集す。時に諸もろの比丘、来集し已わりて、各各黙然として坐す。諸もろの長者、諸もろの比丘に白して言く、「我れ等、説法を聞かんと欲す」と。諸もろの比丘、敢えて説かず、此の事を以て仏に白す。仏言く、「汝等与に説法することを聴す」と。既に聴し已わりて、当に何れの法を説くべきかを知らず。仏言く、「今自り已去、契経を説くことを聴す」と。（爾時、仏在羅閲城。時城中諸外道梵志、月三時集会。月八日、十四日、十五日、衆人大集来往周旋、共為知友給与飲食、極相愛念、経日供養。時瓶沙王、在閣堂上、遥見大衆往詣梵志聚会処、即便問左右人言、「今此諸人、為欲何所至」。答言、「王今知之。此城中梵志、月三集会。八日、十四日、十五日、衆人来往周旋、共為知友給与飲食、極相愛念。是故衆人往詣梵志聚集処」。時瓶沙王、即下閣堂、往詣世尊所、頭面礼足已在一面坐、白仏言、「今此羅閲城中諸梵志、月三時集会。八日、十四日、十五日、周旋往返、共為知友給与飲食。善哉、世尊。今勅諸比丘、令月三時集会、八日、十四日、十五日。亦当使衆人周旋往来、共為知友給与飲食。我及群臣亦当来集」。時世尊黙然受王瓶沙語。王見世尊黙然受語已、即従座起、頭面礼足、遶已而去。時世尊以此因縁集比丘僧告言、「今此羅閲城中諸梵志、月三時会。八日、十四日、十五日、共相往来周旋、共為知友給与飲食、極相愛念。汝亦月三時会、八日、十四日、十五日集。亦使衆人来往周旋、共為知友給与飲食。瓶沙王及群臣亦当来集」。答言、「如是、世尊」。時諸比丘受教已、月三時集。八日、十四日、十五日。時大衆集、周旋往来、共為知友給与飲食。王瓶沙亦復将諸群臣大衆来集。時諸比丘来集已、各各黙然而坐。諸長者白諸比丘言、「我等欲聞説法」。諸比丘不敢説、以此事白仏。仏言、「聴汝等与説法」。既聴已、不知当説何法。仏言、「自今已去、聴説契経」。）（T22-816c~817a）

⑬ 忠曰、白月三時、黒月三時、即是六時。

＊

忠曰く、「白月（＝月が満ち始めてから満月に至るまでの十五日間）の三時、黒月（＝満月後の十六日から月末までの期間）の三時、即ち是れ六時なり」と。

⑭ 大毘婆沙論［四十一ノ六丈］云、三十三天、於白黒月、毎常八日、若十四日、若十五日、集善法堂、稱量世間善惡多少、見造善者、便擁護之、見造惡者、即共嫌毀。

＊

『大毘婆沙論』[四十一の六丈]に云く、「三十三天にては、白黒月に於いて、毎常に八日、若しくは十四日、若しくは十五日に、善法堂に集まり、世間の善悪の多少を稱量し、善を造る者を見れば、便ち之を擁護し、悪を造る者を見れば、即ち共に嫌毀す」と。

＊

○大毘婆沙論[四十一ノ六丈]云…即共嫌毀＝『阿毘達磨大毘婆沙論』巻四一「雑蘊第一中無義納息第七之三」に「問う、『何の故にか唯だ三十三天をのみ説く』と。答う、『彼の諸天は、数数、雲集し、善悪の事を論ずるを以ての故に、偏えに之を説きて、謂く「彼の諸天は、白黒月に於いて、毎常に八日、若しくは十四日、若しくは十五日に、善法堂に集まり、世間の善悪の多少を称量す」と。復た次に三十三天は、常に共に善悪を造る者を伺察し、善を造る者を見れば、便ち之を擁護し、悪を造る者を見れば、即ち共に嫌毀す。是の故に偏えに説く』と（問、『何故唯説三十三天』。答、『以彼諸天、数数雲集、論善悪事故、偏説之、謂彼諸天、於白黒月、毎常八日、若十四日、若十五日、集善法堂、称量世間善悪多少。復次三十三天、常共伺察造善悪者、見造善者、便擁護之、見造悪者、即共嫌毀。是故偏説）」（T27-211c）とある。

《補説》【一九三】「六齋日」の各条の冒頭は次の通りである。①～⑧は藤田宗裕が担当し、⑨～⑭は本多道隆が担当した。

①忠曰、毎月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、此爲六齋日。…
②智度論[十三ノ廿七丈]云、問曰、何以故、六齋日受八戒、修福德。…
③佛説四天王經[九十三套一丈。○諸偈類要略引。○敕修鈔一ノ卅五丈。○統紀卅四ノ八丈略引]云…
④智度論[十三ノ廿八丈。諸偈類要引四天王正依智論。珠林ノ百五ノ十八丈引]云、如四天王經中、佛説。…
⑤　忠曰、諸偈類要、援四天王經、全依智論、引彼經。…
⑥智度論[六十五ノ五丈]云、從四天王、乃至淨居天、…
⑦優婆夷墮釋迦經[八十七套　未校　敕修鈔一ノ卅五丈引]云、何等爲佛正齋法。…
⑧觀普賢行法經[六十七套　十八丈。○釋門正統四ノ廿一丈引。○統紀卅四ノ八丈引]云、刹利居士、於六齋日、敕諸境内、…
⑨梵網經疏[諸偈類要引。未知誰疏。○敕修鈔一ノ卅五丈引]云、三齋六齋、並是鬼神得力之日。…
⑩　提謂經説、見三長齋月處。
⑪摩訶般若經[十四ノ十五丈。○智論六十五ノ一丈經]云、佛告須菩提、是善男子善女人、…
⑫四分律[三十五ノ十五丈]云、佛在羅閲城。時城中諸外道梵志、三時集會。…
⑬　忠曰、白月三時、黒月三時、即是六時。
⑭大毘婆沙論[四十一ノ六丈]云、三十三天、於白黒月、毎常八日、若十四日…

（本多道隆）

【一九四】四齋日

①敕修清規[上一ノ廿三丈]四齋日祝讚云、月旦、月望、初八、廿三、四齋日、隔宿堂司行

者、報衆掛諷經牌。　又知殿［下一ノ四丈］云、四齋日、開殿門、以便往來瞻禮。

＊

『敕修清規』［上一の廿三丈］の「四齋日祝讃」に云く、「月旦（＝一日）と、月望（＝十五日）と初八と廿三との、四齋日には、隔宿（＝前日）に堂司行者（＝堂司のもとで諸種の用務を果たす役職）、衆に報じて諷經の牌を掛く」と。　又た「知殿」［下一の四丈］に云く、「四齋日には、殿門（＝仏殿の門）を開き、以て往來（＝参詣者）の瞻禮（＝礼拝）に便すべし」と。

＊

○敕修百丈清規［上一ノ廿三丈］四齋日祝讃云…掛訶諷經牌＝『勅修百丈清規』巻一「祝釐章第一」の「景命四齋日祝讃」条に「景命の好日、月旦、月望、初八、廿三との四齋日には、隔宿に堂司の行者、衆に報じて諷經の牌を掛け、次の早に鐘絶えて後、僧堂前の鐘を鳴らし、衆を集めて殿に登る（景命好日、月旦、月望、初八、廿三、四齋日、隔宿堂司行者、報衆掛諷經牌、次早鐘絶後、鳴僧堂前鐘、集衆登殿）」（T48-1114b）とある。「旦」「望」については、【一八九】「旦望」参照。「堂司」は、禅院の六知事の一つで、維那のこと。『禅学』（p.931）参照。

○知殿［下一ノ四丈］云…以便往來瞻禮＝『勅修百丈清規』巻四「両序章第六」の「知殿」条（T48-1131c）に同文が見える。「知殿」は、禅院六頭首の一つで、殿主ともいう。仏殿の香灯や掃除など、一切のことを司る役職名。『象器箋』【四一一】「知殿」、『禅学』（p.849）参照。

②舊説［敕修鈔一ノ卅六丈］云、六齋日中、舉此四者、朔望、及白黒二月之分中也。乃初八上弦、二十三下弦也。

＊

舊説［敕修鈔一の卅六丈］に云く、「六齋日（＝毎月の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日）の中、此の四を舉ぐる者は、朔望（＝一日と十五日）、及び白黒二月の分中なり。乃ち初八は上弦にして、二十三は下弦なり」と。

＊

○舊説［敕修鈔一ノ卅六丈］云…二十三下弦也＝雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』巻一に「六斎ノ中、四斎ヲ挙ク。白黒二月ノ中也。而初八ハ上弦、二十三ハ下弦ナリ」（三六丁表、駒澤大学電子貴重書庫「禅籍善本図録」002-038）とある。「六斎日」については、【一九三】を参照。「白黒二月」とは、「白月（月が満ち始めてから満月に至るまでの十五日間）」と「黒月（満月後の十六日から月末までの期間）」のこと。

③幻住清規［廿六丈］朔望回向、稱月旦月望令辰。　又云、初八廿三日、但稱齋戒令辰。

＊

『幻住清規』［廿六丈］の朔望の回向には、「月旦・月望令辰」と稱す。　又た云く、「初八と廿三日とは、但だ『齋戒令辰』と稱す」と。

＊

○幻住清規［廿六丈］朔望回向…但稱齋戒令辰＝『幻住庵清規』の「朔望祝聖回向」条に「某州某菴住持臣僧某、〈月旦・月望〉令辰、謹集合菴僧道衆、諷誦大悲円満〈云云〉神呪。所集洪因、端為祝延今上皇帝聖寿万安、金剛無量寿仏、仁王菩薩摩訶薩〈云云〉」（Z111-493a）とあり、「年朝の如きは『歳旦令辰』と称し、冬至は『書雲令節』と称し、或いは初八・二十三日は、但だ『斎戒令辰』と称するのみにして、上下は前に同じ（如年朝称歳旦令辰、冬至称書雲令節、或初八二十三日、但称斎戒令辰、上下同前）」（493b）とある。

（花岡博芳）

【一九四】四齋日

①敕修清規［上一ノ廿三丈］四齋日祝讃云、月旦、月望、初八、廿三、四齋日、隔宿堂司行者、報衆掛諷經牌。　又知殿［下一ノ四丈］云、四齋日、開殿門、以便往來瞻禮。

＊

『敕修清規』［上一の廿三丈］の「四齋日祝讃」に云く、「月旦（＝一日）と、月望（＝十五日）と初八と廿三との、四齋日には、隔宿（＝前日）に堂司行者（＝堂司のもとで諸種の用務を果たす役職）、衆に報じて諷経の牌を掛く」と。　又た「知殿」［下一の四丈］に云く、「四齋日には、殿門（＝仏殿の門）を開き、以て往來（＝参詣者）の瞻禮（＝礼拝）に便すべし」と。

＊

○敕修百丈清規［上一ノ廿三丈］四齋日祝讃云…掛訶諷經牌＝『勅修百丈清規』巻一「祝釐章第一」の「景命四齋日祝讃」条に「景命の好日、月旦、月望、初八、廿三との四齋日には、隔宿に堂司の行者、衆に報じて諷経の牌を掛け、次の早に鐘絶えて後、僧堂前の鐘を鳴らし、衆を集めて殿に登る（景命好日、月旦、月望、初八、廿三、四齋日、隔宿堂司行者、報衆掛諷経牌、次早鐘絶後、鳴僧堂前鐘、集衆登殿）」（T48-1114b）とある。「旦」「望」については、【一八九】「旦望」参照。「堂司」は、禅院の六知事の一つで、維那のこと。『禅学』（p.931）参照。

○知殿［下一ノ四丈］云…以便往來瞻禮＝『勅修百丈清規』巻四「両序章第六」の「知殿」条（T48-1131c）に同文が見える。「知殿」は、禅院六頭首の一つで、殿主ともいう。仏殿の香灯や掃除など、一切のことを司る役職名。『象器箋』【四一一】「知殿」、『禅学』（p.849）参照。

②舊説［敕修鈔一ノ卅六丈］云、六齋日中、舉此四者、朔望、及白黒二月之分中也。乃初八上弦、二十三下弦也。

＊

舊説［敕修鈔一の卅六丈］に云く、「六齋日（＝毎月の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日）の中、此の四を舉ぐる者は、朔望（＝一日と十五日）、及び白黒二月の分中なり。乃ち初八は上弦にして、二十三は下弦なり」と。

＊

○舊説［敕修鈔一ノ卅六丈］云…二十三下弦也＝雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』巻一に「六斎ノ中、四斎ヲ挙ク。白黒二月ノ中也。而初八ハ上弦、二十三ハ下弦ナリ」（三六丁表、駒澤大学電子貴重書庫「禅籍善本図録」002-038）とある。「六斎日」については、【一九三】を参照。「白黒二月」とは、「白月（月が満ち始めてから満月に至るまでの十五日間）」と「黒月（満月後の十六日から月末までの期間）」のこと。

③幻住清規［廿六丈］朔望回向、稱月旦月望令辰。　又云、初八廿三日、但稱齋戒令辰。

＊

『幻住清規』［廿六丈］の朔望の回向には、「月旦・月望令辰」と稱す。　又た云く、「初八と廿三日とは、但だ『齋戒令辰』と稱す」と。

＊

○幻住清規［廿六丈］朔望回向…但稱齋戒令辰＝『幻住庵清規』の「朔望祝聖回向」条に「某州某菴住持臣僧某、〈月旦・月望〉令辰、謹集合菴僧道衆、諷誦大悲円満〈云云〉神呪。所集洪因、端為祝延今上皇帝聖寿万安、金剛無量寿仏、仁王菩薩摩訶薩〈云云〉」（Z111-493a）とあり、「年朝の如きは『歳旦令辰』と称し、冬至は『書雲令節』と称し、或いは初八・二十三日は、但だ『斎戒令辰』と称するのみにして、上下は前に同じ（如年朝称歳旦令辰、冬至称書雲令節、或初八二十三日、但称斎戒令辰、上下同前）」（493b）とある。

【一九五】寅旦

①日用軌範［敕修下一ノ四十六丈］偈云、從朝寅旦直至暮、一切衆生自回互。

＊

「日用軌範」［『敕修』下一の四十六丈］の偈に云く、「朝の寅旦（＝朝の三時から五時まで）從り、直に暮れに至るまで、一切衆生、自ら回互せよ」と。

＊

○日用軌範［敕修下一ノ四十六丈］範偈云…一切衆生自回互＝『勅修百丈清規』巻六「日用軌範」に見える「困じ来たるを覚ゆれば、被を将て脚後に推し、手巾を取りて身を転じて地に下り、巾をば左手に搭けて偈を念じて云え（覚困来、将被推脚後、取手巾転身下地、巾搭左手念偈云…）」（T48-1144b）という文章に続く割注に偈が記されており、「從朝寅旦直至暮、一切衆生自回互。若於脚下喪身形、願汝即今生浄土」（同上）とある。「回互」とは、「二つ以上のものが互いに入り交じって関係し、相依相存の形でありながら、それぞれ独自の意義を失わないこと」（『禅学』p.94）。

②舊説［敕鈔十二ノ廿五丈］曰、凡報時鐘、及某時正中而撃之。或以撃鐘時。為初入某時者謬矣。譬如撃丑時鐘而經半時為寅時之初。又撃寅時鐘而經半時為寅時之終、即是卯時之初也。毎毎如此。

＊

舊説［敕鈔十二の廿五丈］に曰く、「凡そ時を報ずる鐘は、某時の正中に及びて之を撃つ。或いは鐘を撃つ時を以て、初めて某時に入ると為す者は謬れり。譬えば丑の時の鐘を撃ちて半時を經るを寅の時の初めと為すが如し。又た寅の時の鐘を撃ちて、半時を経るを、寅の時の終わりと為せば、即ち是れ卯の時の初めなり。毎毎此くの如し」と。

＊

○舊説［敕鈔十二ノ廿五丈］曰…即是卯時之初也＝雲章一慶述・桃源瑞仙編『勅修百丈清規雲桃鈔』巻一二「注從朝」の項目に「寅ト云ハ、八ツ打テ半時カラ七ツノ後半時マテソ。皷ヲハ中ニ打ソ。七ツ打テヲ寅ト云ハワルイソ」（二五丁・表）とある。原文そのままを典拠とした引用ではなく、取意による作文である。万治三年刊本が、駒澤大学禅籍善本図録で公開されている。

③傳燈録［廿九ノ五丈］載寶誌和尚十二時偈。其十二時者、曰平旦寅、曰日出卯、曰食時辰、曰禺中巳、曰日南午、曰日昳未、曰晡時申、曰日入酉、曰黄昏戌、曰人定亥、曰夜半子、曰鶏鳴丑也。

＊

『傳燈録』［廿九の五丈］に「寶誌和尚の十二時の偈」を載す。其の十二時とは、曰く「平旦（＝夜明け）寅（＝午前四時前後）」、曰く「日出（＝日の出）卯（＝午前六時前後）」、曰く「食時（＝朝食どき）辰（＝午前八時前後）」、曰く「禺中（＝昼近く）巳（＝午前十時前後）」、曰く「日南（＝南中時）午（＝正午前後）」、曰く「日昳（＝日が傾く）未（＝午後二時前後）」、曰く「晡時（＝日暮れ）申（＝午後四時前後）」、曰く「日入（＝日没）酉（＝午後六時前後）」、曰く「黄昏（＝日没直後の暗くなった時間帯）戌（＝午後八時前後）」、曰く「人定（＝人が寝静まる）亥（＝午後十時前後）」、曰く「夜半（＝夜中）子（＝午前零時前後）」、曰く「鶏鳴（＝一番鶏の鳴くころ）丑（＝午前二時前後）なり」

（花岡博芳）

と。

＊

○傳燈録［廿九ノ五丈］載寳誌和尚十二時偈…曰鷄鳴丑也＝『景徳伝燈録』巻二九「宝誌和尚十二時頌」（T51-450a~c）の原文は次の通り。

平旦、寅。狂機内有道人身。窮苦已経無量劫。不信常擎如意珍。若捉物入迷津。但有纎豪即是塵、不住旧時無相貌。外求知識也非真。

日出、卯。用処不須生善巧。縦使神光照有無、起意便遭魔事撓。若施功終不了、日夜被他人我拗。不用安排只麽従、何曽心地生煩悩。

食時、辰。無明本是釈迦身、坐臥不知元是道。只麽忙忙受苦辛、認声色覓疎親。只是他家染汚人。若擬将心求仏道、問取虚空始出塵。

禺中、巳。未了之人教不至。仮饒通達祖師言、莫向心頭安了義。只守玄没文字。認著依前還不是。暫時自肯不追尋。曠劫不遭魔境使。

日南、午。四大身中無価宝、陽焔空華不肯抛。作意修行、転辛苦。不曽迷、莫求悟。任爾、朝陽幾廻暮。有相身中無相身、無明路上無生路。

日昳、未。心地何曽安了義。他家文字没親疎。莫起工夫求的意。任縦横絶忌諱、長在人間不居世。運用不離声色中、歴劫何曽暫抛棄。

晡時、申。学道先須不厭貧。有相本来権積聚。無形何用要安真。作浄潔却労神。莫認愚痴作近隣。言下不求無処所。暫時喚作出家人。

日入、酉。虚幻声音終不久。禅悦珍羞尚不餐。誰能更飲無明酒。没可抛無物守。蕩蕩逍遥不曽有。縦爾多聞達古今、也是痴狂外辺走。

黄昏、戌。狂子興功投暗室。仮使心通無量時、歴劫何曽異今日。擬商量却啾唧。転使心頭黒如漆。

昼夜舒光照有無。痴人喚作波羅蜜。

人定、亥。勇猛精進成懈怠。不起纎豪修学心、無相光中常自在。超釈迦越祖代。心有微塵、還窒閡。廓然無事頓清閑。他家自有通人愛。

夜半、子。心住無生即生死。生死何曽属有無。用時便用没文字。祖師言外辺事、識取起時、還不是。作意捜求実没蹤。生死魔来任相試。

鶏鳴、丑。一顆円珠明已久。内外接尋覓総無。境上施為渾大有。不見頭、又無手。世界壊時渠不朽。未了之人聴一言。只遮、如今誰動口。

（千坂成也）

【一九六】明相

①法苑珠林［百九ノ五丈］云、若欲解齋、要待明相出時、始得食粥。不爾破齋。何名明相。如薩婆多論［、、、毘尼四ノ十九丈］云、明相有三種色。若日照閻浮提樹、則有黒色。若照樹葉、則有青色。若過樹葉、則有白色。於三色中白色爲正、始得解齋食其粥也。

＊

『法苑珠林』［百九の五丈］に云く、「若し齋（＝正午を過ぎて食事をしない制約のこと）を解せんと欲せば、要らず明相出づる時を待ちて、始めて粥を食することを得べし。爾らざれば破齋（＝正午を過ぎて食事をしない制約を破ること）なり。何をか明相と名づく。『薩婆多論』［『、、、毘尼』四の十九丈］に云うが如し、『明相に三種の色有り。若し日（＝太陽）、閻浮提樹（＝閻浮樹。インドに自生する熱帯性の小高木）を照らせば、則ち黒色有り。若し樹葉を過ぐるときは、則ち白色有り。三色の中に於いて白色を正（＝正時）と爲す』と。始めて齋を解きて其の粥を食することを得るなり」と。

＊

○法苑珠林［百九ノ五丈］云…始得解齋食其粥也＝『法苑珠林』巻九一「受斎篇第八十九」の「引証部

第二」条（T53-955b）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、「粥」は、『象器箋』【一三一五】に立項されている。「薩婆多論」とは、『薩婆多毘尼毘婆沙』のこと。「明相有三種色」以下、「於三色中白色為正」までが巻四「不離衣宿第二」（T23-529b）に見える文章で、文頭が「明相者、有種種異名」となっている以外は同文である。

②釋氏要覧［上ノ六十一丈］云、四分律云、明相出、始得食粥。餘皆非時。婆娑論云、明相有三。初日照剎部樹身、天作黑色。二日照樹葉、天作青色。三日過樹、天作白色。三色中、取白色爲正時。須舒手見掌文分明、始得食粥。

＊

『釋氏要覧』［上の六十一丈］に云く、「『四分律』（＝曇無徳部所属の律蔵で小乗律の一）に云く、『明相出でて、始めて粥を食することを得。餘は皆な非時なり』と。『婆娑論』に云く、『明相に三有り。初めに日（＝太陽）、剎部樹（＝閻浮提樹に同じ）の身を照らし、天、黑色を作す。二に日、樹葉を照らし、天、青色を作す。三に日、樹を過ぎ（＝底本は「過ぐ」と訓むが改めた）、天、白色を作す。三色の中に、白色を取りて正時と爲す。須く手を舒べ掌文（＝手のひらの皺）を見ること分明にして、始めて粥を食することを得べし』と」と。

＊

○釋氏要覧［上ノ六十一丈］云…始得食粥＝『釈氏要覧』巻上「中食」の「粥正時」条（T54-274b）に全く同じ文章が見える。

③澂彧前聞記云、天龍第二代佛慈禪師者、名志玄、號無極、初住臨川。一日粥早。師不展鉢、首座以爲不安候之。師云、古規不云乎、掌文見而喫粥。老僧何病之有。至今臨川、曉鐘雖絶、開靜待明者、師遺範也。

＊

澂彧の『前聞記』に云く、「天龍第二代佛慈禪師は、名は志玄、無極と號し、初め臨川（＝臨川寺）に住す。一日（＝ある日）、粥早し。師、鉢を展げざれば、首座、以て不安（＝病気になること）と爲し、之（＝仏慈禪師）を候す。師曰く、『古規に云わずや、「掌文見えて粥を喫す」と。老僧、何の病か之れ有らん』と。今に至るまで臨川にては、曉鐘、絶ゆ（＝曉鐘の音が鳴り終わる）と雖も、開靜（＝起床）して明きを待つは、師の遺範なり』と」と。

＊

○澂彧前聞記云…師遺範也＝「澂彧」とは、室町時代の禅僧、天章澄彧（一三七九～？）のこと。「仏慈禪師」は、臨川寺や天龍寺に住持した無極志玄（一二八二～一三五九）のこと。『常光国師語録』巻上に収められた澄彧撰「前聞記」（T81-44b）に同文が見える。

④忠曰、無極不展鉢者、諳律文也。首座以爲不安者、盲于佛制也。開靜待明、本是律法、不可必爲師遺範也。

＊

忠曰く、「無極、鉢を展げざるは、律文を諳ずればなり。首座、以て不安と爲すは、佛制に盲ければなり。開靜して明きを待つは、本と是れ律法なれば、必ずしも師の遺範と爲す可からざるなり」と。

⑤ 四分律［十四ノ廿六丈］云、非時者、從日中乃至明相未出。若比丘非時受食食、咽咽波逸提。

＊

『四分律』［十四の廿六丈］に云く、「非時（＝正午以降）は、日中從り乃ち明相未だ出でざるに至る。若し比丘、非時に食を受けて食すれば、咽咽波逸提（＝小乗戒律の一つで、衣食住を不当に取得した時に問われる罪）なり」と。

＊

○四分律［十四ノ廿六丈］云…若比丘非時受食食咽咽波逸提＝『四分律』巻一四「九十単提法之四」（T22-662b）に見える文章である。原文では、「非時者、從日中乃至明相未出。食者有二種。佉闍尼食如上。蒲闍尼五種食如上。若比丘非時受食食、咽咽波逸提」とあるが、『象器箋』では「食者有二種。佉闍尼食如上。蒲闍尼五種食如上」の部分が削除されている。

⑥ 大般若經［五百六十七ノ五丈］云、如見東方赤明相現、則知不久日輪當出。若聞般若波羅蜜多、當知是人去佛不遠。

＊

『大般若經』［五百六十七の五丈］に云く、「如し東方の赤明相の現るるを見れば、則ち知んぬ、久しからずして、日輪、當に出づべきことを。若し般若波羅蜜多を聞かば、當に知るべし、是の人、佛を去ること遠からざることを」と。

＊

○大般若經［五百六十七ノ五丈］云…當知是人去佛不遠＝『大般若経』巻五六七「第六分顕相品第三」（T7-926c）に全く同じ文章が見える。

（堀野真澄）

【一九七】粥罷

①喫粥之後也。

＊

喫粥の後なり。

②敕修清規聖節云、至五更、住持行香回、再覆粥罷上堂。

＊

『敕修清規』の「聖節」に云く、「五更（＝寅の刻。午前三時～五時）に至って、住持、行香（＝巡堂して焼香する）して回るとき、再び覆す、『粥罷わりて上堂（＝説法のために法堂に赴く）』と」と。

＊

○敕修清規聖節云…再覆粥罷上堂＝『勅修百丈清規』巻一「祝釐章第一」の「聖節」（T48-1113a）に同文が見える。なお、文中の事項のうち、【九五二】「聖節」・【三六五】「住持」・【六一二】「行香」・【八〇〇】「上堂」は、それぞれ『象器箋』の中に立項されている。

（桐山大幹）

【一九八】半齋

①舊説［敕鈔九ノ十六丈］云、在粥與齋之半。故曰半齋。　又見諷唱類。

＊

舊説［『敕鈔』九の十六丈］に云く、「粥と齋との半ばに在り。故に『半齋』と曰う」と。又た「諷唱類」に見ゆ。

＊

○舊説［敕鈔九ノ十六丈］云、在粥與齋之半、故曰半齋＝『勅修百丈清規抄』巻九に「半齋ハ粥ト齋トノ半ニソ」（16b・万治三年刊本・駒澤大学禅籍善本図録）とある。「粥」「齋」については、それぞれ『象器箋』内に立項されている（【一三一五】「粥」、【一三二二】「齋」）。

○又見諷唱類＝『象器箋』巻一三「第十七類　諷唱門」参照。

②忠曰、半者猶如備用清規半晩之半。然世有不辨半齋義者、妄引雑譬喩經半日齋因縁［敕鈔三ノ廿三丈］〈雑譬喩經云、昔大檀越、請佛僧飯。有一賣酪客至。因留其飯、勸持齋戒聽法、暮歸。婦言、我朝未飯、延待至今。強令相伴。敗壞其齋、半齋之福、七生天上、七生人間。一日持齋、有六十萬歳糧。〉、令其義益隱矣。或援寄歸傳半者蒲膳尼。半者珂但尼、亦不當也。又半齋者、時名也。然以半齋諷經稱誦半齋、則成歇後語。今援數語、證粥時與飯時之半義。

＊

忠曰く、「『半』とは、猶お『備用清規』の半晩の半の如し。然るに世に半齋の義を辨ぜざる者有って、妄りに『雑譬喩經』の半日齋の因縁（＝由来）を引く［『敕鈔』三の廿三丈］。〈『雑譬喩經』に云く、「昔、大檀越（＝特に多くの布施を行う施主）、佛僧に請いて飯せしむ。一りの酪を賣る客有りて至る。因りて其れを留めて飯せしめ、勸めて齋戒（＝飲食・動作を慎んで身心を清める）を持せしめ、聽法して暮に歸る（＝客は夕方帰って行った）。婦言く、『我れ朝より未だ飯せず、延待して今に至る』と。強いて相伴（＝一緒に食べること）せしむ。其の齋を敗壞するも、半齋の福は、七たび天上に生まれ、七たび人間に生まる。一日の持齋に、六十萬歳の糧有り」と。〉其の義をして益ます隱れしむ。或いは『寄歸傳』の『半者蒲膳尼、半者珂但尼』を援くも、亦た當たらざるなり。又た半齋は、時の名なり。然るに半齋諷經を以て『半齋を誦す』と稱するは、則ち歇後（＝ある語句の後半を省略し、前半でその語句全体の意味をもたせること）の語と成る。今ま數語を援きて、粥時と飯時との半の義を證す」と。

＊

○半者猶如備用清規半晩之半…證粥時與飯時之半義＝「備」は、「備」の別字。「妄に『雑譬喩經』の半日齋の因縁を引用している」という無著道忠の批判は、『勅修百丈清規抄』で取り上げられている常庵龍崇（一四七〇～一五三六）の説を踏まえる。『勅修百丈清規抄』巻三「半齋」条に「寅（＝常庵）按諸偈類要引雑譬喩經云、昔大檀越請仏僧飯、有一売酪客至、因留其飯、勸持齋戒、聽法暮帰。婦言、我朝未飯、延待至今。強令相伴、敗壞其齋。半齋之福、七生天上、七生人間、一日持齋、六十万歳糧云云」（23a・万治三年刊本・駒澤大学禅籍善本図録）とある。割注の「雑譬喩經云…有六十万歳糧」については、『旧雑比喩經』上巻に「昔有四姓請仏飯。時有一人売牛渾、大姓留止飯、教持齋戒止聽経、賓乃帰。婦言、我朝相待未飯。便強令夫飯、壞其齋意。雖爾七生天上、七生世間。師曰、一日持齋、有六十万歳糧」（T4-513a）とある。義浄『南海寄帰内法伝』からの引用とされる「半者蒲膳尼、半者珂但尼」は、巻一（T54-210b）に同じ文章が見える。「半者蒲膳尼」は、「麨・飯・乾飯・魚・肉、あるいは飯・麦豆飯・麨・肉・餅。比丘の正食とされる」（『中村』p.1114）、「半者珂但尼」は、「噛んで食べ

るべき五種のもの。根・茎・華・葉・果の五つ」（同上）。また、【二〇五】「半晩」・【三三八】「檀越」・【九二七】「持斎」・【九九五】「半斎諷経」は、それぞれ『象器箋』に立項されている。

③敕修清規［上二ノ四丈］告香曰、次早請參頭茶、半齋請參頭維那侍者點心。　又迎待尊宿［上二ノ十一丈ヲ］云、半齋點心。　又兩序進退［下一ノ十四丈］云、方丈請半齋點心、齋時草飯。　又方丈特爲新舊兩序湯云、粥罷請新舊人茶、半齋庫司點心。〈備用清規［六ノ五丈］兩序進退亦有此語。〉

＊

『敕修清規』［上二の四丈］の「告香」に曰く、「次の早（＝朝）に參頭を茶に請し、半齋に參頭・維那・侍者を點心に請す」と。　又た「迎待尊宿」［上二の十一丈ヲ］に云く、「半齋に點心す」と。　又た「兩序進退」［下一の十四丈］に云く、「方丈、半齋の點心、齋時の草飯に請す」と。　又た「方丈特爲新舊兩序の湯」に云く、「粥罷（＝粥後）に新舊の人を茶に請す。半齋に庫司（＝寺務を総監する都監寺）の點心あり」と。〈『備用清規』［六の五丈］の「兩序進退」にも亦た此の語有り。〉

＊

○敕修清規［上二ノ四丈］告香曰…備用清規［六ノ五丈］兩序、進退、亦有此語＝「告香曰…半斎請参頭維那侍者点心」は『勅修百丈清規』巻二（T48-1120d）に、「迎待尊宿云、半斎点心」は同・巻七（T48-1154a）に、「両序進退云…斎時草飯」は同・巻四（T48-1134c）に、それぞれ全く同じ文章が見える。「方丈特為新旧両序湯云…半斎庫司点心」は、同・巻四に「粥罷、請新旧人茶。庫司亦請茶。然不及赴。赴方丈茶罷。却往致謝。半斎庫司点心」（T48-1135a）とあり、「庫司亦請茶。然不及赴。赴方丈茶罷。却往致謝」の部分が、ここでは省略されている。『禅林備用清規』巻六「両班進退」に「新旧の両序、同に巡寮す。半斎点心、斎時草飯は並な方丈に就き、西堂の耆旧は光伴し、荘庫の職務は不ず（新旧両序同巡寮。半斎点心、斎時草飯並就方丈、西堂耆旧光伴、荘庫職務不）」（X63-642a）とある。また、【四二八】「參頭」・【五二五】「維那」・【一三四〇】「點心」・【一三二三】「草飯」・【一九七】「粥罷」・【四四四】「庫司」は、それぞれ『象器箋』に立項されている。

（桐山大幹）

【一九九】

【二〇〇】斎罷

①午齋之後也。

＊

午齋の後なり。

＊

○午齋＝午後の食事のこと。

②敕修清規［二ノ廿一丈］聖節云、至日齋罷、堂司行者、覆住持兩序諸寮、掛念誦牌。

＊

『敕修清規』［二の廿一丈］の「聖節（＝今上天皇の誕生日）」に云く、「日に至りて齋罷わる

に、堂司行者（＝維那の下で諸種の用務を行う者）は、住持・兩序（＝仏殿における班位）・諸寮に覆げて、念誦の牌（＝三日と八日の念誦の際、維那があらかじめ「念誦」と書いて告知する牌）を掛く」と。

＊

○敕修清規［二ノ廿一丈］聖節云…掛念誦牌＝『勅修百丈清規』巻一「聖節」（T48-1113a）に見える文章で、原文では文末が「掛念誦牌報衆」となっており、『象器箋』では「報衆」の二字が削除されている。文中の事項のうち、【九五二】「聖節」・【五六七】「堂司行者」・【三六五】「住持」・【一二七八】「念誦牌」は、『象器箋』の中に立項されている。

（堀野真澄）

【二〇一】齋退

①即齋罷也。

＊

即ち齋罷なり。

＊

○齋退…即齋罷也＝「斎退」は「さいたい」とも読む。午後の食事が終わった後、すなわち、およそ正午より三時頃までのことをいう。斎罷に同じ（『禅学』p.376）。「斎罷」については【二〇〇】参照。

②敕修清規［上二ノ廿三丈］山門特爲新命茶湯云、齋退鳴鼓集衆。

＊

『敕修清規』［上二の廿三丈］の「山門特爲新命茶湯（山門特に新命の爲にする茶湯）」に云く、「齋退に鼓を鳴らし衆を集む」と。

＊

○敕修清規［上二ノ廿三丈］山門特爲新命茶湯云、齋退鳴鼓集衆＝『勅修百丈清規』巻三「山門特為新命茶湯」に「茶湯の榜を預じめ僧堂前の上下間に張る。庫司、仍て請状を具う。〈式は後に見えたり。〉枠袱爐燭を備えて、方丈に詣で挿香拝請す。免ずれば則ち触礼す。稟して云く、〈斎退に雲堂に就て点茶を特に為にす。伏して望むらくは慈悲降重せよ。〉稟し訖えて状を呈し、随って客頭をして両序・勤旧・大衆を請じて光伴せしむ。點〈茶湯〉の牌を掛けて衆に報ず。僧堂の内に住持の位を鋪設す。〈近時斎時に長板の鳴るを聞きて、知事堂に入り炷香展拝し、巡堂一匝して茶を請ずること有り。然も特に住持の為に賀を陳ぶるのみ。古規にも亦た「巡堂して大衆を請ずるの礼無し」と。之を免ずるを当たれりと為す。〉斎退に鼓を鳴らし衆を集む。知事、住持を揖して堂に入らしめ、位に帰れば揖坐し焼香一炷、住持の前に揖香、聖僧の後ろ従り転じて中に帰りて問訊して立つ。茶を行くこと遍くして瓶出づれば、住持の前に往きて揖茶、身を退き、聖僧の後右より出でて炷香、展じて三拝し、起ちて全班を引き、住持の前に至りて両展三礼して出づるを送る。復た堂に帰り焼香し、上下間に問訊し盞を収めて退座す。湯は茶礼と同じ。但だ住持を送りて堂を出づること無し。湯罷て座に就き薬石す（茶湯榜預張僧堂前上下間。庫司仍具請状〈式見後〉備枠袱爐燭、詣方丈挿香拝請。免則触礼稟云、〈斎退就雲堂点茶特為。伏望慈悲降重。〉稟訖呈状、随令客頭請両序勤旧大衆光伴。掛点〈茶湯〉牌報衆。僧堂内鋪設住持位。〈近時有斎時聞長板鳴、知事入堂炷香展拝、巡堂一匝請茶。然特為住持陳賀。古規亦無巡堂請大衆之礼。免之為当。〉斎退鳴鼓集衆。知事揖住持入堂、帰位揖坐焼香一炷、住持前揖香、従聖僧後転帰中問訊立。行茶遍瓶出、往住持前揖茶、退身、聖僧後右出炷香、展三拝、起引全班、至住持前両展三礼送出。復帰堂焼香、上下間問訊収盞退座。湯与茶礼同。但無送住持出堂。湯罷就座薬石）」（T48-1126b）とあるのに拠る。「斎退」と「特為茶」については、【八二】「茶堂」で既述されている。

（花岡博芳）

【二〇二】

【二〇三】参後

①晩参或放参之後曰参後。稍近薄暮也。

＊

晩参或いは放参の後を「参後」と曰う。稍や薄暮（＝夕暮れ時）に近きなり。

＊

○晩参或放参之後曰参後。稍近薄暮也＝文中の事項のうち、「晩参」「放参」については、『象器箋』にそれぞれ立項されている（【八一九】「晩参」、【六二六】「放参」）。

②敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云、参後坐禪如常。

＊

『敕修清規』［下一の四十一丈］の「坐禪」に云く、「参後の坐禪は常の如し」と。

＊

○敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云、参後坐禪如常＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1142c）に同じ文章が見える。

（桐山大幹）

【二〇四】参退

①即参後也。

＊

即ち参後なり。

＊

○即参後也＝『象器箋』【二〇三】「参後」参照。晩参あるいは放参後の夕暮れ時に近い時間をいう。

②眞淨文禪師歸宗録［古宿四十三ノ廿二丈。○正法眼藏一上ノ五十三丈引］上堂云〈云云。〉、今日莊主、設饌飯、俵賬錢。参退僧堂内普請喫茶去。

＊

眞淨文禪師の「歸宗の録」［『古宿』四十三の廿二丈。○『正法眼藏』一上の五十三丈にも引く］の「上堂」に云く、「〈云云。〉今日、莊主（＝莊園を管理する役）、饌飯（＝五目飯・菜飯）を設け、賬錢（＝施主から施される施財）を俵（＝分配すること）し、参退に僧堂内に普請し喫茶し去らん」と。

＊

○眞淨文禪師歸宗録［古宿四十三ノ廿二丈。○正法眼藏一上ノ五十三丈］上堂云…喫茶去＝真浄文禪師とは、臨済宗黄龍派の第二祖である雲庵克文（一〇二五～一一〇二）のこと。『古尊宿語録』巻四三・宝峰雲庵真浄禪師「住廬山帰宗語録」に同じ文章が見える（X68-288b）。同様に、大慧宗杲『正法眼藏』巻一上（X67-569b）、『聯燈会要』巻十四（X79-125b）にも同文が見られる。「上堂」「莊主」については、『象器

箋』にそれぞれ立項されている（【八〇〇】「上堂」、【四九五】「莊主」）。

（桐山大幹）

【二〇五】半晩

①齋了與哺時之半時也。

齋了と哺時との半時なり。

＊

＊

○齋了與哺時之半時也＝「齋了」は【八二】「茶堂」で既述されているとおり、「齋退」と同じ意味。「齋了」「齋退」「齋罷」は、正午より午後三時頃までのこと。「哺時」は、「申の刻。現今の午後四時」「禅寺では、午後二時より四時過ぎまでの齋罷（昼食後）の時間の総称」（『禅学』p.1151）。「半晩」は、現在の午後三時頃のこと。

②備用清規［七ノ八丈］知浴云、半晩浴頭、覆首座方丈維那、鳴鼓三下。　律苑事規［八ノ二丈］全同。

＊

『備用清規』［七の八丈］の「知浴」に云く、「半晩に浴頭、首座と方丈と維那に覆し、鼓を鳴らすこと三下（＝三回）す」と。　『律苑事規』［八の二丈］全て同じ。

＊

○備用清規［七ノ八丈］知浴云…律苑事規［八ノ二丈］全同＝『禅林備用清規』巻七「知浴」（X63-647b）、『律苑事規』巻八の同条（X60-124a）に同文が見える。

③　敕修清規［下一ノ三丈］知浴、半晩作齋罷。

＊

『敕修清規』［下一の三丈］の「知浴」には、「半晩」を「齋罷」に作る。

＊

○敕修清規［下一ノ三丈］知浴、半晩作齋罷＝「齋罷」については、【二〇〇】の同項、【二〇一】「齋退」に見える。『勅修百丈清規』巻四「知浴」に「凡そ開浴に遇いては、齋前に開浴の牌を掛く。寒月には五日に一浴、暑天には毎日淋汗す。浴室を鋪設し、手巾を掛け、面盆と拖鞋と脚布を出し、参頭、行者を差して直浴せしむ。齋罷に浴頭、維那と首座と住持に覆し畢わりて、鼓を鳴らすこと三下し、聖を浴す。桶の内に皆な少湯を著き、焼香礼拝し、聖を請じて浴せしむることを想うべし。次第に廊を巡りて、板を鳴らすこと三下し、遍く鼓を鳴らす。第一通には僧衆、浴に入る。第二通の末には頭首、浴に入る。第三通には行者、浴に入る。此の時、住持方に入れば、屏風を以て遮り隔てて浴すべし。第四通には人力、浴に入り、監作の行者と知事、末に居して浴す。就きて之を弾圧し、併せて点視して竈中の火及び炭煤を息して、水もて洒ぎて乾浄ならしめよ。余柴有らば遠処に搬ぶべし。其の入浴の資次は、当に刊して浴室外に掲ぐべし。〈今時、『住持は頭首の後に殿れて浴し、知事は行者の後に殿れて浴す』と謂うは、非なり。如し住持、故有りて、頭首と同に先ず浴せんと欲すれば、則ち屏障を設くることを用いず、小閣の内に入らずして、只だ頭首の板頭に衣を解くべし。〉室内に小板を掛け、旁に小牌を釘うちて書して云え、〈板を鳴らすこと、一声には湯を添えよ。二声には水を添えよ。三声には則ち止むべし。此を以て節と為す。〉如し施主、浴を設ければ、則ち課経回向す。能く妙触宣明にして仏子住を成せば、則ち功は浪りに施さざるなり（凡遇開浴、齋前掛開浴牌。寒月五日一浴、暑天毎日淋汗。鋪設浴室、掛手巾、出面盆拖鞋脚布、参頭差行者直浴。齋罷浴頭、覆維那首座住持畢、鳴鼓三下、浴聖。桶内皆著少湯、焼香礼拝、想請聖浴。次第巡廊、鳴板三下、遍鳴鼓。第一通僧衆入浴。第二通末頭首入浴。第三通行者入浴。

此時住持方入、以屏風遮隔而浴。第四通人力入浴、監作行者知事、居末浴。就弾圧之、併点視令息竈中火及炭煤、水洒乾浄。有余柴、搬於遠処。其入浴資次、当刊掲浴室外。〈今時謂『住持殿頭首後浴、知事殿行者後浴』、非也。如往持有故、欲同頭首先浴、則不用設屏障。不入小閣内、只頭首板頭解衣。〉室内掛小板、旁釘小牌書云、〈鳴板、一声添湯。二声添水。三声則止。以此為節。〉如施主設浴、則課経回向、能妙触宣明、成仏子住、則功不浪施矣）」（T48-1131b）とある。「『半晩』を『斎罷』に作る（半晩作斎罷）」とは、『禅林備用清規』や『律苑事規』が「半晩浴頭」と記すところを、『勅修百丈清規』は、「斎罷」に作って「斎罷浴頭」と記すという意味である。

（花岡博芳）

【二〇六】晩刻

①敕修清規［上二ノ廿三丈］山門特爲新命茶湯状式云、今晨晩刻、就雲堂點茶。

＊

『敕修清規』［上二の廿三丈］の「山門特爲新命茶湯（山門特に新命の爲めにする茶湯）」（＝禅院内の者が、新命住持の入院を祝して行う茶湯の礼）」の「状式」に云く、「今晨（＝今日）の晩刻、雲堂（＝僧堂）に就きて點茶す（＝茶を点てる）」と。

＊

○敕修清規［上二ノ廿三丈］山門特爲新命茶湯状式云、今晨晩刻就雲堂點茶＝『勅修百丈清規』巻三「山門特為新命茶湯」の「状式」（T48-1126b）に見える文章であるが、原文は「取今晨斎退晩刻就雲堂点茶湯用伸陳賀之儀」となっている。文中の事項のうち、【五一】「雲堂」・【一三九八】「点茶」は、『象器箋』の中に立項されている

（堀野真澄）

【二〇七】昏鐘鳴

①敕修清規［上二ノ卅四丈］達磨忌云、昏鐘鳴再鳴僧堂鐘集衆。　又［上二ノ二丈］晩參云、移於昏鐘鳴而謂之小參。　又［上二ノ卅丈］對霊小參云、候昏鐘鳴、鳴鼓集衆。

＊

『敕修清規』［上二の卅四丈］の「達磨忌」に云く、「昏鐘鳴に再び僧堂の鐘を鳴らし衆を集む」と。　又た［上二の二丈］「晩參」（＝晩間に行われる説法）に云く、「昏鐘鳴に移して（＝申の刻の晩參を昏鐘の時に行うこと）之を小參（＝方丈住持より法を受けること）と謂う」と。　又た［上二の卅丈］「對霊の小參」（＝死者の龕前において行う禅問答）に云く、「昏鐘鳴を候ちて、鼓を鳴らし衆を集む」と。

＊

○敕修清規［上二ノ卅四丈］達磨忌云…鳴鼓集衆＝「達磨忌云、昏鐘鳴再鳴僧堂鐘集衆」は、『勅修百丈清規』巻二「達磨忌」（T48-1117c）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【九六二】「達磨忌」・【一四二一】「僧堂鐘」は、『象器箋』の中に立項されている。「晩參云、移於昏鐘鳴而謂之小參」は、同・巻二「晩參」（T48-1119b）に見える文章であるが、原文は、「或四節臘、則移於昏鐘鳴而謂之小參」となっており、『象器箋』では「或四節臘則」の五字が削除されている。文中の事項のうち、【八一九】「晩參」は、『象器箋』の中に立項されている。「対霊小參云、候昏鐘鳴、鳴鼓集衆」は、同・巻三「対霊小參・奠茶湯・念誦・致祭」（T48-1128b）に見える文章であるが、原文は「候昏鍾、鳴鼓集衆」となっており、『象器箋』では「鳴」の一字が追加されている。文中の事項のうち、【一一〇一】

「対霊小参」は『象器箋』の中に立項されている。

（堀野真澄）

【二〇八】人定

①亥時也。寶誌歌、見前寅旦處。

＊

亥の時（＝午後十時頃）なり。「寶誌歌」は、前の「寅旦」の處に見ゆ。

＊

○人定…見前寅旦處寅旦＝「人定」は「じんてい」とも読む。『景徳伝燈録』巻二九「宝誌和尚十二時頌」に「人定、亥。勇猛精進も懈怠と成る。纎豪も修学の心を起こさざれば、無相光中、常に自在なり。釈迦を超え祖代を越ゆ。心、微塵も有れば、還って窒閡す。廓然として無事にして頓に清閑たり。他家、自ら通人の愛有り（人定、亥。勇猛精進成懈怠。不起纎豪修学心、無相光中常自在。超釈迦越祖代。心有微塵、還窒閡。廓然無事頓清閑。他家自有通人愛）」（T51-450b）とある。「宝誌和尚十二時頌」については、【一九五】「寅旦」③を参照。

②經國大典註解［後集下ノ五十六丈］云、人定罷漏、人定初更三點、禁人行。罷漏五更三點、放人行。

＊

『經國大典註解』［後集下の五十六丈］に云く、「人定罷漏とは、人定は初更（＝午後七時から九時）の三點に人行を禁ず。罷漏は、五更（＝午前三時から五時）の三點に人行を放す」と。

＊

○經國大典註解［後集下ノ五十六丈］云…放人行＝『経国大典註解』後集「兵典 門開閉条」の「人定」に「初更三点禁人行」とあり、「罷漏」に「五更三点放人行」とある（学習院東洋文化研究所刊行本・p.293）。なお、一夜を五更に分けた、その「更（約二時間）」の五分の一が「一点」である。

③『敕修清規』［下二ノ十八丈左］鐘云、人定時一十八下。

＊

『敕修清規』［下二の十八丈左］の「鐘」に云く、「人定の時に一十八下す」と。

＊

○敕修清規［下二ノ十八丈左］鐘云、人定時一十八下＝『勅修百丈清規』巻八「法器章第九」の「鐘」に「聖節の看経・上殿・下殿、三八の念誦・仏誕・成道・涅槃・建散楞厳会・諷経・斎粥の過堂・人定の時に遇いては、各おの一十八下す。官員・住持・尊宿を接送するが如きは、数を以て限らず、庫司、之を主る（遇聖節・看経・上殿・下殿、三八念誦・仏誕・成道・涅槃・建散楞厳会・諷経・斎粥過堂・人定時、各一十八下。如接送官員住持尊宿、不以数限、庫司主之）」（T48-1155b）とある。

④『白氏文集』［二十五ノ十六丈］人定詩云、人定月朧明、香消枕簟清。

＊

『白氏文集』［二十五の十六丈］「人定」の詩に云く、「人定まりて月朧明、香消えて枕簟（＝寝具）清し」と。

＊

○白氏文集［二十五ノ十六丈］人定詩云…香消枕簟清＝平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』（同朋

社刊）の篇目表から、明の馬元調によって刊行された『白氏長慶集』全七十一巻の「巻二十五の十六丈」と思われる。『白氏長慶集』巻二五「律詩」の「人定」に「人定まりて月朧明、香消えて枕簟清し。翠屏（＝翠色の屏風）燭を遮る影、紅袖簾を下す声。坐すること久しくして吟方に罷み、眠り初まりて夢未だ成らず。誰が家か鸚鵡をして、故故語りて相い驚かしむる（人定月朧明、香消枕簟清。翠屏遮燭影、紅袖下簾声。坐久吟方罷、眠初夢未成。誰家教鸚鵡、故故語相驚）」（新釈本⑨ p.549）とある。

（花岡博芳）

【二〇九】～【二一四】

【二一五】贈別夜

①大夜也。見前大夜處。

＊

大夜なり。前の「大夜」の處に見ゆ。

＊

○見前大夜處＝「大夜」については、『象器箋』【二一一】参照。

②大鑑清規［五十七丈］云、今晩大夜、則午後道舊辨事、小師諷經。此名贈別經、以表生死道義也。

＊

『大鑑清規』［五十七丈］に云く、「今晩大夜なるときは、則ち午後に道舊（＝修行を共にした道友）辨事（＝雑務に任ずる僧）、小師（＝弟子の僧）諷經す。此れを『贈別經（＝死者を送る意をもって行う読経）』と名づけ、以て生死の道義を表すなり」と。

＊

○大鑑清規［五十七丈］云…以表生死道義也＝『大鑑清規』とは『大鑑広清規』のことで、清拙正澄が正慶元年（一三三二）に撰した法式の解説書である。聴松院蔵本が尾崎正善氏によって翻刻されている（『鶴見大学佛教文化研究所紀要』第五号・二〇〇〇）。尾崎氏の翻刻によれば、「叢林細事」の「末後事儀」条に「又今晩大夜、則午後道舊辨事小師諷經」とあり、その割注に「此名贈別経、以表生死道義也」と記されている。文中の事項のうち、【二九九】「道旧」・【四六七】「弁事」・【三一一】「小師」・【九九〇】「諷経」・【一一〇二】「贈別経」は、『象器箋』の中に立項されている

（堀野真澄）

【二一六】正日

①正日者、當日也。

＊

正日とは當日なり。

②敕修清規［上一ノ卅二丈］帝師涅槃云、正日鳴鐘集衆。又［上二ノ卅四丈］靈骨入塔云、正日鳴鐘集衆。

＊

『敕修清規』［上一の卅二丈］「帝師涅槃」に云く、「正日には鐘を鳴らし衆を集む」と。又た［上二の卅四丈］「靈骨入塔」に云く、「正日には鐘を鳴らし衆集まる」と。

＊

○敕修清規［上一ノ卅二丈］帝師涅槃云…正日鳴鐘衆集＝『勅修百丈清規』巻二「帝師涅槃」（T48-1117a）と巻三「霊骨入塔」（1129c）にそれぞれ同文が見える。

③禮記禮器［素本二ノ六十二丈］云、質明而始行事。〈止此。〉質明者正日也。

＊

『禮記』の「禮器」［素本二の六十二丈］に云く、「質明にして始めて事を行なう」と。〈此こに止まる。〉質明とは正日なり。

＊

○禮記禮器［素本二ノ六十二丈］云、質明而始行事＝『礼記』「礼器第十」（新釈本㊤・p.377）に同文が見える。

（千坂成也）

【二一七】忌日

①釋氏要覧［下ノ五十六丈］云、二月十五日佛涅槃日、天下僧俗、有營會供養。卽忌日之事也。俗禮君子有終身之孝。忌日之謂也。又謂不樂之日。不飲樂故。或云諱日、或云遠日。〈遠日猶濫曲禮喪事先遠日。〉釋子師亡、可稱歸寂之日。蓋釋氏無忌諱故。

＊

『釋氏要覧』［下の五十六丈］に云く、「二月十五日の佛涅槃日には、天下の僧俗、營會（＝法会を営む）し供養すること有り。即ち忌日の事なり。俗の禮に『君子に終身の孝有り』と。『忌日』の謂なり。又た『不樂の日（＝音楽を催さない日）』と謂う。飲樂せざるが故に。或いは『諱日』と云い、或いは『遠日』と云う。〈『遠日』は猶お『曲禮』の「喪事は遠日を先にす」に濫す（＝起源する）。〉釋子（＝仏弟子）の師亡すれば『歸寂の日』と稱すべし。蓋し釋氏（＝仏弟子）は忌諱むこと無きが故に」と。

＊

○釋氏要覧［下ノ五十六丈］云…蓋釋氏無忌諱故＝『釈氏要覧』巻三（T54-309c）に「二月十五日仏涅槃日、天下僧俗、有営会供養。即忌日之事也。俗礼君子有終身之孝。忌日之謂也。又謂不楽之日。不飲楽故。或云諱日、或云遠日。遠日猶濫曲礼葬事先遠日。釈子師亡、可称帰寂之日。蓋釈氏無忌諱故」とあり、「有終身之孝」が「育終身之孝」、「喪事」が「葬事」となっているほかは同文である。文中、「俗礼君子有終身之孝。忌日之謂也」とあるのは、『礼記』「祭義大二十四」に「君子に終身の喪有りとは、忌日の謂なり（君子有終身之喪。忌日之謂也）」（新釈本㊥ p.701）とあるのを踏まえる。また、「又謂不楽之日」とあるのは、『礼記』「檀弓上第三」に「忌日には楽せず（忌日不楽）」（新釈本㊤ p.83）とあるのを踏まえ、「喪事先遠日」とあるのは、『礼記』「曲礼上第一」に「喪事は遠日を先にし、吉事は近日を先にす（喪事先遠日、吉事先近日）」（新釈本㊤ p.49）とあるのに拠る。

②首楞嚴經［一上ノ十五丈］云、時波斯匿王、爲其父王諱日營齋。長水疏云、先王崩日、忌諱之辰。故云諱日。諱忌也。以忌舉吉事、諱避其名。

＊

『首楞嚴經』［一上の十五丈］に云く、「時に波斯匿王、其の父王の爲に諱日に齋を營む」と。長水（＝長水子璿）の疏に云く、「先王の崩ずる日は、忌諱の辰なり。故に『諱日』と云う。諱は忌なり。吉事に舉ぐることを忌み、其の名を諱避するを以てなり」と。

＊

○首楞嚴經［一上ノ十五丈］云、時波斯匿王…諱避其名＝『首楞厳経』からの引用は、『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞厳経』巻一（T19-106b）に全く同じ文章が見える。荒木見悟『楞厳経』（仏教経典選14《中国撰述経典二》筑摩書房・p.9）参照。「長水疏」は、長水子璿『首楞厳義疏注経』巻一に「先王崩日、忌諱之晨。故云諱日。即自恣後之一日也。諱忌也。以忌挙吉事、諱避其名」（T39-829c）とあり、「忌諱之辰」が「忌諱之晨」となっていることと、「即ち自恣後の一日なり（即自恣後之一日也）」の一文が挿入されているほかは同文である。

（桐山大幹）

【二一八】

【二一九】七七日

①釋氏要覽［下ノ四十一丈］云、人亡毎至七日、必營齋追薦。謂之累七。又云齋七。瑜伽論［一巻一五丈］云、人死中有身〈冥間化起一相、似身傳識。謂之中有〉、若未得生縁、極七日住。〈中陰經云、中有、極壽七日。〉若有生縁即不定、若極七日、必死而復生。如是展轉生死、乃至七七日住。自此已後、決定得生。又此中有、七日死已、或於此類、由餘業可轉、中有種子、便於餘類中有生。今尋經旨、極善悪無中有。即受中有身、即中下品善悪業也。故論云、餘業可轉也。如世七日七日齋福、是中有身、死生之際以善追助、令中有種子、不轉生悪趣。故由是此日之福、不可闕怠也。

＊

『釋氏要覽』［下の四十一丈］に云く、「人亡して七日に至る毎に、必ず齋を營み追薦（＝死者の冥福を祈って供えること）す。之を累七（＝四十九日の間、七日ごとに追善供養を行うこと）と謂う。又た齋七と云う」と。『瑜伽論』［一巻十五丈］に云く、『人死して中有（＝死んだ後、次の生を受けるまでの間）の身〈冥間に一相を化起して、身に似て識を傳う。之を「中有」と謂う〉、若し未だ生縁（＝生まれ変わる縁）を得ざれば七日を極めて住す。〈『中陰經』に云く、「中有は、極壽七日なり」と。〉若し生縁即ち定まらざる有りて、若し七日を極むれば、必ず死して復た生ず。是くの如く展轉（＝次から次に）生死して、乃至七七日住す。此れ自り已後、決定して生を得。又た此の中有、七日に死し已わって、或いは此の類に於いて、餘業、轉ず可きに由りて、中有の種子は、便ち餘類に於いて中有生ず』と。今ま經旨を尋ぬるに、極善悪には中有無し。既に中有の身を受くるは、即ち中下品（＝中品下生。道徳や慈しみを行なった者）の善悪の業なり。故に『論（＝瑜伽師地論）』に云く、『餘業、轉ず可きなり』と。世の七日七日の齋福の如きは、是れ中有の身、死生の際に善を以て追い助けて、中有の種子をして、

悪趣（＝悪業の結果として赴く苦しみの世界）に轉生せざらしむ。故に是れに由りて此の日の福、闕怠す可からざるなり」と。

＊

○釋氏要覽［下ノ四十一丈］云…不可闕怠也＝『釈氏要覧』巻下「雑記」の「類七斎」（T54-305b）に全く同じ文章が見える。『釈氏要覧』に引用される「瑜伽論［一巻一五丈］云…便於餘類中有生」については、『瑜伽師地論』巻一「本地分中意地第二之一」に「又た此の中有は、若し未だ生縁を得ざれば七日を極めて住し、生縁を得ること有れば、即ち決定せず。若し七日を極めて未だ生縁を得ざれば死して復た生じ、七日を極めて住す。是くの如く展転して未だ生縁を得ざれば、乃至七七日住し、此れ自り已後、決して生縁を得。又た此の中有は、七日にして死し已わり、或いは即ち此の類に生ずるも、若し余業、転ず可きに由り、中有の種子、転ずれば、便ち余類の中に生ず（又此中有、若未得生縁極七日住、有得生縁即不決定。若極七日未得生縁死而復生、極七日住。如是展転未得生縁、乃至七七日住、自此已後、決得生縁。又此中有、七日死已、或即於此類生、若由余業可転、中有種子転者、便於余類中生）」（T30-282a~b）とあり、割注の「中陰経云、中有極寿七日」については、『中陰経』巻上「如来五弘誓入中陰教化品第一」に、「中陰の衆生の寿命は七日なり（中陰衆生寿命七日）」（T12-1059b）という文が見える。

②地蔵本願經［上ノ十三丈］云、鬼王無毒、答聖女曰、此是南閻浮提、造悪衆生、新死之者經四十九日後、無人繼嗣爲作功德、救抜苦難。生時又無善因。當據本業所感、地獄自然。

＊

『地蔵本願經』［上の十三丈］に云く、「鬼王無毒、聖女に答えて曰く、『此れは是れ南閻浮提の、造悪（＝悪業を造ること）の衆生、新死の者の、四十九日を經て後、人の繼嗣（＝後継ぎ）の爲に功德を作して、苦難を救抜すること無く、生時に又た善因無ければ、當に本業に據りて感ずる所の地獄なるべし』と」と。

＊

○地蔵本願經［上ノ十三丈］云…當據本業所感地獄自然＝『地蔵菩薩本願経』巻上「忉利天宮神通品第一」（T13-778c）に見える文章であるが、原文で「無毒答曰」「此是閻浮提」「當據本業所感地獄、自然先渡此海」となっている箇所が、『象器箋』では、それぞれ「鬼王無毒、答聖女曰」「此是南閻浮提」「當據本業所感地獄自然」となっている。なお、無著道忠は、「當據本業所感、地獄自然」として「自然」までを一区切りの文章とみなして引用し、「當に本業の所感に據りて、地獄自然なるべし」と訓んでいるが、「自然」は、「當據本業所感地獄」に続く後の文章の最初の部分である。書き下し文では、無著道忠の訓みを改めて解釈を試みた。

③灌頂隨願往生十方淨土經［灌頂經ノ十一ノ四丈］云、普廣菩薩、語四輩言、若人臨終、未終之日、當爲燒香、然燈續明、於塔寺中表刹之上、懸命過幡、轉讀尊經、竟三七日。所以然者、命終之人、在中陰中、身如小兒。罪福未定、應爲修福、願亡者神、使生十方無量刹土。承此功德必得往生。

＊

『灌頂隨願往生十方淨土經』［『灌頂經』の十一の四丈］に云く、「普廣菩薩、四輩（＝出家、在家の仏弟子）に語げて言く、『若し人、終わりに臨み、未だ終わらざるの日、當に爲に香を焼き、燈を然やして明を續ぎ、塔寺の中の表刹（＝塔上の竿）の上に、命過幡（＝人が亡くなった時に追薦のために立てる幡）を懸け、尊經（＝有り難いお経）を轉讀して、三七日（＝二十一日）を竟うべし。然る所以の者は、命終の人、中陰（＝人の死後、次の生を受けるまでの間）の中に在りて、身、小兒の如し。罪福（＝善悪の報いの結果、どこに生まれるか）未だ定まらざれば、應に爲に福を修して、亡者の神、十方無量の刹土に生ぜしめんと願うべし。此の功德を承けて、必ず往生することを得』と」と。

＊

○灌頂隨願往生十方淨土經［灌頂經ノ十一ノ四丈］云…承此功徳必得往生＝『仏説灌頂隨願往生十方淨土経』巻一一（T21-529c）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【一五三五】「香」は、『象器箋』に立項されている。

（堀野真澄）

【二二〇】

【二二一】三年忌

①葉縣省禪師録［古宿廿三ノ廿二丈］先師〈首山念〉三周年忌頌云、師眞似日、三周已畢。遍布乾坤、翹足七日。大展壇風、狐魅屏跡。香茶供養、光漆誰識。

＊

『葉縣省禪師の録』［『古宿』廿三の廿二丈］「先師〈首山念〉三周年忌」の頌に云く、「師、眞に日（＝太陽）の似し、三周已に畢わる。乾坤に遍布し、足を翹ぐる（＝足をつまだてて立つ）こと七日なり。大いに壇風を展ずれば、狐魅（＝魑魅魍魎）は跡を屏ぞく。香茶供養するも、光漆（＝光と漆黒）誰か識らん」と。

＊

○葉縣省禪師の録［古宿廿三ノ廿二丈］先師〈首山念〉三周年忌頌云…光漆誰識＝『古尊宿語録』巻二三「汝州葉県広教省禪師語録」の「先師三周年忌」の条（X68-156c）に見える文章であるが、原文では「遍在」となっている個所が、『象器先』では「遍布」となっている。「翹足七日」は、『禪学』に「釈尊が、過去世において弗沙仏が火定三昧に入っているのを見て、心中に歓喜の念を生じ、合掌して片足をつまだてたまま、七日七夜を過ごした故事」（p.226）とある。この故事は『大智度論』巻四（T25-87c）に見え、『法苑珠林』巻九（T53-349b）や『祖庭事苑』巻六「讃底沙」条（Z113-76c~d）に引用されている。また、『景徳伝燈録』五（禪文化研究所・二〇一三、p.42）参照。

（堀野真澄）

【二二二】遠年忌

①虎關散語［三十二丈］云、四十九日追薦、見于經文。百箇日、一周忌、第三年忌、中華俗禮、見于外典。十三年、三十三年等、始于日本。少納言入道信西者卒。其子中有才人。始修十三年、三十三年追薦。爾來日本有此佛事。

＊

虎關（＝虎関師練・一二七八～一三四六）の『散語』［三十二丈］に云く、「四十九日の追薦は、經文に見ゆ。百箇日、一周忌、第三年忌は、中華の俗禮にして、外典に見えたり。十三年、三十三年等は、日本に始まる。少納言入道信西（＝藤原信西・一一〇六～一一六〇）と云う者卒す。其の子の中に才人有り、始めて十三年、三十三年の追薦を修す。爾れより來た、日本に此の佛事有り」と。

＊

○虎關散語云…爾來日本有此佛事＝典拠未詳。虎関師錬（一二七八～一三四六）の『元亨釈書』三十巻、『済北集』二十巻、『禅儀外文集』一巻には見えない。『十禅支録』二巻、『続十禅支録』一巻、『仏語心論』十八巻、『聚分韻略』五巻などについては未見である。

②夢語集［四十四丈］云、十三年忌、三十三年忌、日本始行之。其十三年忌、見元亨釋書明遍傳。今時更有十七年、二十五年佛事。

＊

『夢語集』［四十四丈］に云く、「十三年忌、三十三年忌は、日本始めて之を行う。其の十三年忌は、『元亨釋書』「明遍傳」に見ゆ。今時は更に十七年、二十五年の佛事有り」と。

＊

○夢語集［四十四丈］云…今時更有十七年、二十五年佛事＝『夢語集』とは、室町時代中期の禅僧、瑞溪周鳳（一三九二～一四七三）の『臥雲夢語集』のこと。「薦亡仏事」条に見える。『象器箋』は「四十四丈」と記すが、禅文化研究所所蔵本（3456・Z4・0018、福嶋文庫・11947）では、五十一丁表から五十二丁裏が、本条に相当する。ここ【二二二】②は、「薦亡仏事」条の文章のうち、「十三年、三十三年等、始於日本也」（51a）、「因按元亨釈書第五釈明遍伝曰…」（51a）、「今時更有十七年、二十五年仏事」（52b）という個所を抜粋し、表現を変えて、本条の要旨について記述したもの。文中、「其十三年忌、見元亨釈書明遍伝」とある部分は、指摘通り、虎関師練『元亨釈書』巻五「慧解二之四」の「高野山明遍」条に見える。詳細については、⑤の語注を参照。

③臥雲日件録［下ノ五十五丈］曰、南禪雲臥菴竺華、爲一色泰雲居士二十五年忌陞座、散説中、論二十五年忌、特設佛事、出於近時。

＊

『臥雲日件録』［下の五十五丈］に曰く、「南禪（＝南禪寺）の雲臥菴竺華（＝竺華梵蕚・生没年不詳）、『一色泰雲（＝一色義貫・一四〇〇～一四四〇）居士二十五年忌の陞座』を爲り、散説の中に、二十五年忌に、特に佛事を設くるは、近時に出づることを論ず」と。

＊

○臥雲日件録［下ノ五十五丈］曰…出於近時＝『臥雲日件録』は瑞溪周鳳の日記で、永禄五年（一五六二）に惟高妙安が抄出した『臥雲日件録抜尤』一巻が現存する。当該個所は『抜尤』に見える。『日件録』第五六冊「寛正五年四月廿八日」条に「南禅の雲臥庵竺華（＝梵蕚）来たりて、因りて来月十五日の一色泰雲居士二十五年忌の陞座を出示す。蓋し一色（＝一色義直）の先考（＝亡父）なり。釣語に曰く、『夏五旬五、五五廿五』云々と。予曰く、『此の句可なり』と。又た散説中に、二十五年忌に、特に仏事を設くるは、近時に出づるの事なることを論ず（南禅雲臥庵竺華来、因出示来月十五日一色泰雲居士二十五年忌陞座。蓋一色先考也。釣語曰、夏五旬五、五五廿五云々。予曰、此句可也。又散説中、論二十五年忌、特設仏事、出於近時之事）」（大日本古記録本・p.152）とある。

④清拙日本録普説［八丈］、有三十三年忌説。可知、此時已有此忌祭。

＊

清拙（＝清拙正澄・一二七四～一三三九）の日本の録の「普説」［八丈］に、三十三年忌の説有り。知る可し、此の時已に此の忌祭有ることを。

＊

○清拙日本録普説［八丈］…此時已有此忌祭＝典拠未詳。「清拙」とは、愚極至慧の法を嗣いだ清拙正澄（一二七四～一三三九）のこと。福州（福建省）漣江の禅僧で、月江正印の俗縁の弟である。来日後は、建長寺や建仁寺、南禅寺などに住した。『清拙和尚語録』二巻、『大鑑清規』一巻、『禅居集』一巻、『雑著』一巻がある。『禅居集』は、『五山文学全集』第一巻（帝国教育会出版部）に収録されてい

る。また、『清拙和尚語録』については、国立国会図書館デジタル化資料で公開されており、『大鑑清規』については、聴松院蔵本が尾崎正善氏によって翻刻されているが（『鶴見大学佛教文化研究所紀要』第五号・二〇〇〇）、管見の限り、いずれにも「三十三年忌」に関する説は見当たらない。

⑤

忠曰、七七薦亡、経有明文。如前引證。一百日、一周忌、三年忌、儒家亦祭焉。所謂卒哭、小祥、大祥也。十三年忌、起於日本。元亨釋書明遍傳云、國俗薦十三年者、迎先支而寓追慕。余謂、二十五年、亦本支再廻故薦之。如七年、十七年、二十三年、二十七年、三十三年、則蓋取乎三七之數矣。古云、三者數之小終〈章懐太子〉、七者天之紀數〈空同子〉。佛教説七佛三遶有所表〈事苑［八ノ二丈］〉。禮云、祭不欲數、數則煩。祭不欲疏、疏則怠〈祭義〉。故先亡當三七年者、特祭而薦之。有慧空法師云、昔在尊氏薨、二十一年而追薦之。大猷相公薨、二十一年、攀尊氏之例追薦焉。蓋二十一者、三累七數也。如日本神社、有二十一年而新造其祠。伊勢、春日、談岑等是也。亦據斯義。又薦五十年、一百年等、取其滿數而已〈梨窓隨筆〉。

＊

忠曰く、「七七（＝四十九日）の薦亡は、経に明文有り。前に引證するが如し。一百日、一周忌、三年忌は、儒家も亦た祭る。所謂る卒哭、小祥、大祥なり。十三年忌は、日本に起こる。『元亨釋書』「明遍の傳」に云く、『國俗（＝日本の習俗）、十三年を薦する（＝追薦する）者は、先支を迎えて追慕に寓す（＝〔亡くなった年の干支が一巡し〕先支を迎えて追慕に寓つける）』と。余、謂えらく、二十五年も、亦た本支再び廻るが故に之を薦するなり。七年、十七年、二十三年、二十七年、三十三年の如きは、則ち蓋し三・七の數に取るなり。古えに云く、『三は數の小終なり』〈章懐太子〉、『七は天の紀數なり』〈空同子〉と。佛教は七佛・三遶を説きて表す所有り〈事苑［八ノ二丈］〉。『禮』に云く、『祭は數しばせんことを欲せず、數しばすれば則ち煩わし。祭は疏うとしからんことを欲せず、疏うとしければ則ち怠る』〈祭義〉と。故に先亡（＝先の物故者）の三・七の年に當たる者、特に祭りて之を薦す。慧空法師有りて云く、『昔在、尊氏（＝足利尊氏・一三〇五～一三五八）薨じて、二十一年にして之を追薦す。大猷相公（＝徳川家光・一六〇四～一六五一）薨ずるに、二十一年にして、尊氏の例を攀きて追薦す。蓋し二十一は、七數を三累するなり。日本の神社の如きは、二十一年にして其の祠を新造すること有り。伊勢（＝伊勢神宮）、春日（＝春日大社）、談の岑（＝多武峰談山神社）等、是れなり。亦た斯の義に據る。又た五十年、一百年等を薦するは、其の滿數を取るのみ』と〈『梨窓隨筆』〉」と。

＊

○元亨釋書明遍傳云…迎先支而寓追慕＝虎関師錬『元亨釈書』巻五「慧解二之四」の「高野山明遍」条に、「蓋し国俗、亡者の十三廻の歳に逢いて追薦を営むは、十二支終わりて始めて先支を迎え、而して追慕に寓すればなり（蓋国俗逢亡者十三廻之歳営追薦者、十二支終而始迎先支、而寓追慕也）」とある。『元亨釈書』は、慶長刊本が、駒澤大学禅籍善本図録、及び国立国会図書館デジタル化資料で公開されている。

○三者數之小終〈章懐太子〉＝「章懐太子」とは、高宗と則天武后の第二子である李賢（六五四～六八四）のこと。『後漢書』の注釈者として知られる。『後漢書』巻七四上「袁紹劉表列伝第六十四」の李賢注に「三者、数之小終、言深也」（中華書局校点本・p.2388）とある。

○七者天之紀數〈空同子〉＝「空同子」とは、明代の文人李夢陽（一四七二～一五二九）のこと。『空同集』巻六五「化理下篇」に「斗（＝北斗）は七なり。故に天の数なれば、多く七に準ず。二十八宿は皆な七なり。『左氏』「天は七を以て紀す（＝天〔体運動〕は七の数で整理されている）」（「昭公十年春」全釈本㊦ p.170）是れなり。…［中略］…僧家は其の意義を窃む。是の故に亡人を数うるに七を用う（斗

七。故天之数、多準七。二十八宿皆七也。左氏天以七紀是也。…［中略］… 僧家窃其意義。是故数亡人用七）」（四庫全書本）とある。

○佛教説七佛三遶有所表〈事苑［八ノ二丈］〉＝『祖庭事苑』巻八「七仏」条に、圭峰宗密『裴休拾遺問』からの引用として「若し真諦に拠らば、本より名数を絶す。一すら猶お存せず、何ぞ六七と言わんや。今ま俗諦に約せば、其の表す所有り。国に七廟を立て、七月にして葬り、喪は七代に服し、福は七七に資し〈道・釈皆な同じ〉、経に説く七仏、持念の遍数、壇場の物色、作法の方便、三遶、請僧の限の如き、皆な七に止まる。過ぐれば則ち二七、三七、乃至、七七にして、六に止まらず、八九に至らず。世に順ずれば信を生ず。何ぞ疑う所あらん（若拠真諦、本絶名数。一猶不存、何言六七。今約俗諦、有其所表。如国立七廟、七月而葬、喪服七代、福資七七〈道釈皆同〉、経説七仏、持念遍数、壇場物色、作法方便、三遶、請僧之限、皆止於七。過則二七、三七、乃至七七、不止於六、不至八九。順世生信。何所疑焉）」（寛永刊本・2b、X64-425c）とある。ただし、『裴休拾遺問』には「三遶」の語は見られず、「作法方便、礼仏遶仏、請僧之限」となっており、無著道忠は、『祖庭事苑』の誤りをそのまま踏襲したことになる。『祖庭事苑』の寛永刊本は、国立国会図書館デジタル化資料で公開されている。『裴休拾遺問』の原文については、石井修道「真福寺文庫所蔵の『裴休拾遺問』の翻刻」（『花園大学禅学研究』第六〇号・一九八一）参照。

○禮云…疏則怠〈祭義〉＝『礼記』「祭義第二十四」に「祭は数しばするを欲せず、数しばすれば則ち煩わし、煩わしければ則ち敬せず。祭は疏にするを欲せず、疏にすれば則ち怠る、怠れば則ち忘る（祭不欲数、数則煩、煩則不敬。祭不欲疏、疏則怠、怠則忘）」（新釈本㊥p.700）とある。

○有慧空法師云…取其滿數而已〈梨窓随筆〉＝天台僧恵空（一六四四～一七二一）の『梨窓随筆』二十五丁に「廿一年忌ハ、昔尊氏将軍等ヲ弔シニ例シテ、大猷殿尊儀ヲモ、今歳寛文辛亥ノ年、日光山ニ於テ御法事ニアエリ。今按ニ廿一年ハ第三ノ七年ニ当ガ故ナラン。或人云、『本朝ノ神祇、廿一年ニテフルキヲアラタムルコトアリ。例セバ、天照大神宮、春日大神宮、談峯等ミナ廿一年ニテヲタテカエタマウ』ト。神道ノ説ニ廿一年ヲモチウルコトハ、廿一年ヲヒトムカシトス。ソノ理ハ、『昔』ノ字を『廿一日』トカクニヨルトイエリ（＝『昔』の字を分解すると『廿』と『一』と『日』になる）。タシカナルコトヲシラズ。サテソノチ五十年ヅツニテ営会アルハ、年ヒサシクナレバ、只満数ヲ取ナルベシ」とある。新潟大学の古文書・古典籍コレクションデータベースで、寛文十二年（一六七二）刊本が公開されており、閲覧が可能である。

⑥

近大徳大心和尚、著修祭説云、明遍傳修十三年忌之外、東鑑有修二位禪尼如實十三年忌。又世傳、建久〈後鳥羽帝年號。〉壬子、鎌倉頼朝、爲父義朝、建勝長壽院于本府、薦其三十三年忌。又寛元〈後嵯峨帝〉丙午、宋蘭溪隆禪師來朝、明年修千光禪師三十三年忌於筑前州聖福寺〈語録無語。〉。如二十五年忌、應永〈後小松帝〉巳後禪祖諸録間見。五十年忌、起乎應仁〈後土御門〉以後、一百年忌、創乎建武〈後醍醐帝〉之時。其後有十七年、二十一年、二十三年、二十七年之忌。又天長〈淳和〉丁未、弘法大師、應詔就乙訓寺、修推古帝二百年忌〈大師遊方記〉。又延德〈後土御門〉辛亥三月、阿波州主、細川源久之、請建仁天隱澤公於本州補陀禪寺、陞座薦其七世祖、永泰院源頼之一百年忌。澤公普説畧云、茲承、文安〈後花園帝〉丁卯閏二月、細川某、當先祖光勝院源頼春〈頼之之父。〉一百年忌、請相國寺竺雲連禪師、就某寺佛事。是在家一百年忌之權輿也。其後、長禄丁丑、將軍尊氏公一百年忌、文正〈後土御門〉丙戌、將軍義詮公一百年忌、皆開法筵於洛北等持院。蓋取法於光勝者也。夫百年齋会、未見經典。蓋十十滿數、又分作三、預營爲三十三年、復分其半、爲十七年。不待十三年者、分半爲七年〈止此。〉今按、普説配數、一時附會。或剰一、或欠一。不足據矣。

＊

近ごろ大徳の大心和尚（＝大心義統・一六五七～一七三〇）、「修祭説」を著して云く、「『明遍傳』に十三年忌を修するの外、『東鑑（＝吾妻鏡）』に二位の禪尼如實（＝北条政子・一一五七～一二二五）の十三年忌を修すること有り。又た世に傳う、建久〈後鳥羽帝の年號なり。〉壬

子（三年・一一九二）、鎌倉の頼朝（＝源頼朝・一一四七～一一九九）、父義朝（＝源義朝・一一二三～一一六〇）の爲に、勝長壽院を本府（＝鎌倉）に建て、其の三十三年忌を薦す。又た寛元〈後嵯峨帝〉丙午（四年・一二四六）、宋の蘭溪の隆禪師（蘭溪道隆・一二一三～一二七八）來朝し、明年、千光禪師（＝明菴栄西・一一四一～一二一五）の三十三年忌を筑前州（＝福岡県）の聖福寺に修す〈『語録』に語無し。〉。二十五年忌の如きは、應永〈後小松帝〉巳後（＝一三九四年以後）の禪祖の諸録に間見ゆ。五十年忌は、應仁〈後土御門〉以後（＝一四六七年以後）に起こり、一百年忌は、建武〈後醍醐帝〉（＝一三三四～一三三六年）の時に創まる。其の後に十七年、二十一年、二十三年、二十七年の忌有り。又た天長〈淳和〉丁未（四年・八二七）、弘法大師（＝空海・七七四～八三五）、詔に應じて乙訓寺に就きて、推古帝（＝推古天皇・五五四～六二八）の二百年忌を修す〈『大師遊方記』〉。又た延德〈後土御門〉辛亥（三年・一四九一）三月、阿波州（＝徳島県）主、細川源の久之（＝細川久之・生没年不詳）、建仁（＝建仁寺）の天隱の澤公（＝天隱龍澤・一四二二～一五〇〇）を本州（＝阿波州）の補陀禪寺に請じ、陞座して其の七世の祖、永泰院源の頼之（＝細川頼之・一三二九～一三九二）の一百年忌を薦せしむ。澤公の「普説」の畧に云く、『茲に承わる、「文安〈後花園帝〉丁卯（四年・一四四七）閏二月、細川某、先祖光勝院源の頼春〈頼之の父なり。〉（＝細川頼春・一三〇四？～一三五二）一百年忌に當たりて、相國寺の竺雲連禪師（＝竺雲等連・一三八三～一四七一）を請じ、某寺に就きて佛事す」と。是れ在家の一百年忌の權輿（＝始まり）なり。其の後、長禄丁丑（元年・一四五七）、將軍尊氏公の一百年忌、文正〈後土御門〉丙戌（元年・一四六六）、將軍義詮（＝足利義詮・一三三〇～一三六七）公の一百年忌、皆な法筵を洛北の等持院に開く。蓋し法を光勝（＝細川頼春）に取る者なり。夫れ百年の齋会、未だ經典に見われず。蓋し十十の滿數、又た分けて三と作し、預め營みて三十三年と爲し、復た其の半に分けて、十七年と爲す。十三年を待たざる者は、半に分けて七年と爲す』〈此こに止まる。〉と。今ま按ずるに、「普説」の配數は、一時の附會（＝こじつけ）なり。或いは一を剰らせ、或いは一を欠く。據るに足らざるなり」と。

＊

○近大德大心和尚、著修祭説云…不足據矣＝典拠未詳。『大德寺禅語録集成』第七巻（法蔵館・一九八九）に収録された『大心義統語録』『黒業油薪』には見当たらない。

○東鑑有修二位禪尼如實十三年忌＝『吾妻鏡』巻三一「嘉禎三年（一二三七）六月十一日」条に「二位家追善の奉為、大慈寺に於いて一切経を供養す。導師は助僧正厳海、題名僧六十口。舞楽有り。施主は左京権大夫なり。将軍家、御聴聞の為に御出づ云々（奉為二位家追善、於大慈寺供養一切経。導師助僧正厳海、題名僧六十口。有舞楽。施主左京権大夫也。将軍家、為御聴聞御出云々）」（国史大系本・p.111）とある。

○又寛元〈後嵯峨帝〉丙午…於筑前州聖福寺〈語録無語。〉＝典拠未詳。割注に「『語録』に語無し」とある通り、蘭溪道隆『大覚禅師語録』『大覚拾遺録』に、このことに関する記述は見当たらない。なお、両書は、『大日本仏教全書』に収録されている。『大覚禅師語録』については、文政刊本が、国立国会図書館デジタル化資料で公開されている。

○又天長〈淳和〉丁未…修推古帝二百年忌〈大師遊方記〉＝智燈『大師遊方記』のことであろうが、未見。

○澤公普説畧云…分半爲七年＝「澤公」とは、建仁寺や南禅寺に住持した天隱龍沢（一四二三～一五〇〇）のこと。『天隱録』全三巻がある（花園大学図書館所蔵・Z1-405-3、今津文庫 45988 号）。巻下「永泰院殿桂岩大禅門一百年忌陞座法語」の「散説」に、「茲に承わる、『文安丁卯閏二月、光勝院殿の一百年忌の辰を迎え、大斎会を設くるに、雲居竺雲和尚、陞座説法す』と。是れ俗家の百年忌の權輿なるか。其の後十一年、長禄丁丑は、乃ち等持院殿尊氏の百年なり。又た十年、文正丙戌は、乃ち宝篋院瑞山（＝足利義詮）の百年なり。皆な洛北の等持（＝等持院）に就きて法筵を開くは、光勝院を濫觴（＝起源）とするなり。…［中略］… 夫れ百年の忌斎は、未だ経典を検せざるなり。仏氏の談ずる所は、累七（＝四十九日）の斎のみ。…［中略］… 百年は十十の滿数なり。人、生まれて露のごとく電

のごとく、百年を寿つ者（＝百年の寿命を保つ者）之無ければ、百年を分かちて三分と作し、預め忌斎を営む、之を三十三年と謂うなり。三十三回を待たざれば、又た其の半に分かつ、之を十七年と謂うなり。十三年を待たざれば、又た其の半に分かつ、之を七年と謂うなり（茲承、文安丁卯閏二月、迎光勝院殿一百年忌辰、設大斎会、雲居竺雲和尚、陞座説法。是俗家百年忌之権輿乎。其後十一年、長禄丁丑、乃等持院殿尊氏百年也。又十年、文正丙戌、乃宝篋院瑞山百年也。皆就洛北等持開法筵者、濫觴於光勝院也。…［中略］… 夫百年忌斎、未検経典也。仏氏所談者、累七斎而已。…［中略］… 百年者十十満数也。人生露電、寿百年者無之、分百年作三分、預営忌斎、謂之三十三年也。不待三十三回者、又分其半、謂之十七年也。不待十三年者、又分其半、謂之七年也）」とある。

⑦ 忠曰、世有公事大成經。余聞、是僞造非聖德及河勝作。其中有年忌説、或援之、爲實出于聖德。後生、請莫信焉。

＊

忠曰く、「世に『公事大成經（＝先代旧事本紀大成経）』有り。余聞く、是れ僞造にして聖德（＝聖德太子・五七四～六二二）及び河勝（＝秦河勝・生没年不詳）の作に非ず。其の中に年忌の説有り、或いは之を援き、實に聖德に出づと爲す。後生（＝後進の人）、請うらくは信ずること莫かれ」と。

＊

○世有公事大成經…其中有年忌説＝「公事大成経」の「公」字は、同じ「く」という読みを持つことから「旧」の字を誤ったのであろう。聖德太子撰と伝えられる『先代旧事本紀大成経』は、『先代旧事本紀』をもとに江戸時代に作られた偽書とされ、幕府から発禁処分を受けた。神道を中心としつつ、儒・仏・道の三教を調和させた内容となっており、全巻が『続神道大系』論説篇に収録されている。『大成経』巻六〇「礼綱本紀下巻下」に「弔奠の儀。第七日、第二七、乃至第七七、第百箇日、第三年、第七年、第十三年、第十七年、第三十三年は、天子従り庶人迄一に同じくして、差う所無し。第四十年、第五十年、第六十年は、天子従り諸士迄、一に同じきも子亡くなれば、則ち孫代わる。第七十年、第八十年、第九十年は、天子従り九卿迄一に同じくして、子・孫・曾孫に及ぶ。第一百年、第百十年、第百二十年は、天子従り三公迄一に同じくして、子の曾孫に及ぶ。第百三十年、第百四十年、第百五十年は、天子従り諸王迄、第百六十年従り已下は、唯だ天子のみ之を修す（弔奠之儀。第七日、第二七、乃至第七七、第百箇日、第三年、第七年、第十三年、第十七年、第三十三年、従天子迄庶人一同、而無所差矣。第四十年、第五十年、第六十年、従天子迄諸士、一同而子亡、則孫代。第七十年、第八十年、第九十年、従天子迄九卿一同、而及子孫曾孫。第一百年、第百十年、第百二十年、従天子迄三公一同、而及子之曾孫。第百三十年、第百四十年、第百五十年、従天子迄諸王、従第百六十年已下、唯天子修之）」（続神道大系本④ p.80）とある。

（本多道隆）

※平成二十五年十二月の時点で【一七四】【一八一】【一九九】【二〇二】【二〇九】～【二一四】【二一八】【二二〇】が未収。

【二二三】拈華釋迦

①聯燈會要［一ノ十二丈。廣灯二ノ一丈迦葉章、作持華故不引］釋迦牟尼佛章云、世尊在靈山會上、拈華示衆、衆皆默然。唯迦葉破顔微笑。世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門、不立文字、教外別傳。付囑摩訶迦葉。

＊

『聯燈會要』［一の十二丈。『廣灯』二の一丈「迦葉」章は、「持華」に作るが故に引かず。］「釋迦牟尼佛」の章に云く、「世尊、靈山會上に在りて、華を拈じて衆に示すも、衆皆な默然たり。唯だ迦葉（＝摩訶迦葉）のみ破顔微笑す。世尊云く、『吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門

の、不立文字、教外別傳なる有り。摩訶迦葉に付囑す』と」と。

＊

○聯燈會要…釋迦牟尼佛章云…付囑摩訶迦葉＝『聯燈会要』巻一「釈迦牟尼仏」条（X79-14a）に全く同文が見える。なお、無著禅師が自ら指摘している通り、『天聖広燈録』巻二「第一祖摩訶迦葉尊者」条は、同じ摩訶迦葉への付嘱の個所が、「如来在霊山説法、諸天献華。世尊持華示衆、迦葉微笑。世尊告衆曰、吾有正法眼蔵、涅槃妙心。付嘱摩訶迦葉」（X78-428c）となっており、「拈華」ではなく「持華」となっている。『聯燈会要』は淳熙十六（一一八九）年序刊、『天聖広燈録』は景祐三（一〇三六）年の序刊（X78-426a）であり、本来ならば先行する『天聖広燈録』から引用すべきであろうが、『天聖広燈録』は「持華」となっているため、あえて『聯燈会要』から引用した、との意である。なお、ほぼ同様の文章が『無門関』第六則「世尊拈花」（T48-293c、岩波文庫本・p.43、筑摩『禅の語録』本・p.37）に見えている。

②宗門雑録云、王荊公問佛慧泉禪師云、禪家所謂世尊拈花、出在何典。泉云、藏經亦不載。公曰、余頃在翰苑、偶見大梵天王問佛決疑經三卷。因閲之、經文所載甚詳。梵王至靈山、以金色波羅花、獻佛。舍身爲床座、請佛爲衆生説法。世尊登座、拈花示衆。人天百萬、悉皆罔措。獨有金色頭陀、破顔微笑。世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相。分付摩訶大迦葉。此經多談帝王事佛請問。所以秘藏、世無聞者。

＊

『宗門雑録』に云く、「王荊公（＝王安石）、佛慧の泉禪師に問いて云く、『禪家（＝禅宗）に所謂る世尊拈花は、出でて何れの典にか在る』と。泉云く、『藏經（＝大蔵経）も亦た載せず』と。公曰く、『余（＝私）頃に翰苑（＝官名。翰林院）に在りて、偶たま『大梵天王問佛決疑經』三卷を見る。因みに之を閲するに、經文に載する所、甚だ詳らかなり。『梵王、靈山に至りて、金色の波羅花（＝睡蓮）を以て、佛に獻ず。身を舍てて床座（＝座席）と爲し、佛を請じて衆生の爲に説法せしむ。世尊、座に登り、花を拈じて衆に示す。人天（＝人間界と天上界の略）百萬、悉く皆な措くこと罔し。獨り金色の頭陀のみ有りて、破顔微笑す。世尊云く、「吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相の無相なる有り。摩訶大迦葉に分付す』と。此の經、多く帝王の、佛に事えて請問することを談ず。所以に秘藏して、世に聞く者の無し』」と。

＊

○『宗門雑録』云…世無聞者＝『人天眼目』巻五「宗門雑録」冒頭の「拈花」条（T48-325b）からの引用であり、全く同文である。文中の「王荊公」は、王安石（一〇二一～一〇八六）のこと。字は介甫、撫州臨川（現在の江西省撫州市）の人。文人としても著名だが、北宋神宗の時に、新法党の領袖として政治改革を断行した政治家として知られる。『宋史』巻三二七（中華書局本・p.10541）などに立伝されている。また『宋人伝記資料索引』第一冊（p.277）参照。「仏慧泉禪師」は、宋代雲門宗の禅僧、蔣山法泉（生没年不詳）のこと。雲居曉舜に参じて法を嗣ぎ、大明寺に住す。のち千頃・靈巖・南明・蔣山の諸刹に住した。その伝は、『続伝燈録』巻一一（T51-529c）、『聯燈会要』巻二八（X79-250c）、『五燈会元』巻一六（X80-332b）などに見える。『大梵天王問仏決疑経』について、『宗門雑録』は「三巻」とするが、『大日本続蔵経』に収載された同経は、一巻本と二巻本とである。いずれも訳者・訳時の記載がなく、また歴代の経録にも全くその経名が載せられておらず、内容からみて中国後代の偽作であろうとされている（cf.『禅学大辞典』p.817）。引用された当該箇所は、一巻本では「拈華品第二」（X1-441c～442a）、二巻本では巻上「初会法付嘱品第一」（X1-418b-c）からの抜粋である。

③山菴雑録［下巻五十四丈］云、明善韓先生、書陸放翁普燈録敍草後云、放翁先生手書普燈録敍草本、報恩淨上人之所藏也。余故有先生遺文二帙。其間誤處、皆手自塗乙。傳燈言、世尊擧華、迦葉一笑。今講者以爲、經無此事。詆其妄傳。或曰、金陵王丞相、於秘省得梵王決疑經閲之、有此語。有所避諱、故經不入藏。今先生以爲、書之木葉旁行之間。不知、即丞相之所見以否。其言如此。必有所考矣。併書其後云。夫二先生、學廣理明。其言豈妄。近翰林宋公、爲余敍應酬録、亦曰、予觀大梵天王問佛決疑經、所載拈花云云。

宋公既親觀之、則此經世必有之。而或者詆以爲妄。前云、有所避諱、故不入藏。斯言盡矣。

＊

『山菴雜録』［下巻五十四丈］に云く、「明善韓先生、陸放翁が『普燈録（＝嘉泰普燈録）』の敍（＝序文）の草（＝草稿）の後に書して云く、『放翁先生手書の「普燈録の敍」の草本は、報恩の淨上人の藏する所なり。余（＝韓明善）故と先生の遺文二帙有り。其の間の誤處、皆な手ずから自ら塗乙す。『傳燈』に言う、「世尊、華を擧すれば、迦葉一笑す」と。今講ずる者、以爲く、「經に此の事無し」と。其れ妄傳なりと詆る。或るひと曰く、「金陵（＝現在の中国・南京市）の王丞相（＝王安石）、秘省（＝官省の名。図籍を掌る）に於いて『梵王決疑經』を得て之を閲するに、此の語有り。避諱（＝忌み避ける）する所有るが故に、經藏に入らず」と。今、先生（＝陸游）以爲く、「之を木葉旁行（＝貝葉に書かれた経文）の間に書す」と。知らず、即ち丞相の所見ならんや。其の言、此くの如し。必ず考うる所有らん。併せて其の後に書すと云う』と。夫の二先生（陸游と王安石）、學廣く理明らかなり。其の言、豈に妄ならんや。近ごろ翰林（＝官名。翰林院）の宋公、余が爲に『應酬録（＝恕中無慍禪師語録）』に敍して（＝序文を付ける）、亦た曰く、『予（＝私）、『大梵天王問佛決疑經』を觀るに、載する所の「拈花」云云』と。宋公、既に親しく之を觀るときは、則ち此の經、世に必ず之れ有り。而るに或る者、詆りて以て妄と爲す。前に云く、『避諱する所有るが故に、藏に入らず』と。斯の言盡くせり」と。

＊

○『山菴雜録』［下巻五十四丈］云…斯言盡矣＝怒中無慍（一三〇九～八六）の著である『山菴雜録』巻二（X87-133b）に、一字違いだけの同文が見える。「明善韓先生」は、韓性（一二六六～一三四一）、字は明善。紹興会稽（現在の浙江省紹興市）の人。元代の儒者で、経籍に通じ、性理学に精しく、家居講学した。『元史』巻一九〇（中華書局本・p.4342）に立伝される。また『元人伝記資料索引』第四冊（p.2037）参照。「陸放翁」は＝陸游（一一二五～一二〇九）、字は務觀。越州山陰（現在の浙江省紹興市）の人。南宋時代の著名な詩人であり、金に対する主戦派の政治家としても知られる。『宋史』巻三九五（中華書局本・p.12057）に立伝される。また『宋人伝記資料索引』第三冊（p.2653）参照。陸游の「普燈録叙（序）」は、彼の『渭南文集』五十巻の巻一五（四部叢刊本・7a~8a）に収載されているものが完成稿であるが、『続藏』本の『嘉泰普燈録』の巻末に付録されている同序（X87-488b）とは字句に大きな相違がある。恐らくここに言う「放翁先生手書普燈録敍草本」が『嘉泰普燈録』付録の序文であろう。韓明善の文章の引用は、「放翁先生手書普燈録敍草本」から「併書其後云」までの一三〇字である。引用文中の「皆手自塗乙」の「乙」の字が、『山菴雜録』では「了」となっている。「塗乙」は「文字を刪改することで、『塗』は塗りつぶす、『乙』はチェックを入れるの意（刪改文字。抹去称塗、勾添称乙）」（『漢語』第二冊・p.1176）。字形の類似による訛字であろう。また、「伝燈言、世尊挙華、迦葉一笑」とあるが、『景徳伝燈録』には、この様な記載は無い。「木葉旁行」は「木の葉に書かれた横書きの文字」の意で、貝葉に書かれた梵語の経典を意味するものであろう。成句としては辞書類に見えず、使用例も陸游の『渭南文集』に、ここを含め三個所（巻一五、一八、四〇）見えるだけである。「不知即丞相之所見以否」の部分、末尾の「以否」は「以不」と同じく二字で文末の疑問詞（『漢語』第一冊・p.1087、『中国語』p.3689）。「宋公」は、次の④に出る宋濂（一三一〇～一三八一）のこと。【二】五山②の注、参照。宋濂が序文を書いた『応酬録』は、『山菴雜録』と同じく怒中無慍の著述であろうが、現存しない。「近翰林宋公、為余敍応酬録、亦曰、予観大梵天王問仏決疑経、所載拈花云云」の部分、『応酬録』は恕中の『恕中無慍禅師語録』六巻（X71所収）を指す。同語録巻頭所掲の洪武七（一三七四）年、宋濂撰「瑞巖恕中和尚語録序」の冒頭部分に『大梵天王問仏決疑経』への言及がある。詳しくは次の④を参照。

④宋文憲公護法録［七ノ一丈］瑞巖和尚語録序云、予觀大梵天王問佛決疑經所載、梵王以金色波羅夷花、獻佛、請爲説法。佛拈花示衆。人天百萬、悉皆罔措。獨金色頭陀、破顔微笑。佛云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相。分付摩訶迦葉。嗚呼、此非禪波羅蜜之初乎。

＊

宋文憲公の『護法録』［七の一丈］「瑞巖和尚の語録の序」に云く、「予（＝私）、『大梵天王問佛決疑經』に載する所を觀るに、梵王、金色の波羅夷花を以て、佛に獻じ、請じて爲に説法せしむ。佛、花を拈じて衆に示す。人天百萬、悉く皆な措くこと罔し。獨り金色の頭陀のみ、破顔微笑す。佛の云く、『吾に正法眼藏、涅槃妙心の、實相無相有り。摩訶迦葉に分付す』と。嗚呼、此れ禪波羅蜜（＝禪定波羅蜜）の初めに非ずや」と。

＊

○宋文憲公護法録［七ノ一丈］瑞巖和尚語録序云…此非禪波羅蜜之初乎＝『護法録』巻七「瑞巖和尚語録序」（J21-663b）に全く同文が見える。この序文は、③の注で言及した『恕中無慍禪師語録』冒頭付録の「瑞巖恕中和尚語録序」と同一であるが、『護法録』には撰年が記載されていない。

（丸毛俊宏）

【二二四】寶冠釋迦

①忠聞佛匠説、十六羅漢中尊、必用寶冠釋迦。寶冠有五佛像。中央大日、左邊阿閦寶掌、右邊彌陀釋迦。

＊

忠、佛匠の説を聞く、「十六羅漢の中尊には、必ず寶冠の釋迦を用う。寶冠に五佛の像有り。中央は大日（＝大日如来）、左邊は阿閦（＝阿閦如来）と寶掌（＝宝掌菩薩）、右邊は彌陀（＝阿弥陀如来）と釋迦なり」と。

②東福寺山門閣上中、安寶冠釋迦像。東福古刹、書畫像器夥矣。先年發開秘藏、縱四來觀瞻者、凡兩回忠毎回往而徧覽。如諸堂像設、皆貼紙片題其像名。到山門閣上中尊題云、寶冠釋迦如來。

＊

東福寺の山門閣上の中に、寶冠釋迦の像を安く。東福は古刹にて、書畫像器夥し。先年、秘藏を發開（＝公開）し、四來（＝四方から集まってくる人）の觀瞻（＝観覧）を縱にする者、凡そ兩回（＝二回）。忠、毎回往きて徧覽す。諸堂の像設の如きは、皆な紙片を貼りて、其の像の名を題す。山門閣上の中尊に到りては、題して云く、「寶冠釋迦如來」と。

③華嚴合論［十ノ十一文］云、略説大相、有九十七種大人之相。隨好無盡、頂著華冠、項著瓔珞、手著環釧。非同三乘厭俗出家。

＊

『華嚴合論』［十の十一文］に云く、「略説すれば、大相には九十七種の大人の相有り。隨好（＝仏の微細ですぐれた形相）は無盡（＝無尽）にして、頂に華の冠を著け、項に瓔珞を著け、手に環釧を著く。三乘の俗を厭って出家するに同じきに非ず」と。

＊

○『華嚴合論』［十ノ十一文］云…俗出家＝李通玄撰『新華厳経論』巻九（T36-780a）及び、それを修訂した『大方広仏新華厳経合論』巻一〇（X4-76b）・『大方広仏華厳経合論簡要』巻三（X4-858b）に全く同じ文章が見える。

（東海宏徳）

【二二五】誕生佛

①［敕修鈔二ノ二十丈］像長可四寸、右手指天。

＊

『敕修鈔』二の二十丈」像の長さ四寸可り、右手は天を指す。

＊

○「敕修鈔二ノ二十丈」像長可四寸、右手指天＝『勅修百丈清規抄』巻二「仏降誕」条の「中置仏降生象」の注記に、「四寸ノ像トアルゾ。九竜吐レ水、沐浴シタ事ヲカタトルソ。摩耶夫人ノ脇カラ出テヽ、目ヨ顧四方ヲ、周行七歩シテ、右手指レ天ヲ、左手指レ地ヲ、『天上天下、唯我独尊』ト高声ニ獅子吼ヲナスト、云ゝ。ソノ後ハ常ノ児ノ如ク啼也。三歳ヨリ、チットツヽ、常人カハリタソ」（二〇丁裏）とある。

＊

②澄彧前聞記〈記無極玄禪師事迹〉云、天龍始鑄佛降誕像。其指天手、莫識左右。遣使問師〈無極〉師曰、擧右手耳。但去藏殿探取。合在某字函、某經第幾葉。檢之無差。　彧云、方廣大莊嚴經降生品、及普曜經並不言左右。唯言字函過現因果經云、太子生時、墮蓮華上。無扶侍者、自行七歩。擧其右手、而師子吼云、我於一切天人之中、最尊最勝。宜字函佛本行集經樹下誕生品、及彩字函釋迦譜同之。不知當初所指何函。

＊

澄彧の『前聞記』〈無極の禪師の事迹を記す〉に云く、「天龍始めて佛降誕の像を鋳る。其の天を指す手、左右を識ること莫し。使いを遣わして師に問わしむ。師〈無極〉曰く、「右手を擧ぐるのみ。但だ藏殿に去りて探取せよ。合に某字の函、某経の第幾葉に在るべし」と。之を檢するに差うこと無し」と。　彧云く、「『方廣大莊嚴經』の「降生品」、及び『普曜經』に並びに左右を言わず。唯だ言の字の函の『過現因果經』にのみ云く、「太子生れし時、蓮華の上に墮す。扶侍の者の無きに、自ら行くこと七歩。其の右手を擧げて、師子吼して云く、「我一切の天人の中に於いて、最尊最勝なり」と」と。宜の字の函の『佛本行集經』「樹下誕生品」、及び彩の字の函の『釋迦譜』も之に同じ。當初に指す所何の函かを知らず」と。

＊

○澄彧前聞記〈記無極玄禪師事迹〉云…檢之無差＝『常光国師語録』巻下「前聞記」（T81-44a）に同文が見える。

○彧云、方廣大莊嚴經降生品…不知當初所指何函＝同じく『常光国師語録』巻下「前聞記」（T81-44a）からの引用であるが、字句を削っての節略である。元の文章は次の通り。「余按『方広大荘厳経』降生品、但云『菩薩観察四方、周行七歩』、而無分手之文。『普耀経』云、『分手指天地、作大師子吼』、亦不言其左右。唯言字函『過現因果経』云、『太子生時、随蓮華上、無扶侍者、自行七歩。挙其右手、而師子吼云、「我於一切天人之中、最尊最勝』。宜字函『仏本行集経』樹下誕生品、及彩字函『釈迦譜』同之。而末句改云、『天上天下、唯我独尊』。然不知當初所指、決在那琅函。」文中の『方広大荘厳経』「降生品」は同経・巻三（T03-553a）を、『普耀経』は巻二（T3-494a）を、『過現因果経（過去現在因果経）』は巻一（T3-625a）を、『仏本行集経』「樹下誕生品」は巻八（T3-687b）を、『釈迦譜』は巻一（T50-16a）を、それぞれ指す。ただ、無著禅師の指摘とは異なり、『仏本行集経』には「右手」への言及は無く、『釈迦譜』は「右手」ではなく「右脇」となっている。

③ 忠曰、經唯言右手、而不言左手。而現今釋迦降生像、右手指天、左手指地。蓋應天上天下唯我爲尊〈瑞應經本起經長阿含等〉之語矣。復按、左手、指地者、降魔印也。慧琳經音義云。如來成正覺時。身安吉祥之坐。左手指地。作降魔之印。

＊

忠曰く、「經に唯だ右手を言いて、左手を言わず。而して現今の釋迦降生の像、右手は天を指し、左手は地を指す。蓋し「天上天下、唯我爲尊〈『瑞應經』『本起經』『長阿含』等〉の語に應ず。復た按ずるに、左手、地を指すは、降魔の印なり。慧琳の『經音義』に云く、「如來正覺を成したまふ時、身は吉祥の坐に安じ、左手は地を指して、降魔の印を作す。」と」と。

＊

○忠曰、經唯言右手…作降魔之印＝文中、『瑞応経』は、『太子瑞応本起経』巻上に「四月八日夜明星の出づる時に到り、化して右脇より生れて地に堕す。即ち行くこと七歩、右手を挙げ住して言く、「天上天下、唯だ我のみ尊しと為す。三界は皆な苦にして、何ぞ楽しむ可き者あらん」と」と（到四月八日夜明星出時、化従右脇生墮地。即行七歩、挙右手住而言、天上天下、唯我為尊。三界皆苦、何可楽者）」（T3-473c）とある。『本起経』は、『修行本起経』巻一「菩薩降身品」に「行くこと七歩にして、手を挙げて言く、「天上天下、唯だ我れのみ尊し。三界は皆な苦なるも、吾れ当に之を安んずべし」と（行七歩、挙手而言、天上天下、唯我為尊。三界皆苦、吾当安之）」（T3-463c）とある。また『異出菩薩本起経』巻一に「太子、四月八日夜半時を以て生ず。母の右脇従り生じ地に堕す。行くこと七歩の中、足を挙ぐること高さ四寸、足は地を踏まず。即ち復た右手を挙げて言く、「天上天下、尊きこと我れを過ぐる者無し」と（太子以四月八日夜半時生。従母右脇生墮地。行七歩之中、挙足高四寸、足不蹈地。即復挙右手言、天上天下、尊無過我者）」（T3-617b）とある。『長阿含』は、同経・巻一（T1-4b）に「右脇従り出でて、地に堕し行くこと七歩、扶侍の人無くして、遍く四方を観、手を挙げて言く、「天上天下、唯だ我れのみ尊しと為す。要ず衆生の生老病死を度さん」と（従右脇出、墮地行七歩、無人扶侍、遍観四方、挙手而言、天上天下、唯我為尊、要度衆生老病死）」とある。慧琳の『経音義』は、『一切経音義』巻二六（T54-472b）に同文が見える。

（窪田顕脩）

【二二六】文殊普賢

見次迦葉・阿難處。

＊

次の迦葉・阿難の處に見ゆ。

（東海宏徳）

【二二七】迦葉　阿難

釋門正統〔三巻卅五丈〕云、今殿中、設釋迦・文殊・普賢・阿難・迦葉・梵王・金剛者、此土之像也。阿難合掌、是佛堂弟、理非異儀。迦葉擎拳、本外道種。且附本習、以威來〔衆〕象。蓋若以聲聞人輔、則迦葉居左、阿難居右。若以菩薩人輔、則文殊居左、普賢居右。今四大弟子、俱列者、乃見大小乘、各有二焉耳。梵王執爐、請轉法輪。金剛揮杵、衞護教法也。

＊

『釋門正統』［三巻卅五丈］に云く、「今、殿中に、釋迦・文殊・普賢・阿難・迦葉・梵王・金剛を設くるは、此土（＝中国）の像なり。阿難は合掌す、是れ佛の堂弟なり。理、儀を異にすること非ざるべし。迦葉は拳を擎ぐ。本と外道（＝仏教以外の宗教を信奉する者）の種なり。且く本習に附し、威を以て來る［衆いに］象なり。蓋し若し聲聞（＝釈迦の説法する声を聞いて悟る弟子）の人を以て輔とするときは、則ち迦葉、左に居し、阿難、右に居す。若し菩薩の人を以て輔とするときは、則ち文殊、左に居し、普賢、右に居す。今、四大弟子、俱に列なる者は、乃ち大小乘に各おの二有るを見すのみ。梵王は爐を執りて、轉法輪を請す。金剛は杵を揮いて、護教法を衞るなり」と。

＊

○釋門正統云…衞護教法也＝『釋門正統』第三（X7-298a）に全く同文が見える。

（池田丈明）

【二二八】達磨　百丈　臨濟

三祖之像、安於祖堂。見殿堂門、祖師堂處。

＊

三祖之像、祖堂に安ず。「殿堂門」の「祖師堂」の處に見ゆ。

＊

○見殿堂門、祖師堂處＝『禅林象器箋』巻一「第二類殿堂門 上」の【三二】「祖師堂」を指す。

（池田丈明）

【二二九】普菴

①普菴肅禪師録［上ノ一丈］云、師諱印肅、號普菴。袁州之宜春人也。世姓余。紹臨濟十二世孫、牧菴忠禪師之緒。有宋之時、生於縣之太平里。初師未生時、隣夜有望其室者。祥光燭天、遠近相諤、已而蓮生道周、或現阡陌、衆愈異之。及師生、五相豐潤、即善世言。由是人始知為至聖之徵。實乙未政和五年、十一月二十七日辰時也。庚子宣和改元之二年、師夢一僧點其胸曰、汝他日當自省。既寤、白母黄氏。視點紅瑩。大似世之櫻珠。至高宗甲寅紹興四年八月、遣師壽隆賢和尚。賢授以法華。師曰、諸佛元旨、貴悟于心。數墨循行、何益于道。賢甚器之。辛酉紹興十一年、四月八日剃染。壬戌紹興十二年五月、受甘露大戒於袁州之開元寺。聞牧菴忠公唱導潙山、師入湘訪問、萬法歸一、一歸何處。牧菴豎拂示之、有省。歸壽隆。時癸亥紹興十有三年、師甫二十有九矣。癸酉紹興二十三年、使牒請主慈化寺。孝宗丙戌乾道二年正月一日、始營梵宇。至四年十二月落成。弟子圓通・圓融・圓成、勤勤贊襄。與有績矣。舊傳、殿址本李倉監施。而莫詳開迹何代也。師利世不伐。嘗言、捨家出家。當爲何事。披緇削髮、本屬何因。若不報國資家、虚負皇恩敕命。若不導化檀那、枉作空門釋子。毎楮衣糲食、藜杖芒屩、脇不沾席者、十有二年。一日誦華嚴論、至達本情忘、知心體合、豁然大悟、徧體汗流。廼曰、我今親契華嚴法界矣。

遂示衆曰、李公長者、於華嚴大經之首、痛下一槌、擊碎三千大千世界、如湯消雪。不留毫髮許、於後進者、作得滯礙。普菴老人一見、不覺呑却五千四十八卷、化成一氣、充塞虚空。方信釋迦老子出氣不得之句。然後破一微塵、出此華嚴經、徧含法界、無理不收、無法不貫。便見摩耶夫人是我身、彌勒樓臺是我體、善財童子是甚茄子、文殊普賢與我同參、不動道場、徧周法界。悲涕歡喜、踊躍無量、大似死中得活、如夢忽醒。良久云、不可説不可説、又不可説、始信。金剛云、信心清淨、即生實相。實相既生、妄想生滅、全體法身、徧一切處、方得大用現前。即説偈曰、捏不成團撥不開、何須南嶽又天台。六根門首無人用、惹得胡僧特地來。〈云云。〉俄有僧、稱道存。自蜀冒雪而來。既見師、曰、此吾不請友也。遂相徵詰。棒喝交馳、心心密契。僧曰、師再來人也。大興吾道、非師其誰。因指雪書頌而行。自是廣津梁、崇塔廟、禦灾捍患。天動物與、雖鬼神莫測其變。符頌藥水驗世非一。嘗自贊云、蒼天蒼天、悟無生法、談不説禪。開兩片皮、括地該天。如何是佛、十萬八千。己丑乾道五年、七月二十一日、沐浴書偈于方丈西壁云、乍雨乍晴寶象明、東西南北亂雲深。失珠無限人遭劫、幻魔權機為汝清。○枯木救度。書畢跏趺而逝。至冬十一月一日、奉全身于塔。

*

『普菴肅禪師録』［上の一丈］に云く、「師、諱は印肅、普菴と號す。袁州（江西省）の宜春の人なり。世姓は余。臨濟十二世の孫、牧菴忠禪師（＝牧菴法忠）の緒を紹ぐ。有宋の時、縣の太平里に生まる。初め師未だ生ぜざる時、隣夜に其の室を望む者有り。祥光、天を燭らし、遠近相諤す。已にして、蓮、道周に生じ、或は阡陌に現ず。衆、愈之を異とす。師の生ずるに及び、五相豐潤にして、即ち世言を善くす。是れに因りて人始めて至聖の徴為ることを知る。實に乙未政和五（一一一五）年十一月二十七日辰の時なり。庚子宣和改元（一一一九）の二年、師夢むらく、一僧、其の胸を點じて曰く、「汝、他日當に自ら省るべし」と。既に寤めて、母の黄氏に白す。點、紅瑩するを視る。大きさ世の櫻珠に似たり。高宗の甲寅紹興四年八月に至り、師を壽隆の賢和尚に遣わす。賢授くるに『法華』を以てす。師曰く、「諸佛の元旨、心を悟ることを貴ぶ。墨を數え行に循うも、何ぞ道に益あらん」と。賢甚だ之を器とす。辛酉紹興十一（一一四一）年、四月八日剃染す。壬戌紹興十二（一一四二）年五月、甘露大戒を袁州の開元寺に受く。牧菴忠公の潙山に唱導すと聞きて、師、湘に入りて訪う。問う、「萬法、一に歸す、一、何れの處にか歸す」と。牧菴、拂を竪てて之に示し、省有り。壽隆に歸る。時に癸亥紹興十有三（一一四三）年、師甫めて二十有九なり。癸酉紹興二十三（一一五三）年、使、牒請して慈化寺を主らしむ。孝宗の丙戌乾道二年正月一日、始めて梵宇を營む。四年十二月に至りて落成す。弟子圓通・圓融・圓成、勤勤として贊襄す。與もに績有り。舊に傳う、「殿址は本と李倉監施す」と。而して「迹を開くこと何代」ということを詳らかにする莫きなり。師、世を利して伐らず。嘗て言く、「家を捨て出家するは、當に何事の為なるべき。緇を披し髮を削るは、本と何の因にか屬す。若し國に報じ家を資けずんば、虚しく皇恩敕命に負く。若し檀那を導化せずんば、枉げて空門の釋子と作る」と。毎に楮衣糲食、藜杖芒屩、脇、席を沾さざること、十有二年なり。一日『華嚴論』を誦み、「本に達し情忘じ、心を知りて體合す」というに至りて、豁然として大悟し、徧體汗流る。廼ち曰く、「我今親しく華嚴法界に契えり」と。遂に衆に示して曰く、「李公長者（＝李通玄）、『華嚴大經』（＝六十巻本『華厳経』）の首に於いて、痛く

一槌を下して、三千大千世界を撃碎すること、湯の雪を消すが如し。毫髪許を、後進の者に留めて、滯礙を作し得ず。普菴老人一見して、覺えず五千四十八巻を呑却して、化して一氣と成し、虚空に充塞す。方に『釋迦老子、氣を出し得ず』の句を信ず。然る後、一微塵を破して、此の『華嚴經』を出し、偏く法界を含んで、理として收めずということ無く、法として貫かずということ無し。便ち見る、摩耶夫人是れ我が身、彌勒の樓臺是れ我が體、善財童子是れ甚の茄子ぞ、文殊・普賢、我と同參道場を動かずして、法界に徧周することを。悲涕歡喜、踊躍無量、大いに死中に活を得るに似て、夢の忽ち醒むるが如し」と。良久して云く、「不可説不可説、又た不可説、始めて信ず、『金剛』に『信心清淨、即ち實相を生ず』と云うことを。實相既に生ずれば、妄想生滅し、全體法身、一切處に徧く、方に大用現前を得たり」と。即ち偈を説きて曰く、「捏ぬれども團を成さず、撥けども開かず、何ぞ須いん南嶽又た天台を。六根門首、人の用うる無し、胡僧を惹き得て特地に來らしむ」と。〈云云。〉俄に僧有り、道存と稱す。蜀より雪を冒して來たる。既に師に見えて曰く、「此れ吾が不請の友なり」と。遂に相徵詰す。棒喝交ごも馳せ、心心密かに契う。僧曰く、「師は再來の人なり。大いに吾が道を興すは、師に非ずして其れ誰ぞ」と。因みに雪を指し頌を書きて行く。是れより津梁を廣くし、塔廟を崇くし、灾を禦ぎ患を捍ぐ。天動き物與ること、鬼神と雖も其の變を測ることと莫し。藥水を符頌するに、世に驗あること一に非ず。嘗て自ら贊して云く、「蒼天蒼天、無生の法を悟り、不説の禪を談ず。兩片皮を開きて、地を括り天を該ぬ。如何なるか是れ佛、十萬八千」と。己丑乾道五（一一六九）年、七月二十一日、沐浴して偈を方丈西壁に書して云く、「乍ち雨ふり乍ち晴る、寶象明らかなり、東西南北、亂雲深し。珠を失いし限り無き人、劫に遭う、幻應權機、汝が為に清し。○。枯木救度」と。書き畢わって、跏趺して逝す。冬十一月一日に至りて、全身を塔に奉ず。

＊

○普菴肅禪師録云＝『普庵印肅禪師語録』三巻は、永楽二十一（一四二三）年の刊。選者は不明であるが、明の成祖永楽帝の御製序を冠する。引用個所は、同『語録』巻一の「悟道因縁」（X69-369c~370c）に見える。文中「云云」として省略された部分は、「師一日、復挙似心斎・円通二子云、達本情忘、知心体合。汝作麽生会。二人顧笑云、未達。翌日各呈頌。師因題云、拠宗眼一観、句到意未到。其体未合、其情未忘。不免強書数字歌。曰、解佩令也。明眼人前覷著、三十拄杖不饒。為什麽如此。不合雪上加霜。解佩令云、先天先地、何名何様。阿曼陀無物比況、触目菩提。自是人不肯承当、且輪回滞名著相。円融法界、無思無想。廬陵米不用商量。血脉纔通便知道。撃木無声、打虚空尽成金響。栢庭立雪、一場敗闕。了無為當下休歇。百匝千回但只這。孤円心月不揩磨。鎮常皎潔、無餘無欠、無聴無説。韶陽老只得一槾。十聖三賢聞挙著、魂消膽裂。唯普菴迥然寂滅」の二三一字である。尚、「視点紅瑩、大似世之櫻珠」の部分を、『仏祖歴代通載』巻二〇「普庵禅師入寂」には、「之を視るに心に当たりて一点の紅瑩有り。大きさ世の櫻珠に似たり（視之当心有一点紅瑩。大似世之櫻珠）」（T49-691b）としており、文意を取りやすい。

② 普菴傳、更見于五燈嚴統［二十ノ八十二丈］・佛祖通載［二十ノ廿三丈］・搜神大全［二巻］等。

〈續傳燈載名無録。又載普菴法嗣二人、曰佛慧清禪師、曰鐵牛禮禪師。並有名無録。〉

＊

普菴の傳は、更に『五燈嚴統』［二十の八十二丈］・『佛祖通載』［二十の廿三丈］・『搜神大全』［二巻］等に見ゆ。〈『續傳燈』は名を載するも録無し。又た普菴の法嗣二人を載す。曰く佛慧の清禪師、曰く鐵牛の禮禪師。並びに名有りて録無し。〉

＊

○普菴傳、更見于五燈嚴統［二十ノ八十二丈］・佛祖通載［二十ノ廿三丈］・捜神大全［二卷］等＝指摘通り、『五燈厳統』巻二〇「袁州慈化寺普庵印肅禅師」条（X81-252b）、『仏祖歴代通載』巻二〇「普庵禅師入寂」条（T49-691b）に普庵の伝が見える。『捜神大全』については③参照。

○續傳燈載名無録。又載普菴法嗣二人、曰佛慧清禪師、曰鐵牛禮禪師。並有名無録＝『続伝燈録』巻三二にある「巻第三十三目録」の「大鑑下第十七世」「黄龍忠禅師法嗣四人」条に、「信相戒修禅師師（一人見録）。慈化印肅禅師・無為道徽禅師・崇化道贇禅師（已上三人無録）」（T51-695a）とある。「慈化印肅」が普庵である。また、同じく『続伝燈録』巻三三にある「巻第三十四目録」の「大鑑下第十八世」「普庵肅禅師法嗣二人」条に、「仏恵清禅師・鉄牛礼禅師（已上二人無録）」（T51-701a）とある。

（瀧瀬尚純）

③　捜神大全［二ノ廿三丈］云、師、示衆曰、諸佛不出世、亦無有涅槃。入吾室者、必能元契矣。善自護持、無令退失。索浴更衣、跏趺而寂。時則乾道五年、七月二十一日也。享年五十五、僧臘二十八。年十一月日、全身入塔。是時四衆云集。悲號之志聲、振動山盡。普菴寂感妙濟正覺昭貺禪師、聖朝大德四年、歳次庚子、秋七月、加封大德二字。餘封如故。〈大德大元第六主成宗年號。〉

＊

『捜神大全』［二の廿三丈］に云く、「師、衆に示して曰く、『諸佛出世せず、亦た涅槃有ること無し。吾が室に入る者、必ず能く元契せん。善く自ら護持し、退失せしむこと無かられ』と。浴を索め衣を更え、跏趺（＝結跏趺坐）して寂す。時に則ち乾道五（一一六九）年七月二十一日なり。享年五十五、僧臘二十八。年の十一月一日、全身入塔す。是の時、四衆云に集い、悲號の聲、山を振動盡くす。　普菴寂感妙濟正覺昭貺禪師　聖朝大德四（一三〇〇）年歳次庚子、秋七月、大德の二字を加封す。餘封故の如し」と。〈大德は大元第六主、成宗の年號なり。〉

＊

○捜神大全［二ノ廿三丈］云…餘封如故＝引用部分は、『絵図三教源流捜神大全』七巻（聯経出版事業公司・一九八〇、p.100~101）に見えるが、原文には「振動山尽」の下に、「師之終始、大概如比（師の終始、大概此の如し）」の八字が有る。

④佛祖通載［廿二ノ五十八丈］云、元仁宗祐三年丙辰、是年封普菴禪師、加號。其詔曰。上天眷命、皇帝聖旨。朕聞、佛氏以空寂爲宗。則凡學所遵者、寧欲建名號、殊稱謂、以示天下後世哉。而國家非此、無以昭尊德樂道之意也。朕自即位以來、聞袁州路南泉山慈化禪寺普菴寂感妙濟眞覺昭貺大德慧慶禪師、紹臨濟之緒、超華嚴之境。德映當代、澤被方來。其道甚尊顯、心切慕之。既累錫大諡。唯塔號未稱。可加定光之塔、曰定光靈瑞之塔者。主者施行。

＊

『佛祖通載』［廿二の五十八丈］に云く、「元の仁宗の延祐三（一三一六）年丙辰、是の年、普菴禪師を封じて、加號す。其の詔に曰く、『上天の眷命、皇帝の聖旨。朕聞く、佛氏、空寂を以て宗と為すと。則ち凡そ學に遵う所の者、寧ぞ名號を建て、稱謂を殊にし、以て天下後世に示すことを欲せんや。而れども國家、此れに非ざれば、以て德を尊び道を樂うの意を昭らかにすること無し。朕、即位より以來、聞く、袁州路（江西省）南泉山慈化禪寺の普菴寂感妙濟眞覺昭貺大德慧慶禪師は、臨濟の緒を紹ぎ、華嚴の境に超

ゆ。德、當代に映じ、澤、方来に被らしむと。其の道甚だ尊顯、心切にこれを慕う。既に累りに大謚（＝謚号）を錫（＝賜）う。唯だ塔號のみ未だ稱わず。定光の塔に加えて、定光靈瑞の塔と曰う可き者なり。主者施行せよ』と」と。

＊

○佛祖通載［廿二ノ五十八丈］云…者主者施行＝『仏祖歴代通載』巻二二（T49-731b）に全く同じ文章が見える。

⑤續文獻通考［二百四十七巻四十二丈］云、大明成祖、永樂十八年、十二月、封普菴師制曰、朕惟、佛道以慈悲爲體。方便爲用。超卓萬有拯拔羣倫。廣利濟以無邊、妙神通而莫測。不有丕承於法緒、曷能茂振於宗風。惟普菴禪師、萬行圓融、六通具足、端嚴自在、變化無方。誓覺悟於羣迷、普利益於庶類、如溥甘霖於六合。膏澤均沽、猶現滿月於千江、光輝旁燭。眷此弘彰於靈化。式宜荐錫於名稱、今特加封普菴至善弘仁圓通智慧寂感妙應慈濟眞覺昭貺惠慶護國宣教大德菩薩。於戲教闡宗乘、傳千燈之派系、功施幽顯、福四海之生靈、翊我皇明、永臻至治。

＊

『續文獻通考』［二百四十七巻四十二丈］に云く、『大明の成祖の、永樂十八（一四〇二）年十二月、「普菴師を封する制」に曰く、「朕惟れば、佛道、慈悲を以て體（＝体）と爲し、方便を用と爲す。萬有に超卓（＝抜きんでてすぐれていること）し、羣倫（＝多数の人々）を拯拔（＝救い助ける）す。利濟を廣うして以て無邊、神通を妙にして測ること莫し。丕いに法緒を承くること有らずんば、曷ぞ能く茂く宗風を振わん。惟るに、普菴禪師、萬行圓融、六通具足、端嚴自在、變化無方。誓って群迷を覺悟せしめ、普く庶類を利益すること、甘霖（＝恵みの長雨）を六合に溥くするが如し。膏澤（＝肥えた土地）均く沽うこと、猶お滿月を千江に現じ、光輝旁く燭すが如し。此の弘に靈化を彰すを眷みる。式て宜しく荐りに名稱を錫うべし。今特とに普菴至善弘仁圓通智慧寂感妙應慈濟眞覺昭貺惠慶護國宣教大德菩薩と加封す。於戲、教、宗乘を闡て、千燈の派系を傳え、功、幽顯に施して、四海の生靈に福し、我が皇明を翊けて、永く至治に臻らしめん』と」と。

＊

○續文獻通考［二百四十七巻四十二丈］云、大明成祖、永樂十八年…臻至治＝『続文献通考』巻二四七の四十二条に、「十八年」から「臻至治」まで全く同じ文章が見える。また、この「制」は『普菴印肅禪師語録』の巻頭（X69-369a）に付録されている。

⑥　普菴録三卷。明祖御製序。又續文獻通考載。恐繁不録。

『普菴録』三卷。明の成祖「御製の序」あり。又た『續文獻通考』に載す。繁を恐れて録さず。

＊

○普菴録三卷。明祖御製序＝『普庵印肅禪師語録』三巻はX69所収。永楽帝の「御製序」は、同『語録』の巻頭（X69-368c）に付録されており、末尾に「右『続文献通考』第二百四十七巻に載す。宝永［八（一七一一）年］辛卯春正月、道忠鈔出し、本録の首に置く（右続文献通考第二百四十七巻載。宝永辛卯春正月、道忠鈔出、置本録之首）」（X69-369a）という無著の付記がある。

（東海宏徳）

⑦天如則禪師録［六ノ四十四丈］呉郡慧慶禪寺記云、姑蘇城西五里許。松林柳涇、暎帶如畫。有重閣廣殿、飛出林杪、與西山爭高者、慧慶禪師寺也。寺視他刹、雖不古、而化聲籍籍、緇白歸之如市者、普菴禪師之化也。初普菴振化於袁之南泉山、道場之盛、甲天下。沒世雖久、揚揚有靈。凡官民旱潦病横、與夫拘忌營構之事、咸祷之、厥應如響。皇元加贈大德慧慶禪師。歳時香幣與民施交委、食無寸壤、居徒常數千人。江湘淮漢之間、其化殆遍。獨未至於呉。其至有待於時邪、亦必待人而後行邪。延祐甲寅春。南康無瑕沙門宗璁、訪道至呉門。誦寒山夜鐘、江楓漁火之句、惻然有感于中。乃謀結菴以延游錫、且以奉禪師。郡人金國寶、首率財營地、相其成。戸屨日滿、日持鉢以餉之。閶闔驛道濱長河。民苦泥泥淖。璁募衆、以甓之橋之、圮者新之。凡利人之事、靡不爲、爲必徼靈於普菴。江艘海舶、有獲冥應而脱風涛者。至則拜普菴爲更生。由是施者翕然。遂建無量壽閣、以祠佛及五百尊者像。閣後爲普光明殿。普菴之像居焉。〈云云。〉　又云、余謂、世尊以正法眼藏、涅槃妙心、付摩訶迦葉。凡廿八傳、至達磨。又十傳至臨濟。臨濟十三傳、爲普菴。普菴以臨濟峻機大用、陶鍊學徒、不歴階梯、深達佛祖堂奥、此其化之大本者也。彼弭灾救患、應祷於有爲功用者、餘事也。

＊

『天如の則禪師の録』［六の四十四丈］「呉郡（＝中国の江南地方）慧慶禪寺の記」に云く、「姑蘇城（＝中国の江蘇省。呉王夫差が姑蘇山上に築いた）の西五里許り、松林柳涇、暎帶（王義之の『蘭亭叙』の一節）に畫くが如し。重閣廣殿、林杪に飛出して、西山と高さを爭う者有るは、慧慶禪師寺なり。寺、他刹に視ぶるに、古からずと雖も、而も化聲（＝教化の評判）籍籍（＝やかましいさま）として、緇白（＝僧と俗人）の之に歸すること市の如くなる者は、普菴禪師の化なり。初め普菴、化を袁（＝中国の江西省）の南泉山（＝中国の安徽省）に振るい、道場の盛んなること、天下に甲たり。世を沒すること久しと雖も、揚揚（＝威勢のよいさま）として靈（＝不思議な力）有り。凡そ官民、旱潦（＝ひでりとながあめ）病横と、夫の拘忌（ある物事にこだわってそれをきらうこと）營構の事と、咸く之を祷り、厥の應ずること響の如し。皇元、大德慧慶禪師と加贈す。歳時の香幣と民施と交交（＝かわるがわる）委ね、食、寸壤（＝わずかな土地）無くして、居徒常に數千人。江湘淮漢（＝江河淮漢［中国の長江・黄河・淮水・漢水の四つの川］）の間、其の化殆んど遍し。獨り未だ呉に至らず。其の至ること時に待つこと有るや、亦た必ず人を待ちて後に行うや。延祐［元（一三一四）年］甲寅の春、南康（＝中国の江西省）の無瑕（＝歴却無瑕）の沙門宗璁、道を訪ねて呉門に至る。『寒山夜鐘、江楓漁火』の句（＝張継が蘇州郊外での旅愁をうたった『楓橋夜泊』の詩）を誦して、惻然（＝あわれんで心をいためるさま）として中に感ずること有り。乃ち菴を結んで以て游錫（＝行脚）を延き、且つ以て禪師に奉ぜんことを謀る。郡人の金國寶、首として財を率い地を營み、其の成を相く。戸屨（入口の靴）は日に滿つれば、日びに持鉢して以て之に餉す。閶闔驛道、長河に濱し。民は泥淖に苦しむ。璁、衆を募りて、以て之に甓し、之に橋し、圮るる者は之を新たにす。凡そ人を利するの事、爲さずということ靡し。爲せば必ず靈を普菴に徼む。江艘海舶、冥應を獲て風涛を脱する者有り。至れば則ち普菴を拜して更生と爲す。是れに由りて施す者、翕然（＝多くのものが集まるさま）たり。遂に無量壽の閣を建て、以て佛及び五百尊者の像を祠る。閣後に普光明殿を爲る。普菴の像居れり」と。〈云云。〉　又云く、「余謂えらく、世尊、正法眼藏、涅槃妙心を以て、

摩訶迦葉に付す。凡そ廿八傳して、達磨に至る。又た十傳して臨濟に至る。臨濟十三傳して、普菴と爲る。普菴、臨濟の峻機大用を以て、學徒を陶錬して、階梯を歴ず、深く佛祖の堂奥に達す。此れ其の化の大本なる者なり。彼の灾いを弭み患いを救う。祷を有爲の功用（＝有為功徳［相対的善の意。涅槃の第一義諦を無為功徳とするのに対して、一切の世間的な功徳善法を指す］）に應ずる者は、餘事なり」と。

＊

○天如則禪師録［六の四十四丈］呉郡慧慶禪寺記云…普菴之像居焉＝『師子林天如和尚語録』巻六（X70-808c）に全く同文が見える。無著の書き込み通り、江戸刊和刻本の巻六の四十四丁表から裏にかけて載せられている。

○又云、余謂…餘事也＝典拠の巻数、丁数の書き込みが無いが、右記『師子林天如和尚語録』巻六「呉郡慧慶禪寺記」（X70-809a）の少し後に見える文章である。和刻本では四十三丁裏に当たる。

⑧ 忠曰、禪林或妥普菴於佛殿背後。以慧慶寺無量壽閣後爲普光明殿、居普菴像、爲據、不必然耳。

＊

忠曰く、「禪林或いは普菴を佛殿の背後に妥んず。慧慶寺の無量壽閣の後に普光明殿を爲り、普菴の像を居くを以て、據と爲すも、必ずしも然らざるのみ」と。

⑨ 又天如答江陵性海書。説普菴事。

＊

又た天如「江陵（＝湖北省中南部）の性海に答うるの書」に、普菴の事を説く。

＊

○又天如答江陵性海書。説普菴事＝『師子林天如和尚語録』巻八「答江陵性海長老」（X70-825c）を指す。和刻本では、巻八の三十五丁表に当たる。

（池田丈明）

⑩ 清拙澄和尚録［日本四ノ佛祖賛十一丈］普菴贊云、佛眼之孫、牧菴之子、金剛無量鎮長存。百萬天龍常守護。其靈妙如如也。圓等太虚。其神通赫赫也。震同天鼓。故其不動道場、恩加四海。與一切人、成就華堂紺宇。緇白歸依、浩若百川之朝水府。夫是之謂定光古佛再來。普菴肅公和尚。江西袁州慈化禪寺開山之祖者也。

＊

『清拙澄和尚録』［日本四の佛祖賛十一丈］「普菴の贊」に云く、「佛眼（＝佛眼清遠）の孫、牧菴（＝牧菴法忠）の子、金剛無量鎮長に存す。百萬の天龍常に守護す。其の靈妙（＝神妙不可思議なこと）如如たり。圓かなることは太虚に等し。其の神通赫赫たり。震うことは天鼓に同し。故に其の道場を動かず。恩は四海に加わる。一切の人と、華堂紺宇（＝仏寺）を成就す。緇白（＝僧俗）は歸依すること、浩として百川の水府に朝するが若し。夫れ是れ之を定光古佛の再來、普菴肅公和尚、江西袁州慈化禪寺開山の祖と謂う者なり」と。

＊

○清拙澄和尚録［日本四ノ佛祖賛十一丈］普菴賛云…江西袁州慈化禪寺開山之祖者也＝『清拙澄和尚録』は、清拙正澄の語録。無著は「日本四」としていることから、所謂『雑著』を指すと考えられるが、未見。

⑪謝肇淛塵餘［一ノ三十丈］云、鄭一觀者、隆慶時、福清農家也。雅好持齋誦經。凡桑門之徒過者、無不留宿、罄家所有、資其衣糧。先是有一年少。不知何自而來。挾數百金、占籍於隣村。容貌清俊、器度温雅。一觀因許以女、招之入贅。其日適有道士求宿。一觀以婚辭。強之。乃許。趺坐中堂、手結普安印、凝然不動。須臾堺至。鼓樂沸天、燈光載道。及入門見道士、一時俱沒。道士叱之曰、畜生來前、復汝故形。赦汝死罪。堺即化爲老猴、伏地乞命。道士敕遣之。一觀大驚拜請。何居。道士手指前山、化爲電光而去。明日尋其跡。得廢寺故基。叢莽中有普安佛像。儼然道士也。

＊

謝肇淛が『塵餘』［一の三十丈］云く、「鄭一觀という者は、隆慶（一五六七～一五七二）の時、福清（＝福清市）の農家なり。雅より持齋（＝戒を守っておこないを正しくすること）を好んで誦經す。凡そ桑門の徒、過る者、留宿（＝来客を引きとめて宿泊させる）せざること無く、家の所有を罄くして、其の衣糧を資く。是れより先、一の年少（＝若年の人）有り。何れ自りして來ることを知らず。數百金を挾みて、籍を隣村に占む。容貌清俊、器度温雅（＝穏やかで上品なこと）なり。一觀、因て許すに女を以てし、之を招いて入贅（＝入り婿すること）す。其の日適たま道士（＝道教を信奉し、道教の教義にしたがった活動を職業とするもの）有りて宿を求む。一觀、婚を以て（＝の理由で）辭す。之を強ゆ。乃ち（＝ようやく）許す。中堂に趺坐して、手に普安の印を結び、凝然として動かず。須臾（＝しばらく）に堺至る。鼓樂、天に沸き、燈光、道に載つ。門に入って道士を見るに及て、一時に俱に沒す。道士之を叱って曰く、「畜生來前し、汝が故形に復せよ。汝が死罪を赦さん」と。堺即ち化して老猴（＝年老いた猿）と爲り、地に伏して命を乞う。道士敕して之を遣る。一觀大いに驚いて拜請す。『何くにか居す』と。道士、手に前山を指して、化して電光と爲りて去る。明日、其の跡を尋ぬ。廢寺の故基を得たり。叢莽（＝くさむら）の中に普安の佛像有り。儼然として道士なり」と。

＊

○謝肇淛塵餘［一ノ三十丈］云…儼然道士也＝謝肇淛（一五六七？～一六二四？）は、明代の学者。字は在杭、号は小草斎。『五雑組』の著者として知られる。引用は『塵餘』巻一の三十丁（長澤規矩也解題『和刻本漢籍随筆集』四・p.275）に同文が見える。

⑫　忠曰、普安乃普菴也。音近訛安而已。

＊

忠曰く、「普安は乃ち普菴なり。音近くして安に訛るのみ」と。

＊

○忠曰、普安乃普菴也。音近訛安而已＝⑪の文中に見える「普安印」の注記である。

（窪田顕脩）

【二三〇】開山

①文字禪［三十ノ四丈］雲菴眞淨和尚行状云、丞相舒王、捨第爲寺、以延師爲開山第一祖。又以神宗皇帝問安湯藥之賜、崇成之。是謂報寧。

＊

『文字禪』［三十ノ四丈］『雲菴眞淨和尚行状』云く、「丞相（＝首相）舒王、第を捨てて寺を爲りて、以て師を延き、開山第一祖と爲す。又た神宗皇帝（＝北宋の第六代皇帝）問安湯藥の賜を以て、之を崇成す。是れを報寧と謂う」と。

＊

○文字禪［三十ノ四丈］雲菴眞淨和尚行状云、…是謂報寧＝覚範慧洪『石門文字禪』巻三〇（J23-726c）に基づき、嘉興蔵本では四丁表に当たる。ただ、原文は「丞相舒王、捨第為寺」の箇所を、「公大悦、因捨大為寺」に作っている。尚、『雲庵克文禪師語録』巻一に「因捨第為寺、以延師、為開山第一祖。又以神宗皇帝問安湯薬之賜崇成之。是謂報寧（X69-211a）とあり、ほぼ同文が見える。

＊

②蒲室集［疏十一丈］有當湖新建福源寺。請林平山開山。杭諸山疏。

＊

『蒲室集』［疏十一丈］に「當湖に新たに福源寺を建つ。林平山（＝平山処林）を請うて開山とせしむ。杭の諸山の疏」有り。

＊

○蒲室集［疏十一丈］有當湖新建福源寺…杭諸山疏＝笑隠大訢『蒲室集疏』一巻の十一丁表（和刻影印『近世漢籍叢刊 思想四編 蒲室集・折疑論』中文出版社 p.2023）に載せられた諸山疏の題名。

③貞和集［四ノ十九丈］古田寄集慶開山偈云、如意來尸釋梵宮。雨花狼籍濕春風。自慚老矣無靈骨。日在深雲聽講鐘。

＊

『貞和集』［四ノ十九丈］「古田、集慶の開山に寄せる偈」に云く、「如意（＝おもいのまま）來り釋（＝帝釈天）梵（＝梵天）宮を尸る。雨花狼籍（＝散らばること）春風に濕う。自ら慚づ、老いたり靈骨無きことを。日びに深雲に在りて講鐘を聽く」と。

＊

○貞和集［四ノ十九丈］古田寄集慶開山偈云…日在深雲聽講鐘＝『貞和集』巻四（『大日本仏教全書』巻一四三・p.105）に同文がみられる。

（窪田顕脩）

【二三一】準開山

東漸署清規［一ノ七丈］云、道行崇重、功被山門者、謂之準開山、或號中興祖。

＊

『東漸署清規』［一ノ七丈］に云く、「道行崇重にして、功、山門に被る者、之を準開山と謂い、或いは中興祖と號す」と。

＊

○東漸署清規［一ノ七丈］云、…或號中興祖＝東福寺の東漸建易（一三四四～一四二三）が編纂した清規集。京都大学文学部図書館に無著道忠の筆写本が収蔵されており、尾崎正善「翻刻・京都大学文学部図書館蔵『叢林拾遺』（東漸和尚略清規）」（『鶴見大学紀要』第三八号 第四部 人文・社会・自然科学編、

二〇〇一）に詳しい。原本は未見。上掲論文の翻刻（p.107）では文字の異同はない。

（窪田顕脩）

【二三二】中興祖

見準開山處。

＊

準開山の處に見ゆ。

（窪田顕脩）

【二三四】跋陀婆羅

①浴室設跋陀婆羅菩薩像、本水因圓通之説。

＊

浴室に跋陀婆羅菩薩の像を設くは、「水因圓通の説」に本づく。

＊

○浴室設跋陀婆羅菩薩像、本水因圓通之説＝文中、跋陀婆羅（梵名「バドラパーラ」（Bhadrapala））は、意訳され「善守」「賢護」とも呼ばれる。在家の菩薩の筆頭で、水に触れることに因って開悟したとされる。詳しくは『禅学』（p.1028b「跋陀婆羅」条）、『望月』（p.946c「賢守菩薩」条・p.2411c「十六正士」条）、『織田』（p.410c「賢護」条・p.959b「十六菩薩」条）等を参照。浴室は、【一〇五】「浴室」を参照。「水因圓通之説」は、次段②に引用される『首楞厳経』の記載内容を指す。二十五[種]円通の一つで、「円通」とは、諸法実相の理に通達し、融通無礙の心に住する方法をいう。『広説』（p.1291b「二十五円通」条）・『禅学』（p.979d「二十五種円通」条）等を参照。

②首楞厳経［五上ノ十九丈］云、跋陀婆羅、并其同伴十六開士、即從座起、頂禮佛足、而白佛言、我等先於威音王佛、聞法出家。於浴僧時、隨例入室、忽悟水因。既不洗塵、亦不洗體、中間安然、得無所有、宿習無忘、乃至今時、從佛出家、令得無學。彼佛名我跋陀婆羅。妙觸宣明、成佛子住。佛問圓通、如我所證、觸因爲上。

＊

『首楞厳経』［五上の十九丈］に云く、「跋陀婆羅、并びに其の同伴の十六の開士（＝菩薩）、即ち座從り起ちて、佛足を頂禮し、而して佛に白して言さく、『我等先に威音王佛（＝最初で最古の仏）に於いて、法を聞き出家す。浴僧（＝入浴の供養）の時に於いて、例に隨いて室に入り、忽ちに水因（＝水の本質・実体）を悟る。既に塵をも洗わず、亦た體をも洗わず、中間安然として、無所有を得、宿習（＝過去に積もった善悪の潜在力・習気）を忘るること無くして、乃至今の時、佛に從い出家して、無學（＝阿羅漢果）を得しむ。彼の佛は我を跋陀婆羅と名づく。妙（＝妙）觸宣明（＝霊妙な感覚が顕になる）して、佛子住（＝仏弟子のさとりの境地）を成ず』と。佛が圓通（＝さとりの方法）を問うに、『我が所證（＝さとり）の如きは、觸因（＝触覚に因るもの）を上と爲す』と」と。

＊

○首楞厳経［五上ノ十九丈］云…觸因爲上＝『首楞厳經』巻五（T19-126a）に同文が見られる。本文の「妙」は「妙」の意符書換字。書き下し文では「妙」に変更した。ここに引用される経文は、特に『碧厳

録』（第七八則「十六開士入浴」、岩波文庫本㊦ p.65・末木訳本㊦ p.71）等の題材となり、古来より公案として用いられた。

③智度論［七ノ十二丈］云、颰陁婆羅、秦言善守。　又云、善守等十六菩薩、是居家菩薩、颰陁婆羅居士菩薩、是王舍城舊人。

＊

『智度論』［七の十二丈］に云く、「颰陁婆羅は、秦（＝中国）に善守と言う」と。　又た云く、「善守等の十六の菩薩は、是れ居家（＝在家）の菩薩なり。颰陁婆羅居士の菩薩は、是れ王舍城（＝マガダ国の首都）の舊人（＝古くからの住人）なり」と。

＊

○智度論［七ノ十二丈］云、颰陁婆羅、秦言善守＝『大智度論』巻七（T5-110c）に見える。ただし「秦言善守」の五字は、「颰陁婆羅」の語に対する割注である。

○又云、善守等十六菩薩…是王舍城舊人＝『大智度論』巻七（T5-111a）にそのまま見える。また、少し先に、「善守菩薩、是王舍城旧人、白衣菩薩中最大」（T5-111a）とも記されている。

④大寶積經［百十五ノ一丈］無盡慧菩薩會云、有十六在家菩薩、跋陀婆羅而爲上首。

＊

『大寶積經』［百十五の一丈］の「無盡慧菩薩會」に云く、「十六の在家の菩薩有り、跋陀婆羅を上首（＝筆頭）と爲す」と。

＊

○『大寶積經』［百十五ノ一丈］無盡慧菩薩會云＝『大宝積経』巻一一五に「如是我聞。一時仏在王舍城耆闍崛山、与大比丘衆千二百五十人。爾時復有一万菩薩摩訶薩。所謂慧幢菩薩、法幢菩薩、月幢菩薩、日幢菩薩、無辺幢菩薩。復有十六在家菩薩、跋陀婆羅而為上首」（T11-0648a）とある。

⑤忠曰、今浴室所掲畫像、作僧形著袈裟者。蓋依楞嚴文。若準寶積智論等、則爲在家菩薩。故止觀輔行［二之一ノ廿丈］云、跋陁和、智論及諸經、名跋陀婆羅。音輕重耳。是在家菩薩〈止此〉。余謂、出家者、在家者、名同人別。

＊

忠曰く、今、浴室に掲ぐる所の畫像は、僧形の、袈裟を著くる者に作る。蓋し『楞嚴』の文に依る。若し『寶積』『智論』等に準すれば、則ち在家の菩薩爲り。故に『止觀輔行』［二の一の廿丈］に云く、「跋陁和は、『智論』及び「諸經」に、跋陀婆羅と名づく。音の輕重のみ。是れ在家の菩薩なり」と〈此こに止まる〉。余（＝私）謂えらく、出家の者と、在家の者と、名は同じくして人は別なり」と。

＊

○止觀輔行［二之一ノ廿丈］云＝荊溪湛然『止観輔行伝弘決』巻二（T46-185a）に同文が見える。同書は天台智顗『摩訶止観』全十巻（T46）に対する現存最古の注釈書。

⑥七佛所説神咒經、跋陀和菩薩、説菩薩妙行八事〈如彼〉。

＊

『七佛所説神咒經』に、「跋陀和菩薩は、菩薩の妙（妙）行八事（＝霊妙な行為による八つの功徳）を説く」と〈彼の如し〉。

＊

○七佛所説神咒經…妙行八事＝『七仏所説神呪経』巻四（但し、第一巻に提示される経名は『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』）に、「跋陀和菩薩。我、菩薩の妙行に八事有ることを楽説せんと欲す。何等をか八と為す。一には菩薩は五濁の世界に処し、衆生を拔済して疲厭を生ぜず。二には諸もろの衆生を見て福事を興起し、営護佐助して穢心を生ぜず。三には人の悪を為すを見て敦喩訶諫し、捨離することを得しむ。四には厄難を有する者を拯済憐愍すること、母が子を愛おしむが如し。五には来求の者有らば身命を惜まず。六には厄難の処有らば扶持携接し、脱難することを得しむ。七には邪見の人を見て憐愍敦喩し、正見を得せしむ。八には衆生を鞠育すること猶お赤子の如く、所有の功徳は悉く施与を持し、共に用いて無上菩提に迴向す。是れを菩薩の八事と為し、無量の衆生を利益す（跋陀和菩薩。我欲楽説菩薩妙行有八事。何等為八。一者菩薩処於五濁世界、拔済衆生不生疲厭。二者見諸衆生興起福事、営護佐助不生穢心。三者見人為悪敦喩訶諫、令得捨離。四者有厄難者拯済憐愍、如母愛子。五者有来求者不惜身命。六者有厄難処扶持携接、令得脱難。七者見邪見人憐愍敦喩、令得正見。八者鞠育衆生猶如赤子、所有功徳、悉持施与、共用迴向無上菩提。是為菩薩八事、利益無量衆生）」（T21-555a）とある。

（徳重寛道）

【二三五】聖僧

①忠曰、僧堂中央所設像、總稱聖僧。然其像不定、若大乘寺則安文殊、小乘寺則安憍陳如、或賓頭盧。有處用大迦葉、復用空生。如禪刹、則通用不拘、乃下文援證。

＊

忠曰く、「僧堂の中央に設くる所の像、總じて聖僧と稱す。然らば其の像定まらず、若し大乘の寺には則ち文殊を安んじ、小乘の寺には則ち憍陳如（＝阿若憍陳如）、或いは賓頭盧を安んじ、有る處には大迦葉を用い、復た空生（＝須菩提）を用ゆ。禪刹の如きんば、則ち通用拘らず。乃ち下文證を援ける」と。

＊

②或説［勅抄十四ノ七丈冠考］曰、釋迦法中、以憍陳如爲僧寶之始。蓋陳如臘大於迦葉一夏。故以陳如爲僧堂中上座。然從唐大曆已後、用文殊爲上座。

＊

或る説［勅抄十四の七丈冠考］に曰く、「釋迦法中（＝仏教の教えの中）、憍陳如を以て、僧寶の始めと爲す。蓋し陳如は臘（＝法臘）迦葉より大なること一夏（＝九〇日間）。故に陳如を以て僧堂の中の上座と爲す。然るに唐（＝中国）の大曆（大曆年間・七六六～七七九）從り已後、文殊を用て上座と爲す」と。

＊

○或説［勅抄十四の七丈冠考］曰…用文殊爲上座＝無著禅師書き入れの『勅修百丈清規抄』巻一四に「憍陳如」への言及があるが、次の③に引かれる『梵網経菩薩戒本疏』を踏まえて、「［小乘ノ寺ニハ］陳如尊者、大乘ノ寺ニハ文殊ヲ聖僧ニセヨチヤカ。僧ノ初ハ陳如ソ。釈迦法中、無別菩薩（＝別の菩薩無ク）、文殊弥勒、復タ次第ニ依ルト云ソ」（七丁裏）とあるだけである。［小乘ノ寺ニハ］の部分は無著禅師の書き足しである。また、上欄の余白に「陳如」という項目の見出しで、「首座之故事也。臘先于迦葉一夏、上古以陳如為上坐。唐大曆年中、以陳如尊者、小乘教故、天下食堂中、以文殊為上坐。云云。詳于賛寧高僧伝不空章（首座の故事なり。臘、迦葉に先だつこと一夏なれば、上古は陳如を以て上坐と為す。唐の大曆年中、陳如尊者は小乘教なるを以ての故に、天下の食堂中、文殊を以て上坐と為す。云云。賛寧『高僧伝』（＝『宋高僧伝』巻一・T50-713a）の不空章に詳らかなり」とある。これらの文章を取り混ぜたものが、②の本文となっている。【二三六】「僧形文殊」③④を併せて参照。原文の「冠考」は、「冠注の考察」の意であろうか。尚、『勅抄』の「釈迦法中、無別菩薩」の部分は、『大智度論』巻三四の次の一節を踏まえる。「諸仏、多くは声聞を以て僧と為し、別の菩薩僧無し。弥勒菩薩、文殊師利菩薩等の如き、釈迦文仏に、別の菩薩僧無きを以ての故に、声聞僧中の入れて次第に坐せしむ。仏有り、一乘の説法を為し、純ら菩薩を以て僧と為す。仏有り、声聞、菩薩をば雑えて以て僧と為す。阿弥陀仏国の如きは、菩薩僧多く、声聞僧少し。是の故を以て、無量の菩薩を以て僧と

為さんことを願う。（諸仏多以声聞為僧、無別菩薩僧。如弥勒菩薩、文殊師利菩薩等、以釈迦文仏無別菩薩僧、故入声聞僧中次第坐。有仏、為一乗説法、純以菩薩為僧。有仏、声聞、菩薩雑以為僧。如阿弥陀仏国、菩薩僧多、声聞僧少。以是故、願以無量菩薩為僧。）」（T25-311c）尚、『大智度論』のこの部分は、【二三六】「僧形文殊」の①に引用されている

＊

③『梵網經法藏疏』［一ノ十四丈］云、又聞西國諸小乗寺、以賓頭盧爲上座、諸大乗寺、以文殊師利爲上座。

＊

『梵網經法藏の疏』［一の十四丈］に云く「又た聞く西國（＝西域の諸国）の諸もろの小乗の寺には、賓頭盧を以て上座と爲し、諸もろの大乗の寺には、文殊師利を以て上座と爲す」と。

＊

○『梵網經法藏疏』［一ノ十四丈］云…以文殊師利爲上座＝唐の法蔵撰『梵網経菩薩戒本疏』巻一（T40-605b）に全く同文が見える。

＊

④叡山光定法師『一心戒文』［上ノ十四丈］云、凡佛寺有三。一者一向大乗寺、初修業菩薩僧所住寺。二者一向小乗寺、一向小乗律師所住寺。三者大小兼行寺、久修業菩薩僧所住寺。凡佛寺上座、置大小二座。一者一向大乗寺、置文殊師利菩薩、以爲上座。二者一向小乗寺、置賓頭盧和上、以爲上座。三者大小兼行寺、置文殊與賓頭盧兩上座。小乗布薩日、賓頭盧爲上座、坐小乗次第。大乗布薩日、文殊爲上座、坐大乗次第。『普通廣釋』［中ノ五丈］引惠苑。

＊

叡山の光定（こうじょう）法師の『一心戒文』に云く、「凡そ佛寺に三つ有り。一つには一向大乗の寺、初修業の菩薩僧の所住の寺なり。二つには一向小乗の寺、一向小乗律師の所住の寺なり。三つには大小兼行の寺、久しく修業の菩薩僧の所住の寺なり。凡そ佛寺の上座に、大小二座を置く。一つには一向大乗の寺、文殊師利菩薩を置いて、以て上座と爲す。二つには一向小乗の寺、賓頭盧和上を置いて、以て上座と爲す。三つには大小兼行の寺、文殊と賓頭盧と兩の上座を置く。小乗の布薩（＝懺悔）の日には、賓頭盧を上座と爲して、小乗の次第に坐す。大乗の布薩の日には、文殊を上座と爲して、大乗の次第に坐す」と。

『普通廣釋』［中の五丈］に惠苑を引く。

＊

○叡山光定法師『一心戒文』［上ノ十四丈］云…坐大乗次第＝天台宗の僧である別当大師こと光定（七七九～八五八）撰『傳述一心戒文』巻上（T74-638a）に全く同文が見える。文末に「『普通廣釋』［中ノ五丈］引惠苑」とあるのは、本文中の「凡佛寺上座、置大小二座。一者一向大乗寺、置文殊師利菩薩、以爲上座。二者一向小乗寺、置賓頭盧和上、以爲上座。三者大小兼行寺、置文殊與賓頭盧兩上座」に相当する部分の文章である。具体的には、日本の安然（八四一～九一五？）撰『普通授菩薩戒広釈』巻中に、「惠苑云く、天竺国の法には、一向大乗の寺は、文殊を上座と為す。一向小乗の寺は、賓頭盧を上座と為す。大小兼行の寺は、文殊と賓頭盧と、共に以て上座とす（惠苑云、天竺国法、一向大乗寺、文殊為上座。一向小乗寺、賓頭盧為上座。大小兼行寺、文殊与賓頭盧、共以上座）」（T74-768a）とある。惠苑の典拠は未詳。

＊

⑤有迦葉爲聖僧。別源旨禪師『東歸集』［二一丈］和竺仙和尚賀太虚侍者侍聖僧韻偈云、子今勤侍大迦葉即能超宗還異目。

＊

迦葉を聖僧と爲すこと有り。別源の旨禪師（＝別源円旨・一二九四～一三六四）の『東歸集』［二一丈］に（ママ）「竺仙和尚（＝竺仙梵僊・一二九二～一三四八）、太虚侍者の聖僧に侍するを賀する韻を和する偈」に云く、「子（なん）ぢ今、大迦葉に勤侍す、即ち能く超宗、還（ま）た異目」と。

＊

○別源旨禪師東歸集［二一丈］和竺仙和尚賀太虚侍者侍聖僧韻偈云、子今勤侍大迦葉即能超宗還異目＝所引は、別源円旨『東帰集』（『五山文学全集』第一巻・p.771）に見える同題詩の第七、八句。「超宗異目」は越格底の境地に至った禅者を形容する言葉。『人天眼目』巻二「三種獅子」の第一として挙げられている（T48-307a）。

＊

⑥又『大休念禪師録』［六巻仏事ノ四丈］法源寺安奉聖僧佛事云、恭惟聖僧大迦葉尊者、意根滅盡、妙法開明。分寶華座於多子塔前、破金色顔於靈山會上。

＊

又た『大休の念禪師の録』［六巻仏事ノ四丈］「法源寺に聖僧を安奉する佛事」に云く、恭しく惟（おもんみ）れば聖僧大迦葉尊者、意根（＝六根の一つ）滅盡（めつじん）し、妙法（＝仏法）開明す。寶華の座を多子塔前（＝釈尊より摩訶迦葉への付法があった場所）に分かち、金色の顔を靈山會上に破す」と。

＊

○『大休念禪師録』［六巻仏事ノ四丈］法源寺安奉聖僧佛事云…破金色顔於靈山會上＝大休正念（一二一五～一二八九）の『念大休禅師語録』「法源寺安奉聖僧」（『大日本仏教全書』第九六巻 p.107）に同文が見える。

＊

⑦有須菩提爲聖僧。『大休念禪師録』［六巻仏事ノ四丈］禪興寺聖僧點眼佛事云、恭惟靈山會上空生尊者、達法不二、解空第一。

＊

須菩提を聖僧と爲（す）ること有り。『大休の念禪師録』［六巻仏事ノ四丈］「禪興寺聖僧點眼の佛事」に云く、「恭しく惟れば靈山會上空生尊者、法の不二に達し、解空（げくう）第一」と。

＊

○大休念禪師録［六巻仏事ノ四丈］禪興寺聖僧點眼佛事云…解空第一＝同じく『念大休禅師語録』「禪興寺聖僧點眼」（『大日本仏教全書』巻九六・p.106）に同文が見える。

＊

⑧日本黄檗山萬福寺僧堂、安布袋和尚局聖僧、未聞其有所據。

＊

日本の黄檗山萬福寺の僧堂、布袋和尚を安じて聖僧と為す。未だ其の據の所有ることを聞かず。

（池田丈明）

【二三六】僧形文殊（そうぎょうのもんじゅ）

①舊説［勅修鈔十四ノ七丈］云、古東福寺有一維那。適見聖僧像背、貼紙題云、陳如尊者。告衆云、戒臘簿、宜改書陳如尊者。老僧議云、曾文殊大士爲簿中上座、既經百年餘。而今不可遽改。遂止。止此。忠曰、此蓋不知僧形文殊、妄題爲憍陳如歟。然則固不違戒薄耳。智度論［卅四ノ十四丈］云、釋迦法中、無別菩薩僧。是故文殊彌勒等、入聲聞衆次第而坐。止此。故大乘寺文殊爲聖僧、其像僧形不異聲聞衆矣。夫内證大乘法、外現聲聞形。内外相兼。方稱圓備。

＊

『舊説』［勅修鈔十四の七丈］に云く、「古え東福寺に一（ひと）りの維那有り。適（たま）たま聖僧の像背を見るに、紙を貼して題して云く、『陳如尊者』と。衆に告げて云く、『戒臘簿（＝僧侶の位次を記した帳簿）、宜しく改めて陳如尊者と書くべし』と。老僧議して云く、『曾て文殊大士を簿中の上座と爲して、既に百年餘を經たり。而るに今遽（にわ）かに改む可からず』と。遂に止む」と。〈此こに止まる。〉忠曰く、「此れ蓋し僧形の文殊なることを知らず、妄りに題して憍陳如と爲すか。然らば則ち固（も）とより戒薄に違わざるのみ。『智度論』［卅四の十四丈］に云く、『釋迦法中（＝仏教の教えの中）に、別の菩薩僧無し。是の故に文殊彌勒等、聲聞衆に入りて次第に坐す』と。〈此に止まる。〉故に大乘の寺に文殊を聖僧と爲し、其の像僧形にして聲聞衆に異ならず。夫れ内に大乘の法を證し、外に聲聞の形を現す。内外相（あい）兼ねて、方に圓備と稱す」と。

＊

○舊説［勅修鈔十四ノ七丈］云…遂止。止此＝無著禅師書き入れの『勅修百丈清規抄』巻一四の七丁裏に、「旧東福寺テ維那カ、聖僧ノ背ニヲシ紙ノアルヲ見出シタレバ、陳如尊者トアルトテ、陳如尊者トアルホドニ陳如尊者ト書クヘキハナントアラウゾト問フホドニ、ソレハサアレトモ、早年（ハヤ）久ク百年ハカリ先カラ文殊大士ト書ルヲ、改メ事ハ无用ト云ウタ叟カアルト云ウソ」とある。『禅林象器箋』と体裁を揃えるために、同意の漢文に改めたものであろう。憍陳如は、鹿野園に於いて初転法輪の教化を受けた釈迦の最初の弟子。釈迦最初の弟子である故に僧堂において、聖僧と為し、堂内の首とされ、戒臘簿の第一番にその名を記された。詳しくは、【二三八】「憍陳如」を参照。

○智度論［卅四ノ十四丈］云＝『大智度論』巻三四に「弥勒菩薩、文殊師利菩薩等の如きは、釈迦文仏（しゃかもんぶつ）に別の菩薩僧無きを以ての故に、声聞僧の中に入りて次第に坐す（如弥勒菩薩、文殊師利菩薩等、以釈迦文仏無別菩薩僧、故入声聞僧中次第坐）」（T25-311c）とある。尚、この『大智度論』の文章は、既に【二三五】「聖僧」②の注にも引用されている。

②　忠曰、東福寺聖僧、僧形文殊大士、披袈裟、手結定印。

＊

忠曰く、「東福寺の聖僧、僧形の文殊大士は、袈裟を披して、手に定印を結ぶ」と。

③宋高僧傳［一ノ十六丈〇六学五ノ廿九丈］興善寺不空傳云、大暦四年冬、空奏天下食堂中置文殊菩薩、爲上座。制許之。此蓋慊憍陳如。是小乘教中始度故也。

*

『宋高僧傳』「一の十六丈○『六学』五の廿九丈」興善寺の不空の傳に云く、「大暦四（七六九）年の冬、空（＝不空）天下の食堂の中に文殊菩薩を置きて、上座と爲んと奏す。制して之を許す。此れ蓋し憍陳如を慊ずとするなり。是れ小乘の教中に始めて度するが故えなり」と。

*

○宋高僧傳［一ノ十六丈○六学五ノ廿九丈］興善寺不空傳云…是小乘教中始度故也＝『宋高僧伝』巻一「唐京兆大興善寺不空伝」（T50-713a）に同文が見える。【二三五】「聖僧」②の注に既に言及がある。［六学五ノ廿九丈］には、夢堂曇噩撰『六学僧伝』巻五に、「四年、請自今於天下僧堂中、奉文殊菩薩、為上座。蓋憍陳如、雖先度、而特小乘故爾。制曰可。」（Z133-512a）とある。

④不空三藏表制集第二巻廿丈○又学生式ノ十二丈○又谷響集三ノ卅丈○貞元録十六ノ七丈同天下寺食堂中、置文殊上座制云、大聖文殊師利菩薩、右京城大德、特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空等奏、忝跡緇門、久修梵行、習譯聖典、頗悟玄〈一本作空〉門。大聖文殊師利菩薩、大乘密教、皆周流演。今鎮在臺山、福滋兆庶。伏惟寶應元聖文武皇帝陛下〈代宗也〉、德合乾坤、明竝日月。無疆之福、康我生人。伏望自今已後、令天下、食堂中、於賓頭盧上、特置文殊師利形像、以爲上座。詢諸聖典、具有明文。僧祇如來、尚承訓旨。凡出家者、固合摳衣。普賢觀音、猶執拂而爲侍、聲聞縁覺、擁篲而居後。斯乃天竺國皆然。非僧等鄙見。仍請永爲恒式。祠部牒云、牒。奉敕大聖文殊師利菩薩法王之子、威德特尊。爲諸佛之導師、洗羣生之心目。康我兆庶、是拯無邊。不有尊崇、人何瞻仰。今京城大德、懇茲申奏。雅合聖典、所請宜依。牒至準敕。故牒。大暦四年、十二月十九日牒。

*

不空三藏（七〇五～七七四）の『表制集』「第二巻廿丈○又た『学生式』の十二丈○又た『谷響集』三の卅丈○『貞元録』十六の七丈同じ」「天下の寺の食堂の中に、文殊を置きて上座とする制」に云く、「大聖文殊師利菩薩、右ぎ京城の大德、特進試鴻臚卿大興善寺の三藏沙門大廣智不空等奏すらく、『跡を緇門（＝仏門）に忝うして、久しく梵行を修し、聖典を習譯して、頗る玄〈一本は空に作る〉門を悟る。大聖文殊師利菩薩は、大乘密教、皆な周く流演す。今、鎮（＝じっと）して臺山（＝五台山）に在りて、福、兆庶（＝多くの民）を滋おす。伏して惟れば寶應元聖文武皇帝陛下〈代宗なり〉、德は乾坤（＝天地）に合ない、明は日月に竝べり。無疆（＝限りない）の福、我が生人（＝人民）を康んず。伏して望むらくは今自り已後、天下に令して、食堂の中に、賓頭盧の上に於いて、特に文殊師利の形像を置きて、以て上座と爲ん。諸れを聖典に詢うに、具に明文有り。僧祇（＝阿僧祇・無数の）の如來すら、尚お訓旨（＝教え・導き）を承く。凡そ出家の者、固とに合に衣を摳む（＝拝趨する）べし。普賢・觀音も、猶お拂を執りて侍と爲り、聲聞・縁覺も、篲を擁して（＝箒を持って掃き清める・人を敬うこと）後に居す。斯れ乃ち天竺國、皆な然り。僧等が鄙見に非ず。仍って請う、永く恒式（＝常に従うべき形式）と爲んことを』と。祠部（＝礼制を司る役所）の牒（＝下の官吏が上官に上る公文）に云く、『牒す。敕を奉る大聖文殊師利菩薩法王の子は、威德特尊なり。諸佛の導師爲りて、羣生の心目（＝意識と眼識）を洗う。我が兆庶を康んじ、是れ無邊を拯う。尊崇有らずんば、人何ぞ瞻仰せん。今、京城の大德、懇ろに茲に申奏す。雅さに聖典に合す、請う所、宜しく

依るべし。牒至らば敕に準ぜよ。故(ことさ)らに牒す。大暦四(七六九)年、十二月十九日牒す』と」と。

＊

○不空三藏表制集第二巻廿丈○又学生式ノ十二丈○又谷響集三ノ卅丈○貞元録十六ノ七丈同」天下寺食堂中、置文殊上座制云…十二月十九日牒＝唐・釈円照集『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』巻二に見える、「天下寺食堂中置文殊上座、制一首」(T52-837a~b)から、ほぼそのままの引用。『表制集』では、「祠部牒云」を「中書門下、牒祠部」に、「牒至準敕」を「牒至准敕」に作る。その他、典拠として列挙されているうち、[又学生式ノ十二丈]とあるのは、最澄撰『山家学生式(さんけがくしょうしき)』の「天台法華宗年分度者回小向大式(てんだいほっけしゅうねんぶんどしゃえしょうこうだいしき)」に、「凡そ仏寺の上座に大小の二座を置く。一には、一向大乗寺、文殊師利菩薩を置きて、以て上座と為す。二(ふたつ)には、一向小乗寺、賓頭盧和尚を置きて、以て上座と為す。三には大小兼行寺。文殊と賓頭盧と、両の上座を置く。小乗の布薩の日は、賓頭盧を上座と為し、小乗の次第に坐し、大乗布薩の日、文殊を上座と為し、大乗の次第に坐す。此の次第坐は、此の間に未だ行われざるなり(凡仏寺上座、置大小二座。一者一向大乗寺。置文殊師利菩薩、以為上座。二者一向小乗寺。置賓頭盧和尚、以為上座。三者大小兼行寺。置文殊与賓頭盧、両上座。小乗布薩日、賓頭盧為上座、坐小乗次第、大乗布薩日、文殊為上座、坐大乗次第。此次第坐、此間未行也)」(T74-624c~625a)とある。また、[又谷響集三ノ卅丈」とあるのは、真言僧・泊如運敞(はくにょうんしょう)(一六一四~一六九三)が記した『寂照堂谷響集』巻三に、「客、食堂に文殊を上座と為す因縁を問う(客問食堂文殊為上座因縁)」(智山全書刊行会『智山全書』十一・一九六七・p.73。『智山全書』は元禄二年・洛陽書林、中野宗左衛門・前川茂右衛門刊の影印で、当該個所は道忠の指す丁数と同じ)に答える形で、『表制集』が引用されている。『表制集』とほぼ同文であるが、道忠が「玄門」の「玄」の字について「一本作空」とするのは、この『谷響集』に拠る。また、無著禅師の『表制集』からの引用文が、典拠の原文と異なっている二個所は、『谷響集』も同様に異なっており、無著禅師は、引用に際して『谷響集』から又引きをしたと考えられる。また、この『谷響集』には、黄檗僧の南源性派(なんげんしょうは)や高泉性激(こうせんしょうとん)が序を寄せている。[貞元録十六ノ七丈]＝唐・円照『貞元新定釈教目録』巻一六(T55-887b~c)に『表制集』と同文あり。

(瀧瀬尚純)

【二三七】賓頭盧

①或[黙公]曰、律宗聖僧、不立文殊。而用賓頭盧。其説言、文殊已取涅槃。賓頭盧現在世[珠林五十四ノ廿丈左]。故立以爲聖僧。

＊

或るひと[黙公なり]曰く、「律宗の聖僧(しょうそう)に、文殊を立てずして、賓頭盧(びんずる)を用(もち)う。其の説に言く、『文殊は已に涅槃を取れり。賓頭盧は現に世に在り[珠林五十四の廿丈左]。故に立てて以って聖僧と爲す』と」と。

＊

○或[黙公]曰、律宗聖僧、不立文殊。而用賓頭盧。其説言、文殊已取涅槃。賓頭盧現在世[珠林五十四ノ廿丈左]。故立以爲聖僧＝「公」は不詳。「珠林五十四ノ廿丈左」の部分は、『法苑珠林』巻四二に「賓頭盧羅漢聖人、現在不入涅槃」(T53-611a)とあるのを指す。文中【二三五】「聖僧」・【二二六】「文殊普賢」・【二三六】「僧形文殊」は、それぞれ『象器箋』に立項されている。

②釋氏要覧[下ノ卅三丈]云、傳云、中國僧寺立鬼廟。次立伽藍神廟。次立賓頭盧廟。即今堂中聖僧也。始因道安法師夢一胡僧頭白眉長。語安云、可時設食。後十誦律至。惠遠方知、和尚所夢、即賓頭盧也。於是立座飯之。寺寺成則。法苑[五十四巻十六丈]云、聖僧元無形像。至宋泰初末、正勝寺僧法願、正喜寺僧法鏡等、始圖形像矣。今堂中聖僧、多云是憍陳如非也。縁經律、不令爲立廟故。不赴四天供故。又安法師夢、是賓頭盧故。

＊

『釋氏要覧』［下の卅三丈］云く、「傳に云く、『中國の僧寺に鬼廟を立つ。次に伽藍神の廟を立つ。次に賓頭盧の廟を立つ』と。即ち今の堂中の聖僧なり。始め道安法師の、一りの胡僧の頭は白く眉の長きを夢みるに因る。安（＝道安）に語げて云く、『時に食を設く可し』と。後に『十誦律』至る。惠遠（＝慧遠）方めて知る、和尚の夢みる所は、即ち賓頭盧なりと。是こに於いて座を立てて之に飯す。寺寺則と成す。『法苑』［五十四卷十六丈］に云く、『聖僧は元と形像無し。宋の泰初の末に至りて、正勝寺の僧法願、正喜寺の僧法鏡等、始めて形像を圖す』と。今、堂中の聖僧は、多く『是れ憍陳如なり』と云うは非なり。經律に縁るに、爲に廟を立てしめざるが故に。四天の供に赴かざるが故に。又た安法師の夢みるは、是れ賓頭盧なるが故に」と。

＊

○釈氏要覧…又安法師夢、是賓頭盧故＝『釈氏要覧』巻下「伽藍立廟」（T54-303b）に同文が見える。但し、「即今堂中聖僧也」以下、文末の「是賓頭盧故」までは、本文ではなく割注である。文中、「道安法師」は、釈道安（三一四～三八五）のこと。五胡十六国時代の僧であり、中国仏教の基礎を築いた大功労者。また「十誦律」の部分は、『十誦律』巻三七（T23-268c~269b）に、比丘が托鉢や食事に用いるべき鉢の材質に因む賓頭盧の逸話が記載されるが、本文と必ずしも話題が一致するものではない。「惠遠」は、道安の弟子である釈慧遠（三三四～四一六）のこと。一般には「浄影寺の慧遠」と区別して「廬山の慧遠」と呼ばれ、『十誦律』の翻訳及び普及にも尽力したという。『梁高僧伝』巻六（T50-357c）他に立伝される。文中の引用である「法苑［五十四卷十六丈］云…始圖形像矣」の部分は、『法苑珠林』巻四二に「尚宋泰始之末、正勝寺釈法願、正喜寺釈法鏡等、始図画聖僧列坐標擬」（T53-609c）とあるのを指す。尚、【二〇】「伽藍」・【二三八】「憍陳如」は『象器箋』に立項されている。

③梁高僧傳道安傳［五ノ七丈。谷響集三ノ四丈引。編年通論三ノ三丈］云、安常注諸經、恐不合理。乃誓曰、若所説不甚遠理、願見瑞相。乃夢見梵道人頭白眉毛長。語安云、君所注經、殊合道理。我不得入洹泥、住在西域。當相助弘通、可時時設食。後十誦律至。遠公乃知。和尚所夢賓頭盧也。於是立座飯之。處處成則。

＊

『梁高僧傳』［五の七丈。『谷響集』三の四丈に引く。『編年通論』三の三丈］の「道安傳」に云く、「安、常に諸經を注して、理に合なわざらんことを恐る。乃ち誓いて曰く、『若し説く所、甚だしくは理に遠からずんば、願わくば瑞相を見せ』と。乃ち夢に梵道の人の、頭は白く眉毛の長きを見る。安に語げて云く、「君が注する所の經、殊に道理に合う。我、泥洹に入ることを得ず、西域に住在す。當に相い助けて弘通すべし、時時に食を設く可し』と。後に『十誦律』至る。遠公（＝慧遠）乃ち知る、和尚の夢みる所は賓頭盧なることを。是こに於いて座を立てて之に飯す。處處則を成ず。

＊

○梁高僧傳［五ノ七丈。谷響集三ノ四丈引。編年通論三ノ三丈］道安傳…處處成則＝慧皎撰『梁高僧伝』巻五の「釈道安伝」（T50-353b）からそのままの引用。無著の書き込みにもある通り、その他、『寂照堂谷響集』巻三「賓頭盧像安食堂縁」（『大日本仏教全書』第一四九冊・p.41）、『隆興編年通論』巻三「東晋・寧康元年・法師道安」条（X75-121b）にも道安と賓頭盧の関係への言及がある。また、『法苑珠林』巻一六（T53-407a）に同文が見える。

（徳重寛道）

④日本南都、大乘寺安賓頭盧。　南京招提寺覺盛撰菩薩戒通受遣疑鈔［十八丈］云、問、文殊上座。尤順大乘。由此大唐不空三藏、準天竺例、奏於玄宗皇帝。帝好其説、制可。我

朝諸寺、何不然耶。答、夫於賓頭盧上座者、如來教敕、聖教有文。漢地諸寺、不空以前、渡天歸朝聖人賢哲、更無異論、經數百歲。其寺豈皆小乘寺耶。其戒豈皆小乘戒耶。況不空奏敕制以後、大唐諸寺、始學大乘、始受大戒哉。若許爾者、可有多疑。若不爾者、何由此事、知寺大小耶。明知、不空三藏、新製文殊上座。雖無教文、覺母之德、獨超衆聖。出家菩薩、其形相順。唐國臺山、殊有緣故、食時常禮、爲消信施、窺於天氣、安置之。彼奏狀文有明文者、出家菩薩、滅罪生善、超他之文乎。非謂有明上座文。若不爾者、顯戒論中、何不引之。其所引、但是文殊般涅槃經。彼經無上座文。若雖有教文、澄師不得之、北衆祖師、所見何狹耶。就中、彼狀賓頭盧上、安文殊像〈云云〉。是非並安舊上座耶。如山門義、則當于唐國諸寺、不空以後、大小兼行寺也。已安二上座故、何以彼爲證、立于唯大寺哉。但彼奏狀、謂天竺諸國皆然者、爲西域三寺傳教之證。豈並皆安文殊上座耶。自證文中、似有相違。蓋天竺諸寺、亦上代多分、信聖教文、安賓頭盧、末代少分、雖無教證、歸依覺母、副置文殊。漸遍諸國。不空見之、云爾乎。若然、則南都依教明文、順釋迦法。雖大乘寺、安賓頭盧、有何失耶。是即化身國土之法、以聲聞外、無別僧故、雖大乘衆、表其相也。文殊在世、既入聲聞、次第而坐。何至滅後、私以文殊、隔聲聞耶。上座文殊、既自如是。何況於其下座凡夫耶。賓頭盧設、實類聲聞、住聲聞位、尚可如是。何況既廻心菩薩。何況既是大聖應化哉。

＊

日本の南都、大乘寺にも賓頭盧を安く。　南京の招提寺覺盛の撰する『菩薩戒通受遣疑鈔』［十八丈］に云く、「問う、『文殊を上座とす。尤も大乘に順ぜり。此れに由り大唐の不空三藏、天竺の例に準じて、玄宗皇帝に奏す。帝、其の説を好みて、制して可す。我が朝の諸寺、何ぞ然らざらんや』と。答う、『夫れ賓頭盧の上座に於いては、如來の教敕にして、聖教に文有り。漢地の諸寺、不空以前、渡天歸朝の聖人賢哲、更に異論無くして、數百歲を經たり。其の寺、豈に皆な小乘の寺ならんや。其の戒、豈に皆な小乘の戒ならんや。況や不空奏して敕制の以後、大唐の諸寺、始めて大乘を學し、始めて大戒を受けんや。若し爾りと許さば、多くの疑い有る可し。若し爾らざれば、何ぞ此の事に由りて、寺の大小を知らんや。明らかに知んぬ、不空三藏、新たに文殊上座を製することを。教文無しと雖ども、覺母の德、獨り衆聖に超えたり。出家の菩薩にして、其の形相順ず。唐國の臺山、殊に緣有るが故に、食時に常に禮して、信施を消すが爲に、天を窺いて、之を安置す。彼の奏狀の文に明文有らば、出家の菩薩、滅罪生善、他に超ゆるの文か。明なる上座の文有りと謂うに非ず。若し爾らずんば、『顯戒論』の中に、何ぞ之を引ざる。其の引く所は、但だ是れ『文殊般涅槃經』なり。彼の經に上座の文無し。若し教文有りと雖ども、澄師（＝最澄）、之を得ずとならば、北衆の祖師、所見何ぞ狹きや。中に就いて、彼の狀には賓頭盧の上に、文殊の像を安ずと。〈云云〉。是れ舊との上座に並べ安ずるに非ずや。山門の義の如くんば、則ち唐國の諸寺の、不空（＝不空三藏、七〇五～七七四）以後の、大小兼行の寺に當つるなり。已に二上座を安ずるが故に、何ぞ彼れを以て證と爲して、唯大の寺に立つるや。但だ彼の奏狀に、『天竺の諸國、皆な然り』と謂うは、西域三寺の傳教の證と爲す。豈に並びに皆な文殊の上座を安ぜんや。自らの證文の中に、相違有るに似たり。蓋し天竺の諸寺も、亦た上代多分は、聖教の文に信せて、賓頭盧を安じ、末代の少分は、教證無しと雖ども、覺母に歸依して、文殊を副え置く。漸く諸國に遍し。不空之を見て、爾か云うか。若し然らば、則ち南都、教の明文に

依り、釈迦の法に順う、大乗の寺と雖ども、賓頭盧を安ずるに、何の失か有らんや。是れ即ち化身國土の法、聲聞の外に、別の僧無きを以ての故に、大乗の衆と雖も、其の相を表わすなり。文殊の在世、既に聲聞に入りて、次第にして坐す。何ぞ滅後に至りて、私に文殊を以て、聲聞に隔つるや。上座の文殊、既に自ら是くの如し。何ぞ況や其の下座の凡夫に於いてをや。賓頭盧、設い實類の聲聞にして、聲聞位に住すとも、尚お是くの如くなる可し。何ぞ況や既に廻心の菩薩なるをや。何ぞ況や既に是れ大聖の應化なるをや」と。

＊

○問、文殊上座…＝文中の引用は、鎌倉時代中期の律宗の僧、覚盛（一一九四～一二四九年）の記した『菩薩戒通受遣疑鈔』（T74-52b~c）を踏まえるが、一部増幅削除改変増幅されている（〈　〉は増幅された部分、《　》は削除された部分、〈＝　〉は変更された部分）。「問、文殊上座、尤順大乗。由此大唐不空三蔵准〈＝準〉天竺例、奏於玄宗皇帝《之日》。帝好其説、《被勅置之、》〈制可〉。我朝諸寺、何不然耶。答、夫於賓頭盧上座者、如来教勅。聖教有文。漢地諸寺、不空以前、渡天帰朝聖人賢哲、更無異論、経数百歳。其寺豈皆小乗寺耶。其戒豈皆小乗戒耶。況不空奏被勅以後、大唐諸寺、始学大乗、始受大戒哉。若許爾者、可有多疑。若不爾者、何由此事、知寺大小耶。明知、不空三蔵新製文殊上座。雖無教文、覚母之徳、独超衆聖。出家菩薩、其形相順、唐国臺山、殊有縁故、食時常拝〈＝禮〉、為消信施、窺於天気、安置之。彼奏状文、有明文者。出家菩薩、滅罪生善、超他之文乎。非謂有明上座文。若不爾者、顕戒論中、何不引之。〈其所〉引《之》、但引〈＝是〉文殊般涅槃経。彼経無上座文。〈若〉雖有教文、澄師不得者〈＝之〉、北衆祖師、所見何狭耶。就中、彼状賓頭盧上、安文殊像云云。是不〈＝非〉並置〈＝安〉旧上座也〈＝耶〉。如山門義《者》、〈則当于〉唐国諸寺不空以後、《当于》大小兼行寺哉〈＝也〉。已安二上座故、何〈以〉彼為証、立〈于〉唯大寺〈哉〉。但彼奏状〈謂〉、天竺諸国皆以〈＝皆〉然者、〈為〉西域三寺伝教為〈＝之〉証。豈並皆安文殊上座《耶》。自証文中、似有相違。天竺《之》諸寺、亦上代多分、任〈＝信〉聖教文、安賓頭盧、末代少分、雖無教文〈＝証〉、帰依覚母《有》副〈置〉文殊。《其事漸》漸遍《於》諸国、不空見之《云爾乎》。若爾〈＝然則〉南都依教明文、任〈＝順〉釈迦法。雖大乗寺、安賓頭盧、有何失耶。是即化身国土之法、以声門外無別僧故、雖大乗衆表其相也。文殊在世、既入声聞、次第而坐。何至滅後、私以文殊、隔声聞耶。上座文殊、自〈＝既〉既〈＝自〉如是。何況於其下座凡夫〈耶〉。賓頭盧設《雖》実類声聞住声聞位、尚〈可〉《以》如是。何況既廻心菩薩。何況既是大聖応化哉。」（T74-52b~c）尚、文中の『文殊般涅槃経』は、西晋の居士・聶道真が訳した『仏説文殊師利般涅槃経』（T14-480b）のこと。

（徳重寛道・丸毛俊宏）

⑤

法苑珠林［五十四ノ十六丈］云、賓頭盧爲樹提伽長者、現神通、坐取象牙杙上栴檀鉢。佛呵責。云何爲外道鉢。於未受戒人前現通。盡汝形、擯不得住閻浮提。賓頭盧如教。往化西瞿耶尼。閻浮四衆、思見、白佛。佛聽還、不聽涅槃。自誓、三天下、有請、悉赴。〈略鈔。又見罪責類擯出處。〉

＊

『法苑珠林』［五十四の十六丈］に云く、「賓頭盧、樹提伽長者の爲に、神通を現じて、坐ながらにして象牙杙上の栴檀の鉢を取る。佛、呵責したもう、『云何ぞ外道の鉢の爲に、未受戒の人の前に於いて通を現ずる。汝が形を盡くすまでに、擯けて閻浮提に住することを得ざれ』と。賓頭盧、教えの如くにして、往きて西瞿耶尼（＝須弥山の周囲にある四洲中の西方にある大洲）を化す。閻浮の四衆、見んことを思いて、佛に白す。佛、還ることを聽して、涅槃を聽さず。自ら誓うらく、『三天下、請する有らば、悉く赴かん』と」と。〈略鈔なり。又た「罪責類」の「擯出」の處に見ゆ。〉

＊

○法苑珠林［五十四ノ十六丈］云…悉赴。〈略鈔、又見罪責類擯出處。〉＝『法苑珠林』巻四二に、「如昔有

樹提伽長者、造旃檀鉢著絡囊中、懸高象牙杙上、作是言。若沙門婆羅門、不以梯杖能得者即与之。諸外道知欲現神通、無智挑頭而去。賓頭盧聞是事、問目連言、実爾不。答言、実爾。汝師子吼中第一、便往取之。其目連懼佛教不肯取。賓頭盧即往其舎入禅定、便於座上申手取鉢。依四分律、当時坐於方石縦広極大、逐身飛空、得鉢已還去。仏聞呵責、云何比丘為外道鉢、而於未受戒人前現神通力。従今尽形擯汝、不得住閻浮提。於是賓頭盧如仏教勅、往西瞿耶尼、教化四衆広宣仏法。閻浮提四部弟子思見賓頭盧、白仏。佛聴還坐。現神足故不聴涅槃。勅令為末世四部衆作福田。其亦自誓、三天下有請悉赴」（T53-609c~610a）とあり、文末の割註に示す様に、当該箇所を略鈔している。また、本書の巻一二「第十五類罪責門」にある【九三九】「擯出」を参照。

⑥ 雑阿含經［廿三ノ三十丈］云、賓頭盧告阿育王言、世尊住舎衞國、五百阿羅漢俱。時給孤獨長者女、適在於富樓那跋陀那國。彼女請佛及比丘僧、比丘各乘空而往。我爾時、以神力、合大山、往彼受請。時世尊責我。汝那得現神足如是。我今罰汝。常在世不得取涅槃。護持我正法、勿令滅也。

＊

『雑阿含經』［廿三の三十丈］に云く、「賓頭盧、阿育王に告げて言く、『世尊、舎衞國に住し、五百の阿羅漢と俱なり。時に給孤獨長者の女、適たま富樓那跋陀那國に在り。彼の女、佛及び比丘の僧を請い、比丘、各おの空に乗じて往く。我れ爾の時、神力を以て、大山を合し、彼こに往きて請を受く。時に世尊、我れを責むらく、「汝、那ぞ神足を現し、是くの如きことを得たる。我れ今、汝を罰す。常に世に在りて、涅槃を取るを得ざれ。我が正法を護持して、滅せしむること勿れ」と』と」と。

＊

○雑阿含經［廿三ノ三十丈］云…勿令滅也＝文中の引用は、次の『雑阿含経』巻二三の一段を踏まえるが、一部削除改変されている（《　》は削除された部分、〈＝　〉は変更された部分）。「〈＝又復、〉世尊住舎衞国、五百阿羅漢俱。時、給孤独長者女、適在於富樓那跋陀那国。《時、》彼女請仏及比丘僧。《時、諸》比丘各乗空而往《彼》。我爾時以神力合大山、往彼受請。時、世尊責我、汝那得現神足如是。我今罰汝、常在《於》世、不得取涅槃、護持我正法、勿令滅也。」（T2-170a）

⑦ 可知、賓頭盧留身、非但取鉢事。

＊

知る可し、賓頭盧、身を留むるは、但だに鉢を取る事のみに非ず。

⑧ 藏中［百七十六套］有請賓頭盧經一卷。宋三藏慧簡譯。〈『法苑珠林』［五十四ノ十七丈］受請篇引全文。〉

＊

藏中［百七十六套］に『請賓頭盧經一卷』有り。宋の三藏慧簡、譯す。〈『法苑珠林』［五十四の十七丈］「受請篇」に全文を引く。〉

＊

○藏中［百七十六套］有請賓頭盧經一卷。宋三藏慧簡譯。〈『法苑珠林』［五十四ノ十七丈］受請篇引全文。〉＝劉宋の沙門、釈慧簡が訳した『請賓頭盧法』一巻（T32-784b~c）を指す。なお、割り注には『法苑珠林』巻五四に全文の引用があるとするが、同所には見えない。同書の巻四二（T53-610a~b）に、『請賓頭盧経』を引用し全文を載せるが、両者には若干の文字の相違が見られる。

⑨ 又南山感通傳、説請賓頭盧法。

＊

又た南山の『感通傳』に、賓頭盧を請ずる法を説く。

＊

○又南山感通傳、説請賓頭盧法＝南山律宗を開いた道宣（五九六～六六七）の著述である『律相感通伝』一巻𠀋にある、以下に始まる一連の箇所を指す。「今時有作賓頭盧聖僧像、立房供養、亦是一途」（T45-876b~c）。また、『道宣律師感通録』一巻にも同文の記述が見られる（T52-437b）。

⑩法住記［三丈］云、第一尊者、名賓度羅跋囉惰闍。與自眷屬、千阿羅漢、多分住在西瞿陀尼洲。

＊

『法住記』［三丈］に云く、「第一の尊者、賓度羅跋囉惰闍と名づく。自らの眷屬（＝随行者）、千の阿羅漢と、多分は西瞿陀尼洲（＝須弥山の周囲にある四洲中の西方にある大洲）に住在す」と。

＊

○法住記［三丈］云…多分住在西瞿陀尼洲＝『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』一巻に、「第一尊者名賓度羅跋囉惰闍、…（中略）…、第一尊者与自眷屬千阿羅漢。多分住在西瞿陀尼洲。」（T49-13a）とある。

（丸毛俊宏）

【二三八】憍陳如

①敕修清規［下二ノ二丈］夏前草單式云、威音王戒、陳如尊者、堂頭和尚。

＊

『敕修清規』［下二の二丈］「夏前の草單式」に云く、「威音王戒、陳如尊者、堂頭和尚」と。

＊

○敕修清規［下二ノ二丈］夏前草單式云…堂頭和尚＝『勅修百丈清規』巻七「夏前出草単」条（T48-1150b）に同文が見える。「草単式」は戒臘牌を草すること。【一二四二】「草単」、【四一】「堂頭」は『象器箋』に立項されている。

②　忠曰、僧堂聖僧、用憍陳如。故書戒臘、此爲首也。

＊

忠曰く、「僧堂の聖僧は、憍陳如を用ゆ。故に戒臘を書するに、此れを首と爲すなり」と。

＊

○文中、【五〇】「僧堂」、【二三五】「聖僧」は、それぞれ『象器箋』に立項されている。

③　舊説［鈔十ノ十七丈］曰、天竺僧寶、憍陳如爲始。釋迦法中、出家之椎輪也。［鈔三ノ八丈］憍陳如等、得度不用剃刀。佛一呼善來、則鬚髮自落、得具足戒。此名見諦戒。袈裟自在肩、鉢盂自在手。威儀具足、不勞造作。此名善來得度矣。其用剃刀、落髮度僧、以阿難爲始。

＊

『舊説』[『鈔』十の十七丈]に曰く、「天竺の僧寶は、憍陳如を始めと爲す。釋迦法中、出家の椎輪なり」と。[『鈔』三の八丈]「憍陳如等は、得度するに剃刀を用いず。佛、一たび『善來』と呼べば、則ち鬚髪自ら落ちて、具足戒を得。此れを見諦戒と名づく。袈裟自ら肩に在り、鉢盂自ら手に在り。威儀具足して、造作を勞せず。此れを善來得度と名づく。其の剃刀を用いて、落髪度僧するは、阿難を以て始めと爲す」と。

＊

○『舊説』[鈔十の十七丈]曰…出家之椎輪也＝不詳。『旧説』とは無著禅師書き入れの『勅修百丈清規抄』(駒沢大学電子貴重図書でネット上に公開)を指すと思われるが、該当丁数には見当らない。

○[鈔三ノ八丈]＝無著書き入れの『勅修百丈清規抄』巻三の八丁裏に、「仏ノ一タビ呼テ善来比丘トオホセラルレハ、鬚髪自ラ落チ、具足戒ヲ得タリ。亦タ見諦戒ト名ク。袈裟肩ニ在リ、鉢盂手ニ在リ、威儀具足ソ。剃刀ニテソル事ハ、阿難カラ始タソ」とある。文中、「見諦戒」は、『釈門正統』巻一「釈迦牟尼仏」条に「及一呼善来、須髪自落、得具足戒。亦名見諦戒」(X75-256a)とある。阿難は【二二七】「迦葉阿難」を参照。

⑤

忠曰、陳如度僧之始、則臘最高於釋迦法中可知。崇之爲僧堂聖僧、無復間然矣。

＊

忠曰く、「陳如、度僧の始め、則ち臘、最も釋迦法中に於いて高きこと、知る可し。之を崇めて僧堂の聖僧と爲る、復た間然無し」と。

⑥

編年通論[二十ノ十四丈]云、天台拾得。嘗掌供獻、於憍陳如像前、訶斥之曰、小根敗種、何爲者耶。寺僧深怪之、不使直供。

＊

『編年通論』[二十の十四丈]に云く、「天台の拾得、嘗て供獻を掌る。憍陳如の像の前に於いて、之を訶斥して曰く、『小根敗種、何爲れの者なりや』と。寺僧、深く之を怪みて、供に直(＝当直)せしめず」と。

＊

○編年通論[二十ノ十四丈]云＝祖琇撰『隆興仏教編年通論』巻二〇に「拾得嘗掌供献。至食時、対仏而食。又於憍陳如像前、訶斥之曰、『小根敗種、何為者耶』。寺僧深怪之、不使直供」(X75-208c)とある。

⑦

忠曰、蓋天台聖僧、用憍陳如也。

＊

忠曰く、「蓋し天台の聖僧は、憍陳如を用うるなり」と。

⑧

又見前聖僧處。

＊

又た前の聖僧の處に見ゆ。

＊

○又見前聖僧處＝三条前にある巻三「第五類霊像門 上」の【二三五】「聖僧」を参照。

⑨普燈録[八ノ廿八丈]尼慈鑑大師文照章云、上堂〈云云〉、老胡四十九年説夢、即且止。僧

堂裏憍陳如上座、爲你諸人舉覺底、還記得麼。良久曰、惜取眉毛好。

＊

『普燈録』［八の廿八丈］「尼慈鑑大師文照」の章に云く、「上堂〈云云〉、『老胡四十九年夢を説くことは、即ち且らく止く。僧堂裏の憍陳如上座、你ら諸人の爲に舉覺する底、還って記得するや』と。良久して曰く、『眉毛を惜取せば好し』と」と。

※「還」の字は現在の語録では「はた」と読んでいますが、無著禅師の時代は「かえって」です。

＊

○普燈録［八ノ廿八丈］尼慈鑑大師文照章…惜取眉毛好＝『嘉泰普灯録』巻八（X79-341a）、甘露伝祖仲宣禅師法嗣の平江府妙湛尼慈鑑大師の上堂の語として同文が見える。

（徳重寛道）

稱呼類

【二六八】國師

①祖庭事苑［七ノ一丈］云、西域之法、推重其人、外内攸同、邪正俱有。舉國歸依、乃彰斯號。聲教東漸、唯北齊高僧法常、齊主崇爲國師。國師之號、自常公始。陳隋之代、天台智顗、爲陳宣隋煬菩薩戒師。故時號國師。唐則天朝、神秀召入京師。及中睿玄、凡四朝、皆號爲國師。後有慧忠、肅代二朝、入禁中説法、亦號國師。元和中、敕署知玄、號悟達國師。若偏覇之國、則蜀後主賜右街僧録光業。爲祐聖國師。呉越、稱徳韶爲國師。見贊寧僧史。〈鈔畧僧史畧［中ノ四十丈］。而此文義明。故引此不引彼。〉

＊

『祖庭事苑』［七の一丈］に云く、「西域の法、其の人を推重することは、外内の同じくすずる攸にして、邪正俱に有り。國を舉げて歸依すれば、乃ち斯の號を彰わす。聲教東漸して、唯だ北齊の高僧法常あり、齊主崇めて國師と爲す。國師の號、常公自り始まる。陳隋の代、天台の智顗、陳の宣、隋の煬の菩薩の戒師と爲る。故に時に國師と號す。唐の則天の朝に、神秀召れて京師に入る。中・睿・玄に及ぶまで、凡そ四朝、皆な號して國師と爲す。後に慧忠有り、肅・代の二朝、禁中に入りて説法し、亦た國師と號す。元和中に、敕して知玄を署して、悟達國師と號す。若し偏覇の國には、則ち蜀の後主、右街の僧録光業に賜わりて、祐聖國師と爲す。呉越は徳韶を稱して國師と爲す。贊寧の『僧史』に見ゆ」と。〈『僧史畧』［中の四十丈］を鈔畧す。而して此の文、義明らかなり。故に此れを引きて彼れを引かず。〉

＊

○祖庭事苑［七ノ一丈］云＝睦庵善卿撰『祖庭事苑』巻七「国師」条（X64-409b）に同文が見える。文末にある「賛寧僧史」は、賛寧撰『大宋僧史略』巻中「国師」条（T54-244c）を指す。

②忠曰、高麗國稱國尊。　高麗國華山曹溪宗麟角寺普覺國尊碑銘序云、國尊、諱見明、字晦然。詔住雲門寺。上曰、我先王、皆得釋門徳大者爲王師、徳又大者爲國師。今雲門和尚、道尊徳盛、行闔國尊師之禮。改國師爲國尊者、爲避大朝國師之號也。　忠曰、

大朝、指中華也。

＊

忠曰く、「高麗國には國尊と稱す」と。　高麗國華山曹溪宗麟角寺の「普覺國尊の碑銘序」に云く、「國尊、諱は見明、字は晦然。詔もて雲門寺に住す。上曰く、『我が先王、皆な釋門の德の大なる者を得て王師と爲し、德の又た大なる者を國師と爲す。今ま雲門和尚、道尊く德盛にして、闔國尊師の禮を行ない、國師を改めて國尊と爲すは、大朝の國師の號を避けんが爲なり』と」と。　忠曰く、「大朝とは、中華を指すなり」と。

＊

○普覺国尊碑銘序＝『高麗国華山曹溪宗麟角寺迦智山下普覚国尊碑銘并序』に「国尊、諱見明、字晦然、後易名一然。…四年丁丑、詔住雲門寺。…我先王、皆得釈門徳大者為王師、徳又大者為国師、在否徳独無可乎。今雲門和尚、道尊徳盛、人所共仰。豈宜寡人独蒙慈沢、当与一国共之。於是遣右承旨廉承、益奉綸旨、請行闔国尊師之礼。師上表固讓。上復遣使牢請、至三仍命。上将軍羅裕等、冊為国尊号。円径沖照、冊訖。四月辛卯、迎入大内、躬率百僚行衣礼。改国師為国尊者、為避大朝国師之号也（「古典資料叢書」81-2、韓国精神文化研究院・一九八一）とある。

（徳重寛道）

【二六九】大師

①傳燈録［三ノ十三丈］菩提達磨章云、師以化縁已畢、傳法得人、端居而逝。即後魏孝明帝、太和十九年丙辰歲十月五日也。代宗〈李唐第九主〉諡圓覺大師、塔曰空觀。

＊

『傳燈録』［三ノ十三丈］「菩提達磨」の章に云く、「師、化縁已に畢わり、傳法して人を得るを以て、端居して逝す。即ち後魏の孝明帝、太和十九（四九五）年丙辰の歲、十月五日なり。代宗〈李唐の第九主〉、圓覺大師と諡し、塔は『空觀』と曰う」と。

＊

○傳燈録［三ノ十三丈］菩提達磨章云…塔曰空觀＝文中の引用は、次の『景德伝燈録』巻三の次の一段を踏まえるが、一部削除改変されている（《　》は削除された部分、〈＝　〉は変更された部分）。「〈＝師〉《以》化縁已畢、伝法得人、《遂不復救之》端居而逝。即後魏孝明帝、太和十九年丙辰歲、十月五日也。《其年十二月二十八日葬熊耳山、起塔於定林寺。後三歲、魏宋雲奉使西域迴、遇師于葱嶺、見手携隻履翩翩独逝。雲問、師何往。師曰、西天去。又謂雲曰、汝主已厭世。雲聞之茫然、別師東邁。暨復命、即明帝已登遐矣。而孝荘即位、雲具奏其事。帝令啓壙、唯空棺一隻革履存焉。挙朝為之驚歎奉詔取遺履、於少林寺供養。至唐開元十五年丁卯歲、為信道者窃在五台華厳寺、今不知所在。初梁武遇師因縁未契、及聞化行魏邦、遂欲自撰師碑而未暇也。後聞宋雲事乃成之。》代宗諡円覚大師、塔曰空観。」（T51-220a~b）。なお「魏孝明帝太和十九年丙辰歲」について、北魏（第九代）孝明帝（第九代）の治世に太和の元号は見当たらない。太和年間は、北魏（第七代）孝文帝の世であるが、その太和十九年は乙亥であり「丙辰歲」と合致しない。「丙辰歲」をその近年に求めると、孝文帝の治世の北魏の延興六年、あるいは承明元年（ともに四七六年）となる。

②釋氏要覽［上ノ十一丈］云、師範也。大簡小之言也。

＊

『釋氏要覽』［上ノ十一丈］に云く、「師は範なり。大は小に簡ぶの言なり」と。

＊

○釋氏要覽［上ノ十一丈］云、師範也。大簡小之言也＝『釈氏要覧』巻一（T54-260b）に全く同文が見え

る。

③瑜伽論［七十ノ十丈］云、於善説法毘奈耶中、略有五種大師功徳。若有大師具成就者、便能映蔽外道沙門婆羅門師。何等爲五。一於諸戒行、終無誤失。二善建立法。三善制立所學。四於善建立法、善制立所學中、隨所疑惑、皆能善斷。五教授出離。

＊

『瑜伽論』［七十ノ十丈］に云く、「善説法毘奈耶の中に於いて、略して五種の大師の功徳有り。若し大師の具に成就する者有れば、便ち能く外道沙門婆羅門の師を映蔽す。何等をか五と爲す。一に諸もろの戒行に於いて、終に誤失無し。二に善く法を建立す。三に善く所學を制立す。四に善く建立する法、善く制立する所學の中に於いて、疑惑する所に隨いて、皆な能善く斷わる。五には出離を教授す」と。

＊

○瑜伽論［七十ノ十丈］云…五教授出離＝『瑜伽師地論』巻七〇（T30-687b）に全く同文が見える。

④　又佛稱大師。

＊

又た佛を大師と稱す。

⑤瑜伽論［八十二ノ十五丈］云、能善教誡聲聞弟子、一切應作、不應作事、故名大師。又能化導無量衆生、令苦寂滅、故名大師。又爲摧滅邪穢外道、出現世間、故名大師。

＊

『瑜伽論』［八十二ノ十五丈］に云く、「能善く聲聞の弟子に、一切の應作と、不應作との事を教誡す、故に『大師』と名づく。又た能く無量の衆生を化導して、苦をして寂滅せしむ、故に『大師』と名づく。又た邪穢の外道を摧滅せんが爲に、世間に出現す、故に『大師』と名づく」と。

＊

○瑜伽論［八十二ノ十五丈］云…故名大師＝『瑜伽師地論』巻八二（T30-759b）に全く同文が見える。

（丸毛俊宏）

【二七〇】禪師

①　忠曰、稱禪師有二。一天子褒賞有徳。徽號稱某禪師。二凡禪僧、呼前人稱某禪師。通師家衆僧。

＊

忠曰く、「禪師と稱するに二有り。一には、天子、有徳を褒賞して、徽號を賜って某禪師と稱す。二には、凡そ禪僧、前人を呼んで某禪師と稱す。師家衆僧に通ず」と。

②義堂日工集［二ノ七丈］云、禪師號、自神秀號大通禪師始焉。國師之稱、亦起於神秀。即唐朝也。生前賜之者、宋朝大慧禪師、是也。有四字者、有六字者。如今風俗好名、以多字爲榮。非正論也。四字號、始于宋南渡賣師號助役。未爲好事。（神秀賜號、詳疏榜類、諡號

處。〉

＊

義堂の『日集』［二の七丈］に云く、「禪師號は、神秀、大通禪師と號する自り始まる。國師の稱も亦た神秀に起こる。即ち唐朝なり。生前に之を賜う者は、宋朝の大慧禪師、是れなり。四字なる者有り、六字なる者有り。如今、風俗、名を好む。多字を以て榮と為すは、正論に非ざるなり。四字の號は、宋の南渡、師號を賣って役を助くるに始まる。未だ好事と爲さず」と。〈神秀、號を賜るは、「疏榜類」の「諡號」の處に詳らかなり。〉

＊

○日工集［二ノ七丈］云…未爲好事＝『訓注空華日用工夫略集』巻二（思文閣出版・p.301）に次の様に見える。「蓋し禪師号は神秀より始まり、禪師号は大通禪師なり。国師の称も亦神秀より起る。即ち唐朝なり。未だ示寂せざる時、賜ふ者は宋朝の大恵禪師是なり。或は四字六字なる者有り。今時の風俗名を好み、多字の者を以って栄と為す。蓋し正論に非ざるなり。四字の号は宋より始まり、南渡してより師号を売り役を助く。必ずしも好事と為さず云々。」割り注にあるように、「神秀賜号」については巻五「第六類稱呼門 下」【三五四】「諡号」を参照。

③日本禪師號者［敕修鈔序廿六丈］、蘭溪名道隆、蜀人也。松源三世、嗣無明性。來朝爲鎌倉建長興國禪寺開山。示寂之後、諡大覺禪師。是此方禪師號之始。〈建長第八十八主後深草帝年號、以爲寺名。〉

＊

日本の禪師號は［『敕修鈔』序廿六丈］、蘭溪、名は道隆、蜀の人なり。松源の三世、無明の性に嗣ぐ。來朝して鎌倉建長興國禪寺の開山と為り、示寂の後、大覺禪師と諡さる。是れ此の方の禪師號の始めなり。〈「建長」は、第八十八主、後深草帝の年號、以て寺名と爲す。〉

＊

○日本禪師號者［勅修鈔序廿六丈］…是此方禪師號之始＝『勅修百丈清規抄』「序説」二十六丁表に同意文が載せられる。「於日本者、鎌倉建長興国禪寺開山、諱道隆号蘭溪、蜀人也。松源三世、嗣無明和尚。賜大覚禪師号。是始也。建長人皇八十八代後深草院年号、以爲寺名。」

④頓悟要門論［下ノ九丈。○傳灯廿八ノ十四丈引］云、有客問云、弟子未知、律師、法師、禪師、何者最勝。師曰、夫律師者、啓毘尼之法藏、傳壽命之遺風、洞持犯而達開遮、秉威儀而行軌範、牒三番羯磨、作四果初因。若非宿德白眉、焉敢造次。夫法師者、踞師子之座。瀉懸河之辯、對稠人廣衆、啓鑿玄關、開般若妙門、等三輪空施。若非龍象蹴躍、安敢當斯。夫禪師者、撮其樞要、直了心源。出沒卷舒。縱横應物。咸均事理、頓見如來。拔生死深根、獲現前三昧。若不安禪靜慮、到這裡、總須忙然。隨機授法、三學雖殊、得意忘言、一乘何異。故經云、十方佛土中、唯有一乘法。無二亦無三。除佛方便説、但以假名字、引導於衆生。客曰、和尚深達佛旨。得無礙辯。

＊

『頓悟要門論』［下の九丈。○『傳灯』廿八の十四丈に引く］云く、「客有り問うて云わく、『弟子未だ知らず、律師、法師、禪師、何者か最も勝れたる』と。師曰く、『夫れ律師は、毘尼の法藏を啓き、壽命の遺風を傳え、持犯を洞らかにして開遮に達し、威儀を秉りて軌範を行い、三番の羯磨を牒して、四果の初因となす。若し宿德白眉に非ずんば、焉くんぞ敢えて造次ならん。夫れ法師は、師子の座に踞りけし。懸河の辯を瀉ぎ、稠人廣衆

に對して、玄關を啓鑿し、般若の妙門を開き、三輪空施を等しうす。若し龍象の蹴躍に非んば、安んぞ敢えて斯れに當たらん。夫れ禪師は、其の樞要を撮って、直に心源を了す。出沒卷舒、縱横、物に應ず。咸く事理に均くして、頓に如來を見る。生死の深根を拔きて、現前の三昧を獲。若し安禪靜慮にあらずんば、這裡に到って、總に須らく忙然たるべし。機に隨いて法を授くれば、三學殊なりと雖も、意を得て言を忘ずれば、一乘何ぞ異ならん。故に經（＝『妙法蓮華經』）に云く、『十方佛土の中、唯だ一乘の法のみ有り。二無く亦た三も無し。佛の方便の説をば除き、但だ假名字を以て、衆生を引導す』と」と。客曰く、「和尚、深く佛旨に達し、無礙辯を得たり」と。

＊

○頓悟要門論［下ノ九丈○傳灯廿八ノ十四丈引］云…得無礙辨＝『諸方門人參問語録』巻一（X63-26a）に全く同じ文章が見える。また、『景德伝燈錄』巻二八（T51-441a）に見られるが、冒頭の「時有人問云」が「有客問云」となっている。

⑤善住意天子所問經［下五十六丈○要覧上九丈］云、文殊師利言、何等比丘、坐禪。禪師於一切法、悉無所得、彼無憶念。若不憶念、彼則不修。若不修者、彼則不證。〈乃至〉天子問、何等比丘、得言禪師。文殊師利答言、天子、此禪師者、於一切法、一行思量。所謂不生。若如是知、得言禪師。乃至無有少法可取、得言禪師。不取何法。所謂不取此世彼世、不取三界、至一切法、悉皆不取。謂一切法悉無衆生。如是不取得言禪師。天子、若彼禪師、無少法取非取不取、以是義故、得言禪師。

＊

『善住意天子所經』［下五十六丈。○『要覧』上九丈］に云く、「文殊師利の言く、『何等の比丘か、坐禪する。禪師は一切の法に於いて、悉く所得無く、彼に憶念無し。若し憶念せざれば、彼則ち修せず。若し修せざれば、彼則ち證せず』と。〈乃至〉天子問う、『何等の比丘をか、禪師と言うを得たる』と。文殊師利答えて言く、『天子よ、此の禪師とは、一切の法に於いて、一行思量す。所謂る不生なり。若し是くの如く知れば、禪師と言うを得。乃至、少法の取る可き有ること無きを、禪師と言うを得。何の法をか取らざる。所謂る此世・彼世を取らず、三界を取らず、一切の法に至るまで、悉く皆な取らず。謂えらく、一切の法悉く衆生無しと。是くの如く取らざるを、禪師と言うを得。天子、若し彼の禪師に、少法の取・非取・不取無けん。是の義を以ての故に、禪師と言うを得』と」と。

＊

○聖善住意天子所問經［下五十六丈○要覧上九丈］云…得言禪師＝『聖善住意天子所問經』巻三に見られるが、一部削除改変されている（《　》は削除された部分、〈＝　〉は変更された部分）。「天子〈＝文殊師利言、〉何等比丘坐禪。禪師於一切法悉無所得。彼無憶念。若不憶念彼則不修。若不修者、彼則不証。《天子。以何因縁唯有名説。謂三十七菩提分法。彼名無物。意憙因縁而生此名。一相無相如是而説。或説或不説皆如是名。諸有識知皆無所得。此実知見。若有識知此三十七菩提分法皆無所得。天子問言。文殊師利。言禪師者。》〈＝乃至天子問、〉何等比丘得言禪師。文殊師利答言。天子。此禪師者。於一切法一行思量。所謂不生。若如是知得言禪師。乃至無有少法可取得言禪師。不取何法。所謂不取此世彼世。不取三界。至一切法悉皆不取。謂一切法悉無衆生。如是不取得言禪師。天子、若彼禪師、無少法取非取不取。以是義故得言禪師」。（T12-129a）

○要覧上九丈＝『釈氏要覧』巻一に見られるが、次のようになっており、一部削除改変されている。「天子問文殊曰、何等比丘、得名禪師。文殊曰、於一切法、一行思量、所謂不生。若如是知、得名禪師。乃至無有少法可取、不取何法。所謂不取此世後世、不取三界、至一切法、悉不取。謂一切法悉無。衆生

如是不取、得名禅師。無少取非取不取、於一切法、悉無所得、故無憶念。若不憶念、彼則不修。若不修者、彼則不証、故名禅師。」（T54-260a）

⑤ 楞伽經［泐一ノ九丈］百八問中云、禪師以何法、建立何等人。

＊

『楞伽経』［『泐』一の九丈］百八問の中に云く、「禪師、何の法を以て、何等の人を建立する」と。

＊

○『楞伽經』［宗泐一の九丈］百八問中云、禪師以何法、建立何等人＝泐とは、季潭宗泐のことで、彼の注釈書、『楞伽阿跋多羅宝経註解』巻一（T39-346b）に全く同じ文章が見える。

⑥ 傳燈録韶州淨法章和尚禪想大師〈嗣雲門偃〉章云、廣主劉氏問、如何是禪師。師乃良久。廣主罔測。因署其號。

＊

『傳燈録』「韶州淨法の章和尚、禪想大師〈雲門偃に嗣ぐ〉」章に云く、「廣の主、劉氏問う、『如何なるか是れ禪師』と。師、乃ち良久す。廣の主、測ること罔し。因って其の號を署す」と。

＊

○傳燈録…因署其號＝『景德伝燈録』巻二二（T51-386a）に全く同じ文章が見える。

⑦ 雙杉元禪師、上書丞相、言買師號、金環象簡、不便。見枯崖漫録［下ノ十五丈］。

＊

雙杉の元禪師、書を丞相に上って、師號を買いて、金環象簡、便ならざることを言す。『枯崖漫録』［下の十五丈］に見ゆ。

＊

○雙杉元禪師…不便＝『枯崖漫録』巻下には次のようにある。「双杉元禪師、嘉熙間、乃石田堂中第一座。上丞相書、言朝廷新指揮、買師号、金環象簡不便。」（X87-43b）

（東海宏德）

【二七一】堂頭和尚

①忠曰、方丈和尚、稱堂頭也。

＊

忠曰く、「方丈和尚を、堂頭と稱するなり」と。

＊

○忠曰、方丈和尚、稱堂頭也＝文中の事項のうち、「方丈」は【四〇】、「和尚」は【二七五】、「方丈和尚」は【二七二】、「堂頭」は【四一】に立項されている。

②敕修清規［上二ノ三丈］告香云、侍者出小榜云、奉堂頭和尚慈旨名德西堂、首座、並免告香。

＊

『敕修清規』[上二ノ三丈]「告香」に云く、「侍者、小榜を出して云く、『堂頭和尚の慈旨を奉りたまわる名徳の西堂と、首座とは、並びに告香を免ず』と」と。

＊

○敕修清規[上二ノ三丈]告香云…並免告香＝『勅修百丈清規』巻二「告香」に、「侍者預出小榜、貼法堂柱上云、『奉堂頭和尚慈旨。名徳西堂首座並免告香』」(T48-1120a)とある。なお文中の事項のうち、「名徳西堂」は【三六六】、「名徳首座」は【三九三】、「免告香小榜」は【一一八五】に立項されている。

③臨済玄禪師録[四十一丈]行録云、首座云、汝何不去問堂頭和尚、如何是佛法的的大意。

＊

『臨済玄禪師の録』[四十一丈]「行録」に云く、「首座云く、『汝、何ぞ去りて堂頭和尚に、「如何なるか是れ佛法的的の大意」と問わざる』と」と。

＊

○臨済玄禪師録[四十一丈]行録云…如何是佛法的的大意＝『鎮州臨済慧照禪師語録』「行録」(T47-504c)に、全く同文が見える。

④　又方丈曰堂頭。見殿堂類。

＊

又た「方丈」を「堂頭」と曰う。殿堂類に見ゆ。

＊

○又方丈曰堂頭…第二類殿堂類＝『禪林象器箋』巻一「第二類殿堂門 上」の「方丈」【四〇】を参照のこと。

（丸毛俊宏）

【二七二】方丈和尚

①忠曰、住持人也。

＊

忠曰く、「住持の人なり」と。

＊

○忠曰、住持人也＝文中の事項のうち、「住持」は【三六五】に立項されている。

②敕修清規[上二ノ二丈]小參云、客頭行者喝請云、方丈和尚、請西堂・兩班・單寮・耆舊・蒙堂・侍者・禪客、即今就寢堂獻湯。

＊

『敕修清規』[上二の二丈]「小參」に云く、「客頭行者、喝請して云く、『方丈和尚、西堂・兩班・單寮・耆舊・蒙堂・侍者・禪客を請して、即今寢堂に就いて獻湯す』と」と。

＊

○敕修清規[上二ノ二丈]小參云…即今就寢堂獻湯＝『勅修百丈清規』巻二「小參」(T48-1119c)に、全く同文が見える。なお文中の事項のうち、「客頭行者」は【五六八】、「西堂」は【二八一】、「両班」は【三八二】、「単寮」は【八八】、「耆旧」は【二八六】、「蒙堂」は【八六】、「禪客」は【四二六】、

「寝堂」は【四四】に立項されている。

③又單言方丈。　敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、喝食行者喝云、奉方丈慈旨、晩參。　又［下二ノ十三丈］四節秉拂云、秉拂人提綱、敍謝方丈及兩序勤舊、諸寮大衆畢、舉方丈小參公案、或拈或頌。

＊

又た單に「方丈」と言う。　『敕修清規』［上二の九丈］「訓童行」に云く、「喝食行者、喝して云く、『方丈の慈旨を奉じて、晩參せよ』と」。　又た［下二の十三丈］「四節秉拂」に云く、「秉拂の人、提綱し、方丈及び兩序勤舊、諸寮大衆を敍謝し畢わりて、方丈の小參の公案を舉して、或いは拈じ或いは頌す」と。

＊

○又單言方丈＝文中の事項のうち、「方丈」は【四〇】に立項されている。
○敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云…晩參＝『勅修百丈清規』巻二「訓童行」（T48-1122a）に、全く同文が見える。なお文中の事項のうち、「喝食行者」は【五七五】に立項されている。
○又［下二ノ十三丈］四節秉拂云…或拈或頌＝文中の引用は、次の『勅修百丈清規』巻七「四節秉拂」の次の一段を踏まえるが、一部削除されている（《　》は削除された部分）。「秉払人《索語問答了》、提綱叙謝方丈及両序勤旧諸寮大衆畢、挙方丈小参公案、或拈或頌」（T48-1154a）。なお文中の事項のうち、「秉払」は【八四八】、「提綱」は【八三八】、「叙謝」は【八四〇】、「勤旧」は【二八八】、「大衆」は【三三一】、「小参」は【八一四】、「公案」は【一一四九】に立項されている。

④明極俊禪師報恩録上堂云、只如桶樋一爆、忙急上方丈。方丈云、且喜大事了畢。〈雲峯因縁〉這箇還傷鋒犯手麽。

＊

『明極（みんき）の俊（しゅん）（明極楚俊（みんきそしゅん））禪師報恩録』「上堂」に云く、「只だ桶樋一爆、忙急に方丈に上り、方丈、『且く喜すらくは大事了畢す』と云うが如くんば〈雲峯の因縁〉、這箇還って鋒を傷（そこ）ない手を犯すや」と。

＊

○明極俊禪師報恩録上堂云…這箇還傷鋒犯手麽＝典拠未詳。明極の語録としては、写本が、東洋文庫岩崎文庫（「明極禪師建長禪寺語録」）・成簣堂文庫・兵庫広厳寺・両足院に収蔵されており、また、東京大学史料編纂所に兵庫広厳寺本写五冊本、内閣文庫にも五冊本の写本が蔵されているが、未見。

⑤　又秉拂頭首、多稱堂頭和尚、爲方丈老人。

＊

又た秉拂の頭首、多く堂頭和尚を稱して、方丈老人と爲す。

＊

○又秉拂頭首…爲方丈老人＝文中の事項のうち、「秉拂」は【八四八】、「頭首」は【三八四】、「堂頭和尚」は【二七一】に立項されている。

⑥傳燈録［三十ノ廿丈］石頭和尚草菴歌云、方丈老人相體解。上乘菩薩信無疑。

＊

『傳燈録』［三十の廿丈］「石頭和尚の草菴の歌」に云く、「方丈の老人相（あい）體解す。上乘の菩薩は信じて疑うこと無し」と。

＊

○傳燈録［三十ノ廿丈］石頭和尚草菴歌云…上乗菩薩信無疑＝『景徳伝燈録』巻三〇「石頭和尚草庵歌」（T51-461c）に、全く同文が見える。

⑦石溪月禪師録［下ノ普説八丈］天童西堂寮結夏普説云、方丈老人云、釋迦老子、全身在草窠裡、扶持不起〈云云〉。

＊

『石溪月（＝石溪心月）禪師録』［下の「普説」八丈］「天童の西堂寮、結夏普説」に云く、「方丈老人云く、『釋迦老子、全身、草窠裡に在って、扶持し起こさず〈云云〉』と」と。

＊

○石溪月禪師録［下ノ普説八丈］天童西堂寮結夏普説云…扶持不起＝『石溪心月禪師語録』巻中「天童西堂寮結夏普説」（X71-55a）に、全く同文が見える。

（丸毛俊宏）

【二七五】和尚

①傳燈録［三ノ十丈］達磨大師章云、神光悲涙曰、惟願和尚慈悲。開甘露門、廣度羣品。

＊

『傳燈録』［三の十丈］「達磨大師の章」に云く、「神光悲涙して曰く、『惟だ願わくば和尚、慈悲もて、甘露門を開き、廣く羣品（＝群生）を度したまへ』と」と。

＊

○傳燈録［三ノ十丈］達磨大師章云＝『景徳伝燈録』巻三（T51-0219-b）にほぼ同文が見える。

②善見律［十七ノ九丈］云、和尚者、外國語。漢言知罪知無罪、是名和尚。

＊

『善見律』［十七の九丈］に云く、「和尚は、外國の語。漢に知罪知無罪と言い、是れを和尚と名づく」と。

＊

○善見律［十七ノ九丈］云＝『善見律毘婆沙』巻一七（T24-0792-c）にほぼ同文が見える。「和尚」は「和上」と記されている。

③慧苑華嚴音義［二ノ五丈］云、和尚按、五天雜言和上、謂之塢波陀耶。然彼土流俗、謂之殟社。于闐疏勒乃云鶻社。今此方訛音、謂之和上。雖諸方舛異、今依正釋、言塢波者、此云近也。陀耶者讀也。言此尊師。爲弟子親近習讀之者也。舊云親教師者、是也。

＊

慧苑（＝唐代法蔵門下）の『華嚴音義』［二の五丈］に云く、「和尚は、按ずるに五天（＝五天竺。古代インド）の雜言の和上、之を塢波陀耶と謂う。然れども彼の土の流俗（＝俗人）、之を殟社と謂い、于闐の疏勒（＝現在のウイグル自治区カシュガル辺り）に乃ち鶻社と云う。今ま此の方の訛音、之を和上と謂う。諸方舛異すと雖も、今ま正に依りて釋するに、塢波と

言うは、此ここに近しと云うなり。陀耶は讀むなり。言うこころは此の尊師、弟子の親近習讀するの者爲り。舊に親教師と云う者、是れなり」と。

＊

○慧苑華嚴音義［二ノ五丈］云…舊云親教師者、是也＝『一切経音義』巻二二に収載される『新訳大方広仏花厳経音義』巻中（T54-441b）に見えるが、「親教師者、是也」を「親教、是也」とするなど、多少の文字の異同が見られる。

④行事鈔［上三之三ノ二丈］云、問云、何名師和尚闍梨。答、此無正飜。善見云、無罪見罪訶責、是名我師。共於善法中教授、令知故、是我闍梨。論傳云、和尚者、外國語。此云知有罪知無罪、是名和尚。四分律、弟子訶責和尚中亦同。明了論正本、云優波陀訶、飜爲依學。依此人、學戒定慧故、即和尚是也。方土音異耳。相傳云、和尚爲力生〈道力由成〉、闍梨爲正行〈能糾正弟子行〉。未見經論。雜含中、外道亦號師爲和尚。

＊

『行事鈔』［上三之三の二丈］に云く、「問う、『云何なるを師和尚闍梨と名づく』と。答う、『此こに正飜（＝正しい翻訳語）無し。『善見』に云く、「罪無からしめんとして罪を見て訶責する、是れを我が師と名づく。共に善法の中に於いて教授して、知らしむるが故に、是れ我が闍梨なり」と。『論』の傳（＝注釈）に云く、「和尚は、外國の語、此ここには知有罪知無罪と云い、是れを和尚と名づく。『四分律』に、弟子和尚を訶責する中も亦た同じ。『明了論』の『正本』には、優波陀訶と云い、飜じて（＝翻訳して）依學と爲す。『此の人に依って、戒定慧を學するが故に』というも、即ち和尚是れなり。方土（＝国や地域）の音、異なるのみ」と。相傳して云く、「和尚を力生と爲し〈道力に由りて成す〉、闍梨を正行と爲す〈能く弟子の行いを糾正す〉」と。未だ經論に見われず。『雜含』の中には、外道も亦た師を號して和尚と爲す』と」と。

＊

○行事鈔［上三之三ノ二丈］云…雜含中、外道亦號師爲和尚＝『四分律刪繁補闕行事鈔』巻一（T40-30c）に同文が見える。文中、「善見云…是我闍梨」の部分は、『善見律毘婆沙』巻一に見える次の問答の節略である。「王問、『沙弥師是誰耶』。答言、『無罪見罪呵責、是名我師』。王言、『更与八分』。沙弥答、『善哉。我当与阿闍梨』。王復問言、『闍梨是誰』。答、『共於善法中教授令知、是我闍梨』。」（T24-681a）「論伝云…」がどこまで係るか不明だが、今回は「相伝云…」の前までとして読んだ。「明了論正本、云優波陀訶、飜為依学」の部分は、『律二十二明了論』の「優波陀訶及所依止人、有五五十功徳。此中随得一五徳。此人堪作優波陀訶及依止師」（T24-672a）を踏まえたものと考えられるが、見られる通り「依学」ではなく「依止」となっている。「雜含中、外道亦号師為和尚」の部分は、『雜阿含経』巻四に見える「時、婆羅門作是念、『我今得勝族姓、是沙門瞿曇恩。我経所説「為師者如師供養、為和尚者如和尚供養」』」（T2-26c）の部分を指すのであろう。

⑤業疏［三上ノ十八丈］云、中梵本音、鄔波陀耶、在唐諦言、名之依學。依附此人、學出道故。自古飜譯多雜蕃胡。胡傳天語、不得聲實。故有訛僻、轉云和上。如昔人解和中最上、此逐字釋、不知音本。人又解云、翻力生。弟子道力、假教生成。得其遠意、失其近語。眞諦所譯明了論疏則云優波陀訶。稍近梵音。猶乖聲論。余親參譯、委問本音。如上所述。彦琮譯云郁波弟耶。聲相近也。

＊

『業疏』［三上の十八丈］に云く、「中梵の本音には、鄔波陀耶、唐に在りては諦言、之を

依學と名づく。此の人に依附（＝頼る。従属する）して、出道を學するが故に。古自り飜譯に多く蕃胡（＝外国語）を雑ゆ。胡には天語を傳うれども、聲の實を得ず。故に訛僻有り、轉じて和上と云う。昔人、『和中の最上なり』と解するが如き、此れ字を逐って釋す。音の本を知らざるなり。人又た解して云く、『力生と翻す。弟子の道力、教を假りて生成す』と。其の遠意を得て、其の近語を失す。眞諦の所譯の『明了論の疏』には則ち『優波陀訶』と云う。稍や梵音に近し。猶お聲論に乖く。余、親しく譯に參じて、委しく本音を問う。上の述ぶる所の如し。彦琮（＝中国の訳経僧）は譯して『郁波弟耶』と云う。聲、相近きなり。」と。

＊

○業疏［三上ノ十八丈］云…聲相近也＝『四分律刪補隨機羯磨疏濟緣記』巻三（X41-0224a）に同文が見える。「真諦所訳明了論疏則云優波陀訶」の部分は前注参照。

⑥翻譯名義集［一ノ五十七丈］云、和尚、或和闍〈云云〉。傳云、和尚、梵本正名鄔波遮迦。傳至于闐、翻爲和尚、傳到此土。什師翻名力生。舍利弗問經云、夫出家者、捨其父母生死之家、入法門中、受微妙法。蓋師之力生長法身、出功德財、養智慧命。功莫大焉。又和尚、亦飜近誦。以弟子年少、不離於師、常逐常近、受經而誦、云云。義淨云、鄔波陀耶、此云親教師。由能教離出世業故。故和尚有二種。一親教、即受業也。二依止、即稟學也。毘奈耶云、弟子門人、纔見師時、即須起立、若見親教、即捨依止。

＊

『翻譯名義集』［一の五十七丈］に云く、「和尚、或いは和闍〈云云〉。傳に云く、『和尚、梵本に正に鄔波遮迦と名づく。傳えて于闐に至って、翻じて和尚と爲るを、傳えて此の土に到れり。什師（＝鳩摩羅什）は翻じて力生と名づく』と。『舍利弗問經』に云く、『夫れ出家とは、其の父母生死の家を捨て、法門の中に入って、微妙の法を受く』と。蓋し師の力、法身を生長し、功德の財を出して、智慧の命を養う。功、焉れより大なるは莫し。又た和尚を亦た近誦と飜ず。弟子年少うして、師を離れずして、常に逐い常に近づきて、經を受け誦するを以て〈云云〉。義淨（＝唐の僧。六三五－七一三）の云く、『鄔波陀耶、此こに親教師と云う。能く世を離出する業を教うるに由るが故なり』と。故に和尚に二種有り。一には親教、即ち受業（＝出家者として戒法を授かること）なり。二には依止（＝みずから帰依してその人のところにとどまること）、即わち稟學（＝学問を受けること）なり。『毘奈耶』に云く、『弟子門人は、纔かに師を見る時、即ち須らく起立すべし。若し親教を見れば、即ち依止を捨つべし』と」と。

＊

○翻譯名義集［一ノ五十七丈］云…即捨依止＝『翻訳名義集』巻一（T54-1074a）に同文が見える。文中、『舍利弗問経』からの引用は同経（T24-903a）に同文が見える。「義淨」の引用は典拠未詳。「毘奈耶云…」の部分は、『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻一六（T24-279b）に同文が見える。

（窪田顕脩）

【二七六】長老

①傳燈録［六ノ廿二丈］禪門規式［本古清規揚億序也。勅修下二ノ廿五丈］云、凡具道眼、有可尊之徳者、號曰長老。如西域道高臘長、呼須菩提等之謂也。

＊

『傳燈録』［六の廿二丈］「禪門規式」［本と『古清規』「揚億が序」なり。『勅修』下二の廿五丈］に云く、「凡そ道眼を具し、尊ぶ可きの徳有る者を、號して長老と曰う。西域に道高く臘長ぜる、須菩提等を呼ぶの謂いの如きなり」と。

＊

○傳燈録［六ノ廿二丈］禪門規式云…呼須菩提等之謂也＝『景徳伝燈録』巻六「禪門規式」（T51-251a）に同文が見える。また、書き込みに「本古清規揚億序也。勅修下二ノ廿五丈」とあるように、『勅修百丈清規』巻八の「古清規序」（T48-1158a）に同文が見える。

②敕修清規住持章云、始奉其師為住持、而尊之曰長老。〈見職位類住持處。〉

＊

『敕修清規』「住持の章」に云く、「始め其の師を奉じて住持と為して、之を尊んで長老と曰う」と。〈職位類の「住持」の處に見ゆ。〉

＊

○敕修清規住持章云…而尊之曰長老＝『勅修百丈清規』巻二「住持章第五」（T48-1119a）に同文が見える。また、割り注にあるように、『象器箋』巻六「第七類職位門上」の【三六五】「住持」条を参照。

③慈覺龜鏡文［敕修下一ノ五十二丈］云、開示衆僧、故有長老。　又云、晨參莫請、不舍寸陰、所以報長老。

＊

慈覺（＝長蘆宗賾）の『龜鏡文』［『敕修』下一の五十二丈］に云く、「衆僧に開示す、故に長老有り」と。　又た云く、「晨參莫請、寸陰を舍てざれば、長老に報いる所以なり」と。

＊

○慈覺龜鏡文［勅修下一ノ五十二丈］云、開示衆僧、故有長老＝『勅修百丈清規』巻六「亀鏡文」（T48-1146b）に同文が見える。

○又云、晨參莫請、不舍寸陰、所以報長老＝同じく「亀鏡文」（T48-1146b）に同文が見える。

④釋氏要覽［上ノ十丈］云、長阿含經云、有三長老。謂耆年長老〈年臘多者〉、法長老〈了達法性、内有智德〉、作長老〈假號之者〉。譬喩經偈云、所謂長老者、未必剃鬚髮。雖復年齒長、不免於惡行。若有見諦法、無害於群萌、捨諸穢惡行。此名為長老。我今謂長老、未必先出家、修其善本業、分別於正行。設有年齒幼、諸根無漏缺。此謂名長老。肇法師云、内有智德可尊。故名長老。恩法師云、有長者老年之徳、名長老。

＊

『釋氏要覽』［上の十丈］に云く、「『長阿含經』に云く、「三の長老有り。謂く耆年の長老〈年臘多き者なり〉、法の長老〈法性を了達して、内に智德有り〉、作の長老〈假號の者〉なり」と。『譬喩經』の偈に云く、「所謂る長老とは、未だ必ずしも鬚髮を剃らず。年齒（＝とし）長ずと雖復も、惡行を免れず。若し諦法を見ること有れば、群萌に害無く、諸の穢惡の行を捨つ。此れを名づけて長老と為す。我、今、長老と謂うは、未だ必ずしも出家を先とせず、其の善本の業を修して、正行を分別す。設い年齒の幼有れども、諸根漏缺無

し。此れを謂いて長老と名づく」と。肇（＝僧肇）法師云く、「内に智徳有り尊ぶべし。故に長老と名づく」と。恩（＝知恩）法師云く、「長者老年の徳有るを、長老と名づく」と。」と。

＊

○釋氏要覧［上ノ十丈］云…名長老＝『釈氏要覧』巻一に同文（T54-260a~b）が見える。文中の文献引用について、『長阿含経』からの引用は、同経・巻八に、「復有三法、謂三長老。年耆長老、法長老、作長老」（T1-50b）とある。「譬喩経偈云」の部分は、『法句譬喩経』に同文を見出すことは出来無かった。同じく「肇法師云」の部分も、『肇論』等、僧肇の著述類に見出すことが出来無かった。「恩法師云」の部分については、知恩撰『金剛般若経依天親菩薩論賛略釈秦本義記』巻一に「言長老者是尊之称也。謂有長者老年之徳」（T85-111b）とある。

⑤ 祖庭事苑［八ノ三丈］云、今禪宗住持之者、必呼長老。正取『長阿含經』有三長老中、所謂了達法性、内有智德之人、以訓領學者。

＊

『祖庭事苑』［八の三丈］に云く、「今ま禪宗の住持の者は、必ず長老と呼ぶ。正に『長阿含經』に三の長老有る中に、所謂る『法性を了達して、内に智德有るの人』を取って、以て學者を訓領す」と。

＊

○祖庭事苑［八ノ三丈］云＝『祖庭事苑』巻八（Z113-226a）に同文が見える。『長阿含経』の引用については、前条④の注を参照。

⑥ 増壹阿含經［廿二ノ三丈］云、世尊説偈、所謂長老者、未必剃鬚髮。雖復年齒長、不免於愚行。若有見諦法、無害於羣萌、捨諸穢惡行。此名為長老。我今謂長老、未必先出家、修其善本業、分別於正行、設有年幼少、諸根無漏缺。此謂名長老。分別正法行。

＊

『増壹阿含經』［廿二の三丈］に云く、「世尊偈を説きたまわく、『所謂る長老とは、未だ必ずしも鬚髮を剃らず。年齒長ずと雖復も、愚行を免れず。若し見諦の法有らば、羣萌を害すること無く、諸もろの穢惡の行を捨つるを、此れを名づけて長老と為す。我、今ま長老を謂うは、未だ必ずしも先だって出家せず、其の善本業を修して、正行を分別するをば、設い年、幼少に有るも、諸根漏缺無ければ、此れを謂いて長老と名づけ、正法の行を分別す』と」と。

＊

○増壹阿含經［廿二ノ三丈］云＝『増一阿含経』巻二二「須陀品」（T2-659c）に同文が見えるが、「世尊説偈」を「世尊見已、便説此偈」に作る。

⑦ 大莊嚴經論［一ノ十五丈］云、諸沙彌説偈言、所謂長老者、不必在白髮、面皺牙齒落。愚癡無智慧、所貴能修福、除滅去衆惡、淨修梵行者、是名為長老。

＊

『大莊嚴經論』［一の十五丈］に云く、「諸もろの沙彌、偈を説いて言く、『所謂る長老とは、必ずしも白髮にして、面皺み、牙齒落つるに在らず。愚癡にして、智慧無きに、貴ぶ所は能く福を修し、衆惡を除滅し去り、淨く梵行を修する者、是れを名づけて長老と

為す』と」と。

＊

○大莊嚴經論［一ノ十五丈］云＝『大莊厳論経』巻一に同文（T4-261b）が見える。

⑧智度論［廿二ノ十三丈］云、如佛説偈、所謂長老相、不必以年耆。形瘦鬚髮白、空老内無徳、能捨罪福果。精進行梵行、已離一切法、是名為長老。

＊

『智度論』［廿二の十三丈］に云く、「佛の偈を説くが如くんば、『所謂る長老の相は、必ずしも年耆を以てせず。形瘦せ鬚髮白きも、空しく老いて内に徳無ければ、能く罪福の果を捨つ。精進にして梵行を行じて、已に一切の法を離るる、是れを名づけて長老と為す』と」と。

＊

○智度論［廿二ノ十三丈］云＝『大智度論』巻二二「序品」に同文（T25-224b）が見える。

⑨金剛經纂要［上ノ十二丈］云、長老者、德長年老、唐譯云具壽。壽即是命。魏譯云慧命。以慧爲命。　刊定記［三ノ廿七丈］、德高曰長、年多曰老也。智慧超倫、即是德長義也。然以慧為命者、約喩顯法也。謂人身以命爲本、佛法以慧爲本。命盡則六根俱廢。慧喪則萬行不成。此約別義釋長老也。若通意者、但有德業、便名長老。如云先生、未必年老矣。

＊

『金剛經纂要』［上の十二丈］に云く、「長老とは、德長く年老ゆ。唐譯に『具壽』と云う。壽は即ち是れ命なり。魏譯に『慧命』と云う。慧を以て命と爲すなり」と。　『刊定記』［三の廿七丈］に、「德高きを長と曰い、年多きを老と曰うなり。智慧、倫を超ゆ、即ち是れ德長の義なり。然るに慧を以て命と為すは、喩に約して法を顯わすなり。謂く、人身は命を以て本と為し、佛法は慧を以て本と為す。命盡くれば則ち六根俱に廢す。慧喪すれば則ち萬行成らず。此れは別義に約して長老を釋するなり。若し通の意をいわば、但だ德業有るを、便ち長老と名づく。『先生』と云うが如き、未だ必ずしも年老いたるにはあらざるなり」と。

＊

○金剛經纂要［上ノ十二丈］云…以慧爲命＝圭峰 宗 密撰『金剛般若経疏論纂要』巻一に同文（T33-157c）が見える。

○『刊定記』［三ノ廿七丈］云…未必年老矣＝長 水子璿撰『金剛経纂要刊定記』巻三に見える（T33-196b）が、原文には「年多曰老也」の後に、「唐訳下、証年老。魏訳下、証德長」の十二字がある。

⑩増壹阿含經［三十七ノ五丈］云、阿難白世尊言、如今諸比丘、當云何自稱名號。世尊告曰、若小比丘、向大比丘、稱長老、大比丘稱小比丘。稱姓字。

＊

『増壹阿含經』［三十七の五丈］に云く、「阿難、世尊に白して言く、『如今、諸もろの比丘、當に云何が自ら名號を稱すべきや』と。世尊告げて曰く、『若し小比丘、大比丘に向かわば、長老と稱す。大比丘、小比丘を稱するには、姓字を稱せよ』と」と。

＊

○増壹阿含經［三十七ノ五丈］云…稱姓字＝『増一阿含経』巻三七「八難品」に同文（T02-752c）が見え

る。

⑪十誦律［四十ノ廿七丈］云、佛在舍衞國。爾時有下座比丘、不恭敬喚上座。上座聞已、心不喜。諸比丘不知。云何。是事白佛。佛言、從今不得不恭敬喚上座。若不恭敬喚上座者、突吉羅。爾時諸比丘、不知云何喚上座。是事白佛。佛言、從今下座比丘、喚上座言長老。爾時但喚長老、不便。佛言、從今喚長老某甲。如喚長老舍利弗、長老目犍連、長老阿難、長老難提、長老金毘羅。

＊

『十誦律』［四十の廿七丈］に云く、「佛、舍衞國に在り。爾の時、下座の比丘有りて、恭敬して上座を喚ばず。上座聞き已わって、心喜ばず。諸もろの比丘知らず。云何。是の事、佛に白す。佛言く、『今從り、恭敬して上座を喚ばざることを得ざれ。若し恭敬して上座を喚ばざる者は、突吉羅（＝悪作。最も軽い罪）なり』と。爾の時、諸もろの比丘、云何が上座を喚ばしむることを知らず。是の事、佛に白す。佛言く、『今從り下座の比丘、上座を喚んで長老と言うべし』と。爾の時、但だ長老と喚んで、便ならず。佛言く、『今從り長老某甲と喚ぶべし。長老舍利弗、長老目犍連、長老阿難、長老難提、長老金毘羅と喚ぶが如し』と」と。

＊

○十誦律［四十ノ廿七丈］云…長老金毘羅＝『十誦律』巻三九に同文（T23-286b）が見える。

⑫世尊稱長老、却成不敬。　方廣大莊嚴經［十一ノ四］云、阿若憍陳如等、白佛言、長老。瞿曇、面目端正、諸根寂靜、身相光明、如閻浮金。今者應證出世聖種智耶。爾時世尊、語五人言、汝等不應稱喚如來爲長老也。令汝長夜、無所利益。

＊

世尊を長老と稱するは、却って不敬と成る。　『方廣大莊嚴經』［十一の四］に云く、「阿若・憍陳如等、佛に白して言く、『長老瞿曇は、面目端正にして、諸根寂靜、身相光明なること、閻浮金の如し。今は、應に出世の聖種智を證すべきや』と。爾の時、世尊、五人に語りて言く、『汝等、應に如來を稱喚して長老と為すべからず。汝をして長夜（＝長い間）に、利益する所無からしめん』と」と。

＊

○方廣大莊嚴經［十一ノ四］云…無所利益＝『方広大莊厳経』巻一一「転法輪品」に同文（T3-606b）が見えるが、「阿若憍陳如等」を原文は、「五人於前礼拝問訊、在一面立」に作る。

⑬後生亦稱長老。　五燈會元［十三ノ四十丈］華嚴休靜禪師章云、後唐莊宗、請入内齋。見大師大德總看經、唯師與徒衆不看經。帝問師、爲甚麼不看經。師曰、道泰不傳、天子令、時清休唱太平歌。〈云云。〉帝曰、既是後生。爲甚麼却稱長老。師曰、三歲國家龍鳳子、百年殿下老朝臣。　〈聯燈［廿二ノ廿九丈］作僧問。〉

＊

後生（＝後輩・修行年数の少ないもの）も亦た長老と稱す。　『五燈會元』［十三の四十丈］「華嚴の休靜禪師」の章に云く、「後唐の莊宗、請うて内に入らしめて齋す。大師・大德總に看經するを見るも、唯だ師と徒衆のみ看經せず。帝、師に問う、『甚麼と爲て

か看經せざる』と。師曰く、『道泰らかにして傳えず、天子の令。時清うして唱うることを休めよ、太平の歌と』〈云云。〉帝曰く、『既に是れ後生。甚麼と爲てか却って長老と稱するや』と。師曰く、『三歳國家龍鳳の子、百年殿下の老朝臣』と」と。〈『聯燈』「廿二の廿九丈」、「僧問」に作る。〉

＊

○五燈會元［十三ノ四十丈］華嚴休靜禪師章云…百年殿下老朝臣＝『五燈会元』巻一三「京兆華厳寺休静禅師」条（Z138-488b）に同文が見えるが、「後唐荘宗」を原文は、「荘宗」に作る。

○聯燈［廿二ノ廿九丈］作僧問＝『聯燈会要』巻二二「京兆府華厳休静禅師」条（Z136-805b）に「僧問、既是長老。為甚麼、却後生。師云、三歳邦家龍鳳子、百年堦下老朝臣」とある。

⑭ 北磵簡禪師録普説［三丈］云、遠録公召東山、至方丈、與語奇之曰、我老矣。不能與汝説話。近此有一後生長老、名端。我也不識他。只見他頌臨濟三頓棒、極是淨潔。汝若信我説、必了大事。〈端即白雲守端禪師也。〉

＊

『北磵簡禪師録』（＝『北磵居簡禪師語録』）「普説」［三丈］に云く、「遠録公（浮山法遠）、東山（＝五祖法演）を召して、方丈に至らしめ、與に語りて之を奇として曰く、『我れ老いたり。汝と説話すること能わず。此ここに近くして一りの後生の長老有り、端と名づく。我も也た他を識らず。只だ他の臨濟の三頓棒を頌するを見るに、極めて是れ淨潔なり。汝若し我が説を信ぜば、必ず大事を了せん』と」と。〈端は即ち白雲守端禪師なり。〉

＊

○北磵簡禪師録普説［三丈］云…必了大事＝『北澗居簡禪師語録』に同文（Z121-154a）が見えるが、「遠録公召東山、至方丈」を原文は「遂召至方丈」に作る。

（瀧瀬尚純）

【二七九】東堂

①忠曰、當寺前住人、稱東堂。蓋東是主位。前住人是舊主。故居東堂。

＊

忠曰く、「當寺前住の人、東堂と稱す。蓋し東は是れ主位なり。前住の人は是れ舊主なり。故に東堂に居す」と。

②舊説［敕修鈔十四ノ廿四丈］曰、東堂當山前住也。西堂他山前住也。本非謂位之高下。與日本沿襲、義別也。昔龍華和尚〈春屋葩、開基南禪龍華院。〉・慈氏和尚〈義堂信、開基南禪慈氏院。〉・武州管領等、胥議、定東堂西堂、及其衣相、坐具等之色。

＊

『舊説』［『敕修鈔』十四の廿四丈］に曰く、「東堂は當山の前住なり。西堂は他山の前住なり。本と位の高下を謂うに非ず。日本の沿襲と、義、別なり。昔、龍華和尚〈春屋の葩（＝春屋妙葩）、南禪の龍華院に開基たり。〉・慈氏和尚〈義堂の信（＝義堂周信）、南禪の慈氏院に開基たり。〉・武州管領（＝細川頼之）等、胥い議して、東堂西堂、及び其の衣相、坐具等の色を定む」と。

＊

○舊説［敕修鈔十四ノ廿四丈］曰、東堂當山前住也…坐具等之色＝『勅修百丈清規抄』巻一四には、「東堂ハ当山ノ前住ソ。西堂ハ他山ノ前住ソ。今、日本ノ心得トハチカウタソ。位ノ高下ニハヨラヌソ。東堂ト云、西堂ト云事ノ定メハ、龍華和尚、慈氏和尚、武州管領ナントノ御定アツタソ。衣相坐具ナントノ色ヲモ御定アツタソ」（二十四丁表）とある。

③又［敕鈔十二ノ十三丈］曰、如中華、雖甲刹、某寺前住、則稱東堂於本寺。雖五山之前住、來居餘寺、則稱西堂。日本稱呼不如此耳。

＊

又た［『敕鈔』十二の十三丈］曰く、「中華の如きは、甲刹と雖も、某寺の前住をば、則ち東堂を本寺に稱す。五山の前住と雖も、來って餘寺に居さば、則ち西堂と稱す。日本の稱呼は此くの如くならざるのみ」と。

＊

○又［敕鈔十二ノ十三丈］曰、如中華…日本稱呼不如此耳＝『勅修百丈清規抄』巻一二に、「唐土ハ甲刹ナリトモ、某寺ノ前住ハ其寺テハ東堂ト云ソ。五山ノ前住ナリトモ、外ノ前住ナラハ西堂ト云ソ。日本ハカリタソ」（十三丁表）とある。

④瑩山清規［下ノ廿三丈］云、如當寺退院長老、稱之東堂。

＊

『瑩山清規』［下の廿三丈］に云く、「當寺退院の長老の如きは、之を東堂と稱す」と。

＊

○瑩山清規［下ノ廿三丈］云、如當寺退院長老、稱之東堂＝『瑩山清規』巻下「年中行事第三」（T82-443a）に同文が見える。

⑤敕修清規［上二ノ廿丈左］入院云、若前代住持、別遷未赴、或退居東堂、未據室前、講交代禮。　又［上二ノ廿五丈］退院云、若留本寺居東堂、相繼住持者、須當盡禮温存。

＊

『敕修清規』［上二の廿丈左］「入院」に云く、「若し前代の住持、別遷して未だ赴かず、或いは退して東堂に居れば、未だ據室せざる前に、交代の禮を講ず」と。　又［上二の廿五丈］「退院」に云く「若し本寺に留まって東堂に居せば、相繼いで住持する者の、須く當に禮を盡して温存すべし」と。

＊

○『敕修清規』［上二ノ廿丈左］入院云、若前代住持…講交代禮＝『勅修百丈清規』巻三「入院」（T48-1125c）に同文が見える。

○又［上二ノ廿五］退院云、若留本寺居東堂…須當盡禮温存＝『勅修百丈清規』巻三「退院」（T48-1127a）に同文が見える。

⑥　又［上ノ一ノ廿丈］聖節云、住持趺坐、西堂東堂、出座下問訊。又云、次東堂西堂、出班上香。

＊

又た［上の一の廿丈］「聖節」に云く、「住持趺坐し、西堂東堂、座下に出て問訊す」と。

又た云く「次に東堂西堂、班を出て上香す」と。

＊

○又［上ノ一ノ廿丈］聖節云…住持趺坐…出班上香＝『勅修百丈清規』巻三「聖節」に「住持斂衣趺坐」（T48-1113b）とある後に、「西堂東堂、出座下問訊」（同前）とあり、また少し後に「次東堂西堂、出班上香」（同前）とある。

⑦五燈會元［十一ノ十丈］臨濟玄禪師章云、師後居大名府興化寺東堂。〈又『臨濟録』序云。〉

＊

『五燈會元』［十一の十丈］「臨濟の玄禪師（＝臨済義玄）」の章に云く、「師、後に大名府の興化寺の東堂に居す」と。〈又『臨濟録』序に云う。〉

＊

○五燈會元［十一ノ十丈］臨濟玄禪師章云…興化寺東堂。〈又『臨濟録』序云。〉＝『五燈会元』巻一一「鎮州臨済義玄禅師」条（ZI38-392a）に同文が見える。また、『臨済録』馬防撰の「序」には「衣を払って南邁し、大名に戻止す。興化（＝興化存奬）師承して、東堂に迎え侍す（払衣南邁、戻止大名。興化師承、東堂迎侍）」（T47-496b）とある。

⑧僧寶傳［六冊ノ十四丈］白雲端禪師傳云、圓通訥禪師、讓圓通以居之、而自處東堂。

＊

『僧寶傳』［六冊の十四丈］「白雲の端禪師（＝白雲守端）」の傳に云く、「圓通の訥禪師（＝圓通居訥）、圓通を讓りて以て之に居せしむ。而して自ら東堂に處す」と。

＊

○僧寶傳［六冊ノ十四丈］＝『禅林僧宝伝』巻二八「白雲端禅師」条（ZI37-554a）に同文が見える。

⑨祖庭事苑［六ノ十丈］解風穴衆吼集東堂云、晉郤詵、遼遷雍州刺史。帝於東堂、會送。問詵曰、卿自以爲何爲。詵對曰、百舉賢良對策、爲天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉。帝笑之。

＊

『祖庭事苑』［六の十丈］、『風穴衆吼集』の「東堂」を解して云く、「晉の郤詵、遼かに雍州の刺史に遷る。帝、東堂に於いて會送す。詵に問うて曰く、『卿、自ら以て何爲とか為る』と。詵、對えて曰く、『百、賢良に舉られて對策し、天下第一と爲るも、猶お桂林の一枝、崑山の片玉の如し』と。帝、之を笑う」と。

＊

○祖庭事苑［六ノ十丈］解風穴衆吼集東堂云…帝笑之＝『祖庭事苑』巻六「東堂」に同文（ZI13-163a）が見える。

⑩　忠曰、風穴衆吼集今不傳。古尊宿録［七ノ八丈］風穴語録、無東堂語。未知解何東堂也。郗詵傳、東堂於禪家東堂、沒干涉。

＊

忠曰く、「『風穴の衆吼集』、今傳わらず。『古尊宿録』［七の八丈］の風穴（＝風穴延沼）の語録に、東堂の語無し。未だ何の東堂を解すということを知らざるなり。「郗詵」傳の東堂は、禪家の東堂に於いて干渉沒し」と。

（五十部友啓）

【二八〇】東菴

①［敕鈔一ノ十九丈、又十二ノ十三丈］東堂、又言東菴。

＊

［『敕鈔』一の十九丈、又十二の十三丈］東堂、又た東菴と言う。

＊

○［敕鈔一ノ十九丈、又十二ノ十三丈］東堂、又言東菴＝『勅修清規抄』巻一（十九丁表）には、「東堂ハ本寺ノ前住ソ」と出る。また、巻一二には無著禅師の補足書き込みが見られ「又、東庵西庵トモ云ソ」（十三丁表）とある。

②普燈録［八ノ廿一丈］雪峯妙湛思慧禪師章云、紹興甲子、罷寺居東菴。

＊

『普燈録』［八の廿一丈］「雪峯妙湛思慧禪師」の章に云く、「紹興甲子（十四年・一一四四）、寺を罷めて東菴に居す」と。

＊

○普燈録［八ノ廿一丈］雪峯妙湛思慧禪師章云、紹興甲子、罷寺居東菴＝『嘉泰普燈録』巻八「雪峯妙湛思慧禪師」条（Z137-144a）に同文が見える。

③東山空和尚録［十九丈］送南泉入菴上堂云、去此善法堂不遠、有臥雲老人舊隱之東菴。伏望禪師、不忘廼祖、暫此韜藏。

＊

『東山空（＝雪峰慧空）和尚録』［十九丈］「南泉（＝南泉覚）の入菴を送る上堂」に云く、「此の善法堂を去ること遠からず、臥雲老人、舊隱の東菴有り。伏して望むらくは禪師、廼祖を忘れず、暫く此こに韜藏せよ」と。

＊

○東山空和尚録［十九丈］送南泉入菴上堂云…暫此韜藏＝『雪峰慧空禪師語録』巻一（Z120-284a）に同文が見える。

④『佛祖通載』［二十ノ卅四丈○又（ママ）続傳灯（ママ）卅五ノ六丈、語略］松原岳禪師傳云、師有棲遯之志、即上章、乞罷住持事。上察其誠、許之。退居東菴。　又佛照光禪師傳［二十ノ卅七丈］云、師於育王創數椽、以自處。號曰東菴、掩關自娛。

＊

『佛祖通載』［二十の卅四丈○又（ママ）続傳灯卅五の六丈、語は略す］「松原の岳（＝松原崇岳）禪師」の傳に云く、「師、棲遯の志有り、即ち章を上せて、住持の事を罷めんと乞う。上、其誠を察して、之を許す。退いて東菴に居す」と。　又た「佛照光禪師傳」［二十の卅七丈］に云く「師、育王に於いて數椽を創して、以て自ら處る。號して東菴と曰い、關を掩いて自ら娛しむ」と。

＊

○『佛祖通載』［二十ノ卅四丈○又続傳灯卅五ノ六丈、語略］松原岳禪師傳云…退居東菴＝『仏祖歴代通載』巻二〇（T49-694b）に同文が見える。また、『続伝燈録』三五「杭州府靈隱松源禪師」条に、「靈隱に居すること六年、法道盛んに行われ、法を得る者衆し。退いて東菴に居す（居靈隱六年、法道盛行、得法者衆。退居東菴）」（T51-708a）とある。

○又佛照光禪師傳［二十ノ三十七丈］云…掩關自娯＝『仏祖歴代通載』巻二〇（T49-695a）に同文が見える。

（五十部友啓）

【二八五】江湖

①敕修清規［上一ノ卅八丈］開山歴代祖忌云、或郷人或江湖舉咒。

＊

『敕修清規』［上一の卅八丈］「開山歴代祖忌」に云く、「或いは郷人、或いは江湖、咒を舉す」と。

＊

○敕修清規［上一ノ卅八丈］開山歴代祖忌云、或郷人或江湖舉咒＝『勅修百丈清規』の「開山歴代祖忌」条（T48-1118c）に同文が見える。

②又尊宿遷化祭次［上二ノ卅丈］、蒙堂次有江湖。

＊

又た「尊宿遷化」の「祭次」［上二の卅丈］に、蒙堂の次に江湖有り。

＊

○尊宿遷化祭次［上二ノ卅丈］＝『勅修百丈清規』の「遷化」条（T48-1128c）の、祭次（＝行列の順序）に記載される。「蒙堂」は『象器箋』【八六】を参照。

③　莊子［三ノ七丈］大宗師云、泉涸魚相與處於陸、相呴以濕、相濡以沫。不如相忘於江湖。

＊

『莊子』［三の七丈］の「大宗師」に云く、「泉涸れて魚相い與に陸に處り、相呴するに濕を以てし、相濡すに沫を以てす。江湖に相忘れんには如かじ」と。

＊

○莊子［三ノ七丈］大宗師云…不如相忘於江湖＝『莊子』の「大宗師第六」に同文が見える。

④忠曰、江湖二水名也。〈文選註［五ノ廿九丈］〉今言江湖者、江外湖邊、本是隱淪士所處。如蓮社高賢傳［孚五十七ノ廿一丈］、周續之曰、心馳魏闕者、以江湖爲桎梏、駱賓王序［集ノ四ノ六丈］曰、廊廟與江湖齊致、范希文記曰、既而動星象歸江湖、是也。故禪士之散處名山大刹之外、江上湖邊、此爲江湖人。或不出世、爲名山大刹住持者、聚會在一處、亦爲江湖衆也。然相傳、以江西馬祖、湖南石頭、往來憧憧、爲解。此説、浸染學家肺腸、可浣濯之難矣。此方、禪林江湖疏題名、曰平沙某、遠浦某等。亦足粗知其字義。如傳燈録［十四ノ四丈］石頭章云、江西主大寂、湖南主石頭。往來憧憧、竝湊二大士之門矣〈止此。〉。則二祖師之法席盛昌。非今隱淪義也。〈又、見文疏門江湖疏處。〉

＊

忠曰く、「江湖は二水の名なり〈『文選の註』［五の廿九丈］〉。今、江湖と言うは、江外湖邊は、本と是れ隱淪の士の處する所なり。『蓮社高賢傳』［孚五十七の廿一丈］の、周續之が、『心、魏闕に馳するは、江湖を以て桎梏と爲す』と曰い、駱賓王が『序』［集の四の六丈］に、『廊廟と江湖とは致を齊うす』と曰い、范希文が『記』に、『既にして星象を動じて江湖に歸える』と曰うが如き、是れなり。故に禪士の名山大刹の外、江上湖邊に散處

するを、此れを江湖の人と爲す。或いは出世して、名山大刹の住持と爲らざる者、聚會して一處に在るを、亦た江湖の衆と爲すなり。然るに相傳えて、『江西の馬祖（＝馬祖道一・大寂禪師）、湖南の石頭（＝石頭希遷）は、往來憧憧』というを以て解を爲す。此の説、學家の肺腸に浸染して、浣濯す可きこと難し。此の方、禪林の江湖の疏に名を題して、『平沙某、遠浦某』等と曰う。亦た粗々其の字義を知るに足れり。『傳燈録』［十四の四丈］の「石頭」の章に、『江西は大寂を主とし、湖南は石頭を主とす。往來憧憧として、並びに二大士の門に湊ると』〈此に止まる。〉と云うが如くんば、則ち二祖師の法席盛昌なり。今の隱淪の義に非ざるなり」と。〈又た、「文疏門」の「江湖疏」の處に見ゆ。〉

＊

○江湖二水名也〈『文選註』［五ノ廿九丈］〉＝『六臣註文選』巻五「呉都賦」の「戈船掩於江湖」の註に、「江湖二水名也」（四部叢刊本・22a~b）とある。

○蓮社高賢傳＝『仏祖統紀』巻二六「淨土立教志第十二」のこと。『続淨土集全書』第一六冊や『説郛』第八五冊などにも収載されている。引用は『仏祖統紀』巻二六の「十八賢伝」の「周続之」条（T49-268b）にそのまま見える。

○駱賓王序＝駱賓王は「初唐の四傑」の一人とされる唐代の詩人。引用は『駱丞集』巻四に見える「晦日楚國寺宴序」（四庫全書本・6a）の一節である。

○范希文記＝北宋代の政治家である范希文（＝范仲淹・九八九～一〇五二）が著した「桐廬郡嚴先生祠堂記」（『范文正集』巻七、また『古文鈔』興文社編集所編・p.38）に同文が見える。

○傳燈録［十四ノ四丈］石頭章云＝『景德伝灯録』巻一四（T51-309b）に同文が見える。

○文疏門江湖疏處＝『象器箋』【一一六八】「江湖疏」条を指す。

（徳重寛道）

【二八六】耆舊

①敕修清規［下一ノ五十丈］日用軌範云、古云、衩祖登溷、草履遊山、莫踐法堂。回互耆舊。

＊

『敕修清規』［下一の五十丈］の「日用軌範」に云く、「古に云く、『衩祖にして溷に登り、草履にして遊山せんに、法堂を踐む莫かれ。耆舊を回互せよ』と」と。

＊

○敕修清規［下一ノ五十丈］＝日用軌範云…回互耆舊＝『勅修百丈清規』巻六（T48-1144b）の「日用軌範」条の割注に同文が見える。

○古云＝『緇門警訓』巻六（T48-1070a）に引かれた「慈受禪師示衆箴規」に同文が見える。

②校定清規［上ノ廿三丈］參前特爲新舊人湯云、請西堂、或大耆舊一人、相伴。

＊

『校定清規』［上の廿三丈］の「參前特爲新舊人の湯」に云く、「西堂、或いは大耆舊一人を請じて、相伴す」と。

＊

○校定清規［上ノ廿三丈］參前特爲新舊人湯云…相伴＝『叢林校定清規総要』巻上（X63-599c）の「二十七進退両班」条に同文が見える。

③備用清規［六ノ十一丈］交代茶云、隨令茶頭請兩班耆舊光伴。

＊

『備用清規』［六の十一丈］の「交代の茶」に云く、「隨いて茶頭をして兩班耆舊を請じて光伴せしむ」と。

＊

○備用清規［六ノ十一丈］交代茶云、隨令茶頭請兩班耆舊光伴＝『禅林備用清規』（X63-643c）の「服交代茶」条に同文が見える。

④華嚴經［五十八ノ四十三丈］離世間品云、見有耆舊久修行人、不起逢迎、不肯承事、是慢業。

＊

『華嚴經』［五十八の四十三丈］の「離世間品」に云く、「耆舊、久修行の人有るを見て、起ちて逢迎せず、肯えて承事せざるは、是れ慢業なり」と。

＊

○華嚴經［五十八の四十三丈］離世間品云＝実叉難陀訳・八十巻本『大方広仏華厳経』巻五八（T10-308b）に同文が見える。

⑤增壹阿含經［十五ノ九丈］云、是時世尊、住尼拘類樹下。成佛未久、將千弟子。是皆耆舊宿長。〈千弟子者、優留比迦葉弟子五百人、江迦葉弟子三百人、伽耶迦葉弟子二百人。〉

＊

『增壹阿含經』［十五の九丈］に云く、「是の時世尊、尼拘類樹の下に住す。成佛して未だ久しからざるに、千弟子を將ゆ、是れ皆な耆舊宿長なり」と。〈千弟子とは、優留比迦葉の弟子五百人、江迦葉の弟子三百人、伽耶迦葉の弟子二百人なり。〉

＊

○『增壹阿含經』［十五ノ九丈］云…是皆耆舊宿長＝瞿曇僧伽提婆訳『増一阿含経』巻一五「高幢品」（T2-622b）に同文が見えるが、「住尼拘類樹下」の前に「在彼河側」の四文字がある。。

○〈千弟子者…伽耶迦葉弟子二百人〉＝例えば『仏本行集経』巻四〇「四第迦葉三兄弟品」（T3-840c）に「第一所謂優婁頻螺迦葉為首、教授五百螺髻弟子、修學仙法、為匠為導、最在前行。第二名為那提迦葉、復領三百螺髻弟子、為首為導。第三名為伽耶迦葉、復領二百螺髻弟子、為首為導。合有千人などとあるのを踏まえたものであろう。

⑥毘尼母論［六ノ十六丈］云、從無臘乃至九臘、是名下座。從十臘至十九臘、是名中座。從二十臘至四十九臘、是名上座。過五十臘已上、國王長者出家人所重、是名耆舊長宿。〈又上座處、引行事鈔。〉

＊

『毘尼母論』［六の十六丈］に云く、「無臘從り乃ち九臘に至るまで、是れを下座と名づく。十臘從り十九臘に至るまで、是れを中座と名づく。二十臘從り四十九臘に至るまで、是れを上座と名づく。五十臘を過ぎて已上は、國王・長者・出家の人の重ずる所なれば、是れを耆舊長宿と名づく」と。〈又た上座の處には、『行事鈔』を引く。〉

＊

○毘尼母論［六ノ十六丈］云…是名耆舊長宿。〈又上座處、引行事鈔。〉＝失訳『毘尼母経』巻六（T24-834c）に同文が見える。末尾割り注の〈又上座處、引行事鈔〉については、【二八七】「上座」の③参照。

⑦阿毘達磨集異門足論云、諸有生年尊長耆舊、是謂生年上座。〈詳于上座。〉

＊

『阿毘達磨集異門足論』に云く、「諸もろの有ゆる生年の尊長耆舊、是れを『生年の上座』と謂う」と。〈「上座」に詳なり。〉

＊

○阿毘達磨集異門足論云＝『阿毘達磨集異門足論』巻四（T26-380b）に同文が見える。「上座」は事項【二八七】。

⑧王充論衡卜筮篇云、夫蓍之爲言、耆也。龜之爲言、舊也。明狐疑之事、當問耆舊也。

＊

王充が『論衡』の「卜筮の篇」に云く、「夫れ蓍の言爲る、耆なり。龜の言爲る、舊なり。狐疑の事を明らめんには、當に耆舊に問うべし」と。

＊

○王充論衡卜筮篇云＝中国後漢時代の王充が著した『論衡』巻二四の「卜筮篇」に同文が見える。

⑨晉習鑿齒［郛五十八］、作襄陽耆舊傳。

＊

晉の習鑿齒［郛五十八］、『襄陽耆舊傳』を作る。

＊

○晉習鑿齒［郛五十八］、作襄陽耆舊傳＝『襄陽耆旧伝』一巻。『襄陽耆旧記』『襄陽記』ともいう。『漢晉春秋』の著者としても知られる、東晉の習鑿齒が編纂した襄陽郡（現在の襄陽市）の地方志。［郛五十八］とあるように、『説郛』弓第五十八に収載されており、その他、『五朝小説』「魏晉小説雑伝家」、『旧小説』甲集でも見ることができる。

⑩杜工部集［千家八ノ廿三丈］贈別鄭錬赴襄陽詩云、爲於耆舊内、試覓姓龐人。

＊

『杜工部集』の［『千家』八の廿三丈］「鄭錬が襄陽に赴くに贈別す」の詩に云く、「爲に耆舊の内に於いて、試みに龐を姓とする人を覓めよ」と。

＊

○杜工部集＝中国盛唐の詩人である杜甫の漢詩集。［千家］とは『集千家注杜工部詩集』二十巻を指す。四庫全書本の該書では巻八（19a）に見え、その他、『分門集註杜工部詩』二十五巻では巻二一（四部叢刊本・28a）に収載されている。原詩の全文は以下の通り。「戎馬交馳際、柴門老病身。把君詩過日、念此別驚神。地闊峨眉晚、天高峴首春、為於耆旧内、試覓姓龐人。」

（徳重寛道）

【二八七】上座

①廣燈録［十三ノ十五丈○会元十一ノ廿三丈］、臨濟玄法嗣、有定上座𩜁上座。

＊

『廣燈録』［十三の十五丈○『会元』十一の廿三丈］、臨濟の玄（＝臨濟義玄）の法嗣に、定上座・𩜁

上座有り。

＊

○廣燈録［十三ノ十五丈○会元十一ノ廿三丈］、臨濟玄法嗣、有定上座𪜈上座＝『天聖広燈録』巻一三（X78-483a）

・『五燈会元』巻一一（X80-227a）に定上座と𪜈上座が立伝されている。

②傳燈録［十九ノ廿六丈○会元七］、雪峯存法嗣、有太原孚上座。

＊

『傳燈録』［十九の廿六丈○『会元』七］、雪峯の存（＝雪峰義存）の法嗣に、太原の孚上座有り。

＊

○傳燈録［十九ノ廿六丈○会元七］、雪峯存法嗣、有太原孚上座＝『景徳伝燈録』巻一九（T51-359c）に立伝され、『五燈会元』巻七（X80-145a）などにその名が見える。

③行事鈔［下三ノ二卷廿一丈］云、毘尼母云、二十夏至四十九夏、名上座。〈詳于耆舊。〉　資持記云、母論四名、局據夏限。若如五分、取上無人。隨時受稱、則通大小。今時禪衆、無論老少、例稱上座。不知孰爲下座乎。

『行事鈔』［下三の二卷廿一丈］に云く、「『毘尼母』に云く、『二十夏より四十九夏に至るまでを、上座と名づく』と」と。〈「耆舊」に詳らかなり。〉　『資持記』に云く、「『母論』の四名、局りて夏限に據る。若し『五分』の如くんば、上に人無きに取る。時に隨い稱を受けば、則ち大小に通ず。今時の禪衆、老少を論ずること無く、例して上座と稱す。知らず、孰をか下座と爲るを」と。

＊

○行事鈔［下三ノ二卷廿一丈］云＝道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』巻下（T40-131b）に同文が見える。

前項【二八六】「耆舊」の⑥の注を参照。

○資持記云＝釋元照撰『四分律行事鈔資持記』巻下「釈僧像篇」（T40-394b）に同文が見える。文中の『母論』とは『毘尼母経』を、『五分』とは『五分律』を指す。

④阿毘達磨集異門足論［第四　○心命十五ノ廿二丈考］云、三上座者、謂生年上座、世俗上座、法性上座。云何生年上座。答、諸有生年尊長耆舊、是謂生年上座。云何世俗上座。答、如有知法富貴長者、大財大位、大族大力、大眷屬大徒衆、雖年二十、皆應和合推爲上座。云何法性上座。答、諸受具戒、耆舊長宿、是謂法性上座。有説、此亦是生年上座。所以者何。佛説、出家受具足戒、名眞生故。若有苾芻、得阿羅漢、名爲法性上座。

＊

『阿毘達磨集異門足論』［第四　○心命十五ノ廿二丈考］に云く、「三の上座とは、謂く、生年の上座、世俗の上座、法性の上座なり。云何なるか生年上座なる。答う、諸もろの有ゆる生年の尊長耆舊、是れを生年上座と謂う。云何なるか世俗上座なる。答う、法を知る富貴の長者、大財大位、大族大力、大眷屬大徒衆有るが如き、年二十なりと雖ども、皆な應に和合して推して上座と爲すべし。云何なるか法性の上座なる。答う、諸もろの具戒を受けたる耆舊長宿、是れを法性の上座と謂う。有るが説く、此れ（＝法性上座）も亦た是れ生年の上座なり。所以の者は何ぞ。佛説きたまわく、『出家して具足戒を受る

を、眞生と名づくるが故に。若し苾芻有り、阿羅漢を得れば、名づけて法性の上座と爲す』と」と。

＊

○阿毘達磨集異門足論［第四　○心侖十五ノ廿二丈考］云…名爲法性上座＝『阿毘達磨集異門足論』巻四「三法品」（T26-380b）の一段を踏まえるが、一部削除改変されている。（以下、《　》は削除された部分）

「三上座者。謂生年上座、世俗上座、法性上座。云何生年上座。答、諸有生年尊長耆舊、是謂生年上座。云何世俗上座。答、如有知法富貴長者、《共立制言。諸有知法、》大財大位、大族大力、大眷属、大徒衆、《勝我等者我等、皆応推為上座。供養恭敬、尊重賛歎。由此因縁。》雖年二十、《或二十五、若能知法、得大財位、大族大力、有大眷属、大徒衆者、》皆応和合、推為上座。《供養恭敬、尊重讃歎。如諸国土城邑王都。其有多聞妙解算數弁才書印、或隨一一工巧業所。勝余人者、皆共和合推為上座、供養恭敬、尊重讃歎。如商侶中有、多財者衆人、和合推為上座、供養恭敬、尊重讃歎。如得為王或大臣等、衆人皆共、供養恭敬、尊重讃歎。如難陀王長髪王、種欲与戦争。召馬勝王、刹帝利種、重賜財宝、令其示現種種技能。知彼勝已。告大臣曰、封主、当知吾欲敬礼刹帝、利種馬勝王足。大臣白言、天不応礼刹帝利、種馬勝王足。所以者何。彼是臣佐君、不応礼臣佐之足。如是等事、有無量種。今此意説長髪王種。難陀王時、世俗上座。》云何法性上座。答、諸受具戒、耆舊長宿、是謂法性上座。有説、此亦是生年上座。所以者何。仏説、出家受具足戒、名真生故。若有苾芻、得阿羅漢、《諸漏永盡、已作所作、已弁所弁、棄諸重擔、逮得己利、盡諸有結、正智解脱。心善自在、此中意説。如是》名為法性上座。」　尚、典拠の書き入れにある［心侖十五ノ廿二丈考］は『阿毘曇心論』（T 28所収）を指すと思われるが、『心論』は四巻本であり「十五」に該当しない。待考。

⑥釋氏要覽［上ノ十三丈］云、五分律云、齋幾名上座。佛言、上更無人名上座。十誦律云、具十法名上座。謂、有住處〈言住處者、婆沙論云、謂道及果空、三摩地、能引彼力殊勝、能令身心安住不動。故名上座住處矣。〉、無畏、無煩惱、多知識多聞、辨言具足、義趣明了、聞者信受、善能安庠入他家、能爲白衣説法、令他捨惡從善、自具四諦法樂、無有所乏、名上座。　律中、僧坊上座〈即律三綱上座〉、僧上座〈即壇上上座、或堂中首座〉、別房上座〈即今禪居諸寮首座〉、住家上座〈即計齋席上座〉。　婆沙論云、夫上座者、心安住故、不爲世違順傾動。是名上座。

＊

『釋氏要覽』［上の十三丈］に云く、「『五分律』に云く、『幾ばくを齊りて上座と名づくる。佛の言く、上に更に人無きを上座と名づく』と。『十誦律』に云く、『十法を具するを上座と名づく。謂く、住處有り〈住處と言うは、『婆沙論』に云く、『謂く、道及び果空、三摩地、能く彼の力の殊勝を引き、能く身心をして安住不動ならしむ。故に上座の住處と名づく』と。〉、畏れ無く、煩惱無く、多知識多聞、辨言具足、義趣明了、聞く者は信受し、善く能く安庠として他家に入って、能く白衣の爲に法を説きて、他をして惡を捨て善に從わしめ、自ら四諦の法樂を具して、乏しき所有ること無きを、上座と名づく』と。　律の中に、僧坊上座〈即ち律の三綱上座なり〉、僧上座〈即ち壇上の上座、或いは堂中の首座〉、別房上座〈即ち今の禪居の諸寮の首座〉、住家上座〈即ち齋席を計する上座〉あり。　『婆沙論』に云く、『夫れ上座とは、心安住するが故に、世の違順を爲し傾動せられず。是れを上座と名づく』と」と。

＊

○釋氏要覽［上ノ十三丈］云、五分律云…是名上座＝『釈氏要覧』巻上（T54-261a）にこの段落全体について同文が見える。但し、「十誦律云」の前に、以下の一節を欠いている。「毘尼母云、從無夏至九

夏、是下座。自十夏至十九夏、是中座自二十夏。至四十夏、是上座。五十夏已上一切沙門之所尊、敬名耆宿〈準百一羯磨云、雖夏臘六十、応須是知律。有戒行者、方名耆宿。〉。毘婆沙論云、有三上座。一生年上座、即尊長耆旧具戒名真生故。二世俗上座、即知法富貴、大財大位、大族大力、大眷属。雖年二十、皆応和合推為上座。三法性上座、即阿羅漢。頌曰、心掉多綺語、染意乱思惟、雖久住林園、而非真上座。具戒智正念、寂静心解脱、彼於法能観、是名真上座。」

○五分律云…上更無人名上座＝『五分律』には見当たらない。

○十誦律云…無有所乏、名上座＝『十誦律』巻五〇（T23-368b）に、「有十法名上座。有所住処。無畏無能遮者、有長老息煩悩。多知識有名聞、能令他生浄心。弁才具足無能勝者、無有滞礙義趣明了。聞者信受、善能安詳入他家、能為白衣説深妙法、分別諸道。勧令行施斎戒、令他捨悪従善、自具四諦。現法安楽、無有所乏。是名上座十法。」とあるのを踏まえる。

○律中、僧坊上座〈即律三綱上座〉…僧坊上座〈即律三綱上座〉、僧上座〈即壇上上座、或堂中首座〉、別房上座〈即今禪居諸寮首座〉、住家上座〈即計齋席上座〉＝『十誦律』巻五七「比尼誦行法之餘」に、「僧上座法」「僧坊上座法」「別房上座法」（以上 T23-418c~419a）、「住家上座法」（T23-422c）が列挙されている。

○婆沙論云＝『阿毘達磨大毘婆沙論』巻一〇四（T27-539c）に「若知諸法是空非我身、及覚慧皆不動揺、身心安静故名上座。故説空是上座住処。復次、諸瑜伽師、若住空定其心安住、不為世間適意不適意、可愛非可愛、饒益非饒益、楽具苦具之所傾動。是故、説為上座住処。夫上座者、心安住故」とあるのを踏まえる。

⑦ 祖庭事苑説、見職位類前堂首座處。

＊

『祖庭事苑』の説、「職位類」の「前堂首座」の處に見ゆ。

＊

○祖庭事苑説、見職位類前堂首座處＝『祖庭事苑』巻八（X64-431a）に「首座、即古之上座也。梵語悉替那。此云上座。此有三焉。『集異足毗曇』曰、『一、生年為耆年。二、世俗財名与貴族。三、先受戒及証道果』。古今立此位、皆取其年徳幹局者充之」とあるのを指す。『象器箋』【三八七】「前堂首座」を参照。

⑧ 上座又作尚座。 従容録〔三ノ五十三丈〕云、曹山問徳尚座、佛眞法身、猶若虚空＝〈云云〉。〈曹山録作強上座。〉

＊

上座は又た尚座に作る。 『従容録』〔三の五十三丈〕に云く、「曹山が徳尚座に問う、『佛眞法身、猶お虚空の若し〈云云〉』と」と。〈『曹山録』は強上座に作る。〉

＊

○従容録〔三の五十三丈〕云…猶若虚空〈云云〉＝『万松老人評唱天童覚和尚頌古従容庵録』巻三（T48-259c）を指す。尚、割注の指摘は大正蔵本『曹山録』（T47-527c、日本・慧印校訂）には見い出せないが、『続古尊宿語要』巻二「曹山寂禪師語」条（Z118-896b）や『五燈会元』巻一三「撫州曹山本寂禪師」条（X80-265c）などは「強上座」（Z118-896b）に作る。

（徳重寛道）

【二八八】勤舊（キンギュウ）

①勅修清規［上一ノ十九丈］聖節云、坐堂西堂勤舊、蒙堂諸寮、並外堂坐。

＊

勅修清規［上一の十九丈］「聖節」に云く、「坐堂するとき、西堂の勤舊、蒙堂の諸寮は、並びに外堂に坐す」と。

＊

○勅修清規［上一ノ十九丈］聖節云、坐堂…並外堂坐＝『勅修百丈清規』巻一「聖節」（T48-1113a）に、「首座後入就坐。西堂勤旧蒙堂諸寮並外堂坐」とある。なお文中の事項のうち、「坐堂」は【六二三】、「西堂」は【二八一】、「蒙堂」は【八六】、「外堂」は【七四】に立項されている。

②舊説云、東序都寺退職者、曰勤舊。蓋知事勤山門世務。故曰勤。已退職。故曰舊也。

＊

舊説に云く、「東序の都寺の職を退く者を、『勤舊』と曰う。蓋し知事は山門の世務を勤む。故に『勤』と曰う。已に職を退く。故に「舊」と曰うなり」と。

＊

○舊説云、東序都寺退職者、坐堂…已退職故曰舊也＝舊説にあたる『勅修百丈清規抄』巻一・一三丁裏（駒澤大学電子貴重書庫・禅籍善本図録）には、「勤旧、都寺何トソ」とある。なお文中の事項のうち、「都寺」は【四四〇】、「知事」は【四三六】に立項されている。

③勅修清規［下一ノ五丈左］都監寺云、所在單寮、勤舊不滿五六人。　又［下一ノ十二丈］兩序進退云、近來諸方大小勤舊、動至百數。僕役倍之。脱歡丞相、額定歳請知事員數。正爲此也。

＊

勅修清規［下一の五丈左］「都監寺（ズ）」に云く、「所在の單寮に、勤舊、五六人に滿たず」と。又た［下一の十二丈］「兩序進退」に云く、「近來の諸方大小の勤舊、動（やや）もすれば百數に至る。僕役、之に倍す。脱歡丞相の、歳〻に知事を請じて員數を額定するは、正に此れが爲（ため）なり」と。

＊

○勅修清規［下一ノ五丈左］都監寺云、所在單寮、勤舊不滿五六人＝『勅修百丈清規』巻四「都監寺」（T48-1132a）に、全く同文が見える。なお文中の事項のうち、「単寮」は【二八九】に立項されている。

○又［下一ノ十二丈］兩序進退云、近來諸方…僕役倍之＝文中の引用は、次の『勅修百丈清規』巻四「両序進退」（T48-1134a）の一段を踏まえるが、一部削除されている（《　》は削除された部分）。「近来諸方大小勤旧、動至百数。僕役倍之。《而僧堂間無一人。泰定間》脱歓丞相《領行宣政院、分上中下三等寺院》、額定歳請知事員数。正為此也」。なお文中の事項のうち、「知事」は【四三六】に立項されている。

④忠曰、此等語、皆可以證知事退職者曰勤舊矣。

＊

忠曰く、「此れ等の語、皆な以て知事退職の者を『勤舊』と曰うことを證す可し」と。

⑤又有侍者退職、曰勤舊。有藏主退職曰勤舊。有書狀退職曰勤舊。

＊

又た「侍者の退職せるを『勤舊』と曰う有り。藏主の退職せるを『勤舊』と曰う有り。書状の退職せるを『勤舊』と曰う有り」と。

＊

○又有侍者退職…有書状退職曰勤舊＝文中の事項のうち、「藏主」は【四〇〇】に立項されている。

⑥忠曰、勤舊不止稱東序退職、而西序退職、亦稱勤舊。故敕修清規［下二ノ八丈］方丈小坐湯云、第二座分四出。頭首一出、知事二出、西序勤舊三出、東序勤舊四出。〈止此。〉故知勤舊名、通東西序。

＊

忠曰く、「勤舊は、止だに東序の退職を稱するのみにあらずして、西序の退職も、亦た『勤舊』と稱す。故に、『敕修清規』［下二の八丈］「方丈の小坐湯」に云く、『第二座は四出に分かつ。頭首は一出、知事は二出、西序の勤舊は三出、東序の勤舊は四出〈此こに止まる。〉』と。故に知る、勤舊の名は、東西の序に通ずることを」と。

＊

○忠曰、勤舊不止稱東序退職…通東西序＝文中の引用部「第二座分四出。頭首一出。知事二出西序勤舊三出。東序勤舊四出」は、『勅修百丈清規』巻七「方丈小座湯」（T48-1152b）に全く同文が見える。なお文中の事項のうち、「東序西序」は【三八三】に、「頭首」は【三八四】に、「知事」は【四三六】に立項されている。

⑦　又須與單寮及前資合看。

＊

又た須く「單寮」及び「前資」と合い看るべし。

＊

○又須與單寮及前資合看＝文中の事項のうち、「単寮」は【二八九】に、「前資」は【二九二】に、「知事」は【四三六】に立項されている。

（丸毛俊宏）

【二八九】單寮

①敕修清規［上二ノ二丈左］小參云、客頭行者喝請云、方丈和尚、請西堂兩班單寮耆舊蒙堂侍者禪客、即今就寢堂獻湯。

＊

『敕修清規』［上二の二丈左］「小參」に云く、「客頭行者、喝請して云く、『方丈和尚、西堂の兩班・單寮の耆舊・蒙堂の侍者・禪客を請じて、即今、寢堂に就いて獻湯す』と」と。

＊

○敕修清規［上二ノ二丈左］小參云、客頭行者喝請云…即今就寢堂獻湯＝『勅修百丈清規』巻二「小參」（T48-1119c）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「客頭行者」は【五六八】に、「方丈和尚」は【二七二】に、「西堂」は【二八一】に、「両班」は【三八二】に、「耆舊」は【二八六】に、「蒙堂」は【二九〇】に、「禪客」は【四二六】に、「寢堂」は【四四】に立項されている。

②敕修清規［上二ノ十三丈右］受嗣法人煎點云、令客頭請兩序單寮諸寮。

＊

『敕修清規』［上二の十三丈右］「嗣法の人の煎點を受くる」に云く、「客頭をして兩序の單寮諸寮を請ぜしむ」と。

＊

○敕修清規［上二ノ十三丈右］受嗣法人煎點云、令客頭請兩序單寮諸寮＝『勅修百丈清規』巻二「受嗣法人煎点」（T48-1123b）に、全く同文が見える。

③ 品字箋［又見寮舎処］云、同官爲寮。文選註、寮小窗也。楊升菴曰、古人謂同官爲寮。亦指齋署同窗爲義。

＊

『品字箋』［又た「寮舎」の処に見ゆ］に云く、「同官を寮と爲す」と。『文選』の註に、「寮は小窗なり」と。楊升菴が曰く、「古人、同官を謂いて寮と爲す。亦た齋署の同窗を指して義と爲す」と。

＊

○品字箋［又見寮舎処］云、同官爲寮…亦指齋署同窗爲義＝『諧声品字箋』五七巻・首一巻は、清の虞徳升撰・虞嗣集補註で国立国会図書館に所蔵されているが、未見。「寮小窗也」は、『文選』（李善注）巻二「張平子西京賦」（『文選』中国古典文学叢書巻一、p.57、上海古籍出版社）に、全く同文が見える。また、楊慎（一四八八～一五五九）の『升庵集』巻六三「寮為小窓」（四庫全書本・8b）に「亦」の一字を欠く以外、全く同文がある。「寮舎」は【八四】に立項されている。

④敕修清規［下一ノ六丈］都監寺云、都寺非三次、不得居單寮。再請出充者、公界封鑰元房、以避嫌疑。

＊

『敕修清規』［下一の六丈］の「都監寺」に云く、「都寺、三次に非ざれば、單寮に居することを得ず。再び請し出して充つる者をば、公界より元房を封鑰して、以て嫌疑を避くべし」と。

＊

○敕修清規［下一ノ六丈］都監寺云、都寺非三次…以避嫌疑＝『勅修百丈清規』巻四「都監寺」（T48-1132a）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「都寺」は【四四〇】に、「公界」は【一一】に立項されている。

⑤ 忠曰、頭首知事、退職居獨房、及名徳西堂首座、居獨房者、皆稱單寮。言單身專寮、無同舍者也。

＊

忠曰く、「頭首知事、退職して獨房に居り、及び名徳の西堂首座、獨房に居する者、皆な單寮と稱す。言うこころは、單身、寮を專らにして、同舍の者の無きなり」と。

＊

○忠曰、頭首知事…無同舍者也＝文中の事項のうち、「頭首」は【三八四】に、「知事」は【四三六】に、「名徳西堂」は【三六六】に、「知事」は【四三六】に立項されている。

⑥敕修清規［下一ノ卅六丈］西堂首座掛搭云、如大方名徳、欲作住計、語次露意。住持度有

單寮可處、及行坐位次、上下安順、則留之。

＊

『敕修清規』［下一の卅六丈］「西堂首座の掛搭」に云く、「如（も）し大方の名德、住計を作さんと欲せば、語次に意を露わすべし。住持、單寮の處す可き有り、及び行坐の位次を度（ハカ）りて、上下安順ならば、則ち之を留むべし」と。

＊

○敕修清規［下一ノ卅六丈］西堂首座掛搭云、如大方名德…則留之＝『勅修百丈清規』巻五「西堂首座掛搭」（T48-1141b）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「住持」は【三六五】に立項されている。

⑦備用清規［八ノ六丈］西堂首座掛搭云、住持兩班、送歸單寮。若辭即蒙堂。亦兩班相送。

＊

『備用清規』［八の六丈］の「西堂首座の掛搭」に云く、「住持・兩班、送りて單寮に歸せしむ。若し辭すれば蒙堂に即（つ）かしむ。亦た兩班相送る」と。

＊

○備用清規［八ノ六丈］西堂首座掛搭云、住持兩班…亦兩班相送＝『禪林備用清規』巻八「西堂首座掛搭」（X63-651c）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「住持」は【三六五】に立項されている。

⑧　此是西堂首座、歸單寮者。

＊

此れは是れ西堂首座の、單寮に歸する者なり。

＊

○此是西堂首座、歸單寮者＝文中の事項のうち、「西堂」は【二八一】に立項されている。

⑨敕修清規［下一ノ十二丈］兩序進退云、古知事職滿、鳴椎白衆、告退歸堂隨衆。初無單寮榻位。　又都監寺［下一ノ五丈］云、所在單寮、勤舊不滿五六人。〈忠曰、蓋知事難得其人。故退稱勤舊、而居獨房者、亦少也。○知事告退歸堂者、如靈隱都寺、估唱衣物歸錢常住挿單僧堂。見靈像門土地神。〉

＊

『敕修清規』［下一の十二丈］「兩序進退」に云く、「古は知事、職滿つれば、椎を鳴らし、衆に白（もう）して退くを告げ、歸堂して衆に隨う。初めより單寮の榻位無し」と。　又た「都監寺」［下一の五丈］に云く、「所在の單寮に、勤舊五六人に滿たず」と。〈忠曰く、「蓋し知事、其の人を得難し。故に退きて勤舊と稱して、獨房に居る者も、亦た少なきなり。○知事、退を告げて歸堂すとは、靈隱の都寺、衣物を估唱して錢を常住に歸し、僧堂に挿單するが如し。靈像門の「土地神」に見ゆ」と。〉

＊

○敕修清規［下一ノ十二丈］兩序進退云、古知事職滿…初無單寮榻位＝文中の引用は、次の『勅修百丈清規』巻四「両序進退」（T48-1134a）の一段を踏まえるが、一部削除改変されている（《　》は削除された部分、〈＝　〉は変更された部分）。「〈＝古〉知事《古規只列監院・維那・典座・直歳・庫頭五員而已。》職滿鳴椎、白衆告退、帰堂随衆。初無単寮榻位」。なお、文中の事項のうち、「知事」は【四三六】に立項されている。

○又都監寺［下一ノ五丈］云、所在單寮、勤舊不滿五六人＝『勅修百丈清規』巻四「都監寺」（T48-1132a）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「単寮」は【二八九】に立項されている。

○忠曰、…見靈像門土地神＝割り注末尾に指摘する霊像門「土地神」は、『禅林象器箋』巻四「第五類

霊像門 下」の【二五五】に立項されている。また、割り注の文中の事項のうち、「知事」は【四三六】に、「都寺」は【四四〇】に、「估唱」は【一〇九七】に、「常住」は【一〇】に、「估唱」は【一〇九七】に、「僧堂」は【五〇】に、「挿単」は【六八一】に立項されている。

⑩ 此是知事退職、歸單寮者。

＊

此れは是れ知事退職して、單寮に歸する者なり。

＊

○此是知事退職、歸單寮者＝文中の事項のうち、「知事」は【四三六】に立項されている。

⑪ 備用清規［六ノ五丈右］兩班進退云、送舊首座都寺、歸單寮。

＊

『備用清規』［六の五丈右］「兩班進退」に云く、「舊（もと）の首座都寺を送りて、單寮に歸せしむ」と。

＊

○備用清規［六ノ五丈右］兩班進退云、送舊首座都寺、歸單寮＝『禪林備用清規』巻六「両班進退」（X63-642a）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「都寺」は【四四〇】に立項されている。

⑫ 此是頭首退職、歸單寮者。

＊

此れは是れ頭首退職して、單寮に歸する者なり。

＊

○此是頭首退職、歸單寮者＝文中の事項のうち、「頭首」は【三八四】に立項されている。

⑬ 又與蒙堂合看。

＊

又た「蒙堂」と合わせ看よ。

＊

○又與蒙堂合看＝『禪林象器箋』巻二「第二類殿堂門 下」の「蒙堂」【八六】を参照のこと。

⑭ 人天寶鑑［六十三丈］云、無畏久法師、徧歷禪會。嘗入徑山佛日之室。出世清修。學者雲集。師患後生單寮、縱恣、闢屋爲衆堂、淨几明窻、蒲褥禪板、洒然有古叢社之風。〈法久法師天台宗。『佛祖統紀』［十五ノ十三丈］爲慧覺玉法師法嗣。〉

＊

『人天寶鑑』［六十三丈］に云く、「無畏の久法師、禪會に徧歷す。嘗て徑山佛日の室に入る。清修に出世す。學者雲集す。師、後生の單寮にして、縱恣なるを患（うれ）えて、屋を闢いて衆堂を爲（つく）る。淨几明窻、蒲褥禪板、洒然として古の叢社の風有り」と。〈法久法師は天台宗なり。『佛祖統紀』［十五の十三丈］に、慧覺玉法師の法嗣と爲す。〉

＊

○人天寶鑑［六十三丈］云、無畏久法師…洒然有古叢社之風＝文中の引用は、次の『人天宝鑑』巻一（X87-18c）の一段を踏まえるが、一部削除されている（《 》は削除された部分）。「無畏久法師、《餘姚人。依慧

覚璧公得旨、後》偏歴禅会。嘗入径山仏日之室。《仏日夜坐必召師至。命説天台旨趣及楞厳大意、深遇之。出世清修。学者雲集。師患後生単寮縦恣。闢屋為衆堂、浄几明窓蒲褥禅板、洒然有古叢社之風」。なお、文中の事項のうち、「禅板」は【一五六七】に立項されている。

○法久法師天台宗…爲慧覺玉法師法嗣＝『仏祖統紀』巻一五（T49-225a）に、全く同文が見える。

⑮　此教家有單寮稱也。

＊

此れ教家にも「單寮」の稱有るなり。

（丸毛俊宏）

【二九〇】蒙堂

①敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、集衆坐堂、西堂勤舊・蒙堂諸寮、竝外堂坐。

＊

『敕修清規』［上一の十九丈］の「聖節」に云く、「衆を集めて坐堂するに、西堂勤舊・蒙堂諸寮は、竝びに外堂に坐す」と。

＊

○敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、集衆坐堂…並外堂坐＝文中の引用は、次の『勅修百丈清規』巻一「聖節」（T48-1113a）の一段を踏まえるが、一部削除されている（《　》は削除された部分）。「集衆坐堂、《如尋常坐禅向内坐、鼓鳴則転身向外坐。頭首先集堂外候鼓鳴、即入堂。首座後入就坐、》西堂勤旧・蒙堂諸寮、並外堂坐」。なお、文中の事項のうち、「坐堂」は【六一三】に、「西堂」は【二八一】、「勤旧」は【二八八】、「蒙堂」は【八六】、「外堂」は【七四】に立項されている。

②　蒙堂名、基于大覺故事。〈見殿堂門蒙堂。〉後來、兩序退職者居之。

＊

蒙堂の名は、大覺（＝大覚懐璉）の故事に基づく。〈殿堂門の「蒙堂」に見ゆ。〉後來、兩序退職の者、之に居す。

＊

○蒙堂名、基于大覺故事。〈見殿堂門蒙堂。〉後來、兩序退職者居之＝文中の引用は、『禅林象器箋』巻二「第二類殿堂門 下」の「蒙堂」【八六】を参照とあり、大覚の故事について触れ、『月江正印禅師語録』巻一（X71-125a）にある「大覚禅師忌拈香。代円通応詔而起、為九峰草疏而来。対使者、焚却龍脳之鉢、創蒙堂、如筑黄金之台。此是大覚老人、平生受用不尽底三昧。雖相去二三百載、而声光煒燁、猶百千之迅雷。稽首僧伽真古仏、鄮峰千古碧崔嵬」を引用する。

③敕修清規［下一ノ六丈］都監寺云、監寺非三次、不歸蒙堂。

＊

『敕修清規』［下一の六丈］「都監寺」に云く、「監寺、三次に非ざれば、蒙堂に歸らず」と。

＊

○敕修清規［下一ノ六丈］都監寺云、監寺非三次、不歸蒙堂＝『勅修百丈清規』巻四「都監寺」（T48-1132a）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「監寺」は【四四五】に立項されている。

④　舊説［鈔八ノ卅二丈］曰、三度充都寺者、得退歸單寮、此謂單寮。三度充監寺者、得退

歸蒙堂、此謂蒙堂。

＊

『舊説』[『鈔』八ノ卅二丈]に曰く、「三度、都寺に充つる者、退きて單寮に歸るを得る、此れを『單寮』と謂う。三度、監寺に充つる者、退きて蒙堂に歸るを得る、此れを『蒙堂』と謂う」と。

＊

○舊説[鈔八ノ卅二丈]曰、三度充都寺者…此謂蒙堂＝舊説にあたる『勅修百丈清規抄』巻八・三十二丁裏（駒澤大学電子貴重書庫・禅籍善本図録）には、「監寺モ三度ナラズハ、蒙堂テハアルマイソ。都寺モ三度ヘズハ、単寮テハアルマイソ」とある。なお文中の事項のうち、「都寺」は【四四〇】に、「単寮」は【八八】・【二八九】に、「監寺」は【四四五】に、立項されている。

⑤ 忠曰、都寺退職居單寮者、稱單寮衆。監寺已下知事退職、居蒙堂者、稱蒙堂衆。今按後堂已下頭首退職者、亦須居蒙堂。得稱蒙堂。證如次引。

＊

忠曰く、「都寺の退職して單寮に居する者を、單寮衆と稱す。監寺已下の知事、退職して蒙堂に居する者を、蒙堂衆と稱す。今、按ずるに、後堂已下の頭首退職する者も、亦た須く蒙堂に居して、蒙堂と稱するを得べし。證は次に引くが如し」と。

＊

○忠曰、都寺退職居單寮者、…證如次引＝文中の事項のうち、「都寺」は【四四〇】に、「単寮」は【八八】・【二八九】に、「監寺」は【四四五】に、「知事」は【四三六】に、「頭首」は【三八四】に、立項されている。

⑥敕修清規[下一ノ十三丈]兩序進退云、各喝云、大衆送舊首座・都寺歸寮。鳴鐘送賀畢、各喝云、兩班勤舊、送以次舊頭首・知事、歸蒙堂前資。

＊

『敕修清規』[下一の十三丈]「兩序進退」に云く、「各おの喝して云く、『大衆、舊の首座・都寺を送りて寮に歸せよ』と。鐘を鳴らし送賀し畢わりて、各おの喝して云く、『兩班勤舊、以次の舊の頭首・知事を送りて、蒙堂前資に歸せよ』と」と。

＊

○敕修清規[下一ノ十三丈]兩序進退云、各喝云…歸蒙堂前資＝文中の引用は、次の『勅修百丈清規』巻四「両序進退」（T48-1134b）の一段を踏まえるが、一部削除されている（《 》は削除された部分）。「各喝云、大衆送旧首座都寺帰寮。《亦》鳴鍾送賀畢。各喝云、両班勤旧、送以次旧頭首知事、帰蒙堂前資」。なお、文中の事項のうち、「大衆」は【三三一】に、「両班」は【三八二】、「勤旧」は【二八八】に立項されている。

⑦ 忠曰、首座前已送畢。可知以次舊頭首者、後堂已下而歸蒙堂也。又都寺前已送畢。可知以次舊知事者、副寺已下、而歸前資也。〈監寺歸蒙堂。〉

＊

忠曰く、「首座は前に已に送り畢わりぬ。知る可し、『以次の舊の頭首』とは、後堂已下にして、蒙堂に歸するなり。又た都寺は前に已に送り畢わりぬ。知る可し、『以次の舊の知事』とは、副寺已に下にして、前資に歸するなり」と。〈監寺は、蒙堂に歸す。〉

＊

○忠曰、首座前已送畢…監寺歸蒙堂＝文中の事項のうち、「都寺」は【四四〇】に、「知事」は【四三六】、「副寺」は【四五一】に立項されている。

⑧ 舊説［敕鈔八ノ二丈］曰、都寺是大蒙堂、而居後堂上。

＊

『舊説』［『敕鈔』八の二丈］に曰く、「都寺は是れ大蒙堂にして、後堂の上に居る」と。

＊

○舊説［敕鈔八ノ二丈］曰、都寺是大蒙堂、而居後堂上＝旧説にあたる『勅修百丈清規抄』巻八・二丁表（駒澤大学電子貴重書庫・禅籍善本図録）には、「都寺ハ大蒙堂テ、後堂ノ上ニ居ソ」とある。なお文中の事項のうち、「都寺」は【四四〇】に立項されている。

⑨ 敕修清規［下二ノ三丈］出圖帳云、除單寮西堂・首座勤舊、排板頭外。其餘竝依戒臘。舊以送蒙堂者、排副鉢。後因爭競不排。

＊

『敕修清規』［下二の三丈］「圖帳を出す」に云く、「單寮西堂・首座勤舊を板頭に排するを除くの外、其の餘は竝びに戒臘に依る。舊は蒙堂に送る者を以て、副鉢に排しき。後に爭競に因りて排せず」と。

＊

○敕修清規［下二ノ三丈］出圖帳云、除單寮西堂…後因爭競不排＝『勅修百丈清規』巻七「出図帳」（T48-1150c）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「単寮」は【八八】・【二八九】に、「西堂」は【二八一】、「勤旧」は【二八八】に、「戒臘」は【一七五】に立項されている。

⑩ 忠曰、舊時、則以蒙堂衆、排於單寮西堂首座勤舊之傍、此爲副鉢位。後爲其生爭競、終停不排之。余謂、既以蒙堂、排板頭傍。則可知蒙堂位、卑於單寮西堂首座勤舊矣。

＊

忠曰く、舊時は、則ち蒙堂衆を以て、單寮西堂・首座勤舊の傍らに排しき。此れを副鉢位と爲す。後に其の爭競を生ずるが爲に、終に停めて之を排せず。余謂えらく、既に蒙堂を以て、板頭の傍らに排せば、則ち蒙堂の位、單寮西堂・首座勤舊よりも卑きことを知る可し」と。

＊

○忠曰、舊時…卑於單寮西堂首座勤舊矣＝文中の事項のうち、「単寮」は【八八】・【二八九】に、「西堂」は【二八一】に、「勤舊」は【二八八】に、「副鉢位」は【一四一】に立項されている。

⑪ 古林茂和尚拾遺録［六十一丈］、送林藏主入虎丘蒙堂。頌云、一氣轉得大藏教、衲僧覷著眼睛枯。中峯故是口門窄。虎阜不妨牙齒疎、放去乾坤千句有。收來佛祖一毫無。飜身百草頭邊看。大地從教似燄爐。

＊

『古林の茂（＝古林清茂）和尚拾遺録』［六十一丈］「林藏主、虎丘の蒙堂に入るを送る」の頌に云く、「一氣に轉じ得たり大藏教。衲僧覷著して眼睛枯る。中峯故と是れ口門窄し。虎阜（丘）妨げず、牙齒疎なることを。放去すれば乾坤千句有り。收來すれば佛祖一毫も無し。百草頭邊に飜身して看よ。大地從教（さもあらばあ）れ燄爐に似たることを」と。

＊

○古林茂和尚拾遺録［六十一丈］、送林藏主入虎丘蒙堂…大地從教似燄爐＝『古林清茂禅師拾遺偈頌』巻二「送林藏主入虎丘蒙堂」（X71-284c）に、全く同文が見える。なお、文中の事項のうち、「藏主」は【四〇〇】に立項されている。

⑫ 義堂信和尚録［四ノ三十丈］、壽天錫眞贊敍云、天錫壽公、外柔而内剛。言雅而行端。禪苑之職、自侍局至后板、率以序遷。雖居蒙堂、戸外之屨已滿矣。

＊

『義堂信和尚録』［四の三十丈］、「壽天錫の眞贊の敍」に云く、「天錫の壽公、外柔にして内剛し。言雅にして行端し。禪苑の職、侍局自（よ）り后板に至るまで、率（おおむ）ね以て序遷す。蒙堂に居ると雖も、戸外の屨（くつ）已に滿つ」と。

＊

○義堂信和尚録［四ノ三十丈］、壽天錫眞贊敍云、天錫壽公…戸外之屨已滿矣＝『義堂和尚語録』巻四「寿天錫并序」（T80-541b）に、そのまま見える。

（丸毛俊宏）

【二九一】蒙堂寮主

①主蒙堂者、曰［敕修鈔九ノ廿九丈］蒙堂寮主。

＊

蒙堂（もうどう）に主たる者を、［『敕修鈔』九の廿九丈］「蒙堂寮主」と曰う。

＊

○主蒙堂者、曰［敕修鈔九ノ廿九丈］蒙堂寮主。＝『勅修百丈清規抄』巻九の二十九丈裏に「入蒙‐此ノ寮主トハ非衆寮々、而蒙堂寮主也」とある。

②敕修清規［下一ノ十九丈］入寮出寮茶云、入蒙堂者、白寮主掛點茶牌。

＊

『敕修清規（ちょくしゅうしんぎ）』［下一の十九丈］「入寮出寮茶」に云く、「蒙堂に入る者は、寮主に白（もう）して點茶（てんちゃ）の牌を掛く」と。

＊

○敕修清規［下一ノ十九丈］入寮出寮茶云…白寮主掛點茶牌＝『勅修百丈清規』巻四（T48-1136a）に全く同じ文章が見える。

（東海宏徳）

【二九二】前資

①敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、江湖次有前資。

＊

『敕修清規』［上二の卅丈］「尊宿遷化」の「祭次」に、「江湖（ごうこ）」の次に「前資（ぜんし）」有り。

＊

○敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、江湖次有前資＝『勅修百丈清規』巻三（T48-1128c）「祭次」（葬

祭の行列に並ぶ順番）で、「江湖」の次の八番目に「前資」が見える。

②又［下一ノ五丈左］都監寺云、副寺以下、非歴三次、不歸前資。

＊

又た［下一の五丈左］「都監寺」に云く、「副寺以下は、三次を歴るに非ざれば、前資に歸せず」と。

＊

○又都監寺云…不歸前資＝『勅修百丈清規』巻四（T48-1132a）「都監寺」の項に全く同じ文章が見える。

③普燈録［廿一ノ廿丈］淨慈混源曇密禪師章云。之泉南教忠、求決於晦菴。俾悦衆。會解事歸前資。

＊

『普燈録』［廿一の廿丈］「淨慈の混源曇密禪師」の章に云く、「泉南の教忠に之きて、決を晦菴に求む。悦衆たらしむ。會たま事を解きて前資に歸す」と。

＊

○普燈録［廿一ノ廿丈］淨慈混源曇密禪師章云…會解事歸前資＝『嘉泰普燈録』巻二一（X79-419c）に全く同じ文章が見える。

④物初賸語［二十一ノ九丈］代淨慈前資、祭北磵文云、服勤衆事、隨職所操。解職寧居。録茲微勞。獲依我師、優存吾曹。春風和氣、以相薫陶。有過則飭、有美則褒。

＊

『物初賸語』［二十一の九丈］「淨慈の前資に代わって、北磵を祭る」の文に云く、「衆事に服勤して、職の操る所に隨う。職を解きて寧居す。茲の微勞を録す。我が師に依るを獲て、吾曹を優存す。春風和氣、以て相薫陶す。過有れば則ち飭め、美有れば則ち褒す」と。

＊

○服勤衆事、隨職所操…有過則飭。有美則褒＝『物初賸語』巻二一の九丈に全く同じ文章が見える。

⑤忠曰、以敕修清規及物初所言、推之、副寺以下東序職、勤歴三次、而退休者爲前資也。蓋謂前之資助事務者也。若副寺已上都寺、勤而歴三次者。爲勤舊。居單寮矣。監寺勤而歴三次者、居蒙堂耳矣。

＊

忠曰く、「『敕修清規』及び物初の言う所を以て之を推すに、副寺以下の東序の職、勤めて三次を歴て退休する者を、前資と爲すなり。蓋し謂えらく、前の事務を資助する者なり。若し副寺已上の都寺は、勤めて三次を歴る者を、勤舊と爲す。單寮に居る。監寺は勤めて三次を歴る者、蒙堂に居るのみ」と。

⑥敕修清規［下一ノ十三丈左］兩序進退、送舊首座都寺、次送以次舊頭首知事。歸蒙堂前資。〈詳蒙堂處。〉

＊

『敕修清規』［下一の十三丈左］「兩序進退」に、舊の首座・都寺を送り、次に以次の舊の頭首知事を送り、蒙堂・前資に歸す。〈「蒙堂」の處に詳らかなり。〉

＊

○敕修清規［下一ノ十三丈左］兩序進退…歸蒙堂前資＝【二九〇】「蒙堂」の⑥参照。

⑦　忠曰、前已送都寺畢。可知以次舊知事者、副寺已下、而歸前資也。〈監寺歸蒙堂〉

＊

忠曰く、「前に已に都寺を送り畢わりぬ。知る可し、以次の舊知事とは、副寺已下にして、前資に歸するなり」と。〈監寺は蒙堂に歸す。〉

⑧備用清規［七ノ十丈］云、浙翁退知客後、韜晦前資十七年。

＊

『備用清規』［七の十丈］に云く、「浙翁、知客を退きて後、前資に韜晦すること十七年」と。

＊

○備用清規［七ノ十丈］云、浙翁退知客後、韜晦前資十七年。＝『禅林備用清規』巻七（X63-647c）に全く同じ文章が見える。

⑨　舊説［太岳説○『鈔』六ノ九丈冠考］曰、或見備用語、妄謂、前資、但是知客已下退職者。訛矣。

＊

舊説［太岳説○『鈔』六の九丈冠考］に曰く、「或いは『備用』の語を見て、妄りに謂えらく、「前資は、但だ是れ知客已下の退職の者なり」と。訛れり」と。

＊

○舊説［太岳説○『鈔』六ノ九丈冠考］曰、或見備用語…訛矣＝『勅修百丈清規抄』巻六の九丈裏の上部欄外に、「前資、知客已下之位也。浙翁、退知客韜晦十七年」という墨筆の書き入れがある。

⑩　忠曰、東序歸前資、如前辨。然知客班西序、今見備用所言、西序亦歸前資也。

＊

忠曰く、「東序の前資に歸すことは、前辨の如し。然るに知客は西序に班す。今、『備用』の言う所を見れば、西序も亦た前資に歸するなり」と。

（東海宏徳）

【二九三】久住

①雲門偃禪師録［中ノ廿五丈］云、示衆云、你等諸人、毎日上來下去問訊、即不無。若過水時、將什麼過。有久住僧、對云、歩。師深喜之。　又［下ノ十五丈］云、問新到、甚處過夏。云、雲蓋。師云、多少人。僧云、七十人。師云、你爲什麼不在數。代云、恐久住瞋。

＊

『雲門偃禪師録』［中の廿五丈］に云く、「衆に示して云く、『你等諸人、毎日、上來下去

して問訊するは、即ち無きにはあらず。若し水を過らん時、什麼を將てか過らん』と。久住の僧有り、對えて云く、『歩』と。師深く之を喜ぶと。　又た［下の十五丈］云く、「新到に問う、『甚れの處にか夏を過せし』と。云く、『雲蓋』」と。師云く、『多少の人ぞ』と。僧云く、「七十人」と。師云く、『你什麼と爲てか數に在らざる』と。代わって云く、『久住の瞋らんを恐る』と。

＊

○雲門偃禪師録［中ノ廿五丈］云、示衆云…師深喜之＝『雲門匡真禪師広録』巻中（T47-559c）に全く同じ文章が見える。

○又［下ノ十五丈］云、問新到…代云恐久住瞋＝『雲門匡真禪師広録』巻下（T47-570c）に見えるが、「問新到、甚所過夏。云、雲蓋。師云、多少人。僧云、七十人。師云、爾為什麼不在数。代云、新到分上未受与麼。又云、恐久住瞋」となっている。

②玄沙備禪師廣録［下ノ三丈○聯灯（ママ）廿三ノ三十五丈］云、師見三人新到、打鼓三下、却歸方丈。僧威儀了、却去打鼓三下、却歸堂内。久住來、白師云、新到。輕欺和尚法席。〈云云〉。

＊

『玄沙備（＝玄沙師備）禪師廣録』［下の三丈○『聯灯』廿三の三十五丈］に云く、「師、三人の新到を見て、鼓を打つこと三下、却って方丈に歸る。僧、威儀を具し了わって、却って去って鼓を打つこと三下、却って堂内に歸す。久住來たって、師に白して云く、『新到。和尚の法席を輕欺す。〈云云〉』」と。

＊

○玄沙備禪師廣録［下ノ三丈○聯灯廿三ノ三十五丈］云、師見三人新到…輕欺和尚法席＝『玄沙師備禪師広録』巻三（X73-19c）に全く同じ文章が見える。また、『聯燈會要』巻二三「玄沙師備禪師」条（X79-202a）の該当個所では、「一日有三人新到来。師自去、打普請鼓三下、却帰方丈。新到具威儀了、亦去打普請鼓三下、却入僧堂。久住僧白師云、新到軽欺和尚」となっている。

（東海宏徳）

禪林象器箋卷第六

○職位類上

①義堂日工集［一ノ二十三丈］云、古人以名位爲稱者、何也。謂借位明功也。今時禪宗、弊于名位。夫名位皆職也。百丈兩序之設、爲安衆也。安衆之本、在乎行道。然今人取以爲私。僥倖乎官家、求名及位。自生至死、此念不斷。可痛復可笑。莊周曰、道隱小成。餘亦曰、禪隱名位矣。

＊

義堂『日工集』［一の二十三丈］に云く、「古人、名位を以て稱と爲る者は、何ぞや。謂く、位を借りて功を明かすなり。今時の禪宗は、名位に弊す。夫れ名位は皆な職なり。百丈兩序の設は、衆を安んぜんが爲なり。衆を安んずるの本は、道を行ずるに在り。然るに今の人、取りて以て私の爲にす。官家に僥倖（＝幸運を願い待つこと）して、名及び位を求む。生自り死に至るまで、此の念斷ぜず。痛む可し、復た笑う可し。莊周が曰く、『道、小成に隱る』と。余も亦た曰く、『禪、名位に隱る』と」と。

＊

○義堂日工集［一ノ二十三丈］云、古人以名位爲稱者…禪隱名位矣＝義堂周信『空華日用工夫略集』巻一「応安元年（一三六八）十二月十日」条（辻善之助『空華老師日用工夫略集』大洋社 pp.20~21、蔭木英雄『訓註 空華日用工夫略集』思文閣出版 p.39）に見えるが、原文では「古人以名位為称者、何也」の部分が、「亦曰、禅隠名位矣」の後ろにある。

②水滸傳［六ノ十三丈］云、大相國寺知客語魯智深道、僧門中職事人員、各有頭項。且如小僧做箇知客、只理會管待往來客官僧衆。至如維那侍者書記首座、這都是淸職、不容易得做。都寺監寺提點院主、這箇都是掌管常住財物。你纔到的方丈、怎便得上等職事。還有那管藏的、喚做藏主。管殿的、喚做殿主。管閣的、喚做閣主。管化縁的、喚做化主。管浴堂、。喚做浴主。這箇都是主事人員、中等職事。還有那管塔的塔頭、管飯的飯頭、管茶的茶頭、管東廁的淨頭、與這管菜園的菜頭。這箇都是頭事人員、末等職事。假如師兄、你管了一年菜園好、便陞你做箇塔頭。又管了一年好、陞你做箇浴主。又一年好、纔做監寺。智深道既然如此也、有出身時。洒家明日便去。

＊

『水滸傳』［六ノ十三丈］に云く、「大相國寺の知客、魯智深に語りて道く、『僧門の中、職事の人員、各おの頭項有り。且らく小僧の箇の知客と做るが如きは、只だ往來の客官・僧衆を理會管待するのみ。維那・侍者・書記・首座が如きに至っては、這れ都て是れ淸職にして、容易に做ることを得ず。都寺・監寺・提點・院主、這箇は都て是れ常住の財物を掌管す。你、纔かに方丈に到る的、怎んぞ便ち上等の職事を得ん。還た那の藏を管する的有り、喚びて藏主と做す。殿を管する的は、喚びて殿主と做す。閣を管する的は、喚びて閣主と做す。化縁を管する的は、喚びて化主と做す。浴堂を管する的は、喚びて浴主と做す。這箇は都て是れ主事の人員、中等の職事なり。還た那の塔を管する的の塔頭、飯を管する的の飯頭、茶を管する的の茶頭、東廁を管する的の淨頭、這の菜園を管する的の菜頭有り。這箇は都て是れ頭事の人員、末等の職事なり。假えば師兄の如き、你一年の菜園を管し了わって好ければ、便ち你を陞せて箇の塔頭と做す。又た一年を管し了わって好ければ、你を陞せて箇の浴主と做す。又一年、好ければ纔めて監寺と做す」と。智深道く「既然に此くの如くならば、也た出身の時有り。洒家（＝私）明日便ち去らん』と」と。

＊

○水滸傳［六ノ十三丈］云…洒家明日便去＝『水滸伝』第六回にほぼ同文が見える。

（窪田顕脩）

【三六三】僧録

①僧録者、僧官也。録僧之事。

＊

僧録は、僧官（＝国家が制定した僧侶の官職）なり。僧の事を録す。

②釋氏資鑑［七ノ二十丈］云、唐史唐憲宗元和二年丁亥、二月制、法師端甫、掌内殿法事儀

注、録左右街僧事。僧録自甫而始也。

＊

『釋氏資鑑』［七の二十丈］云く、「『唐史』に唐の憲宗（＝唐朝の第十四代皇帝）元和二（八〇七）年丁亥、二月制すらく、『法師端甫（＝大達法師）は、内殿の法事儀注を掌り、左右街の僧の事を録せよ』と。僧録は甫自りして始まるなり」と。

＊

○釋氏資鑑［七ノ二十丈］云…自甫而始也＝『歴朝釈氏資鑑』巻七に、「丁亥［憲宗元和］二年…二月制、法師端甫、掌内殿法事儀注、録左右街僧事。僧録自甫而始也（唐史）」（X76-201c~202a）と、ほぼそのまま見える。また、『釈氏稽古略』巻三（T49-831b）にも、ほぼ同文が見える。

③ 忠曰、高僧傳［六ノ二十丈］僧碧傳云、姚興曰、凡夫學僧、未階苦忍。安得無過。過而將極、過遂多矣。宜立僧主以清大望。因下書曰、大法東遷、於今爲盛。僧尼已多。應須綱領、宣授遠規、以濟頽緒。僧碧法師、學優早年、德芳暮齒。可爲國内僧主。僧遷法師、禪慧兼修。即爲悦衆。法欽慧斌、共掌僧録。給車輿吏力。〈止此〉蓋職雖異正副、僧録名、既在端甫已前也。

＊

忠曰く、「『高僧傳』＝［六の二十丈］＝僧碧の傳に云く、『姚興（＝後秦の第二皇帝）の曰く、「凡そ夫の學僧、未だ苦忍に階せず。安くんぞ過無きことを得ん。過ちて將に極まらんとして、過遂に多し。宜しく僧主を立てて以て大望を清むべし」と。因りて書を下して曰く、「大法東遷（＝東へうつること）して、今に於いて盛んなりと爲す。僧尼已に多し。應に領綱（＝物事の要点や指針をまとめたもの）を須いて、遠規（＝きまり）を宣授して、以て頽緒を濟うべし。僧碧法師、學、早年に優れ、德、暮齒（＝晩年）に芳し。國内の僧主と爲す可し。僧遷法師、禪慧兼修す。即ち悦衆と爲す。法欽・慧斌、共に僧録を掌るべし。車輿吏力を給す」と』と。〈此こに止まる。〉蓋し職は正副異なりと雖も、僧録の名、既に端甫已前に在るなり」と。

＊

○高僧傳［六ノ二十丈］僧碧傳云…給車輿吏力＝『高僧伝』巻六「釈僧碧」条（T50-63b）に同文が見える。

④ 僧史畧［中ノ卅七丈○要覽上十六丈引］云、唐文宗開成中、始立左右街僧録。尋其人、即端甫法師也。俗姓趙。德宗召入禁中、與儒道論議、賜紫方袍。令侍太子於東朝。順宗重之、若兄弟。相與臥起、恩禮特深。憲宗數幸其院。待之若賓友。掌内殿法儀、録左街僧事。標表淨衆一十年。即元和中也。由此觀之、僧録之起、自端甫也。甫公、文宗開成中卒。

又［卅八丈］云、僞秦始立僧正、則以法欽慧斌二人、掌僧録也。有唐變態。正乃錯、諸録則用矣。蓋禮樂自天子出也。時既所高物無我競。任使魏統如草、秦正若林、皆歸唐録區宇中矣。

＊

『僧史畧』［中の卅七丈○『要覽』上の十六丈に引く］に云く、「唐の文宗（＝唐朝の第十七代皇帝）の開成中に、始めて左右街の僧録を立つ。其の人を尋ぬるに、即ち端甫法師なり。俗姓は趙。德宗（＝唐朝の第十二代皇帝）召して禁中に入れて、儒道と論議せしめ、紫の方袍（＝袈裟）を

賜う。太子に東朝に侍せしむ。順宗（＝唐朝の第十三代皇帝。徳宗の長男）之を重んじて、兄弟の若し。相與に臥起して、恩禮特に深し。憲宗（＝唐朝の第十四代皇帝。順宗の長男）數しば其の院に幸す。之を待する（＝もてなす）こと賓友の若し。内殿の法儀を掌り、左街の僧事を録せしむ。淨衆に標表たること一十年。即ち元和中なり。此れに由りて之を觀れば、僧録の起こり、端甫に自りするなり。甫公は文宗の開成中に卒す」と。　又た［卅八丈］に云く、「僞秦始めて僧正を立て、則ち法欽・慧斌二人を以て、僧録を掌らしむ。有唐に變態す。正は乃ち錯諸するも、録は則ち用ゆ。蓋し禮樂は天子自り出づ。時に既に高しとする所の物、我競無し。任使い魏の統、草の如く、秦の正、林の若くなるも、皆な唐録の區宇（＝区切られた内部）の中に歸す」と。

＊

○僧史畧［中ノ卅七丈○要覽上十六丈引］云…＝『大宋僧史略』巻二（T54-243c）に同文が見える。「要覽」とは『釈氏要覽』のこと。『釈氏要覽』巻一には、「『僧史略』に云く、「文宗開成中、始めて左右の僧録を立つ。即ち端甫法師、始めと為すなり。法師、徳宗に召されて禁中に入り、儒道と論議し、紫の方袍を賜う。大子に東朝に侍せしむ。順宗、之を重んじること兄弟の若し。憲宗、之に侍すること賓友の若し。内殿の法儀を掌り、左街の僧事を録せしむ』と」と（僧史略云、文宗開成中、始立左右僧録。即端甫法師為始也。法師徳宗召入禁中、与儒道論議、賜紫方袍。令侍大子於東朝。順宗重之若兄弟。憲宗待之若賓友。掌内殿法儀、録左街僧事）」（T54-261c）とある。

○又［卅八丈］云…區宇中矣＝『大宋僧史略』巻二「左右街僧録」条（T54-244a）に同文が見える。

⑤日本僧録　第一百主後圓融帝、康暦二年庚申正月、春屋妙葩、賜國師號、任僧録司。此爲始也。自義滿公・義持公時、住鹿苑院者、任僧録司、以蔭涼軒爲其副矣。掌五山十刹出世舉薦、武家賜公帖。

＊

日本僧録　第一百主後圓融帝の康暦二（一三八〇）年庚申正月、春屋妙葩、國師號を賜って、僧録司に任ぜらる。此れを始めと爲すなり。義滿公・義持公の時自り、鹿苑院に住する者、僧録司に任ぜられ、蔭涼軒（＝鹿苑院の南坊にあった寮舎）を以て其の副と爲す。五山十刹の出世の舉薦（＝推薦して役職につかせる）を掌り、武家、公帖（＝諸山の住持を任命する幕府の辞令）を賜う。

（窪田顕脩）

【三六四】副僧録

①僧史略［中ノ四十丈○要覽上ノ十六丈］云、至唐元和・長慶間、始立僧録、録左右街僧、亦無貳職。次有三教首座。昭宗乾寧中、改首座為副僧録、得覺暉焉。副録自暉公始也。

＊

『僧史略』［中の四十丈○『要覽』上の十六丈］に云く、「唐の元和・長慶（＝八〇六～八二四）の間に至りて、始めて僧録を立てて、左右街の僧を録するも、亦た貳職（＝副職）無し。次に三教首座有り。昭宗の乾寧（＝八九四～八九八）中、首座を改めて副僧録と為し、覺暉を得たり。副録、暉公自り始まるなり」と。

＊

○僧史略［中ノ四十丈○要覽上ノ十六丈］云…副録自暉公始也＝『大宋僧史略』巻二（T54-244b）に同文が見える。また、『釈氏要覽』巻上に、「副僧録。即ち昭宗の乾寧中、首座を改めて副僧録と為す。即

ち覚暉を始めと為すなり（副僧録。即昭宗乾寧中、改首座為副僧録。即覚暉為始也）」（T54-261c）とある。

② 忠曰、日本古以蔭涼軒、副於僧録。而今廢之。

＊

忠曰く、「日本、古（いにしえ）、蔭涼軒を以て僧録に副（そ）う。而今（いま）は之を廢す」と。

（瀧瀬尚純）

【三六五】住持

①敕修清規［上二ノ一丈］住持章云、佛教入中國四百年、而達磨至。又八傳而至百丈。唯以道相授受。或巖居穴處、或寄律寺。未有住持之名。百丈以禪宗寖盛、上而君相王公、下而儒老百氏、皆嚮風問道、有徒實蕃、非崇其位、則師法不嚴、始奉其師、為住持。而尊之曰長老、如天竺之稱舍利弗須菩提。以齒德俱尊也。

＊

『敕修清規』［上二の一丈］「住持」の章に云く、「佛教、中國に入りてより、四百年にして達磨至る。又た八傳して百丈に至る。唯だ道を以て相（あい）授受す。或いは巖居穴處、或いは律寺に寄す。未だ住持の名有らず。百丈、禪宗の寖（ようや）く盛んにして、上にして君相・王公、下にして儒老百氏、皆な風に嚮（むか）い道を問い、有徒、實に蕃（おお）きを以て、其の位を崇ぶに非ざれば、則ち師法、嚴ならずとて、始めて其の師を奉じて住持と為す。而して之を尊んで長老と曰うは、天竺の舍利弗・須菩提を稱するが如し。齒德、俱に尊きを以てなり」と。

＊

○敕修清規［上二ノ一丈］住持章云…以齒德俱尊也＝『勅修百丈清規』巻二（T48-1119a）に同文が見える。

②禪苑清規［七ノ八丈］尊宿住持云、代佛揚化、表異知事。故云傳法。各處一方、續佛慧命、斯曰住持。初轉法輪、命為出世、師承有據、乃號傳燈。得善現尊者長老之名、居金粟如來方丈之地。私稱洒掃貴徒、嚴淨道場、官請焚修、蓋爲祝延聖壽故。宜運大心、演大法、蘊大德、興大行、廓大慈悲、作大佛事、成大益利。權衡在手、縱奪臨時、規矩準繩、故難擬議。然其大體、令行禁止、必在威嚴。形直影端。莫如尊重。量才補職。略爲指蹤。拱手仰成。愼無徹肘。整肅叢林規矩、撫循龍象高僧。朝晡不倦指南、便是人天眼目。

＊

『禪苑清規』［七の八丈］「尊宿住持」に云く、「佛に代わって化を揚げ、知事に表異す。故に『傳法』と云う。各おの一方に處し、佛の慧命を續ぐ、斯（こ）れを『住持』と曰う。初めて法輪を轉ず、命（な）づけて『出世』と為す。師承、據有り、乃ち『傳燈』と號す。善現尊者長老の名を得て、金粟如來方丈の地に居す。私（ひそ）かに稱す、貴徒を洒掃（＝掃除）し、道場を嚴淨して、官請焚修するは、蓋し聖壽を祝延せんが爲の故なり。宜しく大心を運（めぐ）らし、大法を演べ、大德を蘊（あつ）め、大行を興（おこ）し、大慈悲を廓（ひろ）げ、大佛事を作し、大益利を成すべし。權衡（＝はかり）、手に在りて、縱奪、時に臨み、規矩準繩（＝きまり・法則・法）、故（もと）より擬議し難し。然れども其の大體、令行禁止、必ず威嚴に在り。形、直ければ、影、端（ただ）し。尊重するに如くは莫し。才を量りて職を補う。略ぼ指蹤（＝指示・指揮）を爲す。手

を拱（＝こまねく）して成ることを仰ぐ。慎しんで徹肘すること無かれ。叢林の規矩を整肅し、龍象高僧を撫循す。朝晡（＝朝夕）指南に倦まざれば、便ち是れ人天の眼目なり」と。

＊

○禪苑清規［七ノ八丈］尊宿住持云…便是人天眼目＝『禪苑清規』巻七「尊宿遷化」条（Z111-916a、訳注本・p.259）に同文が見える。

③備用清規［七ノ四十丈］住持云、佛祖傳持、延洪慧命。軌範三界、開鑿人天、明向上事、轉大法輪。居金粟如來方丈之位、得善現尊者長老之名。入室陞堂、告香普説、世出世間、法如法説、行説俱到、名實相當、舉古明今、師承有據。或單提直截、對接上根、或設化隨機、誘勸中下。成就勝縁、權衡縱奪。致若行道説法之暇、勾稽錢穀簿書、豐儉隨宜供衆。修造雖曰世間餘事、古今亦號難齊。苟能兼濟、斯謂全才。不及此者、竭力運謀、修造盡心、供衆安僧、列職任賢。庶毋曠役。斯謂三等住持。良非細事。焚修祈祷、貴在專誠。臨衆閑居、無宜慢易。叢林之設、老病爲先。照拂矜怜、尤須介念。方來高士、加禮送迎、率身以先、無事不辨。如密菴披衣夜臥、代先師持戒、克振家聲、地藏指石説心、與弟子投機、得大智慧。此皆千古典刑、佛法重任也。

『備用清規』［七の四十丈］「住持」に云く、「佛祖の傳持、慧命を延洪す。三界に軌範して、人天を開鑿し、向上の事を明かし、大法輪を轉ず。金粟如來方丈の位に居し、善現尊者長老の名を得。入室・陞堂、告香・普説、世・出世間、法如法説、行説俱に到り、名實相當たり、古を舉し今を明らめ、師承、據有り。或いは單提直截、上根を對接し、或いは化を設け機に隨って、中下を誘勸す。勝縁を成就し、縱奪を權衡す。致若ならず、行道説法の暇に、錢穀簿書を勾稽（＝調べ考える）し、豐儉（＝手びろにすることと、引き締めること）、宜に隨って衆に供す。修造は、世間の餘事と曰うと雖も、古今も亦た齊しうし難しと號す。苟も能く兼濟（＝行道と修造を兼ね行う）せば、斯れを全才と謂う。此こに及ばざる者は、力を竭くし謀を運らせて、修造、心を盡くし、衆に供し僧を安んじ、職を列ね賢に任ずれば、庶らくは役を曠しくすること毋からん。斯れを三等の住持と謂う。良に細事に非ず。焚修祈祷、貴ぶらくは專誠（＝まことで專ら）に在り。衆に臨んで閑居し、慢易（＝怠慢）に宜しきこと無し。叢林の設け、老病を先と為す。照拂（＝照顧する・世話をする）矜怜（＝あわれみさとす）、尤も須く念を介むべし。方來の高士、禮を加えて送迎し、身を率いて以て先んずれば、事として辨ぜざること無し。密菴、衣を披して夜臥し、先師に代わって持戒して、克く家聲を振るい、地藏、石を指して心を説きて、弟子の與に投機して、大智慧を得さしむるが如きんば、此れ皆な千古の典刑、佛法の重任なり」と。

＊

○備用清規［七ノ四十丈］住持云…佛法重任也＝『禪林備用清規』巻七（Z112-108a~b）に同文が見える。

④明教嵩禪師、廣原教［輔教ノ四ノ卅五丈］云、教謂住持者、何謂也。住持也者、謂藉人持其法、使之永住、而不泯也。夫戒定慧者、持法之具也。僧園物務者、持法之資也。法也者、大聖人之道也。資與具、待其人而後舉。善其具而不善其資、不可也。善其資而不善其具、不可也。皆善可以持而住之也。昔靈山住持、以大迦葉統之。竹林住持、以身子尸之。故

聖人之教盛、聖人之法長存。聖人既隱、其世數相去、茫然久乎。吾人僥倖、乃以住持、名之勢之利之。天下相習、沓焉紛然、幾乎成風成俗也。聖人不復出、孰爲之正。外衞者、不視不擇、欲吾聖人之風不衰、望聖人之法益昌、不可得也。悲夫。吾何望也。

明教嵩禪師の「廣原教」[『輔教』の四の卅五丈]に云く、「教に住持と謂うは、何の謂いぞや。住持とは、人に藉りて其の法を持し、之をして永く住せしめて、泯せざらしむるを謂うなり。夫れ戒定慧は、法を持するの具なり。僧園物務（＝事務）は、法を持するの資なり。法というは、大聖人の道なり。資と具と、其の人を待ちて後に舉ぐ。其の具を善くして、其の資を善くせざるは、不可なり。其の資を善くして、其の具を善くせざるも、不可なり。皆な善くして以て持して之に住す可きなり。昔、靈山の住持は、大迦葉を以て之を統べしむ。竹林の住持には、身子を以て之を尸らしむ。故に聖人の教盛んにして、聖人の法長く存す。聖人既に隱れて、其の世數、相去ること、茫然として久し。吾人（＝我）僥倖（＝分不相応の待遇に巡りあう）ありて、乃ち住持を以て、之を名し、之を勢し、之を利す。天下、相習うて、沓焉紛然として、幾んど風を成し俗を成すなり。聖人、復た出でずんば、孰か之が爲に正さん。外衞の者、視ず擇ばずして、吾が聖人の風、衰えざらんことを欲し、聖人の法、益ます昌んならんことを望むも、得る可からざるなり。悲しいかな。吾、何をか望まんや」と。

＊

○明教嵩禪師、廣原教[輔教ノ四ノ卅五丈]云…吾何望也＝仏日契嵩『鐔津文集』巻二に収載される『輔教編』「広原教」（T52-658b~c）にほぼ同文が見える。異同としては、「僥倖」を『鐔津文集』では、「儌倖」に作っている。

⑤禪林寶訓[下ノ五十丈]云、密菴曰、住持有三莫。事繁莫懼、無事莫尋、是非莫辨。住持人、達此三事、則不被外物所惑矣。

『禪林寶訓』[下の五十丈]に云く、「密菴の曰く、『住持に三莫有り。事繁き懼るること莫かれ、事無きに尋ぬること莫かれ、是非辨ずること莫かれ。住持の人、此の三事に達するときは、則ち外物に惑わされざるなり』と」と。

＊

○禪林寶訓[下ノ五十丈]云…達此三事、則不被外物所惑矣＝浄善の重集した『禪林宝訓』巻四（T48-1037c）に同文が見える。

⑥僧寶傳[五冊十六丈]黄龍寶覺心禪師傳云、謝景温師直、守潭州。虚大潙、以致公。三辭不往。又囑江西轉運判官彭汝砺器資、請所以不趣長沙之意。公曰、願見謝公、不願領大潙也。馬祖百丈已前、無住持事。道人相尋於空間寂寞之濱而已。其後雖有住持、王臣尊禮、爲天人師。今則不然。掛名官府、如有戸籍之民、直遣伍伯追呼之耳。此豈可復爲也。師直聞之、不敢以院事屈、願一見之。公至長沙。

『僧寶傳』[五冊十六丈]「黄龍寶覺の心（＝祖心）禪師」の傳に云く、「謝景温師直、潭州の守たり。大潙を虚しくして、以て公を致す。三たび辭して往かず。又た江西の轉運判官

彭汝砺器資に囑して、長沙に趣かざる所以の意を請う。公の曰く、『謝公を見んことを願うも、大潙を領することを願わざるなり。馬祖・百丈已前、住持の事無し。道人は空間寂寞の濱を相尋ぬるのみ。其の後、住持有りと雖も、王臣、尊禮して、天人の師と爲す。今は則ち然らず。名を官府に掛くること、戸籍の民の、直ちに伍伯（＝戸伯）をして之を追呼せしむるが如くなるのみ。此れ豈に復た爲すべけんや』と。師直、之を聞きて、敢えて院事を以て屈せず、一たび之を見んことを願う。公、長沙に至る」と。

＊

○僧寶傳［五冊十六丈］黄龍寶覺心禪師傳云…公至長沙＝『禪林僧宝伝』巻二三「黄龍宝覚心禪師」条（Z137-531a）に同文が見える。

⑦清拙澄禪師聖因録［卅八丈］云、古徳住持有三種。一説法、二安衆、三修造。舍此之外、不爲住持。昔汾陽感石門排闥、喩以佛法大事、靖退小節之言而起。大覺爲九峯一疏而來。晦堂願見謝公、不住大潙。應菴云、衲僧家、著草鞋住院、何至如戀窟。此皆中古傳道名師、可為後世法。

清拙澄（＝清拙正澄）禪師の『聖因録』［卅八丈］に云く、「古徳の住持に三種有り。一に説法、二に安衆、三に修造なり。此を舍てての外は、住持と爲さず。昔、汾陽（＝汾陽善昭）、石門の、闥（門）を排して、喩すに『佛法は大事、靖退は小節』の言を以てするを感じて起つ。大覺（＝大覚懐璉）、九峯（＝九峯鑒韶）の一疏の爲にして來る。晦堂（＝黄龍祖心）謝公を見んことを願って、大潙に住せず。應菴（＝應菴曇華）云く、『衲僧家の、草鞋を著けて住院する、何ぞ蚖蛇（＝まむし）の窟を戀うが如くなるに至らん』と。此れ皆な中古傳道の名師、後世の法と爲つべし」と。

＊

○清拙澄禪師聖因録［卅八丈］云＝清拙正澄の語録は『清拙和尚語録』として大東急記念文庫や松ケ岡文庫・史料編纂所等に伝わっている。また、国立国会図書館のデジタルアーカイブにおいては『清拙和尚語録』が公開されているが、本箇所は在元時代に住した鶏足山聖因寺における説法を収録した語録部分であり、原典を確認することが出来なかった。

○昔汾陽感石門排闥…＝汾陽が師の首山省念の下で悟境を認められた後、諸方からの招請にも臥して答えなかった。しかし、その様を契聡に咎められた為に世に出た故事。『五燈会元』巻一一「汾陽善昭禪師」条には、「首山歿するに泊び、西河の道俗、僧契聡をして迎え請じて住持せしめんとす。師、関を閉じて枕を高くす。聡、闥（門）を排いて入り、之を譲めて曰く、『仏法は大事、靖退は小節なり。風穴（風穴延沼）、讖に応たらんことを懼れ、宗旨の墜滅せんことを憂う。幸いにして先師有るも、先師已に世を棄つ。汝、如来の大法を荷担するに力有る者なり。今、何の時にしてか安眠せんと欲するや』と。師、矍き起ち、聡の手を握って曰く、『公に非ずんば此の語を聞かず、趣や かに弁厳せよ。吾、行かん』と（泊首山歿、西河道俗、遣僧契聡迎請住持。師閉関高枕、聡排闥而入、譲之曰、仏法大事、靖退小節。風穴懼応讖、憂宗旨墜滅。幸而有先師、先師已棄世。汝有力荷担如来大法者。今何時而欲安眠哉。師矍起、握聡手曰、非公不聞此語、趣弁厳吾行矣）」（Z138-413b）とある。

○大覺為九峯一疏而來＝大覚懐璉が阿育王山に晋住するに際し、九峯鑒韶の疏によって勧請された故事。『五燈会元』巻一五「明州育王山懐璉大覚禪師」条には、「四明の郡守、育王の席を虚しして以て迎致す。九峯の韶公、疏を作して勧請す（四明郡守、以育王虚席迎致。九峯韶公作疏勧請）」（Z138-597a）とある。

○晦堂願見謝公、不住大潙＝前段⑥を参照のこと。

○應菴云…＝応庵曇華の垂訓。『五燈会元』巻二〇「明州天童応庵曇華禪師」条には、「嘗て徒を誡めて曰く、『衲僧家の、草鞋を著けて住院するは、何ぞ啻に蚖蛇の窟を恋う如くならんや』と（嘗誡徒曰、衲僧家著草鞋住院、何啻如蚖蛇恋窟乎）」（Z138-808a）とある。

⑧

羅湖野録［下ノ五十八丈○又武庫廿九丈］云、五祖演和尚、付法衣佛鑑曰、大凡應世、略爲子、陳其四端。雖世俗常談、在力行何如耳。一、福不可受盡。福盡則必致禍殃。二、勢不可使盡。勢盡則定遭欺侮。三、語言不可説盡。説盡則機不密。四、規矩不可行盡。行盡則衆難住。

『羅湖野録』［下の五十八丈○又た『武庫』廿九丈］に云く、「五祖演和尚（＝五祖法演）、法衣を佛鑑（＝太平慧懃）に付して曰く、『大凡そ世に應ずるに、略して子が為に、其の四端を陳べん。世俗の常談と雖も、力行何如というに在るのみ。一に、福、受け盡くす可からず。福、盡きるときは、則ち必ず禍殃を致す。二に、勢い、使い盡くす可からず。勢い、盡くすときは、則ち定めて欺き侮らるるに遭う。三に、語言、説き盡くす可からず。説き盡くすときは、則ち機、密ならず。四に、規矩、行い盡くす可からず。行い盡くすときは、則ち衆、住し難し』と」と。

＊

○羅湖野録［下ノ五十八丈○又武庫廿九丈］＝『羅湖野録』（Z142-994b）には、「大凡応世」以降、全く同文が見える。『武庫』とは大慧宗杲の『大慧普覚禅師宗門武庫』のこと。「仏鑑和尚、初め舒州の太平の請を受けて、五祖を礼辞す。祖曰く、『大凡そ住院するに、己が為に戒むる者四有り。第一に、勢い、使い尽くすべからず。第二に、福、受け尽くすべからず。第三に、規矩、行い尽くすべからず。第四に、好語、説き尽くすべからず。何が故ぞ。好語説き尽くせば、人、必ず之を易る。規矩行い尽くせば、人、必ず之を繁う。福、若し受け尽くせば、縁、必ず孤なり。勢い、若し使い尽くせば、禍、必ず至る』と（仏鑑和尚、初受舒州太平請、礼辞五祖。祖曰、『大凡住院、為己戒者有四。第一勢不可使尽。第二福不可受尽。第三規矩不可行尽。第四好語不可説尽。何故。好語説尽、人必易之。規矩行尽、人必繁之。福若受尽、縁必孤。勢若使尽、禍必至）」（T47-952a）とある。

⑨大慧杲和尚與鼓山逮長老書［書八十七丈］云、溈山謂仰山曰、建法幢、立宗旨於一方、五種縁備、始得成就。五種縁、謂外護縁、檀越縁、衲子縁、土地縁、道縁。

＊

「大慧杲和尚（＝大慧宗杲）、鼓山の逮長老（＝鼓山宗逮）に與うる書」［『書』八十七丈］に云く、「溈山（＝溈山霊祐）、仰山（＝仰山慧寂）に謂いて曰く、『法幢を建て、宗旨を一方に立つるに、五種の縁備って、始めて成就を得ん。五種の縁とは、謂く、外護の縁、檀越の縁、衲子の縁、土地の縁、道の縁なり』と」と。

＊

○大慧杲和尚與鼓山逮長老書［書八十七丈］云＝『書』は、『大慧普覚禅師書』のこと。『大慧普覚禅師語録』三十巻の巻二五～三〇に収載されているが、単行の刊本も存する。『大慧普覚禅師書』「答鼓山逮長老」（『大慧普覚禅師語録』巻三〇・T47-942c）に同文が見える。

⑩山菴雜録［上ノ廿九丈］云、大凡住持人、須要鉗轄僕隷、亦宜時時以善訓之。庶不爲惡、而無累焉。千瀬住嘉興天寧。僕隷盗街坊人狗、煮而食之。千瀬煮狗名。荊石住姑蘇承天。駕舟趣檀家請、經墅落。僕隷盗居民羊、煮而食之。荊石得煮羊名。夫盗狗盗羊、於二人何與。而當其惡名者、蓋尋常失於鉗轄嚴訓、而致然也。後之人、亦當以彼二人爲戒。又云［廿九丈］、夫住持者、蓋住一切菩薩智所住境、護持諸佛正法之輪、所謂佛子住持。而百丈立斯名、豈偶然哉。近代爲住持、而名焉利焉者、不知其所係之重、間有好交俗子、

○靈像類下

【二三九】十六羅漢

①山門閣上、多安十六羅漢。其名號、住處、眷屬、詳於法住記。記云、難提蜜多羅曰、如來先已説法住經。今、當爲汝粗更宣説。〈止此〉故知。十六尊者。本是佛説。慶友後述説。〈難提蜜多羅唐言慶友〉今唯列其名。

＊

山門の閣上に、多くは十六羅漢を安んず。其の名號（＝名前）、住處、眷屬（＝随行者）は、『法住記』に詳らかなり。『記』に云く、「難提蜜多羅の曰く、『如來先に已に『法住經』を説く。今、當に汝が爲に粗（＝大まかに）更に宣説（＝述べ説く）すべし』と」と。〈此に止まる〉故に知んぬ、十六尊者は、本是れ佛説なることを。慶友、後に述説するなり。〈難提蜜多羅は唐（＝中国語訳）に慶友と言う〉今は唯だ其の名をのみ列ぬるのみ。

＊

○山門閣上、多安十六羅漢…今唯列其名＝十六羅漢の山門設置については、【二四】「三門」にも「三門閣上、必設十六羅漢像」と見える。「羅漢」は阿羅漢の略称であり、阿羅漢は、梵 arhat・巴 arahant 意訳、応供、福田、殺賊、無学。一切の煩悩を断滅し、為すべき事を完成した人。仏弟子（声聞）の最高の聖者のことである。『象器箋』【一〇四五】「羅漢供」も参照。「其名號、住處、眷屬、詳於法住記」とは、『法住記』（T49-13a-b）に見える記述のことであり、具体的には②の注を参照。尚、『法住記』とは、永徽四（六五四）年の玄奘訳『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』一巻本（T49-12c~14c）

従事飲啖。吁可惜哉。〈云云〉

＊

『山菴雑録』［上の廿九丈］に云く、「大凡そ住持の人は、須く僕隷（＝召使）を鉗轄（＝管理・取り締まること）することを要すべく、亦た宜しく時時に善を以て之を訓すべし。庶らくは惡を爲さずして、累わすこと無からん。千瀬（＝千瀬善慶・一二六〇～一三三八）、嘉興の天寧に住す。僕隷、街坊の人の狗を盗んで、煮て之を食らう。千瀬、『煮狗』の名を得たり。荊石（未詳）、姑蘇の承天に住す。舟に駕して檀家の請に赴いて、墅落を経。僕隷、居民の羊を盗んで、煮て之を食らう。荊石、『煮羊』の名を得たり。夫れ狗を盗み羊を盗むは、二人に何ぞ與らん。而して其の惡名に當たる者は、蓋し尋常、鉗轄嚴訓を失して、然ることを致すなり。後の人、亦た當に彼の二人を以て戒と爲すべし」と。又た［廿九丈］云く、「夫れ住持の者は、蓋し一切菩薩の智所住の境に住して、諸佛正法の輪を護持す。所謂る『佛子住持』なり。而も百丈、斯の名を立つるは、豈に偶然ならんや。近代住持と爲りて名し利する者、其の係る所の重きことを知らず、間ま好んで俗子に交わり、飲啖に從事する有り。吁、惜しむ可きかな。〈云云〉」と。

＊

○山菴雑録［上ノ廿九丈］云＝恕中無慍『山庵雑録』巻上（Z148-332a）に同文が見える。

○又云［廿九丈］＝前段に続いて『山庵雑録』巻上（Z148-332a~b）に同文が見える。

（瀧瀬尚純）

のことであり、仏滅後八百年、執師国（セイロン）の勝軍王の都にあって大阿羅漢といわれた難提蜜多羅が著した小本の漢訳である。漢訳の他にチベット訳も存在するが原典は現存しない。『法住記』については、清水亮昇「大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記に就て」（『密教論叢』（5）・一九三五）、袴谷憲昭「羅漢信仰の思想背景…『法住記』私釈（序）」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』（65）・二〇〇七）、同「Nandimitravadana の両訳対照本とチベット訳和訳」（『駒沢短期大学研究紀要』（35）・二〇〇七）等の研究がある。また、「記云、難提蜜多羅曰…粗更宣説」の部分は、『法住記』（T49-13a）に見える文章であるが、『法住記』には「難提蜜多羅曰」の部分が、「尊者告曰、汝等諦聴」となっている。『法住経』とは、永徽四（六五四）年に玄奘が漢訳した『仏臨涅槃記法住経』（T12-1112b~1113c）のことである。「慶友」が「難提蜜多羅」の中国語訳の名であるとするのは、『法住記』に「有阿羅漢名難提蜜多羅 唐言慶友」（T49-12c）とあるのに拠ったものであろう。

②第一、賓度羅跋囉惰闍尊者。第二、迦諾迦伐蹉尊者。第三、迦諾迦跋釐墮闍尊者。第四、蘇頻陁尊者。第五、諾距羅尊者。第六、跋陁羅尊者。第七、迦理迦尊者。第八、伐闍羅弗多羅尊者。第九、戍博迦尊者。第十、半諾迦尊者。第十一、囉怙羅尊者。第十二、那伽犀那尊者。第十三、因揭陁尊者。第十四、伐那婆斯尊者。第十五、阿氏多尊者。第十六、注荼半託迦尊者。

＊

第一、賓度羅跋囉惰闍尊者。第二、迦諾迦伐蹉尊者。第三、迦諾迦跋釐墮闍尊者。第四、蘇頻陁尊者。第五、諾距羅尊者。第六、跋陁羅尊者。第七、迦理迦尊者。第八、伐闍羅弗多羅尊者。第九、戍博迦尊者。第十、半諾迦尊者。第十一、囉怙羅尊者。第十二、那伽犀那尊者。第十三、因揭陁尊者。第十四、伐那婆斯尊者。第十五、阿氏多尊者。第十六、注荼半託迦尊者。

＊

○第一、賓度羅跋囉惰闍尊者…第十六、注荼半託迦尊者＝『法住記』（T49-13a）に「第一尊者名、賓度羅跋囉惰闍…第十六尊者名、注荼半託迦」という形式で十六の名称が綴られている。尚、「其名号、住処、眷属、詳於法住記」とあるように、『法住記』には詳細が記されており、以下にそれぞれの眷属数と住処を記す。

第一、賓度羅跋囉惰闍尊者は、千の阿羅漢（＝眷属）を従え、西瞿陀尼洲に住す。第二、迦諾迦伐蹉尊者は五百の阿羅漢を従え、北方迦濕彌羅国に住す。第三、迦諾迦跋釐墮闍尊者は、六百の阿羅漢を従え、東勝身洲に住す。第四、蘇頻陁尊者は、七百の阿羅漢を従え、北倶盧洲に住す。第五、諾距羅尊者は、八百の阿羅漢を従え、南瞻部洲に住す。第六、跋陁羅尊者は、九百の阿羅漢を従え、耽没羅洲に住す。第七、迦理迦尊者は、千の阿羅漢を従え、僧伽洲。第八、伐闍羅弗多羅尊者は千一百の阿羅漢を従え、鉢刺拏洲に住す。第九、戍博迦尊者は、九百の阿羅漢を従え、香醉山中に住す。第十、半諾迦尊者は、千三百の阿羅漢を従え、三十三天に住す。第十一、囉怙羅尊者は千一百の阿羅漢を従え、畢利颺瞿洲に住す。第十二、那伽犀那尊者は、千二百の阿羅漢を従え、半度波山に住す。第十三、因揭陁尊者は、千三百の阿羅漢を従え、広脇山中に住す。第十四、伐那婆斯尊者は、千四百の阿羅漢を従え、可住山中に住す。第十五、阿氏多尊者は、千五百の阿羅漢を従え、鷲峯山中に住す。第十六、注荼半託迦尊者は、千六百の阿羅漢を従え、持軸山中に住す。

③又法住記云、如是十六大阿羅漢、一切皆具三明六通、八解脱等、无量功徳、離三界染、誦持三藏、博通外典。承佛敕故、以神通力、延自壽量、乃至世尊正法應住。常隨護持、及與施主、作眞福田、令彼施者、得大果報。　又云。若此世界、國王大臣、長者居士、若男若女、發慇淨心、爲四方僧、設大施會、或慶寺慶像、慶經幡等、施設大會、或詣寺中經行處等、臥具・飲食、奉施僧衆時、此十六大阿羅漢、及諸眷屬、隨其所應、分散往赴。現種種形、蔽隱聖儀、同凡常衆、密受供具、令諸施主、得勝果報。此南瞻部洲人

壽極短、至於十歳、刀兵劫起。〈乃至〉人壽漸増、至百歳時、此十六大阿羅漢、與諸眷屬復來人中、稱揚正法、度衆出家、作饒益事。人壽七萬歳時、正法永滅。時十六大阿羅漢、用七寶造窣堵波、釋迦如來遺身、皆集其内、香花供養、繞百千匝、作如是言、敬禮世尊釋迦如來應正等覺。我受教敕、護持正法、及與天・人、作諸饒益。法藏已沒、有縁已周。今辭滅度。説是語已、一時入涅槃。〈畧鈔〉

＊

又た『法住記』に云く、「是くの如きの十六大阿羅漢は、一切皆な三明六通（＝阿羅漢が持つ六つの神通力）、八解脱（＝煩悩を棄捨する八種の定力）等の、无量の功徳を具し、三界（＝欲界、色界、無色界）の染を離れ、三藏（＝経・律・論）を誦持し、博く外典（＝仏教以外の典籍）に通ず。佛の敕を承るが故に、神通力を以て、自らの壽量（＝寿命の長さ）を延べ、乃至、世尊の正法、應住（＝この世にとどまっている）せば、常に隨いて護持し、及び施主の與めに、眞の福田（＝福徳を生じ、授ける人）と作り、彼の施者をして、大果報（＝優れた良い報い）を得しむ」と。　又た云く、「若し此の世界の、國王大臣、長者居士、若しくは男、若しくは女、慇淨（＝心がこもって清い）の心を發して、四方の僧の爲に、大施會（＝大々的な施しの催し）を設け、或いは寺を慶し像を慶し、經幡を慶する等、大會を施設し、或いは寺中の經行（＝仏道修行）の處等に詣で、臥具・飲食、僧衆に奉施する時、此の十六大阿羅漢、及び諸もろの眷屬、其の所應に隨いて、分散して往き赴く。種種の形を現し、聖儀（＝神聖なよそおい、かたち）を蔽隱し、凡常の衆に同じくして、密かに供具（＝供物）を受け、諸もろの施主をして、勝果報（＝大果報）を得しむ。此れ南瞻部洲の人壽、極めて短くして、十歳に至るとき、刀兵劫（＝戦争の時代）起こる。〈乃至〉人壽、漸く増し（＝だんだん増す）、百歳に至る時、此の十六大阿羅漢、諸もろの眷屬と、復た人中に來って、正法を稱揚（＝褒め称える）し、衆を度して出家せしめ、饒益（＝人々に利益を与え救うこと）の事を作す。人壽七萬歳の時、正法永く滅す。時に十六大阿羅漢、七寶を用いて窣堵波（＝墳墓）を造り、釋迦如來の遺身、皆其の内に集め、香花供養、繞ること百千匝して、是くの如きの言を作す、『敬禮す、世尊釋迦如來應正等覺。我れ教敕を受けて、正法を護持し、及び天・人の與めに、諸もろの饒益を作す。法藏（＝仏の教説）已に沒して、有縁（＝明版大蔵経本は「化縁」に作る）已に周し。今辭して滅度（＝涅槃に入る）す』と。是の語を説き已わって、一時（＝一度に、一緒に）に涅槃に入る」と。〈畧鈔す（＝略して書き写す）〉

＊

○又法住記云…得大果報＝『法住記』（T49-13a）に全く同じ文章が見える。
○又云…一時入涅槃＝文末に「略鈔」とあるように、『法住記』（T49-13b~c）の文章を取意要約したものである。「居士」は、『象器箋』【三四〇】に立項されている。

（小川太龍）

【二四〇】十六善神

①叢林轉讀大般若經、掲釋尊十六善神像。

＊

叢林（＝道場）の『大般若經』を轉讀するとき、釋尊十六善神の像を掲ぐ。

＊

○轉讀大般若經、掲釋尊十六善神像＝本書【一〇〇八】「転蔵」、【一〇一二】「読大般若経」、【一〇一三】「転大般若経」をそれぞれ参照。「叢林」は本書【一】に、「十六善神」も【二四〇】に立項されている。

②陀羅尼集經［五巻］載、般若波羅蜜多大心經云、爾時世尊、正在大會、説般若波羅蜜。及説是眞言法、利益方便、能令一切人非人等、聞此陁羅尼者、悉發無上菩提之心、廻向十方諸佛國土、當得阿耨多羅三藐三菩提、常生歡喜。爾時衆中。有十六大藥叉將。其名曰。　達哩底囉瑟吒大將　禁毗嚕大將　嚩日嚕大將　迦尾嚕大將　彌覩嚕大將　欵怒毗大將　阿儞嚕大將　婆儞嚕大將　印捺嚕大將　波夷嚕大將　摩尾嚕大將　嬌尾嚕大將　眞特嚕大將　嚩吒徒嚕大將　尾迦嚕大將　俱吠嚕大將　有如是等十六大藥叉將。各將七千諸眷屬等。即從座起、頂禮佛足、而白佛言、世尊、今此衆中、一切天人、既聞佛教、滅一切罪、不墮三塗、植於佛種。我等藥叉將、亦復如是。既蒙佛恩、我等、歸命佛法僧寶、常隨擁護佛法僧衆。若王大臣・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等、及一切衆生、受持此法、若讀、若誦、若聽、若念、又復念佛、若坐禪者、我等、十六藥叉將、及諸眷屬、隨其行處、而衛護之。若國・城邑、若聚落中、若空閑・林中、如是等處、若有念此般若波羅蜜多名者、我等眷屬、悉皆擁護。若人持此般若波羅蜜多時、忽遇一切諸難事者、我等眷屬、共相擁護。若復有人、欲得般若波羅蜜多成就者、我等眷屬、使滿其願。爾時佛、讚諸藥叉大將言、善哉善哉。汝等眷屬、能於般若波羅蜜多所在之處、而作衛護、為未來世諸衆生故、説修行之法。爾時諸藥叉王等言、若王、若比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、若能深心信解我般若波羅蜜多、功德自在威力、陀羅尼成就故者、又須我等十六眷屬、來佐衛護。汝等有能依此法、如前結護、廣建道場、為之壇法、求諸利益、國祚延長、人民安樂、四方無事、災禍不侵、保守貞幹、無諸疾苦。當請清淨持明師、無問道俗、道體相同。行純熟、七人乃至二七、三七人等、淨持戒、行德、尊長者、當於一所、別立厨膳、供給師等、任取勝地。無問、寺内寛大堂宇庭院之所、若近舍利浮圖塔廟、若好園林、名山淨處、起作道場。其壇場法、掘去惡物、淨土築平。如前所説、築平正已、又以淨牛糞、和香湯泥、摩塗其地、以五色粉、作三重院、三重各開四門。第三重内院。作一圓月。中心安般若波羅蜜多菩薩像。面向西門。其像右邊。安帝釋天。左邊安梵摩天。東面安使者。西面持明者。第一重外。四方各列四神王像。四方各四。總數即是十六神王。若欲畫者。第一重内。畫著亦得。其持明師者。入第三重内。正在般若波羅蜜多像前。先請般若波羅蜜多菩薩。次請梵天等。次請召四面。十六神王。而安置之。及使者等。　欵〈『玉篇』所角切〉

＊

『陀羅尼集經』［五巻］に載する、『般若波羅蜜多大心經』に云く、「爾の時、世尊、正に大會（＝大法要）に在りて、般若波羅蜜（＝完全な智慧）を説く。及び是の眞言法の、利益方便を説き、能く一切の人・非人等をして、此の陁羅尼を聞く者は、悉く無上菩提（＝この上ない悟りの智慧）の心を發し、十方の諸佛國土に廻向（＝向かう）し、當に阿耨多羅三藐三菩提（＝完全なさとり）を得て、常に歡喜を生ぜしむべし。爾の時、衆中に十六大藥叉（＝鬼神）將有り。其の名に曰く、　達哩底囉瑟吒大將　禁毗嚕大將　嚩日嚕大將　迦尾嚕大將　彌覩大將　欵怒毗大將　阿儞嚕大將　婆儞嚕大將　印捺嚕大將　波夷嚕大將　摩尾嚕大將　嬌尾嚕大將　眞特嚕大將　嚩吒徒嚕大將　尾迦嚕大將　俱吠嚕大將　是く

の如き等の十六大藥叉將有りて、各おの七千諸の眷屬（＝従者）等を將いる。即ち座より起ちて、佛足を頂禮（＝五体投地）して、佛に白して言さく、『世尊、今、此の衆中、一切天人、既に佛教を聞き、一切の罪を滅して、三塗（＝地獄・餓鬼・畜生の三悪道）に墮せず、佛種（＝成仏の種）を植ゆ。我等藥叉將も、亦た復た是くの如し。既に佛恩を蒙り、我等、佛法僧寶に歸命（＝帰依）し、常に隨いて佛法僧衆を擁護す。若し王大臣・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等、及び一切衆生、此の法を受持し、若しくは讀し、若しくは誦し、若しくは聽き、若しくは念じ、又た復た佛を念じ、若しくは坐禪せば、我等、十六藥叉將、及び諸もろの眷屬は、其の行處（＝修行の処）に隨いて、之を衛護せん。若しくは國・城邑（＝城壁に囲まれた街）、若しくは聚落（＝集落）の中、若しくは空閑（＝静かな）林中、是くの如き等の處に、若し此の般若波羅蜜多の名を念ずる者有らば、我等眷屬、悉く皆な擁護せん。若し人、此の般若波羅蜜多を持する時、忽ち一切諸もろの難事に遇わば、我等眷屬、共に相い擁護せん。若し復た人有りて、般若波羅蜜多を得て成就せんと欲せば、我等眷屬、其の願を滿たさしめん』と。爾の時、佛、諸もろの藥叉大將を讃じて言く、『善き哉、善き哉。汝等眷屬、能く般若波羅蜜多所在の處に於いて衛護を作す。未來世の諸もろの衆生の為の故に、修行の法を説け』と。爾の時、諸もろの藥叉王等言く、『若しくは王、若しくは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、若し能く深心（＝深く欣求する心）に我が般若波羅蜜多の功德自在威力、陀羅尼成就の故を信解（＝深く信じ体得する）せば、又た須く我等十六の眷屬、來り佐けて衛護すべし。汝等、能く我が此の法に依り、前の如く結護（＝護身結界する）し、廣く道場を建て、之の壇法（＝修法の壇を整備するしかた）を為し、諸の利益を求むること有れば、國祚（＝国の栄え）は延長し、人民は安樂、四方無事に、災禍侵さず、保守貞幹（＝心が正しく有能なさま）にして、諸もろの疾苦（＝悩み苦しみ）無からん。當に清淨の持明師（＝陀羅尼を修する師）、道俗を問うこと無く、道體（＝自己の本心）相同じく、行い純熟せる者、七人乃至二七（＝十四）、三七（＝二十一）人等を請うべし。淨持戒、行德（＝仏道修行により備わる德）尊長（＝高くすぐれた）なる者、當に一所に於いて、別に厨膳（＝供養の料理を作る厨房）を立て、師等に供給し、勝地を取るに任せ、寺内を問うこと無かるべし。寛大堂宇、庭院（＝中庭）の所、若しくは舍利浮圖塔廟（＝仏舎利塔）に近く、若しくは園林名山淨處を好まば、道場を起作せよ。其の壇場（＝安置して奉る場所）の法は、惡物を掘り去り、土を淨うして築くこと平らかにすること、前の所説の如し。築くこと平にし正しくし已わりて、又た淨き牛糞を以て、香湯泥に和（＝まぜあわせる）して、其の地に摩塗（＝すりこみ塗る）す。五色（＝青・黄・赤・白・黒）の粉を以て、三重院を作り、三重に各おの四門を開く。第三重の内院に、一つの圓月を作り、中心に般若波羅蜜多菩薩（＝般若菩薩、大般若菩薩）の像を安んず。面（＝顔）は西門に向かう。其の像の右邊に、帝釋天を安んじ、左邊に、梵摩天（＝梵天）を安んず。東面に使者を安んじ、西面は持明の者なり。第一重の外には、四方に各おの四神王（＝四天王のこと。持国天、増長天、広目天、多聞天）の像を列す。四方に各おの四なれば、總數は即ち是れ十六神王なり。若し畫かんと欲する者は、第一重の内に、畫著するも亦た得たり。其れ持明師は、第三重の内に入れば、正に般若波羅蜜多像の前に在り。先ず般若波羅蜜多菩薩を請し、次に梵天等を請し、次に四面の十六神王を請召（＝招請）して、之を安置（＝まつる）し、使者等に及ぶ。　勅〈『玉篇』所と角の切〉

＊

○陀羅尼集經載…及使者等＝『陀羅尼集經』巻三「佛説跋折囉功能法相品」の『般若波羅蜜多大心經』「般若壇法」（T18-808c-809b）に全く同じ文章が見える。ただ、本文末尾の「及使者等」の四字は意味が取りづらい。『大正新脩大蔵経』の校勘に拠れば、宋元明版では、この四字を「誦十六神王呪。呪如下（十六神王の呪を誦せ。呪は下の如し）」の九字、もしくは「誦十六神王呪。呪如下説（十六神王の呪を誦せ。呪は下に説くが如し）」の十字に作っており、そちらの方が分かりやすい。ちなみにこの本文の続きは、「請十六薬叉大将真言第二十」であり、呪文が説かれている。最末尾に付された「敕（『玉篇』所角切）」の部分は、『玉篇』（中国、南北朝時代の漢字辞典）による「敕」の字音を示したもので、「所（sho）」と「角（kaku）」の反切であるから「サク（saku）」となる。

③

忠曰、此經印相有十三。眞言有九、而揭諦咒、其一也。又有請十六神咒。若誦其咒、則不須供養、即得成就。十六神即到、任行者驅使、功徳無窮。須住覽。又有般若壇法、及畫大般若像法。所謂、般若菩薩也。

＊

忠曰く、「此の經に印相（＝仏・菩薩の悟り、誓願を象徴的に手指であらわすもの）十三有り。眞言九有りて、揭諦呪は、其の一なり。又た十六神を請ずるの咒有り。若し其の咒を誦するときは、則ち供養を須いずとも、即ち成就を得たり。十六神即ち到って、行者の驅使（＝思い通りに使う）するに任す。功徳無窮（＝無限）なり。須く住きて覽るべし。又た般若の壇法、及び大般若の像を畫く法有り。所謂る、般若菩薩なり」と。

＊

○此經印相有十三。…及畫大般若像法。＝全て『陀羅尼集経』巻三「仏説跋折囉功能法相品」の『般若波羅蜜多大心経』による。「此経印相有十三。真言有九、而揭諦咒、其一也」は（T18-805c-808a）に、「有請十六神咒」は（T18-809b）に、「若誦其咒呪、則不須供養、即得成就。十六神即到、任行者駆驅使、功徳無窮」は（T18-809b-c）に、「般若壇法」は（T18-808a-c）に、「画大般若像法」は（T18-805a-c）に、それぞれ記載されている。

④

塩嚢鈔［第九ノ七丈］云、大般若十六善神之名、及其本尊不定。唯其脇士、必法涌・常啼也。或曰、十二神將加四天、為十六神而不記名字。常喜院要集記［中巻］、列十六夜叉名云、　毘首羯摩夜叉　劫比羅夜叉　法護夜叉　眉目夜叉　廣目夜叉　護軍夜叉　珠賢夜叉　滿賢夜叉　持明夜叉　阿吒縛夜叉　縛蘓松龍王　補沙毘摩龍王　訶利帝大天佛　醫羅縛蹉大天佛　雙目大天佛　其本尊三種、而脇士隨本尊有異。若本尊藥師、則脇士日光・月光也。本尊釋迦、則脇士普賢・文殊也。本尊般若菩薩、則脇士法涌・常啼也。當寺〈北山觀勝寺〉法用如此。凡文殊、般若部總部主也。般若菩薩、大般若別部主也。故立為本尊。釋迦説教之主、藥師主息災故、並立為本尊焉。

＊

『塩（塩）嚢鈔』［第九の七丈］に云く、「大般若十六善神の名、及び其の本尊は定まらず。唯だ其の脇士は、必ず法涌・常啼なり。或いは曰く、『十二神將に四天を加えて、十六神と為す』と。而れども名字を記さず。常喜院の『要集記』［中巻］に、十六夜叉の名を列ねて云く、　『毘首羯摩夜叉　劫比羅夜叉　法護夜叉　眉目夜叉　廣目夜叉　護軍夜叉　珠賢夜叉　滿賢夜叉　持明夜叉　阿吒縛夜叉　縛蘓松龍王　蘓摩那龍王　補沙毘摩龍王　訶利帝大天佛　醫羅縛蹉大天佛　雙目大天佛』と。　其の本尊は三種にして、脇士は本尊に隨いて異なること有り。若し本尊藥師なれば、則ち脇士は日光・月光なり。本尊釋迦なれば、則ち脇士は普賢・文殊なり。本尊般若菩薩

なれば、則ち脇士は法涌・常啼なり。當寺（北山の觀勝寺）の法用、此くの如し。凡そ文殊は、般若部の總部主（＝総本尊）なり。般若菩薩は、大般若の別部主（＝別本尊）なり。故に立てて本尊と為す。釋迦は説教の主、藥師は息災（＝災難を防ぎ止める）を主とするが故に、並びに立てて本尊と爲すなり」と。

＊

○『塩嚢鈔』［第九ノ七丈］云、…並立為本尊焉。『塩嚢鈔』（一四四六成立。行誉著の辞典）に見える文章であるが、字句の異同、無著の要約が見られる。以下に『塩嚢鈔』（国立国会図書館デジタル資料、正保三年（一六四六）本［九巻七丁］）の該当箇所を記す。

大般若ノ十六善神ノ名、又其本尊様々也。然共其脇士ハ必ズ法踊・常啼欤。十二神將ニ四天ヲ加ト云共、其ノ名字ヲ不明。爰ニ常喜院ノ要集記ノ中巻ニハ、十六夜叉ト被出タリ。其ニ云。…（十六夜叉の名中の「蘇」を「蘓」、「雙」を「双」と作るほかは、文字の異同なし。）…　次ニ本尊ノ事、常ニ三種アリ。脇士ハ必ズ可隨本尊。藥師ノ時ハ、日光・月光也。釋迦時ハ普賢・文殊ナルベシ。用般若菩薩、法踊・常啼ノ二菩薩脇士ナルベシ。當寺ニ用之。凡文殊ハ般若部ノ惣部主。般若菩薩、大般若ノ別部主也。仍テ為本尊。釋迦ハ所説ノ本師也。藥師ハ多分息災ノ祈祷ニ用ル之故ト。云々。

⑤　忠曰、要集記十六夜叉名、未知何據矣。陀羅尼集經明列名、不用別説。

＊

忠曰く、『要集記』十六夜叉の名は、未だ何に據るかを知らず。『陀羅尼集經』に明らかに名を列ぬれば、別説を用いず。

＊

○要集記十六夜叉名、未知何據矣＝無著は「未だ何に拠るか知らず」とするが、『大方等大集経』巻五五「布閻浮提品」に、「爾時世尊、以震旦国、付嘱毘首羯磨天子五千眷属、迦毘羅夜叉大将五千眷属、法護夜叉大将五千眷属堅目夜叉大将五千眷属、大目夜叉大将五千眷属、勇健軍夜叉大将五千眷属、摩尼跋陀夜叉大将五千眷属、賢満夜叉大将五千眷属、持威徳夜叉大将五千眷属、阿荼薄拘夜叉大将五千眷属、般支迦夜叉大将五千眷属、婆修吉龍王五千眷属、須摩那果龍王五千眷属、弗沙毘摩龍王五千眷属、呵梨帝鬼子母天五千眷属、伊羅婆雌大天女五千眷属、双瞳目大天女五千眷属」（T13-368b）とあり、『転法輪菩薩摧魔怨敵法』にも「如此大唐護国土者、所謂毘首羯磨薬叉、劫比羅薬叉、法護薬叉、肩目薬叉、広目薬叉、護軍薬叉、珠賢薬叉、満賢薬叉、持明薬叉、阿吒縛倶薬叉（已上十大薬叉）、嚩蘇枳龍王、蘇摩那龍王、補沙毘摩大龍王（已上三大龍王）、訶利帝大天后、翳囉嚩蹉大天后、双目大天后（已上三大天后）。各有五千神將以為眷属」（T20-609b）とある。但し、見ての通り、末尾の三者は「大天王」ではなく「大天后」となっている。

⑥寂照堂谷響集［八ノ三十一丈］列十六善神名畢曰、又問、十六神形相如何。答一書云、提頭攞吒善神、身緑青色、怒顔、開口。著赤衣、被甲冑。右手持刀、左手杖鉾。鬚髪赤黒色。　毗盧勒叉善神、身赤紫色、忿顔、閉脣。著白青衣、擐甲冑。右拔刀、左按腰。鬚髪紺青色。　摧伏毒害善神、身赤肉色、著白色衣、擐甲冑。右執刀、左手掌向外當胸。鬚髪皆竪、紺色。　増益善神、身赤肉色、怒顔。四臂、右第一手持刀、第二把劍輪。左第一手執楊枝、第二擎半月。著緑色袈裟・紅裳、頸懸瓔珞。　歡喜善神、身緑青色、忿顔。頭頂金色孔雀。右手持鈎、左按腰。著赤衣、被甲冑。鬚髪赤色。　除一切障難善神、身黄色、怒相。六臂。右手第一持三戟、次捧經卷、次擎塔。左第一紅蓮華、次執鈎、次把螺。首戴寶冠、垂瓔珞。披白衣、掛袈裟、風飜環佩。　拔除罪垢善神、身赤黄色、躶體著雜色袈裟、右手持五叉棒、左作拳、置頂上。瞋目開口、利牙上下出。髪毛竪立。能忍善神、身紺青色、裸體被鎧、頭著素帽、垂下。右手持劍、左手執矟、鬚髪赤黒。

＊

『寂照堂の谷響集』［八の三十一丈］に十六善神の名を列し畢わりて曰く、「又た問う、『十六神の形相は如何』と。答う、『一の書に云く、「提頭攞吒善神（＝持国天）、身は緑青色（＝くすんだ緑。酸化した銅の色）、怒顔にして口を開く。赤衣を著て、甲冑（＝甲はよろい、冑はかぶと）を被る。右の手に刀を持ち、左の手に鉾（＝両刃の剣に柄をつけた武器）を杖く。鬚髪は赤黒色なり。　毗盧勒叉善神（＝増長天）、身は赤紫色、忿顔にしてを閉ず。白青衣を著て、甲冑を擐く。右には刀を抜き、左は腰を按ず（＝押さえる）。鬚髪は紺青色（＝紫を帯びた暗い青）なり。　摧伏毒害善神、身は赤肉色にして、白色の衣を著て、甲冑を擐く。右に刀を執り、左の手掌は外に向けて胸に當つ。鬚髪は皆な竪ち、紺色なり。　増益善神、身は赤肉色にして、怒顔なり。四臂（＝臂は腕）あり。右の第一手には刀を持し、第二には剣輪（＝古代インドで用いられた周りに刃が付いた輪状の金属製投擲武器）を把る。左の第一手には楊枝（＝やなぎの杖）を執り、第二には半月を擎ぐ。緑色の袈裟・紅裳（＝裳はスカート状の衣服）を著て、頸に瓔珞（＝かざり）を懸く。　歡喜善神、身は緑青色にして、忿顔なり。頭に金色の孔雀を頂く。右の手には鈎（＝長い柄の先にかぎの付いた武器）を持ち、左は腰を按ず。赤衣を著て、甲冑を被る。鬚髪は赤色なり。　除一切障難善神、身は黄色にして、怒相なり。六臂あり。右の手の第一は三戟（＝長い柄の先端にほこをとりつけた武器）を持し、次は経巻（＝経文を記した巻物）を捧ぐ、次は塔を擎ぐ。左の第一は紅蓮華、次は鈎を執り、次は螺（＝巻き貝）を把る。首に寶冠を戴き、瓔珞を垂る。白衣を披て、袈裟を掛く。風、環佩（＝腰に帯びる玉）を飜す。　拔除罪垢善神、身は赤黄色にして、躶體に雑色の袈裟を著る。右の手に五叉の棒を持ち、左は拳を作して、頂上に置く。目を瞋らし口を開きて、利牙（＝鋭い牙）上下に出づ。髪毛竪立す。　能忍善神、身は紺青色にして、裸體に鎧を被て、頭に素帽（＝きなり、又は白色のかぶり物）を著て、垂れ下せり。右の手に劍を持ち、左の手に稍を執る。鬚髪は赤黒なり。

＊

○　寂照堂谷響集［八ノ三十一丈］列十六善神名畢曰…前却語而已。＝以下、⑩までは、段落分けしてあるが、全て江戸初期の真言僧、運敞（一六一四～一六九三）が著した仏教事典『寂照堂谷響集』「十六善神形相」の条（『大日本仏教全書』文芸部一四九巻『寂照堂谷響集・寂照堂谷響続集・空華談義』148b-149b）に同文が見える。「又問う」と始まるのは、前項「般若十六善神」の条「客問う」の続きである為。また、⑩の文中に見える『般若守護十六善神王形体（T21-378a-c）は本文と同意であるが、文字の異同が見える。

⑦已上右方。

已上、右の方なり。

＊

⑧吠室羅摩拏善神、身青黒色、瞋面合脣。右手杖金剛棒、左手擎寶塔。披赤衣、著甲冑。鬚髪赤黒色。　毗盧博叉善神、身青黒色、笑顔。著緑衣、帯甲冑。右手握筆、左執卷。如欲書之勢。鬚髪赤色。　離一切怖畏善神、形相全似帝釋天。但頭戴髑髏。髑髏上、有三髻杵、是異彼天耳。　救護一切善神、身白青色。形相全如毗沙門天。但両手合掌、指端挿紅色微敷蓮華。　攝伏諸魔善神、身黒肉色。右手持劍、左垂掌向外。瓔珞荘厳。能救諸有善神、身白緑色。顔貌如玉。二手合掌。屈二頭指、著中指背第一節。著鎧帯紅

裙、披白色袈裟。　師子威猛善神、肉色、忿怒相。具四臂。右第一持斧、第二劍、左第一擎梵篋、第二三戟。首戴師子冠、著紺色袈裟、披虎皮小服。　勇猛心地善神、身緑色、微笑。擐甲冑、形如能救諸有。二手外縛當心。

＊

吠室羅摩拏善神（＝多聞天、独尊像の場合は毘沙門天と呼ぶ）、身は青黒色、瞋面にして脣を合す。右の手は金剛棒（＝仏敵を討ち下す宝棒）を杖き、左の手は寶塔を擎ぐ。赤衣を披て、甲冑を著る。鬚髪は赤黒色なり。　毗盧博叉善神（＝広目天）、身は青黒色にして笑顔なり。緑衣を著て、甲冑を帯す。右の手は筆を握り、左は卷（＝巻物）を執る。書せんと欲するが如きの勢なり。鬚髪は赤色なり。　離一切怖畏善神、形相は全く帝釋天に似る。但だ頭に髑髏を戴く。髑髏上に三股杵（＝三鈷杵、先が三枝に分かれている金剛杵）有り、是れ彼の天に異なるのみ。　救護一切善神、身は白青色なり。形相全く毗沙門天の如し。但だ兩手合掌して、指端に紅色の微敷（＝わずかに開いた）蓮華を挿めり。　攝伏諸魔善神、身は黒肉色なり。右手に劍を持ち、左は掌を垂れて外に向かう。瓔珞を以て莊嚴す。能救諸有善神、身は白緑色なり。顔貌、玉の如し。二手合掌す。二の頭指を屈して、中指の背の第一の節に著く。鎧を著て紅裙（＝裙はスカート状のひだのある衣服）を帯し、白色の袈裟を披たり。　師子威猛善神、肉色にして、忿怒の相なり。四臂を具せり。右の第一は斧を持ち、第二は劍、左の第一は梵篋（＝インドの経典。箱に入れたように見えることからこの名がある）を擎げ、第二は三戟なり。首に師子冠を戴き、紺色の袈裟を著て、虎皮の小服（＝庶民の服）を披す。　勇猛心地善神、身は緑色にして、微笑す。甲冑を擐て、形、能救諸有の如し。二手外縛（＝二手を交差して組み、十指を外に出す印）して心に當つ」と』と」と。

⑨已上左方。

＊

已上、左の方なり。

⑩世有金剛智所譯、般若守護十六善神王形體一卷三紙。讀之、明知、非是金剛智筆語。綴文甚拙。想先達、依金剛智圖畫、録之、而假金智名矣。不自揣之甚。今予所註、名及形相、粗摘彼卷中、前却語而已。

＊

世に金剛智（六七一～七四八　インド摩羅耶国の王族出身とされる訳経僧。音写で跋日羅菩提）所譯の『般若守護十六善神王形體』一卷三紙有り。之を讀むに、明らかに知んぬ、是れ金剛智の筆語（＝著述）に非ざるを。綴文（＝綴った文章）甚だ拙し。想うに先達、金剛智の圖畫に依り、之を録して、金智の名を假るならん。自ら揣らざるの甚だしきなり。今、予が註する所の、名及び形相、粗ぼ彼の卷中を摘し、語を前却するのみ。

（小川太龍）

【二四一】梵釋四王

①忠曰、東福土地堂、安梵天・帝釋。又凡道場疏・陳白等勤請回向梵釋四王。實有因由。往昔釋尊、遠舉古佛之例。以滅後正法、親付此三衆。其成道時、必四王授鉢、梵釋同請

轉法輪、無非歆付囑。不然、欲色二天、猶有増勝功徳諸天在。何得獨舉此三天耶。余今引方等典故、而證此義。

＊

忠曰く、「東福の土地堂に、梵天・帝釈を安んず。又た凡そ道場の疏（＝四六駢儷体を用いた表白文）・陳白（＝啓白文）等に梵釈四王を勤請回向す。實に因由有り。往昔、釈尊、遠く古佛の例に攀ず。滅後正法を以て、親しく此の三衆に付す。其の成道の時、必ず四王、鉢を授け、梵釈同に轉法輪を請い、付囑を歆むに非ずということ無し。然らずんば欲色（＝欲界・色界）の二天、猶お増勝功徳の諸天の在ること有り。何ぞ獨り此の三天を舉することを得んや。余、今ま方等（＝大乗経典、ここでは『大方等大集経』）の典故（＝故事・例）を引いて、此の義を證す」と。

＊

○梵釈四王＝梵天・帝釈天・四天王のこと。「土地堂」は『象器箋』【三三】に立項されている。

②大集経［廿二ノ十二丈］云、爾時釈迦牟尼佛、告諸梵天・帝釈・四王、善男子、我爲如是惡衆生故、本願力故、大憐愍故、於此惡處、成阿耨多羅三藐三菩提。［乃至］我涅槃後、所有正法、當付汝等。汝等便當深心守護。

＊

『大集経』［廿二の十二丈］に云く、「爾の時、釈迦牟尼佛、諸もろの梵天・帝釈・四王に告げたまわく、『善男子、我れ是くの如きの惡衆生（＝悪い衆生）の爲の故に、本願力（＝修行時に立てた誓願の力）の故に、大憐愍の故に、此の惡處に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を成ずず。［乃至］我れ涅槃の後、所有る正法、當に汝等に付すべし。汝等便ち當に深心に守護すべし』と」と。

＊

○大集経［廿二ノ十二丈］云、…汝等便當深心守護＝『大方等大集経』巻二一「宝幢分中四天王護法品」（T13-150b）に同文が見える。但し、［乃至］の箇所に「為欲利益無明闇冥渇法衆生、常楽増長煩悩衆生破壊魔衆建立法幢、施其法雨、令諸衆生離煩悩苦。令不可計無量衆生、発阿耨多羅三藐三菩提心。無量諸仏及諸菩薩、悉来在此世界集会、為壊衆生無量悪業紹三宝種」。という文章が省略されている。

③月藏経［六ノ廿一丈］云。爾時、世尊復問、娑婆世界主、大梵天王言、過去諸佛、以此四大天下、曾付囑誰令作護持養育。時娑婆世界主、大梵天王言、過去諸佛、以此四天下、曾付囑我、及憍尸迦、令作護持。［乃至］我等曾於鳩留孫佛、已受教敕、乃至、令三寶種、已作熾然。拘那含牟尼佛、迦葉佛所、我受教敕、亦如是。於三寶種、已勤熾然。地精氣、衆生精氣、正法味、醍醐精氣、久住増長故。亦如我今、於世尊所、頂受教敕、於己境界、言説教令、得自在處、休息一切鬪諍饑饉、乃至、令三寶種、不斷絶故、三種精氣、久住増長故、遮障惡行衆生、護養行法衆生故、休息衆生三惡道、趣向三善道故、爲令佛法、得久住故、勤作護持。佛言、善哉善哉、妙丈夫、汝應如是。

＊

『月藏経』［六の廿一丈］に云く、「爾の時、世尊復た娑婆世界の主、大梵天王に問うて言く、『過去の諸佛、此の四大天下を以て、曾て誰にか付囑して、護持養育を作さしむる』

と。時に娑婆世界の主、大梵天王言く、『過去の諸佛、此の四天下を以て、曾て我れ及び憍尸迦（＝帝釈天）に付囑し、護持を作さしむ。［乃至］我等曾て鳩留孫佛（＝過去七仏の第四番目の仏）に於いて、已に教敕（＝教誡）を受け、乃至、三寶（＝仏、法、僧）の種をして、已に作て熾然（＝盛んなさま）ならしむ。拘那含牟尼佛（＝過去七仏の第六番目の仏）、迦葉佛（＝過去七仏の第七番目の仏）の所に、我れ教敕を受くること、亦た是くの如し。三寶の種に於いて、已に勤めて熾然たり。地の精氣（＝元気づけるもの）、衆生の精氣、正法の味、醍醐（＝ここでは仏性、悟りを指す）の精氣、久住増長せんが故に。亦た我が今の如き、世尊の所とに於いて、教敕を頂受し、己が境界に於いて、言説教令し、自在の處を得て、一切の鬪諍（＝争い）饑饉（＝飢餓）を休息せしめ、乃至、三寶の種をして、斷絶せざらしむるが故に、三種の精氣、久住増長するが故に、惡行の衆生を遮障し、行法（＝修行を行う）の衆生を護養するが故に、衆生の三惡道（＝地獄界・餓鬼界・畜生界）を休息し、三善道（＝修羅界・人界・天界）に趣向（＝おもむくこと）せしむるが故に、佛法をして、久住を得せしめんが爲の故に、勤めて護持を作す』と。佛の言く、『善きかな、善きかな。妙丈夫（＝善男子、素晴らしい人物）、汝應に是くの如くなるべし』と」と。

＊

○月藏經［六ノ廿一丈］云、…妙丈夫、汝應如是＝『大方等大集経』巻五一「月藏分諸天王護持品」（T13-343b）に同文が見える。但し、［乃至］の箇所に「而我有失不彰己名及帝釈名、但称諸余天王及宿曜辰護持養育。爾時娑婆世界主大梵天王及憍尸迦帝釈、頂礼仏足而作是言、大徳婆伽婆、大徳修伽陀、我今謝過。我如小兒愚癡無智、於如來前不自称名。大徳婆伽婆、唯願容恕。大徳修伽陀、唯願容恕。諸来大衆亦願容恕。我於境界言説教令得自在処、護持養育。乃至令諸衆生趣善道故」という文章が省略されている。『月藏経』とは『大集経』中の「月藏分」のこと。

④　忠曰、凡四天王、各分護四洲。北毗沙門。東提頭賴吒。南毗樓勒。西毗樓博叉。［月藏經説］然又有別義、四王竝護南洲。

＊

忠曰く、「凡そ四天王は、各おの分かちて四洲（＝南贍部州・東勝身州・西牛貨州・北倶盧州の四大陸）を護す。北は毗沙門（＝多聞天）、東は提頭賴吒（＝持国天）、南は毗樓勒（＝増長天）、西は毗樓博叉（＝広目天）なり。［『月藏經』に説く。］然れども又た別義有って、四王並びに南洲を護る」と。

＊

○然又有別義、四王竝護南洲＝次項でこの説を説く。

⑤月藏經［六ノ十七丈］云、大梵天王言、大徳婆伽婆、此四天下、南閻浮提最爲殊勝。何以故。閻浮提人、勇健聰慧、梵行相應。佛婆伽婆、於中出世。是故四大天王、於此倍増護持養育。［廣説分國護持相］

＊

『月藏經』［六の十七丈］に云く、「大梵天王の言く、『大徳婆伽婆（＝世尊）、此の四天下には、南閻浮提（＝南贍部州、人間が住む大陸）を最も殊勝（＝最も優れている）と爲す。何を以ての故に。閻浮提の人は、勇健（＝勇ましくすこやか）聰慧（＝聡明）、梵行（＝仏道修行）相應（＝悟りを得るに値する）なり。佛婆伽婆、中に於いて出世す。是の故に四大天王は、此こに於

いて倍増護持養育す』と」と。［廣くは國を分かちて護持するの相を説く。］

＊

○月藏經［六ノ十七丈］云、…於此倍増護持養育＝『大方等大集経』巻五一「月藏分諸天王護持品」（T13-342b）に同文あり

⑥　又月藏第七巻、佛告四王。令護閻浮提佛法。廣説如彼。

＊

又た『月藏』の第七巻に、佛、四王に告げて、閻浮提の佛法を護らしむ。廣説、彼の如し。

＊

○又月藏第七巻…廣説如彼＝『大方等大集経』巻五二「月藏分第十二提頭賴吒天王護持品第十一」、「月藏分第十二毘楼勒叉天王品第十二」、「月藏分第十二毘楼博叉天王品第十三」「月藏分第十二毘沙門天王品第十四」（T13-346b-352a）にそれぞれ記されている。

（小川太龍）

【二四二】密迹金剛

⑩　密迹因縁、又出于如來不思議秘密大乘經［百四套］第五、意無量作無邊慧。　經［七丈］曰、最小無邊慧太子者、當得成佛、號樂欲如來。於賢劫中、最後成佛。

⑪　注云、古經不譯。但云樓至。

⑫金光明經文句［六ノ三十八丈］知禮記云、據經唯一人、今状於伽藍之門、而爲二像者、夫應變無方。多亦無咎。

⑬釋門正統［二ノ三十五丈］云、五分律云、佛四面、有五百金剛。今状其二。無可疑也。又前文、云於門兩頰。應畫執仗藥叉、是也。　〈前文者、正統引毘奈耶律云、佛告給孤長者、於門兩頰應畫執杖藥叉〉。

⑭　忠曰、圓覺經集解引千子成佛、二子爲梵王金剛因縁。辨云、依之。寺三門。只合一身金剛、一身梵王。今爲對故。塑二金剛。非也。〈止此〉。予謂。此胸臆妄談也。夫安金剛於門首。爲有護教之約。如梵王。正掌請法。若安之門、則果是何義。

⑮玄應衆經音義［一ノ八丈］云、密迹、梵言散那。此譯云密主、密是名也。以知佛三密功德故也。主者夜叉主也。按梵本、都無迹義。當以示迹爲神故、譯經者、義立名耳。

⑯　忠曰、此未檢尋寶積文也。經云、法意自誓。普聞一切諸佛秘要密迹之事。信樂受憙。〈止此〉。蓋密主者、密迹之主也。迹義屬佛。非示迹耳。心有佛密迹有財得名。

⑰清凉華嚴疏［卅八上ノ七十丈］云、密跡者、古譯爲力士。

⑱　忠曰、以密迹爲梵語、訛矣。

⑲嘉祥法華疏［十二ノ廿七丈］云、金剛神、屬四天處住。實是樓至佛。樓至此云、啼哭佛。

⑳　忠曰、金剛誤爲樓至。其來尚矣。光明文句記［六ノ卅八丈○名義集引用］云、世傳樓至化身。非也。乃法意王子耳。

21智者觀音義疏［四ノ十八丈］云、金剛手執此寶、護持佛法。或言在欲色天中、教化諸天。即大權神也。經云、是吾之兄。

22　忠曰、恐弟字、誤作兄。然慈恩上生經疏［上ノ十六丈］引金剛力士經云、諸兄、願作金剛。

擁護小弟。〈止此〉。慈恩亦以弟爲兄。

23 又曰、光明文句記［六ノ卅七丈］説二弟爲金剛梵王因縁。爲出正法念經余徧檢彼經七十巻、都無文。名義集釋門正統。圓覺集解、並承訛一律矣。一人傳虚、萬人傳實。故實學難矣。

24 又普通廣釋［中ノ九丈］説、一千二子外、別有密迹。亦是不親見經本縁之過也。

又曰、義楚六帖［十六ノ卅丈］載此因縁引上生經。亦妄也。諸天傳［上ノ廿二丈］云、集要引佛名經、及上生經説。昔有王生千單二子。千兄同詣佛所。發心修道。二弟不知、一弟發願、千兄成道。爲魔惱害。一弟發願、我爲力士。護千兄法。〈乃至〉一爲調達以魔惱。一爲力士以護持。〈止此〉。是説又與寶積大異也。

25 風調雨潤像　升菴文集［四十四ノ十七丈］云、按兵書云、東海出氣如鼈。渭水出氣如蜃。蜃形似蛇而大。今寺門金剛、風調雨潤。手執劍者風也。彈琵琶者調也。執傘者雨也。手中如蛇者蜃也。則與蚌蜃。字同物異。

26 忠曰、日本不見此四像。又無本據。恐中華末代妄造。今且附見于金剛下。又可言手中握如蛇者潤也。如蛇者蜃也。寫者以爲累文。訛脱。

（小川太龍）

【二四三】月蓋長者

①山門閣上、觀音像右邊、安月蓋長者像。蓋依請觀音經事縁。以爲觀音脇士也。

②請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼咒經云、時毗舍離大城之中、有一長者。名曰月蓋。與其同類五百長者、俱詣佛所。到佛所已、頭面作禮、却住一面。白佛言、世尊、此國人民、遇大惡病。良醫耆婆。盡其道術。所不能救。唯願世尊、慈愍一切、救濟病苦。令得無患。爾時世尊、告長有言、去此不遠。正立西方。有佛世尊、名無量壽。彼有菩薩、名觀世音、及大勢至。恒以大悲、憐愍一切、救濟苦厄。汝今應當五體投地、向彼作禮、燒香散華、繫念數息、令心不散。經十念頃。爲衆生故、當請彼佛、及二菩薩。説是語時、於佛光中、得見西方無量壽佛、并二菩薩。如來神力、佛及菩薩、俱到此國。往毗舍離、往城門闔。佛二菩薩、與諸大衆、放大光明、照毗舍離、皆作金色。爾時毗舍離人、即具楊枝淨水、授與觀世音菩薩。大悲觀世音、憐愍救護一切衆生。〈乃至〉。毗舍離人、平復如本。

（小川太龍）

【二四四】善財童子

①山門閣上、觀音像左邊、安善財童子像。蓋依華嚴經説相、以爲觀音脇士也。

＊

山門の閣上、觀音像の左邊に、善財童子像を安んず。蓋し『華嚴經』の説相（＝説かれた内容）に依りて、以て觀音の脇士（＝仏の両脇に立つ菩薩、羅漢）と爲すなり。

＊

○山門閣上…以爲觀音脇士也＝文中、『華嚴經』は、正式には『大方広仏華嚴経』と言い、サンスクリット言語の意味は、「仏の飾りと名づけられる広大な経」である。漢訳には、仏陀跋陀羅訳の六十巻本（T９所収。『六十華嚴』『晋経』『旧華嚴』とも呼ばれる）、実叉難陀訳の八十巻本（T10所収。『八十華嚴』『唐経』『新華嚴』とも呼ばれる）、般若訳の四十巻本（T10 所収。『四十華嚴』『貞元経』とも呼ばれる）の三訳がある。このうち、八〇巻本が禅家で依用されることが多い。ここで引かれる『華嚴経』も全て八〇巻本からである。「觀音」は『象器箋』の【二三三】に立項されている。

②華厳経［六十二ノ八丈］入法界品云、爾時、文殊師利童子、知福城人、悉已來集。〈乃至〉復於是時、觀察善財、以何因縁、而有其名。知、此童子、初入胎時、於其宅内、自然而出七寶樓閣。其樓閣下、有七伏藏。於其藏上、地自開裂、生七寶牙。所謂、金、銀、瑠璃、頗梨、眞珠、硨磲、碼碯。善財童子、處胎十月、然後誕生。形體・支分、端正、具足、其七大藏、縦廣・高下、各滿七肘。從地涌出、光明照耀。復於宅中、自然而有五百寶器、種種諸物、自然盈滿。所謂、金剛器中、盛一切香、於香器中、盛種種衣。美玉器中、盛滿種種上味飲食、摩尼器中、盛滿種種殊異珍寶、金器盛銀、銀器盛金。金銀器中、盛滿瑠璃及摩尼寶、頗梨器中、盛滿硨磲、硨磲器中、盛滿頗梨、碼碯器中、盛滿眞珠、眞珠器中、盛滿碼碯、火摩尼器中、盛滿水摩尼、水摩尼器中、盛滿火摩尼。如是等、五百寶器、自然出現。又雨衆寶及諸財物、一切庫藏、悉令充滿。以此事故、父母親屬、及善相師、共呼此兒、名曰善財。

＊

『華厳経』［六十二の八丈］の「入法界品」に云く、「爾の時、文殊師利童子、福城の人、悉く已に來集することを知る。〈乃至〉復た是の時に於いて、『善財、何の因縁を以てして、其の名有りや』と觀察す。知ぬ、此の童子、初めて胎に入りし時、其の宅内に於いて、自然にして七寶（＝七種の宝）の樓閣（＝高殿）を出だす。其の樓閣の下に、七の伏藏（＝地中に秘め隠された財宝）有り。其の藏の上に於いて、地自ら開裂して、七寶の牙を生ず。所謂る、金、銀、瑠璃（＝猫目石）、頗梨（＝水晶）、眞珠、硨磲（＝貝の一種）、碼碯なり。善財童子、胎に處すること十月にして、然る後に誕生す。形體・支分（＝部分）、端正、具足して、其の七の大藏、縦廣・高下、各おの七肘（＝一肘は一尺六寸）に滿つ。地從り涌出して、光明照耀（＝ひかりかがやくこと）す。復た宅中に於いて、自然にして五百の寶器有って、種種の諸物、自然に盈滿（＝物事が満ちあふれること）せり。所謂る、金剛（＝ダイヤモンド）の器の中には、一切の香を盛り、香器の中に於いて、種種の衣を盛る。美玉の器の中に、種種上味の飲食を盛り滿てて、摩尼（＝珠・宝石類の総称）器の中には、種種の殊異の珍寶を盛り滿てて、金器には銀を盛り、銀器には金を盛る。金銀器の中には、瑠璃及び摩尼寶を盛り滿てて、頗梨器の中には、硨磲を盛り滿てて、硨磲器の中には、頗梨を盛り滿てて、碼碯器の中には、眞珠を盛り滿てて、眞珠器の中には、碼碯を盛り滿てて、火摩尼（＝火珠、火炎を帯びた宝珠）器の中には、水摩尼（＝浄水珠、濁水を清浄にする宝珠）を盛り滿てて、水摩尼器の中には、火摩尼を盛り滿つ』なり。是くの如き等の、五百の寶器、自然に出現す。又た衆寶及び諸もろの財物を雨らして、一切の庫藏に、悉く充滿せしむ。此の事を以ての故に、父母親屬、及び善相師（＝占い師）、共に此の兒を呼んで、名づけて善財と曰う」と。

＊

○華厳経［六十二ノ八丈］入法界品云…名曰善財＝『大方広仏華厳経』巻六二「入法界品」（T10-332b）に全く同じ文章が見える。ただし、「乃至」の部分には、「随其心楽現自在身、威光赫奕蔽諸大衆。以自在大慈令彼清涼、以自在大悲起説法心、以自在智慧知其心楽、以広大辯才将為説法」の五十二字が省略されている。文殊師利は、一般的には普賢菩薩とともに釈迦仏の脇侍として、仏の智・慧の別徳を司って、その猛威の象徴である獅子に乗る。文殊については、『象器箋』【二二六】「文殊普賢」・【二三六】「僧形文殊」も参照。文中の「金・銀・瑠璃・頗梨・真珠・硨磲・碼碯」を、一般に「七宝」と呼んでいる。

③又入法界品、善財、從文殊師利發心、漸次南行、參五十三善知識。而觀自在菩薩、居其第二十七善知識。如經廣説。

＊

又た「入法界品」に、「善財、文殊師利に從り發心（＝求道の念を起こすこと）して、漸次に南に行って、五十三の善知識（＝仏道への手引きをする有徳者）に參ず。而して觀自在菩薩は、其の第二十七の善知識に居る」と。經に廣説（＝詳しく説く）するが如し。

＊

○又入法界品、善財從文殊師利発心…居其第二十七善知識＝『大方広仏華厳経』「入法界品」にはこのままの文章は見えないが、「入法界品」の内容を取意によりまとめたものである。ただし、「入法界品」では「観自在菩薩」ではなく、「観世音菩薩」であり、善知識の二十八番目となっている。

（西川秀敏）

【二四五】韋天將軍

①忠曰、三洲護法者、韋琨將軍。世稱韋馱天、訛矣。

＊

忠曰く、「三洲（＝須弥山の南・東・西の三地方）護法の者は、韋琨將軍なり。世に韋馱天と稱するは、訛なり」と。

＊

○「三洲護法」に北方を除くのは、北方には仏法が広まっていないからとされる。③に挙げる『律相感通伝』の記述を参照。文中の事項のうち、【二四七】「韋馱天」は『象器箋』中に立項されている。

②『法苑珠林』「十六ノ七丈」云、長安西明寺道道宣律師、大唐乾封二年、仲春之節、身在京師城南清宮、故淨業寺。逐靜修道、遂感冥應。時有諸天、四王臣佐。至律師房門。律師問言、是誰。答言、弟子張瓊、第一欲界、南天王之第十五子、云云。又有天人韋琨、亦是南天王八大將軍之一臣也。四天王合有三十二將。斯人爲首、生知聰慧、早離欲塵、清淨梵行、修童眞業、面受佛囑、弘護在懷。周統三洲、住持爲最。亡我亡瑕、殷憂於四部。達物達化、大濟於五乘。所以四有佛教、互涉頽綱、僧像阽危、無非扶衞。屢蒙展對、曲備嘉猶。歎律師緝敍餘風、聖迹住持刪約撰集。於是律師、既承靈屬、扶疾筆受。隨聞隨録、合成十卷。

＊

『法苑珠林』「十六の七丈」に云く、「長安西明寺の道宣律師、大唐の乾封二（六六七）年、仲春之節、身は京師城南の清宮、故淨業寺に在り。靜を逐うて道を修め、遂に冥應（＝仏の加護）を感ず。時に諸天有り、四王（＝四天王）の臣佐（＝補佐官）なり。律師の房門に至る。律師問うて言く、『是れは誰ぞ』と。答えて言く、『弟子は張瓊。第一の欲界、南天王（＝増長天）の第十五の子なり。云云』と。又た天人韋琨有り、亦た是れ南天王の八大將軍の一臣なり。四天王には、合して三十二將有り。斯の人を首と爲す。生知聰慧（＝生まれながらに聡明）にして、早に欲塵（＝煩悩）を離れ、清淨の梵行（＝清らかな修行）、童眞（＝仏・菩薩の使役）の業を修めて、面りに佛囑（＝仏の委嘱）を受けて、弘護（＝ひろく仏法を守護すること）、懷に在り。三洲を周統して、住持を最と爲す。我亡く瑕亡くして、

四部（＝四衆、比丘、比丘尼、在俗信者の男女）を殷憂（＝深く憂える）す。物を達し化を達し、大いに五乗（＝人乗・天乗・声聞乗・縁覚乗・菩薩乗）を濟う。所以に四有（＝生有・本有・死有・中有）の佛教、互いに頽綱（＝衰えた教え）に渉り、僧像の阽危（＝危険が迫る）、扶衞（＝助け守る）に非ざる無し。屡しば展對を蒙り、曲に嘉猶を備う。律師の、餘風を緝敘して、聖迹（尊い事績）・住持、刪約（＝要約してまとめ）撰集することを歎ず。是ここに於いて律師、既に靈屬を承けて、疾を扶けて筆受す。聞くに隨いて、隨いて録し、合して十卷と成す」と。

＊

○『法苑珠林』［十六ノ七丈］云、…合成十卷。＝『法苑珠林』巻一六「千仏篇第五之四」（四部叢刊本・6b~8a）からの節略での引用。大正蔵本では、巻一〇（T53-353c）に相当する。「云云」等による中略部分を除き、全て同文。

③道宣律相感通傳云、有一天人、來禮敬、敘喧涼已曰、弟子姓王、碇名蟠。是大呉之蘭臺臣也〈云云〉。弟子是南天韋將軍下之使者。將軍事務極多。擁護三洲之佛法。有鬪諍陵危之事、無不躬往和喩令解。今附和尚南。太欲即來、前事擁隔。不久當至。且令弟子等共師言議。　又云、次又一天云、姓費氏、禮敬如前。云、弟子迦葉佛時、生在初天在韋將軍下。諸天貪欲所醉、弟子、以宿願力、不受天欲。清淨梵行、徧敬毘尼。韋將軍、童眞梵行、不受天欲。一王之下、有八將軍。四王三十二將、周四天下、往還護助諸出家人。四天下中、北天一洲、少有佛法。餘三天下、佛法大弘。然出家人、多犯禁戒。少有如法。東西天下、少有黠慧。煩惱難化。南方一洲、雖多犯罪、化令從善、心易調伏。佛臨涅槃、親受付囑、竝令守護。不使魔撓、若不守護如是破戒、誰有行我之法教者。故佛垂誡、不敢不行。雖見毀禁、愍而護之。見行一善、萬過不咎。事等忘瑕、不存往失。且人中臭氣、上熏於空四十萬里、諸天清淨。無不厭之。但以受佛付囑、令守護法。佛尚與人同止。諸天不敢不來。韋將軍三十二將之中、最存弘護。多有魔子魔女、輕弄比丘。道力微者、竝爲惑亂。將軍恓惶奔赴、應機除剪。故有事至、須往四王所。時王見皆起。爲韋將軍修童眞行、護正法故。　又云、最後一朝、韋將軍至。致敬相問、不殊恆禮。云、弟子常見師在安豐坊。初述廣弘明集、割斷邪正、開釋明顯、異於前者、甚適幽心。常欲相尋、但爲三天下中佛僧事大、鬪訟興兵、攻伐不已。弟子職當守護、慰喩和解、無暫時停。所以令前諸使者、共師言議。今暫得來、不得久住。師今須解佛法衰昧。天竺諸國不及此方。此雖犯戒、太途慙愧。内雖陵犯、外猶愼護。故使諸天見其一善、忘其百非。若見造過、咸皆流涕、悉加守護。不令魔子所見侵惱。余問、欲界主者、豈非魔耶、以下諸天、皆非魔屬耶。答曰、魔若行惡、四天帝釋、皆所不從。若下二天、行諸善法、魔及魔子、無如之何。此方僧勝、於大小乘、曾無二見、悉皆奉之。西土不爾。諸小乘人、獲大乘經、則投火中。小僧皆賣於北狄。耆者奪其命根。不可言述。今菩提大寺主威猛、象有八萬、僧戸數十萬、王征不得。遶塔之下、日有金帛、收已自納。厨内生魚、積成大聚。羊腔縣之、劇屠宰肆。然亦守護、不令惡鬼害之。余問曰、可無善神龍王。何因縱其造罪。答曰、血食之神、咸來嚮衞。諸受佛語者、守護大乘寺僧。余曰、常見此國、以殺戮爲功。毎願、若死生龍鬼中、有大勢力、令其不殺。如何此神、還縱其殺者。答曰、竝是衆生惡業所致。魚羊還債、是其常理。余問、還債之業、誠是可嘉。然後殺噉、無不由惑。惑是貪瞋癡。貪癡之惑、結在惡道。如何諸神、故縱造耶。答曰、亦是業定。諸佛不能除。況諸神者、

生此國中、正念既失、便縱其殺。余曰、先有此願、脱生失念墮彼如何。答曰、自非觀行明白、在涅而不緇、方向得行此也。韋將軍所言既終、作禮而退。〈釋門正統第三卷［四十六丈］亦引之。〉

＊

道宣の『律相感通傳』に云く、「一りの天人有り、來りて禮敬し、喧涼を（＝涼は諒か。まことを言ういうことか。）敍し已わりて曰く、『弟子、姓は王、名は蟠。是れ大呉の蘭臺の臣なり〈云云〉。弟子は是れ南天韋將軍の下の使者なり。將軍は事務極めて多し。三洲の佛法を擁護す。鬪諍（＝あらそい）陵危（＝非常に危険なさま）の事有れば、躬ら往きて和喩して解かしめざること無し。今附して（＝たよって）和南（＝礼拝）す。大だ即ち來らんと欲すれども、前事擁隔（＝阻隔。へだてじゃまする）す。久しからずして當に至るべし。且しく弟子等をして師と共に言議せしめよ』と」と。　又た云く、「次に又た一りの天云く、『姓は費氏』と。禮敬すること前の如し。云く、『弟子は迦葉佛（＝過去七仏の一人で釈迦の直前に出現した仏）の時に、生まれて初天に在りて、韋將軍の下に在り。諸天は貪欲に醉わさるるも、弟子、宿願力を以て天欲を受けず。清淨梵行（＝仏道修行）にして、徧に毘尼（＝仏戒）を敬す。韋將軍、童眞（＝沙弥）梵行して、天欲を受けず。一王の下に八將軍有り。四王にして三十二將あって、四天下を周り、往還（＝行き来する）して諸もろの出家の人を護助す。四天下の中に、北天の一洲、佛法有ること少れなり。餘の三天下は、佛法大いに弘まる。然れども出家の人、多く禁戒を犯す。少しき如法なる有り。東西の天下には、黠慧（＝悪賢いもの）有ること少れなり。煩惱、化し難し。南方の一洲は犯罪多しと雖も、化して善に從わしむれば、心、調伏し易し。佛、涅槃に臨み、親り付囑（＝教えを託す）を受け、竝びに守護せしめ、魔をして撓さしめず。若し是くの如きの破戒を守護せずんば、誰か我の法教を行ずる者有らん。故に佛、誡を垂れたもう。敢えて行ぜずんばあらず。毀禁を見ると雖も、愍れみて之を護す。一善を行ずるを見ては、萬過も咎めず。事、忘瑕に等し、往失を存せず。且つ人中の臭氣、上、空に熏ずること四十萬里。諸天清淨なれば、之を厭わずということと無し。但だ佛の付囑を受けて、法を守護せしむるを以て、佛尚お人と同止すれば、諸もろの天敢えて來らずんばあらず。韋將軍は三十二將の中に、最も弘護を存す。多く魔子・魔女有りて、比丘を輕弄す。道力（＝仏道修行で身につけた力）微かなる者は並びに惑亂せらる。將軍恪惶奔赴（＝急いで走り回る）して、機に應じて除剪（＝取り除く）す。故に事至ること有らば、須く四王の所に往くべし。時に王見て皆起つ。韋將軍、童眞の行を修して、正法を護するが為の故に」と。

又た云く、「最後の一朝に韋將軍至りて、敬を致して相問うこと、恒の禮に殊ならず。云く、『弟子常に師の安豐坊に在るを見る。初め『廣弘明集』を述べて、邪正を割斷し、開釋明顯（＝非常に明らかなさま）、前きの者に異なり。甚だ幽心（＝俗世を離れ暮らすこころ）に適えり。常に相尋ねんと欲するも、但だ三天下の中の、佛僧の事大なるが為めに、鬪訟（＝鬪は鬪争、訟は告訟。）兵を興し、攻伐して已まず、弟子職當に守護すべければ、慰喩（＝慰め諭す）和解（＝和やかにする）して、暫時も停まること無し。所以に前の諸もろの使者をして師と共に言議せしむ。今暫く來たることを得たり。久住（＝長くとどまる）することを得ず。師今須く佛法の衰昧（＝衰退）を解すべし。天竺（＝インド）の諸國は、此の方に及ばず。此こには戒を犯すと雖も、太途慙愧す。内に陵犯（＝罪を犯す）すと雖も、外には猶お愼護す。故に諸天をして其の一善を見て、其の百非を忘れしむ。若し過

を造るを見ては、咸く皆な流涕して、悉く守護を加う。魔子をして侵惱せられしめず』と。余問う、『欲界の主は、豈に魔に非ずや。以下の諸天、皆な魔の屬に非ずや』と。答えて曰く、『魔なり。若し惡を行ずれば、四天・帝釋、皆な從わざる所なり。若し下の二天、諸もろの善法を行ずれば、魔及び魔子も、之を如何ともすること無し。此の方の僧は勝れたり。大小乘に於て曾て二見無く、悉く皆な之を奉ず。西土は爾らず。諸もろの小乘の人は、大乘經を獲れば、則ち火中に投ず。小僧をば皆な北狄（＝北方の異民族）に売る。耆者（＝年長者）をば其の命根を奪う。言述す可からず。今菩提大寺の寺主、威猛にして、象八萬有り。僧戸、數十萬、王も征すること得ず。塔の下を遶れば、日びに金帛（＝金と絹）有り、收め已わりて自ら納る。厨内に生魚、積みて大聚を為す。羊腔（＝羊肉）之を縣くること、屠宰の肆よりも劇し。然るに亦た守護、惡鬼をして之を害せしめず』と。余問うて曰く、『善神の龍王無かる可けんや。何に因りてか其の造罪を縱すや』と。答えて曰く、『血食（＝いけにえを捧げて祖霊をまつること）の神、咸な來たりて嚮衞す。諸もろの佛語を受くる者、大乘の寺の僧を守護す』と。余曰く、『常に此の國の、殺戮を以て功と為るを見る。毎に願う、若し死せば龍鬼の中に生じて、大勢力有りて、其れをして殺さざらしめん。如何ぞ此の神、還って其の殺す者を縱にするや』と。答えて曰く、『並びに是れ衆生の惡業の致す所なり。魚羊、債を還す、是れ其の常の理なり』と。余問う、『還債の業は、誠に是れ嘉しつ可し。然る後に殺噉は（＝殺すこと）、惑に由らざるということ無し。惑は是れ貪瞋癡なり。貪癡の惑は、結して惡道に在り。如何ぞ諸神、故に造ることを縱にするや』と。答えて曰く、『亦た是れ業定まる。諸佛も除くこと能わず。況や諸神なる者をや。此の國中に生れて、正念既に失すれば、便ち其の殺すことを縱にす』と。余曰く、『先より此の願有り。脱し生じて失念せば彼に堕せん。如何』と。答えて曰く、『觀行明白、涅に在りて、緇ざるに非ざる自りは、方に此を行ずることを得べし』と。韋將軍、言う所、既に終わりて、作禮して退く」と。〈『釋門正統』第三巻［四十六丈］も亦た之を引く。〉

＊

○有一天人…且令弟子等共師言議＝『律相感通伝』一巻（T45-874c）からの引用。原文の「弟子姓王、碇名蟠」の部分、大正蔵本『律相感通伝』は「姓」を「性」に、「蟠」を「璠」に作る。また「今附和尚南。太欲即來」の部分、『感通伝』は「太」を「天」に作っており、「今附和尚南天欲即来」（今、南天に附和して即ち来たらんと欲す）」となる。尚、この文章は『法苑珠林』巻一四（T53-393c）にも引用されているが、この部分、該書では「太」が「大」となっており、校注に拠れば宋元明版の大蔵経では「天」に作るとある。〈云云〉の部分には、「会師初達建業、孫主即未許之。令感希有之瑞、為立非常之廟。于時天地神祇、咸加霊被。於三七日、遂感舍利。呉主手執銅餅、傾銅盤内。舍利所衝、盤即破裂。乃至火焼試、俱不能損。闞沢張昱之徒、亦是天人護助。入其身中、令其神爽通敏、答對諧允。今並在天、弘護仏法為事」の一〇六字が省略されている。

○又云、次又一天云、姓費氏、禮敬如前。…爲韋將軍修童眞行護正法故＝同じく『律相感通伝』（T45-874c~875a）からの引用。前文とこの文章の間に、「不久復有天来云、姓羅氏蜀人也。言作蜀音、広説律相。初相見時、如俗礼儀。叙述縁由、多有次第。遂有忽忘」の四十一字が省略されている。大正蔵本『感通伝』との文字の異同があり、原文の「偏敬毘尼」が大正蔵本では「偏敬毘尼」となっている。

○又云、最後一朝韋將軍至、致敬相問。…作禮而退。〈釋門正統第三巻［四十六丈］亦引之。〉＝『律相感通伝』の末尾（T45-881c~882a）からの引用。大正蔵本とほぼ同じだが、二文字だけ相違があり、原文の「羊腔縣之」が大正蔵では「羊腔懸之」に、「惑是貪瞋癡」が「惑是貪嗔癡」となっている。無著禅師の割り注に〈釋門正統第三巻［四十六丈］亦引之。〉とあるのは、『釈門正統』巻三に「南山感通伝云」（X75-301a）として、韋天将軍について『律相感通伝』から引用記載していることを指す。

④忠曰、世稱道宣律師所感見三洲護法者、爲韋馱天訛矣。釋氏資鑑・大慧普説・無準・清

拙・虎關諸録、皆從世傳。恐未深稽焉。三洲護法者稱韋琨、余按『感通傳』中云、有天、姓姚氏、云弟子天人自有姓字。語同天竺、師既不解、還述本音。止此。例此、韋琨二字亦可皆從漢語焉。如韋馱天、其名著於四卷金光明經・大方等大雲經・涅槃經等、竝無嘆德。況三洲護法等事迹耶。獨金光明云、大力勇猛、常護世晝夜不離。〈止此。〉此嘆德文、亦通諸神説、非特爲韋馱天。可考經知之。韋馱天神處引、韋馱梵語、此云智論。見諸天傳・北本涅槃、作違陀。故知、韋琨將軍與韋馱天神、異而不同。道宣所感見三洲護法者、宜稱韋天將軍也。釋門正統述感通傳、作韋天將軍可爲是矣。

＊

忠曰く、「世に道宣律師の感見する所の三洲護法の者を稱して、韋馱天と為すは訛（あやまり）なり。『釋氏資鑑』・『大慧普説』・『無準』・『清拙』・『虎關』の諸録は、皆な世傳に從う。恐らくは未だ深く稽えず。三洲護法の者を韋琨と稱するは、余按ずるに、『感通傳』の中に云く、『天有り、姓は姚氏。云く、弟子天人に自ら姓字有り。語、天竺と同じからば、師既に解せじ。還って本音を述ぶ』と。〈此こに止まる。〉此れに例するに、韋琨の二字も亦た皆な漢語に從う可し。韋馱天の如きんば、其の名、四卷の『金光明經』［鬼神品］・『大方等大雲經』・『涅槃經』［邪正品］等に著わる。竝びに嘆德すること（＝仏、菩薩等の功德を讃歎すること）無し。況や三洲護法等の事迹をや。獨り『金光明』［合部七の八丈］に云く、『大力勇猛、常に世間を護して昼夜離れず』と。〈此こに止まる。〉此の嘆德の文、亦た諸神に通じて説く。特に韋馱天の爲にするに非ず。經を考えて之を知る可し。［韋馱天神の處に引く。］韋馱は梵語（ぼんご）なり。此（中国語）こに智論と云う」。［『諸天傳』に見ゆ。］北本（ほっぽん）の『涅槃（ねはん）』には、違陀に作る。故に知んぬ、韋琨將軍と韋馱天神とは、異にして同じからず。道宣の感見する所の三洲護法の者は、宜（よろ）しく韋天將軍と稱すべきなり。『釋門正統（しゃくもんしょうとう）』に『感通傳』に述べて韋天將軍に作るを是（ぜ）と爲す可し」と。

＊

○文中、二箇所の引用のうち、『感通伝』の「有天、姓姚氏。…還述本音」の部分は、『律相感通伝』（T45-874c-882a）に、『金光明経』の「大力勇猛、常護世昼夜不離」の部分は、『金光明経』巻三（T16-350a）に同文が見える。その他、『釈氏資鑑』『大慧普説』などの典拠については、以下の諸条に引用がある。

今回提出分はここから

⑤宋魯應龍括異志云、有住菴僧王了因。事母至孝。母病危篤。日夜禱於所事韋天護法神、誠意感格、忽神降其身。作蠻語云、憫汝孝誠。故救汝母。教以藥餌。遂愈。自是神常降之、言人休咎。多驗。遠近趨之。一日有人請禱、僧不謹、神怒責。遂發狂不可止。索浴左右。不得已、具湯與之。湯百沸、猶以爲冷。投於中、宛轉爲快。衆拜祈哀。神曰、姑薄懲之爾。遂免。及出浴、舉體略無少損。病亦愈。神不復降矣。

＊

宋の魯應龍（おうりゅう）が『括異志（かついし）』に云く、「住菴の僧、王了因（おうりょういん）というもの有り。母に事（つか）えて至孝なり。母の病、危篤なり。日夜、事うる所の韋天護法神に禱（いの）る。誠意、感格（＝相手に通じる）して、忽ち神、其の身を降し、蠻語（ばんご）（＝異民族の言葉）を作して云く、『汝が孝誠を憫れむ。故に汝が母を救う』と。教うるに藥餌（＝藥）を以てす。遂に愈ゆ。是れ自（よ）り神常に之に降して、人の休咎（きゅうきゅう）（＝吉凶）を言う。多驗あり。遠近之に趨（おもむ）く。一日、人有りて、請祷するも、僧謹まざれば、神怒責す。遂に發狂して止むべからず。浴を左右

に索(もと)む。已むことを得ず、湯を具えて之に與う。湯百沸するも、猶お以て冷と為す。中に投じて、宛轉（＝変化する）して快と為す。衆拜して哀（＝人の死に対しかなしむ）を祈(の)む。神曰く、『姑薄(しばら)く之を懲らすのみ』と。遂に免ず。浴を出(いず)るに及んで、體を擧げて略(ほ)ぼ少損無し。病も亦た愈ゆ。神復た降らず」と。

＊

○宋魯應龍『括異志』云、…神不復降矣。＝『括異志』は、『閑窓括異志(かんそうかついし)』（『四庫全書』子部、雑家類）のことであり、同文が見える。

⑥明極俊和尚録［七言律ノ六丈］宣上人禮補陀、現韋天像頌云、志山願海浩無邊、不渉程途入妙玄。紫竹林中參大士、白花岩畔見韋天。連心平等門應普、任性逍遥長通自圓。只此別無修證法、光明智照口難宣。

＊

『明極俊和尚録(みんきしゅんおしょうろく)』［七言律の六丈］、「宣上人(せんしょうにん)、補陀(ほだ)（＝観世音菩薩が住むとされる山）を禮して、韋天の像を現ずるの頌」に云く、『志山願海浩として無邊、程途に渉らずして妙玄（＝奥深い境地）に入る。紫竹林(しちくりん)（＝中国浙江省普陀山にある観世音菩薩の聖地）中に大士に參じ、白花岩（＝江西省にある江南仏教の中心地）畔に韋天を見る。心を運(めぐ)らすこと平等にして門應(まさ)に普なるべし、性に任せて逍遥し通自(おのずか)ら圓なり。只だ此れ別に修證の法無し、光明智照、口宣(の)べ難し』と」と。

＊

○『明極俊和尚録』＝元より渡来した明極楚俊(みんきそしゅん)（一二六二～一三三六）の語録。室町時代（五山版）刊本（二巻二冊）が、東洋文庫岩崎文庫（「明極禅師建長禅寺語録」）・成簀堂文庫・兵庫広厳寺・両足院に蔵される。他に、東京大学史料編纂所に、兵庫広厳寺本写（五冊）があり、写本が、内閣文庫（五冊）に蔵される。

⑦教苑清規云、韋天回向式、藩屏佛化、蓋本證之以深保障山門、示大權而利益。云云。伏願、道場鎮山嶽之固、教海源河漢之長。三學興隆、四檀成集。公私並秦、火盗雙沈。

＊

『教苑清規(きょうえんしんぎ)』に云く、韋天回向式に、「佛化に藩屏(はんぺい)（＝守護）として、蓋し本證の以て深ければなり。山門に保障として、大權を示して利益す。云云。伏して願うは、道場は山嶽の固を鎮し、教海（＝広く深い仏の教え）は河漢（＝銀河、＝黄河と漢水）の長に源とせん。三學（＝戒学・定学・慧学）興隆し、四檀（＝四種の教法、世界悉檀・各々為人悉檀・対治悉檀・第一義悉檀）成集せん。公私並びに秦、火盗雙び沈まん」と。

＊

○教苑清規云、…火盗雙沈。＝『教苑清規』巻下（X-57-327b）に同文あり。云云の前に「仰冀」の二字が、また「云云」の後に「時維首夏将事安居」など五十六字が省略されている。尚、『象器箋』には付箋があり、「『韋天』下、『教苑清規』〈云々〉、『公私並秦』〈刊本亦同〉。秦字可疑（『韋天』の下、『教苑清規』〈云々〉の『公私並びに秦』〈刊本も亦た同じ〉は、『秦』の字疑う可し）」とある。確かに「秦」ではなく、「泰」であれば意味が通じる。

⑧　忠曰、明極・自應〈撰教苑〉・魯應龍、皆稱韋天。能得不順世謬矣。

＊

忠曰く、「明極・自應〈『教苑』を撰す〉・魯應龍、皆な韋天と稱す。能く世の謬りに順わ

ざるを得たり」と。

行霆諸天傳［下巻］韋天將軍傳云、靈威要略曰、天神、姓韋、諱琨。南方天王、八將之一臣也。四王合三十二將、而爲其首。生知聰慧、早離塵欲。清淨梵行、修童眞業。面受佛囑、外護在懐。用統三洲〈用珠林作周住持爲最〉、亡我亡瑕。殷憂於四部、達物達化。大濟於五乘〈已上文、又出于法苑珠林［十六ノ七丈］〉。光明鬼神品中有韋馱天神。梵語韋馱、此云智論。今此則以韋爲姓。雖類華夏一經之裔、而其天神隱顯、其號烏可測量。唐高宗乾封歲、京師淨業寺道宣律師、因覩韋天、嘗問律相等事。律師述靈威要略。并律相感通二傳、備載其實。如要略中、天神姓費、自述云、弟子迦葉佛時、生在初天。在韋將軍下、諸天貪欲如醉。弟子以宿願力不受天欲、清淨梵行、徧敬毗尼。韋將軍、童眞梵行、不受天欲。若有事至四王所、王見皆起。自唐高宗已來、諸處伽藍、及建立熏修、皆設像崇敬、彰護法之功。其間、感應録於文集者、甚多。然童眞乃十住中第八住、而賢乎聖乎、孰可知之。讃曰、四王三十二大將、南方韋天以爲先、生知聰慧離塵欲、清淨梵行威儀全、修童眞業持禁戒。迦葉佛時志已堅、四部殷憂常守衛。三洲護法應機縁。名姓隨凡。安可測。示迹唐朝遇道宣、備言佛教深幽事。律相靈威二集傳。或見四王王起接。是知無染、所當然、爰自乾封崇至化。逮今名位列諸天。毎在伽藍或蘭若、熏修之現威權。頭頂金兜、横寶杵、合十指掌兒童年、或警行人令進行。或隨方所護其邊。却除外障令無惱。庶幾佛日照三千。

＊

行霆の『諸天傳』［下巻］「韋天將軍の傳」に云く、「『靈威要略』に曰く、『天神、姓は韋、諱は琨。南方の天王、八將の一臣なり。四王合して三十二將なるも、而も其の首為り。生知聰慧にして、早に塵欲を離る。梵行を清淨にして、童眞の業を修す。面のあたりに佛囑を受けて、外護、懐に在り。用て三洲を統べて〈「用」、『珠林』は「周（＝周く）」に作る〉、住持を最と爲す。我を亡じ瑕を亡じて、四部（＝比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷）を殷憂（＝深くうれう）し、物に達し化に達し、大いに五乘を濟う』と〈已上の文、又た『法苑珠林』［十六の七丈］に出づ〉。『光明』の「鬼神品」の中に『韋馱天神』有り（＝『金光明経』巻三「鬼神品第十三」T16-350a）。梵語には韋馱、此（中国語）には智論と云う。今ま此こに則ち韋を以て姓と爲す。華夏（＝中国中原地区）一經の裔に類すと雖も、其の天神隱顯（＝隱れることと顕れること）せば、其の號、烏くんぞ測量す可き。唐の高宗の乾封の歲（＝六六六～六六八）、京師淨業寺の道宣律師、因みに韋天に覩えて、嘗て律相等の事を問う。律師は『靈威要略』并びに『律相感通（＝『律相感通傳』一巻・T45所収）』の二傳を述して、備さに其の實を載す。『要略』の中の如くんば、天神の姓は費なる、自ら述して云く、『弟子、迦葉佛の時、生まれて初天に在り。韋將軍の下に在りて、諸天は貪欲なること醉うが如し。弟子は宿願力を以て天欲を受けず。梵行（＝仏道修行、特に不淫）を清淨にして、徧く毗尼（＝戒律）を敬す。韋將軍、童眞（沙弥）梵行せば、天欲を受けず。若し事有りて四王の所に至れば、王見て皆な起つ』と。唐の高宗自り已來、諸處の伽藍及び建立、熏修（＝仏道修行）するに、皆な像を設けて崇敬して、護法の功を彰す。其の間、感應を文集に録する者、甚だ多し。然るに童眞は乃ち十住の中の第八住にして、賢か聖か、孰か之を知る可き。讃に曰く、『四王、三十二の大將、南方の韋天を以て先と爲す。生知聰慧にして塵欲を離れ、梵行を清淨にして威儀全し。童眞の業を修し

禁戒を持す。迦葉佛の時、志已に堅し。四部殷憂して常に守衛す。三洲に法を護り機縁に應ず。名姓、凡に隨う。安くんぞ測る可き。迹を唐朝に示して道宣に遇い、備に佛教深幽の事を言う。『律相』『靈威』の二集傳わる。或いは四王に見えれば王起ちて接す。是ここに知る、無染は當然なる所なることを。爰に乾封自り至化（＝最上の教化）を崇ぶ。今に逮んで名位、諸天に列す。毎に伽藍或いは蘭若に在りて、熏修の所に威權を現ず。頭に金兜を頂き、寶杵を横たえ、十指掌を合して兒童の年、或いは行人を警めて行に進ましめ、或いは方所に隨いて其の邊を護す。外障を却除して惱無からしむ。庶幾は佛日、三千を照さん』と」と。

＊

○諸天傳［下卷］韋天將軍傳云、…佛日照三千。＝『重編諸天伝』下巻（X88-430b-c）に同文がある。また、本文中の割り注に、「已上文、又出于『法苑珠林』」とあるように、『法苑珠林』巻一六（四部叢刊本・7b~8a、大正蔵本・巻一〇・T53-354a）に「南天王八大將軍之一臣也」以下、同文が見られる。②に既出。文中に引かれた『靈威要略』は未詳。諸目録に見えず、逸書と思われる。『律相感通伝』での費姓なる天神の言葉は③に既出。

⑩

忠曰、行霆作天神隱顯、其號、烏可測量之説。意似欲混同韋琨韋陀。然三洲護法者、韋琨將軍而足矣。混之韋陀、果有何益耶。予以謂國清百録、依光明鬼神品、而列次諸天焉。行霆傳於百録諸天、自餘諸天並有事緣可述。獨韋馱天闕焉。遂取韋琨事迹、以混合韋馱文飾資筆舌。又自辨防捏合之責。故有烏可測量之言矣。

＊

忠曰く、「行霆の『天神の隱顯、其の號、烏くんぞ測量す可き』の説を作るは、意、韋琨と韋陀とを混同せんと欲するに似たり。然れども三洲護法の者は、韋琨將軍にして足れり。之を韋陀に混じて、果たして何の益か有らん。予、以謂えらく『國清の百録』は、『光明』の鬼神品に依りて、諸天を列次す。行霆、『百録』の諸天に傳するに、自餘の諸天は並びに事緣の述ぶ可き有り。獨り韋馱天を闕く。遂に韋琨の事迹を取りて、以て韋馱に混合して、文飾して筆舌を資く。又た自ら辯じて捏合（＝でっち上げること）の責を防ぐ。故に『烏くんぞ測量す可き』の言有り」と。

＊

○國清百録、依光明鬼神品、而列次諸天焉＝隋の灌頂纂『国清百録』四巻の巻一「金光明懺法第五」に、「一心奉請大梵尊天三十三天・護世四王・金剛密迹・散脂・大辯・功德・訶利帝南鬼子母等、五百徒党、一切皆是大菩薩、亦請此処地分鬼神」（T46-796b）とあり、これは『金光明経』巻三「鬼神品第十三」の「大梵天王・三十三天・護世四王・金剛密迹・鬼神諸王・散脂大將・禪那英鬼、及緊那羅・阿耨達龍・娑竭羅王・阿脩羅王・迦樓羅王・大辯天神、及功德天、如是上首、諸天神等」（T16-349c）とあるのを踏まえていることを指す。

⑪

又曰、天神費氏言、韋將軍童眞梵行、不受天欲。〈止此。〉所謂童眞者、［依楞嚴六上直解意］眞元不不喪、欲惡不行。如童穉眞淨。大般若［四巻二丈］云、常修梵行、不壞童眞、〈止此。〉是也。然行霆託此語、遽以韋天、爲第八童眞住人。豈非舉燭燕説乎。如十住中童眞住。則大乘義章云、所行眞實、離過清淨。如世童子、心無欲染名童眞住。〈止此。〉此是菩薩階位、不可與但不行欲染之童眞概論也。余非必爲韋天非菩薩位中人。只惡其假託傳會、失語之實而已。又讃中云、頭頂金兜横寶杵、合十指掌兒童年。〈止此。〉蓋造此天像、頂兜横杵。由將軍號。如言兒童年、雕作童形。亦當原童眞之言。然童眞但

喩童子無欲。何必童形矣。韋天見道宣時、其童壯不可審焉。日本佛匠、或安鬚若三四十歲人。亦未必爲失也。

＊

又た曰く、「天神費氏が言く、『韋將軍の童眞梵行は、天欲を受けず』と。〈此こに止まる。〉〈此こに止まる。〉所謂る童眞とは、［『楞嚴』六上の『直解』の意に依る］眞元、喪はず、欲惡、行ぜざること、童穉（＝幼い童子）の眞淨なるが如し。『大般若』［四巻二丈］に云く、『常に梵行を修して、童眞を壞せず』と、〈此こに止まる。〉是れなり。然るに行霆、此の語に託して、遽かに韋天を以て、第八童眞の住人と爲す。豈に舉燭の燕説（＝こじつけの解説）に非ずや。十住の中の童眞住の如きは、則ち『大乘義章』に云く、『所行眞實にして、離過清淨なり。世の童子の心に欲染無きが如くなるを、童眞住と名く』と。〈此こに止まる。〉此れは是れ菩薩の階位、但だ欲染を行ぜざるの童眞と概論すべからざるなり。余（私）、必ずしも韋天は菩薩位中の人に非ずと爲るに非ず。只だ其の假託（＝虛構）傅會（＝こじつけ）、語の實を失するを惡むのみ。又た讃の中に云く、『頭に金兜を頂き寶杵を横たう、十指掌を合す兒童の年』と。〈此こに止まる。〉蓋し此の天像を造り、兜を頂き杵を横たうは、將軍の號に由れり。兒童の年と言うが如くんば、雕って童形と作す。亦た當に童眞の言の原なるべし。然れども童眞は但だ童子の無欲に喩う。何ぞ必ずしも童形ならん。韋天、道宣に見ゆる時、其の童壯、審にす可からず。日本の佛匠、或いは鬚を安んじて三四十歲の人の若くなるも、亦た未だ必ずしも失せりと爲さざるなり」と。

＊

○天神費氏言、韋將軍童眞梵行、不受天欲＝「天神費氏」は「費という姓の天人」の意。「天神」は「天人」の誤字。『律相感通傳』（T45-875a）、『道宣律師感通録』（T52-435c）、『法苑珠林』巻一四（T53-393c）などに、そのままの文章が見える。

○大般若云、常修梵行、不壞童眞＝『大般若波羅蜜多経』巻四〇二（T5-17b）に同文が見える。

○所謂童眞者、［依楞嚴六上直解意］眞元不不喪、欲惡不行＝明の広莫著『楞厳経直解』巻六に「不壞男根者、謂真元不喪、欲惡不行。故曰童真」（X14-810b）とあるのを踏まえる。

○大乘義章云、所行眞實、離過清淨。如世童子、心無欲染名童眞住。＝『大乘義章』（T44-746c）に同文が見える。

○又讃中云、頭頂金兜横寶杵、合十指掌兒童年＝『重編諸天伝』巻下「韋天将軍伝」の讃の第十九、二十句（X88-430c）にそのまま見える。

⑫以韋琨訛稱韋馱者、今陳一二。

＊

韋琨を以て訛って韋馱と稱する者、今、一二を陳ぬ。

⑬釋氏資鑑［二ノ廿三丈］云、宣律師問韋陀天。云云。

＊

『釋氏資鑑』［二の廿三丈］に云く、「宣律師、韋陀天に問う、云云」と。

＊

○『釋氏資鑑』［二ノ廿三丈］云、宣律師問韋陀天。云云＝『歴朝釈氏資鑑』巻二（X76-151c）に同文が見える。『釈氏資鑑』は、元の熙仲編。周の昭王から元の順宗に至る約二千年にわたる編年体の仏教通史。

⑭大慧杲和尚爲盧時用普説［一巻五十八丈］云、唐時有箇宣律師、爲他持戒殊勝、戒光直透天宮。感得韋馱天神、毎日供天厨食。

＊

大慧杲和尚、盧時用が爲にする「普説」［一巻五十八丈］に云く、「唐の時、箇の宣律師有り。他の持戒殊勝なるが爲に、戒光直に天宮に透る。韋馱天神、毎日、天厨食（＝天人の厨房の食事）を供うるを感得す」と。

＊

○大慧杲和尚は中国宋代中期の臨済宗楊岐派の禅僧、大慧宗杲。圜悟克勤に参じ、その法を嗣いだ。杭浙の名山に歴住し、趙州無字による公案参究を主張して黙照禅を批判した。

○大慧杲和尚爲盧時用普説云、唐時有箇宣律師…毎日供天厨食＝『大慧普覚禅師普説』巻一下「盧時用請普説」（X59-816a）に同文が見える。

⑮無準範禪師録［五ノ卅五丈］入内陞座云、唐宣律師、嘗問韋陀尊天、云云。

＊

○『無準範禪師録』［五ノ卅五丈］入内陞座云、唐宣律師、嘗問韋陀尊天、云云＝『無準和尚奏對語録』（X70-275a）に同文が見える。

＊

『無準範禪師録』［五の卅五丈］「入内の陞」座に云く、「唐の宣律師、嘗て韋陀尊天に問う、云云」と。

⑯偃溪聞禪師録韋馱天變相贊云、横兩腕中杵、現堆雲裡身。權中示權處、依舊是天人。

＊

『偃溪聞禪師録』「韋馱天變相の贊」に云く、「兩腕中の杵を横たえて、堆雲裡の身を現ず。權中に權を示す處、舊に依りて是れ天人なり」と。

＊

○『偃溪聞禪師録』韋馱天變相贊云…是天人＝『偃溪和尚語録』巻下（X69-750a）に同文が見える。

⑰清拙澄禪師録［七丈］陞座云、韋馱天神、有大願力。東勝身洲、西牛貨洲、南瞻部洲、於此三大部洲、守護正法。獨北俱盧洲佛法不到、故不護之。

＊

『清拙の澄禪師の録』［七丈］の陞座に云く、「韋馱天神に、大願力有り。東勝身洲、西牛貨洲、南瞻部洲、此の三大部洲に於いて、正法を守護す。獨り北俱盧洲は佛法到らず、故に之を護らず」と。

＊

○『清拙澄禪師録』［七丈］陞座云…故不護之。＝出典未詳。清拙正澄の語録『清拙和尚語録』の七丈にはこの文は見えない。

⑱虎關錬禪師録［中ノ卅六丈］厨司韋馱天點眼云、鳳翅兜高金甲新。繁華堆裡獨童眞、上方香積四天是。扶起法輪轉食輪。恭惟蘇迷盧山第四層中、艮頗黎埰、吠室羅摩那王、第二眞子、韋馱天、二九世中、曾居將軍之位、六九生内、又爲宰輔之身、擎北天之貢牙、照

耀此界、持南山之趺足、衛護吾人、臂上横安金寶杵、重輕八萬四千斤、以筆作點勢云、一點毫端烏律律、爍迦羅眼自威神。

＊

『虎關錬禪師録』［中の卅六丈］「厨司韋駄天の點眼」に云く、「鳳翅兜高くして金甲（＝金製の鎧）新たなり。繁華堆裡獨り童眞、上方の香積（＝禪林の厨房）四天是れなり。法輪を扶起し食輪を轉ず。恭しく惟れば蘇迷盧山（＝須弥山）第四層中、艮頗黎埵、吠室羅摩那（＝毘沙門天）王、第二の眞子、韋駄尊天は、二九世の中、曾て將軍の位に居り、六九生内、又た宰輔（＝宰相）の身と爲り、北天の貢牙を擎げ、此界を照耀し、南山の趺足（＝趺坐）を持し、吾人を衛護し、臂上に横ざまに金寶杵を安んず。重輕は八萬四千斤なり。筆を以て點ずる勢を作して云く、『一點毫端烏律律（＝真っ黒）、爍迦羅眼（＝金剛眼。邪正を弁別する眼）自ら威神（＝偉大）なり』と」と。

＊

○虎關錬禪師録［中ノ卅六丈］厨司韋駄天點眼云…爍迦羅眼自威神＝虎関師錬著『虎関和尚十禅支録』二巻の三六丁に同文が見える（国立国会図書館デジタル化資料）。

⑲忠曰、諸天傳云、近有僞書、號總聖録出。十六天并韋天昔因。其間曰、幾世爲國王、幾世爲長者等。考之藏典、並無所據。又云、一千二百卷在西竺、一百二十卷在唐土、皆不根之語。若果西域有之、而傳此方合有譯師飜傳之事。請見者詳之。〈止此。〉忠謂、虎關、二九世居將軍、六九生爲宰輔之語、蓋依總聖録説耶。又按宋高僧傳擎北天之貢牙、持南山之趺足、皆那叱太子事也、非韋天矣。

＊

忠曰く、「『諸天傳』に云く、『近ごろ僞書有り、『總聖録』と號す。十六天（＝色界に存在する十六種の神々）并びに韋天の昔因（＝由来）を出す。其の間に曰く、「幾世國王と爲り、幾世長者と爲る等」と。之を藏典に考するに、並びに據る所無し。又た云く、「一千二百卷、西竺（＝インド）に在り、一百二十卷唐土（＝中国）に在り。皆不根の語なり。若し果たして西域に之有りて、此方に傳えば、合に譯師飜傳の事有るべし。請う、見ん者、之を詳らかにせよ」と。〈此ここに止まる。〉忠謂えらく、虎關の『二九世、將軍に居り、六九生、宰輔と爲る』の語、蓋し『總聖録』の説に依るかと。又た宋の『高僧傳』を按ずるに、北天の貢牙を擎げ、南山の趺足を持するは、皆な那叱太子（＝毘沙門天の太子、三面八臂大力鬼王）の事なり。、韋天には非ず」と。

＊

○『諸天傳』云、近有僞書…請見者詳之＝『重編諸天伝』下巻（X88-436c）に同文が見える。

⑳忠曰、禪林韋天像、安之厨房。未知據。傳説、韋天爲宣律師送天厨。故『大慧普説』云、宣律師感得韋駄天神、毎日供天厨食。〈前已引。〉今安厨司、有託此説乎。『稽古略』但云、宣律師感天送饌侍衛。而不言韋天矣。

＊

忠曰く、「禪林の韋天像は、之を厨房に安んず。未だ何れに據るかを知らず。傳説すらく、『韋天は宣律師の爲に天厨を送る。故に『大慧普説』に云く、「宣律師、韋駄天神、

毎日、天厨の食を供うることを感得す」と』と。〈前に已に引く。〉今、厨司（＝庫裏）に安んずるは、此の説に託すること有るか。『稽古略』には、但だ『宣律師、天に饌（＝供物）を送りて侍衛することを感ず』と云いて、韋天と言わず」と。

＊

○『大慧普説』云、宣律師感得韋駄天神、毎日供天厨食＝⑭参照。
○『稽古略』但云、宣律師感天送饌侍衛。而不言韋天矣＝『釈氏稽古略』巻三（T49-816c）「宣律師持律精厳、感天廚供養」からの引用か。『釈氏稽古略』は元の禅僧、宝洲覚岸が集録した紀伝史。中国歴朝の綱規を中心として法苑の事蹟を述べ、広く三教内外の史実を網羅する。

(21)
大明寺月菴光和尚録韋駄天安座語云、汝是三洲護法、最勝天子。今特請來。且作庖厨之主。切囑、嚴修齋供、不虧鐘鼓、擁護佛僧令法久住。儻違吾言、柱杖與汝喫取。

＊

大明寺の『月菴の光和尚録』の「韋駄天安座」の語に云く、「汝は是れ三洲護法、最勝の天子なり。今、特とに請い來って、且く庖厨（＝台所）の主と作す。切に囑す、齋供を嚴修して、鐘鼓を虧かず、佛僧を擁護して、法をして久住せしめよ。儻し吾が言に違せば、拄杖、汝に與えて喫取せしめん」と。

＊

○大明寺は兵庫県朝来市の臨済宗妙心寺派の寺院。南北朝時代の一三六七年に山名時熙の開基により美濃の僧月庵宗光が開山となって創建されたと伝えられる。
○大明寺『月菴光和尚録』韋駄天安座語云…柱杖與汝喫取＝月菴宗光著、『大明禅寺開山月菴和尚語』五十丁裏に同文あり（国立国会図書館デジタル化資料）。

（朝山一玄）

【二四八】傅大士

①輪藏妥其像。詳于殿堂類、輪藏處。

＊

輪藏に其の像を妥（＝やすらかに坐らす）す。殿堂類「輪藏」の處に詳らかなり。

＊

○輪藏妥其像。詳于殿堂類、輪藏處＝文中に指摘されている通り【四五】「輪藏」は、『象器箋』巻一「第二類殿堂門上」の中に立項されている。

②善慧大士録［一巻三丈］云、大士姓傅、名翕、字玄風、東陽郡烏傷縣稽停里人。烏傷即今義烏縣也。父名宣慈、字廣愛、母王氏、世為農。以齊建武四年丁丑歳、五月八日生。端靖淳和、無所愛著。少不學問、時與里人漁。毎得魚、常以竹籠盛之、沉深水中。祝曰、欲去者去、止者留。時人以爲愚。梁天監十一年、年十六歳、娶留氏。名曰妙光。有子二人、曰普建・普成。〈云云。〉又曰、大士欲導羣品、先化妻子、令發道心。即捨田宅、請四衆、設大會。而説偈曰、捨抱現天心、傾資爲善會。願度羣生盡、俱翔三界外。歸投無上士、仰恩普令蓋。是年饑饉。設會之後、家無斗儲。同里傅昉・傅子良等、入山供養。大士化諭妻子、鬻身助會。妙光受命、乃曰、唯願一切衆生、因此同得解脱。大通二年三

月、同里傅重昌・傅僧舉母、以錢五萬買之。大士得錢、即營設大會。乃發願曰、弟子善慧、稽首釋迦世尊、十方三世諸佛、盡虚空、遍法界、常住三寶。今捨賣妻子、普爲三界苦趣衆生、消災集福、滅除罪垢、同證菩提。後月餘、傅氏悉遣妙光等還山。

＊

『善慧大士録』［一巻三丈］に云く、「大士、姓は傅、名は翕、字は玄風。東陽郡烏傷県稽停里の人なり。烏傷は即ち今の義烏県なり。父の名は宣慈、字は廣愛、母は王氏。世農を為す。齊の建武四（四九七）年丁丑の歳五月八日を以て生まる。端靖（＝正しくてしずか）淳和（＝すなおでおだやかやかなこと）にして、愛著する所無し。少くして學問せず、時に里人と漁す。魚を得る毎に、常に竹籠を以て之を盛り、深水の中に沉め、祝（祈る）して曰く、『去らんと欲する者は去れ、止まる者は留まれ』と。時人以て愚と爲す。梁の天監十一（五一二）年年十六歳にして、留氏を娶る。名を妙光と曰う。子二人あり。普建・普成と曰う」と。〈云云。〉又た曰く、「大士、羣品（＝衆生）を導かんと欲し、先ず妻子を化し、道心を發せしむ。即ち田宅を捨て、四衆を請して大會を設く。偈を説いて曰く、『抱（＝胸中の思い）を捨てて天心を現し、資を傾けて善會を爲す。願わくは羣生を度し盡くし、俱に三界の外に翔ばん。無上の士に歸投（＝仏祖・仏法・師に自己の全身心を投げ出し、その教えに従うこと）し、恩を仰いで普く蓋ばしめん』と。是の年饑饉なり。會を設くるの後、家に豉儲（＝わずかな財産）無し。同里の傅昉・傅子良等、山に入りて供養す。大士、妻子を化諭（＝教え導く。戒める。）し、身を鬻ぎて會を助く。妙光、命を受けて、乃ち曰く、『唯だ願わくは、一切衆生、此れに因って同じく解脱を得んことを』と。大通二（五二八）年三月、同里の傅重昌・傅僧舉が母、錢五萬を以て之を買う。大士、錢を得て、即ち大會を營設す。乃ち發願して曰く、『弟子善慧、釋迦世尊・十方三世の諸佛・盡虚空遍法界の常住三寶に稽首（＝九拝の一つ。ひざを屈し、頭を地面にしばらくつけて敬礼する）す。今、妻子を捨賣して、普く三界苦趣の衆生の爲に、災いを消し、福を集め、罪垢（＝罪のけがれ）を滅除し、菩提を同證（＝あきらかにする）せんことを』と。後、月餘（＝ひとつきあまり）にして、傅氏、悉く妙光等を遣りて山に還す」と。

＊

○善慧大士録云…普建普成。〈云云。〉…傅氏悉遣妙光等還山＝『善慧大士語録』巻一からの引用で、〈云云。〉を挟んで、前半部分が（X69-104b~c）、後半部分が（X69-104c~105a）から引かれている。〈云云。〉で省略された部分には、三七三字がある。文中の事項のうち、【一〇】「常住」は本書巻一「第一類区界門」【三一〇】「弟子」は巻五「第六類称呼門下」に立項されている。

③傳燈録［二七ノ五丈］善慧大士章云、陳太建元年己丑、四月二十四日、示衆曰、此身甚可厭惡、衆苦所集。〈云云。〉弟子問、師之發迹、可得聞乎。曰、我從第四天來、爲度汝等、次補釋迦。及傅普敏文殊、慧集觀音、何昌阿難、同來贊助。故大品經云、有菩薩、從兜率來。諸根猛利、疾與般若相應。即吾身是也。言訖趺坐而終。壽七十有三。

＊

『傳燈録』［二七の五丈］「善慧大士」の章に云く、「陳の太建元（五六九）年己丑四月二十四日、衆に示して曰く、『此の身甚だ厭惡（＝きらう。にくむ。）す可し。衆苦の集まる所なり。〈云云。〉』と。弟子問う、『師の發迹（＝身を起こす。功立てて名をあげる。）聞くことを得可けんや』と。曰く、『我、第四天從り來り、汝等を度せんが爲に、釋迦に次補（ついで援助す

る）す。及び傅普敏は文殊、慧集は觀音、何昌は阿難、同じく來たって贊助す。故に『大品經』に云く、「菩薩有り、兜率（＝兜率天の略）從り來たる。諸根猛利（＝あらゆる能力が鋭利であること）にして、疾く般若と相應（＝合致する）す」と。即ち吾が身是れなり』と。言い訖わるに、趺坐して終う。壽七十有三なり」と。

＊

○太建元年己丑…壽七十有三＝『景德伝燈録』巻二七（T51-430c）に見える文章であるが、〈云云。〉で省略されている部分は、「須慎三業精勤六度。若墜地獄、卒難得脱。常須懺悔。又曰、吾去已、不得移寝床。七日有法猛上人、持像及鍾、来鎮于此。弟子問、滅後形体若為。曰、山頂焚之。又問、不遂何如。曰、慎勿棺斂。但畳甓作壇、移屍於上。屏風周繞、絳紗覆之。上建浮図、以弥勒像、処其下。又問、諸仏涅槃時、皆説功徳」となっている。また、文中の『大品経』は鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』のことである。そのままの文章は見られないが、恐らく同経・巻二「往生品第四」にある次の一段を要約したものであろう。「舎利弗白仏言、『世尊、菩薩摩訶薩、行般若波羅蜜、能如是習相応者、従何処終、来生此間。従此間終、当生何処』。仏告舎利弗、『是菩薩摩訶薩、行般若波羅蜜、能如是習相応者、或従他方仏国、来生此間、或従兜率天上、来生此間、或従人道中、来生此間。舎利弗、従他方仏国来者、疾与般若波羅蜜相応。与般若波羅蜜相応故、捨身来生此間、諸深妙法、皆現在前。後還与般若波羅蜜相応、在所生処、常値諸仏。」（T8-225a~b）文中の事項のうち、【二二三】「拈華釋迦」と【二二六】「文殊普賢」と【二二七】「迦葉阿難」と【二三三】「觀音」と【二三六】「僧形文殊」は、本書巻三「第五類・霊像門上」に、【三一二】「弟子」は、巻五「第六類・称呼門下」に立項されている。

④聯燈會要［二九ノ十五丈］善慧大士章云、大士一日、披衲頂冠鞦履朝見。帝〈梁武〉問、是僧耶。士以手指冠。帝云、是道耶。士以手指鞦履。帝云、是俗耶。士以手指衲衣。

＊

『聯燈會要』［二九の十五丈］「善慧大士」の章に云く、「大士一日、衲（＝袈裟）を披て冠を頂き鞦履にして朝見（＝臣下が朝廷に行って天子にまみえる。）す。帝〈梁武〉問う、是れ僧なりやと。士、手を以て冠を指す。帝云く、是れ道なりやと。士、手を以て鞦履を指す。帝云く、是れ俗なりやと。士、手を以て衲衣を指す」と。

＊

○聯燈會要［二九ノ十五丈］善慧大士章云…士以手指衲衣＝『聯燈会要』巻二九（X79-257a）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【一四〇八】「履」は、本書巻一七「第廿六類・服章門」の中に立項されている。

⑤忠曰、今造像、爲道冠、儒履、佛衣之状、原此。

＊

忠曰く、「今像を造るに、道冠、儒履、佛衣の状を爲すは、此れに原づく」と。

⑥雲臥紀談［下四丈］云、佛印禪師謁王荊公於定林、公以雙林傅大士像。需讃、佛印掇筆書曰、道冠儒履佛袈裟、和會三家作一家、忘却率陁天上路、雙林癡坐待龍華。

＊

『雲臥紀談』［下四丈］に云く、「佛印禪師（＝一〇三二～一〇九八）王荊公（＝一〇二一～一〇八六）に定林（＝南京、定林寺）に謁す（＝目上の人に面会する）。公、雙林の傅大士の像を以て讃を需む。佛印、筆を掇い書して曰く、『道冠・儒履・佛袈裟、三家を和會して一家と作す。率陁天上の路を忘却して、雙林に癡坐（＝無意味な坐禅）して龍華（＝弥勒仏の龍華会）を待つ』と」と。

＊

○佛印禪師…雙林癡坐待龍華＝『雲臥紀譚』巻二（X86-672c）に同じ文章が見えるが、冒頭の「仏印禅師」と「謁」の間に、「元豊五年九月、自廬山帰宗、赴金山之命。維舟秦淮」の二十字があり、また末尾の「待龍華」の後に、「公雖為仏印所調、而終服其詞理至到。故小行書弥勒発願偈数百字為酬、山谷為跋。仏印既住雲居、而刊于石、尚復存焉」という文章が続いている。文中の事項のうち、【一三六七】「袈裟」と【一四〇八】「履」は、本書巻一七「第廿六類・服章門」の中に立項されている。

⑦『搜神秘覽』［中ノ十三丈］云、錢塘龍山伽藍中、有傅大士眞身在焉。因觀大士之遺物、可得而紀矣。藕絲織成彌勒内院一。其巧妙法度、出於自然。惜其歴年、如在髣髴之間耳。王補之以謂、其功非鬼非人。以予觀之、故非人力之所能爲也。叩門槌一。云叩九重門者、乃此槌也。不甚昂大、亦無特異者。銅鐘一。叩之其聲雜踏。然無清越聲。似銅而非銅、若鐵而非鐵。妙光檀香枕一。人之有疾病者、剽其香、煮湯飲之、其患未始有不差者。筆架二、硯屏一。皆陶器木樸之所爲。又大士嘗齋餘、遺飯及蔬茹於山。皆化爲石。今有二焉。白者飯石也。青者菜石也。尚能辨其形跡。可考證之。聖人以身顯化、或出或沒、隨世之縁。又況於物耶。人之於此、不原其心、特有異以待焉耳。誠物之所化也。

＊

『搜神秘覽』［中の十三丈］に云く、「錢塘（＝浙江省杭州付近の地名）の龍山伽藍（＝杭州府錢塘県西一七里、一名臥龍山・龍華山にある寺院）の中に、傅大士の眞身の在る有り。因りて大士の遺物を觀る。得て紀しつ可し。藕絲（＝蓮の糸）織成（＝織り成す）す彌勒の内院、一つ。其の巧妙なる法度（＝軌範に則った作り）、自然に出ず。惜しむらくは其の歴年、髣髴（＝目の当たりに見る思いをするさま）の間に在るが如きのみ。王補之（＝南宋の人、澶淵に［河南省僕陽市西］生まれ、嘉興府［浙江省］の軍事に就いた）以謂えらく、『其の功、鬼に非ず人に非ず』と。予を以て之を觀れば、故より人力の能く爲す所に非ざるなり。門を叩く槌、一つ。云く、『九重の門を叩く者、乃ち此の槌なり』と。甚だしくは昂大（＝高く大きい）ならず。亦た特異の者なし。銅鐘、一つ。之を叩けば其の聲、雜踏（＝入り乱れる）す。然れども清越（＝軽快に流れる）の聲なし。銅に似て銅に非ず、鐵の若くにして鐵に非ず。妙光の檀香の枕、一つ。人の疾病有る者、その香を剽めて（＝削る、分ける）、湯に煮て之を飲めば、其の患、未だ始めより差えざる（＝病が治る）者有らず。筆架（＝筆をかけておく台、筆かけ）二つ、硯屏（＝硯のそばに立てて、ちりやほこりなどを防ぐ小さな衝立）一つ。皆な陶器木樸の爲くる所なり。又た大士嘗て齋餘（＝食事の後）、飯及び蔬茹（＝野菜）を山に遺つ。皆な化して石と爲る。今二つ有り。白き者は飯石なり。青き者は菜石なり。尚お能く其の形跡を辨ず。之を考證す可し。聖人、身を以て、化を顯し、或いは出で或いは沒すること、世の縁に隨う。又た況や物に於けるをや。人の此れに於ける、其の心に原づかず、特に異以て待つこと有るのみ。誠に物の化する所なり」と。

＊

○搜神秘覽［中ノ一三丈］云…誠物之所化也＝『搜神秘覽』は、南宋の章炳文が伝聞した怪異を集め著わしたもの。宋版『搜神秘覽』（福井崇蘭館本、『四部叢刊広編』三〇所収、台湾商務印書館・一九八一）の該当箇所に、文中の「屏」が「瓶」となっている以外は全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【三四四】「人力」は、本書巻五「第六類・稱呼門下」、【一六八五】「遺物」は、巻二〇「第廿八類・器物門下」の中に立項されている。

（神足浩正）

【二四九】普建　普成

＊

或謂、輪藏傳翁像左右、往往置普建・普成、非也。蓋傳翁巳賣二子、而設會。豈可設此像耶。忠謂、按大士録［一巻十三丈］、鬻妻子、月餘而買者復遣歸、二子爲法師、隨侍。而今二子像、非法師。又大士製輪藏、雖不紀年月、測之可在末年。若在末年、則非二子童孩時。進退齟齬。佛祖統紀、列輪藏前像設、而不及二兒、故不設亦可也。其安二兒像處、一拍手笑、一指父笑。或曰、是即傳大士與嵩頭陁、臨水觀影、乃見圓光寶蓋、二子笑之也。忠曰、噫此何從得之耶、按傳、唯大士自笑。無二子事。況今像非臨水者。余謂、二子笑態、只可據現成説。謂大士道冠、而儒履、而佛袈裟。其異形、兒見之笑而已。佛匠巧意、以作兒態也。何好鑿説。

＊

或るひと謂く、「輪藏の傳翁の像の左右に、往往にして普建・普成を置くは非（誤り）なり。蓋し傳翁巳に二子を賣って、會を設く。豈に此の像を設く可けんや」と。忠謂く、「『大士の録』［一巻十三丈］を按ずるに、『妻子を鬻ぎて、月餘にして、買う者また遣り歸す（遣帰＝実家にかえす）。二子、法師と爲りて、隨侍す』と。而れども今ま二子の像は、法師に非ず。又た大士の輪藏を製する、年月を紀さずと雖も、之を測るに末年に在る可し。若し末年に在らば、則ち二子童孩の時に非ず。進退齟齬す。『佛祖統紀』に、輪藏の前の像設を列ねて、二兒に及ばず。故に設けざるも亦た可なり」と。其の二兒の像を安ずる處、一りは手を拍して笑い、一りは父を指して笑う。或るひと曰く、「是れ即ち傳大士と嵩頭陁（＝達磨大師）と、水に臨みて影を觀て、乃ち圓光（＝後光）寶蓋（＝宝玉をもって飾られた天蓋）を見る。二子、之を笑うなり」と。忠曰く、「噫、此れ何れ從りか之を得たる。傳を按ずるに、唯だ大士自ら笑うのみ。二子の事無し。況や今の像、水に臨む者に非ず。余謂えらく、二子の笑態は、只だ現成に據りて説く可し。謂く、大士、道冠にして、儒履にして、佛袈裟なり。其の異形、兒之を見て笑うのみ。佛匠の巧意、以て兒態を作すなり。何ぞ鑿説（＝こじつけて説く）を好まん」と。

＊

○普建・普成＝善慧大士こと傅翁の二子の名。『景徳伝燈録』巻二七「善慧大士」条に「年十六にして、劉氏の女、名は妙光なるを納れ、普建・普成の二子を生む（年十六、納劉氏女、名妙光、生普建・普成二子）」（T51-430a）とある。

○按大士録［一巻十三丈］…隨侍＝『善慧大士語録』巻一にある次の一段の要約である。

大士欲導群品、先化妻子、令発道心。即捨田宅、請四衆設大会。而説偈曰、「捨抱現天心、傾資為善会。願度群生尽、俱翔三界外。帰投無上士、仰恩普令盍」。是年饑饉。設会之後、家無斗儲。同里傅昉・傅子良等、入山供養。大士化諭妻子、鬻身助会。妙光（＝妻）受命、乃曰、「唯願一切衆生、因此同得解脱」。大通二年三月。同里傅重昌・傅僧挙母、以銭五万買之。大士得銭、即営設大会。乃発願曰、「弟子善慧、稽首釈迦世尊・十方三世諸仏・尽虚空遍法界常住三寶。今捨売妻子、普為三界苦趣衆生、消災集福、滅除罪垢、同證菩提」。後月餘。傅氏悉遣妙光等還山。（X69-104c~105a）

○佛祖統紀、列輪藏前像設、而不及二兒＝『仏祖統紀』巻三三「法門光顕志第十六」の「輪藏」条に、「蔵前に相承けて大士の像を列ぬ。儒・道・釈の冠服の相を備うるは、大士常に此の状を作すを以てなり。八大神将を列ぬるは、八部の天神なり。保境将軍は、在日の烏傷（浙江省金華）の宰にして、誓いを発して蔵を護る者なり（蔵前相承列大士像。備儒道釈冠服之相者、以大士常作此状也。列八大神将者、八部天神也。保境将軍者、在日烏傷宰、発誓護蔵者也）」（T49-318c）とあり、列像の中に普建・普成の二像は含まれていない。

○傅大士與嵩頭陁、臨水觀影、乃見圓光寶蓋＝傅大士と達磨の逸話による。『景徳伝灯録』巻二七「善慧大士」条に、「会たま天竺の僧達磨（時に嵩頭陀と謂う）有りて、曰く、『我と汝とは、毘婆尸仏の所にて誓を発す。今ま兜率宮に衣鉢見（現）在す。何れの日か当に還るべき』と。因りて命じて水に臨んで其の影を観しむれば、大士の円光・宝蓋を見る（会有天竺僧達磨（時謂嵩頭陀）曰、『我与汝、毘婆尸仏

所発誓。今兜率宮、衣鉢見在。何日当還』。因命臨水観其影、見大士円光宝蓋）」（T51-430a-b）とある。文中の事項のうち、【四五】「輪蔵」、【二四八】「傅大士」、【一三六七】「袈裟」、【一四〇八】「履」が、『象器箋』の中に立項されている。

（神足浩正）

【二五〇】八大神將

①釋門正統云、藏殿、列八大神將、運轉其輪。謂天龍八部也。〈詳于殿堂類輪藏〉

＊

『釋門正統』に云く、「藏殿（＝経蔵）、八大神將を列し、其の輪（＝輪蔵）を運轉す。謂ゆる天龍八部なり」と。〈殿堂類「輪藏」に詳らかなり〉

＊

○釋門正統云…謂天龍八部也。詳于殿堂類輪藏＝最後の「詳于殿堂類輪藏」の七字を除き、『釋門正統』巻三「塔廟志」条（X75-298c）に全く同じ文章が見える。文中、「八大神將」は『中村』に、「梵天・帝釈天と持国・増長・広目・多聞の四天王と、密迹・金剛の二力士（俗に仁王）とを加えたもの。仏法護持の善神として経蔵などに安置される」（p.1104）とある。又た『禅学』には、『中村』で前述したものの他に、「仏法護持の神将。八大将・八部衆・天竜八部・竜神八部。『妙法蓮華経』譬喩品などに散見する。一、天（deva・音訳提婆）。超人的な鬼神。二、竜（naga）。竜神、竜王。三、夜叉（yaksa 意訳勇健・暴悪）。空中飛行の鬼神。四、乾闥婆（gandharva）。香を食う意で、音楽を奏する鬼神。五、阿修羅（asura 意訳非天・無端正）。果報を天につぐもの。六、迦楼羅（garuda）金翅鳥の意。竜を食う鬼神。七、緊那羅（kinnara）。人非人で角がある歌神。八、摩睺羅伽（mahoraga 意訳大腹行）。蛇神のこと」（『禅学』P.1023 参照）とある。「藏殿」は、経蔵の異名。蔵経を置く殿堂。（『中村』P.884 参照）「運轉」は、決まった軌道に沿ってめぐること。（『漢辞海』p.1419 参照）「天龍八部」は、神々をはじめとする神話的存在である八種類の名。天（deva）・龍（naga）・夜叉（yaksa）・乾闥婆（gandharva）・阿修羅（asura）・迦楼羅（garuda）・賢那羅（kinnara）・摩睺羅伽（mahoraga）は仏法を守護するとあり『中村』P.985 参照、『禅学』には、前述したものの他に、「八部・八部衆・八大神将とも。仏法を守護する天や竜等の八部の異類」（『禅学』p.903）とあり、八大神将と同義で捉えている。「輪蔵」は、転輪蔵に同じ。経蔵の中にある一切経を収納するための回転式書架。柱を中心に回転するようにしてある。（『中村』p.1431 参照）『象器箋』の【四五】に立項されている。輪蔵については【二四八】「傅大士」も参照。

②忠曰、今、輪藏八面、排列八天像。所謂、密迹金剛分二躯、梵天・帝釋四天王也。異正統説。

＊

忠曰く、「今、輪藏の八面に、八天の像を排列す。所謂る、密迹金剛は二躯に分かち、梵天・帝釋と四天王なり。『正統』の説に異なり」と。

＊

○忠曰…異正統説＝文中、「八天」は、もともと色界の四禅天と無色界の四空処とをいうが（『中村』p.1110 参照）、ここでは、八躯の天部の像を指していると思われる。「密迹金剛」は、密迹力士に同じ。金剛の武器を持って仏を警護する夜叉神の総名。常に仏に親近して、仏の祕密の事がらを聞こうとすることを本誓とすることから、この名がある。二王の一つ。（『中村』p.1297 参照）「躯」は、仏像を数える言葉。（『漢辞海』p.1381 参照）「梵天」は、インド思想で万有の根源ブラフマン（brahman）を神格化したもので、仏教に入って色界の初禅天をいう。これに梵衆天（Brahma-kayika）・梵輔天（Brahma-purohita）・大梵天（maha-brahman）の三天があり、その総称。また普通には大梵天を指す。帝釈天と並んで護法神とみなされた。（『中村』p.1272 参照）「帝釋」は、インドラ（Indra）神。ヴェーダ神話における最も有力な神であったが、後、仏教にとり入れられて梵天とともに仏法を守護する神とされた。かれの名は俗語でSakkaとよばれるので「釈」と音写され、また神々の帝王とみなされているので「帝」という。仏教神話にお

いては、忉利天の主で、須弥山頂の喜見城に住む。（『中村』p.904 参照）「四天王」は、また四大天王・護世四天王ともいう。須弥山の中腹にある四王天の主。帝釈天に仕え、仏法の守護を念願とし、仏法に帰依する人々を守護する護法神。東方の持国天（Dhrtarastra）・南方の増長天（Virudhaka）・西方の広目天（Virupaksa）・多聞天（Vaisravana・毘沙門天）をいう。持国天は東方を、増長天は南方を、広目天は西方を、多聞天（毘沙門天）は北方を守護する。六欲天の第二に位置する。わが国では古くから彫刻としての傑作が多い。（『中村』p.527~528 参照）尚、「密迹金剛」は『象器箋』【二四二】に立項されている。また、梵天・帝釈・四天王は、【二四一】「梵釈四王」を参照。

③又依釋門正統・佛祖統紀、立保境將軍像。謂、是在日烏傷縣宰、發誓護藏者也。然此方、少設此。

＊

又た、『釋門正統』・『佛祖統紀』に依るに、保境將軍の像を立す。謂く、「是れ在日の烏傷縣（＝浙江省義烏県）の宰、誓いを發して藏を護る者なり」と。然れども此の方、此れを設くること少れなり。

＊

○又依釋門正統・佛祖統紀…少設此＝『釈門正統』巻三「塔廟志」条に「立保境将軍、助香火之奉。謂是在日烏傷宰也」（X75-298c）とあり、『仏祖統紀』巻三三・法門光顕志第一六「輪蔵」条に「保境将軍者、在日烏傷宰。発誓護蔵者也（義烏県、旧名烏傷。詳見傅大士伝）」（T4-318c）とある。「保境」とは、境内を保護、防衛する意。（『大漢和』巻一・p.790 参照）

④又一説曰、八天中、除一躯密迹金剛、加烏傷將軍、爲八數矣。余謂、此甚得之。且如密迹分二躯、蓋欲對立門左右無偏焉。如今、輪藏則與餘天雜列。而分身、固無謂也。

＊

又た一説に曰く、「八天中に、一躯の密迹金剛を除いて、烏傷將軍（＝保境將軍）を加えて、八數と爲す」と。余謂えらく、「此れ甚だ之れを得たり。且く密迹二躯に分かつが如きんば、蓋し門の左右に對立して、偏ること無からんことを欲すればなり。如今、輪藏は則ち餘天（＝他の神々）と雜え列なる。而して分身は、固とに謂われ無し」と。

＊

○又一説曰…固無謂也＝「一説」は典拠未詳。「烏傷将軍」は「保境将軍」のこと。③の注に引いた『釈門正統』巻三と『仏祖統紀』巻三三の資料中にあるように、烏傷（浙江省義烏県）の高官（将軍）であったことによる。尚、輪蔵の創造者とされる傅大士の出身が烏傷県（義烏県）である。

（松原信樹）

【二五一】耐重

①凡堂閣四稜、椽下柱上、所蹲鬼形、頭上及兩掌作擎舉之勢者、稱耐重。

＊

凡そ堂閣（＝堂は住家。閣は高楼。寺院の建物）の四稜（＝四隅）、椽（＝たるき）の下、柱の上に、蹲る所の鬼形、頭上及び両掌、擎挙（＝両手をささげ挙ぐ）の勢いを作す者を、「耐重（＝頭または両手で擎げ挙げる姿勢をなすこと。堂閣の四稜や椽の下柱の上に蹲っている鬼神・夜叉・金剛神等の像についていう。）」と称す。

②雑毒海［八ノ十丈］卒菴耐重頌云、坐斷孤危未肯休、荷擔傑閣與層樓。祖翁活計丘山重。得力全歸頂顙頭。

＊

『雑毒海』［八の十丈］卒菴の「耐重」の頌（＝禅旨を伝える詩）に云く、「孤危（＝峻厳で辛辣なこと）を坐断（＝完全否定）して、未だ肯えて休まず、傑閣（＝大きな高殿）と層楼（＝高い楼閣）とを荷担（＝背負い担ぐ）す。祖翁（＝祖師）の活計は丘山のごとく重し（＝重大）。得力（＝力量）全く頂顙頭（＝頂・顙ともにいただきの意。頭のてっぺん）に帰すと。

＊

○雑毒海［八ノ十丈］、卒菴耐重頌云、…得力全歸頂顙頭＝『禅宗雑毒海』には、元の仲猷祖闡編の十巻本と、清の迦陵性音が増補重編した八巻本とがある。『卍続蔵経』所収の『雑毒海』は重編八巻本であり、ここに引かれた「耐重」の頌は、その巻五（X65-81b）に見える。但し、末句の「顙」を「額」に作る。無著禅師が見た本は「巻八」とあるから十巻本であろう。十巻本は未見だが、寛文五（一六六五）年の藤田六兵衛刊の二冊本が存する（『禅籍目録』p. 255）。尚、『率菴梵琮禅師語録』（X69-661c）にも同文が見えるが、こちらは「顙」のままである。「卒菴」とは、仏照徳光の法嗣である、南宋の率菴梵琮のこと。「率」と「卒」は音通。『続燈正統』巻一一（X84-470a）などの燈史に名前が見えている。尚、「頌」については、『象器箋』中の【一一五〇】「偈頌」・【一一五一】「頌古」を参照。

③人天眼目［一ノ二十丈］十智同眞、十、同得入下語云、耐重打金剛。

＊

『人天眼目』［一の二十丈］、「十智同真」の、「十、同得入」の下語（＝著語、短評）に云く、「耐重は金剛（＝ダイヤモンド）を打（＝打ち砕く）つ」と。

＊

○人天眼目［一ノ二十丈］…耐重打金剛＝『人天眼目』巻一の「古宿十智同真問答」（T48-305b）に見える。「十智同眞」とは、汾陽善昭がはじめて唱えた学人接得の教えの一つ。同一質・同大事・総同参・同真志・同偏普・同具足・同得失・同生殺・同音吼・同得入の十の点で、不二一体となるべきであると説いたもの。『人天眼目』には汾陽・松源・或庵・寂音・竹庵・大慧・古徳等が著語、問答をつけている。文中の【八七〇】「下語」は『象器箋』中に立項されている。

（神足浩正）

【二五二】十王

⑧韻語陽秋［十二ノ四丈○統紀ノ四十六○又釈氏資鑑九ノ十七丈引用］云、歐陽永叔。素不信釋氏之説。既登二府、一日被病亟。夢至一所、見十人冠冕環坐。一人云、參政安得至此、宜速反舍、公出門數歩。復往問之曰、公等豈非釋氏所謂十王者乎。曰然、因問、世人飯僧造經、爲亡人追福、果有益乎。答云、安得無益、既寤、病良已、自是遂信佛法。文康公得之於陳去非、去非得之於公之孫恕、當不妄。

⑨　忠曰、十王藏典不談、不應憑歐陽之夢、而實其事。晝日所聞見、夜間成夢境。不應詰歐陽之所覩。飯僧造經爲福、經説明白。秖歐陽因此、方信佛法、則其見淺近。不可望玄妙、可知也。

⑩劉須溪［翰墨大全釈教五ノ六丈］十王殿修造疏云、江村古寺。託於長者之間、風雨頽廊。謂是何王之殿、睠焉修復。賴爾衆多、列爲十地十觀。以象三公三又、宣室但言鬼神事。不也世尊。天堂必有君子登、存乎人者。

⑪　釋門正統［四ノ七丈］云、有所謂十王者。按正法念經、秖有琰摩羅王。此翻爲雙王。以兄主男獄、妹主女獄故也。據冥報記云、天帝統御六道。是謂天曹。閻羅王者、是謂地

府。如人間天子、泰山府君、如尚書令録。五道大神、如六部尚書。自餘鬼道、如州縣等。此外十殿之名、乃諸司分者。乃唐道明和尚、入於冥中。一一具述、因標其號。報應符合、初匪罔世。往往猶歴代官制不同、隨時更變也。又有十王經者。乃成都府大聖慈寺沙門藏川所撰。又水陸儀文敍曰、圖形於老仙人、〈唐張果老畫幀〉。起教於道明和尚。雖冥司有十王之號、在藏殿無一字之談。稽攷所因、粗知其故。由雙王之示實、分十殿以強名。或崇追薦之方、或啓預修之會云云。

⑫ 佛祖統紀［卅四ノ十四丈］云、世傳唐道明和上。神遊地府。見十王分治亡人。因傳名世間。人終多設此供。十王名字、藏典傳記。可考者六、閻羅・五官。〈二名見提謂經〉。平等〈華嚴感應傳［十三丈］、郭神亮爲使者追、至平等王所、因誦若人欲了知四句偈。得放廻〉。泰山。〈譯經圖紀、沙門法炬、譯金貢泰山贖罪經、孝經援神契、泰山、天帝孫、主召入魂〉。初江。〈夷堅志、池州郭生、夢入冥府、王揖坐、謂曰、我是西門王郎、冥司録我忠孝正直、不害物、得作初江王、一紀〉。秦廣。〈夷堅志南劍陳生既死、其弟之女、見二鬼導至宮殿曰秦廣王也。王謂女曰、欲救伯苦、可轉八師經、女寤、家人求得經、請僧誦千徧、兄夢弟、來謝曰、已獲生天〉。

⑬ 忠曰、五雜組［四ノ十丈］云、藏經云、泰山爲天帝之孫。爲五岳祖。主掌人間生死脩短。此俗説之鼻祖也。〈止此〉。泰山天孫、孝經援神契之説、而謝肇淛誣以藏經、何也。

【二五三】掠剩大夫　（神足浩正）

①掌世人飲食神也。

②雲臥紀談［下ノ十一丈○通載十九ノ廿四丈引○●宝●无傳］云、無盡居士張公、爲玉泉皓禪師、撰塔碑。紀、其入厨見饌晩饍問、待過客耶。爲衆僧耶。既以實對。即呼知事。杖而數之曰、吾昔參禪、爲人汲水舂米。今現成米麪。烝炊造作。與供養諸佛菩薩無異。飽喫了。並不留心參學。百般想念。五味馨香。假作驢腸鱓生、羊骨鼈☆脽。餵飼八萬四千戸蟲。開眼隨境攝、闔眼隨夢轉。不知注祿判官。掠剩大夫、隨汝抄割、消鑿祿簿、教汝受苦有日在。徒衆不堪其枯寂。讚於縣宰曰、長老不能安衆。唯上來下去、點檢零碎。縣宰召皓至、語之曰、大善知識、何不在丈室端坐。兩廊下三門前、來去得許多耶。皓曰、大通智勝佛、十劫坐道場、長官、以坐是佛耶。坐殺佛去也。縣宰笑而已。

③春渚紀聞［一ノ十丈］云、陳秀公丞相、與元參政厚之、同日得疾。陳忽寄聲、問元安否、曰參政之疾、當即痊矣。某雖小愈、亦非久世者。續請其説。秀公曰、某病中夢至一所。金碧煥目。室間羅列甕器甚多、上皆以青帛羃之。具題曰、元參政香飯也。某問其故。有守者。謂某曰、元公自少至老、每食度不能盡、則分減別器。未嘗殘一食也。此甕所貯、皆其餘也。世人每食不盡、則狼藉委棄。皆爲掠剩所罰、至於減算奪祿。無有免者。今元公由此當更延十年福算也。後數月而秀公薨、元果安、享耆壽。〈其孫中大公紹直云〉。

④異聞總録［二ノ四丈○説類四十三ノ十四丈引］云、揚州節度推官沈君。〈失其名及鄕〉。里居官頗強直。通判饒惠卿。尤知之。惠卿受代歸臨川。一府僚屬、出祖於瓜洲。前一夕沈聞書窓外人語曰、君明日祿盡馬絶。爲妻子言、愀然不樂。明日將上馬。厥子牽衣止之。沈曰、饒通判相與甚厚、方爲千里別。安得不送。策馬徑行。所乘馬、蓋借於軍中者、惡甚。始出城、奔而墜。足絓☆鐙間、不可脱。馳四十里、及瓜洲方止。馭吏追及之、則面目俱敗。血肉糢糊。不可辨識。昇歸舍。氣息殞殞。經一日而絶。惠卿憐其以己死。賻錢二十萬。郡遣

夫力十餘輩、護柩歸。諸人在道相顧。體如冰霜。或時稍怠、則頭輒痛。類有物擊之。兩旁行者、皆見一緣袍官人、坐柩上、執挺而左右顧。至家乃已。後歲餘、其妻閻氏、白晝見旗幟奄再行空中。一人跨白馬、蹀躞而下。至則沈也。相慰拊良久。又徧呼諸子。誨以讀書耕稼之務、曰吾今爲掠剩大夫。職業雄盛、無憶我。翩然而去。自是不復來。閻氏之客、傳其事。（夷堅志［癸ノ二ノ十一丈］作閻氏之弟棺傳其事）。

⑤徐鉉稽神録［三ノ三丈］云、廣陵法雲寺僧珉楚、嘗與中山賈人章某者親熟。章死。珉楚。爲設齋誦經。數月忽遇章於市中。楚未食。章即延入食店、爲置胡餅。既食、楚問、君已死。那得在此。章曰然、吾以小罪、未得辭脱。今死爲揚州掠剩兒。復問、何謂掠剩、曰、凡市人賣販、利息皆有常數。過數得之、爲掠剩。吾得而掠有之。今人間如吾輩甚多。因指路人男女曰、某人人、皆是也。頃之有一僧。過于前、又曰、此僧亦是也。因召至、與語良久、僧亦不見楚也。

⑥　忠曰、所指路人男女、及僧、皆鬼也。

（神足浩正）

【二五四】伽藍神

＊

①或單稱伽藍。　品字箋［丁ノ九丈］云、伽藍釋氏護法神名。

＊

或いは單に伽藍と稱す。　『品字箋』［丁の九丈］に云く、「伽藍は釋氏（＝釈尊が釈迦族の出身であるために仏弟子の姓をすべて釈という）の護法神（＝仏法に帰依し正法を護持しようとする神）の名」と。

＊

○文中の事項のうち、【二〇】「伽藍」は、本書巻一「第二類・殿堂門　上」に、【三四八】「釈氏」は、本書巻五「第六類・称呼門　下」の中に立項されている。

②敕修清規［上二ノ七丈］念誦云、皇風永扇、帝道遐昌、佛日增輝、法輪常轉。伽藍土地、護法護人、十方檀那、增福增慧。　又［下一ノ廿一丈］沙彌得度云、伽藍土地、增益威光、護法護人、無諸難事。

＊

『敕修清規』［上二の七丈］の「念誦」に云く、「皇風（＝天子による教化）永に扇に、帝道（＝天子が国を治める理想的な道）遐かに（＝遠方）昌え（＝いきおいが盛んになる）、佛日（＝仏陀を日輪にたとえた語）輝きを增し、法輪常に轉せん（＝仏法の教化がたえず行われること）。伽藍土地は、法を護し人を護す。十方（＝東西南北・四維・上下をいう）の檀那（＝布施。衣食住等を寺院や僧侶に施与する信者）は、福を增し慧（＝智慧・ものの道理をはっきり見きわめて、心にしっかり納得する精神作用）を增さん」と。　又た［下一の廿一丈］「沙彌得度」（＝十戒を受けて沙弥になること）に云く、「伽藍土地、威光を增益し、法を護し人を護して、諸もろの難事無からん」と。

＊

○敕修清規［上二ノ七丈］皇風永扇…法輪常轉＝『勅修百丈清規』巻一（T48-1121a）と『叢林校定清規総要』巻二（X63-608c）と『禅林備用清規』巻二（X63-628f）にも全く同じ文章が見える。

○敕修清規［下一ノ廿一丈］伽藍土地…無諸難事＝『勅修百丈清規』巻五（T48-1137a）と『弘戒法儀』巻

一（X60-582c）と『禅林備用清規』巻一〇（X63-664b）にも全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【二〇】「伽藍」は、本書巻一「第二類・殿堂門　上」に、【三三七】「檀那」は、本書巻五「第六類・称呼門　下」に、【五五一】「沙弥」は、本書巻八「第七類・職位門　下」に、【六九〇】「得度」は、本書巻九「第九類・叢軌門」に、【九九八】「念誦」は、本書巻一三「第十七類・諷唱堂門」の中に立項されている。

③繼燈録［二ノ廿六丈］雲居即菴慈覺禅師章云、師始登雲居時、先一夕宿瑶田庄。夢伽藍安樂公謂曰、汝與此山祇有一粥縁。〈云云〉。後數年、蜀士有宦達於朝者。與師親。故以雲居虚席、請師補其處。師欣然承命。将復徴往夢。竟至瑶田庄而寂。

＊

『繼燈録』［二の廿六丈］「雲居即菴慈覺禅師」（＝宋代の人。臨済宗楊岐派破菴派。号は即庵。蜀（四川省）の人破菴祖先に参じ、法を嗣ぐ）の章に云く、「師始め雲居（＝南康府（江西省）の雲居山、また雲居寺のこと）に登りし時、先き一夕、瑶田庄に宿す。夢むらく、伽藍安樂公謂いて曰く、『汝、此の山と、祇だ一粥の縁有るのみ〈云云〉』と。後數年、蜀の士、宦、朝（＝朝廷）に達する者有り。師と親し。故に雲居、席を虚しくする（＝寺院に住職が定まっていないこと。また役職が欠けて空席になっていること）を以て、師を請して其の處を補せしむ。師欣然（＝よろこばしい）として、命を承く。将に復た往夢（＝昔の夢）を徴（＝審らかにする。あらわれる）せんとす。竟（＝最後に）に瑶田庄に至りて寂（＝死ぬこと）す」と。

＊

○繼燈録［二ノ廿六丈］雲居即菴慈覺禅師章云…竟至瑶田庄而寂＝『継燈録』巻二（X86-516c）に同文がある。文中の事項のうち、【二〇】「伽藍」は、本書巻一「第二類・殿堂門　上」に、【二七〇】「禅師」は、本書巻五「第六類・称呼門　上」の中に立項されている。

④鏡堂圓禅師録［偈廿一丈］示作無頭榜者偈云損他常住惡徒黨盡付伽藍掌握中。〈詳文疏類、無頭榜處。〉

＊

『鏡堂圓禅師（＝臨済宗楊岐派破菴派。号は鏡堂。蜀（四川省）の人。詩人白玉蟾の子孫）の録』［偈廿一丈］「無頭傍（＝無署名の掲示板。傍は掲示板。無頭は、頭すなわち自分の名を隠したの意）を作る者に示す」偈に云く、「他の常住（＝叢林の役職のうち、運営面を担当する役職を総称していう語）を損す惡徒黨、盡く伽藍掌握の中に付（＝託す。ゆだねる。）す」と。〈「文疏類」の「無頭榜」の處に詳らかなり。〉

＊

○文中の事項のうち、【一〇】「常住」は、本書巻一「第一類・区界門」に、【二〇】「伽藍」は、本書巻一「第二類・殿堂門　上」の中に立項されている。また、「無頭榜」は巻一五「第廿二類・文疏門」の【1193】に見える。

⑤釋氏要覧［上ノ廿三丈］云七佛經云有十八神護伽藍一美音、二梵音、三天鼓、四歎妙、五歎美、六摩妙、七雷音、八師子、九妙歎、十梵響、十一人音、十二佛奴、十三歎德、十四廣目、十五妙眼、十六徹聽、十七徹視、十八遍視、道世法師云、寺院既有十八神護居住之者、亦宜自勵不得怠惰爲非恐招現報耳。〈凡寺壁、有畫大神者、即是此神也。或問、世界之内、伽藍無數。何只十八神、而能遍護耶。答、一切神、皆有無數眷属、即是分任守護、也無妨。〉

＊

『釋氏要覧』（＝三巻。宋、道誠編。天禧四年（一〇二〇）刊。上・中・下巻九篇ずつ、総じて二七篇に分つ。各篇の下に仏教の故事・各自等集め、さらにその下に経典・祖録等を引き注釈を施したもので、仏教の故事成語辞典ともいうべきもの）［上の廿三丈］に云く、『七佛經』（＝『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』四巻）に云く、『十八神（＝十八善神。十八護伽藍神。寺院を守護する十八善神。禅宗では護法神として安像する）有り、伽藍を護る。一に美音、二に梵音、三に天鼓、四に歎妙、五に歎美、六に摩妙、七に雷音、八に師子、九に妙歎、十に梵響、十一に人音、十二に佛奴、十三に歎德、十四に廣目、十五に妙眼、十六に徹聽、十七に徹視、十八に遍視』と。道世法師云く、『寺院既に十八神の護り有り。居住の者、亦た宜しく自ら勵まして、怠惰して（＝なまけて、だらしがない）非を爲すことを得ざるべしと。〈凡そ寺壁に大神を畫く者の有るは、即ち是れ此の神なり。或るひと問う、「世界の内、伽藍無數なり。何ぞ只だ十八神のみにして、能く遍護せんや」と。答う、「一切の神、皆な無數の眷属有り、即ち是れ分任して守護すれば、也た妨げ無し」と。〉」と。

＊

○釋氏要覧［上ノ廿三丈］云七佛經云…也無妨＝『釈氏要覧』巻一（T54-263c~264a）に全く同じ文章が見える。文中の事項のうち、【三四八】「釈氏」は、本書巻五「第六類・称呼門　下」の中に立項されている。

⑥編年通論云、天台拾得嘗掌供獻。伽藍神粥飯多爲烏鳶所殘。拾得杖擊神而嫚罵曰、汝食猶不能護。焉能護伽藍乎。神遍夢寺僧曰、拾得鞭我。至旦互以語及、一一皆同。由是衆駭之。

＊

『編年通論』（＝隆興仏教編年通論。二九巻。宋、石室祖琇撰。南北朝頃刊。後漢明帝の代の仏教の伝来から五代に至る間の仏教上の事蹟を編年体に記したもの）に云く、「天台（＝天台山。台州（浙江省）天台県の城北三里にある）の拾得（＝唐代の人。天台山国清寺に隠栖していたという僧）、嘗て供獻（＝祭礼で供物をさげる）を掌る。伽藍神の粥飯、多く烏鳶（＝カラス・トンビ）の殘なわるる（＝ころす。ほろぼす。傷つける）所と爲るに、拾得、杖もて神を擊して、嫚罵（＝口ぎたなくののしる）して曰く、『汝が食すら猶お護すること能（＝できる。任に堪える）わず。焉くんぞ能く伽藍を護せんや』と。神遍く寺僧に夢みえて曰く、『拾得、我を鞭つ』と。旦（＝よあけ。あした）に至りて互いに以て語り及ぼす。一一皆な同し、是れに由りて衆、之を駭く。

＊

○編年通論云…由是衆駭之＝『隆興仏教編年通論』巻二〇「寒山子」条（十一丁表）に「伽藍神」以下、そのままの文章が見える（国立国会図書館デジタル化資料・寛永年間古活字本）。文中の事項のうち、【二〇】「伽藍」は、本書巻一「第二類・殿堂門　上」に、【二五四】「伽藍神」は、本書巻四「第五類・霊像堂門　下」の中に立項されている。

⑦［應禪云］鎌倉建長寺、伽藍神五軀相竝。　張大帝　大權修利　掌簿判官　感應使者　招寶七郎

＊

［應禪云く、］鎌倉建長寺、伽藍神五軀（＝五体）相い竝ぶ。　張大帝（＝祠山張大帝。中国帰宗寺（江西省廬山）の土地神。蘭渓道隆との因縁により、京都の建仁寺も土地神としてこれを祀る）　大權修利（＝大権菩薩・修理菩薩・招宝七郎・招宝七郎大権修利とも。禅家で護法神として佛殿に安置する像で、右手を額に加え、遠望の姿勢をなし、身に帝王の服をつけている。もと阿育王山の護法神で、海を渡る人々が育王山を望ん

で、この神に加護を祈ったといわれる。また一説には護塔の神ともいわれる）　掌簿判官（＝土地神に従属する神名。土地神が人を賞罰する傍らにあってその帳簿を掌るという）　感應使者（＝帝釈天の使者として禅院に祭られる伽藍神。掌簿判官の下位に祭る）　招寶七郎（＝招宝七郎大権修理（利）菩薩・大権修理菩薩・大権菩薩とも。寺院の護伽藍神。道元が中国より帰朝のとき、形を潜めて随って来た正法護持の護法神といわれる。七郎は招宝山の山神で船舶がこの招宝山下に集まったことから、護船の神といわれ、また阿育王山の護法神であるともいわれる。右手を額に当てて遠望の姿をなし、身に帝王の服を着ている）

＊

○「応禅」は人名であろうが、未詳。文中の事項のうち、【二五四】「伽藍神」は、本書巻四「第五類・霊像堂門　下」に、【二五七】「大権修利菩薩」は、本書巻四「第五類・霊像門　下」に、【二五八】「招宝七郎」は、本書巻四「第五類・霊像門　下」に、【二五九】「祠山張大帝」は、本書巻四「第五類・霊像門　下」に、【二六一】「掌簿判官」は、本書巻四「第五類・霊像門　下」に、【二六二】「感應使者」は、本書巻四「第五類・霊像門　下」に、の中に立項されている。

（神足浩正）

【二五五】土地神

①忠曰、守護其封境之神、稱土地也。〈又見殿堂類、土地堂〉

＊

忠曰く、「其の封境（＝くにざかい・国境）を守護するの神を、土地と稱すなり」と。〈又た、殿堂類の、「土地堂」に見ゆ。〉

＊

○又見殿堂類、土地堂＝本書【三三】「土地堂」の説明に、「土地神、護法神之堂」とある。「土地」は「土地神」の略称。土地神は寺院の境内を守護する神のこと。その神は寺院によって一定していない。

②餘冬序録［四十一ノ八丈］云、爵尊、徳尊、齒尊之人、往往沒而得祭於里社。俗謂土地神、是也。里人或爲之立廟。

＊

『餘冬序録』［四十一の八丈］に云く、「爵（＝官位）尊く、徳尊く、齒（＝年令）尊きの人、往往に沒して祭を里社（＝その土地の社）に得。俗に土地神と謂う、是れなり。里人（＝その土地に生活する人）或いは之が爲に廟を立つ」と。

＊

○『餘冬序録』＝明の何孟春撰。十三冊六十五巻。国立国会図書館デジタル化資料『餘冬序録』四一巻・八丁に同文があるが、「俗謂土地神」の部分を「俗称土地神」に作る。また『餘冬序録』所掲のこの文章は、呉澄（一二四九～一三三三）の『臨川呉文正公集』「江州城隍廟後殿記」（『四庫全書』集部、別集類、巻三八収載）から引かれたものである。

③徑山土地神、名靈澤龍王。寺有龍王殿。〈無準徑山録云、靈澤之殿〉　大慧年譜［三十七丈］云、師、住徑山時、紹興九年己未、以神龍未有封號、敷奏于朝、蒙賜候、曰廣潤、廟曰靈澤。

＊

徑山の土地神を、靈澤龍王と名づく。寺に龍王殿有り。〈『無準の徑山録』に云く、「靈澤の殿」と。〉『大慧年譜』［三十七丈］に云く、「師、徑山に住する時、紹興九（一一三九）年己未、

神龍（＝靈澤龍王を指す語）未だ封號（＝授封ないし冊封に当たって授与する称号）有らざるを以て、朝に敷奏（＝天子に意見などを申し上げること）し、候を賜ることを蒙りて、廣潤と曰い、廟を靈澤と曰う」と。

＊

○無準徑山録云、靈澤之殿＝『無準師範禅師語録』巻二に「特賜本寺『釈迦宝殿妙荘厳閣凌霄之閣霊沢之殿宝所万年正続之院』二十四大字宸翰」（X70-237b）とある。

○大慧年譜［三十七丈］云…曰廣潤、廟曰靈澤。＝「師、住徑山時、紹興九年己未」という文章が『大慧普覚禅師年譜』では、「師五十一歳。是年、龍象駢集、坐夏者一千七百有奇。挙悟本・道顔二座元、分座訓徒。按真讃曰、一千七百痴衲子、圍繞這箇無明叟」（J1-801a）となっている。以下は全く同じ文章が見える。

④靈隱護法神、名靈鷲山王。　正宗賛月堂昌禪師賛云。抛擲冷泉、靈鷲山王、忙忙尋討。

解者［刊鈔十三ノ七十一丈］曰、靈鷲山王。靈隱護法神也。

＊

靈隱の護法神を靈鷲山王と名づく。　『正宗賛』の「月堂の昌禪師賛」に云く、「冷泉（＝水温の低い）に抛擲（＝放り投げる）す、靈鷲山王、忙忙（＝せわしくて落ち着かないさま）として尋討す」と。　解者（＝解釈する者）［刊鈔十三の七十一丈］の曰く、「靈鷲山王は靈隱の護法神なり」と。

＊

○正宗賛月堂昌禪師賛云…忙忙尋討＝『五家正宗賛』巻二「月堂昌禪師賛」（X78-616a）に同文が見える。

○解者［刊鈔十三ノ七十一丈］曰、＝萬安英種（一五九一～一六五四）撰『五家正宗賛抄』（駒澤大学電子貴重書庫収蔵）十三巻七十一丁に「靈鷲山王ハ靈隱ノ鎮守也」とある。

⑤雪峰土地神、名松山。　雪峰録難提塔銘云。土主曰松山、卵塔號難提。

＊

雪峰の土地神を松山と名づく。　『雪峰録』「難提塔の銘」に云く、「土主（＝その土地を守護する者）を松山と曰い、卵塔（＝形が鳥の卵に似ている墓塔　僧の墓に用いる　無縫塔）を難提と號す」と。

＊

○雪峰録難提塔銘云…卵塔號難提＝『雪峰義存禅師語録』巻下の「自制塔銘」（X69-84b）に「土主曰松山（四顧匪絶。又云、看）。卵塔号難提（独露相倚。又云、險）」の文章がある。

⑥嘉興府興聖寺土地神、名千聖小王。　虚堂興聖録云、千聖小王怒發、將鴛鴦湖、一脚踢飜。

＊

嘉興府（＝現在の中国・嘉興市　明清時代に置かれた府都）の興聖寺（＝嘉興府にある寺院。虚堂智愚禅師が住持した事で有名）の土地神を千聖小王と名づく。　虚堂（＝虚堂智愚禅師）の『興聖録』に云く、「千聖小王、怒り發して、鴛鴦湖（＝嘉興府の南方にある湖）を將て、一脚に踢飜（＝仰向けに蹴り上げること）す」と。

＊

○虚堂興聖録云、千聖小王怒發。將鴛鴦湖、一脚踢飜＝『虚堂和尚語録』巻一「嘉興府興聖禅寺虚堂和尚語録」の「上堂」（T47-985a）に同文が見える。

⑦僧寶傳[二冊二十八丈]雲居簡禪師傳云、先是高安洞山有神。靈甚。膺公住三峰時、受服役。既來雲居神亦從至。舍於枯樹之下。而樹茂。號安樂樹神。

＊

『僧寶傳』[二冊二十八丈]の「雲居の簡禪師（＝洞山良价禪師の法嗣・雲居道膺禪師）の傳」に云く、「是れより先、高安（＝中国の地名・現在の高安市）の洞山に神有り。靈甚し。膺公、三峰（＝雲居道膺が洞山良价の法嗣となった後に最初に止まった地名）に住する時、服役（＝召し使われること）を受く。既に雲居に來れば、神亦た從って至る。枯樹の下に舍す（＝やどる）。而して樹茂る。安樂樹神と號す」と。

＊

○僧寶傳[二冊二十八丈]雲居簡禪師傳云…號安樂樹神＝『禪林僧宝伝』巻九（X79-511c）に同文がある。

⑧雪堂拾遺録[十二丈]云、眞州長蘆登和尚、數年鼎新、起長蘆寺。既就。一夜夢有神人來、乞爲土地。登曰、你做我土地不得。神曰、何故。登曰、你見我僧家過。神云、某有長誓。遂斷一臂呈。登曰、若如是則可。遂與建祠堂。迨塑土地、一臂墮落。屢修復爾。方見願力之重也。

＊

雪堂（＝五祖法演下の佛眼清遠の法嗣・雪堂道行禪師）の『拾遺録』[十二丈]に云く、「眞州長蘆の登和尚（＝真歇清了禪師）、數年鼎新（＝新しくすること）して長蘆寺を起つ。既に就る。一夜、夢に神人（＝仙人）有り、來りて土地と爲らんことを乞う。登曰く、『你、我が土地と做り得ず』と。神曰く、『何の故ぞ』と。登曰く、『你、我が僧家（＝僧侶の住する所）の過を見る』と。神云く、『某に長誓有り』と。遂に一臂を斷ちて呈す。登曰く、『若し是くの如くならば則ち可なり』と。遂に與に祠堂を建つ。土地を塑す（＝像をつくる）に迨びて、一臂墮落す。屢しば修するも復た爾り。方に願力の重きことを見るなり」と。

＊

○雪堂拾遺録云…願力之重也＝『雪堂行拾遺録』一巻（X83-372c）に同文がある。

⑨清拙清規[五十五丈]云、近年杭州靈隱寺都寺、〈忘其名字〉晚間土地堂燒香、土地神、執其手、令之筭常住錢米帳。此僧伸手、立於神像前、竟動不得。行者走方丈。方丈遂與告白、免罰。此僧方得退出。明日、此僧自將衣物盡淨、僧堂前估唱、錢歸常住畢。僧堂挿單坐禪。　又平江府承天寺僧、義主座、因時疫病。前堂寮僧、臥病十餘人。義主座、白日見土地神領瘟神同入看病人。義公告土地神求免。土地神乃説與瘟神云、此僧無過、可免。義公時有俗姪。在旁亦病。義公又告土地神、求免俗姪。神答云、我只管寺内僧。此俗人非寺人、我不管。神皆出。後義公病愈。　又天童土地神、依人而降言寺中事。又言、我聞、覺和尚住持六年。我未曾得見其面。覺和尚、宏智也。乃知、道德行解之師、神鬼不能見。

＊

清拙（＝清拙正澄一二七四～一三三九）の『清規』[五十五丈]に云く、「近年、杭州靈隱寺の都寺（＝禪宗寺院で寺の一切の事務を監督する役職）、〈其の名字を忘る〉晚間、土地堂に燒香するに、土地神、其の手を執り、之をして常住（＝寺院の所有物）の錢米帳（＝会計簿）を筭（計算）せ令む。

此の僧、手を伸ばして、神像の前に立ち、竟に動ずることを得ず。行者、方丈に走り、方丈遂に與に告白して罰を免る。此の僧方に退出することを得たり。明日、此の僧自ら衣物を將て盡淨して（＝尽く浄める）、僧堂前に估唱（＝競売）して、錢、常住に歸し畢わって、僧堂に單を挿れて坐禪す。　又た平江府（＝江蘇省蘇州）承天寺の僧、義主座、因みに時疫（流行病）の病す。前堂寮（＝修行僧が起居する寮舎）の僧、病に臥するもの十餘人。義主座、白日（真つ昼間）に土地神の瘟神（＝疫病神）を　領（引き連れる）して、同じく入りて病人を看るを見る。義公、土地神に告げて免ぜんことを求む。土地神乃ち瘟神に説與して云く、『此の僧に過無し、免ず可し』と。義公、時に俗姪有り、旁らに在って亦た病めり。義公又た土地神に告げて、俗姪を免せんことを求む。神答えて云く、『我只だ寺内の僧を管（管轄）す。此の俗人、寺の人に非ざれば、我管せず』と。神皆な出づ。後に義公の病愈ゆ。　又た天童（＝浙江省寧波）の土地神、人に依って寺中の事を降言す。又た言く、『我聞く、覺和尚、住持すること六年と。我未だ曾て其の面を見ることを得ず』と。覺和尚は宏智（＝宏智正覚・一〇九一～一一五七）なり。乃ち知んぬ、道德行解（＝修行と理解）の師は、神鬼も見ることを能わざるを」と。

＊

○清拙清規［五十五丈］云…神鬼不能見。＝清拙正澄の『大鑑清規』（『大鑑広清規』）である。聽松院蔵本『大鑑清規』（尾崎正善「翻刻・聽松院蔵『大鑑清規』」『鶴見大学仏教文化研究所紀要』五、二〇〇〇年 p.115-116）では四十丁裏から四十一丁裏「二月八日大帝誕生規式」条の中に、多少の字句の異同はあるが、同文が見える。一行目「忘其名字」は「失其名字」、「執」は「就」、三行目「盡淨」は「淨盡」、七行目「又言」は「又」となっている。

⑩　洞山見撒米作色。土地神得見禮。見碧巖録［十ノ十九丈］。

＊

洞山（＝洞山良价八〇七～八六九）、米を撒くを見て色を作ゆ。土地神見ることを得て禮す。『碧巖録』［十の十九丈］に見ゆ。

＊

○洞山見…碧巖録＝『碧巖録』第九七則・頌評唱（T48-220c）に詳細な記述が見える。

⑪　南泉見撒米心起。土地神得見禮。見大慧普説［二ノ十九丈］。

＊

南泉（＝南泉普願七四八～八三五）、米を撒くを見て心を起こす。土地神見ることを得て禮す。『大慧普説』［二の十九丈］に見ゆ。

＊

○南泉見…大慧普説＝『大慧普覚禅師普説』巻二（M59-842a-b）に詳細な記述が見える。

⑫　方輿勝覽［十二ノ十丈］泉州云、粥院在開元寺。古傳有兵官、就院索兩大粥桶。盛草餧馬一宿。主僧曰、本院土地、不能守護之。捲畫像、壓磨石下。後一夜、於長廊誦經。忽見一人曰、容爲取之。是夜、兵官兩馬俱斃。亟敲門還兩粥桶。後復見神曰、願從今去、守香積廚。永無鼠雀耗。遂許之。仍立廟像焉。

＊

『方輿勝覽』［十二の十丈］の「泉州（福建省）」に云く、「粥院。開元寺（＝中国唐代に各州

郡に建立された官立寺院　中国各地に現存するがとくに泉州（福建省）のものが有名）に在り。古傳に、兵官有りて、院に就きて兩の大粥桶を索め、草を盛り馬に餧らわせて一宿す。主僧曰く、『本院の土地、之れを守護すること能わず』と。畫像を捲きて、磨石の下に壓う。後に一夜、長廊に於いて誦經するに、忽ち一人を見て曰く、『容に爲に之を取るべし』と。是の夜、兵官の兩馬俱に斃る（＝死ぬ）。亟かに門を敲きて兩の粥桶を還す。後に復た神を見て曰く、「願わくは今從り去、香積廚（＝禅宗寺院における台所）を守りて、永く鼠雀の耗（＝災い）無からしめん」と。遂に之を許す。仍って廟像を立つ」と。

＊

○方輿勝覧［十二ノ十丈］泉州云、…仍立廟像焉。＝宋の祝穆撰『方輿勝覧』巻一二「泉州」の「建置沿革」の「粥院」条（四庫全書本・ゆ）に同文が見える。原典では、「粥院」が見出しで、「在開元寺」以下は二行の割り注となっている。

⑬晋干寶搜神記［五ノ一丈］云、蔣子文者、廣陵人也。嗜酒好色、挑撻無度。常自謂、己骨清、死當爲神。漢末爲秣陵尉、逐賊至鍾山下、賊擊傷額。因解綬縛之。有頃遂死。及呉先主之初、其故吏見文于道。乘白馬、執白羽侍從如平生。見者驚走。文追之謂曰、我當爲此土地神、以福爾下民。爾可宣告百姓、爲我立祠。不爾將有大咎、是歳夏大疫。百姓竊相恐動。頗有竊祠之者矣。文又下巫祝。吾將大啓祐孫氏。宜爲我立祠。不爾、將使蟲入人耳爲災。俄而小蟲如塵虻入耳。皆死、醫不能治。百姓愈恐。孫主未之信也。又下巫祝、若不祀我、將又以大火爲災。是歳火災大發。一日數十處、火及公宮。議者以爲、鬼有所歸、乃不爲厲。宜有以撫之。於是使使者、封子文爲中都侯、次弟子緒爲長水校尉、皆加印綬。爲立廟堂、轉號鍾山爲蔣山。今建康東北蔣山、是也。自是災厲止息。百姓遂大事之。

＊

晋（二六五～四二〇）の干寶（生卒年不詳）が『搜神記』［五の一丈］に云く、「蔣子文は、廣陵（江蘇省揚州）の人なり。酒を嗜み色を好み、挑撻（＝軽薄なさま）に度無し。常に自ら謂う、『己の骨清し、死せば當に神と爲るべし』と。漢の末に秣陵（江蘇省南京）の尉と爲り、賊を逐って鍾山の下に至る。賊撃ちて額を傷る。因りて綬（＝官印などを下げる紐）を解いて之を縛す。頃く有りて遂に死す。呉の先主（＝三国時代・呉の君主孫権）の初めに及び、其の故吏（＝かっての部下）、文を道に見る。白馬に乗り、白羽を執り、侍從、平生の如し。見る者驚き走る。文、之を追いて謂いて曰く、『我當に此の土地の神と爲りて以て爾下民を福すべし。爾、百姓に宣告して、我が爲に祠を立つ可し。爾らずんば將に大咎（＝大きな災い）有らんとす』と。是の歳の夏、大いに疫あり。百姓竊かに相恐動す。頗る竊かに之を祠る者有り。文、又た巫祝（＝神事を司る者）に下る。『吾將に大いに孫氏を啓祐（＝導き助ける）せんとす。宜しく我が爲に祠を立つべし。爾らずんば、將に蟲をして人の耳に入らしめて災を爲さんとす』と。俄かにして小蟲の塵虻の如き耳に入る。皆な死す。醫（＝医者）も治すること能わず。百姓愈いよ恐る。孫主未だ之を信ぜざるなり。又た巫祝に下る。『若し我を祀らずんば、將に又た大火を以て災を爲さんとす』と。是の歳、火災大いに發る。一日數十處、火、公宮（＝君主の宮殿）に及ぶ。議者（＝参謀）の以爲えらく『鬼に歸する所有らば、乃ち厲（＝祟り）を爲さじ。宜しく以て之を撫すこと有る

べし』と。是ここに於いて使者をして、子文を封じて中都（山西省）侯と爲し、次に弟の子緒をして長水校尉（＝長水の司令官）と爲し、皆な印綬（＝正式な役職認可証明）を加へしめ、爲に廟堂を立て、號を轉じて鍾山を蔣山と爲す。今、建康（南京）の東北の蔣山、是れなり。是れ自り災厲（＝災害や疫病）止息す。百姓遂に大いに之に事う」と。

＊

○晋干寳搜神記［五ノ一丈］云、…百姓遂大事之。＝『搜神記』二十巻は、東晋の干宝が著した志怪小説集。神仙・方士・徴応・感応・再生・魑魅・妖怪・人間や動植物の怪異などに関係する四七〇余の説話を説話の型で巻ごとに分類して収録したもの。中には後世の作も混入しており仏教的な説話も含まれている。引用は同書・巻五（四庫全書本・1a~2a）に見える。また、先坊幸子・森野繁夫編『干宝 搜神記』（白帝社・二〇〇四、p.153~155）参照。

⑭ 忠曰、土地神之稱、亦久矣。

＊

忠曰く、「土地神の稱も亦た久し」と。

（馬場道隆）

【二五六】火徳星君

①禅林仏殿、安南方火徳星君牌、毎月四日、十八日、諷経。

＊

禅林の仏殿は、南方火徳星君の牌を安んじ、毎月四日、十八日、諷経す。

＊

○南方火徳星君＝中国道教における火神の名称。禅宗寺院で火難消除の神として祭祀する。

②羅泌路史後紀［三ノ一丈］炎帝紀曰、炎帝神農氏、姓伊耆、名軌。一曰石年、炎精之君也。〈乗火徳。〉贊［十三丈］、火徳開統、連山感神、謹脩地利、粒我烝民。〈云云〉。

＊

羅泌（＝一一三一～一一八九　字は長源　号は歸愚　南宋吉州廬陵の人）『路史後紀』［三の一丈］の「炎帝紀」に曰く、「炎帝神農氏、姓は伊耆、名は軌。一に曰く石年と。炎精（＝日光・陽光）の君なり」と。〈火徳に乗ず。〉贊［十三丈］に、「火徳、統を開きて、連山、神を感ず。謹んで地の利を脩め、我が烝民（＝万民・民衆）に粒す（＝米穀を食料として与える）。〈云云〉」と。

＊

○羅泌路史後紀［三ノ一丈］炎帝紀曰…炎精之君也＝宋の羅泌撰『路史』巻一二「後紀三」の「禅通紀」炎帝条（四庫全書本・1a）に見える。但し、「一曰石年」と「炎精之君也」の間に、「是為後帝皇君」の六字がある。

○炎帝神農氏＝古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人。諸人に医療と農耕の術を教えたという。先農・薬王・五穀爺とも称す。姓は姜、火徳の王であったので炎帝と称したという。耒耜（らいし・鋤の一種）を発明したともされ、農業への貢献を称えるため神農氏とも称したという。医薬の祖・本草学の祖とみなされることもある。

③淮南子［三ノ一丈］天文訓曰、南方火也。其帝炎帝。　漢高誘注炎帝、少典之子也。以火徳王天下。號曰神農、死託祀於南方之帝。

『淮南子』[三の一丈]の天文訓に曰く、「南方は火なり。其の帝は炎帝なり」と。　漢の高誘（＝生没年不詳　『淮南子注』を著す）の注に、「炎帝は、少典の子なり。火徳を以て天下に王たり。號して神農と曰う。死して南方の帝に託祀（＝他に預けて祭祀する）す」と。

＊

○淮南子［三ノ一丈］天文訓曰、南方火也…死託祀於南方之帝＝『淮南子』は前漢の武帝の頃、淮南王劉安（前一七九～前一二二）が学者を集めて編纂させた思想書。劉安・蘇非・李尚・伍被らが著作。10部21篇。道家思想を中心に儒家・法家・陰陽家の思想を交えて書かれており、一般的には雑家の書に分類されている。なお、国立国会図書館デジタル化資料『淮南子箋釈』巻三「天文訓」二丁裏に、高誘の注も含めて同文が見える。

④湖海新聞後集云、衡岳有岳麓寺。重新修建、金碧輝煌、光彩鑠人。有胡僧、雲遊詣寺、與寺主言、若於東北角上小溪中、造一座兜率橋成、則類西天矣。寺主、翌日集大衆題化、積年橋成。山門下二聖、忽現夢於寺主云、本寺類西天。上界今差火徳星君來焚取。可急集大衆、南去十里、溪橋邊迎之。夢覺、寺主驚。遂集僧衆前去往候。自朝至晩、無住來者。天将昏、忽有一道人、鬢髪鬚髯、身衣繿縷、徐徐然來。僧衆見之下拝、迎至寺、大作齋會、待之甚至。哀懇之曰、此寺縁化修造、以十数年之辛勤、方能圓就。若一旦為煨燼之場、寧不可惜。欲望星君、特發慈悲、姑與原宥。道人驚曰、貧道安有此。僧衆再三哀告不已。乃問曰、誰與汝説我是火徳星君。言若明白、當與料理。寺主不得已、直云、山門下二聖現夢。道人云、可打粘大紙数十幅、一一綵繪本寺殿宇房廊様式、多將紙錢前來焼化。庶可消禳。僧衆如其教、焚訖。五更初、衆送道人出山門下。乃指罵二聖云、誰使汝饞舌、教汝骨不見肉、肉不見骨。及送至昨日橋邊、雲霧四起。道人倏然不見。衆回山門、則二聖泥土皆落。只有木胎。寺主再装塑之。越旬日又落。至今本寺山門下、無金剛二聖也。

＊

『湖海新聞』の後集に云く、「衡岳（＝現在の中国湖南省衡岳県の西にある山　中国五岳のひとつ）に岳麓寺有り。重新修建、金碧輝煌、光彩、人に鑠やく。胡僧（＝中国北方・西方の僧侶）有り、雲遊（＝思いのままに自由に歩くこと　さすらい歩くこと）し寺に詣り、寺主と言う、『若し東北角上の小溪の中に於いて、一座の兜率橋（＝兜率は仏教の世界観に現れる天界のひとつ　そこに架かる橋）を造りて成らば、則ち西天（＝西方浄土　極楽）に類せん』と。寺主、翌日、大衆を集めて題化し、年を積みて橋成る。山門下の二聖（＝寺院の山門両脇に祀られる一対の金剛像）、忽ち夢を寺主に現じて云く、『本寺、西天に類す。上界、今、火徳星君を差し來りて焚取す。急に大衆を集め、南に去ること十里、溪橋の邊りに之を迎うる可し』と。夢覺めて、寺主驚く。遂に僧衆を集め、前み去って往いて候す。朝自り晩に至るまで、住來の者無し。天將に昏なんとして、忽ち一道人有り。鬢髪（＝頭髪）鬚髯（＝（髪の毛が）乱れている）、身衣繿縷（＝ぼろぼろ）、徐徐然として來る。僧衆、之を見て下り拝し、迎えて寺に至り、大いに齋會を作して之を待つこと、甚だ至れり。哀懇して曰く、『此の寺縁化（＝募財）修造、十数年の辛勤を以て、方に能く圓就す。若し一旦煨燼の場と為らば、寧ぞ惜しむ可からざらんや。星君に望み欲す、特に慈悲を發して、姑く原宥（＝許す心　諒恕）を與えよ』と。道人驚いて曰く、『貧道（＝仏道修行の乏しいこと　転じて僧侶が自身を謙遜して用いる語）安くんぞ此れ有らん』と。僧衆、再三哀告して已まず。乃ち問うて曰く、『誰か汝が與に

『我れは是れ火徳星君なり』と説きし。言若し明白ならば、當に與に料理（＝物事をうまく処理する）すべし』と。寺主已むことを得ず、直に云く、『山門下の二聖夢を現ず』と。道人云く、『大紙数十幅を打粘して、一一、本寺の殿宇房廊の様式を繪（＝描く）綵（＝彩りをつける）し、多く紙錢を將て前來焼化す可し。庶らくは消禳す可し』と。僧衆、其の教えの如く、焚き訖る。五更（＝一夜を五区分した称の五番目　午前四時～六時）の初め、衆、道人を送って山門下を出づ。乃ち二聖を指罵して云く、『誰か汝をして饒舌ならしむる。汝をして骨、肉を見ず、肉、骨を見ざらしめん』と。送って昨日の橋邊に至るに及んで、雲霧四もに起こる。道人倏然（＝にわかに　速やかに）として見えず。衆、山門に回るときは、則ち二聖の泥土、皆な落つ。只だ木胎（＝塗装加工等をしていない木材）のみ有り。寺主、再装して之を塑す。旬日（＝十日間程の日数）を越えて又落つ。今に至るまで、本寺の山門下、金剛の二聖無し」と。

＊

○湖海新聞後集云、衡岳有岳麓寺…無金剛二聖也＝『湖海新聞』の正式名称は『湖海新聞夷堅續志』。陳摶（ちんたん・陳希夷とも称す。？～九八九。中国宋代に太宗に仕えた隠士の一人）の著した怪異譚収集録。日本の能「芭蕉精」の元となった話等が記載されている。未見。

⑤三国志傳［二ノ廿二丈］云、東海朐懸人、居淮安。姓糜名竺、字子仲。此人家世富豪、莊戸僮僕等、萬餘人。糜竺嘗往洛陽買賣。回歸、竺坐于車、路傍見一婦人。甚有顔色、来求同載。竺乃下車歩行、讓車與婦人。婦人再拝、請竺同載。竺上車、目不邪視、竝無調戯之意。行及数里、婦人辞去。臨別對竺曰、我天使也。奉上帝敕往焼汝家。感君見待以禮、故私告耳。竺曰、娘子何仰也。婦曰、吾乃南方火徳星君耳。竺拝而祈之。婦曰、此天命、不敢不焼。君可速往、搬出財物。吾當夜来。竺飛奔到家、搬出財物。日中廚下、果然火起、盡焼其屋。竺因此済貧抜苦、救難扶危。

＊

『三国志傳』［二の廿二丈］に云く、「東海朐懸（＝現在の中国江蘇省連雲港市）の人、淮安（＝現在の中国江蘇省中西部に位置する都市）に居す。姓は糜名は竺、字は子仲。此の人、家世富豪、莊戸（＝住まいとなる建物）僮僕（＝召使いの少年）等、萬餘人。糜竺嘗て洛陽に往きて買賣す。回り歸るに、竺車に坐し、路傍に一婦人を見る。甚だ顔色有り。来りて同に載らんことを求む。竺、車より下りて歩行し、車を讓って婦人に與う。婦人再拝し、竺に請いて同に載す。竺、車に上って、目、邪に視ず。竝に調戯（＝からかう　いたずらをする）の意無し。行くこと数里に及んで、婦人辞し去る。別れに臨んで竺に對して曰く、『我は天使（＝上帝の使い）なり。上帝（＝天上にあって森羅万象を司る者　神的存在）の敕（＝上帝の命令）を奉って、往きて汝が家を焼く。君が待せらるるに禮を以てするを感ず。故に私かに告ぐるのみ』と。竺曰く、『娘子何の仰せなりや』と。婦曰く、『吾は乃ち南方の火徳星君のみ』と。竺拝して祈る。婦曰く、『此れ天命なり。敢えて焼かずんばあらず。君速やかに往きて財物を搬出す可し。吾、當に夜来るべし』と。竺飛奔して家に到り、財物を搬出す。日中、廚下に果然（＝予想通り）して火起こり、盡く其の屋を焼く。竺、此れに因りて貧を濟い苦を抜き、難を救い危を扶く」と。

＊

○『三國志傳』＝未詳。『音釈補遺按鑑演義全像批評三国志伝』残十巻（明・万暦二十年刊本）が京都建仁寺両足院に存する（『京都大学人文科学研究所漢籍目録』p．695b）。また、中国国家図書

館には同時期の『三国志伝』全三〇巻がある（国立国会図書館カレントアウェアネス・ポータル）

○糜竺子仲＝（？～二二一）中国後漢末期から三国時代の政治家。蜀の劉備に仕えた。妹は劉備夫人（糜夫人）。

（馬場道隆）

【二五八】招寶七郎

①洞家諸刹、所祠土地、稱爲招寶七郎、道元和尚歸朝時、潛形隨來護法。

②或云、亦是大權而已、大權修利［虚堂一ノ廿一丈○同六巻鈔ノ興聖録ノ招宝山ノ処］是封號。本名招寶七郎、招寶山在鄮峯、此神祠于此、七郎蓋行第乎。〈此止〉忠謂、此未輒信、可更攷。

③梅峰信和尚云、祀招寶七郎爲護法、是唯局育王山。蓋按陶弘景、名勝力菩薩。有事縁于育王山、招寶七郎恐是是弘景乎。

④永平道元和尚行状云、寶慶三年冬、解纜發舶、天寒白雪霏霏、忽有化神現前。師云汝何神。曰我是招寶七郎。知師佩祖印還郷、願相隨護正法。師嘆曰、汝若然、須現小身、神乃爲白虵三寸許。自入鉢囊而屈蟠。

⑤肥前州［絶同云］平戸嶋有祠、神名七郎權現、蓋招寶七郎也。昔者唐舩來。皆著於平戸、故唐人祭之。爲護舶之神。猶如今時長崎媽祖、此祠至今存。其祠［平戸ノ大隋和尚云ク］扁紹法二字、蓋訛招寶也。

⑥五國故事［天中三十九ノ八丈○鄂十七ノ十一丈］云、閩王延彬、圭之子、審知姪也。嗣圭封泉州。初圭領兵。至泉州、舍于開寺。始生延彬于寺之堂。既生有一白雀、棲于堂中。迄延彬之終、方失所在、凡三十年。仍歳豊稔、毎發蠻舶、無失墜者、人因謂之招寶侍郎。

⑦忠曰、招寶七郎本護舩神、而延彬無失于舩、故雅稱也。非延彬實是招寶神。

⑧三才圖會［地理九ノ四十八丈］有、招寶山圖云、招寶山、在定海城東一里所、雄峻特立。郡志、山名候濤、以蕃舶貨寶、來集其下故、又名招寶山。〈一統志［四十六ノ四丈左］云、在定海縣東五里。〉

⑨浙江名勝志［五ノ廿五丈］定海縣云與巾子〈山名〉形勢相控者招寶山也。舊名候濤山、後以諸番入貢停舶于此故改今名。

⑩忠曰、按名勝志、鄮山阿育王山、皆在浙江寧波府鄞縣。招寶山在寧波府定海縣舶、故舊説招寶山在鄮峯、七郎亦是大權者、余未信之。

⑪廣輿記［十一ノ十三丈］寧波府云、招寶山、一名候濤山、四向海天無際、朝鮮日本、諸夷之域、皆在指顧中。

（馬場道隆）

【二五九】祠山張大帝

①歸宗寺土地、與蘭溪和尚有因縁。建仁寺祀之、爲土地神。見夢語集［十二丈］。

＊

歸宗寺の土地、蘭溪和尚（蘭溪道隆・一二一三～一二七八）と因縁有り。建仁寺に之を祀って、土地神と爲す。『夢語集』［十二丈］を見よ。

＊

○文中、『夢語集』は、瑞溪周鳳（一三九一～一四七三）が著わした『臥雲夢語集』のこと。禅文化研究

所蔵本によると該当箇所は十四丁表から。「土地神」は本書【二五五】に立項されている。

②義堂日工集［三ノ卅一丈］云、建仁月心云、祠山大帝、盧山歸宗土地神也。大覺禪師、在唐時、夢感示日本有縁。如此三度矣。江東祠山府前有穴。深廣丈餘。毎歳祭祀、飲食等物、内其穴中。未嘗作堆。如消化者。謂之埋藏、或云、穴通南海。

＊

義堂（義堂周信・一三二五～八八）の『日工集』［三の卅一丈］に云く、「建仁の月心云く、『祠山大帝（＝江蘇・浙江・安徽一帯の地方において、非常に盛んに祭祀された神）は、盧山の歸宗の土地神なり。大覺禪師（蘭渓道隆）、唐に在りし時、夢に日本に縁有るを示すことを感ず。此くの如きこと三度なり。江東祠山の府前に穴有り。深廣、丈餘（＝一丈は約三メートル）なり。毎歳、祭祀し、飲食等の物、其の穴の中に内るるも、未だ嘗て堆を作さず。消化する者の如ければ、之を埋藏と謂う。或いは云く、穴は南海に通ずと』と」と。

＊

○義堂日工集［三ノ卅一丈］云…穴通南海＝『日工集』は『空華日用工夫略集』のこと。後半の「江東祠山府前有穴…穴通南海」部分は、原文と同じ記述だが、前半の部分の「建仁月心云…如此三度矣」は、原文では、「建仁月心来話、唐国祠山大帝、乃廬山皈宗土地神、大覚禪師感夢、示其日本有縁之意者三度」となっており、道忠による改変が行われている。

③建長開山大覺禪師蘭渓和尚行状云、有時遊山之次、有峩冠異人。招手謂師曰、汝縁在東方。師回首之頃、便不見。偶到歸宗寺祠山大帝靈祠、而物色。前所現異人是也。師、深疑之。東遊、掛錫於明州天童。時聞、日本船、在來遠亭。往觀之於浮橋頭。異人又現師前曰、時已至矣。速去。速去。師、過橋半里許、有一古廟。入門顧、便是祠山大帝也。師、燒香、誓曰、我、若建立伽藍、請汝爲土地神。善自記取。乃偕義翁・龍江等數人、登日本船、到博多上岸。

＊

『建長開山大覺禪師蘭渓和尚行状』に云く、「有る時、遊山の次いで、峩冠（＝高い冠）の異人有り。手を招いて師に謂いて曰く、『汝の縁、東方に在り』と。師、回首（＝振り向く）の頃、便ち見ず。偶たま歸宗寺祠山大帝の靈祠に到りて物色す。前に現わるる所の異人是れなり。師、深く之を疑う。東遊して、明州（寧波）の天童に掛錫（＝修行僧が行脚の途中に他寺にとどまること）す。時に聞く、日本の船、來遠亭（寧波の三江口デルタ地区）に在りと。往きて之を浮橋の頭に觀る。異人又た師の前に現れて曰く、『時已に至りぬ。速やかに去れ。速やかに去れ』と。師、橋を過ぐること半里許りにして、一古廟有り。門に入りて顧みれば、便ち是れ祠山大帝なり。師、燒香して、誓って曰く、『我、若し伽藍を建立せば、汝を請じて土地神と爲さん。善く自ら記取（＝覚えておく）せよ』と。乃ち義翁（義翁紹仁）・龍江（龍江応宣）等の數人と偕に、日本船に登り、博多に到り、岸に上がる」と。

＊

○建長開山大覺禪師蘭渓和尚行状云、…到博多上岸＝典拠未詳。（※榎本渉編『南宋・元代日中渡航僧伝記集成』〈勉誠出版・二〇一三年二月出版予定〉の「史料翻刻」に「蘭渓和尚行状」の名称が見える。）

④桂林和尚〈名徳昌。嗣和甫忍公。〉、東山建仁寺語録云、吾西來祖〈千光〉、董此山之初、請神君、爲護法神第一。此即張大帝、旺化於東方之權輿也。

＊

桂林和尚（？～一四九九）〈名は徳昌。和甫の忍公に嗣ぐ。〉の『東山建仁寺語録』に云く、「吾が西來の祖〈千光（＝栄西）〉、此の山を董すの初め、神君を請じて、護法神の第一と爲す。此れ即ち張大帝、化を東方に旺にするの權輿（＝物事の始まり）なり」と。

＊

○桂林和尚〈名徳昌。嗣和甫忍公。〉、東山建仁寺語録云、…旺化於東方之權輿也＝『東山建仁寺語録』は『青松録』のことか。未詳。

⑤廣挿神記［夢語集十二丈・搜神大全三卷七丈全同］云、祠山聖烈眞君、姓張、諱渤字伯奇。武陵龍陽人也。父曰龍陽君、母曰、張媼。其先龍陽君、與媼遊於太湖之陂、正晝無見。風雨晦冥、雲蓋其上。五采青黄、雷電並起、忽失媼處。俄頃開霽。媼言、見天女。謂曰、吾汝祖也。賜以金丹、已而有娠。懷胎十四箇月、當西漢神雀三年、二月十一日夜半生。長而奇偉。寛仁大度、喜怒不形於色。身長、七尺。隆準・脩髯髮垂委地。深知水火之道。有神告、以地荒僻、不足建家。命行、有神獸前導。形、如白馬、其聲、如牛。遂與夫人、李氏、東游呉會稽。渡浙江、至苕霅之白鶴山、山有四水。會流其下。公止而居焉、於白鶴得柳氏。於烏程桑坵得趙氏。爲侍人。王九弟、五子一女、八孫。始於呉興郡、長興縣、順靈鄉、發跡、役陰兵。自長興荊溪、疏鑿聖瀆。長十五里、岸高七丈。至十五丈、總三十里。志欲通津於廣德也。復於後村畢宅保小山楓樹之側、爲掛鼓壇。先時與夫人李氏密議爲期。毎餉至鳴鼓三聲、王即自至、不令夫人至開河之所。厥後因夫人遣飧於鼓、乃爲烏啄。王以鳴鼓而餉至。洎王詣鼓壇、乃知爲烏所誤。及夫人至鳴其鼓、王反以爲前所誤、而不至。夫人遂詣興功之所。見王爲大豨、役陰兵、開鑿瀆河。王見夫人、變形未及、遂不與夫人相見。聖瀆之功息矣。遁於廣德縣西五里、横山之頂。居民思之、立廟於山西南隅。夫人李氏、亦至縣東二里而化。時人亦立其廟。聖瀆之河涸、爲民田。即浴兵池爲湖。灌漑瀕湖之田、僅萬頃。掛鼓之壇、禽不敢栖、蟻不敢聚云。唐天寶中、禱雨感應。初贈水部員外郎。横山改爲祠山。昭宗贈司農少卿、賜金紫。景宗封廣徳侯。南唐封爲司徒、封廣徳公。後晉封廣徳王。宋仁宗封靈濟王。至寧宗朝、累加至八字王。至理宗淳祐五年、改封正佑聖烈眞君。至咸淳二年、十二月十二日、準告加封正佑聖烈昭徳昌福眞君。〈二月十一日誕生。〉封正寧昭助靈慧順聖妃。〈李氏初二日誕生。〉封協應濟惠慈昭廣懿夫人〈趙氏〉。封協順承濟慈佑廣助夫人〈楊氏〉。此外神眷、不勝計、不耐記。

＊

『廣挿神記』［『夢語集』十二丈・『搜神大全』三卷七丈全く同じ］に云く、「祠山聖烈眞君、姓は張、諱は渤、字は伯奇。武陵の龍陽（湖南省地級市）の人なり。父を龍陽君と曰い、母を張媼と曰う。其の先、龍陽君、媼と太湖の陂に遊び、正晝（＝昼間）に見ること無し。風雨、晦冥（＝あたりが暗くなること）にして、雲、其の上を蓋う。五采（五色）の青黄、雷・電並び起こり、忽ち媼の處を失す。俄頃にして開霽（＝雨がやみ晴れること）す。媼言く、『天女に見えたり。謂いて曰く、「吾は汝が祖なり」と。賜うに金丹（不老不死の薬）を以てす』と已に娠むこと有り。懷胎して十四箇月、西漢の神雀（＝実在しない年号。神爵のことか）三年、二月十一日夜半に當たりて生まる。長じて奇偉なり。寛仁大度（寛大で情け深く、度量の大きいこと）

にして、喜怒、色に形さず。身の長、七尺なり。隆準（高い鼻）・脩髯（長い髯）にして、髪垂れて地に委む。深く水火の道を知る。神有り、告ぐるに、地、荒僻（片いなか）にして、家を建つるに足らざるを以てす。行くを命ずるに、神獣有って前導す。形、白馬の如くして、其の聲、牛の如し。遂に夫人の李氏と、東の方、呉の會稽（浙江省紹興）に游ぶ。浙江を渡り、苕霅（浙江省湖州。苕溪、霅溪の並称。）の白鶴山に至る。山に四水有りて、其の下に會流す。公止まって居れり。白鶴に柳氏を得、烏程（浙江省湖州）の桑坵に趙氏を得て、侍人（侍者）と爲す。王の九弟、五子、一女、八孫、始め呉興郡、長興縣、順靈鄉に、跡を發し、陰兵（神兵）を役す。長興の荊溪より、聖瀆を疏鑿（＝山を切り開き水を通すこと）す。長さ十五里、岸の高さ七丈より、十五丈に至る。總べて三十里。志、津を廣德に通ぜんと欲するなり。復た後村、畢の宅保、小山、楓樹の側に於いて、掛鼓壇を爲くる。先時、夫人の李氏と密議して、期することを爲す。餉毎に鼓を鳴らすこと三聲に至れば、王即ち自ら至り、夫人をして河を開くの所に至らしめず。厥の後、夫人、飧（＝夕食）を鼓に遺るるに因りて、乃ち烏の爲に啄せられ、王、鼓を鳴らすを以てして餉至るとす。王、鼓壇に詣るに泊んで、乃ち知る、烏の誤る所と爲るを。夫人至りて、其の鼓を鳴らすに及んで、王、反って以て前の誤る所と爲して、至らず。夫人、遂に功を興すの所に詣る。王の大豨（猪）と爲り、陰兵を役して、瀆河を開鑿するを見る。王、夫人を見て、形を變ぜんとして、未だ及ばず。遂に夫人と相い見えず。聖瀆の功息みぬ。廣德縣（安徽省）の西、五里、横山の頂に遁る。居民、之を思いて、廟を山の西南の隅に立つ。夫人の李氏も亦た縣の東二里に至って化す。時の人、亦た其の廟を立つ。聖瀆の河は、涸れて民田と爲る。即ち兵を浴する池は、湖と爲る。湖に瀕きの田に灌漑すること、僅ど萬頃（＝百万畝）。鼓を掛くるの壇に、禽は敢えて栖まず、蟻は敢えて聚まらずと云う。唐の天寶（玄宗の元号・七四二～七五六）中に、雨を禱って、感應あり。初めて水部員外郎（水部の定員外官僚の位）を贈り、横山を改めて祠山と爲す。昭宗（唐朝の第二二代皇帝）、司農少卿（官職の位）を贈り、金紫を賜う。景宗（遼の第五代皇帝）、廣德侯に封ず。南唐（五代十国時代に江南に割拠した十国の一つ）、封じて司徒と爲し、廣德公に封ず。後晉（五代の一つ）、廣德王に封ず。宋の仁宗（北宋の第四代皇帝）、靈濟王に封じ、寧宗（南宋の第四代皇帝）の朝に至り、累ねて加えて、八字の王に至る。理宗（南宋の第五代皇帝）の淳祐五（一二四五）年に至り、改めて正佑聖烈眞君に封ず。咸淳二（一二六五）年十二月十二日に至り、準告して、正佑聖烈昭德昌福眞君に加封す。〈二月十一日に誕生す。〉正寧昭助靈慧順聖妃に封ず。〈李氏は初二日に誕生す。〉協應濟惠慈昭廣懿夫人に封ず。〈趙氏なり。〉協順承濟慈佑廣助夫人に封ず。〈楊氏なり。〉此の外の神眷は、計るに勝えず、記するに耐えず」と。

＊

○廣挿神記［夢語集十二丈搜神大全三卷七丈全同］云、…總三十里＝『臥雲夢語集』には文字の異同があり、『広挿神記』の「霅之」を「雲三」、「役陰兵」を「役陰年」に作る。無著が見た『搜神大全』は『三教源流搜神大全』のこと。（→【二二九】「普庵」の③）

⑥ 陳繼儒羣碎録［續郛廿一ノ十五丈］云、祠山張大帝、張秉武陵人。一日行山澤間、遇仙女。謂曰、帝以君功在呉分、故遣相配。長子、以木德王其地。故且約踰年西會。秉如期往。果見前女、歸子。曰、當世世相承、血食呉楚。後生子渤。爲祠山神。神始自長興、自疏聖澤。欲通津廣德。便化爲豨、役使陰兵。後爲夫人李氏所見。工遂輟。故避食豨。

＊

陳繼儒（一五五八～一六三九・中国明代末期の書家・画家）が『羣碎録』［『續郛』廿一の十五丈］に云く、「祠山の張大帝は、張秉、武陵（湖南省）の人なり。一日、山澤の間を行き、仙女に遇う。謂いて曰く、『帝、君が功、呉の分に在るを以て、故らに相配せしむ。長子、木徳（＝五行思想による木に応じた王者の徳）を以て其の地に王たり。故に且く約す、年を踰えて西に會せん』と。秉、期の如く往く。果たして前の女を見るに、子に歸ぐ。曰く、『當に世世相承けて、呉楚に血食（＝祖先の霊を祀る）すべし』と。後に子渤を生む。祠山の神と爲る。神始め長興（浙江省湖州）自り、自ら聖澤を疏くる（＝水路を通す）。津を廣德に通ぜんと欲す。便ち化して猯（ブタ）と爲りて、陰兵を役使す。後に夫人、李氏の見る所と爲りて（もとの返り点は「李氏の爲に見らる」です）、工（＝水路の工事）、遂に輟む。故に猯を食うことを避く。

＊

○陳繼儒羣碎録［續郛廿一ノ十五丈］云、祠山張大帝…故避食猯＝『説郛続』弓第二十一所収の『群碎録』一巻は未見。『群碎録』は『和刻本漢籍随筆集』第二集（汲古書院・一九八六、p.318）にも収載されており、該当部分は同じく十五丁（裏）に見える。文字に大きな異同は無いが、「西会」の「西」が「酉」に作られている。「酉」には「西」の意味がある。

⑦

宋程棨三柳軒雑識［郛廿四］云、廣德祠山神曰張。避食猯。按祠山神事要云。王始自長興縣、疏聖瀆、欲通津廣德。化身爲猯。從使陰兵。後爲夫人李氏所覘。其工遂輟。食之避猯、蓋以此。『淮南子』［前漢六ノ十五丈、注、淮南子引く］載。禹治水時。自化爲熊。以通轘轅之道。塗山氏見之。慙而化爲石。右二事實相類。

＊

宋の程棨が『三柳軒の雑識』［『郛』廿四］に云く、「廣德祠山の神を張と曰う。猯を食うことを避く。『祠山神の事要』（＝『祠山事要』）を按ずるに云く、『王、長興縣自り始めて、聖瀆を疏ぐりて、津を廣德に通ぜんと欲す。身を化して猯と爲り、陰兵を從使す。後に夫人李氏の覘う所と爲る。其の工、遂に輟む。食の猯を避くるは、蓋し此れを以てなり。『淮南子』［『前漢』六の十五丈の注に『淮南子』を引く］に載す。『禹、水を治むる時、自ら化して熊と爲る。以て轘轅（河南省偃師県にある山）の道を通ず。塗山氏、之を見る。慙じて、化して石と爲る』と。右の二事、實に相類す』と。

＊

○宋程棨三柳軒雑識［郛廿四］云、廣德祠山神…右二事實相類＝『三柳軒の雑識』は『三柳軒雑識』のこと。陶宗儀纂『説郛［正］』（百二十弓本）の弓第二十四に同文が収載されている。早稲田大学所蔵の明版刊本があり、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」に画像が掲載され、閲覧が可能である。『祠山事要』十巻については⑨参照。『淮南子』は、前漢の武帝の頃、淮南王劉安（紀元前一七九年～紀元前一二二年）が学者を集めて編纂させた思想書。訳注に楠山春樹著『淮南子』上～下（明治書院〈新釈漢文大系〉54・55・62、一九七九・一九八二・一九八八）、池田知久著『訳注　淮南子』（講談社学術文庫：二〇一二）がある。引用は、無著の書き込みにもあるように、『漢書』巻六の「夏后啓母石」という語の顔師古注に引かれた『淮南子』の文章を踏まえる。注の原文は次の通り。

師古曰、「啓、夏禹子也。其母塗山氏女也。禹治鴻水、通轘轅山、化為熊、謂塗山氏曰、『欲餉、聞鼓声乃来』。禹跳石、誤中鼓。塗山氏往、見禹方作熊、慚而去、至嵩高山下化為石、方生啓。禹曰、『帰我子』。石破北方而啓生。事見『淮南子』。景帝諱啓。今此詔云啓母、蓋史追書之、非当時文」。（『漢書』巻六、中華書局校点本・p.190）

⑧清拙小清規［六十六丈］祠山大帝誕生看經榜云、山門二月初八日、恭遇當寺護法、大宋國祠山正順昭顯威德聖烈大帝、聖誕良辰。謹集合山大衆、肅詣靈祠、看誦大乘經典。聊伸慶讚之誠。仰答匡扶之德者也。粤以、戒稟歸宗、僧夏預堂前單鉢位。廟居廣德、詩仙稱天下鬼神爺。朝誦法華六萬餘言。功闢隋河、幾千百里。方仲春萸敷八葉、應昌期靈降九天。陰兵肅衞、鐵騎雲屯、在在作伽藍之主。聖烈尊嚴、玉爐香靄。堂堂現居士之身。摧邪去惡雷擊電奔。翊正扶公、波騰嶽立。爰自建長年、東臨日域、宏恢少室心宗。始知大宋國西有祠山。夙秉鷲峯口囑。禱號如鴻鐘答杵、昭然若寶鏡當臺。背忘恩義之者先誅、侵盗常住之人重罰。今此海衆、同披梵典。仰謝帡幪。未來劫數、確護禪林、益堅城塹。謹榜。　又［六十七丈］云、元號祠山正順威德聖烈大帝。洪名元朝改稱祠山正祐昌福崇仁眞君。歸宗寺裡請作土地神。本社正在江東廣德軍。埋藏靈驗天下聞。二月八日誕生辰。與大覺禪師、爲有因緣、不易言陳。畢竟無異事。要在弘法度人。祠山處名、大帝官名。

＊

清拙（清拙正澄・一二七四～一三三九）の『小清規』［六十六丈］「祠山大帝誕生看經の榜」に云く、「山門二月初八日、恭しく當寺の護法、大宋國祠山正順昭顯威德聖烈大帝、聖誕の良辰（＝よい日）に遇う。謹しんで合山の大衆を集めて、靈祠に肅詣し、大乘經典を看誦し、聊か慶讚の誠を伸ぶ。仰いで匡扶（＝ただし助ける）の徳に答うる者なり。粤に以れば、戒を歸宗に稟け、僧夏（＝受戒後の年数、夏）、堂前單鉢の位に預かる。廟、廣徳に居し、詩（ママ）仙（＝「諸仙」か？）、天下鬼神の爺と稱す。朝に『法華』六萬餘言を誦す。功、隋河を闢くこと幾千百里ぞ。仲春、萸（＝伝説上のめでたい草）、八葉を敷くに方って、應に昌期（＝興隆昌盛の時期）、靈、九天より降るべし。陰兵肅衞（＝厳かにまもる）し、鐵騎雲屯（＝人が雲のようにたくさん集まること）し、在在、伽藍の主と作る。聖烈尊嚴、玉爐香靄す。堂堂として居士の身を現す。邪を摧き惡を去って、雷［の如くに］擊ち電［の如くに］奔る。正を翊け、公を扶けて、波のごとくに騰り、嶽のごとくに立つ。爰に建長の年（一二四九～一二五六）自り、東に日域に臨み、少室の心宗を宏恢（＝広々と大きく開くこと）す。始めて知る、大宋國の西に祠山有りと。夙に鷲峯の口囑を秉る。禱號、鴻鐘（＝大きなつりがね）の杵に答うるが如く、昭然として寶鏡の臺に當たるが若し。恩義を背忘するの者をば先ず誅（殺す）し、常住を侵盗するの人をば重く罰す。今、此の海衆、同じく梵典を披き、仰いで帡幪（＝庇護）を謝す。未來劫（未来永劫）數、確く禪林を護り、益ます城塹を堅くせんことを。謹しんで榜す」と。　又た［六十七丈］云く、「元と祠山正順威德聖烈大帝と號す。洪名、元朝に改めて、祠山正祐昌福崇仁眞君と稱す。歸宗寺裡、請じて土地神と作す。本社、正に江東の廣德軍に在り。埋藏の靈驗、天下に聞こゆ。二月八日は誕生の辰なり。大覺禪師と因緣有りと爲すも、言陳し易からず。畢竟、異事無し。要は弘法度人に在り。祠山は處の名、大帝は官の名なり」と。

＊

○清拙小清規［六十六丈］祠山大帝誕生看經榜云……祠山處名、大帝官名＝一般的に、清拙の『小清規』と言えば、『大鑑禪師小清規』（T 81）のことであるが、該当文は所謂『大鑑清規』（『大鑑広清規』）からの引用である。聽松院蔵本の『大鑑広清規』（尾崎正善「翻刻・聽松院蔵『大鑑清規』」『鶴見大学仏教文化研究所紀要』五、二〇〇〇年）では四十一丁裏から四十二丁裏にあたり同文が見られる。若干の文字の異同が見られ、一行目「榜」は「牓」、三行目「詩仙」は「諸仙」、四行目「仲春」は「中春」、五行目「鉄騎」は「鉄騎馬」、十行目「崇」は「宗」、十二行目「度人」は「度入」、とあ

る。

⑨ 忠曰、祠山事要十卷。詳記神事跡、顯應、封爵等、無遺矣。然不載歸宗寺縁。其行状［三卷十八丈］中、唯有天寧寺事。而今清拙明言。可爲據。按一統志［五十二ノ八丈］歸宗天寧同在南康府。

＊

忠曰く、『『祠山事要』十卷あり。詳しく神の事跡、顯應（＝あきらかに応ずる）、封爵（＝土地に封じ官を授ける）等を記し、遺すこと無し。然るに歸宗寺の縁を載せず。其の『行状』［三卷十八丈］の中に、唯だ天寧寺の事有るのみ。而今、清拙明らかに言う。據と爲す可し。『一統志』［五十二の八丈］を按ずるに、歸宗、天寧、同じく南康府（＝江西省）に在り」と。

＊

○忠曰、祠山事要十卷……按一統志歸宗天寧同在南康府＝『祠山事要』十卷については未見。『明一統志』卷五二「南康府」の「寺觀」の冒頭に「天寧寺」と「帰宗寺」が掲載されている（四庫全書本・10a）。

⑩ 江西名勝志［四ノ九丈］南康府星子縣云、廬山歸宗寺、在城西二十五里。

＊

『江西名勝志』［四の九丈］「南康府星子縣」に云く、「廬山の歸宗寺、城西二十五里在り」と。

＊

○江西名勝志＝正式名称は、『大明一統名勝志江西名勝志』。曹学佺撰。二百八卷。崇禎三年（一六三〇）刊本が京都大学人文科学研究所等に存するが、未見。

⑪ 張大帝生辰、祠山事要・廣搜神記、爲二月十一日。南京名勝志・翰墨大全［癸集十一ノ一丈］、清拙清規作二月八日。

＊

張大帝の生辰（＝生まれた日）は、『祠山事要』・『廣搜神記』に「二月十一日」と爲す。『南京名勝志』・『翰墨大全』［癸集十一の一丈］・『清拙清規』に、「二月八日」に作る。

＊

○張大帝生辰、……清拙清規作二月八日＝『南京名勝志』は未見。『翰墨大全』は、正式には『聖宋千家名賢表啓翰墨大全』と言い、明の王宇の撰で、尺牘書簡を学ぶために作成されたものである。天理図書館善本叢書『聖宋千家名賢表啓翰墨大全〈翰林珠玉〉』（天理大学出版部・一九八一）に収載されているが、未見。

⑫ 忠曰、禪林疏文、所謂祠山正順昭顯崇仁威德聖烈大帝、〈止此〉。皆見于歷代封號。據『祠山事要』正順者、宋紹興五年、加封正順忠祐靈濟昭烈王、昭顯者、宋開禧三年、改封正祐昭顯威德聖烈王、崇仁者、宋德祐［南宋ノ孝恭帝年号］元年、加封正祐聖烈昭德昌福崇仁輔順眞君。

＊

忠曰く、「禪林の疏文に所謂『祠山正順昭顯崇仁威德聖烈大帝』〈此こに止まる。〉は、皆な歷代の封號（＝封ぜられた称号）に見えたり。『祠山事要』に據るに、『正順』は、宋の紹興

五年（一一三五）に、『正順忠祐靈濟昭烈王』と加封（＝位や領地を封ずること）せられ、『昭顯』は、宋の開禧三年（一二〇七）に、『正祐昭顯威德聖烈王』に改封（＝諸侯の領地を移しかえること）せられ、崇仁は、宋の德祐［南宋の孝恭帝年号］元年（一二七五）に、『正祐聖烈昭德昌福崇仁輔順眞君』と加封せらる」と。

⑬元史泰定本紀［廿九ノ九丈左］云、泰定元年、加封廣德路。祠山神張眞君。曰普濟。

＊

『元史』の「泰定の本紀」［廿九の九丈左］に云く、「泰定元年（一三二四）、廣德路の祠山の神、張眞君に加封して、『普濟』と曰う」と。

＊

○元史泰定本紀……曰普濟＝『元史』巻二九「泰定本紀」の元年二月癸未条（中華書局校点本・p.644）に同文が見える。紀伝体の歴史書で帝王の事跡をしるした部分を言う。

⑭南京名勝志［八巻四丈］廣德州云、廣惠王祠在横山。亦呼爲祠山。　又云、國朝慎蒙廣德紀游云、從呉興西行九十里、至長興之銀坵。舟行過四安、又陸行五十里、至廣德。出西門三里、有廣惠殿牓。殿高計九丈。以沈香雕神像。甚奇怪。面色似經煙火。虬髯如鐵。祝史、謂是海馬驖。乃水神也。有像袴。乃元天曆二年、製布爲之。至今不朽。我太祖龍興時、嘗來登謁。有詩云、天下英靈第一山。白雲爲闕石爲關、高臺近斗當空出。老樹如龍挾雨還。兵革累經香火舊。鬼神常護道人閒。從軍幸得來瞻此。麾指干戈動笑顔。　又云、廟記云、祠山神以二月八日誕。七日必風。九日必雨。相傳、誕神延其小姨飲。必風雨者、欲以露其足爲樂。雖涉虚妄、然風雨不爽。

＊

『南京名勝志』［八巻四丈］「廣德州」に云く、「廣惠王の祠、横山に在り。亦た呼びて祠山と爲す」と。　又た云く、「國朝の慎蒙が『廣德紀游』に云く、『呉興（＝浙江省湖州市）より西に行くこと九十里、長興（＝浙江省湖州市）の銀坵に至る。舟行して四安を過ぎ、又た陸行すること五十里、廣德に至る。西門を出でて三里、廣惠殿の牓有り。殿の高さ、計るに九丈。沈香を以て神像を雕む。甚だ奇怪なり。面色（＝顔色）、煙火を經るに似たり。虬髯（＝縮れ曲がったほおひげ）、鐵の如し。祝史（＝神官・神職と記録役）謂く、『是れ海馬の驖（＝たてがみ）なり。乃ち水神なり。像に袴（＝はかま、ももひき）有り。乃ち元の天曆二（一三二九）年、布を製して之を爲る。今に至るまで朽ちず。我が太祖、龍興の時、嘗て來たって登謁す。詩有りて云く、「天下の英靈、第一の山。白雲を闕と爲し、石を關と爲す。高臺、斗に近くして、空に當たりて出づ。老樹、龍の雨を挾んで還るが如し。兵革（＝戦争）、累りに經れども、香火（＝仏前などでたく焼香の火）舊たり。鬼神、常に護して、道人、閒なり。軍に從って、幸いに此ここに來瞻することを得たり。干戈（＝戦い）を麾指（＝指揮）して笑顔を動ず」と』と」と。　又た云く、『廟記』に云く、『祠山神、二月八日を以て誕す。七日には必ず風ふく。九日には必ず雨ふる。相傳う、誕神、其の小姨（＝妹、義妹）を延いて飲す。必ず風雨する者は、其の足を露すを以て、樂と爲さんと欲す。虚妄に渉ると雖も、然も風雨、爽わず』と」と。

＊

○南京名勝志［八巻四丈］廣德州云…欲以露其足爲樂雖涉虚妄然風雨不爽＝『南京名勝志』は、未見。

該書に引用されている『廣徳紀游』及び『廟記』も未見。

⑮湖海新聞［東漸清規一ノ八丈亦引］後集［七卷　靈像］云、廣德軍祠山張大帝、初發靈時、嘗化爲豬以治水。故郡人多不食豬。自爲諱物郡人事之甚謹。戒不食豬肉。唐士羅隱、名彰天下、所至之處鬼神、無不爲之譏諷。嘗過其廟、題詩於壁曰、踏遍天涯路、平生不信邪。方欲題後二句、俄手如人拽起状。聞人語曰、若後二句不佳、能折爾手。羅悚懼曰、如不佳、甘照神語。手遂如故。續題曰、祠山張大帝、天下鬼神爺。宋景定年間、太平州城北四里外、有行宮、極靈。富家巨室、重新廟宇、計用筒瓦數萬口。臨時起窰三五所燒造。其土瓦盡皆變成青色琉璃。結蓋將畢工、尚少三百口。續行燒造。匠者復以數萬入竈。意其皆變琉璃、庶可轉鬻、以圖小利。及出窰、則三百口爲琉璃、餘者皆土瓦也。

＊

『湖海新聞』［『東漸清規』一の八丈にも亦た引く］後集［七卷　靈像］に云く、「廣德軍、祠山張大帝、初めて靈を發する時、嘗て化して豬と爲りて以て水を治む。故に郡人多く豬を食せず、自ら諱物（＝忌むもの）と爲す。郡人、之に事うること甚だ謹み、戒めて豬肉を食わず。唐の士、羅隱（＝唐の文学者）、名、天下に彰われ、至る所の處の鬼神、之に譏諷（＝辛辣な話で相手の誤り、欠点を非難するか嘲笑すること）せ爲れずということ無し。嘗て其の廟に過ぎり、詩を壁に題して曰く、『天涯の路を踏遍（＝踏み破る）して、平生、邪を信ぜず』と。方に後の二句を題せんと欲するに、俄に手、人の拽起（＝引っ張る）する状の如し。人語を聞くに曰く、『若し後の二句、佳ならずんば、能く爾が手を折らん』と。羅、悚懼（＝恐れおののく）して曰く、『如し佳ならずんば、甘んじて神の語を照らさん』と。手、遂に故の如し。續いて題して曰く、『祠山張大帝、天下鬼神の爺』と。宋の景定の年間（一二六〇～一二六四）に、太平州の城北四里の外に、行宮（＝古代の京城の外で帝王に旅に出るように時居住する宮殿）有り、極めて靈（＝すぐれたもの）なり。富家、巨室、重ねて廟宇を新たにせんとす。計るに、筒瓦數萬口を用う。時に臨み、窰（＝燒物の窯）三五所を起こし、燒造す。其の土瓦、盡く皆な變じて、青色の琉璃と成る。蓋を結して將に工を畢わらんとするに、尚、三百口を少く。續いて燒造を行う。匠者、復た數萬を以て、竈に入る。意ろ、『其れ皆な琉璃に變ぜん。庶わくば、轉鬻（＝職を求めてうろつくこと）して、以て小利を圖らん』と。窰を出すに及んで、則ち三百口は琉璃と爲るも、餘は皆な土瓦なり」と。

＊

○湖海新聞［東漸清規一ノ八丈亦引］後集［七卷　靈像］云…是夕四鼓。遂成焦土＝無名氏撰『湖海新聞夷堅続志』後集巻二「神明門」の「祠山神顕」条（中華書局・古体小説叢刊本・二〇〇六、p.215）に、そのままの文章が見える。但し、同本は前集二巻・後集二巻の計四巻本である。『東漸清規』は、東漸健易（一三四四～一四二三）の『叢林拾遺略清規』のこと。無著道忠による写本一冊が東海庵に所蔵されており（『禅籍目録』p.279）、また建仁寺両足院に三巻二冊本があり、その他、京都大学文学部図書館にも現存する。尾崎正善「京都大学文学部図書館蔵『叢林拾遺』（東漸和尚畧清規）について」（鶴見大学佛教文化研究所紀要（6）・二〇〇一）に詳しい。

⑯周密［必ノ十五ノ八巻］〈字公謹〉齋東野語［十三ノ十五丈］云、余世祀祠山張王。動止必禱。應如著龜。姑志奇驗數事於此、以彰神休。先子需澄、江次爲有力者攘去。再以毘陵等三疊干祀第、餘月不報。先妣時留雪、禱於南關之祠。有水邊消息的非遙之語。及收杭信、則

聞霍山所祈、亦得此籤。越日臨汀之命下矣。戊辰年、鑄子甫五歲、病骨蒸、勢殆甚。凡藥皆弗效。禱籤得蠱之上九。云、蠱有三頭。紛紛擾擾。如蠱在皿。執一則了。退謀之醫、試投逐蠱之劑。凡去蚘蛔二。其色如丹。即日良愈。甲寅春、往桐川、炷香得籤。云、不堪疾病及東牀。〈云云〉。是歲外舅捐館。壬午五月二十八日、杭城金波橋馮氏火作。次日勢益張。雖相去幾十里、而人情惶惶、不自安。時楊大芳・藩夢得、皆同居。相慰勞曰、巫言神語皆吉。毋庸輕動。余不能決。因卜去就於神、得五十六。云、遭人彈劾失官資。火欲相焚盜欲窺。於是挈家湖濱。是夕四鼓、遂成焦土。

＊

周密（＝南宋末の政治家・一二三二～一二九八）［必の十五の八巻］〈字は公謹〉が『齋東野語』［十三の十五丈］に云く、「余、世世、祠山張王を祀る。動止に必ず禱る。應に著龜（＝筮竹占いと亀の甲を焼いてそこにできる割れ目で判ずる占い）の如し。姑く奇驗（＝不思議なしるし）數事（＝異なる数種の事項）を此こに志し、以て神休（＝神明の瑞祥）を彰す。先子、需澄、江次（＝河の辺）に有力の者の爲に攘去せらる。再び毘陵（＝現在の江蘇省常州市）等、三疊干祀第を以てするも、餘月、報あらず。先妣（＝死んだ母）、時に霅（＝地名）に留まり、南關の祠に禱る。『水邊の消息、的らかに遙かに非ず』の語有り。杭の信を收むるに及び、則ち聞く、霍山に祈る所も、亦た此の籤を得たりと。日を越して、臨汀の命下る。戊辰の年、鑄子、甫めて五歲、骨蒸（＝虚労内熱の症状）を病む。勢、殆ど甚だし。凡そ藥、皆な效しあらず。禱籤して蠱（＝まじない）の上九を得たり。云く、『蠱に三頭有り。紛紛擾擾たり。蠱の皿に在るが如し。一を執れば則ち了す』と。退いて之を醫に謀る。試みに蠱を逐うの劑を投ず。凡そ蚘蛔（＝回虫）を去ること二つ。其の色、丹の如し。即日に良や愈ゆ。甲寅の春、桐川に往す。香を炷き、籤を得たり。云く、『疾病に堪えず、東牀（＝娘の婿）に及ぶ。〈云云〉』と。是の歲、外舅（＝妻の父）、捐館（＝高貴な人の死去）す。壬午五月二十八日、杭城、金波橋の馮氏、火を作す。次の日、勢い益ます張る。相去ること幾十里と雖も、而も人情、惶惶（＝びくびく落ち着かない様子）として、自ら安ぜず。時に楊大芳・藩夢得、皆な同居す。相、慰勞して曰く、『巫言、神語、皆な吉なり。輕がるしく動くことを庸いること毋れ』と。余、決すること能わず。因って去就を神に卜し、五十六を得たり。云く、『人に彈劾するに遭い、官資（＝官吏となる資格）を失す。火、相焚かんと欲し、盜、窺わんと欲す』と。是こに於いて、家を湖濱（＝湖水のほとり）に挈す。是の夕の四鼓、遂に焦土と成る」と。

＊

○周密［必十五ノ八巻］〈字公謹〉齋東野語［十三ノ十五丈］云…遂成焦土＝［必ノ十五ノ八巻］は未詳。『齋東野語』二十巻の巻一三「祠山応語」条（四庫全書本・13b~14b）に同文が見える。Ⓟ文中の「上九」は、『易経』の「爻辞」の一つ。「五十六」は、『易経』の六十四卦の第五十六番目の卦である「旅」であろう。その「卦辞」に、「旅は、小しく亨る。旅にては貞しければ吉なり」とある。

⑰勸善書［十五ノ廿九丈］云、宋台郡都監趙訓武、…

⑱張大帝感應、悉於事要。…

⑲應菴華禪師歸宗録［五丈］、有靈濟王生日上堂。

⑳竺仙仙禪師建長録、土地堂語云、祠山張大帝…

21天境和尚無規矩［二卷四十一丈］大帝讚云、於昭祠山、誰不仰止。…

22瑞溪夢語集［十一丈］云、予萬年先廬佛龕右畫達磨像、…

23忠曰、育王起塔時、大帝…
24貴耳集［上ノ三十七丈］云、高九萬、越人。號菊磵。…

（西川秀敏）

【二六〇】關帝

①蜀關羽也。又稱關大王、或關壯繆。河東解梁人也。

＊

蜀（＝蜀漢〔二二一～二六三〕。三国時代、劉備が漢を再興するとして建てた王朝。都は成都。二代四十三年で魏に滅ぼされた。）の關羽（一六〇？～二一九。三国蜀の武将。張飛とともに劉備を助け、蜀の勢力拡大に努めたが呉の孫権に殺された。死後、道教で神格化され、軍神、財神として各地の関帝廟に祭られている）なり。又た關大王、或いは關壯繆（＝関羽の追諡）と稱す。河東解梁（＝河東郡解県）の人なり。

＊

○或關壯繆＝道忠は「繆」の字に「ボク」という読み仮名を付けている。「穆」の字と混同したものであろう。関羽の諡は、一般に「壯繆侯」または「壯穆侯」とされている。『大漢和辞典』の「壯穆」条には、「三国蜀、関羽の追諡」（巻三・p.288）とあり、『三国志』には、「壯繆」とある『三国志』巻三六・中華書局校点本・p.942）。

②續文獻通考［百三十八ノ十三丈］云、盪寇將軍、都督荊州事、漢壽亭侯。關羽字雲長。後主時、追諡壯繆。

＊

『續文獻通考』［百三十八の十三丈］に云く、「盪寇將軍、都督荊州事（＝荊州方面の軍事部門を統括する官職のことか。都督諸州軍事とは、兵を領する者の意）、漢の壽亭侯（＝関羽の封号）。關羽、字は雲長。後主（＝劉禪〔二〇七～二七一〕劉備の子）の時に壯繆と追諡す」と。

＊

○續文獻通考［百三十八ノ十三丈］云…追諡壯繆＝『続文献通考』巻一三八・一三丁に、「盪寇将軍、都督荊州事、漢寿亭侯。関羽、字雲長。河東解梁人。後主時、追諡壯繆」とある。（明・万暦刊本影印、第一四冊・文海出版社・一九七九、p.8417）

③三國志［三十六ノ一丈］蜀書關羽傳云、關羽、字雲長。本字長生。河東解人也。亡命奔涿郡。先主於鄉里合徒衆、而羽與張飛爲之禦侮。先主與二人寢則同牀、恩若兄弟。建安五年、曹公東征、先主奔袁紹。曹公禽羽以歸、拜爲偏將軍、禮之甚厚。紹遣大將軍顏良、攻東郡太守劉延於白馬、曹公使張遼及羽爲先鋒擊之。羽望見良麾蓋、策馬刺良於萬衆之中、斬其首還。紹諸將莫能當者、遂解白馬圍。曹公即表封羽爲漢壽亭侯。初曹公壯羽爲人、而察其心神無久留之意、謂張遼曰、卿試以情問之。既而遼問羽。羽歎曰、吾極知曹公待我厚。然吾受劉將軍厚恩。誓以共死。不可背之。吾終不留。吾要當立效以報曹公乃去。遼以羽言報曹公、曹公義之。及羽殺顏良、曹公知其必去。重加賞賜。羽盡封其所賜、拜書告辭。而奔先主於袁軍。左右欲追之。曹公曰彼各爲其主。勿追也。云云。二十四年、先主爲漢中王。拜羽爲前將軍、假節鉞。是歲、羽率衆攻曹仁於樊。曹公遣于禁助仁。秋、大霖雨、漢水汎溢、禁所督七軍皆沒。禁降羽。羽又斬將軍龐悳、梁郟等。云云。曹公議徙許都以避其鋭。司馬宣王、蔣濟以爲、關羽得志、孫權必不願也。可遣人勸權躡其後。

許割江南以封權、則樊圍自解。曹公從之。先是、權遣使爲子索羽女。羽罵辱其使、不許婚。權大怒。又南郡太守麋芳在江陵。將軍傅士仁屯公安。素皆嫌羽自輕己。羽之出軍、芳仁供給軍資、不悉相救。羽言還當治之。芳仁咸懷懼不安。於是權陰誘芳仁。芳、仁使人迎權。而曹公遣徐晃救曹仁。羽不能克。引軍退還。權已據江陵、盡虜羽士衆妻子。羽軍遂散。權遣將逆擊羽、斬羽及子平于臨沮。追謚羽曰壯繆侯。子興嗣。興字安國、少有令問。丞相諸葛亮深器異之。

＊

『三國志』〔三十六ノ一丈〕の「蜀書」の「關羽傳」に云く、「關羽、字は雲長。本の字は長生。河東の解の人なり。亡命して涿郡（河北省東涿県）に奔る。先主（＝劉備）、郷里に於いて徒衆を合す。而して〔関〕羽と張飛（？～二二一）と之れが爲に侮りを禦ぐ。先主と二人と、寢ぬるときは則ち牀を同じくし、恩は兄弟の若し。建安五（二〇〇）年、曹公（曹操・一五五～二二〇）、東征（＝東方征伐）し、先主、袁紹（？～二〇二）に奔る。曹公、〔関〕羽を禽にして以て歸り、拜して偏將軍（＝軍の副將。又は、軍を構成する一部隊の將軍）と爲し、之れを禮すること甚だ厚し。〔袁〕紹、大將軍顔良（生卒年不祥）を遣わして、東郡太守劉延（生卒年不祥）を白馬（河南省滑県東）に攻め、曹公、張遼（一六九～二二二）及び〔関〕羽をして先鋒と爲さしめて之を擊つ。〔関〕羽、〔顔〕良の麾蓋（＝大將の使う、さしず旗と絹がさ）を望見して、馬に策うち、〔顔〕良を萬衆の中に刺し、其の首を斬って還る。〔袁〕紹が諸將、能く當たる者莫し。遂に白馬の圍いを解く。曹公即ち〔関〕羽を表封（＝奏上して爵位を授ける）して、漢の壽亭侯と爲す。初め曹公、〔関〕羽の人と爲りを壯なりとして、其の心神に、久しく留まるの意無きことを察して、張遼に謂いて曰く、『卿、試みに情を以て之を問え』と。既にして〔張〕遼以て〔関〕羽に問う。〔関〕羽歎じて曰く、『吾れ極めて曹公の我を待つこと厚きことを知る。然れども、吾れ、劉將軍の厚恩を受く。誓うに死を共にせんことを以てす。之に背く可からず。吾れ終に留まらじ。吾れ要ず當に效を立てて以て曹公に報いて乃ち去るべし』と。〔張〕遼、〔関〕羽が言を以て曹公に報じ、曹公、之を義とす。〔関〕羽、顔良を殺すに及び、曹公、其の必らず去らんことを知る。重く賞賜を加う。〔関〕羽、盡く其の賜う所を封じて、拜書して辭を告ぐ。而して先主に袁〔紹〕軍に奔る。左右之れを追わんと欲す。曹公曰く、『彼各おの其の主の爲にす。追うこと勿かれ』と。云云。二十四年、先主、漢中の王（＝漢中郡の統括者。漢王。現在の陝西省漢中市）と爲る。〔関〕羽を拜して前將軍（＝前軍の將軍）と爲し、節鉞（＝独断の権を示す杖とまさかり）を假す。是の歳、〔関〕羽、衆を率いて曹仁（一六八～二二三）を樊（樊城〔湖北省襄陽県北〕）に攻む。曹公、于禁（＝?~221）を遣わし、〔曹〕仁を助く。秋、大いに霖雨（＝長雨）し、漢水（揚子江の支流。漢江）汎溢（＝氾濫）して、〔于〕禁が督する所の七軍、皆な沒す。〔于〕禁、〔関〕羽に降す。〔関〕羽又た將軍龐悳（＝?~219）、梁郟（生卒年不祥）等を斬る。云云。曹公、議して許（河南省許昌県）の都に徙り、以て其の鋭（＝旺んな勢い）を避く。司馬宣王（司馬懿・一七九～二五一）、蔣濟（？～二四九）以爲えらく、『關羽の志を得んことは、孫權（一八二～二五二）必ず願わじ。人を遣わし〔孫〕權を勸めて其の後を躡わしむべし。江南を割きて以て〔孫〕權を封ずるを許せば、則ち樊の圍み自ら解けん』と。曹公、之に從う。是れより先、〔孫〕權、使を遣わし、子の爲に〔関〕羽が女を索む。〔関〕羽、其の使を罵辱して、婚を許さず。〔孫〕權大いに怒る。又た、南郡の太守の麋芳（生卒年不祥）、江陵（湖北省南部）に在り。將軍傅士仁（生卒年不祥）、公安

に屯す。素より皆な、〔関〕羽が自ら己を輕んずることを嫌う。〔関〕羽が軍を出すや、〔糜〕芳・〔傅士〕仁、軍資を供給するも、悉らかに相い救わず。〔関〕羽言く、『還らば當に之を治むべし』と。〔糜〕芳と〔傅士〕仁と、咸な懼れを懐きて安んぜず。是こに於いて〔孫〕權、陰かに〔糜〕芳・〔傅士〕仁を誘う。〔糜〕芳・〔傅士〕仁、人をして〔孫〕權を迎えしむ。而して曹公、徐晃（？～二二七）を遣わして曹仁（一六八～二二三）を救わしむ。〔関〕羽、克つこと能わず。軍を引いて退き還る。〔孫〕權、已に江陵に據る。盡く〔関〕羽が士衆・妻子を虜にす。〔関〕羽が軍、遂に散ず。〔孫〕權、將を遣わして〔関〕羽を逆撃し、〔関〕羽及び子の〔関〕平を臨沮（湖北省南漳県）に斬る。〔関〕羽に追謚して壯繆侯と曰う。子の〔関〕興嗣ぐ。興、字は安國。少くして令問（＝良い評判）有り。丞相の諸葛亮（一八一～二三四）深く之を器異す」と。

＊

○三國志蜀書關羽傳云、關羽、字雲長。…丞相諸葛亮深器異之＝『三国志』巻三六・蜀書六・関羽馬黄趙第六（中華書局校点本・p.939~942）からの節略である。

④釋門正統〔三巻四十二丈〕云、無盡居士張天覺〈商英〉、鉅儒碩學。筆大如椽。嘗記玉泉寺關王祠堂云、過去陳隋間、有大法師。名曰智顗。一時圓證諸佛法門、得大總持、辨説無礙。敷演三品摩訶止觀。是三非一、是一非三。即一是三、即三是一。是三是一、非一非三。隨衆生根、而設初後。至自天台、止玉泉、冥坐林間、身心湛寂。此山先有大力鬼神。與其眷屬、怙恃憑據。以通力故、知師行業。即現種種諸可怖畏。虎豹號擲、蛇蟒盤瞪、鬼魅嘻嘯、陰兵悍怒、血脣劍齒、毛髮鬚鬙。妖形醜質、欻忽千變。法師愍言、汝何爲者。生死於幻。貪著餘福、不自悲悔。作是語已。迹言悄絶。頎然丈夫、鼓髯而出。我乃關羽。生於漢末。値時紛亂、九州爪裂。曹操不仁、孫權自保。義臣蜀主、同復帝室。精誠激發、洞貫金石。死有餘烈。故王此山。所嗜惟殺、所食惟腥。諦觀法師、具足殊勝、我從昔來、本未聞見。我今神力、變見已盡、而師安定、曾不省視。汪洋如海。非我能測。大悲我師、哀憫我愚、方便攝受。願捨此山、作師道場。我有愛子。雄鷙類我。相與發心、擁護佛法。師問所能。授以五戒。神復白言。營造期至。幸少避之。其夕晦冥、震逕掣電、靈鞭鬼箠、萬壑浩汗、湫潭千丈、化爲平地。黎明往視、精藍煥麗、簷楹欄楯、巧奪人目。海内四絶、遂居其一。〈智者造寺、三十六所。櫻霞、靈巖、天台、玉泉、天下四絶。〉以是因縁、神亦廟食。千里内外、同共雲委。稽違有咎、怠慢有罰。捐施金幣、匍匐恐後。玉泉以甲、實神之助。歳越十稔、魔民出世、寺綱頽亂、槌拂虚設。神既不祐、廟亦浸弊。元豐甲申、襄有蜀僧。名曰承皓。行年七十、所作已辨。以大衆請、翛然赴感。有陳氏子。忽作神語。自今已往、祀我如初。遠近播聞、瞻祷逾肅。明年辛酉、廟宇鼎新。爾時無盡居士、聞説是事、廼其贊之。〔云云〕

＊

『釋門正統』〔三巻四十二丈〕に云く、「無盡居士、張天覺〈商英〉（張商英・一〇四三～一一二一）、鉅儒（＝優れた学者）碩學なり。筆大にして椽の如し。嘗て玉泉寺（湖北省荊州府）の關王の祠堂に記して云く、『過去、陳（五五七～五八九）・隋（五八一～六一八）の間、大法師有り。名づけて智顗（智者大師・五三八～五九七）と曰う。一時、圓かに諸佛の法門を證し、大總持を得、辨説は無礙なり。三品（三種類）の『摩訶止觀』（T 46 収載）を敷演す。是れ三にして一に非ず、是れ一にして三に非ず。一に即して是れ三、三に即して是れ一。是れ三にして是れ

一、一に非ず三に非ず。衆生の根に隨いて、初後（＝修行の段階）を設く。天台（浙江省天台県天台山）自り至りて、玉泉（湖北省当陽県玉泉山）に止まり、林間に冥坐し、身心湛寂なり。此の山に先に大力の鬼神有り。其の眷屬（一族）と怙恃憑據（頼り・占拠）す。通力を以ての故に、師（＝智顗）の行業（立派な行い）を知る。即ち種種の諸もろの怖畏すべきを現す。虎豹（虎や豹）は號擲（叫び躍り上がる）し、蛇蟒（蛇や大蛇）は盤瞪（とぐろを巻いてにらむ）し、鬼魅（死霊や生霊）は、嘻嘯（気高い声でせせら笑い）し、陰兵（地獄の兵士）は悍怒（荒々しく怒り）し、血脣（血の付いた唇）・劍齒（剣のような歯）にして、毛髮は鬚鬙（乱れ）、妖形（怪しい形）・醜質（醜い質）にして、欻忽（たちまち）千變す。法師愍れみて言く、「汝、何爲る者ぞ。生死は幻に於いてす。餘福に貪著して、自ら悲悔（悲しみ悔やむ）せず」と。是の語を作し已わって、迹言（姿や声）悄絶す。頎然たる丈夫、髯を鼓いて出づ。「我は乃ち關羽なり。漢の末に生まる。時の紛亂に値い、九州は爪裂す。曹操（一五五～二二〇）は不仁（＝残忍）にして、孫權（一八二～二五二）は自ら保つ（＝保身）。義、蜀主（劉備・一六一～二二三）に臣として、同じく帝室を復す。精誠（＝純粋な真心）激發して、金石（＝硬い金属や石）を洞貫（つらぬく）す。死して餘烈（功績）有り。故に此の山に王たり。嗜む所は惟だ殺すのみ。食らう所は惟だ腥（なまぐさ）のみ。法師を諦觀（よく見る）するに具足（身のそなえ）殊勝（立派）なり。我れ昔より來（このか）た、本より未だ聞見せず。我、今ま神力、變見（現）すること已に盡くるも、師、安定し、曾て省視（振り返る）せず。汪洋（＝恩情が深いさま）として海の如し。我れ能く測るにあらず。大なる我が師、我が愚を哀憫（憐れむ）し、方便もて攝受（受け容れる）せよ。願わくは此の山を捨て、師の道場と作さん。我に愛子有り。雄鷙、我に類す。相與（とも）に心を發（おこ）し、佛法を擁護せん」と。師、能くする所を問い、授くるに五戒（不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒）を以てす。神（関羽）復た白して言く、「營造（建築）の期至れり。幸わくは少く之を避けよ」と。其の夕、晦冥（暗い）にして、逕（みち）を震い電を掣し、靈は鞭うち、鬼も箠（むちう）ち、萬壑（＝たくさんの溝）は浩汗（＝水の豊かなさま）にして、湫潭（＝深く水をたたえた池）は千丈なるも、化して平地と爲る。黎明（明け方）に往きて視るに、精藍（寺院）煥麗（立派）にして、簷楹（のきの柱）・欄楯（垣根）、巧（精巧さ）、人の目を奪う。海内（天下）の四絶（＝四つの大寺院）、遂に其の一に居す。

（智者、寺を造ること、三十六所。櫻（＝棲）霞・靈巖・天台・玉泉、天下の四絶なり。）是の因縁を以て、神（＝関羽）も亦た廟食（＝寺院内の宗廟に神として祭られて供物を受けること）す。千里内外に同じく共に雲のごとくに委（まか）す。稽違（遅延）すれば、咎有り、怠慢には罰有り。金幣を捐施（出資）し、匍匐（尽力）して後（おく）ることを恐る。玉泉以て甲たるば、實に神（＝関羽）の助なり。歳、十稔（年）を越えて、魔民（悪い民）、世に出で、寺綱は頽亂（たいらん）し、槌（槌砧）・拂（払子）は虚しく設く。神（＝関羽）既に祐せず。廟も亦た浸（ようや）く弊す。元豐（ママ）甲申（元豊三年・一〇八〇。庚申の誤り）、襄（湖北省襄陽県）に蜀僧有り。名づけて承皓（じょうこう）・『五燈会元』巻一五・X80-327b）と曰う。行年七十、所作（なすべきこと）已に辨ず。大衆の請するを以て、翛（しょう）然として感に赴く。陳氏の子（＝智顗・『五燈会元』巻二・X80-67c 参照）有り、忽（たちま）ちに神（関羽）の語を作す、「今より已（以後）往、我を祀ること初めての如くにせよ」と。遠近、播聞（伝聞）し、瞻禱（厚く祈る）逾（いよ）いよ肅（つつし）む。明年辛酉（元豊四年・一〇八一）、廟宇、鼎新す』と。爾（そ）の時、無盡居士、是の事を説くことを聞きて、廼（すなわ）ち其れ之を贊す［云云］」と。

＊

○釋門正統云、無盡居士張天覺…廼其贊之。［云云］＝『釈門正統』巻三「護法志」（X75-300a~b）に同文が見える。本文中、割り注部分の「櫻霞」について、欄外に「櫻疑棲之訛（『櫻』は疑うらくは『棲』の訛ならん）」と注記がある（活字本『象器箋』にも「櫻字、棲之誤乎」（p.156）と注記されている）。張無尽撰の「玉泉寺関王祠堂記」は、『釈門正統』のこの引用以外には見られないようである。

⑤佛祖統紀［六ノ十九丈］智者傳云、一日天地晦冥、風雨號怒、妖怪殊形、倏忽千變。有巨蟒。長十餘丈。張口内向、陰魔列陳、砲矢雨。經一七日、了無懼色。師閔之曰、汝所爲者、生死衆業。貧著餘福、不自悲悔。言訖衆妖俱滅。其夕雲開月明。見二人。威儀如王。長者美髯而豐厚。少者冠帽而秀發。前致敬曰、予即關羽。漢末紛亂、九州瓜裂。曹操不仁、孫權自保。予義臣蜀漢。期復帝室、時事相違、有志不遂。死有餘烈。故王此山。大徳聖師。何枉神足。師曰、欲於此地、建立道場、以報生身之徳耳。神曰、願哀閔我愚、特垂攝受。此去一舍、山如覆船。其土深厚。弟子當與子平（蜀先主、拜羽前將軍率衆攻曹仁不克。孫權已據江陵。羽因遁走。呉馬忠獲羽及其子平、於章郷斬之。唐書羽生侍中興。其裔孫播相徳宗。）建寺化供、護持佛法。願師安禪七日、以須其成。師既出定見、湫潭千丈、化爲平阯。棟宇煥麗。巧奪人目。神運鬼工、其速若是。師領衆入居晝夜演法。一日神白師曰、弟子今日獲聞世間法。願洗心易念、求受戒品、爲菩提之本。師即秉鑪、授以五戒。於是神之威徳、昭布千里。遠近瞻祷、莫不肅敬。

＊

『佛祖統紀』［六の十九丈］「智者の傳」に云く、「一日、天地晦冥（真っ暗）して、風雨號怒し、妖怪の殊形、倏忽（たちまち）として千變す。巨蟒（＝大蛇）有り。長十餘丈。口を張って内に向かい、陰魔（おんま）列陳す。砲矢（砲弾や矢）雨の如きも、一七日を経て、了（つい）に懼（おそ）るる色無し。師（智顗）之を閔（あわ）れみて曰く、『汝の爲す所は、生死の衆業なり。餘福を貧著して、自（みずか）ら悲悔せず』と。言い訖（お）われば、衆妖俱に滅す。其の夕（ゆうべ）、雲開け月明らかなり。二人を見るに、威儀、王の如し。長ぜる者は、美髯にして豐厚なり。少なる者は、冠帽にして秀發（利発）なり。前（すす）んで敬を致して曰く、『予、即ち關羽なり。漢の末、紛亂し、九州瓜のごとくに裂く。曹操は不仁にして、孫權は自保す。予は蜀漢に義臣として、帝室を腹せんと期するも、時事相違し、志有りて遂げず。死して餘烈有り。故に此の山に王たり。大徳聖師（智顗）、何ぞ神足（おみ足）を枉（ま）ぐる』と。師（智顗）の曰く、『此の地に於いて道場を建立し、以て生身の徳を報ぜんと欲す』と。神（關羽）曰く、『願わくは我が愚を哀閔し、特に攝受を垂れたまえ』と。此こを去りて一舍（一泊）して、山、覆船（＝覆舟のことか。山名、江蘇省南京市にある。東晋の時、劉祐が桓玄の軍を破った所）の如きあり。其の土深厚なり。弟子當に子の［関］平（？～二一九）（蜀の先主（＝劉備）、［関］羽を前將軍に拜して、衆を率いて曹仁を攻むるも克たず。孫權已に江陵に據る。［関］羽因りて遁走す。呉の馬忠（？～二四九）、［関］羽及び其の子、［関］平を獲て、章郷（湖北省南漳県臨沮）に於いて之を斬る。『唐書』に『［関］羽は侍中［関］興（生卒年不祥）を生む。其の裔孫（末裔）の［関］播（生卒年不祥）は徳宗に相たり』と。〉と寺を建て、化（募財）供（供養）して佛法を護持すべし。願わくは師（＝智顗）安禪すること七日にして、以て其の成るを須（ま）ちたまえ』と。師（智顗）既に定を出でて見るに、湫潭千丈、化して平阯（＝平らな土台）と為る。棟宇（とうう）（伽藍）煥麗にして、巧、人の目を奪う。鬼工を神運して、其の速やかなること是くの若し。師（智顗）、衆を領して入りて居し、晝夜、法を演ぶ。一日、神（関羽）、師（智顗）に白（もう）して曰く、『弟子、今日、出世間の法を聞くことを獲（う）。願わくは心を洗い念を易（か）え、求めて戒品を受け、永く菩提の本と為さん』と。師（智顗）即ち鑪（香炉）を秉（と）りて、授くるに五戒を以てす。是ここに於いて神（關羽）の威徳、昭（あきら）かに千里に布き、遠近瞻祷して、肅敬（しゅくけい）せざること莫し」と。

＊

○佛祖統紀［六ノ十九丈］智者傳云、一日天地晦冥…莫不肅敬＝『仏祖統紀』巻六（T49-183b~c）に同文が見える。尚、割り注の中の『唐書』からの引用は、『新唐書』巻七五下の「関氏出自商大夫関龍逄之後。蜀前将軍漢亭侯羽、生侍中興、其後世居信都。裔孫播相徳宗」（中華書局本・p.3379）による。

⑥

三國志傳［十三巻］云、却説雲長。英魂不散。悠悠蕩蕩、直至荊州當陽縣玉泉山。有一僧人。名普靜。原是氾水關鎭國寺長老。是時普靜禪師、雲遊天下、來到此處。因見山明水秀、就此結爲草菴。每日裡坐禪參道、止有個小行童。下山化飯度日。是夜月白風清、正當三更、普靜只聞空中有人、大呼還我頭來。普靜仰面觀之。見空中一人、騎赤兎馬、手提青龍刀。左有關平。右有周倉。口中但呼如前言不息。普靜見是、雲長騎馬在菴前。靜乃將手中麈尾、擊其座曰、顏良安在。雲長即叉手、立于菴前曰、吾師何人也。願求清號。靜曰、昔氾水關前、鎭國寺中、已曾相會。今日何爲不識普靜耶。雲長曰、羽質愚魯、願聞其教。靜曰、昔非今是、一切休論。只以公今生所爲言之。往日白馬坡前、顏良文醜、不曾與公鬬力、忽然刺之。斯人于九泉之下、安得不抱恨乎。今呂蒙、一旦詭計、害公正猶此也。公何迷惘。于是雲長方始解脱。禮玉泉山普靜長老爲師、就山間往往顯聖。里人于山頂建廟、四時以猪羊祭之。後至大唐高宗儀鳳年間、東京開封府尉氏縣、有一秀才。屢舉不第。遂乃捨族出家。法名神秀。拜蘄州黄梅寺五祖禪師弘忍爲師、學大小乘經法。後雲遊天下。到玉泉山、忽然困倦。坐于怪樹之下、見一大蟒于前。神秀端坐不動、至次日、于樹下得金一藏。遂于玉泉山、剏建道場。因問土人、此何廟也。土人答曰、三國時、關公顯聖之祠也。神秀折毀。忽然陰雲四合、見雲長提刀、躍馬于黒雲中馳驟。秀問之、雲長具言前事。神秀乃破土建寺、立關公爲本寺伽藍。至今古跡尚存。神秀即六祖師兄。我聖朝封雲長義勇武安王。

＊

『三國志』の傳［十三巻］に云く、「却って説く、雲長（關羽）の英魂散らず。悠悠蕩蕩として、直ちに荊州（湖北省）の當陽縣の玉泉山に至る。一りの僧人有り。名は普靜。原と是れ氾水關（河南省氾水県の西境）鎭國寺の長老なり。是の時、普靜禪師、天下に雲遊して、來りて此の處に到る。因りて山明らかに水秀ずるを見、此こに就きて結んで草菴を爲す。毎日裡に坐禪參道し、止だ個（一人）の小行童（寺の召使いの少年）有りて、山を下り、飯を化（托鉢）して日を度る。是の夜、月白く風清し。正に三更（夜十二時）に當たり、普靜只だ聞く、空中に人有り、大いに『我が頭を還し來れ』と呼ぶを。普靜、面を仰いで之を觀るに、空中に一人、赤兎馬（関羽の馬の名）に騎り、手に青龍刀（長い柄の太刀）を提ぐるを見る。左に關平有り。右に周倉（蜀漢の武将で架空の人物）有り。口中に但だ呼ぶこと前言の如くにして息まず。普靜、是れを見るに、雲長、馬に騎って菴の前に在り。［普］靜乃ち手中の麈尾（払子）を將て其の座を擊ちて曰く、『顏良（？～二〇〇）安くにか在る』と。雲長即ち叉手して菴の前に立ちて曰く、『吾が師は何人ぞや。願わくは清號を求めん』と。［普］靜曰く、『昔、氾水關前の鎭國寺の中に、已に曾て相會す。今日何爲れぞ普靜を識らざる』と。雲長曰く、『［関］羽が質（性質）愚魯（愚鈍）なり。願わくは其の教えを聞かん』と。［普］靜曰く、『昔の非も今の是も、一切論ずることを休めよ。只だ公、今生の爲す所を以て之を言え。往日、白馬（四川省羅江県）の坡前に、顏良・文醜（？～二〇〇）曾て公と力を鬬わしめずして、忽然として之を刺す。斯の人、九泉（黄泉）の下に于いて、安くんぞ恨みを抱かざることを得んや。今、呂蒙（一七八～二一九）、一

旦詭計して公を害すること、正に猶お此くのごとくなり。公、何ぞ迷惘せるや』と。是こに于いて雲長（關羽）方始めて解脱す。玉泉山の普靜長老を禮して師と爲し、山間に就きて往往に聖を顯わす。里人、山頂に于いて廟を建て、四時猪羊を以て之を祭る。後に大唐の高宗の儀鳳年間（六七六～六七九）に至り、東京の開封府尉氏縣（河南省）に一りの秀才有り。屢しば舉（受驗）すれども第（合格）せず。遂に乃ち族を捨てて出家す。法名は神秀（？～七〇六）。蘄州（＝湖北省）の黄梅寺（湖北省黄梅県）の五祖禪師弘忍（六〇一～六七四）を拜して師と爲し、大小乘の經法を学ぶ。後に、天下に雲遊す。玉泉山に至り、忽然として困倦す。怪樹の下に坐り、一大蟒を前に見る。神秀、端坐して動かず。次の日に至り、樹下に于いて金一藏を得たり。遂に玉泉山に于いて道場を剏建せんとす。因りて土人に問う、『此れ何の廟ぞや』と。土人答えて曰く、『三國の時、關公の聖を顯すの祠なり』と。神秀、折毀す。忽然として陰雲四合して、雲長（＝關羽）、刀を提げて馬を黒雲の中に躍らせて馳驟（駆け回る）するを見る。〔神〕秀、之れに問えば、雲長（関羽）具に前事を言う。神秀乃ち土を破り寺を建て、關公を立てて本寺の伽藍と爲す。今に至るまで古跡尚お存す。神秀は即ち六祖（慧能）の師兄なり。我が聖朝、雲長を封じて義勇武安王とす」と。

＊

○三國志傳［十三巻］云、却説雲長…我聖朝封雲長義勇武安王＝内容から見て『三国志演義』からの引用と思われる。道忠が見た『三国志演義』の版本は不明だが、本稿では『李卓吾先生批評三国志』第七十七回（五丁～六丁）を参考した。（第四巻・ゆまに書房・一九八四、p.265~266）

⑦

忠曰、三國志傳迂誣謬悠［柳文二十三ノ十一丈］、不足信之。七修類稿［代酔二十九ノ八丈］、辨其普靜事妄誕。唯七修竝受戒護法、皆歸虚妄。又稱智者爲妖僧。太過矣。

＊

忠曰く、「『三國志』の傳は、『迂誣謬悠（間違いだらけで、いい加減でどうでも良い話）』『柳文』二十三の十一丈］にして、之を信ずるに足らず。『七修類稿』『代酔』二十九の八丈］に其の普靜の事の妄誕（でたらめ）を辨ず。唯だ『七修（類稿）』は受戒護法を并せて、皆な虚妄に歸す。又た智者（智顗）を稱して妖僧と爲す。太だ過れり」と。

＊

○迂誣謬悠［柳文二十三ノ十一丈］＝柳宗元（七七三～八一九）の『増広註釈音辯唐柳先生集』巻二三「送辛殆庶下第遊南鄭序」に見える「専ら学に志し、文を為るに謬悠迂誣の談無し（専志於学、為文無謬悠迂誣之談）」（四部叢刊本・5a）を踏まえる。

○七修類稿［代酔二十九ノ八丈］、辨其普靜事妄誕。唯七修竝受戒護法、皆歸虚妄。又稱智者爲妖僧。太過矣＝明の郎瑛撰『七修続稿』巻四「関漢寿」条に、「関候聴天師召、使受戒護法。乃陳妖僧智顗…」とあり（『七修類稿』下、中華書局校点本・p.792~793）、また、同じく明の張鼎思撰『瑯邪代酔編』巻二九（八丈）の「壯繆」条に、「関雲長聴天師召、使受戒護法。乃陳妖僧智顗…」（和刻本漢籍随筆集・第七集『瑯邪代酔編』、汲古書院・p.403）とある。

＊

⑧呂眞人〈洞賓〉文集［一ノ十五丈］、眞人本傳曰、政和中、〈宋徽宗年號〉宮禁有祟。白晝現形、盜金寶、奸妃嬪。獨上所居無患。自林靈素、王文卿、諸侍宸等、治之息而復作。上、精齋、虔祷、奏嗣凡六。一日晝寢、見東華門外、有一道士。碧蓮冠、紫鶴氅、手持水晶如意、前揖上曰、臣奉上帝命來、治此祟。良久、一金甲丈夫、捉劈而啗之且盡。上問、丈夫何人。道士曰、此乃陛下所封崇寧眞君關羽也。上勉勞再四、復問、張飛何在。羽曰、

飛乃臣累劫兄弟。世世爲男子身、今已爲陛下、先于相州岳家。他日輔佐中興、飛將有功焉。上問卿姓名。曰、臣姓陽。四月十四日生。夢覺録之、召侍宸言之。意其爲洞賓也。自是宮禁帖然。遂詔天下有洞賓香火處、皆正妙通眞人之號。

＊

『呂眞人〈洞賓〉文集』［一の十五丈］の「眞人本傳」に曰く、「政和中〈宋、徽宗（＝一〇八二～一一三五。北宋八代皇帝）の年號〉、宮禁（＝宮中）に崇り有り。白晝、形を現じ、金寶を盜み、妃嬪（＝皇后以外の、天子の第二（＝妃）、第三（＝嬪）夫人）を奸す。獨り上（＝皇帝）の所居、患無し。林靈素（＝？～一一一九）・王文卿（＝一〇九三～一一五三）自り、諸もろの侍宸（＝道教で天帝に侍する八人の侍中）等、之れを治むるも、息みて復た作こる。上（＝皇帝）、精齋（＝「齋」に関する儀式のことか）、虔祷（＝恭しく願う）、奏嗣（何らかの儀式のことか）すること凡そ六。一日、晝寢て、東華門の外を見るに、一道士有り。碧蓮冠（＝緑色の蓮の冠）、紫鶴氅（＝紫色の鶴の羽で織った外套（防寒用の上着））、手に水晶の如意を持ち、前んで、上（＝皇帝）に揖（＝両手を組んで会釈する）して曰く、『臣（私）（＝一道士）、上帝の命（＝命令）を奉（＝忠実に守って）り、來たって此の崇りを治す』と。良久して、一りの金甲（＝黄金で飾った鎧）の丈夫（＝成人した男子）、捉え劈きて之れ（＝崇り）を啗らって、且に盡くさんとす。上（＝皇帝）問う、『丈夫は何人ぞ』と。道士曰く、『此れ乃ち陛下封ずる所の崇寧眞君（＝地位の名）の關羽なり』と。上（＝皇帝）、勉勞（＝励ましいたわる）すること再四して、復た問う、『張飛、何くにか在る』と。羽（＝關羽）曰く、『飛（＝張飛）は乃ち臣が累劫の兄弟なり。世世、男子の身と爲り、今已に陛下の爲に、先に相州（＝河南省）の岳家（＝妻の実家）に生まる。他日の輔佐（＝助け）中興（＝衰えていたものが、ふたたび盛んになる）、飛將（＝張飛）に功有らん』と。上（＝皇帝）問う、『卿が姓名は』と。曰く、『臣の姓は陽。四月十四日に生まる』と。〔上＝（＝皇帝）〕夢覺めて之れを録す。侍宸を召して之れを言う。其れ洞賓（＝呂洞賓のこと。唐代の仙人。呂巖・呂純陽・孚佑帝君・呂祖・純陽真人とも称する。後世では、七八六年四月十四日に生まれたとされる。八仙人の一人に数えられ、現在でも、孚佑帝君として親しまれている。また、全真教の五祖の一人。『道教事典』平河出版社・p.605 参照）為るかと意うなり。是れ自り宮禁、帖然（＝落ち着き安んずるさま）たり。遂に天下に詔して、洞賓が香火（＝灯明と香）有る處、皆な妙通眞人の號を正しくす」と。

＊

○呂眞人〈洞賓〉文集［一ノ十五丈］、眞人本傳曰…皆正妙通眞人之號＝『輦上 道蔵続集』第一一一二『呂祖志』巻一・第一〇（中華民国十五年四月・上海涵芬楼影印）に収載。

＊

⑨瑯邪代醉編［廿九ノ九丈］云、王元美曰、宋崇寧時…

⑩文海披沙［四ノ十三丈］云、關壯繆之神、自唐以前、未聞威靈。…

⑪塵餘［一ノ廿八丈］云、福清民林某如、幼喜齋素。…

⑫宋許觀［正孚廿八］東齋記事［二丈］云、紹興中、洞庭漁人、獲一印。…

⑬暌車志［説類四十三ノ十丈］云、忠愍李公若水、宣和壬寅、尉大名之元城。…

⑭媚幽閣文誤載、姚希孟撰。關壯繆定本序云、自古忠義之士。亦多矣。…

⑮戴埴鼠璞云、如今東三班之祠關王、…

⑯五雜組［十五ノ十六丈］云、唐以前、崇奉朱虚侯劉章、家祠戸禱。…

⑰劉氏鴻書載、宋南宮靖關壯繆侯贊云、嗚呼簒漢者瞞也。…

⑱清拙澄禪師録［日本ノ四、佛祖贊十一丈］關大王贊云、蜀帝熊虎之將、…

⑲忠曰、日本黄檗山伽藍堂神、三目。問之則云、關帝也。…

（松原信樹）

【二六一】掌簿判官

①忠曰、是土地神之屬從者、凡張大帝大權修利等、一切神前、不妨皆安此像。蓋護法神天、各執賞罰之權、須備掌簿録之官吏也。

②慧日山東福寺土地堂、安梵天帝釋據床像。像東安掌簿判官立像。其像著襆頭、左手持卷軸、右手握筆。梵釋像西、安感應使者立像。右手持棒擔于右肩、左手持槌。〈東福、曽此諸像、各題其名云爾、事記于前寶冠釋迦處。〉

③襆頭者、杜氏通典［五十七ノ廿丈○通鑑正ノ卅五ノ五十五丈］云、全幅巾、而向後幞髪、謂之頭巾。俗人謂之幞頭後周武帝、因裁幅巾、爲四脚、大唐因之。　又［五十七ノ十四丈］云、唐太宗謂侍臣曰、幞頭起於周武帝。蓋取便於軍容耳。

④廣燈録［十六ノ八丈○古宿廿三ノ六丈葉縣録］葉縣省禅師章云、問如何是衲僧活計。師云、城東太山廟。學云、不會、意旨如何。師云判官手裏筆。

⑤忠曰、近見中華人撰、禪林方語、其神祇類載判官手裡筆句、可知此判官、謂神之屬官者。而握筆者、是掌簿判官也。

⑥又按、左采簿右握筆者、記録衆之善惡行事、以備賞罰之證也。同形管、記功書過之義。

⑦竹窻三筆云、夫剃削者、應離世絶俗、柰何接踵於長途廣化。募化者、罕遇道流、而恒見緇輩也。有手持縁簿、如土地神前之判官者。

⑧忠曰、已稱判官。而在土地神前、則可證大帝大權等屬官矣。〈法山掌簿、舊著幞頭、近加莊飾、佛工改著帝冠。又呼爲張大帝、訛甚。〉

⑨舊説［正宗賛南泉傳旧鈔］云、土地神、十九用祠山張大帝或用掌簿判官感應使者。

⑩忠曰、余觀諸禪刹、少安張大帝、多祀大權、所謂十九者。舊説以大權、訛稱張大帝、故有此妄説。夢語集云、建仁祀張大帝。〈前祠山處引。〉

⑪又言、或用掌簿判官感應使者、此亦訛也。夫掌簿感應、是正神之屬官、當先立正神。然後有部屬、豈有無主、虚設從之理耶、縱令有之、猶如不立本尊。而但置挾侍像而已。

（馬場道隆）

【二六二】感應使者

＊

忠曰、蓋位在判官下。東福寺所設像、左手持槌右手持棒、而擔右肩。三聖寺土地堂感應像、右手持槌、左手提棒。與東福像、左右相反。皆被髪不復著巾。［大日経疏六ノ一五丈］所謂作卑下之容也。

＊

忠曰く、「蓋し（＝そもそも。もともと）位は判官（＝掌簿判官）の下に在り。東福寺に設くる所の像は、左手に槌を持し、右手に棒を持して、右肩に擔う。三聖寺の土地堂の感應の像は、右手に槌を持して、左手に棒を提ぐ（＝持ち支える。腰のあたりにさげ持つ）。東福の像と、左右相反す。皆な髪を被り（＝髪の毛をざんばらにする）、復た巾（＝頭巾）を著けず。所謂る［『大日経疏』六の十五丈］『卑下の容ちに作る』なり。

＊

○［大日経疏六ノ一五丈］所謂作卑下之容也＝『大毘盧遮那成仏経疏』巻六「入漫荼羅具縁真言品」に、「其使者奉教等、皆作卑下之容」（T39-642a）とある。
○文中の事項のうち、【三三】「土地堂」は、本書巻一「第二類・殿堂門　上」に、【二六一】「掌簿判官」は、本書巻四「第五類・霊像門　下」に、【一三八二】「頭巾」は、本書巻十七「第二十六類・服章門」の中に立項されている。

（神足浩正）

【二六三】曠野神

＊

天竺中華、多畫于門壁。出食祭之、見祭供類出生處。

＊

天竺中華、多く門壁に畫く。食を出して之を祭る。「祭供類」の「出生」の處に見ゆ。

＊

○文中の事項のうち、【一〇五七】「出生」は、本書巻一四「第十八類・祭供門」の中に立項されている。

（神足浩正）

【二六四】鬼子母

＊

訶利帝母也。訶利帝、此飜惡賊。今已受戒護法、須稱鬼子母。天竺中華、畫於門屋、或食厨處、出生祭之。見祭供類出生處。

＊

訶利帝母なり。訶利帝、此（中国）こに悪賊と飜（翻訳）す。今已に受戒護法せば、須く鬼子母と称すべし。天竺中華、門屋或いは食厨の処に畫き、生を出して之を祭る。「祭供類」の「出生」の処に見ゆ。

＊

○文中の事項のうち、【一〇五七】「出生」は、本書巻一四「第十八類・祭供門」の中に立項されている。

（神足浩正）

【二六五】頂相

①忠曰、祖相本無相。猶如如來頂相不可見。故名頂相。

＊

忠曰く、「祖相は本と無相なること、猶お如來の頂相（＝如来の頭頂）の見る可からざるが如し。故に頂相と名づく」と。

＊

○忠曰…故名頂相＝文中、「如來頂相不可見」の部分は、『大乘本生心地觀経』巻五（T3-314c）に同文がある。

②　大法炬陀羅尼經［四ノ八丈］云、如來頂相、肉髻圓滿。一切天人、所不能見。

＊

『大法炬陀羅尼經』［四の八丈］に云く、「如來の頂相は、肉髻（＝頭頂の肉の隆起で仏の三十二相の一つ）圓滿なり。一切の天・人（＝諸天と人間）の、見ること能わざる所なり」と。

＊

○大法炬陀羅尼經［四ノ八丈］云、如來頂相…所不能見＝『大法炬陀羅尼経維』巻四（T21-676c）に同文がある。

③ 瑜珈師地論［四十八ノ十四丈］云、一切所有諸相、隨入福聚、除白毫相、烏瑟膩沙、増至千倍。爾所福聚、能感如來眉間白毫。乃至白毫隨入福聚、増至百千倍。爾所福聚。能感如來其頂上、烏瑟膩沙、無見頂相。

＊

『瑜珈師地論』［四十八の十四丈］に云く、「一切所有る諸相の、隨入の福聚（＝福徳の集まり）は、白毫相（＝眉間にある白色の旋毛で仏の三十二相の一つ）と、烏瑟膩沙（＝肉髻の意の梵語の音写）とを除いて、増して千倍に至る。爾所の福聚をもって、能く如來の眉間白毫を感ず。乃至、白毫に隨入の福聚を、増して百千倍に至る。爾所の福聚をもって能く如來の其の頂上に現ずる、烏瑟膩沙の、無見頂相（＝見ることができない仏の頭頂）を感ず」と。

＊

○『瑜珈師地論』［四十八ノ十四丈］云…無見頂相＝『瑜伽師地論』巻四九（T30-568c）に同文がある。

④ 竺仙天柱集［七十九丈］頂相朝向所宜跋云、凡畫宗師頂相、宜面西向。或謂、生前作者則東。此言勿聽。若作執竹篦、爲學者入室之状、學者從右而入。是尤不可背之。其或陞堂・小參之時、雖四衆滿前、顧視不拘定方、然龍象多衆、皆居於右。而亦偏多右眄。抑東面者賓也。是主人者、將爲賓乎。若夫遊山・行道等相、或回頭轉腦。臨時出格、則無固必。傳神寫照之士、宜知之。

＊

竺仙（梵僊・一二九二～一三四八）の『天柱集』［七十九丈］に「頂相の朝向（＝顔の向き）の所宜（＝宜しき所）の跋」に云く、「凡そ宗師（＝修行の指導者たる禅僧）の頂相を畫くには、宜しく面は西に向くべし。或いは謂く、『生前に作る者は則ち東にす』と。此の言、聽くこと勿かれ。若し竹篦（＝修行者を指導するために用いる弓形の竹棒）を執りて、學者の爲に入室するの状を作さば、學者は右よりして入る。是れ尤も之に背くべからず。其れ或いは陞堂（＝法堂の高座に上っての説法）・小參（＝随処での説法）の時は、四衆（＝比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）前に滿ちて、顧視、定方に拘わらずと雖も、然れども龍象（＝優れた禅僧）の多衆は、皆な右に居す。而も亦た偏えに多くは右に眄（＝横目⾮で見る）す。抑そも東面する者は賓なり。是れ主人なる者、將に賓と爲らんとするや。若し夫れ遊山・行道等の相は、或いは頭を回らし腦を轉ず。時に臨んで出格（＝型にはまらない）なるは、則ち固必無し。傳神寫照（＝姿形を正確に写し取ること）の士は、宜しく之を知るべし」と。

＊

○天柱集［七十九丈］頂相朝向所宜跋云、…宜面西向＝『竺仙和尚天柱集』（『続群書類従』第十二輯上 文筆部六・一五一頁、また『五山文学全集』第一巻・七二八頁）に同文あり。文中の事項のうち、【一五六二】「竹篦」・【八一四】「小参」・【九二五】「遊山」・【六三六】「行道」は、『象器箋』中に立項されてい

る。また、「陞堂」は、【八一二】「陞座」も併せて参照。

⑤ 忠曰、余聞、凡祖像其生前畫者主位、面向像右。死後畫者客位、面向像左。其書贊法、書起一隨像面所向也。今見竺仙所辨、存沒須皆主位也。抑死後所畫者、果何也。亦是畫生前形状耳。若言死者在賓位、其像當賓位、則死者有何形状可圖。嗚呼、竺仙所論、可謂至當。

＊

忠曰く、「余聞く、『凡そ祖像は、其の生前に畫く者は主位（＝住職・主人の座所）にして、面は像の右に向かい、死後に畫く者は客位（＝主位に対する位置）にして、面は像の左に向かう。其れ贊を書する法は、書き起こすこと一に像面の向かう所に隨う』と。今、竺仙の辨ずる所を見るに、存沒須く皆な主位なるべし。抑そも死後に畫く所の者は、果たして何ぞや。亦た是れ生前の形状を畫くのみ。若し死者、賓位に在れば、其の像當に賓位なるべしと言わば、則ち死する者、何の形状の圖く可きか有らん。嗚呼、竺仙の論ずる所は、至當（＝最も適切である）と謂う可し」と。

＊

○忠曰…可謂至當＝文中の事項のうち、【一〇二】「客位」・【一四五】「主位」・【一四六】「賓位」は、『象器箋』中に立項されている。

⑥ 永平道元和尚［正法眼十五巻］云、江浙禪刹自稱臨濟遠孫者、間有惡模様者。謂在善知識會下參禪、懇請頂相一幅、法語一軸、以備嗣法之標準。及晩年討得一箇院子、不嗣法於前法語・頂相之師、但擇當代名譽・王臣・親附者而改嗣之。噫如此輩、豈夢見佛祖道耶。大凡法語頂相。雖教師及在家男女・行者・商客、可亦授之。諸家語録、具在。或非其人、而謾望嗣法之證。雖是有道所傷、遂不得已、而援筆也耳。乃不憑古來書式、聊記嗣我之由矣。

＊

永平の道元和尚［正法眼十五巻］の云く、「江浙（＝江蘇省と浙江省）の禪刹に自ら臨濟の遠孫（＝後世の法孫）と稱する者、間（＝時々）惡模様なる者有り。謂く、『善知識（＝高僧）の會下（＝門下）に在りて參禪して、頂相一幅、法語一軸を懇請し、以て嗣法の標準（＝証）に備う』と。晩年に一箇の院子（＝寺院）を討得（＝手に入れようとする）するに及んで、前きの法語・頂相の師に嗣法（＝法統を嗣ぐ）せず、但だ當代の名譽（＝名高い人）・王臣（＝王や大臣）の親附（＝親しい人）の者を擇んで、改めて之に嗣ぐ。噫、此くの如きの輩、豈に夢にも佛祖の道を見んや。大凡法語・頂相は、教師及び在家の男女・行者・商客と雖も、亦た之を授く可し。諸家の語録、具さに在り。或いは其の人に非ざれども、而も謾りに嗣法の證を望む。是れ有道の傷つくる所なりと雖も、遂に已むことを得ずして、筆を援く（＝手に取る）のみ。乃ち古來の書式に憑らず、聊か我に嗣ぐの由を記す」と。

＊

○永平道元和尚云。江浙禪刹…聊記嗣我之由矣＝『正法眼蔵』「嗣書」（T82-069b-c）に典拠とみられる文章が見えるが、語句の異同が多い。

イマ江浙ニ大刹ノ主トアルハ。オホク臨濟。雲門。洞山等ノ嗣法ナリ。シカアルニ臨濟ノ遠孫ト自稱スルヤカラ。ママニクハタツル不是アリ。ハク。善知識ノ會下ニ參シテ。頂相一幅。法語一軸ヲ懇請シテ。嗣法ノ標準ニソナフ。シカアルニ一類ノ狗子アリ。尊宿ノホトリニ。法語頂相等

ヲ懇請シテ。カクシタクハフルコト。アマタアルニ。晩年ニオヨヒテ。官家ニ陪錢シ。一院ヲ討得シテ。住持職ニ補スルトキハ。法語頂相ノ師ニ嗣法セス。當代ノ名譽ノトモカラ。アルヒハ王臣ニ親附ナル長老等ニ嗣法スルトキハ。得法ヲトハス。名譽ヲムサホルノミナリ。カナシムヘシ末法惡時。カクノコトクノ 邪風アルコトヲ。カクノコトクノヤカラノナカニ。イマタカツテ一人トシテモ。佛祖ノ道ヲ夢ニモ見聞セルアラス。オホヨソ法語頂相等ヲユルスコトハ。教家ノ講師。オヨヒ在家ノ男女等ニモサツク。行者商客等ニモユルスナリ。ソノムネ諸家ノ録ニアキラカナリ。アルヒハソノ 15 ヒトニアラサルカ。ミタリニ嗣法ノ證據ヲノソムニヨリテ。一軸ノ書ヲモトムルニ。有道イタムトコロナリトイヘトモ。ナマシイニ援筆スルナリ。シカノコトキノトキハ。古來ノ書式ニヨラス。イササカ嗣吾ノヨシヲカク。

文中の事項のうち、【一一五四】「法語」・【八七六】「嗣法」・【五五九】「行者」は、『象器箋』中に立項されている。

（朝山一玄）

【二六六】寫照

①忠曰、畫肖像言寫照也。照者鏡也。行事鈔〔下二之三ノ十八丈〕鉢器制聽篇。明坐禪具。有好照。資持記云。好照、有説坐禪處。多懸明鏡、以助心行。〈止此〉。又駱丞集〔二ノ五十四丈〕題、有詠照。陳繼儒註云、鏡也。〈止此〉。蓋寫照、視鏡所照、一倣模、寫其面像。故謂寫照也。

②閲耕餘録〔一巻廿七丈〕云。國語越王命工、以良金寫范蠡之状。

③史記燕世家、宋王無道。爲木人、以寫寡人射其面。後世言寫照寫生。義出於此。

④碧巖録三教老人序云、昔人寫照之詩曰、分明紙上張公子、盡力高聲喚不應。

⑤晉書〔列傳六十二ノ廿五丈〕顧愷之傳云、尤善丹青。圖寫特妙。每畫人成。或數年不點目精。人問其故。答曰、四體妍蚩。本無闕少於妙處傳神寫照。正在阿堵中。

⑥普燈録〔廿三ノ十一丈〕内翰蘇軾居士章云、過金山。有寫公照容者。公戲題曰、心似已灰之木。身如不繫之舟。問汝平生功業。黄州。惠州。瓊州。

⑦僧寶傳〔六冊七十七丈〕佛印元禪師傳云、李公麟伯時、爲元寫照。元曰、必爲我作笑状。

（西川秀敏）

【二六七】三十佛配日

①五祖師戒禪師所定也。〈戒雪門宗〉

②虚堂愚和尚録〔後録十ノ九丈〕楊御藥奉聖旨。請跋每月念佛圖云、每月念佛之圖、戒禪師所編。自初一定光佛爲首、三十日至釋迦世尊、終而復始。猶若貫華。新新不住。念念不停。口誦心思、光明發現、爲人天福。此念佛精誠之感驗也。

③虎關和尚〔紙衣ノ散廿二丈〕云、配一月三十日、以佛名者、無有本説。但寶積經第六十一巻、有説佛之日。然與今之三十佛、全異也。

④　忠曰、檢彼經無文。如三十五佛、第九十巻説。恐言之乎。

⑤臥雲日件録〔上ノ卅二丈〕云、三十日、配佛菩薩名號。未知何人所定。其〔上ノ卅三丈〕二十八日、大日如來、一本爲大日菩薩。問律宗僧、其荅不分明。

⑥　忠曰、瑞溪未知五祖戒所定。大日菩薩恐筆誤耳。今本皆作大日如來。

（小川太龍）

【三〇〇】山主

①傳燈録〔廿四ノ十四丈。〇会元八ノ六十四丈〕有撫州龍濟山主紹修禪師。〈嗣羅漢琛。〉又稱修山主。

②廣燈録［廿八ノ十丈。○会元十］有杭州南山資國圓進山主。〈嗣崇壽稠。〉
③續傳燈［十三ノ六丈］有衡州茶陵縣郁山主。〈嗣楊岐會。　五燈會元［十六ノ八十五丈］、爲未詳法嗣。〉
④明極俊禪師語要［上ノ廿八丈］有堪翁本忍山主。

（堀　祥岳）

【三〇一】靜王

①黄檗清規云、本山住持與各院靜主、既同宗派。

（堀　祥岳）

【三〇二】老宿

①敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、勤舊之外有老宿、次前資。
②臨濟録云、有一老宿、參師、未曾人事。便問、禮拜即是、不禮拜即是。〈云云。〉

（堀　祥岳）

【三〇三】受業師

①忠曰、得度受教之師名受業師。又曰親教師。〈又見和尚。〉
②釋氏要覽［上ノ三十丈］云、律云、師有二種。一親教師、即是依之出家。授經剃之者。毘奈耶亦云、親教。二依止師、即是依之、稟受三藏學者。〈但是依學一切事業、乃至一日、皆得稱師。〉　又［三十丈］云、毘奈耶云鄔波陁耶。此云親教、由能教離出世業故、稱受業和尚。
③古靈神讚、大中寺受業。見于區宇類受業院。
④　史記［七十四ノ一丈］孟子傳云、孟軻受業子思之門人。

（堀　祥岳）

【三〇四】依止師

①忠曰、依隨住止於諸方名德座下、仰爲受學參禪之師者、是名依止師。〈又見受業師處。〉
②五分律［十六ノ十九丈］云、佛言有五種阿闍梨。始度受沙彌戒、是出家阿闍梨。授具足戒時、教威儀法。是名教授阿闍梨。授具足戒時、爲作羯磨、是名羯磨阿闍梨。就授經乃至一日誦、是名授經阿闍梨。乃至依止住一宿、是名依止阿闍梨。
③　羯磨阿闍梨。四分律［三十九ノ十丈］名受戒阿闍梨。

（堀　祥岳）

【三一〇】弟子

①維摩經孤山垂裕記［五ノ六丈］云。所以稱弟子者。言弟則顯師之謙。言子則彰我之敬。謙敬俱陳。故言弟子所以自稱爲弟子。師亦謂之爲弟子。故知其名含謙敬也。
②維摩經慧遠義記［二本一丈］云。聲聞學在佛後。故名爲弟從佛化生。故復稱子。
③維摩經嘉祥〈胡吉藏〉疏［二ノ十三丈］云。問諸聲聞菩薩。皆弟子。何意。聲聞云弟子。菩薩不稱弟子耶。解云。通例而不爾者。聲聞親侍佛。形儀如法。故云弟子。菩薩形無定方。反常合道。如文殊安劍欲刺佛。非弟子之法。故不得云弟子。也而言弟子者。外書云。夫子視門人如弟。自處如兄。弟子親夫子如父。自處如子。師資合擧。故云弟子。佛法即通。衆生親佛如父。自處爲子。佛亦視衆生如子。自處爲父。故云。吾世間之父。衆生皆是吾

子。前悟爲兄。後悟爲弟。故云弟子也。

（廣田宗玄）

【三一二】師孫

①弟子之弟子。稱師孫。

②敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次。有師孫。〈又見小師處。〉

（廣田宗玄）

【三一三】法眷

①法中眷屬曰法眷。［敕修鈔十三ノ廿七丈］或同辨道者。総名法眷。如敕修清規［下一ノ六十一丈］亡僧入塔。云郷曲法眷。同収骨。是也。

②敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次。郷人次有法眷。　又［下一ノ卅二丈左］遊方參請云。侍者詳詢來由。或郷人。法眷。辨事。分明。

③　忠曰。詳問住持人。同郷人否。住持人法眷否也。

（廣田宗玄）

【三一四】法兄

①忠曰。受業於師。先於己者。喚之爲法兄。此文字又在佛經。

②大集經［十八ノ十丈］云。寶女。語無畏言。法兄。如來出世。不可思議。〈止此。〉已下文。累稱法兄。蓋同是釋迦世尊之弟子。故稱也。

（廣田宗玄）

【三一六】同門

①忠曰、法之兄弟言同門。或泛稱法眷、言同門。

②敕修清規［上一ノ卅八丈］云、法眷尊長、同門兄弟。〈見于兄弟處。〉

③大光明藏［中ノ八十一丈］關南道吾章云、同門有漳州羅漢和尚。

④　忠曰、羅漢道吾、同嗣關南道常。

⑤白虎通［三ノ廿八丈］云、禮記曰、同門曰朋、同志曰友。

⑥　忠曰、天中記［二十ノ十五丈］同門曰朋。引公羊。按、公羊傳［廿五ノ廿三丈］朋友相衛註、有此語。非傳本文。用禮記可也。

（堀　祥岳）

【三一七】兄弟

①忠曰。自少壯居叢林。諳熟清規者。曰山中兄弟。便反晩達之人。

②　或作品麗者無據。又作之説曰。義滿公臨相國寺日。無位者。不得充供過。乃以沙彌喝食。權受五品。而充之。故言品麗也。此説益無根據。又不得字義。

③敕修清規［八巻十一丈］舊解云。藏主當兄弟人轉之。然昔竺仙和尚。特自書記。轉于藏主。蓋時無兄弟人故。〈書記非兄弟之職也。〉　又解名勝［鈔十一ノ十八丈］云。名勝者。非常人之稱。如大方兄弟者。

④敕修清規［上一ノ卅八丈左］嗣法師忌云。諷經罷。備湯果。如有法眷尊長。同門兄弟。皆當

請之。

⑤叢林盛事［十六丈］云。宏智禪師。一笠過東浙。抵天童。及歸旦過。雖不言名字。而兄弟已有職者曰。此乃長蘆長老也。主事即申使府。府喜。出帖差官。至旦過。請之。師堅不肯。乃被旦過兄弟。硬舁歸方丈。　又［卅四丈］云。柏堂雅禪師。兄弟。多歸之。〈見座元處〉

⑥　巳上兄弟。有一類人也。

⑥増壹阿含經［谷響五ノ廿二丈●］云。佛臨涅槃時。告阿難曰。自今巳後。敕諸比丘。不得輕心相向。大者稱尊。小者稱賢。相視當如兄弟。

⑦敕修清規［上二ノ三丈］告香云。新掛搭兄弟。欲求和尚告香普説。　又謝掛搭［下一卅八丈］云。出榜報衆云。新歸堂兄弟來日粥罷。詣方丈謝掛搭。　解［鈔四ノ十四丈右］云。兄弟者。修道和合。如兄如弟。故曰兄弟。

⑧南泉語要［古宿十二ノ三丈］云。兄弟。近日禪師太多。覓箇癡鈍人。不可得。

⑨雪峯存禪師録［上ノ九丈］云。兄弟。我道。祗三寸。能殺人能活人。

⑩癡絶冲禪師録。金山普説云。如今兄弟。志願不堅。力量不大。

⑪虚堂愚和尚徑山録［後素五十三丈］云。兄弟家。還有東去西去底。

⑫　巳上呼大衆爲兄弟。

⑬大慧普説［下ノ六十三丈］禮侍者斷七普説云。可惜遮兄弟。方始於竹篦子話。有箇發明處。

⑭　此呼一箇人。爲兄弟。

⑮　左傳［林注卅二ノ十一丈。〇林注十四ノ七丈］襄三年云。寡君。願與一二兄弟相見。　林堯叟註。列國之君。相謂兄弟。言晋國。願與列國之君相見。

（藤原良敬）

【三一九】同行

①忠曰、結友徧歴者、相謂爲同行。

②楊岐會和尚録［古宿十九ノ十丈］云、一日三人新到。師問、三人同行必有一智。提起坐具云、參頭上座、喚者箇作什麽。僧云坐具。師云、眞箇那。僧云是。師云、喚作什麽。僧云坐具。師顧左右云、參頭却具眼。〈云云。〉

③正宗贊［二下ノ十四丈］眞淨文禪師傳云、師遊方時、與二僧偕行。至谷隱薛大頭處。問三人同行、必有一智。如何是一智。二僧無語。師立下肩、應聲便喝。薛擧拳作相撲勢。師云、不勞再勘。薛拽杖趁出。

（篠塚純海）

【三二〇】平交

①敕修清規［上二ノ十一丈］迎待尊宿云、若諸山平交、斟酌中禮、可也。

②　忠曰、平交者、同位等輩也。謂道德位年。皆與我齋等也。

（篠塚純海）

【三二一】社中

①忠曰、凡結衆、講磨道學者、曰社中。

②北礀［續集ニ附］簡和尚行状［一丈］云、社中飽參。碩望。忘年與交。

③石城遺寳、虚堂愚和尚虎丘十詠題云、虎丘十詠。奉呈社中龍象、幸笑覽。

（篠塚純海）

【三二二】郷人

①敕修清規［上二ノ卅六丈］議擧住持云、爲勤舊知事者、不可以郷人法眷阿黨傳會。　又遊方參請掛搭規［下一ノ卅二丈］云、侍者詳詢來由。或郷人、法眷、辨事、分明。

②又敕修清規［上一ノ卅八丈］開山歴代祖忌云、或郷人、或江湖、擧呪。　又尊宿遷化孝服［上二ノ廿八丈］云、勤舊・辨事・郷人・法眷・諸山・生絹・腰帛。　又亡僧大夜念誦［下一ノ五十九丈］云、江湖・道舊・郷人・法眷、次第設祭。

③　或解遷化章郷人曰、此有二解。一與遷化尊宿。同生縁郷里人。二尊宿取滅處郷里人。亡僧章郷人例解。

④　忠曰、以議擧住持參請掛搭中郷人語、觀之、初同生縁郷里之義、是也。

⑤雪竇顯禪師録［二ノ五丈］云、問僧、近離甚處、僧云、温州。師云、還識永嘉大師麽。僧云、是郷人。師云、與你隔海。僧云、酌然。〈云云。〉　又云、師在大龍、爲知客。李殿院到山、茶話次、問師。知客是長老郷人。師云、不敢。院云、且在者裏。不得亂走。師云、本爲行脚。院云、行脚爲甚事。師云、看亂走底。院微笑。〈聯燈［廿七ノ卅三丈］大龍作大潙。〉

⑥死心新禪師録［続古宿ノ天。〇普灯廿五ノ十四丈］小參云、便被世間情愛纏縛得來、七顛八倒。江南人護江南人。廣南人護廣南人。淮南人護淮南人。向北人護向北人。湖南人護湖南人。福建人護福建人。川僧護川僧。浙僧護浙僧。道我郷人住院。我去贊佐他。一朝有箇不周全。飜作是非、到處説。〈周全、普燈作周旋。〉

（堀　祥岳）

【三二三】郷頭

①忠曰、諸郷人中。爲其首者。曰郷頭。

②雪巖欽禪師録［上ノ七十七丈］告香普説云。諸路郷頭。力到侍者寮。陳請。

③　忠曰。諸路郷頭者。蓋大衆十百。毎路數人。其各數人中。揀老成有德者。以爲之首。名爲郷頭。已毎路有郷頭。此爲諸路郷頭也。

④幻住清規［中ノ五十七丈］津送云。郷頭出龕前燒香。郷末擧經。

（並木泰淳）

【三二四】郷長

①郷頭。亦曰郷長。

②敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云。郷人擧咒。郷長出燒香。

（並木泰淳）

【三二五】郷末

①郷人之末位者。〈見于郷頭。〉

（並木泰淳）

【三二六】新到

①忠曰。新到某寺掛搭。謂之新到僧。

②敕修清規［下一ノ卅四丈］遊方參請云。新到相看。住持當居中位。令其挿香展禮。

（並木泰淳）

【三二七】暫到

①忠曰、暫時到某寺、當不久而去。故曰暫到僧。

②敕修清規［上一ノ二十一丈］聖節云、堂僧、堂司給由。暫到客司給由。

③　又［下一ノ三十二丈］遊方參請云、參頭領衆。白云、暫到相看。

（佐野泰典）

【三二八】新戒

①忠曰、沙彌新受戒、故稱新戒。

②敕修清規［下一ノ二十七丈］新戒參堂云、得度受沙彌戒已、覆住持、於何日參堂。〈乃至〉新戒參頭。領衆入堂。聖僧前。列問訊。

③　忠曰、如有新戒數人。其初得度者、爲參頭。

（佐野泰典）

【三二九】恩度

①忠曰、蓋特恩賜度者、爲恩度。

②張無盡、東林善法堂記云、以弼恩度、而爲上首。

（佐野泰典）

【三三〇】座主

①忠曰、禪家凡稱教者、爲座主。

②馬祖一禪師録［古宿一ノ六丈］云、有講僧來、問曰、未審禪宗、傳持何法。師却問、座主傳持何法。主曰、忝講得經論二十餘本。師曰、莫是師子兒否。主曰不敢。師作嘘嘘聲。〈云云。〉

③釋氏要覽［上ノ十四丈］曰、摭言曰、有司謂之座主。今釋氏取學解、優瞻穎拔者、名座主。謂一座之主、古高僧、呼講者爲高座。或是高座之主。

（佐野泰典）

【三三一】大衆

①忠曰、大衆者、謂多衆也。

②舊説曰、疏家謂、衆者、四人非一、崇成衆法。梵言僧伽耶、和合義。非四人則不成和合義故。記家。謂三人曰、衆。衆字從三人故。〈泉涌寺、南山爲疏家大智爲記家。〉

③　國語周語［五丈］曰、獸三爲羣、人三爲衆、女三爲粲。

④善見毘婆沙律［八ノ十丈］云、衆者、如律文説三人名衆。從此以上名爲僧。

⑤淨名疏［一ノ三十五丈］云、梵言僧伽、此翻爲衆。直一比丘、不名爲衆。衆多共集、名爲衆也。律明、四人已上、皆名爲衆。如衆樹共聚、乃名爲林。

⑥四分律［二十九ノ十丈］云、衆者、若四人、若過四人。
⑦十誦律［三十ノ廿一丈］云、佛語諸比丘、清淨同見、四比丘、是名衆僧。若五比丘、清淨同見。十比丘、二十比丘、清淨同見。皆名衆僧。〈略鈔〉
⑧放光般若經［四ノ十三丈］曰、佛告須菩提。大衆者、謂須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、初發意菩薩摩訶薩、至阿惟越致地住者、是爲大衆之聚。
⑨智度論［四十五ノ四丈］云、大衆者、除佛、餘一切賢聖。

（荒川玄梁）

【三三二】僧

①僧伽耶之略言也。
②僧史畧［下ノ六十六丈］云、若單曰僧、則四人以上。方得稱之。今謂分稱爲僧、理亦爽。如萬二千五百人爲軍、或單己一人、亦稱單也。僧亦同之。
③行事鈔［上一四ノ一丈］云、僧者、以和爲義。資持記僧者、通目七位。一二三人、雖不秉衆法、亦得名僧。以僧假別成、從因彰號。和者、有六。戒見利三、名體和。身口意三名相和。
④五分律［三ノ二十三丈］云、僧者從四人已上。
⑤毘尼母論［六ノ十四丈］云、比丘僧者、一二三人不成僧。四人成僧、五人僧、十人僧、二十人僧。

（佐野泰典）

【三三三】比丘

①釋氏要覽［上ノ七丈］云、梵語云比丘、秦言乞士。謂上於諸佛乞法、資益慧命、下於施主、乞食資益色身。　肇法師云、因果有三名。一名怖魔。即因出家時、魔宮震動。故至果上名殺賊。〈有云、出家者、具正信正因、發勇捍心、求佛果大菩提、誓度一切衆生眞實大心者、方能震動魔宮爾。〉二因中名乞士、果上名應供。三因中名破惡。〈即持戒名破惡。〉至果上名無生。　涅槃經云、能破煩惱故名比丘。破我等想、修戒定慧、度三有四流、安處無畏道。故名比丘。　大莊嚴經云、破無明藏、故明比丘。　瑜伽論云、比丘者捨離家法、趣非家等。具足別解脱律儀衆同分。是其自性。於其形色、勤精進故、怖畏惡趣、自防守故、攝無損故名比丘。毘婆沙論偈云、手足勿妄犯。節言順所行、常樂守定意。是名眞比丘。　雜阿含經偈云、所謂比丘者、非但以乞食、受持在家法、是何名比丘。於功德過惡、俱離修正行、其心無所畏、是則名比丘。　大威德陀羅尼、有一長者。名選擇。投佛出家剃髮已。時有尊者婆難陀、喚言長者。選擇答曰、我今出家剃髮爲比丘。非長者也。時婆難陀語曰、不但剃髮名爲比丘。乃以偈說云、若斷欲希望、復斷諸漏盡、諸法無希望、不可說有法、隨順向涅槃、隨順趣厭離、入信到彼岸。此成爲比丘。有四種比丘。一畢竟到道比丘、謂阿羅漢。二示道比丘、謂三果聖人。三受道比丘、謂初果向。四汚道比丘、謂凡夫破戒者。〈凡夫持戒比丘、隨信隨戒法故、必在受道下稱也。問汚道比丘、堪爲福田否。答大婆娑論云、汚道比丘、雖破戒而不破見、雖破加行、不破意樂。信有因果、如是。正見意樂、九十六種外道所無、但施主於彼起正信、不生嫌惡。自生大福矣。〉
②智度論［三ノ十四丈］云、比丘名乞士、清淨活命故。〈乃至〉復次比名破、丘名煩惱。能破煩惱故名比丘。復次出家人名比丘。譬如胡・漢・羌・虜、各有名字。復次受戒時、自言、我是某甲比丘、盡形受持戒。故名比丘。復次比名怖、丘名能。怖魔王及魔人民、當出家

剃頭、著染衣受戒、是時魔怖、何以故怖。魔王言、是人必得入涅槃。如佛説、有人能剃頭、著染衣、一心受戒。是人漸漸斷結離苦入涅槃。

③維摩經註［一ノ六丈］云、肇曰、比丘秦言、或名淨乞食、或名破煩惱、或名淨持戒、或名能怖魔。天竺、一名該此四義。秦言無一名以譯之。故存義名焉。

④　忠曰、比丘號。不必局聲聞僧。

⑤　馬鳴『遺教論』［廿二丈］云、此修多羅中、每説比丘者、示現遠離相故、復示摩訶衍方便道與二乘共故、又於四衆、亦同遠離行故。　住法記釋第二義云、欲明比丘之號、不局聲聞。取其所修、皆受斯目。方顯遺教、普被羣機。

（廣田宗玄）

【三三四】尼大師

①忠曰。比丘尼稱大師與徽號賜大師之類。別也。

②正宗贊［一ノ卅七丈］雪峰眞覺禪師傳云。師象骨巖接人。後欲往松山建寺安衆。問大師。借菴基。尼不肯。因與坐禪。約曰。未滿七日出定者輸。尼至六日開眼。師遂奪其基。建寺。

③宗門統要續集［十一ノ廿三丈。○又聯燈十三ノ十四丈］云。都尉李文和公。臨薨時。膈胃躁熱。因尼道堅就枕問云。都尉。衆生見劫盡。大火所燒時。切要照管主人公。尉云。大師與我煎一服藥。來。尼無語。尉云。者師姑。藥也不會煎。投枕而去。

④　忠曰。可作李和文。往往字倒。非也。

⑤大慧杲和尚普説［三ノ十四丈］有尼慈明大師請普説。

⑥普燈録［八ノ廿二丈］甘露仲宣禪師法嗣。平江府妙湛尼。慈鑑大師文照。　又［九ノ廿一丈］枯木成禪師法嗣。東京妙慧尼。淨智大師慧光。　又石門易禪師法嗣。遂寧府香山尼。佛通大師。

⑦雲臥紀談［下ノ一丈］云。東都妙慧尼寺住持。淨智大師慧光。〈乃普燈所載者。〉

⑧倦遊雜録云。熙寧中。王禹玉丞相奏。亡妻慶國夫人鄭氏。臨終遺言。乞度爲女眞。敕特許披戴。賜名希眞。仍賜紫衣。號沖靜大師。

⑨　宋莊綽雞肋編［孚廿七］云。京師僧。諱和尚。稱曰大師。尼諱師姑。呼女和尚。

⑩　近有名執弊集［続十三丈］者曰。按毘那耶律云。尼女十夏以上。其徒尊之爲大姉。二十夏以上。其徒尊之爲大師。　燕南記譚［後下廿九丈］同此。

⑪　忠曰。此大妄説。惑後生者也。凡律藏有毘奈耶名者。一一點檢。絶無此語。

（並木泰淳）

【三三五】師姑

①尼稱師姑。

②傳燈録五臺智通禪師章云、初在歸宗會下、時忽一夜巡堂。叫云、我已大悟也。衆駭之。明日歸宗上堂。集衆問、昨夜大悟底僧出來。師出云、智通。歸宗云、汝見什麼道理。言大悟。試説似吾看。師對云、師姑天然是女人作。歸宗默而異之。

③宗門統要［十ノ二丈］云、鄭十三娘、年十二歳、時隨師姑。到大潙。纔禮拜起。潙便問、這箇師姑甚麼處住。姑云、南臺江邊住。潙便喝出。又問背後老婆。甚處住。十三娘放身、近前叉手立。潙再問。娘云、早箇呈似和尚了也。潙云去。

（荒川玄梁）

【三三六】道人

①尼稱道人。

②雲臥紀談［下五丈］云、無際道人、乃張侍郎淵道之女。超宗道人、乃劉侍郎季高猶子之母。其於大慧老師之門、俱受記莂者。

③普燈録［十ノ廿丈］死心新禪師法嗣云、空室道人智通者、龍圖范峋女也。〈峋會元［十八ノ十六丈］作珣。〉又［十五ノ廿丈］圓悟勤禪師法嗣、覺菴道人祖氏、建寧游察院之姪女也。

④誠齋朝天集［五ノ尾］云、臨川蔡教授詵之母、徐氏、諱蘊行、自號悟空道人。

（白川邦與）

【三三七】檀那

①南海寄歸傳［一ノ廿九丈］云、梵云陁那鉢底、譯爲施主。陁那是施、鉢底是主。而云檀越者、本非正譯。略去那字、取上陁、音轉名爲檀。更加越字。意道、由行檀捨、自可越渡貧窮。妙釋雖然、終乖正本。舊云、達嬾者訛也。

②資持記［下三之三ノ廿五丈］云、檀越亦云檀那、並訛略也。義淨三藏云、具云陀那鉢底。此翻施主。

（白川邦與）

【三三八】檀越

①敕修清規［上二ノ五丈］普説云、有檀越特請者。有住持爲衆開示者、則登法座。

②首楞嚴經［一上ノ廿四丈］云、阿難、心中初求最後檀越、以爲齋主。長水疏、檀越此云施者。

③飜譯名義集［一ノ五十四丈］云、稱檀越者、檀即施也。此人行施越貧窮海。又見檀那處。

④祖庭事苑云、檀那此云施者。越謂度越彼岸。

⑤忠曰、或越爲漢語、或兼越爲梵語。以余觀之、兩字爲梵語者近是。又唐時安秀諸師、對天子、稱檀越、見貧道處。

（白川邦與）

【三三九】功德主

①檀施之人、曰功德主。

②虚堂愚和尚顯孝録［一ノ五十九丈］云、次拈香、奉爲革律爲禪、功德主、侍讀尚書。資陪祿算。

（白川邦與）

【三四〇】居士

①祖庭事苑［三ノ廿五丈］云、凡具四德、乃稱居士。一不求仕官、二寡欲蘊德、三居財大富、四守道自悟。又菩薩行經云、有居財之士、居家之士、居法之士、居朝居山之士、通名居士也。

②法華文句［五ノ十二丈］補注云、外國居財一億爲下居士。乃至居財百億名上居士。此士、

居家德業充備、故名居士。又居家大富財多財之士、名居士也。

③五分律［廿一ノ十六丈］云、瞻婆城長者子、名首樓那。大富有二十億錢。人號曰首樓那二十億。有三人居士。并二十億爲四。瓶沙王問言、汝各有幾財、得爲居士。第一人言、我錢有十三億。第二人言、我有十四億。第三人言、我有十四億。又有一無價摩尼珠。二十億言、我有二十億。復有五百摩尼珠、一摩尼寶牀。

④首楞嚴經［六ノ六丈］云、若諸衆生、愛談名言、清淨自居。我於彼前、現居士身、而爲説法、令其成就。　長水疏、博聞強識、不求士官、居財大富、秉志廉貞。故曰居士。

⑤　又長水［楞嚴一上ノ廿四丈］云、守道自怡。寡欲蘊德。故曰居士。

⑥維摩經［二ノ五丈］云、若在居士、居士中尊、斷其貧著。　註什曰、外國白衣、多財富樂者、名爲居士。肇曰、積錢一億、入居士里。寶貨彌殖、故貧著彌深。

⑦智者觀音義疏［四ノ十五丈］云、居士者、多積賄貨、居業豐盈、以此爲名也。

⑧中阿含經［卅七ノ一丈］云、生聞梵志問曰、瞿曇、居士何欲、何行、何立、何依、何訖耶。世尊答曰、居士者、欲得財物、行於智慧。立以技術。依於作業、以作業竟爲訖。

⑨禮記玉藻云、居士錦帶。　鄭康成註、居士道藝處士也。　孔穎達疏、居士錦帶者、用錦爲帶。尚文也。

⑩輟耕録［六ノ十五丈］云、今人以居士自號者甚多。考之六經中、惟禮記玉藻有曰。居士錦帶。注謂道藝處士也。呉曾能改齋漫録云、居士之號、起於商周之時。按韓非子書曰、太公封於齋。東海上有居士。任𠫑・華仕昆弟二人。立議曰、吾不臣天子。不友諸侯。耕而食之、掘而飲之。吾無求於人。無上之名。無君之祿。不仕而事力云。然則居士云者、處士之類、是已。

⑪張無盡護法論、議歐陽脩排佛曰、及其致仕也。以六一居士、而自稱何也。以居士自稱、則知有佛矣。知有而排之、則是好名而欺心耳。豈謂端人正士乎。

⑫又志磐佛祖統紀［四十六ノ廿二丈］曰、居士者、西竺學佛道者之稱。永叔〈歐陽〉見祖印、排佛之心已消。故心會其旨。而能以居士自號、又以名其文集。信道之篤、於茲可見。

⑬又竺仙續叢林公論［十六丈］云、歐陽子好排佛、而乃自稱居士。居士者、乃奉佛弟子、在家之流、能通佛道者也。〈已下引維摩證。〉

⑭　忠曰、儒亦有居士之稱。而所援數書。以謂其稱但在佛氏。而歐陽取之。以爲渠信佛之證矣。欠深攷也。

⑮　大明録［二十ノ十一丈］廣辨居士。今不取之。

⑯忠曰、居士之服、別一樣。　釋氏資鑑［九ノ廿三丈］云、忠肅公馬亮、歴探竺典、尤邃華嚴。忽一日、告所親曰、吾大期非遠。乃絶葷澡頴、更居士服、泊然而逝。

（廣田宗玄）

【三四一】女居士

①婦人亦稱居士。

②物初賸語［十三ノ十九丈］重刊古尊宿語録序云、覺心居士、出善女倫、秉烈丈夫志操。

③天如則禪師録［二ノ七十四丈］普説云、如徐氏了心居士、雖現女人身。同行世間事。其不昧者、終自了然。

④圓菴集［九ノ十丈］賢母沈氏傳云、母名善清、字本然、族出蘇之崑山湖川鄉沈氏。母年及笄、即絶葷食、衣不華飾、好清絜自處。父母強之。於是贅邑之李氏福成。爲其配、既生

伯瑩。遂與夫異室而居、清修苦行。鄉隣多譽之。因稱爲女居士。
⑤明極俊禪師語要［下ノ九丈］有妙清女居士。求坐禪訣語。
⑥徐氏筆精［五ノ十四丈］云、范君和妻。姚氏自號青峨居士。
⑦客窓隨筆［六ノ十六丈。○容齋四筆五ノ四丈。○類林十ノ卅九丈引漁隱］云。趙明誠挺之之子、妻李氏、能文、號易安居士。
⑧堯山外紀［五十四ノ廿一丈］曰、李清照、號易安居士。濟南李格非女、適趙明誠。明誠乃趙挺之子也。

（荒川玄梁）

【三四二】大姉
①舊解［碧古鈔六ノ廿四丈］云、大姉老女稱
②碧巖録［六ノ十三丈］云、七賢女遊屍陁林。遂指屍問云、屍在這裏。人在什麼處。大姉云、作麼作麼。一衆齋證無生法忍。
③敬函［九十三套］七女經。無大姉字。

（荒川玄梁）

【三四三】老郎
①敕修清規［上二ノ廿二丈左］開堂祝壽云。次直廳轎番。莊甲作頭。老郎人僕。參拜。　又尊宿遷化祭次［上二ノ卅丈］、轎番次、有老郎。
②舊解［敕修六ノ十丈］云。老郎者。力者之上首。所謂兄部也。

（荒川玄梁）

【三四四】人力
①力者也。
②通鑑綱目。宋文帝元嘉元年云。臺官衆力。　集覽力謂僕從也。
③俗事考［十一丈］云。俗語人力見北史。
④敕修清規［下一ノ三丈］知浴云。第四通。人力入浴。
⑤羅湖野録［七丈］云。玉泉皓禪師。有示衆曰。一夜雨霧烹。打倒葡萄棚。知事頭首。行者人力。拄底拄撐底撐。撐撐拄拄到天明。依舊可憐生。

（藤原良敬）

【三四五】人僕
①敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次。有方丈人僕。〈又見老郎。〉

（荒川玄梁）

【三四六】某甲
①正字通［辰中廿七丈］云。某以代名。凡未知主名。與不敢斥名者。皆以某代之。禮天王某甫。語某在斯。是也。今書傳凡自稱不書名。亦曰某。
②忠曰某召事物辭。甲以十干分人也。可言某甲某乙某丙等。文字出周禮注。
③困學紀聞［十九ノ七丈］云。某甲。出周禮［七ノ四丈］職内注。

④周禮〔七ノ四丈〕職内註云。某月某日某甲。詔書出某物若干。給某官某事。
⑤祖庭事苑〔二ノ九丈〕云、某甲。某如甘在木上。指其實也。然猶未足以定其名。甲次第之言。亦猶某甲某乙也。
⑥輟耕録〔廿三ノ十五丈〕云。有部民。某甲與某乙鬬毆。〈云云。〉
⑦舊説〔左傳上一ノ廿丈〕曰。凡書某甲兩字者。可知雙字名。書某一字者。可知單字名。然不必如此。如臣僧某。〈敕修清規聖節上堂〉豈單字名而可哉。必須雙字名。
⑧忠曰敕修清規〔上二ノ卅四丈〕遷化下遺書書云。令某馳送。又〔下一ノ十一丈〕請名德首座榜云。侍司某。〈止此。〉此等豈復單字名耶。

（藤原良敬）

【三四七】名諱

①敕修清規〔下一ノ卅二丈左〕遊方參詣云、住持問鄉里名諱及夏在何處。
②品字箋〔戊卅九丈〕云、生時曰名。沒則稱諱。檀弓卒哭而諱。諱之不稱也。今問人名、而曰尊諱者、失其義矣。
ニ）左傳〔杜ノ二ノ十六丈〕桓六年云、公問名於申繻。對曰、名有五。有信。有義。有象。有假。有類。〈申繻、魯大夫。〉以名生、爲信〈若唐叔虞、魯公子友。〉以德命、爲義。〈若文王名昌、武王名發。〉以類命、爲象。〈若孔子首象尼丘。〉取於物、爲假。〈若伯魚生、人有饋之魚因名之曰鯉。〉取於父、爲類。〈若子同生、有與父同者。〉不以國〈國君之子不自以本國爲名也。〉不南嶽石頭是汝師也。遽抵南嶽、一日石頭告衆曰、來日剗佛殿前草、至來日、大衆諸童行各備鍬钁剗草獨師以盆盛水淨頭於和尚前、胡跪石頭見而笑之便與剃髮、又爲説戒法。師乃掩耳而出、便往江西、再謁馬師、未參禮、便入僧堂、以官。不以山川。不以隱疾。〈隱痛疾患、辟不祥也。〉不以畜牲。〈畜牲、六畜。〉不以器幣。

（堀　祥岳）

【三四八】釋氏

①敕修清規〔上二ノ八丈〕肅衆云、悉稱釋氏、準俗同親。
②大般若經〔四百五十三ノ五丈〕云、非沙門、非釋迦子。
③高僧傳〔五ノ五丈〕道安傳云、初魏晉沙門、依師爲姓。故姓各不同。安以爲、大師之本、莫尊釋迦。乃以釋命氏。後獲增一阿含、果稱、四河入海、無復河名。四姓爲沙門、皆稱釋種。既懸與經符。遂爲永式。
④開元釋教録云、秦晉已前、出家者、多隨師姓。後彌天沙門道安云、凡剃髮染衣、紹釋迦種。即無殊性。宜悉稱釋氏。時皆未然。洎譯出阿含經云、佛告比丘、四大河水、入海無復本名。同名爲海。四姓之子、於佛出家。剃除鬚髮、著三法衣、無復本姓。但云沙門釋子。彌沙塞律云、汝等比丘、雜類出家、捨本姓同稱釋子。今稱沙門釋者、蓋天竺出家外道、亦自稱沙門。今以釋字簡之。或單稱釋亦可。若彼此是僧、即不用稱。蓋同釋家、法兄弟故。
⑤僧祇律〔二十八ノ十四丈〕云、佛言、譬如恆河・遥扶那・薩羅・摩醯、流入大海。皆失本名、合爲一味。名爲大海。汝等如是。各捨本姓、皆同一姓、沙門釋子。譬如刹利、婆羅門鞞舍首陀羅、各各異姓、共入大海、皆名海商人。如是比丘、汝等各各、異姓・異家・信家・非家・捨家・出家、皆同一姓、沙門釋子。

⑥避暑録話［下ノ四十八丈］云、晋宋間、佛學初行。其徒、猶未有僧稱。通曰道人。其姓、則皆從所授學。如支遁、本姓關、學干支謙爲支。帛道獻、本姓憑、學于帛尸梨密。爲帛、是也。至道安、始言、佛氏釋迦、今爲佛子、宜從佛氏。乃請皆姓釋。世以釋擧佛者、猶言楊墨申韓。今以爲稱者、自不知其爲姓也。

⑦慧能大師、上唐高宗、辭疾表云、韶州曹溪山釋迦慧能、辭疾表。　慧能生自偏方。幼而慕道、叨爲忍大師、囑付如來心印。傳西國衣鉢、授東土佛心。奉　天恩、遣中使薛、召能入内。慧能久居山林、年邁風疾。　陛下德、包物外、道貫萬民。育養蒼生、仁慈黎庶。旨弘大教、欽崇釋門。恕慧能居山養疾、修持道業、上答　皇恩、下及諸王太子。謹奉表、釋迦慧能、頓首頓首。

⑧忠曰、釋迦慧能、即釋慧能也。釋具言釋迦耳。

（廣田宗玄）

【三四九】法名

①忠曰。凡名加祖字宗字者。祖之宗之之意也。祖宗者。尊崇之也。其所尊崇者。下某字是也。而今人不詳此義。浪加祖宗字非也。今以明極語。證之。

②燄慧語要［上ノ十七丈］金菴主警策云。菴主名宗金。求語爲警策。余曰。古人既説。金多亂人心。汝苦要宗他作麽。莫是以其爲世間至重之寶歟。莫是以其有堅剛不壞之德歟。又［上十八丈］宗禪禪人警策云。汝既名宗禪。宜宗此禪。便須二六時中。提趙州狗子無佛性話。

③東都事略［卅二ノ六丈］張齋賢傳云。自言。慕唐李大亮之爲人。故字師亮。〈止此。〉此以大亮爲師之義。

④傳燈録［十四ノ七丈］丹霞天然禪師章云。初造江西。馬祖曰。南嶽石頭。是汝師也。遽抵南嶽。一日石頭告衆曰。來日剗佛殿前草。至來日。大衆諸童行。各備鍬钁剗草。獨師以盆盛水。淨頭於和尚前胡跪。石頭見而笑之。便與剃髮。又爲説戒法。師乃掩耳而出。便往江西。再謁馬師。未參禮。便入僧堂内。騎聖僧頸而坐。時大衆驚愕。遽報馬師。馬躬入堂。視之曰。我子天然。師即下地。禮拜曰。謝師賜法號因名天然。

⑤聯燈會要［十九ノ廿二丈］道吾智禪師章云。師見南泉泉問。闍梨名甚麽。師云宗智。泉云。智不到處。作麽生宗。師云切忌道著。泉云。酌然道著即頭角生。

⑥雪竇顯禪師録［一ノ十六丈。〇聯灯廿七ノ卅一丈］云。問僧。闍梨名什麽。僧云宗雅。師云雅即不問。作麽生是宗。僧無對。師云。且限三日。其僧頻來下語。師皆不諾。僧却問。某甲見處。只恁麽。和尚。作麽生。師云。爾何不問我。僧方擬問。被師連打數下。

（佐野泰典）

【三五〇】道號

①忠曰。以號表所得之道也。即是表德號。今時以字爲道號。而道號之外。有表德焉。

②禮記郊特牲云。冠而字之敬其名也。

③大慧杲禪師答許壽源書［書廿八丈］云。左右具正信。立正志。此乃成佛作祖基本也。山野因以湛然名公道號。

④又答楊彦侯書［七十二丈］云。承需道號。政欲相塗糊。可稱快然居士。

⑤明極俊禪師語要［下ノ十九丈］曰。諏方性了居士。過門需字以號其道。余摭達空二字。授

之。　又［号説ノ十三丈。○又十八丈。○又題跋二丈号其道］云。崇福胤公藏主。問號於予。予曰。夫胤者繼也嗣也。受經所稟師訓。名既曰胤。宜以嗣宗二字。號其道。

⑥　忠曰語要所言。道號字義。自炳然。

⑦　虎關錬和尚［紙散卅丈］曰。聖一在中華時。需道號於無準。準曰。汝鄉里名何。一曰駿河州久能。準云。不可別求。但久能爲號。可也。

⑧　勸善書［九ノ廿一丈］云。宋僧惠詢。道號月堂。俗陳氏。

⑨古今印史［廿六丈。○説孚卅六丈］云。道號之稱。雖起於末世。然義各有取。或因性急。而以韋自勉。或因性緩。而以弦。自厲。有思親［狄仁傑事］而號望雲江湖。而號散人。紛然不同。然皆士流則有之。今也不然。而胥吏之徒。往往而有。以號者衆也。恒慮其相同。崇尚新奇。有名木者。號曰半林。有姓管名簫者。號曰四竹。穿鑿亦甚矣。於義何居。且習以成俗。而稱謂之間。有不諳大義者。或責其友曰。我長於汝也。曷不以號稱。而字我邪。嗟夫孔子祖也。子思孫也。嘗稱仲尼。明道兄也。伊川弟也。嘗稱伯淳。蓋字之者乃所以尊之也。何獨取於號乎。古者相語名之質也。周人尚之以字文矣。末世別以號稱。彌文也哉。

（佐野泰典）

【三五一】別號

①又言別稱。即表德也。

②釋氏通鑑［五ノ十六丈］梁武帝普通四年紀云、制中外、毋斥法師慧約名、別號智者。沙門別號、自是而始。

③楊升菴外集［五十九ノ十九丈］云、幼名、冠字。長而伯仲。沒則稱謚。古之道也。未聞有所謂別號也。杜甫・李白倡和互相稱名。張仲・吉甫・雅什、但聞舉字。近世士夫、多稱別號。厥名與字、蕾然不知。傳刻詩文。但云張子・李子。或云、某菴・某齋。當時尚不諳其誰何。後此安能辨其甲乙。愼所著詩篇多舉交遊之字。或書其名于下。庶乎觀者。俾言與事諧情景相對。不知者、或以爲輕之、異哉。又近日民風漓猾。白衣市井。亦輒稱號。永昌有鍛工。戴東坡巾。屠宰號一峯子。一善謔者、見二人竝行。遥謂之曰、吾讀書甚久、閲人固多。不知蘇學士善鍛鐵、羅狀元能省牲。信多能哉。相傳以爲笑。

③丹鉛總録［十ノ一丈］云。戰國策秦惠王時、有寒泉子。注云、秦處士之號、史記索隱云、甘茂居渭南陰鄉之樗里、故號曰樗里子。又范蠡去越、自稱鴟夷子。此固後人別號之所昉乎。

（堀　祥岳）

【三五二】表德號

①忠曰、禪祖、昔但有名而已。臨濟之義玄、徳山之宣鑒之類也。後世便有道號、謂字也。後又道號外、有表德號。其實、道號即表德耳。

②華嚴經清涼疏［十二ノ二丈］云、召體曰名。表德爲號。名別。號通。一切諸佛、通具十號。名釋迦等、則不同故。　鈔亦有釋云、表德爲字、響頌人天曰號。

③　忠曰、號通者、禪林稱和尚禪師等也。

④叢林盛事［六十丈］云、菴堂道號、前輩例無。但以所居處呼之。如南嶽・青原・百丈・黄檗是也。菴堂者、始自寶覺心禪師［普燈四巻四丈］、謝事黄龍、退居晦堂。人因以稱之。自

後靈源死心草堂、皆其高弟、故遞相法之。眞淨與晦堂、出黄龍之門。故亦以雲菴號之。覺範乃雲菴之子、故以寂音甘露滅自標。大抵道號、有因名而召之者。有以生縁出處而號之者。有因做工夫、有所契、而立之者。有因所住道行而揚之者。前後皆有所據、豈苟云乎哉。今之兄弟、纔入衆來、未曾夢見向上一著子。早已各立道號、殊不原其本。故瞎堂遠禪師、因結制次、問知事云、今夏俵扇多少。知事曰、五百來柄。遠曰、又造五百所菴也。蓋禪和、菴纔得、柄扇子便寫箇菴名定也。聞者罔不大笑。余以母氏、夢梵僧頂一月、而投之懷中、既覺遂育、因以古月自號。以安穩眠呼之。蓋彷覺範甘露滅也。二號皆維摩寶積所出。故橘洲曇公、爲余作古月説云、萬古長空、一朝風月、慚愧古人模寫得成也。融禪未生之夕、其母夢得月、是爲生子之祥。愧今人不去却模子也。融禪不負其母。兼不忘古人。古月名菴、不爲忝矣。

⑤ 忠曰、禪祖表德、大珠可爲始。按傳燈［六ノ五丈］師名慧海、姓朱氏、嗣馬祖。祖因覧其所撰頓悟入道要門論。告衆云、越州有大珠圓明、光透自在、無遮障處也。衆中有知師姓朱者。迭相推識、結契來越上、尋訪依附。時號大珠和尚者、因馬祖示出也。

⑥ 西京雜紀［四ノ六丈］云、禮曰、字以表德。

⑦ 顔氏家訓［孚十七丈ノ愛日叢抄九丈引］云、名以體正、字以表德。

⑧ 老學菴筆記［二ノ十七丈。○必十ノ五］云、字所以表其人之德、故儒者謂夫子曰仲尼。非嫚也。先左丞每言及荊公、只曰介甫。蘇季明書張横渠事、亦只曰子厚。

⑨ 輟耕録［三十］論印章制度云、漢張安字幼君、有印曰張幼君。唐呂温、字化光、有印曰呂化光。此亦三字表德式。〈詳器物類類印處。〉

⑩ 事林廣記［丁三ノ二丈］云、仲尼者、孔子字也。字是表德也。

已上以字爲表德。

⑪ 祝允明猥譚［三丈］云、道號別稱、古人間自寓懷、非爲敬名設也。今人不敢名、亦不敢字、必以號稱。雖尊行貴位、不以屬銜爲重、而更重所謂號。大可笑事也。士大夫、名實副者、固多。餘唯農夫、不然自閭市村隴、嵬人瑣夫、不識丁者、未嘗無號。兼之、庸鄙狂怪、松蘭泉石、一坐百犯。又兄山、則弟必水。伯松、則仲叔必竹梅。父此物、則子孫引此物於不已。愚哉愚哉。予每徇人爲記説。多假記以規諷。猶用自愧。近聞婦人亦有之。向見人稱冰壺老拙。乃嫠媼也。又傳江西一令訊盗。盗忽對曰、守愚不敢、令不解問左右。一胥云、守愚者其號也。乃知、今日賊亦有別號矣。此等風俗、不知何時可變。

⑫ 南堂欲禪師録［四ノ偈頌五十六丈］云、承天毅首座號木翁。松月翁更曰剛中、求正於余。余曰、剛中其字也。木翁其號也。

⑬ 北磵文集［七ノ廿三丈］云、妙喜稱覺範、曰甘露滅。何以字稱。

⑭ 宋濂護法録［一下ノ四丈］靈隱樸隱塔銘序云、其諱元瀞、其字天鏡。別號爲樸隱。

⑮ 江湖紀聞後集云、人面虵呼之曰、黎觀主。黎不應、又連呼其孺名、及道號表字、俗時排行。黎終不應、乃不復呼。

已上字外別立表德。

⑯ 周書［通鑑綱目前編七ノ十二丈左引］諡法解云、諡者、行之迹也。號功之表也。車服者、位之章也。

⑰ 白虎通［一ノ七丈］曰、帝王者何。號也。號者功之表也。所以表功名德、號令臣下者也。

（白川邦與）

【三五三】雅號

①忠曰、有雅而呼者、有謔而名者、有誚而稱者。

②羅湖野録［上ノ二丈］云、湖州西余淨端禪師、字表明。觀弄獅子、頓契心法。齋岳禪師、住杭之龍華。端往參禮、機縁相契。不覺奮迅飜身、作狻猊状。岳因可之。自是叢林雅號爲端獅子。

③祖庭事苑［二ノ六丈］云、白頭因、因事立號、叢林素有之。因以少年頭白、故得是名。如●頭副、赤頭璨、钁頭通、安鐵胡、覺鐵觜、劉鐵磨、清八路、米七師、忽雷澄、踢天太、鑒多口、不語通、黒令初、明半面、一宿覺、折床會、岑大蟲、獨眼龍、矬師叔、周金剛、簡浙客、陳蒲鞋、泰布衲、備頭陀、大禪佛、王老師、瀏陽叟、皆禪林之白眉。聞其名者、莫不慕其所以爲道也。

（荒川玄梁）

【三五四】諡號

①僧史略［下七十一丈］云、僧循萬行。故有迹焉。善行則諡以嘉名。惡行則人皆不齒。自漢魏晋宋、無聞斯禮。後魏重高僧法果、生署之以官、死幸之而臨。乃追贈胡靈公。此僧諡之始也。〈果爲沙門統。對公爵、追贈胡靈諡也。〉後周隋世唐初、皆不行。至天后朝、有北宗神秀。居荊州。神龍二年、詔賜諡大通禪師矣。

②白虎通［一ノ十三丈］云、諡者何也。諡之爲言引也。引烈行之跡也。所以進勸成德、使上務節也。故禮特牲曰、古者生無爵、死無諡。此言生有爵、死當有諡也。死乃諡之何。言人行終始、不能若一故、據其終始、從可知也。

③晋書［四十五ノ七丈］劉毅傳云、王宮上疏曰、臣謹按、諡者行之迹、而號者功之表、今毅功德竝立。而有號無諡。于義不體。

④經國大典［後集上ノ九丈］註解云、諡誄其平生行迹、以易名也。

⑤竺仙仙禪師淨智録［卅八丈］云、帝詔徑山欽禪師至、賜國一禪師。此誠有道德、感於君王召賜、如此。而本無道德、而求討一箇虚號。不知何用。後來六祖、也不討。不知何人。也諡他、爲大鑒禪師。達磨也有人、諡他曰圓覺大師。如今才諷經回向時、便口裏念。我道、也不消得。他達磨六祖、心裏也不以爲榮。也沒甚麼懽喜。者般説話、若如今人、本師已死、有師號者、必定怪殺我。其師未死。無號者、未定。我死後、必定小師。也者般弄我、必在陰空裏打。莫言不道。又有好笑底事。你道是甚麼事。釋迦老子、却沒人諡他、不知如何。畢竟無德耶。

⑥佛祖統紀［十八ノ四丈］善月法師傳云、善月字光遠。將入寂顧左右曰、人患無實德、爲後世稱。若但崇虚譽、我則不暇。千載之下、謂吾爲柏庭叟、則吾枯骨爲無愧。幸勿爲請諡、以汚我素業。言已、累足而化。

（篠塚純海）

【三五五】徽號

①諡號又言徽號。本旌旗之名。借用。

②陳后山詩集［十二ノ十四丈］追尊皇太后挽詞云。典冊尊徽號。欽慈煥德名。　注徽號字、見禮記後人借用。

③康熙字典［寅下七十八丈］曰。徽爾雅釋詁。善也。疏徽者美善也。書舜典愼徽五典。又與

徽通。幟也。禮大傳。聖人南面而治天下。必改正朔。殊徽號。註。徽號。旌旗之屬也。

（藤原良敬）

【三五六】安名

①爲新戒者。初命法名也。

②增壹阿含經［三十七ノ五丈］云。世尊告阿難曰。自今後。不得稱父母所作字。　又云。諸比丘。欲立字者。當依三尊。此是我之教戒。

③聯燈會要［十九ノ十三丈］丹霞然禪師章云。師再謁馬祖。未參禮。便入僧堂。騎却聖僧項而坐。〈乃至〉馬大師入堂見。即笑云。我子天然。師跳下作禮云。謝師安名。因名天然。〈詳法名處。〉

④廣燈録［八ノ十七丈。○会元四ノ二丈］黄檗斷際禪師章云。裴相一日。托一尊佛。於師前胡跪云。請師安名。召云裴休。休應喏。師云與汝安名竟。相公便禮拜。

（藤原良敬）

【三五七】具位

①［敕鈔十五ノ廿丈左］具載位名。言具位也。

②敕修清規迎待尊宿。請湯狀尾云。年月日具位狀。文選任彦升撰。宣德皇后令云。宣德皇后。敬問具位。　註濟曰。具位。謂在位百官也。

（藤原良敬）

【三五八】人氏

①敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂榜式云、掛搭一僧某甲上座、某州人氏某戒。

②干寶搜神記［一ノ十二丈］云、漢時有杜蘭香者、自稱南康人氏。

③　堯山堂外紀［廿三ノ廿三丈］云、唐權龍褒、夏日侍皇太子宴、獻詩云、嚴霜白皓皓、明月赤團團。或曰、豈是夏景。答曰、趁韻而已。太子援筆譏之曰、龍褒才子、秦州人氏、明月晝耀、嚴霜夏起。如此詩章、趁韻而已。

④　忠曰、人氏又作人事。蓋、事與氏音通。假借而已。〈人事義多、詳禮則類。〉作氏爲正。

⑤傳燈録虎谿菴主章［十二ノ廿七丈。○会元十一ノ廿一丈］云、有僧問、和尚何處人事。師云、隴西人。

⑥法華擧和尚録［古宿廿六ノ十一丈］云、天使牛太保入寺、師云、天使甚處人事。使云、東京城裏人。

⑦大慧武庫［一丈］云、湛堂準和尚、初參眞淨。淨云、甚處人事。準云、興元府。　又［十七丈］云、眞淨和尚小參云、人人有箇生緣、那箇是上座生緣。便道某是州人事。是何言歟。

⑧　普燈録［十五ノ十六丈］佛海遠禪師章云、老僧本貫、眉州眉山縣人事。

⑨　西巖慧和尚東林録［二丈］拈睦州偸果話云、陳尊宿將謂、是睦州生緣。元來却是普州人事。　又法語［三丈］云、西巖老漢、是蓬州人事了也。

（堀　祥岳）

【三五九】上肩　下肩

①忠曰、在己位上人、言上肩。在下人、言下肩。
②日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云、看上下肩、以面相朝揖食。
③　又左肩謂上肩義別。見身肢類。

（堀　祥岳）

【三六〇】肩上　肩下
①己位上下也。同上肩・下肩。
②敕修清規兩序交代茶云、西序請茶。則知事分手坐於同列頭首中。請肩下一人光伴。如肩上人赴、坐位相妨。

（堀　祥岳）

【三六一】一行人
①忠曰。一列之人也。
②康熙字典［中下五丈］云。行集韻寒岡切。音杭。類篇列也。左傳隱十一年。鄭伯使卒出豭行出雞犬。註。百人爲卒。二十五人爲行。行亦卒之行列。
③敕修清規［上二ノ十四丈］請新住持發專使云。山門管待專使一行人從。至起程日。講茶湯禮。　又［上二ノ卅二丈］尊宿遷化入塔云。主喪同喪司一行人。巡寮致謝。
④　瑯琊代醉編［廿六ノ十一丈］云。維志。王文恪。留守西京日。長水縣申請買木錢。數百千。王視其状。亟呼吏作教。下縣令追買木。一行人。械送府。〈云云。〉

（藤原良敬）

【三六二】合干人
①忠曰、凡合會干預一種事務人、曰合干人。
②　正字通［寅下一丈］云、唐萬年公主傳、無干時事。註干預也。
③敕修清規［上二ノ廿八丈］請喪司職事云、喪司合干人僕、排單掲示。　又唱衣［上二ノ卅二丈］云、喪司合干人。貴在公心主行。

（荒川玄梁）

【三八一】四寮
①有數説。詳殿堂門四寮。〈庫司頭首、單寮、蒙堂。〉

蘆田太玄

【三九〇】禪頭
①首座稱禪頭。
②大鑑清規［六十丈］、淨智寺首座寮●云、僧堂坐禪、號令之權、在首座、不在住持。首座謂之禪頭。衆僧皆聽命於首座、切須力行勉勵後學。
③祖庭事苑［五ノ一丈］、天衣懷禪師傳云、晚謁翠峯明覺、因營衆務。汲水憺忽墮地、師豁然知歸。由是名振叢林、皆目之爲禪頭云。

僧寶傳法昌遇禪師傳［六冊十丈］云、大寧寬禪師至、遇畫地作此●相、便曳钁出。翌日未陞座、謂寬曰、昨日公案如何。寬畫此●相、即抹撤之。遇曰、寬禪頭、名下無虛人。

④ 大慧爲秦國夫人請普説［上ノ卌丈］云、睦州喚僧、大德、僧回首、州云儋板漢。會有箇頭。擧遮話問僧、你作麽生會。　又爲禮侍者斷七普説［下ノ六十八丈］云、我既會了、却倒疑著幾箇禪頭、乃問老和尚。老和尚曰、能有幾箇、得到你田地。　又方外道友請普説［二ノ五十丈右］云、慶藏主、在潙山、雖僻地裏。與先師入室、其實眞如不會擧他立僧。一日眞如問先師、你去慶藏主處入室否、曰未曾。眞如云、因甚不去。他古今好。先師曰、某侍都去禪頭處入室。

僧寶正續傳［一ノ十二丈左］●潭照禪師傳云、示衆曰、禪頭首座、同行道伴。亦皆教你參學。

蘆田太玄

【三九一】首衆

①首座稱首座。

②虛堂愚和尚徑山録［●ノ五十三丈］云、擧黄檗在南泉會中、爲首衆、一日捧鉢、向南泉位中坐。〈云云。〉

蘆田太玄

【三九二】立僧首座

①舊説［●●九ノ六丈］曰、立僧者、謂成立衆僧也。［鈔九ノ六丈冠注］無定人、首座頭首之外、別於西堂或前堂、及諸耆宿中、擇有道博達之人、敦請、爲衆開法焉。

②［鈔十三ノ二丈］或有請大方尊宿、充之、極爲重任矣。

③夫前堂首座之代主説法者、尚乏人、日本古有闕之。況立僧之名實相符、豈易多得耶。如名德首座、則前堂中、擇稍有德者、爲之。不甚難得其人也已。

④敕修清規［下一ノ十丈］請立僧首座云、其事嚴重、不可輕擧。如大方西堂。名德首座、行解素爲衆所推服者、委曲陳情。

⑤如有允意、特爲上堂言、此間多衆。宜得當人、相與建立法幢、開大爐鞴、山中幸有某人、知見高明、慧命所寄、少刻下座。同兩序大衆拜請、爲衆開室。伏望慈悲。特垂開允下座。〈云云。〉

⑥禪苑清規［七ノ五丈］請立僧云、退院尊宿、首座藏主、如合衆望、可擧立僧。即住持人陞座、擧白訖、知事大衆、詣寮禮請。〈請辭云、大衆傾心、久思示誨伏望慈悲、俯賜開允。〉如不允、更不答拜云。〈自救不了、豈可爲人。〉如允、即時還禮。〈云既蒙堅請、不敢固辭。〉乃上方丈陳謝。禮數隨宜、退院尊行。〈謝云、本欲依棲貴藏衰拙、既蒙見擧、不敢奉違、答云、象駕既臨、法輪常轉、雖然不合奉煩告、以佛法爲念。〉退院平交、〈謝云、方圖自養豈復爲人、上命雖違、下情多愧答云、不合奉煩、且以佛法爲念。〉諸方名德、及參學小師、〈謝云、此蒙和尚指揮今受兄弟問訊雖無深證不敢固辭下情無任惶恐感激之至答云、既有餘光且以佛法爲念。〉竝相看、陳謝知事。

⑦次日堂頭庫下、特爲煎點。〈置食隨意。〉

⑧備用清規［六ノ一丈］請立僧云、若名德之士、受此請。住持座上説及、即抽身歸寮閉門、下座、領大衆扣門。開門接住持入。挿香同衆觸禮一拜。呈納普説入室牌。

已下略擧事縁

⑨大慧杲和尚爲禮侍者斷七普説［下ノ六十八丈］云、老和尚圓悟曰、如今方知道、我不謾你。我既會了、却倒疑著幾箇禪頭。乃問老和尚。老和尚曰、我箇禪、如大海相似。是你將得箇大海來、傾取去、始得。若只將得鉢盂來盛得些子去。便休、是你器量、只如此。教我怎奈何。能有幾箇、得到你田地。

⑩舊時只有一箇●上座、與麽一般。只是死了、過得幾時。便擧我立僧。

⑪後來在雲居首座寮、夜間常與兄弟入室。老和尚、愛來聽。

⑫人天寶鑑［六十六丈］云、慈航小參、長靈卓禪師、命無示立僧、法席嚴肅。不事堂廚。唯安禪以當佳供。夜參以當藥石。其間衲子、有不任者。無示告卓曰、人以食爲先。若是則衆將安乎。卓慍之曰、表率安可爲此。無示云、某不淨。堂廚教誰爭耶。

⑬叢林盛事［八丈］云、應菴初依蔣山圓悟。會中與此菴元爲友。及元住處之連雲。華從虎丘隆會中來。初到便令作首座。未久令立僧。

⑭元上堂云、西河有師子。連雲出虎●。親從猛虎窟中來。文彩爪牙悉皆備。雖未及驚羣、已有食牛志。痛念楊岐宗、今之如●地。竪起鐵脊梁、與先師出氣。諸人還識麽、兩眼大如環。當頭立底是。［十四丈］又云、谷山旦、初參佛性泰和尚。泰問、前百丈不落因果。因甚隨野狐身。後百丈不昧因果。因脱野狐身。且曰、好與一坑埋却。泰徵之。語皆不凡。

⑮未幾令立僧、名動一時。

⑯應菴華禪師天童録［四丈］有擧傑首座。密菴立僧上堂。

⑰密菴傑禪師徑山録［八丈］有擧演首座。立僧上堂。云云。下座詣首座告香。

⑱無準範禪師録［一ノ廿一丈］有請淵首座。立僧上堂。［一ノ廿七丈］又有上元請首座。立僧上堂。

⑲增續傳燈［●ノ●丈］滅翁禮禪師章云、時松源唱道饒之薦福。師往參焉。蒙印可。

⑳辭源巡禮江淮間祖塔。至蔣山浙翁命充立僧首座。晉陵尤公●。數入山聽師提唱語悦服。

㉑虚堂愚和尚録［四ノ廿六丈］有靈立僧普説已下略擧請尊宿立僧事縁。

㉒應菴華禪師蔣山録［●丈］有擧西堂正法和尚立僧上堂。

㉓密菴傑禪師徑山録［七丈］請前堂首座鶴林印和尚。立增上堂。云云。下座煩知事頭首大衆。詣首座寮。扣問。

㉔松源嶽師録［下ノ十五丈］擧首座鳳山義和尚立僧上堂云、諸佛不出世、祖師不西來、佛法遍天下。談玄口不開。既是談玄。因甚口不開、問取鳳山和尚。

㉕癡絶沖禪師天童録［九丈］請蔣山石溪和尚立僧上堂云、正法眼、破沙盆、貴時傾國不換、賤時不直分文、不作貴不作賤、分付石溪老子、共結佛祖深免。

㉖破菴先禪師録行状［四十五丈］云、師歸蜀、初住果之清居、梓之望川、未幾。復振錫而南至●門、時尚書楊公輔、素聞師名。以臥龍招之。留三年、出峽至常州華藏。●菴演、始延師分座立僧、衆皆傾服。

㉗山菴雜録［上ノ廿二丈］云、破菴和尚、退資福趣徑山蒙菴招。委以立僧首座職。

㉘有寶上座者、具大知見。遇住持首座開堂、必横機捷出、迎鋒取勝。一日破菴開室、寶上座至。破菴垂語云、乾坤之内、宇宙之間、中有寶擬議、被打出。

㉙其時寶待破菴擧語盡、乃進語。既於中有處、被打出。以謂破菴故摧我、歸衣單下脱去火後、鄉人收舍利、呈破菴。破菴拈起云、寶上座饒你、有舍利。八斛四斗、置之一壁。還我生前一轉語來。擲地、惟見膿血。聞之於先輩。

【三九三】名德首座

①舊説［敕鈔四ノ廿四丈左］曰、名德非位職之稱。

②［太岳禾上ノ説］前堂首座中、擇有名譽德行者、爲名德首座。其事最重、故諸頭首中。首座爲重首座中、名德爲重。

③名德西堂例知、敕修清規［下一ノ十一丈］請名德首座云、住持須預稟露。

④如有允意、方丈先請茶。兩序光伴、即鳴鼓陞座。更不報衆、住持委曲懇。下座與大衆同伸拜請。鳴鐘、送歸寮。

⑤中阿含經［五ノ六丈］云、烏陀夷、妄非舍梨子説法。

⑥世尊面呵尊者烏陀夷已、語尊者阿難曰、上尊名德長老比丘、爲他所詰。汝以故、縱而不檢。汝愚癡人、無有慈心。捨背上尊名土地神長老。

⑦釋氏要覽［上ノ十八丈］云、名德、名者實也。實立而名從之。仲尼云、所貴名實之名也。德者得也。所謂内得於己、外得於人。常無所失、合而稱之。

⑧阿含經呼舍利弗已下、爲名德比丘。

⑨皎法師高僧傳序云、寡德適時、名而不高。實德潛光、高而不名。

蘆田太玄

【三九四】却來首座

①敕修清規［下一ノ一丈］前堂首座云、雖大方尊宿、若住持能以禮致之、亦請充此職。謂之退位爲人。

②　舊説曰、退位爲人。是爲却來首座。

③　忠曰、却來洞家擧唱、向正位爲向去。自正位來于偏位。爲却來。

蘆田太玄

【三九五】後堂首座

①敕修清規［下一ノ二丈］云、後堂首座、位居後板。輔贊宗風、軌則莊端、爲衆模範。

②蓋以衆多、故分前後。齋粥二時過堂、及坐禪、則後門出入、如●前堂、住持別日上堂、白衆請轉前板、挿單唱食。

③其坐禪坐參、只衆寮前第三下板、即入堂、不必鳴首座寮前板。餘行事、悉與前堂同。〈後堂義、見殿堂類、前板處〉

④　義堂信禪師日工集貞治三年甲辰記曰、四十歲、東林和尚領圓覺寺、請餘充後板、餘以年少。堅臥不起。

⑤　忠曰、義堂以四十歲、爲猶未老、不勝任後板、而不就。由此可驗昔時厚純、亦可痛今日輕躁矣。

蘆田太玄

【三九六】書記

①古稱書狀［敕鈔八ノ九丈］。今分内外。内爲書狀侍者。外爲書記。

②敕修清規［下一ノ二丈］云。書記。即古規之書狀也。職掌文翰。凡山門●疏書問。祈祷詞語。悉屬之。蓋古之名宿。多奉朝廷徴召。及名山大刹。凡奉聖旨敕黄住持者。即具謝表。示寂。有遺表。或所賜所問。俱奉表進。而住持專柄大法。無事文字。取戎幕府。署記室參軍之名。於禪林。特請書記。以職之。猶存書狀。列於侍者。使司方丈私下書問。曰内記云。而名之著者自黄龍南公始。又東山演祖。以是職。命佛遠公。欲以名激之。使兼通外典。助其法海波瀾。而先大慧亦嘗充之。凡居斯職者。宜以三大老爲則可也。

③忠按。聯燈普燈會元正宗贊等。皆云。佛眼爲知客。未見爲書記。普燈云。佛鑑主五祖書記。恐今誤爲佛眼乎。

④忠曰。記室參軍。武官也［鈔八ノ九丈］。杜氏通典［二十九ノ四丈］武官大將軍云。晉增置司馬一人。從事中郎二人。主簿記室督各一人。

⑤事文類聚［遺集十四ノ十一丈］引續漢百官志云。三公大將軍。皆有記室。主上表章報書記。雖列於上宰之庭。然本於從事之職。

⑥禪苑清規［三ノ七丈］云。書狀之職。主執山門書疏。應須字體眞楷。言語整齋。封角如法及職尊卑觸淨。僧俗所宜。如與官告員書信。尤不得妄發。每年化主書疏。預先安排。即事應須子細點檢恐封角差賺。及漏落施主名銜。如寫常住書信。即用常住紙筆。如寫堂頭書信。即用堂頭紙筆。如發自己書信。不宜侵用。輕塵積嶽。宜深戒之。新到茶湯。特爲禮。不可闕。院門大榜。齋會疏文。並宜精心製撰。如法書寫。古今書啓。疏詞文字。應須遍覽。以益多聞。若語言典重。式度如法。千里眉目。一衆光彩。然不得一向事持筆硯。輕侮同胞。不將佛法爲事。禪月齋己。止語詩僧。買島惠休流離俗官。豈出家之本意也。

⑦備用清規［七ノ六丈］云。書記。聲名清雅。翰墨典嚴。製文須合古規。發語當爲新鑑。悚動觀聽。輝映林泉。若曰佛祖慧命。豈在茲乎。黄龍南和尚。遇雲峯悦禪師。指見慈明。方決大事。謀西江。華藏遁菴會下充書記。代赴張循王府陞座。到府門問曰。書記若會禪。家間自有教授。謀即婦寺。焚却所蓄文字。徑造天童。默耕此道。凡十年。不出僧堂。方了大事。後住雪竇至天童。法道大振。任重致遠。叢林共知。

⑧慈覺龜鏡文云。爲衆僧典翰墨。故有書狀。又云。　手不把筆如救頭然。所以報書狀也。又云。　書狀不工。文字蔑裂。非書狀所以飾衆也。　又云。事持筆硯。馳騁文章。非所以報書狀也。

⑨無文印［十九ノ八丈］寄隆瘦巖書云。古無書記。見於清規。惟書狀。書記云者。創置於中古諸老。非百丈意也。第數十年來。謬謬相承。冒其氏名者多耳。

⑩舊説［敕鈔八ノ十一丈］曰。書記雖班藏主上。然其職掌卑。猶如知客雖在侍香上。其職却卑。

⑪　已下略出事縁。

⑫碧巖録［二ノ五丈］云。唐宣宗乃大中也。武宗即位。潛遁在香嚴和尚會下。後剃度爲沙彌。未受具戒。後到鹽官會中。請大中作書記。

⑬林間録［上ノ六十三丈○禪類九ノ十六丈］云。嵩明教。初自洞山。游康山託迹開先法席。主者以其佳少年。鋭於文學。命掌書記。明教笑曰。我豈爲汝一盃薑杏湯耶。因去。居杭之西湖。三十年閉關。不妄交。

⑭僧寶傳［五冊八丈］黄龍慧南禪師傳云。登衡嶽。寓止福嚴。老宿號賢叉手者。大陽明安之嗣。命公掌書記。

⑮ 北磵文集［五ノ十丈］送夢書記序云。古無書記。自積翠老南領徒行脚。叢林稱之。後世嗣其遺響。僅得積翠之一體。餘則百歩半百也。

⑯ 普燈録［十一ノ二丈。○又会元十九の三十七丈］佛鑑懃禪師章云。師見五祖演。大豁所疑。令主翰墨。

⑰ 普燈録［十五ノ三丈。○又通戴二十ノ十九丈］大慧杲禪師章云。師至大寧。見圓悟。於言下。去盡知見。悟曰。始知吾不汝欺。遂命掌翰墨。

⑱ 普燈録［九ノ十七丈。○又通戴二十ノ十四丈］宏智正覺禪師章云。丹霞子淳領大洪。師掌記。

⑲ 有比丘尼命書記者。**談**慧語要［上ノ二十三丈］有比丘尼廓然聖書記者。

（窪田顕脩）

【三九七】【三九八】外史　外記

① 書記又名外史。或名外記〈又見内史處〉皆準朝制。

② 周禮［二十六ノ三十六丈］云。外史掌書外令。〈註王令下畿外〉掌四方之志。〈註志記也、謂若魯之春秋晉之乘楚之**檮**杌〉

③ 雪廬膏云。江左外史番易釋克新仲銘。

④ 金玉編序云。天曆初。文宗皇帝。以金陵潛邸。爲大龍翔寺。起笑隱禪師主之。而天下學者。雲輸川涌。今水西新公仲銘晩至。以雄才碩學。爲書記。

（窪田顕脩）

【三九九】記室

① 書記又名記室。

② 大慧年譜［十九丈］云。師三十八歳。居天寧記室。

（窪田顕脩）

【四〇〇】藏主

① 備用清規［七ノ六丈］云。藏主。掌握金文。嚴設几案。常備湯茶香燭。延迎。兄弟看經。初入經堂。先白堂主。同到藏司。相看。送歸案位。對觸禮一拜。此古法也。今人物駢集。藏列東西。務在馳名。所職何事。直須宗乘洞達。聖教該通。點對出入經卷。書填殘欠字畫。焙拂補粘。盡心成美。亦爲報佛之恩。名實無辜矣。

② 大藏教貳副。分●東西。見殿堂門。遂有東藏主。西藏主。

③ 慈覺龜鏡文云。爲衆僧守護聖教。故有藏主。又云。明窓淨案。古教照心。所以報藏主也。又云。几案不嚴。喧煩不息。非藏主所以待衆也。又云。慢易金文。看尋外典非所以報藏主也。

④ 藏主本兄弟職。舊説［**鈔八ノ十一丈**］曰。昔竺仙和尚。由書記轉藏主。蓋時乏兄弟。而藏主。本兄弟職故也。

⑤ 已下略録事縁。

⑥ 傳燈録［二十六ノ三十九丈。諸祖偈**頌上之下ノ三丈**］雲居道齋禪師章云。法燈泰欽住上藍院。師乃主輕藏。一日侍立次。法燈謂師曰。藏主。我有一轉西來意話。汝作麼生會師對曰。不東不西。法燈曰。有什麼交涉。曰道齋只恁麼。未審和尚尊意如何。法燈曰。他

家自家兒孫在。師於是頓明厥旨。

⑦續傳燈録［二十七ノ十九丈。又会元］虎丘隆禪師章云。謁圓悟。悟問曰。見見之時。見非是見。見不能及。舉拳曰。還見麽。師曰見。悟曰。頭上安頭。師聞脱然契證。悟叱曰。見箇甚麽。師曰。竹密不妨流水過。悟肯之。俾掌藏教。有問悟曰。隆藏主柔易若此。何能爲哉。悟曰**瞌**睡虎耳。

⑧　按虎丘録［二十二丈］行状。圓悟移道林。師從焉。遂有見見之問答。乃知。掌教在道林時也。

⑨虚堂愚和尚録［十ノ四十五丈］行状云。時笑翁和尚住靈隱。以虎丘舊職。命師再尸藏事。

【四〇一】知藏

①即藏主也。

②敕修清規［下ノ二丈］云。知藏職掌經藏。兼通義學。凡看經者初入經堂。先白堂主。同到藏司。相看。送歸按位。對觸禮一拜。此古規也。今各僧看經。多就衆寮。而藏殿無設几案者。然充其名。當盡其職。函帙目録。常加點對。欠者補完。蒸潤者焙拭。殘斷者粘綴。若大衆披閲。則藏主置簿。照堂司所排。經單列名。逐函交付。看付。看畢照簿。交收入藏。庶無散失。

（窪田顕脩）

【四〇二】藏司

①忠曰。知藏之居處言藏司。〈藏主及知藏處引備用敕修〉故亦呼知藏爲藏司。又見殿堂門。

②普燈録［十九ノ二丈］楚安慧方禪師章云。佛鑑指往大別。既至職藏司。

（窪田顕脩）

【四〇三】經藏堂主

①忠曰。藏主之外。有堂主焉。藏主不居藏殿。堂主。守經。常在藏殿也。

②敕修清規云。凡看經者。初入經堂。先曰堂主。見知藏處

（窪田顕脩）

【四〇四】知客

①敕修清規［下一ノ三丈］云。知客職典賓客。凡官員檀越。尊宿諸方名德之士。相過者。香茶迎侍。隨令行者通報方丈。然後引上相見。仍照管安下去處。如以次人客。只就客司相疑。或欲詣方丈庫司諸寮相訪。令行者引往。其旦過寮床帳什物。燈油柴炭。常令齋整。新到須加温存。維那在假。則攝其行事。僧堂前檢點。行益客僧粥飯。遇亡僧。同侍者把帳。暫到死。主其喪。雪竇在大陽。禪月在石霜。皆典此職。母忽。

②聯燈會要［二七ノ三十三丈］雪竇重顯禪師章云。師在大潙爲知客。李殿院來問云。知客是通老鄉人那。師云不敢。李云。且在這裡。不得亂走。師云。本爲行脚。李云。行脚當爲何事。師云。看亂走底。李大笑。

（窪田顕脩）

【四〇五】典客

①知客又名典客。

②僧寶傳［三冊三丈。又通戴十八ノ三十五丈］雪寶顯禪師傳云。嘗典客大陽。與客論趙州宗旨。客曰。柏樹子因緣。覺鐵觜言。先師無此語。法眼肯之。其旨安在。顯曰。宗門抑揚。那有規轍乎。時有苦行名韓大伯者。貌寒寢。侍其旁。輒匿笑而去。客退。顯數之曰。我偶客語。爾乃敢慢笑。笑何事。對曰。笑知客智眼未正。擇法不明。顯曰。豈有説乎。對以偈曰。一兎横身當古路。蒼鷹一見便生擒。後來獵犬無靈性。空向枯椿舊處尋。顯陰異之。結以爲友。顯盛年工翰墨。作爲法句。追慕禪月公。

③破菴先禪師録［四十四丈左］行状云。見密菴於烏巨。衆纔滿百。然皆一時龍象。命師爲典客。常隨衆入室。密菴爲傍僧。擧不是風動。不是幡動。師聞豁然大悟。從此機語相契。一日密菴遇師於衆寮前。謂師曰。不得問訊。不得叉手。總不得作伎倆。你試露個消息看。師應聲云。方丈裏有客。密菴呵呵大笑。

（窪田顕脩）

【四〇六】典賓

①　即知客也。

②　普燈録［十一ノ十二丈］、佛眼遠禪師章云、依太平事祖。〈五祖〉數載。後典賓海會。雨夜讀傳燈録至破竈墮因緣。忽撥火大悟。

③　明極俊禪師録［普説十八丈］、南洲和尚遠忌普説云、大日本國有善知識、名南洲禪師。生平履踐確實。工夫精專。遊唐七載。參知識於南屏山中。掌典賓任。只一玻璃盞子。驗盡五湖四海龍象。奏凱回來本國。見兀菴。於洗鉢盂話。深領其旨。

（東海宏徳）

【四〇七】客司

①　忠曰、知客之人居處、言客司。〈見殿堂類客司處〉故亦呼知客爲客司。

②　敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云、堂僧堂司給由。暫到客司給由。

（東海宏徳）

【四〇八】知浴

①　敕修清規［下一ノ三丈］云、知浴凡遇開浴、齋前掛開浴牌、寒月五日一浴、暑天每日淋汗。鋪設浴室、掛手巾、出面盆拖鞋脚布。參頭差行者直浴。齋罷。浴頭覆維那首座住持畢。鳴鼓三下。浴聖。桶内皆著少湯、燒香禮拜。想請聖浴。次第巡廊鳴板三下徧。鳴鼓。第一通、僧衆人浴。第二通末、頭首入浴。第三通、行者入浴。此時、住持方入、以屏風遮隔而浴。第四通、人力入浴。監作行者。知事、居末浴。就彈壓之、併點視。令息竈中火。及炭煤。水洒乾淨。有餘柴。搬於遠處。云云。能妙觸宣明、成佛子住、則功不浪施矣。

②　傳燈録［十九ノ廿六丈］、太原孚上座章云、參雪峯。嘗問師曰、見説臨濟有三句。是

否。師曰是、曰作麼生是第一句。師擧目視之。雪峯曰、此猶是第二句。如何是第一句。師叉手而退。自此雪峯深器之。室中印解。師資道成。師更不他遊。而掌浴室焉。一日玄沙上問訊。雪峯曰、此間有箇老鼠子。今在浴室裏。玄沙曰、待與和尚勘破。言訖到浴室。遇師打水。玄沙曰、相看上座。師曰、已相見了。玄沙曰、什麼劫中會相見。師曰、瞌睡作麼。玄沙却入方丈。白雪峯曰、已勘破了。雪峯曰、作麼生勘伊。玄沙擧前語。雪峯曰、汝著賊也。

（東海宏德）

【四〇九】浴主

① 知浴又曰浴主。

② 慈覺、龜鏡文云、爲衆僧浣濯。故有浴主水頭。　又云、輕除靜獻、不昧水因。所以報浴主水頭也。　又云、湯水不足、寒暖失宜、非浴主水頭。以浣衆也。　又云。桶杓作聲、用水無節、非所以報浴主水頭也。

（東海宏德）

【四一〇】浴頭

③ ［勅鈔八ノ十九丈右］直浴行者曰浴頭。

④ 敕修清規知浴云、齋罷、浴頭覆維那首座住持畢。鳴鼓三下。〈詳知浴處〉

⑤ 傳燈録、鏡清道怤禪師章云、因普請鋤草次、浴頭請師浴。師不顧。如是三請。師擧钁作打勢。浴頭乃走。師名曰、來來。浴頭廻首。師曰、向後遇作家、分明擧似。

（東海宏德）

【四一一】知殿

③ 掌佛殿事者、曰知殿。

④ 敕修清規［下一ノ四丈］云、知殿、掌諸殿堂香燈、時時拂拭塵埃、嚴潔几案。或遇風起、須息爐内香火。及結起旛脚。防顧使勿近燈燭。施主香錢、不得互用。佛誕日浴佛煎湯、供大衆。四齋日、開殿門、以便往來瞻禮。

（東海宏德）

【四一二】殿主

③ 知殿又曰殿主。

④ 禪苑清規［四ノ六丈］殿主云、拂拭塵埃、列正供具。以時洒掃、莊飾香燈。參後展席、以待衆人瞻禮。

⑤ 宗門統要［十二ノ十丈〇又類聚九ノ九丈］藥山儼禪師章云、師因遵布衲作殿主。浴佛次、師乃問、汝祗浴得這箇。還浴得那箇麼。遵云、把將那箇來。師休去。

⑥ 斷橋倫禪師瑞巖録［十八丈］、有請殿主上堂。

（東海宏徳）

【四一三】直堂

① 禪苑清規［四ノ七丈］云、直堂之法、從上間第二座被位爲頭、次第輪轉、終而復始。主看守堂中衆僧。被位衣鉢。早晨長板時、大衆集。持直堂牌、於當日上座前、問訊云、上座今日直堂。交牌訖、問訊歸位。〈如食位與被位相遠、即須記被位不看之人、於何粥飯所貴至時不煩尋討。如只在鄰位、亦當下床納牌、受牌人但口所問訊納之、並不下床、〉直堂人、常在堂中。於上下間照管。如有所幹。須請熟分兄弟、暫時看守。並不得赴陞堂。及延壽堂。并外請。念誦諸處茶湯。如全衆出入、除維那指揮鎖堂。並不得擅離所守。至放參後方可隨意。如堂中去失、係是放參已前。方是直堂人位責。〈直堂以放參爲限也。〉欲開函櫃。或抽衣被。並先白直堂人知。如不先報、即當審問。開靜已前、放參已後、衆中兄弟、並不得開函櫃。及抽取衣被。如送入衣被、則不妨。如有所犯、即鄰位及衆人、呵止。不得規避直堂。預遷被位、令堂衆動念。

② 敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云、堂中有直堂牌。刻云、輪次直堂周而復始。住山押。

（東海宏徳）

【四一四】閣主

① 禪苑清規云、閣主殿主、維那所請。〈詳立班小頭首處。〉

（東海宏徳）

【四一五】塔主

① 臨濟玄禪師録［五十一丈］云、師到達磨塔頭、塔主云。〈云云、詳區界類塔頭處。〉

（東海宏徳）

【四一六】主塔侍者

①傳燈録［五ノ七丈○全元一ノ七十一丈］慧能大師章云、塔中有達磨所傳信衣、中宗賜、摩衲寶鉢、方辯塑眞。道具等。主塔侍者尸之。

（東海宏徳）

【四一七】侍眞

④ 忠曰、侍祖塔眞影者、曰侍眞。即塔主也。眞者、祖師形像也。

⑤ 傳燈録［七ノ八丈］盤山寶積章云、師將順世。告衆曰、有人邇得吾眞否。衆皆將寫得眞呈師。云云。

（東海宏徳）

【四一八】聖僧侍者

① 敕修清規［下一ノ五丈］云、聖僧侍者。〈不立班、在衆後行道、堂外粥飯。〉貴有道心。齋粥二時上供、鳴下堂椎、朝夕交點被位、中夜剔燈。同維那、交收亡僧唱衣錢。住持遷化、把帳。頭首秉拂、則爲燒香、或代鳴椎念佛。職滿在本山、當預侍者名。退耕斷橋二老、在衆時、常充此職。以能結衆緣。而勵志于道也。

② 義堂日工集［四ノ七丈］云、府君〈義滿〉問、衣鉢侍者次、是何侍者。曰、聖僧侍者。即秉拂也。常在僧堂。侍于聖僧者。君曰、其職爲貴爲賤。曰此職多以道者充之。或雖勤舊。亦發心自請充者。有之。

（東海宏德）

【四一九】寮元

① ［敕鈔九ノ十七丈］舊説曰、維那司僧堂。寮元司衆寮。

② ［敕鈔八ノ四十九丈右］江西曰、禪林、寮元立班、起於大慧充雲居寮元、爲衆普説。〈按大慧年譜、大慧四十歲、四十一歲、在雲居首座寮焉。〉

③ 寮元亦稱座元。〈見座元處。〉

④ 敕修清規［一ノ八丈］、刻職雜務云、寮元掌衆寮之經文什物。茶湯柴炭、請給供需、洒掃浣濯、淨髮梛巾之類。

⑤ ［下一ノ三十五丈］又大掛搭歸堂云、新掛搭人、行者引見寮元。

⑥ 備用清規［七ノ十一丈］云、寮元之職、隨處毘尼。江左叢林盛時、大慧挂牌普説、班刻西序之下者、當知所自也。

⑦ 清拙清規［六十二丈］梅檀林須知云、寮元、總管衆寮大小事務。好經文雜文字、語録、家私什物等、各依目録交割、維那眼同見。衆兄弟借文書、寮暇、請暇、病暇時、須便送還。

⑧ 叢林盛事［四十五丈左］云、證西林號老衲。長沙人。月菴之嗣。月菴居道林。證爲寮元。已爲兄弟、挂牌入室。其爲人至誠鄭重。雖處暗室。如臨大賓。兄弟見之。其容必莊。

（東海宏德）

【四二〇】寮長

① 敕修清規［下一ノ八丈］寮元云、每日粥罷。令茶頭行者、門外候衆至、鳴板三下、大衆歸寮。寮長分手、寮主副寮對面左右位。副寮出燒香歸位。茶頭喝云、不審大衆和南。

② 解曰、寮長分手者。寮長位于寮元分手也。

（東海宏德）

【四二一】寮主

① 舊説［敕鈔十一ノ十六丈］曰、寮主、輔佐寮元者、侍者類也。

② 敕修清規［下一ノ八丈］刻職雜務云、寮主副寮、凡安衆處、寮元照戒次、自下而上、請充之。寫定名字。預貼牌上。十日一替。佐寮元辨事。旦暮僧衆歸堂、巡視經案。或有遺忘什物者。眼同收拾、付還、及交點本寮什物、提調香湯茶湯。母容外人止宿。及

寄賣物件。猶預定望寮一名、使以次挨補副寮。若寮主遇滿、從維那請交代、副寮遇滿、從寮元請交代。　又［下一ノ卌五丈］大掛搭歸堂云、參頭領衆。行者引至衆寮。鳴内板三下。寮主相接、入門對觸禮一拜。

③　清拙清規［六十二丈］梅檀林須知云、寮主副寮二人、日夜不離衆寮。坐禪時、同寮元、佛前坐禪。諷經過堂、一切隨衆𣪍免。專看守上下間、及前後門。凡諷經過堂時、𣪍關閉前後門。日夜坐禪時、𣪍鎖前後門。其後門打給粥飯。打炭打水時開、餘時常鎖。諸寮大小、人工不許入。凡取點茶之湯、只沙彌喝食入取茶盞及臺。并圓盤盆湯瓶、係副寺管領。日間、寮主看管上間、副寮看管下間。凡有失物、分上下間倍償。如檢點不在寮。令起單。放參後、寮行者、鳴出寮版。一聲、衆隨意鎖櫃先出、行者掩大門一扇。二聲衆盡出。三聲門雙閉。昏鐘鳴下鎖。鑰匙寮元收寮内。夜間不許通僧來往。定鐘時、寮主副寮、及行者、執燭。三人同巡視案櫃。或忘鎖者、與鎖之。或忘收物者、與收起。明日送還之。十日管領、遞相照應義也。五更鐘鳴、行者裝香爐、點燈。請鑰匙。門開一扇。住持知事行香。此時多是賊入。寮主副寮、輪番人。各一日看守。粥時全閉。亦恐有賊。此粥時外寮、莫來燒香。粥罷全開。衆入問訊畢、耆舊隨意燒香。

④　慈覺［敕修下一ノ五十三丈］龜鏡文云、爲衆僧、守護衣鉢。故有寮主。　又云、一瓶一鉢、處衆如山、所以報寮主。　又云、打疊不勤。守護不謹。非寮主所以居衆也。又云、以己方人、慢藏誨盜、非所以報寮主也。

（東海宏徳）

【四二二】知寮

①知寮者、即寮主也。

②諸祖偈頌［■之下ノ■丈］慈受禪師示衆箴規云、放參開籠、須白知寮。

③　日用軌範［勅修下一ノ五十丈］云、粥前齋前、放參後、不得開函櫃。如有急切白主事人。寮中白寮主、僧堂白聖僧侍者。

④　解曰、此寮主者、慈受所謂知寮也。

丸毛俊宏

【四二三】副寮

①備用清規［七ノ十二丈］云、副寮之職、其事繁重、寮中什物、逐一交割、分明。職務一旬、關攝諸事。粥前參後、不許登閣。有急切幹者、須白寮主、書日書名、打板上閣、庶免後患。時時提點湯瓶、夜看火燭賊盜、掃地拭按、換水添香。勿容外人止宿。寄賣物件、子細收藏、衣竿熨斗、洗衣桶、衆人所用之物、各收元處、善用其心、獲勝妙功德也。

②　又見于寮主處。

丸毛俊宏

【四二四】望寮

①舊説［勅鈔八ノ五十丈］曰、望寮轉副寮、副寮轉寮主。蓋自臘少者、次第請向上。
②忠曰、副寮闕、則可轉上補之、故云望也。
③備用清規副寮下、有望寮云、望寮之職、先輩深有意焉。受職到寮、預知寮中細大。副寮出盞點茶、相與收拾。放參藥石、行醋行鹽、。結縁邊事也。
④　又見寮主處。

丸毛俊宏

【四二五】洞脚

①舊説［鈔十四ノ卅一丈］曰、住侍巡寮、住持倚各各寮椅子時、寮主與寮之洞脚、皆進挿香。
②　古解者爲洞脚未詳。
③　忠曰、蓋各寮屬寮主之衆也。未詳字義。
④日工集［一ノ七十一丈］云、守亨書記、求預會下、乃容石屏洞脚。
⑤又［一ノ五十四丈］云、歩往石屏、語諸同脚曰、屋子破損、在在皆是。吾無以爲憂、今經像墨寶無恙、幸矣。
⑥　忠曰、作同。未知孰是。

丸毛俊宏

【四二六】禪客

①舊説［江湖集贈禪客偈鈔］曰、宋國圓悟大慧之後、禪刹例置禪客僧。大刹二人、小刹一人。擇得言句三昧者、蓋官人入寺、屡請陞座説法。及時禪客、出衆問答、名之曰問禪。今叢林差禪客、此其遺風也。或禪客中、有得法者、則讓其主位云。
②晦堂祖心〈寶覺〉禪師語録、長沙安撫謝通議請、就北禪、陞座云、僧問、昔日李翺登藥嶠、雲在青天水在瓶。今日通議臨寶座、乞師一句定宗乘。師曰、潭上無風浪自平。僧曰、還有承當處也無。師曰、爾作麽生承當。僧曰、金烏廻出青霄外、玉兎輝時四海清。師曰、不如退後看。僧曰、大衆證明、學人禮謝。
③　忠曰、此禪客、出衆作頌。又有入衆語。大似今時禪客模樣、而寶覺時、已有之。此可以證舊説、禪客事也。
④敕修清規［上二ノ二丈］上堂云、古之學者、蓋爲決疑、故有問答。初不滯於語言、近日號名禪客。多昧因果、増長惡習、以爲戲劇。■然喧笑、甚失觀瞻。況擧揚宗乘、端祝聖壽。
⑤　忠曰、夫問話者、不憑佛心宗淵源、亂以口頭聲色、粉飾語句、或戲謔模樣、欲動視聽、或坐具擬棒、打地云效臨濟打爺。弄法之罪因、莫大焉。無間之獄果、難逃矣。然自撥無因果、増長此惡弊、可不痛哉。或有惡之、。都禁絶問話、此亦過甚。非令法久住之計、只當止火災、何廢爨燭之用、世之師法、須委悉。
⑥　又見參請類問話處。
⑦龐居士録［上ノ二丈］云、居士因辭藥山、山命十禪客相送。至門首、士乃指空中雪曰、好雪片片、不落別處、有全禪客。曰落在甚處、士遂與一掌。全曰、也不得草草。士曰、恁

麼稱禪客、闍羅老子、未放你在。全曰、居士作麼生。士又掌曰、眼見如盲、口説如瘂。
⑧江湖風月集［上］、復巖己和尚、贈禪客頌云、倒飜一問沒來由、拶得通身白汗流。梅雨打窓聲瀝瀝、重添公案上心頭。
⑨行者亦爲禪客。
⑩虚堂愚和尚録［新添五丈］贈禪客智仁偈云、法戰場中樹勝旗、話頭何似問頭危。古人減竈添兵處、切忌交鋒蹉過伊。
⑪又云、問話行者智仁、炷香請語。以此贈之。景定癸亥、至節、虚堂老僧書于雪竇西菴。

丸毛俊宏

【四二七】放禪客

①忠曰、秉拂預定禪客外、放出問答。名放禪客。
②敕修清規［下二ノ十三丈］秉拂云、秉拂人、令茶頭行者、請聖僧侍者禪客。燒香獻茶畢云、今晩秉拂、輒煩侍者燒香、禪客問話。
③舊解［十四ノ卌三丈］曰、見此語、預差定禪客也。唐土則兄弟名勝秉拂、定禪客外、自他寺他山來者、忽放出於衆前、問答、稱放禪客。日本亦如東福虎關秉拂時、乾峯俄出衆問答。成叢林絶唱。

丸毛俊宏

【四二八】參頭

①有行者參頭［勅修鈔五ノ八丈］〈見下〉有四來參頭。今是四來參頭也。即告香普説等、新歸堂衆中、推舊參、能諳禮樂人一員、爲參頭焉。
②敕修清規［上二ノ三丈］告香云、每夏前告香、新歸堂者、推參頭一人。
③又［同四丈］云、若大衆均預告香、則首座爲參頭。
④又［下ノ卌二丈］遊方參請云、今時遊方掛搭、初到旦過、推熟於叢林、能事者一人、爲參頭。領衆至客司、具威儀、列門首右白云、暫到相看。〈云云〉。
⑤大慧武庫［一丈］云、慈明瑯琊大愚等數人、辭汾陽、相讓不肯爲參頭。汾陽云、此行不可以戒臘推、聽吾一頌。天無頭、吉州城畔展戈矛、將軍疋馬林下過、圓州城裏鬧啾啾。慈明出班云、楚圓何人、敢當此記莂。遂領衆拜辭。
⑥廣燈録［■■ノ三］羅漢院繼宗禪師章云、師行脚時、與數僧、參一老宿。問五人新到、阿那箇是參頭。師云不怕三冬雪、惟憂午夜風。宿云、平地上喫交作什麼。師云、言猶在耳。宿云、且坐喫茶。師云喫茶即得。
⑦聯燈會要［廿七ノ卌一丈・雪竇録一ノ十六丈］雪竇顯禪師章云、一日六人新到相看、師問參頭。夫爲上將、須是七事隨身、兩刃交鋒作麼生。云久**嚮**和尚有此一著。師云、一著放過。還我草鞋錢來、僧便喝、師便打、僧約住棒與師一掌。師云、未到翠峯時、與你三十棒了也。僧無語。師云且過一邊著。却問第二僧、副將作麼生。僧茫然。師云一狀領過。喫茶了。師把住參頭云、適來公案、這裏只恁麼、堂中作麼生擧。僧擬議、師打一坐具、便推出。

【四二九】小參頭　　丸毛俊宏

①敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云、參頭當具小圖習儀。三人一引、每引一人、爲小參頭。須詳記詞語、進退折旋、合度免致臨時參差。

【四三〇】副參　　丸毛俊宏

①忠曰副貳參頭者、此云副參。
②　副參亦有兩。曰行者副參〈見下〉。曰四來副參、今是四來副參也。
③敕修清規告香云、住持就座、副參遞大香一片與參頭、同衆問訊。

【四三一】望參　　丸毛俊宏

①舊說［鈔八ノ五十二丈］曰、日本南禪寺、定望參名、參頭闕、則補其職、猶望寮之例。
②忠曰、望參當補副參之闕矣。

【四三二】開堂請主　　丸毛俊宏

①雪峯悅禪師録［古宿四十一ノ七丈］云、保壽開堂、三聖爲請主。纔陞座、聖推出一僧、保壽便打。聖云、似恁麼爲人、瞎却鎮州一城人眼去在、壽擲下柱杖、便歸方丈。〈聯燈［十一］無請主字、又見叢軌類、開堂處〉

【四三二】開堂請主　　丸毛俊宏

①雪峯悅禪師録［古宿四十一ノ七丈］云、保壽開堂、三聖爲請主。纔陞座、聖推出一僧、保壽便打。聖云、似恁麼爲人、瞎却鎮州一城人眼去在、壽擲下柱杖、便歸方丈。〈聯燈［十一］無請主字、又見叢軌類、開堂處〉

【四三七】執事

①即知事也。

②虚堂愚和尚報恩録［一ノ五十丈］曰、謝執事上堂、一跳一躑、師子嚬呻、一新一舊、和氣如春。報恩、尺不如寸。贏得癡坐。何也。家裏有人。

③周禮［二ノ廿八丈］天宮大宰曰、前期十日、帥執事而卜日、遂戒。　註執事、宗伯大卜之屬。

（桐野祥陽）

【四三八】都文（ツウブン）

①南禪清規［上ノ十六丈］都寺上有都文。

②相國寺、亦古有都文、而班都寺上。〈心華桂長老云。〉

③備用清規［三ノ七丈］被鉢位圖、都寺下、監寺上、有都文。

④夢嚴應和尚録［卅一丈］安持國佛事云、慧日山東福禪寺、都文比丘某。〈云云。〉

⑤希叟曇禪師法華録［八丈］謝坤都文。竝客西堂、上堂云、電捲風旋、搖乾蕩坤、一伸怒臂。相助扶顛、聽古洞生薑。倍增高價、與楊岐破屋、重整頽塼。法華贏得日高眠、蘿窓清夢覺。引客歩松門。春晝永、烏聲喧。拍禪床一下、我行荒草裡、汝又入深村。

⑥　忠曰、希叟用寶生姜會監寺事、都文職掌、可粗知之。

（桐野祥陽）

【四三九】都聞（ツウブン）

①忠曰、蓋都文也。文聞音近、或作聞耳。

②東福清規［百九丈］云、東序轉位、自都聞寮嘘達。　又云、都聞轉位、則令都寺退。而都聞立班其位。新住持入院、則都聞立寺之班。

③鏡堂圓禪師録示法平都聞［九丈］法語云、平都聞、不憚鯨波之險。隨侍建長和尚、而來此。同住一夏。

④忠曰、建長、蓋隆蘭溪也。法平自中華侍來、乃知都聞之稱尚矣。

⑤清拙澄禪師録［日本録四ノ頌古五十丈］有都聞惠聲頌。

⑥靈山隱禪師〈嗣雪岩欽。〉業識團、有慶都聞起龕佛事。

⑦義堂日工集［二ノ十五丈］云、天龍都聞能公。〈云云。〉　［四ノ卅丈］又云、趣相國寺新都聞局、奉接府君之伴也。〈府君義滿公。〉［四ノ卅二丈］又云、中季藏主、送公帖、與南禪都聞、都聞即持公帖來、餘乃受請。

（桐野祥陽）

【四四〇】都寺（ツウス）

①忠曰。位在監寺上。都總諸監寺。故曰都寺。又曰都總。

②［鈔八ノ二丈］舊説曰、或謂、知事卑於頭首、殊不知。都寺是大蒙堂、位居後堂上。凡三歴都寺、則歸單寮。

③　僧史略［中ノ卅三丈］云、夫言寺者、嗣也。治事者、相嗣續於其内也。既用官司之名。無虧佛事之業。故子續其父、資踰於師。此相嗣而接。蹤當克勤而成事也。

④永平清規［下］云、古時監寺而已。近日稱都寺、即監寺也。稱副寺亦監寺也。近代寺院繁務、仍請兩三監寺也。

⑤備用清規云、都監寺、山門重任、貴在得人。百丈監院幹辨公私、今都表是也。大刹多職。書記方任荷負。貴得翰墨清新。黼黻宗社、朝夕勤於香火、歳計攷於簿書、參辭官員、賀謝檀越。出納收支、準備供衆。齋粥常運、勝心待物、不可輕易。行僕有犯、量過行移。罪亡重科、誠告聽恕。莊庫職務、擇擧公心、尊賢容衆、和氣靄然、供衆欠乏、竭力運謀。修造事務、盡心成美。同事才徳、推揚行止、渉私密諭。或大過累及山門、密覆住持、毋聞清衆。方便處置、萬不失一也。二時撥忙赴堂他營語及同事、公私織粟分明。種種愛護常住、如楊岐之佐慈明、石牕之輔宏智。異日遇縁、即宗、人天模範、盛大光明、未可量也。

⑥　虚堂愚和尚徑山後録謝知事上堂云、楊岐挾紙衾、出入庫司、三十年、力輔慈明。用都寺、不點常住油、買大椀造食、供養大衆。〈用都寺、婺州雙林、徳用禪師也、嗣高菴悟『普燈録』載〉

（桐野祥陽）

【四四一】都監寺

①忠曰、即都寺也。都監寺、略言都寺而已。［鈔一ノ廿七丈右］或以爲雙擧都寺監寺二職、者非也。

②敕修清規［下一ノ五丈］都監寺云、古規、惟設監院。後因寺廣衆多、添都寺、以總庶務、早暮勤事香火、應接官員施主、會計簿書、出納錢穀、常令歳計有餘。尊主愛衆。凡事必會議、稟住持方行、訓誨行僕、不妄鞭捶。設當懲戒擯罰、亦須稟議、量情示警、毋縱威暴激變起訟。差設莊庫職務、必須公平。毋用私黨、致怨上下。昔叢林盛時、多請西堂首座書記、以充此職。而都監寺亦充首座書記。否則必臘高歴事、廉能公謹、素爲衆服者、充之。既無取於公、而道福殊勝、上下美留、雖連年不易。或數請再充、又何傷焉。故所在單寮、勤舊、不滿五六人。副寺以下、非歴三次、不歸前資。監寺非三次、不歸蒙堂。都寺非三次、不得居單寮。再請出充者、公界封鑰元房、以避嫌疑。齋粥二時、必趣堂。則行僕行益、自然整肅。如楊岐之輔慈明、石牕之輔宏智。可爲法則。［上一ノ廿一丈左］又聖節黄榜式云、都監寺臣僧某言。

③［鈔一ノ廿七丈右］舊説曰、天竺唯有監寺耳。如都寺、漢土始置、故當監寺爲本。然都寺、却班監寺上。

④　忠曰、舊説云天竺無都寺、蓋依要覽主事四員之説、〈前主事處引而。〉有此言。又云漢土始置都寺者、依敕修清規添都寺之語、而有此言。但如曰都寺漢土後置。故可在監

寺下。則拘事昧義、夫事務繁故、増監寺之員。在數員上位者、可總下位。總之者名都寺。其名雖後有、豈都總者、而可得班所屬之下耶。

⑤睦州陳尊宿録［古宿六ノ八丈］云、睦州僧正、竝諸大徳衆、請師上堂。師問僧正。僧正應諾。師云監寺吟。正云不在。師云、都監闍梨吟。正云不在。師云、上座吟、正云不在。師云、三段不同。今當第一。向下文長、赴在來日。不詞謹退、便起。諸大徳罔措。

（桐野祥陽）

【四四二】都ツ總

①［敕鈔十一ノ廿五丈］都總即都寺也。

②敕修清規［下一ノ卅九丈］謝掛搭云、座元都總、諸位禪師。

（桐野祥陽）

【四四三】都ツウ管

①都寺亦名都管。

②［日本二］清拙澄禪師、南禪録［十九丈］請都管上堂云、有荷衆之力、復有容衆之量。有憂衆之心、復有供衆之念。能具此力量、更存此心念。方可總衆僧之庶、廣梵刹之宏規。佛法與世法無殊。公事與己事一體。護惜常住、如護眼睛、如楊岐之輔慈明。三脚驢遼天聲價。石窓之佐宏智。漏燈盞動地光輝、須是大丈夫兒。方顯大丈夫事、還知麽。瑞龍此日宗風盛。栗棘金圈大播揚。

③大休念禪師録［六巻題分ノ九丈］、月巖頌軸跋云、建長蘭溪和尚神秀、照都管、毘贊叢席、歴試諸難、觀其處己清廉。虚明自照、見其履踐卓絶、高而不危。因命曰月嚴、非其父不知其子。非其子不承其父。〈云云。〉

④希叟曇禪師開善録［十五丈］謝首座藏主秉拂、都管冬齋上堂云、兜率天宮初説夢、修多羅藏又談空。一人人飽純陁味、不與尋常至節同。娟娟蘿月、瑟瑟松風、四壁生涯貧徹骨。敵君王富樂無窮。

⑤義堂信和尚録［三ノ廿四丈］、玖都管預修拈香曰、乾坤之内、宇宙之間、中有一寶。秘在形山、〈乃至〉今有大功徳主、等持禪寺現職都管、寶山玖公、憑此寶力、輔我山門。法輪食輪、左轉右轉、大屋小屋、東樗西樗。〈云云〉

⑥高峯妙禪師録［九十四丈］、有明山都管下火。

⑦朝廷有都管職。　元周密著。天基聖節［正郛五十三］排富樂次［六丈］云、都管、周朝清、陸恩顯。〈二人名。〉

⑧市豪亦有都管。　水滸傳［六十一ノ七丈］云、盧俊義、管家私的主管。姓李名固、盧俊義。見他勤謹、直擡舉他、做了都管。一應裏外家私、都在他身上。手下管著四五十箇行財管幹。一家内、都稱他、做李都管。

（桐野祥陽）

【四四四】庫司

①敕修清規［上一ノ廿四丈］國忌云、庫司報堂司、令行者覆住持兩序。

②［敕鈔二ノ七丈］解者曰、庫司、都寺也。

（桐野祥陽）

【四四五】監寺

①釋氏要覽［下ノ廿六丈］云、會要云、監者總領之稱。所以不稱寺院主者、蓋推尊長老。〈又見主事處〉

②舊唐書［傳五十二ノ五丈］劉子玄傳云、夫言監者、蓋總領之義耳。

③祖庭事苑［八ノ十四丈］云、僧史［――僧史略中ノ四十一丈］曰、知事三綱者、若網罟之巨繩。提之則百目正矣。梵語摩摩帝、此云寺主。即今之監寺也。詳其寺主、起於東漢白馬也。寺既爰處、人必主之。于日難無寺主之名、而有知事之者。至東晋以來、此職方盛。今吾禪門、有内外知事。以監寺爲以首者、蓋相沿襲、而然也。大集等經云、僧物難掌、佛法無主、我聽二種人、掌三寶物。一阿羅漢、二須陁洹、所以爾者、諸餘比丘、皆不具足、心不平等、不令是人爲知事也。更復二種。一能持淨戒、識知業報者。二畏後世罪、有諸慚愧者。今吾禪門、必擇心通法道、而不著諸有、身忘利養者。以掌僧務。此先德之遺意也。

④普燈録［三ノ八丈］、楊岐會禪師章云、慈明自南源、徒道吾石霜。師皆佐之、總院事。依之雖久、然未有省發。每咨參、明曰、庫司事繁、且去。他日又問、明語如前。或謂曰、監寺異時、兒孫遍天下去。何用忙爲。

⑤禪林寶訓［下ノ四丈］云、雪堂曰、高菴住雲居。普雲圓爲首座。一村僧爲書記。白楊順爲藏主。通爲烏頭爲知客。賢眞牧爲維那。華姪爲副寺。用姪爲監寺。皆是有德業者。用姪尋常廉約、不點常住油。華姪因戲之曰、異時做長老、須是鼻孔端正始得。豈可以此爲得耶。用姪不對。用姪處己雖儉、與人甚豐。接納四來、路無倦色。高菴一日見之曰、監寺用心固難得。更須照管常住、勿令疎生失。用姪曰、某失爲小過。在和尚、尊賢待士、海納山容、不問細微。誠爲大德。高菴笑而已。故叢林有用大碗之稱。〈大碗義見都寺處。〉

（桐野祥陽）

【四四六】監院

①監寺。古稱監院。

②禪苑清規［三ノ一丈］云、監院一職。總領院諸事。如官中應副。及參辭謝賀。僧集行香。相看施主。吉凶慶弔。借貸往還。院門歲計。錢穀有無。支收出入。準備逐年受用齋料。米麥等。及時收買。並造醤醋。須依時節。及打油變磨等。亦當經心。衆僧齋粥。常運勝心。管待四來。不宜輕易。如冬齋年齋。解夏齋。結夏齋。炙茄會。端午七夕重九。開爐

閉爐。臘八二月半是。如上齋會。若監院有力。自合營辦。如力所不及。即請人勾當。如院門小事。及尋常事例。即一面處置。如事體稍大。及體面生剏。即知事頭首。同共商量。然後稟住持人行之。自住持人以下。如有不合則矩。不順人情。大小諸事。竝合宛轉開陳。不得緘默不言。亦不得言語麁暴。

③敕修清規［下一ノ五丈］云、古規、惟設監院後因寺廣衆多、添都寺。以總庶務。〈詳于都寺處。〉又［下一ノ十二丈］兩序進退云、知事古規。只列監院・維那・典座・直歳・庫頭、五員而已。〈見單寮處〉

④黄龍南禪師書尺［十一丈］與讓監院書云、固宜乘時適變。畢力毘贊。不可須臾有倦色。異日他時。因緣會遇。皆歸于己。先佛所説。豈可妄言。

⑤慈覺龜鏡文云、荷負衆僧、故有監院。又云、外遵法令、内守規繩。所以報監院也。又云、容衆之量不寛、愛衆之心不厚、非監院所以護衆也。又云、意輕王法、不顧叢林、非所以報監院也。

⑥　碧巖録有則監院、丙丁童子來求火因緣。

（冨増健太郎）

【四四七】院主

①監寺。古稱院主。後爲尊住持。改稱監寺。〈見監寺處。〉又名寺主。〈見監寺處、又見三綱。〉

②馬祖道一禪師録［古宿一ノ七丈］云、師示疾。院主問、和尚近日尊候如何。師曰、日面佛月面佛。

②臨濟録［四十丈］云、師問院主、什麼處來。主云、州中糶黄米去來。〈云云。〉

④廣燈録［十二ノ七丈〇会元十一ノ七丈］興化奬禪師章云、師後到大覺爲院主。一日大覺喚院主、我聞。你道向南方行脚一匝。拄杖不會撥著一箇會佛法底人。你具箇什麼眼。便溜你道。師便喝。大覺拈棒。師擬議。大覺便打。師又喝。覺又打。兩家便休。〈云云。〉

⑤　明極俊和尚録佛事云、瑞雲堂上暘谷院主。〈云云。〉

⑥　宋高僧傳曇一傳［六学二八　五ノ廿六丈］［十四ノ卅丈］云、詔置開元寺、長史張楚、擧爲寺主。

（冨増健太郎）

【四四八】院宰

①院主又名院宰。

②傳燈録［十二ノ廿四丈］魏府大覺禪師章云、興化在奬禪師爲院宰。

（冨増健太郎）

【四四九】主首

①監寺亦曰主首。

②正宗贊〔三ノ八丈〕、雲居膺禪師傳云。師示寂。主首白師、誰可繼席。曰堂中簡。時簡密受師印。人無知者、以臘高爲第一座。衆不曉師意。謂令揀擇。欲命第二座住持。且備禮、先請簡。簡不讓、即自持道具。入方丈、衆不愜。簡察其情、乃棄法。〔二ノ四十六丈〕又南堂靜禪師傳云、師住大隋。舊有龍、居方丈寢室。累代不敢近。師至欲臥。主首白、師不顧。竟去臥。見龍臥床上。師以手推曰、老畜生、留老僧半榻。就臥。及醒龍不見。從此不來矣。

（冨増健太郎）

【四五〇】權管

①忠曰、蓋監寺也。執一寺權柄、而管領事務也。

②愚中及和尚艸餘集〔字説十丈〕云、嘗見江南叢林、不論寺院大小。不問住持有無。必立權管一位、而待之。

（冨増健太郎）

【四五一】副寺

①篇海類編〔十六ノ卅四丈〕云、副音富、貳也佐也。

②敕修清規〔下一ノ七丈〕云、副寺、古規曰庫頭。今諸寺稱櫃頭。北方稱財帛。其實皆此一職。蓋副貳都監寺分勞也。掌常住金穀錢帛米麥、出入隨時上曆。收管支用、令庫子每日具收支若干、僉定飛單、呈方丈。謂之日單。或十日一次結算、謂之旬單。一月一結、一年通結有無見管、謂之日黄總簿。外有米麪五味各簿、皆當考算。凡常住財物、雖毫末、並是十方衆僧有分。如非寺門外護、官員檀越、賓客迎送慶弔。合行人事、並不可假名。支破侵漁。其上下庫子、須擇有心力。能書算、守己廉謹者、爲之。病僧合用供給之物、即時應付。如倉庫疎漏、雀鼠侵耗、米麥蒸潤、一切物色、頓放守護。有不如法者、並須及時照管處置。

③備用清規〔七ノ十丈〕云、副寺之職、職小任重。衆人命脈所繫、米麪當須細潔。粥飯貴得精豐、醤黄豆豉、合辨及時。鹽醋姜油、滿足供衆。欠乏預謀上首。尅落常愼、下流無徇私情。勿圖己計、推情保惜、如護眼睛。先德分司列任、本爲衆人。今昧原、加刻削、麁飯薄粥、臭醋淡齏、非惟任責者之無知。實在住持之有過。

（冨増健太郎）

【四五二】上副寺　【四五三】下副寺

①敕修清規〔上二ノ五丈〕告香圖、東序凡有副寺三人。維那上一人、維那下二人。〈圖、見東序西序處。〉

②敕修清規［下一ノ十八丈］兩序交代茶云、如維那。位居東序請茶時、肩下副寺一人趣。
③忠曰、肩下副寺、所謂下副寺也。既言肩下副寺。須知有肩上副寺。乃如告香圖所記。
④［鈔九ノ二十八丈］舊説曰、觀肩下副寺一人趣語、副寺本是維那肩下也。或有副寺肩上於維那者、即是監寺退職後。爲却來副寺者、位在維那之上矣。
⑤義堂日工集［一ノ六十六丈］云、夢巖默菴、與中巖此山、會於等持。夢巖問中巖、以日用規中、浴室之儀。上下知事、中巖一一分曉指陳。蓋江南叢林常儀、不必疑問也。
⑥忠曰、上下知事、蓋上副寺、下副寺也。

（冨増健太郎）

【四五四】庫頭（コ〈ク〉ヅウ）

①副寺之舊稱也。〈見副寺處〉
②幻住清規［四十五丈］云、古叢林無副寺之名。惟稱庫頭。掌一切支收出内、即知庫之職也。
③禪苑清規［四ノ一丈・敕修鈔八ノ四十五丈引］云、庫頭之職、主執常住錢穀。出入歲計之事。所得錢物、即時上曆。收管支破分明、齋料米麥、常知少有無。及時擧覺收買、十日一次計曆。先同知事簽押、一月一次通計、住持人已下、同簽。金銀之物、不宜謾藏。見錢常知數目、不得裏私借貸與人。如主人並同事、非理支用、即須堅執不得順情。常住之財、一毫已上、並是十方衆僧、有分之物。豈可私心專輒自用。如非院門供給檀越、及有力護法官員。並不宜將常住之物、自行人事。如有借貸米麥錢物、除主人及同事。自辨衣鉢外、常住之物、不可妄動。當庫行者、須有心力、解計算。守己清廉、言行眞的、衆所推伏、方可委付。如山野寺院、城市稍遠、衆僧所用、及藥蜜茶紙之類。亦宜準備僧行回買、常存道念、不可憚煩。病僧合用供給之物、不得闕少。如遇打給、即時應副。如倉廩疎漏、雀鼠侵耗、米麥蒸潤、常住物色、頓放守護。若不如法、並係庫頭照管、白同事人處置。
③慈覺龜鏡文［敕修下一ノ五十二丈］云、爲衆僧出納、故有庫頭。又云、常住之物、一毫無犯、所以報庫頭也。又云、畜積常住、減剋衆僧、非庫頭所以瞻衆也。又云、多貧利養、不恤常任、非所以報庫頭也。
④傳燈録［九ノ五丈］潙山祐禪師章、庫頭繫木魚。〈見火頭處。〉

（冨増健太郎）

【四五五】知庫

①庫頭、又名知庫。〈見庫頭處。〉
②虛堂愚和尚録［素佛事三丈］質知庫鎖龕語云、無矯僞多質直。豎百横千、對本收息。質知庫、日暮也收取鑰匙。

（冨増健太郎）

【四五六】櫃頭（バチウ）

①副寺亦曰櫃頭〈見副寺處。〉

② 貞和集［五ノ九丈］雪巖欽和尚、賀梅溪副寺頌云、櫃頭一面日黄簿、列祖玄關無少差。算得透時參得透、油鹽醤醋與姜茶。

（冨増健太郎）

【四五七】財帛

①中華北方叢林、稱副寺爲財帛。〈見副寺處。〉

② 事文類聚［新十二ノ一丈］云、戸部尚書、漢置尚書郎四人、其一人主財帛委輸。

＊

【四五八】掌財

①忠曰蓋財帛也。

②希叟曇禪師開善録［一ノ廿六丈］謝新舊知客・掌財・維那。上堂云、茶迎過客無新舊。秤定須須彌有重輕。活弄手頭雖得妙、何如聞爆桶箍聲。［佛事］又份掌財秉炬、〈曾充直歳〉云、渤塗直歳、寺基掌財。網市利不求龍斷。開荒田先務燒畬。無星秤較錙銖、絲毫不忒。破钁頭埋佛祖、深淺無差。掀飜死貨、別立生涯。石火電光機路活、涅槃生死等空花。〈忠曰、寺基、蓋鎡基字也。〉

③元叟端禪師徑山録［四ノ六丈］爲泳掌財下火云、秤盤上、分斤定兩、是汝。算筒邊、横千竪百、是汝。且道、生死海中、涵泳游戯。是汝不是汝。〈云云。〉

（冨増健太郎）

【四五九】典座

①僧史略［中ノ四十二丈］云、典座者、謂典主牀座、九事擧座一色、以攝之、乃通典雜事也。〈現刊僧史略九作凡非。〉

②釋氏要覽［下ノ廿七丈］云、典座、僧祇律云、典次付床座、此掌僧九事之一也。〈又見主事處。〉

③祖庭事苑［八ノ十四丈］云、按僧史。謂典主牀座、九事、今擧一色以攝之、廼通典雜事也。今禪門相沿、以立此名耳。

④僧祇律［七ノ卅四丈］云、佛住舍衞城、有比丘、名陀驕摩羅子、衆僧拜典知九事、九事者、典次付牀坐、典次差請會、典次分房、典次分衣服、典次分華香、典次分果蓏。典次知煖水人、典次分雜餅食、典知隨意與堪事人、是名僧拜典知九事。付牀坐時、是長老、右手小指出燈明、隨品次付。〈廣説。〉〈忠曰、次者次第也、次第付與、次第差擇等也。〉

⑤四分律［十八ノ五丈］云、佛在羅閲城、耆闍崛山中、爾時尊者沓婆摩羅子比丘、衆中差令典衆僧、牀座、臥具、及分飲食。〈廣説。〉

⑥禪苑清規［三ノ四丈］云、典座之職、主大衆齋粥。須運道心隨時改變、令大衆受用安樂、

亦不得枉費常住齋料、及點檢廚中、不得亂有抛撤。選揀局次行者、能者當之。行令不得太嚴。嚴則擾衆、不宜太緩、緩則失職、造食之時、須親自照管、自然精潔、如打物料并齋粥味數、並預先與庫司知事商量、如醤醋淹藏收菜之類、並是典座專管、不得失時、常切提舉火燭依時、俵散同利、務要均平、如合係監院直歳庫主所管、同共商量即可、並不須侵權亂職、廚中竈釜什物、如故舊損壞、則逐旋抽換添補。〈云云。〉

⑦備用清規［七ノ十丈］云、典座之職、無眞心供養者、不宜徇關節妄請之、當與前堂首座謀議、從衆擢用、萬不失一也。當廣種蔬菜、力除草穢、四時合種雜物、勤看老圃須知、園丁當以私惠、優其寒暑、調和羹菜五味、須全油醤椒料、常住有限、須出己囊、助辨堂供、一人辨心、諸天辨供、多見所在假名、職圖監收、園地半占、栽麻苧、以爲園丁補洗、遞代相承習、以成弊、廚中不許棄賤諸物、執役選用苦行老成、若設大齋、食次與上首知事商議、過多減除、皆不可也。行者不律、誨而至再。不受訓者、責之罰之。同利均俵、粥飯上桶、焚香望僧堂設拜、常把衆人、頂在頭上、自獲福利、不汝欺也。

⑧敕修清規［下一ノ七丈］云、典座職掌大衆齋粥。一切供養、務在精潔、物料調和、檢束局務、護惜常住、不得暴殄。訓衆行者、循守規矩、行益普請、不得怠慢。撫恤園夫、栽種及時、均俵同利、二時就廚下粥飯、食不異衆。粥飯上桶、先望僧堂、焚香設拜、然後發過堂。

⑨慈覺龜鏡文云、供養衆僧、故有典座。　又云、爲成道業故、應受此食、所以報典座也。　又云、六味不精、三徳不給、非典座所以奉衆也。　又云、貧婪美膳、毀訾麁飡、非所以報典座也。

⑩潙山祐禪師［傳燈九ノ三丈〇会元九ノ二丈］、在百丈充典座。〈見第一座處。〉

⑪漸源興禪師、在道吾爲典座。〈見主事處。〉

⑫五燈會元［十四ノ卅丈〇聯灯廿八ノ卅五丈］芙蓉楷禪師章云、謁投子〈義青〉於海會、後作典座。子曰、廚務勾當不易。師曰不敢。子曰、煮粥邪蒸飯邪。師曰、人工淘米著火、行者煮粥蒸飯。子曰、汝作甚麼。師曰、和尚慈悲、放他閑去。

⑬佛果擊節録［下ノ十八丈］云、雪峯儋苽籬木杓行脚、到處作典座。〈詳雜行類把針處。〉

⑭物初賸語［十五ノ四丈］、諸公贈淨慈印典座語跋云、大潙雪峯、皆典香積、而策勲者也。必躬必親、隨變發機、乃自作活計、非勤勞之謂、至踢倒淨瓶、鼇山半夜、而其活計一空。印也職此、斡無爲有、調衆口若一、雖午盂九文之積、亦以資之、噫亦勤且勞矣、爲而忘其勤、隨變而發其機、審是則太虚爲口、萬象爲舌、讚之不及、又豈在諸衲、謗沈無香哉。

（水野隆道）

【四六〇】提點

①忠曰、掌常住金穀者。

②［二巻］南堂欲禪師靈巖録［廿五丈］請提點上堂云、楊岐栗棘蓬、東山鐵酸餡、多處添些子、點即不到、少處減些子、到即不點、萬機俱赴、八面玲瓏、一句全提、風行草偃、擊拂子、龍得水時添意氣、虎逢山色長威獰。

③山菴雜録［下ノ廿一丈］云、徑山惠洲提點、虎巖徒弟。頗聰明有幹蠱才、掌常住衆務。三

十餘年、一切金穀、恣其糜費。或以果報諭之、乃荅云、滿載戴角來、洲只戴得一雙。至正初、高納麟領行宣政院事。其屬淨珂具状訴之結罪、杖斷歸俗。既而潛於化城院、得風痺疾。攣拳如蝟、兩手握拳。承其兩頰、兩脚反、承其尻。看病人欲伸之、痛不可忍。日夜但聞霍霍之聲。如是者三年、始氣絶。洲平昔以麁心任事、輕視因果、乃言、滿載戴角來、只戴得一雙。余謂、三途報中、歳月長久、一雙去一雙來、至無量劫、戴此角、何止一雙而已。凡司常住金穀人、宜以洲自鑒。〔廿一丈〕又云、洪武八年秋、余訪同門友報復元于象山智門寺、寺有提點彝正堂者、四十餘年、管領常住出納。廉能謀、斷有方、撫衆和易。歴六代住持、終始如一。是年七月二十四夜夢、兩童子並立榻前。問之、何幹抵此。荅曰、請提點考算單帳。荅云、我無單帳可算。覺而再睡。得夢如前。次日到方丈説其夢。稟云、夜得此夢、恐今歳庫司知事人懶慢、常住日黄簿未成。和尚宜促之。觀其言貌、絶無愧赧態、少選報彝歸房趺仆地上、如熟醉。至夜半始甦。急處分後事、然後瞑目。彝於智門可謂有功矣。臨終尚爾。諸方執事者、遇常住物、如鷹拏燕趠。不以罪福爲事、聞此自須改行。

④ 宋史職官志〔志百二十ノ十六丈〕云、提點刑獄公事、掌察所部之獄訟、而平其曲直所至審問囚徒、詳覆案牘。凡禁繫淹延而不決、盜竊逋竄而不獲。皆刻以聞。

⑤ 事物紀原〔六ノ廿丈〕云、宋朝會要曰、景德三年三月、敕置開封府界提點司、即置提點之官。呂夷簡三朝寶訓曰、眞宗謂近臣曰、諸道刑獄、皆遣官提振。惟京師無之。去夏開封府訊進士蹇符、暴於日中、裂其背而鞠之、無状、炎暑之際未見情。枉罹虐毒、令置司命、京師刑獄處、悉糾之。

⑥ 忠曰提點、本朝廷官職名、而僧寺擬立也。提點者、提振其壅滯也。按山菴所言、庫司知事外、有提點。

（水野隆道）

【四六一】免僧

①義堂日工集〔二ノ卅二丈〕云、鳴板坐禪。議曰、自今輪番聖僧侍者、四時裝香鳴板、且爲衆説。勤行精進、則成就道業。懶惰懈怠則滅亡佛法。輪番衆、毎三日一更、自外典座免僧直歳三人、免坐堂、各守其職也。

（水野隆道）

【四六二】納所

①虎關錬禪師〔紙誉散卅一丈〕曰、當時叢林之司、言納所者、日本樣也。

② 忠曰、天如則禪師録〔九ノ卅二丈〕、師子林菩提正宗寺記云、崇佛之祠、止僧之舍、延賓之館、香積之廚、出納之所、悉如叢林規制。〔止此。〕依之、納所稱、非爲日本樣也。

（水野隆道）

【四六三】火客（コ）

①火客、執爨者也。

②敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、莊甲之次、有火客。

（水野隆道）

【四六四】火佃

①忠曰、火客、亦云火佃。

②備用清規尊宿遷化祭次、莊甲之次、有火佃。

（水野隆道）

【四六五】火伴（コ）

①忠曰司竈火之伴類也。世作火番謬矣。

②虚堂愚禪師淨慈後録［八ノ卅三丈］、謝執事上堂云、火伴得人。

③宋襲熙正續釋常談云、古木蘭詞云、出門見火伴。

（水野隆道）

【四六六】十務

①禪門規式云、置十務。謂之寮舍、每用首領一人、管多人營事。主飯者、目爲飯頭、主菜者、目爲菜頭等。〈見殿堂類寮舍處。〉

②　忠曰十務未稽一一目。

③　傳燈鈔云、一山曰、十件事務、令人主領也。今兩班職也。

④　忠曰、見禪門規式所注、以飯頭菜頭等、爲十務。則必當但東班中分此職。然言今兩班也。恐不是。

（水野隆道）

【四六七】辦事（バンズ）

①［正宗賛鈔大覚傳蒙堂ノ処］常菴崇和尚曰、辨事、言小寮等。

②忠曰、辨事無舊解所的指。余謂、山門列職雜務人、總名辨事也。敕修清規［下一八丈］列職雜務、所謂、寮元、寮主、副寮、延壽堂主、淨頭、化主、園主、磨主、水頭、炭頭、莊主、監收等、此一行人、不可稱勤舊、蒙堂、前資等。故可以爲辨事人也。

③敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、衆寮次有辨事。［下一ノ廿丈］又頭首就僧堂點茶榜式

云、本山辨事禪師。［下二ノ八丈ヲ］又方丈小座湯云、第三座、本山辨事、諸方辨事、隨職高下分坐。

④　解者曰、本山辨事者、本寺勤舊也。

⑤　忠曰、上第二座有勤舊、而今以辨事爲第三座。何得言辨事即勤舊耶。［敕上ニノ三十丈］又住持遷化祭次、勤舊之外、有辨事。其別、益可知也。

（水野隆道）

【四六八】飯頭

①幻住清規［四十五丈］飯頭云、粥飯乃一衆命脈所係、不可不留心於其間。故叢林自典座而下、至應接、無慮數十人、皆職司五味、供給二時之、至公之道也。今菴居但設一飯頭、總柄其事。凡任此責者、須拳拳以大衆心食之、重觀察時分之早晩、酌量食指之寡多、撿看米穀之精麁、分別水漿之清濁、撙節菜蔬之多少、顧慮柴薪之有無。乃至收藏洗滌等、勿令穢汚。毋致餿淹、弗及則食觀不充、過多則遺棄何益。使生熟之得所、令鹹淡之合宜、一朝不動衆人心、萬古積成身後福。然出家、以利他爲行、今此職務、莊嚴保社、安慰衆心、助轉食輪、遠資法化、誠利他之極致者也。前輩如雪峯大隨潙山諸老、自此而高登祖位、盛播遺風。豈猥屑之謂哉。有力於道者、宜審之。

②　已下略録事縁。

③傳燈録［十四ノ十二丈○聯燈十九ノ十一丈］藥山儼禪師章云、師問飯頭、汝在此多少時也。曰三年。師曰、我總不識汝、飯頭罔測。發憤而去。

④臨濟玄禪師録［卅七丈］云、黄檗因入廚次、問飯頭。作什麼。飯頭云、揀衆僧米。黄檗云、一日喫多少。飯頭云、二石五。黄檗云、莫太多麼。飯頭云、猶恐少在。黄檗便打。飯頭却擧似師。師云、我爲汝勘這老漢。纔到侍立次、黄檗擧前話。師云、飯頭不會、請和尚代一轉語。師便問、莫太多麼。黄檗云、何不道來日更喫一頓。師云、説什麼來日。即今便喫。道了便掌。黄檗云、這風顛漢。又來這裏、將虎鬚。師便喝出去。

⑤大光明藏［中ノ七十一丈○傳聯不載此事○人天宝鑑廿八丈載］大隋眞禪師章評云、此老爲定光古佛示現。在潙山造飯七年、洞山負薪三年、苦處先登。力量如此、非古佛而何。〈潙山大安也。事出大隋示衆、見柴頭處。〉

⑥聯燈會要［廿一ノ廿一丈○会元七ノ十四丈○碧一ノ十八丈］雪峯存禪師章云、師在洞山作飯頭。淘米次、山問、淘沙去米、淘米去沙。師云、沙米一時去。洞云、大衆喫箇甚麼。師覆却米盆。山云、據子、因縁合在徳山。［廿一ノ廿一丈］又云、師在徳山作飯頭。〈見雜行類托鉢處。〉

⑦南京名勝志［九ノ卅五丈］云、蘓州承天能仁寺、呉地記云、有飯頭、號宗本、毎飯熟、必禮拜、然後供僧。一日忽悟、恣譚皆經中語。仁宗召見、賜金襴衣、號圓照禪師。

（水野隆道）

【四六九】粥頭

①禪苑清規［又永平ノ下ノ廿丈全引禪苑］、有粥頭名。〈見般若頭處。〉

（水野隆道）

【四七〇】湯頭

①石溪月禪師録賀鎮湯頭頌云、甜似黄連微帶澁、苦如甘草略含辛。一回點過一回別。只恐難瞞無舌人。

（水野隆道）

【四七一】茶頭

①茶頭在諸寮舍。［敕鈔九ノ廿九丈］或曰、即茶頭行者也。

②敕修清規新首座特爲後堂大衆茶云、呈納状訖、受特爲人、令本寮茶頭、遞付供頭、貼僧堂前下間。

③［敕鈔九ノ廿六丈］解者曰、此是後堂寮茶頭行者。

（水野隆道）

【四七二】四寮茶頭

①四寮者、首座寮、維那寮、知客寮、侍者寮也。各有茶頭。

②敕修清規［下一ノ六十二丈］亡僧板帳式、有四寮茶頭。

（水野隆道）

【四七三】庫司茶頭

①敕修清規［下一ノ六十二丈］亡僧板帳式、有庫司茶寮。

（水野隆道）

【四七四】菜頭

①菜義、見飲啖類、貼菜處。

②趙州諗禪師録［下ノ廿丈　古宿ノ十四〇傳燈十ノ十八丈］云、師問菜頭、今日喫生菜熟菜、菜頭提起一莖菜。師云、知恩者少、負恩者多。

（水野隆道）

【四七五】薑頭

①傳燈録［十五ノ十一丈］投子同禪師章云、師問僧、久嚮疎山薑頭、莫便是否。無對。　法眼代云、嚮重和尚日久。

（水野隆道）

【四七六】醬頭

①禪苑清規有醬頭名。〈見般若頭處。〉

（水野隆道）

【四七七】米頭

①傳燈録［十五ノ十五丈○会元五ノ四十丈○聯燈二十ノ十七丈］石霜諸禪師章云、抵大潙山法會、爲米頭。一日師在米寮内篩米。潙山云、施主物、莫抛撒。師曰不抛撒。潙山於地上、拾得一粒云、汝道不抛撒。這箇什麼處得來。師無對。潙山又云、莫欺這一粒子、百千粒、從這一粒生。師曰、百千粒從這一粒生。未審這一粒、從什麼處生。潙山呵呵笑歸方丈。晚後上堂云、大衆米裏有蟲。

（水野隆道）

【四七八】麥頭

①東山外集［上ノ廿一丈］送麥頭頌云、淵明非達士。乞食拙言詞、誰知我輩人、佳處正在茲。所化果何物。持來復是誰。山前小麥熟、行矣今其時。

（水野隆道）

【四七九】麻頭

①白雲端禪師法華録［八丈］上堂云、法華、收得三般稀奇之寶、尋常未曾拈出。今日麻頭、穀頭、進發。不免將出奉送二公。乃拈起拄杖、卓三下云、前頭第一不得擘破。又須分交兩手。縱遇南番舶主、也須換却眼睛。

（瀧玄浩）

【四八〇】穀頭

①見麻頭處。

（瀧玄浩）

【四八一】園頭

①慈覺龜鏡文［敕修下一ノ五十三丈］云、爲衆僧執勞。故有園頭磨頭莊主。　又云、計功多少、量彼來處、所以報園頭磨頭莊主也。　又云、地有遺利。人無全功、非園頭磨頭莊主、所以代衆也。　又云、飽食終日、無所用心。非所以報園頭磨頭莊主也。

②　已下、畧録事縁。

③傳燈録［十四ノ十一丈］藥山儼禪師章云、師見園頭栽菜次、師曰、栽即不障汝栽。莫教根生。曰既不教根生、大衆喫什麽。師曰、汝還有口麽。僧無對。

④［十一ノ廿九丈］又末山尼了然〈嗣高安大愚。〉章云、灌溪閑和尚、遊方時到山、禮拜問。如何是末山。然云、不露頂。閑云、如何是末山主。然曰、非男女相。閑乃喝云、何不變去。然云、不是神不是鬼。變箇甚麽。閑於是伏膺、作園頭三載。

⑤［二十ノ卌一丈○会元六ノ四十丈○六学八ノ十四丈］又永安靜禪師章云、唐天復中、南謁樂普安禪師。安器之、容其入室。仍典園務。力營衆事。有僧辭樂普。普曰、四面是山、闍黎向什麽處去。僧無對。樂普曰、限汝十日内。下語得中、即從汝去。其僧冥搜、久之無語。因經行偶入園中。師怪問曰、上座豈不是辭去。今何在此。僧具陳所以。堅請代語、師不得已。代曰、竹密不妨流水過。山高那阻野雲飛。其僧喜踴。師囑之曰、祇對和尚時、不須言是善靜語也。僧遂白樂普。普曰誰下此語。曰某甲。樂普曰、非汝之語。僧具言園頭所教。樂普至晚上堂、謂衆曰、莫輕園頭。他日住一城隍、五百人常隨也。〈乃至。〉節帥創永安禪苑、以居之、徒衆五百餘。

⑤佛果擊節録［下十八丈］云、巖頭行脚、到處做園頭。〈詳雜行類、把針處。〉

⑥碧巖録［四ノ廿三丈］云、風穴在南院會下、作園頭。一日院到園裏問云、南方一棒、作麽生商量。穴云、作奇特商量。穴云、和尚此間、作麽生商量。院拈棒起云、棒下無生忍、臨機不讓師。穴於是豁然大悟。

⑦聯燈會要［十一ノ廿二丈○会元十一ノ四十二丈］首山念禪師章云、師與眞園頭。同上侍立風穴次、穴問。作麽生是世尊不説説。眞云、鵶鳩樹頭啼、意在麻畲裏。穴云、你作許多癡福作什麽。何不體究言句。復問師。師云、動容揚古道。不隨悄然機。穴顧眞云、汝何不看念法華下語。

（瀧玄浩）

【四八二】園主

①即園頭也。

②敕修清規云、園主不憚勤苦、以身率先。栽種菜蔬、及時灌漑、供給堂廚、毋使缺乏。

（瀧玄浩）

【四八三】園夫

①藝菜蔬之人夫也。

②敕修清規［下一ノ七丈］典座云、撫恤園夫、栽種及時。

（瀧玄浩）

【四八四】磨頭

①慈覺龜鏡文見園頭處。

②大慧武庫［四十丈］云、五祖演和尚、依舒州白雲海會端和尚、咨決大事、深徹骨髓。端令山前作磨頭、演逐年磨下收糠麩錢。解典出息、雇人工及開供外、剩錢入常住、每被人於端處、鬬諜是非云、演逐日磨下、飲酒食肉、又養莊客婦女。一院紛紜。演聞之、故意買肉沽酒、懸于磨院、及買坯紛、與莊客婦女、搽畫、每有禪和、來遊磨院、演以手、與婦女、揶揄語笑、全無忌憚。端一日喚至方丈、問其故。演喏喏、無他語。端擘面掌之。演顏色不動。遂作禮而去。端咄云、急退却。演云、俟某筭計了、請人交割。一日白端曰、某在磨下、除沽酒買肉之餘、剩錢三百千、入常住。端大驚駭。方知小人嫉妬。時秀圓通爲座元。受四面請。即請演爲第一座。

（瀧玄浩）

【四八五】磨主

①即磨頭也。

②敕修清規［下一ノ九丈］云、磨主、兼主碓坊、米麵供衆、極有關系。須擇有道心人、諳曉舂磨等事者、充之。

（瀧玄浩）

【四八六】水頭

①敕修清規［下一ノ九丈］云、水頭、五更燒湯。供大衆頰盥。手巾面盆、燈燭牙藥、毋令缺少。冬月烘焙手巾、須早起鋪排。勿致臨時動衆念。

②慈覺龜鏡文見浴主處。

③普燈録［二ノ十八丈〇会元十六ノ一丈］天衣懷禪師章云、晚至姑蘇、禮明覺於翠峯。徐爲水頭。因汲水折擔、忽悟、作投機偈曰、一二三四五六七、萬仞峯頭獨足立、驪龍頷下奪明珠。一言勘破維摩詰。覺聞拊几稱善。

（瀧玄浩）

【四八七】火頭

①傳燈録［九ノ五丈〇会元九ノ三丈。聯灯七ノ十二丈］潙山祐禪師章云、師在法堂坐。庫頭擊木魚、火頭擲却火抄、拊掌大笑。師云、衆中也有恁麼人。喚來問作麼生。火頭云、某甲不喫粥、肚饑、所以喜歡、師乃點頭。

②［十ノ十四丈］又趙州諗禪師章云、抵池陽、參南泉。作火頭、一日閉却門燒。滿屋煙。叫云、救火救火。時大衆俱到。師云道得即開門。衆皆無對。南泉將鎖於窻間過、與師。師便開門。

③碧巖録［三ノ廿六丈〇傳聯会元不収此事］云、大隋眞和尚、承嗣大安禪師。昔時在潙山〈大安。〉會裏、作火頭。

④傳燈録［二十ノ廿九丈］伏龍山奉璘禪師章云、師問火頭。培火了未。曰低聲。師曰什麼處、得者消息來。曰不假多言。師曰、省錢易飽、喫了還饑。

（瀧玄浩）

【四八八】柴頭

①人天寶鑑［廿八丈］云、大隋眞禪師示衆曰、諸禪徳、老僧行脚時、到諸方、多是一千、少是三百衆、在其中、經冬過夏。未省時中空過。向潙山會裏、做飯七年、洞山會中、做柴頭三年、重處即便先去。只是了得自己。時中干他人甚麼事。

②　忠曰、光明藏言洞山負薪者、是也。〈見飯頭處。〉

③傳燈録［二十ノ十一丈〇正法眼藏二下五十一丈引］嵇山章禪師〈嗣雲居膺。〉章云、曾在投子、作柴頭。投子喫茶次、謂師曰、森羅萬象、總在者一椀茶裏。師便覆却茶云、森羅萬象、在什麼處。投子曰、可惜一椀茶。師後謁雪峯和尚。雪峯問、莫是章柴頭麼。師便作輪椎勢。雪峯肯之。

（瀧玄浩）

【四八九】炭（トン）頭

①敕修清規［下一ノ九丈］云、炭頭預備柴炭、以禦寒事。或化施主、或出公界、須令足用。

②慈覺龜鏡文［敕修下一ノ五十三丈］云、爲衆僧禦寒。故有炭頭爐頭。　又云、緘言拱手、退己讓人、所以報炭頭爐頭也。　又云、預備不前、衆人動念、非爐頭炭頭所以向衆也。又云、身利温暖、有妨衆人、非所以報爐頭炭頭也。

③　雲峰悅禪師、在翠巖化炭、見堂司處。

④　慈受深禪師慧林録、上堂云、炭頭今日地爐開。澁雨慳風惱破懷。老僧向火喫酸蹥。誰管檀那來不來。

（瀧玄浩）

【四九〇】爐頭

①禪苑清規［四ノ六丈］云、爐頭、雖維那所請、亦係炭頭和會選擧。十月一開爐、二月一日閉爐。放參前裝爐、粥前添炭。相度寒暖、臨時添減。如天暖炭多、則枉用信施。如天寒炭少、則大衆冷落。掃箒拂拭、常令嚴淨。兄弟圍爐、遞相廻避。不畫灰撥入、敲火筯作聲、聚頭閑話、擅便取火、熨焙等用。

②慈覺龜鏡文見炭頭處。

③趙州諗禪師録［古宿十三ノ五丈］云、師在南泉作爐頭。大衆普請擇菜。師在堂内、叫救火救火。大衆一時到僧堂前。師乃關却僧堂門。大衆無對。泉乃抛鎖匙、從窓内入堂中。師便開門。〈傳燈作火頭。見火頭處。〉

（瀧玄浩）

【四九一】鍋頭

①東山外集［上ノ卅九丈］送鍋頭偈云、白雲生處踈山寺、無水無柴世得知。若問道人今日事、木虵鑽破鐵鍋兒。

（瀧玄浩）

【四九二】燈（テン）頭

①禪苑清規有燈頭稱。〈見般若頭處。〉

②續傳燈録［二ノ七丈〇又正宗賛四ノ十二丈］洞山聰禪師章云、遊方時、在雲居作燈頭。見僧説、泗洲大聖、近在揚州出現。有設問曰、既是泗洲大聖、爲甚麽却向揚州出現。師曰、君子愛財、取之以道。後僧擧似蓮華峯祥菴主。主大驚曰、雲門兒孫猶在、中夜望雲居拜之。

（瀧玄浩）

【四九三】桶頭

①傳燈録［十八ノ十丈］玄沙備禪師章云、文桶頭下山、師問。桶頭下山、幾時歸、曰三五日。師曰、歸時有無底桶子、將一擔歸。文無對。〈歸宗柔代云、和尚用作什麽。〉

②聯燈會要［廿六ノ廿三丈］、招慶匡禪師章云、師在長慶作桶頭。常與衆僧語話。一日長慶入寮見、乃問。伱終日口嘮嘮地、作甚麽。師云、一日不作、一日不食。〈云云。〉

（瀧玄浩）

【四九四】樹（チウ）頭

①虚堂愚禪師録［続輯八ノ二丈］、謝樹頭上堂。僧問、栽松道者借路周氏之家、後來爲第五祖。此意如何。師云、燈籠沿壁上天台。僧云友直歳爲二林樹頭、獲何福報。師云説向伱也不難。僧云、學人也要種一片樹。只是未有人分付钁子。師云、何不便領。僧云、謝和尚钁子、便禮拜。師云得少爲足。［十ノ十九丈］又樹頭祖用秉炬語云、黄梅不墜腰間石、鄮嶺惟栽帶雨松。四十餘年今有驗。長長短短用無窮。祖衣未得入手。萬縁先以頓空。無柄钁頭何處著。一時分付丙丁童。

（瀧玄浩）

【四九五】莊主（シヤウス）

①敕修清規［下一ノ九丈］云、莊主視田界至、修理莊舍。提督農務、撫安莊佃。些少事故、隨時消弭。事關大體、申寺定奪。近時叢林、凋弊百出、而莊中尤甚。略擧其三。諸方通害、初爭莊職、安能徧及。搆怨住持、上下不睦、一也。一充其職、離寺相遠、靡所不爲。致爭起訟。供衆錢粮、盡皆耗費、復積逋負、以累于後。因而紀綱不振。莊佃生侮、租課不還。其弊二也。縱使老成能事充之、而州縣應酬、吏胥管幹、鄉都職役、鄰里富豪、皆合追陪。既啓其端、稍有不及、便生釁隙。雖不明支、而巧立除破。公私無益。故莊中之費、或半於寺。其弊三也。只如大家業産巨富、不聞分遣子弟、徧居莊所。蓋耕種有佃。提督則有甲幹。收租之時、自有監收僧行。此外縱有輸納、修圩俵粮等項。只臨時分委勤舊知事、限期使辦、事畢旋歸。非唯省費。有補常住、而消禍未萌。公私攸濟。今諸方之癈、如逃亡家。住持勤舊、能恤念寺門、欲撙費救弊、汰除濫冗、請自此始。其初例有當重難、而應充莊職者、別議酌補之。

②慈覺龜鏡文、見園頭處。

（瀧玄浩）

【四九六】都莊（ツシヤウ）

①忠曰、蓋莊主也。

②普燈録［十九ノ十六丈］別峯寶印禪師章、擧南泉到莊因縁云、金山今日新請都莊。萬一山僧到莊、第一不得鬼語。

③東山空禪師録［廿四丈］亡僧遷化上堂云、洞山道、天晴蓋却屋、乘時刈却禾。輸納王租了、鼓腹唱謳歌。古人住山、得與麼了事、得與麼快活。雪峯有屋蓋未了、有禾收未上、有租未納破。方待鼓腹謳歌、而顕都莊又遷化、苦苦、敢問大衆。一等是出家兒。一等是住山人。爲甚苦樂不同。會麼、曹溪波浪如相似、無限平人被陸沈、喝一喝。

（瀧玄浩）

【四九七】副莊（シヤウ）

①忠曰、副貳莊主者。

②石溪月禪師録［佛事三丈］、淑副莊下火語云、鬧處番交、靜處挿脚、偉哉淑副莊。擧火云、透過這一著。這一著那一著。開眼也著、合眼也著。

（瀧玄浩）

【四九八】監收

①敕修清規［下一ノ十丈］莊主云、收租之時、自有監收僧行（アン）。［下一ノ十丈］又諸莊監收云、古規初無莊主監收。近代方立此名。此名一立、其弊百出。爲住持私任匪人者有之。因利曲徇者有之。爲勤舊執事人、連年佔充者有之。托勢求充者有之。樹黨分充者有之。角力爭充者有之。蠹公害私、不可枚擧。雖欲匡救、末如之何。倘得廉正勤舊輔佐住持、公選區用。或對衆鬮拈充之。充此職者、當克己爲念。奉衆爲心。毋苟取佃戸。毋虧損常住、則自他俱利矣。

②備用清規［六ノ十三丈］云、監收之職、衆人命脈。貴在擇人。當請公心大小耆舊。無任小師鄉人。苟用非其人、不識因果。隱瞞常住。苛取佃甲、無所不至。非特歲計不足。抑且累及山門。晦堂見黄龍。〈云云、如次下引。〉諸莊成熟時至、審細和會、廉謹久歴。大小耆舊、或十方兄弟、定已至日請兩班大耆舊茶。勤率寢堂、一一請已、轉位獻湯了。送歸客位。兩班領衆作賀。次第巡寮。草飯特爲湯、庫司特爲湯藥石、進退兩班禮同。唯天童諸莊、古式不墜。監收無人。已望望畏之。每年至再和會。加禮敦請。特爲了。至下莊日、山門首釘挂、講茶湯禮。鳴樓鐘集衆、門送上轎。至今遺風在焉。

③禪林寶訓［上ノ廿二丈］云、晦堂一日見黄龍有不豫之色。因逆（ムカヘテ）問之。黄龍曰、監收未得人。晦堂遂薦感副寺。黄龍曰、感尚暴。恐爲小人所謀。晦堂曰、化侍者稍廉謹。黄龍謂、化雖廉謹、不若秀藏主、有量而忠。靈源嘗問晦堂、黄龍用一監收、何過慮如此。晦堂曰、有國有家者、未嘗不本此。豈特黄龍爲然。先聖亦曾戒之。

④［上ノ十六丈］又云、演祖自海會遷東山。太平佛鑑省覲。祖問佛鑑、舒州熟否。對曰熟。祖曰太平熟否。對曰熟。祖曰諸莊共收稻多少。佛鑑籌慮間、祖正色厲聲曰、汝濫爲一寺之主、事無巨細、悉要究心。常住歲計、一衆所係、汝猶罔知。其他細務、不言可見。

⑤　五祖演禪師録［二ノ十二丈〇古宿廿一］謝監收上堂云、人之性命事、第一須是〇。欲得成此〇、先須防於〇。若是眞〇人〇〇。〈按大慧普説［一ノ廿八丈］稻稻盜道道道六字。〉

（荒木泰量）

【四九九】都場

①［廣録ノ一］希叟曇禪師法華録［十五丈］中秋謝都場監收、并知客維那上堂云、明月可中庭、鴈影沈寒水。烹金爐冷歲華深、九鼎遺言猶在耳。拈拄杖云、深深撥著、宿火通紅、不假一槌成大器。刈禾鎌子疾如風。

②敕修清規［下一ノ十二丈］兩序進退云、泰定間、脱歡丞相、領行宣政院（アン シンエン）、分上中下三等寺

院。額定歳請知事員數。

③ ［敕鈔九ノ十二丈］解者曰、上五山、中十刹、下甲刹、爲三等。額定者、題定之也。

（荒木泰量）

【五〇〇】都倉

①雪巖欽禪師光孝録［上ノ十六丈］、謝都倉・副寺・侍者、并秀才上堂云、叢林雖未整肅、更點却要分明。粒米須還粒飯。八兩定要半斤。折衡剖斗、移風易俗。固是格外提持。爲什麽却道。將謂汝孤負吾、元來却是吾孤負汝。逢人但恁麽擧。

（荒木泰量）

【五〇一】甲幹

①敕修清規［下一ノ十丈］莊主云、耕種有佃。提督有甲幹。收租之時、自有監收僧行。［上二ノ廿八丈］又尊宿遷化孝服云、甲幹、莊客、諸僕麻布巾。

② 甲、正字通［午上ノ五十三丈］云、詩衞風、能不我甲。註甲長也。才能不足長于我也。幹、品字箋［乙ノ百十六丈］云、能幹、言其能爲凡事之根幹也。

③ 忠曰、甲幹屬莊主、催促作務者也。〈舊解、言掌納收者非也。掌收、已有監收。今言提督。則其職亦可知也。〉

（荒木泰量）

【五〇二】莊甲

①［敕修鈔六ノ十丈迄今不用］忠曰、莊甲、即甲幹。屬莊主。故曰莊甲也。

②敕修清規［上二ノ廿二丈］開堂祝壽云、參頭領衆行者、挿香禮拜。次直廳・轎番・莊甲・作頭（サクテウ）・老郎・人僕、參拜。［上二ノ廿丈］又尊宿遷化祭次老郎之次、有莊甲。

（荒木泰量）

【五〇三】莊佃

①［敕修鈔九ノ一丈］農夫之属莊主者、其名見莊主處。

② 小補韻會［霰ノ十二丈］云、佃堂練切。廣韻營田。增韻治田。又亭年切。治土也。

③ 居家必用［辛ノ五十四丈］云、佃客、謂治田分利之人也。

④ 和名類聚［一ノ十丈］云、唐韻佃作田也。音與田同。〈和名豆久太（ツクダ）。〉

（荒木泰量）

【五〇四】莊客

①忠曰、莊客、即莊佃也。見甲幹處。

（荒木泰量）

【五〇五】地客

①忠曰、即莊佃也。

②禪林寶訓［下ノ十七丈］云、妙喜曰、佛性住大潙。行者與地客相歐（ウツ）。佛性欲治行者。祖超然〈佛日文祖嗣天衣懷。〉因言、若縱地客摧辱行者、非惟有失上下名分。切（ヒソカニ）恐小人乘時、侮慢事不行矣。佛性不聽、未幾。果有莊客弑知事者。［十七丈］又云、妙喜曰、祖超然住仰山。地客盜常住穀。超然素嫌地客。意欲遣之。令庫子行者、爲彼供状。行者欲保全地客。察超然意、抑令供起離状。仍返使叫喚、不肯供責。超然怒行者擅權、二人皆決竹篦而已。蓋超然不知陰爲行者所謀。烏乎小人狡猾如此。

（荒木泰量）

【五〇六】廨院主

①禪苑清規［四ノ四丈］云、廨院主之職、主院門收糴買賣。僧行宿食、探報郡縣官員交替。應報公家文字、或收簇院門供施財利、或迎待遠方施主。

②［正眼七　○会元不載妙信。又仰山章不収］永平道元和尚曰、妙信尼仰山之弟子也。仰山選廨院主曰、信淮子雖是女流、有大丈夫志氣。正堪爲廨院主。遂充之。信在廨院。與蜀僧商量風幡話。

（荒木泰量）

【五〇七】街坊化主

①或單言化主。或單言街坊。

②忠曰、勸化市鄽街坊、索得檀施、以爲大衆供料者。［敕修古鈔亀鏡文鈔三丈］古德曰、東山外集、多送街坊頌。蓋到處若不持師家送偈、則人疑爲贋索。故必作頌送之。

③敕修清規［下一ノ九丈］云、化主、凡安衆處。常住租入有限。必藉化主、勸化檀越。隨力施與、添助供衆。其或恒産足用、不必多往、干求取厭也。

④慈覺龜鏡文［敕修下五十三丈］云、爲衆僧乞丐。故有街坊化主。　又云、忖己德行全缺應供。所以報街坊化主也。　又云、臨財不公。宣力不盡、非街坊化主所以供衆也。　又云、不念修行、安然受供。非所以報街坊化主也。

⑤覺浪大師尊正規［二ノ十三丈］云、予嘗謂、化主是門外知賓。知賓是門裡化主。蓋法不孤起。仗緣方生。所謂諸法性無常、佛種從緣起。

⑥五燈會元［十四ノ卅四丈○聯灯普灯続傳灯師章不収之］芙蓉楷禪師章云、示衆曰、山僧行業無取。忝主山門。豈可坐費常住頓忘先聖付囑。今者輒斅古人。爲住持體例。與諸人議定、更不下山、不赴齋、不發化主。唯將本院莊課、一歳所得、均作三百六十分、日取一分用之。更不隨人添減。可以備飯則作飯、作飯不足、則作粥、作粥不足、則作米湯。新到相見、茶湯而已。更不煎點。唯置一茶堂、自去取用、務要省縁、專一辨道。

⑦聯燈會要［廿八ノ十五丈○続傳燈五ノ一丈○正宗賛四ノ十四丈］雲居舜禪師章云、師自洞山、如武昌行乞。首謁劉公居士家。居士高行、爲時所敬。意所與奪、莫不從之。師時年少。不知其飽參。頗易之。居士云、老漢有一問。上人語相契、即開疏。如不契、即請却還（キヤワン）。遂問、古鏡未磨時如何。師云、黒似漆。士云、磨後如何。師云、照天照地。居士長揖云、若恁麼、上人且請還洞山。拂袖入宅。師懨懼。即還洞山。山問其故。師具言其事。山云、你問來、我與你道。師理前問。山云、此去漢陽不遠。師進後語。山云、黄鶴樓前鸚鵡洲。師於言下大悟。機鋒不可觸。

⑧希叟曇禪師録［佛事ノ六丈］、爲元街坊下火云、赤脚走紅塵、全身入荒草。本命元辰都失了、掀翻海嶽覓無蹤。

⑨雪峯悦、在大愚爲衆乞飯。〈見于堂司處。〉

⑩天竺亦有化主儀。　付法藏因縁傳［四ノ八丈］云、於東方國、有族姓子。信樂佛法、出家學道、善能營事、無不成辨。經歴多時、便生疲厭。即往尊者憂波毱所。尊者觀察、知此比丘、爲福未具、故不得道。即令爲僧遊行教化。受教入城。處處求索。有一長者。見而問之。答言、長者、尊者毱多、使我教化。今此城中、誰是篤信。長者復言、愼勿餘去。一切所須、當相奉給。即爲辨具。比丘得已、於上座前、持食長跪。一切衆僧、皆爲咒願。咒願已竟、成阿羅漢。

⑪雜阿含經［十九ノ十九丈］云、尊者大目犍連言、我於路中、見一大身衆生。以熾然鐵鏁、以纏其身。衣被狀臥、悉皆熱鐵。炎火熾然、食熱鐵丸。乘虚而行。啼哭號呼。佛告諸比丘。此衆生者、過去世、於此舍衞國、迦葉佛法中、出家作比丘。爲衆僧乞衣食。供僧之餘、輒自受用。縁斯罪故、已地獄中、受無量苦。地獄餘罪、今得此身、續受斯苦。

（荒木泰量）

【五〇八】粥街坊

①禪苑清規［四ノ三丈］街坊云、粥街坊・米麥街坊・菜街坊・醤街坊・水頭・炭頭・燈頭・華嚴頭・般若頭・經頭・彌陀頭、並是外勸檀越。増長福田。内助禪林、資持道果。若非契聖運心、何以普酬衆望。

（荒木泰量）

【五〇九】米麥街坊　【五一〇】菜街坊　【五一一】醤街坊

①並見粥街坊處。

（荒木泰量）

【五一二】供養主

①蓋即街坊化主也。

②廣燈録［十四ノ五丈〇傳灯不収〇会元十一ノ廿九丈〇擊節录上ノ廿三丈］第二代寳壽禪師〈失名嗣寳壽沼〉章云、師在先寳壽處。爲供養主、得數年。一日寳壽問云、供養主父母未生時、還我本來面目來。師道不得。三兩日後、却來下供養主。寳壽云、汝不用下。後經月十日間、因在街坊、見二人買賣不和（クワ）相打。師見忽然大悟。歸院擧似寳壽。寳壽云、你悟也。不用道。

②葉縣省禪師録［古宿廿三ノ十八丈］云、師勘五人新到云、總是雲居供養主那。僧云是。師云是即一齊坐。

③傳燈録［十一ノ十八丈］王敬初常侍視事次、米和尚至。王公乃擧筆。米曰、還判得虚空否。公擲筆入廳、更不復出。米致疑。至明日、憑鼓山供養主、入探其意。米亦隨至。潛在屏蔽間偵伺。供養主纔坐、問云、昨日米和尚、有什麽言句、便不得見。王公曰、師子咬人。韓獹逐塊。米師竊聞此語、即省前謬。遽出朗笑曰、我會也、我會也。

（荒木泰量）

【五一三】修造局

①忠曰、掌山門作事者。局義、見六局行者處。

②敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、火客次、有修造局。

③西巖惠和尚開善録［六丈］、有謝璧都管、郁修造上堂。

④廣燈録［廿四ノ廿二丈］、四面山寳津禪師章云、師問修造僧。本自圓成。何得開山造寺。造云、擔枷過狀。師云、未在更道。造云、兩重公案。師拈棒。造擬議。師便打。

（荒木泰量）

【五一四】諸色作（サク）（サウ）ヂウ（チウ）頭

①忠曰、山門匠人。隷修造局者。

②敕修清規［上二ノ廿一丈］開堂祝壽云、直廳・轎番・莊甲・作頭・老郎・人僕、參拜。［下二ノ十一丈］又結制禮儀云、參頭領衆行者、挿香禮拜。次作頭、領老郎、諸直廳・轎番・人僕等、參拜。［上二ノ廿八丈］又尊宿遷化孝服云、方丈人僕・作頭、麻布巾衫。［上二ノ卅丈］又同祭次、修造局之次、有諸色作頭。〈又見莊甲處。〉

③忠曰、［鈔六ノ十丈］舊説曰、作頭者、園頭乎。〈止此。〉非也。余引無準録、好生録。正其謬説。

④無準範禪師録［二ノ五丈］入城歸上堂云、張都料、李作頭、鑿竅底鑿竅、著楔底著楔。

⑤好生録［曇華筆記廿七丈引］云、杏花寺八長老、一夕至丹墀、見巨蛇、即時打死。出山門、暗中忽有聲曰、八長老、我與夏作頭有讐。欲來相報、汝何無故殺我。八長老驚、汗浹

背。急趍出至街。恰遇夏匠、曰你好造化。夏問其故。長老具述前事。夏曰、此蛇在否。引至蛇所。夏大怒、拔斧斫之。破腦出髓。髓濺入眼。眼遂爛、三年而死。長老亦因訟弊於獄。

⑥ 忠曰、已呼夏作頭爲夏匠。此作頭是工匠之證。

（荒木泰量）

【五一五】監作（サク）

①忠曰監作、隷修造局、監作頭者。蓋人力之上首。

②敕修清規［下一ノ六十二丈］亡僧板帳式云、監作、差撥人力。

③ 忠曰、舊解訓監作。爲古乃加宇倍。即兄部也。蓋非當訓也。監作頭者、是人力之上首。故爲此訓矣。已言差撥人力。則其上首可知。

④忠曰、備用清規［九ノ五丈右］當代涅槃、對靈小參中云、作下寮參拜。聲喏諷經。〈止此。〉作下寮、蓋亦監作也。

（荒木泰量）

【五一六】兄部（コノカウベ）

①日本禪林、力者上首、稱兄部。〈和言古乃加宇倍。〉

（荒木泰量）

【五一七】直歲（シッスイ）

①忠曰、正字通云、直當也。〈止此。〉蓋當一歲幹事、故謂直歲也。

②敕修清規［下一ノ七丈］云、直歲、職掌一切作務。凡殿堂寮舍之損漏者、常加整葺。動用什物、常閲其數、役作人力、稽其工程、黜其游惰、毋縱浮食、蠹財害公。田園莊舍、碾磨碓坊、頭疋舟車、火燭盜賊、巡護防警。差撥使令、賞罰惟當。並宜公勤、勞逸必均。如大修造、則添人同掌之。

③釋氏要覽［下ノ廿七丈］云、三千威儀經、具十德堪充直歲。〈文多不録。〉今但掌園民直歲調也。〈又見主事處。〉

④ 大比丘三千威儀［下ノ十九丈］云、直歲有十德。一者爲三法盡力。二者若有比丘從遠方來當迎安隱。三者當給與狀席若燈火、三日至七日。四者設房皆滿、當自避持處與之。五者當數住問訊占視。六者當爲説國土習俗。七者當憂所不具足。八者若中有共諍者、不得有所助。常當和解令安隱。九者若宿與不相便安、不得於衆中呵罵。亦不得呼人使共作某令主不可。十者不得與摩波利共諍求長短數於衆中。若行説之、亦不得取三法中所有物、持行作恩惠。如法行者、可作直歲。

⑤僧史略［中ノ四十二丈］云、或立直歲、則直一年。或直月、直半月、直日。皆悦衆也。

⑥祖庭事苑［八ノ十四丈］云、按僧史、謂直一年之務。故立此職。今禪門雖不止定歲時、立亦法於古制也。

⑦慈覺龜鏡文［敕修下一ノ五十二丈］云、爲衆僧作務、故有直歲。　又云、安處僧房、護惜什物、所以報直歲也。　又云、寮舍不修、什物不備、非直歲所以安衆也。　又云、居處受用、不思後人、非所以報直歲也。

⑧　五燈會元［傳聯等不●●歲正宗賛四●●歲　九ノ十一丈］仰山寂禪師章云、師在溈山爲直歲。作務歸。溈問甚麼處去來。師曰、田中來。溈曰、田中多少人。師揷鍬叉手。溈曰、今日南山大有人刈茅。師拔鍬便行。

（彦坂宗俊）

【五一八】直月

①見直歲處。

（彦坂宗俊）

【五一九】直日

①見直歲處。

②　俗事考［十一丈］云、俗語直日、見禮記注。

（彦坂宗俊）

【五二〇】巡更

①尊正規［下ノ卅一丈］巡更云、重門擊柝、以待暴客。此聖人防微杜漸之意也。叢林每夜輪二人巡更。打板念佛、直欲喚起光天徹地主人公。無使偸心白拈之所欺瞞也。其中兼有五種大利。一警覺提昏、出于夢宅。二敲破參頭、懸崖撤手。三使小人不敢私自交接。四令燈火明愼、門戸常嚴。五能令虛空作舞、露柱揚眉。此巡更人、莫往往向犍椎下、失自家眼睛鼻孔也。

（彦坂宗俊）

【五二一】直廳

①［敕鈔六ノ十丈］舊説曰、直廳者、力者也。

②忠曰、僧寺亦當擬官有廳事。今直廳、直於廳事者。小補韻會［青ノ十五丈］云、毛氏曰、聽事、言受事察訟於是、漢晉皆作聽。六朝以來乃始加广。

③敕修清規［上二ノ廿二丈］開堂祝壽、有直廳名。〈見莊甲處。〉　又［下一ノ十五丈］侍者進退云、方丈行者、直廳、轎番、拜賀。

（彦坂宗俊）

【五二二】轎（キヤウ）番

①轎番［敕鈔六ノ十丈］者、荷輿僕人也。

②忠曰、轎肩輿也。〈見器物門轎處。〉番正字通［午上ノ六十一丈］云、番符山切、音翻、廣韻更遞也。漢紀賢良直宿更番。〈止此。〉今轎番者更遞擡輿者。

③敕修清規［上二ノ十丈］迎待尊宿云、方丈執局、及參頭、領衆行者、人僕、轎番、以次參拜。〈又見莊甲處。〉

（彦坂宗俊）

【五二三】轎從

①［鈔五ノ十四丈○コシカキ也］轎番、又名轎從。

②敕修清規［上二ノ十丈］迎待尊宿云、帶行侍者、行者、人僕、轎從參拜。

（彦坂宗俊）

【五二四】額定知事數

①敕修清規兩序進退云、泰定間、脱歡丞相、領行宣政院、分上中下三等寺院。額定歲請知事員數。

②　解者曰、上五山、中十刹、下甲刹、爲三等。額定者、題定之也。

（彦坂宗俊）

【五三四】導師

①忠曰、觀音懺法式有導師、香華、自歸三職。其導師、謂表白者。

②僧史略［中ノ四十一丈］云、導師之名、而含二義。若法華經中商人白導師言、此即引路指迷也。若唱導之師、此即表白也。故宋衡陽王、鎮江陵、因齋會無有導師。請曇光爲導、及明帝設會、見光唱導稱善、敕賜三衣瓶鉢焉。

③法華經［五ノ四十六丈］涌出品云、是四菩薩、於其衆中、最爲上首唱導之師。

補注［九ノ卅丈］云、啓發法門、名之爲唱。引接物機、名之爲導。

又禪史稱唱導之師者、謂唱教法、導引有情之義。今援一二。

④　廣燈録［八ノ十二丈○古宿一ノ十丈百丈録］百丈海禪師章云、仰山云、百丈得大機、黄檗得大用、餘者盡是唱導之師。

⑤傳燈録［十二ノ廿四丈］興化奬禪師章云、師謂克賓維那曰、汝不久當爲唱道之師。〈洋維那處〉

【五三五】香華

①見導師處。

【五三六】自歸

①見導師處。

【五三七】鐘頭

①禪苑清規［四ノ六丈］鐘頭云、付法傳説、罽賓吒王死、作千頭魚。常爲劍輪斫首、痛不可言。每聞鐘聲、則劍輪不下。晨昏扣鐘、無非佛事。高僧傳釋智興、如法鳴鐘、聲震地府、受苦者皆解脱。

②校定清規［敕鈔四ノ廿六丈］念誦云、報鐘頭候鳴大鐘。

③又勤化鑄鐘者、曰鐘頭。　應菴華禪師録示［注語十丈］圓鐘頭法語云、歸宗年來寂寞太甚也。思得六十棒喫。誰爲下手。忽然圓上座出來道、法圓下手。秖向伊道。待你鑄鐘了、則分付拄杖子。

【五三八】爭頭

①廁［敕鈔八ノ五十六丈］本不淨之處、故掌之者、可令極淨潔、故以淨命名。

②禪苑清規［四ノ五丈］云、淨頭之職、五更上燈、日出收茆籌、淨布浸之。次刷洗籌槽、併疊掃地、添換茆籌淨巾、并灰土皂角、打當水廨、齋後洗濯籌布、晚後燒湯上油、常令湯水相續、無使大衆動念。淨頭者、行人之所甚難、當人所甚惡。可謂無罪不滅、無病不愈、無福不生。同袍拱手上廁、寧無慚愧之心。

③備用清規［七ノ十三丈］云、淨頭之職、果自因生。每朝掃地、裝香及時、剔燈點燭、換籌洗廁、出桶拖鞋、手巾乾淨、湯水寬容、澡豆頻添、灰土常滿、或時狼藉打併、宜勤討柴洗籌、俯恤人力、觸邊明淨、道業圓成。雪竇在靈隱、牧菴妙喜、寶峯會中、皆服勤斯務矣。

④敕修清規云、淨頭、掃地裝香、換籌洗廁、燒湯添水須是及時、稍狼藉、隨即淨治。手巾淨桶、點檢添換。凡供此職、皆自發道心。將交替時、堂司預出小榜云、〈下次淨頭缺人。如結緣、請留芳字〉願結緣者、收榜白堂司。然後覆住持、請充之。

⑤慈覺龜鏡文云、爲衆僧滌除。故有淨頭。　又云、酌水運籌、知慚識愧、所以報淨頭也。又云、懶惰併除、諸緣不具、非淨頭所以事衆也。　又云、涕唾墻壁、狼藉東司、非所以報淨頭也。

⑥大慧年譜［七丈］云、師二十四歲、〈在寶峯〉居侍者寮、一日侍次、湛堂視指爪云、想東司頭籌子、不是汝洗師。即承訓。交代黄龍忠道者、作淨頭九箇月。按普説、某自聞湛堂和尚此説。終身不養爪甲、纔長一菽不剪、湛堂和尚、便於手指上出現。此乃誠服、其訓導也。〈又見殿堂門、淨頭寮處〉

⑦雲臥紀談［上七丈］云、佛心禪師才公、趨西禪海印隆禪師法席、于時西禪衆、逾萬指。才發心領淨頭職。一夕汎掃次、隆適夜參、至則遇結座。擲拄杖云、了即毛端呑巨海。始知大地一微塵。才豁然有省。

⑧眞淨文禪師録［古宿四十五ノ四十一丈］云、淨頭端上人。求洗滌之。因而成偈云、段食共滋養、皆名有漏身。焉知大小事、不昧往來人。歷歷隨聞見、惺惺應屈伸。變通元自在、鑒照本天眞。由逐江湖客、恥爲堯舜臣。所依投旅客舍、妄計困風塵。病故嫌王膳、饑

仍預國民。既能分早白、須解別疎親。朽宅蚖虵會、浮泡屎尿陳。何妨觀穢惡、却要滅貧瞋。除垢超凡果、談空入聖因。迦文教雖舊、釋子道應新。革屣排朱戶、禪衣掛緣筠。攝心彰戒定、彈指覺坑神。吐唾防塗壁、抛籌怕動隣。爲僧當異俗、學佛便行仁。伏忍冤憎盡、興悲鳥獸馴。汲湯宜讓伴、盥手忌淋垠。受用生慚愧、供承識苦辛。堦甎同鏡面、瓦宇若魚鱗。狼藉欣歡少、光明讚歎頻。桶盆還次第、灰土最精淳。塞鼻奢紅棗、迎賓熾絳脣。去驕終遠害、習慢必遭迍。匾器易盈滿、曠懷忘賤貧。沙門修慧命、菩薩振慈綸。總具如蓮性、誰偏可意珍。莫迷臭皮袋、苦海枉沈淪。

⑨ 竺仙仙禪師、南禪録〔十丈〕、重陽謝志首座爲淨頭上堂云、盡十方虛空、是箇廁坑孔、三世諸佛、諸代祖師、頭出頭沒、盡十方大地、是箇拉摧堆、三世諸佛、諸代祖師、十字縱横、坐斷去來今、不落第二見、超出法報化、分開三八九。僧問雲門、如何是佛。門云、乾屎橛。南禪則不然。如何是佛。不昧主人翁。不昧主人翁。眉間劍化龍。笑他陶靖節、醉倒菊華叢。

⑩ 又竺仙淨智録〔卅六丈〕普説云、山僧少年時、每見人誦祖英集自亦觀其語句雄偉超拔、亦慕敬之。乃想其人物、必英姿氣概、方頤大耳。巍巍不可近者。及遊雪竇觀衆寮前石碑、所鐫頂相、大不相似、心中想者。如絶無福之人、而有大福。〈乃至〉你道其大福、從何而來。他昔在靈隱做淨頭、今靈隱淨頭寮、名曰雪隱。即今圓覺淨頭寮二草字、即是不知何人好事者模來。他做淨頭時、將衆人用過籌子、雖把水浸漬洗滌、其上有乾塗之物、不去者。躬以指甲剔洗。又恐不光滑。或少傷你所用處身體。乃於自面上盪試之。如此、若看其頂相、窮寒寂寞。而其語言道德、如此之行、人之敬慕。

⑪ 月江印禪師録〔下偈七丈〕贈省淨頭偈云、擬續當年雪隱絃、行菩薩行更加鞭。驀然自屎不覺臭、揷翅蒲鞋飛上天。

⑫ 義堂空華集〔十一ノ二丈〕賀淨頭頌軸序云、易曰、謙亨。君子有終。卑而不可踰。又曰、地中有山謙。君子卑以自牧。牧者養也。夫山之爲體也、宜峻拔乎天上、而反居地中。然而人莫敢踰越其巔者。猶君子抱才德者、宜居崇班而反隱乎下位以自養。然而以居人之所惡故、莫或爭之、其道自亨而有終也宜矣。古之宗門祖師、發心入道、必先歷試諸難而役于雜務職。職之最卑而人所甚惡、莫過乎持淨。然若雪竇明覺居衆、司此職于靈隱、至今有雪隱之美稱。大慧師以承湛翁之訓、洗籌於寶峯、幾一朞、有終身不養爪甲之誓、是豈非卑以自牧也歟。惟二老也、出乎雲門臨濟之後、回狂瀾於既倒、支大廈於將顛之際、可謂君子有終矣。而後學者、抑止不啻如泰山北斗之尊、不亦卑而不可踰之謂乎。今也不然。初機後輩、乍入吾門、則輒欲身心以逸予、衣食以豐美、名位以崇重、屋盧以安便。由是雜務劇職、每乏其人、寔主法者、所憂也。我不聞大禪師、主瑞鹿。明年丙午春、適淨頭缺人、前主正傳明岩師之徒、有阮其名者。被褐懷玉、匿乎緇伍之間、有年於此矣。及茲慨然而起、請就厥職。凡東司器皿、什物之類、莫不修整焉。牖之汚者、刷而滌之、屐之缺者、綴而補之、桶貧脱者、椸巾弊者、或箍而束之、或換而新之。至若掃地裝香之勤、燒湯汲水之勞、莫不竭力焉。見者咸悦服矣。於是禪師特唱四句伽陀、以讚厥美。且告于乃師。泪山中耆英碩衲、賡歌以助成之。軸成命予、文以冠于首。惟曆應間、朝廷有旨、革故龜山行宮、鼎建一大禪刹、賜天龍資聖之額、仍命先師、爲開山祖。然以寺本備十方之居故、先師不允徒弟者掛搭。小子方十七歲、投師易服、懇乞隸名、師憫予誠心、乃允。予既而發心持淨、期一周。而職未滿、俾遷于侍司、而後出入叢林。每欲終其職、而未遂矣。嗟今老且病矣。竊感諸阮公、克繼雪竇大

慧之踵、合乎君子有終之道。而有愧于内、故不辭、書以告來者。庶乎哉。

【五三九】持淨

①忠曰、淨頭又名持淨。

②虛堂愚禪師録〔四ノ六十一丈〕普説云、如玄沙和尚、精持頭陀苦行、日間開畠種粟、引水澆蔬、夜間勤於香燈、持淨掃地。

③斷橋倫禪師録行状〔二丈左〕云、佛鑑奉詔登徑山、因再參焉。命掌法藏、既復自惟曰、宴安鴆毒、苟勞身利衆、何爲不勉。持淨一年、拂垢滌穢、皆躬爲之。佛鑑亟稱於衆。遂延爲第二座。

④清拙澄禪師、住建長時、請持淨偈云、妙喜寶丞峯持淨日、隱之靈隱結緣時。芳塵郁郁今如昔、直下承當者是誰。

⑤月江印禪師録〔偈三十丈〕振寮元持淨、求警策、偈云、執持糞器、著弊垢衣。入淨入穢、入水入泥。日用常行三昧、發揮古德風規、趙州東司頭不説佛法、狼藉不少。湛堂指甲上放光動地、誠不自欺。生苕帚破糞箕、得便宜是落便宜。這般標致誰相似。靈鷲山中有隱之。

⑥雜毒海〔六ノ一丈〕實虛闍侍者、持淨頌云、銀甲纖纖剪斷時、黄金殿上掘東司。一籌不獲翻身去、禿箒拈來好畫眉。

⑦虎關濟北集〔一ノ十二丈〕持淨歌略云、漢也少年誓持淨、胸懷不干高下職。土灰堆器似丘陵、波浪鼓槽如溟渤。盧公何處惹塵埃、神秀時時勤拂拭。夜燈焰長常耿暉、晨香煙細恒馥郁。誰言此所幽陰地、何知變作光明國。誰言此所臭穢地、何知熏作芝蘭室。三回引出赤鈎天、一推推倒悟瓦塔。應識寺圃眞法場、不與俗間溷廁匹。鶩子婆羅潛堅信、趙州文遠工鬬劣。巍峩乳峯百世師、突兀凌霄萬人傑。道價盛起洞明爭、讚歎不及衡梅謫。二老在衆共於斯、奚翁寶峯李靈岳。想汝要透祖師機、豈必敢學淮南跡。〈奚翁、大慧奚氏。李、雪竇顯李氏、靈岳靈隱也〉

⑧義堂日工集云、康永元年壬午、十八歳復參夢窓、掛名天龍、發心持淨者一年、國師一日、闚見余躬自沈洗滌廁牏、用爪甲、清除穢汚、感其精勤、乃命侍于湯藥。而職未滿、俾遷于侍司。

【五四〇】延壽堂主

①或略稱堂主〈又見殿堂類延壽堂處〉

②禪苑清規〔四ノ四丈〕延壽堂主云、堂主須請寛心耐事、道念周旋、安養病僧、善知因果之人。堂中所用、柴炭米麪、油鹽醤菜、茶湯藥餌、薑棗烏梅、什物家事、皆係堂主緣化。如其無力。唯米麪油炭、就常住打給。如病僧入堂將息、令行者打疊床位、如法安排。煎煮湯藥、供過粥飯、遂時問訊、務令適意。如病人苦惱、多生瞋怒、粥飯湯藥、動不如意。及呻吟叫喚、屎尿狼籍、並須憫念看承。不得心生厭賤。如欲沽酒下藥、及以浸藥爲名。食啖魚肉葱薤、貴圖補益、是時堂主、當以禁戒因果、善言開諭、令堅正念、勿縱邪心。嚴戒供過行者、剪剃針線之人、不得潛隱藏帶酒肉入堂、〈合藥如須用酒、當令院外浸漬、及以酒糊爲丸、煎藥用葱、及合藥肝腎魚肉、尚猶不可。何況恣心食啖也〉病僧若可擔擎、及稍進粥飯、勸令持齋、不宜輕毀禁戒。堂中鍋釜、不得令人練帛、有妨病僧使用、非係堂中將息之人、不得延容粥飯〈有處病僧在堂。並上文暦、以憑庫司打給、并請齋嚫〉病僧如稍困重、報堂司抄箚、遷重病閣、

〈若非道眼精明、並勸令專念阿彌陀佛、祈生淨土。若勸率同袍、打磬念之極妙〉八福田中、看病最爲第一、〈佛法僧、父母、師長、貧窮、橋梁、義井、疾病、乃八福田也〉況出家之人。雲遊萍寄、一有疾病、誰爲哀憐。唯藉同袍慈悲安養、誠爲重任、豈可輕心。

③備用清規[七ノ十二丈]云、延壽堂主奉養病僧、常備姜棗、油燭五味、以時管遇。病者呻吟、當生愍念、病稍輕安、勿縱補益、恣噉無厭、久佔房榻。病是衆生良藥、當改過日新。孤燈燭照時、正好著力。

④敕修清規[下一]云、延壽堂主、看視病僧、湯藥油燭、炭火粥食、五味常備供須、公界倘缺、若自己豐裕、結緣應付、或勸化施主、措辦、床席衣被、狼籍穢汚、爲其洗浣、母生憎嫌、八福田中、直病爲第一也。

⑤慈覺龜鏡文[勅鈔下一ノ五十三丈]云、爲衆僧、供侍湯藥、故有堂主。　又云、寧心病苦、粥藥隨宜、所以報堂主也。　又云不閑供侍惱亂病人、非堂主所以恤衆也。　又云多瞋少喜、不順病緣、非所以報堂主也。

已下略録事緣。

⑥禪林寶訓[上ノ五十七丈]云、高菴住雲居。聞衲子病、移延壽堂、咨嗟嘆息、如出諸己、朝夕問候。以至躬自煎煮、不嘗不與食。或遇天氣稍寒、拊其背曰、衣不單乎。或値時暑、察其色曰、莫大熱乎。不幸不救、不問彼之有無、常住盡禮、津送。知事或他辭、高菴叱之曰、昔百丈爲老病者、立常住、尒不病不死也。四方識者、高其爲人、及退雲居過天台、衲子相從者、僅五十輩、間有不能往者、泣涕而別。蓋其德感人如此。

⑦春渚紀聞[四ノ十一丈]云、錢塘淨慈寺古道者、主供侍病僧寮、一日病僧有告之。曰、我病少愈。念少鳧血爲味、汝能爲我密致之、幸甚。至暮夜袖血餉、僧食之美甚。一二日復多以金付之、再有所須。同僚僧雛、窺道者於隙處、披其胸取漆盂、以利刀刺心血、覆盂其上、解衣帶纏遶、久之開視盂中、血凝矣。即以葱醯依前法製之、以進病僧。僧雛大駭、出以所見、語其徒、且告病僧。皆大驚異。

⑦　又見殿堂類延壽堂處

【五四一】涅槃頭

①忠曰、蓋掌涅槃堂事者、涅槃堂、即延壽堂也。

②雲門偃禪師録[下ノ廿四丈]云、師問僧、伱作什麼。僧云涅槃頭。師云、還有不病者麼。僧云不會。師云恁麼不會。不恁麼不會。僧無語。師云、汝問我。僧便問、作麼生是不病者、師指傍僧。

【五四二】本師

①受業之師也。〈受業師見稱呼類〉

②敕修清規[下一ノ廿三丈]沙彌得度云、引請領沙彌、至本師前、胡跪合掌。本師執刀云、最後一結。謂之周羅。唯師一人、乃能斷之。我今爲汝除去。汝今許否。答云可爾。

【五四三】戒師

①爲沙彌、授戒品者。

②敕修清規[下一ノ廿三丈]沙彌得度云、戒師用淨瓶灌頂、以指滴水於頂上、執刀剃髮。〈乃至〉秉爐請三寶、受戒。

【五四四】作梵闍梨

①忠曰、沙彌得度時、作梵唄者、蓋聲明。止息喧亂、然後方行事。

②敕修清規[下一ノ廿一丈]沙彌得度云、作梵闍梨、鳴大磬、作梵云、神仙五通人、云云。

又作云何梵、云云。場歇、又鳴磬作處世界梵。

③梵梵唄也。釋氏要覧[上ノ六十七丈]云、梵音梵云唄匿。華言止斷也。由是外事、己止己斷、爾時寂靜、任爲法事。

④長阿含經云、其梵聲有五種、〈詳諷唱類聲明處〉

⑤闍梨南海寄歸傳[三ノ十四丈]云、阿遮利耶、譯爲軌範師。是能教弟子法式之義。先云阿闍梨、訛也。

【五四五】引請闍梨

①忠曰、得度沙彌、未諳進退、故此闍梨、引導之指揮行禮、而請戒師受戒焉。

②敕修清規[下一ノ廿一丈]沙彌得度云、引請闍梨至戒師前、大展三拜。〈乃至〉引請收坐具、起鳴手磬、引剃頭人入堂、聖僧前三拜。次戒師前三拜了就跪。云云。〈乃至〉引請秉爐教沙彌云、請師言句、汝合自陳。汝若不能隨我聲道、凡稱某甲處當稱自己名。〈詳如彼〉

③行事鈔沙彌別行篇[下四之二ノ廿一丈]云、先請和尚。應具儀教云。大德一心念、我某甲、請大德爲和尚。云云。　資持記云、教云者、準須旁人教示。今時所謂引請人也。

【五四六】專使

①忠曰、專爲某事發使、非託便。故曰專使、或又用魯論文字。

②論語[七ノ三丈]云、子曰、誦詩三百。授之以政不達。使於四方、不能專對。雖多亦奚以爲。　朱熹曰、專獨也。

③敕修清規[上二ノ十四丈]、請新住持發專使云、庫司會兩序勤舊茶議發專使。修書製疏茶湯榜。〈云云〉所請專使或上首知事、或勤舊、或西堂首座、或以次頭首、充之。若非知事充專使、亦須以下知事一人同去、掌財議事。

④備用清規[九ノ十丈]、住持涅槃、下遺書云、須擇能事人、充專使。如大慧見無盡、叢林未致寂寥。

⑤敕修清規[上二ノ廿四丈]尊宿遷化云、主喪請侍者辦事人、充專使、分路馳送諸山法眷、檀越、官員遺書。唯尊宿相見下語。須擇能事人、充專使。

⑥臨濟玄禪師録[四十九丈]云、師爲黄檗馳書去潙山、時仰山作知客、接得書便問、這箇是黄檗底、那箇是專使底、師便掌。

【五四七】帶行侍者

①忠曰、賓客、自帶從之人也。

②　經國大典註解[後集下ノ八丈]云、帶行率行也。

③敕修清規[上二ノ十丈]迎待尊宿云、喫茶罷、侍者方挿香禮拜。帶行侍者行者、人僕轎從參拜。　又尊宿遷化、對靈小參云、喪司維那、同小師、壞香詣客位、拜請主喪人、大夜對靈小參。〈乃至〉主喪人、用帶行侍者燒香、無則聖僧侍者代之。

【五四八】帶行小師

①敕修清規〔上二ノ廿五丈〕入院、受兩序勤舊煎點云、住持寢堂中位、兩序勤舊位、如常坐。侍者帶行小師、問訊住持畢、兩序勤舊末坐。

【五四九】帶行知事

①敕修清規受嗣法人煎點云、若法嗣到寺煎點、令帶行知事到庫司、會計營辦合用錢物、送納。

【五五〇】帶行僧行

①敕修清規〔上二ノ廿八丈〕尊宿遷化、請喪司職事云、主喪人須存公正。不可徇私帶行僧行、不得干預執役。

【五五一】沙彌

①飜譯名義集〔一ノ五十三丈〕云、音義云、沙彌二字、古訛略也。唐三藏云室利摩拏路迦。此翻勤策男。寄歸傳〔事鈔下四之二ノ十九丈引之〕云、授十戒已、名室羅末尼、譯爲求寂。最下七歳至年十三者、皆名駈烏沙彌。若年十四至十九、名應法沙彌。若年二十已上、皆號名字沙彌。

②法苑珠林〔卅一ノ十三丈〕云、沙彌者耶。舍傳云、隋云勞之小者、以修道爲勞也。又翻息慈。謂息世染之情、以慈濟萬物也。又創佛法、俗情猶存、須息惡行慈也。

③十誦律〔六十一ノ十三丈〕云、沙彌法者、沙彌不應輕慢和尚、有所作事、皆應白和尚。行時當隨從和尚後。常供給一切所須。隨順和尚意、不得有違逆。若所作、不白和尚不得作、除禮佛法僧。用齒木、大小便、沙彌住和尚邊、知不能增長善法、應白和尚。持我付囑某甲比丘。和尚應籌量。是比丘教化法何似。弟子衆復何如。若知是比丘、具足善法、當付囑、若知不具足、當更付囑餘比丘、若和尚不好、應捨去、應令取草樹葉取果齒木、除僧坊中草、掃灑、授飲食湯藥。是名沙彌法。

④人天寶鑑〔六十七丈〕云、慈航朴禪師、凡童行剃染、令入沙彌寮、習登壇受戒儀軌、及誦遺教經、方令受具戒、受具畢、入新戒寮、受持三衣一鉢。夜則展坐具、披五條而睡。復請一精誦戒經者、與之教授。誦至通利、方許參堂。越二三夏、山門方督掌務。願遊方者、師必欣然、動于眉睫。贈道具促其行。

⑤趙州諗禪師録〔上ノ一丈〕云、師初隨本師行脚、到南泉、南泉問、伊是有主沙彌。無主沙彌。師對云、有主沙彌。泉云、那箇是伊主。師云、孟春猶寒、伏維和尚尊體、起居萬福。

⑥傳燈録〔十四ノ廿五丈。会元五〕藥山高沙彌〈嗣藥山儼〉章云、高沙彌、藥山住菴。初參藥山。藥山問師、什麼處來。師曰南嶽來。〈云云〉山便召維那云、這跛脚沙彌、不任僧務、安排向後菴著。

【五五二】驅烏沙彌

①四分律云〔三十四ノ廿七丈〕、阿難有檀越、家死盡。唯有一小兒。將至佛所、頭面禮足、在一面坐。佛知而故問、此何等小兒。阿難具白因緣。世尊言、何不度令出家。答言世尊有制、不得度年減十二者。是以不度。佛問阿難、此小兒、能驅烏、能持戒、能一食不。若

能如是者、聽令出家。阿難言、此兒能驅烏、能持戒、能一食。佛告阿難、若此小兒、盡能爾者、聽度令出家。〈略鈔〉。

② 十誦律［廿一ノ十四丈］、作阿難親里二小兒、又作能驅僧食上烏未。

③ 五分律［十七ノ十二丈］、作二小兒、大者八歲、小者七歲、恆敎驅食上烏。如上座所得食分、驅烏小兒、亦應等與。

④ 僧祇律［廿九ノ四丈］云、沙彌有三品。一者、從七歲至十三、名爲驅烏沙彌。二者、從十四至十九、是名應法沙彌。三者、從二十上至七十、是名字沙彌。

【五五三】沙喝

① 忠曰、日本禪林、剃度爲沙彌、而著喝食之服者、稱爲沙喝。〈喝食義見下〉

② 瑞龍山南禪寺方丈有牌、開山大明國師時物也。題曰、闔山清衆七百員、沙喝百三十人。〈止此〉此方沙喝之稱亦舊矣。〈或謂、沙彌喝食略言〉

③ 日工集［四ノ四十七丈］云、南禪、佛生之辰、紀綱預命沙喝、裝花亭。沙喝行力、走山野、採衆色草花。〈詳花亭處。　觀之、非沙彌喝食略言〉

【五五四】童行

① 忠曰、童行、投佛寺求僧、未得度者、即少年行者也。

② 釋氏要覽［上ノ卅四丈］云、智度論云、梵語、鳩摩羅伽、秦言童子。寄歸傳云、白衣詣苾蒭所、專誦佛典、求落髮、號童子。西天、出家國無制止。但投師允可、即和僧剃髮。即無童子行者之屬。今經中、呼文殊善財寶積月光等諸大菩薩、爲童子者、即非稚齒、如智論云。如文殊師利、十力、四無所畏等、悉具佛事故住鳩摩羅伽地。又云、若菩薩從初發心、斷婬欲、乃至菩提、是名童子。今就此方釋之、釋名曰、兒年十五曰童、童獨也。自七歲止十五、皆稱童子。謂太和未散故。

④ 南海寄歸傳［三ノ五丈］云、凡諸白衣、詣苾蒭所、若專誦佛典、情希落髮、畢願緇衣、號爲童子。或求外典、無心出離、名曰學生。

⑤ 童行訓誨法、詳垂説門、訓童行處。

⑥ 六學僧傳［廿一ノ三丈〇梁傳五ノ十七丈］晉曇徽傳云、徽年十二、師事安公、爲童子。精神大於其身、安使受詩禮。又四年乃落髮。

⑦ 普燈録［二ノ十七丈〇会元十六ノ一丈］天衣懷禪師章云、長游京師、依景德寺、爲童行。天聖中、試經得度。

【五五五】道者

① 忠曰、童行又稱道者。義堂曰、禪家雛道者、雖七八歲、亦猶於大衆前作法事。又曰鹿峯宗輔道者、年十三、選於衆、爲楞嚴頭、共詳楞嚴頭處。

② 僧寶傳［七ノ一丈］天台韶國師傳云、十八詣信州開元寺、受滿分戒。後唐同光中、謁舒州投子菴主、不契。造龍牙遁禪師、問天不蓋地不載、此理如何。遁曰、合如是、韶惘然。固要爲説。遁曰、道者汝向後自會去。

③ 釋氏要覽［上ノ十四丈］云、智度論云、得道者、名爲道人。餘出家者、未得道者、亦名道人。　注道者亦同此説。

④ 舊説［敕鈔一ノ廿四丈］曰、渡唐人説、中華叢林、稱僧道者、其得度牒披剃、此謂僧。未得

度牒、有髪而與僧同誦經者、此謂道。即行者也。

⑤ 忠曰、敕修清規聖節云、僧道、歳一供帳。〈止此〉是即僧及道士也。然解者［敕鈔一ノ廿四丈］、謂道是行者、非道士、輒引渡唐人説、非也。余左觸中辨。

【五五六】童侍

①即童行也。

②宋高僧傳［三十ノ九丈］貫休傳云、貫休七歳、父母雅愛之、投本縣和尚安寺圓貞禪師出家、爲童侍。日誦法華經一千字、耳所蹔聞、不忘於心。

【五五七】僧童

①即童行也。

②勸善書［七ノ六丈〇排勻引往生集］云、宋師贊雍州人、爲僧童。年十四、念佛不絶。

③東海一漚集［二ノ九丈］、示僧童道秀頌云、蔗苗地不腴、道秀亦何如。童穉無攸往、昏蒙可擊虚。今年天大旱、盈科詎庸需、爲憐山下水。竟弗知所於、而矧若爾輩、育徳少居諸。吾詩有新誡、似示城南符。龍魚各異志。爭取怪豫且。

【五五八】聽叫

①忠曰、侍住持左右、聽其叫呼、受使令者。

②敕修清規［下一ノ六十二丈］亡僧板帳式云、方丈聽叫、捧香合。

【五五九】行者

①忠曰、禪林行者、盧能爲始、爾後凡求剃度。而未得買度牒、有髪而依止僧寺者、稱爲行者。

②舊説［敕鈔五ノ六丈］曰、中華行者、與日本所謂行者別、日本行者、剪除鬚髪、而行事同俗。中華則凡剃髪者、唯有僧及沙彌而已。如行者、則不剃落、不披帽、其髪岐二、長下垂背後。又中華行者、受五戒。五戒、本在家所受、但第三爲不邪婬。行者則不婬欲、以爲異焉。昔六祖受衣鉢於黄梅時、亦以行者之形矣。從行者轉得爲僧。故有行堂之額、題選僧堂者。

③又［敕鈔十ノ廿九丈左］曰、行者有二種。謂方丈行者、庫司行者也。〈詳見下〉

④釋氏要覧［上ノ卅四丈］云、善見律［十一巻十九丈］云、有善男子、欲求出家、未得衣鉢、欲依寺中住者、名畔頭波羅沙。〈未見譯語〉今詳、若此方行者也。經中多呼修行人、爲行者。行是所修二種行也。者即五蘊假者、是能修行之人也。凡十六歳已上、應呼行者。謂男生八歳毀齒。十六陽氣全、以其有意樂信忍、修淨梵行故自晋時已有此人。如東林遠大師下有辟虵行者。

⑤宋高僧傳［八ノ三丈〇六学四ノ廿二丈］南華寺慧能傳云、咸亨中、往韶陽、遇尼無盡藏、恒讀涅槃經。能聽之、即爲尼辨析中義。尼深歎服。號爲行者。

⑥虚堂愚和尚録［四ノ十四丈］、示行者智潮法語云、優婆塞者、吾佛會中、四衆之一數也。精持苦行、承事佛僧、先道業而後得度。世尊入滅、道法遐被五天竺國、佛舍僧盧、莫不有之。逮教入中國、譯梵語而正唐言。名之曰行者。蓋有徳有行之所稱也。其數既廣。漢唐以來、設官置局、試經得度。至於海内奇髦俊彦、冒歴寒暑、窮經討論、以試所業。

其間獲中僧科者、官給黄牒、剃度爲僧。然後肩雲頂絲、履艱涉險、不憚數千里之遥。尋師訪道、究明人天性命之學。醞釀既久、文彩發露。王臣尊禮、爲人天師。一言一句、光明殊勝、爲後世法。此古今通論、出家兒之大體也。南渡之後、爲見吾教日興、出綾紙易楮幣。庶欲得者寡、而入者稀。殊不知、物隨事變、一墮利域、百計紛拏、以謀進納之計。得之者、形服雖殊、昇沈事海。失之者、窮困相煎、老斃山澤。要如前人優游教海、披尋文義、試所得而披法服者、無復得也。

⑦ 忠曰、翻優婆塞曰行者。未知何據。

⑧ 忠曰、如日本今時行者、帶妻啖肉。全非求僧也。然中華上古行者、有復帶妻者。 傳燈録［十ノ廿四丈］池州甘贄行者〈嗣南泉〉章云、有住菴僧、緣化什物。甘曰、若道得即施。乃書心字問、是什麼字。僧云心字。又自問其妻、什麼字。妻云心字。甘云、某甲山妻、亦合住菴。其僧無語、甘亦無施。

⑨ 聯燈會要［廿九ノ廿三丈］、亡名尊宿云、昔潙山有一僧、下山、覓住處。偶宿一行者家。者問、上座何處去。云覓箇住處。者書佛字問、這箇是甚麼字。云佛字。者却喚妻子問、是甚麼字。妻云佛字。者云、上座與拙室、見解一般、爭解住得。其僧却回潙山。

⑩ 趙州諗禪師録［下ノ七丈］云、有俗行者、到院燒香〈云云〉

⑪ 已稱俗。蓋亦是帶妻子者。

⑫ 義堂日工集［一ノ十八丈］云、圓覺行者、實恩至。戒其勿帶刀器。謂行者是僧之基、豈可自棄哉。

【五六〇】行堂

①忠曰、行者居行者堂。故以居呼人、又曰行堂也。〈若呼居處爲行堂、則行者堂也。見殿堂類〉

②敕修清規、尊宿遷化祭次、方丈行者、六局行者之次、有行堂。 解者曰、此公界行堂也。

③中峰本禪師録示行堂偈云、至道常湛然、萬古絶成壞。良由妄想生、輪回三有界。

【五六一】行堂主

①行者堂之主首［敕鈔五ノ十丈］、或單稱堂主。

②敕修清規［上二ノ九丈］、爲行者普説曰、參頭堂主、詣侍司、同請住持下行堂。

【五六二】六局行者

①敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、有六局行者。〈舊解闕〉

② 品字箋［己ノ九十七丈］云、局曹也、部分也。曲禮各司其局也。

③忠曰、六局古無解。蓋謂六頭首歟。六頭首所屬行者、故云六局行者歟。且闕疑。〈六頭首者、禪苑清規列首座書狀藏主知客庫頭浴主、云已上並爲六箇頭首〉

【五六三】執局行者

①敕修清規［上二十丈左］迎待尊宿云、方丈執局、及參頭、領衆行者、人僕、轎番、以次參拜。 又開堂祝壽［上二ノ二十二丈］云、展賀畢、據座、侍者、小師、揷香大展三拜。次執局行者、揷香禮拜。次參頭、領衆行者、揷香禮拜。

② 忠曰、方丈及六局行者、就諸職者、此謂執局也。

③ 次言參頭領衆行者、是無職掌者。

【五六四】參頭行者
①行者中［敕鈔五ノ八丈］、高年舊參者、首于諸行者、曰參頭行者。〈又有四來參頭見前參頭處〉。
②敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、參頭行者、令喝食行者、報各局務、行堂前、掛牌報衆。

【五六五】副參行者
①忠曰、副貳參頭事務者。〈又有四來副參見前副參處〉。
②敕修清規［上二ノ九丈］爲行者普說云、參頭報衆、請兩序立班。副參領衆、門迎兩序入堂。

【五六六】望參
南禪寺［敕鈔八ノ五二丈］往昔有望參之行者、若副參闕、則此人將補之。故曰望參。猶如副寮之有望寮焉。

【五六七】堂司行者
①維那爲堂司。而此行者、屬堂司、受其使令。故名堂司行者。
②敕修清規［下一ノ十六丈］堂司特爲新舊侍者茶湯云、維那令堂司行者、請新舊侍者、幷聖僧侍者、參前就寮獻湯。

【五六八】客頭行者
①屬知客。受其使令者。
敕修清規［下一ノ三丈］知客云、凡官員檀越、尊宿、諸方名德之士、相過者、香茶迎待。隨令行者、通報方丈。然後引上相見。　又云、或欲詣方丈庫司諸寮、相訪、令行者引往。
②　忠曰、此皆知客寮客頭行者也。

【五六九】方丈行者
①舊說［敕鈔十ノ廿九丈左］曰、行者有兩部、謂方丈行者、庫司行者也。
②敕修清規［上二ノ一丈］上堂云、方丈行者、覆住持、次覆侍者、鳴鼓。　又［上二ノ卅丈］尊宿遷化祭次、六局行者上、有方丈行者。　又［下一ノ十四丈］侍者進退云、與舊人交代、頭首禮同。方丈行者、直廳、轎番、拜賀。

【五七〇】庫司行者
①見方丈行者處。
②禪苑清規［四ノ二丈］庫頭云、當庫行者、須有心力、解計算。守己清廉、言行眞的、衆所推伏、方向委付。

【五七一】方丈客頭行者
①請客侍者、所使令者。
②敕修清規［上二ノ十六丈右］專使特爲新命煎點云、兩序單寮、係方丈客頭、同專使行者、一一詣寮稟請。　又方丈特爲新舊兩序湯云、請客侍者、令客頭行者、備盤袱爐燭、詣新舊前堂首座處。

【五七二】庫司客頭行者

①都寺寮［敕鈔十四ノ廿七丈］客頭行者也。

②敕修清規［上二ノ二十一丈］山門請新命齋云、庫司客頭、鋪設僧堂内、住持位。　又庫司四節特爲首座大衆湯云、都寺預於齋退、具湯榜。即令客頭行者、備盤袱爐燭、詣前堂首座前、挿香。

【五七三】庫子

副寺寮［敕鈔八ノ四十六丈右］行者、屬副寺、造單具收支者、見副寺處。〈又見前地客處、及雜行門公差處〉或曰、禪苑清規［四ノ二丈右］所謂當庫行者、是也。〈見庫司行者處〉

【五七四】茶頭行者

①茶頭在四寮、〈庫司頭首單寮蒙堂、見殿堂門四寮處〉故茶頭行者、亦可在四寮、又見茶頭處。

②敕修清規［下一ノ八丈］寮元云、毎日粥罷、令茶頭行者、門外候衆至、鳴板三下。

【五七五】喝食行者

①禪苑清規［一ノ九丈］赴粥飯云、十聲佛罷、良久打槌一下、首座施食。〈粥云、粥有十利、云云。齋云、三德六味、云云。饋飯云、施者受者、云云〉施食訖、行者喝食入。喝食須言語分明、名目不賺。若有差誤、受食之法不成。須令再喝。

②永平清規赴粥飯法［七丈］云、喝食行者、先入前門、向聖僧問訊訖、向住持人前、問訊住持人訖、到首座前問訊訖、到前門内南頰板頭之畔、面向聖僧問訊訖、叉手而立喝食。

③瑩山清規［上］云、聞展鉢槌、喝食童行、入堂、聖僧主人首座前問訊罷、經聖僧後、到南頰版頭、問訊、待首座施食呪願了、喝食如常。

④南禪規式［上ノ八十九丈］云、旦望喝食二人、列立僧堂門右邊、同音喝食。粥則曰飲湯、次白粥、次汁菜、次再請、次滌水。〈或云鉢水〉次折水。〈折者棄義〉齋則曰、香飯、次汁菜、次再請、次請折、次滌水、次折水、次第喝之。如粥時飲湯、低聲而永曳。蓋表大衆謹慎也。若四節、則請上座喝之。或闕其人、則新戒轉上座唱之、隨唱某物、參頭行者、低聲報鈴之沙喝。粥畢、自聖僧龕右邊、轉左至首座前問訊、高聲唱曰、請首座大衆、祝聖諷經、畢、下堂。

⑤舊説［敕鈔八ノ九丈］曰、喝食者、喝是唱義、當衆僧齋粥時、唱喝湯香飯等名。

⑥古説曰、喝者其音速烈者。如日本禪林齋粥二時喝食之聲、則只是唱食而非喝食。

⑦忠曰、或見禪機下咄喝聲緊烈、作此説。可笑、清規［上二ノ九丈。又下一ノ四十三丈］云、長聲喝、緩聲喝。豈怒聲義耶。

⑧舊説［敕鈔十ノ二十九丈］曰、喝食行者、屬方丈。〈行者分二類謂方丈、及文庫司也〉住持上堂、立班侍者之後。　又曰、日本禪林有髮童子、稱喝食者。綺羅鉛粉、恧口言飯羹、名實相失、有如此者、可笑。

⑨古德［太岳禾上爲予説］曰、喝食者、喝大衆喫飯也。　或曰、往昔東福寺齋時、喝食人、候其飯羹等盡未盡、以異名呼之。〈鹽稱柳絮之類〉供頭即行益焉。今時司席人、指揮供頭。故喝食名義、到有無識者。

⑩忠曰、禪苑清規已言、喝食言語、若差誤、受食之法不成。須令再喝。〈止此〉依此則

喝大衆喫飯之説、爲當矣。但可依敕修清規喝言請大衆下下鉢。〈見受嗣法人煎點處〉此語不明、實應受食不成。豈有但誤唱飯羹等而受食不成之義哉。然初喝請大衆下鉢、次第喝香飯羹菜等、可如南禪規條。

⑪敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、凡旦望五參上堂罷、參頭行者、令喝食行者、報各局務、行堂前、掛牌報衆。〈云云〉如住持他緣、則喝食行者、喝云、奉方丈慈旨、晚參、衆云不審。次長聲喝云、放參、衆云、珍重問訊退。　又亡僧板帳式［下一ノ六十二丈］云、喝食行者撮鬮。　又大坐參［下一ノ四十三丈］云、若不晚參、則堂司行者、進首座前問訊云、堂頭和尚、今晚放參、轉聖僧後右出、令喝食行者、中立問訊長聲喝云放參。

⑫忠曰、按此敕修清規數條、皆是粥飯喝食之外、有名喝食行者明矣。然舊説［敕鈔十ノ二十九丈。又十二ノ十三丈］曰、非有定行者名喝食者、只臨時掌此職者、爲喝食行者而已。〈止此〉此無稽之談、不可取也。

⑬日本禪林、喝食權輿、有數説、未知孰是。　一説［敕鈔一ノ十四丈］、曰始於東福聖一國師法嗣、雙峯源公。〈東福塔頭、桂昌院開祖也〉　一説［敕鈔五ノ五十六丈］曰、聖一法嗣、無外然公、稱應通禪師。是爲喝食之始。

⑭忠曰、此時喝食、不拘齒老少、但掌其職而已。非如今時喝食、但少年者。何以知之。如無外、初稱道空房。蓋更教入禪者。其豈少年耶。

⑮一説［敕鈔五ノ六丈］曰、東福開山時、有監寺勤舊。死後現形於僧堂、請聖一國師曰、我某監寺也。某平生希望秉拂分座。而事未果、遽死。今也託生山前某家。願和尚他後、允爲頭首。言畢不現。國師訪求山前民家、果産一男子。國師囑曰、此是某監寺後、身善能撫育焉。稍長取之、訓導。某額所垂髮、剪刀斷之、令掌喝食。〈後居實相寺〉是喝食之始。

⑯忠曰、今時喝食、分取額上髮少許、下垂額面、剪斷其末。蓋此故事歟。又左右髮、抽取少許、下垂左右肩前、此是中華行者、岐髮下垂之遺法歟。

⑰一説［敕鈔一ノ十四丈］曰、大覺禪師法嗣、桃溪悟公〈宏智禪師〉、爲喝食之始。

⑱傳説曰、天龍開山時、名公鉅卿之子、求僧入寺、未堪剃度受具者、皆爲喝食。

⑲忠曰、蓋失喝食名實者、起於此。

⑳僧祇律［廿二ノ十六丈］衆學法中、看大衆食、徧不徧者、名監食人、又行益者、名行食人。

【五七六】供頭行者

①忠曰、粥飯時行益飯羹茶果等者、或但稱供頭。

②敕修清規［下一ノ十三丈］兩序進退云、堂司行者喝云、大衆送新知事、歸庫司。供頭行者、鳴僧堂鐘。住持送入、對觸禮一拜。

③敕修清規［上二ノ六丈左］念誦云、住持入堂、供頭鳴堂前鐘七下。

④又亡僧板帳式［下一ノ六十二丈］有供頭。　又坐禪云、令供頭僧堂内、裝香點燈。

⑤忠曰、此方供食果人名言給仕、訛矣。當稱供頭、按給仕〈法華經安樂行品云、天諸童子、以爲給仕不動經云、如親友童子、給仕行人〉給侍〈慈覺［禪苑八ノ一丈］亀鏡文云、爲衆僧給侍、故有淨人〉給使〈搜神［十七ノ五丈］記云、朱誕給使妻、有鬼病其夫疑之、爲奸、趙與時賓退録［輟耕ノ九二引］云、市民間子女以備給使〉皆在人左右辨事之泛稱、不可局供茶飯之事矣。蓋給仕、與供頭音似近、故有此轉訛。

⑥ 普燈録［十七ノ六丈］月菴果禪師章、謝供頭上堂云、解猛虎頷下金鈴驚群動衆。取蒼龍穴裏明珠。光天照地山僧今日、到此讚歎不及、汝等諸人、合作麽生、竪起拂子曰、貶上眉毛、速須薦取、擲拂子、下座。

⑦ 應菴華禪師録［法語ノ九丈］示璋供頭法語云、本色道流、夙有般若種智、纔出頭來、其氣概勁直、於最初一歩、卓然超絶、與泛泛者不同。蓋末上親近眞正宗匠、至於一言半句、終不妄誕。然此一段事、初非明悟知見可擬。又豈是世智辨聰、而能彷彿者哉。是故羅山云、上士脚纔跨門、便知宗旨、猶怕繩狀上老漢瞌睡、更回頭與一探。若是作家、暫挂瓶盂、亦恐繩床上老漢、瞌睡未醒、口裏水漉漉地、不是泊船處、便去俗人家、寄宿去。看他透底人、驀露箇消息、直使天下衲僧、無絲頭許湊泊、亦不令守住無湊泊蹊徑。所謂驅耕奪食手段、誠間世而出。又安可與時輩、和泥合水、瞎學者眼耶。

【五七七】供過行者

①即是供頭者。

②禪苑清規［四ノ五丈］延壽堂主云、病僧如欲沾酒下藥、及以浸藥爲名。當以禁戒因果、善言開諭、嚴戒供過行者、剪剃針線之人、不得潛隱、藏帶酒肉入堂。〈詳前延壽堂主處〉

③癡絶沖禪師蔣山録上堂云、擧顯英首座見慈明、明問云、近離甚處。英云、金鑾。明云、夏在甚處。英云、金鑾。明云、去夏在甚處。英云、金鑾。明云、前夏在甚處。英云、金鑾。明云、先前夏、在甚處。英云、和尚何不領話。明云、我也不會勘得你。教庫下供過兒子、來勘。且點一椀茶、與你濕口。

【五七七】供過行者

①即是供頭者。

②禪苑清規［四ノ五丈］延壽堂主云、病僧如欲沾酒下藥、及以浸藥爲名。當以禁戒因果、善言開諭、嚴戒供過行者、剪剃針線之人、不得潛隱、藏帶酒肉入堂。〈詳前延壽堂主處〉

③癡絶沖禪師蔣山録上堂云、擧顯英首座見慈明、明問云、近離甚處。英云、金鑾。明云、夏在甚處。英云、金鑾。明云、去夏在甚處。英云、金鑾。明云、前夏在甚處。英云、金鑾。明云、先前夏、在甚處。英云、和尚何不領話。明云、我也不會勘得你。教庫下供過兒子、來勘。且點一椀茶、與你濕口。

【五七八】直殿行者

①守佛殿行者［敕鈔一ノ廿三丈］。

②敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、堂司行者、直殿行者、常加伺候、毋令怠慢。

【五七九】衆寮行者

①大鑑［六十三丈］清規梅檀林須知云、寮行者、常常在寮。凡事聽寮元、主副、號令。如新來副寮、未知、行者詳細白知。每日點茶之湯、行者管、寮主提點之。

【五八〇】門頭行者

①羅湖野録［下ノ六十四丈］云、死心住黄龍山、揭牓于門曰、仰門頭行者。賓客到來、劃時報覆。〈詳殿堂類三門處〉

【五八一】監作行者

①忠曰、名義、見前監作處。蓋即監作也。

②敕修清規［下一ノ三丈］知浴云、第四通、人力入浴、監作行者。知事、居末浴。　又亡僧送亡云、庫司、預分付監作行者、辦柴化亡。

【五八二】淨人

①舊説［敕鈔十二ノ四十三丈］曰、淨者、非自淨之義。能代他而淨他也。

②忠曰、淨人投寺、未得剃染、給使衆僧者。

③釋氏要覽［下ノ卅三丈］云、毘奈耶云、由作淨業、故名淨人。若防護住處、名守園民。或云使人。今京寺呼家人。緣起者、十誦律云、瓶沙王、見大迦葉、自蹋泥修屋。王於後、捕得五百賊人。王問、汝能供給比丘、當赦汝命。皆願、王遂遣往祇園、充淨人。謂爲僧作淨、免僧有過。故名淨人。又梵云吃栗多、唐言賤人。〈今見童行自稱淨人。蓋不知端也〉

④慈覺龜鏡文［敕鈔下一ノ五十三丈］云、爲衆僧給侍故有淨人。　又云、寬而易從、簡而易事、所以報淨人也。　又云、禁之不止、命之不行、非淨人所以順衆也。　又云、專尚威儀、宿無善教、非所以報淨人也。

⑤六學僧傳［十ノ卅二丈〇傳燈廿四ノ卅四丈］宋常覺〈嗣歸宗章〉傳云、覺遊盧山、樂其間靜、遂投歸宗寺、出家爲淨人。梁乾化二年、始易形服、從剃染。

⑥高峯妙禪師録［九十三丈］志藏淨人煅骨語云、一大藏教、全體是火。若有嶺南靈骨、便好。赤身憺荷、雖然更入紅爐重煅過。

⑦明極俊禪師録示智有淨人［偈頌四十二丈］偈云、智妙玄機有也無、須從槽廠著工夫。一朝踏碓忘移足、肯許傳衣與老盧。

【五八三】苦行

①忠曰、淨人亦名苦行。

②傳燈録［廿七ノ十五丈］天台豐干禪師章云、師居天台山國清寺。本寺廚中、有二苦行、曰寒山子拾得。二人執爨、終日晤語。潛聽者、都不體解。時謂風狂子。獨與師相親。

③宋高僧傳［廿八ノ十一丈］常覺傳云、泪登弱冠往盧山、乃禮歸宗寺禪師、克苦行焉。

④　忠曰、六學僧傳常覺傳、作淨人。〈見淨人處〉

⑤僧寶傳［三册ノ三丈］雪竇顯禪師傳云、有苦行名韓大伯者。笑知客智眼未正。〈詳前典客處〉

【五八四】五戒

①五戒者、行者也。但受五戒、未剃染者。

②義楚六帖［五ノ廿九丈］云、行者五戒、律云、行者依師、先受五戒、修行之者、近事堪可承事比丘羅漢故、名爲行者、五戒故、名爲五戒示名。

③趙州諗禪師録［下廿七丈］十二時歌人定亥云、劉維那趙五戒、口頭説善甚奇怪。

④石溪月禪師雜録爲智擧五戒下火語云、天台臨海擧五戒、靈隱堂中幾歲華、掃地添爐新活業、拾薪供水舊生涯、不憂衣鉢不入手。且喜身心已出家、擧五戒、劫火洞然無退轉、却來領取一袈裟。

【五八五】毛頭

①日本月菴光禪師録［上ノ六十四丈］志杲毛頭請自贊云、三尺吹毛、當面提起。杲日照天、清風匝地。　又［六十五丈］宗聃毛頭請自贊云、利劍高提、殺佛殺祖。死中得活、是尋常、空手誰擊塗毒鼓。

②　忠曰、毛頭未詳。蓋淨人毛髮者、淨髮待詔類乎。〈淨髮待詔、見靈山業識團〉

【五八六】主喪

①忠曰、自代亡人、指揮後事、總主領喪事者、其職甚重。

②敕修清規［上二ノ廿六丈左］尊宿遷化云、請人主喪、須諸山名德、隣封老成、或法眷尊長、或只本寺首座。如有遺命、遵行舉請。　又［上二ノ廿七丈］請主喪云、主喪人至、鳴大鐘集衆門迎、至龕前炷香、首座大衆問訊。　又云、凡主喪者、須老成名德、如圓悟爲開福寧和尚主喪、接月菴果公以嗣其法。可爲標格。

③校定清規［下廿五丈］云、隣封當代歸寂、如請主喪、一看亡者遺言、二者其徒虔請、尤宜審及。若亡者遺言、固不可辭、非其徒虔請、如得回互、最逃謗議。切不可有心希酬謝也。事稍違式、多致爭訟、有玷法門。如圓悟與寧道者、主開福之喪、接月菴果一人、便是承當後事之標格也。

④東漸略清規［三ノ十六丈］云、凡喪主、須老成宿德圓悟爲開福寧主喪、宏智作書、遺大慧禪師、屬以後事、晦堂祖必入滅、命門人黄庭堅、主後事、豈可忽乎。

⑤　龐居士請于頔爲喪主。　宗鏡録［廿二ノ十二丈］云、昔有龐居士、命女靈照曰、吾當先逝、汝可後來。專候日中、可蛻斯殼。靈照曰、午即午矣。有蝕陽精。居士怪之。自臨窓下、其靈照忽爾廻、登父座、俄爾坐亡。居士笑云、甚爲鋒捷。空華落影、陽焰飜波。吾道于先、吾行于後。遂往于相公、爲喪主、告于公曰、但願空諸所有。慎勿實諸所無。言訖而逝。

⑥　有縁禪師、囑楊習主喪。　六學僧傳［七ノ四十一丈〇宋僧傳十二ノ十四丈］唐有縁傳云、宣宗皇帝、嘗戲書其衫背云、此童子、與朕有縁、由是名之有縁、而薙落焉。天祐丁卯歲終、時司空楊公習、方制置浙右。遺命主後事。

⑦　雪峯遷化、玄沙爲喪主。聯燈會要［廿三ノ廿五丈］玄沙備禪師章云、雪峯遷化。師作喪主。三朝集衆煎茶、師於靈前、拈起一隻盞云、先師在日即且從。汝道、如今作麼生道。若道得、即先師無過。若道不得、即過在先師。還有人道得麼。如是三問、衆無對。師撲破盞子、歸寺。

⑧　香林遠禪師寂、宋璫主喪。　普燈録［二ノ三丈］香林遠禪師章云、知府密學宋公璫、請至普安院安下。〈云云〉示衆訖坐逝。府主爲師作喪主。

⑨　黄龍心禪師、命山谷主喪。　雪堂拾遺録［十六丈］云、山谷嘗問道於晦堂。晦堂入滅。山谷主後事、請勝寺長老秉炬而火不爇。山谷顧謂死心曰、老師之意無他。蓋欲這風顛漢説數句。死心曰、某拘喪制中拒不出。山谷強之。死心執炬曰、不是殃門累及我、彌天過犯不容誅。而今兩脚捎空去、不作牛兮便作驢。遂以火炬、打一圓相云、只向這裏雪屈、擡下火炬、應手而爇。

⑩　大慧［敕鈔六ノ廿三丈〇七ノ十五丈］爲宏智主喪。　人天寶鑑［六十四丈］云、大慧主育王。一日執宏智手曰、吾二人偕老矣。爾唱我和、我唱爾和。一旦有先溘然者、則存者爲主其事。越歲宏智告寂。大慧竟爲主喪、不逾盟也。

⑪ 叢林盛事［十二丈］亦云、宏智入滅、妙喜主後事。

⑫ 月林觀禪師滅、陳貴謙作喪主。　無門開禪師［下ノ六丈○常光泉陞座十六丈］〈嗣月林師觀〉録告香普説云、先師圓寂後、陳提刑諱貴謙、作喪主。臨時令爲先師掛眞。〈詳喪薦門掛眞處〉

⑬ 教家、善無畏化、詔李現護喪。　編年通論［十六ノ六丈○宋僧傳二ノ七丈○六学五十五丈］云、開元二十三年、三藏善無畏卒。春秋九十有九。詔鴻臚丞李現、監護喪事。

⑭ 儒家梁明山賓卒。昭明使王顒監護喪事。〈詳喪薦類舉哀處〉

⑮ 君實卒。詔程伊川主喪。程子遺書云、司馬温公薨。朝廷命伊川、爲主喪事。子瞻周視無闕禮。乃曰、正叔喪禮、何其熟也。

【五八七】押喪

①送亡之時、鎮行列之最後者爲押喪人。〈義見喪薦門押喪處〉

②敕修清規［下一六十三丈］亡僧板帳式云、首座主喪、都寺押喪。

【五八八】喪司書記

①凡喪事、山門公界職事外、別請喪司職事、並加喪司兩字、擇于公界。如公界職事、稱山門書記［敕鈔上二ノ廿八丈左］、見職書記、山門維那、現職維那等。

②敕修清規［上二ノ廿八丈］云、議請喪司職事。書記、維那、知客、侍眞、侍者。

③校定清規［敕鈔六ノ廿六丈］云、次商議、請諸執事人。掌財、或二人、喪司維那、書記、知客、侍者、即四人。請執事、如尋常請人禮。

【五八九】喪司維那

①見喪司書記處。

【五九〇】喪司知客

①見喪司書記處。

【五九一】侍眞侍者

①即［敕鈔七ノ六丈左］喪司侍者、侍于靈者。〈見喪司書記處〉

②敕修清規［上二ノ卅二丈］尊宿入塔云、山門維那、送見職侍者、侍眞侍者、歸衆寮。

【五九二】喪司行者

①敕修清規［上二ノ廿九丈］尊宿遷化云、如有親書遺言、喪司行者、貼法堂中間上手幕上。

【五九三】直靈行者

①敕修清規［下一ノ立十七丈］亡僧云、直靈行者、毎日上粥飯。

第八類身肢門

【五九四】周羅髪

①敕修清規〔下一ノ廿二丈〕沙彌得度云、戒師用淨瓶灌頂、以指滴水於頂上、執刀剃頭。〈乃至〉本師執刀云、最後一結、謂之周羅。唯師一人、乃能斷之。我今爲汝除去、汝今許否。答云可爾。

②行事鈔〔下四ノ二ノ廿三丈〕沙彌別行篇云、與剃髮時、當頂留五三周羅髮、來至和尚前、互跪。和尚問云、今爲汝去頂髮、可不。答言爾便爲除之。　資持記云、周羅經音義云、此翻爲小。梵僧云小髻也。留五三者、趣擧其數留一亦得、準知。落髮本是和尚恐其煩久。故令闍梨爲除、餘者但留少許、和尚親落。

③釋氏要覽〔上ノ卅五丈〕云、周羅髮即今親教和尚、最後爲剃、頂上髮也。梵語周羅、此云小結。且三界九地煩惱、見修所斷有八十一品、即第九地、末品煩惱名小結。微細難除、今此頂髮、喩彼煩惱、九十六種外道、皆不能盡除。唯佛弟子能斷。故親教師、最後剃者、表爲除殘結、令出三界故。

④玄應經音義〔十九ノ十七丈〕云、周羅此譯云小、謂小髻也。

【五九五】上肩

①日用軌範〔敕鈔下一ノ四十七丈〕云、以上肩順轉。註謂左肩也。

②　忠曰、己身之左爲上肩、己身之右爲下肩、其己身左爲上義、詳禮則類上肩順轉處。

③　又曰、凡上肩下肩有二義。其自他相望以上位下位爲上肩下肩者別見座位門。

【五九六】下肩

①忠曰、己身之右也。上肩處箋。

【五九七】觸指

①日用軌範〔敕鈔下一ノ四八丈右〕展鉢法云、以兩手大拇指迸取鎮子、從小次第展。不得敲磕作聲。仍護第四第五指、爲觸指、不得用。

②　忠曰、上厠畢洗淨時、用第四第五指。故常以此二指爲觸指不用。觸者汚也。雖〔鈔十二ノ卅二丈〕左右四五爲觸指、就中洗淨用左。〈日用軌範〉故特忌左手四五指矣。

禪林象器箋　巻第九

神京妙心龍華沙懋道忠無著甫輯

○叢軌類

叢軌不止視篆開堂之類、凡禮則垂説、報祷喪薦、無非叢軌矣。今就中、更條分類從。貴易撿尋焉。又諸清規所列詳細行事、皆是叢規。若逐一擧之、不若但從頭閲清規。故今特撮其中名色顯著者。

（花岡博芳）

【五九八】出世

①禪士得法之後、隱退長養。一旦龍天推轂、而住大小寺院、此謂出世焉。蓋比佛世尊之瑞

于世。其爲代佛揚化也。其所住寺院、須奉綸命公帖、方著黄紫之服。世俗遂見著黄紫以爲出世、可笑。

② 舊説曰、自首座轉西堂、可謂之出世。自諸山轉十刹、不可謂之出世。

③ 忠曰、諸山轉十刹、如清拙由南禪住臨川。

④聯燈會要［四ノ十三丈］南泉願禪師章云、有一菴主、人謂之曰、南泉近日出世、何不去禮拜。主云、非但南泉。直饒千佛出興、亦不去。師聞、令趙州往勘之。州纔見菴主、便作禮。主不顧。州從西過東、從東過西而立。主亦不顧。州云、草賊大敗。拽下簾子便行、擧似師。師云、我從來疑著這漢。

⑤ 法華經［科注一下十八丈］方便品云、諸佛世尊、唯以一大事因緣故、出現於世。

（花岡博芳）

【五九九】入院

①出世入某院也。

②敕修清規［上二ノ十九丈］入院云、古人腰包頂笠、到山門首、下笠入門、炷香、有法語。就僧堂前、解包、屏處濯足、取衣披搭、入堂炷香、云云。〈具如彼。〉

（花岡博芳）

【六〇〇】視篆

①舊説［敕鈔五ノ四十一丈］曰、中華寺院、有其寺印。如天童印、以玲瓏巖主四字篆刻。凡住持退院時、小軸列書闔山大衆名、軸尾使寺印。又別片紙打寺印、不動其紙。貼印仰之、納于印籠。若少動印、則所粘紙可破。〈唐紙易破。〉是闕住之際、禁盗掛搭之法也。住持封其印籠、託都寺、令傳後住之人。都寺至新住持入寺日、於室間度與之。 忠曰、日本禪刹、皆亦有寺印。

②敕修清規［上二ノ二十丈］入院云、知事捧呈寺印。新命看封、付知事開封、新命視篆。

③ 唐書［志ノ卅九下ノ三丈］百官志云、節度使入境。州縣齋印、迎于道左。視事之日、設禮案、三日洗印、視其刓缺。

④ 潛確類書［五十一ノ七丈］云、職官分紀［敕鈔五ノ四十一丈引］、節度使視事三日、洗印視其刓缺。故曰視篆、又曰滌篆。〈篆印也。仕滿曰解篆。〉

（花岡博芳）

【六〇一】滌篆

①視篆亦曰滌篆。〈見視篆處。〉

②舊説［敕鈔五ノ四十二丈］曰、小器盛水備傍、削細木、以爲滌印之用。

（花岡博芳）

【六〇二】拈衣

①敕修清規［上二ノ十七丈］受請人陞座云、若新命是嗣法弟子、住持付法衣、有法語披衣。又開堂祝壽［上二ノ廿一丈］云、如受請時、未拈衣、當擧法語、披衣畢。

② 舊説［鈔六ノ五丈］曰、衣表信而已。不可數拈之。 又［鈔五ノ十二丈］曰、凡開堂拈法衣、一生當唯一度也。昔慈氏和尚入寺、公方〈義滿〉請拈衣。答曰、貧道、嘗在鎌倉、一

回拈黄梅衣。今若再拈、近乎衒名、不可也。

③日工集［四ノ卅三丈］云、義堂受南禪鈞帖、三會院大義來曰、先師所留金襴、洎先祖法衣、二頂。當探府君意、以入寺日護送。堂曰、按清規、凡入院、有嗣法之師、送法衣至、則拈衣佛事。乃披爲嗣法之信、不復還於師處。今則不然。吾先師、嘗以衣爲爭端、留在三會院、不許外出。然先師滅後、好名者、出而披之、誇入院觀瞻、不爲玩弄哉。余昨告府君曰、無相爲衣。況嘗拈黄梅所傳衣耶。固辭。又按無準行状、破菴遷寂之日、以密菴法衣、及頂相等、付無準。準不受。惟領圓悟墨跡、及密菴法語。蓋不必貴衣。故曰、衣表信而已。

④東漸清規［三ノ十一丈］曰、如初出世人、在別處受請已、拈衣有法語、此處更不重疊。如未拈出。當先拈衣、有法語、然後披衣。

（花岡博芳）

【六〇三】一家（カ）宴

①入院不請列刹、名爲一家宴。宴亦作燕醼筵。或不局入院、凡不請他寺、皆一家宴也。

②五祖演禪師四面録［古宿二十ノ八丈］云、結夏無可供養大衆。作一家醼、管顧諸人。遂擡手云、囉邏招、囉邏揺、囉邏送。莫怪空疏。

③古林茂和尚永福録、擧五祖作一家燕。又小參［廿一丈］云、開東山家筵。

④南浦明禪師崇福録［下ノ三丈］、擧五祖、作一家宴。

⑤物初觀禪師智門録云、山僧未免作一家宴。以當賞勞。

⑥清拙澄禪師録小參［日本三ノ二丈］云、山僧未免、將無作有、作一家宴。也要大家暖熱。

（花岡博芳）

【六〇四】開堂

①敕修清規［上二ノ廿一丈］云、古之開堂、朝命下、或差官敦請。或部使者、或郡縣、遣幣禮請、就某寺或本寺、官給錢料、設齋開堂。各官自有請疏、及茶湯等榜、見諸名公文集。近來開堂、多是各寺自備。至時入院。〈其規詳清規〉。

②祖庭事苑［八ノ十二丈］云、開堂廼譯經院之儀式。每歲誕節、必譯新經上進、祝一人之壽。前兩月、二府皆集、以觀飜譯、謂之開堂。前一月、譯經使潤文官又集、以進新經、謂之開堂。今宗門命長老住持、演法之初亦以謂之開堂者、謂演佛祖正法眼藏、上祝天筭、又以爲四海生靈之福。是亦謂之開堂也。

③春明退朝録［上ノ十一丈］云、太平興國中、始置譯經院於太平興國寺。延梵學僧、翻譯新經、始以光祿卿湯公悅、兵部員外郎張公洎潤色之、後趙文定、楊文公、晁文莊、季尚書維、皆爲譯經潤文官。天僖中、宰相丁晉公、始爲使。天聖三年、又以宰相王冀公爲使。自後元宰繼領之。然降麻不入銜。又以參政樞密爲潤文。其事寖重、每歲誕節、必進新經。前兩月、二府皆集以觀飜譯、謂之開堂、亦唐之清流盡在也。前一月、譯經使潤文官、又集以進新經、謂之閉堂。慶曆三年、呂許公羅相、以司徒爲譯經潤文使。明年致仕、章郇公代之。自後降麻入銜。

④湘山野録［必十五四上八丈］云、景祐中、景靈宮鋸傭解木。木既分、中有蟲鏤文數十字。如梵書旁行之状。因進呈。仁宗遣都知羅崇勲、譯經潤文使夏英公竦、詣傳法院、特詔開堂導譯。〈每聖節譯經則謂之開堂。〉冀得祥異之。

⑤聯燈會要［八ノ十六丈］香嚴閑禪師章云、師開堂日、溈山令人送書并拄杖到。師接了云、蒼天蒼天。僧問、和尚爲甚如此。師云、只爲冬行春令。

⑥　已下略録先入院後開堂者。

⑦禪苑清規［七ノ七丈］入院云、至晩小參。三日爲準。次日早晨看官、次第人事、擇日開堂。

⑧佛果擊節録［上ノ廿四丈］云、第二代保壽、參前保壽。後前保壽遷化。祝三聖云、且令作山主住十年、始得開堂。後三聖作請主令開堂。開堂日、三聖推出一僧、保壽便打。三聖云、恁麼爲人、瞎却鎮州一城人眼去在。壽便歸方丈。

⑨慈受深禪師慧林録云、師宣和三年五月五日、入院。五月二十二日、就大相國寺中三門上開堂。

⑩密菴傑禪師徑山録云、淳熙四年正月初七日、在常州華藏受請。次有入寺上堂。次云、淳熙四年五月初十日、恭奉聖旨、就景德靈隱禪寺開堂。　又靈隱録云、淳熙七年六月二十四日、在徑山受請。次有入寺上堂。次云、淳熙七年八月二十九日、恭奉聖旨、就本寺開堂。

⑪　已下略録先開堂後入院者。

⑫楊岐會禪師録［古宿十九ノ四丈］云、住潭州雲蓋山海會寺。於興化寺開堂。

⑬雲峰悅禪師翠巖録［古宿四十ノ一丈］云、師在同安受翠巖請、在上藍開堂。次云、師入山、大衆出接、入院陞座。

⑭大慧杲和尚年譜［卅五丈］云、紹興七年丁己、師四十九歲。張浚造朝、遂以臨安府徑山延之。七月十七日至臨安。二十一日開堂於明慶寺。二十四日入院。　又［五十五丈］云、紹興二十八年戊寅、師七十歲。正月初十日被旨、遷住徑山。二月二十八日、就靈隱寺開堂。三月初九日入院。

⑮　已下略録入院開堂同日者。

⑯五祖演禪師海會録［古宿二十ノ十九丈］云、師入院開堂日、僧問、白雲山下祖令當行。如何是祖令。師云、一二三四五。學云、恁麼則昨日太平、今朝海會。師云、高著眼。

⑰忠曰、今時入院開堂例在同日。凡新命自入門到視篆草賀爲入院也。自後法座祝聖壽爲開堂也。

⑱虎關錬禪師禪儀外文序云、唐宋之間迄于汴京、入院開堂兩也。南渡後合爲一焉。是我門之大儀也。以故疏榜出焉。

⑲　忠曰、如上所録、保壽在五代時、楊岐雲峰慈受在宋南渡已前、大慧密菴在南渡已後、而皆入院開堂、隔時月別行之。五祖演禪師在南渡已前、而入院開堂［正灯録六ノ十九丈亦弁之］、同日行之。故外文序所言、未必如此矣。

⑳開堂就三門行之者、如前録慈受。　又僧寶正續傳［二ノ十四丈］佛鑑懃禪師傳云、政和二年、有詔、請住東都智海。十月九日、就大相國寺三門開堂。

21就本寺開堂、如前録密菴住靈隱。

22有請首座開堂者。　聯燈會要［廿五ノ十九丈。○又禪類九ノ十三丈引］含珠哲禪師章云、師因檀越請堂中首座開堂。主事報師。師云、是即是、欠悟在。首座聞得束裝而去。師拈拄杖、隨後打出。

23有尼師開堂者。　聯燈會要［十ノ廿二丈。○正法眼藏二上九丈引］談空和尚章云、有尼欲開堂。師云、你有五障、不得開堂。尼云、龍女成佛、有幾障。師云、龍女現十八變。你試變看。尼云、不是野狐精。變箇甚麼。師便打。

24又祝聖之外、有新堂慶讃稱開堂者。　明極俊禪師録［普説十丈］勝因寺慶讃觀音開堂普説云、由是涓卜今月二十七日吉旦、命諸山宿德、安寶座、點光明、標懸寺額。仍命建長住持比丘、陞于寶座、舉唱宗乘。謂之開堂演法、慶賛妙嚴樓閣觀音聖像。　又新法堂開堂普説云、大日本國相模州、巨福山建長禪寺、新造法堂成。主事者與大檀越、敦請當寺住持某、於結制日、陞此寶座。普説一切法要、謂之開堂演法。

25開堂敍得法。　普燈録［十七ノ十三丈］五雲悟禪師章云、乾道戊子秋、回冷泉爲西堂。十二月望、示微疾、至二十四夜、請堂頭首座龍華本禪師、爲衆普説、敍師出處及得法。註師未開堂故也。〈忠曰、堂頭當作堂中〉。

（花岡博芳）

【六〇五】祝聖拈香

①劉熙釋名［三ノ三丈］云、拈黏也。兩指翕之、黏著不放也。

②　忠曰、拈香者、拈起香而燒之也。

③忠曰、開堂拈香祝天子、蓋葉縣神鼎爲始。

④葉懸省禪師録［古宿廿三ノ一丈］云、師開堂捻香示衆云、此一瓣香、不從他方得、即汝州水土然。願皇帝萬歳、重臣千秋、文武百僚、常居禄位。

⑤　忠曰、此録、無別嗣法香。其不從他得等、似寓嗣法意。又以臣僚香、合拈。往時朴略如此。

⑥神鼎諲禪師録［古宿廿四ノ一丈］云、開堂日拈香。此一炷香、奉爲今上皇帝、聖壽無彊。

⑦　爾後、香語稍文、有對語四六。見演祖佛眼等録。

（花岡博芳）

【六〇六】將軍拈香

①忠曰、日本禪林開堂、祝聖香次、必有爲將軍拈香。

②約翁儉禪師〈嗣蘭渓〉建長録［録中ノ二丈］、祝聖香次、拈香云、此一瓣香爇向爐中、奉爲征夷大將軍、增崇禄筭。伏願、華夷一致、車書混同、八埏風清、四海浪靜。

③鏡堂圓禪師圓覺録、征夷大將軍香云、伏願、壽山高聳、福海淵渟、永佐聖明、長居禄位。

（花岡博芳）

【六〇七】臣僚拈香

①忠曰、開堂爲官僚拈香、亦葉縣神鼎爲始。

②神鼎諲禪師録祝聖香次云、第二炷香、爲府主學士、合郡尊官。伏願、長光佛日、永佐明君。

（花岡博芳）

【六〇八】敕使拈香

①忠曰、如大德妙心兩刹、敕差住持。故開堂日、天使臨法筵。便爲敕使拈香。

（花岡博芳）

【六〇九】檀那拈香

①忠曰、日本禪林開堂、爲大檀那拈香。
②蘭溪隆禪師建寧録、丞相文武官僚香次、拈檀越最明寺禪門香。
③約翁儉禪師建長録、將軍香次、拈香云、此一瓣香、熱向爐中、奉爲本寺大檀那、最勝園寺殿。伏願、除細行之枝蔓、窮大德之淵源、福海愈廣、壽山彌堅。

（花岡博芳）

【六一〇】嗣法拈香

①忠曰、開堂爲師拈香、發露得法所由。興化奬禪師爲始。〈又信香、見器物類〉。
②興化奬禪師録［古宿五ノ十二丈。〇会元十一ノ十一丈］云、師開堂日、拈香云、此一炷香、本爲三聖師兄。三聖爲我太孤。便合承嗣大覺。大覺爲我太賒。我於三聖處會得賓主句。若不遇大覺師兄、洎乎誤却我平生。我於大覺處喫棒、見得臨濟先師在黄檗處喫棒底道理。此一炷香。供養我臨濟先師。
③石門山慈照禪師［古宿九ノ一丈］鳳巖集云〈師嗣首山念〉、師開堂、拈香云、西天二十八祖、唐土六祖、過去聖人、盡得傳衣付法、至唐代六祖之後、得道者如稻麻竹葦。不傳其衣、只傳其法、皆以香爲信。今日一瓣香、爲什麼人通信。某甲雖不言、大衆已委悉。爇此一炷香也。
④祖庭事苑［八ノ十二丈］云、世典所謂、人而無信、不知其可也。曰大車無輗、小車無軌、其何以行之哉。是以釋氏之作佛事、未嘗不以拈香爲先者。是所以託香而表信。經曰、信是道源功德母、長養一切諸善根。此其意也。今開堂、長老必親拈香者、以所得之法、必有所自。所行之道、其外衛者、必藉乎王臣。俾福慧雙資、必圖報於此日、豈偶然乎。
⑤敕修清規開堂祝壽云、拈香祝聖。次拈帝師省院、臺憲郡縣、文武官僚香。侍者逐一度香。惟法嗣香住持懷中拈出、自挿爐中。
⑥普燈録［廿五ノ十八丈］諸方廣語、本覺法眞一禪師示衆云、古人雖則徧參知識、承嗣燒香、只爲最初發明之師。非是別底不如此人、揀人承嗣。蓋不忘本也。今時見人曾參某人、却不承嗣、却承嗣某人、便謂前人不如彼人、生輕重心。又有般底、或受他摩将、或希他勢望、便忘本逐勢。既負慚怍、欲釋人非、返生毀謗。如斯之輩、閻羅王未放伱在。古人接得弟子、却指令承嗣他人。則睦州與雲門、大愚與臨濟是也。不似今時勾爬人家男女、硬斷送與三間屋子、令承嗣他。若総如此、佛法豈得殊勝。敗壞宗門、有現世報者、自不省耳。
⑦有數回拈嗣香者。　圓悟勤禪師金山録［六ノ八丈］云、此一瓣香、佛眼也覷不見。江淮十載、受盡辛懃、一旦白雲打破漆桶、六處忝領大刹。七回拈出此香、奉爲蘄州五祖山眞慧禪院第十二代演禪師以酬法乳。　又次雲居眞如禪院開堂、爲演禪師拈香。
⑧虚舟度禪師徑山録云、拈香云、此一瓣香、三十年八回拈出。更看末後慇懃、奉爲前住常州褒忠顯報華藏禪寺、先師無得和尚、爇向爐中、用酬法乳之恩。
⑨中巖月禪師建長録［二丈］云、此香本無許多。五回拈出、供養金華草堂先師。
⑩有爲曾見知識拈香者。　義堂信和尚［鈔六ノ七丈冠考］曰、東福白雲和尚、嗣香之次、更拈香云、供養曾所見諸知識。

（千坂成也）

【六一一】從香（シウ）

①忠曰、開堂祝聖、侍者挿瓣香、更拈一炷。或新住持、爲嗣法師、親挿爐、却中立。侍者進、更撮香炷。並謂之從香。

②舊説［敕修鈔一ノ十六丈］曰、從者副也。檀弓［素本一ノ卅五丈］所謂涕之無從之從也。或曰［大年ノ義］、從者隨也。小瓣香、隨從大瓣香之後。故東福則左手挿大香、未放手而右手燒從香矣。可式也。

③禮記［註疏七ノ十四丈］檀弓［上篇］云、孔子之衛、遇舊館人之喪。入而哭之哀、出使子貢説驂而賻之。子貢曰、於門人之喪、未有所説驂。説驂於舊館、無乃已重乎。夫子曰、予鄉者入而哭之。遇於一哀而出涕。予惡夫涕之無從也。小子行之。　疏、謂我感舊館人恩深。涕淚交下。豈得虛然客行更無他物易換此馬。女小子、但將驂馬以行之。副此涕淚。

④敕修清規［上一ノ十九丈。○備用一ノ二丈同］聖節云、侍者接香、以左手挿爐中、右手拈從香一炷。略問訊。

⑤校定清規［下卷。○敕修鈔四ノ十六丈引］告香入室請益云、再進前、燒大香一片。有處初請開示前不燒香。但同大衆問訊、便往請開示因緣。此際燒大片香、又燒小片。謂之從香。

（千坂成也）

【六一二】行香（ギヤウ）

①忠曰、有巡堂燒香曰行香、有出班上香曰行香、有官人來寺行香曰行香、有施主自來寺行香曰行香。

②漢書［一下ノ四丈］高帝紀、行田宅註、蘇林曰、行音行酒之行。猶付與也。〈止此〉。諸韻書欠此訓。

③已下録巡堂燒香曰行香者。

④敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、燒香侍者覆住持、來早上堂。至五更、住持行香回、再覆。

⑤忠曰、住持巡堂燒香、在朝暮二時。故敕修清規［下二ノ十九丈］鐘云、殿鐘、住持朝暮行香時、鳴七下。〈止此〉。蓋住持人［依日向臺雲寺點圖説］巡庫堂韋天、東司烏瑟砂摩明王、山門觀音、浴室跋陀婆羅菩薩、僧堂聖僧、炷香。

⑥尚直編［下ノ十一丈］云、行中仁禪師、毎旦行香。至世尊前、於小合中別取好香一炷進之。〈詳器物類、大香合處〉。

⑦已下録出班上香曰行香者。

⑧備用清規［一ノ九丈］達磨忌云、行者鳴行香鈸。維那轉身爐前、揖住持上香。〈云云〉。

⑨已下録官人來寺行香者。

⑩僧史略［中ノ廿九丈］行香唱導云、香也者解穢流芬。令人樂聞也。原其周人尚臭、冥合西域重香。佛出姫周、遠同符契矣。經中長者請佛、宿夜登樓、手秉香爐、以達信心。明日食時、佛即來至。故知香爲信心之使也。大遺教經曰、比丘欲食、先燒香唄讃之。又經中蚍呼比丘、自説宿縁、令爲懺悔、并將仙提來、取我行香。此方教法既行、經律散漫。故安法師、三例中、第一是行香、定座上講。斯乃中夏行香之始也。後魏及江表皆重散香、且無沿革。至唐高宗朝、薛元起李義府、奉敕爲太子齋行香、因禮奘三藏。又中宗設無遮齋、詔五品以上、行香或用然香薫手。或將香粉徧行、謂之行香。後不空三藏奏、爲高祖太宗七聖忌辰、設齋行香。敕旨宜依。尋因多故不齋、但行香而已。文宗朝、中書崔蠡上

疏曰、國忌設齋、百官行香、事無經據。伏請停廢。敕曰、崔蠡所奏、遂遺。討尋本末禮文令式、曾不該明。其兩京天下州府、國忌於寺觀行香、今後並宜停罷。嘗試論之。崔蠡言無經據者、蛇之行香、豈無經也。安公引教設儀、豈無據也。敕曰、討尋本末禮文令式、曾不該明者、三代之禮。何嘗言飯釋子而行香耶。且令式、唯是歷代沿革之法律。如代宗後之條格、豈標在隋末唐初之令式乎。矧以禮出儒家、詎可將釋書爲據。事因釋氏、無宜用儒典爲憑。就體證之、方曰合理。儒流不許、還引儒書。何異獄訟之人、召親黨而作證。若欲除廢、其無辭乎。夫孝子事祖考、唯善是從。徇葬不益於生生、固宜寢也。行香是薦於冥漠、知無不爲。觀文宗、薄於祖宗、宜其寄坐矣。或曰、何必行香爲通。曰、如周之尚臭燔柴、血膋薌蕭。言天歆其臭也。天豈食血膋薌蕭之氣耶。由人尚其臭、故以臭而事天也。若然者、佛教重香、寧可奪乎。況百官行香、代君也。百官事祖宗、亦臣子也。苟欲廢之、如忠孝何。宣宗即位、再興斯道。大中五年、敕京城及外州府、國忌行香、並須清潔。不得携酒肉、入寺烹炮。既失嚴恪之心。頗乖追薦之道。云、自此至于哀帝、行香如舊。朱梁廢唐七廟方止。開平〈後梁太祖年号〉三年、大明節、百官入寺、行香祝壽。後還薦祖宗行香、于今不絶。晋天福〈後晋高祖〉五年、竇貞固奏、國忌、宰臣跪爐、百官列座。今欲宰臣跪爐、百官立班。行香後、飯僧百人、永爲常式。宋太宗淳化三年、虞部員外郎李宗訥奏、國忌行香、請宰臣已下行香後、禁酒食。表其精潔。敕下御史臺依行。

⑪困學紀聞［十四ノ八丈］云、忌日行香、始於唐。崔蠡奏罷之。本朝宋景文公奏云、求於非福、則是諂祭。懺於無罪、則是誣親。其言不行。

⑫行香歷代興廢、宋姚寛西溪叢語［下ノ卅六丈］詳説。同僧史略。

⑬宋洪邁容齋四筆云、樞密行香、唐世樞密使、專以内侍爲之、與它使均稱内諸司。五代以來、始參用士大夫、遂同執政。案實録所載、景德二年三月、元德皇后忌中書樞密院文武百官並赴相國寺行香。初樞密院言、舊例國忌行香、惟樞密使副依内諸司例不赴、恐有虧恭恪。今欲每遇大忌日、與中書門下同赴行香。從之。樞密使副翰林樞密直學士、並赴自茲始也。然則樞密之同内諸司久矣。隆興以來、定朝臣四參之儀、自宰臣至于郎官、御史皆班列殿庭拜舞、惟樞密立殿上不預、亦此意云。

⑭釋氏資鑑［六ノ廿丈］云、唐高宗永徽三年上壬子、幸感業寺、忌日行香。

⑮唐玄裝三藏傳［八巻十七丈法山藏］云、高宗顯慶元年、敕遣朝臣行香。

⑯已下録施主行香。

⑰廣燈録［十四ノ六丈。〇会元十一ノ卅三丈］濟上座〈嗣克符〉章云、師行脚到洛京南禪安下。有朱行軍設齋、入僧堂内、顧視上下云、直下是又作麼生。行香次、口不住道、至下間、師便問、直下是箇什麼。行軍便喝。師云、行軍幸是會佛法底人。又惡發作什麼。軍云、喚作惡發即不得。師便喝。軍云、鈎在不疑之地。師又喝。

⑱法苑珠林［五十五ノ五丈］云、増一阿含經云、若有設供者、手執香爐而唱時至。佛言［増一ノ廿二ノ十一丈］香爲佛使、故須燒香、徧請十方。既知燒香本擬請佛、爲凡夫心隔、目覩、不知佛令燒香徧請十方一切凡聖、表呈福事、騰空普赴。正行香作唄時、一切道俗、依華嚴經、各説一偈云、戒香定香解脱香、光明雲臺徧世界、供養十方無量佛、見聞普熏證寂滅。又三千威儀經云、坐受香亦得、爲女人行香、恐觸手染著、故開坐受。若恐譏慢、令懸放下亦得。男子行香、女人受香、翻前即是。

⑲行事鈔［下三之三ノ十三丈］赴請設則篇云、賢愚經、蛇施金已、令人行香置僧手中。乃至執香爐、遥請佛僧、如富那奇中説。　資持記云、賢愚即行香縁。彼第七云、佛告阿難、過

去無量阿僧祇劫、閻浮提有一大國、名波羅捺。時有一人、好修家業、意偏愛金、勤力積聚。因得一瓶。於其舍内、掘地藏之。如是勤身、乃得七瓶、悉取埋之。後遇疾終、作一毒蛇、守此金瓶。如是展轉受形、經一萬歲。最後受身、猒心忽生。見有一人、順道而過。蛇呼之云、吾今此處有一瓶金。欲用相託、供僧作福。設食之時、持一阿先提。〈此云草籠〉。來取我。彼至日、擔蛇至寺、著衆僧前。食時已到僧住行立。蛇令彼人次第賦香。〈賦給〉。衆僧食訖、爲蛇説法。歡喜轉增、將僧維那、到本金所、餘六瓶金、盡用施僧、命終生忉利天。佛告阿難、爾時持蛇人者、則我身是。是毒蛇者、今舍利弗是。富那奇亦即彼經第六云、佛在舍衛、放鉢國長者有子、名富那奇。後出家證阿羅漢、化兄羨那。造旃檀堂請佛。各持香爐、共登高樓。遥望祇桓、燒香歸命、念佛及聖僧。香煙乗空、至佛頂上、作一煙蓋。佛知即語神足比丘同往。

⑳ 儒禮有言行香者。　月令廣義〔毎月令ノ三ノ七丈〕云、行香、國初詔正諸臣封號。惟孔子封爵、特仍其舊。毎月朔望、遣内臣降香。朔日則祭酒行釋菜禮。洪武二十四年令、各處儒學、毎遇朔望、有司官至、日早詣學謁廟行香。

（千坂成也）

【六一三】燒香

①傳燈録睦州陳尊宿章云、問教意、請師提綱。師云、佛殿裡燒香、三門外合掌。

②法苑珠林云、佛言、香爲佛使。〈見行香處〉。

③禪苑清規〔五ノ五丈〕煎點燒香法云、兩手捧香合起、以右手拈合、安左手内、以右手捉香合蓋、放香臺上。右手上香、向時爲人焚之。却右手蓋香合、兩手捧安香臺上、並須款曲款低細。勿令敲磕或墜地。

④宋〔鄂十七〕呉曾能改齋漫録〔三丈〕云、李相之貿己集、謂焚香之始、云本佛圖澄傳。襄陽國城塹水源暴竭、石勒問澄。澄曰、今當敕龍下取、水乃至。澄上坐繩床、燒安息香。咒數百言、水大至。予按、江表傳、有道士干吉、來呉會立靜舍、燒香讀道書、制作符水以療病。又按、漢武帝故事亦云、昆邪王殺休屠王、以其衆來降。得其金人之神、置之甘泉宮。金人者皆長丈餘、其祭不用牛羊、唯燒香禮拜。然則焚香自漢已然矣。

（千坂成也）

【六一四】挿（サッ）香

①挿瓣香於爐也。

②敕修清規〔上二ノ三丈〕告香云、住持就座、副參遞大香一片與參頭、同衆問訊。挿香、各大展三拜。

（千坂成也）

【六一五】答（タッ）香

①凡有來挿香者、我亦爲彼挿香。此謂答香。

（千坂成也）

【六一六】還（ワン）香

①答香亦名還香。

②備用清規［六ノ九丈］方丈特爲新首座茶云、請客侍者、寫茶榜、詣首座寮炷香、首座還香。
觸禮一拜、還拜。　又［六十一丈］交代茶云、具威儀懷香、躬往交代人前挿香、觸禮一拜。
〈云云。〉茶畢、交代人詣爐前、還前請香、觸禮一拜。
③敕修清規［下一ノ十八丈］兩序交代茶云、新職事、具威儀懷香、躬詣各受代人處挿香、對
觸禮一拜。〈云云〉。茶畢、受代人起、將元請香挿爐中、觸禮拜謝而退。

（千坂成也）

【六一七】安居ゴ

①敕修清規［下二ノ一丈］節臘章云、西域、三時、以一時爲安居。出入有禁止。　又云、五竺地廣、暑寒霖潦、氣候之弗齊。故結制、有以四月五月十二月。然皆始以十六日。所謂雨安居者、因地隨時、惟適之安。或曰坐夏、或曰坐臘。戒臘之義始此。
②行事鈔［上四之二ノ二丈］安居策修篇云、律通制三時。意存據道、文偏約夏月、情在三過。一無事遊行、妨修出業。二損傷物命、違慈寔深。三所爲既非。故招世謗。以斯之過。教興在茲。然諸義不無指歸。護命故、夏中方尺之地、悉竝有蟲。即正法念經云、夏中、除大小便、餘則加趺而坐。故知、護命爲重。佛深制之。　又［八丈］云、上総三時分別。今但就夏、亦有三時。初四月十六日是前安居。十七日已去、至五月十五日、名中安居。五月十六日、名後安居。故律中、有三種安居。謂前中後也。前安居者住前三月、後安居者住後三月。雖不云中三月、然文中、具明前後日數。中間不辨、於理自明。
③羯磨疏［四下一丈］諸衆安居法篇云、出家慕道、馳散非業。故當計時擇念、義無浮逸。今乃沿隨邑野、追逐情塵、顛仆巨壑、無思返迹。是以大聖、以法遮防、不許遊涉。當居靜盧。故律文中、三時通制。然有待之形、許緣不一。必量過起、夏暑偏多。一則損生害命。深乖慈道。二招世譏謗、不及禽獸。三爲過既深。故非道業。春冬過少。待緣開赴。有斯別故、名曰安居。釋名者、形心攝靜曰安、要期在住曰居也。
④忠曰、譏謗不及禽獸者、僧祇律［廿七ノ廿八丈］云、安居法者、佛住舍衞城、爾時諸比丘、雨時遊行。多所踐害。爲世人所嫌。九十六種出家人、尚知安居。如烏隱巢、而自守住。沙門釋子、自稱爲善好、而不安居。諸比丘、以是因緣、具白世尊。佛言、正應爲世人所嫌、從今已後、雨時應安居。〈廣明安居法〉。
⑤梵網經古迹記［下経下ノ廿一丈］云、夏坐安居處者、北并洲疏云、昔來經論、或名坐夏、或名坐臘、或名夏臘。皆由不善方言也。今依大唐三藏譯、云雨安居。謂雨時安居故。然西方、立時不同。或立四時。謂從正月十六日、至四月十五日、爲春時、從四月十六日、至七月十五日、爲夏時。如此秋冬、竝各三月。至正月十五日、總爲一歲。或総一年、分爲三時。謂即佛法、依此爲定。謂從正月十六日、至五月十五日、以爲熱際、從五月十六日、至九月十五日、立爲雨際、從九月十六日、至正月十五日、即爲寒際。雨際蟲多。令人譏謗故制安居。　又云、今此四月十六日、至七月十五日、實爲疎謬。既非夏時。言雨安居。
⑥忠曰、太賢意謂、佛制、自五月十六入、爲初安居、自六月十六入、爲後安居。然此方結制、以四月十六。既不依佛制。實爲疎謬矣。又稱坐夏夏臘、尤謬矣。蓋初安居、至八月十五日。則自七月十六已後、非天竺夏時。此方亦自七月朔已後、非夏時。其後安居、滋晩焉。不待論之。依彼此、不可謂坐夏夏臘等。但當稱雨安居耳矣。諸律講、解古迹文、紛紛沒甄別。故我今贅言。
⑦圓覺經［四ノ卅一丈。〇永平眼七十五安居章引之］云、世尊、告圓覺菩薩言。若經夏首三月安居、當爲清淨菩薩止住。心離聲聞、不假徒衆。至安居日、即於佛前、作如是言。我比丘、比

丘尼、優婆塞、優婆夷、某甲、踞菩薩乗、修寂滅行。同入清淨實相住持。以大圓覺、爲我伽藍、身心安居平等性智。涅槃自性、無繫屬故。今我敬請、不依聲聞、當與十方如來及大菩薩三月安居。爲修菩薩無上妙覺大因縁故。不繫徒衆。善男子、此名菩薩示現安居。

⑧僧祇律［廿五ノ十七丈］云、比丘、至四月十六日、應安居。不安居者、越毘尼罪。到後安居、復不安居者、得二越毘尼罪。

（桐山大幹）

【六一八】結制

①結安居之制也。〈見安居處〉。結制禮儀如敕修清規［下二ノ十一丈］。

（桐山大幹）

【六一九】坐夏

①安居曰坐夏。〈其辨見安居處〉。

（桐山大幹）

【六二〇】過夏

①敕修清規［下一ノ卅七丈］謝掛搭云、近時衲子、到處坐席未温、移單東西、多致不謝掛搭。既曰經冬過夏。折中當在冬前夏前兩期報謝。

②廣燈録［十九ノ十五丈］廬山慶雲禪師章云、問僧、什麼處來。僧云、洪州來。師云、什麼處過夏。僧云、翠巖。師云、踏破多少草鞋。〈又見節時類冬安居處〉。

③碧巖録［十ノ廿丈］云、天平和尚行脚時、參西院。〈有兩錯因縁〉。西院云、且在這裏、過夏。待共上座、商量這兩錯。〈云云〉。

④忠曰、科擧名目、有過夏。取佛書準倣也。或看此、爲此目出俗書、非也。

⑤唐國史補［下ノ十二丈］云、進士籍而入選。謂之春關。不捷而醉飽。謂之打毷氣。匿名造謗、謂之無名子。退而肄業。謂之過夏。執業而出。謂之夏課。

⑥遯齋閒覽云、長安擧子、六月後落第者、不出京。謂之過夏。多借靜坊廟院作文、曰夏課。

⑦太平廣記［百八十ノ一丈］引盧氏小説云、唐徳宗、至西明寺。宋濟在僧院過夏。上忽入濟院。方在窓下、犢鼻葛巾抄書。上問曰、作何事業。兼問姓行。濟云、姓宋、第五、應進士擧。〈云云〉。

（桐山大幹）

【六二一】坐臘

①安居、亦曰坐臘。〈其辨、見安居處〉。臘義、節時類、法臘處、詳説。

（桐山大幹）

【六二二】賞勞

①梵網古迹作償勞。　韻會陽韻云、償辰羊切。説文還也。廣韻報也。增韻酬也。　行事鈔作賞勞。

②祖庭事苑［六ノ十丈］賞勞註云、勞郎到切。尉也。

③ 忠曰、國史補［上ノ十八丈］云、大出金帛賞勞。〈止此。〉此般賞勞勞、當从郎到切耳。

④ 行事鈔［上四之二ノ十二丈］安居策修篇云、五事賞勞。〈忠曰、五事即五利。次下箋。〉

⑤ 羯磨疏［四下ノ三丈］安居法篇云、迦提賞勞、使作衣服受用資身弘道利俗也。

⑥ 梵網經古迹記［下經ノ下ノ廿一丈］云、然初安居、即從五月十六日、至八月十五日。良以雨時將畢。恐至寒時不濟。故開一月、爲償勞月。若後安居、從六月十六日、至九月十五日、即無償勞。三月雨時盡故。　善圓鈔云、從八月十六日、至九月十五日、三十日爲償勞月。

⑦ 已上、證賞勞字畢。已下、辨其義。

⑧ 行事鈔［上四之二ノ七丈］安居策修篇云、問何爲但結三月者、生死待形、必假資養、故結前三月、開後一月。爲成供身衣服故。

⑨ 忠曰、如來聖教、歲爲三時。乃一時有四月。故有此問。言何故不結一時全四箇月耶。

⑩ 又［上四之二ノ廿八丈］云、若四月十六日結者、至七月十五日夜分盡訖、名夏竟。至明相出、十六日後、至八月十五日已來、名迦提月。明了諭云、本言迦絺那。爲存略故、但云迦提。此翻爲功德。　註以坐夏有功、五利賞德也。

⑪ 忠曰、由是可知。賞勞者、賞坐夏功勞也。又宗覺律師語余曰、此一月、二百五十戒中、開五種戒。恣意出入往來、而造功德衣、以償前九旬功勞也。〈止此。〉依此說、則勞即刀切、老平聲、疲也、勤也、功也。〈字彙。〉事苑、爲去聲、郎到切、慰勞義、恐不知律文。

⑫ 賞勞目謾下義乎。若知則必可辨其義。而欠之。五利者、行事鈔［上四之三ノ四十丈］自恣宗要篇云、次明五利通塞者、律中受此衣故、畜長財、離衣宿、背請、別衆食、食前食後至他家等、各如隨相所明。〈隨戒釋相篇。〉

⑬ 僧祇律［二十下一丈。〇又廿五ノ十四丈］云、衣時中間捨五罪。別衆食、處處食、離同食、不白畜長衣、離衣宿、無罪。

⑭ 毘尼母論［四ノ十三丈］云、佛聽畜迦絺那衣、有五種利。一得中前數數食、二得有檀越來請得別衆食、三得畜長財不說淨、四得離衣宿、五不白得出界。是名受迦絺那衣利。

⑮ 迦絺那衣者、自恣篇［上四之五ノ廿九丈］云、二明衣體、四分云、若得新衣、若檀越施衣、若糞埽衣、新物揲作淨。若已浣、浣已納作淨。即日來不經宿、不以邪命得、不以諂曲得、不以相得、不以激發得、不捨墮。作淨者應法。四周有緣。五條作十隔、若過是條數、應自浣染、舒張碾治、裁作十隔縫治。又云、不得大色染衣。聽用袈裟色。〈此云、不正色也。〉

⑯ 釋氏要覽云、迦提梵語。具云、迦栗提迦。即九月望宿名也。謂、西國三月安居、至九月十六日、解後安居。比丘行化故。取望宿爲名也。

⑰ 忠曰、是與事鈔義大異。未知何據。

⑱ 已下、禪録用賞勞語。

⑲ 普燈録［五ノ五丈］大通本禪師章云、僧問、九夏賞勞即不問、從今向去事如何。曰、光剃頭、淨洗鉢。

⑳ 虚堂愚禪師寶林録［二ノ八丈］結夏小參云、於是九十之期、各證本法、然後升雙樹堂、入息耕室、向無星等子上、較其重輕、以憑賞勞。　又淨慈後録［八ノ廿八丈］上堂云、忽有箇眼皮錠底、出來道乞師賞勞、只向他道、三貫嚫錢三味食、相招携手上高臺。

21 忠曰、律則五事賞勞、其文明皎。今按録所擧、似以施財供養等爲賞勞焉。

（桐山大幹）

【六二三】坐堂（ソ）

①忠曰、坐堂［敕修鈔十二ノ五丈ノ意］與坐參規同。但上堂已前、少時坐禪於僧堂、此曰坐堂。小參已前、及每日晚參已前、少時坐禪於僧堂、此曰坐參也。今以小參已前稱坐參。例解之、坐堂之堂者、上堂之堂也。上堂之堂者、法堂也。故非坐僧堂之義。謂坐禪於上堂已前也。

②敕修清規［上一ノ十九丈］聖節上堂云、鳴方丈板三下、鳴鼓。堂司行者、預鳴衆寮前板三下、集衆坐堂。如尋常坐禪、向内坐。鼓鳴、則轉身向外坐。頭首先集堂外、候鼓鳴即入堂。首座後入就坐。西堂勤舊蒙堂諸寮、並外堂坐。

③忠曰、集衆者、集於僧堂也。

④一山寧禪師［敕修鈔一ノ十三丈］曰、坐堂不赴者、首座罰之。衆頭首、自末班次第入堂。故首座自最後入也。

⑤大衆坐堂時、住持亦坐堂。　敕修清規［下一ノ四十三丈］大坐參云、待住持入堂坐定、堂司行者、鳴首座寮前板三下。〈云云〉。　又［下一ノ四十三丈］坐參云、鳴堂前鐘三下、衆就位、普同和南、住持頭首、次第出堂。

⑥忠曰、依此可知。住持參前陪大衆坐參。坐參既然。亦當上堂前、陪衆坐堂而已。

⑦舊説［敕鈔一ノ十三丈。〇又四ノ十一丈。〇又八ノ九丈］曰、住持説法已前、亦自澄心靜慮。蓋世尊説法華時、先入無量義處三昧。即從三昧、安詳而起、方説法華。此其榜樣也。

⑧又凡坐禪於僧堂曰坐堂。　日用軌範［下一ノ四十七丈右］云、住持并首座、坐堂時、不得從前門出入。

⑨入衆日用［八丈左］云、莫待打坐堂板。次第歸堂坐禪。

⑩忠曰、軌範所謂坐堂、乃四更一點坐禪也。入衆所謂坐堂、亦是每日坐禪也。並非上堂已前者。故此堂、乃僧堂也。

（桐山大幹）

【六二四】坐參（ザ）

①坐參者［敕鈔四ノ十一丈］、坐禪於參前也。住持［清拙日本録三ノ晚參五丈ノ意］晚參已前、大衆集僧堂、坐禪澄心、以待參。謂之坐參。若住持有事息參、則行者報曰、和尚今晚放參。

②敕修清規［上二ノ二丈］晚參云、叢林坐參、猶且望五參陞座、將聽法時、大衆坐堂也。又［下一ノ四十三丈］坐參云、蓋古者、每晚必參住持、以求開示。故率衆齊集、坐待鼓鳴、而往參之。名曰坐參。因汾州地寒、昭公罷之。遂有放參之説。

③忠曰、坐參坐堂、名異規同。〈見坐堂處〉。清規已云、坐待鼓鳴、而往參之。乃知。禪於僧堂畢、往參於住持之處。故曰坐參。非禪坐即是參之義。

④備用清規［二ノ三丈］云、諸方謂、放參不披袈裟、轉身方搭衣。非法也。唯徑山寺、古規不墜、披衣坐參。當力行之。

⑤清拙澄和尚録［日本ノ三］晚參［五丈］云、每日晚參已前、坐以待參。謂之坐參。且如坐參、又參箇甚麼。莫是參父母未生前事麼。莫是參空劫以前自己麼。莫是參宗乘向上向下事麼。莫是參古人玄言妙句、一機一境麼。若與麼、總是將心湊泊、擬心承當、擬心領解。本分事上、総沒交渉。

⑥　又不遊方而參禪、曰坐參。　大慧［一上ノ一］正法眼藏云、或者道、琅邪被擧公道箇杜

撰、心中疑惑、即時倒戈卸甲、遂挽留擧公、咨決此事。謂之坐參。一犬吠虚。千猱啀實。

⑦　忠曰、此不離己住處、居參禪於他之義。蓋大慧擧俗説。故其義不足取焉。

（桐山大幹）

【六二五】大坐參

①敕修清規大坐參云、今時叢林、有多衆處、猶特講晩參、以存古意。謂之大坐參。與常坐參同。但首座入堂、不燒香。〈云云。具如彼〉。

（桐山大幹）

【六二六】放參

①舊説曰、住持有事、或［勅鈔十一ノ九丈］修臨時祈祷、則放免晩參。此謂放參。即鳴鐘三下、此謂放參鐘。〈又見坐參、及垂説類、晩參處。〉

②禪苑清規［三ノ七丈］首座坐堂云、大衆入堂、依單位相向而坐。堂司行者、先稟堂頭、掛放參牌。然後堂前上簾。行者於首座前問訊。低聲云、和尚放參。復於聖僧前、躬身正立、喝放參。然後打放參鐘、展單下帳罷、歸寮問訊。喫湯隨意。

③僧寳傳［五冊七丈］慈明圓禪師傳云、公冬日牓僧堂。作此字。　其下注云、若人識得、不離四威儀中。有首座者、見之謂曰、和尚今日放參。

④　白氏文集［六ノ十五丈］昭國閒居詩云、時暑放朝參。

⑤　忠曰、可知放參之目本在官制。

⑥　又有晩食名放參者、見飲啖類放參飯處。

⑦　忠曰、此方禪林、晡時念經爲讀誦放參。失義。當曰念經。或誦晩課。蓋放參鐘後誦經。故轉訛。

（桐山大幹）

【六二七】展（セン）單

①舊説［敕鈔十四ノ廿九丈右］曰、無晩參時、鳴放參鐘三下。其時展半單。蓋爲黄昏坐禪也。然放參鐘名展單者、隣近釋也。

②日用軌範［敕修下一ノ五十一丈右。〇又下一ノ四十三丈右坐參処］云、坐參了、各出半單下地。

（藤田宗裕）

【六二八】坐禪

①敕修清規坐禪、詳敍其規。

②敕修清規［下一ノ四十丈左］坐禪云、大衆歸堂、向裏坐。　又［上一ノ十九丈］聖節云、坐堂如尋常坐禪、向内坐。

③永平清規辨道法［七丈］云、早晨坐禪、首座大衆、搭袈裟入堂、就被位面壁坐禪。首座不面壁、自餘頭首、一如大衆面壁而坐。住持人就椅子坐禪。　又云、後夜坐禪、大衆不搭袈裟、住持人袈裟、掛于椅子而坐禪。是法也。

④　忠曰、住持就椅坐、則知亦是不面壁矣。夫面壁坐禪、［日用清規稗説上之一ノ廿八丈亦云］匪但準依初祖風規、復可攝定散心。然今清朝禪僧例向外。誠失古矣。

⑤日工集［二ノ卅二丈］云、典座免僧直歲三人、免坐堂。〈詳職位類免僧處。〉

⑥南禪規式［上ノ八十三丈］云、四月廿一日、舊規自今日四時坐禪。不赴佛殿勤行者、罰金壹斤。不赴坐禪者、罰金同此。　又云、初夜并曉天二時坐禪、住持巡堂。若有被位空處、則令聽叫取被巾、歸方丈。若兩班寮之看寮而空被位者、僧堂坐牌前植看寮簡板、則不取被巾。

⑦　忠曰、坐禪用心、諸祖有箴有銘、有儀有論、不可悉録。今且擧其目、備辨道士檢尋。

⑧杭州五雲和尚坐禪箴　傳燈録［三十ノ十三丈］載。

⑨鵝湖大義禪師［唐人］坐禪銘　緇門警訓［上ノ廿二丈］載。

⑩天台大靜禪師［嗣玄沙備。〇五代人］坐禪銘　諸祖偈頌［上之二ノ卅一丈］載。

⑪同安察禪師［嗣九峯虔。〇宋人］坐禪銘　諸祖偈頌［上之一ノ十八丈］載。

⑫佛眼遠禪師坐禪銘　緇門警訓［上之廿一丈］載。

⑬長蘆賾禪師［嗣長芦夫。〇徽宗時人］坐禪儀　禪苑清規［八ノ五丈。〇敕修下一ノ四十一丈。〇警訓上。〇五味禪］載。

⑭佛心才和尚［嗣靈源清］坐禪儀　普燈録［三十。〇又警訓上ノ十八丈。〇諸祖偈下之二ノ十四丈］載。

⑮中峯本禪師坐禪論

⑯蘭溪隆禪師坐禪論

⑰明極俊禪師坐禪訣　焰慧語要［下ノ九丈］載。

⑱永平元禪師坐禪并銘［正法眼藏］

⑲瑩山瑾禪師坐禪用心記、及三根坐禪説［附瑩山清規後］

⑳大慧杲禪師告香普説［普説二ノ卅一丈］云、近來諸方、打板坐禪。若要莊景即得、我不信你坐得定。往往聞恁麼道、却謂妙喜不教人坐禪。又是錯認、何曾解方便。我只要你行亦禪、坐亦禪。語默動靜體安然。山僧有時夜裏睡、纔覺便起來坐。坐既久、都無所思。自謂諸佛境界只這是。然不要把爲極則。不是放身命處。況更言靜是根本、悟是枝葉。此處誤人。諸方説靜了方悟。我是悟了方靜。不敢相瞞。未悟時心識紛飛、悟了方貼貼地。

21 大比丘三千威儀［上ノ十六丈］云、欲坐禪有五事。一者當隨時。二者當得安牀。三者當得輭座。四者當得閒處。五者當得善知識。復有五事。一者當得好善檀越。二者當有善意。三者當有善藥。四者當能服藥。五者當得善助。爾乃得猗。隨時者、謂四時。安牀者、謂繩牀。輭座者、謂毛座。閒處者、謂山中樹下。亦謂寺中不與人共。善知識者、謂同居善。善檀越者、謂令人無所求。善意者、謂能觀。善藥者、謂能伏意。能服藥者、謂不念萬物。善助者、謂禪帶。禪帶有五事。一者當廣一尺。二者當長八尺。三者當頭有鉤。四者當三重。五者不得用生韋。亦不得用金鉤。

22　又天台次第禪門、詳説坐禪用心、内外方便。其第二第三卷、最爲要。〈無住［雜談八ノ十一丈］云〉

23　日本坐禪規矩、道元禪師爲始。　無住和尚雜談集［八ノ十丈］云、建仁榮西入宋、雖傳禪門戒律儀、歸朝之後、且順國風、兼行天台眞言、未得專講禪規。其坐禪、但據狹床而已。佛法上人〈道元〉入宋歸朝、始行廣床坐禪於深草〈興聖寺也〉。道俗初見聞此規。故敬信者衆。當時所目擊之僧、爲予説之。自後東福開山〈圓爾〉渡宋、久住徑山、歸國行其坐禪法。蘭溪隆長老、宋國僧也。故建長寺坐禪規、一依宋朝。自此後、天下禪院儀禮通行矣。

24 坐禪坐法、見禮則類結跏趺坐處。

25坐禪累手法　請觀音經［疏四十三丈］云、若欲得見觀世音菩薩、端身正心。使心不動、心氣相續、以左手置右手上、擧舌向齶、令息調匀。智者疏、約世間、陽上陰下。隨世俗故、右陽居下。左陰處上者。欲將定靜之法、鎭於陽散也。世俗既有威儀、此即是以戒法、禁約麁獷、即對戒也。二陽動相、陰靜相、以靜鎭動、是制亂方便、即對於定。三者右表方便、屬權而居下。左是實智居上、是則自權而顯實。此即表慧。〈闡義鈔［四ノ十一丈］釋之、恐繁不録。〉

26　或曰、一夏九十日坐禪、即一行三昧也。　摩訶止觀［二ノ一ノ一丈］明四種三昧〈常坐、常行、半行、半坐、非行、非坐〉中云、一常坐、出文殊説文殊問兩波若。名爲一行三昧。〈乃至〉居一靜室、或空間地、離諸喧鬧。安一繩床、傍無餘座、九十日爲一期。結跏正坐、項脊端直、不動不搖、不萎不猗、以坐自誓、脇不挂床。

（藤田宗裕）

【六二九】四時坐禪

①四時者、依永平清規［上巻］辨道法［一丈已下。○又瑩山上ノ二丈已下日中行事］黄昏坐禪〈戌辰〉、後夜坐禪〈四更三點〉、早晨坐禪〈粥後己辰〉、晡時坐禪〈申辰〉也。

②又幻住菴清規［一丈］云、裝香一盤、且以三炷爲率。自黄昏燒起、至第三炷、約四鼓時分也。竈下燒面湯、堂前鳴板三下、大衆收枕、推被於裏床、收半單、下地洗面、歸堂坐禪。〈忠曰、是後夜也。〉至開靜板鳴、即摺被搭衣、佛前禮拜、歸鉢位坐、展鉢受粥、粥罷佛前諷經。經畢小歇。堂前復鳴板三下、自主至伴、歸堂坐禪。〈忠曰、是早晨也。〉至齋時火板鳴、下地。少頃長板鳴、歸鉢位受食、食畢小歇。堂前鳴板三下、復歸堂坐禪。〈忠曰、齋罷是永平爲晡時。〉至晡時分、鳴板放參、至黄昏、燒香盤。大衆搭衣諷經、施食事畢、堂前鳴板三下、歸堂坐禪。〈忠曰、是黄昏也。〉至放參板鳴、開枕展被、右脇而息。　又［二丈］云、凡一日夜之間、四次坐禪之際、宜各屏心絶慮、息念忘縁、深究死生、力窮道業。

③大比丘三千威儀云、坐禪有五事。一者當隨時、謂四時。〈詳前坐禪處。〉

④夢窓石國師録［新刊拾遺三丈］臨川家訓云、四時坐禪、唯除浴日坐參。其餘極寒極熱、修正蘭盆時節、亦不可開。〈若於坐禪時特有事可作、則可開之。〉趙州和尚云、我在南方三十年、除粥飯二時、是雜用心處。趙州寧謂粥飯二時、不是正用心處耶。只是言其除粥飯外、更不雜餘事耳。〈乃至〉古德又云、大事未明、當如喪考妣。大事已明、亦當如喪考妣。古人苦口叮嚀、其意豈在令人限日約時、工夫不純乎。上古道人、皆是卜僻洞深巖、居樹下石上、更有何事可作。廢寢忘飡、一味存道。百丈建立叢林以來、普請作務、其事不少。雖然人人以道聚頭、故辨道工夫、不會爲事縁所奪。百丈滅後、迨于三百年、叢林規繩漸衰、緇流少有慚愧。始有擊版坐禪之儀、謂之四時坐禪。蓋是主法尊宿、曲設方便、以誘懈怠者耳。今時後生、猶嫌四時坐禪、動則欲令省略。無慚無愧、莫甚於此。

⑤義堂日工集［二ノ五十二丈。○又五十七丈］云、在黄梅院訓衆曰、夏安居、三時諷經、四時坐禪、本朝不論大小刹、皆例行之。合不怠。怠者罰。

（藤田宗裕）

【六三〇】三時坐禪

①四時坐禪［日用清規稗説上ノ廿八丈］中、省後夜也。

②　瑜伽師地論［廿四ノ一丈］云、言初夜者、謂夜四分中過初一分、是夜初分。言後夜者、

謂夜四分中、過後一分、是夜後分。

（藤田宗裕）

【六三一】再請（シン）禪

①忠曰、定式坐禪［敕鈔十二ノ十四丈］、到定鐘鳴而止。此後再禪坐。此曰再請禪。

②敕修清規［下一ノ四十四丈］大坐參云、如坐再請禪、住持後門入歸位、不巡堂。頭首隨。衆或抽解者、即歸被位。更深住持出。聞首座開枕響、衆方偃息。在道兄弟、不以此拘。

（藤田宗裕）

【六三二】伴禪

①舊説［敕鈔一ノ十一丈］曰、住持五更行香之次、入僧堂、伴於大衆坐禪、此謂伴禪也。

（藤田宗裕）

【六三三】陪（ホイ）禪

①陪禪同伴禪義。

②舊説［敕鈔十二ノ十三丈。○同八ノ四丈］曰、住持燒香巡堂之次、入僧堂、陪衆之禪坐少時、以勵衆。故曰陪禪也。住持已是得法人、非是爲自修行坐禪於僧堂而已。

③　又道話曰陪禪。蓋訛名也。　愚中及和尚年譜［廿二丈］云、應永十三年丙戌、師八十四歲。尼松巖、興造含暉、爲師塔所。師一冬宴安于此、檀施甚厚、普施衆僧、輪次齋會禪坐、道話曰陪禪、曰夜話。

（藤田宗裕）

【六三四】放禪

①敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云、堂司行者、候齋次第覆首座放禪。轉從聖僧後右出、撐簾下牌、輕撼作聲。住持頭首、出堂。

②瑩山清規［上ノ二丈左］云、凡坐禪者、首座之管領也。已香欲了時、聖僧侍者、問訊首座。是稟放禪也。

③　幻住清規［四十四丈］首座云、凡打板、坐參放禪行道、種種動靜、靡不關心。

（藤田宗裕）

【六三五】經行

①日用軌範［敕修下一ノ四十七丈右］云、開小靜摺被、或歸衆寮、喫湯藥、或茶堂經行、次第歸鉢位。

②瑩山坐禪用心記［七丈］云、坐中若昏睡來、常應揺身、或張目、又安心於頂上髮際眉間。猶未醒時、引手應拭目、或摩身。猶未醒時、起座經行。正要順行。順行若及一百許歩、昏睡必醒。經行法者、一息恒半歩、行亦如不行、寂靜而不動。

③南海寄歸傳［三ノ九丈］云、五天之地、道俗多作經行。直去直來、唯遵一路。隨時適性、勿居鬧處。一則痊痾、二能銷食。禺中日昳、即行時也。或可出寺長引、或於廊下徐行。若不爲之、身多病苦、遂令脚腫肚腫、臂疼膊疼。但有痰廕不銷、並是端居所致。必若能行此事、實可資亦長道。

④釋氏要覧［下ノ十七丈］云、慈恩解云、西域地濕、疊塼爲道。於中往來、如布之經、故曰經行。十誦律云、經行有五利。一勦健〈勦音巣。輕捷也〉、二有力、三不病、四消食、五意堅固。三千威儀經有五處可經行。一閑處、二戸前〈自房戸前〉、三講堂前、四塔下、五閣下。

⑤瑜伽師地論［廿四ノ一丈］云、言經行者、謂於廣長稱其度量一地方所。若往若來相應身業。〈經行、斷惛沈睡眠法、如彼〉。

⑥佛陀波利修禪要訣云、問、行法云何。答、行即經行也。宜依平坦之地、二十二歩以來、十四五歩以上、於中經行。經行時、覆左手、以大指屈、著掌中、以餘四指、抱大指作拳。然覆右手、抱左手腕、即端立少時。攝心令住〈謂住鼻端等〉乃行。行勿太急太緩、亦攝心行、至界畔、即逐日廻身、還向來處。住立少時、如前後行。行時即開目、住即輒閉。如是復稍倦、即休。經行唯在晝、夜不行也。問、多人同處經行得不。答、稍須相離、全近不得。問、繞塔行道、與經行何別。答、經行者、直往直來。豈同繞塔耶。又塔是多人往來處。不可於中經行。問、此方有逆日行道、稱爲右旋、未知是不。答、西方旋塔、並逐日輪、曾無逆行。

⑦忠曰、逐日者、自東而南而、西而北也。逆日者、從東而北、而西而南也。逐日者、順日輪之行。與上肩順轉同。

⑧十誦律［六十一ノ十五丈］云、經行法者、比丘應直經行。不遲不疾。若不能直、當畫地作相。隨相直行、是名經行法。

⑨摩得勒伽［六ノ廿六丈］云、經行不能直者、安繩。

（藤田宗裕）

【六三六】行道

①敕修清規［上一ノ廿三丈］藏殿祝讚云、住持領衆、合掌繞藏、行道三匝。多衆則一匝。又佛降誕云、維那擧唱浴佛偈。行道浴佛。

②幻住清規［五十八丈］津送云、擧楞嚴咒一遍、行道。

③村寺清規云、行道尤須端謹。叉手當胸徐行細歩。瞻顧前後、須使疎密得中。或出入門戸、上下階級、皆當先擧左足。須照應。袈裟不得拖地。衣服領袖、須當齊整。

④萬善同歸集［上廿六丈］云、行道一法、西天偏重、繞百千匝、方施一拜。經云、一日一夜行道、志心報四恩、如是等人、得入道疾。　又云、南山行道儀云、夫行道障盡爲期、無定日限。若論障盡、佛地乃亡。

⑤翻譯名義集［四ノ十五丈］云、半行半坐、方等云、旋百二十匝、却坐思惟。法華云、其人、若行若立、讀誦此經。

⑥忠曰、禪林懺摩法、楞嚴咒、或住立、或行道。蓋是半行半坐三昧也。

（藤田宗裕）

【六三七】炙茄（セキキヤ）會

①禪苑清規［三ノ一丈］監院云、如冬齋〈乃至〉炙茄會。〈詳職位類、監院處〉。

②五祖演和尚［古宿廿一ノ三丈］海會録炙茄會上堂云、六月三伏天、火雲布郊野。松間臨水坐、解帶同歡䞋。毳侶弄荷花、賓朋傾玉斝。紅塵事繁華、碧洞何瀟洒。重會在明年、相期莫相捨。白雲曾有約、願結青蓮社。

③ 酉陽雜俎［十九ノ六丈］云、茄子茄字、本蓮莖名。革遐反。今呼伽未知所自。茄子、僧人多炙之。甚美。

④ 忠曰、炙茄會、蓋炙茄開筵也。依酉陽言、僧家炙茄尚矣。

（藤田宗裕）

【六三八】茶湯會

①松源岳禪師録［下ノ五十八丈］茶湯會求頌曰、春風吹落碧桃花、一片流經十萬家。何似飛來峯下寺、相邀來喫趙州茶。

（藤田宗裕）

【六三九】冷淘會

①石菴珌禪師録［続宿五丈］、有結冷淘小參云、湖南人賣上麵、福建人喫冷淘。〈云云〉。〈正字通云、淘音陶。浙米也〉。

（藤田宗裕）

【六四〇】銷蕾會

①無學元禪師支那眞如録［五丈。〇又廿九丈］、有銷蕾會燒駱駞秉炬偈。

（藤田宗裕）

【六四一】蓮華會

①圓悟勤禪師天寧録［録五ノ四丈］、有蓮華會上堂。

②慈受深禪師慧林録、有資福作蓮花會、供養羅漢陞座。

（藤田宗裕）

【六四二】菩提會

①大慧杲禪師普説、有雪峯建菩提會普説。

（藤田宗裕）

【六四三】拈鬮（キツ）會

①西巖惠和尚能仁録、有謝幹拈鬮會上堂。

② 鬮義、詳執務類鬮拈處。

（藤田宗裕）

【六四四】焙經

①舊説［敕鈔八ノ十四丈］曰、設火爐焙藏經、去其蒸濕也。

②忠曰、蓋煅綿拭經也。

③敕修清規［下一ノ二丈］知藏云、函帙目録、常加點對、缺者補完、蒸潤者焙拭、殘斷者粘綴。

④北磵文集［九ノ十六丈］、常熟道友、焙經得舍利無數、榜云、蠹不在魚、在執紙上語者、焙非待火、待忘言外詮時。

⑤明極俊和尚録［題跋五丈］、跋天目淨海眞禅人焙四大部經得舍利頌什後云、天目西峯淨海眞禅人、發心焙四大部經、一一用綿拂拭、及火煅其綿、獲設利一顆。

⑥偃溪聞禅師雪竇録［八丈］、謝衆僧焙經、上堂云、罏韝之所鈍鐵猶多。黄面老子、具正徧知、只知撒土抛沙、欺胡謾漢、不知性命落在弟子手中、二千年後、横拕倒拽、只如雪竇恁麽擧、也是把火助熱。

⑦南浦明禅師崇福録［中巻十九丈］、有焙經上堂。

（堀野真澄）

【六四五】拭經

①以綿拭經、見焙經處。

②鏡堂圓禪師禪興録［六丈］拭藏經上堂云、五千餘軸眼中塵、不識無端貴似金、盡底掀翻知落處、掃堦松影又沈西。

③佛祖通載［廿二ノ廿八丈］云、元世祖、詔僧大内念經、行香。侍臣奏云、僧多不識字在、帝乃云、但教舒展、拭去塵埃、亦有功德。

（堀野真澄）

【六四六】上堂（齋粥）

①粥飯上僧堂、此謂上堂。與法堂説法稱上堂別。

②傳燈録［十四ノ十丈左］藥山儼禪師章云、院主報、打鐘也。請和尚上堂。師曰、汝與我擎鉢盂去。　又［十四ノ十一丈］云、師曰、二時上堂不得齩破一粒米。

③聯燈會要［八ノ二丈。〇八方珠玉中ノ十三丈］石梯和尚章云、師見侍者托鉢上堂、乃喚云、侍者、者應諾。師云、甚處去。云、上堂齋去。師云、我豈不知伱上堂齋去。云、除此外、別道箇甚麽即得。師云、我只問伱本分事。云、和尚若問本分事、某甲實是上堂齋去。云、汝不謬爲吾侍者。

④教誡律儀［上ノ廿二丈］云、師欲上堂、爲師滌鉢、看閉門戸等事。

⑤　已下録世典稱僧上堂。

⑥酉陽雜俎［三ノ十二丈］云、玄奘言、那蘭陁寺僧食堂中、熱際有巨蠅數萬、至僧上堂時、悉自飛、集于庭樹。　又［十二ノ十丈］云、著謡於軍中曰、齋鐘動也。和尚不上堂月餘。

⑦天中記［四十三ノ十五丈］云、摭言、王播［舊唐列傳百十四］客楊州木蘭院。僧厭苦之、飯後擊鐘。後二紀、播鎮楊州。訪舊詩有曰、上堂已了各西東、慙愧闍梨飯後鐘、碧紗籠之矣。續云、二十年來塵拂面、如今始得碧紗籠。

⑧　已下録官人飲食亦稱上堂。

⑨李肇國史補［中ノ八丈］云、鄭相珣瑜、方上堂食、王叔文至、韋執誼遽起、延入閣内。又［下ノ六丈］云、三院上堂、有除改者、不得終食。

（堀野真澄）

【六四七】過堂

①上僧堂喫食亦云過堂。

②備用清規［六ノ八丈］送鉢位云、兩班退職、維那先送首座、入鉢位。次接都寺、送鉢位、首座都寺、挂鉢過堂。

③六學僧傳［六ノ廿九丈］惟儼傳云、二時過堂、不得咬著一粒米。〈傳燈作上堂。如上堂處引〉。
④大休念禪師録［五ノ頌古ノ廿九丈］頌古、擧云、鵝湖孚禪師、侍者請過堂。湖云、我下莊、喫油糍了。〈會元作赴堂〉。

（堀野真澄）

【六四八】赴堂
①忠曰、與上堂過堂同義。
②敕修清規［下一ノ六丈右］都監寺云、齋粥二時、必赴堂、則行僕行益、自然整肅。
③五燈會元［七ノ六十七丈］鵝湖孚禪師章云、師一日不赴堂、侍者來、請赴堂。師曰、我今日在莊喫油糍飽。者曰、和尚不曾出入。師曰、你但去、問取莊主。者方出門、忽見莊主、歸謝和尚到莊喫油糍。

（堀野真澄）

【六四九】陪（ネイ）堂
①客僧［敕修鈔九ノ廿一丈有陪堂字］陪僧堂之外堂受食、此曰陪堂。

（堀野真澄）

【六五〇】下（ア）堂
①粥飯畢下僧堂、此謂下堂。與上間下間稱上堂下堂別。
②敕修清規［上一ノ廿三丈］每日祝讚云、齋粥二時下堂、僧衆必須登殿。〈又見唄器類、下堂椎處〉。

（堀野真澄）

【六五一】喝食
①見職位類、喝食行者處。

（堀野真澄）

【六五二】光伴
①敕修清規［上二ノ四丈］告香云、請客侍者、預依戒次、具茶狀、備卓袱筆硯。告香罷、列法堂下間請茶、各々僉名。請首座光伴。
②金鰲新話［卅八丈］龍宮赴宴録云、神王開潤筆宴。王曰、余欲與秀才光伴。故邀爾。酒進樂作。
③惑曰、光伴者、言我得前人恩光允容我令相伴也。不敢自專之謂矣。此義未是。
④忠曰、光者、猶如榮也。字係伴人。言我得伴此人。是己之光榮也。如入院展詞云、光據法筵、又［集ノ廿四ノ十一丈］王梅溪小簡云、光膺宸命、榮陟臺端。當例此而解耳。
⑤竺印先師曰、明朝百丈清規、淪亡久矣。隱元來朝、禿翁懷百丈清規、質難解處、元皆不能通。翁問光伴義。元曰、光者空也。謂不設茶菓藥石、而空伴之謂也。然觀清規光伴、皆是備茶菓點心者、非空伴之義。

（堀野真澄）

【六五三】相伴
①聯燈會要［五ノ十八丈。〇傳燈十四ノ廿六丈百顔章。〇光明藏下ノ卅七丈］柏巖哲禪師云、洞山與密師伯

到。師問、二上座、甚處來。洞云、湖南來。師云、觀察使姓甚麼。洞云、不得姓。師云、名甚麼。云、不得名。師云、還理事也無。云、自有廊幕在。師云、還出入也無。洞云、不出入。師云、豈不出入。洞拂袖而出。師次日侵晨入堂、召二上座。二人便出。師云、昨日老僧、對上座一轉語、不稱意。一夜不安。今請上座、別轉語。若愜老僧意、便開粥相伴過夏。洞云、請和尚問。師云、不出入。洞云、太尊貴生。師乃開粥同過夏。

②傳燈録〔十一ノ七丈〕仰山寂禪師章云、若説禪宗、身邊要一人相伴亦無。

③敕修清規〔上一ノ卅八丈左〕嗣法師忌云、方丈客頭、請西堂兩序、晩間對眞、相伴喫湯。

④　外典有接伴名。且附此。　事物紀原〔六ノ十八丈〕云、宋朝會要曰、契丹使至、命樂黄自康宗元詣雄州接伴。廻日充送伴使。此疑接伴之始也。

⑤　宋史〔列傳百七十四ノ十一丈〕袁韶傳云、韶爲右司郎官、接伴金使。

（堀野真澄）

【六五四】巡堂

①忠曰、巡僧堂也。有數種。謂住持巡堂〈入院、旦望茶、坐禪〉、大衆巡堂〈三八念誦〉、首座巡堂〈坐禪、大坐參、結制〉、維那巡堂〈聖節〉、參頭巡堂〈掛搭〉、都寺巡堂〈庫司湯〉、知事巡堂〈結制、旦望茶〉、請客燒香巡堂〈方丈茶〉、沙彌巡堂〈參堂〉、也。此有數義不同。謂點撿義〈坐禪時、住持、首座〉、告報義〈聖節時、維那〉、請謝義〈茶湯時〉、禮賀義。〈入院時、掛搭時、結制時也。　三八念誦後巡堂、蓋亦是、住持大衆、互相禮也〉。

②中峯雜録〔上ノ十二丈〕冬安居示徒云、爲懶墮懈怠之舊習之所障、〈乃至〉其巡堂人、三回五度警省、畧不肯少加精進。似如此參禪、要明心地、要敵生死、要脱略情塵、要勦除窠臼、莫説八十日。便是八十年、八十劫、惟增業識、但長癡迷。

③　忠曰、此巡堂人者、住持首座之外、別設人巡堂、以警策坐禪者睡惰也。

④住持巡堂、　敕修清規〔下一ノ四十一丈〕坐禪云、住持入堂燒香巡堂、自上間至下間一帀、歸位坐定。

⑤　東福清規〔百九丈〕云、住持入僧堂、坐禪者、蓋爲點撿大衆也。其入堂巡堂一帀、是點撿之儀也。

⑥又〔上二ノ廿丈〕入院云、鳴僧堂鐘、大衆先歸鉢位立定。新命入堂炷香。參隨人、同展三拜、維那當面問訊、引巡堂一帀。參隨人先出。兩序送新命歸鉢位。觸禮三拜。旦望住持巡堂、見次下知事巡堂。

⑦大衆巡堂、　敕修清規、念誦〈外堂念誦畢〉云、住持入堂、前堂首座入。次名德西堂挿入、歸聖僧板頭立。頭首領衆、三人一引、聖僧前問訊、轉身住持前問訊。合掌巡堂、順左肩轉、依圖位立。暫到侍者、隨衆入、只巡半堂、至聖僧後、侍者向後門立、暫到向侍者立。次知事入堂、聖僧前問訊、轉身住持前問訊、合掌巡堂出。暫到接侍者後隨出。〈云云〉。

⑧首座巡堂、　敕修清規〔下一ノ四十丈左〕坐禪云、首座聖僧前燒香巡堂、自下間至上間一帀、就歸被位坐。

⑨　校定清規〔敕修鈔十二ノ四丈引〕〔下ノ八丈〕云、巡堂之法、住持從上堂巡至下堂。首座從下堂巡至上堂。蓋首座未出世人。故從下巡上。若已出世人則不拘。以理論之、亦合從下巡上、免得於住持位前行故也。

⑩　忠曰、校定初義、位階區別。亦義敬師法式。蓋此時雖住持未入堂、若首座聖僧前燒香了、直向上間、則横過住持空椅前也。若聖僧前燒香了、直向下間巡堂、自聖僧後

至上間、而歸自被位、則得不横過住持空椅前也。故校定云、免得於住持位前行也。
區別義見後。

⑪又敕修清規〔下一ノ四十三丈〕大坐參云、首座入堂不燒香、便歸位待住持入堂坐定、堂司行者、鳴首座寮前板三下。大衆轉身向外坐。首座下地從後門出、復轉從前門入、聖僧前燒香、如常巡堂、歸被位坐少定。

⑫　忠曰、如常者、擇坐禪時首座巡堂也。如坐禪時、首座巡堂、自下間至上間一帀。蓋自下間巡起者但是已。私推其理、坐禪則首座巡之後、隨有住持巡堂。故首座先巡時、欲異于住持而示其位階區別矣。今大坐參巡堂、則自上間巡起。是尋常巡法、乃如聖節維那巡堂、自上間至下間也。

⑬又敕修清規〔下二ノ十一丈〕結制禮儀云、首座離位、聖僧前燒香、大展三拜、巡堂一帀歸位。行者喝云首座禮謝、大衆觸禮三拜。

⑭維那巡堂、　敕修清規〔上一ノ十九丈〕、聖節云、維那於僧堂早粥遍食椎後、再鳴椎一下云、〈白大衆、粥罷聞鐘聲、各具威儀、詣大佛寶殿、啓建聖節。謹白〉復鳴椎一下、往住持前問訊。從首座板起巡堂一帀、出外堂、下間至上間、歸内堂中間、問訊而出。

⑮參頭巡堂、　敕修清規〔下一ノ卅五丈〕大掛搭歸堂云、參頭領衆、前門右手入堂、至聖僧前排立。參頭燒香、同衆大展三拜、巡堂一帀、自上堂至下堂、仍如前排立問訊。

⑯都寺巡堂、　敕修清規〔下二ノ十丈〕、庫司四節特爲首座大衆湯云、鳴齋鼓一通、大衆歸鉢位。頭首一班、齋歸前板。都寺隨入、揖首座離位、却揖以次頭首進板首、隨送首座歸位、從聖僧後、右出堂外、迎住持入堂。供頭緩鳴堂前鐘七下、送住持入位、仍往首座前揖坐。仍如前出、從首座板起巡堂一帀、外堂上下間歸堂、中立問訊。〈忠曰、此是揖坐巡堂。次有揖香、揖湯、巡堂問訊〉。

⑰知事巡堂、　敕修清規〔下二ノ十一丈〕、結制禮儀云、知事入堂燒香、大展三拜、巡堂一帀、至聖僧板頭排立。行者喝云、知事禮謝大衆、觸禮三拜。

⑱又〔下二ノ十五丈〕旦望巡堂茶云、鳴堂前鐘七下、住持入堂燒香巡堂一帀歸位。知事入堂、排列聖僧前問訊、轉身住持前問訊、從首座板起巡堂一帀。

⑲請客巡堂、　見巡堂請茶處。

⑳燒香侍者巡堂、　敕修清規、方丈四節特爲首座大衆茶云、鳴鼓集衆、燒香侍者行禮。〈同庫司湯都寺巡堂〉。

21沙彌巡堂、　見參堂處。

（堀野真澄）

【六五五】巡堂請茶（シンサ）

①忠曰、住持請衆、故請客侍者巡堂。

②敕修清規〔下二ノ十四丈〕方丈四節特爲首座大衆茶云、掛點茶牌、長板鳴、請客侍者入堂、聖僧前燒香一炷、大展三拜。巡堂一匝、至中問訊而退、謂之巡堂請茶。

（堀野真澄）

【六五六】巡寮

①校定清規〔上十七丈。〇鈔六ノ十丈引〕云、侍者先於上堂時、令行者、挂巡堂牌。住持巡寮、自東廊第一寮巡起、寮衆各出外接入、仍送出。衆寮人多處、但寮元一人、迎送出入、大衆只立門外。〈忠曰、巡堂牌之堂、當作寮〉。

②備用清規［四ノ九丈］云、方丈客頭、先行通覆。住持至。寮主先於門前下手立迎入。請趺坐挿香、住持答香。暑敘寒温、致謝送出、聽叫収香。蒙堂四寮衆、皆列門外下手、同接入、同送出。謂衆寮人衆、只寮元接送非法。次第巡寮畢、歸方丈、照拂官客諸山。

③敕修清規［下二ノ十二丈］結制禮儀云、住持次第巡寮、各寮嚴設坐椅香几、於門外候住持。從東廊第一寮巡起、至各寮香几前。寮主同衆挿香云、〈此日禮當拜賀、返沐降重〉。答香云、〈適辱禮賀。專此致謝〉。送住持數歩、復側立香几之右、合掌問訊、待衆行盡、就隨其末、次第巡過。各寮人、隨後接巡。至法堂上、住持於香几内中立、大衆三人一引、問訊而過。又［上二ノ八丈］巡寮云、古規、住持巡寮、僧堂前掛巡寮牌報衆。〈云云、如彼〉。或旦望巡行、則不掛牌。今惟以四節報禮爲巡寮、餘日不講。能復古者、當行之。

④祖庭事苑［八ノ十三丈］云、僧祇云、世尊以五事故、五日一按行僧房。一恐弟子著有爲事。二恐著俗論。三恐著睡眠。四爲看病僧。五令年少比丘、觀佛威儀庠序生歡喜故。禪門巡寮、正擬大聖之遺範。今天下、率叢林爲師匠者、莫不遵依此式。

⑤　按韻會云、按察行也、考也、撫也。

（堀野真澄）

【六五七】巡案

①［敕鈔十一ノ十六丈右］僧堂則曰巡堂、衆寮則曰巡案。

②敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云、行者引至衆寮。〈云々〉。寮主引掛搭人排列、朝觀音問訊、引巡案一帀、復朝觀音問訊而退。

（堀野真澄）

【六五八】喝參

①［敕鈔五ノ十丈］喝參者唱參。蓋報某伺候在此之義也。

②品字箋［丙ノ七十八丈］云、參趨承也。晋謁也。

③敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、凡旦望五參上堂罷、參頭行者、令喝食行者報各局務、行堂前掛牌報衆。昏鐘鳴、行堂前鳴板三下、集衆行者。先佛殿、次祖堂、僧堂前、前堂寮、喝參。方上寢堂排立。參頭入方丈請住持、出就坐。參頭進前挿香、退身歸位。緩聲喝云、參。衆低聲同云、不審。齊禮三拜。　又［上二ノ九丈］爲行者普説云、侍者燒香請法、參頭領衆鴈立。挿香喝參三拜。

④傳燈録［廿六ノ卅四丈］瑞鹿先禪師章云、黄昏唱禮了、僧堂前喝參。僧堂前喝參了、主事處喝參。主事處喝參了、和尚處問訊。

⑤沙彌亦喝參。　傳燈録［十ノ十八丈。〇本録下ノ廿三丈無喝字］趙州諗禪師章云、師聞沙彌喝參、向侍者云、教伊去。侍者乃教去。沙彌便珍重去。師云、沙彌得入門。侍者在門外。

⑥祖忌有喝參。　敕修清規［上一ノ卅四丈］達磨忌云、維那擧楞嚴呪畢、回向。〈云云〉。次參頭領衆行者、排列喝參禮拜諷經。　忠曰、準事生也。

（堀野真澄）

【六五九】開浴

①又見殿堂類浴室處。

②敕修清規［下一ノ三丈］知浴云、凡遇開浴、齋前掛開浴牌、寒月五日一浴、暑天毎日淋汗。

（堀野真澄）

【六六〇】施浴

①傳燈録［廿四ノ卅五丈。○会元十四ノ十五丈］普淨院常覺禪師章云、師以時機淺昧、難任極旨。苟啓之非器、令彼招謗讟之咎。我寧不務開法。毎月三八施浴、僧道萬計。師常謂諸徒曰、但得慧門無壅、則福何滯哉。〈又見殿堂類浴室處〉。

②佛説温室洗浴衆僧經［六十七套］云、耆域欲請佛及僧菩薩大士、入温室澡浴。佛告醫王、吾當爲汝説澡浴及報之福。澡浴之法、當用七物。除去七病、得七福報。七物、一然火、二淨水、三澡豆、四酥膏、五淳灰、六楊枝、七内衣。除七病、一四大安穩、二除風病、三除濕痺、四除寒氷、五除熱氣、六除垢穢、七身體輕便、眼目精明。如是供養衆僧、便得七福。一四大無病、二面貌端正、三身體香潔、四肌體潤澤、五多人從拂塵垢識宿命、六口齒香好白齊所説肅用、七所生處自然衣飾珍寶。〈乃至廣説〉。

（堀野真澄）

【六六一】入浴

①敕修清規［下一ノ三丈］知浴云、鳴鼓。第一通、僧衆入浴。第二通末、頭首入浴。第三通、行者入浴。此時住持方入、以屏風遮隔而浴。第四通、人力入浴、監作行者知事居末浴。

②日用清規［九丈右］云、如遇入浴、浴具携右手、入下間門閾内問訊、歸空處、挹左右人。〈云云。具如彼説〉。或有瘡、或洗灸瘡、或使疥藥、宜隨後入浴。

③寄歸傳云、須饑時浴。〈詳殿堂類浴室處〉。

④五燈會元［四ノ六十六丈］石梯和尚〈嗣茱萸〉章云、因侍者請浴。師曰、既不洗塵亦不洗體。汝作麽生。者曰、和尚先去。某甲將皂角來。師呵呵大笑。〈傳燈聯燈不收〉。

（堀野真澄）

【六六二】淋汗

①夏月入浴曰淋汗。〈見開浴處〉。蓋熱時常有汗、故毎日淋沃也。　又見文疏類淋汗疏處。

②正字通云、淋音林。説文以水沃也。

③清拙澄禪師録［日本彔頌古卅六丈］淋汗頌云、陜府鐵牛遭日炙、嘉州大象汗交流。有人浴得這箇佛、萬兩黄金也合収。

（堀野真澄）

【六六三】洗脚（セイ）

①舊説［敕鈔十二ノ四十六丈］曰、洗足、多於西淨矣。

②日用軌範［敕修下一ノ五十一丈］云、洗脚板鳴、不得爭奪脚桶。

（堀野真澄）

【六六四】淨髪

①剃頭髪也。

②敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云、或山門有迎接、祈禱、普請、看誦、送亡、及衆寮淨髪洗衣、則不坐禪。

③　行事鈔諸雜要行篇云、五分佛制半月一剃髪。除無人難縁。論家四種次第。一上座、二髪長、三先洗頭、四有縁欲行並前爲剃。毘尼母、剃髪者、但除頭上毛及鬚。餘毛一切

不合却。所以剃者、爲除憍慢自恃心故。四分、比丘不得爲白衣剃髮。除欲出家者。若頭極長、若兩月、若廣兩指、一剃。爪極長如一麥、翦之。不得用剪刀翦髮。聽畜盛髮器。十誦、髮當薶坑中。涅槃、頭鬚爪髮悉皆長利、破戒之相。増一、佛告比丘、沙門出家有五毀辱法。一頭髮長、二爪長、三衣裳垢坋、四不知時宜、五多有所論。

④ 逆剃順剃。　毘奈耶雜事〔十六ノ二十丈〕云、阿難入城乞食、有婆羅門、於高堂見已、以拳攉阿難頭。時鄔波難陀聞已、口中唱、我今解治彼小人。使剃頭人、逆順淨剃。揩摩以油、著衣入城、捉婆羅門臂、至王門、見王白其事。王大怒、斬婆羅門手。〈略鈔〉。

（堀野真澄）

【六六五】 煆髮

①焚得度人之髮也。

②斷橋倫禪師録〔佛事三丈〕、新化爐煆髮。佛事云、銅頭鐵額、馬頷驢腮。倒順剗除千萬萬、零星収拾幾堆堆。作者出手、爐鞴新開。從前毛病、到此一時灰。紅个白个青个紫个赤个。以火打圓相云、盡從者箇流出來。

③應菴華禪師蒋山録〔三丈〕焚衆僧髮佛事云、拈火把云、一呼善來、鬚髮自落。積累既多、無處安著。普請大衆、把火燒却。且道、燒却後如何。不用撥灰求舍利、無邊頂相放毫光。

④長翁淨禪師録〔如淨上ノ七丈〕煆髮上堂云、活剗羣牛腦後毛。風吹日炙轉腥臊。不堪狼藉薫天地。罪惡重將業火燒。恁麼見得、切忌死灰尋舍利。臭煙蓬焞燄頭高。

（堀野真澄）

【六六六】 開爐

①敕修清規〔下二ノ十七丈〕月分須知云、十月初一日開爐、方丈大相看。〈又見職位類爐頭處〉。

② 僧寳傳〔廿八ノ十丈〕法昌遇禪師傳云、法昌在分寧之北。千峯萬壑、古屋數間。遇至止、安樂之、火種刀耕。衲子時、有至者、皆不堪其枯淡、坐此成單丁。開鑪日、輒以一力撾鼓、陞座曰、法昌今日開鑪、行脚僧無一箇。唯有十八高人、緘口圍鑪打坐。不是規矩嚴難、免見諸人話墮。直饒口似秤槌、未免燈籠勘破。不知道絶功勲。安用修因證果。喝一喝云、但能一念回心、即脱二乘羈鎖。

（堀野真澄）

【六六七】 閉爐

①敕修清規、月分須知云、二月初一日、僧堂内閉爐。或山寺高寒母拘。〈又見職位類爐頭處〉。

（堀野真澄）

【六六八】 向火（キャンコ）

①日用軌範云、寒月向火、先坐爐圈上、然後轉身正坐、揖上下肩。不得弄香匙火筯。不得撥火飛灰。不得聚頭説話。不得煨點心等物。不得炙鞋焙脚、烘衣裳。不得攪起直裰、露袴口。不得吐唾、并彈垢膩於火内。

② 傳燈録〔八ノ六丈〕南泉願禪師章云、師在方丈與杉山向火次、師云、不用指東指西、直下本分事道來。杉山挿火箸、叉手立。師云、雖然如是、猶較王老師一線道。

③ 曹山寂禪師録〔十七丈。〇会元十三ノ十六丈〕云、師一日入僧堂向火。有僧曰、今日好寒。

師曰、須知有不寒者。曰、誰是不寒者。師筴火示之。僧曰、莫道無人好。師下火。僧曰、某甲到這裏却不會。師曰、日照寒潭明更明。

④四分律〔五十九ノ十四丈〕云、向火有五過失。一令人無顏色。二無力。三令人眼闇。四令多人鬧集。五多説俗事。

⑤僧祇律〔十七ノ二十丈〕云、佛告諸比丘。然火有七事無利益。何等七。一者壞眼。二者壞色。三者身羸。四者衣垢壞。五者壞牀褥。六者生犯戒因縁。七者増世俗言論。有此七過故、從今日後不聽然火。

⑥行事鈔引僧祇、資持記釋之云、壞色、謂面無神色。生犯戒縁、即露地然火、掘壞等戒、因而成犯。

（堀野真澄）

【六六九】普請（シン）

①忠曰、集衆作務、曰普請。

② 困學紀聞〔十九ノ六丈〕云、普請、出呉呂蒙傳。

③根本説一切有部毘奈耶雑事〔十四ノ五丈〕云、如世尊説、若埽地時、有五勝利。時有老宿苾芻、棄禪誦業、入逝多林、皆親埽地。佛言、我於知事人、作如是説。非諸耆宿苾芻修行業者。然於我所、依善法律、而出家者、有二種業。一者習定、二者讀誦。苾芻聞佛爲知事人、密作是説、其知事人、不能遍埽逝多林地。佛言隨要當埽。若月八日、或十五日、應鳴犍稚、總集衆僧、共爲灑掃。 古徳以此鳴犍稚、集衆作務、爲叢林普請之據。〈五勝利、見執務類、埽地處〉。

④傳燈録〔六ノ廿二丈〕禪門規式云、行普請法、上下均力也。

⑤僧史略〔廿三丈〕別立禪居云、共作者、謂之普請。

⑥敕修清規〔下一ノ四十五丈〕云、普請之法、蓋上下均力也。凡安衆處、有必合資衆力而辨者。庫司先稟住持。次令行者、傳語首座維那、分付堂司行者、報衆掛普請牌。仍用小片紙書、貼牌上云、〈某時某處〉。或聞木魚、或聞鼓聲、各持絆膊、搭左臂上、趨普請處、宣力。除守寮直堂老病外、竝宜齊赴。當思古人、一日不作、一日不食之誡。

⑦幻住清規〔四十九丈〕云、公界普請、事無輕重。均力爲之。不可執坐守靜、拗衆不赴。但於作務中、不可譏呵戲笑、誇俊逞能。但心存道念、身順衆縁。事畢歸堂、靜黙如故。動靜二相、當體超然、雖終日爲、而未嘗爲也。

⑧臨濟玄禪師録云、一日普請。〈乃至〉。黄檗竪起钁頭云、祗這箇、天下人拈掇不起。師就手掣得、竪起云、爲什麼。却在某甲手裏。黄檗云今日大有人普請。便歸院。

⑨聯燈會要〔廿二ノ廿九丈〕華嚴休靜禪師章云、師在洛浦作維那。普請、白槌云、上間般柴、下間鋤地。首座云、聖僧作甚麼。師云、當堂不正坐。不赴兩頭機。

⑩大慧普説〔一ノ廿八丈〕如山主請普説云、乾峯示衆〔碧岩三ノ十二丈評亦挙〕云、擧一不得擧二。放過一著、落在第二。雲門出衆云、昨日有人。從天台來。却往徑山去。峯云、今日不得普請。舊時叢林中、日日普請。不似今時禪和家、十指不沾水、百事不干懐、著好衣服、要受人天供養、不生慚愧。舊時無這般衲子。每人有一柄畚刀、一柄鋤頭。謂之一日不作、一日不食。若是普請處、有一人打發時、一衆頼他便免普請。所以道、今日不得普請。後來衆中。多把作禪會了。

⑪聯燈會要〔廿五ノ十四丈。〇又傳灯二十ノ六丈〕佛日和尚章云、師到夾山。一日大衆普請次、維那令師送茶。師云、某甲爲佛法來。不爲送茶來。那云、和尚教上座送。師云和尚尊命、

即得。乃携茶、去作務處。撼盞作聲。夾山回顧。師云、醶茶三五盌、意在钁頭邊。山云、瓶有傾茶勢。籃中幾箇甌。師云、瓶有傾茶勢。籃中無一甌。便傾茶行。時大衆一時擧目。師云、大衆鶴望、請師一言。山云、路逢死蛇莫打殺。無底籃子盛將歸。師云、手執夜明符、幾箇知天曉。山云、大衆、有人也。歸去來、歸去來。

⑫ 忠曰、大衆有人也。歸去來。此即是大慧所謂賴他免普請者。

⑬ 已下、録非作務、而但集衆、稱普請者。

⑭敕修清規［下一ノ五十九丈左］送亡云、白大衆。粥罷普請送亡、除守寮直堂外、並當齊赴。

⑮雪峯存禪師録［下ノ廿一丈］云、師示衆云、盡大地撮來、如粟米粒大。抛向面前、漆桶不會、打鼓普請看。

⑯聯燈會要［十四ノ廿二丈］眞淨文禪師章云、今日莊主、設鑽飯俵襯錢。參退、僧堂内普請、喫茶去。

⑰清拙澄禪師録［日本三ノ小參八丈］除夜小參云、爆竹已催殘年去。明朝普請賀新年。

（堀野真澄）

【六七〇】交代

①新職者與舊職者、相代也。

② 困學紀聞［十九ノ六丈］云、交代、出蓋寛饒傳。

③敕修清規［下一ノ十三丈左］兩序進退云、與舊人交代、互轉身對觸禮一拜。送舊人出。

（堀野真澄）

【六七一】交承

①交代、亦曰交承。承繼也。

②康熙字典［卯中廿二丈］云、承繼也。詩小雅、如松柏之茂、無不爾或承。疏、新故相承、無彫落也。

③物初賸語［十八ノ四丈］、淨慈請無極。諸山疏云、先與東寺、交承於鳳城南畔。

④虚堂愚禪師録［七ノ偈頌十四丈］、有芝峯交承惠茶偈。

⑤ 官人交代、亦曰交承。 魯應龍［郛百十六］括異志［廿二丈］云、當湖酒庫有四聖廟。在炊淘之後。立祠以來、閲歳滋久。前後交承、祀之奉之甚謹。每一任初到、則上兩幡。既解印。則復兩幡、酬神之庇。以爲定例。

（堀野真澄）

【六七二】交堂

①僧堂直堂人交付曰交堂。

②大鑑小清規［七丈］僧堂衆僧須知云、直堂、須自開靜後、看守衆僧被鉢一日。至晚不諷經、不出外、不入寮舍、專此一日、至放參了、名曰交堂。交付聖僧侍者看管。

（堀野真澄）

【六七三】掛搭

①［敕鈔五ノ卅九丈左］初入叢林者、掛衣鉢袋於僧堂單位鈎也。故凡住持容行脚人依住、曰許掛搭。

②楊億古清規序［敕修下二ノ廿五丈。○傳灯六ノ廿二丈禅門規式引之］云、所裒學衆、無多少、無高下、盡入僧堂、依夏次安排、設長連床、施櫨架、掛搭道具。

③敕修清規［下一ノ卅三丈左］遊方參請云、如求掛搭、參頭領衆、回身進住持前稟云、某等、生死事大、無常迅速。久闖道風。特來依附。伏望慈悲收録。稟訖不伺允否、即普觸禮一拜云、謝和尚掛搭。〈云云如彼〉。

④住持亦有掛搭儀。　敕修清規［上二ノ十九丈］入院云、就僧堂前解包、屏處濯足、取衣披搭、入堂炷香、聖僧前大展三拜、參隨人同拜。掛搭已、到佛殿拈香。

⑤　大鑑小清規［十一丈。○清拙附録ノ五十六丈有天境跋］侍者寮牓云、昔雪竇明覺禪師、在衆日、與曾侍郎談道交契。一日明覺入浙、曾公與書一封、至靈隱珊和尚處、求掛搭。明覺至靈隱相看、得掛搭。匿其書。明年曾公訪靈隱問、去年有書。送僧掛搭到否。珊和尚云、無。取床歷看、有重顯上座名。問之乃作淨頭。曾公乃相見問其書、明覺出其書還之。緘封未開。曾公大悅、知其遠大之人也。今日本僧、人人求擧書掛搭。全無羞恥。實使人愁。有高見遠識兄弟、別有格外相見、不擧書爲妙。

⑥　忠按、雪竇顯公、不達曾公贈靈隱書、以顯薦達珊禪師故不傳也。見僧寶傳［三ノ四丈］。

（堀野真澄）

【六七四】掛錫

①掛搭、亦曰掛錫。

②祖庭事苑［八ノ十六丈］云、西域比丘、行必持錫。有二十五威儀、凡至室中不得著地、必挂於壁牙上。今僧所止住處、故云挂錫。二十五威儀、具錫杖經。

（本多道隆）

【六七五】掛鉢

①粥飯畢、掛鉢於單後之鈎也。

②敕修清規［下一ノ十四丈］掛鉢時請知事云、預分付堂司行者、於僧堂早粥罷掛鉢時喝云、大衆少立、請新知事。

③　有官人掛鉢於禪刹者。　普燈録［廿三ノ十二丈］徐師川居士章曰、爲尚書外郎、與朝士同志者、挂鉢於天寧寺之擇木堂、力參圜悟。

（本多道隆）

【六七六】止掛搭

①敕修清規［下二ノ一丈］夏前出草單云、叢林以三月初一日出草單、方丈止掛搭。　又［下二ノ十六丈］月分須知云、四月初一日鎖旦過。〈見殿堂類旦過寮處〉。

（本多道隆）

【六七七】謝掛搭

①敕修清規［下一ノ卅七丈］謝掛搭云、古規掛搭歸堂者、即時謝掛搭。後以冬節歲節夏前三次謝掛搭。近時衲子、到處坐席未温、移單東西、多致不謝掛搭。既曰經冬過夏。折中當在冬前夏前兩期報謝。〈其規具如彼〉。

（本多道隆）

【六七八】參堂

①沙彌歸堂曰參堂。堂者謂僧堂也。

②敕修清規［下一ノ廿七丈］新戒參堂云、得度受沙彌戒已、覆住持、於何日參堂。〈乃至〉。至期、早粥遍食椎後、新戒參頭、領衆入堂、聖僧前列問訊、挿香大展三拜。〈乃至〉。轉身、住持前列問訊。從首座板起巡堂、至外堂、復歸内堂中間、問訊而出。然後歸堂挿單、隨衆禪誦。

（本多道隆）

【六七九】暖（ナン）寮

①忠曰、入寮人辨茶果等響先居人曰暖寮。予聞大德寺亦曰暖寮、妙心寺此謂暖席矣。

②清拙小清規［九丈］云、凡入祖堂、當一一歴代位牌平等供養。〈云云〉。比之生人、入寮暖寮同。

③　輟耕録［必九集ノ九。〇十一ノ十一丈］云、今之入宅與遷居者、隣里醵金治具、過主人飲、謂之曰煖屋、或曰煖房。王建宮詞、太儀前日煖房來。則煖屋之禮、其來尚矣。

④　忠曰、此煖房、隣里煖於入宅者之房。故與禪林煖寮義少異焉。

（本多道隆）

【六八〇】暖洞

①義堂日工集［一ノ七十一丈］云、守亨書記、求預會下、乃容石屏洞脚。　又［一ノ七十二丈］云、勸淨智長老春谷、令停止兩班官錢。且告云、今時佛法、屬吾宗門。宗門弊在名、名之弊在暖洞、暖洞之弊、至官錢極矣。與古之賣爵無異。請和尚誓革此弊、以爲永則焉。

又［三ノ六丈］康暦二年記云、承僧録之命、巡報建仁兩序西堂諸寮、禁止暖洞之儀。蓋余之宿志也。

（本多道隆）

【六八一】挿單

①初厠衆、挿單位於僧堂衆僧之間也。

②敕修清規［下一ノ廿七丈］新戒參堂云、歸堂挿單、隨衆禪誦。〈詳參堂處〉。

③又移單位亦曰挿單。　敕修清規［下一ノ二丈］後堂首座云、如缺前堂、住持別日上堂白衆、請轉前板、挿單唱食。

（本多道隆）

【六八二】起單

①忠曰、會裏僧辭去某寺曰起單。言起其單位也。〈又詳請假處〉。

②敕修清規［下二ノ十七丈］月分須知云、八月本色衲子、未遽起單。

③碧巖録［一ノ廿六丈］云、則監院説、丙丁童子來求火。法眼云、監院果然錯會了也。則不憤、便起單渡江去〈云云〉。

④密菴傑禪師録［頌ノ二丈］云、應菴一日喝恭上座云、你常在此、作什麼。恭煩惱、打併起單。

（本多道隆）

【六八三】抽（シウ）單

①起單亦曰抽單。抽下［敕上二ノ八丈左ノ字］單位也。

②大慧武庫［卅五丈］云、保寧勇禪師、初更衣、依雪竇顯禪師問道。雪竇呵爲央庠座主。勇不意、堂儀纔滿、即抽單。望雪竇山禮拜誓曰、我此生行脚參禪、道價若不過雪竇、定不歸鄉。

（本多道隆）

【六八四】請（シン）假

①舊説［敕鈔十一ノ十三丈］曰、暫請假外出者、須不過十五日却回。若外出過十五日、則稱爲起單。非是請假也。須更講掛搭儀。〈掛搭儀者、到侍司附名、侍司發榜下維那、維那出度牒、上床曆送歸堂也。詳敕修清規遊方參請〉。

②篇海類編［四ノ廿三丈］云、假去音駕。假告休沐。

③正字通［子中五十一丈］云、假暇音義別。舊註與暇同非。

④居家必用［辛ノ廿一丈］云、喪病告報曰假。謂借勾當月日也。節朔旬休曰暇。謂公務空閑日也。

⑤忠［左角三］曰、諸韻書並假字下旬休休沐註、而必用獨暇字爲旬休。按禪林請假、非休沐例。故不可用韻書假義。爲辨私事請假、故可用必用假義。又今時起單稱請假、更假作暇皆謬矣。

⑥敕修清規［下一ノ卅四丈］遊方參請云、或有故出入、須守堂儀。半月方可請假。古云［禪苑一ノ七丈］、請假遊山者、常將半月期。過期重掛搭、依舊守堂儀。

⑦南禪規式［下ノ六十七丈］云、請假先上方丈報之。次報維那寮看寮、看寮出紙榜貳片。壹片再上方丈呈之、便貼衣鉢閣、壹片貼僧堂己單名肩。呈牓時、首尾粘糊、以便貼。書牓法。

請假、〈或病假〉、堂司字印也。本寺用則書公界二字、亦不書日限。

⑧又［下七十七丈］云、義堂和尚住南禪日、罰榜式中云、某上座不請假出京、不赴四更坐禪。理合出院、且從宥恕罰油四斤。

⑨已下録住持亦言假。

⑩敕修清規［下二ノ十八丈］鐘云、僧堂鐘、遇住持每赴衆入堂時鳴七下、住持或不赴堂、或在假則不鳴。

⑪忠曰、在假出外也。此住持亦言暫假也。

⑫傳燈録［廿一ノ廿四丈］僊宗守玭禪師章云、一日不上堂、大衆入方丈參。師曰、今夜與大衆同請假。未審還給假也無。若未聞給假、即先言者負。珍重。

⑬請假本世禮語。朝野僉載［四ノ十六丈］云、權龍襄不知忌日、謂府史曰、何名私忌。對曰、父母忌日請假、獨坐房中不出。襄至日於房中靜坐。有青狗突入、龍襄大怒曰、衝破我忌。

（本多道隆）

【六八五】暫假

①請假亦曰暫假。謂暫時請假也。

②敕修清規［下一ノ六丈］維那云、或有他緣、或暫假出入、將戒臘簿假簿堂司須知簿、親送過客司令攝之。

③雲臥紀談［廿九丈］云、眞淨和尚住寶峰日、洪明一祖、同在侍寮。祖請暫假、眞淨不許。及上巳日、呼俱侍行。爲寶蓮莊主具飯。眞淨題偈于壁曰、元符二年三月三、春餅撮餤桐飯兼。眞淨來看信道者、洪明一祖相隨參。祖匿笑、謂同列曰、元來老和尚、以我名厠於偈。故不給假也。

（本多道隆）

【六八六】寮假

①寮假［敕鈔十一ノ十三丈］、書上中下、限在十五日。

②清拙小清規［五十二丈］云、浴佛在近、沙彌喝食、不可請假病假寮假。

（本多道隆）

【六八七】病假

①忠曰、爲養病請假者。〈見寮假處〉。

②幻住清規［五十丈］云、忽遇病緣、宜白之公界、移單屏處。〈乃至〉。病或少間、當具威儀、謝直病人、歸堂參假。

（本多道隆）

【六八八】參假

①凡暫假者、不過十五日而再歸堂曰參假。［敕鈔十一ノ十三丈］若過十五日則抽籍［南禪規下ノ六十七丈］。故初出外爲起單、非請假也、若歸則可再行掛搭禮。故不可言參假矣。

②　忠曰、今時新依栖某寺曰參假訛也。須稱掛搭。

③清拙小清規［略ノ十丈。廣ノ五十三丈］云、參假僧、無維那寮先請假禮者、不可免參。維那照了。

④瑩山清規［下］云、不請假而起單人、不可免再參假。　又［上ノ四丈］云、或爲請假參假參禪白事、詣方丈及諸寮首座等寮、不拘時候、必搭袈裟也。

⑤　雪巖欽禪師録［上ノ四十六丈］普說云、頓起鄉念、且請假歸鄉。自此一放、都放了也。兩月後、再來參假、又却從頭整頓。

⑥　忠曰、過六十日再來、亦曰參假。依清規非禮。

⑦住持亦有參假。　虎丘隆禪師録［十八丈］參假上堂云、病起雲山草木秋、浮華世事謾悠悠。從來萬法不爲侶、何似韶陽六不收。喝一喝、下座。

⑧　參假本世禮語。　戴植［郛十四］鼠璞［十三丈。○退朝說見垂說五參上堂］云、唐文武職事官、九品以上、望朔朝。文官五品以上、及兩省供奉監察御史員外太常博士、日朝爲常參。武官三品以上、三日一朝爲九參。五品以上、及折衝當番、五日一朝爲六參。三日不趁常參、即橫行參假。時多御宣政、正衙立仗、廊飱而退。

（本多道隆）

【六八九】分散

①大衆一同退去、曰分散。

②臨濟玄禪師録云、徑山有五百衆、少人參請。師到徑山、裝腰上法堂、見徑山。徑山方擧頭、師便喝。徑山擬開口、師拂袖便行。尋有僧問徑山、這僧適來有什麼言句、便喝和尚。徑山云、這僧從黄檗會裡來。你要知麼、且問取他。徑山五百衆、太半分散。

（本多道隆）

【六九〇】得度

①忠曰、落髮爲沙彌、此謂得度。蓋生死比海、今超之到彼岸。故言度。因中説果也。

②增壹阿含經［十四ノ十二丈］云、佛在道場樹下、初得佛作是念。羅勒迦藍、諸根純熟、應先得度。空中天曰、已死。復念、鬱頭藍弗、先應得度。空中天曰、已死。世尊便往波羅奈國、度阿若拘隣等五人。

（本多道隆）

【六九一】試經得度

①佛法金湯編［七ノ八丈］云、唐中宗神龍二年八月、詔天下、試童行經義挑通無滯者度之。〈唐史〉。試經度僧始此。

②編年通論［十七ノ七丈］云、唐肅宗至德二年、聽白衣能誦經五百紙者度爲僧。

③佛祖統紀［五十二ノ九丈］云、宋仁宗詔試天下童行。誦法華經中選者得度。參政宋綬夏竦監試。

④　又見簿券類祠部牒處。

⑤　歐陽修［鄂四十］歸田録［一ノ十五丈］云、宋宣獻公綬、夏英公竦、同試童行誦經。有一行者、誦法華經不過。問其習業幾年矣。曰十年也。二公笑、且閔之。因各取法華經一部誦之。宋公十〈一作五〉日、夏公七日、不復遺一字。人性之相遠〈一有也字〉如此。

（本多道隆）

【六九二】懺悔

①敕修清規［下一ノ廿三丈］沙彌得度云、戒師云、汝今至誠隨我懺悔。擧云、我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡。從身口意之所生、一切我今皆懺悔。

②華嚴經疏［廿五ノ二丈］清凉鈔云、懺者、梵云懺磨、此云請忍。悔即此方。體是惡作、厭先過失、求請三寶、忍受悔過。單云悔者、非是六釋、合二即是依主。

③根本説一切有部毘奈耶［十五ノ十五丈］音釋云、言懺摩者、此方正譯當乞容恕。容忍收謝義也。若觸誤前人、欲乞歡喜者、皆云懺摩。無問大小、咸同此説。若悔罪者、本云阿鉢底提舍那。阿鉢底是罪、提舍那是説。應云説罪。云懺悔者、懺是西音、悔是東語、不當請恕、復非説罪。誠無由致。

④毘奈耶雜事［三十三ノ九丈］義淨注云、懺謝。所言懺者、梵云懺摩。是謂容恕義。後人加悔、喚爲懺悔。此即與説罪義不同也。

⑤　義淨言後人加悔、不然。經律中皆有懺悔字。

⑥四分律［五十八ノ十一丈］毘尼增一法云、佛告比丘言、汝自懺悔。於我法中、能至誠如法懺悔者、便得增益。汝懺悔應生厭離心。汝比丘、至誠如法懺悔、我爲受之。

⑦合部金光明經［二ノ六丈］懺悔品云、願當受我誠心懺悔、令我恐懼、悉得消除。

（本多道隆）

【六九三】登壇受戒

①禪苑清規［一ノ一丈］云、三世諸佛皆曰出家成道。西天二十八祖、唐土六祖、傳佛心印、盡是沙門。蓋以嚴淨毘尼、方能洪範三界。然則參禪問道。戒律爲先。既非離過防非、何以成佛作祖。受戒之法、應備三衣鉢具、并新淨衣物。如無新衣、浣染令淨、入壇受戒。不得借借衣鉢。一心專注、愼勿異緣。像佛形儀、具佛戒律、得佛受用、此非小事。豈可輕心。若借借衣鉢、雖登壇受戒、並不得戒。若不曾受、一生爲無戒之人。濫厠空門、虛消信施。〈云云〉。

（本多道隆）

【六九四】納（ナッ）戒

①傳燈録［十ノ十四丈］趙州諗禪師章云、從諗禪師、曹州郝鄉人也。姓郝氏。童稚於本州扈通院、從師披剃。未納戒、便抵池陽、參南泉。〈云云〉。

②　虛堂録納牌普説擧之、作詣南泉請戒。

（本多道隆）

【六九五】謝戒

①敕修清規［下一ノ廿六丈］沙彌得度云、俟他時登壇受戒。謝戒詞云、某等獲登戒品、濫厠僧倫。仰荷庇庥、特此拜謝。答云、宿承佛記、僧戒圓成。堅忍受持、力扶宗教。

②傳燈録中邑恩禪師章云、仰山初領新戒、到謝戒。師見來、於禪床上拍手云、和和。仰山即東邊立、又西邊立、又於中心立、然後謝戒了、却退後立。

（本多道隆）

【六九六】白四羯磨

①忠曰、如沙彌得度、戒師先云汝應受某戒、白也。次三説某戒相、汝能持不、三羯磨也。通初白名白四羯磨。翻譯集［四ノ卅八丈］羯磨飜業、或所作、或辨事、或作法。

②宗覺六物纂註［一ノ卅三丈］云、就衆法有三。一者單白、事或輕小、或常所行、或是嚴制、一説告僧、便成法事。二者白二、由事參涉、義須通和。一白牒事告知、一羯磨量處可不、便辨前務。通白及羯磨、故云白二。三者白四。受戒、懺重、治擧、訶諫、事通大小、情容乖舛、自非一白告知、三法量可、焉能辨得。以三羯磨、通前單白、故云白四。〈單白有三十九、白二有五十七、白四有三十八。三位八品、総數則有一百八十四種羯磨〉。

③四分律藏［五十八ノ一丈。○又十誦五十二］云、佛告諸比丘、有三羯磨、攝一切羯磨。何等三。白羯磨、白二羯磨、白四羯磨、是爲三羯磨。

④十誦律［六十ノ七丈］云、白者白衆是事。故名白。有僧事、初向僧説。故名白。白羯磨、受具足戒、布薩説戒、自恣等、是名白羯磨。白二羯磨者、若白已、一唱説。如是白二羯磨、是名白二羯磨。白四羯磨者、若白已、三唱説。是三羯磨并白爲四、是名白四羯磨。

⑤　又見雜心論［三］、行事鈔［上］等。

⑥慧苑華嚴音義［二ノ五丈］云、羯磨、此云辨事。謂諸法事、由茲成辨也。

（本多道隆）

禅林象器箋　巻第十

神京妙心龍華沙懣道忠無著甫輯

○禮則類

四分律［四十ノ十五丈］云、佛告比丘云、何攝持威儀。比丘若出若入、屈伸俯仰、執持衣鉢、若飲若食、若服藥、大小便利、若眠若覺、若來若去、若坐若住、若睡若覺、若語若默。常爾一心、是謂比丘攝持威儀。

（藤田宗裕）

【六九七】禮拜

①道宣歸敬儀［遍真中ノ一丈］云、禮者履也、敬而已矣。經云、恭敬塔廟、謙下比丘者是也。

②　禮者履也、出説文。敬而已矣、出孝經［疏六ノ七丈］廣要道章。經云、出法華。

③六祖法寶壇經［下ノ二丈］云、僧法達、常誦法華經。來禮祖師、頭不至地。師訶曰、禮不投地、何如不禮。〈乃至〉。聽吾偈曰、禮本折慢幢、頭奚不至地。有我罪即生、亡功福無比。

④大鑑小清規［四丈］云、禮拜之法、自謙之法。坐具不敢全展。須上兩角摺轉些子。若新爲僧、坐具但半展兩重狹而禮拜。又拜時合掌低頭問訊。次先兩手托地。次兩膝至地、低腰妥身、仰展開兩掌。頭額至地、兩手兩膝皆至地。名五體投地。又拜佛之法、仰開兩掌、接承如來雙足。叩頭而禮拜佛也。故曰頭面接足禮。今此方人、以兩手捏拳。不知何義。

又云、禮拜之法。低頭問訊。先兩手掌至地、徐徐五體投地、低腰伸手掌而拜。有一等執拗之人、禮拜時、先跪兩膝至地、次方兩掌至地。威儀不雅。如俗人不知次第。此大訛謬之人。不依眞正法度、誤後來、錯習惡相之甚也。

⑤大鑑展坐具法、見服章類、坐具處。

⑥飜譯名義集［四ノ四十六丈］云、那謨悉羯羅、此云禮拜。今謂禮之與拜、名有通局長短。經曰、禮者履也。進退有度、尊卑有分、謂之禮。禮記云、禮也者猶體也。體不備、君子謂之不成人。故孔子云、非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。是則凡所施爲、皆須合禮。此顯禮名通也。白虎通云、人之相拜者何。所以表情見意、屈節卑體、尊事者也。拜之言服也。故周禮明九拜。此顯拜名局也。若依釋氏、如南山云、四儀若無法潤、乃名枯槁衆生。故天台明四種三昧之法。是知四儀法則名禮。身業恭敬名拜。此亦禮通拜局。今此飜譯、禮即是拜。故大論［二百巻三丈］云、禮有三種。一者口禮。二者屈膝、頭不至地。三者頭至地、是爲上禮。一口禮者、如合掌問訊也。觀音義疏云、此方以拱手爲恭、外國以合掌爲敬。手本二邊、今合爲一。表不散誕、專至一心。僧祇律［三十五巻十四丈］云、禮拜不得如瘂羊、當相問訊。爾雅云、訊言也。地持論云、當安慰舒顏、先語平視、和色正念、在前問訊。善見論云、比丘到佛所問訊云、少病少惱安樂行不。二屈膝者、即互跪也。音義指歸云、不合云胡跪。蓋梵世遺種、居五竺間。蔥嶺之北、諸戎羌胡。今經律多翻互跪。以三處翹聳故名互跪。即右膝著地也。涅槃疏明三義。一右膝有力、跪能安久。二右膝有力、起止便易。三右膝躁動、著地令安。若兩膝著地、則名長跪。毘奈耶云、尼女體弱、互跪要倒。佛聽長跪。三頭至地者、即五體投地。故大論［百巻ノ四丈。又十巻十五丈

有此意〕云、人之一身、頭最爲上、足最爲下。以頭禮足、恭敬之至。輔行〔二之二ノ六丈〕云、準地持阿含、皆以雙膝雙肘及頂至地、名五體投地。亦名五輪、五處圓故。

⑦ 華嚴經〔廿五ノ四丈〕十廻向品疏云、勒那三藏説七種禮。今加後三、以成圓十。一我慢禮、謂依次位立、無敬心故。二唱和禮、高聲喧雜故。此二非儀。三恭敬禮、五輪著地、捧足殷重故。四無相禮、入深法性、離能所故。五起用禮、雖無能所、而禮不可禮之三寶。一一佛前皆影現故。六内觀禮、但禮身中法身佛故。七實相禮、無内無外、同一實故。八大悲禮、前雖有觀、未顯爲生。今一一禮、普代衆生故。九総攝禮、總攝前六爲一觀故。十無盡禮、入帝網境、若佛若禮、重重無盡故。　鈔禮佛十重、初二非儀。令其知非故辨之耳。三通權小。四是始教、順空義故。五是終教、通事理故。六七頓教、但禮心佛、無禮禮故。八通終教、同教一乘故。後三合成圓教。八是能禮一、具一切故。九融深淺、事隨理融、事事無礙故。而言攝前六、二非儀故。十重重無盡故。下經云、一毛孔中悉明見、不思議數無量佛。一切毛孔皆如是、普禮一切世間燈。擧身次第恭敬禮、如是無邊諸最勝。亦以言辭普稱讚、窮盡未來一切劫。一如來所供養具、其數無量等衆生。又普賢行云、於一微塵中、見一切諸佛菩薩衆圍繞。法界塵亦然。一一如來所、一切刹塵禮等。若依此禮、一禮則無有盡。功德豈可量哉。

⑧ 忠曰、勒那七禮廣説、如法苑珠林〔廿八〕致敬篇、及道宣歸敬儀〔通真下ノ三十八丈〕。

⑨ 西域記〔二ノ九丈〕云、致敬之式、其儀九等。一發言慰問。二俯首示敬。三擧手高揖。四合掌平拱。五屈膝。六長跪。七手膝踞地。八五輪俱屈。九五體投地。凡斯九等、極唯一拜。跪而讚德謂之盡敬。遠則稽顙拜手。近則舐足摩踵。

⑩ 智度論〔十ノ十五丈〕云、何名頭面禮足。答曰、人身中、第一貴者頭。五情所著而最在上故。足第一賤。履不淨處、最在下故。是故以所貴禮所賤、貴重供養故。復次有下中上禮。下者揖、中者跪、上者稽首。頭面禮足、是上供養。以是故、佛毘尼中、下座比丘、兩手捉上座兩足、以頭面禮。　又〔十三ノ卅四丈〕云、天竺以捉足、爲第一恭敬。

⑪ 忠曰、清拙仰開兩掌、接承如來雙足。〈止此〉。固無間然、而智度論已言、毘尼中、兩手捉上座兩足。〈止此〉。今且引律、證覆開兩掌、執觸前人足上。

⑫ 毘奈耶雜事〔十一ノ四丈〕云、難陁執持衣鉢、入城乞食。巡至鹿子母家、時毘舍佉見彼容儀光飾、便起淨信、禮其雙足。將手觸著、彼身柔輭。女是觸毒。近便損害難陀、便起染心。〈畧鈔〉。

⑬ 又十誦律〔三十八ノ十二丈〕云、爾時諸比丘、以油塗足上。是國多塵土、著比丘脚。諸居士婦、以兩手接比丘足作禮、然後洗手捉鉢下食。比丘言、先洗手已捉鉢。答言、已洗。若汝不油塗足者、當有何過。佛見婦呵責、還僧房語比丘、從今不應油塗足上、入白衣家。

⑭ 又十誦律〔六十三ノ十四丈〕云、毘舍法鹿子母、信衆僧、兩手接足、頭面作禮。

⑮ 釋氏要覧〔中ノ二丈〕云、長阿含經云、二肘二膝頭頂、謂之五輪。輪者、圓轉之義也。亦云五體。凡禮拜、必先並足正身、合掌俯首、以手褰衣〈衣即袈裟也。五百問云、不褰三衣礼拜、得衆多罪〉、先以右膝著地、次下左膝、以二肘著地、舒二掌過額、承空示有接足之敬也。以頭在地、良久方成一拜。若以中拇指相拄、或以掌承面、或捺地、並非儀也。　又〔中ノ卅七丈〕云、大方廣寶篋經、智燈聲聞、問文殊言、云何禮佛。文殊言、若見法淨、名見佛淨。若身若心、不低不昂、正直而住、不動不揺、其心寂靜、行寂靜行、是名禮佛。

⑯ 萬善同歸集〔上ノ廿五丈〕云、若行道禮拜時、不生殷重、既無觀慧。又不專精、雖身在道

場、而心緣異境、著有爲之相、迷其性空、起能作之心、生諸我慢、不了自他平等、能所虛玄、儻涉茲倫、深當客舂磨牛責。

⑰ 野客叢書〔九ノ十六丈〕云、古者拜禮、非特首至地、然後爲拜也。凡頭俯膝屈手動、皆謂之拜。按周禮辨九拜之儀。〈云云〉。肅拜但俯下手、即今之揖也。何嘗專以首至地爲拜邪。乃知禹聞善言則拜。如揖之類是也。豈僕僕之謂哉。

⑱ 周禮九拜、解見頓首處。

⑲ 朱子語録〔西峯四ノ中ノ十二丈〕云、古人之拜、正如今道士拜、二膝齊下。唐人先下一膝、謂之雅拜。

⑳ 李濟翁資暇録〔廿一丈。〇孚十四〕云、夫拜者、禮之特、所以申敬恭之儀。故周禮有稽首、頓首、振動、吉、凶、奇、褒、肅、九等之拜、以示威靈而觀容止也。其非至親行卑者拜、則接捧示止之、不敢當之意。今卑謙大過、反不敢接捧、而鞠躬側立惕受、翻令前人得以盡禮深拜。又書狀弔慶辭竭、並削去拜字、以敬尊官、都乖古風。

㉑ 周祈名義考〔六ノ五丈〕云、首與要平爲拜。荀子〔十九ノ五丈〕平衡曰拜。平衡謂磬折。正首與要平。〈荀子注、首與腰、如衡之平〉。

（藤田宗裕）

【六九八】再拜

① 史記〔四ノ九丈〕周本紀云、商人皆再拜稽首。武王亦答拜。

② 通鑑前編載之、作載拜稽首。

③ 大鑑附録〔廿七丈〕云、中呉承天南楚師悦載拜。

④ 正字通云、載與再同。小雅賓載手仇。

⑤ 忠曰、釋氏要覧、再拜爲俗法。〈見三拜處〉。然師悦有載拜。

⑥ 白虎通〔三ノ三十八丈〕姓名篇云、人所以相拜者何。所以表情見意、屈節卑體、尊事之者也。拜之言、眼也。所以必再拜何。法陰陽也。尚書曰、再拜稽首也。

⑦ 忠曰、尚書云、禹拜稽首、皐陶拜手稽首等。無再之言。

（藤田宗裕）

【六九九】三拜

① 敕修清規〔上一ノ廿丈〕聖節云、出班上香。〈乃至〉。大衆同展三拜。

② 廣燈録〔六ノ十四丈〕菩提達磨章云、命門人曰、汝等盍各言乎。〈乃至〉。二祖出禮三拜。依位而立。師云、汝得吾髓。

③ 釋氏要覧〔中ノ三丈〕云、俗中兩拜者、蓋法陰陽也。今釋氏以三拜者、蓋表三業歸敬也。智論云、内式禮拜、大約身口業也。佛法以心爲本、以身口爲末。故三拜爲禮數。

④ 南海寄歸傳〔三ノ十三丈。〇敕鈔一ノ廿丈引〕云、凡禮拜者、意在敬上自卑之儀也。欲致敬時、及有請白、先整法衣、〈乃至〉。足跟雙竪、脊項平直、十指布地、方始叩頭。然其膝下、迴無衣物。復還合掌、復還叩地。慇懃致敬、如是至三。必也尋常一禮便罷。中間更無起義。西國見爲三拜、人皆怪之。〈乃至〉。如經律云、來至佛所、禮佛雙足、在一邊坐、不云敷坐具、禮三拜在一邊立。

⑤ 祇洹圖經〔下ノ十一丈〕受戒登壇儀云、當佛禮三拜、運想請十方現在諸佛、諸大菩薩等。又〔十二丈〕云、面北禮佛、三拜。

⑥ 又法苑珠林［五十二ノ九丈］引西國寺圖云、行至佛所、禮三拜竟、圍繞三匝、唄讚三契。禮佛既已、方至僧房。房外一拜、然後入見上座。次第至下、各設三拜。僧多一拜。

⑦ 忠曰、若據此説、則天竺非無三拜法。

⑧ 外典亦有三拜。 國語［十七ノ五丈］云、蔡聲子曰、子尚良食、吾歸子。湫擧降三拜、納其乘馬。 註拜善言也。

⑨ 夷俗亦有三拜法。 宋史［傳二百四十八巻十六丈］外國傳云、闍婆國王、椎髻、戴金鈴、衣錦袍、躡革履、坐方牀。官吏日謁、三拜而退。

（藤田宗裕）

【七〇〇】大展（テン）三拜

① 敕修清規［上二ノ三丈］告香云、參頭同衆、問訊挿香、各大展三拜。 又［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云、參頭至聖僧前排立。參頭燒香、同衆大展三拜。

② 睦州蹤禪師録［十四丈］云、問僧、莫是從河北來麼。僧云、某甲近離江西。師云、大展坐具、禮三拜著。其僧禮拜了、便出去。

③ 大隋眞禪師録［古宿三十五ノ十二丈］云、投子和尚呼侍者令裝香、大展坐具、望西川大隋山、遥禮三拜。

④ 聯燈會要［十五ノ十一丈］保寧勇禪師章云、少習天台教、後更衣謁雪竇顯禪師。顯熟視之、呵曰、殃祥座主。師氣不平。發憤下山、望雪竇山、大展坐具、禮三拜。誓曰、我此生行脚參禪、名不過如雪竇、誓不歸鄉。

⑤ 五祖演和尚［古宿二十ノ十七丈］太平録上堂云、將四大海水爲一枚硯、須彌山作一管筆。有人向虚空裏、寫祖師西來意五字、太平下座、大展坐具、禮拜爲師。

⑥ 虚堂愚和尚録［四ノ四十一丈］普説云、疎山云、若教某甲道、須還師資之禮始得。香嚴乃下座、大展坐具、禮三拜、準前問。

⑦ 南堂欲禪師開福録［卅一丈］云、衆中忽有忍俊不禁底、出來掀倒禪床、喝散大衆、山僧大展坐具、禮他三拜。

⑧ 忠曰、或解、展開手也。將合掌時、先大開展兩手於左右、却合掌。此謂大展矣。然此説無據。諸録已言、大展坐具。非開手明矣。禪苑清規［一ノ十四丈］入室云、有處大展、有處觸禮。〈止此〉。此亦以觸禮對大展、則展開坐具義爲正焉。若大展開手拜者、大儀式時然。表恭恪也。

⑨ 敕修清規［下一ノ廿六丈左］沙彌得度云、沙彌挿香、大展三拜。

⑩ 解者［鈔十ノ廿八丈］曰、侍者小師拜、不全展坐具。然今言大展也。

⑪ 忠曰、大鑑小清規云、禮拜之法自謙。坐具不敢全展、須上兩角摺轉些子。若新爲僧、坐具但半展、兩重狹而禮拜。〈止此〉。解者憑之。恐清規失辭。

（藤田宗裕）

【七〇一】同展（セン）三拜

① 敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、出班上香、大衆同展三拜。

② 備用清規聖節云、出班畢、大衆同展三拜。此拜佛、爲告天祝壽也。

③ 忠曰、凡聖節二祖三佛會、皆有此規。行者先高聲喝云、大衆列拜。〈止此〉。大衆一同展坐具三拜。〈展有二切。一旃上聲、一知輦切、見次下兩展三禮處〉。

（藤田宗裕）

【七〇二】九拜

①舊説［敕鈔五ノ廿七丈右首書］云、禪林九拜者、展坐具三拜者三度、遂成九拜。

②敕修清規［上二ノ四十一丈］當代住持受請云、專使挿香、大展三拜、進前云、〈某蒙山門使令、擧屈尊嚴、得奉慈顔。下情不勝感激之至。〉又三拜詞云、〈即日時令謹時、共惟新命堂頭大和尚、尊候起居萬福。〉復三拜收坐具。

③村寺清規［敕鈔十一ノ十一丈引］行脚云、行脚須見尊宿。見尊宿、須預見侍者託通名。候見、合致九拜敬。乃請尊宿趺坐、當中間訊、所懷香雙手把進、挿香爐中。退展坐具禮三拜、即穿鞋自坐具左、以進尊宿坐右、鞠躬叉手云、某久仰道風、此日幸遂展拜、下情不勝多感之至。復側身、顧尊宿、歸坐具、再禮三拜。又進云、即日共惟、某山堂上老師大和尚、尊候動靜多福。復退禮三拜、合掌問訊。尊旨就坐喫茶。茶罷、復出香爐前問訊、謝茶而退。

④律苑事規［五ノ一丈］云、大展九拜詞語、先敘事、次寒暄、並同禪規。

⑤右證三拜三度而成九拜。

⑥禪苑清規［一ノ五丈左］掛搭云、入室弟子、洎法眷卑行、並大展九拜。

⑦備用清規［三ノ十一丈］結制行禮云、方丈客頭行者、進罣罳椅子、住持即趺坐、侍者一班、進前挿香九拜。次辨事小師、挿香九拜。　又開堂祝聖［四ノ八丈。〇清拙清規四丈引用之］云、進罣罳椅子據坐、侍者挿香、大展九拜。小師挿香、大展九拜。

⑧敕修清規［上二ノ九丈］、爲行者普説云、參頭緩聲喝云、〈不審。〉衆低聲和畢、同禮九拜。又請益［下一ノ四十四丈］云、侍者引入住持前、問訊挿香大展九拜。乃至諦聽垂誨畢、進前挿香、大展九拜。謂之謝因緣。詳參請類請益處。

⑨雪巖欽禪師録［上ノ四十五丈］普説云、聞天目和尚久侍松源、是松源的子。必得松原説話。移單過淨慈拄搭、懷香詣方丈請益、大展九拜。

⑩聖一國師年譜云、弘安三年庚辰、師七十九歳。無傳〈嗣徑山珏荊叟。〉、自越後來、挿香作禮。師曰、最後相見。須致九拜、拜畢而坐。

⑪永平元和尚［眼ノ左五十三ノ三丈］曰、結解冬年、及旦望、參師燒香九拜或十二拜。若請益、則不必用九拜十二拜。或觸禮一拜、或三拜、或稽首拜、或六拜。其一拜三拜六拜、竝額叩地、此名頓首拜。

⑫永平清規［五丈六丈］典座教訓云、齋粥辨了、典座搭袈裟、展坐具、先望僧堂。焚香九拜了、乃發食也。日本國僧食之法、先徳未記僧食九拜之説、未夢見在。

⑬唐段成式續酉陽雜俎［五ノ五丈］云、長樂坊安國寺彌勒像、法空自光明寺移來、初移像時、索大如虎口、數十牛曳之、索斷不動。法空執爐、依法作禮九拜。像身忽迸分、不終日、移至寺焉。

⑭人天寶鑑［七十五丈］云、道曇法師、凡閲經、炷香九禮、趺坐良久、然後開帙。常訓諸徒曰、夫窺聖教、意在明宗。若不端己處心、爭到如來境界。

⑮忠［又敕鈔五ノ九丈、又廿七丈。〇又十一ノ十二丈］曰、面墻之徒妄謂、禪林門狀及文翰、言九

拜非也。夫周禮有九拜。此依位高下、分九品拜也。又佛祖忌九拜、乃三回三拜也。豈有一時爲九拜者哉。故今略録數證。

⑯敕修清規［下二ノ尾］附一山書云、了万九拜、復前智者堂上和尚、雲翁老師兄尊几。

⑰敕修清規［下二ノ尾］附一山書云、了万九拜、復前智者堂上和尚、雲翁老師兄尊几。

⑱雪峯存禪師録、二十四景総詩尾云、當代住山、遠孫比丘、智明九拜書。

⑲南堂欲禪師録［四ノ題跋七丈］松源老祖家書跋云、頓首九拜、謹誌乎下方云。

⑳月江印禪師録［題跋五丈］應菴與烏巨書跋云、三復感慨、焚香九拜而爲之書。

21清拙澄禪師録［日本ノ五ノ祭文ノ四丈］示寂前一日、預代小師作祭文云、謹以湯茗果蔬之儀、九拜致祭于眞慈。　又附録［廿五丈左］瑶首座〈宇玉淵。大元國人。〉、悼清拙偈後云、小師堅瑶九拜。　又［卅一丈］祖柏和瑶首座悼偈序云、梓末比丘祖柏九禮。

22明極俊禪師録［偈頌一丈］附寶屏雲長老詩序云、口占數語、尚希慈盻。門人大雲九拜。

（花岡博芳）

【七〇三】佛祖忌九拜

①敕修清規佛降誕云、住持上香三拜、不收坐具、進前上湯進食。請客侍者遞上。燒香侍者、棒置于几畢、復位三拜、再上香、下蹴點茶、又三拜收坐具。　又［上一ノ卅四丈］達磨宿忌云、住持上香三拜、不收坐具、上湯退身三拜、再進前問訊揖湯。復位三拜、收坐具。

②　餘忌例同、不用煩録。

③　舊説［敕鈔二ノ廿八丈］曰、九拜法、諸規相同。

④　惟建仁寺所講、上香三拜、次上湯上食下蹴點茶畢三拜、次進揖三拜、頗異餘刹。東福寺進食之次、獻果子、建仁點茶之次、獻果子。蓋果子是爲茶子之謂歟。中華則供具外、無更備果、而日本則更備果矣。

（花岡博芳）

【七〇四】祖忌十八拜

①敕修清規［上一ノ卅五丈］達磨忌云、住持上香三拜、不收坐具。進爐前上湯上食、請客侍者供遞。進爐前上湯上食、請客侍者供遞。俟燒香侍者、就祖位側、捧置几上、退就位三拜。仍進前燒香、下蹴畢、三拜收坐具。鳴鼓講特爲茶、如湯禮。

②　忠曰、特爲湯宿忌記之。故不煩重録。特爲湯有九拜。〈佛祖忌九拜録之。〉今亦如此。合前成十八拜。

③　十八拜、兩回九拜也。先住持上香歸、行者展席、住持三拜、不收坐具。進上湯進食、歸三拜。進上香下蹴、歸三拜收坐具、行者捲席。復住持進上香歸、行者復展席、住持三拜、不收坐具。行者鳴茶鼓、住持進上茶、歸三拜。又進深揖、歸三拜。行者止鼓、住持收坐具、行者捲席。

（花岡博芳）

【七〇五】百拜

①希叟曇禪師正宗贊序云、寶祐甲寅、西蜀比丘紹曇百拜書于靈鷲放山室。

②　忠曰、百拜直爲一百度禮拜也。或又但言數多耳。不必禮拜百度矣。論衡儒增篇云、百與千數之大者也。實欲言十則言百、百則言千矣。是與書言協和萬邦、詩曰子孫千億、

同一意也。

③ 儒亦有百拜。　禮記［注疏卅八ノ五丈］樂記云、壹獻之禮、賓主百拜。　疏謂、士之響禮、唯有壹獻。言所獻酒少也、從初至末、賓主相答而有百拜。言拜數多也。

④ 明［續孚五］聖君初政記［一丈］曰、洪武三年五月、諭中書省曰、今人書劄、多稱頓首再拜百拜、非實禮也。宜定其式。凡致書于尊者、稱端肅奉書、答則稱端肅奉復。

⑤ 儒論再拜禮重。　野客叢書［唐本廿九ノ十三丈］云、漫録曰、晏元獻與兄手帖曰、殊再拜。莊客至、知大事禮畢云云。此外希順變。不備。殊再拜。十一哥十一嫁。僕家有富鄭公一帖、正與晏元獻一同、前後皆云、弼再拜。幾叔幾嬸。乃知、前輩以再拜二字、施於尊長、不肎輕用。而今人或用此二字、則以爲輕己。雖平交亦不敢、況兄與叔乎。

⑥ 儒有四拜。　李［鄂十三］涪刊誤［十六丈］云、夫郊天祭地、止於再拜。其禮至重、尚不可加。今代婦、謁姑嫜、其拜必四。予輒詳之、婦初再拜。次則跪獻衣服文史、承其筐篚、則跪而受之。常於此際、授受多誤。故四拜相屬。因爲疑。又婦拜夫家長老、長老答之、則又再拜。即其事也。士林威儀、豈可傚諸下俚耶。謁拜姑嫜、宜修典故。再申揷地。〈周禮婦拜揷地〉。其儀可觀。

⑦ 儒有八拜。　邵伯温［必十五］聞見前録［十卷二丈］云、韓魏公留守北京、李稷以國子博士爲漕、頗慢公。公不爲較、待之甚禮。俄潞公代魏公爲留守。未至揚言云、李稷之父絢、我門下士也。聞稷敢慢魏公。必以父死、失教至此。吾視稷猶子也。果不悛、將庭訓之。公至北京、李稷謁見、坐客次。久之公著道服、出語之曰、而父吾客也。只八拜。稷不獲已。如數拜之。

⑧ 儒天子前有二十四拜。　水滸傳［九十九ノ十六丈］云、宋江等、朝覲東京。侍御史、引至丹墀玉階之下、宋江盧俊義爲首、上前八拜、退後八拜、進中八拜。三八二十四拜。揚塵舞蹈、山呼萬歲。

⑨ 儒有萬拜。　羣談採餘［九卷］諂媚類［六丈］云、羅志仁姑蘇筆記、賈似道當國時、浙曹朱浚、每有劄子白事、必稱某萬拜復。時人謂之朱萬拜。浚晦翁曾孫也。〈餘冬序録［二十三ノ七丈］亦載之云、朱浚、字深源〉。

⑩ 趙世顯客窓隨筆［四ノ十二丈］云、李涪謂、唐世郊天祭地、止於再拜。其禮至重、不可加。而以婦拜姑章必四、爲非禮。然則彼時、不行四拜也。方干處士、每拜必三、時謂之方三拜。宋朱元晦孫、爲淮東提刑、與顯者書必云萬拜、時謂之朱萬拜。方未免好奇之過。朱則諛佞、喪厥祖風矣。

（花岡博芳）

【七〇六】千拜

① 忠曰、又有千拜者。

② 大寶積經［八十一ノ十四丈］護國會云、福焰王子、即乘吉利意如來光、至如來前、擧身投地、如大樹倒、禮彼如來、一千拜已、説偈。

（花岡博芳）

【七〇七】不住拜

① 永平元和尚［眼ノ五十三ノ四丈］曰、法益之時、亦有不住拜。謂禮拜而不止也。可到百千拜。是皆佛祖之會、所用來拜也。

（花岡博芳）

【七〇八】兩展（セン）三禮

①字彙云、展之輩切。旃上聲。開也。舒也。

②小補韻會［銑ノ五丈］云、展知輩切。舒也。

③舊説［敕鈔五ノ廿八丈］曰、展者、初欲展坐具、師家揶揄止之。故作摺勢。復欲重展、復止之、復作摺勢。然不拜則情不足。故不展坐具、而手持觸地拜而已。　或［敕鈔五ノ廿一丈冠考］曰、展者挿手於坐具也。至第三度、抽之點額而禮。

④　忠曰、或曰、展者、展禮話也。謂叙事寒暄。予謂展固係坐具、初欲展具、師家約免。即不展具、但叙事情。第二展義同。叙寒暄耳。非展禮詞之義。

⑤敕修清規［下一ノ卅三丈左］遊方參請云、起至爐前、兩展三禮謝茶。初展云、某等重承煎點。特此拜謝。下情不勝感激之至。再展云、即日時令謹時、恭惟堂頭和尚尊候起居多福。退身觸禮三拜。　又謝掛搭［下一ノ卅八丈。〇又下二ノ十四丈同之］云、參頭一展坐具、住持展手約免之。即收起。參頭進前云、某等宿生慶幸、獲遂依棲。下情不勝喜躍之至。仍如前退身、香几右手轉、歸位問訊、再展坐具、住持復如前約免、收坐具、再進前云、即日時令謹時。恭惟堂頭和尚尊候起居多福。仍如前轉、歸位問訊、觸禮三拜、住持答一拜。〈又大鑑説、見觸禮處〉。

⑥　忠曰、上來所録、到第三度、觸禮三拜。其三拜、但是三度點額也。然又有第三度眞三拜者。敕修清規［上二ノ十丈］受法衣云、挿香兩展三禮、免則觸禮。〈止此〉。此既免眞三拜。故但觸禮、點額三度也。

⑦校定清規［上ノ三十丈］云、兩展三拜、亦有議論高者。凡前兩展、住持不答拜。只以兩手、作分開勢。蓋彼欲展拜、此以手免之。故彼抽之、彼又展。此又免之。故彼觸拜、則住持亦當觸拜酬之。

⑧僧史略［上ノ十八丈］云、近以開坐具、便爲禮者、得以論之。昔梵僧到此、皆展舒尼師壇、就上作禮。後世避煩。尊者方見開尼師壇、即止之。便通叙暄凉。又展、猶再拜也。尊者還止之。由此、只將展尼師壇、擬禮爲禮之數。所謂菱拜也。如此設恭、無乃太簡乎。然隨方爲清淨者、不得不行也。

⑨祖庭事苑［八ノ十七丈］引僧史略文了云、今叢林尊宿亦行此禮。所未便者、僧方展坐具、即反答一拜。實爲倒置。往往輒謂、一展即當二拜。不知據何、而爲此言。所謂菱者詐也。卑以詐拜、而尊實答之。既重輕之不分。使後世將何以爲法邪。而今而後、愼勿言答拜之禮、以取笑於傍觀。菱祖臥切。

⑩釋氏要覽［中ノ二丈］云、南方以抽坐具爲禮。律檢無文。〈已下引僧史略〉。又云、菱音挫。拜失容。又云詐也。

⑪村寺清規［敕鈔十一ノ十二丈引］叙九拜了云、然今叢林、多只兩展三拜。或謂、昔有梵僧、來參仰山。僧方展、而山怜其遠來、特止之。僧即進前切叙云、久仰道風、意欲展拜。山又止之。僧故只通寒温、而後觸禮三拜。〈云云〉。後世因之、而爲叙見之禮。又或更簡而只觸禮三拜。〈云云〉。但梵僧參仰山之事、清規諸書所不載。後學不知兩展三禮之由。竟昧見尊宿、當九拜之敬耳。

⑫村寺清規［鈔五ノ廿丈］万一山跋云、予初遊方、一尊宿曰、昔仰山有西土僧來參、手展坐具。山挹而辭之、遂通仰參。復欲展禮、山又止。乃通寒温、僧則觸禮三拜。叢林若不本

此説、則此禮無義理。後予任職。衆中睹師徒行禮、其徒方展坐具、而師乃答拜。次日、予詰曰、詎有爲徒者、方展具而師即拜。於理未通。師曰、近代宗師皆然。予擧前話以應。遂以予言爲是。茲事蓋清規所不載。

⑬ 忠曰、僧史略開坐具爲禮、引梵僧縁。通慧博該、必有所據。後世因作梵僧參仰山兩展三禮之説。夫仰山別有梵僧來參縁。乘之傳會矣。宜哉、清規諸書不載。

⑭ 律苑事規〔五ノ一丈〕云、禪規二展三禮。今律規併作大展三拜。詞語、先寒暄、次叙事、一併稱之。住持不答拜。

⑮ 舊説〔敕鈔五ノ十三丈〕曰、兩展陳辭、每展別。初展言某事、再展言起居。

⑯ 舊説〔敕鈔九ノ十五丈右〕云、或規有初展叙時令、異于敕修清規。忠曰、言或規者、指律苑乎。若然則卒見律苑云先寒暄次敍事、謬解爲二展三禮事。而自以爲異餘規。然律苑實以禪規二展三禮事、合爲一箇大展三拜。故拜間不交詞語、拜前一併稱唱之。其語先寒暄、次叙事也。若到大展九拜、則〔又律苑六ノ一丈ニモ如此〕每三拜展詞、其語先叙事、次寒暄。並同禪規。〈九拜處引律苑〉。敕修清規亦一併稱之、則先起居、次叙事。見遊方參請〔下一ノ卅二丈右〕、及謝掛搭〔下一ノ卅九丈右〕。敕修何異律苑耶。舊説〔敕鈔十四ノ卅八丈〕又云、澤山清規、先叙時令。〈止此〉。妄謬惑人。有如此者。備用兩展皆先叙事次寒温、與敕修全同。

⑰ 因録一併唱語法。

⑱ 敕修清規〔下一ノ卅二丈〕遊方參請云、參頭領衆至客司。〈乃至〉。詞云、即日恭惟、知賓尊長禪師、尊候起居多福。久欽道譽。獲奉瞻際。下情不勝感激之至。　又云、知客詞云、移刻恭惟、諸位尊長禪師、尊候起居多福。適承降重、特此拜謝。下情不勝感激之至。

⑲ 一併詞語、先拜、次詞語。　敕修清規〔下一ノ三十九丈〕謝掛搭云、參頭轉身、至爐前、對觸禮一拜、詞云、移刻恭惟、堂頭和尚、尊候起居多福。某等重荷收録。禮合拜謝。茲蒙降尊、下情不勝感激之至。　又云、次揖兩序入、對觸禮一拜、詞云、即刻恭惟、座元都總諸位禪師、尊候多福。某等獲遂依附廼承隆重。下情不勝感激之至。

（花岡博芳）

【七〇九】觸禮

① 見兩展三禮處。

② 舊説〔敕鈔一ノ十丈左〕曰、以頭觸地故云觸禮。　忠曰、以坐具觸地、三叩頭。故云觸禮三拜。

③ 舊説〔敕鈔五ノ十三丈〕曰、觸義未詳。義堂岐陽皆不明説。　忠曰、觸義明見大鑑清規語、亦何疑焉。

④ 大鑑小清規〔三丈〕云、古法、小比丘見大比丘、必須展拜。一問訊、便展坐具、大比丘、堅以手約免之。或以坐具約而免之。小比丘、收摺了、又慇懃必欲展拜。又展坐具、大比丘又堅約免之。小比丘、又收摺了、敬禮之心未息、乃以坐具觸地三而拜之。大比丘、遂答之一拜、此其兩展三拜之本意也。

⑤ 舊説〔敕鈔五ノ十三丈〕曰、觸禮三拜有數説。一曰、三折坐具、當額於其一折面、三叩也。一曰、執坐具正半四折、當額於其上面、三叩也。一曰、前兩展後一拜、合稱三拜。

⑥ 忠曰、第三説非是。敕修清規中、有但觸禮三拜而無前兩展者。

⑦ 敕修清規〔下二ノ十四丈〕、方丈四節特爲首座大衆茶云、首座至住持前謝茶、兩展三禮、初

展。〈云云〉。再展。〈云云〉。退觸禮三拜。住持每一展則約止之、至觸禮則答一拜。

⑧ 舊説［鈔五ノ廿八丈］曰、觸禮如軍中菱拜。〈僧史畧説、見兩展三禮處〉。菱拜、略拜也。軍中負兵器、身禮不自在、故然。　小補韻會［箇匀四丈］云、菱祖臥切。説文拜失容也。禮記［典礼上。○注疏三ノ廿九丈］介者不拜。為其拜而菱拜。朱氏曰、菱猶言有所枝拄、不利屈伸。

⑨ 律苑事規［五ノ一丈］云、原其坐具之制、爲護身護衣故。觸禮之法、頭若至地、身衣有汙、非所宜也。　又［同上］云、禪規觸禮之法、有汚身衣、盡除去之。

（堀野真澄）

【七一〇】觸禮一拜

① 敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云、維那詣書記寮、觸禮一拜稟云、啓建聖節。煩製疏語。書記製畢具草、先呈住持、親送堂司、觸禮一拜、答先禮也。

（堀野真澄）

【七一一】對觸禮

① 敕修清規［上二ノ廿丈］入院云、新命受草賀了、鳴僧堂鐘、領衆躬送前代歸寮、對觸禮一拜。

（堀野真澄）

【七一二】對轉觸禮

① 備用清規［六ノ六丈］、侍者進退云、當日批下堂司、請舊侍者茶、送歸衆寮。維那上首對觸禮一拜、對轉觸禮一拜、送維那出門。

② 敕修清規［下一ノ十五丈］侍者進退云、與維那交互對觸禮一拜。〈止此〉。即是對轉觸禮也。

③ 備用清規［八ノ五丈］、小挂搭歸堂云、參頭同到衆寮。維那上間入、對觸禮一拜、對轉觸禮一拜。

④ 敕修清規［下一ノ卅六丈］小掛搭歸堂云、維那居上間、對觸禮一拜、轉下間又對觸禮一拜。

（堀野真澄）

【七一三】普觸禮

① 敕修清規［下一ノ卅六丈］諸方名勝掛搭云、凡欲求掛搭、次日赴茶。罷稟云、某等爲生死事大、特來依棲。伏望収録。普觸禮一拜。

② 備用清規［六ノ六丈］、侍者進退云、受請人進前、普觸禮一拜。

③ 忠曰、衆人一時觸禮、故曰普也。

（堀野真澄）

【七一四】普同作禮

① 敕修清規［下二ノ十一丈左］結制禮儀云、行者喝、云大衆普同作禮。觸禮三拜。

② ［敕鈔十四ノ卅丈］解者曰、大衆各各互禮也。

（堀野真澄）

【七一五】丈夫拜

①雪峯存禪師録［下ノ十丈］云、師領徒南遊。時黄涅槃、預知師至、搘策造前途接之、抵蘇谿邂逅相遇。師遂問曰、近離什麽處。槃云、離辟支巖。師云、巖中還有主麽。槃以竹策叩師簷。師乃出簷相見。槃云、曾郎萬福。師遽展丈夫拜。槃亦作女人拜答。師云、莫是女人麽。槃又設兩拜。〈云々〉。

（堀野真澄）

【七一六】女人拜

①傳燈録［八ノ七丈］南泉願禪師章云、師與歸宗麻谷、同去參禮南陽國師。師先於路上畫一圓相云、道得即去。歸宗便於圓相中坐、麻谷作女人拜。師云、恁麽即不去也。歸宗云、是什麽心行。師乃相喚廻、不去禮國師。〈又見夫拜處〉。

②傳燈［八ノ五丈］一山解云、女人拜、女人立拜、屈膝而已。又曰、以兩手當胸前、些子鞠躬。

③事物紀原［九ノ十六丈］云、禮曰、男拜則尚左手、女拜則尚右手。又居喪之禮、男拜稽顙、女子則否。是古者男女之拜一也。古詩曰、長跽故夫前。五言之作、自漢李陵。推此則由漢而來。其拜猶同耳。孫甫唐書云、唐武后欲尊婦人、始易今拜。是則女屈膝而拜、始於唐武后也。〈忠按、女屈膝、恐屈上脱不字〉。

④鶴林玉露［四ノ十一丈］云、宋朱文公［家礼一］云、古者婦女、以肅拜爲正。謂兩膝齋跪、手至地而頭不下也。拜手亦然。南北朝有樂府詩、説婦人曰、伸腰再拜跪、問客今安否。伸腰亦是頭不下也。周宣帝令命婦相見、皆跪如男子之儀。不知、婦人膝不跪地、而變爲今之拜者、起於何時。程泰之以爲始於武后。不知、是否。余觀王建宮詞云、射生宮女盡紅粧、請得新弓各自張、臨上馬時齊賜酒、男兒跪拜謝君王、則唐時婦女拜、不跪可證矣。

⑤事言要玄［二ノ廿三丈］事集云、代酔編、禮婦人與丈夫爲禮則俠拜。俠者夾也。謂男子一拜、婦人兩拜、夾男子拜。今婦人之拜、不跪則異於古。所謂俠拜、江浙衣冠之家、尚通行之、閭巷則否。江鄰幾嘉祐雜志載司馬溫公之語。乃謂、陜府村野婦人、皆夾拜。城廓則不然。南北之俗、不同如此。　又曰、古者、男女皆跪。男跪尚左手、女跪尚右手。以此爲別。自唐武后尊婦人、始爲今拜、而不屈膝。此見張建章渤海國記、不謂無據。然大觀北史周時、詔内外命婦、拜宗廟及天臺、皆俛伏、則知前此婦人、蓋已不跪者矣。

⑥文海披沙［七ノ十九丈］云、婦人拜而不跪、自古已然。宋玉貽孫、對趙中令謂、古詩、長跪問故夫、則古婦人亦跪。不跪、自唐則天始。今製婦人亦跪。但拜時不如男子一揖、聞一拜耳。然連拜不起揖者、俗謂之叩首。乃賤者之禮、非貴之也。至於揖、則男子雙手至地、婦人略縮膝而已。此禮不知與古同否也。

（堀野真澄）

【七一六】女人拜（※三四丁目の中の付箋）

①文海披沙云、〈云云〉。宋玉貽孫對趙中令。　作宋王貽孫對趙中令。

②今製。　作今制。

③不如男子一揖聞一拜耳。　作不如男子一揖間一拜耳。

（堀野真澄）

【七一七】團拜

①［敕修鈔十四ノ廿九丈］衆人聚拜曰團拜。

②敕修清規［下二ノ十丈］庫司四節特爲首座大衆湯云、各鄉曲依所出榜、詣各處團拜。

（堀野真澄）

【七一八】答拜

①敕修清規［上二ノ廿九丈］尊宿遷化奠茶湯云、主喪炷香禮眞、小師眞左答拜。

②尚書［下ノ五十二丈］顧命云、太保受同降盥、以異同、秉璋以酢、授宗人同拜。王答拜。

③春秋左氏傳［九ノ九丈。〇文十三年］文十三年云、鄭伯拜。公答拜。

④周禮九拜有褒拜。正字通［卯中卅一丈］云、詩詁謂褒拜爲答拜。古文報亦作褒。

⑤宋陳賓［鄂廿八］桃源手聽［三丈］云、史越王罷相歸里、經從慈溪、邑宰蔣鶚遠迎既見。邑吏而下皆參、羅拜庭下。越王答拜。蔣宰局脊請免。王曰、閣下與之有名分。某與之爲鄉曲。

（堀野真澄）

【七一九】還（ワン）拜

①［敕鈔七ノ十八丈］答拜亦曰還拜。

②敕修清規［上二ノ卅五丈］尊宿遷化下遺書云、住持詣靈几前、炷香點湯、上祭點茶展拜。專使座右還拜。

（堀野真澄）

【七二〇】頓首

①九拜之一也。

②周禮［註疏廿五ノ十八丈］大祝云、辨九擂。一曰稽首、二曰頓首、三曰空首、四曰振動、五曰吉擂、六曰凶擂、七曰奇擂、八曰褒擂、九曰肅擂。　註稽首、拜頭至地也。頓首、拜頭叩地也。空首、拜頭至手。所謂拜手也。吉拜、拜而后稽顙。凶拜、稽顙而后拜。奇拜、謂一拜。褒拜、報拜也。肅拜、但俯下手。

③振動者、正字通［卯中卅一丈］云、振動、如儀禮之揖厭。推手曰揖、引手曰厭。今謂之打躬連拱手。詩詁謂、戰栗變動、恐悚迫蹙而下手。〈忠曰、凡九拜解釋、正字通用捨註疏。欲得其詳者、須檢彼〉。

④文獻通考云、朱文公熹、白鹿禮殿塑像説曰、其爲頓首、則又以頭頓手上也。其爲稽首、則又卻其手而以頭著地。

⑤野客叢書云、今人或以頓首施於卑下。不知拜頭叩地、豈卑下之所安乎。

⑥經國大典註解［後下四十四丈］云、臣之於君稽首。稽首者、引首稍久在地。稽者、稽留之意。下官於上官頓首。頓首者、額至手即起也。上官於下官空首。空首者、頭不至手、即起也。平交者亦空首。

⑦賓退録［七ノ十四丈］云、其爲頓首、則又以頭頓于手上也。其爲稽首、則又卻其手而以頭

著地。

（堀野真澄）

【七二一】叩首

①永平［眼ノ五十三ノ四丈］元和尚云、凡禮拜、以頭叩地。或至血出、此名頓首拜。

（堀野真澄）

【七二二】磬折

①史記［百廿六ノ十二丈。〇通鑑綱目九ノ十三丈用之］滑稽傳云、西門豹、簪筆磬折。　註、磬折、謂曲體揖之、若石磬之形曲折也。磬一片黒石、凡十二片、樹在虡上擊之。其形皆中曲、垂兩頭。言人腰側傾也。

②後漢書［傳十四ノ二丈］馬援傳云、公孫述警蹕就車、磬折而入。　註磬折者、屈身如磬之曲折敬也。

③禮記［註疏四ノ三丈］曲禮云、立則磬折。　疏僂折如磬之背。故云磬折也。

④韓詩外傳［一ノ七丈。〇又説苑十九ノ三丈］云、立則磬折、拱則抱鼓。

⑤藝圃球瑯［三ノ四十丈］威儀篇云、立以磬折、坐必抱鼓。　註磬折鞠躬也。抱鼓手拱也。

⑥莊子漁父篇云、夫子曲要磬折。

⑦孝經援神契云、孔子作孝經、使七十二子向北辰磬折。

（堀野真澄）

【七二三】叉手

①洪武正韻［麻ノ五十三丈］云、叉、手相錯也。今俗呼拱手、曰叉手。

②事林廣記［丁集三ノ一丈。〇又必用甲集十五丈全同］載、王日休速成法云、叉手法、小兒六歳入學、先教叉手。以左手緊把右手、其左手小指、則向右手腕。右手皆直其四指、以左手大指向上。如以右手掩其胸。不得著胸、須令稍離、方爲叉手法也。

③敕修清規［下一ノ三十一丈］裝包云、途中雲水相逢、彼此叉手朝揖而過。

④十誦律［廿六ノ廿八丈］云、民大居士、從座起、叉手合掌、白佛言、世尊、願佛及僧、受我舍宿。佛默然許之。

⑤佛説方等般泥洹經［上ノ廿九丈］曰、佛告阿難、汝爲空無菩薩。〈自西方樂園世界來者〉。叉十指、説是偈言、其雄根爲寂定、空無出大光明。我爲勇猛叉手、爲師子大吼禮。〈云々〉。佛告阿難、汝用是叉手功德、我般泥洹已後、六月中當獨作佛。天上天下人、皆當稽首向汝作禮。〈云云〉。如來今現在、若泥洹後、以直心無諛諂之意、一心叉手。向説法者、諸佛天中天、皆當授其決。及少功德者、皆當具足得是法。何況樂喜無瑕穢者。

⑥忠曰、須知此經所謂叉手者、捨妄心收歸一眞法界者。故其功德、如經所説。

⑦後漢書［列傳十四ノ七丈］馬援傳云、豈有知其無成而但萎腰、咋舌叉手從族乎。

⑧傳燈録［八ノ六丈］南泉願禪師章云、有僧問訊、叉手而立。師云、太俗生。其僧便合掌。師云、太僧生。

⑨忠曰、合掌西竺之法、叉手本中華古法、爲俗禮。故南泉以爲太俗生。

⑩舊説［敕鈔一ノ十七丈］曰、凡進退法、進前叉手、退後合掌。是其通式也。

（堀野真澄）

【七二四】合掌

①日用軌範〔敕修下一ノ四十八丈〕云、合掌、手指不得參差。須當胸高低得所。不得以手托口邊。古云、參差合掌不當胸。兩手交加挿鼻中。拖履揭簾無款細。嘔聲泄氣、逞英雄。

②永平清規赴粥飯法云、合掌、指頭當對鼻端。頭低指頭低。頭直指頭直。頭若少斜、指頭亦少斜。其腕莫教近於胸襟、其臂莫教築於脇下。

③　又與問訊同看。

④智者觀音義疏〔一ノ十二丈〕云、合掌者、此方以拱手爲恭、外國合掌爲敬。手本二邊、今合爲一、表不敢散誕、專至一心。一心相當。故以此表敬也。觀解者、昔權實不合而今得合。〈乃至廣説〉。合掌表於返本還源、入非權非實。事理契合。故合掌也。〈前禮拜處名義集略引之〉。

⑤法苑珠林〔廿八ノ卅八丈〕致敬篇云、律云、當令一心合十指爪掌、供養釋師子。或云、叉手白佛者、皆是斂容呈恭、制心不令馳散。然心使難防。故制掌合而一心也。今禮佛者、多有指合掌不合、或有掌合而指開、良由心慢而惰散也。寧開指而合掌、不得合指而開掌。本欲來求福、却反招慢過。

⑥釋氏要覽〔中ノ一丈〕云、合掌、若此方之叉手也。法苑云、若指合其掌不合者、良由心慢而情散故也。必須指掌相著、不令虛也。

⑦資持記〔下三ノ十五丈左〕云、合掌者、定心想也。兩掌相抵、指掌齊合。今人但合指耳。

⑧忠曰、禪林有人、但合十指頭、不合其掌、像未開蓮。因名蓮華合掌矣。夫蓮華合掌、別在儀軌。逍遥園記、羅什答秦王問供養法華、正用蓮華合掌。蓋依供養蓮經。若尋常合掌、則不可徒虛掌黏指端。既當諸師剉折。好善兄弟、勿從非法焉。

⑨　又理趣六波羅蜜多經〔一ノ五丈〕云、以無量功德莊嚴之手、如新生蓮華、合掌恭敬。〈止此〉。是謂手之清淨、非合掌如蓮華也。

（堀野真澄）

【七二五】和南ヲ

①敕修清規〔上一ノ十九丈〕聖節云、住持和南、登座。　又〔下一ノ八丈〕寮元云、每日粥罷、大衆歸寮。〈乃至〉。副寮出、燒香歸位、茶頭喝云、不審。大衆和南。

②翻譯名義集〔四ノ四十六丈〕云、槃那寐、或名槃談、訛云和南。皆飜我禮。

③行事鈔〔下三之二ノ廿丈〕僧像致敬篇云、四分、至上座前、脱革屣、偏袒右肩合掌、手執兩足、云我和南〈義云度我〉。而作禮也。

④出要儀云、和南者、爲恭敬也。聲論云、槃那寐、此翻爲禮。

⑤法苑珠林〔廿八ノ十六丈〕云、依經云、和南者梵語也。或云、那謨婆南等。此猶非正。依本、正云槃淡、唐言我禮、或云歸禮。歸亦我之本情、禮是敬之宗致也。或云歸命者、義立代於南無也。理事符同、表情得盡。俗人重南無而輕敬禮者、不委唐梵之交譯也。況復加以和南諸佛迷之、彌復大笑。又南無者、善見論、翻爲歸命覺、亦云禮大壽。又和南者、出要律儀、翻爲恭敬。善見論、翻爲度我。准此而言、恭敬度我、義通凡聖。豈和南偏在尊師。亦通上聖。〈忠曰、和南諸佛之南字、當作尚也〉。

⑥僧祇律〔廿七ノ十三丈〕云、佛言、和南有三種、身口心。身者、前人若坐若立住、頭面禮足、是名身。口者、若前人遠遥、合掌低頭、作是言和南、是名口。心者、若以背去、應

合掌作敬。是名身口心恭敬。

⑦玄應一切經音義［廿ノ六丈］云、南無、或作南謨、或言那模。皆以歸禮譯之。言和南者、訛也。正言煩淡、或言槃淡。此云禮也。或言歸命、譯人義安命字。

（堀野真澄）

【七二六】普同和南

①同普同問訊。

②敕修清規［上二ノ七丈］念誦云、供頭鳴堂前鐘三下、衆普同和南。

（桐山大幹）

【七二七】問訊

①祖庭事苑［五ノ十一丈］云、訊亦猶問。古之重語也。

②釋氏要覽［中ノ一丈］云、爾雅云、訊言也。善見論云、比丘到佛所、問訊云、少病少惱、安樂行否。僧祇律［三十五ノ十四丈］云、禮拜不得如瘂羊。當相問訊。地持論云、當安慰舒顏、先語平視和色、正念在前問訊。〈見禮拜處口禮中〉。

③敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、維那往住持前問訊。巡堂一匝、歸内堂中間、問訊而出。

④忠曰、舊説［敕鈔一ノ十二丈］謂、日本問訊、但合掌低頭、闕不審詞太簡乎。〈止此〉。蓋見僧祇瘂羊之誡、云爾歟。然不可一定説。清規問訊、合掌低頭。〈如大鑑説〉。不必敍言詞。

⑤聖節［廿丈左］中亦云、兩序對出、向佛問訊上香。〈止此〉。日用軌範云、摺袈裟了、亦當問訊而去。〈止此〉。此般豈亦出語曰不審耶。

⑥大鑑小清規云、兩掌相合、但名合掌。若合掌低頭敬揖、此名問訊。今此間人、但合掌、名曰問訊。此亦錯誤傳習也。　又云、凡兩掌相合、只名合掌。如十佛名時、大衆合掌、默念佛名、不名問訊。如揖香揖茶、此時合掌低頭揖衆、此名問訊。如自己、於佛前合掌低頭、敬揖諸佛、此名問訊。如主賓相見、合掌相揖、此名問訊。如合掌巡堂、不名問訊巡堂。

⑦村寺清規［敕鈔二ノ廿三丈引］云、事畢、或轉身團欒問訊、或只就位、略轉面、相顧左右和南、却須以頭面隨手略轉、相揖左右而問訊。不得但俛首、以手揺拽左右。

⑧　舊説［敕鈔十四ノ廿五丈］曰、凡問訊、但曲腰而直項非也。須傾首寓敬意。

⑨僧史略云、如比丘相見、曲躬合掌、口曰不審者何。此三業歸仰也。〈曲躬合掌、身也。發言不審、口也。心若不生崇重、豈能動身口乎〉。謂之問訊。其或卑問尊、則不審、少病少惱、起居輕利不。上慰下、則不審、無病惱、乞食易得、住處無惡伴、水陸無細蟲不。後人省其辞、止曰不審也。大如歇後語乎。

⑩智度論［十ノ十五丈］云、問曰、寶積佛一切智、何以方問訊釋迦牟尼佛。答曰、諸佛法爾。知而故問。復次大貴大賤、不應相問訊、佛力等故、應相問訊。問曰、何以問少惱少病不。答曰、寒熱饑渴、兵刃墜落、外病。四百四病、内病。如是二病、有身皆苦故、問少惱少患不。人雖病差、未得平復故、問興居輕利。雖病差、能行歩坐起、氣力未足、不能造事携輕擧重、故問氣力。雖擧重携輕、有貧窮恐怖、不得安樂、故問得安樂不。復次有二種問訊法。若言少惱少患興居輕利氣力、是問訊身。若言安樂不、是問訊心。内外諸病、名爲身病。貪瞋嫉妬、九十八結等、名爲心病。問訊二病故、言少惱少病興居輕利氣力安樂不。〈略鈔〉。

⑪華嚴經［十七ノ十丈］梵行品云、若語業是梵行者、梵行則是起居問訊、略説、廣説、〈乃至〉。

隨俗説、顯了説。

（桐山大幹）

【七二八】普同問訊

①忠曰、有二種普同問訊。一行事人、普問訊大衆。如上堂登座時。二大衆一時問訊、名普同問訊。

②敕修清規［上二ノ十一丈］迎待尊宿云、尊宿、往住持前問訊、歸中普問訊登座。〈云云〉。説法畢下座、住持前問訊、普與大衆問訊。　又［下二ノ十三丈］四節秉拂云、秉拂人、往住持前問訊、次知事前問訊、巡至班末。次至同班前問訊、亦巡至班末。即擧手與大衆普同問訊。　又［下一ノ五十九丈］大夜念誦云、維那請鎖龕佛事。受請人、出班燒香、退身問訊。次住持前問訊、轉東序前問訊、巡至班末問訊。次西序前問訊、然後與大衆普同問訊。

③　右行事人、與大衆問訊者。

④　忠曰、行事人與衆普同問訊之法、先低頭問訊了、以其合掌直下身左邊、〈少磬折〉。更以其合掌、〈直身〉。轉下身右邊、〈少磬折〉。即以合掌致胸前、解合掌叉手。或處［東福］稱十問訊。謂若畫十字然。

⑤敕修清規［上二ノ四丈］告香云、普説竟仍齊向法座立。參頭挿香、同衆三拜。免則觸禮。進云、〈云云〉。普同問訊而退。　又［下一ノ四十五丈］赴齋粥云、古規、毎日住持赴堂。早粥時、先於堂外坐。待堂前鳴鐘即入堂、大衆齊下床、普同問訊就坐。

⑥日用軌範［敕修下一ノ四十七丈］云、堂前鐘鳴下床、爲迎住持入堂。大衆普同問訊、不得以手左右揺曳。

⑧　右大衆一時相問訊者。

（桐山大幹）

【七二九】普通問訊

①即普同問訊也。見東福寺入寺規。

（桐山大幹）

【七三〇】普問訊

①即普同問訊也。

②敕修清規［上二ノ十一丈］迎待尊宿云、尊宿、往住持前問訊、歸中普問訊登座。〈詳普同問訊處〉。

（桐山大幹）

【七三一】十問訊

①即普同問訊也。合掌横豎、若畫十字故名。

②東福清規［八十七丈］上堂曰、住持到法堂、東月壇、冬則脱帽子到中央、十問訊登座。

（桐山大幹）

【七三二】略問訊

①忠曰、不深低頭也。

②敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、侍者接香、以左手挿爐中、右手拈從香一炷、略問訊下座歸班。

（桐山大幹）

【七三三】小問訊

①［敕鈔十一ノ廿三丈］即略問訊也。

②敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云、參頭小問訊叉手、進爐前左手挿香。

（桐山大幹）

【七三四】趺坐問訊

①忠曰、秉拂人、請堂頭趺坐、故令侍者問訊。此謂請趺坐問訊、或省言趺坐問訊。堂頭到此據椅矣。如日本禪林入院開堂、比住持擧垂語、侍客爲請趺坐、到列刹和尚上位前問訊、轉身到末位。〈西堂末位〉。問訊。此謂趺坐問訊。

②敕修清規［上二ノ廿二丈］開堂祝壽云、住持當令侍者請官員坐。又［下二ノ十三丈］四節秉拂云、秉拂人就座云、侍者、請堂頭和尚趺坐。秉拂侍者、至住持前問訊。

③忠曰、此問訊、即是趺坐問訊也。

（桐山大幹）

【七三五】座前問訊

①忠曰、座前者、謂法堂正前、撐天柱之間也。按［教苑上ノ十三丈］［敕修上一ノ十九廿丈］［備用一ノ一二丈］上堂凡有兩次座前問訊。初住持未出時、西序東序望空座、座前問訊。後住持登座、兩序復座前問訊請法。日本禪林未聞行初空座問訊焉。

②敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、頭首下床、聖僧前問訊、領衆出堂。至法座前、列一行問訊、歸西序立。大衆鴈列于後。知事待西序歸位畢、亦列一行、座前問訊。上首居後。都寺引、歸東序立定。　又云、住持和南登座。〈乃至〉。首座領班、出列座前問訊、大衆同問訊。知事轉班列座前問訊、行者隨問訊。

③忠曰、頭首知事、空座問訊、初未知何義、後於教中得其意。

④大般若經百二十七卷云、天帝釋言、我坐在三十三天善法殿中天帝座上、宣說正法。無量天子聽說、恭敬禮拜而去。我不在時、諸天子亦來咸言、此處是帝釋爲諸天說法之座。我等皆應如天主在供養。右繞禮拜而去。

⑤又正法念處經［三十ノ七丈］云、迦迦村陀佛、上忉利天、爲諸天說法、還閻浮提。後天帝釋入俱吒殿、以清淨心擧身投地、禮師子座。心自念言、此是如來所坐之處、以敬重心念如來故。

⑥忠曰、今空座問訊、亦此義也。堂頭說法座故。雖堂頭未坐、亦禮揖。或不得其意、妄爲兩序互問訊之義、非也。固依百丈淹貫大藏、所制作有淵源矣。

（桐山大幹）

【七三六】座下問訊

①忠曰、座下者、法堂須彌座前、直下也。

②敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、待住侍斂衣趺坐、侍者先末班引過座下。列一行問訊、燒

香侍者、引班歸位。〈次有首座、知事座前問訊〉。西堂東堂、出座下問訊。

③ 忠曰、兩序座前問訊、侍者座下問訊。蓋侍者左右乎住持、可謂親於兩序。所以座下問訊也。其［敕鈔一ノ十七丈］西堂東堂之於座下者、彼無有別問訊位。況其人與侍者、位階懸隔、無混雜之嫌。故亦用座下也。

④ 舊説［敕鈔一ノ十七丈］曰、侍者位卑於兩序、故於座下。〈止此〉。予不與此義。

（桐山大幹）

【七三七】四處問訊

①忠曰、僧堂四板頭、燒香問訊。此謂四處問訊。

②敕修清規［上二ノ十六丈］專使特爲新命煎點云、專使揖衆坐、聖僧前燒香。次上下間、次堂外燒香、仍歸堂内、住持前上下間及外堂問訊、仍歸中問訊。　又［下二ノ十丈］庫司四節特爲首座大衆湯云、都寺揖坐巡堂、歸堂中立問訊。衆坐進前燒香、次上下間外堂、歸香合安元處、即往特爲人前問訊。右出住持前問訊、仍巡問訊一匝及外堂、歸堂中問訊側立。

③東漸略清規［一ノ十丈］四節別式云、庫司特爲首座大衆茶、〈乃至〉。都寺進前、燒香四處或七處。首座板、後堂板、分手板、聖僧板也。次外堂上下間、歸即往首座前問訊。右出住持前問訊、仍巡堂問訊一匝及外堂、歸堂中問訊側立、依聖僧板頭立。

④鎌倉清規［十三丈］燒香侍者巡堂禮云、待大衆坐定而進龕前、把香合、燒香聖僧之前。次自首座床始、而於四所燒香及外堂、香合置本處。又向四所問訊及外堂、然而立中央問訊。是揖香之禮也。

⑤ 瑩山清規云、聖僧上下間堂外問訊。是云四處問訊。

⑥ 忠曰、東漸云四處、但是僧堂四板頭也。外堂則不在其數。鎌倉及言亦爲外堂在四處之外。然瑩山歷指僧上下間堂外、以爲四處、太可疑。蓋取僧堂上下間爲二處。四板中、捨何二耶。又取外堂爲一處。外堂有上下間、捨何間耶。若共問訊、復成五處矣。我恐瑩山卒見敕修等清規聖僧上下間外堂問訊語、不及審訂、妄加外堂爲四處也。

（桐山大幹）

【七三八】七處問訊

①忠曰、東漸清規云、都寺燒香四處或七處。〈見四處問訊處〉。雖不指七處名、僧堂及外堂、有爐七處。〈見四處問訊僧堂圖〉。七處燒香了、七處問訊。是揖香之禮、此可稱七處問訊也。

②忠又按、衆寮茶湯禮亦七處安爐。中間上下間燒香問訊、亦可稱七處問訊。謂中間觀音前一、上間三、下間三也。

③ 敕修清規［下一ノ十九丈］衆寮入寮出寮茶云、進中間上下間燒香。復中間上下間問訊。

（桐山大幹）

【七三九】三巡問訊

①敕修清規［下二ノ八丈］方丈小座湯云、客集、侍者揖、引至住持前問訊、依照牌入位立定。燒香侍者、請客侍者、分往特爲人前、巡問訊。揖坐已、復位竝立。燒香侍者進前燒香、仍歸位、與請客侍者同時轉身、分巡問訊揖香、候鳴板二下行湯遍、仍巡揖湯畢、燒香侍者進燒光伴香。鳴板一下收盞。鳴鼓三下退座。

②解者［敕鈔十一ノ九丈右。十二丈左。〇又十四ノ廿四丈］曰、此揖坐、揖香、揖湯、三次問訊。是謂三巡問訊。燒香請客二侍者、各合掌而巡、及至末班、略問訊了、各叉手歸位。僧堂湯禮［敕鈔十一ノ廿七丈］亦有三巡問訊。〈見飲啖類大座湯處〉。先住持前問訊、次第巡堂如常。

（桐山大幹）

【七四〇】一問訊

①竺仙小清規［清規略要八丈］云、住持并侍者、接入大衆時、合掌立而已。是名接入一問訊。

②大鑑小清規［略ノ十三丈］求掛搭禮云、方丈行者、請粥罷方丈獻茶。粥罷、參頭領衆、方丈前候住持入了、參頭領衆進、門外肅立。侍者一問訊、接入香爐前。　又［十四丈］四節日巡堂禮云、凡茶湯禮、侍者門外立。俟兩班耆舊皆集、但一箇問訊。衆入、無人人問訊之理。與衆寮不同。

（桐山大幹）

【七四一】借香問訊

①揖班上香有借住持香者、即先向住持問訊。此爲借香問訊。燒香了、復向住持問訊。此爲謝香問訊。

②敕修清規［下一ノ廿丈］兩序出班上香云、兩序相朝而出、轉身問訊住持。謂之借香。然後上香。若聖節、佛祖嗣法師忌、無借香問訊。〈詳報祷類出班上香處〉。

③大鑑小清規［略一丈。〇廣四十六丈］兩班出班拈香法云、三佛、初祖、百丈、臨濟、開山、嗣法師、無借香問訊。其餘前住忌、則兩班人人、借住持香合内香燒之。故先問訊住持借香。又回身問訊、謝住持也。　又諸祖忌［廣八丈］云、維那揖兩班燒香、借香問訊。先問訊住持、轉身燒香問訊了。又問訊住持歸位。

④瑩山清規［下ノ廿丈］土地堂念誦云、維那出班燒香、倚卓左邊、向主人問訊、請主人燒香。侍者開香合、分香於函蓋置。兩班一位、出班進前、問訊主人、轉身問訊土地燒香。又轉身問訊主人還位。諸位皆如此。

（桐山大幹）

【七四二】謝香問訊

①見借香問訊處。

（桐山大幹）

【七四三】茶禮

①禪苑清規［一ノ十二丈］赴茶湯云、院門特爲茶湯、禮數慇重。受請之人、不宜慢易。〈又見湯禮處〉。

②　忠曰、禪林茶湯禮、諸清規具在。不用煩記、今録朝廷所講、使知有所本。

③　夢溪筆談［一ノ五丈］云、百官於中書見宰相。九卿而下、即省吏高聲唱一聲、屈躬趍而入。宰相揖。及進茶皆抗聲贊唱。謂之屈揖。待制以上、見則言請某官、更不屈揖。臨退仍進湯、皆於席南、横設百官之位。升朝則坐、京官已下皆立。後殿引臣寮、則待制已上、宣名拜舞。庶官但贊拜、不宣名、不舞蹈。中書略貴者示與之抗也。上前則略。

微者殺禮也。　又［一ノ八丈］云、禮部貢院、試進士日、設香案于堦前、主司與擧人對拜。此唐故事也。所坐設位。供帳甚盛。有司具茶湯飲漿。

（桐山大幹）

【七四四】湯禮

①見茶禮處。

②南禪規式［下ノ卅二丈］云、特爲湯、雪峯爲雲峯講、此爲始。

（桐山大幹）

【七四五】送入席

①大鑑小清規［十五丈］四節僧堂茶禮云、侍者叉手、至首座前問訊。便至後堂面前問訊、便至特爲人前問訊。此名送入席。却從聖龕後轉、出堂外報住持、住持入堂立定。侍者從住持前、直至特爲人前問訊。此名揖坐。又從龕後轉、從上間一問訊、合掌巡堂、内外一匝、爐前中立問訊。此名揖大衆坐。

（桐山大幹）

【七四六】送歸位

①忠曰、與送入席同。

②備用清規［三ノ十三丈］方丈特爲首座大衆茶云、侍者、外堂俟頭首一班歸前板。次首座入堂揖請、離位揖次肩上位、即送首座、歸特爲位。從龕後出堂前、報住持入堂、鳴堂前鐘七下、住持歸位。侍者往特爲人前問訊、從龕後、轉首座板頭、巡問訊一匝、外堂自下而上間、歸中問訊、大衆就坐。〈先名送歸位、住持入堂後方名揖坐〉。圓照和尚會中盛講此禮。

（桐山大幹）

【七四七】揖

①敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、維那轉身爐前、揖住持上香。

②舊説［敕鈔三ノ廿三丈。〇又十四ノ廿八丈。〇又一ノ十九丈右］曰、僧家言揖者、即問訊是也。若叉手著胸、是在家所謂揖也。

③忠曰、如揖班揖坐揖香揖湯茶、皆問訊名揖也。但祖忌眞前之揖湯揖茶、及觸禮之後相揖、正是叉手低頭。故僧家亦非無此法。

④智度論［十ノ十五丈］云、有下中上禮。下者揖、中者跪、上者稽首。〈詳禮拜處〉。

⑤釋氏要覽［中三丈］云、揖即周禮第九肅拜也。又是内法下品禮也。書云、揖如磬折。若仰首直身、叉手不謹、即慢甚也。故孔子曰、爲禮不敬、吾何以觀之。

⑥日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云、聞徧食椎、看上下肩、以面相朝揖食。不得正面以手揺曳兩邊。

⑦經國大典［後集下ノ四十四丈］註解云、揖、下官於上官隔等、則擧手齊眼下致敬。差等則擧手齊口下致敬。上官於下官隔等、則無答。差等則擧手齊心答禮。相等者、各擧手齊心下致敬。

⑧居家必用［甲ノ十六丈］載、王虚中訓蒙法云、凡揖人時、則稍闊其足。其立則穩。揖時、須是曲其身、以眼看自己鞋頭。威儀方美觀。揖時亦須直其膝、不得曲了。當低其頭、使

手至膝畔。又不入膝内、則手隨時起而叉於胸前。揖時須全出手、不得只出一指。謂之鮮禮。揖尊位、則手過膝下、亦以手隨身、起叉手于胸前也。

⑨困學紀聞［四ノ十八丈］云、鄭司農注、肅拜但俯下手。今時揖是也。項氏云、古之拜、如今之揖。折腰而已。介冑之士不拜。故以肅爲禮。以其不可折腰也。其儀特斂手向身、微作曲勢。此正今時、婦人揖禮也。漢時婦人之拜、不過如此。

⑩周祈名義考［六ノ五丈］云、手與胸平爲揖。詩詁推手曰揖、引手曰厭。推手、手與胸離也。厭則著手於胸。

⑪正字通［卯中五十三丈］云、揖手著胸也。六書故、拱手上下左右之、以相禮也。周禮秋官、詔王儀、南鄉見諸侯、土揖庶姓、時揖異姓、天揖同姓。註、鄭氏曰、土揖、推手小下之也。時揖、平推手也。天揖、推手小擧之也。

⑫小補韻會［緝勻七丈］云、儀禮註、推手曰揖。引手曰厭。今詳、上手當曰厭。謂手厭於胸。引手當曰揖。揖而左、揖而右。〈又見頓首處〉。

⑬程大昌［孚十三ノ廿八丈］演繁露云、公羊僖二年、晉謀伐郭。荀息進、獻公揖而進之。注、以手通指曰揖。

⑭史記［四ノ九丈］周本紀云、武王乃揖諸侯。

⑮湖海新聞［後集二ノ二丈］云、宋徽宗宣和元年、降手詔曰、寺院改爲宮觀。自今設禮。合掌和南不審、並改作擎拳稽首。

⑯長揖。〈附〉。前漢書［一上九丈］高帝紀云、酈生不拜、長揖曰、足下、必欲誅無道秦、不宜踞見長者。註、師古曰、長揖者、手自上而極下。

（堀野真澄）

【七四八】聲喏

①敕修清規［下三ノ十一丈］迎待尊宿云、侍者燒香、行者問訊、僕從聲喏。

②忠曰、本寺僕從、要中尊宿之使用。故唱喏敬揖、相隨侍也。

③品字箋［巳ノ十丈］云、喏爾者切、敬言也。俗以長揖呼爲作揖、又轉而謂之唱喏。永言之謂唱。喏敬詞也。言人於作揖時、必有喃喃之辭。以將其敬、故不僅曰作揖、而直謂之唱喏耳。　又唱註［巳ノ八十丈］云、古人謂長揖爲唱喏。唱聲之長。喏辭之敬也。

④正字通［丑上ノ五十五丈］曰、喏爾者切、音惹、俗謂長揖曰唱喏。舊註音社非。餘冬序録［四十七ノ四丈］曰、揖相傳曰唱喏。或古人相揖、作此聲。唱喏者、引氣之聲也。宋人記鹵庭事實云、揖不聲、名曰唖揖。不如是、則爲不知禮法、衆所嗤笑。契丹人置手胸前、亦不聲、謂之相揖、宋人以爲怪。宋以前、中國揖、皆作聲。今日承元之後、揖不作聲久矣。而其名唱喏猶存。官府升堂、公坐輿皁排衙、獨引聲稱揖。豈非唱喏之謂與。此固自有本也。又六書故、喏應聲也。古無此字。疑即諾字。六書統言部、諾奴各切、古文从若从口、作喏。篆作　。據二説、諾喏同。俗音惹。或曰、今輿皁無稱揖者、伏地叩首而起。序録説非。

⑤周祈名義考［六ノ六丈］云、唱喏。〈喏音惹〉。左傳［十三ノ四十三丈］使訓羣騶知禮。注、騶、喏喝聲也。喏、玉篇敬言也。喝、訶也。貴者將出、唱使避己。故曰唱喏、亦曰鳴騶。即孟子［四ノ廿九丈］行辟人也。今俗謂揖、曰唱喏。不可曉。

⑥老學菴筆記［八ノ十四丈。〇必十ノ六］云、古所謂揖但擧手而已。今所謂喏乃始於江左諸王。方其時惟王氏子弟爲之。故支道林入東、見王子猷兄弟還。人問、諸王何如。答曰、見一

羣白項烏。但聞唖唖聲。即今喏也。〈忠曰、此説大異餘冬序録〉。

⑦ 廣燈録［廿三ノ三丈］洞山聰禪師章云、上堂云、聞鼓聲來、到法堂上。佛法向什麽處去也。還有人道得麽。莫是去來叉手當胸、唱一聲喏、東邊却過西邊是麽。〈云云〉。

⑧ 皇朝類苑［十四ノ三丈］云、英宗即位、赦天下、皆加恩。荊南所給縑帛、皆故惡。軍士睨之。揚言不肯受賜。偶語紛紛不已。時張師正爲鈐轄、呼將卒前曰、朝廷非次之恩、州郡固無預備。今帑中所有、止如此。汝輩不肯拜賜、將何爲也。必欲反、則非殺我、不可。遂擲劍於庭下、披胸示之。羣校茫然自失、遽聲喏、受賜而去。〈東軒筆録〉。

（堀野真澄）

【七四九】連珠喏

①忠曰、連珠喏、蓋數人連聲唱喏、如珠連環也。

②夷堅志［乙ノ三ノ一丈］云、崑山縣一老叟、錢三萬、買滿艙鼈。盡解縛、放諸水。是夜夢、數百人被甲、於門外唱連珠喏。驚出視之、相率列拜、謝再生之恩。〈云云〉。

（堀野真澄）

【七五〇】揖坐

①忠曰、立爲敬、坐爲懈。今請坐者、欲弛勤就安。故智度論［十ノ十五丈］云、若得道諸阿羅漢、如舍利弗目連須菩提等、所作已辨。是故聽坐。餘雖得三道、亦不聽坐、大事未辨、結賊未破。故譬如王臣大有功勲、故得坐。

②敕修清規［上二ノ廿三丈］、山門特爲新命茶湯云、知事揖住持入堂、歸位揖坐、燒香一炷、住持前揖香。從聖僧後轉、歸中問訊立。行茶遍、瓶出、往住持前揖茶。

③ 又見送人席處。

（堀野真澄）

【七五一】揖大衆坐

①見送入席處。

（堀野真澄）

【七五二】請（シン）坐問訊

①南禪規式［下ノ五十三丈］入院方丈煎點云、法堂人事畢、侍者立方丈門左、揖衆而入。〈乃至〉。揖坐、揖香、勤湯畢、侍者引一班侍者入、至住持前問訊。〈住持左邊爲上首〉。謂之請坐問訊。侍者各歸位坐。行者進飯卓、飯畢收卓。次茶禮。

②清規略要、新舊兩序管待云、屆時住持出接。或遣侍者接。各依位立定。〈或侍香獨入、揖坐問訊、次請坐問訊入位〉。住持復歸位。侍香侍客、分上下間、先至新兩序前問訊、巡至末問訊。叉手復至舊兩序前問訊、巡至末問訊、同歸中問訊、衆坐。侍香引同列、住持前一行問訊、左肩爲首入位。飯畢鳴鼓、侍香侍客、離座至爐前立。侍香炷香、轉身如前、新舊前行禮、歸中問訊。而行者入湯盞行瓶。候喫了、又如前行禮、歸中問訊而立。侍香即燒光伴香、侍客同問訊、復歸位。乃點果子并茶畢、收盞、鳴鼓三下、退座。

（堀野真澄）

【七五三】請（シン）香

①校定清規［敕鈔九ノ廿丈］特爲新舊人湯云、燒香請客二侍者、分東西兩邊、巡位揖坐訖、各歸中央立。客人就坐、燒香侍者、進前燒香一炷、至爐前、小問訊。謂之請香。然後開合取香。〈云云〉。

②　忠曰、東漸清規［二ノ十六丈］、侍者進退亦如此。予謂、管待新舊兩序新舊侍者。故燒香侍者亦在客中。故此香亦係爲自一分。故有請香之禮歟。

（堀野真澄）

【七五四】揖香

①敕修清規［下二ノ二丈］新掛搭人點入寮茶云、新掛搭人、列衆寮前右邊立、候衆下堂。茶頭即鳴寮前板。衆至、揖迎歸位立定。點茶人、列一行問訊揖坐、坐畢分進中爐上下間爐前燒香、人多不過九人。則三三進前、退歩轉身、須相照顧詳緩。列一行問訊、仍分進爐前問訊退。仍一行列問訊而立。謂之揖香。鳴寮内小板二下、行茶遍。仍如前進前問訊、復退作一行問訊。謂之揖茶。

②　又見揖坐處。

③　舊説［鈔十一ノ廿七丈］曰、如巡揖香時、先炷香了、次巡堂揖、如前揖坐法。

（堀野真澄）

【七五五】揖大衆香

①大鑑小清規［十五丈］四節僧堂茶禮云、衆坐定、侍者小問訊、進爐前燒香。次上下間、堂前燒香、安香合畢、直至特爲人前問訊。此名揖香。又從龕後轉、至上間巡堂内外、又爐前中立問訊。此名揖大衆香。

（堀野真澄）

【七五六】光伴香

①舊説［鈔五ノ廿二丈右ヒヤシ］曰、燒香謝光伴人。謂之光伴香。

②備用清規［三ノ十四丈］、方丈特爲首座大衆茶云、首座轉身龕後、右出。住持略送。復位執盞陪衆。燒光伴香一炷、鳴鐘一下、收大衆盞。

③敕修清規［上二ノ十三丈。〇備用五ノ一丈同此］受嗣法人煎點云、若諸山煎點、煎點人、待行食徧、起燒香、往住持前問訊、下蹴、俵衆人蹴、燒光伴香、歸位伴食。

④　舊説［敕鈔十一ノ廿七丈］曰、凡煎點人、燒光伴香揖時、但光伴人、擧盞而答之。餘人不用擧盞。

（堀野真澄）

【七五七】揖茶

①見揖香及揖大衆茶處。揖而勸茶也。

②　舊説［敕鈔十一ノ廿七丈］曰、如巡揖茶時、理應俟揖畢而喫茶。然巡揖經時稍久。若俟畢、恐冷。故各少報左右、先喫了、及巡揖人歸堂中立問訊、但當擧空盞、而應之也。

（堀野真澄）

【七五八】揖大衆茶

①大鑑小清規〔十五丈〕四節僧堂茶禮云、行者行茶湯。瓶出侍者直至特爲人前問訊。此名揖茶。又從龕後出上間、聖僧前大展三拜、外入中立。此名揖大衆茶。行者收茶盞。

（堀野真澄）

【七五九】勸茶（ケンサ）

①忠曰、勸茶亦是揖茶義。但至特爲人前問訊、名勸茶也。

②敕修清規〔上二ノ十三丈〕受嗣法人煎點云、行食徧、煎點人、起燒香下蹴、問訊住持、及行衆蹴。厨司方鳴齋板、就行飯。飯訖衆收鉢。退住持卓、煎點人、燒香、往住持前問訊。從聖僧後出、爐前問訊。鳴鐘行茶徧、往住持前勸茶。復從聖僧後出、進住持前、展坐具云、〈此日薄禮屑瀆、特辱降重。下情不勝感激之至〉。二展寒温、觸禮三拜、送住持出。

③備用清規〔五ノ一丈〕煎點住持云、煎點人、爐前問訊、鳴鐘、行茶徧、往住持前勸茶。〈儀同敕修清規〉。

④校定清規〔敕鈔五ノ十八丈引〕諸山尊宿相見云、至喫飯時、侍者、燒香下蹴。至喫茶時、行者鳴茶鼓、侍者燒香一炷、至特爲人前、問訊勸茶。仍轉身、上手側問訊、進前燒相伴香一炷、歸位問訊而退。

（堀野真澄）

【七六〇】謝茶

①禪苑清規〔六ノ三丈〕謝茶云、堂頭置食、點茶特爲罷、如係卑行之人、即時於住持人前大展三拜。如不容、即觸禮三拜。如平交已上、即晚間詣堂頭陳謝、詞云、此日伏蒙管待特爲煎點。下情無任不勝感激之至。

②古人云、謝茶不謝食也。

（堀野真澄）

【七六一】揖湯

①忠曰、湯禮則有揖湯。當準揖茶而知之。揖而勸之、即勸湯也。敕修清規〔上一ノ廿四丈〕達磨忌揖湯、備用〔一ノ十八丈〕作勸湯。

（堀野真澄）

【七六二】勸湯（ケン）

①忠曰、亦是揖湯義。可準勸茶知之。

②敕修清規〔上二ノ十一丈〕迎待尊宿云、寢堂釘掛帳幕、排照牌、設特爲光伴位、鳴鼓行禮、揖坐揖香、勸湯。湯罷藥石。

（堀野真澄）

【七六三】謝湯

①忠曰、謝湯之禮、有湯前預謝者、有湯畢爐前謝者。

②敕修清規〔上二ノ六丈〕念誦云、請客侍者、即往西序問訊、請湯巡過。次請東序、就歸位。〈乃至〉。各出全單而散。住持出、兩序隨出。至堂前謝湯、住持止之。〈下八赴湯寢堂鳴板。侍

者燒香、行禮如常式。湯罷藥石〉。

③　右湯前預謝者、舊説［敕鈔四ノ卅丈左］曰、謝湯當觸禮。故住持止之。

④敕修清規［下一ノ十六丈左］、庫司特爲新舊兩序湯藥石云、湯罷起身、出詣罏前、謝湯畢、抽衣就座藥石。

⑤　右湯畢謝者。

（堀野真澄）

【七六四】謝衆臨屈

①敕修清規［下二ノ三丈］、新掛搭人點入寮茶曰、寮元出爐前、對點茶人代衆謝茶。衆人就位、同時合掌、謝畢、寮元復位。點茶人、復一行列問訊、再各分進罏前問訊。謂之謝衆臨屈。仍退作一行問訊。鳴寮前板三下、大衆和南而散。

（堀野真澄）

【七六五】退座（ソイ）

①敕修清規［上二ノ十六丈］、專使特爲新命煎點云、鳴鼓三下、退座。

（堀野真澄）

【七六六】門送

①清拙澄禪師録晩參云、龐居士因辭藥山。山命十人禪客門送。

（堀野真澄）

【七六七】草賀

①舊説［敕鈔五ノ四十三丈］曰、草賀者、小賀也。　或曰、草賀、權賀也。

②忠曰、入院草賀者、草草先賀也。草略也。謂入寺次後禮繁。故且省略五侍沙彌喝食行者等三拜。其受全賀、在開堂下座之後。

③　論語［七ノ廿一丈］子路篇云、裨諶草創之。　朱註、草略也。

④敕修清規［上二ノ廿丈］入院云、住持起身、知事全班進列、上首挿香。〈乃至〉。諸山及頭首勤舊、進前挿香。草賀畢、客頭行者喝云、請諸山兩班勤舊就座獻湯。

（堀野真澄）

【七六八】展賀

①忠曰、開堂説法畢、下座後、大衆賀入寺。是名展賀。

②敕修清規［上二ノ廿二丈ウ］開堂祝壽云、客頭行者、即進爐燭、一字排列座前。專使挿香、兩展三禮畢、堂司行者喝云、〈諸山人事〉。次喝云、〈西堂人事〉。展禮喝云、〈知事人事〉。兩展三禮、又喝云、〈首座大衆人事〉。勤舊蒙堂前資諸寮、齊挿香、同大衆兩展三禮畢、莊庫菴塔法眷鄉人暫到、展賀畢、據座、侍者小師挿香、大展三拜。次執局行者、挿香禮拜、次參頭領衆行者、挿香禮拜。次直廳轎番莊甲作頭老郎人僕、參拜畢。

（堀野真澄）

【七六九】相看

①敕修清規［下二ノ十七丈］月分須知云、九月重陽日、住持上堂、許方來相看。

（堀野真澄）

【七七〇】大相看

①敕修清規［下二ノ］月分須知云、十月初一日、方丈大相看。

（堀野真澄）

【七七一】人事（ジンズ）

①忠曰、人事有三義。一見人行禮曰人事。二餽贈物曰人事。三姓氏生緣曰人事。

②　已下、録見人行禮稱人事者。

③永平元和尚［眼七十五ノ十五丈］曰、人事者、相禮拜也。

④觀心論疏［下ノ十九丈］云、人事者、慶弔俯仰、低昂造聘、此往彼來、來往不絶。〈摩訶止觀［四之二ノ五丈］全同此〉。

⑤敕修清規［上二ノ四丈］告香云、入院後、人事定、爲衆告香。　又［上二ノ廿一丈左］開堂祝壽云、堂司行者喝云、諸山人事。　又［下二ノ十一丈］結制禮儀云、先與西堂人事、觸禮一拜。〈乃至〉。堂頭和尚、與大衆人事、普觸禮三拜。

⑥臨濟玄禪師録云、有一老宿參師。未曾人事便問、禮拜即是、不禮拜即是。師便喝。老宿便禮拜。〈云云〉。

⑦大慧武庫［卅二丈］云、兜率悦禪師、張無盡徐語、及宗門事。悦曰、今日與運使相陪人事已困。珍重、睡去。

⑧　論語［一ノ廿七丈］學而篇云、禮之用和爲貴。　朱憙注、禮者天理之節文、人事之儀則也。

⑨　已下、録餽贈物稱人事者。

⑩一山寧和尚［傳灯鈔三ノ十六丈］曰、以物贈人曰人事。

⑪廣燈録［十四ノ四丈］西院思明禪師章云、師未住時、在許州、聞汝州南院和尚住。元是同參、特往看、人事了。啓和尚、某甲別無人事。買得江西剃刀、獻上和尚。南院便問、汝從許州來、甚處得江西剃刀。師把南院手掐。院喚侍者收收、師以衣袖拂一拂。院云、阿莉莉、阿莉莉。〈忠曰、初人事謂行礼、後人事謂餽贈物〉。

⑫葉縣省禪師録［古宿廿三ノ十八丈］云、因僧人事一箇書筒。〈云云〉。　又［廿三丈］有人事手巾頌。

⑬大慧杲和尚［普説四ノ八十八丈］示方宋輔法語云、臨行袖此紙、求指示、以頌繼之云、惠然訪我鄮峯下、剡溪興盡歸心起。禪家無物贈君行、前面有山兼有水。要知妙喜、敢將常住物、作人事耳。

⑭　韓昌黎集［卅八ノ九丈］、謝許受王用男人事物状云、緣臣與王用撰神道碑文、令臣領受用男沼所與臣馬一匹、并鞍銜、及白玉腰帶一條者。〈云云〉。令臣受領人事物等、承命震悚。

⑮　宋許觀［鄂二廿八］東齋紀事［一丈］云、今人以物相遺、謂之人事。

⑯　韓退之［韓文卅八ノ十三丈］、奏韓弘人事物状云、奉敕撰平淮西碑文。伏緣聖恩、以碑本賜韓弘等。今韓弘、寄絹五百疋、與臣充人事物、未敢受領、謹録奏聞。又杜牧謝許受江西送撰韋丹碑綵絹等状云、中使奉宣聖旨、令臣領受江西觀察使許于泉所寄、撰韋丹

遺受碑文人事、綵絹共三百疋。乃知此稱自唐已有之。

⑰ 徐充［糸孚十九丈］暖姝由筆［六丈］云、今人凡交遊往來、及贄見、不論貴賤、但有餽送之禮、貨物不等、皆謂之人事。白樂天奏于頔裴均欲入朝事宜狀云、上須進奉、下須人事。其來已久。昌黎集亦有奏韓弘人事物狀。

⑱ 人之姓氏生緣稱人事者、見稱呼類人氏處。

（千坂成也）

【七七二】揶揄

①忠曰、揶揄亦作歟歟、邪揄。禪録多爲約免義。

②僧寶傳［一ノ廿一丈］汾州善昭禪師傳云、時洞山谷隱皆虛席、衆議歸昭、太守請擇之。昭以手耶揄曰、我長行粥飯僧、傳佛心宗、非細職也。　又［四ノ卅六丈］西余端禪師傳云、端聽僧官宣至此、以手耶揄曰、止。

③後漢書［列傳十ノ二丈］王霸傳云、市人皆大笑、擧手邪揄之。

④章懷註、説文曰、歟歟手相笑也。歟音弋支反。歟音踰、或音由。此云邪揄。語輕重不同。

⑤通鑑集覽［綱目八下百五丈］云、邪揄音耶喻。説文擧手相笑也。

⑥正字通［辰下七丈］云、歟歟、舞手相弄笑也。

⑦世説新語補［十七ノ三丈］云、晉陽秋曰、羅友同府人。有得郡者、温爲席起別。友至尤晩問之。友答曰、於中路逢一鬼、大見揶揄云、我只見汝送人作郡。何以不見人送汝作郡。　〈温者桓温也〉。

⑧孤樹裒談［八ノ三十二丈］云、蔣君廷貴、應試經行教坊。群婢夾擁、蔣不一顧。妓揶揄引其裾、蔣絶裾去、亦不怒。

（千坂成也）

【七七三】約免

①忠曰、約免者、省約煩禮而放免之也。乃出手、作止之勢。或曰揶揄。

② 正字通［未下二丈］云、約簡也。節省也。禮内則適子庶子。不敢以貴富入宗子之家。雖衆車徒、舍于外以寡約入。

③敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云、本引三人、一展坐具、住持展手約免之、即收起。　〈詳兩展三禮處。又見觸禮處〉。

（千坂成也）

【七七四】回（ウイ）禮

①忠曰、回禮者、答他之禮也。

②敕修清規［下一卅二丈］遊方參請云、參頭領衆至客司、〈乃至〉。歸旦過、知客尋往回禮。

③希叟曇禪師［廣録三丈左］開善録、有回諸山禮歸上堂。

（千坂成也）

【七七五】還（ワン）禮

①回禮又謂還禮。

②禪苑清規［七ノ五丈］請立僧云、退院尊宿、首座、藏主、如合衆望、可擧立僧。知事、大衆、詣寮禮請。〈請辭云、大衆傾心、久思示誨。伏望慈悲、俯賜開允〉。如允即時還禮。〈云、既蒙堅請不敢固辭〉。

（千坂成也）

【七七六】復禮（フク）

①回禮又曰復禮。

②玄沙備禪師廣録［中ノ卅五六丈］云、師問招慶云、我如今去、看王太傅。〈乃至〉。來日太尉、出招慶復禮。

（千坂成也）

【七七七】習儀

①居家必用［辛ノ廿二丈］云、習儀、學制禮也。謂凡有大典禮、必預先習儀也。

②敕修清規［上二ノ三丈］告香云、預集衆習儀。　又［下一ノ卅八丈］謝掛搭云、參頭當具小圖習儀。三人一引、每引一人爲小參頭、須詳記詞語、進退折施合度、免致臨時參差。

③　春秋左傳［廿一ノ十八丈］昭公五年云、女叔齊曰、禮所以守其國、行其政令、無失其民者也。〈云云〉。而屑屑焉、習儀以亟。言善於禮、不亦遠乎。

（千坂成也）

【七七八】具威儀

①永平元和尚［眼五十三ノ二丈］云、參師具威儀者、著袈裟、持坐具、整理鞋襪、帶一片沈香棧香等也。

②敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、維那鳴椎一下云、白大衆、粥罷聞鐘聲、各具威儀、詣大佛寶殿、啓建天壽聖節。謹白。

③教誡律儀［贊行鈔下ノ十一丈］入温室法云、具威儀、持坐具。　贊行鈔云、具威儀者、著五條也。

④　舊説［敕鈔一ノ十二丈右。〇同十九丈右。〇又九ノ廿八丈ノ右］曰、大覺大鑑並曰、具威儀者、謂帶坐具也。

⑤　忠曰、具威儀、當隨處通解之。教誡具威儀、著五條義、則是入温室時具威儀也。永平所言者、是參師時、具威儀也。大覺大鑑、但爲帶坐具義。夫如啓建聖節、豈但持坐具、披五條而可耶。凡七條坐具帽襪、一切服章具足、方可言具威儀而已。　又曰、帶坐具也者、恐由教誡文、有此轉解。余謂、教誡文、若持業而具威儀、即持坐具義、則與著五條解違、與大覺大鑑順。若相違而具威儀、更別持坐具義、則著五條解成、大覺大鑑義不成。我恐此解、非出於二師。若具威儀、即是帶坐具義、則不可重言持坐具矣。

⑥　因録佛説具威儀。

⑦　長阿含經［二ノ十一丈］云、世尊告諸比丘云、何比丘、具諸威儀。於是比丘可行知行、可止知止。左右顧視、屈伸俯仰、攝持衣鉢、食飲湯藥、不失儀則、善設方便、除去陰蓋、行住坐臥、覺寐語默、攝心不亂、是謂比丘、具諸威儀。

⑧　大寶積經［八十五ノ十三丈］云、有四法威儀具足。一者知時、二者知處、三者寂靜、四者眞實。

（千坂成也）

【七七九】朝

①忠曰、朝者、面相向前人也。

②小補韻會云、朝馳遥切。觀君之總稱。又禮記王制、耆老皆朝于庠。註云、猶會也。疏云、恐有朝王之嫌、故云會。耆老聚會於鄉學。

③康熙字典［辰上四十一丈］云、朝馳遥切。音潮。爾雅釋言、陪朝也。註、臣見君曰朝。又曰、又同類往見亦曰朝。史記司馬相如傳、臨邛令、謬爲恭敬。日往朝相如。

④敕修清規［上一ノ廿丈左］聖節云、出班上香、兩序對出、向佛問訊、上香畢、兩兩相朝、轉身歸位。　又日用軌範［下一ノ四十八丈］云、聞徧食椎、看上下肩、以面相朝揖食。

（千坂成也）

【七八〇】朝立

①忠曰、立爲敬、揖坐處詳説。朝立者、向佛祖及靈位立也。

②校定清規［下ノ廿四丈左］遷化遺書云、住持升座。〈乃至〉。下座、詣靈位前朝立。

（千坂成也）

【七八一】廟立

①忠曰、中立南面、如太祖廟位。故曰廟立。

②備用清規［八ノ七丈］謝拄搭云、至時侍者同參頭、入請住持出廟立。參頭歸衆、同問訊。

③律苑事規［十ノ三丈］新來拄搭云、至時侍者同參頭、入請住持出、廟位立。參頭歸位、衆同問訊。

（千坂成也）

【七八二】鴈立

①忠曰、鴈立者、凡列立、或横或竪、總此謂鴈立也。與鴈行班不同。

②楊億古清規序［敕修下二ノ廿五丈］云、長老上堂陞座、主事徒衆、鴈立側聆。

③敕修清規［下二ノ九丈］四節土地堂念誦云、衆集相對鴈立。

④　右竪列立者。

⑤敕修清規帝師涅槃云、鳴鐘集衆、向座鴈立。

⑥　右横列立者。今爲下有揖班上香、故預向座耳。

（千坂成也）

【七八三】鴈行班

①村寺清規［敕鈔二ノ廿三丈］云、若横列佛神而立、謂之鴈行班。事畢或轉身團欒問訊、或只就位、略轉面相顧左右和南。

②　　忠曰、又見前人背後、次第列行、言鴈行。

③　四分律［四十九ノ廿六丈］云、佛言、若檀越來白時到、上座應在前如鴈行而去。

④　教職律儀食了出堂法云、出堂門外、須旁廊一邊行、令威儀庠序、鴈行而行。

⑤　戰國策［七下廿二丈］云魏朱忌曰、爲天下鴈行頓刃。　註、鴈行言以次進。〈此義通四分律等〉。

⑥　又竝行而稍後也。
⑦　禮記王制云、父之齒隨行、兄之齒鴈行。　註、鴈行竝行而稍後也。
⑧　又次第行。言鵝行。
⑨　十誦律［四十一ノ七丈］云、起行時、來往故相亂。佛言、應如鵝法次第行。

（千坂成也）

【七八四】鴛班

①村寺清規［敕鈔二ノ廿三］云、凡諷經、面面相看而對立、謂之鴛班。事畢、候回向人歸位、與衆俛首和南。不必更轉身、面佛神而問訊。

（千坂成也）

【七八五】朝坐

①忠曰、朝坐者、面於前人坐也。與朝立之朝同義、譬如新命辭衆茶湯、東序西序、同面於新命坐是也。
②敕修清規［上二ノ十七丈右］、新命辭衆上堂茶湯云、中敷高座向内。首座向外攝居主位。西堂勤舊、分手光伴。東西序兩邊朝坐。

【七八六】廟坐

①忠曰、中位坐如廟位。故云廟坐。廟義見廟立處。
②［敕鈔五ノ卅三丈］山門管待新命并專使座次圖。
③［敕鈔五ノ十七丈］特爲諸山尊宿湯果藥石管待廟坐之圖。
④校定清規［敕鈔五ノ廿一丈］、特爲住持煎點云、煎點人請特爲人出、有處只就主位坐、有處廟坐。或是法嗣亦當廟坐。在住持意。
⑤　忠曰、住持或坐主位。若法嗣人煎點、則住持廟坐。以此可知、廟坐尊於主位矣。
⑥［敕鈔五ノ廿二丈］諸山法眷特爲住持煎點寢堂廟坐之圖。
⑦　忠曰、備用清規、猶言廟坐、敕修清規［上二ノ十六丈左。十七丈右］皆改爲高坐。實惟、廟之言關天子、東陽換詞、或有意于避之乎。

（千坂成也）

【七八七】分手坐

①忠曰、住持在煎點人分手位也。分手義、見座位類。
②［敕鈔五ノ廿二丈］諸山特爲住持煎點寢堂分手坐位圖　。

（千坂成也）

【七八八】胡亂（ウロン）坐

①東福清規云、兩序交代禮。東西新兩班人、共到無價軒。先東序與住持觸禮外出。次西序與住持觸禮外出。兩序共到茶堂、據堂内床、東序西首列東、西序東首列西、位次未定、故謂之胡亂坐、亦謂不臘次也。住持坐中央椅子點茶。蓋爲定兩班、集衆點茶也。請客頭呈目子、住持下椅、向西立、先讀東序目子。侍客進次第請。東序受請了、都寺引維那監

寺、到住持前、都寺植香、兩展觸禮。都寺引班、到茶堂横廊、東壁北首向西立。次讀西序目子、禮如東序。首座引班到茶堂横廊、西壁北首向東立。

② 又侍者交代胡亂坐、見飲啖類七香湯處。

③ 忠曰、胡亂坐者、蓋對新職之位次得名。謂若欲受請未受已前列坐時、未知誰人可爲何職、且依舊位坐。以後受職位、視今坐位、則成雜亂、故爲胡亂坐矣。及受職畢、交互轉位、依某職位次。於是位方定。所謂東序、都寺監寺副寺等、西序、前堂後堂書記等、五侍、燒香書狀請客等、如此列次。敕修清規〔下一ノ十三丈右二行〕兩序進退、言轉位者是也。

（千坂成也）

【七八九】不臘次

① 即胡亂坐也。見胡亂坐處。

（千坂成也）

【七九〇】趲近

① 敕修清規〔上一ノ十九丈〕聖節云、粥罷上堂。〈乃至〉。衆行者、列知事後稍離遠立。〈乃至〉。住持至法座前、行者趲近、知事後立。

② 正字通〔酉中六十一丈〕云、趲則板切。贊上聲。逼也、走也。六書故、行第相趣也。

③ 品字箋〔庚ノ十丈〕云、趲催趲也。俗以緊行謂之趲歩。

④ 忠曰、衆行者初少離知事後者、爲開住持出路。若過己背後、則成失禮。況復住持至、迎問訊。〈見清規〉。故退立。今住持既過前去、故進走近知事背後立。此謂趲近也。

（千坂成也）

【七九一】右繞

① 敕修清規藏殿祝讚云、繞藏行道。〈見行道處〉。

② 忠曰、繞者須右繞也。

③ 四分律〔四十九ノ十一丈〕云、客比丘、於塔邊左行過、護塔神瞋。佛言、不應左行過、應右遶塔而過。

④ 薩婆多毘尼毘婆沙〔五ノ十丈〕云、右繞者、順佛法故、所以右繞。又密迹力士、若有左繞者、即以金剛杵碎之。又佛世世已來、常順三寶父母師長。一切教誡、無違無逆。令得果報、無有逆者。又佛身淨、衆生於中、各見所事。或天或神、莫不見者。是以畏敬、右繞而去。

⑤ 大毘婆沙論九十八〔四丈〕云、不吉祥故、説名爲左。如有於佛賢聖制多及天靈廟不右繞者、以不吉祥故名爲左。

⑥ 萬善同歸集〔上ノ二十六丈〕云、繞塔功德經云、勇猛勤精進、堅固不可壞。所作速成就。斯由右繞塔。得妙紫金色、相好莊嚴身、現作天人師。斯由右繞塔。

⑦ 淨源法師楞嚴道場修證儀〔十六丈〕云、夫右繞者、順向殷重、瞻望不足也。如是三匝、乃至百匝、亦無定數。

⑧ 行事鈔〔下三ノ二ノ十一丈〕僧像致敬篇云、大論如法供養、必應右繞。

⑨ 資持記諸經論、皆令右遶。古今諍論、紛紜不息。都緣不曉遶佛遶壇、兩儀自別。且直據祖教、略明大途。餘廣如別。初明遶佛者、歸敬儀〔通真記下ノ廿六丈〕云、右遶者。面西

北轉。〈如像面南、行者面北、擧步廻身、面西而去、從北而廻〉。右肩祖侍、向佛而恭。〈此示正儀〉。比見有僧、非於此法。便東廻北轉、此爲右遶。〈出錯見也〉。西竺梵僧、闐聚京邑、經行旋遶。目閲其蹤、並乃西廻、而爲右遶。以順天道、如日月焉。〈此引親見之事、證成上義〉。次明遶壇者、感通傳、天人述西竺戒壇云、衆僧登壇、受戒説戒事訖、東廻左遶、南出而返。戒壇經、祖師對眞懿云、律師勿見東廻左遶、以爲非法耶。此乃天常之大理也。〈感通傳云、天常乃左、人常乃右〉。祖訓明顯、人妄穿鑿、或曲引俗書。〈如執天文誌、李長者之説是也〉。或妄憑世事。〈如執牛踏稲、蜘蛛結綱之類〉。且遶佛者、本乎致敬。遶壇者、便乎行事。致敬則必須右遶、表執侍之恭之恭勤。行事則必須左遶、使上下而倫序。〈如入食堂、及説恣時、入堂之式〉。必依此判。寧復疑乎。若爾壇經云、東廻北轉、遶佛一匝者、答此本登壇、爲行受法、因旋佛後故云繞佛。豈同殿塔特申卑敬耶。〈古記引秀州靈光舍利左遶爲證。予親瞻禮。但觀金鐸動揺、豈見舍利左右。此亦斯罔之甚〉。

⑩ 忠按、禪林巡堂者左遶、而準遶壇儀。尋常行道者右遶、而準遶佛儀。資持記云、行事則必須左遶。注云、如入食堂。〈止此〉。禪規巡堂左遶、正合律文。又資持云、有僧、東廻北轉、此爲右遶。〈止此〉。余按、此亦非無據。天文家曰、天左旋、日月五星逆右旋。〈止此〉。此以東廻爲右旋。然天文家説左右、反常途。蓋人仰面於北斗、而以人左右爲天左右乎。記曰西廻爲右遶如日月者、且約現見耳矣。

（本多道隆）

【七九二】上肩順轉

①日用軌範〔敕修下一ノ四十七丈〕云、以上肩順轉。　註謂左肩也。

②敕修清規〔上二ノ七丈〕念誦云、順左肩轉、依圖位立。

③ 忠曰、左爲上者、古者尚右、後世尚左。叢林亦從時尚而已。如上堂已前、寢堂侍者東立、行者西立。是尚住持左也。住持登法座趺坐時、侍者及東西序、請法問訊、〈並在清規聖節規中〉。必以住持左爲上位而列行、皆斯義也。如今於己一身亦爾。以左爲上、故左肩曰上肩也。順轉者、即以左肩、自面前向右方而廻轉、此爲順轉矣。若以右肩、自面前向左方而廻轉、或以左肩、自背後向右方而廻轉、是逆轉也。

④僧祇律〔三十五ノ一丈〕云、經行時、不得背廻。應面向右廻。

⑤ 忠曰、是即言上肩順轉也。

⑥戰國策〔六下廿四丈〕趙策云、趙國豪傑之士、多在君之右。註右者人道所尊。補曰、秦漢以前、用右爲上。

⑦史記〔八十一ノ四丈〕廉頗傳正義云、秦漢以前、用右爲上。

⑧ 忠曰、秦已後、用左爲上、可知也。

⑨瑯邪代醉編〔三十六ノ十二丈〕云、朱承爵曰、古者賓位尚右。史記陳平願以右丞相讓周勃。語云、無能出其右者、及行尚西。禮記主人就東階、客就西階。諺呼主人爲東道、則古人坐尚右、行尚西、甚明矣。後世不察、遂以東左爲尊。

⑩齊東野語〔十ノ二丈〕云、按古人主當阼、以右爲尊、而遜客、而己居左、則左非尊位也。後世以左爲主位、而貴不敢當、則以左爲尊也。如魏無忌〔史記七十七ノ一丈〕迎侯主而虛車左、何也。地道陰道尚右。故後世之祀、以右爲上、今宗廟亦然。〈野語詳載古今左右之辨〉。

（本多道隆）

【七九三】結跏趺坐

①禪苑清規坐禪儀〔八ノ五丈〕云、欲坐禪時、於閑靜處、厚敷坐物、寬繫衣帶、令威儀齊整、然後結跏趺坐。先以右足安左脞上、左足安右脞上。或半跏趺坐亦可。但以左足壓右足而已。

②瑜伽師地論〔三十ノ七丈〕云、何因緣故結加趺坐。謂正觀見五因緣故。一由身攝斂、速發輕安。如是威儀、順生輕安、最爲勝故。二由此宴坐、能經久時、如是威儀、不極令身速疲倦故。三由此宴坐、是不共法。如是威儀、外道他論、皆無有故。四由此宴坐、形相端嚴。如是威儀、令他見已、極信敬故。五由此宴坐、佛佛弟子、共所開許。如是威儀、一切賢聖、同稱讚故。正觀如是五種因緣、是故應當結加趺坐。

③大毘婆沙論〔三十九ノ十六丈〕云、問、諸威儀中皆得修善、何故但說結跏趺坐。答、此是賢聖常威儀故。謂、過去未來、過殑伽沙數量諸佛及佛弟子、皆住此威儀而入定故。復次如是威儀、順善品故。謂、若行住、身速疲勞、若倚臥時、便增惛睡、惟結跏趺坐、無斯過失。故能修習殊勝善品。復次如是威儀、違惡法故。謂、餘威儀、順婬欲等諸不善法、惟結跏趺坐、能違彼故。〈乃至〉。復次住此威儀、怖魔軍故。謂、佛昔於菩提樹下、結跏趺坐、破二魔軍。謂、自在天及諸煩惱。故今魔衆、見此威儀、即便驚恐、多分退散。復次此是不共外道法故。謂、餘威儀、外道亦有、惟結跏趺坐、外道無故。〈乃至〉。問、結跏趺坐義、何謂耶。答、是相、周圓而安坐義。聲論者曰、以兩足趺、跏致兩脞。如龍盤結、端坐思惟。是故名爲結跏趺坐。脇尊者言、重疊兩足、左右交盤、正觀境界、名結跏坐。惟此威儀、順修定故。大德說曰、此是賢聖吉祥坐故、名結跏坐。

④慧琳經音義〔八ノ十丈〕云、跏趺、上音加、下音夫。皆俗字也。正體作加跗。鄭注儀禮云、跗足上也。顧野王云、足面上也。案金剛頂及毘盧遮那等經、坐法差別非一。今略擧二三、明四威儀。皆有深意。結跏趺坐、略有二種。一曰吉祥、二曰降魔。凡坐皆先以右趾押左股、後以左趾押右股。此即左押右。手亦左居上。名曰降魔坐。諸禪宗、多傳此坐。若依持明藏教、瑜伽法門、即傳吉祥爲上。降魔坐、有時而用。其吉祥坐、先以左趾押右股、後以右趾押左股、令二足掌仰於二股之上。手亦右押左、仰安跏趺之上。名爲吉祥坐。如來昔在菩提樹下成正覺時、身安吉祥之坐、手作降魔之印。是故如來、常安此坐、轉妙法輪。若依秘密瑜伽、身語意業、擧動威儀、無非密印。坐法差別、並須師授。或曰、半加或名賢坐、或象輪王、或住調伏。與此法相應、即授此坐。皆佛密意、有所示也。

⑤又慧琳經音〔廿六ノ二丈〕云、結加趺坐、趺音府。無反。三蒼云、足趺也。鄭注儀禮云、足上也。案、攝持鞋履之處、名爲足趺。慧琳云、結加趺坐者、加字、只合單作加。盤結二足、更互以左右足趺、加於二髀之上、名結加趺坐。其坐法差別名目頗多、不可繁說。今且略敍二種坐儀。先以右足趺加左髀上、又以左足趺加右髀上、令二足掌仰於二髀之上。此名降魔坐。二手亦仰掌展五指、以左押右、安在懷中。諸禪師、多傳此坐。是其次也。若依持明藏教灌頂阿闍梨所傳授、即以吉祥坐爲上、降魔爲次。其吉祥坐者、先以左足趺加右髀上、又以右足趺加左髀上、亦令二足掌仰於二髀之上。二手准前、展指仰掌、以右押左。此名吉祥坐。於一切坐法之中、此最爲上。如來成正覺時、身安吉祥之坐。左手指地、作降魔之印。若修行人、能常習此坐、具足百福莊嚴之相、能與一切三昧相應、名爲最勝也。

⑥止觀輔行〔二之一ノ三丈〕云、結跏者、先左後右。與兩脞齊。大論第九問云、有多坐法、何故但令跏趺坐耶。答、最安穩故。攝持手足、心不散故。魔王怖故。故偈云、得道慚愧

人、安坐若龍蟠。見畫跏趺坐、魔王亦驚怖。不同俗坐、及異外道翹立等也。字書云、跏趺者、大坐也。故知、此方未曉坐法。但云大坐。今佛法坐、其相如結、二趺相加。故云結跏。

⑦釋氏要覽［中五丈］云、結加趺坐、毘婆沙論云、是相圓滿安坐義。聲論云、以兩足趺加致兩脞、如龍盤結。脇尊者云、是吉祥坐。念誦經云、全加趺、是如來坐。半加趺、是菩薩坐。

⑧智度論［七ノ十三丈］云、問曰、多有坐法、佛何以故唯用結跏趺坐。答曰、諸坐法中、結跏趺坐、最安穩、不疲極。此是坐禪人坐法。攝持手足、心亦不散。又於一切四種身儀中、最安隱。此是禪坐、取道法坐。魔王見之、其心憂怖。如此坐者、出家人法。在林樹下、結跏趺坐、衆人見之、皆大歡喜、知此道人、必當取道。如偈説、　若結跏趺坐、身安入三昧、威德人敬仰、如日照天下。除睡嬾覆心、身輕不疲懈、覺悟亦輕便。安坐如龍蟠、見畫跏趺坐、魔王亦愁怖、何況入道人。安坐不傾動。　以是故結跏趺坐。復次、佛教弟子應如是坐。有外道輩、或常翹足求道、或常立、或荷足。如是狂狷、心没邪海、形不安隱。以是故、佛教弟子結跏趺、直身坐。何以故。直身心易正故、其身直、坐則心不嬾。端心正意、繫念在前。若心馳散、攝之令還、欲入三昧故。種種馳念、皆亦攝之。如此繫念、入三昧王三昧。

⑨薩婆多毘尼毘婆沙［三ノ五丈］云、結跏趺坐、爲正身故。所以正身、爲正心故。是正於心、必先正身。又云、九十六種外道、皆不結跏趺坐、欲異外道故、爲此坐法。又云、欲止睡眠故。又云、欲生前人信敬心故。如一時有異國、來罰罽賓。入其界内、見諸比丘、在山林樹下、結跏趺坐、正身正意、即生信敬、尋歸本國。又云、佛坐道樹時、結跏趺坐。利根辟支佛、亦結跏趺坐。以是諸縁故、結跏趺坐。

⑩供養次第法［下ノ十丈］不可思議疏云、跏趺坐者、凡坐法、聖善之寺三藏和上邊面受。左足先著右脞上、右足次著左脞上、名爲蓮華坐。單足著左脞上、名爲吉祥坐也。別此坐者、非聖坐也。若欲求菩提、學佛坐爲得。　又［下ノ四十五丈］云、蓮華座者、結跏坐。是所謂先左脚著右脞上、後右脚著左脞上也。吉祥坐者、右脚著左脞上、亦言半跏坐是也。

⑪忠曰、不思議所謂蓮華坐者、慧琳所謂吉祥坐也。不思議所謂吉祥坐者、半跏趺坐而又異于禪苑坐法。余謂、禪苑是降魔之半跏。以左壓右故。不思議是吉祥之半跏。以右單足壓左脞故。

（本多道隆）

【七九四】半加趺坐

①以左足、壓右脞。是菩薩坐。見結加趺坐處。

②四分律［四十九ノ八丈］曰、比丘尼結跏趺坐、血不淨出、汙脚跟指奇間。佛言、比丘尼、不應結跏趺坐。彼疑不敢、半跏趺坐。佛言聽半坐。

③毘奈耶雜事［三十一ノ三丈］云、諸苾芻尼、受用隨時供身臥具、跏趺而坐、宴默思惟。遂有蟲來、入不便處、因生苦惱。世尊聞已、告諸苾芻、諸尼不應跏趺而坐、以修寂定。應半跏坐。

（本多道隆）

【七九五】胡跪

①敕修清規［下一ノ廿一丈］沙彌得度云、引請闍梨、至戒師前、大展三拜、胡跪合掌。

②歸敬儀［通真ノ下ノ廿三丈］云、言胡跪者、胡人敬相。此方所無、存其本縁、故云胡也。或作胡跽者、檢諸字書、跽即天竺國屈膝之相也。俗禮云、授立不趫。趫謂屈膝、俗所諱之。凡有所授、膝須起立。　通眞記授立不趫、文出曲禮。俗所諱者、由是受刑之狀故。

③劉熙釋名［三ノ二丈］釋姿容云、跪危也。兩膝隱地、體危倪也。跽忌也。見所敬、忌不敢自安也。

④文獻通考［四十四ノ四丈］云、朱文公熹、白鹿禮殿塑像説曰、古人之坐者、兩膝著地、因反其蹠、而坐於其上。正如今之胡跪者。

⑤瑯邪代醉編［三十七ノ四丈］云、古者席地而坐。即今之跪也。故禮記稱跪、皆曰坐。以愚意觀之、跪則兩膝用力、坐則臀近于肱。

⑥賓退録［七ノ十四丈］云、莊子云跪坐而進之、則跪與坐、似有小異處。疑跪有危義。故兩膝著地、伸腰及股、而勢危者爲跪。兩膝著地、以尻著蹠、而稍安者爲坐也。

（本多道隆）

【七九六】互跪

①歸敬儀［通真下ノ廿二丈］云、言互跪者、左右兩膝、交互跪地。此謂有所啓請、悔過授受之儀也。佛法順右、即以右膝拄地、右髀在空、右指拄地。又左膝上戴、左指拄地、使三處翹翹、曲身前就。故得心有專志、請悔方極。此謂心隨其身、行慢失矣。

②忠曰、三處者、右膝右指左指、此三拄地。餘皆在空也。

③釋氏要覽［中ノ五丈］云、互跪天竺之儀也。謂左右兩膝。互跪著地故。釋子皆右膝。若言胡跪、音訛也。

④文獻通考［四十四ノ四丈左］云、跪與坐、又自有少異處。疑跪有危義。故両跪［膝乎］著地、伸腰及股、而勢危者爲跪。兩膝著地、以尻著蹠、而稍安者爲坐也。

⑤宋史［傳百三十七ノ一丈］衞膚敏傳云、膚敏使金、及受書、欲令雙跪。膚敏曰、雙跪乃北朝禮。安可令南朝人行之哉。爭辨踰時、卒單跪以受。

⑥又見禮拜處。

（本多道隆）

【七九七】長跪

①歸敬儀［下ノ廿三丈］云、僧是丈夫、剛幹事立、故制互跪。尼是女弱、翹苦易勞、故令長跪。兩膝據地、兩脛翹空、兩足指拄地。挺身而立者是也。

②南海寄歸傳［一ノ廿一丈］云、言長跪者、謂是雙膝踞地、竪兩足以支身。舊云胡跪者非也。五天皆爾。何獨道胡。

③釋氏要覽［中ノ五丈］云、長跪。即兩齊著地。亦先下右膝爲禮。神足無極經云、月天子、即從座起、更整衣服、前下右膝、叉手長跪。毘奈耶云、女體弱、跪要倒、佛聽長跪。

④忠曰、今人所爲互跪者、右膝著地、右蹠承尻、植左膝屈之、左蹠蹈地、都無在空者。不知所謂三處翹翹、爲何物。如此互跪、易於長跪。寧長跪可踣、互跪不可倒。翻令人疑互跪難爲、長跪易爲之説。

（本多道隆）

【七九八】踉跪

①長跪又作踉跪。

②慧琳一切經音義［卅九巻一丈］云、踉跪、上丈良反。方言云、東郡謂跪曰踉跪。廣雅、踉

（本多道隆）

登拜也。古今正字、從足長聲。登音務。下逵位反。雙膝跪地也。

【七九九】住持位前不可行過

①住持座位之前、横行過爲失禮。

②校定清規［下八丈］云、巡堂之法、首座從下巡上、免得於住持位前行故也。

（本多道隆）

禪林象器箋卷第十一

神京妙心龍華沙瀁道忠無著甫輯

〇垂説類

【八〇〇】上堂

①楊億古清規序［敕修下一ノ廿五丈］云、長老上堂陞座、主事徒衆、鴈立側聆。

②傳燈録［三ノ廿三丈］弘忍大師章云、能居士跪、受衣法。〈乃至〉禮足已、捧衣而出。是夜南邁。大衆莫知。忍大師、自此不復上堂。凡三日、大衆疑怪致問。祖曰、吾道行矣。何更詢之。　又［五ノ廿四丈〇古宿一ノ三丈］南嶽讓禪師章云、後馬大師、闡化於江西師遣一僧去云、待伊上堂時但問作麽生。伊道底言語、記將來。僧去、一如師旨。廻謂師曰、馬師云、自從胡亂後三十年、不曾闕鹽醬。師然之。　又［六ノ十七丈］百丈海禪師章云、馬祖上堂、大衆雲集。方陞座良久。師乃卷却面前禮拜席。祖便下堂。

③忠曰、五祖章、已有上堂語。蓋其盛行。自馬祖百丈時而已。

④祖庭事苑［八ノ十三丈］云、或問、毎質諸佛經所集四衆、未嘗不坐。今禪門上堂、必立而聽法、何謂也。曰此百丈禪師之深意也。且佛會説法、四衆雲萃。所説法義、不局性相。所會時節、未知久暫。今禪門、自佛教東流後六百年。達摩祖師、方至漢地、不立文字字、單傳心印、直指人心、見性成佛。所接學者、俾於一言之下、頓證無生。所聚之衆、非久而暫。故不待坐而立也。百丈曰、上堂升座、主事徒衆、鴈立側聆。賓主問酬、激揚宗要。示依法而住。此其深意也。

⑤古徳曰、睦菴所辯如此、而後代［敕鈔四ノ九丈書］不然。如諸録普説五六紙、或至十餘紙。豈可謂一言下、證無生、所聚非久哉。

⑥忠曰、質之佛經、四衆皆坐者、蓋經首聽法、往往有退坐一面文。又十誦律［四十一ノ十六丈］云、比丘尼到祇洹聽法。諸比丘敷敷具竟。多有殘在。比丘尼語比丘言、餘者、借我等坐。比丘白佛言、聽敷敷具竟、殘與比丘尼坐。又毘奈耶雜事［十九ノ十四丈］云、聽法之時、應敷座席。〈止此〉。此亦容坐聽。然而立聽、是佛制也。智度論云、佛法中、諸外道出家、及一切白衣、來到佛所皆坐。外道他法。輕佛故坐。白衣如客、是故坐。一切五衆、身心屬佛、是故立。若得道諸阿羅漢、如舍利弗・目連・須菩提等、所作已辦。是故聽坐。餘雖得三道、亦不聽坐。大事未辦。結賊未破故。〈止此〉。由此、出家五衆、除得道者外、不許坐而聽法者、西竺古制、而龍樹之論、如揭日也。非百丈深意。爲説不多。集不久創立此規。睦菴不援智度而酬問、而臆斷。爲百丈新立者殆乎誣矣。智論復言、坐者於供養不重。立者恭敬供養法重。〈止此〉。是故華嚴善財聽法、無不言起立合掌白言、頂禮其足、合掌而立等。又大集經云、金剛光藏世界大衆、至娑婆世界、

觀見釋迦牟尼如來、頭面禮足、右繞三帀。却拄一面、合掌而立。〈止此〉。此是賓客亦立。蓋敬法重於供養也。

⑦ 舊説［敕修鈔四ノ六丈］曰、以上堂對小參、則可稱大參也。

⑧ 忠曰、凡四節、開爐・元宵・佛祖忌・國忌。請兩班、謝秉拂、謝都寺齋、祈雨雪、禳旱澇。出隊、病起、客至、訃至。一切因事、無不上堂。不可枚舉。載在諸録。又曰、粥飯過僧堂、云上堂。〈見叢軌類〉。又上間下間、稱上堂下堂。〈見座位類〉。皆義別也。

（小川太龍）

【八〇一】旦望上堂

① 敕修清規［上二ノ一丈］上堂云、凡旦望、侍者隔宿、稟住持云、來晨、祝聖上堂。住持登座、拈香祝壽。〈其規如彼〉。

② 又見節時類、旦望處。

③ 舊説［敕修鈔四ノ六丈首出］曰、上古朝參暮參。中古五日一參。近代旦望參而已。〈忠曰、備用所説。見五上堂處〉。

④ 春明退朝録［次五參上堂詳引］云、唐在京文武官職事、九品以上、朔望日朝。又曰、其武官準令、五品以上、每月六參。〈五參上堂處詳引〉。

⑤ 忠曰、六參中、亦有朔望。雲章［敕修鈔四ノ六丈］曰、旦望上堂、且循俗禮也。〈止此〉。其説有據。

（小川太龍）

【八〇二】五參上堂

① 校定清規［下二丈］云、如初五・初十・二十・二十五、此四日、謂之五參上堂。座上不鋪設。衆中有未盡齊整。及常住缺典事。畧而提之、欲衆知也。不可多談世諦、厭人聽。古人朝暮恣參。何有限日。今從簡要。於五日。一陞堂也。侍者當隔宿、覆住持。恐住持事繁。或有失記。是日開靜前、令行者、報覆知事頭首寮舍。及再請後、挂上堂牌。

② 忠曰、朔日・五日・十日・十五日・二十日・二十五日。一月総有六參。但旦望、別有祝聖上堂。故除之、餘四日、名爲五參。即每五日、一參也。非謂一月五度參矣。蓋擬朝制、五品以上官、五日一朝。若鼠璞及退朝録則十日作十一日。二十日作二十一日。餘同此。參義見小參處。

③ 敕修清規［上二ノ一丈］上堂云、五參上堂、兩序至座下、徑歸班立、住持登座。不拈香。

④ 舊説［敕修鈔四ノ六丈］曰、五參上堂、同小參。鳴法鼓唯一通。

⑤ 唐書［志ノ三十八ノ一丈〇紺珠九ノ六十六丈引］百官志云、文武官、職事九品以上。及二王後、朝朔望、文臣五品以上。及兩省供奉官、監察御史員外郎太常博士、日參。號常參官。武官三品以上、三日一朝。號九參官。五品以上。及折衝當番者、五日一朝。號六參官。

⑥ 五代史［五十四ノ五十八〇白孔三十六ノ廿一丈引］李琪傳云、明宗初即位。及詔羣臣、五日一隨宰相、入見内殿。謂之起居。琪以謂非唐故事。請罷五日起居、而復朔望入閤。明宗曰、五日起居、吾思所以數見羣臣也。不可罷、而朔望入閤可復。

⑦ 宋［正百卅二〇郛四十一］宋敏求春明退朝録［中ノ九丈］云、唐在京文武官、職事九品以上、朔望日朝。其文官、五品以上、及監察御史、員外郎、太常博士、每日參。武官、五品以上、仍每月五日、十一日、二十一日、二十五日、參。三品以上、九日、十九日、二

十九日、又參。〈王沂公家一本云、四品以上、九日、十九日、二十九日、再參〉。其長上折衝果毅、若文武散官、五品以上、直諸司、及長上者、各準職事參。其洪〈正字犯宣祖廟諱〉文館、及國子監博士學生、每李參。若雨雪霑服失容、及泥潦並停。〈以上唐儀制令〉。凡京百司、有常參官、謂五品以上、職事官、八品以上供奉官。〈以上唐六典〉。正〈正字犯仁宗嫌名〉。元二年、敕文官充翰林學士。皇太子諸王侍讀、武官充禁軍職事、並不常朝參、其在三館等。諸職掌者、並朝參訖、各歸所務。是年、御史中丞竇參奏、常參文武官、準令每日參。自艱難以來、遂許分日。待戎事稍平、即依常式。其武官準令、五品以上、每月六參。三品以上、更加三參。頃並停廢。今請準令、却復舊儀。十三年御史臺奏、諸司常參文官、隔假三日以上、並以横行參假。其武班、每月先配、九參六參。〈九參謂、一月九次。六參謂、一月六次〉。今後每經三節假滿、縱不是本配入日、並依文官例、横行參假。〈以上唐會要〉。後唐同光二年、四方館奏、今後除隨駕將校、及外方造奉專使、文武兩班、三品以上官、可於内殿對見。其餘並詣正衙從之。天成元年、御劄賜文武百僚。每日正衙常朝外、五日一赴内殿起居。每月朔望日、賜廊下食孚。唐室承平時、常參官、每日朝退賜食。謂之廊餐。自乾符亂離罷之。惟月旦入閤日、賜食。明宗即位、諫官請、文武百僚五日一起居、見帝於便殿。李琪以爲、非故事。以五日爲繁、請每月朔望日入閤。賜廊下食、罷五日起居之儀。至是宣旨、朔望入閤外、五日一起居、以爲常。天成元年敕、今後若遇不坐正殿日、未御内殿前。便令閤門使宣不坐放朝、班退。是年御史臺奏、凡新除官、及差使者、合於正衙謝辭。每遇内殿起居日、百官不於正衙敘班、其差使及新除官辭謝。不令參謝。每内殿起居日、百僚先敘班於文明殿庭、候辭謝官退。則班入内殿、從之。晉天福二年、中書門下奏、在内延諸司使等、每除正官。請令赴正衙。後不赴常朝、其京官未陞朝官。祇赴朔望朝參、從之。〈以上五代會要〉。國朝諸在京、文武陞朝官、每日朝、其有制免。常朝者、五日一參起居。〈國朝令文〉。按唐制文武職事官、並赴常參、武班五日一參。又有三日一參。〈五日參并朔望爲六參。三日參乃九參〉。所謂常參官、未有無職事者、由後唐同光中乃分常朝内殿、凡隨駕將校外方進奉使、文武三品以上官、即於内殿對見。其餘並詣正衙。至天成初詔、文武百官、每日常朝外、五日一赴内殿起居。其趨朝官、遇宣不坐放朝、各退歸司。本朝視朝之制、文德殿日外朝、凡不釐務朝臣日赴。是謂常朝。垂拱殿曰内殿、宰臣樞密使以下、要近職事者、并武班日赴、是謂常起居。每五日、文武朝臣釐務令釐務、並赴内朝。謂之百官大起居。是則奉朝之制。自爲三等。蓋天子坐朝、莫先於正衙。殿於禮羣臣無一日不朝者、故正衙雖不坐。常參官、猶立班俟放朝。乃退。〈唐有職事者、謂之常參。今隸外朝不釐務者、謂之常參〉。

⑧ 又鼠璞説、見叢軌類、參假處。

⑨ 大慧〔三ノ九十五丈〕爲眞空道人慈行普説云、方是時、大潙〈眞如慕喆〉。法席甚盛。龍象蹴踏、每遇陞堂。三通鼓罷、大衆鴈行而立、風滲滲地。趺坐良久、乃舉箇古人頌子云、欲識本來心、青山緑水深。不是身心境。徒將聞見尋、識得便識取。不用更沈吟。參。便下座。後五日、又當參、復舉。是柱不見柱、非柱不見柱。是非已去了。是非裏薦取。參。但是陞座、除拈提公案外、其餘多類此。有箇川僧滑稽、從潙山下來。有問大潙法道如何。僧云、規矩法度甚好。只是念誦多煞。曰、三八念誦叢林定法。何言甚多。僧云、大潙獨不然。三八日、僧堂前維那念誦了。五日法堂上、長老又念誦。衲子傳以爲笑。

⑩ 普燈録〔十五ノ十六丈〕佛海遠禪師章云、上堂、昨夜來報五參。正値老僧洗脚。起來抖擻精神。末上輸他一著。

⑪雪巖欽禪師録［上ノ四十三丈］云、凡遇五參。見曲彔床上箇漢、胡説亂道。何不也歴在耳根。　又［上ノ四十四丈］云、前日有兩箇兄弟、來侍者寮説、要上方丈請益。我與侍者説、毎遇五參。須説做工夫一段。他何不領畧。又何須到方丈聽説、方纔便是。這裡無口傳心授底佛法。待此後五參。把我自己。爲伊再説一遍。

⑫普燈録［十二ノ十九丈］西禪舜禪師章云、上堂曰、五日一參。三八普説。千説萬説。横説竪説。云云。　又［二十ノ五丈〇会元二十ノ六十四丈］簡堂機禪師章云、上堂曰、五日一參。三八普説。自揚家醜。更苦問理問事、問心問性。克由叵耐。

⑬別峯印禪師録［孚古辰］、慈航到上堂曰、毎遇五日一參。雖是諸方舊例、今日宗師面前、豈容亂呈懵袋。雖則恁麽、不可放過。云云。

⑭別峯雲禪師録云、上堂、支提門下、五日一參。我纔合掌、汝便和南。云云。

⑮無準範和尚録普説云、凡遇五日、須要上堂。三八須拄牌勉強以塞方丈之責。亦不是矜誇學解、眩曜見知。及造妖捏怪、只據自家所見。赤骨律地、與兄弟相見。

⑯偃溪聞禪師香山録上堂云、五日不陞堂。三八不入室。供是衆人辦。飯是借米喫。

⑰清拙澄禪師建長録［卅一丈］、舉龍濟修山主、諸佛不出世、四十九年説頌、師和二首。代五參上堂。

⑱　忠曰、日本古亦有五參。　中巖月禪師崇福録云、五參衆立定、師出來。大衆如例問訊。〈云云〉。

（小川太龍）

【八〇三】五上堂

①五參上堂。又名五上堂。

②備用清規［二ノ三丈］五日上堂云、古宿、朝夕激揚此道。晩參曾不越宿。今時遇五上堂、單提正令。亦不易得也。

（小川太龍）

【八〇四】九參上堂

①退朝録云。九參。謂一月九次。又云。三日參。乃九參。〈見五參上堂處〉

②　古徳有行九參上堂者。

③傳燈録［廿一ノ七丈］羅漢琛禪師章云。衆僧晩參。聞角聲。師曰。羅漢三日一度上堂。王太傳二時相助。

（朝山一玄）

【八〇五】聖節上堂

①天子生日爲聖節。〈詳＝＝類〉上堂祝壽。詳敕修清規［上一ノ十八丈］

②續燈録［十九ノ十七丈］禾山志傳禪師章。有聖節看經上堂。

③日本亦行聖節上堂。　清拙［日本ニノ］澄禪師建仁録［？］有天壽節上堂。

（朝山一玄）

【八〇六】謝秉拂上堂

①四節。頭首秉拂之後。住持上堂。謝勞。此謂謝上堂。

②敕修清規［下二ノ十三丈］四節秉拂云。次日方丈請茶。如都寺辦齋。併請茶。半齋點心。別日上堂敍謝管待。

③虛堂愚和尚［二ノ］寶林録［九丈］謝頭首秉拂上堂云。以壇拜將。爲求活國之英。以拂授人。要見枯心之士。雲黄峯下。象龍所歸。虛堂薄處先穿。引得證龜作鼇。

（朝山一玄）

【八〇七】謝都寺齋上堂

①四節秉拂。都寺辦齋。住持上堂。謝之。〈見謝秉拂上堂處〉

②虛堂愚和尚育王録［三ノ廿四丈］謝秉拂夏齋上堂云。一稱南無佛。皆已成佛道。若説到金輪水際。崑崙山椒。功歸何所。擊拂子。吽吽。有甚饉饉餽子。快下將來。

③希叟謝都管冬齋上堂。〈見職位類都管處〉

④南堂謝秉拂冬齋上堂。〈見飲啖類冬齋處〉

⑤北磵簡禪師續集［九丈］化齋偈云。解結冬年辦四齋。赤洪崖打白洪崖。信心檀越家家是。只告諸天次第排。

（朝山一玄）

【八〇八】出隊上堂

①出隊義。見雜行類。

②大川濟和尚天章録［一丈］出隊上堂云。爲衆持鉢去。七佛舊儀式。菴園塔廟間。處處遍敲擊。施主一聲慚愧。化主當面著賊。賊已著了。且道如何拔本。太無厭生。

③元叟端禪師録［六ノ八丈］出隊寄歸。示衆偈云。太湖三萬六千頃。垂白西來把釣竿。蝦蟹魚龍都不見。月明空照夜濤寒。

④北磵簡禪師道場録［三丈］出隊歸上堂云。半月出去。鼻孔不見眼睛。一日歸來。眼睛不見鼻孔。失却惺惺。換得骨董。雖然只是潑骨董。貪者不與。廉者不取。卓拄杖云。打歸常住。

（朝山一玄）

【八〇九】出鄉上堂

①密菴録多出鄉上堂。蓋即出隊也。

②密菴傑禪師靈隱録［七丈］出鄉歸上堂云。持鉢去持鉢歸。草鞋跟斷通消息。玲瓏八面盡光輝。遊魔宮入虎穴。當機撞著惡聲頭。直教心地頓休歇。且據箇什麽道理。便乃如是。老不以筋力爲能。

（朝山一玄）

【八一〇】因事上堂

①忠曰。雖其事不定。多是有毀逆違難。因此説法。不露言其事。故稱因事也。

②虛堂和尚［三ノ卅九丈］育王録因事上堂云。天之有雲也。可以蔽日月。降甘雨。地之有水也。可以濟舟楫。潤焦枯。人之有心。可以興禍福。制剛柔。三才既明。理歸一揆。所以然者何也。卓拄杖。大鵬展翅蓋十洲。籬邊燕雀空啾啾。

③祖庭事苑［三ノ十七丈］云。叢林或説因事。往往妄議當日猥瑣世諦雜事。豈其然也。夫宗師唱道。無不因此事。而有語言偈頌。以接引學者。豈存誠於世諦者哉。若宗師。因世諦。

彼非此是。以出示人天。又何足爲後世法耶。至如初洞山因事頌曰。五臺山上雲蒸飯。佛殿前頭狗尿天。刹竿頭上煎饂飩。三箇猢猻夜簸錢。又慈明因事頌。時來開鉢展巾單。飯了收盂困即眠。石人撫掌呵呵笑。木女彈箏你自箏。又韶九峯因事頌。收得便除四足。兩耳却拄金鐶。好是月明深夜。一聲清透松關。此皆因事而作。豈留情於是非動靜之間者哉。

④ 忠曰。睦菴以因事。強爲因此事。不因世諦。若然。則宗師語言。上堂偈頌。無不因此事。則都可名因事上堂偈頌矣。特標因事何爲。凡佛祖出乎五濁惡世垂化。動則遇魔難。宗師即託魔難。開示道法。此云因事上堂。因事偈頌而已。何復彼非此是耶。

（朝山一玄）

【八一一】引座

①忠曰。引座者。導引他陞座也。若突然敷演。則衆可驚疑。故住持先表白。故語尾。必有恐人無憑等語。舊説［敕鈔四ノ九丈〇又五ノ十五丈］曰。引座有二。一他寺尊宿來訪時。首座勤請説法。住持爲之先引座。以申尊宿。當爲衆闡揚之意。二他刹虚席。請本寺西堂。或首座等。遷補。即專使。先請本寺住持引座。次受請新命陞座。

②敕修清規［上二ノ二丈］上堂云。若尊宿相訪。特爲上堂。或引座舉揚。　又［上二ノ十一丈］迎待尊宿云。如大尊宿。則首座衆頭首。稟住持。勸請爲衆。開示法要。住持先到客位。陳意。若允。首座具状。兩序大衆。同詣客位。挿香拜請。次請住持引座。〈乃至〉住持先引座。與常上堂同。

③　右爲尊宿引座者。

④敕修清規［上二ノ十七丈］受請人陞座云。住持出陞座。與五參禮同。令請客侍者。請新命趺坐。褒美新命爲法而出。勤請舉揚。慰衆渴仰。舉話有無不拘。〈松源爲掩室引座、笑菴爲松源引座、皆不舉話石橋爲簡堂引座、息菴爲復菴引座、皆舉話、〉

⑤無準範禪師徑山録［二ノ十五丈〇石溪録亦載］石谿和尚赴蔣山。引座云。寶公寶山之寶。非青黄赤白等色。亦非大小方圓等相。三賢莫辨。十聖那知。是故公亦秘惜。若非其人。未易分付。今日石谿不涉安排計較。突然在前。無心而得。既得之已。亦不以爲奇特。眩曜於人。是則故是。爭奈我此千百衲子。虚心久矣。皆欲一見。是以鳴鼓集衆。慇懃虔請。願陞此座。於香煙起處。放此寶光。令我一衆。因此寶光。獲見此寶。同得受用。盡未來際。永無退失。然雖恁麼。更有一事。不得不疑。或有箇没意智漢。不識好惡。犯衆出來道。蔣山蔣山。不得將常住物。作自己人情。吾姪却須自作支遣。莫教累及老叔。恐人無憑。先此奉白。

⑥　右爲受請新命引座者。

（朝山一玄）

【八一二】陞座

①舊説［敕鈔四ノ十九丈］曰。普説爲陞座。或上堂亦稱陞座。

②忠曰。古有上堂稱陞座者。如臨濟録後世陞座與上堂不同。諸録已分二名。不可槩爲一也。又日本稱陞座者。多有散説。與普説同。如唐僧。無學大休竺仙清拙等日本録中陞座。亦有散説。蓋觀土風。愜時機而已。按陞座有散説。無學爲濫觴焉。

③瑞溪臥雲日件録［下九丈］云。妙智太岳曰。陞座與普説。有異。然此方陞座。全同普説。有散説。其弊自絶海矣。予按絶海已前尊宿陞座。早有散説。〈忠次下引〉

④敕修清規［上二ノ十五丈］受請陞座云。侍者覆住持。鳴鼓。如常上堂式。
⑤聯燈會要［一ノ九丈］釋迦牟尼佛章云。世尊一日陞座。大衆纔集定。文殊白槌云。諦觀法王法。法王法如是。
⑥六祖法寶壇經［上ノ十八丈］云。韋使君請益。師陞座。
⑦臨濟玄禅師録云。府主王常侍。與諸官請師陞座。師上堂云。山僧今日事不獲已。曲順人情。方登此座。〈云云〉。
⑧　已下畧録來朝唐僧。日本録中。陞座有散説者。無學元禪師建長録［一ノ五十四丈］慶讚釋迦圖繪像。陞座。先提綱。次散説〈百六十言〉後説偈。又［一ノ六十丈］越州太守夫人。請慶讚釋迦像。楞嚴經。陞座。先提綱。次散説。〈三百七十言〉後四句偈。　又圓覺録［二ノ一丈］開堂。大光明殿慶讚陞座。先拈香。次趺坐提綱。次散説。〈四百七十言〉後長偈。
⑨　忠曰。無學録。陞座數則。但此三則。有散説。然不如後人繁長。
⑩大休念禪師壽福録［四十九丈］武藏守三祥。供淨智寺開山。陞座。先拈香。次就座散説。後説偈。
⑪竺仙仙禪師淨妙録［十五丈］足利觀心公周年忌。陞座。先問答。次提綱。次散説。後長偈。
⑫清拙澄禪師録［日本録陞座一丈］近江太守直菴居士。七七日。陞座。從頭散説。次回向。後拈提。　又［四丈］直菴百日拈香。陞座。先拈香。次問答。次散説。次回向。次敘謝。後四句頌。
⑬　已下畧録日本禪祖。陞座中。有散説者。
⑭南浦明禪師萬壽録［下四丈］龜山法皇大祥。奉敕就嵯峨殿。陞座、先拈香。次就座。索話問答。次提綱。次散説。後拈提。
⑮夢窓石禪師天龍録［上ノ五十四丈］後醍醐天皇十三回忌。就多寶院。陞座。先拈香。次就座問答。次提綱。次散説志趣。回向。後長偈。　又［下ノ五丈］慶讚京城東山八坂寶塔。陞座。全同上。
⑯月菴光禪師録［上ノ六丈］前豫州太守。爲先考正受院殿。陞座。先拈香。次志趣回向。次就座。索話。問答。次提綱。次散説志趣。回向。後拈提。説偈。
⑰　忠曰。支那諸録。陞座無散説。且如續燈録所載。淨因臻。圓通秀。佛國白等。自餘不遑枚舉。

（朝山一玄）

【八一三】説禪

①忠曰。日本禪林。有説禪一規。而今詳之。只是陞座耳矣。其必拄文殊像者。蓋行之於僧堂也。有處。沒意智。對機之後。不提綱。直敘志趣或初垂語。敘志趣。皆失體裁。其提綱之後。説志趣者。如宋時慧林德遜［続灯十三ノ二丈］。〈佛陀禪師〉淨因惟岳［十六ノ六丈］。〈佛日禪師〉慈德殿陞座。見續燈録
②夫説禪者。何謂也。但是謂提綱説法而已。故大鑑禪師叢林細事［清規四十三丈］云。秉拂提綱。不必押韻但據平生參學所見。滔滔地説將去。所貴宗眼正。手段高。如臨濟德山趙州雲門。可以爲法。若能如是。古風可復。古來但云説禪。不言做禪。〈止此〉。然説禪。而無提綱。何説禪之有。
③　忠曰。中華未有規矩。詺説禪者。其禪史祖録中。唯有説禪文字。畧録一二。
④聯燈會要［八ノ五丈〇会元九ノ十五丈］仰山寂禪師章云。溈山云。寂子説禪。如師子吼。驚殺

狐狼野犴之屬。

⑤傳燈録［七ノ十九丈］歸宗常禪師章云。師上堂云。吾今欲説禪。諸子總近前。大衆進前。師云。汝聽觀音行。善應諸方所。

⑥大慧［三ノ卅七丈］爲照超二大師普説云。有箇月和尚。法嗣大通自信禪不及。每日在方丈内。修長懺。所以端師子有頌。譏之曰。何山長老修長懺。壇上闍梨愛説禪。子細思量無別事。都盧只爲大光錢。

⑦中峯［録十一ノ八丈］山房夜話云。今之禪流。將欲據大牀。揮塵尾。首取諸家語要。揀擇記持。及漁獵百氏之雜説。以資談柄者。是説禪之師也。不惟不能與人解黏去縛。而亦自失本眞。喪壞道眼。

（朝山一玄）

【八一四】小參

①舊説［敕鈔四ノ六丈］、小參、不時講之。鳴鼓唯一通。其規約於大參。故曰小參。大參［敕鈔四ノ十一丈］者、上堂也。參［同上］者、交參義。

②敕修清規云。凡集衆開示。皆謂之參。〈見晚參處〉。

③祖庭事苑［八ノ十三丈］云。禪門詰旦升堂。謂之早參。日晡念誦。謂之晚參。非時説法。謂之小參。夫是皆以謂之參者。何乎。曰參之爲言。其廣且大矣。謂幽顯皆集。神龍並臻。既無間於聖凡。豈輒分於僧俗。是以謂之參也。其主法者。以平等一心。應勤植萬類。令法久住。豈曰小補。或以小參。爲家訓。愚未之前聞。

④敕修清規［上二ノ二丈］小參云。小參初無定所。看衆多少。或就寢堂。或就法堂。〈乃至〉。鳴鼓一通。衆集兩序歸位。住持登座。〈與五參上堂同〉。提綱敍謝。委曲詳盡。然後舉古。結座。

⑤　又［上二ノ二丈］晚參云。如住持入院。或官員檀越入山。或受人特請。或爲亡者開示。或四節臘。則移於昏鐘鳴。而謂之小參。可以敍世禮。曰家教者。是也。

⑤禪苑清規［二ノ三丈〇鈔四ノ十一丈引］小參云。小參家訓。綱紀叢林。夫小參之法。初夜鐘鳴。寢堂設位。集知事徒衆。賓主問酬。並同早參。提唱之外。上自知事頭首。下至沙彌童行。凡是衆中。不如法度。事無大小。並合箴規。〈廣説乃至〉。出家行脚。入衆參禪。粥飯茶湯。晨參暮請。語言事業。動止威儀。應係衆中規矩。並當委曲提撕。若其緘口無言。迤邐玄綱墜地。後進如蒙法藥。應當刻骨銘肌。斂片善以無遺。剔纖瑕而必去。小參之設。意在斯焉。

⑥有行堂講之者。　希叟曇禪師録。有行堂小參。〈又見立參虚〉。

⑦　義堂日工集云。建長衆寮。聽長老中巖講清規。云。天童淨和尚小參。不必於法堂。隨處行之。故今日本永平寺猶講此規。

⑧傳燈録［十四ノ十三丈］藥山儼禪師章云。大衆夜參。不點燈。師垂語曰。我有一句子。待特牛生兒。即向汝道。時有僧曰。特牛生兒也。何以不道。師云。侍者把燈來。其僧抽身入衆。

⑨聯燈會要德山鑑禪師章云。小參示衆云。今夜不答話。問話者三十棒。時有僧出作禮。師便打。僧云某甲話也未問。爲甚便打。師云。你是甚處人。云新羅人。師云未跨舩舷時。好與三十棒。

⑩　汾陽小參。見提綱處。

⑪元亨釋書［八ノ廿一丈］藏山空禪師傳云。空白。石林老〈行鞏〉。禪海波瀾。吾雖不得而盡。偏洲傍渚。儻打浮泳。我昔辭林。林告曰。小參雖家訓。又自有家法。子歸故里。敲唱宗乗。妙叶之一路。不可亂做也。即與二篇。冬至曰。擬著即錯。鐵牛掣斷黄金索。不擬猶乖。撤手還同萬仞崖。這裏一咬便斷。如花開鐵樹。似笋迸石頭。無陰陽地。儘自寛閒。爭奈東山山前。一片松根竹脚。未曽踏著在。驀拈拄杖一畫云。不得侵彊越界。除夜曰。似地擎山。不知山之孤峻。鳳縈金網。趨霄漢以何期。如石含玉。不知玉之無瑕。蛇護神珠。蘊風雷而未化。設使翺翔霄漢。鼓蕩風雷。聞者震驚。見者眩惑。也只閒閒地可可地。豈不見。僧問洞山。年窮歳盡時如何。山云。家家門底野狐兒。拍床云。鯨呑海水盡。露出珊瑚枝。

【八一五】家教　（神足浩正）

①小參又曰家教。又見小參處

②黄龍死心禪師録［緇門警訓下ノ八丈○中岩建長録○大同○三丈○續古宿一○普燈廿五ノ十三丈］云。夫小參者。謂之家教。何謂家教。譬如人家。有三箇五箇兒子。大底今日幹甚事。小底今日幹甚事。是與不是。晩間歸來。父母一一處斷。叢林中亦復如是。院門今日幹甚事。是與不是。住持人。當一一處斷。

③清拙澄禪師聖因録［廿五丈］云。古徳小參。謂之家教。説些細大法門。汾陽六七人。夜夜小參。徳山小參。不答話。問話者三十棒。令行千古。如在耳目。雲峯悦禪師小參。舉百丈示衆語。至今叢林。膾炙人口。莫不皆是從悲智海中流出。血滴滴地。親切爲人處。豈似後來攢花簇錦。對句押韻。以當宗門提唱。　又日本［三］録小參［十五丈］云。古徳小參謂之家教。細大法門。一一指陳。後來法道不古。競出新様。攢花簇錦。以巧妙爲奇特。不知古人實頭處。正是拙中之巧。

④　雲峯小參。聯燈録［十四ノ十丈］載。

⑤笑隱訢禪師龍翔録［卅六丈］云。明日結制。今夜小參。謂之家教。如家裡人。説裡話。

【八一六】家訓　（神足浩正）

①小參曰家訓。〈見小參處〉。

②校定清規［下ノ三丈○敕鈔四ノ十二丈引］云。小參謂之家訓。初夜鳴鼓。寢堂排設。〈有處只就法座〉。事無大小。竝合箴規。衆中規矩。委折提撕。若其緘口無言。迤邐綱宗墜地。小參之法。意在斯焉。鳴鼓一通。侍者候衆集定。請住持。出踞座。侍者於法座前問訊。〈云云〉。古之叢林。毎夜咨參。汾陽以夜寒罷參。不特爲規矩家訓。而設意專激勵學者。箴其做處偏枯。各自討生涯。立地成佛作祖。今時叢林。毎遇解結冬年四節。小參。蓋爲敍謝兩班。及大小職務。又縁諸方專係都寺幹齋。故當晩小參時。敍謝心力爲衆之勤。若常住自辨。不必言也。〈云云〉。如施主請小參。觀其來意。或咨扣因縁。則又與家訓不同也。或齋後。或夜静。俱得。又有所至處。官員請小參者。又有出隊處。衆人裒率。請小參者。雖名爲小參。乃與升座。事體一同。此尊宿家。遇縁即宗之謂也。

③備用清規［二ノ四丈］小參云。百丈謂之家訓。古法。只就寢堂。箴誨垂示。委曲提撕。〈乃

至〉。前輩時時。激揚宗旨。開發後昆。

④ 忠曰。祖庭事苑［八ノ十二丈］云。或以小參爲家訓。愚未之前聞。〈止此〉。余謂。死心敷衍小參謂家教義。〈見家教處〉。睦菴與死心同時人。或怪其説乎。然備用已言。百丈謂之家訓。蓋其目在古清規。而睦菴偶不見也。

⑤ 中巖月禪師建長録［三丈］入寺當晩小參。垂語問答畢。師乃云。小參者。家訓也。古德喩之。有一大家底主人。朝暮使令屋裏兒女姪弟。排列座下。分付家中行事云。大兒當行其事。小底當作何事。以至奴婢僕輩。一一示其當行事。便如我宗門中。兩序諸職事人。教它排列法座下。一一標示當行底事。乃至四來兄弟。在僧堂裏。究明已躬大事。斯乃最要緊事。近來佛法弊甚。在小參時。長老力作文言。謂是提綱。或舉古則。拈之頌之。以當宗旨。以予觀之。當得甚麼椀脱丘。兄弟家。莫説道。新長老不會説法。只會弄口觜。才方入院雜談惡言。以當佛事。便是雜惡言談。不會文章詞語。他後到閻王面前。未知他愛你文言耶。又聽我條直言語乎。兄弟各自諦審思惟。勉之。〈次結座。其語見結座處〉。

（神足浩正）

【八一七】朝參

①早朝參禪也。

②禪門規式［傳燈六ノ廿二丈］云。闔院大衆。朝參夕聚。

③僧史畧［廿三丈］別立禪居章云。有朝參暮謂之禮。隨石磬木魚。爲節度。

④ 忠曰。禪林朝參於粥罷。

⑤普燈録［三ノ八丈］楊岐會禪師章云。一日當參。粥罷久之。不聞撾鼓。師問行者。今日當參。何不擊鼓。云和尚〈慈明〉。出未歸。師徑往婆處。見明執爨。婆煮粥。師曰。和尚今日當參。大衆久待。何以不歸。明曰。你下得一轉語即歸。下不得。各自東西。師以笠子蓋頭上。行數歩。明大喜。遂與同歸。〈忠曰。當參者。當五參之日也〉。

⑥ 忠曰。世禮言朝參者。蓋入朝參謁義。〈見五參上堂處〉。

⑦ 杜工部集［千家二ノ十三丈〇律ノ一ノ廿四丈］。重過何氏詩云。頗怪朝參懶。應耽野趣長。

⑧ 皇明通紀集畧［三ノ十五丈］。弘治紀云。今朝參外。不得一覩天顔。

（神足浩正）

【八一八】早參

①朝參。又名早參

②祖庭事苑［八ノ十三丈］云。禪門詰旦升堂。謂之早參。〈詳小參處〉。

③廣燈録［廿三ノ六丈］洞山聰禪師章。夏日早參頌云。晨參暮請無別事。古代相傳直至今。折旋俯仰全體是。莫累曹溪與少林。三月鶯啼春樹老。九旬時雨日霖霖。滴滴不離毗盧界。海上番人笑夜深。　又早參頌云。曙色纔分便即參。九年面壁過多談。俱胝一指虚勞力。禪客豈待口喃喃。

（神足浩正）

【八一九】晩參

①舊［敕鈔四ノ十一丈］説曰。晩參。對朝參爲言。

②敕修清規［上二ノ二丈］晩參云。凡集衆開示。皆謂之參。古人匡徒。使之朝夕咨扣。無時

而不激揚此道。故每晚必參。則在哺時。至今叢林坐參。猶旦望五參陞座。將聽法時。大衆坐堂也。若住持至晚不參。則堂司行者。稟命住持。覆首座。鳴僧堂鐘三下。謂放參鐘也。

③備用清規［二ノ二丈］坐參云。若晚參。堂司行者。不覆首座。不鳴僧堂前鐘。方丈客頭。鳴法堂鼓。住持出堂。首座頭首領衆。隨至法堂。或寢堂。隨方毘尼。上座坐定。侍者出班。兩班東西堂。各出班問訊。晚參畢。衆散各歸寮。藥石。

④臨濟玄禪師録云。師晚參示衆。

⑤僧寶傳［一冊ノ廿一丈〇廣灯十六ノ十二丈少呉〇会元十一ノ五十丈〇材閒下ノ卅六丈］汾州昭禪師傳云并汾地苦寒。昭罷夜參。有異比丘。振錫而至。謂昭曰。會中有大士六人。柰何不説法。言訖陞空而去。昭密記以偈曰。胡僧金錫光。請法到汾陽。六人成大器。勤請爲敷揚。　又［廿八巻］楊岐會禪師傳云。慈明。飯罷。必山行。禪者問道。多失所在。會闞其出未遠。即撾鼓集衆。慈明遽還。怒數曰。少叢林。暮而陞座。何從得此規繩。會徐對曰。汾州晚參也。何爲非規繩乎。慈明無如之何。今叢林。三八念誦罷。猶參者。此其原也。

⑦清拙澄禪師録［日本三］。晚參［五丈］云。晚參之舉。盛起於汾陽。汾陽老人。日日晚參。楊岐撾鼓。逼慈明晚參。正謂此也。或暫止參。則云和尚今晚放參。

⑧祖庭事苑［八ノ十三丈］云。日晡念誦。謂之晚參。〈詳小參處〉。

⑨忠曰。晚參。直如臨濟晚參示衆。楊岐所謂汾州晚參。是也。然目之於日晡念誦者。當時訛言。又如晡時念經。言誦放參也。〈叢軌類。放參處辨〉。

【八二〇】廣參　（神足浩正）

①忠曰。大衆一同參。故言廣。

②鹽山拔隊和尚行録［廿丈］云。大衆廣參次。國師〈三光〉。還呈問師曰。趙州因什麽。道箇無字。

【八二一】立參　（神足浩正）

①忠曰。立地説法。故云立參而已。即晚參也。

②希叟曇禪師法華録［三丈右〇又十一丈左］。及小參［十四丈右又六丈右］中。有爲行者。立參四則。又［小參十一丈］晚參普説云。慈明出遊。楊岐乃撾鼓。請歸立參。

【八二二】訓童行　（神足浩正）

①備用清規［十ノ十七丈］訓童行云。五參上堂罷。當訓童行。參頭行者。令喝食行者。報各局務行者。行堂前拄牌。報衆。昏鐘鳴。行堂前。鳴板三下。集衆。行者上寢堂排立定。參頭入方丈。請住持出。就座。參頭進前挿香。喝參。同問訊九拜。進前屏息。拱聽規誨已。又同衆三拜。珍重而退。

②禪苑清規［九ノ九丈〇下］訓童行。有立身。陪衆。作務。三章。〈文繁〉。　又［三ノ一丈］監院云。訓誨童行之法。宜以方便。預先處置。不得妄行鞭捶。設有懲戒。當庫堂對衆行遣。不過十數下而已。不虞之事。不可不愼。

③村寺清規［敕鈔五ノ七丈］云。童行方入寺。須先訓之。以祖師偈頌。近世所刊緇林寶訓。及了禪師訓童行歌。潙山警策。證道歌。永安僧堂記［無尽居士作諸祖偈頌載］等。是也。次訓之。以大悲楞嚴諸秘咒。觀音圓覺金剛諸經。若語孟中庸大學周易禮記。并可兼訓之。〈乃至〉。早以佛祖書。入諸肺腑。多應作好人。蓋先入者爲主。他日雖中之雜毒。亦不足以害其正念。〈乃至〉亦不可只訓其歌唄鼓鈸。以規賺施。〈乃至〉宜教觀音聰明神咒。久而漸漸聰明。縱未即聰明。亦足以資性長福消災。〈觀音聰明咒見經咒類〉。

④童行義。見職位類。

禪月大師戒童行偈　諸祖偈［下●下ノ十五丈］頌載。

月窟清禪師訓童行　諸祖偈［下●下ノ廿四丈］頌載。

慈受深禪師訓童行頌　慈受［廿六丈］偈頌載。

中峯本禪師訓童行　幻住清規［五十一丈］載。

慈航朴禪師沙彌訓練法　人天寶鑑［六十七八丈］載。

（神足浩正）

【八二三】説規矩

①希叟累行説規矩。蓋有所特警誡。敕修清規［上二ノ九丈］備用清規等。訓童行之類也。

②希叟曇禪師開善録上堂。謝遠首座。并説規矩云。結繩爲政。畫地爲牢。堯舜之君。猶有化在。拈杖。拄杖子罪犯彌天。剛強難化。非結繩可以取其信。非畫地可以格其非。商令至嚴。惡心轉熾。瑞嚴老朽。既司其職。當言不避截舌。卓杖。輕輕點著。返朴還淳。何故。不過虎溪橋。誰識東林遠。　又［小参七丈］爲新歸堂兄弟晩參。註云。説規矩不録。

又［小参八丈］衆寮晩參。説規矩云。妙斲去漫。巧運風斤之手。專工修月。細無玉斧之痕。木之就規矩。在梓匠輪輿。金可作瓶盤。假洪爐烹煉。學道謹鞭羊之戒。希賢思畫虎之羞。蠅附驥。千里可期。葛倚松。九霄有望。馬勝熱威儀。攝衆忍不歩趨。婆羅門聚會無殊。速須敬遠。隄防六賊。守心城莫使穿窬。埽蕩羣邪行正路。須教透徹。百丈頽綱。要人提掇。楊岐破屋。要汝支撐。灼然皮下有血人。終不隨他語脉轉。倘能深信。彼此無辜。其或未然。拍膝一下。啼得血流無用處。不如緘口過殘春。

⑤教苑清規［下ノ六十三丈］訓童行云。訓童行之法。當説出家因縁。或説規矩禮度。或説經中大意。

（神足浩正）

【八二四】聽教

①義堂日工集［一ノ七十丈］云。中華禪院、毎夜坐禪罷、隨意就于諸寮而夜話。商量古今事。謂之聽教。今日本不然。是以兄弟、見聞局於冊子上。而不通方。

（西川秀敏）

【八二五】普説

①舊説［敕鈔四ノ十九左　廿丈左］曰、普説即陞座也。上堂亦陞座也。但普説不炷祝香。不搭法衣、以爲異。普説自眞淨始。三佛亦行之。到大慧方盛。普説［鈔五ノ八丈］。須是知見廣博人而始得。

②或[敕鈔五ノ八丈]曰、今時陞座、即普説也。多唯演五部大乗經本縁、施食法來由耳。中華宗師、豈如是耶。少讃檀主者、則有之。如今時普説、與唱導之師經供養何異。[經供養者、檀家請供養某經則爲作之也。]又[鈔五ノ八丈]曰、陞座如諷經、拈香如願文。正述諷經之功德。

③忠曰。如供養五部大乗經、普説。則何得不演五部功德。若復餘時陞座。而演五部功德。則或剥可當也。原夫末代道薄、無開示宗要之普説。多是檀那薦亡、供養經時、爲普説。故語路自然、不似中華宗師普説而已。或不鑑其本、而但責其末。何足鍼起膏盲哉。

④敕修清規普説云、有大衆告香、而請者、就據所設位坐。有檀越特請者。有住持爲衆開示者、則登法座。凡普説時、侍者令客頭行者、掛普説牌、報衆。鋪設寢堂、或法堂。粥罷、行者覆住持、緩擊鼓五下、侍者出候衆集。請住持出、據坐普説。與小參禮同。

⑤舊説[敕鈔四ノ十九丈〇又廿丈ヲ]曰。普説者、一時説。普於一切時也。或曰、普説一切法也。或[敕鈔五ノ八丈〇又四ノ十九丈]曰、説普法也。普法者、即普賢法也。隨縁眞如曰普。不變眞如曰賢。隨縁不變、圓融無礙法門也。

⑥忠曰、華嚴經[十一ノ卅五丈]毘盧遮那品、演義鈔云、言普法者、一具一切、一一稱性、同時具足等。

⑦太清[敕鈔四ノ廿丈]曰、普説非明眼人、則不可也。語中必演自家悟道縁。蓋人天衆前、吐露自悟境界。豈未悟人、而得普説哉。

⑧忠曰、眼若不明、何説而可是。太清之言可笑。又云、普説中、必説自悟處。古人普説。何必如此。是太清自枉立格式。

⑨大慧杲和尚爲虎丘沼長老普説[三ノ七十五丈]云、一百年前、本無普説。因熙寧元祐間、眞淨和尚、居洞山歸宗時、方有普説。大意以開悟學者爲心。然古人立箇法門。亦自有出處。何以知之。不見。大華嚴經離世間品、普慧菩薩、雲興二百問。普賢菩薩瓶瀉二千酬。於中有一問。曰何等名爲普説三世。答曰、佛子菩薩摩訶薩、有十種説三世。何等爲十。所謂過去世説過去世、過去世説未來世、過去世説現在世、未來世説過去世、未來世説現在世、未來世説無盡。現在世説過去世、現在世説未來世、現在世説平等。已上是九世。却把當人這一念、如貫數珠相似、穿過九世。以此一念、通爲十世。故曰、現在世説三世。即一念是爲一。所以李長者有言。無邊刹境、自他不隔於毫端。十世古今、始終不離於當念。〈云云〉。

⑩忠曰、按華嚴普慧問、但云何等爲説三世。〈五十三經[十二丈]〉乃無普字。普賢[五十三ノ廿八丈]答云。有十種説三世。何等爲十。〈云云〉。是爲十菩薩。以此普説三世。〈止此〉。至此。方有普説字。　又離世間品云、有十種智慧觀察。〈乃至〉於一切世界、普説正法。智慧觀察。〈五十四經[廿五丈]〉亦有普説字。

⑪又[二ノ八十七丈]永大師請普説云、師云。叢林舊無普説。有來方五六十年、始因眞淨和尚、尋常不入室。時便爲大衆、普説。如普説、入室一般。

⑫東山外集[下ノ四十八丈]答普賢書云、正月二十九日。堅上座自衡陽歸來、得妙喜老書。此老名雖未脱罪籍、其身甚安樂。道愈光。衡之伊山開福花藥三院、與之館參徒。無事即騎馬入三處。坐方丈與之入室普説。來者皆湖海英爽、有志之士。是臨濟一宗、未至委地矣。

⑫備用清規[二ノ八丈]普説云、洞下尊宿。每遇朔望、衆寮設位、爲衆普説。惟大慧和尚、宗通説通、不拘時節、不擇方所也。

⑬虚堂愚和尚録[四ノ廿四丈]告香普説云、古之宗師、爲人直截。凡有所問、只就問處、與之破執。初無實義。後來埀生招箭、形於語言。乃有普説、普説首出於眞淨和尚。三佛以來

皆有普説。無非怒罵呵咄、鞭策誨勵、使其大心衲子、勇於進工。近世宗師、間有普説。尚多文體、不見古人直截爲人處。大似場屋中論策一般。及攻其所從、乃藥貼上語。不能療人之病徒使其末流、紛紛傳集秘蓄、以當本參。殊不知、我王庫内無如是刀。

⑭明極俊禪師普説〔普説廿四丈〕舉華嚴普説三世法畢云、由是東震旦禪林中、有普説之舉。即宗此法。然此普説亦不易舉。無非法性寛。波瀾濶。有變通逸格之才。回乾轉坤之作。方可任此責。前輩大珠南陽臨濟德山巖頭羅山。亦不敢舉此。黄龍南。死心新。靈源清。長靈卓。亦不敢舉此。至於眞淨文。方有普説之舉。以後圓悟大慧應菴。皆宗此式。中峯密菴下。惟無無準石田癡絶虚堂外。餘者法性不寛。波瀾不濶。雖有此舉。終是不能通暢。況乎山僧膚淺末學。孤陋無聞。詎敢當此責耶。

⑮華嚴經〔五十三ノ十二丈〕離世間品云。佛子菩薩摩訶薩。有十種説三世。何等爲十。所謂過去世説過去世。過去世説未來世。過去世説現在世。未來世説過去世。未來世説現在世。未来世説無盡。現在世説過去世。現在世説未來世。現在世説平等。現在世説三世即一念。是爲十。菩薩以此普説三世。

⑯又〔四十ノ廿二丈〕十定品云。此菩薩。普入一切世界。而於世界無所著。〈乃至〉於一念中。普得一切三世智。普知一切三世法。普説一切諸佛教。普轉一切不退輪。於去來現在一一世。普證一切菩提道。於此一一菩提中。普了一切佛所説。

⑰忠曰。禪林普説目。當援十定品爲證。貴徑截。而易曉人耳矣。又大慧言。眞淨和尚。方有普説。撿古宿録中。眞淨語録。不載普説。

（西川秀敏）

【八二六】告香普説

①普説。有告香者。

②小補韻會號〔四十一丈〕韻。告居號切。增韻啓也。又沃韻。姑沃切。増韻啓告也。爾雅請也。註云求請也。

③正字通〔丑上ノ廿一丈〕云。告古到切。音誥。啓也。爾雅請也。

④忠曰。今告香者。謂挿香于師家。請求普説。或啓求開示之意也。韻會姑沃切。正字通古到切。並有啓也請也訓。則二音相通。

⑤漢書〔一上ノ三丈〇代醉廿五ノ十三丈引〕高帝紀註。孟康曰。古者名吏休假曰告。師古曰。告者。請謁之言。謂請休耳。

⑥忠曰。今告香。請謁挿香、求開示也。漢書注。告音如嗥呼之嗥。又音譽。

⑦雲章〔敕鈔四ノ十三丈〕曰。告字。上之告下音郜。下之告上音穀。學者就師家。挿香以告之請法。則用穀音。師家順學者之請而説。則用郜音。日本禪林、未曽行之。爲可憾焉。

⑧忠曰。韻會〔号勻四十一丈〕毛氏曰。凡告命告假之告。止音去聲。餘經史告示。有音無音。合二韻通用。〈止此〉。雲章。何從得二音義別耶。蓋周禮〔韻会誥字注〕大祝作六辭。一曰告上曰告。發下曰誥。〈止此〉。此是文告之辭也。雲章依此妄説。至今學徒。傳妄無辨。

⑨敕修清規〔上二ノ三丈〕告香云、毎夏前告香。新歸堂者。推參頭一人。維那和會定。同衆詣侍司。稟云、新掛搭兄弟、欲求和尚告香普説、敢煩侍者咨稟。〈乃至〉如住持允從。即報堂司。出告香圖。〈其規詳彼〉

⑩備用清規〔二ノ五丈〕告香云、四月五日。告香、開示方來。

⑪校定清規［敕鈔四ノ十四丈引］云、夏前。例於四月初五日已前。看新掛搭兄弟若干人。就中推一人。爲參頭。

⑫忞公清規［敕鈔四ノ十四丈引］云、或頭首中、有未告香者、亦可爲參頭。

⑬北礀簡禪師録告香普説云、告香乃叢林盛禮。前輩未嘗盡行。道大德備。如慈明和尚。尚且至再至三。然後受南禪師告香。況非慈明乎。

⑭舊説［敕鈔四ノ十四丈］曰、夏前新掛搭人。請普説者。蓋列刹宗師。自證雖可無異。爲人演法。門風或不同。新到要識之。或意在若説入做因縁。可以爲榜樣焉。

⑮瑞溪夢語集［九丈］云、即菴録曰。告香普説、叢林典故。予謂。普説尋常可行之。告香普説行之不多。何以知之。普説之盛、無如大慧。然六十則内、告香唯一耳。大慧曰、一百年前、無普説。然則告香、蓋有普説以來、有此式也。大慧引經證普説字。其告香字、亦可證。而未檢出矣。

⑯入寺之初告香普説。是又叢軌也。今畧録。

⑰敕修清規［上二ノ四丈］告香云、住持入院後、人事定、庫司備香。首座領衆懇請。爲衆告香。然後開室。〈古法未預告香不詳入室〉。

⑱大慧有告香普説在其普説［三十丈］第二卷。

⑲偃溪聞禪師録［普説二丈］靈隱告香普説云、叢林新人入門、例有開室告香二事。諸方臨夏、告香一節、不舉行久矣。山僧叨冒此來。已及兩月、汨汨人事。日不暇給。向後入室之際、兩班單寮。暨諸宿德、不必訪及。若是晩學、有志慕道者、來自大方、不妨商確。

⑳清拙澄禪師録［日本三ノ普説一丈］夏前告香普説云、諸方舊例。今古常儀。入寺之初、爲衆普説。近日堂中首座、諸耆德。同上方丈、堅請、告香普説。務欲復見古道顔色。

（西川秀敏）

【八二七】開室

①忠曰、開室即入室也。言開室。令衆入參也。猶如公孫弘開東閤。延賢人之開矣。

②敕修清規云、住持入院後、爲衆告香。然後開室。〈詳告香處〉　又［上二ノ五丈］入室云、遇開室時、粥前侍者、令客頭行者、僧堂前諸寮、掛入室牌。

③偃溪録新人入門、例有開室告香二事。〈詳告香處〉

④虚堂愚和尚録［四ノ四十八丈］靈隱立僧普説云、旦夕必爲諸公開室相見。

（西川秀敏）

【八二八】入室

①舊説［敕鈔四ノ廿二丈左］曰、入室者、師家勘驗罷參的學者見解深淺、教其無底滯矣。

②敕修清規［上二ノ五丈］入室云、入室者、乃師家勘辨學子。策其未至、擣其虚亢、攻其偏重、如烹金鑪。鈆汞不存、玉人治玉、碔砆盡廢、不拘昏曉。不擇處所、無時而行之。故昔時衲子、小香合、常隨身、但聞三下鼓鳴、即趨入室。〈今時以三八入室者、備故事也。〉　又云、粥罷、下堂、客頭即緩擊鼓三下、住持至達磨前炷香、同侍者三拜、入據室坐。侍者問訊、班左立、行者問訊、班右立。頭首領衆、達磨前、各炷香三拜、聯接而至室前。後至者、依次炷香展拜、接排而立、次第相趲、不許攙先亂序。侍者燒香問訊、出外揖首座入。入先左足、仍以左手上香、進前問訊、至禪椅右側立、聽舉話、或下語、或不下語、隨意。過禪椅左、問訊退歩、觸禮一拜、舉左足出、揖次人入。一出一入、相向問訊、聯

接不絶。　又告香云、古法未預告香、不許入室。

③　雲章［敕鈔四ノ廿二丈］曰、凡有入室、侍者以竹篦、度與住持云、請入室、是即天童如淨和尚之規也。

④禪苑清規［一ノ十四丈］入室云、或分郭（廊）、或分寮、或隔日、或排日、或早或晩、各逐住持人建立。入室時到、侍者令行者裝香、當面設拜席。〈有處不拜、更不展席。〉竟咨稟住持人、如有指揮入室、則掛入室牌、或打鼓、或打板、或敲入室牌、警集大衆。住持人坐、侍者方丈外東邊、叉手立。如衆稍集、排立定、或一行面東、或兩行相對。侍者入方丈、當面門訊、轉身禪椅東邊香臺後、面南立、先問訊、左手上香問訊訖、當面問訊、出於大衆前問訊、請入室。侍者歸寮、入室人、畧轉身問訊、大衆依次第、叉手而進、不得攙前、令衆動念。」於方丈門右邊入、先舉左足、當面問訊訖、轉身叉手、禪椅西南角、問訊而立。又先問訊、然後吐露消息、不得語話多事、亦不得説世諦閑語、久滯大衆。吐露竟、問訊退、當面禮拜。〈有處一拜、有處三拜、有處大展、有處觸禮。〉面東轉身叉手、從左邊出、先舉左足、所以避後來之人、免有衝撞、出方丈外、望住持人問訊乃去、大衆前又問訊而出。或作両行入室、入門便分兩向、東西次第送進。〈有處或舉話、或通話、或請益、各分一時、不許相雜、有處混而爲之。〉大衆入室竟、侍者入室、仍捲席而退。〈入室禮、合燒香、燒香之法、初入方丈、當面問訊訖、轉身叉手、於香臺南立、向住持人問訊、右手上香、當面問訊、禪椅角立、今以滯時妨衆、故不燒香、有處門外設席、一拜而退、亦恐妨衆也。入室人、常令衣服完淨、無帶垢膩、及令威儀齊整、舉止安詳、以表敬重人之意也。〉曉諭侍者、非緊急人客、要切事務、於入室時、不得通報、仍令行者、不得出聲説話、敲磕喧衆。

⑤校定清規［下六丈○敕鈔四ノ廿二丈引］云、入室之法、或三八日、或不定時節、鳴鼓三下、集衆。侍者預令行者挂牌、住持於方丈内坐、侍者於室外東邊、列一行立、仍於室門限外、設席、衆人燒香、大展三拜、不問戒臘、鴈行而立、於室外西邊。如頭首知事、挿入、不妨餘人攙行、令人動念、俟排稍定、侍者入室内、住持前問訊了、燒香、復當面問訊、出室外、對入室上首人、問訊揖入、當先舉左足、叉手進、住持前問訊、轉身於禪倚角西南、叉手而立、住持舉話、下語畢、復正面問訊、叉手、從東邊出、亦先舉左足、出門外席内、觸禮一拜而退。據清規所載、入室例合燒香、燒香之法初入方丈、當面問訊、轉身叉手、於香倚南面、向住持問訊、右手上香、却當面問訊、方過禪倚西南角、聽舉話。今以滯時妨衆、故不燒香、就門外設席、一拜而退、亦恐妨衆、或行古法、燒香亦在住持意。當於寢堂中、或挂達磨頂相、設香觸供養、其住持、當展拜了、方歸室中坐、侍者隨住持後拜、入室弟子、次第於像前、燒香一炷、設三拜、如前鴈行而立、次第入室。

⑥備用清規［二ノ四丈］入室云、開大爐韝、煅煉方來、眞正舉揚、克盡厥責、曉昏不拘時也。近代三八、聊應故事、漸寂無聞、可不痛心耶。　又云、按大慧竹菴雲門議集、入室罷、住持復出、達磨前、炷香大展九拜、仰遵遺教、頓謝證明、令法久住。

⑦禪林寶訓［下ノ廿八丈］云、萬菴曰、古人入室、先令掛牌、各人爲生死事大、踴躍來求決擇。多見近時、無問老病、盡令求納降款、有麝自然香、安用公界驅之、因此妄生節目、賓主不安、主法者、當思之。

⑧　巳下、畧録上古言入室者、恐非用今入室規者。

⑨傳燈録［四ノ十一丈］牛頭融禪師章云、命入室上首智巖、付囑法印、令以次傳授。　又百丈［六ノ十六丈］海禪師章云、屬大寂闡化南康、乃傾心依附、與西堂智藏、南泉普願、同號入室。　又［六ノ廿二丈］禪門規式云、除入室請益、任學者勤怠、或上或下、不拘常準。

⑩廣燈録［廿四ノ二丈］、大陽堅禪師章云、在靈泉入室、靈泉問云、你從什麼處來。師云僧堂裏來、泉云、你爲什麼、不築著露柱、師於言下省悟。

⑪松源嶽禪師録云、上堂、舉馬大師入室罷、西堂百丈南泉、隨侍翫月。

⑫　巳下、畧録規矩入室者。

⑬黄龍書尺［六丈］、荅筠陽聖壽禪師書、題注云、來書勉夏中、爲僧入室。

⑭癡絶冲禪師、雪峯録［三丈］云、上堂、舉善侍者、在大愚芝、入室次、大愚趯出一隻履、善侍者退身而立。〈云云〉

⑮文字禪［三十ノ七丈］、泐潭準禪師行状云、師槌拂之下、常三百人、而宿戸外者、又百餘許、求入室就學、師難之。

⑯僧寶傳［五冊廿七丈］大潙喆禪師傳云、遷住大潙、衆二千指、無所約束、人人自律。唯粥罷、受門弟子問道、謂之入室。齋罷、必會大衆茶、諸方纔月一再、而喆講之、無虚日。

⑰大慧［下ノ六十八丈］、禮侍者斷七普説云、有時入室了、却上方丈、見老和尚、同在火爐頭坐。老和尚曰、或有箇禪和子、得似老僧、你又如何支遣、老漢曰、何幸如之、正如東坡説作劊子。得一箇肥漢剮、我却倒與老和尚入室、被我拶得上壁、老和尚呵々大笑。思量遮老和尚、粉骨碎身、亦未能報得。〈老和尚圓悟也、老漢大慧自言。〉

⑱又大慧［二ノ廿六丈］、爲蘓宜人普説云、馬祖百丈已然、無入室之説、要識眞箇入室麼、尋常鐘鳴鼓響、鵲噪鵶鳴盡是宣揚第一義諦。

⑲大慧武庫［四十三丈］云、師云、今時一般宗師、爲人入室、三五徧、辨白他不出、却教他説悟處、更問、你見處如何、學人云、某見處説不得、却云、你説不得、我如何見得你去。若恁麼地、如何爲人。不見泉大道到慈明、明云、片雲生谷口、遊人何處來。泉云、夜來何處火、燒出古人墳。明云、未在更道、泉便作虎聲、明便打一坐具。泉推明向禪牀上、明却作虎聲。泉云、我見八十四人善知識、惟師繼得臨濟宗風。」看他恁麼問荅數句子、那裏便是見他處、須是如比始得。

⑳隱元琦和尚録［十一］、有入室、每人爲垂一語勘撿、其中有居士二人、侍者亦進。

21　巳下、畧録入室之後、行普説者。

22破菴先禪師録［卅三丈］云、徑山西堂寮入室罷、衆請就座普説。

23雪巖欽禪師録［上ノ五十七丈］、有入室後普説。

24大休念禪師壽福録、有相模守殿府中、入室陞座。

25永平元禪師［眼藏四十七ノ十四丈］曰、如浄和尚、入室已前、行普説。

26　巳下、畧録日本國行入室者。

27榮西興禪護國論云、入室、謂遇和尚閒暇之日、建立之、此宗一大事也。

28聖一國師年譜［廿六丈］云、後宇多天皇、健治元年乙亥、師七十四歳、九月藤丞相實経、洎其子家經、率諸官從、入山請師上堂、且復行入室禮。

29約翁儉和尚［本録ノ尾下ノ十九丈］塔銘序云、上躯入山、請師爲衆入室、御龍床於籌室之左、顧謂侍臣曰、此叢林盛典也、朕深敬悦。〈師時住南禪。上後醍醐天皇也。〉

30大休念禪師壽福録［十一丈］相模守府中、入室。〈見前〉　又法光寺［壽福六十丈］百日陞座云、法光寺殿、休沐之暇、會諸山知識茶話、命僧入室下語、激揚宗旨、要使未信宗乗者、知有自己一段大事因縁。

31義堂日工集［三ノ卅八丈］云、府君問、古人入室、儀式如何、余荅曰、日本則吾先師住天龍時、有入室之儀、近來不聞行之。

32入室、有每三日行之者。　曹源生禪師録、歳夜小參云、死心和尚云、叢林小參、謂之家訓、莫是談玄説妙、舉古明今、五日上堂、三朝入室麽、錯。莫是行須緩歩、語要低聲、嚴浄律儀、精持戒行麽、錯。

33入室有隔日行之者。　介石朋禪師柏山録上堂云柏山小小叢林、安居九十日、五日不陞堂、隔日不入室。

34日本入室不妨人觀聽、中華亦有例。　東坡外紀［七上ノ十二丈］云、師民瞻詩［坡詩四ノ四十四丈］注云、佛印禪師、法名了元、饒州人、公久與之游。時住持潤州金山寺、公赴杭過潤、爲留數月、一日値師、挂牌、與弟子入室、公便服、入方丈見之。師云、内翰何來、此間無坐處。公戯云、暫借和尚四大、用作禪床。師曰、山僧有一轉語、内翰言下即荅、當從所請、如稍渉擬議、所係玉帶、願留以鎮山門、公許之、便解玉帶、置几上。師云、山僧四大本無、五蘊非有、内翰欲於何處坐。公擬議、未即荅。師急呼侍者云、収此玉帶、永鎮山門、公笑而與之、師遂取衲裙相報、因有二絶、公次韻荅之。〈其詩今畧之、又見東坡詩集。〉

35祖庭事苑［八ノ十三丈］云、入室參門、祖師傳云、五祖大師、至夜、密令侍者、於碓坊、召盧行者入室、遂傳衣法。又法華云、著如來衣、入如來室阿含經云、佛告苾蒭、吾欲兩月宴坐、汝等不須參問、唯除送食及灑地時、可至於比、應知、佛祖當時有入室參問之儀也。

36　舊説［敕鈔四ノ廿二丈］曰、大慧謂、馬祖百丈已前、無入室之説。〈止此〉可知事苑所援、可證入室文字耳、其實非今之所謂入室也。

（馬場道隆）

【八二九】受牌

①忠曰、立僧首座、奉堂頭命、或普説、或入室。堂頭先令送某牌、立僧謹受之畢、或普説或入室。

②虚堂和尚［四ノ四十八丈］、靈隠立僧普説云、茲蒙堂頭舉衆、俾山野受牌、與兄弟舉話、此亦叢林任重之責。既不敢寧居、恐旦夕必爲諸公、開室相見。

（馬場道隆）

【八三〇】納牌

①忠曰、立僧奉堂頭命、受入室牌、爲衆開室畢、却納其牌於方丈也。

②虚堂和尚［四ノ六十五丈］、立僧納牌普説云、茲來至節在邇、久拄首座寮入室、殊覺不便、恐妨山門請人次第、方丈納牌、既縁會許時。以道義故、遂舉些古人履踐處、以當末後殷勤、第衰老、出語太過、望兄弟救之、幸甚。

（馬場道隆）

【八三一】示衆

①六祖法寶壇經［定恵第四］云、師示衆云、善知識、我此法門、以定慧爲本。〈此外壇經示衆多〉

②　忠曰、諸録示衆、比爲最古也。

（馬場道隆）

【八三二】垂示

①忠曰、垂示、即示衆也。語見諸録。

②臨濟玄禪師録［四十丈］云、第二代德山垂示云、道得也三十棒、道不得也三十棒。

（馬場道隆）

【八三三】登座

①敕修清規［上二ノ十八丈］受請人陞座云、指座有法語。

②　忠曰、登座語、永興祿和尚爲始。〈祿嗣玄沙備〉

③傳燈録［廿一ノ十四丈］、福州蓮華山永興祿和尚章云、閩王請師開堂日、未陞座、先於座前立云、大王大衆聽、已有眞正舉揚也。此一會、總是得聞。豈有不聞者。若有不聞、彼此相謾去也。方乃登座。

（松原信樹）

【八三四】垂語

①又是垂示也。

②雪竇顯禪師録［碧一ノ廿丈］云、雲門垂語云、十五日已前不問汝。十五日已後、道將一句來。自代云、日日是好日。

③敕修清規［上二ノ十八丈］受請人陞座云、指座有法語。登座垂語問答。　又［上二ノ廿二丈］開堂云、住持垂語問答。

④　忠曰、上堂垂語、稱索話非也。見索話處。

（松原信樹）

【八三五】索話

①校定清規［上十一丈］、住持受請云、次索話問答、提綱。

②虛堂［三ノ八丈］愚和尚育王録云、師斂衣就座、索話。人天交接、兩得相見。莫有不承言、不滯句底麼。

備用清規［一ノ五丈］云、古之學者、有疑未决、出衆請問。宗師答話、貴在解粘去縛。今之索話、已失古意。先大慧深非之。

③　清拙澄禪師録［日本五ノ銘四丈　○又小清規十九丈］圓覺前堂首座寮銘序云、古德未説法已前、先垂語、令學者有疑請問、問以决疑、一言之下、超越生死之岸。後來變其名、曰索話。此二字、已訛謬矣。

（松原信樹）

【八三六】索語

①索話又曰索語。

②敕修清規秉拂云、秉拂人、索語問答了、提綱。

③竺仙［廿三丈］東度語、建長寺結制、秉拂垂語云、凡到者裏、必須垂語。俗曰索語。去古既遠、源流益別。本其宗猷、無有是處。雖然、者裏亦不妨、隨例顛倒、正恁麼時、還有

并却咽喉脣吻出來、道得一句底麼。

（松原信樹）

【八三七】釣語

①索話［敕鈔十四ノ卅四丈］又曰釣語、或曰釣話。蓋釣學者問話之義。

②禪林寶訓［下ノ廿丈七］云、萬菴曰、古人上堂、先提大法綱要、審問大衆、學者出來請益、遂形問答。今人杜撰四句落韻詩、喚作釣話。一人突出衆前、高吟古詩一聯、喚作罵陣。俗惡俗惡、可悲可痛。前輩念生死事大、對衆决疑、既以發明、未起生滅心也。

（松原信樹）

【八三八】提綱

①説法曰提綱。提起宗旨大綱而説。又曰提要。萬菴曰、古人上堂、提大法綱要。〈見釣語處〉是也。

②敕修清規［上二ノ廿二丈］開堂云、住持垂語、問答、提綱。〈又見敍謝處〉

③睦州蹤禪師録云、問佛法大意、請師提綱。師云拈將來、與你提綱。

④廣燈録［十六ノ十二丈］汾州善昭禪師章云、師因北地寒、僧衆難立、云、且住小參、候春暖。不經旬日、忽有一僧。兩耳帶環、手持金錫。來到方丈云、和尚何得住却小參。衆中自有不憚寒暑、爲佛法者。堂中見有六人、是法器。言訖而退、不知處所。師却小參、乃成一頌。胡僧金錫光、請法照汾陽。六人成大器、今我爲提綱。

又普安道禪師章［廿一ノ六丈］、提綱商量頌云、若欲正提綱、直須大地荒。欲來衝雪刃、不免碎鋒鋩。　又桃園朗禪師章［廿二ノ三丈］云、若是唱道門風、權且強名。若論祖宗提綱、直下難爲開口。

⑤雪巖欽禪師録［上ノ廿丈］有乾會節提綱。

杜工部詩集［八ノ六丈］、石犀行云、安得壯士提天綱、再平水土犀奔茫。

已下、略録論提綱體裁。

忠曰、古德語録、上堂提綱、有押韻、有不押韻。有用偈頌、其體不一定。本無挂唇齒法。何有拘章句式。舊説曰、提綱拈提、不用押韻。只據自家所見、宣發道蘊、滔滔地説將去、爲妙。

⑥大慧示銛遠二禪人法語［説四ノ九十四丈］云、近世前輩老衲、皆已化去。正宗日益淡薄、叢林日益凋弊、邪法日益增熾。裨販之流、各各自謂、得上人法、以無義語、綺飾言詞、砌鬬排疊、裒糅佛祖教乘、累句荐出、謂之秘密心要。魔魅凡庸、幻惑無識、稱有道之士者、如麻似粟。末世光明種子、未具擇法眼。遭其邪毒、入其心腹者、不可勝數。致使後生晚學、隨例骨董。臨濟和尚曰、有一般禿兵、向教乘中取、意度商量、成於句義。如把屎塊子、口中含了、却吐與別人。嗚呼、如來正法眼藏、達磨單傳之宗、如以一絲、引千鈞之石。安得此老復出、爲後進、鍼膏肓、而起廢疾乎。

⑦清拙澄禪師録［日本三］晩參［七丈］云、只如馬祖百丈黄檗臨濟德山雲門諸大老宿、不得已、爲人開口、莫不直截指示根源。河傾海涌、汗漫無際。又何曾諛述言詞。逐句下語、張王李趙爲人註解來。末代大法澆醨、無此大模範大力量。弄出小巧禪道、製作奇言妙語、攢花簇錦、風月煙雲、對句押韻、如作詩一般。當知此是做禪、非説禪也。説禪早是不中。況禪可做乎。使佛祖正法眼藏、流爲戲論。法道下衰、莫甚乎是。若是大丈夫漢、爭肯咂

啖這般野狐涎唾。

⑧竺仙仙禪師南禪録［卅五丈］爲二品太夫人普説、判玉泉皓開堂、兩言君不見云、是又豈可與念語録、習答問製造提綱、對以四六藻繪文詞、以悦時流者、同日語哉。

⑨永覺禪言［下ノ二丈］云、少室心印、豈落文彩。古人聊爲接引之計、始挂脣吻。然皆渾朴簡眞、刻的示人。非誇會逞能、外飾觀美而已也。後世即大不然、雕章琢句攢花簇錦、極意變弄、各競新奇。豈獨淫巧之意、乖衲僧之本色。而理因辭晦、道以言喪。欲其一言半句之下、觸發靈機。不亦難乎。

⑩元叟端禪師録［五ノ十八丈］答慈雲玨長老書云、上堂提唱、務在單提箇事、開悟人天。前則馬祖百丈德山臨濟、後則大慧應菴。縱横波辯、直達心源、得大自在、無出曹溪盧祖、皆可爲法。

（松原信樹）

【八三九】自敍

①忠曰、敍説自不才不德、常有謙遜之語。

②大鑑清規［三丈左］開堂云、垂語、問答、提綱、自敍、敍謝。

（松原信樹）

【八四〇】敍謝

①忠曰、敍謝、或爲二。所謂自敍、及謝語也。或爲一、如此所引、及自敍處。謂敍臨筵知識、兩序、侍者、單寮蒙堂等之德、而謝也。又名謝語。

②敕修清規［上二ノ二丈］小參云、住持登座、提綱敍謝、委曲詳盡。

③　又［下二ノ十三丈］秉拂云、敍謝方丈、及兩序、勤舊、諸寮大衆。

④又云、近時敍謝、循襲繁贅、使人厭聽、取誚識者。蓋秉拂以法爲施。苟徇時儀、但捻標名、或畧提過、足矣。

（松原信樹）

【八四一】結座

①舊説［敕鈔四ノ十三丈］曰、結座有二種。一［敕鈔五ノ卅一丈左］舉古拈提、名結座。此是提綱之後、有敍謝。遂以舉古、結一會也。二［鈔四ノ十三丈右］提綱語尾、直爲結座語。此是無敍謝拈古。故以此結説法也。

②　已下、畧録舉古拈提、名結座者。

③敕修清規［上二ノ二丈］小參云、提綱敍謝、委曲詳盡、然後舉古結座。　又［上二ノ十五丈○又十八丈右］受請陞座云、登座提綱、敍謝、結座。　又［？］開堂祝壽云、住持垂語問答、提綱、敍謝、結座。

④大鑑清規［三丈左］云、提綱自敍、敍謝、拈提、結座。

⑤　已下、略録提綱尾、有結座語者。

⑥保寧勇禪師録［六丈右］在蔣山、受疏上堂、提綱畢、乃云、爐冶鉗鎚枉用工、吹毛何必在磨礱。靈光昨夜輝牛斗、坐致昇平宇宙中、久立。〈止此〉是結座語也。

⑦北磵簡禪師淨慈録［五丈］朝廷供羅漢、禱雨禳火祈江。結座有八句偈。

⑧希叟曇禪師開善録郡王忌提綱畢云、結座、親隨彌勒下長汀、一字王書奉化名、輔國功成

歸内院。子孫恩被錦衣榮。

⑨斷(ドン)橋倫禪師國清録［二丈左］入寺次日、爲太師越國公上堂、提綱畢、結座。有七言四句偈。

⑩如淨和尚［上ノ二丈］清凉録入寺上堂、提綱畢、結座云、復舉三聖道、逢人則便出、出則不爲人。興化道、我逢人則不出、出則便爲人。此兩則公案、驗盡衲僧。難爲著眼。忽被我大檀越建康府主、等閒觀覷破、舉似清凉。可謂龍吟雲起、虎嘯風生。未免借尚書鼻孔、爲叢林出氣、有箇口號、舉似諸人。一舉首登龍虎榜、太平親到鳳凰池。全生全殺超言象、更透機先向上機。〈止此〉此結座舉古、又有頌。

⑪明極俊禪師建長録［三丈］入寺上堂、提綱畢、結座云、法流東去、覺花開浩劫之英。道自西來、慧辯瀉銀河之碧、鐵網罥出、珊瑚萬樹春、金鎚敲出、鳳凰五色髓、縱説横説、無是不是。三世諸佛沒觜、六代祖師沒觜、天下老和尚沒觜、須彌峰頂浪滔天、大洋海底墜塵起。

⑫宗峰［一ノ四丈］超禪師大徳録、入寺上堂、提綱後、復云、昔日世尊、云云、此結座也。

⑬　已下、畧録普説小參之結座。

⑭無學元禪師録［四ノ七丈］長樂慶讃普説終、有結座。五言長篇偈。

⑮中巖月禪師建長録［三丈］入寺、當晚小參、提綱後、結座云、生縁抛離十三霜。威加海内歸故郷。溪谷山川総依舊、殿堂樓閣轉昌昌、久立。

（松原信樹）

【八四二】拈提

①拈弄古則也。

②大鑑清規云、拈提結座。〈見結座處〉

（松原信樹）

【八四三】拈古

①即同拈提。

②碧巖録［四ノ廿六丈］第三十九則云、僧問雲門、如何是清淨法身。門云、花藥欄。僧云、便恁麼去時如何。門云、金毛獅子。雪竇頌云、花藥欄、莫顢頇。星在秤兮不在盤。便恁麼、太無端。金毛獅子大家看。　圓悟評云、雪竇相席打令、動絃別曲、一句一句判將去。此一頌、不異拈古之格。

③東山外集［下ノ三十三丈］法語云、建祖禪人問東山拈古、山曰、拈古之法、無他。只要眼正有出古人手段。若只到古人田地、亦動他底不得。先徳雖謂之公案、欲後人就其節文輕重、而斷之使合其宜。然亦不只於此。汝不見。世間造泥孩兒乎。或捏聚擊碎、或擊碎捏聚、爲之心肝五臓、爲之眼耳鼻舌。衣服鮮明、機關動轉。見者隨其好醜、愛惡、而形之語言。造之者方且袖手仰視、而不知其爲泥孩兒矣。若能如是、乃可於古人公案中、出一隻手。若見他心肝五臓、不得。捏聚擊碎他底不破、切不可動著。然則東山此語、不獨施之於拈古、會麼。祖佇思、東山曰、我與麼弄泥團也不會、乃喝出去。

（松原信樹）

【八四四】代語

①忠曰、代語有二種。一代現前衆、謂師家垂語、令衆下語。不契則自下語代衆。此是代語、

可通別語名。雲門録多代語。蓋宗門［虚堂六ノ一丈注］代別、雲門爲始焉。二代古人、謂舉古則、而他古人無語處［虚堂六ノ一丈注。碧古鈔九ノ十五丈同此］、我代他下語。

②碧巖録［九ノ十五丈］云、雲門垂語云、人人盡有光明在。看時不見暗昏昏。作麽生是諸人光明。自代云、廚庫三門。又云、好事不如無。評云、尋常代語只一句。爲什麽、這裏却兩句。前頭一句、爲你略開一線路、教你見。若是箇漢、聊聞舉著、剔起便行。他怕人滯在此、又云、好事不如無。依前與你掃却。

③大慧［二ノ八十九丈左］爲永大師普説云、近世爲宗師者、老婆心切、爲人代語。這箇最教壞人家男女。未説別人。如死心和尚、也有這箇病痛、有箇宜大頭。是靈源禪子、來雲嵓掛塔。死心要請充維那、宜不肯。死心云、你與我做維那、待老僧非時、爲你入室。宜乃受之。其時參靈源底兄弟、多不肯死心。一日宜以職事、當稟方丈、上去、見死心。心錯認他來入室、叫行者裝香。宜郎忙退身。借香匣坐具、去燒香禮拜了、倒問死心。守宜非時上來。請和尚答話。心云、恰値死心不在。宜云、何得當面諱却。心云、不好。你作老僧、我却答你。宜便云、恰値死心不在。心云、謝答話。可知是難得人。死殺那漢、如此尊宿、尚自與人代語。教學者自道始得。常記、山僧在夷門、一日送亡僧。老和尚問、亡僧遷化、向甚麽處去。山僧答一轉語。老和尚云、你這語、只道得八成。你問我、與你道。山僧掩耳云、莫惡口。老和尚呵呵大笑。這老子古錐、有時室中、見禪和子、下得語不是。忍俊不禁、也爲他代語。山僧每見他掛牌、愛去外頭聽。一日又要爲人代語。望見山僧、乃云風漢在外面壁聽遂休。山僧在雲居秉拂。曾舉、有一僧、辭覆舩去、見雪峯。峯問、近離甚處。僧云覆舩。峯云、生死海未渡、爲甚麽覆却舩。僧無語。却回舉似覆船。船云、何不道渠無生死。其僧歡喜、復往雪峯。峯問、還道得也未。僧云、道得。峯云、試道看。僧云、渠無生死。只見、雪峯從禪床上走下來、把住這僧、云此不是汝語。僧云不敢。實是覆舩恁麽道。峯云、我有二十棒。打覆舩。二十棒老僧自喫。不干闍梨事。妙喜云、是即是、不干這僧事、二十棒雪峯何須自喫。當時杲上座、添作四十、只打覆舩。爲甚麽如此。老老大大、不合與人代語。老和尚聞而笑曰、這漢無状。蓋師資相忘敢爾。所謂代語、只成教壞他。於他何益。

（松原信樹）

【八四五】別語

①舉古則中、雖他古人有語。我復別下一轉語。謂之別語。見於諸録。與代語不同。

（小川太龍）

【八四六】揀話

①五位顯訣中、有別揀語。是也。

②傳燈録［廿六冊一丈］瑞鹿先禪師章云、師有時云、大凡參學佛法、未必学問話是參學。未必學揀話是參學。未必學代語是參學。未必學別語是參學。未必學捻破經論中、奇特言語。是參學。未必捻破諸祖師奇特言語是參學。若也於如是等參學。任你七通八達。於佛法中。儻無箇實見處。喚作乾慧之徒。

（小川太龍）

【八四七】對機

①忠曰、師家答學者問也。見參請門、問答處。

（小川太龍）

【八四八】秉拂

①敕修清規［下二ノ十二丈］四節秉拂詳録。

②秉拂五頭首、見職位類。

（小川太龍）

【八四九】分座

①敕修清規［下一ノ一丈］云、前堂首座、表率叢林、人天眼目。分座説法。開鑿後昆。

②　分座本迦葉縁。　中本起經［下十九丈］云、世尊、在舍衛國祇樹給孤獨園。爲衆説法。天龍鬼神、四輩弟子、嚴整具足。於時摩訶迦葉、垂髮弊衣而來。詣佛。世尊遥見歎言、善來迦葉、豫分半床。命就坐。迦葉進前、頭面作禮、退跪自陳曰、余是如來末行弟子。顧命分座。不敢承旨。大衆僉念。此老道士。有何異德。乃令世尊分座命之。此人俊乂。唯佛明焉。於是如來察衆所念。欲決所疑。廣論迦葉大行齊聖。

③書記有分座者。　大慧年譜［十八丈］云、圓悟著臨濟正宗記、以付之。俾掌記室。分座訓徒。師乃握竹篦。爲應機之器。

（小川太龍）

【八五〇】茶話

①永覺晩録［一ノ六丈七丈］有晩間、師學問答、次師説法、名曰茶話。

（小川太龍）

【八五一】夜話

①佛通寺愚中和尚會裏、道話、曰夜話。見叢軌類、陪禪處。

（小川太龍）

【八五二】佛事

①忠曰、禪林凡託事。開示佛法。謂之佛事。文字出淨名經。復次反魔事。故謂之佛事。見放光説、凡開光、安座・拈香・入牌・起龕・秉炬等。無不稱佛事。

②維摩經［九ノ五丈］菩薩行品云、阿難白佛言、未曽有也。世尊、如此香飯、能作佛事。佛言、如是如是。阿難。或有佛土、以佛光明、而作佛事。有以諸菩薩、而作佛事。有以佛所化人、而作佛事。有以菩提樹、而作佛事。有以佛衣服臥具、而作佛事。有以飯食、而作佛事。有以園林臺觀、而作佛事。有以三十二相、八十隨形好、而作佛事。有以佛身、而作佛事。有以虚空、而作佛事。衆生應以此縁、得入律行有以夢幻影響、鏡中像、水中月、熱時炎。如是等論、而作佛事。有以音聲語言文字、而作佛事。或有清淨佛土。寂寞無言。無説無示、無識無作無爲、而作佛事。如是阿難。諸佛威儀進止。諸所施爲、無非佛事。阿難有此四魔八萬四千諸煩惱門、而諸衆生、爲之疲勞。諸佛即以此法、而作佛事。是名入一切諸佛法門。　註肇曰、佛事者、以有益爲事耳。如來進止舉動。威儀俯仰。乃至動足。未曽無益。所以諸所作爲。無非佛事。

③放光般若經［十六ノ六丈左］不和合品説魔事畢云、若有是善男子善女人、書持諷誦般若波羅蜜者、便具足五波羅蜜、及薩云若已、當知是爲佛事。

（小川太龍）

【八五三】立地

①忠曰、佛事名立地。蓋語不多故、立地而成也。

②虎關錬禪師十禪支録序云、〈虎關〉曰、予考訂古今禪冊備十門。一曰開堂。二曰上堂。三日小參、附陞座。四曰拈提。五曰普説。六曰法語。七曰對機。八曰立地。九曰偈賛。十曰秉佛。

（小川太龍）

【八五四】拈香

①舊説［敕鈔一ノ廿三丈］曰、拈燒義也。凡佛祖等前、燒香、皆是拈香也。

②敕修清規［上二ノ十九丈］入院云、到佛殿拈香、有法語。〈止此。〉又開堂。爲王臣檀越嗣法師。拈香是也。今以拈香爲佛事名。備用清規［一ノ九丈］達磨忌云、住持舉拈香佛事。〈止此。〉是也。

③又舊説［敕鈔五ノ八丈］曰、陞座、如諷經。拈香佛事、猶如願文也。又猶如諸經之流通分也。

④海藏紀年録［四十七丈］云、康永三年、師六十七歳、六月。武州刺史高師直、遇亡父六七日忌、因金吾衛長史平氏明。勸師爲其拈香。師諉氏明曰、拈香、蓋有叢規、非可常用者。古徳未及此。老僧日在衆也。竊哂、據師位者、忽遺往哲遠業。以習近圖。繇是往既獲拒武州之須於府命。〈源將軍〉今烏可失拒于此邪。君善爲我辭焉。氏明曰、祖佛出興。隨機赴感。何常之有。師曰、噫。蕩然無反。吾誰與歸。使者三反。師終不可。識者尚其節義也。

⑤忠曰、拈香、蓋有叢規者、蓋爲佛祖拈香、不待言之。其爲居家者、如建寺檀主。徳業稍大。則入院人、爲之拈香矣。以習近圖者、日本國俗、薦亡靈忌辰。請拈香佛事。師僧爲之。屬四六文。廣讃亡靈事業。其間非無虚褒。或以香。直供靈。則其徳難當。故説道。檀家借手山僧。供養十方三世佛祖、大小神祇等。回此功徳。莊嚴亡者報土。此般古徳。未曽爲之。蓋虎關之所惡、在于此。又如寧兀菴、爲尤木石拈香。直供其靈。木石參禪徹悟人。應供無愧、不可以爲例矣。

（小川太龍）

【八五五】小拈香

①舊説曰、凡陞座已前、有甲長老、拈香、此爲大拈香。大拈香畢、次乙長老、出拈香、此拈香、名脚踏佛事。拈香畢、乙長老陞座。若無大拈香人、則長老直出拈香、轉身陞座、則此拈香、爲小拈香。

②東漸清規［三ノ四丈］臨時行事陞座云、如本寺開山、或本山前住諱日、當代住持、升座。或就本菴安排。若法堂鋪設、掛眞於座上、對靈而設座。〈乃至。〉施主守塔比丘、出衆、眞前燒香、請佛事。受請人出燒香。先住持前問訊。又至證明人前問訊。巡與大衆普同問訊。舉法語畢、住持前問訊歸位。又施主如前。請住持佛事。受畢、離位進爐燒香、徑往

證明人前。巡問訊、驀直頭首背面透過。次普同問訊據座、兩班轉位排立。法座左邊頭首。住持方爲上。右邊知事排立。侍者後至立。住持先小拈香。〈或云、若無拈香人、則謂之小拈香。有拈香人、則謂之脚踏佛事。〉畢趺座。〈已下禮與上堂同。〉

（小川太龍）

【八五六】脚踏佛事

①見小拈香處。

（小川太龍）

【八五七】慶讖

①禪苑清規看藏經云、如施主、於看經了日。設齋供慶讖、更須讀。

②應菴華禪師録［●丈］云、檀越張子明、裝佛慶讖、請小參。

③如淨和尚録［下ノ四丈］云、新起妙嚴慶讖陞座。

④　忠曰、碧巖録［八ノ七丈］云、長慶云。大似因齋慶讚。〈止此。〉即作讚。恐作讖者訛。然諸録多作讖。

（小川太龍）

【八五八】開光明

①忠曰、凡新造佛祖神天像者、請宗師家。立地數語。作筆點勢。直點開他金剛正眼。此爲開眼佛事。又名開光明。

②大慧杲禪師録［八ノ十五丈］云、江給事請、開佛光明。師執筆云、教中道、清淨慈門刹塵數。共生如來一妙相。一一諸相莫不然。是故見者無厭足。又道、如來眼有大人相。名自在普見雲。以衆妙寶。而爲莊嚴。摩尼寶光、清淨瑩徹。普見一切、皆無障礙。既然如是。爲甚麼。却要他人點眼。還有道得底麼。若也道得、非獨爲黄面老子出氣。亦使徧法界衆生、悉沾利益。若道不得。聽取一頌。舉頭忽覩明星現。因茲眼病見空華。遂以筆點云、今日還渠舊光彩。碧眸烱烱照塵沙。

③應菴華禪師録、希叟曇禪師録已下。不遑枚舉。

④　教家開眼法。　黑谷語燈録［五ノ一丈］云、問佛之開眼。及供養。答開眼者、本是佛匠雕開眼。是事開眼。次僧家誦佛眼眞言、而開眼、誦大日眞言、而成就佛一切功德。此謂開眼也。供養者。持香華燈明、及珍寶等、奉上佛。此謂供養也。

（小川太龍）

【八五九】安座

①忠曰、不拘新像古像。凡奉之安殿内時、請宗師家、立地數語。此謂安座佛事。或有新像未點眼、則點眼安座。一時講之、語中自具兩意者。或有雖一時講之、點眼安座各別請一師者。〈如日工集［一ノ廿七丈］云。〉

②大川濟禪師大慈録云、門前七塔堅菴主、造石佛。請師奉安。云、一二三四五六七。古佛不曾過去。七六五四三二一。妙轉如是法輪。菴主向崖崩石裂處領話。三十二相、八十種好。一時出醜。直得西風陣陣高、秋雨番番急。塔戸鎮長開、無出亦無入。且道毘婆尸佛之前、釋迦文佛之後。還有者箇消息麼。〈彈指一下。〉唵毘盧枳帝挲訶。

（小川太龍）

【八六〇】鳴鐘佛事

①虛堂愚和尚録［新添卅九丈］鳴鐘佛事云、烹金鍊玉。煆聖鎔凡。不假鉗錘。便成大器。霜清月皎。證圓通三昧之門。雲淡天低。破勞生昏迷之夢。壽同空有。永鎮化城。最初一椎。如何話會。聲鐘一下云、劫石有銷日。洪音無盡時。

（小川太龍）

【八六一】行新橋佛事

①無門開和尚録請［下廿丈］行新橋佛事云、雲根架就笑談中、凡聖如今一路通。箇箇脚跟親蹈著。人人足下起清風。不似天台滑石。半巇半嶮。勝如趙州略彴。度馬度驢。雖然欲行千里。要知一歩爲初。從茲不用頻題柱。來往都乘駟馬車。

（小川太龍）

禪林象器箋巻第十二

○參請類

【八六二】請益

①傳燈録［六ノ二十二丈］禪門規式云、除入室請益。任學者勤怠。或上或下。不拘常準。

②敕修清規［下一ノ四十四丈］請益云、凡欲請益者。先稟侍者。通覆住持。〈乃至〉如允所請。定鐘後。詣侍司。候方丈秉燭裝香。侍者引入住持前。問訊。挿香。大展九拜。〈乃至〉肅恭側立。諦聽垂誨。畢。進前挿香。大展九拜。謂之謝因縁。免則觸禮。次詣侍司。致謝。

③論語［註疏十三ノ一丈］子路篇云、子路問政。子曰、先之勞之。請益。曰無倦。疏。請益者。子路嫌其少。故更請益之。

④禮記［註疏二ノ十三丈］曲禮云、侍坐於先生。先生問焉終則對。請業則起。請益則起。註尊師重道也。起若今摳衣前請也。益謂受説不了。欲師更明説之。〈引論語〉

⑤　忠曰、有所已與。更復請餘分。言請益。禪家借儒典字。以命入室請法也。

⑥碧巖録［一ノ三十二丈］云、久參先德。有見而未透。透而未明。謂之請益。若是見得透請益。却要語句上周旋。無有疑滯。久參請益。與賊過梯。其實此事。不在言句上。

⑦又雲門［二ノ十三丈］倒一説話評云、這僧不妨。是箇作家。解恁麼問頭邊。謂之請益。

⑧僧寶傳［六冊二十四丈］佛印元禪師傳云、嘗謂衆曰、昔雲門。説法如雲雨。絶不喜人記録其語。見必罵逐曰、汝口不用。反記吾語。異時裨販我去。今室中對機録。皆香林明教。以紙爲衣。隨所聞即書之。後世學者。漁獵文字語言。正如吹網欲滿。非愚即狂。時江浙叢林。尚以文字爲禪。謂之請益。故元以是諷之。

⑨祖庭事苑法英序云、睦菴卿上人曰、曩游叢林。竊見大宗師。陞堂入室之外。復許學者記誦。所謂雲門雪竇諸家禪録。出衆擧之。而爲演説其縁。謂之請益。　忠曰、此是江浙叢林。所謂請益也。

⑩聯燈會要［二十ノ二十二丈］洞山价禪師章云、師問忠國師無情説法。後到潙山。潙云、我這裡。也有些子。便以拂子點一點。師辭潙山。直造雲巖。請益前話。巖云、不見。彌陀經云、水鳥樹林。悉皆念佛念法。師因有省。

⑪八方珠玉集［下ノ三十五丈］云、金峯和尚上堂。至晚。有僧請益云、和尚今日垂語。有

僧出問。爲什麽不答。峯云、大似失錢遭罪。

⑫ 雪巖欽禪師録［上ノ四十五丈］普説云、移單過淨慈拄搭。懷香詣方丈。請益。

（朝山一玄）

【八六三】謝因縁

見請益處。

①忠曰、因縁者。佛祖差別因縁也。師家爲學者説之。睦菴所謂。爲演説其縁者。〈詳請益處〉

學者聽畢。謝之。故言謝因縁。

②雪巖欽禪師録［上ノ四十六丈］普説云、尋常請益。末上有一炷香禮三拜。謂之謝因縁。

（朝山一玄）

【八六四】代衆請法

①敕修清規聖節上堂云、侍者登座。左手上香。轉身提坐具問訊。謂之代衆請法。

②竺仙仙禪師録［三ノ二十二丈］示燒香侍者法語云、海印提藏主。爲吾侍者。數以左手。代爲大衆燒香。請吾説法。於是莫不即爲或拈拂子。或拄杖等。并口嘮舌沸。無量作用。其猶描畫虚空也。　又送輝藏主偈［四ノ二十四丈］云、如來大藏教。演出復演入。光明一照中。貶眼顱不及。手操烏號弓。射落日與月。拾得兎角杖。撥出火中雪。由是與我左手燒香。轉身問訊。八萬高人。似鵠立。三千刹界如雷震。相別如九州。寫作贈行句。他日再相逢。清風動寰宇。〈蓋輝侍于燒香〉

（朝山一玄）

【八六五】問話

①傳燈録瑞鹿先禪師章云、師云、大凡參學佛法。未必學問話是參學。〈詳揀話處〉

②廣燈録［二十七ノ八丈］寶覺諟禪師章云、師云、今時師僧問話。印本打就。箇箇一般。未有一箇本分問話者。看他茱萸和尚上堂道。汝諸人。莫向虚空裏釘橛。有僧便出來道。虚空是橛。茱萸便棒。且道者僧。出來恁麽道。具眼。不具眼。茱萸當時便棒。且道。打他什麽處。大家驗看。

③緇門警訓［下ノ七十三丈・東漸規三ノ二丈引］佛眼遠禪師。誡問話云、近代問話。多招譏謗。蓋縁不知伸問致疑。咨請之意。後生相承。多用祝贊順時語。竝非宗乘中建立。如古人問。若爲得出三界去。又問。聲色如何透得。又問。此間宗乘。和尚如何言論。竝是出衆當場決擇。近時兄弟。進十轉五轉沒巴鼻語。或奉在座官員。或莊嚴修設檀信。俱不是衲僧家氣味。又抽身出衆。便道數句。或時云、某甲則不恁麽道。又云、和尚何不道。云云。夫問話者。激揚玄極也。不在多進語。三兩轉而已。貴得生人信。不至流蕩取笑俗子也。

④　又見職位類。禪客處。

（朝山一玄）

【八六六】問答

①忠曰、學問師答。謂之問答。若唯屬師家邊。則謂之對機也。

②緇門警訓［下ノ七十二丈］佛眼遠禪師示禪人心要云、近世多以問答。爲禪家家風。不明古人事。一向逐末不反。可怪可怪。昔人因迷而問。故問處求證入。得一言半句。將爲事。

究明令徹去。不似如今人胡亂問。趁口答。取笑達者。

③續燈録崇福祖印禪師章云、師云、問在答處。答在問宗。一任諸人點頭。忽若問不在答處。答不在問宗。又且作麽生模索。乃展手云、無遺絲髮。一時分付。請諸人。各各子細觀瞻。甚生門風。甚生標格。儻一念回光。千聖共徹。不歷僧祇。豈勞修證。截生死河。踞祖佛位。便乃高超三界。永出四流。萬德圓明。十方獨步。可不同酬佛恩。共顯王化。

（朝山一玄）

【八六七】問禪

①見職位類。禪客處。

（朝山一玄）

【八六八】出陣　入陣

①大鑑小清規［十九丈］秉拂云、問話禪客。始謂出陣。終謂入陣。此皆訛謬。古人胸中。疑情未泯。出來對衆決擇。安有出陣入陣之意。可削除之。古來雖有法戰之語。不專在禪客分上。

②楊岐會和尚録［古宿十九ノ十丈］云、一日七人新到。師問。陣勢既圓。作家戰將。何不出陣。與楊岐相見。〈云云〉。　又［十一丈左］曰、一日八人新到。師問。一字陣圓。作家戰將。何不出陣與楊岐相見。僧云、和尚照顧話頭。師云、楊岐今日抱馬拖旗去也。僧云、新戒打退鼓。師云、道。僧擬議。師云道。僧撫掌一下。師云、謝上座答話。僧無語。師云、將頭不猛。累及三軍。且坐喫茶。

（朝山一玄）

【八六九】出衆　入衆

①忠曰、出陣入陣。大鑑已呵之。則須言出衆入衆也。

（朝山一玄）

【八七〇】下語

①敕修清規［上二ノ四丈］告香云、參頭進椅側問訊。稟云、某等爲生死事大。無常迅速。伏望和尚慈悲。開示因縁。住持擧話三則。隨下語。

②　忠曰、蓋住持自下語。示學徒也。

③敕修清規［上二ノ三十四丈］下遺書云、專使進前問訊。請和尚趺坐。若住持垂語。須下語挿香展禮。

④　傳燈録［十五ノ二十二丈・聯二十ノ二十六丈］洞山价禪師章。　師垂語曰、直道本來無一物。猶未消得他衣鉢。這裡合下得一轉語。且道下得什麽語。有一上座。下語九十六轉。不愜師意。末後一轉。始可師意師曰、闍梨何不早恁麽道。有一僧。聞請擧。如是三年。執侍巾缾。終不爲擧。上座因有疾。其僧曰、某甲三年。請擧前話。不蒙慈悲。善取不得。惡取。遂持刀向之曰、若不爲某甲擧即便殺上座也。上座悚然曰、闍黎且待。我爲汝擧。乃曰、直饒將來。亦無處著。其僧禮謝。

⑤　續傳燈録［二十七ノ三丈］大慧杲禪師章云、勤〈圓悟〉擧。僧問雲門。如何是諸佛出身處。答云、東山水上行。令師下語。師參及一年。凡下四十九轉語。皆不契。一日勤赴一達

官宅。陞座。擧東山水上行。若是天寧即不然。若有人問。如何是諸佛出身處。只向道。薫風自南來。殿閣生微凉。師聞擧。豁然省悟。

⑥ 癡絶冲禪師録尤木石序云、癡絶師。得處超軼。用處灑落。故平生室中不許人下語。專以此著。羅龍打鳳。而學者鮮能湊泊。

（朝山一玄）

【八七一】斷禪

① 忠曰、問答挨拶。謂之斷禪。斷相也。

② 餘冬序録［四十八］云、唐人詩中字音。有以十讀如諶。相讀如斷。如恰似春風相欺得。如何不相離等句。皆思必切。

③ 老學菴筆記［十ノ一丈］云、世多言。白樂天用相字。多從俗語。作思必切。如爲問長安月。如何不相離。是也。然北人大抵以相字。作入聲。至今猶然。不獨樂天。老杜云、恰似春風相欺得。夜來吹折數枝花。亦從入聲讀。乃不失律。俗謂。南人入京師。效北語。過相藍。輒讀其隍。曰大斷國寺。傳以爲笑。

④ 大慧答張提刑書［書上ノ四十丈］云、將心意識。記取遮杜撰説底。却去勘人。一句來一句去。謂之斷禪。末後我多一句。你無語時。便是我得便宜了也。

⑤ 大慧爲永大師普説云、眞淨和尚。愛與學者斷禪。或問。監寺近日如何。或問。首座近日作麼生。或問。潙山水牯牛。你如何會。學者便答一句。看來又似好。又似不好。何故字。經三寫。烏焉成馬。引得後來叢林。有一般兄弟。專以斷禪爲事。不管道理是不是。末後多一句。便是贏得禪。

（朝山一玄）

【八七二】行脚

① 釋氏要覽［下十五丈］云、遊行人間。今稱行脚。未見其典。毘奈耶律云、如世尊言。五法成就。五夏已滿。得離依止。遊行人間。五法者。一識犯。二識非犯。三識輕。四識重。五於別解脱經。善知通塞。能持能誦。〈別解脱經即戒本也〉

② 祖庭事苑［八ノ十六丈］云、行脚者。謂遠離鄉曲。脚行天下。脱情捐累。尋訪師友。求法證悟也。所以學無常師。徧歴爲尚。善財南求。常啼東請。蓋先聖之求法也。永嘉所謂。游江海涉山川。尋師訪道爲參禪。豈不然邪。中阿含帝釋偈云、我正恭敬彼能出非家者。目在游諸方。不計其行止。往則無所求。唯無爲爲樂。又高僧慧乘。事祖強爲師。年十六。啓強曰、離家千里。猶名在家沙門。請遠游都鄙。以廣見聞。強廼從之。夫是行脚之利。豈不博哉。

③ 村寺清規云、從上出家。參學之士。未有不發足超方。千里求師者。故永嘉云、遊江海。涉山川。尋師訪道爲參禪。大慧師喜離得業偈曰、古佛放光留不住。鐵牛無脚也須行。雖然未踏曹溪路。且喜今朝離火坑。古人既如是。今可不然耶。

④ 趙州諗禪師録［上ノ一丈・古宿十三］云、師初隨本師行脚。到南泉。〈乃至〉其後自携瓶錫。遍歴諸方。常自謂曰、七歳童兒。勝我者。我即問伊。百歳老翁不及我者。我即教他。年至八十。方住趙州城東觀音院。

⑤ 忠曰、從諗。自盛年行脚。到八十歳。初住院。此謂趙州八十行脚。世誤言八十歳。而

行脚者。非也。

⑥廣燈録［十二ノ七丈］興化奬禪師章云、常云、我南方行脚。一匝。拄杖。不曾撥著一箇會佛法底人。

⑦林間録［下ノ四十四丈・又僧宝伝五冊十三丈］云、雲峯悦禪師。見僧荷籠至。則曰未也。更三十年。定乗馬行脚。法雲秀禪師。聞包腰至者。色動顔面。彼存心於叢林。豈淺淺哉。

⑧叢林盛事［十丈］云、密菴傑禪師。初出嶺。至婺州智者。有老宿問曰、上座此行何處去。曰四明育王見佛智和尚去老宿云、世衰道喪。後生家行脚。例帶耳不帶眼。傑曰、何謂也。老宿云、今育王一千來衆。長老日逐接陪不暇。豈有工夫著實。與汝輩發機。傑下涙曰、若如此。某今往何處。宿云、此去衢州明果。有華嚴頭。雖後生。見識超卓。汝宜見之。傑依教。往明果依華。

⑨慈受深禪師録［二十六丈］示小師行脚語云、前輩打包。意在省縁無冗細。無玩好。如徳山挾複子到大潙。是也。今人打包即不恁麼。鉢盂以梅花衲作袋。祠部用古蜀錦爲囊。淨瓶交枕。總要光鮮。拄杖戒刀。莫非濟楚笠頂上。閑文澆字。須及數斤線貼裏。襪樣針筒。將看一擔。只要別人道好。忘却自己辛勤若是脱洒衲僧。必不如是。草草地挈箇包子。卓卓地做箇道人。直似野鶴孤雲。切忌無繩自縛。汝等更聽一偈。古人只蓄兩枚針。夏葛冬裘逐施尋。汝輩盛年脚力健。好携複子歴叢林。

⑩汾陽昭禪師録［広下ノ一丈］行脚歌云、發志辭親。意欲何能。投佛出家異俗。專心慕法爲僧。既得尸羅具備。又能法服霑身。父母不供甘旨。王侯不侍不臣。潔白修持。如氷似玉。不名不利。去垢去塵。受人天之瞻敬。承釋梵之恭勤。忖徳業量來處。將何報答爲門戸專精何行即能消唯有參尋別無路。苦身心歴山水。白眉作伴。爲參禮。冒雪衝霜。不避寒。渡水穿雲。伏龍鬼。鐵錫飛銅餅滿。不問世問長與短。叢林道侶要商量。四句百非一齊翦。探玄機明道眼。入室投針須鍛錬。驅邪顯正自應知。勿使身心有散亂道難行塵易。頭頭物物須明見。區區役役走東西。今古看來忙無限。我今行勤自辨。莫教失却來時伴。擧足動歩要分明。切忌被他虚使喚。入叢林行大道。不著世間虚浩浩。堅求至理。不辭勞。剪去繁華休作造。百衲衣雲水襖。萬事無心離煩惱千般巧妙不施功。直出輪廻生死道。勸同袍求正見。莫似愚夫頻改變。投巖立雪猛身心。方得法王常照現。請益勤恭敬速。不避寒暄常不足。只縁心地未安然。不羨榮華不怕辱。直教見性不從他。自家解唱還郷曲。度平生實安樂。蕩蕩縱横無依托。四方八面應機縁。萬象森羅任寛廓。報四恩拔三有。問答隨機易開口。五湖四海乍相逢。一擊雷音師子吼。悠悠自在樂騰騰。大地乾坤無過咎。分明報爾水雲僧記取面南看北斗。

⑪領衆行脚　碧巖録［一ノ二十六丈］第七則評云、韶國師。久依疎山。自謂得旨。乃集疎山平生文字頂相。領衆行脚。至法眼會下。他亦不去入室。只令參徒。隨衆入室。

（朝山一玄）

【八七三】偏參

①五燈會元［二ノ六十四丈〇伝廣等不収］應化聖賢云。善財參五十三員善知識。未後到彌勒閣前。見樓閣門閉。瞻仰讚歎。見彌勒從別處來。善財作禮曰。願樓閣門開。令我得入。尋時彌勒至善財前。彈指一聲。樓閣門開。善財入已。閣門即閉。

②大隋眞和尚録［古宿卅五ノ九丈］云。祇如老僧行脚時。不揀叢林。有供養無供養處。祇要看他眼目。稍似根性有些些器量。方欲過一夏哉一冬。若是根性鄙劣者。三朝兩日。便行。

筭來參六十餘員大知識。有大眼目者。那無一二。餘者豈有眞實知見。祇是圖你諸人供養。欲望福報。你又有什麼福報與伊。

③傳燈録［十八ノ二丈］玄沙備禪師章云。雪峯召曰。備頭陀。何不徧參去。師曰。達磨不來東土。二祖不往西天。

④僧寶傳［一冊廿丈］汾州昭禪師傳云。剃髮受具。杖策游方。所至少留。不喜觀覽。或譏其不韻。昭嘆之曰。是何言之陋哉。從上先德。行脚。正以聖心未通。驅馳決擇耳。不緣山水也。昭歷諸方。見老宿者。七十有一人。皆妙得其家風。尤喜論曹洞。

⑤傳燈録［三十ノ廿五丈］龍會道尋徧參三昧歌云。天涯海角參知識。徧咨惠我全提力。師乃呵余退歩追。省躯廓爾從茲息。覩諸方垂帶直。善財得處難藏匿。棒頭喝下露幽奇。縱去奪來看殊特。趙州關雪嶺陟。築盧峯前驗虚實。據證霊由闢萬機。横揮祖刃開三域。卷舒重重孰可委。休呈識意謾猜揣。衲子攢眉碧眼咦。黄河倒逆崑崙觜。潙山牛道吾唱。馬師奮迅呈圓相。執水投針作後規。把鏡持旛看先匠。廣陵歌誰繼唱。擬續宮商調難況。石人慍色下鞭撾。木馬奔嘶梵天上。麗水金藍田玉。祝融峯攢湘浪蹙。滿月澄谿松韻清。雲從龍騰好觀矚。

（神足浩正）

【八七四】辨道

①修行曰辨道。

②敕修清規［下一ノ十四丈］侍者進退云。舊侍者咨稟云。某等久侍和尚。今欲告退隨衆辨道。伏望慈悲。

③雪巖欽禪師録普説云。修兄問我。在這裡作甚麼。對他道。辨道。他云。你喚甚麼作道。遂不能對。

④永平清規［上巻］有辨道法章。　又［上ノ六丈］典座教訓章云。嘉定十六年癸未。五月。在慶元舶裏。有一老僧。來問和客討買倭椹。山僧請他喫茶。僧云。吾是西蜀人。離鄕四十年。今年六十一歳。充阿育王山典座。明日。五日一供。渾無好喫。要做麪汁。未有椹在。仍特特來討椹。欲供養十方雲衲。山僧話次問。座尊年。何不坐禪辨道。看古人話頭。煩充典座。只管作務。有甚好事。座大笑云。外國好人。未了得辨道。未知得文字在。山僧驚且慚。便問。如何是文字。如何是辨道。座云。若不蹉過問處。豈非其人麼。山僧不會。座云。他時後日。來育王與汝商量。便起去。七月山僧掛錫天童。典座忽來相見。山僧喜踊。説出前日未了因緣。座云學文字者。要知文字所由。務辨道者。要會辨道所由。山僧問他。如何是文字。座云一二三四五。又問如何是辨道。座云徧界不曾藏。

（神足浩正）

【八七五】罷參

①了畢大事。罷休參禪也。

②傳燈録［八ノ廿二丈］京兆草堂和尚章云。自罷參大寂。馬祖遊至海昌。　又［十八ノ廿丈］鏡清忞禪師章云。師罷參。受請。止越州鏡清禪苑。唱雪峯之旨。

④虚堂愚和尚録［四ノ五十六丈］普説云。則監院。謂法眼曰。某甲曾見青峯和尚。得箇安樂法門。所以罷參。

【八七六】嗣法　（神足浩正）

①祖庭事苑［七ノ六丈］云。嗣音寺。从口以言傳。从冊以書記。記而主之。必有傳嗣者矣。宗門之嗣法。猶諸侯之嗣國也。

②雲外［古今雜集載］岫禪師嗣法論云。參禪學道。貴在乎續佛祖慧命。非榮身之事也。余嘗曰。嗣其法者。有三。上士嗣怨。中士嗣恩。下士嗣勢。嗣怨者在道。嗣恩者在人。嗣勢者在己。在道者。如大火眞金。在人者。如歲寒松柏。在己者。如春風楊柳。立志有殊。眞僞不等。古今叢林。皆有之。余作此論。自愧學陋才謭。不敢褒貶是非。明人之功過。後必有班楊史筆。作春秋者。詳而補之。延祐己未夏。爲璵書記。

○執務類

【八七七】輪番　（神足浩正）

①羅湖野録［上ノ卅一丈］云。雁山能仁元禪師。居連江縣福嚴菴。揭偈於伽藍祠曰。小菴小舍小叢林。土地何須八九人。若解輪番來打供。免教碎作一堆塵。

②護法録［一下ノ三丈］樸隱禪師塔銘序云。皇明龍興。詔天下名桑門。建會鍾阜。升濟幽靈。輪番説戒。

③宋史［志ノ百四十四ノ十四丈］兵志云。槍手。自十一月至二月。月輪一番閲習。凡三日一試。擇其技優者。先遣之。

④輟耕録［十八］云。汴梁宮人。絶句曰。殿前輪直罷。偸去賭金釵。怕見黄昏月。殷勤上玉階。

【八七八】直堂　（神足浩正）

①直僧堂●。

②敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云。堂中有直堂牌。刻云。輪次直堂。周而復始。　又見守寮處

【八七九】守寮　（神足浩正）

①忠曰。看守衆寮也。　〈又曰看寮。〉

②敕修清規普請云。除守寮直堂老病。外並宜齊赴。

【八八〇】直浴　（神足浩正）

①敕修清規［下一ノ三丈］知浴云。參頭差行者直浴。

【八八一】僉疏　（神足浩正）

①忠曰。僉作簽爲正。簽書姓名也。見僉押處。

②敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云。維那用黄紙書疏。帶行僕。捧盤袱爐燭香合。上方丈。請住持僉疏。

③僉疏法。疏首尾。及可漏上三處。住持比丘下。空闕不書。及僉疏。住持於空處。書兩字名。維那命行者。疏中及可漏。使三寶印。〈使印法。見器物類。三寶印處。〉

（神足浩正）

【八八二】僉狀

①忠曰。僉作簽爲正。見僉押處。

②敕修清規［上二ノ卅六丈］議舉住持云。兩序勤舊。列名僉狀。保申所司。請之。

（神足浩正）

【八八三】僉押

①敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云。每日堂司行者。將輪差僧簿。須預先一日。請住持頭首衆僧。各書雙字名。僉押。量衆多少。依戒具寫差單。排定日分。周而復始。

②忠曰。簽押。本官吏語。禪林循用。僉書雙字名也。押書華押也。

③敕修清規［上二ノ廿丈］入院云。新命視篆訖。就狀上。先僉押。次題日子。使印於上。

④三國演義［八ノ廿七丈］云。龐統拜。求榜文。以安宗族。曹操命寫榜。僉押。付統。

⑤建仁［敕鈔一ノ廿一丈］常菴曰。禪苑清規［四ノ一丈］作簽押。今僉當改簽。簽者書住持比丘。頭首比丘等也。押者。打華押也。古解言。僉皆也。僉押。衆皆集書押也。此解非。

⑥忠曰。如言新命就狀上僉押。則獨押。亦言僉押。非皆集押義明矣。又僉當作簽。簽作籤爲正。

⑦禪苑清規［四ノ一丈］庫頭云。十日一次計曆。先同知事簽押。一月一次通計。住持人己下同簽。

⑧夢溪筆談［一ノ五丈〇必十五ノ一］云。唐中書指揮事。謂之堂帖子。曾見唐人堂帖。宰相簽押格。如今之堂劄子也。

⑨十八史畧［六ノ卅六丈］宋英宗紀云。韓琦。一日出空頭敕。〈敕出未書姓名。〉歐陽修己僉。趙槩未僉。修曰。第書之。〈修勸槩次第僉署。〉韓公必有説。

⑩續通鑑綱目［六ノ三丈］書之。作歐陽修己簽。僉簽通用。

⑪正字通［未上卅八丈］云。簽同籤。俗省。从籤爲正。　又［未上四十二丈］云。籤倉先切。音千。説文驗也。通雅曰。籤求。猶今之僉敘也。通鑑馬仙琕。籤求應赴。李延壽南史。故事。府州部論事。皆籤。前直敘所論之事。後云謹籤具日下。當時王府。有典籤官。今吏書承行。亦以紅籤。裁貼其旁。以便批決。故外官坐穿堂。謂之籤押。今作簽。

⑫楊升菴外集［十ノ十丈〇又升菴文集六十三ノ十五丈全同］云。籤押。梁書馬仙琕〈音駢〉籤求應赴。李延壽南史。故事府州部論事皆籤。前直敘所論之事。後云謹籤具日下。又云。某官籤。此即近日。僉押之僉。古今字變爾。

⑬品字箋［押ノ注〇乙ノ百廿八丈］云。僉押。僉僉日。押押字也。

⑭建仁［敕鈔一ノ廿一丈］常菴曰。簽與檢同。檢書署也。〈説文〉署者位之表識也。國語［四ノ十二丈］註簽者書住持比丘。頭首比丘。知事比丘等。若官人。書某官位職等也。

⑮忠曰考韻書。未見簽檢通。然按十八史畧註。簽書姓名也。韻會［琰句五十六丈］檢。居奄切。説文書署也。止此則簽檢雖字別音異。皆書名位也。

⑯ 唐國史補［下ノ一丈］云。宰相判四方之事。有堂案。處分百司。有堂帖。不次押名。曰花押

⑰ 宋張淏雲谷雜記［鄂廿八　四丈］云。予按東觀餘論云。唐文皇令羣臣上奏。任用眞草。惟名不得草。遂以草名爲花押。韋陟五朶雲。是也。魏晋以來法書。至梁御府藏之。皆是朱异姚懷珍等。題名於首尾紙縫間。故謂之押縫。或謂之押尾。祇是書名耳。後人花押。乃以草記其自書。故謂押字。蓋沿襲此耳。唐人及國初前輩。與人書牘。或只用押字。與名用之無異。上表章亦或爾。近世遂施押字於移檄。或不書己名字。而別作形模。非也。又孫公談圃云。先朝人。書狀簡尺。多用押字。非自尊也。從簡省。以代名耳。今人不復識。見押字便怒。予頃在武陵於畢文簡公諸孫處。見文簡與寇萊公一帖。尾用押字。押字之下。却有拜咨二字。此正以押字代名也。景德間。士大夫質厚。故此風尚存。至元豐間。相去方七十餘年。已爲罕見。今固不復有矣。

⑱ 羣談採餘［二ノ文史六丈］云。古人花押。所以防僞政。以名而花之。凡官府文移。人間私簡。俱前書名姓。而後押字。國朝押字之製。上下多用一畫。蓋取地平天成之意。凡釋褐入官者。至吏部。畫字三日。以驗異時文移之眞僞也。

⑲ 經國大典註解［後ノ下四十七丈］云。押署也。以草書名爲押。古者書名。破眞從草。取其便于書記。難于模倣。復有不取其名。出于機巧者。唐韋陟。始以押字爲記。

【八八四】僉名　（神足浩正）

① 忠曰。僉作簽爲正。及僉名義。見僉押處。

② 敕修清規［上二ノ四丈］告香云。請客侍者。預依戒次。具茶狀。備卓袱筆硯。告香罷。列法堂下間。請茶各僉名。

【八八五】僉單　（神足浩正）

① 僉義。見僉押處。單帳也。見文籍類。

② 敕修清規［上二ノ卅二丈］唱衣云。唱衣畢。結定鈔數。主喪僉單。

【八八六】鳴鐘　（神足浩正）

① 敕修清規［下二ノ十八丈］鐘云、大鐘引杵宜緩揚聲欲長。凡三通。各三十六下。総一百八下。起止三下稍緊。鳴鐘行者、想念偈云。願此鐘聲超法界、鐵圍幽暗悉皆聞。聞塵清淨證圓通、一切衆生成正覺

② 禪苑清規警衆云、打大鐘之法、先輕手擬鐘三下。慢十八聲。緊十八聲。三緊三慢。共一百八聲。當職行者。燒香禮拜。誦偈訖。然後擊之。偈云。三塗八難。息苦停酸。法界衆生。同聲悟道。念竟即時輟之。

③ 羣談採餘［十ノ考証廿一丈］云。鐘聲晨昏。叩一百八聲者。一歲之義也。蓋年有十二月。有二十四氣。又有七十二候。正得此數。浙杭州歌曰。前發三十六。後發三十六。中發三十六聲急。通共一百八。越州歌曰。緊十八。緩十八。六遍湊成一百八。台州歌曰。

前撃七。後撃七。中間十八徐徐發。更兼臨後撃三聲。三通湊成三百八。
④忠曰。傳説。鐘一百八聲。表破百八煩惱。未見經論説。蓋出乎世典。取一歳數之義爲正。如律文。鳴犍稚［敕鈔十五ノ三丈］曰作相。鳴之四十下。三通合一百二十下也。未聞百八聲之説。
⑤忠曰。行事鈔［上一ノ四巻六丈］集僧通局篇。明打犍稚法。簡古難見。今竊合資持記所解。取意綴文。直下録去。貴易通解。　文云。尋常所行。始終四十下。初十下漸發聲。此爲虚揩中間二十七下。漸希漸大。後三下。聲盡。方打一通。如是至三。名爲三通。集三乗也。長打百二十下。接前四十。増兩四十。共百二十。其第二四十下。虚揩漸大。十八下。中間四下聲盡方打。此救四惡趣。自二十三已去。後十八下。漸槪漸小。乃至微末。次第三四十下。同前。亦有少異。三十六七八三下。名三通。末後二下。名息槌。圖經云。念三寶。存五衆。衆各八輩。故以四十爲差。三道乗之。則百二十爲節。〈八輩謂四果四向、三道、謂三乗。〉
⑥南山［敕鈔十五ノ三丈引］増輝記作相偈云。虚揩十下。漸希漸大。二十七下。大長三下。
（西川秀敏）

【八八七】装香

①敕修清規［下一ノ四十丈］坐禪云。令供頭僧堂内。装香點燈。
（西川秀敏）

【八八八】埽地

①正法念處經云。若埽如來塔。命終。生意躁天。身香氣。熏百由旬。
②無垢優婆夷問經［九十三套］云。佛告無垢優婆夷言。埽佛塔地。得五福報。何等爲五。一者自心清淨。他人見已。生清淨心。二者爲他所愛。三者天心歡喜。四者集端正業。五者命終。生於善道天中。
③毘奈耶雜事［十四ノ一丈・要覧下十八丈］云。世尊。在逝多林。見地不淨。欲令彼樂福衆生。於勝田中。植淨業故。即自執箒。欲埽林中。時舍利子大目乾連大迦葉波阿難陀等。諸大聲聞。見是事已。悉皆執箒。共埽園林。時佛世尊。及聖弟子。遍埽除已。入食堂中。就座而坐。佛告諸苾芻。凡埽地者。有五勝利。云何爲五。一者自心清淨。二者令他心淨。三者諸天歡喜。四者植端正業。五者命終之後。當生天上。
④増壹阿含經［廿五ノ廿四丈］云。佛言。埽地之人。有五事。不得功德。云何爲五。於是埽地之人。不知逆風。不知順風。復不作聚。復不除糞。然埽地之處。復非淨潔。是謂比丘。埽地之人。雖有五事。不成大功德。復次比丘。埽地之人。成五功德。云何爲五。於是埽地之人。知逆風。順風之理。亦知作聚。亦能除之。不留遺餘。極令淨好。是謂比丘。有此五事。成大功德。
⑤四分律［四十九ノ三十丈］云。有五種埽地。不得大福德。不知逆風順風。埽地不滅跡。不除糞。不復埽箒本處。有五法得大福德。知逆風。順風。埽地滅跡。除糞復埽箒本處。若上座在下風。應語言。小遍避。我欲埽地。
⑥緇門警訓［續下ノ十二丈］。杭州淨慈寺守一法眞禪師。埽地回向文云。以此埽地功德。回向法界衆生。色塵清淨。塵清淨故。眼根清淨。根清淨故。識清淨。聲香味觸法。亦復如是。又願。一世界清淨。乃至盡法界。虚空界。皆悉清淨。同諸如來。光嚴住持。圓覺伽藍。

清淨覺地。永斷習氣。淨穢二邊。凡聖垢染。一塵不立。如是願清淨。智亦復清淨。

⑦趙州諗禪師録［下十三丈・古宿十四］云。劉相公入院。見師埽地。問大善知識。爲什麼却埽塵。師云從外來。

⑧碧巖録［三ノ廿六丈］云。大隋眞如和尚。承嗣大安禪師。一日溈山問云。子在此數年。亦不解致箇問來看如何。隋云。令某甲問箇什麼即得。溈山云。子便不會。問如何是佛。隋以手掩溈山口。山云。汝已後。覓箇埽地人也無。〈又見職位類。淨頭處〉。

⑨禮記［素本二ノ六十六丈］效特牲云。埽地而祭。於其質也。

（西川秀敏）

【八八九】釘掛

①忠曰。釘掛者。総言鋪設也。或釘柱。或掛帷幕等。

②敕修清規［上二ノ十丈］迎待尊宿云。寢堂釘掛帳幕。排照牌。

③又［上二ノ十四丈左］請新住持。發專使云。三門下釘掛帳設。向裏設位。講茶湯禮。　又［下一ノ十五丈］方丈特爲新舊兩序湯云。釘掛寢堂。鋪設坐位。〈乃至〉燒香侍者。預排照牌。又［下二ノ八丈左］方丈小座湯云。寢堂釘掛排位。秉燭裝香。

④舊説［■■■■丈］曰。釘掛者。朱漆板書名位。以釘掛之也。非照牌。蓋如鉢位圖者。

⑤忠曰。舊説謬矣。若如所言。則迎待尊宿。豈可掛漆板。既言釘掛帳幕。何求異解。又若掛名位。爲釘掛。則何以下。復重信排照牌耶。故舊説必謬矣。

⑥墨莊漫録云。兩京牡丹。聞於天下。花盛時。太守作萬花會。宴集之。所以花爲屏帳。至于梁棟柱拱。悉以竹筒貯水。簪花釘掛。擧目皆花也。

（西川秀敏）

【八九〇】喝火

①忠曰。巡寮警火。言喝火。所謂照顧火燭也。見唄器類。火鈴處。

②備用清規［十ノ六丈］日用清規云。喝火過。放禪。

③開福寧和尚録［五十六丈］偈頌云。夜深聞喝火號聲。故經云。即時觀其音聲。而得解脱。偈曰。火號更深喝道來。普門關捩一時開。圓通大士呵呵笑。不是峨嵋與五臺

（西川秀敏）

【八九一】行益（アンイツ）

①忠曰。行者行食也。益者益食也。行猶付與也。〈見行香處〉。

②僧祇律［十五ノ十五丈・又十九ノ廿三丈右］九十二。波夜提中云。若比丘尼。請一比丘食。一比丘尼。共比丘坐。一比丘尼。來往益食。益食比丘尼去時。比丘隨一一時。得波夜提。

③法顯佛國記（執務）［二丈・必十ノ三］云。法顯到于闐僧伽藍名瞿摩帝。是大乘寺。三十僧共犍槌食。入食堂時。威儀齊肅。次第而坐。一切寂然。器鉢無聲淨人益食。不得相喚但以手指麾。

④梁高僧傳［二ノ廿丈・出三藏十六ノ十五丈］佛馱跋陀羅〈此云覺賢〉傳云。陳郡袁豹屆于江陵。賢詣豹乞食。豹素不敬信待之甚薄。未飽辭退。豹曰。似未足。且復少留。賢曰。檀越施心有限。故令所設已■。豹即呼左右益飯。飯果盡。豹大慙愧。

⑤太平廣記［四百五十四ノ一丈］云。張簡棲。見狐憑几。尋讀冊子。其旁有群鼠。益湯茶。

送果栗。皆人拱手。

右證益字。爲增益食物之義。

⑥禪苑清規［一ノ九丈・日用軌範畧下注四十一丈引］赴粥飯云。行食之法。當淨人自行。僧僧家不得自手取食。淨人行益禮合低細。羹粥之類。不得汚僧手。及鉢盂緣點杓三兩下。良久行之。曲身斂閑。手當胸。粥飯多少。各隨僧意。　又［三ノ二丈・敕鈔八ノ卅丈引］監院云。非疾病官客。並當赴堂。所貴。二時行益。行者齊整。

⑦敕修清規［下一ノ三丈］知客云。僧堂前。檢點行益客僧粥飯。

⑧又［下一ノ六丈］都監寺云。齊粥二時。必赴堂。則行僕行益。自然整肅。　又［下一ノ七丈］典座云。訓衆行者。循守規矩。行益普請。不得怠慢。

⑨傳燈録［廿六ノ卅三丈］瑞鹿先禪師章云。師有時云。晨朝起來洗手面。盥漱了喫茶。喫茶了佛前禮拜。佛前禮拜了。和尚主事處問訊。和尚主事處問訊了。僧堂裏行益。僧堂裡行益了。上堂喫粥。上堂喫粥了。歸下處打睡。

⑩忠曰。言僧堂粥飯。行益畢。自家方粥飯也。

⑪傳燈録［十五ノ廿八丈］夾山會禪師章云。小師省覲。師曰。汝蒸飯吾著火。汝行益吾展鉢。什麼處是孤負汝處小師從此悟入。

⑫續燈録［廿七ノ十丈］大覺璉禪師。拈雲門沙喜世界百雜碎話云。山僧遮裏。祇是維那白槌。首座施食。山僧展鉢。行者行益。與麼説話。一任諸方裁斷。

⑬［普説上ノ廿七丈］大慧爲秦國大夫人普説云。伱諸人。每日上來下去。寮舍裏喫茶喫湯。莊上般鹽般麪。僧堂裡行益長廊下擇菜。後園裏擔糞。磨坊下推磨。當恁麼時。佛眼也覷伱不見。

⑭虚堂愚和尚録［四ノ六十一丈］普説云。伱看。雪峯一出嶺來。先買一把杓頭。綰一條手巾。到處行益結緣。

⑮諸祖偈頌［上之下卅五丈］阮中大仰山飯歌云。維那白槌似雷吼。十聲佛號慵開口。行益纔遲忿怒生。第二念中都忘了。

（西川秀敏）

【八九二】供遞（テイ）

①忠曰。傳送供物也。

②字彙云。遞更迭也。又傳遞也。

③敕修清規［上一ノ卅五丈］達磨忌云。住持上香三拜。進爐前。上湯上食。請客侍者供遞。又［上二ノ三丈］告香云。住就座。副參遞大香一片。與參頭。同衆問訊挿香。

（西川秀敏）

【八九三】化米

（西川秀敏）

【八九四】化炭

①雲峯悦禪師。在翠巖化炭。見職位門。堂司處。

②如淨和尚録［下廿六丈］化炭偈云。一刀兩段沒商量。透出無明大火坑。再入死灰烹得活。歲寒聲價轉崢嶸

（西川秀敏）

【八九五】化鹽

①雜毒海［六ノ五丈］少室和尚化鹽偈云。逆浪堆中淘汰出。大爐鞴裡衣將來。遍身潔白誰能比。點著須教百味回。

②忠曰凡化齊化浴。化燈化柴。化薑化茶。化席化鐘等。有所闕乏。無不抄化。不勝枚擧。載在集録。

（西川秀敏）

【八九六】稟（ヒン）

①忠曰。白事曰稟。

②敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云。維那詣書記寮通報。書記出接。維那觸禮一拜。稟云。啓建聖節。煩製疏語。

③小補韻會［寢句卅五丈］云。稟筆錦切。受命曰稟。左傳稟命則不威。俗作稟非。毛氏曰。今俗以白事爲稟。古無此義。

（西川秀敏）

【八九七】覆

①忠曰。白事曰覆。

②敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云。行者就。覆住持。來早殿上啓建諷經。

③小補韻會［宥ノ廿六丈］云。覆通作復。　又［屋ノ九丈］云。復房六切。又白也。禮記願有復也。孟子有復於王者。

（西川秀敏）

【八九八】通覆

①忠曰。白事通達其意也。

②敕修清規［下一ノ五丈］湯藥侍者云。或暫缺侍者。客至通覆。

③又［下一卅二丈］遊方參請云。到侍司通覆。詣方丈禮拜。

（西川秀敏）

【八九九】守請

①舊説［敕鈔九ノ十四丈］曰。守請。猶言内報也。

②敕修清規［下一ノ十二丈］兩序進退云。粥罷。行者守請新人。至寢堂。

（西川秀敏）

【九〇〇】和會

①忠曰、凡有可議、則與預事人、和同會論、揀善行之。

②敕修清規［上一ノ廿五丈］祈禱云、維那和會、堂司行者、報衆、掛祈禱牌。　又［上二ノ廿一丈］開堂祝壽云、預先和會、維那宣公文、首座宣山門疏。　又［下一ノ五丈］都監寺云、凡

事必會議、稟住持方行。

③ 經國大典註解［後下五十一丈］云、和會、和兩順也、會相應也。

（馬場道隆）

【九〇一】提調

①敕修清規［下一ノ八丈］、寮主副寮云、提調香燈茶湯。　又［下一ノ十六丈右］方丈特爲新舊兩序湯云、仍提調、送舊人粥飯三日。　又［上二ノ卅丈］尊宿出喪云、庫司喪司相關、提調喪儀。　又［下二ノ十七丈］月分須知云、六月入伏、堂司提調晒薦。

② 忠曰、日本禪林、撰入院同門疏、同門衆中、一人幹蠱、率衆告諭、成之。及疏後列衆名、其人在最末、此謂提調人、提調者、提起其事、調辨之也。

③ 冥樞會要［下ノ尾］卷尾云、提調鋟梓。萬壽耆舊比丘慧朗。

④ 宋史卷頭、列修史人名云、提調官、光禄大夫中書平章政事〈臣〉納麟等。

⑤ 經國大典註解［後上廿四丈］云、提調提舉也、調和也、言舉一司之事、而調和之也。

（馬場道隆）

【九〇二】提點

①忠曰、提振點起其事、令無壅滞也。

②敕修清規［上二ノ卅五丈］下遺書云、侍者一一提點。

③備用清規［七ノ九丈］衣鉢之職云、方丈一應禮節、究心提點。　又職名有提點、見職位類。

（馬場道隆）

【九〇三】點對

①敕修清規［下一ノ十五丈］、寮舍交割什物云、數日前、副寺帯行者、賚簿到各寮、預先點對分曉。

② 忠［鈔九ノ十九丈説非也］曰、総簿所記、與寮舍所有物、對挍點撿有無也。〈総簿詳交割處。〉

（馬場道隆）

【九〇四】照拂

①敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、維那燒香、點湯照拂。

②律苑事規［八ノ一丈］住持云、叢林之設、老病為先、照拂矜怜、猶須介念。

③ 雲章［敕鈔一ノ廿三丈］曰、照者鑒視也、照拂、點撿也。

④ 忠曰、照拂者、照顧輔弼也、拂音弼。

⑤ 經國大典註解［後集上ノ五十九丈］云、照謂具見始末也。

⑥ 前漢書［七十七ノ二丈］蓋寛饒傳云、欲以太古久遠之事、匡拂天子。　註師古曰、拂、讀曰弼。

⑦ 正字通［卯中廿六丈］云、拂與弼通、荀子諫諍輔拂。

【九〇五】鋪設

①敕修清規［上一ノ卅六丈］百丈忌云、至日、隔宿如法、鋪設法堂。

②　品字箋［癸廿八丈］云、鋪、俗以排列、謂之鋪設。

③　　忠曰、或單言鋪、亦是鋪設義。

④敕修清規［上二ノ一丈］上堂云、俟鋪法座畢、堂司行者、覆首座。

（馬場道隆）

【九〇六】交

①忠曰、相共交參、取與物也。

②敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云、堂司行者、收香錢足、交侍者納方丈。　又［同上］云、侍者付大香一片、與參頭、交副參、收。

（馬場道隆）

【九〇七】交點

①忠曰、相共交參、點檢也。

②敕修清規［下一ノ八丈］寮主副寮云、交點本寮什物。　又［下一ノ五丈］聖僧侍者云、朝夕交點被位、中夜剔燈。

③　忠曰、寮主、共副寮點撿、聖僧侍者、共被位主點撿、故云交點也。

（馬場道隆）

【九〇八】交割

①敕修清規［上二ノ廿五丈］入院云、交割砧基什物。　又［上二ノ廿五丈］退院云、方丈什物、點對交割、具單目、一樣兩本、住持兩序勤舊僉押、用寺記印。　又［下一ノ十五丈］寮舎交割什物云、庫司當置総簿、具寫諸寮什物、住持知事僉定、仍分置小簿、付諸寮、兩相對同、新舊相沿交割。

②忠曰、新舊人、相共交參、故言交、分割公私之物、故言割、凡常住寮舎、遷居人、必有自己用度、而雜公界物、及交代、與新遷人、共對交、分割公器私物也。

③　舊説［敕鈔六ノ十七八丈　○　又九ノ十八九丈］曰、如常住交割、方丈及庫司各有簿、如寮舎交割、庫司及寮舎、各有簿、若簿唯一本、則有改寫剽竊之疑、一簿二本、置兩處、交代時、對同照勘、得無疑焉。

④　　又曰、交割字、未見據、交者交考兩簿也、割一一陳列物也。　忠曰、對勘二簿也、義可爾、以此解交字、非也、割字亦解不得。交割字、余下引證。或不得交義、而妄改校尤非。

⑤大慧武庫［四十丈］云、五祖演和尚、依舒州白雲海會端和尚、端令山前作磨頭、每被人於

端處鬬諜是非、〈云云。〉端咄云、急退却、演云、俟某筭計了、請人交割。〈云云。〉

⑥ 戰國策［四下十二丈］曰、蘓子説齋閔王曰、明於諸侯之故、察於地形之理者、不約親、不相質、〈質子〉而固、不趨而疾、衆事而不及。〈衆事猶其事。〉交割而不相憎。〈交言彼此割地。〉俱強而加以親。

⑦ 唐鄭還古［郛百十五］博異志［三丈］敬元穎傳云、仲躯移居、牙人云、價直契書、一無遺闕、並交割訖。

⑧ 元史［志ノ十七上ノ三丈］河渠志云、分監新官至、則一一交割、然後代還。

⑨ 棠陰比事［下ノ七丈］云、唐李徳裕鎮浙西、有甘露寺主僧、訴交割常住物、被前知事僧、隱没金若千兩、引前數輩為證、遞相交付、文籍在焉、新受代者、已伏盗取之罪、未窮破用之所、徳裕疑其非實。〈云云。〉

⑩ 三國演義［九　卌六丈］云、魯肅曰、前者皇叔有言、公子劉琦若在、荊州暫時居住、今公子去世、必然見還、肅正為此事而來、幾時可以交割。　又［十一ノ廿一丈］云、孔明、欲雲長任荊州、設一宴、交割印綬、雲長雙手來接。

⑪ 宋志傳［一ノ十二丈］云、晋主命趙瑩桑維翰等、寫定文字、撥取十六州、請契丹主、差人前去交割。

⑫ 桂苑叢談［孚廿六ノ二丈］云、太尉朱崖出鎮浙右、有甘露知主事者、訴交代得常住什物、被前主事隱用、却常住金若千兩、引證前數輩、皆有遞相交割、文字分明、衆詞皆指、以新得替者、隱用之、且初上之時、交領既分明、及交割之日、不見其金、鞠成具獄、伏罪昭昭、然未窮破用之所由。或以僧人不拘細行、而費之、以是無理可伸、甘之死地、一旦引慮之際、公疑其未盡徴、以意揣之、髣人、乃具寔以聞曰、居寺者、樂於知事、前後主之者、積年已來、空交分兩文書、其寔無金、群衆以某孤立、不雜輩流、欲乗此擠排之、因流涕不勝其冤、公乃憫而惻之曰、此固非難也、俛仰之間曰、吾得之矣、乃立從名兜子數乗、命關連僧、入對事、咸遣簾子畢、令門不相對、命取黄泥、各令模前後交付、下次金樣、以憑證據、僧既不知形段、竟模不成、公怒令刻前輩、皆一一伏罪、其所排者、遂獲清雪。

⑬ 楊誠齋江湖集［十三ノ七丈］臘裏立春、蜂蝶輩出、詩云、嫩日催青出凍荄、小風吹白落疎梅、殘冬未放春交割、早有黄蜂紫蝶來。　又朝天集［廿一ノ十七丈］和張功父園梅未花之韻、詩云、前夕三更月落時、東風已動萬花知、江梅端合先交割、春色如何未探支、只欠梁溪氷柱句、追還和靖暗香詩、張家剩有葱根指、不把瓊酥滴一枝。　又［一ノ九丈］答劉修武詩云、解道征鴻數字秋、清於雪椀映氷甌、老來筆底心無毒、交割風光與子休。

（馬場道隆）

【九〇九】収管

①忠曰、収納管領也。

②敕修清規［下一ノ七丈］副寺云、掌常住金穀、錢帛米麥、出入隨時上暦、収管支用、令庫子、毎日具収支若干、僉定飛單、呈方丈、謂之日單。

（馬場道隆）

【九一〇】交収

①敕修清規［下一ノ五丈］、聖僧侍者云、同維那、交収亡僧唱衣錢。

（馬場道隆）

【九一一】把張

①敕修清規［上二ノ廿八丈］、請喪司職事云、聖僧侍者、把張。　又［上二ノ廿四丈］估唱單式云、把張執事人、兩序典座、各書名僉押。　又［下一ノ三丈］知客云、遇亡僧、同侍者把張。又亡僧板帳式云、把張、侍者某押、知客某押。

②幻住清規［六十一丈］、亡僧板張式云、把張押。

③　舊説曰、把張者、造帳暦也。

④　三國演義［三ノ卅六丈］云、曹操喚典韋、就中軍帳房外、安歇、提調把帳親軍、二百餘人、非奉呼喚、不許輒入。

⑤　忠曰、依此、非帳簿之帳、而帳帷也、把者把守把斷義、蓋把守帳帷、不濫通外人也、猶言守把關隘也。

⑥　雲蓋本禪師録上堂云、釋迦老子、横眠竪臥、樓至如來、把却三門。

⑦　孤樹裒談［二ノ四十丈］云、今南京孝陵城、西門之内、有呉孫權墓在焉、當時築城者、奏欲去之、太祖曰、孫權亦一漢子也、宜戸留以把門、遂不得毀。

（馬場道隆）

【九一二】支用

①支分也、分用錢物等也。　見収管處。

（馬場道隆）

【九一三】結筭

①敕修清規［下一ノ七丈］副寺云、或十日一次、結筭、謂之旬單。

（馬場道隆）

【九一四】鬮拈

①敕修清規［下一ノ十丈］諸莊監收云、倘得廉正勤舊、輔佐住持、公選區用、或對衆鬮拈充之。

②松源嶽禪師録［上ノ廿二丈］云、紹熙元年、九月十五日、雲居薦福專使同至、對衆拈鬮、得雲居、乃受帖。

③　忠曰、凡事理無優劣、兩可難決、則可用鬮拈、實息爭解疑謗法也。

④篇海類編云、鬮舉有切、音九、手取拈鬮也。

⑤品字箋［●九十一丈］云、説文鬮取也、憑公撥定、仍復各書片紙、撚紙如丸、隨人自取、

謂之拈鬮。

⑥　已下録唱衣鬮拈法。

⑦敕修清規［上二ノ卅二丈］唱衣云、今多作鬮拈、甚息喧爭。其法、用小片紙、以千字文、次第書字號、每一號作三段、寫於上、仍用印記關防、量衆多少、與寀司合干人、封定。至期、呈過主寀兩序、首座開封、知客分俵、堂司行者、捧盤隨侍者、侍者剪取其半、置盤内畢、以盤置首座側、安水盆於下、抖匀、維那、拈衣唱價訖、首座、臨時呼一童行、信手拈盤中半鬮、遞與首座、開看字號、分曉、説與堂司行者、喝某字號、衆人各開所執半鬮、字號同者、即應、如不願唱此號衣物、則不應、三唱不應、首座以半鬮、投水盆中、再令撮起半鬮、復唱起、應者、堂司行者、往収半號、到首座處、對同、報與維那稱云、某物唱與某人、鳴磬一下、知客上單、侍者發標、供頭行者、遞與唱得人。

⑧　忠曰、右且録唱衣鬮拈之法。

（馬場道隆）

【九一五】吹噓

①忠曰、日本禪林、贊成某禪士、稱揚於主人、而請其許達、是曰吹噓。聯燈會要［八ノ廿二丈］、睦州陳尊宿、指臨濟參黄檗、接雲門、嗣雪峰、皆師之力也。〈止此。〉此即吹噓榜樣也。

②魏志［十六ノ十三丈］鄭渾傳云、渾兄泰、字公業、對董卓十事曰、孔公緒能清談高論、噓枯吹生。

③杜工部集［千家二ノ廿丈］、贈獻納起居田舍人澄詩云、揚雄更有河東賦、唯待吹噓送上天。又［九ノ十五丈］謁文公上方詩云、願聞第一義、廻向心地初、金篦刮眼膜、價重百車渠、無生有汲引、茲理儻吹噓。

④山谷詩集［十ノ十四丈］、東觀讀未見書、詩云、諸生起孤賤、天子自吹噓。

（馬場道隆）

【九一六】輪差

①舊説［敕鈔一ノ十丈］曰、輪差輪番也。

②忠曰、自上位差、次第到下位、復還及上位、若車輪環轉、故云輪差。

③　正字通［寅中卅八丈］云、差又皆韻、音釵、使也。唐宣宗詔、每役事、委令輪差。

④敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云、輪差僧簿、依戒次、各書雙字名。　又祈禱云、輪僧十員廿員、或三五十員、分作幾引、接續諷誦。

⑤雪峯存禪師録規制［二丈左］云、衆中或有老者病者、不任自取索、即差了事童行、終始看侍、如無童行、輪差沙彌、如無沙彌、輪差大僧、終始看侍、無至違越。

⑥　宋史［志ノ百三十ノ十九丈］食貨志云、輪差壯丁。

⑦　忠曰、輪差音訓、今得正字通、不復費辨。古解聖節輪差者曰、差叉宜切、次也、今謂戒臘次第也。若如所解、則雪峯輪差、亦若何通、至唐詔、宋志、皆在俗事、豈有戒臘次第哉、可笑。

（馬場道隆）

【九一七】公差（サイ）〈ジャウヂウザシ〉

①公界差人也。

②敕修清規［上二ノ廿八丈］請喪司職事云、喪司、公差庫子客頭、茶頭一行人。管辨事。

（松原信樹）

【九一八】差定

①叢林盛事［五十七丈］云、混融然、有小師大●者。淳熙間、住衢之靈曜。時朝廷、方行役法。二浙江淮處、並差定。●乃糾率衢婺處三州、僧尼道士。造朝、免之。今天下僧、由此獲安。不爲國家之差役者、蓋●之力耶。

②宋史食貨志［志百廿七ノ六丈］云、收租、掌納官吏、以限外欠數、差定其罰。又［志百卅三ノ一丈］云、銅錢、闌出江南塞外、及南蕃諸國、差定其法。至二貫者、徒一年、五貫以上、棄市、募告者賞之。

③經國大典註解［後集上ノ九丈］云、差定、差擇也。言差任也。定安也。

（松原信樹）

【九一九】暗封

①舊説［外文盲鈔二ノ十六丈］曰、暗封者、暗昧選封也。不以公舉、而私請也。

②藏叟摘藁［下ノ十五丈○釈氏資鑑十一ノ廿七丈載］跋趙大監請愚谷住法石書後云、法石二十年間、主僧更代不一。類非本色。寺日入於壞。前守趙大監、一日集諸禪主首曰、法石壞於暗封久矣。欲革斯弊、非得江湖名衲子、不可。某等退而舉三人、愚谷元智其一也。時愚谷謝事常之芙蓉、居靈隱、爲第一座。有聲叢林間、守焚香拈得之。且詢其出處。喜甚、亟馳書招致。寺僧咸謂、泉取浙二千里餘、如費何。某諭之曰、昔以暗封、今以公舉。計道路費、視暗封。不能十之一、何患焉。愚谷至、衆果悅服。未二年、百廢具舉。

③日工集［三ノ十五丈］云、府君、欲付以天龍、而東歸興、切也。赴三會忌齋、與等持物先、和會退建仁事云、余日者聞、諸山新命、暗封已定、而以南禪天龍未動。且期今日忌齋燒香、欲告退。先曰、可也

（松原信樹）

【九二〇】接待

①正宗贊［四ノ三丈］香林遠禪師傳云、師後歸蜀、於水晶宮、接待往來、茶湯。

②碧巖録［三ノ廿六丈］云、大隋眞如和尚、承嗣大安。後歸川、先於堋口山路次、煎茶、接待往來、凡三年、後方出世、開山住大隋。

（松原信樹）

【九二一】打給

①忠曰、［敕鈔十二ノ卅丈？］送食於別處、曰打給。打義飲啖類、打飯處箋。

②日用軌範［勅修下一ノ四十七丈］云、木魚響、不得入堂。或令行者取鉢、堂外坐、或歸衆寮打給。

③禪苑清規［四ノ二丈］庫頭云、如遇打給、即時應副。　又［四ノ五丈］延壽堂主云、堂中所用、柴炭米麪、油鹽醤菜、茶湯藥餌、薑棗烏梅、什物家事、皆係堂主緣化。如其無力、唯米麪油炭、就常住打給。又［同上］云、有處、病僧在堂、並上文曆、以憑庫司、打給。并請齋嚫。

（松原信樹）

【九二二】隷籍

①六祖壇經緣起外紀［序四丈］云、師遊境内山水勝處、輒憩止、遂成蘭若一十三所、今日花果院、隷籍寺門。

②字典［戌？中四十三丈］云、隷即計切。音麗、説文附著也。後漢書馮異傳註、隷屬也。又孔融傳、皆隷名而已。

③宋［？十二］馬縞中華古今注［中ノ十二丈］云、牛亭問、籍者、何云、答曰籍者、一尺二寸竹牒。記人之年、名字物色、懸之宮門。案省、相應、乃得入也。

（松原信樹）

【九二三】出隊

①忠曰、小補韻會［隊句十七丈］云、隊群隊也。〈止此〉出隊者、住持出大衆之隊、在外、勸化財糧也。又見垂説類、出隊上堂處、文籍類、右具在前處。

②傳燈録［十五ノ卅丈］招福和尚〈嗣投子大同〉章云、僧問、東牙烏牙、皆出隊。和尚爲什麼、不出隊。師曰、住持各不同。闍梨爭得怪。

一山曰、東牙烏牙俱寺名。出隊勸化也。

③應菴華禪師録［法語廿九丈］示章化士法語云、善章禪人、有志參學、不憚數千里。來此道集、期透生死大事、未肯端坐。固効古爲衆持鉢、繼洪州出隊目録。袖軸求法語、揮汗、聊書大槩。

（松原信樹）

【九二四】出鄕

①出隊、又曰出鄕。見垂説類、出鄕上堂處。

【九二五】遊山

①忠曰、已事了畢人、不要參問、翫覧勝槩也。

②敕修清規［下一ノ卅一丈］裝包云、如遊山、到處將及門。下包捧入旦過、安歇處解包、取鞋韈、濯足更衣、搭袈裟、與知客相看。

③聯燈會要［廿六ノ八丈］巴陵鑒禪師章云、師問僧、爲佛法來、游山來。云清平世界、説甚麼佛法。師云、好箇無事底禪客。云早是多事也。師云、上座去年、在此過夏了。云不曾。師云、恁麼則先來不相識。下去。

④禪林類聚［十二ノ五丈］云、茱萸禪師問僧、闍梨爲復遊山翫水、爲復問道參禪。僧云、和尚試道看。師云、雕蚶鏤蛤、不蟾之泥、勞君遠至。云渾身是鐵、猶被一橈。師云、降軍不斬。

已下、畧録與上義異者。

⑤聯燈會要［八ノ十丈］仰山寂禪師章云、師問僧、近離甚處、云廬山、師云、會到五老峯麼。云不曾到。師云、闍梨不曾游山。　又［八ノ十一丈］云、一日有一異僧。乘空而來。作禮而立、師問、近離甚處。云早晨離西天。師云、何太遲生。云游山翫水。師云、神通妙用、即不無尊者、佛法須是老僧始得。云特來東土、禮文殊。却遇小釋迦、遂出西天貝多葉、與師、作禮、騰空而去。

⑥又長沙岑禪師［六ノ廿六丈］章云、師游山、歸至門首。首座問、和尚甚處去來。師云、游山來。云到甚麼處來。師云、始隨芳草去、又逐落花回。云大似春意。師云、也勝秋露滴芙渠。

⑦日用軌範［下一ノ五十丈］云、衩袒登溷、草履游山。莫踐法堂。回互耆舊。

（松原信樹）

【九二六】閉關

①永覺賢禪師禪餘内集［五ノ五丈］、示三峯泰水法師法語云、余聞、古之學道者、博參遠訪、陸沈賤役。勞其筋、骨餓其體膚、百苦無不備嘗。並未有晏坐一室、閉關守寂、以爲學道者也。自入元始有閉關之説。然高峯閉苑關於天目、乃是枕子落地後。非大事未明而畫地、以自限者也。自入明、乃有閉關學道之事。夫閉關學道、其最初一念、乃是厭動趨寂者也。祇此一念、便爲入道之障。況關中、既不受知識鉗鎚。又無師友策勵。癡癡守著一句話頭、如抱枯椿相似。日久月深、志漸靡力漸疲、話頭無味。疑情不起、忽然轉生第二念了也。甚至身坐一室、百念紛飛者、有之。又何貴於關哉。

②　文選［十六ノ四十三丈］江文通恨賦云、閉關却掃、塞門不仕。

（松原信樹）

【九二七】持齋

①舊説［敕鈔一ノ卅四丈］、儒佛取齋義有異。儒氏則欲先祖來歆。故齊心也。佛氏則過日中、不食也。

②　小補韻會［隹ノ廿七丈］云、經傳齋字、多作齊。

③　洪武正韻云、古單作齊。後人於其下、加立心、以別之。

④請觀音經［卅七丈○名義集七ノ廿丈引？］智者疏云、齋者齊也。齊身口業也。齊者只是中道也。後不得食者、表中道法界外、更無別法也。中前得啖、而非正中、此得明表前方便。但似道之中、得有證義、故得啖也。亦是表中道法界外有法也。

⑤　智圓闡義鈔［三ノ卅七丈］云、齊身口業者、祭統［礼記□？四ノ二丈］云、齊之爲言齊也。齊不齊、以致齊者也。是故君子、非有大事也。非有恭敬也、則不齊。不齊則於物無防也。嗜欲無止也。及其將齊也。防其邪物、訖其嗜欲、耳不聽樂。今釋氏、以不過中食爲齊、亦取其防邪訖欲、齊不齊之義也。毘羅三昧經［□？五十五ノ四丈亦引？］云、早起諸天食、日中三世佛食、日西畜生食、日暮鬼神食。佛制斷六趣因、令同三世佛故。今約理解。故云齊者祇是中道。後不得食者、即佛制。中後不得食也。今表初住初地圓證中道、心外無法。如中後不得食也。中前得噉者、佛制中前非正食、皆得噉之。

⑥釋氏要覧［上ノ六十丈］云、齋起世因本經云、烏脯沙陁。隋言增長。謂受持齊法、增長善根。故佛教、以過中不食名齋。

⑦飜譯名義集［七ノ廿一丈］云、毘婆沙論云、夫齋者、以過中不食爲體。以八事、助成齋體。

共相支持、名八支齋法。又〔七ノ廿二丈〕云、處處經、佛言、中後不食、有五福。一少婬、二少睡、三得一心、四無有下風、五身得安隱、亦不作病。

⑧雜譬喩經〔統紀卅四ノ八丈引?〕云、佛言、一日持齋、有六十萬歲糧。復有五福。少病身安、少睡、少婬、得生天、識宿命。

⑨佛祖統紀〔六ノ廿三丈〕天台智顗禪師傳云、師曰、非但歩影爲齋。〈日影不過午〉能無縁無觀。即眞齋也。〈無所縁、無能觀、是爲境觀俱亡。〉

⑩歩影善見律〔十七ノ九丈〕云、受戒已、應歩影。歩影者、正立住、取住脚爲初、隨身影長短歩影。歩影竟、教其時。其時者、或冬時、或春時、或夏時。

⑪莊子人間世篇云、顏回曰、吾無以進矣、敢問其方。仲尼曰、齋、吾將語若。有而爲之、其易耶。易之者、皥天不宜。顏回曰、回之家貧、唯不飲酒、不茹葷者、數月矣。若此、則可以爲齋乎。曰、是祭祀之齋、非心齋也。回曰、敢問心齋。仲尼曰、若一志、無聽之以耳、而聽之以心、無聽之以心、而聽之以氣。聽止於耳、心止於符。氣也者、虛而待物者也。唯道集虛。虛者心齋也。

⑫又見飲啖類、非時食處。

（松原信樹）

【九二八】持鉢

①忠曰、乞食於城市。曰持鉢。

②續燈録〔廿七ノ廿丈〕拈古門云、臨濟持鉢、到一婆子門前云、家常。婆子開門云、太無厭生。濟云、飯猶未曾得。何責人無厭。婆子閉却門。

③傳燈録〔十三ノ十丈〇碧四ノ廿二丈〕風穴沼禪師章云、師初見南院。不禮拜、便問曰、入門須辨主。端的請師分。〈乃至〉南院曰、三十年住持。今日被黄面浙子、上門羅織。師曰、和尚大似持鉢不得、詐道不饑。　又漳州羅漢和尚〔十一ノ廿八丈　〇光明藏中ノ八十一丈〕章云、始於關南常禪師舉下、悟旨。乃爲歌曰、咸通七載初參道。〈乃至〉從茲蹬蹬以碣碣、直至如今常快活。只聞肚裏飽膨脖。更不東西去持鉢。

④普燈録〔十二ノ十一丈　〇会元十二ノ七十八丈〕懷玉用宣首座章云、一日自臨川持鉢歸、値泐潭〈景祥〉晚參。有云、一葉飄空便見秋、法身須透鬧啾啾。宣聞領旨。

⑤大慧武庫〔三丈〕云、葉縣省和尚、嚴冷枯淡。浮山遠參。〈乃至〉省一日、見遠獨於旅邸前立、乃云、此是院門房廊、你在此住許多時、曾還租錢否。令計所欠追取、遠無難色、持鉢於市、化錢還之。

⑥密菴傑禪師録〔法語九丈〕示殊禪人法語云、回觀此山、食指既多、常住不給。不忍坐視、發心爲衆持鉢。余嘉其志不凡。臨行欲語。故書此以贈之。

⑦曹源生禪師録〔十六丈〕送聞兄持鉢偈云、聞聲悟道鳥投籠、祗麽無聞道未充。利劍拂開慳悋穴、全身輥入是非叢。脚頭脚尾無虛棄、山北山南有路通。一笑歸來能事畢、眞金百鍊見全功。

⑧金剛般若經云、爾時世尊、食時著衣持鉢、入舍衞大城乞食。於其城中、次第乞已、還至本處。

⑨首楞嚴經〔三上ノ十一丈〕云、阿難、汝常二時、衆中持鉢、其間或遇酥酪醍醐、名爲上味。於意云何。此味爲復生於空中、生於舌中、爲生食中。〈廣説〉

⑩廣弘明集〔二十七ノ五丈〕沈約述僧設會論云、出家之人、本資行乞、戒律昺然、無許自

立厨帳、并畜淨人者也。今既取足寺内、行乞事斷、或有持鉢到門、便呼爲僧徒鄙事下劣、既是衆所鄙恥、莫復行乞。悠悠後進、求理者寡、便謂、乞食之業、不可復行。白淨王子、轉輪之貴、持鉢行詣、以福施者、豈不及千載之外、凡庸沙門、躬命僕竪、自營口腹者乎。

（松原信樹）

【九二九】托鉢

①乞食曰托鉢。或作拓。正字通托同拓。手承物也。

②續傳燈録［十ノ十六丈〇又会元十ノ八十三丈］淨土院惟正禪師章云、有願輸奉歲時用度。俾繼加之院務。亦復謝曰、聞托鉢乞食。未聞安坐以亨。聞歷謁諸祖。未聞廢學自任。況我齒茂氣完。正在筋力爲禮。非從事屋廬之秋也。

③恕中慍禪師録［六ノ十二丈］松巖雜言云、念念無生自入微。瓶中米盡腹中饑。夜深月下敲門急。道者蕉溪托鉢歸。

④又粥飯時、擎鉢赴僧堂、曰托鉢。　聯燈會要［廿一ノ廿二丈〇会元七ノ九丈岩頭章］雪峯存禪師章云、師在德山作飯頭。一日飯遲。師曬飯巾次。見德山托鉢。至法堂前。師云。這老漢。鐘未鳴鼓未響。托鉢向甚麼處去。山便歸方丈。〈云云。〉

（小川太龍）

【九三〇】乞食

①見持鉢托鉢處。

②佛祖統紀［卅四ノ七丈］云、善見論。梵語分衛。此云乞食。寶雲經凡乞食。爲四分。一奉同梵行。一與窮乞。一與鬼神一分自食。法集經。行乞食者。破一切憍慢。十二頭陀經、食有三種。一受請食、二衆僧食、三常乞食。前二食起諸陋因縁。若得請。便言我有德。若不請、則嫌恨彼。或自鄙薄。是貧法。則能遮道。共僧食者。常隨衆法。斷事擯人。料理僧事。心則散亂、廢行道有如是惱亂。應受乞食法

（小川太龍）

【九三一】把針

①佛果擊節録［下十八丈］云、巖頭擔鋤頭行脚。處只做園頭。雪峯擔笊離木杓行脚。到處作典座。欽山將熨斗剪刀針線行脚。到處與人做衣。到箇所住處。三人互爲賓主。作小參。舉公案。欽山承當不得。後來却到洞山契證。法嗣洞山。

②貞和集［十ノ六丈］龍巖廬山東林十題。把針頌云、豆花和雨落繽紛。絡緯催寒徹夜聞。不費機梭衣不盡。白綿山頂自牽雲。　清拙和云、千山黄落正紛紛。月下村碪遠近聞。寒衲一條重補綴。自憐剪破半溪雲。

（小川太龍）

【九三二】臥眠

①摩得勒伽［六ノ十二丈］云、云何臥比丘。不病。不得晝日臥。不得燈中臥。若疲極者、應起去。不得惱第二人。　云何眠世尊。聽比丘。晝日經行。坐除睡蓋。初夜過、四揲鬱多羅僧。敷。卷揲僧伽梨。爲枕。右脇臥。脚脚相累不得散手脚。不得散亂心。不得散亂衣。作明相正念。起想思惟。然後眠。至後夜。疾疾起。經行坐。除去睡蓋

（小川太龍）

【九三三】帶刀臥

①宋高僧傳［十卷十八丈］百丈山懷海傳云。海創意不循律制。別立禪居。不論高下。盡入僧堂。堂中設長連牀。施櫈架。挂搭道具。臥必斜枕牀脣。謂之帶刀睡。爲其坐禪既久。略偃亞而已。　〈又見僧史略［上ノ廿三丈］別立禪居章〉

②六學僧傳［六卷九丈］唐懷海傳云、坐長連牀。晝夜不息、倦則斜枕牀脣。偃仰。謂之帶刀臥。使不安於寢寐也。

③傳燈録［六ノ廿二丈］百丈海禪師章云、設長連牀。施櫈架。掛搭道具、臥必斜枕牀脣。右脅吉祥睡者。以其坐禪既久略偃息而已。具四威儀也。

④忠曰、傳僧帶刀臥。即傳燈右脅吉祥睡也。蓋帶［敕鈔十二ノ四十七丈］刀者於左脇。故不得左脇而臥。因名右脇臥。爲帶刀臥也。

⑤白雲端禪師録［頌古廿丈〇貞和一ノ七丈］雲門餬餅頌云、雲門餬餅圓摸小。爭似法華爐竈大。飽來一任帶刀眠。誰問西來間達磨。

⑥續燈録［十四ノ十七丈］澄惠詡禪師章云、更有一般堪羨處。長連牀上帶刀眠。

⑦普燈録［五ノ七丈］法眞一禪師章云、問如何是玄中玄。曰、長連牀上帶刀眠。

（小川太龍）

【九三四】抽解

①敕修清規［下一ノ四十一丈］坐禪云、坐定久之、僧衆方可次第起身抽解。又須看上下肩。起止急緩。免見成連連單位空缺。　又［下一ノ四十四丈］大坐參云、如坐再請禪。住持後門入歸位不巡堂。頭首隨。衆或抽解者、即歸被位。　又云、頭首與大衆、暫從後門出、換衣換頭袖、抽解即歸守被位。

②備用清規［二ノ二丈右］坐參云、與坐禪一同。但促鳴板耳。蓋不起抽解故也。

③禪苑清規［一ノ五丈］挂搭云、維那云、請某上座於某寮、抽解。問訊而別。新到歸寮。又［一ノ六丈］云、或自監院首座藏主退下、於獨寮抽解。　又［一ノ七丈］云、新到掛搭、如經本院曾作知事頭首化主。並於前資寮、抽解。　又［五ノ四丈］下頭首云、以次頭首、合入前資寮抽解。

④忠曰、或坐禪中間、出僧堂［敕鈔十二ノ四丈左首考］、少休息。或新掛搭人、歸寮安息。皆曰抽解也。抽解者、抽解袈裟也。敕修清規［下一ノ十六丈］庫司特爲、新舊兩序湯藥石云、謝湯畢抽衣就座藥石。又［下一ノ］遊方參請云、抽衣就坐藥石。〈止此。〉抽解義可例知也。

⑤舊説［敕鈔十二ノ卅七丈〇又十四丈］曰、抽解同抽脱。放大小便也。

⑥忠曰、如坐禪坐參抽解、則解衣休息時。亦應行便利。故可通便利義。如掛搭抽解、則唯是休息義。不通便利。故抽解。不可直以放便利解之。

⑦竹窓三筆［一丈］云、念彌陀、飲食抽解、皆無間斷。

⑧忠曰、此但言便利。婉詞稱抽解矣。

⑨或有蕃船抽貢貨物、曰抽解者。甚與前義、不相涉。且録廣聞見。

⑩宋史［志百卅九ノ廿六七丈］食貨志、互市舶法云、熙寧初、立市舶。以通物貨。舊法抽解有定數。而取之不苛。如犀角象齒。十分抽二。珠十分抽一。

⑪元史［志ノ四十三ノ廿四丈］食貨志、市舶云、每歲招集舶商於蕃邦。博易珠翠香貨等物。及次年廻帆。依例抽解。於是定雙抽單抽之制。雙抽者蕃貨也。單抽者土貨也。

（小川太龍）

【九三五】抽脱

①舊説［敕鈔十二ノ卅七丈］曰、放大便云抽脱。抽脱上衣也。

②患曰、如廁抽脱袈裟、僧祇支、大小便

篇云、應脱袈裟、僧祇支、大小便

③敕修清規［下一ノ四十九丈］日用軌範云、若抽脱、古例披五條。〈即掛絡也。〉以淨巾、搭左手。解條繫筅竿上。脱五條直綴令齊整以手巾繫定。作記認不得笑語。不得在外催促右手提水入廁。〈其規如彼。〉

④大慧武庫［十五丈］云、泐潭深知尚、河東人。眞淨之子。有悟侍者。偶在知客寮、見掉下火柴頭、忽然有省。直上方丈通所悟。深和尚喝出。自爾失心。引繩於延壽堂東司自縊夜後常在藏院・知客寮・東司。三處。出沒移鞋度瓶、一衆苦之。湛堂遊浙回、充首座。聞其事、中夜故入延壽堂東司、抽脱。壁燈微明、忽然撲滅。方脱衣、悟便提水瓶至。湛堂云、未要。且待我脱衣。脱衣罷、便接瓶子、去當時悟自縊間、抽脱。須臾又送籌子來。及出、喚云、接瓶去。悟纔接。捉住摸其手。或似軟或似硬。問曰、汝是悟侍者麽。汝便是當時在知客寮。見掉下火柴頭、有省處底麽。參禪學道、祇要知本命元辰下落處。汝在藏殿、移端首座鞋履。豈不是汝當時悟得底。又在知客寮、移枕子。豈不是汝當時悟得底。逐夜在此、與人提瓶度水豈不是汝當時悟得底因甚不知落處。秖管在這裏、惱亂大衆、作麽。我明日勸大衆、爲汝看藏經。裒錢設粥、追悼汝。汝當別求出離、不得滯著於此言訖乃推一推。如瓦礫塔子倒索然有聲。由是絶跡。湛堂一臂、冷如冰。踰半月方平復。蓋非人附陰而至。冷氣侵人如此。

⑤上廁法。十誦律［六十一ノ十五丈］毘尼母論［六ノ廿八丈］等詳説

（小川太龍）

【九三六】看病

①敕修清規［下一ノ八丈］延壽堂主云、看視病僧、湯藥油燭・炭火粥食・五味、常備供須。〈詳職位類延壽堂主處。〉

②釋氏要覽［下ノ四十三丈］云、瞻病人五德四分律云、一知病人可食金可食、二不惡病人、便利睡吐三有慈愍心、不爲衣食。四能經理湯藥、五能爲病人説法令。歡喜已增長善法。

瞻病人六失。增壹經［廿四丈］云、一不辯良藥、二懈怠、三喜瞋好睡、四但貪衣食、五不以法供養、六不共病人、言語談笑。〈忠曰、增壹爲五法以今一二合爲一〉

③增壹阿含經［廿四ノ廿四丈］云、疾病之人、成就五法、不得時差。恒在牀蓐。云何爲五。於時病人不擇飲食。不隨時而食。不親近醫藥。多憂喜瞋。不起慈心。向瞻病人。是謂比丘疾病之人。成就此五法、不得時差。〈反此得差略之。〉

④又［廿四ノ廿四丈］云、瞻病人、成就五法、不得時差。恒在牀蓐。云何爲五。於是瞻病之

人。不別良藥。懈怠無勇猛心。常喜瞋恚。亦好睡眠。但貧食故、瞻視病人不以法供養。故亦不與病人語談往返是謂比丘若瞻病之人。成就此五法者、不得時差。〈反此得差、且略之。〉

⑤教誡儀［鈔下ノ十四丈］看和尚闍梨病法云、一懷孝養心、作父母想。二不得嫌有臭穢。三常經營湯藥。四所忌之食、不與食。五飲食常令得所。六洗濯衣裳。七數除糞穢。八勤燒香。九常令衣被、厚薄得所。十常具火燭。十一常須作意細心、不得鹿躁。十二常念觀音菩薩、願師所苦、早得痊平。

⑥梵網經［下廿四丈］云、若佛子、見一切疾病人、應供養。如佛無異、入福田中、看病福田第一福田。若父母師僧弟子病、諸根不具、百種病苦、皆養令差

⑦華嚴經［十四］淨行品偈云、見疾病人、當願衆生、知見空寂、解脱衆苦。

⑧緇門警訓［下ノ四十四丈］勉僧看病偈、〈靈岩石刻。〉三首、云、四海無家病比丘、孤燈獨照破牀頭。寂寥心在呻吟裡。粥藥須人仗道流。　病人易得生煩惱。健者長懷惻隱心。彼此夢身安可保。老僧書偈示叢林。　氣濕風勞猶可療。不知禪病若爲醫。衲僧更擬論方藥。便把拳頭驀口搥。

⑨已下、略録事緣

⑩僧祇律［廿八ノ十三丈］云、佛住舍衛城、按行、到一破房中。見一病比丘、臥糞穢中。不能自起。佛問、氣力何似。所患增損。答言、患但有增無損。復問、得食不。世尊、我不得食來、已經七日。佛問、此間有和尚・阿闍梨不。無有無比房比丘耶。答言、以我臭穢不喜故、徒餘處去。佛語比丘、汝莫憂惱。我當伴汝。取衣來我爲汝浣。阿難白言、我當與浣。佛語阿難、汝浣衣。我當灌水。浣已日曝。阿難抱病比丘、舉著露地。除去糞穢。出牀褥諸不淨器。水灑房内、掃除已、巨磨塗地、浣曬牀褥。更織繩牀、敷著本處澡浴病比丘、徐臥牀上。世尊以無量功德莊嚴。金色柔軟手、摩比丘額上。問言、所患增損。比丘言、蒙世尊手、至我額上衆苦悉除。世尊、隨順説法。發歡喜心已、重爲説法。得法眼淨。比丘差已、世尊至衆多比丘所、以上事具説、呵責比房比丘。汝等同梵行人、病痛不相看視。誰當看者。若比丘病不看者、越毘尼罪。〈略鈔。〉

⑪智度論［八ノ廿二丈］亦載此緣。爲舍婆提國事。舍婆提、即舍衛也。又增壹［四十ノ七丈］阿含、有佛羅閲城。瞻病比丘緣。與僧祇大同小異。羅閲即王舍城。王舍城在摩伽陀國、蓋事相似而緣別也。西國傳［要覽下ノ四十三丈］云、唐三藏親至王舍城東北。禮佛洗病僧塔。〈止此。〉然西域記［六］以此緣。係舍衛國。則玄奘所禮者。舍衛塔也。恐西國傳訛録

（小川太龍）

○類罪責類

【九三七】梵壇

①長阿含經［四ノ九丈］云、阿難白佛言、闡弩比丘、虜扈自用佛滅度後、當如之何。佛告阿難。我滅度後、若彼闡弩不順威儀、不受教誡、汝等當共行梵壇罰。敕諸比丘、不得與語、亦勿往反教授從事。

②梵網經［六ノ廿九丈］法藏疏云、梵壇者、此翻爲默擯。良以非理違犯。不受調伏。故以此治之。

③行事鈔［会本上ノ二ノ二ノ卅丈○補忘ノ九ノ廿六丈引］云、言默擯者、五分［名義ノ五ノ卅二丈引ナリ］

云、梵壇法者、一切七衆、不來往交言。智論云、若心強獷、如梵天法治之。以欲界語地。亦通色有、不語爲惱。故違情故。不語治之。此法最要。　資持記云、梵壇者、有云、梵王宮前立一壇。天衆不如法者、令壇上、餘天不與往來交語。五分因闡陀惱僧、故用此治。語地以語爲樂故、通色有者、梵天行故。言故違者、謂特意也。

④智度論〔二ノ三丈〕云、佛告阿難。車匿比丘、我涅槃後、如梵天法治。

⑤維摩經略疏〔一ノ十九丈〇名義三ノ五丈引〕引智度論釋云、惡口車匿、梵法治者、其自恃王種。輕諸比丘、僧法事時、即輕笑言、如似落葉旋風所吹、聚在一處。何所互論。佛去世後、猶自不改。佛令作梵壇、謂默擯也。亦云、彼梵天治罪法、別立一壇、其犯法者、令入此壇諸梵不得共語。

⑥忠曰、梵壇、法藏爲梵語。智者元照、引有義爲漢言、其説稍類左傳履薪事。闡陀即車匿也。

⑦春秋左傳〔杜注五ノ卅六丈〕僖公十五年云、穆姬聞晋侯將至、以太子罃弘與女簡璧登臺而履薪焉。　杜預註、罃康公名。弘其母弟也。簡璧罃弘姉妹。古之宮閉者、皆居之臺。以抗絶之。穆姬欲自罪。故登臺、而荐之以薪。左右上下者、皆履柴乃得通。

⑧梵壇擬世間死刑。　雜阿含經〔卅二ノ七丈〕曰、世尊、告調馬聚落主。調伏馬有幾法。答言有三種法。一柔軟。二剛彊。三柔軟剛彊。佛告、若猶不調、當如之何。言便當殺之。聚落主言、瞿曇無上調御丈夫者、當以幾法調御丈夫。佛告我亦以三法。一柔軟。二剛彊。三柔軟剛彊。聚落主白、若三種猶不調。當如之何。佛言便當殺之。所以者何。莫令我法有所屈辱。聚落主言、瞿曇法中。殺生者不淨、而今説不調伏者。亦當殺之。佛告、我以三種法。調御丈夫。彼不調者。不復與語。不復教授。不復教誡。豈殺耶。〈略鈔。〉

（小川太龍）

【九三八】默擯

①即梵壇也。詳于彼。

②忠曰。僧祇律雜誦跋渠法〔廿六ノ十六丈〕。有捨不語羯磨法。恐繁不録。大抵悔前過隨順五事。〈比丘事、比丘尼事、眷屬事、羯磨事王事〉一一如法。學教律。知罪相者。應與捨。

（朝山一玄）

【九三九】擯出

①南本涅槃經〔三ノ廿六丈〕云。善男子。譬如國王。諸羣臣等。有犯王法。隨罪誅戮。而不捨置。如來世尊。亦如是也。於毀法者。與驅遣羯磨。訶責羯磨。置羯磨。舉罪羯磨。不可見羯磨。滅羯磨。未捨惡羯磨。善男子。如來所以與謗法者。作如是等降伏羯磨。爲欲示諸行惡之人。有果報故。　又云。有持戒比丘。威儀具足。護持正法。見壞法者。即能驅遣。訶責糾治。當知是人。得福無量。不可稱計。

②　忠曰。經驅遣。即律中驅出。即今擯出也。自餘訶責等義。彼疏中詳釋。恐繁不録。

③又涅槃經〔六ノ卅二丈〕云。是菩薩。擯治諸惡比丘。令清淨僧得安隱住。流布方等大乘經典。利益一切諸天人故。

④大方等日藏經〔一ノ十九丈〕云。彼破戒人。無有慚愧。以劫盜心。取彼僧物。以爲己有。是如法比丘。隨其住處。若在林中。或在伽藍。不應共住。應生慈愍。方便示教遣令出衆。語言。長老。汝等不應住此。如是三諫。是破戒人。若去者。善。若不出衆。如法比丘。不得瞋罵應告國王。刹利。婆羅門。毘舍首陀。及有勢力者。言此有比丘。不如法行。恆

相擾亂。不令我等。安心行道。惟願檢校勿令侵惱。而彼國王。刹利。乃至聚落主等。應當治之驅逐令出。若彼刹利王等。取彼破戒比丘。飲食財物。而不驅遣者。如法比丘。亦不應瞋。莫貪住處。及資生等。默然捨去。更求餘處無難之所。若在山林窟中。或阿蘭若地。隨其靜處。就彼而住。

⑤行事鈔僧網大網［上二之二ノ廿丈］篇云。擯出者。謂對俗人。倒說四事。廣如律文。又如隨戒中。汚家惡行。倒亂佛法汚他俗人淨善之心。以非爲是故。須遣出本處。折伏治之。使世俗。識非達正。無復疑惑。此之過罪人多有之。特須禁斷。　資持記云。擯出者。佛在鞫離那國。因阿濕卑。富那婆娑。二比丘。汚家惡行。爲緣。故制。羯磨罰已。驅出當界。故得名也。

⑥釋氏要覽［下ノ卅二丈］云。瑜伽論云。驅擯由三因緣。一爲護他故。二彼不堪爲上法器故。三彼能令僧無威德故。問今僧中。有先驅出人。後却容入。未知可耶。答亦有此理。何者。瑜伽論云。犯下中品過。爲教誡餘者。權時驅擯。後環攝受。若犯上品過罪。應可驅擯。盡壽不與共住。

⑦『十誦律』［卅八ノ十八丈］云。賓頭盧頗羅墮。座上伸手。取樹提居士栴檀鉢。世尊訶責。云何名比丘。爲赤裸外道物木鉢故。於未受大戒人前。現過人聖法。訶責已語頗羅墮。盡形壽擯汝。不應此閻浮提住賓頭盧受佛教已。頭面禮佛足。右遶。還自房。所受僧臥具牀榻。盡以還僧。持衣鉢。入如是定於閻浮提沒。瞿耶尼現。〈又見靈像門賓頭盧處〉

⑧迦葉命優波離。擯阿難。見職位類。維那處。

⑨興化擯克賓出院。又見維那處。

⑩忠曰。僧祇律［廿六ノ十六丈］雜誦跋渠法中。有捨擯出羯磨法。大抵隨順行五事。〈默擯處箋〉、一一如法者。應與捨。是名捨擯。

（朝山一玄）

【九四〇】擯罰

①即擯出也。

②敕修清規［上二ノ十七丈］尊宿入龕云。或盜竊常住。住持依公。擯譴。

（朝山一玄）

【九四一】出院

①大慧武庫［五丈］云。撫州明水遜禪師、在法雲侍者寮。時道林琳禪師挂搭。方丈特爲新到茶。遜躬至寮請之。適琳不在。有同行。與琳聯桉。曰汝去。俟渠來。我爲汝請。遜去。僧偶忘之。齋後鳴鼓會茶。琳不到。圓通問曰。新到在否。趣請之。琳到。圓通令退坐榻立衆前責曰。山門特爲茶。以表叢林禮數。因何怠慢不時至。琳曰。適聞鼓聲。忽內逼。趨赴不前。圓通呵曰。我鼓又不是巴豆。擊著。你便屎出。遜前白云。是某忘記請之。某當出院。時同行出衆曰。不干侍者與新到事。是某不合。承受爲渠請。偶忘記。某當代二人出院。圓通高其風義。併宥之。

②　又克賓出院。見職位門。維那處。

③　出院出去呼。若依正字通則入聲。

④　正字通云。毛詩古音考曰。增韻自內而外曰出凡物自出則入聲。使之出則去聲。書寅賓出日出納朕命。皆此音。又陸德明釋文出字。皆直類切。易繫河出圖王弼讀墜。按出雖

有去聲。出納出圖。當入聲如本音。陸王説泥。舊本引增韻非。　又去入互用。

⑤　康熙字典［子下三十三丈］云。出。正韻凡物自出。則入聲非自出而出之。則去聲。然亦有互用者。

（朝山一玄）

【九四二】滅擯

①削僧籍也。

②行事鈔［上二之二ノ卅一丈］網大綱篇云。言滅擯者。謂犯重比丘。心無慙愧。不肯學悔。妄入清衆。濫居僧限。當三根五德舉來。詣僧憶念。示罪令自言已。與白四法。　又足數衆相篇［上一下之四ノ卅五丈］云。滅擯者。謂犯重已。舉至僧中。白四除棄也。

釋氏要覽［下ノ卅二丈］云。彌沙塞云。梵罰此有二法。一默擯。謂一切人。不與來往言話等。二滅擯〈滅即滅名也。爾雅云、點滅、如今勾點糊滅名字也〉律謂。犯重罪。心無慚愧。衆所不容。不可共住。舉來僧中示罪驅出。多論云。但實犯罪。大衆有知。不須自言。直爾滅擯驅出。所謂貴安善人也。

③地藏十輪經［二ノ十二丈］云。佛言。善男子。如來成就善巧知根機智。若諸弟子。遠離福慧巧方便智。及以布施調伏寂靜。失念心亂。來至我所。歸依於我。而我善知彼根意樂。隨眠勝解。隨其所應。爲説治罰毘奈耶法。若諸衆生。其性很戾。於諸學處。不能奉持。爲令久住我之聖教。多有所作。或爲制立憶念治罰。或以言教恐怖呵責。或暫驅擯。或令折伏歸誠禮拜或不與語。不共同利。或如草布。或復滅擯。

④　忠曰。滅擯者。當世之死刑。謂律乘犯四重者。爲波羅夷罪。於是人。方行滅擯矣。所謂滅者。除去名籍也。行事鈔篇聚名報篇云。四分云。波羅夷者。譬如斷人頭。不可復起。若犯此法。不復成比丘故。

（朝山一玄）

【九四三】削籍

①滅擯也。謂削去僧籍名。

②世典亦有此目。　明通紀集略［四ノ六十四丈］云。高攀龍溺園池死。有遺疏曰。臣雖削籍。舊屬大臣。大臣不可辱。辱大臣。則辱國矣。謹北面稽首。以效屈平之遺。

③　籍義。見前隸籍處。

（朝山一玄）

【九四四】誡罰

①僧史略［上ノ廿三丈］別立禪居云。或有過者。主事示以拄杖焚其衣鉢。謂之誡罰。

（朝山一玄）

【九四五】箠擯

①敕修清規［上二ノ八丈］肅衆云。若僧人。自相干犯。當以清規律之。若鬬諍犯分。若汚行縱逸。若侵漁常住若私竊錢物。宜從家訓。母揚外醜。蓋悉稱釋氏。準俗同親。恪守祖規隨事懲戒。重則集衆。箠擯則罰錢罰香罰油。而榜示之。如關係錢物。則責狀追陪。惟平惟允。使自悔艾。

【九四六】罰錢
①見箠擯處。又克賓罰錢。見職位類。維那處。
（朝山一玄）

【九四七】罰香
①見箠擯處。
（朝山一玄）

【九四八】罰油
①見箠擯處。
②南禪規式［下ノ七十六丈］義堂罰榜。多罰油。〈又見叢規類請假處〉
（朝山一玄）

【九四九】罰茶
①南禪規式義堂和尚。住南禪日。罰榜式中云。某甲上座。衆寮點茶。不赴行益。無禮甚。罰茶一斤。今後不赴行益者。皆准此。維那照管。
（朝山一玄）

【九五〇】還俗
①居家必用［辛ノ四十七丈］吏學指南篇云。還俗。謂僧道犯罪。歸家者。
②經國大典註解［下ノ七十二丈］云。還俗。僧道出家曰棄俗。若犯罪。令其還歸本俗爲民也。
（朝山一玄）

【九五一】歸俗
①居家必用［辛ノ四十七丈］吏學指南篇云。歸俗謂僧道無罪。自願歸家也。
（朝山一玄）

第十六類報祷門

【九五二】聖節
①忠曰。天子生日。曰聖節。
②敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云。欽遇聖節。必先啓建金剛無量壽道場。〈其規詳彼〉
③小補韻會［敬ノ四十四丈］云。聖武正切。說文聖通也。通論曰。通而先識曰聖。於文耳呈爲聖。心通萬物之情。若耳之通聲。
④尚書［註疏十二ノ十丈］洪範云。睿作聖。傳於事無不通。謂之聖。正義曰。鄭玄周禮注云。聖通而先識也。是言識事。在於衆物之先。無所不通。以是名之爲聖。聖是智之上。通之大也。
⑤書言故事［一ノ二丈］云。尊稱天子。曰聖皇聖帝。東都賦聖皇乃握乾符。注班固稱光武。

爲聖皇〈文選〉［一ノ卅四丈］晁錯策。五帝神聖。其臣莫能及〈前漢書晁錯傳〉［四十九ノ十四丈］故後人尊稱天子。曰聖帝。

⑥僧史略［中五十二丈］云。生日爲節名。自唐玄宗始也。魏大武帝始光二年。立道場。至神麚四年。敕州鎮。悉立場道場慶帝生日。始光中。是帝自崇福之始也。神麚中。是臣下。奉祝帝壽之始也。自爾以來。臣下吉祝。必營齋轉經。謂之生辰節道場。于今盛行焉。又［下ノ五十五丈］云。昔漢祖。與盧綰同日生。有奉酒饌相遺。此爲慶生之權與也。後則束帛壺酒。孩兒服玩。以加祝賀。大則玉帛。長生久視之意。屬于物品。以慶生之豐禮也。及聞佛法中。有弭災延命之説則以佛事。爲慶也。元魏後周隋世。多召名行廣學僧。與濡道對論。悦視王道。亦慶生之美事矣。唐高宗。召賈公彦。於御前。與道士沙門。講説經義。德宗誕日。御麟德殿。命許孟容等。登座與釋老之徒講論。貞元十二年。四月誕日。御麟德殿。詔給事中徐岱。兵部郎中趙需。及許孟容韋渠牟與道士葛參成。沙門談筵等。二十人。講論三教。渠牟最辨給。文宗九月誕日。召白居易。與僧惟澄。道士趙常盈。於麟德殿談論。居易論難鋒起。辭辨泉注。上疑宿搆深嗟揖之。莊宗代。有僧録慧江。與道門程紫霄談論。相切磋謔浪嘲戲。以悦帝焉。莊宗自好吟唱。雖行營軍中。亦携法師談讚。或時嘲挫。每誕辰飯僧。則内殿論明宗。石晉之時。僧録雲辨。多於誕月談讚。皇帝親座。累對論義。至大宋太祖朝。天下務繁。乃罷斯務。止重僧講。三學爲上。此無乃太厚重。而貞實乎。

⑦宋洪邁容齋三筆［十四ノ十二丈］云。唐德宗。以誕日。歲歲詔佛老者。大論麟德殿。并召給事中徐岱。及趙需。許孟容。韋渠牟。講説。始三家若予盾然。卒而同歸于善。帝大悦。賚予有差。此新書列傳所載也。〈云云〉。國朝命僧。升座祝聖。蓋本於此。

⑧宋喩文豹唾玉集［郛廿三］云。德宗每年生日。令僧道。及給事中等官。大論麟德殿。相與問難。賚賜有差。時以爲上儀。白樂天有三教論衡。我朝聖節昇座本於此。

⑨居家必用云。聖節唐太宗以前有宴。而無節。至明皇。始曰千秋節。歷代節名。不同。

⑩事物紀原［一ノ二十九丈］云。唐會要曰。開元十七年。八月五日。源乾曜張説等。請以是日。爲千秋節。休暇三日。至長慶七年。十月十日。穆宗誕日。令天下州府。置宴。文宗開成二年誕日。始禁屠宰。此聖節禁屠置宴之始也。宋朝俱循用之。

⑪忠按舊唐書［十七下二十三丈］文宗本紀開成二年。有聖節斷屠之制。然實聖節斷屠。始於隋高祖。仁壽三年。東齋記事辨事物紀原之誤。見節時類。三長齋月處。

⑫隋書［二ノ十三丈］文帝紀云。仁壽三年。夏五月癸卯詔曰。哀哀父母。生我劬勞欲報之德。昊天罔極。但風樹不靜。巖敬莫追。霜露既降。感思空切。六月十三日。是朕生日。宜令海内。爲武元皇帝。元明皇后。斷屠。

③周必大淳熙玉堂雜紀［上ノ一丈○必十集七］云。錢文僖公惟演。金坡遺事云。舊規。學士六人。遇聖節。共率百二十緡。寺中設齋。今送五十千。與樞密使同開道場。前一日赴宴。當時所記如此。近歲樞密院滿散聖節。及貢院賜宴。則學士待制皆與。而無送錢故事。

（朝山一玄）

【九五三】六好日祝聖

①帝王誕生。支干相當之日。諷經祝讚。一年有六箇本命好日。故曰六好日也。

②幻住清規［三丈ヲ○敕修鈔一ノ卅五丈引］云。一年内有六日。是本命好日。此六日亦與朔望同。粥前諷大悲咒祝聖。切惟。皇恩如天之覆。林泉懦弱之者。仰承帝澤。而獲終身之安。其

贊祝之誠。豈可擇日而爲之。蓋二六時中。俯仰折旋。皆是謝恩祈禱之時也。今特取本命朔望。而爲者。乃表而出之之意也。

③又［廿六丈］云。如遇本命好日。回向。稱甲子令辰。

④　莊子［四ノ卅七丈］天地篇云。堯觀乎華。華封人曰。嘻聖人。請祝聖人。使聖人壽。

⑤　忠曰。祝聖祝壽語。出于此。

（神足浩正）

【九五四】景命日祝讚

①天子［敕修鈔一ノ卅四丈］即位之日。祝讚諷經。

②　忠曰。或［敕鈔一ノ卅五丈寅ノ説］以六好日。爲景命好日。非也。

③敕修清規［上一ノ廿三丈］景命祝讚云。景命好日。隔宿。堂司行者報衆。掛諷經牌。

④　忠按景命日。蓋毎月有祝。蒲室集。奉敕。重修百丈清規疏語中。十二箇月。但除正月三月。餘皆有景命日祝香語。都十道。

⑤　詩經［註疏十七之二ノ十九丈○敕鈔一ノ卅四丈引］既醉篇云。君子萬年。景命有僕。　箋云。成王女。既有萬年之壽。天之大命。又附著於女。謂使爲政教也。

⑥　文選［卅七ノ四十一丈］劉越石勸進表云。高祖宣皇帝。肇基景命。

⑦　註良曰。肇始。景大也。

（神足浩正）

【九五五】毎日祝讚

①敕修清規［上一ノ廿三丈］毎日祝讚云。齋粥二時。下堂。僧衆必須登殿。維那舉無量壽咒。三遍。回向。

②　舊［敕鈔一ノ卅七丈］説曰。毎日三時。祝禱皇風永扇。帝道遐昌者。唯有禪林而已。餘所未聞之。

（神足浩正）

【九五六】萬歲祝君

①敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節黄榜式云。逐日輪僧上殿。披閲眞詮。宣持密號。所萃洪因。端爲祝延今上皇帝。聖壽萬歲。萬歲。萬萬歲。

②禪林開堂祝聖。有萬歲語。蓋葉縣省禪師爲始。〈見叢軌類。祝聖拈香處〉。後代例有萬歲萬歲。萬萬歲語。

③虚堂愚和尚［三ノ七丈］育王録入寺云。師陞座拈香云。此一瓣香。爇向爐中。恭爲祝延今上皇帝。聖躬萬歲萬歲萬歲萬萬歲。陛下。恭願。堯仁廣被。舜德日新。〈淨慈録。徑山録。皆有萬歲萬歲萬萬歲語〉。

④無學元禪師建長録入院云。驟步登座。祝聖拈香云。此一瓣香。恭爲祝延今上皇帝。聖躬萬歲萬歲萬萬歲。陛下。恭願。如日之明。如天之普。九州共貫。并包有截之區。三景同光。申錫無疆之祚。

⑤　忠曰。日本有萬歲萬歲萬萬歲語。此爲始。自後大休念禪師。一山寧禪師。皆有此語。

⑥明極俊禪師。建長録入寺云。祝聖。拈香。大日本國相模州巨福山建長興國禪寺。新住持。傳法臣僧。入院開堂之次。虔爇此香。端爲祝延今上皇帝。聖躬萬歲萬歲萬萬歲。皇帝陛

下。恭願。統一國聖明之尊。如日如月。恢萬世鴻熙之祚。同地同天。

⑦ 忠曰。大日本國等語。似今時造語者。此爲始。

⑧前漢書郊祀志云。武帝登中嶽太室。從官在山上。聞若有言萬歲云。

⑨祖庭事苑［五ノ二丈○説類四ノ四丈同］云。呼萬歲。自古至周。未有此禮。按春秋後語。趙惠王。得楚和氏璧。秦昭王聞之。遺王書。願以十五城易之。趙遣藺相如。奉璧入秦。秦王見相如奉璧大喜。左右呼萬歲。又田單守即墨。使老弱女子。乘城上。僞約降。燕軍皆呼萬歲。馮瑗之薛。召諸民債者。合劵。劵既合。瑗乃矯孟嘗君之命。所債賜諸民。因燒其劵。民皆呼萬歲。至秦始皇殿上上壽。羣臣皆呼萬歲。見優孟傳。蓋七國之時。衆所喜慶於君。皆呼萬歲。自漢已後。臣下對見於君。及拜恩慶賀。以爲常制。又謂山呼者。漢［前漢］武帝。至中嶽。翌日親登崇高。御史乘屬在廟旁。吏卒盛聞呼萬歲者三。山呼萬歲者。自漢武始也。

⑩野客叢書［唐三ノ六丈］云。東漢臣下。多呼萬歲。馮魴既降羣盜赦其罪。各返農桑。皆稱萬歲。耿恭於虜圍中拜井得泉衆皆稱萬歲。馬援曰。今賴士大夫之力。蒙被大恩。紆佩青紫。吏士皆稱萬歲。歲旦門下掾王望請上太守壽。掾史皆稱萬歲。臣下往往若此。不以爲僭。此猶可也。觀漢刻中有故民呉仲山碑。其銘中。有子孫萬歲之語。民猶稱萬歲。官吏可知。鮮有非之者。惟竇憲爲將軍。至長安。尚書以下。議欲拜之伏稱萬歲。韓稜正色曰。禮無臣下稱萬歲之制。議者皆慚。所避忌者惟此語。此語抂當時。不無諱避。但不至如後世之切耳。

⑪事物紀原［一ノ卅丈］云。萬歲考古。逮周未有此禮。戰國時秦王見藺相如奉璧。田單僞約降燕。馮諼焚孟嘗君債劵。左右及民。皆呼萬歲。蓋七國時。衆所喜慶於君者。皆呼萬歲。秦漢以來。臣下對見於君。拜恩慶賀。率以爲常。

⑫宋許觀東齋紀事［卲廿八］云。萬歲之稱。不知起於何代。商周以來。不復可攷。呂氏春秋。宋康王飲酒。室中有呼萬歲者。堂上悉應。戰國策。馮驩燒債劵。民稱萬歲。藺相如奉璧入秦。秦王大喜。左右皆呼稱萬歲。韓非子。巫覡之祝人曰。使君千秋萬歲之聲聒耳。新序梁君出獵。歸入廟中。呼萬歲曰幸今日也。紀信乘黄屋。載左纛曰。食盡漢王降。楚呼萬歲。陸賈奏新語。左右皆稱善。呼萬歲。漢［前漢六巻十六丈］武帝登嵩高呼萬歲者三。元帝送許后。入太子家。謂左右酌酒賀我。左右呼萬歲。馮異傳。趙臣將兵助異。并送縑穀。軍中皆稱萬歲。王望曰。今日雖擊牛釃酒勞饗。軍士皆稱萬歲。伏王馬授［援カ］封侯。乃首請上雅壽。掾史皆稱萬歲呉甘寧入魏營。斬數十級。還入營。作鼓吹稱萬歲。是則慶賀之際。上下通稱之。初無禁制。不知自何時始專爲君之祝也。

⑬孔氏［卲十三］〈平仲〉雜説［三丈］云。人臣不嫌稱萬歲。馬援傳。援釀酒亨軍士。皆伏稱萬歲。是也。

⑭居家必用［辛ノ廿二丈○敕鈔一ノ廿七丈●出］云萬歲大雅［江漢素本下七十丈］云。虎拜稽首。天子萬年。始於戰國以來。臣下對君慶賀。呼曰萬歲。

⑮ 又詩經大雅［素本五十四丈］既醉篇云。君子萬年。介爾景福。

⑯ 又［素本下卅五丈］小雅瞻彼洛矣及鴛鴦篇［卅六丈］。有君子萬年語。

⑰宋史［傳二百四十八ノ十九丈］外國傳云。勃泥國。在西南大海中。太平興國二年。其王向打。遣使齎表。入貢。其表以華言譯之云。勃泥國王。向打。稽首拜皇帝。萬歲萬歲萬萬歲。願皇帝萬歲壽。今遣使進貢。〈云云〉。

⑱三才圖會儀［八ノ廿三丈］制類。蕃國接詔儀云。司賛唱。搢笏鞠躬。三舞蹈。三拱手加額。

山呼萬歳山呼萬歳再山呼萬歳。出笏俯伏興。

⑲元史〔志ノ十八ノ五丈〕禮樂志云。通贊贊曰。搢笏。曰鞠躬。曰三舞蹈。曰跪左膝三叩頭。曰山呼。曰山呼。曰山呼。曰再山呼。〈凡傳山呼。控鶴呼譟。應和曰萬歳。傳再山呼。應曰萬萬歳〉。曰出笏。曰就拜。曰興。

⑳忠曰。累言萬歳。萬歳。萬萬歳。見宋史勃泥國事中。及圖會蕃國。接詔儀中。其於中國。見元史禮樂志。然則如上累言者。本是西戎北狄之祝語歟。

（神足浩正）

【九五七】修正

①義堂日工集〔二ノ六十丈〕云。永和五年己未正月。在報恩。正旦對衆説云。吾國叢林。或三日或五日。修正勤行。亦是同國俗也。吾山。例定坐七日。以祈國家安全。亦成辨自己修行也。

（神足浩正）

【九五八】二祖三佛忌

①二祖〔敕修鈔三ノ卅二丈〕者。達磨〔白雲ノ之先ノ説〕及某寺開山也。或〔心ノ説〕云。達磨百丈二忌也。三佛者。涅槃忌。誕生會。成道會也。

②忠曰。誕生成道非忌。然言二祖三佛忌。隨多得名也。

③正月〔敕修鈔十四ノ四十二丈〕十七日。爲百丈忌。十月五日。爲達磨忌。然日本古來不修百丈忌。故加某寺開山忌。以爲二祖忌矣。凡開山忌。自常住經營之。達磨百丈二忌。率衆財營辨。非常住措致之。

（神足浩正）

【九五九】佛誕生會

①四月八日。其規如清規。

②忠按佛生日。當以二月八日爲正。何縁作此●。曰周書異記云。昭王二十四年。甲寅歳。四月八日。江河泉池。忽然汎溢。井皆騰涌。宮殿震動。其夜五色光氣。貫于太微。徧于西方。作青虹色。時王問太史蘇由。由對曰。有大聖。出于西方。故現此瑞。王曰。於國無損乎。對曰。一千年後。聲教當被于此。〈僧史畧〔上ノ六丈〕引〉忠以謂。周書異記。周時記録。必當用周正。則其四月。〈建卯〉是夏小正二月〈建卯〉也。故當定二月八日。爲佛生日。然今例用四月。是以周四月。〈建卯〉謬爲夏小正四月〈建巳〉而已。

③僧史略〔上七丈〕云。今東京。以臘月八日。浴佛。言佛生日者。案祇桓圖經。寺中有玻黎師子。形如拳許大。口出妙音。菩薩聞之。皆超地位。每至臘月八日。舍衛城中士女。競持香花。來聽法音。詳彼不言佛生日。疑天竺以臘八爲節日耳。又疑是用多論二月八日。臘月乃周之二月也。東西遼夐。故多差異焉。〈薩婆多論〔二ノ一丈〕云。佛。二月八日。沸星現時生〉。

④忠曰。東京。臘八稱佛生日者。以余觀之。周書異記四月八日佛生。而周四月。即夏小正二月〈建卯〉也。然或以夏小正二月。又謬爲周二月。〈建丑〉周二月。即夏小正十二月。故以臘八。爲佛生日也。又薩婆多所謂。二月八日佛生者。取夏小正二月。〈即合周書異記〉然賛寧。以爲周二月。而以合夏小正臘月。非也。又自引周書異記現瑞。

證佛生。何不主張周四月〈建卯〉佛生義耶。又臘八浴佛。出于譬喩經說。〈次佛成道會。處引〉然賛寧不得之。強援祇桓圖經。未足成浴佛義。

⑤忠曰。佛誕生。或省生。但言佛誕者。非也。

⑥趙與峀賓退録［九ノ一丈］云。詩誕彌厥月。誕大也。朱文公則以爲發語之辭。世俗誤以誕訓生。遂有降誕慶誕之語。前輩辯者多矣。書曰。誕膺天命。誕亦大也。范曄贊光武。乃有光武誕命之語。尤不可曉。殤帝紀云。誕育百餘日。亦誤。

（神足浩正）

【九六〇】佛成道會

①十二月八日。其規如清規。

②忠曰。八相事略［五十二丈］云。佛成道。五大院安然出五説。一二月八日。〈出因果經〉二四月八日。〈出方等泥洹經〉三三月八日。〈出西域記［八ノ廿一丈］〉四三月十五日。〈又出西域記〉五八月八日。　忠按佛祖統紀正宗記等。取二月八日説。似以因果經爲正。然中華日本。古今用十二月八日。僧史略［上ノ八丈］會之云。臘月乃周之二月也。〈止此〉。名義集［三ノ廿六丈］引周書異記云。周穆王二年癸未。二月八日。佛年三十成道。正當今之臘八也。〈止此〉。

③忠曰。周書異記者。周時記録。必可用周正。則其二月。〈建丑〉是夏小正。十二月也。

④臘八有浴佛者。　丹霞淳禪師録臘八上堂云。屈指忻逢臘月八。釋迦成道是斯辰。二千年後追先事。重把香湯浴淨身。諸禪徳。古有十六開士。因僧浴時。隨例入室。忽悟水因。洞明妙觸。盡入圓通境界。大洪今日普請。往靈濟殿上。灌沐釋迦如來。箇中亦有悟底消息。諸人還會麽。香湯瀲灩兩三杓。便向如來頂上傾。

⑤臘八浴僧有本縁。　法苑珠林［四十五ノ十五丈］云。譬喩經云。佛以臘月八日。神通降伏六師。六師不如。投水而死。仍廣説法。度諸外道。外道伏化。白佛言。佛以法水。洗我心垢。我今請僧洗浴。以除身穢。仍爲常縁也。〈今臘月八日洗僧。唯出此經文〉。

⑥釋氏要覧。引譬喩經。作請佛僧。洗浴身垢。註云。今淮北及至三京。皆用臘八浴佛。

⑦又寶積經［百ノ三丈］云。波斯匿王女無垢施。始年八歳。二月八日。沸星現日。與五百婆羅門俱。持滿瓶水。出至城外。浴洗天像。婆羅門。見諸比丘。在門外立。皆謂不吉。〈廣説〉　依之。二月八日浴像。本是天竺風俗。

（神足浩正）

【九六一】佛涅槃忌

①二月十五日。其規如清規。忌義。見節時類。忌日處。

（神足浩正）

【九六二】達磨忌

①十月初五日、其規如清規。

（西川秀敏）

【九六三】百丈忌

①正月十七日也。

②清拙澄禪師圓覺録［日本一ノ廿一丈］百丈祖忌、拈香語尾云。百丈祖忌、日本未曾講行。今

次初設此禮。百丈以前、無住持。今之住持、兩序大小職任、堂宇規式、皆百丈祖立之。長老者、不肯設忌。可謂昧本。本且不知。末奚取焉。聞之者、足以勸。

（西川秀敏）

【九六四】開山忌

①某寺開山入滅日。修供養。其規見清規。

（西川秀敏）

【九六五】嗣法師忌

①某寺住持之嗣法師、入滅日。修供養。其規見清規。

②碧巖録云。巴陵、衆中謂之鑒多口。常縫坐具行脚。深得他雲門脚跟下大事。所以奇特。後出世、法嗣雲門。先住嶽州巴陵。更不作法嗣書。只將三輪語、上雲門。如何是道。明眼人落井。如何是吹毛劍。珊瑚枝枝撐著月。如何是提婆宗。銀椀裏盛雪。雲門云。他日老僧忌辰、只舉此三轉語、報恩足矣。自後、果不作忌辰齋。依雲門之囑、只舉此三轉語。

③備用清規［一ノ十一丈］嗣法師忌云。巴陵三轉語作忌、不墮流俗。後世道不及古。務在廣設祭筵、修營厚供。可無愧乎。近代大川做浙翁和尚忌。横川設天目和尚忌。方丈設位、置食一分、燒香一炷、大展九拜。不許諷經。二大老、深有意焉。

（西川秀敏）

【九六六】愍忌

①誕生日。曰愍忌

②中峯本禪師録［一之下卅丈］呉江州太湖、簡村順心禪菴、高峯和尚愍忌拈香云。順心菴裏、太湖中央、俄然逢愍忌。世相未能忘。大衆高峯老和尚來也。雨蒸苗葉緑、風撼稻花香。

③岐陽［中峯録不二鈔］曰。幻住清規云。三月廿三日、高峯和尚愍忌。按高峯行状。師生宋嘉熙戊戌、三月廿三日申時。乃知愍忌是誕生日也。或云。尊宿示寂後、稱其誕生日、爲愍忌也。

④雲章［勅修鈔二ノ十九］曰。高峯生日、中峯設愍忌齋。依此、誕生日亦言忌也。

⑤或［勅鈔二ノ十九丈丈云英東陽ノ説也蓋訛東陽英朝乎］曰。善知識、爲哀愍衆生出生應世。故其誕生日曰愍忌。　忠曰。此義杜撰。按癡絶冲禪師録［下ノ］普説［十七丈］云。爲令尊堂戴氏小一太君愍忌與百日、同時辨香積供。〈止此〉。是則婦人言愍忌。非哀愍應世之義、明矣。亦不必局尊宿善知識也。

（西川秀敏）

【九六七】入牌祖堂

①入祖師牌於某寺。祖師堂也。

②勅修清規［上二ノ卅二丈・又卅五丈ウニモ］尊宿全身入塔云。毎日三時、上茶湯、集衆諷經。俟迎牌位、入祖堂。則止。或待新住持至、方入祖堂有佛事。

③有存日逆修入牌者。　臥雲日件録［上ノ八十三丈］云。無極和尚在世時、入自牌於天龍祖堂。後其孫鹿苑寺東嶽攀例、又入自牌於天龍。近時景南愚極、皆有是舉矣。

（西川秀敏）

【九六八】千佛會

①圓悟勤禪師天寧録〔五ノ六丈〕喬貴妃設千佛會、上堂云。千華顯瑞應、萬善積靈臺。廣闢解脱門。大開無價藏。〈乃至〉集無涯福禄、祝睿筭無彊。〈云云〉。

（西川秀敏）

【九六九】知識會

①忠曰。供養華嚴入法界品、五十三善知識也。

②北礀簡禪師續集〔九丈〕靈隱散知識會。首求頌云。無識無知五十三、勞他童子遍咨參。朝來靈隱羅齋去、添得從前滿面慚。

（西川秀敏）

【九七〇】祖師會

①圓悟勤禪師天寧録〔五ノ三丈〕祖師會上堂云。四天二十八祖也恁麼。唐土六祖帆恁麼。天下列刹相望。諸老宿也恁麼。山僧也恁麼。〈云云〉。

②中峯本禪師廣録〔八ノ五丈〕歴代祖師畫像讃序云。臨濟十七傳、而至仰山雪巖和尚。先師入巖翁之室、於羣弟子未造之先、誤中其毒、口耳俱喪。既而深棲天目、影不出山三十年、無一法與人領荷。杭之妙行寺、嘗集五宗傳道之師遺像數千軸、毎遇歳旦展挂。緇白瞻禮、目之曰祖師會。有好事者。圖少林至天目。直下相承、二十八代。祖師遺像。歳遇少林諱日。薦羞粢盛。以酬遞代傳持之意。

③退菴先禪師録〔続宿星二丈〕有祖師會上堂。

④雪巖欽禪師録〔下ノ八十二丈〕嘯巖居士請、自贊題註云。入錢塘北關祖師會。

⑤備用清規〔一ノ八丈右〕達磨祖師忌云。住持專誠、山門執事備辨、維那侍者提點。法堂敷陳玩具書畫。

⑥忠曰。祖師會在歳旦。其達磨忌、張列祖像。亦是祖師會而已。備用稱。敷陳書畫。似不局祖像。日本東福寺、毎歳十月十七日、聖一國師忌、展掛名畫珍墨數百軸。觀者如堵。蓋攀中華儀也。

（西川秀敏）

【九七一】楞嚴會（レンゲンエ）

①敕修清規〔下二ノ五丈六丈〕云。楞嚴會、乃祈保安居。〈其規詳彼〉。　又云四月十三日啓建。至七月十三日。滿散。

②備用清規〔三ノ二丈〕楞嚴會云。古法放參後、山門首諷誦。眞歇和尚住經山。謂衆不專誠。則在粥罷。　又云。普回向偈。眞歇和尚自製。信知。名行尊宿一舉、四海一律也。

③舊説〔敕鈔十四ノ六丈〕曰。夏中楞嚴會始於眞歇了禪師。眞歇〔敕鈔十四ノ十五丈〕初住明州補陀山。僧行悉病疫。歇禱觀音大士。大士夢中告云。佛在世時、有楞嚴咒。須令僧行、依戒臘行道誦持、回向聖凡。覺而依教行法。果衆病平愈矣。自此叢林依行。但逐一回向。歇後住徑山、方作普回向偈。天下遵用。

④忠曰。眞歇作普回向文。及觀音夢告。誦咒脱疫、沒可疑焉。但如言夏中楞嚴會、始于眞歇、爲難信耳。備用云。古法放參後、山門首諷誦。眞歇住徑山在粥罷。既言古

法、則眞歇已前、有楞嚴會。

⑤又普陀山志有十五卷。第三卷云。高宗紹興元年、眞歇清了禪師、泛海、結于山椒。題曰海岸孤絶處。郡請于朝、易律爲禪。　又第六卷、載眞歇小傳云。此山禪宗、蓋自師始、稱開法第一世云。〈止此〉。不言觀音靈夢、誦咒病愈事。

⑥曹源生禪師録［六丈］散楞嚴會上堂云。將聞持佛佛、何不自聞聞。曼珠室利五臟心肝、盡情吐露。這裡薦得、九十日内、異口一音。諷演摩訶悉怛多、般怛羅無上神咒、聲無間。無見頂相、無爲心佛、時時見前。若也躊躇龜峯、不免重下注脚。卓拄杖一下、遂高聲喚云。侍者收取拄杖。

（西川秀敏）

【九七二】盂蘭盆會

①盂蘭盆經云。大目犍連、始得六通、欲度父母、報乳哺之恩。即以道眼、觀視世間、見其亡母、生餓鬼中。不見飲食、皮骨連立。目連悲哀、即以鉢盛飯、往餉其母。母得鉢飯。便以左手障鉢、右手搏食、食未入口、化成火炭、遂不得食。目連大叫、悲號涕泣、馳還白佛、具陳如此。佛言。汝母罪根深結。非汝一人力、所奈何。汝雖孝順、動天地、天神地祇、邪魔外道、道士、四天王神、亦不能奈何。當須十方衆僧威神之力。乃得解脱。吾今當救濟之法。令一切、皆離憂苦。佛告目連。十方衆僧、七月十五日、僧自恣時。當爲七世父母、及現在父母、戹難中者、具飯百味五果、汲灌盆器、香油挺燭、牀敷臥具、盡世甘美、以著盆中、供養十方大德衆僧。當此之日、一切聖衆、或在山間禪定、或得四道果、或在樹下經行、或六通自在、教化聲聞縁覺。或十地菩薩大人、權現比丘、在大衆中、皆同一心、受鉢和羅飯、具清淨戒。聖衆之道、其德汪洋。其有供養此等自恣僧者、現在父母、六親眷屬、得出三塗之苦、應時解脱、衣食自然。若父母現在者、福樂百年、若七世父母、生天。自在化生、入天華光。時佛敕十方衆僧。皆先爲施主家爲咒願。願七世父母、行禪定意、然後受食。初受食時、先安在佛前、塔寺中佛前、衆僧咒願竟、便自受食。時目連比丘及大菩薩衆、大歡喜。目連悲啼泣聲、釋然除滅。是時目連母、即於是日、得脱一劫餓鬼之苦。目連復白佛言。弟子所生母、得蒙三寶功德之力、衆僧威神之力故、若未來世、一切佛弟子、應亦奉盂蘭盆、救度現在父母、乃至七世父母。爲可爾否。佛言。大善。快問、我正欲説。汝今復問。善男子、若比丘、比丘尼、國王、太子、大臣、宰相、三公百官、萬民庶人、行慈孝者。皆應先爲所生現在父母、過去七代父母、於七月十五日、佛歡喜日、僧自恣日、以百味飯食、安盂蘭盆中、施十方自恣僧。願使現在父母、壽命百年、無病、無一切苦惱之患、乃至七世父母、離餓鬼苦、生人天中、福樂無極。是佛弟子、修孝順者、應念念中、常憶父母、乃至七世父母、年年七月十五日、常以孝慈、憶所生父母、爲作盂蘭盆、施佛及僧、以報父母、長養慈愛之恩。若一切佛弟子、應當奉持是法。時目連比丘、四輩弟子、歡喜奉行。

②佛祖統紀［卅四ノ十一丈］云。盂蘭盆經言［記下ノ七十八丈］。佛弟子、修孝順者、應念念中、常憶父母、乃至七世父母、年年七月十五日、以百味飲食、安盂蘭盆中、施佛及僧、以報父母長養、慈愛之恩。〈止此〉。盂蘭、此翻解倒懸。言奉盆供於三寶福田、用以解飢虚倒懸之急。　又述曰。目連託救母、以興縁、如來云奉盆、以垂法。所以教人道、以報重恩也。自大教東流、古今帝王、所以奉盆供者爲多矣。然今之寺舍、多於此日、施斛供亡、如常法者、雖無奉盆之儀、而不失盂蘭之意。

③忠曰。依玄應意、連盆字、爲梵語。

④玄應一切經音義［十四ノ廿五丈］云。盂蘭盆、此言訛也。正言烏藍婆拏。此譯云倒懸。按西國法。至於衆僧自恣之日、盛設佛具、奉施佛僧、以救先亡倒懸之苦。以彼外書云、先亡有罪、家復絶嗣、無人祭神請救、則於鬼處受倒懸之苦。佛雖順俗、亦設祭儀、乃教於三寶田中、深處功德。舊云盂盆、是貯食之器。此言誤也。

⑤又見祭供門、盂蘭盆供處。

⑥雲棲正訛集云。世人以七月十五日、施鬼神食、爲盂蘭盆大齋之會、此訛也。蘭盆縁起目連。謂七月十五日、衆僧解夏自恣、九旬參學、多得道者。此日修供、其福百倍。非施鬼神食也。施食自縁起阿難。不限七月十五、所用之器、是摩竭斛、亦非蘭盆。蓋一則上奉聖賢、一則下濟餓鬼。悲敬異田、惡可等混。

⑦羣談採餘［十卷考証ノ四丈］云。中元七月十五日、俗傳地官赦罪之辰、人家多持齋誦經、薦奠祖考。攝孤判斛、僧家建盂蘭盆會、放水中及塔上。謂之照冥官府。亦登郡邑厲壇祭祀。

⑧又羣談採餘［十卷弁惑十一丈］云。七月十五日、蘭盆之説、諸皆主佛經目連救母、於是日、以百味、著盆中供佛。然不知何謂盂蘭盆也。及讀釋氏要覽云。盂蘭猶華言解倒懸。似有救母之説矣。而盆字、又無著落。問之博識、不知也。後見老學菴筆記［七ノ二丈］。父老云。故都於中元、具素饌享先。織竹爲盆盂狀、貯紙錢於中、承之以竹。迨焚倒、以視方隅、而占冬之寒煖、謂盂蘭盆。乃知風俗祀先、全無佛氏之意。因而考夢華録亦云。以竹斫成三脚、上織燈窩。謂之盂蘭盆。又買素食、擦米飯。享先、以告報秋成。但多目連經搬其雜劇數言、反覆思之、盂蘭盆實起於風俗。而目連救母之事、偶符是日。且佛氏盂蘭盆、二字之音、又與同。遂訛而爲盂蘭盆也。或當是此筶籃盆三字、亦不可知。但佛教與祀先之事日崇、而風俗之事日遠且微也。故不復知前知義。併筆記華録、抄過亦錯。但於三字難通。因得其説、贅之於稿

⑨忠曰。欲通盂蘭盆字義、何不讀大盆經小盆經。此三字。本出于佛經、而燈窩爲盂蘭盆。告報秋成。或視焚倒、占寒煖。皆起於俚俗謬作。倪綰不言世俗訛轉佛氏盂蘭盆。而爲盂蘭盆實起於風俗、不辨本來也。要知俗儒有此説。故收録。

⑨釋氏通鑑［九ノ廿二丈］唐代宗大曆元年紀云。七月壬午、作盂蘭盆會于禁中。設高祖太宗已下、七聖位、建巨幡。各以帝號、標其上。自大廟迎、入内道場。饒吹鼓舞、旌旛燭天。是日立仗百僚、於光順門迎拜、導從。自是歲以爲常。〈忠按唐書［傳七十ノ四丈］元載傳載此事〉

⑩水滸傳［五十一ノ十一丈］云。七月十五日、盂蘭盆大齋之日、年例各處、點放河燈、修設好事。

⑪忠曰。河燈、小片板樹燭、流之於水上。今大清僧寺、七月修水懺作此。其實、事係水懺、而不關盂蘭矣。

（西川秀敏）

【九七三】祈禱

①舊説［敕鈔二ノ八丈］曰、有災則祈禱、無災則不用之、故祈禱、無定式。

②敕修清規［上一ノ廿五丈］祈禱云、凡有祈禱、須知法嚴治壇場、鋪陳供養、住持專心加謹、僧衆各務整肅。

③ 義堂日工集［二ノ十丈］云、余告恕義天曰、禅家大尊宿、病中或臨終、祈禱、是何義、儒［論四ノ］尚言、丘之禱久矣、況出家、視生死如幻乎。」又今時例為住持本命、祈禱于方丈、是則取笑於有識者。」公他日據師位、莫隨例顛倒矣。

（馬場道隆）

【九七四】祈保

①忠［敕鈔十四ノ四十一丈 泰安］曰、禱保安也。

②敕修清規［下二ノ六丈］楞嚴會云、楞嚴會、乃祈保安居。　又月分須知［下二ノ十六丈］云、有處、四孟月、大衆行道諷経、祈保。

（馬場道隆）

【九七五】祈晴

①敕修清規［下二ノ六丈］祈晴、祈雨、祈雪、遣蝗、禳日蝕、禳月蝕、等疏語、凡有災厲、則無不禱焉。

②　舊唐書［志十七ノ九丈］五行志云、大暦四年秋、大雨是歳自四月、霖澍至九月京城閉坊市北門、門置土臺、臺上置壇及黄幡以祈晴、秋末方止。

③　忠曰、土臺、土剋水、黄亦土色、剋水義也。

（馬場道隆）

【九七六】祈雨　【九七七】祈雪

①祈雨、祈雪等見祈晴處。

②法蔵別傳［十四丈］云、景雲再春、時雨罕潤、冬又不雪、人皆顧天。」君命召蔵禁中、懇訊救農之術、乃啓沃曰、有経名隨求、則得大自在陀羅尼、若結壇浄寫是総持語、投於龍湫、應時必獲。」詔可其請、遽往藍田山悟眞寺龍池所、作法、未旬大雪。

（馬場道隆）

【九七八】禳日蝕　【九七九】禳月蝕

①見祈晴處。

（馬場道隆）

【九八〇】遣蝗

①見祈晴處。

（馬場道隆）

【九八一】青苗會

①祈保田稼也。

②敕修清規［下二ノ十六丈○敕鈔十四ノ四十三丈］月分須知云、五月端午日、住持上堂、次第建青苗會、同司預出諸寮、看誦經單。

③幻住菴清規［六丈］云、五月二十八日、起青苗經會、三日、至六月初一日散、須預備香燭供料、弁立疏文、及預出經單、請大衆、結縁披閲、然後聚其經目、入疏回向。　又青

苗經疏去、歲遇中夏當植物長茂之時、啓建青苗且勝會、用保田疇、仰祈護祐。

④ 南堂［一卷］欲禪師本覺錄［卅三丈］上堂云、毘盧藏中、有大經卷、主伴互融、理事俱顯、及乎點讀開科、多是討頭不見、山門保護青苗、爲汝是掇一遍、卓拄杖、乃合掌云、誓首文殊普賢、却須管取一百四十大願下座。

⑤ 忠曰、蓋青苗會、轉華嚴經也。

⑥ 介石朋禪師能仁錄［八丈］、有保苗上堂。

⑦ 明極俊禪師寶林錄、有散青苗經上堂。

⑧ 石溪月禪師報恩錄［九丈］、拙澄禪師圓覺錄［十一丈］等、有青苗會上堂。

（馬場道隆）

【九八二】不斷輪

① 敕修清規［上一ノ廿五丈］祈禱云、如祈晴、祈雨、則輪僧十員廿員、或三五十員、分作幾引、接續諷誦、每引諷大悲咒消災咒、各三七遍、謂之不斷輪、終日諷誦、必期感應、方可滿散懺謝。

② 忠曰、輪者、自第一引、次第精修、數引終、則復第一引臨場、如輪環然、故言輪。

（馬場道隆）

【九八三】浴佛

① 佛祖統紀［卅四ノ二丈］云、摩訶利頭經、四月八日、是佛生日、人民念佛、浴佛形像。

② 舊説曰、浴佛香湯方、沉香、壹兩白檀、壹兩甘松、半兩丁子、半兩熏陸、半兩芎藭、半兩鬱金、壹錢參分此七種、盛浄布囊、投於鐺内、用浄水三揆、前煎減二揆、移鐺冷之、然後盛浴盆。

③ 天中記［五ノ十一丈引高僧傳］云、四月八日、浴佛、以都梁香、爲青色水、鬱金香、爲赤色水、丘隆香、爲白色水、附子香、爲黄色水、安息香、爲黑色水、以灌佛頂。

④ 誕生佛像法、見靈像類。

⑤ 傳燈錄義堂日工集［十四ノ十二丈○類聚九ノ九丈］、藥山儼禪師章云、師見遵布衲洗佛、乃問這箇從汝洗得那箇麽、遵曰、把將那箇來、師乃休。

⑥ 臘八浴佛、見佛成道會處。

（馬場道隆）

【九八四】浴聖

① 浴聖僧也。

② 敕修清規［下一ノ三丈］知浴云、浴頭覆維那首座住持畢、鳴鼓三下、浴聖、桶内皆著少湯、燒香禮拜、想請聖浴。

③ 高僧傳［五ノ八丈○六学十一ノ八丈○敕鈔八ノ十九丈］道安傳云、安立誓、願生兜率、忽有異僧、形甚庸陋、來寺寄宿、寺房既窄、處之講堂、時維那直殿、夜見此僧、從窓隙出入、遽以白安、安驚起、禮訊問其來意、答云、相爲而來、安曰、自惟罪深、詎可度脱、彼答曰甚可度耳、然須更浴聖僧、情願必果、具示浴法、安請問來生所之處、彼乃以手、虚撥天之西北、卽見雲開、備覩兜率妙勝之報、爾夕、大衆數十人、悉皆同見、安後營浴具、見有非常小兒、伴侶數十、來入寺戲、須更就浴、果是聖應也。

④法苑珠林、[二ノ十丈] 洗僧法云、敷揚玄教、已自周圓、嚴儀洗具、後皆備訖、唯衆一心、奉請三寶、聲首歸依、上請十方諸佛、三世慈尊、五分法身、眞應兩體、九十八使、惑纏已盡、三十二相、微妙莊嚴、實無四求、假同四事、爲衆生故、有感便來、唯願各各、乘摩尼寶殿、坐瑪瑙雲中、放百億光明、照三千刹土、梵王持蓋、帝釋布華、降比道場、入温室浴。」次請發心已上、補處已還、歡喜離垢之人、善慧法雲之士、三賢十聖一切諸菩薩、惟願運夭人於掌内、安法界於毛端、齊馭四足之靈鵬、俱騁六通神驥、不見相而見、不來相而來、降此道場、入温室浴。」次請山中宴坐、獨覺大人、言下證眞、四果高士、及向趣聖僧、賓頭上座等、惟願空中振錫、戲六神通、雲内持瓶、具十八變、發波斯之正信、伏勞度之邪心、及此現前和合大衆、百千臘已下、乃至無臘、並入温室浴。」次請弘慈本誓、誓度四生、方便善權、權形六道、隨聲卽至、如影赴身、不念卽彰、不請之友、並入温室浴。」次請三界天衆、四海龍王、八部鬼神、一切含識、有形之類、蠕動之流、並入温室浴。

⑤　又南海寄歸傳 [四ノ一丈]、出灌沐尊儀法。

（馬場道隆）

【九八五】焚疏

①忠曰、日本禪林修正滿散、解夏滿散、焚疏及經馬紙錢、在諷經後、而諸清規未錄此。化紙錢、見錢財類。

②大慧 [普説三ノ七十二丈〇武庫二丈] 爲孟宗丞普説云、本朝仁宗皇帝時、京師有言法華者、不知從何所來、常行闤闠中、飲啖無所擇、道俗莫能凡聖之。」時呂文靖公作相、欲驗其眞僞、遂焚疏、請明日就府第齋、言公如期果至、文靖遂釋所疑。

（馬場道隆）

【九八六】跪爐

①敕修清規 [上一ノ廿丈] 聖節云、兩序分班對立、住持就跪、知客跪進手爐、侍者跪進香合、維那白佛宣疏畢、知客跪接爐、住持收坐具。

②備用清規 [一ノ二丈] 聖節云、或住持、受州懸關請、上首知事、偏位跪爐、庫司客頭、跪進手爐、復跪接爐、庫司茶頭跪進香合。　又如来降誕 [一ノ六丈] 云、如或住持它緣、首座偏位跪爐、聖僧侍者、堂司庫子、跪進手爐香合、方丈侍者亦得、爲法重也、古宿公論唯佛祖忌、當首座代住持、爲傳法故、聖節知事代、爲山門也、大慧笑翁皆行之。

③　舊説 [敕鈔一ノ廿四丈冠考] 曰、聖節、知事代住持跪爐、由山門設供矣、若三佛二祖、率衆財設供、則首座代住持、偏位跪爐、聖僧侍者、進手爐、庫司行者、進香合。」如今日本、三佛二祖、山門設供、而住持不在、則須都寺偏位跪爐也。

④　忠曰、備用重法、故首座代住持。」舊説則衆財設供、非由山門、故首座代焉。」若依備用意、則三佛二祖、雖山門設供、須首座代住持也。」又按備用言知事代、爲山門也者、謂聖節事、係山門世諦也、非謂爲山門設供、舊説庶於野矣。

⑤敕修清規 [下二ノ五丈] 楞嚴會云、原夫大衆拜、與住持跪爐宣疏者、以祝聖壽、報佛恩、當嚴其禮、以示特重。

⑥僧史畧 [中ノ卅一丈] 云、據寄歸傳中曰、焚香胡跪、歎佛相好、合是導師胡跪爾。　胡跪法、詳禮則類。

⑦ 忠曰、跪爐、亦見世禮。　戒環法華要解〔二ノ四十五丈〕云、偏右肉袒、示降志尊法、右膝虔跪、示屈節致欽也、袒跪、不唯西竺之禮、此方春秋、鄭伯肉袒降楚、示爲臣僕、及禱則跪爐、祭則跪奠、皆致欽也。

⑧ 宋史〔志七十六ノ廿五丈〕禮志忌日云、命行香羣臣、班殿下、宰相一員、升殿跪爐、而罷通揖。　又〔廿六丈〕云、宰相執政官、分左右、行香訖、執笏俱復位、次引班首升殿、詣香案前俛伏跪、搢笏執爐、俟讀疏畢、執笏俛伏、興降階復位、又再拜退。

（馬場道隆）

【九八七】出班上香

① 敕修清規〔上一ノ廿丈〕聖節云、行者鳴鈸、維那轉身爐前、揖住持上香、燒香侍者、捧香合、次東堂西堂、出班上香、次兩序對出、向佛問訊、上香畢、兩兩相朝、轉身歸位、大衆同展三拜。　又〔下一ノ廿丈〕兩序出班上香云、凡出班上香、行者鳴鈸、維那出爐前、向外偏立、揖住持上香。侍者捧合次揖兩序、相朝而出、轉身問訊住持、謂之借香、然後上香。」若聖節、佛祖、嗣法師忌、無借香問訊、有立班西堂、當先上香、或謂首座已出世、當先上香者非、蓋必與都寺、同出班故也。

② 忠曰、出班燒香、亦見世禮、宋史所謂、宰相執政官、分左右行香、止此是也、見跪爐處。

（馬場道隆）

【九八八】揖班上香

① 卽出班上香也。

② 敕修清規〔上一ノ廿七丈〕佛降誕会云、維那揖班上香。

（馬場道隆）

【九八九】放生

① 佛祖統紀〔卅四ノ十五丈〕云、放生光明經、述流水長者救魚、十千天子報德、此緣起也。」智者買斷簟梁、悉罷江上採捕、此立法也。赴計詡獄中之難、報修禪堂上之恩、此顯驗也、〈此三事並見智者紀〉。唐肅宗乾元二年、詔天下、置放生池、凡八十一所、〈顏真卿爲碑〉、本朝眞宗天禧元年、詔復天下放生池、沿江淮州郡、上下水五里、並禁採捕、〈二事詳見通塞志〉慈雲奏西湖爲放生池、以四月八日會郡人、縱魚鳥。」法智於南湖、以佛生日、放魚鳥、祝聖人壽。樞密劉均、奉敕撰碑、此皆放生之梗槩也。

② 釋門正統〔三ノ卅八丈〕曰、復次精舍所踞、號曰仁祠、式警羣迷、聿形悲濟、於彼坊佐、或臨江湖川澤沼隄防之處、多有因高就下、普化博施、捐以爲放生池者、濫觴雖非於眞經、滲漉實推於佛隴自天台海曲、買滬梁之地、綿亘三百里、敷奏王家、全宥潛蟄、因艸菴曰、海上漁人、截流一網、巨尾纖鱗、皆爲所有、一日何止萬死耶、智者嘗刱放生池於海涯、當其放之也、則爲授歸戒、說大法、然後縱之海中、圉圉洋洋、得其所也、而不知日活幾千萬億乎、智者没至唐末、中國台道漸息、而海東諸國極熾、忠法師謂、智者緣在此方、而道敷于海東者、此必放生諸魚所致耳、聞者莫不笑之。」以余觀之、其語若誕、教理有憑、流水十千天子、卽脫魚報、豈非比乎、中興以來、祥開延慶、化廣葛川、金塘大堤、歌於劉禮部之頌、潽潯淥浦、酬於王丞相之恩、故教行錄金園集、各有放生儀軌、鱗番疊

幅、率土化之、佛生之旦、衆大和會、浮泛綵鐲、演唱竺墳、悟流水勝因、識啣珠善報者、舉袂揚塵、揮汗成雨、固不待於百年、而後勝殘去殺也、況動以祝聖爲名、則憂國愛君、顧不韙歟。　又利生志〔四ノ二丈巳下〕中廣説、文繁不錄。

③　放生事、在外典。　列子〔八ノ十二丈〕説符篇云、邯鄲之民、以正月之旦、獻鳩於簡子、簡子大悦、厚賞之、客問其故、簡子曰、正旦放生、示有恩也、客曰、民知君之欲放之、競而捕之、死者衆矣、君如欲生之、不若禁民勿捕、捕而放之、恩過不相補矣、簡子曰然。

（馬場道隆）

○諷唱類

【九九〇】諷經

①敕修清規〔上一ノ廿五丈〕祈祷云、鳴鐘集衆諷經。

②　南禪規式〔上ノ八十三丈〕夏中罰不赴諷經者法云、籤書衆僧雙字名實筒。每日勤行時、堂司行者置籤筒於佛前、諷經畢、住持指筒。堂司行者取筒振掉三、而至住持前、維那出班、至住持右邊、住持抽籤度之、維那接之、呼所書名三度。若無答者則知不赴乃以籤度聽叫。不赴人、上方丈乞籤。若懈及數回則住持小片紙書罰金式貼佛殿柱。罰金壹片、懈者納之方丈。

【九九一】六諷經

①忠曰、每月兩回、六諷經謂、初二日土地、初三日祖師、初四日火德、初五日韋天、初六日普菴、初七日晩鐘守。自十六日至二十一日、亦如上次第矣。其初二及十六土地諷經見幻住清規。自餘未得中華書所載。又未知此方何人肇製也。

【九九二】二日、十六日、土地諷經

①幻住清規〔三丈〇廿九丈有回向文〕云、每月初二十六是衆聖衞會之辰、常住營備香華燈燭茶果珍羞、就土地堂鋪設供養、大衆諷楞嚴咒。

②興禪護國論〔下ノ十丈〕云、土地神事謂每月初二、十六兩日、諸神法施、隨處不同。

③　忠曰、禪林土地諷經用此日而榮西時已立規焉。

【九九三】每日三時諷經

①忠曰、每日粥罷、齋罷、放參罷、此三時上殿諷經也。蓋粥前坐禪不可諷經、齋前亦坐禪不可諷經。故敕修清規亡僧云、齋粥殿堂諷經罷、及放參罷、首座領衆至龕前、維那擧大悲呪。

②備用清規日用清規云、食訖槌一下、住持下地。次第挂鉢出堂、上殿諷經。

③祖庭事苑〔八ノ十三丈〕云、日晡念誦、謂之晩參。〈詳小參處〉

④無住雜談集〔九ノ十丈〕云、東福開山〈聖一〉常令衆早朝誦楞嚴咒、日中諷尊勝陀羅尼。渡宋僧啓曰、若依宋地規則此山、事行多矣。師曰、宋地僧專修坐禪、四時坐禪外、更有常坐

者。故事行少矣。如日本僧、疎于定坐若不修誦咒、何以消信施、或修禪如宋七則止諷誦亦可也。尊勝咒功德、消信施、見于其經。

⑤夢窓國師夢中問答集［上ノ卅丈］云、唐土禪院、每朝粥後、唯誦大悲咒一遍耳。蓋坐爲急務故。若誦楞嚴咒名爲楞嚴會、亦是近代始起。然但於夏中矣。每晩誦楞嚴咒名放參者、日本始行。如唐土放參、別有規矩。建長寺本無日中諷經。弘安年中、有蒙古襲我之流言、日中始誦普門品以祷寧謐、自此爲永式、遂成朝中暮三時勤行。雖非宗意、慣習既舊。後代長老、不得停罷焉。雖然未世僧、多懶惰不勤禪坐、苟有此輩則徒略諷誦無益。且當負彼重世法好祈禳檀主之意。故禪院不可缺三時諷經。其回向意、專祈天下太平、檀信安隱耳矣。

⑥　拔遂和尚［中ノ十八丈］和泥合水云、教家未聞有誦經咒成佛道之理。況乎禪宗。若依看經成佛則世尊用六年端坐爲什麼。何禪録載事三時勤行耶。原之日本弘安年中、有蒙古襲我之説。時官家、令佛寺行祈祷、此爲濫觴矣。山僧熟思、者般實非祈祷、却是佛法王法、衰替因縁也。其故何。謂若不爲如此勤行、乃至俗學文筆費時日、直從出家本志、放下一切、單單以坐禪行道爲專要、扶竪教外別傳宗猷則應當佛法王法繁興師檀同游戯解脱大海。然則諸神加擁護、天龍生欣悦、魔外悉屈状矣。現當二世祈祷、何以加焉。

⑦　忠曰、朝午諷經、敕修亡僧章、可以爲證。晡時諷經、事苑文可以爲證。然則中華亦有三時諷經。夢窓所議、蓋在日本以此爲專行、不務坐禪乎。

【九九四】日中諷經

①忠曰、中華齋罷諷經可在日中。見三時諷經處。如日本日中諷經正在齋前。

②義堂日工集［三ノ七十二丈］云、府君赴西芳精舍、臨齋君就于僧堂、聽衆僧誦金剛經云、每寺如是乎。余曰、日本號日中諷經者、昔爲外國敵來襲建長寺始誦法華普門品、爾來每寺、或誦金剛法華圓覺等經。今天龍臨川等、則以南禪爲準、等持則讀圓覺經。君信心增發、形於面貌。

【九九五】半齋諷經

①舊説［敕鈔三ノ廿四丈○又九ノ十六丈］曰、早粥已過、午齋未及、在其中間諷經。故曰半齋諷經。又見節時類半齋處。

②敕修清規［上一ノ卅四丈］達磨忌云、堂司行者覆。來日半齋、各具威儀散忌諷經。

【九九六】臨齋諷經

①舊説［敕鈔三ノ廿四丈］曰、祖師半齋諷經亡者、臨齋諷經。臨齋者、臨午齋之時也。又見節時類臨齋處。

【九九七】結縁諷經

①敕修清規［上一ノ卅八丈］開山歴代祖忌云、或郷人、或江湖、擧咒。解者［敕鈔三ノ卅三丈］曰、結縁諷經也。

【九九八】念誦

①覺苑大日經演密鈔［五ノ十七丈○谷響二ノ十六丈］云、梵語瞿醯、此云念誦。

②　忠曰、今禪林念誦、謂十佛名也。　三八日念誦見節時類三八日處。

③　敕修清規［上二ノ七丈］念誦云、維那先離位至門首向住持立、合掌念誦、上八中八。〈云云〉下八云、白大衆、如來大師入般涅槃、至今大元重紀至元元年、已得二千二百八十四載。是日已過、命亦隨減、如少水魚。斯有何樂。衆等當勤精進、如救頭然。但念無常、愼勿放逸。伽藍土地護法護人、十方檀那增福增慧。爲如上緣念。清淨法身、十號云云。

④　忠竊按、下八念誦本於西竺法。何以知之。中論〈一末ノ廿丈〉吉藏疏云、外國祇洹精舍銘、出在古涅槃經後。載之云、佛正千年、像法千年、末法萬年。天竺朝夕衆中恒唱此事云、佛法若千年已過、佛法欲滅、老死至近。宜須精進。

⑤每日念誦、於食時念之。　大鑑小清規維那須知法曰、凡齋粥二時、僧堂念十佛。〈云云〉先出聲念逐日小回向。滿堂聞回向聲。次大出聲念會十佛名。多有維那、不依唐僧說、堅執日本古例、不念小回向。〈云云、逐日回向如彼文繁不録〉

⑥　傳燈録［十ノ廿四丈］甘贄行者章云、於南泉設粥云、謂和尚念誦。南泉云、甘贄行者設粥、請大衆、爲貍奴白牯念、摩訶般若波羅蜜。甘乃禮拜便出去。南泉却到厨内、打破鍋子。

【九九九】十佛名

①舊說［勅鈔八ノ四十丈〇六ノ廿四丈］曰、凡十念之稱、可通一切佛號。然道安所制、食時十念、特稱爲十念矣。即今十佛名也。十是存大數。實佛名不到十。或復除阿彌陀大勢至、拘十句之數、非也。釋迦是穢土佛、文殊普賢其弟子而表理行。彌陀是淨土佛、觀音勢至其弟子而表悲智。此六名、淨穢相待而標擧。已取伴之觀音。豈可去主之彌陀耶。凡釋迦現穢國、教衆生、厭此求彼。彌陀居淨邦、迎衆生接取不捨。此謂遣迎矣。而今之揀意、亦在此。故彌陀勢至、不可除也。又彌勒是穢土東宮、觀音勢至、是淨土東宮也。若然則可配于何位次。偶覽一書、彌勒次云、極樂世界阿彌陀佛、又觀音次云、大智勢至菩薩。吳尅己所録釋道安食時念三寶列次、亦同此。〈吳尅己編釋門正統、今本宗鑑述。多資彼〉。釋門正統［四ノ廿六丈］云、佛圖澄有弟子、曰道安。令僧食時念佛、取法、報、見未、攝攝、及二土四大弟子。爲十聲。餘爲結句也。或者昧之、溺於數、而欠其所念、過矣。

②　忠曰。法報可知。見現在釋迦、未來彌勒、二土娑婆極樂、四大弟子彼土觀音勢至、此土文殊普賢也。攝攝者何。舊說曰、彌陀是攝取不捨之佛、故云攝也。次攝、總攝義、謂十方三世一切諸佛也。

③東福雲章慶和尚、製十佛科圖、自述意曰、十佛名、古來諸祖、未檢得本據、明國亦無明答者。予頃於道安法師傳得之。仍作科線如左。

④總念――稽首薄伽婆。圓滿修多羅。大乘菩薩衆。功德難思議。〈忠曰、上三句、如次佛法僧〉。

法

清淨法身毘盧遮那佛

別

報

圓滿修多羅盧舍那佛

本師
千百億化身釋迦牟尼佛
佛
應此土
補處當來下生彌勒尊佛
他土西方無量壽佛
總十方三世一切諸佛
此土弟子
理
大聖文殊師利菩薩
別念
別
行
大乘普賢菩薩
僧
他土弟子悲
大悲觀世菩薩
智大智勢至菩薩
總諸尊菩薩摩訶薩

法摩訶般若波羅蜜

⑤　忠曰、彌陀報身。科何爲應身。謂勝應身也。復觀音補處乎樂土。〈見觀音授記經〉則彌陀當入

涅槃。入涅槃之佛、豈非應身耶。又文殊言大聖者、華嚴演義鈔［四十五ノ廿四丈］云、言大聖者、即文殊也。不指其名、直言大聖。今山中稱念、但云大聖菩薩、即舉總稱。別指吉祥耳。〈忠曰、山中者、謂五臺山也〉。

⑥　又曰、毘盧遮那、此云徧一切處。盧舍那、此云光明徧照。又翻淨滿。釋迦牟尼此云能仁寂黙。〈翻譯集〉

⑦忠曰、律苑事規［二ノ三丈］載佛名、十方三世一切諸佛下、加大小兩乘毘尼戒藏、一切法寶。大勢至菩薩下、加十方三世諸大菩薩、南山聖師菩薩、大智律師菩薩、西天此土傳法祖師、聲聞緣覺、得道眞僧、而無諸尊菩薩已下兩句。蓋以古來十佛名、無己宗祖名、所依法名、爲闕典矣。

⑧又曰、永平清規［又正眼七十五ノ十丈］赴粥飯法［六丈］、舉之、加大乘妙法蓮華經一句。古東福寺十佛名、岐陽和尚、勢至下、加聖一國師。

⑨　忠曰。十佛名［古鈔八ノ四十丈］、每日粥飯二時、唱之。道安云、令僧食時念佛。〈止此〉。已言食時、則粥時飯時、應皆念也。

【一〇〇〇】五觀

①日用軌範［勅修下一ノ四十八丈］展鉢法云、作五觀想念云、一計功多少量彼來處。二自忖己德行全缺應供。三防心離過貪等爲宗。四正事良藥爲療形枯。五爲成道業故應受此食。

②　忠曰。此全依釋氏要覽［上ノ六十三丈］所載、而要覽不言出處。行事鈔［下二ノ三ノ卅一丈］對施興治篇云、約食時立觀、以開心道、略作五門。明了論如此分之。

③行事鈔［中三之三ノ十六丈］隨戒釋相篇云、食須觀門五別。一計功多少量彼來處。二自忖己德行全缺多減。三防心顯過不過三毒。四正事良藥取濟形苦。五爲成道業世報非意。　又對施興治篇［下二之三ノ卅一丈］云、初計功多少量他來處。智論云、思惟此食、墾植耘除、收穫蹂治、舂磨洮沙、炊煮乃成。用功甚多。計一鉢之食、作夫流汗、集合量之、食少汗多。須臾變惡。我若貧心、當墮地獄。噉燒鐵丸、從地獄出、作諸畜生、償其宿債、或作猪狗、常噉糞除。故於食中、應生猒想。僧祇云、告諸比丘、計此一粒米。用百功乃成。奪其妻子之分、求福。故施。云何棄之。二自忖己身德行。毘尼母云、若不坐禪誦經、不營佛法僧事、受人信施、爲施所墮。若無三業、知故而施、俱爲施墮。比丘強飽食施主食、憍慢意。或自食己食、強飽過分、爲施所墮。以其食、亦從施主得故。何以故。佛長夜中、常嘆最後限食。〈謂末後減口食〉施持戒者、能受能消。施持戒、果報大、破戒果報少。〈如是呵責、如上律文〉足食已、更強食者、不加色力、但增其患故。不應無度食。三防心離過明了論疏云、律中說、出家人受食、先須觀食、後方得噉。凡食有三種、上食起貧、應離四事。一喜樂過。貧著香味、身心安樂、縱情取適故。二離食醉過。食竟身心力強、不計於他故。三離求好顏色過。食畢樂於光悅勝常。不須此心。四離求莊嚴身過。食者、樂得充滿肥圓故。二者下食、便生嫌瞋。多墮餓鬼、永不見食。三者中膳、不分心眼。多起癡捨。死墮畜生中、作諸噉糞樂糞等蟲。初貪重故、並入地獄。且略如此。反此三毒、成三善根、生三善道。謂無貪故生諸天。中下二可知。四正事良藥。觀分二。爲除故病、饑渴不治、交癈道業。不生新病、食飲減約、宿食消滅。又以二事爲譬。初如油膏車。但得轉載。焉問油之美惡。二欲度險道、有子既死。

饑躬餓急、便食子肉。必無貪味。五爲成道業觀、三種。一爲令身久住故、欲界之身、必假搏食。若無、不得久住。道緣無託故。二爲相續壽命、假此報身假命、成法身慧命故。三爲修戒定慧、伏滅煩惱故。持世云、若不除我倒、此是外道。不聽受人一杯之水。佛藏亦爾。必厭我倒、於納衣麤食、不應生著。

④佛藏經［四ノ八丈］云、舍利弗、乞食比丘、乞食得己、心無染汚、持所得食。從聚落出、在淨水邊。可修道處、置食一面。洗脚而坐、以食著前、應生厭離想、不淨想、屎尿想、臭爛想、變吐想、壁瘡想、厭惡想、子肉想、臭果想、沈重想。又於身中、應生死想、青想、脹想、爛壞想。舍利弗、比丘應生如是想。以無貧著心然後乃食。但以支身除飢渴病、令得修道。應作是念。我食此食破先苦惱、不生後苦。心得快樂、調適無患、身體輕便、行步安穩。又念。食此食已、我應當得須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、無生法忍。舍利弗比丘、如是食者、我聽乞食。舍利弗、若乞食比丘、於所得食、生貧味心、以爲甘美、而作是念。我食此食、當得好色氣力充盛。不作是念、我食此食勤行聖道。如是比丘、我乃不聽受一飲水、何況飲食。含利弗、若於食中、不見過惡、不見出道、而便食者、寧自以手割股肉噉。何以故。我聽行者得者、受他供養。不聽餘人。〈經廣說行者得者相、大意、謂行道者、得道者〉

⑤忠曰、此經文中、有五觀中、後四觀意。第一觀、依智度論意。又第二觀、所謂德行、乃佛藏得者行者也。德者得也。

⑥瑜伽師地論［九十九ノ十丈］云、若飲食時、常當安住爲療病想。

【一〇〇一】呪願

①舊說［勅鈔八ノ八丈］曰、齋粥呪願、前堂首座唱之。粥時呪願云、粥有十利。饒益行人、果報無邊、究竟常樂。齋時呪願云、三德六味、施佛及僧、法界有情、普同供養。

②南本涅槃經［一ノ廿二丈］云、其食甘美有六種味。一苦、二醋、三甘、四辛、五鹹、六淡。復有三德。一者輕軟、二者淨潔、三者如法。〈粥十利、見飲噉類〉

③增壹阿含經［廿九ノ十二丈］云、世尊、告諸比丘。呪願有六德。施主檀越、成就三法、信根成就、戒德成就、聞成就。

⑥施物復成三法。物色成就、味成就、香成就。

⑦忠曰、物色、味、香、是呪願六德中、三法。亦可稱三德。

⑧禪苑清規［一ノ九丈○勅鈔八ノ四十三丈引］赴粥飯云、十聲佛罷、良久打槌一下、首座施食。粥云、粥有十利。饒益行人、果報生天、究竟常樂。又云、粥是大良藥。能除饑渴消、施受獲清涼、共成無上道。齋云、三德六味。施佛及僧、法界人天、普同供養。饋飯云、施者受者、俱獲五常。色力命安、得無礙辨。已上、竝引聲高喝也。南禪規式［上ノ八十九丈］云、僧堂粥齋呪願、第一座唱之。若闕則書記、或藏主、代之。後堂首座、必不得代之、在後堂故。

⑨釋氏要覽［上ノ六十九丈○珠林五十五ノ十二丈］云、十誦律云、佛言、應爲施主、種種讚歎呪願。若上座不能、即次座能者作。

⑩舊說［勅鈔序ノ八丈］曰、凡喫食、每三口呪願。此名三口呪願。蓋爲防雜念。然機劣不堪、故但於初三口而已。

⑪釋氏要覽［上ノ六十三丈］云、摩德伽論云、若得食時、口口作念。凡食限三匙爲一口。第一匙、默云、願斷一切惡。第二匙云、願修一切善。第三匙云、所修善根、廻向衆生、普

共成佛。〈準論、須口口作念。若省繁但初口三匙、總念亦得〉。

⑫ 僧史略［中ノ卅一丈］云、西城上座、凡赴請咒願曰、二足常安、四足亦安、一切時中、皆吉祥等。以悅可檀越之心也。

⒀ 忠曰、一切事緣、皆可咒願。如華嚴淨行品［十四］、又法苑珠林［五十五ノ十二丈］受請篇、行事鈔［下三之三ノ十二丈已下］訃請設則篇、廣明咒願。無住和尚雜談集［五ノ十七丈］亦詳說。

【一〇〇二】唱食

①食時咒願［敕鈔十五ノ六丈］曰唱食。謂唱食之咒願也。或作喝食非也。〈喝食見叢軌類〉

②敕修清規［下一ノ六丈］維那云、俟首座唱食至第三句將畢、轉身退、至立僧板頭立。

③備用清規［七ノ七丈］維那云、首座唱食至有無字、朝龕轉身、退立板頭。

④敕修清規［下一ノ二丈］後堂首座云、如欠前堂、住持別日上堂、白衆、請轉前板、挿單唱食。　又法器章［下二ノ廿丈］椎云、齋粥二時、僧堂內、開鉢念佛、唱食遍食、施財白衆、皆鳴之。

【一〇〇三】施食

①唱食又名施食。與施餓鬼食不同。〈施餓鬼食、見喪薦類〉

②禪苑清規［敕鈔八ノ四十三丈］云、首座施食、粥有十利。〈云云〉齋云、三德六味。〈云云〉施食訖、行者喝食入。〈詳咒願處〉

③傳燈録［十二ノ廿八丈］睦州刺史陳操章云、一日齋僧、自行食次、曰上座施食、上座曰、三德六味、陳曰錯、上座無對。

【一〇〇四】施財

①禪苑清規［一ノ九丈○敕鈔八ノ四十四丈］赴粥飯云、維那打槌一下、首座施財、喝云、財法二施、等無差別、檀波羅蜜、具足圓滿。庫頭或維那、次第行嚫、輕手放僧前單上。意在恭敬。衆僧合掌受嚫、不得服顱。及不得將嚫錢、擲被位、作聲。齋畢收之。

②敕修清規［下一ノ六丈］維那云、若施主齋僧行嚫、徧食椎後、從聖僧僧後、轉左邊朝首座問訊、復鳴椎一下而出、爲請施財也。

③ 資持記［会本下三ノ三ノ廿五丈］云、達嚫、梵言、此翻財施。世謂以財襯食故名嚫者、不識華梵。又召說法、爲施財者並非。〈詳錢財門達嚫處〉

④ 聯燈會要［六ノ卅一丈○傳灯十ノ廿三丈異］甘贄行者章云、甘到南泉設粥。時黃檗爲第一座。甘云、請施財。檗云、財法二施、等無差別。甘舁錢出去。須臾復云、請施財。檗復云、財法二施、等無差別。甘便行錢。

【一〇〇五】懺法

①釋氏資鑑［四ノ二丈○天監二年］云、梁武帝妃郗氏有三女。帝爲雍州刺史而妃薨。其性酷妬、至是化爲巨蛇、入于後宮、通夢于帝求功德拯拔離苦。帝閲大藏、製慈悲懺法、請僧禮佛懺罪、尋化爲天人。於空中謝帝、功德已得生天。帝畢世、不復議郗立后。

② 南史［十二ノ二丈］云、武德郗皇后、諱徽、齊建爾末、嬪于武帝。及武帝爲雍州刺史、殂于襄陽官舍。年三十二。及武帝踐祚追崇爲皇后。諡曰德。后酷妬忌、及終化能龍入于後宮、通夢於帝、或見形、光彩照灼、帝體將不安。龍輒激水騰涌、於露井上爲殿、衣服委積、

常置銀鹿盧金瓶。灌百味以祀之。故帝卒不置后。

③歷代三寶紀［十二ノ廿四丈］大隋録云、文帝開皇元年七月制曰、伏惟太祖武元皇帝、間關二代造我帝基。追仰神猷事冥眞寂。思欲崇樹寶刹、經始伽藍、增長福因、徽副幽旨、其襄陽隋郡江陵晉陽、並宜立寺一所、建碑頌德。庶使莊嚴寶坊坊、比虛空而不壞、導揚茂實、同天地以久長。所以每年至國忌日、癈務設齋、造像行道、八關懺悔、資神靈。

④　忠曰、懺悔法、追薦先亡。梁隋時已見焉。

⑤神僧傳［八ノ廿七丈］云、悟達國師知玄與一僧邂逅京師。時僧患迦摩羅疾、人莫知其異也、厭惡之。知玄視候無倦色、後別。僧謂知玄曰、子後有難。可往西蜀彭州茶隴山相尋。有二松爲誌。後知玄居安國寺、懿宗親臨法席、賜沈香爲座。恩渥甚厚、膝生入面瘡、眉目口齒俱備。每以飲食餧之、則開口呑啖、與人無異、求醬莫效。因憶舊言、乃山相尋、見二松於煙雲間。信所約不誣、即趨其處、佛寺煥儼。僧立于山陰、顧接甚歡、天晚止宿。知玄以所苦告之、曰無傷也。山有泉、且濯之即愈。黎明童子、引至泉所方掬水間、瘡忽人語曰、未可洗。公曾讀西漢書不。曰、曾讀。既曾讀之、寧不知袁盎殺晁錯乎。公即袁盎、吾晁錯也。錯腰斬東市、其冤何如哉。累世求報於公、而公十世爲僧、戒律精嚴、報不得其便。今汝受賜過奢、名利心起。故能害之。蒙迦諾迦尊者、洗我以三昧法水、自此不復爲冤矣。時知玄魂不住體、急掬水洗水。其痛徹髓絶而復蘇。其瘡亦施愈、回顧寺宇、莽不復見。因卓菴其處、遂成大寺。知玄感其異、思積世之冤冤。非遇聖賢、何由得釋。因述懺法三卷。蓋取三昧水、洗冤業之義、名曰水懺。

⑥　釋氏稽古略［三ノ四十九丈］云、匡宗大德、諱知玄、姓陳氏。咸通四年、制署號悟達國師、總教門事。十二月五日、帝幸安國寺、賜師沈香裝飾寶座。高二丈餘、珍麗絶甚。僖宗中和二年、駕幸蜀、避黄巣至成都。遣御史郭遵、齎璽書、召師赴行在。次年師自成都行宮辭、還九隴山。一珠隆起于左股楚甚。是曰入面瘡。邁異僧、引水洗瘡、知爲晁錯袁盎冤對也。今之水懺三卷者、縁起於師也。師亦自知時謝、右脇安然而逝。師三學洞貫、名蓋一時世稱陳菩薩。

【一〇〇六】圓通懺法

①六學僧傳［三ノ十七丈〇唐僧傳廿一ノ十六丈］隋智顗傳云、永陽王伯智、出撫吳闘、就山受戒、且建方等懺法。七日夜、在郡晝治事。夜習觀。顗一日、謂門人智越曰、吾欲勸王修福禳灾。越以爲王已勤於進道。若更有所言、不知者、以爲佞也。乃止。俄王出獵、墮馬幾絶。顗爲率衆作觀音懺法、因而起、凭几坐。見僧擎鑪進尉問王。時王流汗未知所答。僧乃繞王一匝、痛遂止。　〈續高僧傳［廿一ノ十六丈］載。今愛文簡明故引六學〉

②清拙澄禪師［日本一ノ十六丈］圓覺録上堂云、元正五日、或演唐音修禮圓通懺法而作佛事、或出日本音唱念法華懺法而作佛事。　又［三］日本録鐵菴和尚七周忌陞座云、賢弟子、出家在家、同心竭力、修建報恩佛事、看讀五部大乘尊經、修禮圓通懺法。

③愚中及禪師［四丈］年譜云、曆應四年秋、發博多冬到明州。船中水盡數日、師與同志修圓通懺摩法以祈雨水。密雲忽布、大雨滂注。船中數百人飲之得活。

④　臥雲日件録［下ノ卅八丈］云、誠中住相國時、林光院某爲衣鉢侍者。一日勝定相公來聽懺法於方丈、及懺悔文畢、俄起到茶堂、召林光某曰、長老不唱懺雪罪愆增延福壽之語耶。明日懺法宜唱之。蓋等爲法界之等字下有此八字、或唱或否。相公試來聽。果不唱。故告之而已。相公以叢林爲念、至細鎖如下此。

【一〇〇七】轉經會

①臥雲日件録［上ノ五十五丈］云、寶德二年庚午九月、天龍寺夢窓國師一百年忌、修轉經會。曰、廿九日早晨、聞轉經鐘、衆集雲居、伶人作舞、六長老鳴鐃。一長老唱摩訶般若波羅蜜多、景南引衆行道、衆各手把一卷經、自雲居出天龍總門到三會院。院内及臨川諸堂、諸廊行道旋繞、無不到處。却出經舊路、復到雲居門外。導師未及一匝、而行道纔畢。

② 傳燈録［九ノ廿一丈］薦福弘辯禪師章云、唐宣宗問曰、禪師既會祖意。還禮佛傳經否。對曰、沙門釋子、禮佛轉經。蓋是住持常法、有四報焉。然依佛戒修身、參尋知識、漸修梵行、履踐如來所行之迹。

③ 碧巖録［十ノ十七丈］云、古人道、手不執經卷、常轉如是經。〈法華經玄義云、如此解字、手不執卷、常是讀經、口無言聲遍誦衆典〉

【一〇〇八】轉藏

①忠曰、轉讀大藏經也。蓋轉藏與看藏不同。看者每行閲過、自首徹尾。轉者唯讀每卷初中後數行而已。〈初七行、中五行、後三行〉

②敕修清規［上一ノ廿三丈］旦望藏殿祝讚云、旦望古來轉藏祝壽。今則必先侵晨登殿、御座前祝讚。於禮爲恭。

【一〇〇九】圓覺會

①北礀續集［十一丈］云、圓覺會首求頌、頌曰、大圓覺海勝伽藍、七佛之師、首發譚。引得上乘菩薩子、大光明藏作同參。

②無門開禪師録［下ノ廿一丈］圓覺會頌云、十二獸郎欲決疑。瞿曇嚼飯餧嬰兒。若教知有衲僧事、終不人前鼓口皮。

【一〇一〇】華嚴會

①曹源生禪師録［十丈］散華嚴會上堂云、一多相入、理事圓融、一門通貫一切門、一法徧含一切法。〈云云〉

②大慧杲和尚［六十一丈］年譜云、孝宗隆興元年、師七十五歲。〈時住徑山〉出衣盂、命闔山清衆、閲華嚴經七百餘部、用祝兩宮聖壽、保國康民。

【一〇一一】讀法華千部

①竺仙仙禪師南禪録［二ノ廿九丈］左武衛將軍源公爲乃母二品太夫人請。普説云、左武衛將軍爲二品太夫人眞歸以來、不知已作多功德了也。今常五七之辰、只於昨日一日之間、命諸山僧衆、同時看誦妙法蓮華經一十千部。

【一〇一二】讀大般若經

義堂日工集［三ノ廿六丈］云、康暦三年、二月四日、率衆就于上府、眞讀大般若、祈祷府君疱瘡平安。

【一〇一三】轉大般若經

①忠曰、轉讀法、見轉藏處。轉讀般若、見蘇悉地經。
②蘇悉地羯羅經［中ノ廿八丈］、成就具支法品云、猶不成者、常作此法、決定成就。所謂乞食精勤念誦、發大恭敬、巡八聖跡、禮拜行道。或復轉讀大般若經七遍、或一百遍。
③梁高僧傳［十三ノ廿三丈］慧皎論云、天竺方俗、凡是歌詠法言、皆稱爲唄。至於此土詠經則稱爲轉讀。歌讚則號爲梵音。

【一〇一四】藥師號
①敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云、如官員入山拈香、鳴鐘集衆諷無量壽咒、擧藥師號。
②義堂日工集［三ノ八丈］云、康暦二年〈時住建仁〉五月十三日、府君入山入佛殿、炷香三拜。余送歸特榻、乃燒香、歸知事班首、與官榻對立。行者鳴磬、眞珠西堂擧唱藥師如來。侑藝正仁二僧和之。維那擧大悲咒、余炷香三拜、回向畢、余引君入方丈而點心。〈詳圖牌門接官牌〉
③臥雲日件録［下ノ五丈］云、普明國師、住南禪日、以藥師如來聲明廢絶、及五十年、欲復興立。擇山中能音者五十人習之。皆不稱國師意、時誠中爲書狀勤舊在方丈、國師命之、一唱得其妙。遂與梅靖梅隱同唱之。

【一〇一五】四聖號
①如如居士録［四集二ノ五丈］藏眼語云、清晨請念四佛聖號。　註南無阿彌陀佛、南無觀世音菩薩、南無大勢至菩薩、南無大海菩薩。
②敕修清規［上二ノ卅一丈］尊宿遷化起龕云、山門維那、向内合掌、中立擧往生咒。或四聖號、大衆齋念。　又［下一ノ五十六丈］病僧念誦白贊云、仰憑尊衆念、南無阿彌陀佛、一百聲、觀世音菩薩、大勢至菩薩、清淨大海衆菩薩、各十聲。
③　解者曰、清淨大衆者、總擧西方淨土、諸菩薩也。

【一〇一六】金剛無量壽佛
忠曰、祝聖回向略三寶有金剛無量壽佛。無量壽者阿彌陀翻名。蓋今祝天子壽考、故特擧此佛名、以充佛寶焉。金剛者、堅固義。所以祷皇基鞏固也。又有佛説一切如來金剛壽命陀羅尼經［藏目二ノ廿三丈］不空譯。今祝聖回向、無量壽上、蒙金剛二字。或取此等交乎。

【一〇一七】仁王菩薩
①忠曰、祝聖回向、有仁王菩薩摩訶薩、蓋非定有一人所名、經有仁王護國般若今略三寶、取之、充僧寶矣、又祝聖、所以竊對配今上也。
②仁王護國般若經吉藏疏［一ノ一丈］云、施恩布德故名爲仁。統化自在故名爲王。護國者、仁王是能護、國土是所護、由仁王如法治道、萬民適樂、國土安穩。若仁王望般若、般若是能護。由持般若故、仁王安穩。由人柄法、仁王是能護、般若是所護。今仁王般若、皆是能護、國土是所護。　又［三丈］云、略簡仁王波若位地、名字不同。仁王者、依瓔珞經云、有十四王。一粟散王、十善下品。二習種菩薩、銅輪王。三性種菩薩、銀輪王。四道種菩薩、金輪王。亦名轉輪王。五初地菩薩四天王。六二地菩薩、忉利天王。七三地菩薩、琰魔天王。八四地菩薩、兜率天王。九五地菩薩、化樂天王。十六地菩薩、他化自在天王。十一七地菩薩、初禪王。十二八地菩薩、二禪王。十三九地菩薩、三禪王。十四十

地菩薩、四禪王。今言仁王者、即是十善下品、粟散王。十四王内、最下品也。

【一〇一八】浴佛偈

①敕修清規［上一ノ廿八丈］佛降誕云、維那宣疏畢、擧唱浴佛偈云、我今澠沐諸如來、淨智莊嚴功德聚、五濁衆生令離垢、同證如來淨法身、行道浴佛。

②　忠曰、偈出浴像功德經。唐寶思惟譯、有一卷。瑩山清規［下ノ十二丈］浴佛偈云、稽首大聖薄伽梵、天上天下兩足尊、我等今以功德水、澠浴如來淨法身。〈止此〉未攷出何典。洞家諸利唱此偈。

③佛説浴像功德經［六十三套］云、清淨慧菩薩白佛言、世尊、若佛在世、及滅度後、未來世中、諸衆生等、云何浴像。佛言、不作執空有想。於諸善品、心懷渴仰、不生疲厭。何以故。爲成就如來法報身故。我今爲汝説浴像法、諸供養中、最爲殊勝、應以牛頭栴檀、紫檀、多摩羅香、甘松、芎藭、白檀、鬱金、龍腦、沈香、麝香、丁香、如是等妙香、隨所得者、以爲湯水、置淨器中。先作方壇、敷妙床座、於上置佛、以諸香水、次第浴之、用諸香水訖、復以淨水淋洗。其浴像者、各取少許洗像水、置自頭上。初於像上、下水時、應誦以偈。　我今澠沐諸如來淨智功德莊嚴聚、五濁衆生令離垢、願證如來淨法身。

【一〇一九】啓請

①忠曰、凡諷經前、奉請佛菩薩、此爲啓請。

②敕修清規［下二ノ六丈］楞嚴會云、白佛宣疏畢、楞嚴頭、喝楞嚴衆和。

③　忠曰、喝楞嚴者、即啓請也。謂楞嚴會上諸菩薩之梵音是也。備用清規作佛菩薩。

④備用清規［三ノ一丈］楞嚴會云、楞嚴頭、喝楞嚴會上佛菩薩三聲、衆和。

⑤東漸清規楞嚴會云、維那歸位、向佛宣疏畢、行者鳴磬、楞嚴頭擧啓請衆和。

⑥　忠曰、瑩山清規作啓唱訛矣。

【一〇二〇】序引

①忠曰、楞嚴會啓請後、咒前、念楞嚴經文。

②敕修清規［下二ノ六丈］楞嚴會云、楞嚴頭、喝楞嚴。衆和畢、仍作梵音、唱念經首序引畢、方擧咒。

③備用清規［三ノ一丈］楞嚴會云、楞嚴頭喝楞嚴會上佛菩薩三聲、衆和了、起爾時世尊云。擧咒諷畢。

④　忠曰、爾時世尊、即楞嚴經、咒前文、所謂經首序引也、瑩山東漸、竝名爲佛母、無、如下辨。

⑤序引文［楞嚴七ノ九丈〇瑩山下ノ廿七丈］云、爾時世尊、從肉髻中涌百寶光中涌出千葉寶蓮。有化如來、坐寶華中、頂放十道百寶光明、一一光明、皆徧示現十恆河沙、金剛密迹、擎出持杵、徧虛空界、大衆仰觀、畏愛兼抱、求佛哀祐、一心聽佛無見頂相放光、如來宣説神咒。

【一〇二一】咒心

①忠曰、七月十三日、楞嚴會滿散、誦楞嚴經咒後文、此爲結咒心。

②敕修清規［下二ノ六丈］楞嚴會云、七月十三日、滿散禮同、但楞嚴頭、唱念咒尾之末章。

維那回向而散。

③備用清規［三ノ二丈］楞嚴會云、滿散、楞嚴頭、須結咒心。維那宣疏、禮與啓建同。

忠曰、結咒心者、所謂咒尾末章也。瑩山東漸並名爲佛母、無義如下辨。

④咒心文［楞嚴七ノ廿一丈］云、阿難是佛頂光聚悉怛多、般怛羅、秘密伽陀、微妙章句、出生十方一切諸佛、十方如來、因此咒心。得成無上正徧知覺、十方如來、執此咒心。降伏諸魔、制諸外道、十方如來、乘此咒心。坐寶蓮華、應微塵國、乃至十方如來、傳此咒心。於滅度後、付佛法事、究竟住持、嚴淨戒律、悉得清淨。

⑤忠曰、乃至字、越却經文貳伯字。瑩山清規所載如此。

【一〇二二】摩訶

①忠曰、楞嚴咒尾、唱念摩訶般若波羅蜜是也。

②敕修清規［下二ノ六丈〇東漸一ノ十三丈同］楞嚴會云、咒畢、喝摩訶、衆和畢、維那回向。

【一〇二三】佛母

①敕修清規［上一ノ廿三丈］旦望藏殿祝讚云、鳴鐘集衆、往藏殿、維那擧云、摩訶般若波羅蜜多、〈乃至〉回向云、繞施行道、稱念摩佛母聖號。〈云云〉

②大品般若經云、佛告須菩提、般若波羅蜜、是諸佛母、般若波羅蜜、能示世間相、乃至何以故、是般若波羅蜜、出生諸佛、又云、須菩提白佛言、云何諸佛、從般若波羅蜜生、云何諸佛、説世間相佛告須菩提、是深般若波羅蜜中、生佛十力乃至十八不共法、一切種智、須菩提、得是諸法因緣、故名爲佛。

③仁王般若經［吉疏五ノ十九丈］云、佛告大王、般若波羅蜜、應説應受、是諸佛母、諸菩薩母、神通生處。

④智度論［卅四ノ廿四丈］云、般若波羅蜜、是諸佛母。父母之中、母功最重。是故佛以般若爲母、般舟三昧爲父。

⑤忠曰、敕修清規、念摩訶般若畢、回向、言念摩訶佛母。則佛母是稱般若波羅蜜、明白也。然東漸清規［一ノ十三丈］、瑩山清規［下ノ廿七丈又卅九丈］等［東福清規卅四丈］、指楞嚴咒前序引、咒後咒心、皆名爲佛母。且有何憑據。備用但言、起爾時世尊、又言結咒心。爲經有咒心語也。敕修但言經首序引、咒尾末章。始無名佛母。予謂楞嚴咒尾、唱咒心、次喝摩訶。摩訶是佛母、謬和咒心爲佛母也。是猶可辨。至經序引、稱佛母、則都失義。蓋咒尾楞嚴文、謬稱佛母。以謂楞嚴文在前後者、皆是佛母也。其訛謬有如此者。猶如楞嚴會上諸菩薩、是啓請語。而咒後摩訶般若、亦稱後啓請也。試點檢。摩訶般若、有何啓請義。又咒尾理可奉送、却復啓請、有何事。豈非愚昧可笑者耶。

【一〇二四】開啓

①初開法事場也。

②敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、預於某月某日、啓建金剛無量壽道場、一月日、逐日輪僧上殿、披閲金文、今辰開啓。

【一〇二五】滿散

忠曰、凡建會行法事畢、臨散場諷誦曰滿散。見咒心處。

【一〇二六】散經

①忠曰、轉大藏或某經畢、修滿散佛事也。

②眞淨文禪師録〔古宿四十二ノ十一丈〕檀越散藏經請上堂云、奉佛至孝四郎、及孝眷等、爲先考二郎終七追薦、乃請眞如聖壽二禪衆、開轉大藏經一遍、供僧一千員。斯晨闔郭齋、以用表懺。〈云云〉

③應菴華禪師録〔小參四丈〕檀越散藏經請小參。〈云云〉

【一〇二七】散忌

①修忌法事〔敕鈔三ノ廿三丈〕滿散也。

②敕修清規〔上一ノ卅四丈〕達磨忌云、堂司行者、報衆、掛諷經牌。當晩諷經。并覆來日半齋、各具威儀、散忌諷經。

【一〇二八】普回向

①敕修清規〔下二ノ五丈左〕楞嚴會云、每日粥罷、〈乃至〉集衆諷咒畢、楞嚴頭擧普回向偈、大衆同聲念。

②普回向偈、敕修清規〔下二ノ七丈〕載。備用云、普回向偈、眞歇和尚自製。〈止此〉見報禱類楞嚴會處。

【一〇二九】回向

①忠曰、諷誦之後願文。以所修善業、回向所願事也。

②敕修清規〔上一ノ廿丈〕聖節云、維那擧擧嚴咒、回向。

③摩訶止觀〔七ノ卅四丈〇敕修鈔一ノ卅七丈略川〕云、廻向者、廻衆善、向菩提。一切賢聖、功德廣大、我今隨喜。福亦廣大、衆生無善。我以善施。施衆生已、正廻向菩提。如廻聲入角、響聞則遠。廻向爲大利。

④知禮修懺要旨〔卅六丈〕云、修回向者、所謂回事向理、回自向他、回因向果。初回事向理者、元由理具、方有事用。一切修證、不出理性。衆生強執、計是有爲。今回此心、向於實際、回自向他者、昔迷理徧、凡所修善、莊嚴自身及己眷屬。今順本性、回向衆生。回因向果者、一毫善種、三業熏修、不趣二乘。寧滯三有。修既順性、則成緣了二因。因必顯眞、同歸究竟三德。是名回因向果。此三種回向、一切菩薩共修。是故行人依此回向。

⑤華嚴經十回向品疏〔廿三ノ卅丈〕云、廻者轉也。向者趣也。轉自萬行、趣向三處。故名回向。三處、謂衆生、菩提及以實際。上二皆隨相。實際即離相。〈疏更開三爲十、會十歸三。今恐繁不録。〉

⑥忠曰、菩提與實際、見在回向文。其衆生者、所謂四恩總報、三有徧資、法界有情、同圓種智、是也。

⑦又華嚴出現品疏〔五十二ノ二丈〕云、眞如語其體。法界生法所依。實際是窮事至實。

【一〇三〇】宣疏

①敕修清規〔上一ノ□〕聖節云、維那、白佛宣疏。〈詳報禱類跪爐處。〉

②　凡祈祷、三佛、二祖忌、皆有宣疏。
③　又見執務類僉疏處、疏榜類道場疏處。

【一〇三一】白佛
①忠曰、疏及回向首、嘆佛語、言白佛。白者、表白義。
②敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、維那白佛宣疏。　又［上一ノ廿三丈］千秋節云、維那舉楞嚴咒畢、白佛回向。　又［上一ノ廿七丈］佛降誕云、維那白佛云、一月在天、影涵衆水。一佛出世、各坐一華。白毫舒而三界明。甘露洒而四生潤。

【一〇三二】嘆佛
①忠曰、同白佛。或儷語一聯、或四句偈、嘆佛功德也。祝聖回向首魏魏金相、堂堂覺皇、是也。
②敕修清規［一上ノ廿三丈］景命四齋日祝讚云、維那舉楞嚴咒唱藥師號。嘆佛畢回向。
③續酉陽雜俎［五ノ十三丈］云、平康坊菩提寺、李右座〈林甫〉、每至生日、常轉請此寺僧、就宅設齋。有僧乙、嘗嘆佛。施鞍一具。賣之、材直七萬。又僧廣有聲名。口經數年、次當嘆佛。因極祝右座功德、冀獲厚賜。齋畢、簾下出綵篚。香羅帕籍一物。如朽釘。長數寸。僧歸失望。遂攜至西市、示於商胡。驚曰、此寶骨也。直一千萬。
④　忠曰、依此嘆佛之目、來尚矣。

【一〇三三】贊佛
①［敕鈔十三ノ十三丈］嘆佛又言贊佛。
②敕修清規［下一ノ五十六丈］病僧念誦云、排列香燭佛像、念誦贊佛云、水澄秋月現。懇祷福田生。惟有佛菩提、是眞歸仗處。

【一〇三四】白贊
①歎佛、或名白贊。
②敕修清規［下一ノ五十六丈左］病僧念誦云、如病重、爲十念阿彌陀佛。念時先白贊云、阿彌陀佛眞金色。相好端嚴無等倫。白毫宛轉五須彌。紺目澄清四大海。光中化佛無數億。化菩薩衆亦無邊。四十八願度衆生。九品咸令登彼岸。

【一〇三五】白眞
①祖師忌回向文首、唱儷語或偈文、言白眞。
②備用清規［一ノ九丈］達磨祖師忌云、維那白眞宣疏。

【一〇三六】嘆眞
①即白眞也。
②舊說［敕鈔一ノ卅七丈］曰、祖師回向首語、言嘆眞。謂寶明空海、湛死生漩澓之波、是也。

【一〇三七】嘆靈
①舊說［敕鈔一ノ卅七丈］曰、亡俗回向首語、言嘆靈。淨極光通達、寂照含虛空、是也。

②　忠曰、嘆佛嘆眞、其義自存矣。如亡俗、則不可例佛祖、以嘆其德也。唯修善憑佛德、而拔濟其靈耳。何用嘆靈德。故如施食法回向首語曰、佛身充滿於法界、普現一切羣生前。豈是嘆亡靈德者哉。故予謂、嘆靈之目杜撰也。

【一〇三八】嘆經

①敕修清規［上一ノ廿三丈］旦望藏殿祝讚回向云、大圓照中、有華藏海。功超造化、道絶名言。三光電卷而實相涵。六合雷奔而湛然寂。

②　解者［敕鈔一ノ卅七丈］曰、此是嘆經也。

【一〇三九】畧三寶

①舊説［敕鈔六ノ卅四丈左］曰、凡回向之尾、必有十方三世等語。此名略畧三寶。謂十方三世一切諸佛是佛寶、諸尊菩薩摩訶薩是僧寶、摩訶般若波羅蜜是法寶也。［敕鈔一ノ廿一丈］其鳴磬法、十方一下、諸尊一下、摩訶般若一下。分三寶也。如祝聖回向、金剛無量壽佛乃佛寶、仁王菩薩摩訶薩乃僧寶、摩訶般若波羅蜜乃法寶也。鳴磬法、準前可知。

【一〇四〇】聲明〈梵唄　梵放〉

①忠曰、稱號諷演、流暢其聲。此曰聲明。瑜伽論［十三ノ十四丈］説五明曰、内明處、醫方明處、因明處、聲明處、工業明處。〈止此。〉佛家聲明、亦彼攝也。傳燈録［十八玄沙章］、聲明三藏、善別音聲。〈止此。〉此辨五音。亦是五明學流類。

②瑜伽師地論［十五ノ廿丈］説聲明中、分六相。第一法施設建立曰、謂名身句身文身、及五德相應聲、一不鄙陋、二輕易、三雄朗、四相應、五義善。

③　忠曰、所謂五德、亦可用梵音聲明。阿含五聲、稍同此。

④釋氏要覽［上ノ六十七丈］云、梵音、梵云唄匿、華言止斷也。由是外事已止已斷、爾時寂靜、任爲法事。又云、諸天聞唄、心則歡喜。故須作之。十誦云、比丘跋提、於唄聲中第一。長阿含經云、其梵聲有五種。一其音正直、二和雅、三清徹、四深滿、五周遍遠聞。法苑云、夫唄者、讚詠之音也。當使清而不弱、雄而不猛、流而不越、凝而不滯、遠聽則汪洋、以峻雅。近屬則從容、以和肅。此其大致也。昔魏陳思王曹子建、游魚山。忽聞空中梵天之音。清響哀婉、其聲動心。獨聽良久。乃摹其節、寫爲梵唄。撰文製音、傳爲後式。梵音茲爲始也。

⑤　宋［劉一］劉敬叔異苑［五ノ九丈］云、陳思王曹植、字子建。嘗登魚山、臨東阿、忽聞嚴岫裏有誦經聲。清通深亮、遠谷流響、肅然有靈氣。不覺斂衿祇敬、便有終焉之志。即效而則之。今之梵唱、皆植依擬所造。一云、陳思王遊山、忽聞空裏誦經聲。清遠遒亮。解音者、則而寫之、爲神仙聲。道士效之、作步虛聲也。〈法華文句疏［四之三ノ十一丈］引梁宣驗記。〉

⑥行事鈔［上四之一廿五丈］説戒正儀篇云、「彼説戒者、坐已、維那打靜、小者供養、梵唄作之。若準律文、唄匿如法。出要律儀云、如此鬱鞞國語。翻爲止斷也。又云止息。由是外緣已止已斷。爾時寂靜、任爲法事也。

⑦　玄應經音義［十五ノ六丈］云、唄匿、蒲芥切。梵言婆師、此言讚歎。言唄匿者、疑訛也。婆音蒲賀切。

⑧　又高僧傳［十三ノ廿一丈］、慧皎詳論天竺此土歌讚梵唄。

⑨毘尼母論［六ノ九丈］云、佛告諸比丘、聽汝等唄、唄者、言説之辭。佛雖聽言説、未知説何等法。復諮問世尊。佛言從修多羅乃至優波提舍、隨意所説。〈乃至〉佛聽諸比丘、引經中要言妙辭、直顯其義。

⑩　梵唄亦稱梵放。

⑪文字禪［八ノ十二丈］雨後得無象新詩次韻、落句云、入門庭院度飛螢。梵放哀聲滿深殿。

⑫又潭州開福轉輪藏靈驗記［廿一ノ二丈］云、寶坊精舍、樓觀追逐。煙雲蔽虧、梵放酬酢、如錢塘之西湖、伊洛之嵩少。

⑬無文印［一ノ十一丈］送西苑徑上人詩云、西苑寶峯麓、占地寬一弓。梵放殷青冥。與峯相長雄。〈云云。〉

⑭杜工部詩集［三ノ十六丈］大雲寺贊公房詩云、梵放時出寺、鐘殘仍殷牀。　千家註、洙曰、梵放、蓋佛事至梵音、必唱而誦之。

【一〇四一】平舉

①敕修清規［下一ノ五十九丈］大夜念誦云、知客平舉楞嚴咒。

②　解者曰、送亡維那、不舉啓請、直舉南無薩怛他、曰平舉。以不舉啓請、亦不舉摩訶梵、蓋［鈔七ノ三丈］恐妨諸方人、結緣諷經也。

③東漸清規［三ノ十九丈］送亡式云、維那平舉楞嚴咒、不啓請曰平舉。

【一〇四二】表白

①忠曰、宣讀咒願、凡表顯事、以白告衆、此謂表白。

②慈受深禪師慧林録［五丈］拈疏云、却請表白宣過。

③僧史畧［中ノ卅一丈〇要覧上ノ六十八丈引］云、唱導者、始則西域上座凡赴請、咒願曰、二足常安、四足亦安、一切時中皆吉祥等、以悅可檀越之心也。舍利弗多辨才。曾作上座、讚導頗佳、白衣大歡喜、此爲表白之椎輪也。

【一〇四三】白槌

①碧巖録［十ノ四丈］云、世尊一日陞座、文殊白槌云、諦觀法王法、法王法如是。世尊便下座。

②廣燈録［十三ノ二丈］、金沙禪師章曰、開堂、有僧問、昔日梵王親請佛、迦葉白槌、事若何。師云、從古至今。進云、恁麼即徧天徧地也。師云收。

③　舊説［敕鈔十五ノ七丈〇又六ノ四丈］曰、凡鳴椎白事、皆是白椎耳。然禪林、獨於開堂稱白椎。乃鳴椎一下、息靜羣喧、方白衆、發法筵云云語也。或［敕鈔九ノ十五丈］謂、爲肅衆、聽長老説法也。

④　　忠曰、後説非也。

⑤敕修清規［上二ノ廿一丈］開堂祝壽云、預請諸山一人白椎。　又［同廿二丈］云、諸山上首出白椎、鳴椎一下云、法筵龍象衆、當觀第一義〈乃至〉。結座、白椎人、復鳴椎一下。白云、諦觀法王法、法王法如是。

⑥　楊岐會禪師海會録［古宿十九ノ五丈］開堂云、淨行大師白槌云、法筵龍象衆、當觀第一義。〈無結座白槌。〉

⑦　五祖演禪師四面録［古宿二十ノ一丈］開堂云、龍門和尚白槌云、法筵龍象衆、云云。〈無結

座白槌。〉

⑧ 大慧杲禪師育王録［五ノ一丈○敕修鈔六ノ五丈引］云、於明州報恩光孝禪寺開堂、天童和尚白槌云、法筵龍象衆、云云。拈提畢、天童和尚、再白槌云、諦觀法王法、法王法如是。師召大衆云、記取天童和尚語。便下座。

⑨ 祖庭事苑［八ノ十三丈］云、白椎、世尊律儀、欲辨佛事、必先秉白、爲穆衆之法也。今宗門白椎、必命知法尊宿、以當其任。長老才據座己、而秉白云、法筵龍象衆、當觀第一義。長老觀機、法會酬唱、既終、復秉白曰、諦觀法王法、法王法如是。此蓋先德之眞規、不失佛意、且見叢林、多舉世尊升座、文殊白椎。或謂、徧閲藏乗、不見其縁。然秉白儀範、既出聖製、復何區區、求文殊之説、以恣無益之論耶。

⑩ 忠曰、事苑以秉白爲義、可知白者告事也。猶言謹白大衆也。　舊説［敕鈔八ノ八丈○又六ノ四丈］、白明白也。鳴椎令衆明白知其事。〈止此〉此義、固不足取也。

⑪ 品字箋［庚卅五丈］云、今以下告上、曰稟白。同輩述事、陳義、亦曰白。又梵言羯磨。此云作白、言受戒三番、毎月自白其所犯。作白者、令其白也。

⑫ 翻譯名義集［四ノ卅八丈］云、律云、若作羯磨、不如白法作白不如羯磨法、作羯磨。如是漸漸、令戒毀壞。以滅正法、隨順文句。勿令増減。

⑬ 已下、畧録維那白槌于開堂説法者。蓋闕尊宿當任人故、如是乎。

⑭ 傳燈録［廿五ノ卅丈］法燈泰欽禪師章云、師住金陵龍光院、上堂陞座、維那白椎云、法筵龍象衆、云云。　又［廿五ノ卅三丈］慧濟禪師法安章云、江南國主、請入居報恩、署號攝衆。師上堂謂衆曰、此日奉命、令住持當院、爲衆演法。適來見維那白槌了。多少好令教、當觀第一義。且作麽生是第一義。　又［廿六ノ九丈］歸宗柔禪師章云、師初上堂陞座、維那白槌曰、法筵龍象衆、云云。

⑮ 廣燈録［十七ノ十六丈］興教守芝禪師章云、師纔升座、僧正宣疏畢。維那白槌云、法筵龍象衆、云云。〈又［十八ノ廿一丈］景清居素章［廿八ノ九丈］靈臺令岑章〉

⑯ 汾陽無德禪師録［二ノ一丈］云、師初開堂、讀疏罷、維那白槌云、法筵龍象衆、云云。

⑰ 雪竇顯禪師開堂録［一ノ十八丈］云、僧正宣疏了、維那白槌云、法筵龍象衆、云云。

⑱ 雲峯悅禪師翠巖録［古宿四十ノ三丈］云、師在上藍開堂、跏趺而坐、維那白槌云、法筵龍象衆、云云。

⑲ 已下、畧録開堂外、維那白槌。

⑳ 傳燈録［十七ノ十五丈］華嚴休靜禪師章云、師會在樂普、作維那。白槌普請曰、上間搬柴、下間鋤地。時第一座問、聖僧作麽生。師曰、當堂不正坐、不赴兩頭機。

【一〇四四】禮話

① 禪苑清規［一ノ六丈］掛搭云、參頭曲躬、近前云、久響和尚道價、此日獲奉尊顔。下情不任喜躍之至、退身依位。又一展云、某寒暄、伏惟和尚尊體、起居萬福。　註正月孟春猶寒。二月仲春漸暄。三月季春極暄。四月孟夏漸熱。五月仲夏毒熱。六月季夏極熱。七月孟秋猶熱。八月仲秋漸凉。九月季秋霜冷。十月孟冬漸寒。十一月仲冬嚴寒。十二月季冬極寒。

② 忠曰、某寒暄處、隨時以此語也。

③ 敕修清規［上二ノ四丈］告香云、即日時令謹時、共惟堂頭和尚、尊候起居萬福。

④ 忠曰、謹時語、通十二月。時令處可用孟春孟夏等也。如結制禮儀中、云即日孟夏謹時。

⑤ 翰墨大全〔后ノ甲集一ノ十丈〕通敍時令警語部正月單句類云、孟春謹時　春謹孟月　孟春猶寒　孟春漸暄等。　二月單句類云、仲春謹時　春謹仲月　仲春猶寒　春半漸暄等。　三月單句類云、季春謹時　春謹季月　季春極暖等。　四月云、孟夏謹時　孟夏謹月　孟夏漸熱　首夏清和等。　五月云、仲夏謹時　仲夏謹月　炎景方中等。　六月云、季夏謹時　季夏謹月　季夏極熱　朱夏告闌。　七月云、孟秋謹時　孟秋謹月　開秋兆凉等。　八月云、仲秋謹時　仲秋漸凉　素景適中等。　九月云、季秋謹時　季秋謹月　三秋向杪等。　十月云、孟冬謹時　孟冬謹月　小春暄妍　初冬薄寒等。　十一月云、仲冬謹時　冬謹仲月　冬半寒隆　仲冬嚴寒等。　十二月云、季冬謹時　季冬謹月　冬晩極寒等。

○祭供類

【一〇四五】羅漢供

①忠曰、十六羅漢、見靈像門。五百羅漢名、莫聞藏乗説。近有南宋江陰軍乾明院羅漢尊號碑一巻、刊布。亦不載本據矣。羅漢供、別有式。

②又曰、東福寺毎歳修正、講羅漢供、昔明兆殿司、妙于繪事。曾畫五百應眞、一日遇異人。授以一軸書、不知所往。展視之、則羅漢供祭文也。時人以爲畫像感應。至今爲東福寶物。故此軸不識何人書。

③佛祖統紀〔卅四ノ四丈〕云、佛滅時、付囑十六阿羅漢、與諸施主、作眞福田。時阿羅漢、咸承佛敕、以神通力、延自壽量。若請四方僧、設無遮施、或所住處、或詣寺中、此諸尊者、及諸眷屬、分散往赴、蔽隱聖儀。密受供具、令諸施主、得勝果報。

④傳燈錄〔十四ノ十八丈〕翠微無學禪師章云、師因供養羅漢。有僧問曰、丹霞燒鍛木佛、和尚爲什麼、供養羅漢。師曰、燒也不燒著、供養亦一任供養。又問、供養羅漢、羅漢還來也無。師曰、汝毎日還喫飯麼。僧無語。師曰、少有靈利底。

⑤ 密菴傑禪師徑山錄〔六丈〕建會上堂云、千嚴釀秀、萬木回春、羅漢會興、貫通今古。一願龍王福護、瑞雪快晴。二願施主歸崇、駢臻輻輳。三願大衆同心同德、扶掖叢林、滴水氷生、始終一致。〈云云〉

【一〇四六】盂蘭盆供

①釋氏要覧〔下卅六丈〕云、盂蘭盆、此釋子、申孝報恩、救苦之要、以自連救母爲始也。梵語盂蘭、此云救懸也、盆則此方器也。此經目、華梵雙學也。若梵語從聲。其盂字不須從皿。必執毛者悞爾。若于闐等、可知也。義淨云、盂蘭者、西域之語。此云救倒懸、即飢虚危苦。謂之倒懸也。盆乃東夏之音。此則救苦之器。所以仰大衆之恩光。救倒懸之窘急。此從義以制名也。

②古師云、盆或是鉢、但譯時、隨俗稱盆、盆之與鉢、皆器故也。經云、七月十五日、僧自恣日、當爲七世父母。及現在父母。厄難中者。〈此文、又通保安現在父母〉具飯百味五果、汲瀦盆器、香油挺燭、牀敷臥具、盡世甘美、以著盆中、供養十方大德衆僧。又云、初食時、先安在佛前塔寺中、衆僧咒願竟、便自受食。〈若供養佛食、回供僧者、即此日得、他日不通今却於寺中設供亡人蓋悞之也〉

③法苑珠林〔七十七ノ四丈〕祭祠篇云、問曰七月十五日、既開道俗造盆獻佛以不。答曰、並得。若依小盆報恩經、略無寶物、依大盆淨土經、即有。故十六國王、聞佛説目連救母、

脱三劫餓鬼之苦、生人道中、母子相見。時瓶沙王、即敕藏臣爲吾造盆、藏臣奉敕。即以五百金盆、五百銀盆、五百瑠璃盆、五百琿璖盆、五百碼碯盆、五百珊瑚盆、五百琥珀盆、各各盛滿百一味飲食。事事如法。將來。獻佛及僧。准此定得。問曰、依小盆經云、佛告目連、十方衆僧、七月十五日、自恣時、。當爲七世父母、及現在父母、厄難中者、具飯、百味果汲潅盆器、香油挺燭、牀臥衆具。盡世甘美、著盆中、供養十方大德衆僧。初受盆時、先安在塔前、衆僧咒願竟、便自受食。不論襍華供養、今時諸寺、有力富者、廣造襍華、或用襍繪。或用米麪、或用諸蝋、或用鉛錫、或用襍色等、亦有道俗貴勝。譏輸此事、目連爲母生在餓鬼。佛令設百味飯食、獻佛及僧。何因將此寶華襍物、獻之佛僧。豈得食此寶華襍色等不。答曰、不得以己狹劣、妨他大福。故大盆經云、瓶沙王造五百金鉢、盛滿千色華、五百銀鉢、盛滿千色百木香、五百瑠璃鉢、盛滿千色紫金香、五百琿璖鉢、盛滿千色黄蓮華、五百碼碯鉢、盛滿千色赤蓮華、五百珊瑚鉢、盛滿千色青木香、五百琥珀鉢、盛滿千色白蓮華。王視如法。即敕兵臣、嚴駕、十四萬衆俱。到祇洹寺禮佛奉盆。及僧、以七寶盆鉢、俱施與佛及僧。僧受用竟、還駕歸國。七世父母超過七十二劫生死之罪。其次須達居士、毘舍佉母、二百優婆夷、波斯匿王、末利夫人等、頒宣國内、依目連盆法、爲吾造盆。各用五百紫金盆、黄金盆盛滿百一味飲食。後以五百紫金罍、五百金罍、盛滿百一物。事事具足、遂至王及夫人前、見其如法、時王即以嚴駕、十八萬衆共至佛前、奉千金盆千金罍等、竟敬禮還歸。七世父母超過七十二劫生死之罪。

④ 事物紀原〔八ノ卅一丈〕云、今世每七月十五日、營僧尼供、謂之盂蘭齋者、按盂蘭經曰、目連母亡生餓鬼中。佛言須十方衆僧之力至七月十五日、具百味五果以著盆中、供養十方大德。後代廣爲華飾、乃至割木割竹、極工巧也。今人第以竹爲圓架、加其首、以荷葉、中貯雜饌、陳目連救母畫像、致之祭祀之所失之遠甚矣。

⑥ 忠曰、是亦不見大盆經者也。然依之足知中華當時風俗。故録之。

⑦ 又見報祷門盂蘭盆會處。

【一〇四七】入門歡

①大鑑清規〔五十二丈〕云、一代住持、入祖堂新安位牌、則前歷代諸住持、皆相迎接、問訊歡喜。住持之小師、當爲本師修設歷代供養點心餚饌、作入門歡。若獨設一位新入住持自饗、令歷代住持空坐、看別人受供、是何道理。兩無面目。

② 忠曰〔勅鈔三ノ卅三丈作勸〕、或作勸勉之勸、非也。又有作款者、款曲也。希叟曇禪師開善録〔二丈〕入院提綱云、入門款無改換。芝峯一一從公斷。事涉春縁。何妨花判。

【一〇四八】傳供

①大鑑清規〔五丈左〕佛誕生云、住持至。燒香一炷。大展三拜不收坐具。侍者一班。進卓排立。傳供

② 敕修清規〔上一ノ二十丈右〕聖節云、住持上茶湯。上首知事、遞上。

③ 忠曰、遞上。即傳供也。

【一〇四九】貼供

見識位門貼供行者處。

【一〇五〇】上供

①〔勅鈔八ノ廿六丈〕備佛餉祖餉也。

②敕修清規〔下一ノ五丈〕聖僧侍者云、齋粥二時上供。

【一〇五一】發供

【一〇五二】斛食

①忠曰、施食法、方木函、堆盛飯食、備三界萬靈牌前、此節斛食也。

②　漢書〔廿一ノ八丈〕律歷志云、斛者、角斗。平多少之量也。

③敕修清規〔下二ノ十七丈〕月分須知云、七月盂蘭盆會、預率衆財辨斛食供養。

④釋氏要覽〔上ノ六十四丈〕云、若比丘、各自備一斛食、施者即依焦面大士經、施與餓鬼也。

⑤佛祖統記〔卅四ノ十三丈〕云、六道斛、淨名經云、以一食施一切〈言一切則全收六道〉供養諸佛及衆賢聖、然後可食。南嶽隨自意三昧云、凡得食應云、此食色香味、上供十方佛、中奉諸賢聖、下及六道品、等施無差別。天台觀心食法、鳴鐘後、劍手供養一體三寶、次出生飯稱施六道。此皆等供十界、即是今人施六道、修水陸供之明證也。述曰、妙樂云、世人設六道者、是梁武見江東多淫祀、〈殺生命祭邪鬼〉乃以相似佛法、權宜替之。此蓋荊溪一往、以祭祀惡法、對佛法論之、將以止天下之殺。故未論十界等供之義。餤口經、令供養三寶、即是四聖。供婆羅門仙、即是人道。供餤口衆、即是鬼道。餘四道、雖不備、蓋是當時赴機未普、故經文隱略耳。若大乘行人、圓觀法界、則當依淨名經中義、若慈雲謂鬼道得食、餘五道不得者、此等意、亦是用婆沙論云若因祭祀唯鬼神得之、餘趣不可盡得、此是約人世祭祀、言之耳。若依出世法、用平等心修無礙供、則當仰觀淨名南嶽天台三處之文、則理無不在、今有營小斛、曰散灑者、或一巨斛者、或至四十九斛者、皆所以等供六道羣品也。可不信哉。

⑥　阿難斛食緣、見喪薦門、施食法處。

【一〇五三】香饌

①敕修清規〔上一ノ卅四丈〕達磨宿忌回向云、率比丘衆、營備香饌、以伸供養。

②　忠曰、説文饌喝食也。宿忌具九味、蓋謂之香饌。

③　舊説〔勅鈔三ノ廿三丈〕曰、不烹熟者言香饌、烹熟者言羞。或曰、香饌此方俗所謂洗米也。　忠曰、並杜撰。

【一〇五四】九味齋

①忠曰、或作鳩美菜。蓋集美味也。或作供備菜。大鑑清規作九味齋。今依此爲正。蓋果糍類、有九味而已。如今時、小器長脚者、金銀裝飾、高餖飣饅頭羊羹等及諸珍果、或十二器〈左右各六器〉、或十六器〈左右器各八〉、予曾觀建仁千光祖師五百年忌、其器銀碗雕華形、横列四行、每行十器、凡四十器。

②大鑑清規〔五十七丈〕末後事儀云、正大夜時、念誦經、九味齋略之。

③　忠曰、九味齋、本是宿忌供物、可以之證焉。

④　雲章和尚〔勅鈔三ノ廿四丈〕講敕修清規到達磨忌曰、兒孫者遇祖忌則須盡如在之誠、酬恩德、前晚備設供具鳩美菜等者、見慇懃之情也。本是前晚供物故、來早宜撤之。然猶留

之、嚴飾靈筵耳。或曰、僧家不可晚食、況祖師乎。是故宿忌回向、但擧茶湯、到半齋回向、列擧珍羞供物、及茶湯也。予謂、聖賢雖道高、世相須同凡。若諸供一時進之、則匕箸難周、調攝違法故宿夜進鳩美菜。來早獻飯羹、於理得處。又當日供養、尋常也。若不以前晚供具、則無可以表丹悃者。徒不可以晚食作難而防誠心矣。但茶湯禮則以當日爲本、學者須知之。

⑤ 江湖紀聞〔后集四ノ五丈〕云、至元歸附後、胡雨嚴遊學湖湘道永之境、投宿敝寺、有老僧、背燈而坐。曰、客來何暮。胡曰、店艱乏食、行路良苦、僧袖中出二齋、令食席地就臥。僧誦偈云、百補袈裟舊鉢盂、機年同我此山居。寒燈夜照青蓮座、得伴看添貝葉書。旦覺衣濕而冷、捫席乃知、露宿草上、青天曠野、一無所有、行至一寺、儼然夜所宿處。驚語行者以故。曰、此祖師葬處。祖師順寂、十五年矣。夜供五齋、訝欠其二也。

⑥ 忠曰、五齋、蓋九味齋、五器也。此可以證九味齋書齋字、及九味齋、前晚供養也。

【一〇五五】珍羞

① 敕修清規〔上一ノ廿七丈〕佛降誕上堂云、嚴備香花燈燭、茶果珍羞、以伸供養。

② 小補韻會〔尤五十一丈〕云、羞膳也。一曰、致滋味爲羞。周禮享人註疏、牛羊豕調、以五味、盛之於豆、謂之羞、又食也。禮記月令、羣鳥養羞。註羞謂所食也。疏云若食之珍羞相似。

③ 又作饈。正字通〔戌下四十六丈〕云、饈膳𦳝。俗字、舊註音脩、膳也、薦也。義與饈同。誤分爲二。經傳本借羞。

④ 李太白詩集〔廿三ノ七丈〕過汪氏別業詩云、我來感意氣、搥𩛥列珍羞。

【一〇五六】生飯

① 敕修清規〔下一ノ四十八丈〕日用軌範云、鉢刷、安第二鎮子縫中、出半寸許、盛生飯、不得以匙筯出生飯、不過七粒、太少爲慳食。凡受食、則用出生。或不受食、却不可就桶杓内、撮飯出生。

② 舊説〔敕抄十二ノ卅二丈〕曰、施鬼界衆生之飯故曰生飯。出飯不可過七粒、麵不可過一寸、饅及餅可指甲許。生飯不可飣請菜中、爲受飯鬼與受菜鬼相爭也。凡鬼中專受生飯者曠野鬼也。專受施餓鬼食者面然鬼也。

③ 或説〔敕抄十二ノ卅二丈〕曰、生飯者人之生氣、在左掌故先用右手拇指中指而撮之、少點左掌熏著生氣於飯、然後置鉢刷、唱偈、施與鬼子母故曰生飯。

④ 或〔日用別山鈔〕曰、生字義、古德未下解。有謂、生是熟之對、未下筋之新飯、是生義以供鬼也。

⑤ 忠曰、人生氣在左掌、未得本據。謂生者衆生也。非生熟義。佛自言出衆生食〈後引〉、何不見經文、生曲説而爲難解哉。資持記云、施生不必多也。〈出生處引〉乃出於施衆生之食也。

⑥ 佛祖統紀〔卅四ノ八丈〕云、出生飯此有二緣、一者涅槃經令施曠野鬼、毘奈耶律令施鬼子母等、此曹本食肉啖人、佛化之、受戒不殺、乃囑弟子、隨處施食。今齋堂各各出衆生食、是也。此唯出家人行之。二者餤口經託阿難爲緣、令施餓鬼食、今齋堂別具小斛、於食畢衆作法施之。或各具小生斛、夜間咒施。此通道族行之。

⑦ 曠野鬼緣　涅槃經〔南本十五ノ十丈〕梵行品云、善男子如我、一時遊彼曠野聚落叢樹、在其

林下、有一鬼神。即名曠野。純食肉血、多殺衆生。復於其聚、日食一人。善男子、我於爾時爲彼鬼神廣説法要。然復暴惡、愚癡無智、不受教法、我即化身爲大力鬼、動其宮殿令不安所。彼鬼於時將其眷屬出其宮殿、欲來拒逆、鬼見我時即失心念、惶怖躃地、迷悶斷絶猶如死人。我以慈愍、手摩其身、即還起坐、作如是言、快哉今日、還得身命。是大神王具大威德有慈愍心、赦我愆咎。即於我所、生善信心。我即還復如來之身、復更爲説種種法要。令彼鬼神受不殺戒、即於是日、曠野市中有一長者、次應當死。村人已送付彼鬼神。鬼神得已、即以施我。我既受已、便爲長者更立名字名手長者。爾時彼鬼既白我言、世尊、我及眷屬、唯仰血肉以自存活。今已受戒、當何資立。我即答言、從今當敕聲聞弟子。隨有修行佛法之處、悉當令其施汝飲食。善男子以是因緣爲諸比丘制如是戒。汝等從今常當施彼曠野鬼食。若有住處不能施者、當知是輩非我弟子、即是天魔徒黨眷屬。善男子、如來爲欲調伏衆生故示如是種種方便、非故令彼生怖畏也。

⑧ 訶利帝母縁　鼻奈耶雜事〔三十一ノ十五丈〕云、懽喜夜叉神、生子至五百、其最小者名曰愛兒。歡喜入王舍城、所有男女、次第取食、人民痛惱當往告佛。時諸人曰、此鬼瞰我男女、則是惡賊、何名歡喜。因此競呼爲訶梨底母。衆往白佛、佛持鉢入城以鉢覆其愛兒。母歸不見愛兒。上從天宮下至地獄、尋覓不見。佛問言、汝有幾子。答言、五百。佛言、五百失一何甚苦惱。況他一子、汝何食之乎。母曰、願以示誨。佛言可受我戒、得見愛兒。母曰、我依佛、佛擧鉢見愛兒。從佛受三歸五戒白言、我今與子何所食瞰。佛敕聲聞弟子、於食次出衆生食。呼汝等名字施之。〈略鈔〉

⑨ 佛祖統紀〔卅四ノ十一丈〕云、訶利帝、此翻惡賊。蓋是鬼子母、未受戒時、食王城男女。居人怨之故作此目。

⑩ 又別有阿利陀因縁　灌頂封印大神咒經〔灌頂経第七巻五十七套〕云、阿利陀、復白佛言、我等鬼神、官屬七百、常以精氣血肉爲食。今日歸命於佛世尊。既授戒法不殺物命。唯願天尊、敕諸弟子、法食之時惠施少少飯食之餘。

⑪ 又與出生交看。

⑫ 傳燈録〔六ノ十一丈〕杉山智堅禪師〈嗣馬祖〉章云、師喫飯次、南泉收生飯云、生師云、無生。南泉云、無生猶是末。南泉行數歩、師召云、長老長老。南泉廻頭云、怎麽。師云、莫道是末。

⑬ 趙州諗禪師録〔古宿十四ノ廿五丈〇録下十三丈〕云、師因見院主。送生飯。鵶子見便總飛去。師云、鵶子兒見你爲什麽却飛去。院主云、怕某甲。師云、是什麽語話。師代云、爲某甲有殺心在。

【一〇五七】出生

① 忠曰、生飯亦言出生。出衆生食之略言也。

② 行事鈔〔下三ノ三ノ十九丈〕訃請設則篇云、明出衆生食。或在食前唱等得已出之。或在食後、經論無文。隨情安置。〈資持記云、雖通前後理合在前、準寶雲經、乞食分四分、一與同梵行人、一與乞人、一與鬼神、一分自食。故知、前出、後方自食。〉涅槃因曠野鬼〈云云〉、四分僧伽藍中、立鬼神廟屋。傳云、中國僧寺、設鬼廟、伽藍神廟、賓頭盧廟。每至二食、皆僧家、送三處食。餘比丘不出。愛道尼經、令出如指甲大。〈資持記云、舊云、晋法猛遊西國傳。鬼廟即曠野神、或鬼子母。今多畫於門首、本爲出食祭之、今人乃謂門神。訛替久矣。愛道下、示多少、下引智論、鬼能變食故不在多。恐費信施。〉智論云、鬼神得人一口食而千萬倍出也。〈資持記云、以鬼有通力。變少爲多、此明施生不必多也。〉

③教誡律儀云、凡欲出生粥、不得令淨匙、拄著淨人出生器中。若著處、即須更受匙。又云、凡所出生、餅當如一半錢大。飯不過其七粒。自餘飯食亦不得多。又云、凡所出生食須事事如法。又云、出生食、不得將所棄惡食物致生中。又云、凡出生法、須安牀邊淺處、令淨人掠取、不得自用手拈、意在護手。

④　忠曰、飯出生用右指、粥出生用匙。可按律儀文而知也。

⑤釋氏要覽〔上ノ六十四丈〕云、今詳若食是米麪所成者、方可出之。或蔬茄不用、緣物類不食、翻成棄也。如愛道經云、出生餅、如指甲大。又出生偈云、汝等鬼神衆、我今施汝供、七粒遍十方、一切鬼神共。〈以食出生時、默誦此偈〉

⑥孤山智圓法師〔十四ノ三丈〕間居編出生圖紀序云、儒禮、食必祭其先。君子有事不忘本也。釋氏之出生具云、出衆生食。蓋祭曠野鬼神及鬼子母、沙門用心、憫異類也。不忘本仁也。憫異類慈也。兩者同出而異名。今觀後學、鮮測厥由、遂使出生事乖謹潔、於檀越家則或雜以所棄。處衆堂則盤器汚雜、因圖其形容、紀其事跡、以示來者。且祭神如神在、享于克誠。在儒尚然。況稟佛制。今衆居、宜以淨器聚劍安此像前、良久施飛走鱗介之屬、檀越家、當於僧食畢取其生飯併著一器、供彼形像、然後散之。然律亦許二。食時先送食供養。〈寄歸傳亦云、後於行末安食一盤以供訶利帝母也。〉若或先供則衆僧不須各出。竊恐於時未安、今宜各出、然後聚而供之。既人別用心咸思佛制、庶幾上士、勤而行之。所謂賢者之祭、必受其福也。

⑦涅槃南本第十五云、佛遊曠野聚落〈云云前引〉寄歸傳〔一ノ十七丈〕第一云、施主初初置聖僧供、次乃行食以奉僧衆、復於行末、安食一盤以供呵利底母。其母先身、因事發願、王舍城所有兒童。遂受藥又身、生五百兒、日飡王城男女。佛遂藏其稚子名愛兒。〈云云如前引〉故西方諸寺、每於門屋處、或在食厨邊、索畫母形抱一兒子、於膝下、或五或三以表其像、每日於前盛陳供食。母乃四天王部衆也。大豐勢力、其有疾病無兒息、饗祷焉。皆遂願、詳説如律。神州先有名鬼子母也。〈今詳、此方佛寺、皆於門壁畫二神、神後一女。蓋其遺像、既二俱受祭故并畫之、或有立居士像者。蓋手長者也。西壁即曠野之身、東壁即佛所化者、今明受祭、唯圖曠野之像焉。〉

⑧　三餘贅筆〔一丈〕云、古人每飲食必祭。未有不祭而飲食者、今之釋老食時猶祭而士大夫、乃反不行。古云、禮禮失而求之野、此亦可見。

⑨史繩祖學齋佔畢〔二ノ二丈　代酔卅一ノ廿二丈刂〕云、餘嘗觀張横渠語云、曾看相國寺飯僧、因嗟嘆以爲三代之禮盡在是矣。誠哉斯言、餘亦曾觀成都華嚴閣下、飯萬僧始盡得横渠之所以三嘆。蓋其席地而坐、不設倚卓、即古之設筵敷席也。未食、先出生、蓋孔子卿黨所謂、疏食菜瓜祭、必齋如也。朱文公注云、陸氏魯論釋、瓜字作必、謂古人飲食、每種各出少許置之豆間之地、以祭先代、始爲飲食之人、不忘本也。孔子雖薄物必祭。祭必敬。如齋嚴。此聖人之誠。余又於禮記〈雜記下〇三ノ七十三丈〉及左傳有云、子曰、吾食於少施氏而飽。少施氏遇我以禮。吾祭作而曰、疏食不足祭也。古人以此爲禮。今之腐儒、匪惟不能祭、見有學者行之、則指以溺佛爲笑、是不曾讀書也。而反使髡徒得竊吾教而堅持之。又終食之間、寂然無聲、此子所謂食不語屯也。只此三者、非三代之禮而何。及到石室亦看士人會飯則攫拏如猿猱者有之。吼詈齋僕庖人者有之。打損器皿者有之。褻談喧笑視飯僧、爲有愧匪獨士也。余嘗出入制總兩幕、士夫會食、亦猶是也。得不動横渠之嘆耶。

⑩　忠曰、佛氏出生、非斅孔子卿當子行、自有曠野神鬼子母事緣。皎在綖文。史氏唯知責腐儒、不曾讀書亦自不會讀内典、妄以出生、爲竊儒教矣。嗚呼士大夫、何物而不踐三代禮樂。其會食、招猿猱喧雜之訕耶。僧人何物而致使異教發禮在是之嘆耶。蓋儒佛之

小大、淺深、於此乎見、不待勞辨焉。史氏遂不少轉腦、反思釋迦大聖之教化、薫陶倍萬於汝儒而折其慢幢、猶軒軒有輕侮之言、實可憫哉。

【一〇五八】獻粥

【一〇五九】獻齋

【一〇六〇】齋僧

①雲臥紀談〔上ノ十五丈〕云、池州梅山愚丘宗禪師、因練塘居士洪慶善持江東使節、夜宿山間、相與夜話。洪問、以飯僧見於何經。其旨安在。宗曰、四十二章經有云、飯惡人百、不如飯一善人。乃至飯千億三世諸佛、不如飯一無住無作無證之者。其無修證則是正念獨脱、能飯斯人則功超諸佛。然前輩知此旨者多矣。洪曰、其爲誰乎。宗曰、且以近説、如秦少游滕州貶所、自作挽章、有誰爲飯黄緇之句。東坡既聞秦訃、以書送銀五兩、囑范元長、爲秦飯僧。及東坡北歸、至毘陵以疾不起。太學生裒錢、於東京慧林飯僧。蘇黄門撰東坡墓誌、首載之。洪曰、嘲金有據乎。宗曰、公豈不見。毛詩小雅鹿鳴、燕羣臣嘉賓也。既飲食之、又實幣帛筐、以將其厚意、蓋飲食不足以盡敬而加贈遺以致慇懃也。於是爲誦丁晋公齋僧疏曰、佛垂遍智、道育羣生。凡欲救於傾危、必預形於景貺。謂白衣干椽、叨家宰之重權。丹陛宣恩、忝先皇之優渥。補仲山之袞、曲盡巧心、和傳説之羹、難調衆口。嘗於安寢、忽夢清容。妙訓泠泠、俾塵心而早悟、眞儀隱隱、恨凡目以那知。蓋智未周身、事乖遠害、至禍臨而莫測、成災及以非常、黜向西京、感聖恩而宥、竄於南裔、常忠憲以甘心。咎實自貽、孽非他作、念一家上散地、望萬里以何歸。既爲負國之臣、永絶經邦之術、程遊湘土、道假靈山、正當煩惱之身、忽接清凉之來、方知富貴、難保始終、直饞鼎食之榮、豈若盂羹之美、特形歸命、恭發精誠。虔施白金、充修淨供、飯苾蒭之高德、答嬾瓚之深慈、冀保此行、乞無佗恙。伏願、天回南眷澤賜下臨、免置邊夷、白日便同於鬼趣。賜歸中夏、黄泉再感於天恩、虔罄丹誠、永繫法力。洪曰、向讀名臣傳、只見補仲山袞和傳説羹一聯而已。今獲全聞、其精祷若此。

②大慧〔一ノ五十八丈〕爲盧時用普説云、我初到衡陽。諸處道友、送得千百貫錢來、自家遣兩箇侍者、去嶽山潙山諸處、齋僧一巡。衡陽人、初不知有齋僧之説。有來問妙喜者。對他道、只是把錢雇和尚喫飯。過得幾時、因普説、方與他説齋僧功德。後來稍稍知歸向。唐時有箇宣律師、爲他持戒殊勝、戒光直透天宮感得、韋馱天神、每日供天厨食。因問天神、世間功德、何者最大。曰、齋僧功德、最大。

③梵網經不行利樂戒第九云、若疾病、國難、賊難父母、兄弟、和上、阿闍梨、亡滅之日、及三七日、乃至七七日、亦應讀覇説大乘經律、齋會求福。

【一〇六一】夏齋

忠曰、結夏秉拂、都寺辨齋曰夏齋、見垂説門、謝都寺齋上堂處。

【一〇六二】冬齋

①忠曰、冬至秉拂、都寺辨齋曰冬齋。

②南堂〔五十一丈〕欲禪師本覺録謝秉拂冬齋上堂云、法離見聞、言詮罔及、道非色相、智照

洞然。首座用處、即是藏主用處、藏主用處、即是都寺用處、一即三、三即一、木馬火中嘶、黄昏候日出。你諸人、向箇裡著得眼便見。都寺用處、要且不是藏主用處、藏主用處、要且不是首座用處。還會麽。曹溪波浪如相似、無限平人被陸沈。

【一〇六三】罷參齋

①忠曰、參禪了畢、設齋供養大衆也。

②傳燈録〔十五ノ廿一丈〇聯灯二十ノ廿四丈〕洞山价禪師章云、因夜間不點燈、有僧出問話退後。師令侍者點燈、乃召適來問話僧出來。其僧近前。師曰、將取三兩粉來、與這箇上座。其僧拂袖而退。自此省發玄旨。遂罄捨衣資設齋。

③　忠曰、是所謂罷參齋也。

④雲棲袾宏和尚禪關策進序云、警策在手、疾驅而長馳、破最後之幽關、徐而作罷參齋未晚也。

【一〇六四】罷講齋

①忠曰、教家參禪有省悟分。即罷講教辨齋、供養大衆也。

②虚堂和尚顯孝録拈提云、良遂座主參麻谷、谷見來、携鉏去鉏草。次日又來、谷便閉却門、遂因此契悟、乃云、和尚莫謾良遂好。若不來見和尚、幾被十二分教、誤却一生。遂將房計賣却、作一罷講齋。

③　忠曰、聯燈不言罷講齋事。

④　皇甫冉〔三体五律六ノ十四丈〕送陳法師赴上元詩云、延陵初罷講、建業去隨緣。

⑤　忠曰、此但是休講、遊方也。不必參禪之謂也。

【一〇六五】茶湯

①忠曰、凡佛前、祖前、靈前、每日供茶湯、爲恒禮。

②　宋劉敬叔異苑〔七ノ一丈〕云、剡縣陳務妻、少與二子寡居、好飲茶茗。宅中先有古塚、每日作茗飲、先輒祀之。二子患之曰、古塚何知。徒以勞祀。欲掘去之。母苦禁而止。及夜、母夢、一人曰、吾止此塚二百餘年、謬蒙惠澤。卿二子、恒欲見毀、賴相保護、又饗吾佳茗。雖泉壤朽骨、豈忘翳桑之報。遂覺。明日晨興、乃於庭内獲錢十萬以久埋者而貫皆新。提還告其兒、兒太有慙色、從是祷酹愈至。

○喪薦門

【一〇六六】遷化

①聯燈會要〔四ノ十九丈〕百丈海禪師章、野狐因縁云、師令維那白槌云、食罷送亡僧。衆皆怪訝云、又無人遷化。何得送亡僧。

②臨濟録〔四十四丈〕云、普化繞街市、叫云、我往東門遷化去〈云云〉。

③玄沙備禪師廣録〔中ノ十一丈〕云、雪峯擧、神楚闍梨問我、亡僧遷化、向什麽處去。我向伊道、如冰歸水。師云、是即是、某不與麽道。峯云、你作麽生。師云、如水歸水。

④釋氏要覽〔下ノ四十八丈〕云、釋氏死謂涅槃、圓寂、歸寂、滅度、遷化、順世、皆一義也。隨便稱之。蓋異俗亡。

⑤　忠曰、遷化者、謂遷移化滅也。其實可通在家。要覽且從世之偏稱而已。然或設義曰、

尊宿出世能事畢、遷化度事於他方世界也。如涅槃經〔南五ノ十丈〕説、如來見閻浮衆生受大苦、聞甘露法藥療治已、復至他方有煩惱毒箭處、示現作佛療其病。〈略鈔〉又唐慧持臨終曰、吾欲往他方教化。〈續高僧傳〔十六ノ廿三丈〕〉又佛眼寂、圓悟上堂云、此方緣盡、他方顯化。此界身死、他界出現。〈圓悟録〉明極訃至、竺仙上堂云、前月二十七日、明極和尚與三世如來、把手共行、轉化他國而去。〈淨智録〔廿八丈〕〉是遷於化之義。余謂非也。亡僧已言遷化、固非出世尊宿、何化度事之有。故可知遷化之目、通出世未出世、出家在家矣。

⑥前漢書〔九十七上十二丈〕外戚傳云、李夫人卒。武帝自作賦曰、〈云云〉忽遷化而不反、兮魄放逸以飛揚。

⑦文選〔五十二ノ十三丈〕魏文帝典論論文云、日月遊於上、體貌衰於下。忽然與萬物遷化、斯亦志之大痛也。

⑧華嚴傳記〔四ノ七丈〕樊玄智傳云、人見龕内有光。怪往觀之、乃見居士久從遷化。忠曰、此三事、太在家之死言遷化。則此目不必局釋氏矣。

【一〇六七】浴亡

敕修清規〔上二ノ廿七丈〕尊宿遷化云、小師侍者、親隨人、安排洗浴、著衣淨髮人龕。又〔下一ノ五十七丈〕亡僧云、如病僧瞑目、延壽堂主、即報維那、令堂司行者報燒湯、覆首座知客侍者、庫司差人、擡龕浴船、安排浴亡。浴畢、淨髮拭浴衣被、酌量俵浴亡人。手巾與淨髮人、維那提督、著衣入龕。

【一〇六八】入龕

①敕修清規〔上二ノ廿七丈〕尊宿入龕云、維那領小師、炷香、請首座、入龕佛事、安排寢堂、置龕爐燭几筵供養。

②又見浴亡處。

③幻住菴清規〔五十六丈〕亡僧津送云、入龕之法、須預備麻骨蔑等類、置疊亡僧兩腋之下、次用乾柴、四面挨排定當、然後掩龕、用長條合縫、公界印押、封閉龕門、龕前立位牌一座、書云、新圓寂某上座覺靈。

④忠曰、麻骨乾柴等、擬便火化也。又有儒家入槨之法、或可用全身入塔乎。

⑤朱子語録〔十ノ十丈〕喪葬云、槨外四圍上下、一切實以炭末須厚七八寸許避濕氣免水患截樹根、槨裏用石灰、又以篩過細沙相雜。灰與沙相乳入、其堅如石。

⑥圓悟勤禪師録〔二十ノ十八丈〕有爲智海法眞和尚入龕佛事。

【一〇六九】移龕

敕修清規〔上二ノ廿九丈〕尊宿移龕云、入龕三日、揜龕鋪設法堂上間、〈乃至〉中間法座上掛眞、〈乃至〉下間置龕、用麻布幃幙前列几案爐瓶素花、香燭不絶、二時上茶湯粥飯、供養諷經、仍備挑燈鐃鈸花旛鳴僧堂鐘、集衆請移龕佛事。

【一〇七〇】鎖龕

敕修清規〔上二ノ廿九丈〕尊宿移龕云、請移龕佛事罷、移龕下法堂請鎖龕佛事。又〔下一ノ五十九丈〕亡僧大夜念誦云、維那出燒香、請鎖龕佛事。受請人、出班燒香、退身問訊、

次住持前問訊、轉東序前問訊、巡至班末問訊、次西序前問訊、然後與大衆、普同問訊、從西序末過、若見職頭首、各依本位空處過至龕右側立。堂司行者、以盤托鎖、候舉佛事畢、行者以鎖鎖龕畢、住持復位。

【一〇七一】蓋棺

①鎖龕又曰蓋棺。韻會〔含韵十四丈〕闔轄獵切、閉也。通作蓋。

②韓詩外傳〔八ノ十二丈〕云、孔子曰、學而不已、闔棺乃止。

③杜工部集〔千家十四ノ四十八丈〕簡蘇溪詩云、丈夫蓋棺事始定。

④佛通愚中和尚年譜〔八丈〕云、師參金山即休一日有亡僧、請耆宿并頭首、各演佛事。衆中有忌休厚於師者、俄於闍維場請蓋棺佛事。師卒出唱、〈云云〉一衆吐舌、諸方傳譽、是年二十五。

【一〇七二】掛眞

①忠曰、眞者眞儀。即遷化尊宿、肖像也。有兩處掛眞。一法堂掛眞。二山門首眞亭掛眞。

②敕修清規〔上二ノ廿九丈〕尊宿掛眞云、移龕就法堂。鎖龕已、請掛眞佛事。　又〔卅一丈〕云、龕至山門首、請眞亭掛眞奠茶湯俱有佛事。

③無門開和尚録〔下ノ六丈〕告香普説云。先師〈月林觀〉圓寂後、陳提刑諱貴謙、作喪主。臨時令爲先師掛眞。不容辭避。山僧棒起眞云、老賊一喝。虛空迸裂、儂家當下、如桶底脱。連伸三拜。納盡敗缺。這些怨恨、怎生消滅。而今高掛祖堂、千古號令不絶。

【一〇七三】舉哀

①敕修清規〔上二ノ廿九丈〕尊宿遷化云、主喪白云、堂頭和尚歸寂。理合舉哀。舉佛事罷、舉哀三聲、大衆同哭。小師列幕下哀泣。

②大清〔勅鈔五ノ廿三丈〕曰、理合舉哀者、非謂舉哀佛事。佛事畢、唱哀哀哀三聲。此爲舉哀也。

③圓悟勤禪師録〔二十ノ〕有爲佛眼和尚舉哀佛事。語尾云、要知末後句、分明普請。大衆齋聲舉。乃云哀哀。

④東漸清規〔三ノ十七丈〇勅鈔五ノ廿三丈〕云。東福定山和尚。辭世偈尾書云。煩堂頭和尚、舉哀。時住持性海和尚。爲舉哀佛事。論者曰、定山意、謂下火。但忌火言。故爲舉哀。而性海不諭本意可憾。

⑤　已下略録外書舉哀。

⑥梁書〔廿七ノ五丈〕明山賓傳云、山賓卒。昭明太子爲舉哀。賻錢十萬。布百匹。并使舍人王顒、監護喪事。又夏侯亶傳、亶卒於州鎮。高祖聞之、即日素服舉哀。

【一〇七四】奠茶湯

①敕修清規〔上二ノ廿九丈已下〕尊宿遷化、舉哀之後、有奠茶湯佛事。又對靈小參之後、有奠茶湯佛事。又眞亭掛眞之次、有奠茶湯佛事。又見起龕處。

【一〇七五】直靈

①守亡者龕曰直靈。

②敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云、直靈行者、每日上粥飯。

【一〇七六】伴夜

①大鑑清規［五十七丈］末後事儀云、入滅第三日荼毘。先第二日晚夜、慇懃供養。小師圍繞、終夜不寐。名曰伴夜、唯誦金剛經鳴磬。

【一〇七七】送亡

①敕修清規［下一ノ五十九丈］送亡云、凡出喪庫司預分付監作行者。辦柴化亡。差撥行僕。鐃鈸鼓樂。旛花香燭。擡龕喪儀一切齋備、堂司行者、隔宿覆住持兩序。掛送亡牌、次早、行粥、遍食椎後、再鳴椎一下云、白大衆。粥罷普請送亡。除守寮直堂外。竝當齋赴。謹白、

②大潅頂神呪經［六ノ十三丈］云、賢者阿難、問佛言、閻浮提界有幾種葬法。佛語阿難。葬法無數。吾今當爲略説。我此國土、水葬、火葬、塔塚之葬。其事有三。〈乃至〉震旦國中、人民葬法。莊嚴之具、金銀珍寶、刻鏤車乘。飛天仙人、以爲莊嚴。衆妓鼓樂、鐘鈴之音、歌詠讚歎、用爲愛樂。終亡者、身衣服具足。棺槨微妙、香烟苾芬。百千萬衆、送于山野。莊嚴山林、樹木鬱鬱。行行相對、無虧盈者。墳栢茂盛、碑闕儼然。人民見者、莫不歡欣。

③毘奈耶雜事［十八ノ一丈］云、佛言苾芻。身死。應爲供養。苾芻不知。云何供養。佛言、應可焚燒。鄔波離曰、如佛所説、於此身中、有八萬戸蟲。如何得燒。佛言、此諸蟲類、人生隨生、若死隨死。此無有過。身有瘡者、觀察無蟲。方可燒殯。欲燒殯時。無柴可得。佛言、可棄河中。若無河者、穿地埋之。夏中地濕、多有蟲蟻。佛言、於叢薄深處、令其北首右脇而臥。以草稕支頭、若草若葉覆其身上。送喪苾芻、可令能者、誦三啓無常經、并説伽陀、爲其呪願。事了歸寺、應可洗身。若觸屍者、連衣俱洗。其不觸者、但洗手足。

④行事鈔［下四之一ノ十九丈］瞻病送終篇云、中國四葬。水葬投之江流、火葬焚之以火、土葬埋之岸旁、林葬棄之中野、爲鵰虎所食。律中、多明火林二葬、亦有薶者。

⑤五分云、屍應薶之。若火燒、在石上。不得草上安。

⑥資持記、水葬飼魚鼈、林葬濟禽獸。諸部文中、但無水葬。〈忠曰、鈔所謂中國、謂天竺也〉

⑦忠曰、事鈔云、律中、多明火林二葬、亦有薶者者、謂其水葬稀少。非謂絶無。資持云諸部文中、但無水葬者、失矣。如予所援毘奈耶雜事。

⑧佛不聽塔下葬、四分律［五十二ノ廿三丈］云、彼於塔下、埋死人。佛言、不應爾。彼於塔下、燒死屍。佛言、不應爾。

⑨忠曰、中華亦有四葬。而人不自省察。却以火葬、爲佛氏之法。『列子』［七ノ四丈］云、晏平仲曰、既死、豈在我哉。焚之亦可、沈之亦可、瘞之亦可、露之亦可。衣薪而棄諸溝壑。亦可袞衣繡裳、而納諸石椁、亦可。

〈忠曰、焚火葬、沈水葬、瘞及衲椁土葬、露及棄壑、林葬、又此四葬、濟北集已辨〉

⑩周易上繫辭云、古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹、喪期無數。後世聖人、易之以棺槨、蓋取諸大過。此亦可見漢土古葬法也。

【一〇七八】津送

①送亡曰津送
②敕修清規［上二ノ廿六丈］尊宿遷化云、遺戒、一切佛事竝免。但擧無常偈、同亡僧津送。
③幻住菴清規［五十六丈］津送云、其餘袈裟鉢盂、并種種行李、抄劄既定、待出龕日、估唱錢物、入板帳、支收以爲津送。
④正宗贊百丈大智禪師傳云、老人作禮曰、某已脱野狐身。住在山後、敢乞依亡僧津送。
⑤一山曰、津發也。
⑥舊説［勅鈔十三ノ十五丈］曰、津送不必局送亡、送生人亦云津送、謂送人至津而止也。今謂送亡、蓋準生者也。
⑦忠曰、津字韻書無發也訓。餘謂、津送者、人之去。譬如舟發津、而人送之也。
⑧津字非局於送亡名。今略引數證。
⑨傳燈録［四ノ廿一丈］召賢會通禪師章云、師乞歸寧省。帝厚其所賜、敕有司津遣。
⑩禪林寶訓［上ノ廿四丈］云、晦堂曰、先師聞衲子省侍親老、氣色穆然、見於顔面、盡禮津遣。又［下ノ十丈］云、死心住翠嚴、聞覺範竄逐海外、道過南昌、激歸山中、迎待連日、厚禮津送。
⑪六學僧傳［廿一ノ九丈］宋道猷傳云、宋文帝問慧觀、生公頓悟成佛義、誰能復通者、觀以猷對。即詔臨川、津發至都。
⑫癡絶冲禪師録［上ノ］夏中普説［三丈ヲ］云、是時圓悟、道尊一代、子蒼先遣書、探圓悟口氣、然後津發妙喜、歸雲居。
⑬古林茂禪師録行實傳、省劄下建康、津發者再。
⑭翦燈餘話［四ノ十八丈］、芙蓉屏記云、高公贈崔英奴婢各一、津遣就道。
⑮朱子語録［十一ノ十一丈］云、逆亮臨江、朝臣震怖各津遣其家屬他走。

【一〇七九】押喪
①舊説［勅鈔七ノ二丈、又十三ノ廿三丈］曰、押管押也。都寺殿于喪事、點檢儀禮、令不亂行列也。〈又見職位類〉
②忠曰、押者、彈壓義。殿于送喪列行、鎮壓其擾亂矣。
③正字通云、押與壓通。
④敕修清規［上二ノ卅一丈］尊宿出喪云、主喪領衆、兩兩分出、左右俵散雪柳、齋歩竝行。母得挨肩交語、各懷悲感。都寺押喪。又亡僧送亡［下一ノ六十丈］云、維那隨龕、都寺押喪。

【一〇八〇】起龕
①敕修清規［下一ノ六十丈］亡僧送亡云、維那出燒香、請起龕佛事。擧畢、行者鳴鈸、擡龕出山門首。若奠茶湯、轉龕龕則向裏。安排香几、首座領衆、兩行排立、維那炷香、請佛事。候擧佛事而行。
②山菴雜録［上ノ四十一丈］云、天童西嚴和尚、蜀人。南游徧參、至徑山、見無準。機語相投、容入室。欲授藏主職、或者以力攘之。次日爲亡僧訥侍者起龕、怯衆一辭不吐。無準即令維那、請惠侍者起龕。惠至龕前、連喚訥侍者者三、人亦以爲怯。乃曰、三喚不應、果然是訥、頂門放出遼天鶻。無準黜或者、而以惠侍者、代其職。惠侍者即師也。

【一〇八一】轉龕

①送亡中路、有奠茶湯佛事。則暫轉龕向裏、見起龕處。

【一〇八二】轉骨

①敕修清規［上二ノ廿九丈］尊宿遷化佛事云、如衣鉢豐厚、每日奠茶湯、添轉龕轉骨等佛事。

②忠曰、轉骨者、在入塔時、即自寢堂起骨、向塔所時、中路轉回骨、向裏税下、行轉骨佛事。此局唯茶毘者。

【一〇八三】秉炬

①敕修清規［上二ノ卅一丈］尊宿茶毘云、喪至涅槃臺、喪司維那、俟都寺上香茶了、進前燒香、引小師、拜請秉炬佛事。

②舊説［勅鈔十三ノ十七丈、同六ノ廿九丈］曰、秉炬與下火同。然因師集賢録［十三ノ三丈五丈］分爲二。

③或曰、秉炬語長、下火語短。又下火一人行之、秉炬數人遞爲之。凡立地佛事、忌語繁、唯秉炬有及數句者。秉炬佛事、語長、而復數人行之。若用眞火、移刻易爐。故刻木炬塗朱、擬火狀、或紅綿繒造花、著炬首、而不點火、備更把焉。是故其語落句、可言火處、或言花而已。

④有弟子、爲師秉炬者、普燈録［四ノ六丈］黄龍祖心禪師入滅、黄庭堅強得法上首死心秉炬。〈詳職位類、主喪處〉

有子、爲母秉炬者。羣玉集［中峯不二鈔七］云、黄檗運禪師、得道之後、忽思省侍父母。一婆子出問。何處。曰江西。婆曰、我家亦有一子。在江西、多年不歸。因借宿、婆親爲洗足。運足心一誌甚大、婆失記是其子。次日運辭去。於三里外、説與鄉人云、吾母不識山僧。但母子一見、足矣。鄉人報知其母、母趕至福清渡。運已登舟、母一趺而終。運不回、但於隔岸、秉炬。法語云、一子出家、九族登天。若不生天、諸佛妄言。擲炬火然、兩岸人、皆見其母。於火焰中、轉爲男子身。乘大光明、上生夜摩天宮、後官司改福清渡、爲大義渡。

【一〇八四】下火

見秉炬處。

【一〇八五】茶毘

①釋氏要覽［下ノ五十三丈］云、闍維、或云茶毘、或耶維、闍毘。正梵云闍鼻多、此云焚燒。

②茶毘、又作荼毘。升菴外集［九十ノ廿一丈］云、茶即古茶字也。周詩記茶苦、春秋書齊茶、漢志書茶陵、顔師古陸德明、雖已轉入茶音而未易字文也。至陵羽茶經、玉川茶歌、趙贊茶禁以後、遂以茶易茶。

③戒環法華經要解［六ノ四十七丈］云、佛設火化之法。在已則顯三昧之力、播薫練之功。故化火自焚、舍利逆透。在人則掩臭腐之穢、免螻蟻之食、使其魄不滯其神清升。而此方以臥淤膿於荒郊、埋腐骸於朽壞爲是。且以火化爲不忍。方其穴地負土、全體而坑之、爲可忍耶。二皆出於得不已耳。達者觀之、一等歸盡。則臥淤埋腐、不若火化之愈矣。自道觀之、沈之可也。露之可也。衣薪而棄諸溝中、袞文而納諸石槨、無不可者奚足爲焚瘞之競。

③東都事略太祖本紀建隆三年曰、三月丁亥、詔曰、王者設棺槨之品、建封樹之制、所以厚

人倫而一風化也。近代以來、遵用夷法、率多火葬、甚愆典禮、自今宜禁之。

【一〇八六】収骨

①忠曰、荼毘之後、收拾化骨也。俗作取骨、訛矣。

②敕修清規［上二ノ廿一丈］尊宿荼毘云、小師鄉人法眷、守化收骨。齋罷鳴僧堂鐘、集衆、仍備儀從、迎骨、回寢堂、安奉、請安骨佛事。　又［下一ノ六十一丈］亡僧入塔云、荼毘後、執事人鄉曲法眷、同收骨以綿裹、袱包函貯、封定、迎歸延壽堂。〈位牌上去新字〉

【一〇八七】安骨

見收骨處

【一〇八八】起骨

敕修清規尊宿靈骨入塔云、鳴鐘衆集、都寺上香畢、請起骨佛事、送至塔所、請入塔佛事。

【一〇八九】入塔

見起骨處。

【一〇九〇】全身入塔

①忠曰、不火化而以全骸入塔也。

②敕修清規［上二ノ卅一丈］尊宿全身入塔云、龕至塔所、都寺上香茶畢、喪司維那、進燒香、引小師、拜請入塔佛事。

【一〇九一】入骨

①忠曰、蓋僧曰入塔、居家類曰入骨。

②西嚴慧禪師録［佛事一丈］淨日行者入骨佛事云、三日已前、可憐甘贄到南泉、五日已後、堪笑盧公連夜走。正今日赤骨律、四顧寥寥誰委悉、流水遶孤村、白雲抱函石。

【一〇九二】撒骨

①忠曰、蓋入骨撒土也。

②北磵簡禪師録［佛事七丈］有陸氏孺人撒骨佛事。

【一〇九三】撒土

①舊説［敕鈔六ノ卅丈○同七ノ六丈］曰、撒土者、全身入塔行之。或曰、盆内鋪紙、盛土呈之、佛事人接之、作撒土勢。或［東断三ノ十六丈］曰、以來錢土三物、撒之地上、即是入塔佛事也。或曰、古者有執鍬子行之者。吁唐土固不可有之、可笑。

②敕修清規［上二ノ卅二丈］尊宿全身入塔云、候掩壙一切畢備、然後請攪土佛事、迎眞回寢堂供養。

【一〇九四】掩土

①忠曰、全身埋葬也。

②義堂日工集〔四ノ六十三丈〕云、凡掩土之法、掘地作窖、切石布底裏、且隨龕揉側立、其畔岸塗以泥粉、塞其孔隙、是俗之所謂窀穸也。龕中立椅子、安身跏趺坐、椅前置机、机上陳設筆硯水瓶、平日資具、龕戸鎖封、鑰子折而棄之。投龕於窖中、覆以石蓋、亦粉其罅、掩土而深埋。立石浮圖而爲表。

③　應菴禪師録〔下ノ佛事一丈〕有爲留守樞密大資、掩土佛事。

【一〇九五】上祭

①敕修清規〔上二ノ廿九丈〕尊宿移龕云、中間法座上掛眞、安位牌、廣列祭筵、用生絹幃幙以備上祭。　又〔上二ノ廿九丈〕云、每日或兩次三次上祭、無拘。蓋檀越諸山、來有先後、隨時若法眷門人、上祭、到門、知客接已、即報喪司、隨送孝服、然後上祭。

②　忠曰、上祭則有祭文、見疏榜類。

【一〇九六】下祭

①碧巖録〔二ノ八丈〕云、陸亘大夫、作宜州觀察使、參南泉。泉遷化、亘聞喪入寺下祭。

②忠曰、下者猶言安置也。同下嶰之下義。宋高僧傳〔一ノ十八丈〕不空傳云、帝詔高品劉僊鶴、就寺置祭。〈止此〉乃下祭義也。　又録下字例。

③敕修清規〔上一ノ廿丈〕聖節云、燒香侍者、就佛座前下茶湯。

④　又歷代祖忌〔上一ノ卅七丈〕云、就祖堂下食一位。

⑤備用清規〔九ノ十五丈〕念誦致祭云、上祭人、龕右上湯茶。行者下。

⑥龐居士録云、石林一日、自下茶與居士。〈云云〉

【一〇九七】估唱

①估衣唱衣也。

②敕修清規〔上二ノ廿六丈〕尊宿遷化云、示疾、覺沈重、預請兩序勤舊、點對封收衣鉢行李、就留方丈、差公謹行僕看守以俟估唱。

③幻住清規津送云、衣盂估唱、板帳支收、既無間於死生、安可昧其因果。

【一〇九八】估衣

敕修清規〔下一ノ五十八丈〕亡僧估衣云、維那分付堂司行者、請住持兩序侍者、堂司、或就照堂、對衆呈過包篭、開封出衣物、排地上席内、逐件提起、呈過維那、估直、首座折中、知客侍者上單、排字號、就記價直在下、依號寫標、貼衣物上入籠。仍隨號依價、逐件別寫長標以備唱衣時用。

【一〇九九】唱衣

①敕修清規〔上二ノ卅二丈〕尊宿唱衣云、至期僧堂前或法堂、上下間設大衆坐位、中間向裏、横安長卓置筆硯大磬其上、鳴僧堂鐘集衆。〈乃至〉維那鳴磬一下白云、夫唱衣之法、蓋稟常規。新舊短長、自宜照顧、磬聲斷後、不得翻悔、謹白。〈云云詳彼〉　又〔下一ノ六十一丈〕亡僧唱衣云、扛包籠住持兩序前、巡呈封記於首座處請鎖匙呈過、開取衣物照字號、次第排席上、空籠向内側安。〈乃至〉維那解袈裟安磬中、却換掛絡。堂司行者、依次第拈衣物、呈過遞與、維那提起云、某號某物、一唱若干、如估一貫則從一伯唱起。堂司行者、接聲

唱衆中、應聲次第唱到一貫、維那即鳴磬一下云、打與一貫。餘號並同、或同聲應、同價者、行者喝住云、雙破。再唱起鳴磬爲度。堂司行者問定某人名字、知客寫名上單。侍者照名發標、付貼供行者、遞與唱得人、供頭行者、仍收衣物入籠、一一唱畢、鳴磬一下。

② 又唱衣鬮拈法、詳執務類。

③釋氏要覽〈下卅五丈〉送終云、唱衣、律亡僧輕物、差一五法比丘、分與現前僧、爲分不均故、佛聽集衆、先以言白衆、和許可賣共分。〈言五法者不隨愛、不隨瞋不隨癡不隨怖、知得不得亦名五德〉十誦律云、賣衣未三唱、比丘益價後心悔疑奪彼衣。〈疑是奪前剛價者〉佛言、未三唱竟、益價、不犯。目得迦云、佛言、初准衣時、可處中。勿令太貴太賤不應。待其價極、方與之。若不買者、故增價、犯惡作罪。大毘婆沙論、問命過比丘衣鉢等、云何得分。答、彼於昔時、亦曾分他如是財物、今時命過、他還分之。增輝記云、佛制、分衣本意、爲令在者見其亡物、分與衆僧作是思念。彼既如斯。我還若此。因其對治、令息貪求故今不能省察此出、翻於唱賣之時爭價上下、喧呼取笑以爲快樂、悞之甚也。仁者宜忌之。

④義楚六帖〈廿二ノ七丈〉云、薩婆多論云、估唱衣物、未三唱、得益價、三唱已、不應益、衆亦不得與、唱衣已、不得悔得罪。

⑤校定清規〈下ノ廿三丈〉云、唱衣、昔世尊在日、古佛示跡、號烏波難陀比丘、好聚劍衣盂。身死之後、佛令集衆以所畜之物盡情估唱、使現前比丘、觀前人慳鄙、爲他人所積、因茲有證二巢者、對治他緣、修己行。所有法衣、不唱、當分留與嗣法弟子。

⑥大川濟録有因唱衣上堂。

【一一〇〇】提衣

①唱衣、亦名提衣。

②敕修清規［上二ノ卅二丈］尊宿遷化唱衣云、開籠出衣鉢、依號排席上。請提衣佛事。

【一一〇一】對靈小參

敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化云、喪司維那、同小師懷香、詣客位、拜請主喪人、大夜對靈小參。預設座、候昏鐘鳴、鳴鼓集衆。兩序座下問訊〈如常式〉。主喪人、用帶行侍者燒香。無則聖僧侍者代之。小參下座、小師羅拜、致謝。

【一一〇二】贈別經

①大鑑清規［五十七丈］末後事儀云、今晚大夜、則午後道舊辨事、小師諷經、此名贈別經。以表生死道義也。

② 又見節時類、贈別夜處。

③毗奈耶雜事云、送喪苾芻、可令能者、誦三啓無常經、并說伽陀、爲其呪願。〈前送亡處詳引。〉

④ 忠曰、此即佛制、有送亡諷經事。

【一一〇三】龕前念誦

①敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿遷化云、首座領衆、龕前上香、立定、請奠茶湯佛事畢、山門維那念誦。

② 解者曰、此即此方所謂龕前念誦也。

【一一〇四】山頭念誦

①敕修清規［上二ノ卅一丈］尊宿荼毘云、喪至涅槃臺、〈乃至〉秉炬佛事、山門維那念誦。

②　解者曰、是即山頭念誦也。［敕鈔七ノ三丈］古劍曰、大唐火浴、多在山頭。故曰山頭念誦。

③敕修清規［下一ノ六十三丈］亡僧板帳式云、參拾貫、維那山頭佛事。

④　解者曰、即謂山頭念誦也。

⑤幻住菴清規［六十三丈］云、凡對靈回向、但入龕宿夜念誦、山頭念誦、此三遍、公界回向、稱亡僧兩字名。

【一一〇五】追薦

①忠曰、俗作追善、非也。

②　丹鉛總録［十九ノ十一丈］云、薦者、祭之名。士無田則薦、是也。

③慈受深禪師慧林録云、只如今日、了初侍者、追薦二親。試問諸人、且道、他父母、在地獄中受苦耶、在人天受樂耶。

④宋史禮志［志ノ七十六ノ廿八丈］云、及周朝忌日、尚有追薦。

⑤春渚紀聞云、明皇時、太眞妃得白鸚鵡。聰慧可愛。妃每有燕遊、必置之輦竿、自隨。一日鸚鵡、忽低首愁慘。太眞呼問之、云、鸚鵡夜夢甚惡。恐不免一死。已而太眞妃出後苑。有飛鷹、就輦攫之而去。宮人多於金花紙上、寫心經、追薦之者。

⑥灌頂十方淨土經［灌頂經十一ノ四丈］云、命終之人、在中陰中、身如小兒。罪福未定。應爲修福、願亡者神。使生十方無量刹土。承此功德、必得往生。　又［六丈］云、普廣菩薩言、衆生不信三寶、不行法戒等、命終墮三塗八難、親族爲修福不。佛言、七分之中、爲獲一也。何故爾乎。緣其前世不信道德故、使福德七分獲一。若以亡者嚴身之具、堂宇室宅、園林浴池、以施三寶、此福最多、功德力強。可得拔彼地獄之殃、便得解脱、往生十方佛土。［畧鈔］

⑦法苑珠林［七十七ノ十六丈〇灌頂經乎］云。往生經云、亡後作福、死者七分獲一。餘者屬現造者。

⑧　宗鏡録［四十八ノ十三丈〇攝論乎］云、問、若言須與所熏和合一處、方名能薫者。且如先亡父母、及先亡子孫等、後人爲作功德。此亦是熏他識。以獲福故。如何不許。答、此有二解。一云、此但爲增上、令亡者自發心、非熏他識。二云、七分之中、許獲一分。難只此所獲一分功德、便是此人造福、他人受果、應乖唯識義。答、有五力、唯識不判。一定力、二通力、三借識力、四大願力、五法威德力。

⑨優婆塞戒經［五ノ六丈〇珠林七十七ノ十三丈引］云、佛言、或有説言、子修善法、父作不善。因子修善、令父不墮三惡道者、是義不然。何以故。身口意業、各別異故。若父喪已、墮餓鬼中、子爲追福。當知即得。若生天中、都不思念人中之物。何以故。天上成就勝妙寶故。若入地獄、身受苦惱、不暇思念。是故不得。畜生人中、亦復如是。若謂餓鬼何縁獨得、以其本有愛貧慳悋故。墮餓鬼中、既爲餓鬼、常悔本過、思念欲得。是故得之。若所爲者、生餘道中、其餘眷屬、墮餓鬼者、皆悉得之。是故智者、應爲餓鬼、勤作福德。

⑩大毘婆沙論［十二ノ十二丈〇百五十二套］云、生聞婆羅門白佛言、喬答摩、我有親里。命過、欲施其食。彼爲得我食不。世尊告言、此事不定。所以者何。諸有情類、有五趣別。若汝親里、生地獄中、食地獄食、以自存活。彼不能受汝食。生傍生趣、天趣、人趣、亦復如

是。若汝親里、生鬼趣中、則能受汝所施飲食。婆羅門言、若我親里、不生鬼趣、所施飲食、誰當受之。佛語彼言、餓鬼趣中、無汝親里、無有是處。乃至廣說。

⑪ 冥報記［中ノ九丈］云、眭仁蒨、問鬼成景曰、人死當分入六道、那得盡爲鬼。景曰、君縣内萬餘戸、獄囚常二十人已下。萬戸之内、五品官無。九品已上官、數十人。六道之内、亦一如此耳。其得天道、萬無一人。如君縣内、無一五品官。得人道者、有數人。如君九品。入地獄者、亦數十。如君獄内因。唯鬼及畜生、最爲多也。如君縣内課役戸。就此道中、又有等級。因指其從者曰、彼人大不如我。其不及彼者尤多。

⑫ 忠曰、世尊說應爲鬼道作福善。而諸道中、鬼畜居多之理、景鬼之言、盡矣。審惟彼此、追薦之業、不可廢焉。

【一一〇六】大行追嚴上堂

① 忠曰、天子追薦上堂也。

② 史記［十一ノ五丈］景帝紀註云、服虔曰、天子死、未有謚、稱大行。

③ 又見節時門、大夜處。

④ 希叟曇禪師［廣録］雪竇録［七丈］大行追嚴上堂云、統御金輪四十年、拱垂衣化育黎元。萬機休罷昇遐去、四海無思不斷魂。〈云云〉

【一一〇七】水陸會

① 釋門正統［四ノ七丈］云、水陸者、取諸仙致食於流水、鬼致食於淨地之義。亦因武帝夢一神僧、告曰、六道四生、受苦無量。何不作水陸、普濟羣靈。諸功德中、最爲第一。帝問沙門、咸無知者。唯誌公勸帝、廣尋經論、必有因緣。於是搜尋貝葉、置法雲殿、早夜披覽。及詳阿難遇面然鬼王、建立平等斛食之意、用製儀文。三年乃成。遂於潤之金山寺、修設。帝躬臨地席、詔祐律師宣文。世涉周隋、茲文不傳。唐咸亨中、西京法海寺英禪師、異人之告、得其科儀、遂再興焉。我朝蘇文忠公〈軾〉重述水陸法像贊。今謂之眉山水陸。供養上下八位者、是也。熙寧中、東川楊鍔、祖述舊規、又製儀文三卷、行於蜀中。最爲近古。然江淮京浙所用像設、一百二十位者、皆後人踵事增華、以崇其法。至於津濟一也。

② 事物紀原云、今釋氏教中有水陸齋儀。按其事始出於梁武帝蕭衍。初帝居法雲殿。一夕夢、僧教設水陸齋。覺而求其儀、而世無其說。因自撰集銓次。既成、設之於金山。實天監七年也。大抵取救焰口經事云爾。

③ 釋氏資鑑［六ノ卅丈］云、唐高宗咸亨二年、西京法海寺英禪師、有異人、來謁曰、弟子知有水陸齋、可以利益幽明。自梁武歿後、因循不行。今大覺寺、吳僧義濟、藏此儀文。願師往求。以來月十五日、於山北寺、如法修設。苟釋狴牢、敢不知報。英公尋詣濟處、得儀文以歸。即以所期日、於山北寺修設。次日曛暮、向者異人、與十數輩來謝曰、弟子即秦莊襄王也。又指其徒曰、此范睢、穰侯、白起、王剪、張儀、陳軫、皆秦臣也。咸坐本罪、幽囚陰府。大夜冥冥、無能救護。昔梁武帝、於金山寺設此齋時、前代弑紂之臣、皆免所苦。弟子爾時亦暫息苦。然以獄情未決、不得出離。今蒙吾師設齋、弟子與此輩、并列國諸侯、衆等、皆乘善力、將生人間。慮世異國殊、故此來謝。言訖遂滅。自是儀文布行天下、作大利益。〈贇師葦江集〉

④ 月江印禪師録［下ノ普說十二丈］朝廷金山寺建水陸會普說云、大元佛心聖主、於楊子江、建金山萬僧之海會、修水陸無礙之大齋。披閱五千四十八卷之尊經、講演教禪、直指難思之

妙法。〈云云。廣説〉復舉、梁武帝夢、神僧告曰、六道四生、幽囚者衆。何不建水陸大齋、而濟拔之。帝既寤、詔十大高僧、披尋大藏、撰成儀文、始於金山、建此大會。於初夜分、悉停燈燭、帝親臨筵禱曰、若此儀文、理協聖凡、願我拜起、燈燭自明。如未符聖意。燭暗如故。帝一拜、燈燭皆明。二拜、宮殿震動。三拜、天雨寶花。當時靈異、不可勝數。至於歴代、修建顯驗猶多。當今佛心天子、以梁武之心爲心、特降御香七寶綵段、修設齋供、建此大會。宰相百官、光臨法會。諸山碩徳、共闡玄音。凡聖混融、人天交接。直得娑竭羅龍王、從海涌出、親獻寶珠、天帝釋空中雨花、殷勤贊嘆。

⑤佛祖統紀［卅四ノ十二丈］録梁武英師事訖、述曰、昔眞隱史越王、嘗過金山。慕水陸齋法之盛、乃施田百畝、於月波山、專建四時水陸、以爲報天地君親之舉。且親製疏辭、刻石殿壁。撰集儀文、刊板于寺。既而孝廟聞而嘉之、賜以水陸無礙道場宸翰、扁于殿。逮今百年、修供惟謹。去月波里所、有梵苑曰尊教。師徒濟濟、率沙門族姓三千人、施財置田、一遵月波四時普度之法。先是尊教同人有謂、越王疏旨之辭、專爲平昔仕官、報效君親之舉。美則美矣。而於貴賤貧富、未見平等修供之意。乃力挽志磐、續成新儀六卷。推廣齋法之盛、而刻其板、復依準名位、繪像幢者、二十六軸。及今創立齋會。於是儀文像軸、皆得其用。時主其事者、寺沙門處謙、清節、文學師竑。以法施者、月波住山宗淨也。以文字施者、則志磐也。當願十方伽藍、視此爲法、大興普度之道。

【一一〇八】悲濟會

①忠曰、水陸會、又言悲濟會。蓋慈悲拯濟之義。

②應菴華禪師報恩光孝録［三丈］悲濟會水陸陞堂云、大智洞明、體無去住。明逾日月、寛若太虚。天地以此爲覆載、日月以此爲照臨、山嶽以此爲崔嵬、江河以此爲流注、賢聖以此爲威靈、凡夫以此爲安養、陣亡以爲超昇、冤讎以此爲解脱、諸佛以此爲示現、祖師以此爲單傳、諸人以此爲悲濟。乃至以拄杖卓一卓云、願今得果成寶王、還度如是恒沙衆。

【一一〇九】施食法

①敕修清規［下二ノ十七丈］月分須知云、七月十五日、晩設盂蘭盆會。諷經施食。〈又見施餓鬼食處。〉

②幻住菴清規［六十五丈］載普施法食文。與日本禪林所行異也。

③救拔焰口餓鬼經［大藏一覽六ノ廿一丈引〇九十九套〇施食通覽六丈］云、阿難獨居靜處。中夜忽見一餓鬼、名曰焰口。口中火然、咽如針鋒。白阿難言、汝三日後、死我趣中。阿難惶怖、問何方便。餓鬼答言、汝於明日、若能布施百千那由他恒河沙數餓鬼、并百千婆羅門仙等、以摩伽陀國所用之斛、各施一斛飲食、并及爲我供養三寶、汝得增壽、令我離於餓鬼之苦、得生天上。阿難白佛。佛告阿難、勿怖我能方便。有陀羅尼、名曰無量威徳自在光明勝妙力。即能充足俱胝那由他、百千恒河沙數餓鬼、及婆羅門仙等、上妙飲食、一一皆得摩伽陀國所用之斛、七七斛食。能食彼衆、解脱苦身得生天上。阿難、汝今受持、福徳壽命、皆得増長。説陀羅尼曰、曩謨薩縛（ナムサボ）、怛佗孽跢（トトキヤト）、嚩路枳帝（ホリヨキチイ）、唵三跋羅三跋羅（エンモモキ）吽。佛告阿難、若人欲求長壽福徳増榮、滿足檀波羅蜜、每於晨朝、及一切時、悉無障礙。取一淨器、盛以淨水、置少飲麨及餅飯等、右手按器、誦前陀羅尼七徧。〈云云。廣説、不能具引〉

【一一一〇】施餓鬼食

①施食具言施餓鬼食。
②釋門正統［四ノ六丈］云、若夫施食之法、又非一切人天所知。惟如來、以大慈普覆、不忍一切含靈、受其飢餓苦惱。故假面然鬼王緣起、令阿難尊者、以一摶食、誦咒施之。今緇素通行。謂之施餓鬼食、經律所出、有三不同。一、涅槃經、謂之曠野鬼。二、焰口經、謂之焰口鬼。三、鼻奈耶律、謂之訶利帝母。皆由如來善權示迹、俾後之學者、依而行之。觀其所行、用力甚約、收功甚博。回視夫靈輒倒戈、漂母返哺之儔、誠有天淵之間。所謂曠野鬼、并訶利帝母者、今爲佛弟子、每食必出生飯者、是也。所謂焰口鬼、及婆羅門仙者、今爲佛弟子、至心所辨、斛食者、是也。

【一一一一】開甘露門
①施食法、亦曰開甘露門。
②幻住菴清規［六十五丈已下］詳載其法。

【一一一二】冥陽會
①忠曰、蓋施食法也。與水陸會不同。冥者、謂冥界餓鬼衆。陽者、謂陽界婆羅門仙衆。今普供施彼羣生。故名冥陽會。是故日本藝州佛通寺施食會之牌、第二世一笑和尚書曰、天地冥陽一切靈位。
②因師集賢録［十五ノ二丈］云、建水陸冥陽二會、設大齋、獻天地水府萬靈。
③物初賸語［十ノ十一丈］育王植善庫記云、都鈐邵君謂、夫導往福存、莫善於冥陽大會。乃年設之、斥己財千五百緡足有奇。入寺之植善庫、存本取息、以足厥用。

【一一一三】頓寫
①忠曰、一座疾書法華經、爲頓寫矣。此方薦亡修之。或謂、昉於唐僧法僧行。或謂、起於日本法藏也。
②竺仙仙禪師眞如録［五丈］爲征夷大將軍仁山大居士預修拈香云、命僧頓書妙法華經一部、及仁山大居士、親手躬書。
③愚中及禪師艸餘集［五ノ佛事上ノ十五丈］頓寫法華經祝語云、中有純孝沙門、而爲一日頓寫之權輿。良有深旨。可不信哉。〈乃至〉嚴飾齋會、延之僧衆、於一日内、同心戮力、頓書八軸。以伸供養。　又［五ノ佛事十三丈］供養頓寫法華經語云、欽惟佛所護念、一乘妙法蓮華經、開五種行門中、以書寫功德爲勝。書寫功德中、以頓寫功德、爲最尊最上者。久矣。
④空谷應禪師録［常光國師上ノ四十四丈］起峰大祥忌陞座云、預就西山景德、開建道場、敦請僧衆、三日看閲五部大乘經、計二百卷。一日頓寫大乘妙典、六萬餘言。
⑤　僧祥法華傳記［八ノ十五丈］云、絳州有孤山。西河造立堂舍。多樹林木、頗得山居形勝處也。永徽［唐高宗年号］中、有二人僧、同房而住。一人名僧行、行三階佛法。一人名僧法、行法華三昧。二人要契、先亡者、必告生處、如昔無著世親。後僧行先亡。雖思慕之、三年無示告生處。堂有觀音像。斷食祈誓、必有感應。僧法斷食五日、在堂不出戸外。至五日夜、夢有一沙門、謂法曰、汝執取我裳角。將見僧行生處。即執裳角、須臾至地獄。猛火熾然、不可親近。鐵網七重、而覆其上、鐵扉四面、閉甚固。百千沙門、犯淨戒、不調身心者、在中受苦。沙門謂防守羅刹曰、此中有沙門僧行不。答、有。又曰、欲見。答、不可見。沙門語羅刹、昔同行思慕而來。我等佛子。汝如何固惜。答、

若欲見、隨意即見。時羅刹、以鉾貫黒炭、示之曰、此是僧行也。僧法見黒炭、流泣。沙門釋子、如何受重苦。願欲見昔形。時羅刹唱活、宛如平生。但身體燒爛。謂法曰、吾昔貢高恣犯。汝將救吾苦。法曰、如何救之。答、爲造法華經。曰、如何造。答、一日之中、以可畢其功。法曰、貧道豈可一日中畢。答、吾苦不可忍。刹那難過。非一日猛利行、焉得苦息。爾時羅刹瞋呵、以鉾貫之、投地獄中。法隨前沙門而出。夢覺、即日捨衣鉢資、雇書生四十人、一日寫之、供養禮拜。其夜又夢。前沙門來告、僧行早離地獄苦、近生第二天。

⑥

元亨釋書〔四ノ十五丈〕法藏傳云、天帝屈法藏、慶讃紺瑠璃觀自在像。藏曰、所生之母、去閻浮久。不知報生爲何處乎。天威嚴尊、柄持此權。乞令貧道、詳得見知。言已潛然。於是天帝、敕一天子、將藏往燄王宮。燄王受天敕、檢罪簿、藏之母、在燒熱地獄。乃付冥使、令藏至獄所。四旁燄煙、叫呼音不堪聞。獄卒開一鐵扉、猛火迸出、不可嚮邇。獄獄卒以鐵鉾、探釜底、罥一物而出。宛似炭頭。置藏前。曰、是師之母也。藏心神奪褫、不能正視。熟看似人。藏白母言、生平何殃、受此極苦。對曰、只是生育兒孩、癡愛之故耳。藏曰、修何拔濟。對曰、冥中資糧、無過法華。願子爲我、一日寫之。母子相語之間、獄卒曰、獄中無閑時。今已移刻、何其久乎。便捉引母。母把藏袖大叫。獄卒強牽。以鉾貫母、擲釜中。藏見之、放身投地、悶絶而臥。冥使曰、是師母自作。非他所爲。早歸閻浮、促拯濟方。天使又把藏手置肩、須臾在東大寺西室。藏乃一日内寫妙法華、回母冥資。其夜夢、莊服之天告曰、我因經功、已出苦輪、生忉利宮。是人命終當生忉利言、不食乎哉。

⑦

無住和尚雜談集〔七ノ十丈〕云、南都大安寺勤操僧正、曾夢、一僧告曰、請爲我及吾母、一日書寫法華經供養之、則庶幾得超拔矣。操覺、而一如其言。南都以此爲一日經縁起。〈操即弘法大師求聞持之師也。〉　又云〔七の十丈〕、一日經、未見經文本説。日本傳曰、昔信州國司、任滿還京。一蛇相隨逐、趁之不去。從者太惡之曰、請殺之。國司曰、勿殺。必有故。夜夢、蛇啓曰、我於君、無禍福。但君輜重内、有長時怨夫。願捉而與我。覺後開櫃、見有一鼠。從者曰、所謂怨夫、必是也。欲執與蛇。國司仁慈、亦不許。便請近寺僧、一日寫妙經一部、供養之、以濟拔。其後蛇鼠同時死。復夢、白衣二人來、告言、吾輩多生怨害、輪環無窮矣。今蒙君慈濟、共生忉利天。歡喜禮謝、而昇天去。

【一一一四】疾書

①頓寫亦曰疾書。

②忠曰、疾書法華、則表猛利行。又大品般若經〔十五ノ廿三丈〇又放光十五ノ九丈〕云、若欲書是般若波羅蜜時、應當疾書。〈止此〉此是恐魔障故也。然疾書文字、亦有據。

【一一一五】漸寫

①以數日書法華也。

②竺仙仙禪師淨妙錄〔六丈〕足利殿觀心公、周年忌陞座云、同音誦持秘密伽陁、并其頓書漸書、妙法華經。〈云云〉

③愚中及禪師卟餘集〔六ノ九丈〕開光禪門拈香云、沼田居住某、預爲先考某、大祥忌辰追薦、漸寫法華經二部。

【一一一六】逆修

①灌頂隨願往生十方淨土普廣菩薩所問經［灌頂經十一ノ五丈〇五十七套］云、普廣菩薩白佛言、若四輩男女、善解法戒、知身如幻、精勤修習、行菩提道、未終之時、逆修三七、然燈續明、懸雜〈高麗藏作繒〉幡蓋、請召衆僧、轉誦尊經、修諸福業、得福多不。佛言、普廣、其福無量、不可度量、隨心所願、獲其果實。

②雲棲正訛集云、世人未死、先作七七小祥大祥經懺道場名曰預修、此訛也。言預修者、令人趁色身尚在、早自修持、莫待臨渴掘井、逼餒蓄田也。且請他課誦、孰若自我修之之爲勝乎。然肯破慳囊而作佛事。良愈於不爲者。此理或通。高明之士、自不應爾。

③忠曰、逆修説出乎隨願往生經、袾宏以爲俗傳而剥其妄、恣作胸臆論矣。袾宏不遠攷往生經尚可原之、何不近覽佛祖統紀、釋氏要覽所載哉。所謂隨願往生經、在灌頂經第十一卷。又經三七、統紀、要覽、訛寫作生七。寂照堂谷響集［八ノ十丈］云、生七者、謂累七齋也。〈止此〉從訛文無所辨亦是不閲本經之過也。

④竺仙仙禪師眞如錄［四丈］、爲征夷大將軍仁山大居士預修拈香云、奉佛弟子、征夷大將軍、乙己本命、當於今歲、謹發善念、預修功課。於昨三月二十七日、以爲初七、至於七七已過、百日復滿、當於今月初六日爲一周忌。乃倩畫工、圖繪大勢至菩薩聖像一尊、命僧頓書妙法華經一部、及仁山大居士、親手貽書、特命比丘某、拈此信香、供養盡虚空界、一切三寶。〈云云〉

⑤愚中及和尚年譜［廿五丈］云、應永十六年、己丑、八月十七日、師示微疾。先是相公、請預修佛事。涓取廿四日、知事因師不安、屢乞前日營辨。師云、相公涓取某日。老僧行脚、有何妨乎。廿四日、設大會齋、諸般佛事畢、自書香語、付持實、速歸京師。持實迫入滅時到而不忍去、日將晡。師知持實未去叱曰、老僧行脚、決在明日。預修者、延壽之善也。這回以慶而復命。豈可兼凶而聞乎。速去速去。

【一一一七】物故

①劉熙［八ノ六丈］釋名云、漢以來、謂死爲物故。言其諸物皆就朽故也。

②前漢書［五十四ノ十六丈］蘇武傳、物故註云、師古曰、謂死也。言其同於鬼物而故也。一説不欲斥言、但云其所服用之物、皆已故耳。而説者妄欲改物爲勿非也。

③後漢書［傳六十九上ノ十三丈］牟長傳、物故註云、按魏臺訪問物故之義高堂隆。答曰、聞之先師、物無也、故事也。言死者無復所能於事故也。

第二十類言語門

【一一一八】尊候

①敕修清規［上二ノ四丈］告香云、參頭云、即日時令謹時、共惟堂頭和尚、尊候起居萬福。又［下一ノ卅九丈］謝掛搭云、參頭云、移刻、恭惟堂頭和尚、尊候起居多福。

②舊説曰、候者脈之證候也。又曰、八刻爲一辰。十二辰爲一日夜。五日爲一候。三候爲一氣。六氣爲一時。四時爲一歲。每候人脈變換。故問人起居曰尊候如何。言無有病惱也否也。

③馬祖一禪師錄［四家一ノ五丈］云、馬祖示疾、院主問、和尚近日尊候如何。師曰、日面佛月面佛。

【一一一九】不審

①忠曰、不審、禮話也。其義見僧史畧。須與珍重交看。

②　困學紀聞［十九ノ七丈］云、不審出韓詩外傳。〈止此〉此但原語本據、不必拘禮話。

③敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、參頭入方丈、請住持、出就坐、參頭進前挿香、退身歸位、緩聲喝云、參。衆低聲同云、不審。齋禮三拜。　又［下一ノ八丈］寮元云、每日粥罷、〈乃至〉茶頭喝云、不審。大衆和南。

④僧史畧［上ノ十八丈〇要覧中二丈引小異〇敕鈔八五十丈用之］云、如比丘相見、曲躬合掌、口曰不審者何。此三業歸仰也。〈曲躬合掌身也。發言不審口也。心若不生崇重、豈能動身口乎。〉謂之問訊。其或卑問尊則不審、少病少惱、起居輕利不。上慰下則不審、無病惱乞食易得、住處無惡伴、水陸無細蟲不。後人省其辞止曰不審也。大如歇後語乎。

⑤舊説［敕鈔一ノ十二丈］曰、單言不審猶是歇語。日本禪林、但合掌低頭而不審二字亦不唱。母乃太簡乎。

⑥　已下、畧舉事證。

⑦臨濟玄禪師錄［四丈］云、麻谷拽師下座、麻谷却坐。師近前云、不審。

⑧雲門偃禪師錄［中六丈］室中語要云、舉夾山語云、百草頭上、薦取老僧。師合掌云、不審不審。

【一一二〇】珍重

①敕修清規［上二ノ九丈］訓童行云、屏息拱聽規誨畢又三拜。參頭喝云、珍重。衆齊低聲和、問訊而退。

②僧史略［十九丈］云、臨去辭曰珍重者何。此則相見既畢、情意已通、囑曰珍重。猶言善加保重、請加自愛。好將息。宜保惜、同也。

③釋氏要覧［中ノ六丈］云、釋氏相見將退、即口云珍重。如此方俗云安置也。言珍重即是囑云善加保重也。若卑至於尊所、尊長命坐、及受經。後去、即不云珍重。但合掌俯首、示敬也。

④　已下。畧舉事證。

⑤傳燈錄［廿六ノ卅四丈］瑞鹿先禪師章云、初夜唱禮了、僧堂前喝珍重。僧堂前喝珍重了、和尚處問訊。　又［十一ノ廿三丈］國清院奉禪師章云、如何是出家人本分事。師曰、早起、不審、夜間、珍重。

⑥續燈錄［二ノ六丈〇又会元十五ノ廿三丈］香林遠禪師章云、問如何是平常心。師云、早朝不審。晚後珍重。

⑦傳燈錄［七ノ十七丈〇六学六ノ卅六丈］無等禪師〈嗣馬祖一〉章云、師住武昌大寂寺。一日大衆晚參。師見人人上來、師前道不審、乃謂衆曰、大衆適來聲向什麽處去也。有一僧豎起指頭。師云珍重。　又［十六ノ五丈〇又聯灯廿一ノ六丈］嚴頭豁禪師章云、夾山會下一僧、到石霜入門便道、不審。石霜曰、不必。闍梨、僧曰、恁麽即珍重。又到嚴頭如前道不審、師曰、嘘。僧曰、恁麽即珍重。方廻歩。師曰、雖是後生亦能管帶。

⑧續燈錄［五ノ又六丈〇又会元十六ノ二丈〇続古宿二天衣録五丈］天衣懷禪師章云、上堂、大衆集定。云上來打箇不審、能消萬兩黄金、下去打箇珍重亦消得四天下供養。若作佛法話會、滴水難消。若作無事商量、眼中著屑。且作麽生即是。良久去、還會麽、珍重。

⑨　忠曰、或問、已言早起不審、却晚參道不審、何也。答曰、凡上來、見師主則不拘早

晩言不審。下去則言珍重。若常隨者早起見時、可言不審。夜間退時、可言珍重而已。

【一一二一】降重

①敕修清規［上二ノ十丈］迎待尊宿云、請客侍者、具状詣客位。稟云、方丈拜請和尚、今晩就寢堂、特爲獻湯、伏望慈悲降重。

②舊説［敕鈔五ノ十四丈首書］曰、請和尚則言降重。請首座［敕修下二ノ九丈左］則言光降。蓋分尊卑也。

③忠曰、按庫司頭首、特爲新掛搭茶云、衆慈同垂降重。〈敕修〉［下一ノ四十丈］故降重語、不局請和尚也。

④品字箋［癸ノ七十六丈］云、重物之不輕者也。又愼重、厚重、遲重、持重、皆不輕舉妄動之意。論語、君子不重則不威。

【一一二二】光降

①敕修清規［下二ノ九丈］庫司四節、特爲首座大衆湯云、都寺令客頭行者備盤袱爐燭、詣前堂首座前稟云、今晩就雲堂、特爲首座大衆點湯。伏望慈悲、特垂光降。

②又見降重處。

【一一二三】拜覆

①敕修清規［下一ノ卅九丈］謝掛搭回禮榜云、堂司行者、某拜覆。

②禪居附録［卅七丈］云、希陵頓首拜覆澱山堂上和尚、月江禪師席前。

③忠曰、覆申覆也。俗訛爲反覆酬答之義非也。

④前漢書［五十ノ四丈］馮唐傳云、賞賜决於外、不從中覆也。註師古曰、覆、謂覆白之也。音芳目反。

⑤正字通［申下四十六丈］云、又官府吏文之、申請于上者。曰申、曰覆。馮唐傳云云。

【一一二四】承准

①敕修清規［下一ノ卅九丈］謝掛搭回禮榜云、客頭行者、某承准。

②忠曰、承堂頭命而依準其所命也。

③居家必用［卒集ノ七丈］云、承、受納其事也。　又云、準法則也。

【一一二五】一中

①敕修清規［下一ノ十八丈］新首座、特爲後堂大衆茶状云、今晨齋退就雲堂、點茶一中、特爲後堂首座大衆。　又［下一ノ四十丈］方丈、特爲新掛搭茶状云、今晨齋退就庫司、點茶一中、特爲伏望衆慈、同垂降重。

②聯燈會要［二十ノ廿八丈］洞山价禪師章云、師於咸通十年三月一日剃沐、端然坐逝。大衆號慟。移時、師忽開眼云、夫出家之人、心不附物、是眞修行、勞生息死、於悲何有。乃令主事、辨愚癡齋一中。蓋貴其戀情也、至八日方坐逝。

③忠曰、傳燈［十五ノ廿五丈］作一普、一普者、普及一堂也。

④一山［傳灯鈔十五ノ五丈］曰、表衆人愚癡。不了生死本空之理。故曰愚癡齋。一中、一堂之謂也。

⑤ 舊説紛紜解一中。或［敕鈔十四ノ十四丈］謂、中字平呼。盞有［敕鈔九ノ卅丈首注］大中小三品而茶湯用中盞。即如馬上盞者、故云一中矣。或謂、一座之義。或謂、中者滿也。誠齋［日件上ノ七十二丈］詩、有齋一中語。或謂、夢語集云、近入唐人、問彼土尊宿。答曰、中與鐘音同。鍾、盞也。一中即是一盞義。〈止此〉忠謂、數説皆未是。

⑥ 忠曰、一中者中坐一筵之義也。臥雲夢語集云、常光國師、曾講傳燈録及法眼傳中、中坐茶筵未起之語、國師曰、中者如茶湯榜一中之中也。予謂、蓋特爲座、必在中央。故謂一中也。〈止此〉瑞溪所解、得中正矣。

⑦ 已下。略擧中坐之證。

⑧ 敕修清規［上二ノ十一丈］迎待尊宿云、若法眷尊長至、先講諸山相見禮、送客位、請居中座。住持挿香禮拜、講法眷禮、方丈内坐、當讓中位。　又云、若嗣法、辨事法姨相訪、當躬至方丈。住持即令鳴僧堂鐘集衆人事、先請住持中坐、行弟子法眷禮。

⑨ 解者［敕鈔五ノ十五丈］曰、中位、主人所居、請令居之示尊敬也。住持讓自中位、尊法眷也。

⑩ 傳燈録［廿四ノ六丈］清涼益禪師章云、初開堂日、中坐茶筵、未起、四衆先圍繞法座。

⑪ 南禪規式［下ノ六十一丈。敕鈔五ノ十五丈前出引空華］開堂中座云、寢堂有上中下三座。中座爲上。傳燈清涼章、中坐茶筵是也。

⑫ 忠曰、可言寢堂有左右中三座、已有上座。復言中座爲上、造語拙矣。

⑬ 瑩山清規［下ノ卅三丈］云、半夏、或法堂或方丈齋、立中座、接名德等、此謂中筵齋、或施主接之。

⑭ 忠曰、中筵齋儀、見禪苑清規［六ノ四丈］。但未辨中義而今瑩山、以立中座解中筵則亦可以證一中也。

⑮ 俗儀亦以中坐爲崇賓。　湖海新聞［前十ノ五丈］云、海東伯、視浙西憲洪起畏曰、是我前生父母。若不遇此恩人、安能有今日當貴。掖憲中坐、把盞周密問勞浹洽。

⑯ 又徽宗畫題一中字。事雖不涉且録之。　臥雲日件録［上七十二丈］云、在鹿苑寺看宋畫題曰、宣和殿御製一中。未知何義也。　忠曰、蓋惟精惟一、允執厥中〈大禹謨〉之語、用爲瘦名也。

⑰ 歐陽文忠公全集［八十六ノ十丈］内制集云、開寶寺福勝院、開啓道場。於乾元節日、支散袈裟、并設大會齋一中。

⑱ 江湖紀聞前集［八ノ一丈］秦檜陰獄章云、就城隍廟。建水陸一中。

⑲ 中峯雜録［上ノ十三丈］示衆云、前日之晚、首座與維那到菴言、結夏在近、請爲衆道話一中。

⑳ 忠曰、此一中似一座義、然且隨俗談耳。未必求正義。

㉑ 梁高僧傳［十二ノ十四丈］法莊傳云、元嘉初、出都止道場寺。性率素、止一中而已。

㉒ 忠曰、此言日中、一食也。

【一一二六】諸色

① 忠曰、猶言種種也。

② 敕修清規［下二ノ十七丈］月分須知云、歲終、結呈諸色簿書。

【一一二七】公用

①忠曰、凡公界器物等、不可妄私用、此謂公用。
②元經世大典［元文類四十ノ廿五丈］賦典有公用錢篇。

【一一二八】眼同
①舊説［敕鈔十二ノ十四丈］曰、眼一同觀而爲事也。　忠曰、蓋元朝俗語。
②　或［鈔八ノ五十二丈冠考］謂、眼同者如兩眼不可闕一、凡一具一雙之物、若闕一不全則令之完備、此云眼同。
③　　忠曰、此解可笑。固不足取。
④敕修清規［下一ノ八丈］寮主副寮云、或有遺忘什物者眼同收拾付還。
⑤幻住清規［五十五丈］攝養云、或抱病之人、藥餌不靈、勢將順寂、須宛轉、首座鄉人、眼同抄劄行李。
⑥佛祖通載［廿一ノ廿七丈］云、元世祖聖旨曰、應有收藏道家一切經文本處。〈乃至〉分曉分付差去官、眼同焚毀。

【一一二九】差撥
①忠曰、又作差發、差役人發令也。
②　品字箋云、差切皆切、差遣役使也。
③　篇海類編云、撥之也、發也。
④敕修清規［下一ノ八丈］直歲云、差撥使令、賞罰惟當。　又［下一ノ五十九丈］亡僧送亡云、庫司預分付監作行者、辨柴化亡差撥行僕。
⑤禪苑清規［七ノ二丈］亡僧云、庫司知事、預前差撥行者。
⑥　宋史［志百三十廿五丈］食貨志云、必無肯就招者勢須差撥。
⑦　敕修清規卷首、聖旨云、不揀甚麼、差發休當。

【一一三〇】合用
①忠曰、所欲用之物也。
②敕修清規［下一ノ七丈］副寺云、病僧合用供給之物、即時應付。

【一一三一】合行
①忠曰、合行者宜作爲之之事也。
②敕修清規副寺云、常住財物、如動非寺門外護、官員檀越、賓客迎送、慶弔合行人事、並不可假名、支破侵漁。
③　經國大典註解［後集下ノ四十七丈］云、合行移關、行猶爲也。言合爲移關也。

【一一三二】合干
①忠曰、干關也。可關係其事之人也。
②敕修清規［上二ノ卅二丈］、尊宿唱衣云、喪司合干人。貴在公心主行。　又［同卅三丈］云、與喪可合干人封定。

【一一三三】作聲

①敕修清規［上二ノ卅二丈］坐禪云、撐簾下牌、輕撼作聲、住持頭首出堂。　又日用軌範［下一ノ四十七丈］云、摺被、不得抖擻作聲。

②　解者［太岳首書］曰、作聲者、俗話也。

【一一三四】生疎

①忠曰、生者未熟也。疎、荒疎也。生疎、謂居動麁糙也。

②　小補韻會［庚匀七十七丈］云、生、熟之對。

③　山谷詩集［十三ノ十七丈］謝送銀茄詩云、蜀人生疎不下箸、註、生疎、蓋用俗語。

④敕修清規［下ノ十二丈］両序進退云、受職新知事云、某乍入叢林、諸事生疎、過蒙使令。下情不勝恐懼之至。

⑤又日用軌範［下一ノ五十一丈］云、鄰單生疎、當以善言誘喩。不得生嫌悪心。

⑥　劉仕義［糸孚十六］新知録［四丈］云、歐陽文忠公曰、當醫之至人家也。僕馬鮮明、進退有禮、爲人診脉、按醫書、述病證、口辨如傾。聽之可愛。然病兒服藥云、無效。則不如貧醫。貧醫無僕馬、舉止生疎、爲人診脉、不能對。病兒服藥云、疾已愈矣。則便是良醫。

第廿一類經録門

【一一三五】大藏經

①宋景濂護法録［六ノ十三丈］寶積三昧集序云、釋氏之書、有三法藏焉。曰經、曰律、曰論。經則佛與菩薩等所説。論則諸賢聖僧所著。唯律必佛口親宣、而非諸大弟子之得與聞也。然而三藏之間、統爲十二部、分爲大小中三乘、廣大殊勝、無所不攝。其文久流中國、至秦而絶。漢遣郎中蔡愔及秦景、往使天竺受其書以歸。自是譯師疊至、代有所增。以卷計者、梁則五千四百、隋則六千一百九十八、唐承隋亂之後、稍有廢逸。開元之目、則五千四十八、至貞元中、則又增二百七十五。宋太平興國以來、或翻譯、或編纂、或收貞元未附藏者、又増七百七十五、逮元有國、又増二百八十六。其中頗不能盡知。今以千文紀之。自天至遵爲號者五百八十六、通爲六千二百二十九卷。噫嘻其廣矣哉。

②　舊説［勅修鈔七ノ八丈又八ノ十三丈］曰、大藏以千字文命函、未知始於何人。智昇開元目録、猶未言天地玄黄等。忠按唐智昇撰開元釋教録略出四卷、自大般若經六百卷已下、以千字文、天等字、命函帙、直到羣字。都四百七十九字。舊説云、智昇未命之。蓋不覈及略出也。

③　釋氏通鑑［九ノ八丈］唐開元十八年紀云、沙門智昇、撰開元釋教録二十卷。銓次大藏、經律論、凡五千四十八卷。〈自天地玄黄字號、止笙字函。后數十函、系傳録及唐宋新譯經。〉

④又護法録［八ノ十四丈］贈令儀藏主序云、三藏靈文、琅函玉軸、世所嚴奉者、凡五千四十八卷、六百億三萬一千八百八十八言、其刊定因果、窮究性相、則謂之經。垂範四儀、嚴制三業、則謂之律。研眞顯正、覈僞摧邪、則謂之論。三者莫不具焉。

⑤　應菴華禪師録［小參ノ四丈］有散藏經小參。

【一一三六】五部大乘經

①法華玄義［五ノ一ノ六丈］云、究竟大乘、無過華嚴大集大品法華涅槃。

②　忠曰大乘經、揀出五部、正從智者大師説。〈隋文帝時〉又曰、相傳此五部、華嚴則取六

十經。〈蓋智者時、無八十經。〉大集六十卷、〈大集三十卷、日藏月藏地藏十輪各十卷〉大品三十卷、法華八卷、涅槃則取四十經。〈是亦智者時經。〉總一百九十八卷。〈若以法華爲卷一百九十七卷〉

③ 雲棲正訛集云、世人相傳、誦五大部、謂是華嚴、涅槃、心地觀、報恩、金光明五經、此訛也。五大部者、一大藏之總名、所謂般若部、華嚴部、寶積部、大集部、涅槃部。部統所屬諸經。如六曹爲總而統所屬諸職也。若云五部中、各取其一則般若部、一經不取、何名五部。

④ 忠曰、五大部、可謂五部大乘也。雲棲正世傳之訛則可尚矣。惜乎、不原智者之説、私擇五名以爲大藏總名焉。又惟雲棲不取阿含部、豈可爲大藏總名哉。若如此則更重一訛、何能正訛。

⑤ 蘭溪禪師建長録［二ノ卅九丈］有檀越寫五部大乘經上堂。

⑥ 南浦明禪師録有大通忌、讚五部大乘經陞座。相國空谷應禪師録［陞座ノ二丈〇又十九丈〇又廿四丈〇卅四丈］有陞座敷篇、皆能言五部綱領。

⑦ 天境和尚無規矩［二ノ卅二丈］、小笠原泰山居士拈香云、爰有海東宗師證公、抽出華嚴、方等、般若、法華涅槃芳名、爲五部大乘經。

⑧ 忠曰、不辨五部、智者抽出。乃是三尺之暗也。

⑨ 忠按、法華經二譯、一西晉時、竺法護譯爲十卷、題云正法華經。二東晉時、鳩摩羅什譯爲七卷、題云妙法蓮華經。然世唯用羅什譯焉。如法護譯、語意艱澁、利益不饒故世不用之。〈捫蟲新話亦論二譯短長。〉

〈重本按ノ次二文アリ。忠又按、智者擇出五部而其華嚴經智者之時、但有六十經矣。然今時五部取八十經者何。蓋六十經竺法護之譯而語意不圓利益惟少。故取八十經而已。〉

【一一三七】四大部經

① 敕修清規［上ノ廿五丈］祈禱云、或看藏經、或四大部經、或三日五日七日、隨時而行。

② 佛祖統紀［四十八ノ十一丈］云、馮楫問道於杲佛日、頓悟心旨。南渡之後、所在經藏殘闕、楫以奉資、造大藏經四十八所、小藏四大部者亦如其數。 註云、世以華嚴、涅槃、寶積、珠林爲四大部。

③ 忠曰、珠林二字訛。當作般若。見物初賸語［十ノ五丈］及北磵文集。

④ 物初賸語［十ノ五丈］資壽教院經藏記曰、今所甌藏、特雜華、般若、寶積、涅槃四大部、與夫珠林之文而已。如不足何。

⑤ 北磵文集［四ノ九丈］江東延慶院經藏記云、教有半滿、藏無小大、般若、寶積、華嚴、涅槃、合八百四十一卷、自五千四十八卷出。

⑥ 忠曰、蓋世俗以五千四十八爲大藏、以四部八百四十一卷者爲小藏、北磵欲辨此訛故云藏無小大也。

【一一三八】金剛經

① 忠曰、禪家專誦訛經。弘忍慧能二大師、有勸奬語。又［一丈］依慧能、初聞誦此經、心即開悟。又忍大師、爲説此經、至應無所住而生其心、慧能言下大悟一切萬法、不離自性。如壇經説。

② 法寶壇經［一丈］六祖自説行由云、見一客誦經、慧能一聞經語、心即開悟。遂問、客誦何經。客曰、金剛經。復問、從何所來持此經典。客云、我從蘄州黄梅縣東禪寺來。其寺

是五祖忍大師、在彼主化。門人一千有餘。我到彼中禮拜、聽受此經。大師常勸僧俗、但持金剛經。即自見性、直了成佛。　又般若品云、善知識、若欲入甚深法界及般若三昧者、須修般若行、持誦金剛般若經、即得見性。當知此經功德、無量無邊、經中分明讚嘆。莫能具説。

【一一三九】楞嚴咒

①首楞嚴經［一ノ十五丈］長水疏云、首楞嚴者、梵語也。涅槃云、首楞者名一切事竟。嚴者名堅。即一切事、究竟堅固也。得此三昧、觀法如幻、於法自在。　又咒未疏云、此咒、四百二十七句、前諸句數、但是歸命諸佛菩薩、衆賢聖等、及敍咒願加被、離諸惡鬼病等難至四百十九。云跢姪他。此云即説咒曰。從四百二十唵字去、方是正咒。如前云六時行道誦咒、每一時、誦一百八徧、即正誦此心咒耳。如或通誦、更爲盡善。

②　大明仁孝皇后勸善書云、白傘蓋者、二千一百三十字。

③首楞嚴經［序十二丈〇敕鈔引文大同此］圓通疏云、臨川克立曰、昔天台智者大師聞西域有是經、夙夜西望願見而未及見也。唐武后長安末、般刺密帝三藏、始持梵本自南海至廣州。會宰相房融、知南銓在廣。請就制止寺譯出而筆受之。中宗神龍元年乙巳、五月念三日、經成謄寫入奏。適朝廷多故、未遑領行。有神秀禪師、入内道場見所奏本、傳寫歸荊州度門寺。時慧振法師訪度門而得之、經始傳。天寶十年、西京興福寺惟慤法師、復於故相房融家、得其筆受之本、始作疏解而廣傳之。

④　舊説［敕鈔十三丈〇又十四ノ十五丈］曰、禪刹誦楞嚴咒、始自唐北宗神秀大師。忠曰、克立但言、神秀傳寫此經歸度門寺。未得神秀始誦此咒之證。舊説附會。此類不一。然既寫得則理可誦咒。

⑤榮西興禪護國論［上ノ五丈］云、楞嚴經云、佛言、阿難持此四種律儀、皎如氷霜、一心誦我般怛羅咒、要當選擇戒清淨者以爲其師、著新淨衣、燃香閑居、誦此心佛所説神咒一百八遍。然後結界、建立道場、求於悉地、速得現前。於道場中發薩願、出入澡浴、六時行道。如是不寐、經三七日、我自現身、至其人前、摩頂安慰、令誦持衆生、火不能燒、水不能溺、乃至心得正受。一切咒詛、一切惡星、不能起惡。阿難當知、是咒、常有八萬四千、那由他等、金剛藏王菩薩種族、一一皆有諸金剛衆而爲眷屬、晝夜隨侍。設有衆生於散亂心、心念口持、是金剛王、常隨從。何況決定菩提心者。阿難、是娑婆界有八萬四千災變惡星、二十八大惡星、出現世時、能生災異。有此咒、地悉皆消滅。十二由旬、成法戒地、諸惡災障、永不能入。是故如來、宣示此咒、於未來世保護。初學諸修行者。文禪院恆修、此是白傘蓋法也。鎮護國家之義明矣。

⑥僧史略［上ノ廿五丈］曰、灌頂壇法、始於不空、代宗永泰年中、敕灌頂場處、選二七人、爲國長誦佛咒、及免差科地税云。

⑦　釋氏資鑑［七ノ十二丈］云、唐代宗大曆九年甲寅、道士史華以術得幸。因請立刃梯、與沙門挍法有旨。兩街選僧剋日較勝負。沙門崇惠常誦楞嚴咒、表請挫之。帝率百僚、臨觀、史華革履、刃梯而上。命惠躡刃而昇、往復無傷。惠乘勝、命聚薪於庭、擧烈焰、惠入火聚呼華入、華慚汗敢正視。帝大悅賜崇惠號護國三藏紫衣。

【一一四〇】白傘蓋神咒

①楞嚴咒、稱白傘蓋神咒。即八句陀羅尼也。

②首楞嚴經〔七ノ一丈〕曰、一心誦我佛頂光明摩訶薩怛多般怛囉無上神咒、斯是如來無見頂相、無爲心佛從頂發輝、坐寶蓮華、所說心咒。　温陵會解云、摩訶薩怛多般怛囉、此云大白傘蓋。即藏心也。量廓沙界曰大、體絶妄染曰白、用覆一切曰傘蓋。神咒從此流演故名心咒。

③智廣編〔百八十一八套〕密咒圓因往生集〔七丈〕載大佛頂白傘蓋心咒云、　捺麻斯怛〈二合〉達〈引〉須遏怛〈引〉也、啊囉訶〈二合〉矸薩滅三莫㗚薛怛涅達〈引〉唵　啊捺令覓折寧、覓〈引〉囉末唎囉〈二合〉㗚吟、末〈舌齒〉㗚禰、末唎囉〈二合〉鉢〈引〉禰發〈怛〉吽唯嚧〈二合〉〈引〉莎〈引〉訶。

【一一四一】大悲咒

①敕修清規〔上一ノ廿三丈〕旦望藏殿祝讚云、維那擧大悲咒。

②千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經〔北藏能函〇目ノ廿一丈〕一卷、唐西天竺伽梵達摩譯。

③　經咒功德、如彼說。

④大慧普說〔四ノ三十三丈〕云、如大悲咒云阿遊孕、杜撰者輒敢易遊字爲逝。且言、是鬼名。因鬼告以名阿逝孕、由是易之。此由可怪。既云秘密伽陀。又是古聖師譯、豈可信鬼語而誣先聖耶。信知學不經師、豈免邪解。

⑤叢林公論〔三十三丈〕云、乾道間、伊菴権和尚、董天台平田。有士人陳德夫、訪之曰、大悲神咒、舊本作阿遊孕、新改爲阿逝孕、謂神人現而正之、如何。菴曰、咒乃如來秘密之言、十師未嘗譯也。字或可改、已譯矣。

【一一四二】消災咒

①敕修清規〔上ノ廿五丈〕祈祷云、如祈晴祈雨則諷大悲咒消災咒大雲咒。

②佛說大威德金輪佛頂熾盛光如來消除一切災難陀羅尼經一卷、施護譯。

③佛說熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經一卷。

④經云、我今說過去娑羅王如來所說熾盛光大威德陀羅尼、除災難法。〈乃至〉受持讀誦此陀羅尼者、能成就八萬種吉祥事、能除滅八萬種不吉祥事。〈詳經如說。〉

【一一四三】尊勝陀羅尼

①宋高僧傳〔二ノ十三丈〕唐五臺山佛陀波利傳云、釋佛陀波利華言覺護。北印度罽賓國人、忘身徇道、徧觀靈跡、聞文殊師利在清凉山、遠涉沙、躬來禮謁。以天皇〈高宗〉儀鳳元年丙子、杖錫五臺、虔誠禮拜、悲泣雨涙、冀覩聖容、倏焉見一老翁從山而出。作婆羅門語謂波利曰、師何所求耶。波利答曰、聞文殊大士、隱迹此山從印度來、欲求瞻禮。翁曰、師從彼國將佛頂尊勝陀羅尼經來否。此土衆生、多造諸罪、出家之輩亦多所犯。佛頂神咒除罪秘方。若不齎經、徒來何益。縱見文殊亦何能識。師可還西國、取彼經來、流傳此土、即是徧奉衆聖、廣利羣生、拯接幽冥、報諸佛恩也。師取經來至、弟子當示文殊居處、波利聞已、不勝喜躍、裁抑悲涙、向山更禮。擧頭之頃、不見老人、波利驚愕、倍增虔恪、遂返本國、取得經廻。既達帝城便求進見、有司具奏。天皇賞其精誠、崇斯秘典、下詔鴻膽寺典客令杜行顗與日照三藏、於内共譯、譯訖賜絹三十匹。經留在内。波利垂泣奏曰、委棄身命、志在利人。請帝流行。是所望也。帝愍其專功、遂留所譯之經、還其梵本。波

利得經、彌復忻喜、乃向西明寺訪得善梵語僧順貞。奏乞重翻、帝俞其請。波利遂與順貞對諸大德翻、名曰佛頂尊勝陀羅尼經。與前杜令所譯者、咒韻經文、少有同異。波利所願既畢、持梵本入于五臺、莫知所之。

②無住和尚雜談集［九ノ十一丈］云、聖一國師住東福、日行事稠於餘禪院、朝誦楞嚴咒、日中諷尊勝陀羅尼七遍。有渡宋老僧、啓國師曰、若欲行宋様則何不一隨彼事例。國師曰、宋土僧則如法坐禪。四時坐禪外、猶有常坐者。凡彼國、無道無俗、多務坐禪。故省於行事耳矣。如日本禪僧、不然。不專於禪定、若復疏略乎行事誦咒、何以消信施。若汝輩修禪、如同宋僧則癈行事亦可也。其僧無以答焉。尊勝經説消信施功能、復令魔外遠潛。一時天狗魔憑人言、我亦欲往東福。但怖他也尊勝陀羅尼。

【一一四四】無量壽咒

①敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云、諷無量壽咒、擧藥師號。

②佛祖通載［廿二ノ卅丈］云、弘教教集云、元世祖命僧念無量壽王陀羅尼經。能念者賜疋帛稱賞。

③　聖節誦無量壽咒、必是此經陀羅尼也。非謂往生咒。

④佛説大乘聖無量壽決定光明王如來陀羅尼經［北藏目二ノ十四丈カ函］一卷、那爛陀寺法天譯。

⑤經云、佛言、今此閻浮提世界中、人壽命百歳、於中多有造諸惡業而復中夭。若有衆生、得見此無量壽決定光明王如來陀羅尼經功德殊勝、及聞名號、若自書寫、若教他人、書是經、竟或於自舍宅、或於高棲、或安精舍殿堂之中、受持讀誦、遵奉禮拜、種種妙華、燒香、炷香、塗鬘等、供養無量壽決定光明王如來陀羅尼經、如是短壽之人、若能志心、書寫受持、讀誦、供養禮拜、如是之人、復增壽命、滿於百歳。

【一一四五】觀音聰明咒

①村寺清規［敕鈔五ノ七丈］云、童行方入寺〈乃至〉宜教觀音聰明咒、久而漸漸聰明。〈詳垂説類訓童行處〉

②　忠曰、陀羅尼集［六巻］經有觀世音説咒藥服得一聞持陀羅尼。又有觀音聞持不忘陀羅尼。又續觀音感應集、有觀音智慧咒。所謂聰明咒是乎。

③續觀音感應集［六十七丈］云、趙師炳、事觀音大士甚虔。行徽嚴道中、壁間有大士所説智慧咒語。且云、若人受持、滿二百萬遍、智慧不與我等、我誓不成正覺。咒曰、唵婆囉婆囉、三婆囉、印涅唎野、彌輸陀尼、唵嚕唵嚕、折唎曳鑠訶。

【一一四六】經馬

①忠曰、日本禪刹祈祷、或盂蘭盆會等、印造心經及馬圖、加之紙錢、先掛殿桂、經罷而焚化、未知何時起。必是宋國禪林之法、此方傳習而已。蓋人鬼道異。若火化之則得他受用。詳錢財類紙錢處。今繪馬、火化之則鬼得取而乘亦如此。

②　豐後州大分郡眞萱村松岡有松岡山長興寺。東福門派、要翁綱禪師爲開基祖。其扁額、寧一山書。寺有馬經之印板、是要翁時物。經則心經、馬圖亦如今所繪也。要翁即圓爾之第四世、已下略引事證。

③空谷尚直編云、浙右有人、印造佛天三界紙馬、開張店業。店屋楣間、平鋪閣板、作臥室於閣上。一夜觸翻尿器、淋漓汚馬。仍將此馬晒乾賣之。本年從店中提出此人、雷打死於

門前。

④王同軌耳談［十一ノ十四丈］云、蘄水薛府尹均、永樂時人。往巴河鎮、平生清苦、上亦甚稱之。槖無一錢、在任積俸、置紙馬板數副、以貽子孫、今巴河薛鋪紙馬、獨易售、人猶稱薛府尹紙馬。可謂厚於貽矣。

⑤博異志［郛百十五ノ六丈○●山廿五ノ十二丈］云、開元中、琅邪王昌齡、自自吳抵京國、舟行至馬當山、屬風便而舟人云、貴賤至此皆合謁廟以祈風水之安。昌齡不能駐。乃命使、賫酒脯紙馬、獻于大王而以一首詩曰、青驄一疋崑崙牽、奉上大王、不取錢、直爲直爲猛風波裏驟、莫怪昌齡不下船。

⑥宋史禮志［志ノ七十七ノ一丈］云、大中祥符二年十二月、北朝皇太后凶訃、遣使來告。〈云云〉焚紙馬皆擧哭再拜。

⑦歸元直指［下ノ百四丈］臨終四關云、不求出世善根、爲愛家園長旺以致臨終遭病怕死、貧生信受童兒、呼神喚鬼、燒錢化馬、殺戮衆生。緑此心邪無佛攝護。

⑧忠曰、此是責貧生諂鬼不求出纏。非必言燒錢化馬是邪業。

⑨元亨釋書［九ノ九丈］云、釋道公居天王寺、持法華有年矣。嘗詣熊野安居、夏終還本寺。暮過一村無居宅、宿大樹下。夜半有騎馬者、三十餘人、至樹下、一人呼曰、翁在乎。答曰在。曰何不前去。答曰、馬足損、不任乘、齡又衰老、不能徒歩、諸騎過去。明旦公怪巡見樹下、有小神祠、其像朽弊。前有片板、上圖馬形。前足之處、其板破裂。公便以絲繫補、欲試神言、次夜猶宿樹下。中夜前騎又來呼翁。乘馬而出。向曉更、翁歸來。謝曰、承賜治馬脚、不堪幸也。乃出甘饍餉公。公曰、數騎何人。翁曰、行疫神也、神巡管内、我爲前驅。若不出、必受苦罵、今蒙師惠、嘉慶深矣。

⑩忠曰、焚馬多見本據。焚經難得其證。適得焚尊勝咒施鬼事。是可以證焚心經也。

⑪異聞總録［四ノ七丈］云、李泳子永、平生常印尊陀羅尼幡、焚施鬼道。淳熙六年、爲坑冶司幹官、分局信州。次年十二月、被檄至弋陽、邑宰招飲、歸已侵夜。臥驛堂、睡未交睫、見二婦人。一冠一髻、徘徊往來於室中、知其爲異物、不及問。少焉微寤則已逼床下。李祝之曰、若有所言可明告我。不然托諸夢可也。展轉間復睡。夢兩人來拜曰、見公無所求。只欲得常印尊勝幡耳。李曰、吾在役固未嘗携來奈何。曰、候公歸信州見贈、未晩扣其姓氏、曰、無用問、當自知之。明旦訪諸人、其從行虞候能言。云、比年廣州盧彝通判之妾、以産終此室。今頂髻者是矣。其冠者不知何人。李還舍爲印數十本焚與之。

【一一四七】語録

①忠曰、禪祖語要、不事華藻。以常談直説。侍者小師、隨而筆録。此名語録。

②正字通［戌上廿三丈］云、録音鹿。謄寫曰録。又書篇名。梁阮孝緒七録、〈云云〉。宋諸儒、有語録。名臣言行録。

③文心雕龍［下ノ十七丈］云、録者領也。古史世本、編以簡策。領其名數、故曰録也。

【一一四八】話則

①丹鉛總録［十一ノ十三丈］云、佛書以一條、爲一則。洪景盧容齊隨筆、史繩祖學齋佔畢用之。

②品字箋云、則法則。凡制度品式之有法者、皆曰則。

祖庭事苑［七ノ六丈］云、宗門因縁、不言一節一段。而言一則者、蓋則以制字、从貝从刀。貝人所寶也。刀人所利也。所發之語、若刀之制物、以有則也。故人皆寶之。以爲終

身之利焉。是知謂一則者、不無深意也。

忠曰、佛祖説話、可爲學者法則。故言話則又言話幾則。不必用事苑鑿説矣。

【一一四九】公案

①中峯山房夜話[録十一上ノ十八丈]云、或問。佛祖機縁、世稱公案者。何耶。幻曰、公案乃喩乎公府之案牘也。法之所在而王道之治亂、實係焉。公者、乃聖賢一其轍。天下同其途之至理也。案者、乃記聖賢爲理之正文也。凡有天下者、未嘗無公府。有公府者、未嘗無案牘。蓋欲取以為法。而斷天下之不正者也。公案行、則理法用、理法用、則天下正。天下正、則王道治矣。夫佛祖機縁、目之曰公案。亦爾、蓋非一人之臆見。乃會靈源、契妙旨。破生死、越情量。與三世十方、百千開士、同稟之至理也。

②聯燈會要[七ノ十八丈]黄檗運禪師章云、次日陞堂云、昨日尋羚羊僧、出來。其僧便出。師云、昨日公案、老僧休去。作麼生。僧無語。師去。將謂是本色衲子。元來是義學沙門。拈拄杖、即時打出。〈蓋禪帖公案之言、始見于此。廣燈文異〉碧巖録三教老人序云、嘗謂、祖教之書、謂之公案者、倡於唐。而盛於宋。其來尚矣。二字、乃世間法中。吏牘語。其用有三。面壁功成、行脚事了、定槃之星難明。野狐之趣易墮。具眼爲之勘辨。一呵一喝、要見實詣、如老吏據獄黒讞罪、底裏悉見。情款不遺、一也。其次、則嶺南初来、西江未吸。亡羊之岐、易泣、指海之針、必南。悲心爲之接引。一棒一痕、要令證悟、如廷尉執法、平反出人於死二也。又其次、則犯稼憂深。繫驢事重。學奕之志、須專。染絲之色、易悲。大善知識、爲之付囑。俾之心死蒲團、一動一參、如官府、頒示條令、令人讀律知法、惡念才生、施即寢滅三也。具方冊、作案底、陳機境、爲格令、與世間所謂金科玉條。清明對越諸書、初何以異。祖師所以立爲公案。留示叢林者、意或取此。

③虎關錬和尚曰、公案者、寄世事而哥立名。唐土有六省。日本有八省。省者、俗云奉行者、武士訴式家刑罰事。則屬兵部省刑部省决之。民訴田壤事、則民部省决之。判文事、則治部省决之。凡諸奉行者、以自古公界所定法式、聚置之於案上。仍擬于今之所訟、而理之。日本法家人、以延喜式目弘仁式目沙汰而理之。即是也。宗門公案亦爾。提撕古人祖師。所定之法、是非一人之私法。便天下公共之理也。

④雲棲正訛集[廿一丈]云、公案者、公府之案牘也。所以剖斷是非。而諸祖問答機縁、亦只爲剖斷生死。故以名之。總其問答中、緊要一句、則爲話頭。如一歸何處、因甚道無。念佛是誰、之類、是也。千七百則、乃至多種、皆悉如是。

⑤居家必用[辛ノ廿丈]、吏學指南冊籍類云、公案謂公事始末也。

⑥　又垂説部、拈古處、東山外集説。

【一一五〇】偈頌

①翻譯名義集[四ノ五丈]云、伽陀、此云孤起。妙玄云、不重頌者名孤起。亦曰諷頌。西域記云、舊曰偈。梵本略也。或曰偈他。梵音訛也。今從正音。宜云伽陀。唐言頌。

②又[四ノ五丈]云、祇夜此云重頌。妙玄云、重頌上直説。修多羅也。亦曰應頌、頌長行也。

③忠曰、禪宗偈頌、尋源、二十八祖。有傳法偈。慧能神秀呈偈、見己所解。爾降倡於趙宋、而熾於胡元。汾陽作廣智歌[僧宝傳]。雪竇圓悟。鏗訇、垂模範矣。

④禪林寶訓[下ノ廿九丈。古林重拈ノ跋ニ引]云。萬菴曰。頌始自汾陽。暨雪竇宏其音。顯其旨。汪洋乎不可涯。後之作者。馳騁雪竇。而爲之。不顧道徳之奚若。務以文彩。煥爛相鮮。

爲美使後生晩進。不克見古人渾淳大全之旨。烏乎。

⑤山菴雜録[下ノ十一丈]云、竺元先師謂、做頌、須事理俱到。譬如打索。兩股緊緩不同、則不堪矣。大川和尚、作蜘蛛頌、固好。但其中三字、於理固無害、於事則不然。其頌云、一絲挂得虚空住。百億絲頭殺氣生。上下四圍羅織了。待無漏網話方行。末後三字。於蜘蛛却無交渉。又題出山相云、龍姿鳳質出王宮。垢面灰頭下雪峯。誓願欲窮諸有海。不知諸有幾時窮。以雪峯易雪山、拘韻耳。而此地有雪峯。其名既顯。似覺有妨。所以不純也。

⑥竺仙疑問[一丈]云、宗門偈頌、唯是發明佛祖大事。非達佛祖之知見。孰能爲之。頌者誦也。稱述也。美盛徳之形容、歌誦盛徳也。謂以偈言、稱頌其事、以美其徳也。所謂游揚徳業。褒讃成功。是矣。而佛菩薩正當宣揚之時。皆以寶音梵唄。演而爲微妙清雅之韻。悠揚諷咏、優遊彬蔚。婉而成章。乃涵不盡深長之意、令人樂聞。今茲翻譯、莫能寫之。唯掇其大意耳。是故經偈、亦無有押韻也。東土諸祖、始稍體之。是皆悟明通達、衝口而成。非假造作、法滋既久。華竺兩狎。人心轉巧、機變送出、遂寄調於風雅之音。播揚西來不傳而傳之意也。且詩者、止乎六義而已。宗門玄唱、則有儼若、含於六義者。有超然於六義之表。而絶去世間翰墨畦逕之外、來不知蹤、去不知迹。非意可求。非情能測。若或體其所翻經偈之作。則逼似之。唯其達人、千變萬化。所謂青出於藍、氷寒於水。而成亹亹者歟。自古至今、代不乏賢。然雖近今、而能超於前作者、時亦有之。第不多耳。

⑦夢嚴旱霖集[五十丈]跋北磵詩集云、詩也者、人之情性也。因感觸而生、云云。吾釋偈頌。據彼之方、有祇夜者焉。有伽陀者焉。昔人曰、偈或偈佗、蓋梵音之訛略也。按梁僧史、羅什語慧叡曰、天竺國俗、甚重文製。其宮商體韻、以入絃爲善。凡見佛觀王、詠歌功徳。經中偈頌、皆其式也。但改梵爲秦、失其藻蔚。傳譯大意、以詔後世。有如嚼飯與人、非特失味、乃令嘔噦也。什輒製偈、贈沙門法和曰、心山育明徳。流薫萬由延。哀鸞孤桐上。清音滿九天。此土之偈。濫觴于此。自爾以降、達磨對揚衒之作偈。以至汾陽雪竇或古或律、偈頌獨盛于吾門。向所謂情性之本、發爲玄言奇唱、蓋詩律特其寓也耳。卿睦菴曰、詩而非詩、乃此也。然悠悠後學、不本宗猷。肆筆而成、全無羞愧。如峨嵋鵶臭。十倍隱之。何其多耶。至若黄龍之由有沒二字、服其妙密。則蓋寡矣。其末流甚者、聞云秋雲秋水共依依。則曰此詩也。聞云倒騎佛殿上天台。則曰此頌也。欲不笑而得乎。夫内無所得、語言惟貴。則雖咸池三百首、金薤千萬篇、竟何補於吾道之萬一耶。北磵老子、從涵養醞藉之中、獲超然自得之妙。離文字之縛脱筆墨之畛畦。文章鉅公與交、則寂寥乎短章、春容乎大篇。謂之詩也亦得。衲子與酬唱、則痛快過乎棒喝之用事。謂之頌也亦得。與夫休己島可之徒。雕肝鏤腎、抽黄對白、以詩著名者、不亦邈乎。

⑧舊説曰、妙喜中巖月和尚云、詩與頌別。頌者倒騎佛殿、出山門等、活語、是也。詩者秋雲秋水共依依等、細調柔和語也。

⑨忠曰。野哉斯言、此必逐弊風文字禪者之説。非中巖也。縱作倒騎佛殿等語、若不具眼、則非頌、亦非詩。無可名焉。縱作秋雲秋水等語、若具禪意、則可爲頌也。昔麟一菴、頌於應無所住而生其心、用司空曙詩全篇。曰、罷釣歸來不繫船、江村月落正堪眠、縱然一夜風吹去、只在蘆花淺水邊。絶海特賞之、可知頌與詩之辨、在意旨、而不在言語。

【一一五一】頌古

①小補韻會宋韻[九丈]云、頌似用切、説文、頌、貌也。廣韻、歌也。

②子夏[秘一]毛詩大序[二丈左○又、文選四十五卅九丈]云、頌者美盛德之形容以其成功告於神明者也。

③周禮[廿三ノ十九丈]大師六詩註云、頌之言、誦也、容也。誦今之德廣以美之。

④毛詩註疏[十九ノ二丈]、周頌正義云、頌之言容、歌成功之容狀也。

⑤詩經[集注八ノ一丈]周頌朱熹註云、頌者宗廟之樂歌。大序所謂美盛德之形容以其成功告于神明者也。蓋頌與容、古字通用。故序以此言之。

⑥唐賈島二南密旨[二丈]云、頌者美也。美君臣之德化。

⑦忠曰、頌名本起于六詩。〈風賦比興雅頌〉歌誦盛德以告于神明者也。如禪家頌古則爲韻語而發明之以爲人。亦是歌誦佛祖之盛而揚其美故名頌古。

⑧汾陽無德禪師録[中卷]有頌古一百篇。禪家頌古以此爲權輿。

⑨禪林寶訓[下ノ廿九丈]云、萬菴曰、頌始自汾陽。暨雪竇宏其音顯其旨。汪洋乎不可涯。又[四十一丈]云、心聞貴和尚曰、天禧間、雪竇以辨博之才、美意變弄、求新琢巧、繼汾陽爲頌古。籠絡當世學者、宗風由此一變矣。

⑩碧巖録[一ノ四丈]云、大凡頌古、只是繞路説禪。拈古、大綱據款結案而已。

⑪雲臥紀談[下ノ九丈]云、大潙佛性禪師、爲其嗣者潭州惠通旦公、嘗頌覺鐵觜先師無此語話曰、誰道先師無此語。焦尾大蟲元是虎、胡蜂不戀舊時窠、猛將不歸家裏死、急著眼、勿回顧。若會截流那下行、市地清風隨步武。佛性見而諭之曰、頌古拈古、要奢儉得所。如人解使錢。不必多也。及頌黄檗示衆、瞳酒糟話曰、荊棘林中宣妙義、蒺藜園裏放毫光。千言萬語無人會、又逐流鶯過短墻。佛性頷之。

⑫竺仙疑問[二丈]云、頌古之作、譬之儒家則猶詠史也。復幾數百載矣。蓋始於宋國初汾陽。是時尊宿、皆悉渾厚蘊藉、不尚浮靡。天禧間、雪竇以辨博之才、恢宏其音、莫卷舒抑揚、縱横得妙、後之作者莫出其右。然亦有以其美意、變弄求新琢巧、變其宗風、失古淳全之作矣。至於景定咸淳之間、所謂大道衰、變風變雅之作、於是雕蟲篆刻競之、倣效晩唐詩人、小巧聲韻。思惟煉磨而成二十八字曰道號頌。時輩相尚、迨今莫遏。於中雖有深知其非而深欲絶去之者。然以久弊、不能頓除、勉隨其時曲就其機亦復不拒來命、時或秉筆、覿面信手賦、塞所需、聊爲方便接引之意也。然以其音律諧和、與夫事理句意俱到、而活脱者、使或哦之、誠亦可人。然譬如食蜜中邊皆甜、宜乎人其愛之。若夫欲濟飢餒、不可得也。

【一一五二】道號頌

竺仙和尚説、見頌古處。

【一一五三】贊

叢林盛事[七十一丈]云、前輩贊佛祖偈句、并自贊語、各有矜式、今之例多杜撰。如自贊亦如贊祖之語。良可笑耶。唯密菴最得其體。贊云、在家不讀書、行脚不參禪。隨流閑打鬨、掘地覓青天。如今老大空追悔、捻人痛處力加鞭。塗毒亦云、眼瞎耳恆聲、鼷鼠技已窮。要見嚴中主、白雲千萬重。咄、具眼者宜辨之。

【一一五四】法語

①東明日禪師録[法語ノ二丈○宗派卅四丈]示嗣芳待者語云、法語之作爲進道勉勵之助、先輩是

皆不得已而出一言半句、示一機一境、如穿楊之箭、不發而已。發則必中。近習師法不嚴、以法語爲稱己長、發越胸中不平。何益於本分事。況復發越己長不平之者、其亦鮮矣。

②希叟曇禪師録[法語五丈]示日本平將軍法語云、昨承建長鄉老禪師賜書爲閣下需語。三思、前輩大老與士大夫、交游未深、不知造蘊、不敢輕易通信、恐悞於人。況小僧耶。

③東山空禪師法語[卅四丈]云、今時一種風範、直是好笑、如袖紙燒香求偈頌覓法語之類、是也。更有一般瞎老師、不辨來機、便向他雪色紙上、屙一堆、學家珍藏以爲護身符子。苦哉苦哉。

④癡絶冲禪師録[法語十●丈]示巽升維那語云、所謂法語者蓋前輩有道之士、提持佛祖不傳之妙、警悟學者。餘之不敏鳥足以能之。

⑤寂室光禪師録[下ノ卅九丈]示眞源禪者語云、法語者道眼明白底本色宗匠事業。以其宗説俱通、意句活而衲子取爲參禪之標式而已。是故得之者如袖隋珠卞璧而歸家也。實非單見淺識之流、容易所議。縱使勉強而作、非唯無益於他、恐招謗乎己之必矣。

⑥恕中愠禪師録[六ノ十九丈]題無準書浮山遠録公語後云、昔玉山癡翁、凡有學者求警訓、往往伸紙、絲墨作斗方、書般若心經及古德語以酬之。於紙尾惟記年月、署己名而已。更不別加一字。蓋其與佛祖、同一舌頭、同一宣説、貴在控人入處、實不在馳騁翰墨、且與古人述而不作之意合。

⑦大集經[五ノ六丈]云、佛言、法語者凡所演説、依法而語。觀法念法、奉行於法、行至處法。求法欲法、樂法修法、法幢法仗、莊嚴、法器燈、法明法念、法意法有、法所莊嚴瓔珞、法床法儀、法護法財、法無窮盡。廣大無邊、法事法身、法口法意、菩薩具足成就如是等法、是名法語。法語者眞實之語、守護法語。〈云云廣説〉 又云、法者則不可獲、無有文字而無言説、亦無辭無色無見、亦無所趣、無言誨、亦無所教、無心意識、無有塵垢、無明無暗。〈云云廣説〉

⑧智度論[卅九ノ四丈]云、菩薩知能利益者皆是佛法。若不能利益雖種種好語、非是佛法。譬如種種藥、不能破病、不名爲藥。趣得土泥等能差病者是名爲藥。

【一一五五】行状

①忠曰、状書名德行業、曰行状。

②正字通[已下十八丈]云、状形象也。又形容之也。

③文選[六十ノ一丈]文宣王行状、注云、良曰、述其德行之状。

④文心雕龍[下ノ十三丈]云、状者貌也。體貌本原、取其事實。先賢表謚、並有行状。状之大者也。

【一一五六】敕黄

①敕修清規[下一ノ二丈]書記云、古之名宿、多奉朝廷徵召、及名山大刹、凡奉聖旨敕黄、住持者、具謝表。示寂有遺表。或所賜所問、俱奉表進。而住持專柄大法、無事文字。特請書記、以職之。

② 山堂肆考[宮ノ卅五ノ十五丈]云、唐太宗、用黄麻紙、寫詔敕文。故杜詩、紫詔仍兼綰、黄麻似六經。唐玄宗別置學士院掌内命。凡拜免將相、皆用白麻。注云、黄麻、詔紙用

黄檗染成。取其辟蠹也。似六經者、謂詔浩之詞、渾厚如六經之文也。

③ 野客叢書［三ノ廿九丈］云、敕舊用白紙。唐高宗上元間、以施行之制、既爲永式。白紙多蠹。遂改用黄、除拜將相制書、用黄麻紙。其或學士制、不自由中書出。故獨用白麻紙。所以有黄麻、白麻之異也。

④ 又見經單處、聖節黄榜處。

（桐野祥陽）

【一一五七】謝表

①見敕黄處。

（桐野祥陽）

【一一五八】公文

①忠曰、知府所降公憑文也。

②居家必用［辛ノ十八丈］云、公文、謂官遣文字。故曰公文。

③敕修清規［上二ノ廿一丈丈］開堂祝壽云、先呈公文、擧法語畢、接付維那、宣白。次山門諸山江湖疏、一一遞上、有法語分送宣讀。

④雪竇顯禪師開堂録小參云、僧問、四明侯伯、遠降公文。未涉程途。請師速道、師云劄。

⑤大慧武庫［十二丈］云、洪州奉新縣慧安院、偶法席久虚、太守移書寶峯眞淨禪師、命擇人主之。時有淵首座、向北人。孤硬自立。白眞淨曰、惠淵去得否。眞淨曰、汝去得。遂復書擧淵。淵得公文、即辭去。

⑥隱山璨禪師録［糸古尊二ノ一丈］云、入院、指座云、隱山無量罪過、復被公文追到。要得重整頽綱。不免再陞此座。

⑦ 已下畧記外典公文語。

⑧魏書［七上ノ二丈］高祖紀云、二年夏四月癸酉、詔沙門、不得去寺浮遊民間。行者仰公文。

⑨春渚紀聞［二ノ八丈］云、江淮發運使盧秉、元祐初、發解赴闕、至泗州。夜夢、肩輿詣郡守、而回、過漕司。有頂帽執撾、而督視工役、丹飾門墻者。問之。云修此以俟新官也。盧曰、新官爲誰。執撾者、厲聲而對曰、盧秉。〈云云。〉既覺、未及盥濯、而郡將公文一角至。即除盧領大漕事。

⑩爲善陰隲［八ノ廿二丈］曰、王縉爲兩路提刑。每斷死囚、必焚香奏天、然後行下。一日暮坐、恍見一玉女。長披大袖手持一角公文、立于簷前。遥告縉曰、此汝平生、所奏事目一一皆合情法。無有枉濫。上帝嘉汝。已爲汝父延壽一紀、兼爲汝倍增福矣。汝之子孫、異日亦皆當作監司。更宜自勉。言訖而没。後果如其言。

（桐野祥陽）

【一一五九】府帖

①公文也。

②校定清規［上ノ十五丈○敕鈔六ノ三丈引］新住持入院云、都寺、預請維那首座宣疏帖等人。注先讀敕黄、省劄或府帖、山門疏、諸山疏、次第宣讀。

（桐野祥陽）

【一一六〇】諸疏帖

①文體明辯［廿六ノ二丈］云、疏者、布也。

②正字通［午上ノ六十九丈］云、疏去聲、暮韻、音數、條陳也。

③　忠曰、疏者、條暢布陳其所蓄望也。

④禪苑清規［七ノ五丈］請尊宿云、具合用錢物、行李、人轎等、或舟舩、要用之物、官疏、院疏、僧官疏、諸院長老疏、施主疏、閑居官員疏、住持帖、本州縣開報、彼處州縣文牒、官員書信、院門茶榜、並須子細備辨、如法安置。

⑤［外文考一ノ一丈］舊説曰、士大夫爲僧製請疏、泛論之。則南北朝時、沈休文發講疏爲始。禪林請住持疏、韶州防禦使何希範等、製請疏、令雲門偃禪師、住靈樹、爲始。其疏、載在雲門語録後也。僧疏、則九峯韶公作疏請大覺璉和尚、住阿育王山。此爲始矣。

（桐野祥陽）

【一一六一】官府疏

①［江西ノ説●禪文格］舊説曰、凡請住持。有官府疏、山門諸山・道舊・法眷・江湖勤舊等疏。官府疏者、宣政院選擧之也。

②［敕鈔六ノ三丈］又曰、古者官府疏、有祝聖壽之語。今則山門疏、有祝語。蓋無官府疏時、此而已。若有官府疏、則山門疏、非必作祝天子語也。

（桐野祥陽）

【一一六二】路疏

①忠曰、某州路官府、請住持疏也。

②古林茂禪師永福録［二丈］、有拈路疏語。

（桐野祥陽）

【一一六三】縣疏

①虚堂愚和尚録續輯云、府疏已刊前集。縣疏、知府陸盤隱撰。

【一一六四】府僚疏

①忠曰、僚官僚也。府中官僚、薦住持疏也。

②［十ノ十五丈］居頂圓菴集、有青遠禪師住昌國普慈、府僚疏。蓋居頂代府僚製也。

（桐野祥陽）

【一一六五】山門疏

①［江西説●●文格○敕鈔五ノ廿四丈］舊説曰、請住持山門疏、敍勸請、諸山疏、敍促駕。江湖疏、道舊疏、敍展賀。〈又見官府疏、法眷疏處。〉

②敕修清規［上二ノ十四丈］請新住持云、庫司會兩序勤舊茶、議發專使修書。〈頭首・知事・勤舊・蒙堂・前資・僧衆。〉疏〈山門、諸山、江湖。〉茶湯榜。

（桐野祥陽）

【一一六六】同門疏

①新命、同門人、製疏、賀其入院也。〈見法眷疏處。〉

②　同門義、見稱呼門、同門處。

（桐野祥陽）

【一一六七】諸山疏

①本寺隣封之諸山、製新住持、入寺疏也。〈見山門疏處。〉

（桐野祥陽）

【一一六八】江湖疏

①忠曰、江湖上禪刹人、製新命寺疏也。〈見山門疏處。〉有東江湖西江湖二疏。　南禪規式［下ノ四十二丈］入院云、首座宣山門疏。行者兩人扛疏。住持在椅。其餘疏、以次頭首宣讀。道舊疏、書記。諸山疏、後堂、東江湖西江湖疏、東西藏主宣之。但道舊同門等疏、頭首出衆向法座立定、讀之。蓋無可宣揚位也。

②　忠曰、江湖者、江外湖邊蕞刹也。凡禪刹名山大刹之外者、稱江湖矣。然舊説、援［傳灯十四丈ノ四］江西馬祖、湖南石頭、學者憧憧往來之説。實無交渉。如今此方江湖疏、

題名銜曰、平沙某甲、遠浦某乙等。是足粗知江湖義。莊子［大宗●］云、魚相忘於江湖。蓮社高賢傳［説郛五十七ノ廿七丈］云、周續之曰、心馳魏闕者、以江湖、爲［統紀廿七］秩梏。文選［五十五ノ六丈］劉孝標廣絶交論云、寄通靈臺之下、遺跡江湖之上。〈止此。〉此等江湖、其義相通。〈又見稱呼門江湖處。〉

（桐野祥陽）

【一一六九】道舊疏

①忠曰、新住持道舊、製其入寺寺疏也。〈見官府疏山門疏處。〉道舊者、道友也。詳稱呼門道舊處。

（桐野祥陽）

【一一七〇】法眷疏

①忠曰、新命法屬、製其入寺疏也。〈見官府疏處。〉

②［●禪文格］天隱曰、今時山門疏語、如上表文。例祝天子。如山門疏、以山門事、爲發端。以祝天子終之。同門疏、以同門事終之。江湖疏、以江湖事終之。道舊疏、以道舊事、終之。法眷疏、以兄弟故事、終之。

③竺仙來禪子集［五十六丈］、有抗州大慈成止嚴、住西興明化法眷疏。蒙頭云、時止時行。何用隔江招手、難兄難弟、倒却門前刹竿。收結云、懽協人天、光增法社。

（桐野祥陽）

【一一七一】法親疏

①法眷疏、又名法親疏。見義堂空華集［十九ノ廿一丈］。

（桐野祥陽）

【一一七二】方外疏

①在家士大夫、爲新住持、製疏也。

②居頂圓菴集［十ノ十二丈］有方外交疏。其柄語云、竊聞。今浙東天童木菴禪師、靖退已久。一旦虚席、其徒失依。遂勸師、以輕車熟路。復鎮其虚。人謂師之此舉、足以崇重天童。而師固無加損也。凡吾薦紳、所尚在道。道由人興、故疏以賀。

③元叟端禪師杭州靈隱録［三ノ一丈］、拈方外疏。　又杭州徑山録、拈方外疏。語云、言言見締、句句朝宗、西天昔日淨名老、東土今朝龐蘊公。

（桐野祥陽）

【一一七三】江湖友社疏

①相國寺香渚和尚告忠曰、江湖疏外、復有江湖友社疏。但新命傑出人、而敢當之。非尋常用之。

②居頂圓菴集［十ノ十五丈］、有青遠禪師、住昌國普慈、友社疏。

③［十六丈］又有應中法師、住延慶、禪林友社疏。蓋今爲教家發。故有禪林目也。

（桐野祥陽）

【一一七四】林泉友社疏

①［敕修鈔五ノ廿四丈前出］舊説曰、山門、諸山、江湖疏外、有林泉友社疏。但非尋常有之。

②香渚和尚告忠曰、林泉友社疏、例江湖友社疏。必新命傑出人、而敢製之。

③義堂空華集［十九ノ十二丈］、有芳少室住淨智、友社疏。

（桐野祥陽）

【一一七五】郷曲疏

①居頂圓菴集［十ノ十八丈］、有元素住開壽郷曲疏。

（桐野祥陽）

【一一七六】淋汗疏

①忠曰、爲化柴燒浴、製疏也。曾聞、五嶽學製疏者、必先製之、試手、琳汗義。見叢軌類。

②清拙澄禪師録［日本四ノ卅六丈○貞和集八ノ卅二丈］化琳汗頌云、陜府鐵牛遭日炙。嘉州大象汗交流。有人浴得這箇佛、萬兩黄金也合收。

（桐野祥陽）

【一一七七】化疏

①忠曰、凡叢林、化米化炭等、皆造疏。化主齎之去。一展示其意、二證非假竊也。

②已下、畧録誹僧好化。

③笑隱蒲室集［書ノ廿二丈］與友人書云、不肖、多與士大夫交。嘗聞其言、與僧往來、每懼其袖中有物。便殺風景。謂其持疏也。故五年於此、修造已十成七八。忍貧自力。未嘗妄造人門、頗似倔強。

④雲棲竹窓三筆［五十丈］云、有道者。告予曰、我輩冠簪、公等剃削。夫剃削者、應離世絶

俗。奈何●踵於長途、廣行募化者、罕遇道流、而恒見緇輩也。有手持縁薄、如土地神前之判官者。有魚撃相應、高歌唱和、而談説因縁、如瞽師者。有扛擡菩薩像神像、而鼓樂喧填、贊勸捨施、如歌郎者。有持半片銅鐃、而鼓以竹箸、如小兒戲者。有整衣執香、沿途禮拜、挨家逐戸、如里甲抄排門冊者。清修法門、或者有玷乎。予無以應。

（桐野祥陽）

【一一七八】草疏

①忠曰、疏語多四六成之、而間有散文者。此名草疏。禪月集［十九ノ四丈］上新定宋使君詩云、水疊山層擎草疏、砧清月苦立霜風。

② 已下。畧録古今草疏。

③九峯韶禪師、請大覺、住育王疏。

④圓菴作、竺芳住道場、江湖疏。〈見圓菴集［十ノ十三丈］。〉

⑤又作、性初住雪竇、諸山疏。〈見圓菴集［十ノ十四丈］。〉

⑥又作、岱宗住中竺、京刹疏。〈見圓菴集［十ノ十六丈］。〉

⑦笑隱訢禪師、請虚谷、住徑山、江湖疏。〈見蒲室集。〉

⑧清拙澄禪師、請明蒙山、住聖福、山門疏。〈見清拙録。〉

⑨又請夢窓、住建仁疏。〈見清拙録。〉

⑩袁中疏集多草疏。

⑪ 又有以詩準疏、宣讀者。 義堂日工集［三ノ四十九丈］云、建長中山入寺、以余所寄禪詩、擬疏、付西藏主令讀。拈云、鐔津語脉。筠溪詞源、華袞之贈、感佩何言。蓋日本、以詩準疏讀者、始於此。

（桐野祥陽）

【一一七九】柄語

①忠曰、山門同門等疏、小序、名柄語。蓋如器有柄也、山門疏柄語、造語多一律。同門疏等柄語、有語意不同者。

②瑞溪臥雲日件録［上ノ八十六丈］云、普廣院僧、持本寺同門疏來。疏語、意句不到。柄語亦冗甚。今時后生、不依師授。叨作文、往往如此。

（桐野祥陽）

【一一八〇】道場疏

①［敕鈔一ノ卅二丈］舊説曰、道場疏、多滿散用之。然啓建、亦有之。凡啓建有疏、則滿散必亦有疏。啓疏、發頭用儒典語。散疏、發頭用釋典詞。

② 又與諷唱門宣疏、交看。 僉疏法、見執務類、僉疏處。

③文體明辯［十四ノ一丈］附録云按道場疏者、釋老二家、慶祷之詞也。慶詞曰生辰疏。祷祠曰功德疏。二者皆道場之所用也。

（桐野祥陽）

【一一八一】右語

①忠曰、道場疏、首敘某州某寺某甲値某事、諷某經等畢、次正有四六疏語。故疏語首必蒙右伏以三字、是以疏語稱右語也。右者指已前事縁諷誦等、伏以已下、詳述其志趣祷願等事也。

②東漸畧清規［一ノ一丈］、佛降誕云、維那宣疏、至右語、住持跪爐。

③忠曰、住持跪爐、必在右伏以時。東漸言右語跪爐、則以右伏以、爲右語、正同余所解也。

④文體明辯［十三ノ卅丈］附録云、按右語者、宋時、詞臣、進呈文字之詞也。謂之右語者、所進文字、列于左方、而先之、以此詞。實居其右。故因而名之。蓋變進書表文之體、而別其稱耳。然考之諸集、唯歐陽脩王安石等、有進功德疏右語。豈其特用於此等文字、而他皆不用歟。詞皆儷語、而短簡特甚。

⑤忠曰、徐氏言所進文字在左、此詞居右、故名右語者失矣。余謂功德疏、先列數般功德品目、在右方。而次之、以述其志趣之疏語、在左方。而此疏語之首、必加右伏以三字。故以駢儷疏文、名爲右語耳。非爲此詞在右矣。徐氏見諸家文集、唯載右伏以已下儷語、未見功德疏全文。故謬以謂、疏前詞、在疏語右。故名右語。然則不名于本疏爲右語、而却以前序爲右語也。夫一篇文字題、不題本體、却題前序。豈有此理耶。

⑥忠按山門同門等疏、凡有右伏以者、皆當稱右語。然古來右語名、唯於道場疏。不可稱於余疏、矣。

⑦［敕鈔一ノ十丈］舊説曰、祈祷等疏語、名右語。［敕鈔八ノ十丈］書記製之、其文四六也。凡右方爲尊、故右語、猶言尊語也。非疏文在右方之義。　忠曰、此亦一重臆解、固不足取也。

⑧歐陽文忠公集［八十二ノ一丈］云。

⑨太祖皇帝忌辰、道場功德疏、右語。〈九月八日。〉

⑩右伏以、當天開運、聿隆創始之功、繼統承休。方聲奉先之孝、爰戒徹音之日、用資作善之祥。嚴法會於金園、啓靈文於貝葉、伏願、超登妙果、高證眞乘。瞻不動以常存。祐無彊而永固。下均氓庶。咸獲乂寧。

⑪白玉蟾集［十一ノ七丈］、懺謝朱表云。

⑫上清大洞寶籙弟子五雷三司判官知北極驅邪院事。〈臣白某。〉

⑬右〈某〉言、伏以、紫鸞嘯月、青皇垂羽葆於樞宮、白鶴呼雲、赤帝降霓旌於璣舍。〈已下文繁故畧。〉

（桐野祥陽）

【一一八二】榜

①品字箋［五十上　七丈］云、説文榜木片也。古無紙。凡有示告、皆用板、言簡。懸之牌。文繁列之榜。後雖有紙。而牌牓之名。猶昔焉。
②敕修清規肅衆［上二ノ九丈］云、大慧禪師、住育王時、榜示堂司。僧爭無明。決非好僧。有理無理。並皆出院。
③南堂欲禪師録［題跋二丈］、大慧和尚墨蹟、跋云、參學兄弟、未有正見、而務外學。故先德有雜毒入心之誡。老妙喜榜之於門。罰及隣案、在洋嶼。一夏打發一十三人。夫豈偶然。雪峯龍巖翁、得此牓、時以示人。不爲無補。
④死心、掲牓于門。見殿堂門、三門處。

（冨増健太郎）

【一一八三】茶湯榜

①文體明辯云、張于食所者、曰茶湯榜。〈詳道場榜處。〉
②敕修清規［上二ノ十四丈］請新住持云、庫司會兩序勤舊茶、議發專使、修書製疏茶湯榜、〈專使署名。〉請書記爲之。如欠書記、擇能文字者、分爲之。用絹素寫榜。
③［敕抄五ノ廿四丈］解者曰、山門疏、及茶湯榜、書記作之。分爲之者、一人作茶榜、一人作湯榜也。
④忠曰、新住持、茶湯榜、有入寺前者、有入寺後者。
⑤敕修清規［上二ノ十六丈］、專使特爲新命煎點云、茶湯榜、張于堂外兩側。
⑥是即專使與請疏、共持去、穿新命本居處。設煎點時、所張也。
⑦又敕修清規［上二ノ廿三丈］、山門特爲新命茶湯云、茶湯榜、預張僧堂前上下間。
⑧是即新命入寺之後、煎點所張也。

（冨増健太郎）

【一一八四】回禮（ウイレイノ）榜

①敕修清規［下一ノ卅九丈〇備用八ノ八丈同］、謝掛搭云、當日侵早、方丈客頭、堂司行者、各寫回禮榜、貼衆寮前。方丈榜、貼上間。兩序榜、貼下間。　榜式云。
②堂頭和尚、粥罷回禮
　新歸堂首座、
　　今月　日客頭行者　某　承準
③頭首知事、粥罷、回禮
　新歸堂首座、
　　今月　日堂司行者　某　拜覆

（冨増健太郎）

【一一八五】免告香小榜

①敕修清規［上二ノ三丈］、告香云、侍者預出小榜。貼法堂柱上云、奉堂頭和尚慈旨。名徳西堂、首座、並免告香。侍司某謹白。

（冨増健太郎）

【一一八六】免人事榜

①敕修清規［下二ノ十丈］、庫司四節、特爲首座大衆湯云、方丈預出免人事榜云、某節、並就來日、法堂上人事、例免到方丈。伏希衆悉。

②　舊説［敕鈔十四ノ廿九丈］曰、榜有古式今式。敕修所戴、今式也。

③古式免人事榜云、〈結制、解制、冬節、歳節。〉禮數併就來日、法堂人事、頭首、知事、耆舊、法眷、私下往復、不必講。切希悉及、住山某、咨白。

④新式、免人事榜云、某節、禮數、並就來日、法堂上人事。例免到方丈。幸希衆悉。

（冨増健太郎）

【一一八七】免人事頌

①禪苑清規［二ノ七丈］、冬年人事云、節前一日、堂頭有免人事頌。貼僧堂前。

②貞和集［三ノ四丈］、天衣懷禪師、元旦免人事頌云、休把僧儀混俗情、江頭野草幾回青、無角鐵牛眠少室、當初豈是賀新正。　又云、日日相逢日日新。何須特地到慇懃。百年三萬六千日。祇是南柯夢裏人。

③芙蓉楷禪師録［續古宿二ノ芙蓉録六丈］、歳旦免人事頌云、日出東方夜落西、急須著眼莫遲疑、新年不用來相賀、江月松風是舊時。

④圓照本禪師別録［十一丈］、山中歳旦、免人事頌云、報爾玄徒休賀歳、出家弗比在家同、老僧自看生來事、七十年過一夢中。　又云、自謂居山且免閑、豈勞心力賀新年、百千萬歳今朝事、成住壞空彈指間。

（冨増健太郎）

【一一八八】閑人不輒入榜

①臥雲日件録［上ノ五十七丈］云、察堂省西堂入寺、據室、有閑人不輒入之語。問之。省答曰、唐土尊宿之室、例掲閑人不輒入之榜。

（冨増健太郎）

【一一八九】諸寮報榜

①敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云、維那發諸寮報榜。　榜式云、
②　掛搭　一僧某甲上座。某州人氏。某戒。
　　某甲上座
　　某甲上座
　　今月　日堂司　某　報
③報侍司曰申。尊住持也。前堂首座、侍司、衆寮、必具戒次州名。餘皆不具。
（冨増健太郎）

【一一九〇】掛搭報榜

①敕修清規［下一ノ卅三丈左］遊方參請云、求住、如允、仍觸禮一拜。就求帖子。到侍司、附名云、適奉方丈慈旨、令就上寮附名。侍者次第、發榜頭下堂司。〈詳帖子處。〉［下ノ卅四丈］又大相看云、次早、赴方丈茶、求掛搭。候發榜下堂司、送歸堂。　榜式云、
②奉　方丈慈旨、掛搭　一僧。某甲上座。
　　某甲上座
　　今月　日侍司　某　報
（冨増健太郎）

【一一九一】謝掛搭率香錢小榜

①見錢財類、謝掛搭香錢處。
（冨増健太郎）

【一一九二】參榜

①參榜、即門狀也。見門狀處。
②翰墨大全［活套門四ノ十八丈］云、凡榜子用白紙濶四寸許、就中心。寫一行、横卷之。平常見人、添取覆兩字。其餘賀謝辭違、並臨時於名下、改之。寫榜子式云、
③僧家　　某院住持僧　某　參
（冨増健太郎）

【一一九三】無頭牓

①鏡堂圓禪師録［偈廿一丈］、示作無頭榜者、偈云、白壁無頭榜字濃、不知虚費半宵功、損他常住惡徒黨、盡付伽藍掌握中。
②義堂日用工夫集［一廿七丈］云、石室出示無頭榜一卷。大槩擧叢林辨事、不公之論。［六

十一丈］又云、石屏寮有無頭榜之嗤。蓋以余不黨門徒之議、獨立弗移也。

③ 一休順和尚年譜云、岐嶽請師、題無頭牓。

④ 忠曰、［下ノ十二丈］李肇國史補云、匿名造謗。謂之無名子。〈止此。〉無頭牓者、所謂無名子也。蓋無頭名也。若人無頭、則不可認其人。今作榜謗人者、藏己姓名。故言無頭榜。張湯傳、言蜚變。亦此類也。寂照堂谷響集［九ノ廿丈］作無住方、素無據。

⑤ 堯山堂外紀［廿四ノ八］云、唐魏扶〈太和中進士〉知禮闈。入貢院題詩云、梧桐葉落滿庭陰、鎖閉朱門試院深、會是當年辛苦地、不將今日負初心。及放榜、無名子削其梧桐、鎖閉、會是、不將、二字。爲五言詩。以譏之。

⑥ 忠曰所譏、只在削不將二字。

⑦ 史記［百廿二ノ八丈］張湯傳云、河東人李文、嘗與湯有郤。湯有所愛史魯謁居。知湯不平、使人上蜚變、告文姦。

⑧ 評林云、劉奉世曰、蜚變、謂如無姓名、上變者。

⑨ 岳珂裎史云、熙寧七年、四月、王荊公罷相、鎮金陵。是秋江左大蝗。無名子、題詩賞心亭曰、青苗免役兩妨農、天下嗷嗷怨相公、惟有蝗蟲感恩德、又隨鈞旆過江東。荊公一日餞客、至亭上。覽之不悅。命左右物色。竟莫知其爲何人也。

（冨増健太郎）

【一一九四】道場榜

① 文體明辯附録［十三ノ卅二丈］云、按道場榜者、釋老二家、修建道場、榜示之詞也。品題不同、而施用亦異。其迎神馭者、曰門榜。淨壇場者、曰監壇榜。〈亦曰衞壇。〉燃燈者、曰燈榜。戒孤魂者、曰戒約榜。限孤魂者、曰結界榜。沿孤魂者、曰浴堂榜。施法食者、曰施斛榜。施水燈者、曰水燈榜。張于造齋之所者、曰監齋榜。張于設供之所者、曰供榜。張于食所者、曰茶湯榜。已上數榜、二家錯陳、而互有遺闕。其或用或不用、亦不可知。

（冨増健太郎）

【一一九五】聖節黄榜

① 敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云、啓建之先、一日、堂司備榜、張于三門之右。用黄紙書之。［同廿一丈］又黄榜式云、

② 某道某路某寺。
某月某日。欽遇
天壽聖節。本寺預於今月某日、恭就
大佛寶殿。啓建
金剛無量壽道場。一月日。逐日輪僧上殿、
披閱眞詮、宣持密號。所萃
洪因。端爲祝延
今上皇帝。聖壽萬歲萬歲。萬萬歲。

右　恭　惟
佛日洞明。
龍天昭格。
某年某月　日都監寺臣僧某　言
住持臣僧　某

②幻住清規［十三丈］云、榜用黄紙書。如臣僧之名。用紅紙貼。可高四尺闊三尺。此亦隨屋大小。爲掛之佛殿上。俟道場滿散、收起。榜用木作骨子。

③春明退朝録［下ノ二十丈］云、唐日曆、正〈正字犯仁宗嫌名。〉觀十年十月、詔始用黄麻紙。寫詔敕。又曰、上元三年、閏三月戊子、敕制敕施行。既爲永式。比用白紙、多有蟲蠹。自今已後、尚書省頒下諸司、及州下縣。宜並用黄紙。〈魏志、劉放孫資、勸明帝、召司馬宣王。帝納其言、即以黄紙令放作詔。〉

④［敕鈔一ノ十丈］舊説曰、聖節榜、及經單、用黄紙防蚨也。或謂一月日間、豈怕蚨災哉。但是敬之至也。

⑤黄紙、以黄蘗染。　遯齋閒覽［事文別ノ三ノ一丈引］云、古人寫書。皆用黄紙。以蘗染之。所以辟蠹、故曰黄卷。

（冨増健太郎）

【一一九六】看經榜

①忠曰、七月十五日、盂蘭盆會。維那預於朔日、發看經榜。榜語左方、列寫咒名題、張之僧堂。衆僧隨意、讀誦某經咒幾卷訖、書己名於某經咒目下。維那依所誦、列寫之疏中、至十五日、臨會宣讀、　榜式云、

②山門
宓以、衲子自恣之日、乃是蘭盆救苦之辰。鵝護雪清。調御之眞規不墜。蝋人氷冷。目連之報勞有效。眞讀至教。課持秘咒。所鳩良因。　仰贊常住三寶、果海聖賢。　專祈。　亡沒七世父母親眷、心鏡初拭、照破萬却之昏迷。慧劍忽磨、斫開千生之羈鎖。四恩總報、三有齋資、法界含靈、均登覺道者、　具列功課品目于後。

大乘妙典　圓覺了義經
金剛般若經　梵網經
盂蘭盆經　般若心經
普門品　壽量品
楞嚴神咒　大悲咒
提婆品　尊勝陀羅尼
光明眞言　隨求陀羅尼
八句陀羅尼　破地獄咒
一字金輪咒　阿彌陀名號

右具任前
伏希　衆悉
今月　日　　堂司某甲榜

②　右經咒名、一行一名。

③正月修正［回向集三ノ四十七丈　五十二丈］、或亡僧結縁等、皆有看經榜。

（冨増健太郎）

【一一九七】經單

①忠曰、單者、紙片也。經目録單紙。故云經單。〈單有數種。見名單處、及座位門單位處。〉

②敕修清規［上一ノ十八丈］、聖節云、啓建之先、一日、堂司備榜、及上殿經單、俱用黄紙書之。〈用黄義、見聖節黄榜處。〉

③［敕鈔一ノ十丈］舊説曰、經單式、似看經榜。

④敕修清規［上一ノ廿二丈］經單式云、

⑤今具經文品目于后。

大方廣佛華嚴經
大佛頂萬行首楞嚴經
大乘妙法蓮華經
大乘金光明經
大方廣圓覺修多羅了義經
大乘金剛般若波羅蜜經
大仁王護國經

右具如前
今月　日綱維臣僧　某　具

（冨増健太郎）

【一一九八】茶（サ）状

①舊説［敕鈔四ノ十八丈］曰、請于茶之状子也。

②敕修清規［上二ノ四丈］告香云、請客侍者、預依戒次、具茶状、備卓袱筆硯。告香罷、列法堂下間、請茶、各僉名。［下一ノ四十丈］又方丈特爲新掛搭茶云、次日庫司客頭行者、依戒單字名、具茶状、列衆寮前、請僉名。書云、某甲敬依來命。［下一ノ四十丈］新掛搭茶状式云、

③新掛搭某甲上座列名
堂頭和尚今晨齋退（ツイ）就寢堂點茶
特爲伏希
雲集　今月　日侍司某　拜請

④庫司頭首式云、

⑤新掛搭　某上座列名
右某等今晨齋退就庫司點茶一中
特爲伏望
衆慈同垂
降重　　今月　日庫司比丘某等拜請
⑥頭首當列名止於知客。就照堂餘同前。

（荒木泰量）

【一一九九】門状

①敕修清規［下二ノ十六丈］月分須知云、正月初一日、有處四孟月、大衆行道諷經祈保。次具門状、官員・檀越、諸山賀歳。

②［敕鈔十四ノ四十一丈］舊説曰、門状者、謁見人時、所呈單状也。紙濶六七寸。内不書文字。自左方巻之。用絲束分中少已上。題姓名於其上。又名參榜。或曰參状。

③翰墨大全［諸式ノ四ノ十九丈］云、凡名刺門状、用好紙。濶三四寸。左巻如箸大。用紅線、束刺腰。須眞楷細書。或倉卒無絲線、則剪胚紅紙一小條。就名上束定、亦得。若辭人、則於名下書拜辭。謝人則於名下書拜謝。送人則於名下書拜違。［諸式四ノ十八丈〇敕鈔十四ノ四十一丈引］又寫門状式云、

④具銜姓某
右某謹祇候
參
某官稱呼伏候
台旨
月　日具銜姓　某　状

⑤凡門状、用大白紙一幅。前空二寸。眞楷小書、字疎密相對。如前式。武官不用全幅紙。但濶四五寸。後不用具年。但云某月日、姓某状。公吏同武官式。僧道、同官員式。尤貴細書。

⑥太平老人袖中錦［事文別集廿七ノ一丈引続世説］云、古者未有紙。削竹木、以書姓名。故謂之刺。後以紙書故謂之名紙。唐李徳裕爲相貴盛。人務加禮。改具銜候起居之状、謂之門状。

⑦李濟翁資暇録［事苑四ノ十六丈引事始同此・卅六丈〇郛十四］云、門状、文宗朝以前無之。自朱崖李相貴盛於武宗朝。且近代稀有生一品。百官無以希取其意。以爲舊刺輕。〈刺則今之名紙。〉相扇留具銜候起居状。而今又益競、以善價紙、如出印之字。巧諂曲媚、猶有未臻之遺恨。井丹禰正平生於今日、其亦如是乎。

⑧丹鉛總録［十五ノ十丈］云、古以通名爲謁。至漢猶然。晉人謂之門牋。唐人謂之投刺。今人謂之拜帖。史記［九十七ノ十丈］酈生踵（イタリテ）軍門上謁。案劍叱使者。使者懼而失謁。跪拾謁、還走入報。漢徐穉傳、弔喪醊酒畢、留謁則去。注謁刺也。

⑨忠曰、門状、辭別則主還之。見寇準事。

⑩古今詩話云、寇萊公寫刺。訪魏仲先。議論騒雅。相得甚懽。將別。謂萊公曰、盛刺不復還。留爲山家之寶。

【一二〇〇】參状

①門状又名參状。見門状處。

（荒木泰量）

【一二〇一】目子

①忠曰、凡人名、或事條等、其數多、而不可諳記者。列寫其品目於片紙。以備遺忘。此名目子。

②敕修清規［上二ノ廿三丈］、入院、當晩小參云、提綱畢、敍謝。行者乗燭。侍者呈目子。庶得詳盡。

③忠曰、清規上文云、或有相送官客諸山留宿者、逐一條列、預用呈稟。〈止此。〉今所呈目子、列其名者。

④敕修清規［下一ノ十二丈］兩序進退云、住持以擇定人名目子、并西堂勤舊、令客頭行者請粥罷會茶。［下一ノ十四丈］又掛鉢時、請知事云、維那至住持前、問訊側立。住持付所請人名目子。

⑤忠曰、又叢林、請入牌祖堂等語於住持人、其孝子、詳録其入牌祖師屋裏縁語等、呈之住持、以充造語之用。此亦云目子矣。又請禪師號等於　朝廷時、列書其祖師行状・縁語等、呈之内記、以備造文之資。此亦云目子矣。故目子之名廣焉。

（荒木泰量）

【一二〇二】批子

①忠曰、敕修清規［下一ノ十二丈］兩序進退云、擇定人名目子、〈詳目子處。〉校定清規［敕鈔九ノ十三丈］書之、目子作批子。然批子、少異目子。笑隱改名。固有意。批者小片紙書事要、示人也。

②［敕鈔九ノ十七丈〇又十一ノ十八丈〇又五ノ四十丈］舊説曰、批者、但書事簡要者。如禪林批子、曰誰某掛搭、或充某職等也。有首尾語。復用年月日。日本俗言折紙者、類此。莊子［二ノ三丈養生主］庖丁解牛説云、依天理、批（ウチ）大却導（シタカフ）大窾。林氏曰、大郤、骨肉交際之處也。批擊也。〈止此。〉蓋以刀背（ムネヲ）、擊其骨肉間、戛戛然、骨肉自分離。書要者、類之。故云批。凡詩文批語、亦此義。如註語多。批則評至要。僅下三五字。

③品字箋［巳ノ十六丈］云、批手書評隲曰批。進學解、手不停批於六藝之編。

④正字通［卯中ノ十八丈］云、批示也。唐李藩傳、藩遷給事中。制敕有不便者、黄紙後批之。帝稱其有宰相器。

⑤巳下、畧録批式。亦文有長短。

⑥華嚴經玄談［八ノ六十二丈］云、藏和尚開講。忽然震動、具以表聞。則天大聖皇后、親運御筆、批云、省状具云、皆因敷演微言、弘揚秘賾。初譯之日、夢甘露以呈祥、開譯之辰、感地動而標異。斯乃如來降跡、用符九會之文。豈朕庸虚。敢當六種之應。披覧來状、欣暢盈懐。

⑦尭山堂外紀［廿三ノ七丈］云、唐中宗、内出綵花。賜近臣。武平一應制賦詩。〈云云。〉中宗手敕批云、平一年雖最少、文甚警新。悦紅蕊之先開。訝黄鶯之未囀。循環吟咀。賞歎兼懐。今更賜花一枝、以彰其美。

⑧宋史［列傳七十七ノ四丈］張方平傳云、方平進詔草。帝親批之曰、卿文章典雅。煥然有三代風。［六丈］又云、新法、鬻河渡・坊場・司農。并及祠廟。宋閼伯・微子廟、皆爲賈區。方平言、宋王業所基、閼伯封於商丘。以主大火。微子爲始封之君。是二祠者、亦不得免乎。帝震怒、批牘尾曰、慢神辱國。無甚於斯。於是天下祠廟、皆得不鬻。

⑨宋李忠定公奏議、多御批。皆書議後。或云、依奏。或云、不允所乞。今封還卿奏。勿復有請。

⑩王梅溪集御試策巻末云、御批、任賢輝、經學淹通、議論醇正、可作第一人。

（荒木泰量）

【一二〇三】免遠迎批

①敕修清規［上二ノ廿丈］入院云、専使預當計稟住持、必先發批免衆遠迎。

（荒木泰量）

【一二〇四】送榻位批

①敕修清規［下一ノ三十七丈］諸方名勝掛搭云、凡欲求掛搭、〈云云。〉住持如允、隨職名高下、送蒙堂前資。〈云云。〉受送人、懐香、詣方丈、拜謝榻位。或方丈發榜頭、煩首座、請送、則首座、令堂司行者、請知事一人・維那・侍者、及受送人、同至寮、首座燒香獻茶、白住持發批、山門相送之意。

（荒木泰量）

【一二〇五】請侍者批

①敕修清規［下ノ十四丈］侍者進退云、住持、批下堂司、請新侍者。維那、令行者照批請。

（荒木泰量）

【一二〇六】帖子

①敕修清規［下一ノ卅三丈］、遊方參請云、不拘早晩。不擇處所。各知進退、伺候住持、求住。方丈近事人、毋得呵禁。如允、仍觸禮一拜。就求帖子、到侍司附名云、適奉方丈慈旨。令就上寮附名。侍者次第、發榜頭、下堂司。維那令行者、請新到。喫茶畢、出度牒、上床暦。

②　忠曰、［敕鈔十一ノ十三丈］舊説、言帖子、即目子也。差矣。［鈔十一ノ十五丈ノヲ東傳ノコトニテ可知］但小片紙、書掛搭一僧某甲、煩侍者附名、之語也。

③［下一ノ五十八丈］又敕修清規、亡僧云、用小片白紙。寫帖（テウ）子云、

④新圓寂某甲上座某州人

　　乘炬

　　佛事

　　堂頭和尚　　堂司比丘　某　拜請

⑤其餘佛事、並準此寫。

⑥　［鈔十一ノ十五丈］舊説曰、祖東傳、入元國。求掛搭於龍翔寺。輝東陽、抛出剪刀、令試頌。祖即時呈頌。殺人刀矣活人劍。一句當機不讓師。自此豁開門戸了、喪身失命在斯時。東陽親（ミツカラ）書帖云、掛搭一僧、煩侍者附名。有住持躬書帖、如此者。

（荒木泰量）

【一二〇七】檢子

①校定清規［上ノ卅九丈］、侍者職事云、凡上堂、及法語、當隨即編録。預呈檢子、臻志書寫。

②正字通云、檢程式。今俗謂文書藁、爲檢子。

（荒木泰量）

【一二〇八】日子

①敕修清規［上二ノ廿丈］、入院云、行者進卓筆硯。知事具状。備盤袱、捧呈寺印。新命看封、付知事、開封。新命視篆訖、就状上、先僉押。次題日子。使印於上。知事收状。衣鉢侍者、收印退卓。

②　忠曰、日子子、非助詞。乃十二支之子也。〈餘冬解見于次。〉題日子者、書朔日子・二日子等也。

③　［敕鈔五ノ四十二丈］岐陽和尚曰、状上者、状尾也。寺印、是山門重寶。不可容易。但入寺事繁、不暇別紙造收納状。即就送來状子尾、僅題日子、使印於其上。年月已詳于彼状。故今只書某日甲子而已。使印於上者、謂日子字上也。或曰、僉押下、日子上之中間、使印也。

④　　忠曰、岐陽、言書某日甲子者、岐陽意謂、若入寺朔日甲子、則押下書甲子字。若二日乙丑、則押下書乙丑字、而其支干上、使住持私印也。是訛矣。但既書某月下書某日子、而日子上、使印而已。

⑤餘冬序録［三十九ノ十二丈］〈何孟春撰。〉云、年月稱某年月日、有云日子者。或謂、此俗語。

按文選陳孔璋、檄呉將校文、年月朔日子、云云。則日子之稱、有自來矣。南史劉之遴、與張纘等、參校古本漢書、稱、永平十六年、五月二十一日己酉郎班固。而今本無上書年月日子。隋袁充上表、寳曆之元、改年仁壽。歳月日子、還共誕聖之時日。十二時毎日必起子。日子之稱、其是乎。

⑥孔氏雜説〔郛十三ノ九丈〇輟耕十ノ十七丈依引〕〈宋孔平仲〉云、俗所謂日子、亦有所出。文選〔四十四ノ十九丈〕曹公檄呉將校部曲文、年月朔日子。注、發檄時也。然則日子日時也。〈忠曰、陳孔璋、爲曹公作此檄文。〉

⑦忠曰、文選注、以子爲發檄時。則與餘冬解子、較異也。夜半子時、恐非發檄時。余謂餘冬之解、得理也。

⑧葉子奇草木子〔一百張〕云、北人無識字。使之爲長官。或欽正官。要題判署事。及寫日子、七字鈎不從右七轉、而從左■轉。見者爲笑。

（荒木泰量）

【一二〇九】標

①敕修清規〔上二ノ卅二丈〕唱衣云、行者、瞻顧前後、喝定名字、知客寫名上單、侍者依名發標。〔下一ノ五十八丈〕又亡僧估衣云、排字號、就記價直。在下。依號寫標。貼衣物上、入籠。

②正字通〔辰中百三丈〕云、標表也。立木爲表、繫采于上、爲標記。

③忠曰、〔敕鈔七ノ十丈発八与撥同今不用〕發者發遣也。發紙片標記、與買人、後時以此標照之、而取某物也。

（荒木泰量）

【一二一〇】長標

①忠曰、聯紙列寫。故言長標。

②敕修清規〔下一ノ五十八丈〕亡僧估衣云、隨號依價、逐件別寫長標、以備唱衣時用。

（荒木泰量）

【一二一一】引標

①黄檗清規梵行章、第五云、〈三師七證、共十條。〉

第一引票上〈某〉下〈某某〉宗師、爲得戒大和尚。

第二引票上〈某〉下〈某某〉宗師、爲羯磨阿闍梨。

第三引票上〈某〉下〈某某〉宗師、爲教授阿闍黎。

第四引栗上〈某〉下〈某某〉宗師、爲尊證阿闍黎。

〈至第十引票俱倣此〉票用紅紙。長二尺餘。闊五寸。

②　忠曰、票標俗省。　上〈某〉下〈某〉者、檗山僧。稱隱元、言上隱下元老和尚之類也。

（荒木泰量）

【一二一二】單〈名單〉

①忠曰、以名書單片紙。故言單也。凡清規稱單者、數種。名同物別。有名單、有單板、單位〈見座位類。〉、眠單。〈見服章類。〉並但言單。又有經單・差（サ）單・簿單・單帳等。〈見簿券類。〉今此即名單也。

②又曰、僧堂單者、紅紙小片、書各位名。一紙一名、以貼各位床上、壁外面。〈今太清僧寺如此。〉別源東歸集［廿二丈］、賀太虚侍者侍聖僧。偈云、五湖四海堂内客、一單一鉢標一名。〈止此。〉是也。〈又見座位類、單位處。〉

③　敕修清規［下一ノ四丈左］坐禪云、大衆歸堂向裏坐。〈止此。〉［敕鈔十二ノ四丈］解者曰、面（ムカテ）己坐牌坐。〈止此。〉依此、似名單在後壁。如東福僧堂、後壁、當對面處、各畫一圓相。藝州佛通寺僧堂、亦後壁當坐可對面處、畫圓相。圓相中、次第書竺土大仙心東西密相付云云。〈參同契語。〉一圓一字、即是第二世、一笑和尚親蹟。〈忠親覧。〉

④敕修清規［上二ノ廿八丈］、請喪司職事云、喪司合干人僕、排單掲示。

（荒木泰量）

【一二一三】單票

①叢林兩序須知［十一丈］〈費隱撰。〉知客須知云、在寺及新到僧衆、有懇求進堂者、預先引拜方丈、給出單票、然後送入。白維那安單。

（荒木泰量）

【一二一四】花押

①見執務類僉押處。

（荒木泰量）

【一二一五】遺囑書

①敕修清規［上二ノ廿六丈］尊宿遷化、遺囑式云、

②某寺住持某、世縁報謝、風燭不停。所有隨身衣鉢、檀信施利。非常住物、煩兩序抄劄。端（マサニ）請。某人、主行喪事、餘俵衆僧。看經行喪、毋致繁多侵用常住。幸察此意。伏希

悉及。　　年　月　日住山　某　押

（荒木泰量）

【一二一六】遺書

①敕修清規［上二ノ廿六丈］尊宿遷化云、有官員檀越、諸山法眷遺書。即當遣送。　遺書式云、

②早忝
遊從。奈合離之有數。繼承推挽（スイ）。遂黽勉於微縁。電
露俄空。
雲山益渺。敢祈
保護。以
壽斯文。拜禱。不備。

③　鄰封式云、

④住山無補。每依
鄰壁之光。夢境元空。幸謝世縁之幻。莫諧
面別。惟切心馳。冀
佛日以流輝、俾
宗風而益振。伏惟
珍重。

⑤　法眷式云、

⑥叨濫住山。有媿
同門之友。因循抱疾、將爲畢世之人。敬奉手書。聊
伸
面別。光昭
先師之令徳、道在
吾屬之力行。無任傾勤。伏惟
珍重。

⑦　可漏子書云、

⑧書拜　某人稱呼　　某寺比丘　某　謹封

（荒木泰量）

【一二一七】病僧口詞

①敕修清規［下一ノ五十六丈］病僧口詞云、

②抱病僧某、右某、本貫某州・某姓・幾歳、給到某處度牒爲僧。某年、到某寺挂搭。今來抱病。恐風火不定。所有隨身行李、合煩公界抄割。死後望、依叢林清規津送。　年　月　日抱病僧　某甲口詞。

③　又見幻住菴清規［六十丈］。

（荒木泰量）

【一二一八】訃状

①敕修清規［上二ノ廿六丈］尊宿入龕云、首座同兩序勤舊、商議、發訃状。状式［上二ノ廿七丈］云、

②某寺喪司比丘　某

右某山門不幸

堂頭和尚、今月某日遽爾歸眞、謹以訃

聞謹状。

年　月　日。某寺喪司比丘某状。

③　可漏子書云

④訃告　某處堂頭和尚禪師　　具位　謹封

（彦坂宗俊）

【一二一九】祭文

①敕修清規［上二ノ廿九丈左］尊宿遷化云、凡祭文、皆喪司書記爲之。

②東漸清規［三ノ十六丈］送亡式云、祭文不拘時節、若爲師爲父則倒展讀之可也。

（彦坂宗俊）

【一二二〇】諡號

①僧史略［七十一丈］云、僧循萬行。故有迹焉。善行、則諡以嘉名惡行、則人皆不齒。是以六羣比丘、終非杜多之號。六和勝士、方旌所易之名。自漢魏晉宋、無聞斯禮。後魏重高僧法果生署之以官、死幸之而臨。〈去聲〉。乃追贈胡靈公、此僧諡之始也。〈果爲沙門統、封公爵、贈胡靈諡也〉。原此出於太常寺矣。後周隨世唐初皆不行。至天后朝。有北宗神秀居荊州、神龍二年、詔賜諡大通禪師矣。

②　日本禪林諡號、始於大覺、見稱呼類、禪師處。

（彦坂宗俊）

【一二二一】可漏子

①忠曰、納文疏紙筒也。書柬袋、亦名可漏子、可漏卽是殼漏。殼漏者卵殼也。比人身骸。又言封皮。可殼唐音相近、故假用、猶如弄引作弄胤。此類甚多。

②敕修清規［上二ノ十二丈］、迎待尊宿請状云、可漏子状請。某處堂頭和尚禪師、具位、謹封。又［上二ノ廿一丈］山門請新命齋状云、可漏子状請。新命云云、尊座前、具位謹封。

③容齋三筆［十五ノ三丈］云、蔡京盗弄威柄。有一兵、齎一雙緘及紫匣來。乃福建轉運判官、直龍圖閣鄭可簡、以新茶獻。卽就可漏上、書秘撰運副四字、授之。

④潛確居類書［五十ノ廿三丈○書言八ノ七丈全同］云、敕黄、用蜀中麻紙爲之。其可漏子、又長於敕黄一尺。可漏子註云封皮。

⑤孤樹裏談［八ノ四十八丈］云、内閣題本、用小揭帖。楷書斜摺、内封。外則可漏、封以文淵閣印、方銀鑄、五筋篆、大如御史印。

⑥忠曰、書柬可漏、糊封上下。啓之之法、截開其底。如疏可漏上下不封、如竹筒然。行者度疏於維那時、維那亦自底、抽取之。或曰、可漏者、上下通透、可脱漏之義。余謂若然、則上下糊封者、亦名可漏。當如何解之。故此義不足取也。

⑦已下、録可漏即是殼漏之證。

⑧圓悟勤禪師録［十三ノ十七丈］普説云、先師常云、莫學瑠璃瓶子禪。輕輕被人觸著。便百雜碎、參時須參皮可漏子禪。任是向高峯頂上撲下、亦無傷損。

⑨碧巖録［十ノ廿三丈］擧之、作但參皮殼漏子禪。

⑩已下、録身骸稱殼漏子。

⑪傳燈録［十五ノ廿五丈］洞山价禪師章云、師將圓寂、謂衆曰、離此殼漏子、向什麽處、與吾相見。衆無對。

⑫掌珠故事［仙佛集］、載此。注云、殼漏子、身尸也。

⑬傳燈録［十八ノ十八丈］長慶稜禪師章云、保福遷化、人問師。保福抛却殼漏子、向什麽處去也。師曰、且道保福在那箇殼漏子裏。　又［廿八ノ四丈］南陽忠國師語云、有知識、示學人、但自識性了無常時、抛却殼漏子一邊著、靈臺智性、迥然而去、名爲解脱。〈是外道量〉。

⑭已下、録衣稱可漏、又殼可通用之證。

⑮恕中慍禪師録［一ノ廿八丈］云、洪祐和尚、送歸源法衣至。上堂、拈衣示衆云、者箇是先歸源、向異類中。遺下皮可漏子、日炙風吹而不壞、刀斫鋸解而不開。

⑯舊説［勅鈔六ノ二丈］云、疏可漏貼小黄紙者、爲防蠹災也。雖少時用之、表其謹至。　忠曰、此義不然。余謂、可漏貼黄紙者、引黄之遺範也。施食法疏可漏、貼黑紙者、蓋黑北方水色、取救渴義也。

⑰引黄者、正字通［亥下廿五丈］云、貼黄、即古之引黄、唐制。詔敕有更改、以紙貼之曰貼黄。其表章略擧事目。見于前封皮者、謂之引黄、後世卽以引黄、爲貼黄、不用黄紙。龍川志曰、富鄭公上章、貼黄言、臣與韓琦言、不當、起復。是以引黄爲貼黄也。李肇曰、貼黄、或曰押黄。

（彦坂宗俊）

禪林象器箋巻第十六

神京妙心龍華沙懲道中無著甫輯

○簿券類

【一二二二】憑由

①居家必用［辛ノ廿丈］云、憑由、謂敘其事因也。
②敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云、聖節啓散、古規所載。堂僧堂司給由、暫到客司給由、隨身照證。蓋往時僧道、歲一供帳、納免丁錢、官給由爲憑。故遊方道具、度牒之外、有每歲免丁由。有何處坐夏由。有啓散聖節由。以備徵詰。各亦畏慎。今雖不用、存其事、以見古也。
③解者［敕鈔一ノ廿四丈］曰、古規校定備用也。由者公憑也。謂敘其事因由也。論語［常菴引］云、觀其所由。［西引］張籍内宴詩云、共喜拜恩侵夜出、金吾不敢問行由。皆謂來歷也。
④鐔津文集［八ノ廿七丈］、上仁宗皇帝萬言書云、其徒苟欲求師訪道千里之遠、有司不以憑由而阻之。使人無迫戚之心。往來裕如也。然憑由之制、本用防惡、及其小吏侮之、而返更防善。此又在百執事、而宜深察之。

（彦坂宗俊）

【一二二三】免丁由

①敕修清規云、往時、僧道歲一供帳、納免丁錢。官給由爲憑。〈詳憑由處。〉
②忠曰、僧人免民丁役。故納錢於官所。官收錢、了與憑文。此爲免丁由。
③又與供帳處、及錢財類、免丁錢處、交看。
④小補韻會［青ノ三丈］云、丁民丁、唐志男子二十爲丁。一説二十以上、爲丁。人壽百年爲期、一幹十年、則丁當四十、強壯之時、故曰丁。
⑤忠曰、十歲甲。二十歲乙。三十歲丙。四十歲丁也。
⑥杜氏通典［七ノ十四丈］食貨篇、丁中云、晉武帝平吳。後、有司奏、男子年十六以上、至六十爲正丁。十五以下、至十三。六十以上、至六十五。爲次丁。十二以下、六十六以上、爲老小、不事。宋孝武大明中、王敬弘上言。〈云云〉。十五至十六、且爲半丁。十七爲全丁、帝從之。北齊武成清河三年、乃令、男子十八以上、六十五以下、爲丁。十六以上、十七以下、爲中。六十六以上、爲老。十五以下、爲小。隋文帝頒新令、男女三歲以下、爲黄、十歲以下、爲小。十七以下、爲中。十八以上、爲丁。以從課役六十爲老。乃免、開皇三年。乃令、人以二十一成丁。〈云云。〉大唐武德七年、定令。男女始生爲黄。四歲爲小。十六爲中。二十一爲丁。六十爲老。玄宗天寶三載、十二月制、自今以後、百姓宜以十八以上、爲中男、二十三以上成丁。
⑦通鑑綱目［卅八ノ九十七丈］唐武德七年集覽云、三宗史編解曰、黄謂穉幼髮黄也。四歲爲小。小謂細弱也。十六爲中。中者謂上下通也。二十爲丁。丁者當也。當彊壯之耆。

（彦坂宗俊）

【一二二四】坐夏由

①忠曰、行脚僧、在某寺過夏者、本寺給由文。
②敕修清規云、有何處坐夏由。〈詳憑由處。〉

【一二二五】啓散聖節由

①見憑由處。
②備用清規［一ノ四丈］聖節路由式云、
③暫到一僧、某甲上座。今月幾日。恭遇
天壽節、已於本寺、啓散訖。憑此爲照者。
年月　日某寺知客某押給。

（彦坂宗俊）

【一二二六】公驗

①忠曰、自官出與、證據文也。
②廣燈録［十二ノ三丈］三聖然禪師章云、師參德山、參衆。堂中踢天太爲首座、問云、夫行脚人、須具本道公驗。作麽生是本道公驗。師云、嗄。首座再問、師以坐具便打云、者漆桶、前後觸忤多少賢良、首座自後更不勘僧。
③　虛堂愚禪師興聖録［十二丈］知府呉状元、蠲蘆租公據立石上堂云。〈云云。〉且道、有何憑據。卓拄杖、公驗分明。

（彦坂宗俊）

【一二二七】祠部牒

①康熙字典［巳中六十八丈］云、牒達協切、音疊、説文札也。廣韻書板曰牒。又增韻官府移文、謂之牒。
②忠曰、祠部給度牒。故度牒稱祠部牒。
③釋氏要覧［上ノ卅五丈］云、祠部牒、自尚書省祠部司出。故稱祠部。
④編年通論［十六ノ十八丈］云、天寶五年五月制、天下度僧尼。並令祠部給牒。今謂之祠部者、自是而始。
⑤僧史略［中ノ四十四丈〇要覧上卅五丈引ナリ］云、案會要曰、則天延載元年、五月十五日敕、天下僧尼、隷祠部。不須屬司賓。知天后前、係司賓也。此乃隷祠部之始也。義取其善攘惡、福解災之謂也。　［中ノ四十七丈〇要覧引］又云、案續會要天寶六年、五月制、所度僧尼、仍令祠部給牒、給牒、自玄宗朝始也。
⑥　忠曰、往時依試經得度。鬻祠牒、起於後代。
⑦　困學紀聞［十四ノ三丈］云、治平末年、始鬻度牒。攷之唐史、肅宗時、裴冕建言、度僧道士、收貲、濟軍興、此鬻牒之始也。　〈又見後供帳處。又按淮南子齊桓公、欲征伐、甲兵不足、乃令輕罪者、贖以金刀、訟不勝者、出一束箭。依此、収貲濟軍興、亦有所本。〉

⑧ 容齋三筆［九ノ九丈］云、唐末帝〈後唐路王。〉、清泰二年、二月、功徳使奏、毎年誕節、諸州府奏、薦僧道。其僧尼、欲立講論科、講經科、表白科、文章應制科、持念科、禪科、聲贊科。道士、經法科、講論科、文章應制科、表白科、聲贊科、焚修科、以試其能否。從之。此事、見舊五代史記。不知會行與否、至何時而罷也。蓋是時猶未鬻賣祠部度牒耳。周世宗、廢併寺院、有詔、約束云、男年十五以上、念得經文一百紙、或讀得五百紙。女年十三以上、念得經文七十紙、或讀得三百紙者、經本府、陳状、乞剃頭。委録事參軍本判官試驗。兩京大名京兆府青州、各起置戒壇、候受戒時、兩京委祠部、差官引試。其三處、柢委判官、逐處聞奏、候敕下、委祠部、給付憑由。方得剃頭受戒、其防禁之詳、如此。非若今時、只納錢于官、便可出家也。念經讀經之異、疑爲背誦與對本云。〈忠曰、鬻度牒、自唐肅宗、洪邁失攷〉。

（彦坂宗俊）

【一二二八】度牒

①即祠部牒也。〈與祠部牒交看。〉

②敕修清規［下一ノ廿一丈］、沙彌得度云、凡行者、初受度牒、以盤袱、托呈本師兩序各處、挿香禮三拜、選日設供、剃頭。［下一ノ六丈］又維那云、堂僧掛搭、辨度牒眞僞。［下一ノ六十一丈］又亡僧唱衣云、拈度牒、於亡僧名字上、横剪破云、亡僧本名度牒一道、對衆剪破。

③虚堂愚和尚録、示行者智潮法語云、自唐以來、設官置局、試經得度。其間獲中僧科者、官給黄牒。剃度爲僧。

④［敕鈔十一ノ七八丈］舊説曰、中華人、爲僧不易、必可受度牒。若未得買度牒、則只有髪。而隨僧修學而已、謂之行者。如中峯本禪師、二十四歳、而方得度牒剃落。

⑤陸游渭南文集［廿四ノ九丈］爲行者雷印定、求度牒疏云、故鄉踰八千里路、空手要七十萬錢。

⑥江湖紀聞［前四ノ六丈］云、眞西山師潭州時、有程二者、開旅店。有子年二十餘、屢謀於所厚者、欲弑其父、時西山以精明稱、所厚者、恐累己、赴官首之。喚其父母問之、亦云、逮其子、赴左院、推勘、隨即準状、索到鼠尾刀解官。但問其故、則卒無説。〈云云。〉獄已成、西山疑之。〈云云。〉西山一夕穿乘炷香、告之天地神祇、夢神告之曰、此毋怪其然乃是二十年前事了。旦起喚程二、屏去左右曰、爾二十年前、做什麽事來、此事我知、已悉、爾其無隱。程乃唖然曰、然。二十年前、有潙山行者、在店安歇、欲買度牒。某貪某財物、殺而有之、所殺屍、見瘞廚中、西山委官、籍其家産。可千緡、并掘其屍。果在、逐將程二、送左院、禁審其子準伏、與前詞無異。〈云云。〉西山曰、伊若做甚生計、我自與伊一千貫錢去、其子曰、若得千貫錢、我買本度牒、潙山出家去、西山遂將所籍家産千緡、與之、程二編管建昌軍。時嘉定壬午年也。

⑥ 忠曰、度牒不易買。可以此知。

⑦［敕鈔十三ノ廿五丈］今録中華度牒式。

⑧ 行在禮部檢會到

大明律内一款。若僧道、不給度牒。私自簪剃者、杖

八十。若由家長、家長當罪。寺觀住持、及受業師。私度者、與同罪、還俗、除欽遵外。本部　今填釋字玖千陸百捌拾玖號、度牒給付靈珍。　收執憑照、須至出給者、釋字玖千陸百捌拾玖號。

靈珍參拾捌歲、係日本國向州人熊谷長男。永樂年間、憑父捨送前住南禪禪寺出家。披剃爲僧。投禮中和德輝爲師、習經。宣德柒年、捌月内、蒙本國差來、朝貢請給度牒。

右給付僧人靈珍。　收執準此。

宣德捌年、伍月、貳拾伍日。

資善太夫行在禮部尚書胡　一押

右　侍　郎章　一押

奉政太夫祠祭清史司郎中鄭　一押

奉直太夫員外郎易　一押

承德郎主事　馬駿　一押

沈餘慶　一押

都吏徐政　一押

令史張壽一押

⑧　日本國度牒式。〈聖一國師度牒。〉

⑨治部尚書

〈駿州有渡郡久能寺沙彌圓爾、俗姓氏平、見年十八、投於當寺住持堯辨、禮爲本師、賜度僧牒、剃髮受具者〉。

右被太政官符稱右大臣宣奉

敕件度者姓平。宜仰治部省與剃度牒至准

敕、故牒。

承久元年乙卯十月廿日。左大史〈小槻宿禰國宗〉給

參議郎兼　治　部　郎　藤原　信行　押

典主　　宰　事　官〈闕〉

鴻　臚　　丞正六位上行　〈平〉貞弘　押

鴻　臚　　少　卿〈闕〉

典　客郎中署令正五位上橘　　成恒　押

治　部主事正六位〈闕〉

治　部郎中正六位上行　源盛慶　　押

治　部侍郎從五位　　紀頼成　　押

⑨　右度牒、白紙、紙高壹尺壹寸捌分、濶壹尺陸寸陸分、文字皆板刊。蓋出牒繁故、省寫功也。但所新加者、初駿州有度等細字。又件度者姓平之平一字。元年之元一字、乙卯字。〈年號亦刊。〉十月廿日之十字、廿字、人名花押、此等筆書耳。三大印、字不可辨、蓋治部省印也。三印皆同。

（彦坂宗俊）

【一二二九】綾牒

①虚堂愚和尚録［四ノ十五丈］、示行者智潮語云、南渡之後、出綾紙易楮幣。〈詳行者處。〉

②佛祖統紀［四十八ノ六丈］法運通塞志云、南宋高宗、紹興三年八月、自治平末。〈北宋英宗年號。〉始鬻度牒、舊以黄紙、印造僞爲者多戸部朱異始奏、令僧道用敕綾牒。　述曰、唐明皇天寶中、度牒已用綾素、本朝太宗初年、普度十七萬、眞宗天禧、普度二十三萬、應此時、但用紙牒、使之易辨。今既汗賣、欲重其價、故用敕綾、此同品官之告身、亦見朝延之重僧也。

（彦坂宗俊）

【一二三〇】供帳

①敕修清規［上一ノ廿一丈］云、往時僧道、歳一供帳、納免丁錢、官給由、爲憑。〈詳由處。〉

②佛祖統紀［四十一ノ十二丈］云、唐玄宗開元十七年、敕天下僧尼、令三歳一造籍、供帳始此。志磐曰、出家學道、要以從師受戒、爲之制、初未嘗挂名於官籍。自漢明至唐初、莫不然。至則天延載、始令二衆隷祠部、而明皇正觀始令三歳造籍、肅宗至德、復令鬻牒、謂之香水錢。逮我本朝南渡、則又創免丁之賦、謂之清閒錢、嘻、律言、非我所制、餘方爲清淨者、不得不行、豈如來、以佛眼觀末世、爲吾徒者、當勉順國法乎、嘻。〈忠曰正觀字訛當作開元。〉

③僧史略［中ノ五十二丈］云、夫得果之人、且無限劑、出家之士、豈有司存、既來文物之朝、須設糾繩之任、其有見優閑競入、懼徭役而奔來、輒爾冒名、實非高士、僧之内律、豈能御其風牛佚馬邪、故設僧局、以綰之。立名籍、以紀之、周隋之世無得而知、唐來主張、方聞附麗、文宗太和四年、正月、祠部請、天下僧尼冒名、非正度者、具名申省、各給省牒、以憑入籍。時入申名者、計七十萬、造帳入籍、自太和五年始也、若然者、前豈無籍帳耶、監福曹昭玄寺崇玄署、將何統断僧務乎。對曰、勘造僧帳、體度不同、或逐寺總知、或隨州別録、或單名轉數、或納牒改添、故不同也。然則出時君之好惡、乃入籍之解張。今大宋用周顯德條貫、三年一造、著于律令也。

④事物紀原［七ノ卅三丈］曰、僧帳、唐會要曰、舊制、僧尼簿、三年一造。其籍、一本送祠部、一本留州縣。又開元十七年、八月十日、敕僧尼宜依十六年舊籍、則僧尼供帳、始於此耳。僧史略曰、唐文宗大和四年、正月、祠部請、天下僧尼、具名申省、以憑入籍、入籍造帳、自太和始也。二文不同、以會要爲正。本朝用周顯德事、三年一造帳、定著於令。

（水野隆道）

【一二三一】籍

①前漢書［十六ノ三丈］功臣表注、師古曰、籍謂名録也。
②琅邪代醉編［二十五ノ十四丈］云、籍者、一尺二寸竹牒、記入之年、名字物色、懸之宮門。
（水野隆道）

【一二三二】簿

①篇海類編［九ノ四十二丈］云、簿去聲、讀如歩、籍也、帳也。
②正字通［未上ノ卅九丈］云、簿薄故切、蒲去聲、籍也。又手版也。周禮司書注疏、古以簡策記事。若對君以笏記之、後代用簿、簿今手版。
（水野隆道）

【一二三三】戒臘簿

①［敕鈔八ノ四十四丈］舊説曰、戒臘簿者、小僧籍也。
②敕修清規［下一ノ六丈］維那云、或有他縁、或暫假出入、將戒臘簿、假簿、堂司須知簿、親送過客司、令攝之。［下一ノ卅七丈］又謝掛搭云、侍者先期、取堂司戒臘簿、檢看、新掛搭戒臘、在上者一人、爲參頭。
（水野隆道）

【一二三四】輪差僧簿

①敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云、輪差僧簿、依戒次、各書雙字名。
②　又見差單處。
（水野隆道）

【一二三五】堂司須知簿

①見戒臘簿處。
（水野隆道）

【一二三六】假簿

①見戒臘簿處。
②［敕鈔八ノ四十四丈］舊説曰、假簿、即請假帳也。
（水野隆道）

【一二三七】砧基簿

①敕修清規［上二ノ廿五丈］交割砧基什物云、入院後、須會兩序勤舊茶、詳細詢問山門事務、砧基契書什物、逐一點對交割。

②中峯本禪師録［十七ノ十五丈○敕鈔六ノ十五丈引］擬寒山詩云、十冊古傳燈、轉作砧基簿。

③［敕鈔六ノ十五丈］舊説曰、砧基礎石也。南海寄歸傳［二ノ十七丈］、結淨地法、謂初造寺時、定基石已。〈止此。〉是也。砧基簿者、始建寺、所定、殿堂廊廡柱礎之圖、雖後日無用物、然住持人、不可不知、故入寺後、詢問兩序勤舊矣。今中峯意謂、今時參徒、泥語不徹本源、故傳燈不益人、猶如砧基簿、無用於後年也。

（水野隆道）

【一二三八】日黄總簿

①［敕鈔八ノ四十六丈］舊説曰、常住總簿、黄檗染成紙、避蠹災、故言黄簿也。

②敕修清規［下一ノ七丈］副寺云、收管支用、令庫子每日、具收支若干、僉定飛單、呈方丈、謂之日單、或十日一次結算、謂之旬單、一月一結、一年通結有無見管。謂之日黄總簿。

③山菴雜録［下ノ廿二丈］云、提點彝正堂云、今歲庫司、知事人懶慢、常住日黄簿未成。〈詳職位類、提點處。〉

④雪巖欽禪師、賀梅溪副寺頌云、櫃頭一面日黄簿、列祖玄關無少差、〈詳職位類、櫃頭處。〉

（水野隆道）

【一二三九】衣鉢簿

①僧家錢財、曰衣鉢、見錢財類。

②西巖惠禪師録［三丈］行状云、忽索衣鉢簿、大書其後、緘付寺之執事者、趣辨後事。

（水野隆道）

【一二四〇】單〈簿單〉

①［敕鈔十三ノ十六丈］單偏紙列寫目録也。

②敕修清規［上二ノ卅二丈］、尊宿唱衣云、行者瞻顧前後、喝定名字、知客寫名上單、侍者依名發標。［下一ノ五十七丈］又亡僧抄劄衣鉢云、收拾經櫃函櫃衣物、抄劄具單。

（水野隆道）

【一二四一】差單

①［敕鈔一ノ廿二丈］舊説曰、差單者、差帳也。

②敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、每日堂司行者、將輪差僧簿、須預先一日、請住持頭首衆僧、各書雙字名、僉押、量衆多少、依戒具寫差單、排定日分。周而復始。

③［上一ノ廿二丈］差單式云〈用白紙書。〉

④今具逐日輪僧上殿名員于后

某日　住持臣僧　某甲首座　某甲書記

某甲藏主　某甲知客　某甲西堂

某日　某甲稱呼　某甲上座　某甲都寺

右具如前

今月　日堂司　某　具

（水野隆道）

【一二四二】草單

①敕修清規［下二ノ一丈］夏前出草單云、叢林以三月初一日、出草單、方丈止掛搭。

②［下二ノ二丈］草單式云、〈戒次朱書、名字墨書。〉又見圖牌類、戒臘牌。

③衆戒臘

威音王戒

陳如尊者

堂頭和尚

至元幾戒　元貞幾戒

某甲上座　某甲上座

大德幾戒　至大幾戒

某甲上座　某甲上座

右具如前、恐有差悞、請自改正、伏幸

衆悉、　今月　日堂司　某　具

③忠曰、至元元貞等、修撰敕修清規、在此年間、故笑隱權書、示例而已、實可依某人受戒年、曆號第幾年而已。余昔遊一寺、仰觀貼草單、題曰文明戒、蓋往時文明年間草單、沒意智、次第寫將去、素不曉文明何義、余拍同遊肩語言、此間一衆非凡、同遊怪問、爲甚得知、余指言、文明戒人、猶不死在茲、却後、必可與仙眞爭年庚矣、同遊大笑絶倒。

（水野隆道）

【一二四三】單目

①忠曰、簿單、記品目也。

②敕修清規［上二ノ廿五丈］退院云、方丈什物、點對交割具單目、一樣兩本、住持兩序勤舊僉押、用寺記印。

（水野隆道）

【一二四四】月單

①［敕鈔六ノ十七丈］舊説曰、副寺收管支用、一月一結、曰月單。

②忠曰、敕修清規云、一月一結〈詳日黄總簿處。〉是也。或清規脱謂之月單四字。

（水野隆道）

【一二四五】旬單

①副寺十日一筭、謂之旬單。〈詳日黄總簿處。〉

（水野隆道）

【一二四六】日單

①副寺、毎日僉定收支、謂之日單。〈詳日黄總簿處。〉

（水野隆道）

【一二四七】飛單

①日單呈方丈、此謂飛單。〈詳日黄總簿處。〉

②忠曰、飛單者、蓋一日所記、條目不多、數紙往來、如飛、故名之。

（水野隆道）

【一二四八】床曆

①［敕鈔八ノ卅七丈］舊説曰、床者、僧堂床也。曆者、記其著床僧籍之帳也。凡堂僧、依戒臘次第、而定位、以首座爲首。

②敕修清規［下一ノ六丈］維那云、戒臘資次、床曆、圖帳、凡僧事内外、無不掌之。

③　僧寶傳［十一ノ四丈］雪竇顯禪師傳云、顯與學士會公會、厚善、日靈隱天下勝處。珊禪師吾故人。以書薦顯。顯至靈隱三年、陸沈衆中。俄會公奉使浙西、訪顯於靈隱、無識之者、時堂中僧千餘、使吏檢床曆、物色求之、乃至、會公問向所附書、顯袖納之曰、公意勤、然行脚人、非督郵也、會公大笑、珊公以是奇之。

【一二四九】文暦

①簿帳、曰文暦也。

②禪苑清規［七ノ十丈〇敕鈔六ノ十六丈引］退院云、如常住錢物・僧供之類、須與知事結絶、文暦分明。及堂頭公用・合行交割、亦具文暦、拘管、用院印印押、通知事知之。

③人天寶鑑［六十四丈］云、通明集、南嶽讓和尚、有院主二十年、管執常住、不置文暦。一日有司磨勘、囚禁、在獄。乃自惟曰、我此和尚、不知是凡是聖。二十年、佐助伊、今日得此苦毒之報、馬祖於寺中覺知、令侍者裝香、端然入定。院主於獄中、忽爾心開二十年用過錢物、一時記得、令書司口授筆寫、計筭無遺。

（水野隆道）

【一二五〇】帳

①正字通［寅中ノ五十二丈］云、今俗會計事物之數、曰帳、　又云、具來歳課役、以報度支、爲計帳、即今之文簿冊籍。

②舊唐書［志ノ廿八ノ三丈］食貨志云、毎歳一造計帳、三年一造戸籍。

③周祈［十二ノ二十丈］名義考云、今俗謂簿籍、曰帳目、韻書帳幬也、帷也。無有以簿籍爲義者。按漢制、郡國歳時、上計、顔師古曰、計若今諸州之計帳、是。師古亦用帳字。其來久矣。

④　忠曰、計數記曰帳。唐書已見。師古亦唐人。正字通、云今俗、非也。

⑤丹鉛總録［十五ノ二十丈］云、吏胥下流、市井米鹽帳簿、則用省訛俗字、如錢作匁、聖作圣、盡作尽、是也。

（水野隆道）

【一二五一】單帳

①敕修清規［上二ノ卅三丈］尊宿唱衣云、造單帳。

②　單式云。

③堂頭和尚示寂、謹具衣物估唱鈔數收支、于后。

一收鈔若干〈係某件唱到〉
一收鈔若干〈係某項收到〉
一支鈔若干〈係某項用度〉
一支鈔若干〈係某項支使　逐一列寫〉
已上共收鈔若干
共支鈔若干

除支外、見管鈔若干、〈準齋七追修、僧行經資〉。
右具如前
年　月　日、喪司行者　某　具
呈　把帳執事人、兩序典喪、各書名僉押。

（水野隆道）

【一二五二】圖帳

①敕修清規［下一ノ卅七丈］、抛香相看云、若圖帳已定、則詣堂司、稟添名入圖。或人多、列戒次後。［下一ノ卅八丈］又謝掛搭云、既曰隨衆、當依戒臘、依戒佛制也、況諸圖帳、及衆寮戒臘牌、不以名字、分高下。

②忠曰、圖與帳二物也。圖謂楞嚴會圖、念誦巡堂圖、被位圖、鉢位圖等也。〈見圖牌類、戒臘牌處。〉帳謂諸記名帳也。

③又曰、［敕鈔十一ノ十九丈］舊解者謂、圖者、戒臘牌等圖也。〈止此。〉此説非也。已言圖帳及衆寮戒臘牌、可知。圖不攝戒臘牌矣。

（水野隆道）

【一二五三】火帳

①忠曰、飯頭計人口、打飯之帳也。

②雪巖欽禪師録［上ノ四十二丈］、仰山普説云、莫教被一陣業風吹。入十八重無間地獄中去、被閻羅老漢、與伊打筭火帳、問伊索飯錢。

（水野隆道）

【一二五四】板帳

①敕修清規［下一ノ六十四丈］亡僧板帳云、板帳之設、蓋古者凡立成式。必書諸板。示不可移易也。故叢林亡僧、有板帳焉。凡僧亡、以其所有衣物、對衆估唱、懲貧積也。估唱得錢、必照板帳。〈板帳式、詳彼。〉

（水野隆道）

【一二五五】契書

①入院後、詢問契書什物、詳砧基簿處。

②忠曰、契書、和俗所謂手形也。田産等、買收之證状、或無盡財等、證文也。

③正字通［丑下廿二丈］云、契約也。今謂之券。

（水野隆道）

【一二五六】印紙

①忠曰、禪林以小片紙、朱印其寺號、謂之印紙。凡俵賜金、先俵散印紙、後日受賜人、各持印紙。〈自書己名〉來收賜去。

②朝廷亦有印紙目。宋史［志ノ百十三ノ廿二丈］選擧志考課云、太宗勵精圖治。〈云云。〉諸州掾曹、及縣令簿尉、皆戸部南曹、給印紙曆子、俾州郡長吏書其績州愆過、秩滿送有司。［志ノ百十六ノ卅二丈］又職官志都宮郎中云、以役之輕重、均其勞逸、給印紙、書其功過展減磨勘歲月。

（水野隆道）

【一二五七】俵子

①忠曰、俵子、蓋印紙之類。

②湖海新聞［後一ノ四丈］云、張居士宋朝都吏也。諱道純、好道甚堅。至元庚辰、常齋僧道。一日先散俵子一百箇、至日憑此赴齋。臨期收俵子、只九十九箇、不見一箇、居士付之不問、徑支齋九十九分、此心終不滿。次夜夢、一道人來。告曰、俵子在我枴上、覺而細思、其日並無策枴者、想是道院鐵枴先生。亟於井亭下、覓舟往道院、叩門觀之。果見枴上有俵子、題得四句云、特來赴齋、見我不采。空腹且歸、俵縛我枴、因知仙亦赴凡齋矣。

（水野隆道）

【一二五八】開具

①忠曰、具者、詳擧物數、列記也。

②正字通［子下ノ廿一丈］云、具者物數。可目見、故从目、物具可收持以克用、故从廾、會事物兼備意。

③敕修清規［下一ノ六十二丈］亡僧板帳式云、開具内、幾貫文。〈云云。〉

④江湖紀聞［前集三ノ十丈］云、蘇州張烈卿孫、剥廬、於桷角、得板尺餘。篆書云、此屋某年某月某日毀、某人買去、某間、某人買去其料。該得價錢若干。開具甚悉。造屋時都料尚在。其孫問之、但云、當造屋時、有貧子求役月餘告去。酬價不受、人皆異之、由今思之、必此人所爲。

⑤東都事略［十一ノ］、徽宗本紀曰、宣和七年詔曰、有司凡有侵漁蠹耗之事、理宜裁抑、應不急之務、無名之費、令講議司條具。以聞。

（水野隆道）

【一二五九】右具如前

①凡開具尾、書此四字、爲結語。

②敕修清規［上一ノ廿二丈］、聖節經單式云、今具經文品目于后。〈經名云云。〉右具如前。〈詳文疏類、經單處。又見此單帳處。〉

③　或曰右具在前。

④　北磵續集［三十二丈］、圓悟和尚出隊疏跋云、圓悟老人還鄉。昭覺産薄、亦有廣文飯不足之態。發一先馳、葛藤如許。尋常教人、信口道、則右具在前。若信脚行、則未敢相許。

（水野隆道）

○第二四類圖牌門

舊説、以敕修清規［上二ノ七丈］念誦巡堂圖、西爲上頭書、爲非。曰、凡造圖、掛之壁、則北方可在上頭。蓋掛之必於北壁也。若書籍中造圖、反此。須南方在上頭。蓋看書者、倚南窓取明。則圖南成南方也。

忠按、行事鈔結界圖、律苑事規戒壇圖、皆南方在上頭。又文獻通考［百卷一丈］宗廟考、大祫圖、南方在上頭。又三才圖會、［宮室二ノ六丈］七廟圖、及［地理十四ノ二十丈］公劉相陰陽圖、並以南爲上頭。故清規圖、實背本式。如餘此書中、但隨便、不拘本式。準古圖而已、覽者須知之。

【一二六〇】楞嚴（レンゲンノ）圖

①敕修清規［下二ノ三丈］、出圖帳云、堂司依戒臘、寫楞嚴圖。念誦巡堂圖、被位圖、鉢（ホ）位圖、戒臘（ラッ）牌。

（桐野祥陽）

【一二六一】念誦巡堂圖

①見楞嚴圖處。

（桐野祥陽）

【一二六二】告香圖

①敕修清規［上二ノ三丈］告香云、住持允從、即報堂司、出告香圖。

②　告香圖［上二ノ五丈］、詳彼。

（桐野祥陽）

【一二六三】入室圖

①入室見垂説門、其規詳敕修清規。
②忠曰、解敕修者、造圖多謬。餘今依舊圖改正。

（桐野祥陽）

【一二六四】茶湯問訊圖

①見經櫃圖處。
②忠曰、衆寮、一切茶禮湯體、爐前三巡問訊等圖也。

（桐野祥陽）

【一二六五】夏中行茶湯瓶盞圖

①見經櫃處。
②敕修清規［下二ノ四丈］註云、兄弟結縁、隨意書名。

③ ［敕鈔］解者曰。結縁行禮也。然今日本。預差人定之。

（桐野祥陽）

【一二六六】僧堂圖

①見殿堂門、僧堂處。

（桐野祥陽）

【一二六七】僧堂出入板圖

①見殿堂門、出入板處。

（桐野祥陽）

【一二六八】鉢位圖［十六板首］

①［敕鈔十四ノ九丈］舊説曰、被位圖、平僧排僧堂圖也。鉢位圖、蒙堂排僧堂圖也。

②敕修清規［下二ノ三丈］出圖帳云、惟鉢位圖、當分十六板。〈餘隨僧堂大小不拘〉除單寮、西堂、首座、勤舊、排板頭外、其餘竝依戒臘。舊以送蒙堂者、排副鉢、後因爭競不排。

③ 又與被位圖交看。

④ 敕修清規［下二ノ四丈〇又敕鈔九ノ廿五丈　又同廿七丈］、僧堂十六板首、鉢位圖云。

⑤按永平赴粥飯法［十四丈左］、聖僧侍者位、在侍者最末。又律苑事規［四ノ十丈］僧堂圖云。

【一二六九】被位圖

①［敕鈔十四ノ九丈］舊説曰、被位圖者、僧堂大衆位也。〈又見鉢位圖處〉

②敕修清規［下二ノ四丈］鉢位圖云、被位倣此。不分板首。〈見鉢位圖處〉

③　忠曰被位、不分板首。如今所録備用清規甲乙丙丁次第坐、是被位也。板首者、第一首座、第二西堂、第三後堂、第四後堂分手、第五第六七八如圖、是鉢位也。板首側一位、是副鉢位也。且第一副鉢位、首座右側、是也。第二副鉢位、西堂左側、是也。已下例知備用清規被位鉢位圖云、

（桐野祥陽）

④副鉢位、非備用圖忠因加之令易曉。

（桐野祥陽）

【一二七〇】衆寮圖

①見殿堂門、衆寮處。

（桐野祥陽）

【一二七一】經櫃圖

①忠曰、衆寮排位圖也。僧堂曰函櫃、衆寮曰經櫃。〈見器物門〉

②敕修清規［下二ノ四丈］、衆寮結解、特爲衆湯云、堂司圖帳已定、寮元依戒排經櫃圖、茶湯問訊圖、清衆戒圖、清衆戒臘牌、入寮資次牌、夏中行茶湯瓶盞圖。

（桐野祥陽）

【一二七二】三牌

①三牌、排列於佛殿、本尊前。

②［敕鈔一ノ卅八丈］元朝禪刹、三牌禪刹、三牌式云。

③左皇后齊年　齊年者、齊等皇帝萬歲也。

④中皇帝萬歲

⑤右太子千秋

⑥建仁寺禪居菴大鑑禪師所建三牌云。

⑦南方火德火部聖衆

⑧今上皇帝聖壽無彊

⑨檀那本命福祿壽星

⑩［任ノ廿丈］品字箋云、廣韻牌牓也。以張官府之諭言者也。詞之長者、列于牓。其短者、則書之牌。即今榜文牌票之謂。

⑪續燈録［八ノ六丈］淨因道臻禪師章云、如何是淨因境。師云、法廣殿牌。仁宗親寫。

（桐野祥陽）

【一二七三】位牌

①［一ノ七十九丈］義堂日工集云、位牌、古無有之、自宋以來有之。

②敕修清規［上二ノ廿九丈］尊宿移龕云、法座上掛眞、安位牌、廣列祭筵。

③　朱子語録［十ノ二丈］云、主牌、荀勗禮據隋煬帝所編禮書有一篇。荀勗禮乃是。云濶四寸、厚五分、八分大書某人神座、不然、只小楷書亦得。

④　忠曰、八分者、八分字也。據此位牌自宋己前有之。

（桐野祥陽）

【一二七四】三界萬靈牌

①牌云、三界萬靈、十方至聖、六親眷屬、七世父母。
②大鑑小清規、月中、每日、粥時念文、廿九日云。祝獻三界萬禮十方至聖。
③［砂七十二丈］古德曰、或謂、先萬靈後至聖、倒語、非也。有深義在。

（桐野祥陽）

【一二七五】善月牌

①敕修清規［上一ノ廿四丈］善月云、預先一日、維那令堂司行者、覆住持、報庫司、掛善月牌于殿門前。

（桐野祥陽）

【一二七六】祈祷牌

①敕修清規［上一ノ廿五丈］祈祷云、維那、和會堂司行者、報衆掛祈祷牌。
②夢窓夢中問答［上卅丈］云、弘安年中有蒙古來冠之流言。時法光寺禪門〈時宗〉無驚懆色。但日日請建長長老、佛光禪師、及諸宿達、法談而已。其奇特事業、具載佛光普説中。其後創立圓覺寺、大興禪宗。蒙古不復來冦、父子保世清平、臨終亦自在矣。爾後子孫相續、崇敬佛法、雖然其見世法也重、信佛法也輕。故天下大禍未現。數數命禪刹、行禳祓、於是乎禪刹祷事稠故、皆掛祈祷牌。其衆僧、唯以誦經諷咒、爲日用、而禪床工夫、廢而不做。如諸小院、復有小檀主。例請祈禳、僧家專利名者。亦以此爲第一義、遂忘失本分一大事。豈非禪法破滅因縁耶。

（桐野祥陽）

【一二七七】諷經牌

①敕修清規聖節云。行者覆住持。來早殿上。啓建諷經。仍報諸寮。掛諷經牌。

（桐野祥陽）

【一二七八】念誦牌

①敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、節内、遇三八日、堂司行者、覆住持雨序諸寮、掛念誦牌、報衆。

（桐野祥陽）

【一二七九】戒臘牌

①敕修清規［下二ノ七丈］戒臘牌云、堂司侍司衆寮、預依戒臘。寫造。至十四日午後、堂司牌、列僧堂前上間、侍司牌、列法堂下間、衆寮牌、列寮内。各備香几爐燭供養。大衆各炷香展拜畢、仍各收牌掛起。

②又見楞嚴圖、經櫃圖處。

③［敕鈔十一ノ廿丈］舊説曰、如蒙堂勤舊、則位不依戒次。但侍者、以戒臘、爲次第矣。又蒙堂中、勤舊者、不上戒臘牌也。

④［七十五ノ七丈］永平道元禪師戒臘牌式云。〈草單是也〉

⑤某國某州某山某寺、今夏結夏、海衆戒臘、如後。

⑥陳如尊者

⑦堂頭和尚

⑧建保元戒

⑨某甲上座某甲藏主

⑩某甲上座某甲上座

⑪建保二戒

⑫某甲西堂某甲維那

⑬某甲首座某甲知客

⑭某甲上座某甲浴主

⑮建曆元戒

⑯某甲直歲某甲侍者

⑰某甲首座某甲首座

⑱某甲化主某甲上座

⑲某甲典座某甲堂主

⑳建曆三戒

㉑某甲書記某甲上座

㉒某甲西堂某甲首座

㉓某甲上座某甲上座

㉔右勤具呈、若有誤錯、各

㉕請指揮、謹狀。

㉖某年四月三日　　堂主比丘　某甲　謹狀

（桐野祥陽）

【一二八〇】入寮資次牌

①見經櫃圖處。

②［敕鈔十四ノ十丈］舊説曰、入寮資次義、未詳。

（桐野祥陽）

【一二八一】接住持牌

①敕修清規［上二ノ廿丈］入院云、隔宿掛接住持牌報衆。

②［又附録ノ八丈右］東漸清規［三ノ九丈〇敕鈔五ノ十四丈　依用］入院儀式云、凡入院前日、掛接住持牌於堂前下間、當日掛上間、用黄紙。

③［三ノ九丈］又東漸清規云、夢窓國師、粥罷掛接和尚牌。〈清規隔宿掛之。〉愚謂、隣封名徳、江湖尊宿、來訪、則掛接和尚牌、考鐘伐鼓耳。［敕鈔六ノ十四丈　用此説］若入院、則掛接住持牌、不可言接和尚也。〈又見接尊宿牌處。〉

④［三ノ廿三丈］書言故事延接註云、延引也、接迎也。

（桐野祥陽）

【一二八二】接和尚牌

①敕修清規［上二ノ廿四丈］報謝出入云、住持出入、則知事探伺歸期、令堂司、掛接和尚牌。報衆、鳴鐘門迎。住持、先令傳語免之。

②［敕鈔五ノ十四丈〇同六ノ十四丈］舊説曰、住持外出、經四五日、或十日、歸則掛接和尚牌、而迎之。

③忠曰、東漸曰、隣封江湖尊宿來、則掛接和尚牌。〈詳接住持牌處。〉餘謂、雖本寺住持、已入院後、外歸。則亦可掛接和尚牌。但入院時、不可掛接和尚牌耳。

④　已下。略擧［敕鈔六ノ十四丈引］門迎因縁。

⑤聯燈會要［六ノ廿六丈〇又碧四ノ十五丈］、長沙岑禪師章云、師游山歸。至門首。首座問、和尚甚處去來。師云、游山來。云到甚麼處來。師云、始隨芳草去、又逐落花回。云大似春意。師云、也勝秋露滴芙渠。

（桐野祥陽）

【一二八三】接尊宿牌

①敕修清規［上二ノ十丈］、迎待尊宿云、尊宿相訪、須預掛接尊宿牌。鳴鐘集衆、門迎。彼若尚簡、則潛入寺。住持必於寢堂、具香爐相接。

②［敕鈔五ノ四十丈］義堂和尚曰、接尊宿牌、可書和尚。接住持牌、可但言住持也。　忠曰、即書接尊宿和尚也。

（桐野祥陽）

【一二八四】接官牌

①義堂日工集［三ノ八丈］云、康暦二年、五月十三日、〈時義堂住建仁。〉掛接官牌。奉迎府君、〈義滿公〉臨期、大小鐘鼓皆鳴。余率兩班大衆、出迎三門、釣旆入門、余引自正門。入佛殿、府君炷香三拜罷、余送歸特榻。乃燒香、歸知事班首。與官榻相對而立。行者鳴磬、眞珠西堂擧唱藥師如來。侑藝正仁二僧、和之、維那擧大悲咒。余炷香三拜、同向畢。余引君、入方丈、點心、官伴、管領一人、僧伴、普明國師、東堂蘭洲、天龍大清、等持物先、燒香清祖侍者。點心罷、余引君、歸歇處、道話。少頃鳴鼓上堂。府君特榻、諸山列在下、釣語、問答、提綱、自敍、謝辭、拈提。罷、齋會、會罷還駕。

（桐野祥陽）

【一二八五】上堂牌

①敕修清規［上二ノ一丈］上堂云、凡旦望、侍者分付客頭行者、掛上堂牌、報衆。

（桐野祥陽）

【一二八六】小參牌

①［敕鈔六ノ十二丈］舊説曰、小參牌、入院、則小片紙書今晩兩字、貼牌左肩。四節、則書昏鐘鳴三字、貼之。

②敕修清規［上二ノ廿三丈］、入院當晩小參云、侍者令客頭報衆、掛小參牌。

（桐野祥陽）

【一二八七】普説牌

①敕修清規［上二ノ五丈］普説云、侍者、令客頭行者、掛普説牌、報衆。

②若告香普説、牌左肩、貼告香兩字。　校定清規［敕鈔四ノ十五丈引］云、侍者寮行者、粥後挂普説牌。小書告香二字。

（桐野祥陽）

【一二八八】告香牌

①敕修清規告香［上二ノ三丈］云、堂司行者、預逐一報衆、掛告香牌。

②備用清規告香［二ノ六丈］云、堂司、預晩挂告香牌、牌左云、告香罷、普説。

（冨増健太郎）

【一二八九】入室牌

①敕修清規［上二ノ五丈］入室云、遇開室時、粥前、侍者令客頭行者、僧堂前、諸寮、掛入室牌。

（冨増健太郎）

【一二九〇】乘拂牌

①敕修清規［下二ノ十三丈］、四節秉拂云、秉拂人、令行者僧堂前、掛秉拂牌。

（冨増健太郎）

【一二九一】坐禪牌

①永平清規辨道法［八丈］云、早晨坐禪、掛坐禪牌、餘時坐禪、不掛坐禪牌。

②　忠曰、餘時者、晡時、黄昏、後夜、三時也。

（冨増健太郎）

【一二九二】靜牌

①坐禪牌、又言靜牌。靜者、靜慮也。

②諸祖偈頌［下下ノ十一丈］、慈受深禪師示衆云、靜牌才掛、宜各默然。縱不掛時、豈可談笑。

（冨増健太郎）

【一二九三】坐參牌

①敕修清規［下一ノ四十二丈］坐參云、齋罷、堂司行者、覆首座、僧堂衆寮前、各掛坐參牌。

（冨増健太郎）

【一二九四】放參牌

①永平清規辨道法［八丈］云、放參時、掛放參牌。昏鐘鳴、收放參牌。

（冨増健太郎）

【一二九五】照牌

①敕修清規［下一ノ四十五丈］、赴茶湯云、先看照牌、明記位次。免致臨時倉遑。

②忠曰、看照牌、明記位次。照義解得過半矣。凡照者、二物相照、而鑒識也。如照牌、座間早有座牌、貼各位了。然著座人、不得入席預見之。故於外而、別設牌、造座間樣式、小片紙、書衆名、貼各位。著位人審視之、記己所著位畢、然後入座間、照看外牌位而坐。貴免致倉遑敗闕矣。

③［敕鈔九ノ二十丈］舊説曰照牌者、座間不排名牌。只門外設木坐牌、造排坐位圖、而樹之。大衆審照視己之上下位、及時著席而已。其照視左右者、爲能知隣位、則於己位不迷也。是以照視上下爲照義。［敕鈔七ノ十九丈〇又三ノ卅五丈］或曰、能明視己位故云照。［敕七ノ十九丈〇十四ノ廿三丈］或曰、就照牌能視己位、在某人下某人上、故云照。［鈔十一ノ廿七丈］或曰、照視己位在自上幾位、自下幾位。故云照。皆解不得照字。故今不取之。

④忠曰、今時照牌、用紙數十幅、連接令方。上横題第一筵照牌圖等字。其下圖席樣、以小片紙書名。以糊排貼、一如本席。衆及時入席、照依外牌著坐。

⑤敕修清規［上二ノ十一丈］迎待尊宿云、寢堂釘掛帳幕排照牌。［下一ノ十六丈］又方丈特爲新舊兩序湯云、燒香侍者、預排照牌、至時鳴鼓。［下一ノ十七丈］又方丈管待新舊兩序云、寢堂設位排照牌。客集報住持、出接、各入座依照牌立定。［下一ノ四十丈］又方丈特爲新掛搭茶云、各依照牌、歸位立定。［上二ノ卅六丈］又尊宿遷化管待主喪等云、排照牌、都寺行禮。［上一ノ卅八丈］又嗣法師忌云、若講特爲伴眞湯、齋罷、方丈客頭請西堂兩序、晩間對眞、相伴喫湯、排照牌位、禪林照牌。

⑥禪林照牌、似朝廷混牓。事物紀原［三ノ卅九丈］云宋朝會要曰、大中祥符四年五月、晁迥等奏、引試進士、預令於貢院納案子。試前一日、貢院出牓、曉示、逐人排坐位處所。則引試之有坐位牓、自此爲始今亦爲之混牓。

（冨増健太郎）

【一二九六】坐牌

①忠曰、日本叢林行禮、用小紙片。書一衆名位、而隨二出四出等座、逐位次排之。牌首以糊少許、貼床、大衆未著座已前、先入認記己位畢、而出。及時次第、著其牌位、貴免顛沛矣。

②傳燈録［九ノ廿二丈］金州操禪師章云、一日請米和尚齋。不排座位。米到展坐具禮拜。師下禪床米乃就師位而坐。師却席地而坐。齋訖米便去。侍者曰、和尚受一切人欽仰。今日座位、被人奪却。師曰、三日若來、即受救在。米果三日後來云、前日遭賊。僧問鏡清。古人遭賊意如何。清云、只見錐頭利、不見鑿頭方。

（冨増健太郎）

【一二九七】木座牌

①舊説曰、小木牌書衆名、牌首穿小穴。別設大板、板上列植小釘。而以小牌、逐位次排、掛定之。

②又有板上直書名者。　敕修清規［下一ノ十五丈］、方丈特爲新舊兩序湯云、釘掛寢堂、鋪設坐位。

③　［敕鈔九ノ廿丈］解者曰、是非紙座牌。又非木座牌。但朱漆板上、書衆名位、而釘掛其板也。猶如鉢位圖。

（冨増健太郎）

【一二九八】煎點牌

①敕修清規［上二ノ十二丈］受嗣法人煎點云、法嗣令客頭請兩序單寮諸寮、掛煎點牌。

（冨増健太郎）

【一二九九】點茶牌

①敕修清規［下一ノ十七丈］方丈特爲新首座茶云、客頭報衆、掛點茶牌。

（冨増健太郎）

【一三〇〇】點湯牌

①敕修清規［下二ノ十丈］庫司四節特爲首座大衆湯云、都寺分付客頭、請勤舊蒙堂諸寮、各掛點湯牌。

②備用清規［七ノ十一丈］寮元云、朔望、係寮元、自燒香、令挂點湯牌、燒湯出盞。

（冨増健太郎）

【一三〇一】特爲照牌

①敕修清規［下二ノ十四丈］方丈四節特爲首座大衆茶云、請客待侍者、巡堂請茶、堂前排特爲照牌。

②　特爲位、見座位類。

（冨増健太郎）

【一三〇二】特爲牌

①敕修清規［下一ノ卅九丈］、方丈特爲新掛塔茶云、侍者令客頭依戒列名、寫特爲牌、或作四出六出。首座光伴、諸方名勝、必與住持對面位、若有異議、則於名勝内、推戒最高者坐之。參頭與光伴對面位、蓋受送者、先謝榻位、此同赴茶耳。

②［敕鈔］解者曰、書照牌、以名勝排定之特爲位。此謂特爲牌。特爲位、即是住持對面位也。〈特爲位、見座位類〉

（冨増健太郎）

【一三〇三】巡寮牌

①見叢軌類、巡寮處。

（冨増健太郎）

【一三〇四】直堂牌

①敕修清規［下一ノ四十一丈］、坐禪云、堂中、有直堂牌。刻云、

②輪次直堂、周而復始。　住山押両面刻。　照依被位資次、毎日五更鐘絶後、交下次人。終日看守。

（冨増健太郎）

【一三〇五】開浴牌

①見叢軌門、開浴處。

（冨増健太郎）

【一三〇六】浴室内小牌

①敕修清規［下一ノ四丈］知浴云、室内掛小板、旁釘小牌書云、

②鳴板一聲添湯。二聲添水。三聲則止。以此爲節。

③備用清規［七ノ八丈］知浴云、室内小牌、白字。

④一湯、二水、三滿、打小板。

⑤　三滿［敕鈔八ノ廿丈］、有作三止者。

（冨増健太郎）

【一三〇七】入浴資次簡板

①敕修清規［下一ノ四丈］知浴云、其入浴資次、當刊掲浴室外。

②　［敕修鈔八ノ廿丈］解者曰、資次者、第一通僧衆、第二通頭首、第三通行者、第四通、人力、監作行者、知事等、如此書、鐫板、掛浴室外也。

【一三〇八】普請牌

①見叢軌門、普請處。

（冨増健太郎）

【一三〇九】淨髪牌

①見經櫃圖處。

（冨増健太郎）

【一三一〇】拾遺牌

①禪林寶訓［下ノ卅丈］云、山堂住黄龍日、有智恩上座、爲母修冥福。透下金二錢。兩日不尋。聖僧才侍者、因掃地而得之。掛拾遺牌。一衆方知。蓋主法者清淨、所以上行下效也。

②鏡堂圓禪師録［偈九丈］、示兄弟拾得物、不掛拾遺牌者。偈云、叢林百丈古清規、遺者應須掛拾遺。若也便將爲己有、亦名倫盗罪無疑。

③孔子家語［一ノ一丈］相魯篇云、孔子初仕、爲中都宰。男女別塗、路無拾遺。

④史記［四十六ノ九丈］田敬仲完世家云、梁王曰、若寡人國小也。尚有徑寸之珠、照車前後各十二乘者十枚。威王曰、寡人之所以爲寶、與王異。〔云云。〕吾臣有種首者、使備盗賊。則道不拾遺、將以照千里。豈特十二乘哉。

⑤淮南子［六ノ八丈］覽冥訓云、昔者黄帝治天下、而力牧太山稽輔之。〔云云。〕田者不侵畔、漁者不爭隅、道不拾遺、市不予買。

（冨増健太郎）

【一三一一】觸落牌

①敕修清規［下一ノ八丈］淨頭云、稍有狼藉、隨即淨治。

②［敕鈔八ノ五十六丈］解者曰、廁有觸落牌。若有狼藉、自不洗之、則挂牌、報淨頭、令洗淨焉。

③［江湖集淨録鈔］或曰、牌一面書觸字、一面書落字。觸是不淨義、落是遺落義。若有不淨穢汗、則挂觸牌、而報淨頭。若鞋履等、落廁内、則挂落牌而告淨頭也。

（冨増健太郎）

【一三一二】唱衣牌

①敕修清規、亡僧唱衣云、茶毘後、堂司行者、覆住持兩序侍者、齋罷、僧堂前唱衣。仍報衆、掛唱衣牌。

（冨増健太郎）

【一三一三】送灰牌

①敕修清規［下一ノ六十二丈］、亡僧入搭云、堂司行者、預報衆、掛送灰牌。

②　忠曰、送煆骨入塔、兼其荼毘時餘灰。故曰送灰也。

（冨増健太郎）

【一三一四】過渡牌

①江湖集［下一ノ四十三丈］敬叟莊和尚、送人之汚水頌云、小朶峯前絆草鞋。羲公帆掛待君來。風休水面平如鏡。下却江頭過渡牌。

②　聯燈會要［廿一ノ十八〇会元七ノ九丈］、巖頭豁禪師章云、師因沙汰、遂於鄂州湖邊、作渡子。兩岸各挂一板、有人過渡、打板一聲、師云、阿誰。或云、要過那邊去。師乃舞棹迎之。

（冨増健太郎）

〇飲啖類上

【一三一五】粥

①四分律［十ノ十丈］云、毘舍佉母白佛言、世尊、聽阿那頻頭國諸比丘食粥。若世尊、當聽比丘食粥者、我當盡形壽供給。

②十誦律［十八］云、佛言、毘舍佉、汝見何因緣故、欲常與比丘僧粥。答言、大德、若比丘、不食粥、有飢渴惱。或時腹内風起。我常與粥。故則無衆惱。

③釋氏要覽［上ノ六十一丈〇統紀卅七丈畧引］云、讀五部律文、粥之緣起有三。初僧祇律［廿九ノ九丈］云、佛住舍衞國。難陀母、令作釜飯、逼上汗自飲、覺身中風除食消。便作念、闍梨是一食人、應當食粥。乃取多水少米、煎去二分、然後入胡椒華撥末、盛滿甖、持詣佛所、白言、唯願世尊、聽諸比丘、食粥。佛許。仍爲［珠林五十五卷二丈引］説偈云、持戒清淨人所奉。恭敬隨時以粥施。十利饒益於行者。色力壽樂辭清辨、宿食風除饑渴消。是名［律作爲］良藥佛所説。欲［律作生］得人天［律作常］長受樂、應當以粥施衆僧。次四分律云、佛在那頻頭國。因瓮沙施粥、佛許之。後十誦律云、婆羅門王阿耆達、施八般粥。謂乳、酪、胡麻、豆、摩沙、荏蘇等。佛許之。［上六十一丈］又云、粥不正食攝。僧祇律［廿九ノ九丈］

云、粥出釜、劃不成字、始名不正食。

④ 忠曰、依寄歸傳四分律等。五噉食、謂飯、麥豆飯、麨、肉、餅。五嚼食、謂根、茎、葉、華、果、此爲不正食。若已食前五、必不合饗後五。先食後五、則随意噉前五。

［忠曰、肉者、初聽三種淨肉。至楞伽涅槃、方斷肉食。］

⑤又釋氏要覽［上ノ六十二丈］云、今析粥十利者、一色、二力、三壽、四樂、五詞清。俱舍云、詞謂訓釋言詞也。六辨。俱舍云、辨謂展轉言、無滯礙也。七宿食消、八風除、九消饑、十消渴。

⑥守千崆峒記［下巻］、附法數中、載粥十利云、一僧徒安樂、二施主長壽、三不關修道、四不生饑饉、五當來勝報、六佛果現前、七衆善莊嚴、八先云離苦、九不値刀兵、十當生淨土。

⑦四分律［十四ノ二丈〇又五十九ノ十五丈］云、食粥有五事。善除飢、除渴、消宿食、大小便調適、除風忠。食粥者、有此五善事。

⑧ 義堂和尚日工集云、因雪示衆。大雪、人民凍餒、薪貴如玉。洗面湯不用燒。湛堂準和尚、以小杓湯洗面。尚餘用濯足。古人用心如此、況斯時乎。又粥羹宜暫停之。凡粥貼羹湯、日本風俗而已。中華但用鹽豉齏等。如今建長寺、毎日堂中粥菜用七紋錢、買胡麻鹽、是也。因［僧宝傳］擧神鼎諲和尚住山十年、始有醬食訖曰、古人住山安衆。不諭粥飯精麤、唯道是行。幸諸人不患暫時粥無羹矣。

（冨増健太郎）

【一三一六】小食

①忠曰、和訓古豆計。

②釋氏要覽［上ノ六十一丈］云、増輝記云、小食者、粥是。

③海龍王經［三ノ一丈〇七十五套］請佛品云、爾時海龍王、白佛言、唯佛加哀、詣我宮中、屈神小食。

④ 野客叢書［唐本三十〇刊ノ十二ノ十八丈］云、漫録謂世俗例以早晨小食、爲點心。或謂小食亦罕知出處。僕謂、見昭明太子傳。曰、京師穀貴、改常饌爲小食。小食之名、本此。

⑤ 忠曰、小食本出佛經律文。蓋昭明時、王公好佛學。故用其目。王儒攷出、未盡原矣。

（冨増健太郎）

【一三一七】五味粥

①大慧武庫［三丈］云、葉縣省和尚、嚴冷、浮山遠在衆時、特往參扣、請遠充典座。衆苦其枯淡。省偶出莊、遠竊鑰匙、取油麺、作五味粥。粥熟、省忽歸赴堂、粥罷坐堂外、令請典座。遠至首云、實取油麺煮粥。情願乞和尚責罰。省令算所直、估衣鉢還訖。打三十挂杖、出院。

② 事文類聚［前ノ十二ノ十丈］云、南方專用臘月八日、潅佛。皇朝東京、十二月初八日、都城諸大寺、作浴佛會。并送七寶、五味粥謂之臘八粥。

③ 忠曰、雜穀衆味、隨意合造、言五味粥而已。月令廣義［十二月十五丈］云、宋元臘八日、都城諸寺、作浴佛會、併送七寶。以諸果品、五穀煮粥、謂之臘八粥。

④ 春渚紀聞［四ノ十八丈］云、湖州孫略教授家婢、名呂媼者、服勤孫氏、有年矣。性謹朴、無他能、但常日晨起、就廚中。取食器潔之、聚所棄餘粒。間有落溝渠者、亦拾取淘濯。再於釜中、或加五味、煮食之。未嘗一日廢也。年七十餘。一日微疾、即告其家人曰、爲我髡髮、著五戒衣、我將去矣。家人從之、因起以左手、結印而化。家人遂龕、置開元寺中、觀者餘月、了無穢氣。而髮漸生、因與剃之。後一月一剃。

（冨増健太郎）

【一三一八】紅糟（クンザウ）

① 敕修清規［下二ノ十七丈］月分須知云、十二月初八日、佛成道、庫司、預造紅糟。

② ［敕鈔十四ノ四十五丈］解者曰、昔佛成道、隨牧牛女、乞牛乳喫。今紅糟學牛乳者也。未知加何紅物矣。紅糟或作温（ウン）糟。

③ 忠曰、按紅唐音俱（ク）牟（ン）。而和字俱（ク）似宇（ウ）。故錯爲宇（ウ）牟（ン）。仍作温糟。温糟訛音而訛字者。

④ 義堂日工集［一ノ五十七丈］云、十二月八日喫紅糟。有人問紅糟縁起。余曰、牧牛女獻乳糜於世尊。今紅糟、其遺意也。

⑤ 忠曰、紅糟即五味粥也。臘八噉之。〈見五味粥處。〉下學集云、紅調粥、正月十五日所食、赤豆粥（アツキカユ）也。〈止此。〉然則紅是赤豆色。下學糟作調、訛矣。余又謂、果品・五穀雜和造粥。米白色爲之變。故言紅。數味相合。故言糟而已。

⑥ ［糸孚廿八］劉侗帝京景物略［十一丈］云、十二月八日、家效菴寺、豆果雜米、爲粥供、而朝食。曰臘八粥。

⑦ 菊坡叢話［三ノ三十二丈］云、陸放翁、臘八日詩云、臘月風和氣已春、時因散策過吾鄰、草煙漠漠柴門裏、牛跡重重野水濱、多病所須唯藥物、差科未動是閒人、今朝佛粥更相餽、更覺江村節物新。

（荒木泰量）

【一三一九】纓絡粥

① ［七ノ七丈］永覺賢禪師禪餘外集、山中有感詩云、春墾（アラキハリス）半畝畦、秋收一擔粟、每挑野菜根、和你纓絡粥。

② 忠曰、粥糜品［山林経済］不載纓珞粥。蓋糝野菜、加米造。菜牽連、如纓絡也。

③ 梅山歴然禪師普説［五丈］云、見秖對次的、即浩浩作得主的。作得主的、即喫瓔珞粥的。

（荒木泰量）

【一三二〇】蒋簿（ボ）粥

①五燈嚴統［廿一ノ五十三丈］金陵蔣山曇芳忠禪師章云、梁王、至建康。王詣寺、問曰、衲子所謂蔣簿粥者、何也。師曰、將謂殿下忘却。王曰、衲子所謂三隻襪者、何也。師曰、國内山川都踏遍。今朝親到帝王家。

（荒木泰量）

【一三二一】晩粥

①敕修清規［下一ノ四十三丈］坐參云、堂司行者、候晩粥熟、覆首座云、放參。〈乃至。〉歸衆寮藥石。

②［氏昔卅八丈］虎關和尚曰、唐樣非時煮粥、二百年來事也。

③無準範和尚録［三ノ十三丈］解夏小參云、徑山寺裏、毎日兩粥一齋。是汝諸人、九十日内、捧鉢盂。向長連牀上、恣意咂啖。於中還有知飽底麽。

④　忠曰、兩粥者、朝粥晩粥也。

（荒木泰量）

【一三二二】齋

①佛祖統紀［三十四ノ八丈］云、毗婆沙論、齋者、以過中不食、爲體。

②又云、請觀音疏齋者齊（サイ）也。　齊（トトノフル）身口業也。齊者祇是中道。後不得食者、表中法界外、更無別法也。

③釋氏要覽［上ノ六十丈］云、起世因本經云、鳥脯沙陁、隋言增長。謂受持齋法、增長善根故。佛教以過中不食名齋。　［六十一丈］又云、齋正時、毗羅三昧經云、佛爲法慧菩薩、説四食時。一旦時、爲天食。二午時、爲法食時。佛斷六趣因、令同三世佛故、制日午、爲法食正時也。僧祇律云、午時日影、過一髮一瞬。即是非時。

④齋字、和訓登幾。即是時字也。經律往往請佛者、先請、而再請白時至。　薩婆多毘尼［五ノ十一丈］云、問曰、先已請佛。何以重請。答曰、欲生增上功德故。先日以請、今更重請。又欲成三堅法故。又佛時到自行。何由得知。一居士在靜處燒香、遥供養請佛。香來繞佛三帀。又云、佛自知時。不須外縁。

（荒木泰量）

【一三二三】草飯

①忠曰、草飯者、麁飯也。

②　史記［五十六ノ四丈］陳丞相世家云、更以惡草具、進楚使。　注草粗也。

③　戰國策［四下ノ四丈］云、左右以君賤之也。食以草具。　注草不精也。具饌具。正曰、草菜也。陳平傳、惡草具、注去肴肉。

④敕修清規［下一ノ十一丈］、請立僧首座云、方丈備草飯、請特爲湯藥石。

（荒木泰量）

【一三二四】水飯

①敕修清規［上二ノ十二丈］迎待尊宿請状云、當寺住持比丘某、右某。輒以來日、就寢堂、聊備水飯。

②忠曰、水飯、以水澆飯。如日本湯食（ユヅケ）〈和語由豆計。〉也。然［敕鈔五ノ十六丈］舊説曰飯味淡如水也。蓋謙詞者、訛甚。

③本草綱目［廿五ノ八丈］云、飧（ソン）飯、飧音孫、即水飯也。

④正字通［戌下卅一丈］云、飧（ソン）蘇昆切、音孫、食也。字林水澆飯也。禮雜記、孔子曰、少施氏、食（シ）我以禮。吾飧（ソン）、作而辭曰、疏食也。不敢以傷吾子。註、禮食竟、更作三飧、以助飽。飧謂以飲澆飯也。鄭康成釋飧、爲勸食誤。

⑤字彙云、飧以飲澆飯也。古者、食後更飧、以盡主情。禮雜記、孔子食於少施氏、曰吾飧。

⑥正字通［戌下ノ卅三丈］云、飮同飯。六書故曰、陸德明、飮扶萬切。食飮、曰飯扶晩切。謂二字不同、非也。飯與飮一字、而二音也。

⑦老學菴筆記［一ノ三丈〇必十ノ五］云、集英殿、宴金國人使九盞。第一肉鹹豉。第二爆肉、雙下角子。第三蓮花肉、油餅骨頭。第四白肉、胡餅。第五羣僊殞、太平畢羅。第六假圓魚。第七柰花索粉。第八假沙魚。第九水飮鹹豉、施鮓。瓜薑看食棗錮子、膸餅。白胡餅、饅餅。

⑧睦州蹤禪師録［古宿六ノ十一丈］云、師云、後園生菜、熟水淘飯。

（荒木泰量）

【一三二五】黒飮

①敕修清規［下二ノ十六丈］月分須知云、四月初八日、佛誕浴佛。庫司預造黒飮。

②本草綱目［廿五ノ十丈］云、陶隱居登眞隱訣、載太極眞人青精乾石餽飯法。餽音信。餽之爲言。飧也。謂以酒蜜藥草輩、溲而曝之也。亦作迋。凡内外諸書、並無此字。惟施於此飯之名耳。陳藏器本草名烏飯。〈登眞隱訣飯法文繁今畧之。〉藏器曰、烏飯法、取南燭莖葉搗碎、清汁浸粳米、九浸九蒸九曝。米粒緊小。黒如鑿（エイ）珠。袋盛、可以適遠方也。時珍曰、此飯、乃仙家服食之法。而今之釋家多於四月八日、造之以供佛耳（ノミ）。造者、又入柿葉・白楊葉、數十枚、以助色。或又加生鐵一塊者。止知取其上色。不知乃服食家所忌也。

③潛確類書［九十六ノ廿二丈］云、青精、一名南天燭。又曰黒飯草。以其可染黒飯也。道家謂之青精飯。故仙經云、服草木之王、氣與神通。食青燭之精、命不復隕、謂此也。

④忠曰、南燭異名云草木之王。見本草［卅六ノ四十三丈］。

又與桐飯交看。

【一三二六】桐飯

①雲臥紀談［上廿九丈］云、眞淨和尚偈云、元符二年三月三、春餅撮（ツマミ）餤桐飯兼。〈詳叢軌類暫假處。〉

②［敕鈔十四ノ四十三丈］舊説曰、以桐葉染成飯、言桐飯。其色黑故。又名黑飯。但未知桐染飯、是何義。

③忠曰、以南燭葉汁、染飯、色青黑。故名黑飯。南燭異名楊桐。〈見本草。〉故又言桐飯。舊説爲梧桐葉染飯、太誤。欲知染義、即仙家服餌也。〈見黑餌處。〉

④山堂肆考［宮ノ九ノ十五丈］云、零陵総記、楊桐葉細冬青。居人遇寒食、採其葉染飯。色青而有光。食之資陽道。道家謂之青精乾石■。杜詩、豈無青精飯、使我顏色好。鄭畋詩、圓明。青■飯、光潤。碧霞漿。〈■音信。〉

（荒木泰量）

【一三二七】饌飯

①玉篇［九ノ七丈］云、饌子旦切。以羹澆飯。

②一山和尚曰、饌飯古多用之。川僧最好造之。乃五味飯也。　或曰、日本所謂芳飯是也。

③聯燈會要［十一ノ十一丈〇傳灯十二ノ廿四丈無――字］克賓禪師章云、興化云、克賓維那、法戰不勝。罰錢五貫。設饌飯一堂。〈詳職位類維那處。〉

④普菴肅禪師録［下ノ六十六丈］、擧克賓話、作纂飯。

（荒木泰量）

【一三二八】特爲飯

①校定清規［敕鈔十ノ十七丈引］迎待尊宿云、次日特爲飯、係具状、作都寺名請。

（荒木泰量）

【一三二九】非時食

①敕修清規［下一ノ廿五丈］沙彌得度章沙彌十戒、第十云、不非時食

②薩婆多毘尼毘婆沙［七ノ廿四丈］云、非時者、從日中至後夜後分。名爲非時。從晨至日中、名時。何以故、以日初出、乃至日中。明轉盛。中則滿足。故名爲時。從中至後夜後分。明轉減沒、故名非時。又從晨至日中、世人營救事業、作飲食。是故名爲時。從中至後夜後分、燕會嬉戲、自娛樂。時比丘遊行、有所觸惱。故名非時。又從晨至日中、俗人種種

事務、婬惱不發。故名爲時。從中至後夜後分、事務休息。婬戲言笑、若比丘出入、遊行、或時被誹謗。受諸惱害。名爲非時。又比丘、從晨至中、是乞食時。應入聚落、往來遊行。故名爲時。從中至後夜後分、應靜拱端坐、誦經坐禪。各當所業。非是行來、入聚落時。故名非時。

③五分律［八ノ七丈］云、佛在王舍城。爾時未爲比丘、制非時食。迦留陀夷、著雜色衣、面黑眼赤。闇中乞食。懷姙婦人、電光中見、大驚喚言、毗舍遮、毗舍遮。迦留陀夷言、我是沙門。非毗舍遮。便罵言、汝何冥夜乞食。餘沙門婆羅門、一食便足。汝云何食無晝夜。長老比丘、白佛。佛呵責結戒。若比丘、非時食、波逸提。非時者、從正中以後、至明相未出。名爲非時。

④法苑珠林［五十五ノ四丈］云、毗羅三昧經、世尊、爲惠法菩薩説云、食有四種。旦天食時。午法食時。暮畜生食時。夜鬼神食時。佛斷六趣因、令同三世佛。故日午時、是法食時也。過此已後、同於下趣。非上食時。故曰非時也。又薩婆多論［七ノ廿四丈］云、釋時有四。一始從日出、乃至日中。其明轉熾。名之爲時。從中已後、至後夜分。其明滅沒。故名非時。二從旦至中、是作食時。乞不生惱。故名爲時。從中已後、至於夜分、是俗人醼會遊戲之時。入村乞食、多有觸惱。故名非時。三從旦至中、俗人作務、婬亂未發。乞不生惱。故名爲時。從中已後、事務休息、婬戲言笑。入村乞食、喜被誹謗。故名非時。四從旦至中、是乞食時。得食濟身、寧心修道。事順應法。故名爲時。從中已後、宜應修道。非乞食時。故名非時。

⑤佛祖統紀［卅四ノ八丈］云、僧祇律時食、若午時日影、過一髮一瞬、即是非時。四分戒本、若比丘、非時食者、波逸提。〈十誦律、波逸提義翻、爲墮。墮在燒煮地獄。〉

⑥法苑珠林［五十五ノ十丈］云、僧祇律云、食已若渴、佛令取一切穀豆麥、煮不破者、非時取汁得飲。若酥油蜜、及石蜜、諸生果汁等、要以水淨得飲。若器底殘水、被雨湔（アラハ）、亦名爲淨。善見論云、舍樓伽果漿、澄汁使清。非時得飲。〈謂藕根是。〉摩德勒伽論、沙糖漿、亦得非時飲。

⑦老學菴筆記［三ノ十七丈］云、佛經戒比丘非時食。蓋其法過午、則不食也。而蜀僧招客草食。謂之非時。董仲舒、三年不窺園。謂勤苦不遊嬉也。舘中著庭有園。每會飯罷。輒相語曰、今日窺園乎。此二事、甚相類。

（荒木泰量）

【一三三〇】放參飯

①竹窓二筆［十七丈］云、越地、安禪夜作齋。其名曰放參飯。競爲侈靡。勝於午齋。相沿成習、久矣。昔有尊宿、聞隣房僧、午後作食。不覺泣下、悲佛法之凌夷也。故僧禁過午食。況夜食耶。律言、人間碗鉢作聲、餓鬼咽中起火。乃於漏深入靜、而砧几盤盂音響、徹其耳根。又煎煮烹炮、馨香發其鼻識。忘慈悲之訓、恣口腹之欲。於心安乎。或曰、中夜饑、如之何。則代以菓核餅餌之類、不煩鍋銚者可也。況持過午者、午後至明、不食纎物。我等晚有藥石。何不知足之甚。

②蒙山和尚録［敕鈔八ノ九丈〇又十一ノ九丈引］云、我從在家、不喫放參。

③解者曰、喫放參者、謂喫非時食也。蓋諱非時之言也。此方亦有此稱。其喫食在放參鐘

時。故云爾。此隣近釋。

（荒木泰量）

【一三三一】藥石（ヤシツ〈ヤクセキ〉）

①敕修清規［上一ノ卅四丈］達磨忌日、念誦畢、或請就坐藥石。［上二ノ四丈］又告香云、當晚方丈、請參頭・維那・侍者、藥石。［下一ノ卅三丈］又遊方參請云、當晚特爲湯、〈乃至。〉湯罷、起就爐前、謝湯。須兩展三禮。抽衣就坐藥石。［下一ノ四十三丈］又大坐參云、若住持晚參、則不鳴堂前鐘。〈乃至。〉開示畢、衆散、歸寮藥石。若不晚參、則堂司行者、進首座前問訊云、堂頭和尚、今晚放參。〈乃至。〉衆各出全單、歸衆寮藥石。

②［敕鈔九ノ九丈〇又三ノ廿丈］舊説曰、藥石謂晚間之粥。［同十四ノ廿七丈］蓋隱語也。凡禪林清規、所擧戒相、止沙彌十戒而已。不擧具足戒。故禪僧行事、於此十支、無缺漏足矣。可謂簡易。然猶不堅持。過午食可耶。抑喫晚粥、爲養體療病、進修道業。故稱爲藥石也。粥咒願、所謂粥是大良藥、是也。

③黄檗清規［標注］云、藥石晚食也。比丘過午不食、故晚食名藥石。爲療饑渴病也。

④玄應經音義［十九ノ二丈］云、攻病曰藥石。古人以石爲針。今人以鐵。皆謂療病者也。

⑤春秋左氏傳［杜注十七ノ八丈〇林注卅八ノ十四丈〇襄廿三年］云、臧孫曰、季孫之愛我疾疢（チン）也。孟孫之惡我、藥石也。　杜預曰、常志相違戾、猶藥石之療（イヤスカ）疾。

⑥唐書［列傳廿九ノ六丈〇敕鈔三ノ廿丈引］高季輔傳云、數上書、言得失。辭誠切至。帝賜鐘乳一劑。曰而進藥石之言。朕以藥石相報。

⑦居家必用［辛ノ四十四丈］云、圓散曰藥。鍼砭曰石。

（荒木泰量）

【一三三二】藥食（ヤシツ）

①古刊古尊宿録［六ノ七丈］睦州録云、問大衆云、三乘十二分教、成得箇什麼邊事。有僧云、今日大衆、普請不易。師云、不要將出來。僧云、打鼓喫藥食。〈新刊作藥石。〉

②雲門偃禪師録［中ノ五十六丈］云、師歲夜問僧。餅餤是羅漢藥食。還將得饌饌餡子來麼。無對。代云、今日東風起。

③今本作藥石。蓋依事苑改。

④春渚紀聞［四ノ十七丈］云、龔彦和正言、自貶所、歸衞城縣。寓居一禪林。日持鉢隨堂供。暇日偶過庫司。見僧雛具（ソナフルヲ）湯餅。問其故。云具殿院晚間藥食。龔自此不復晚飡云。

⑤祖庭事苑［一ノ十二丈］辨雲門録羅漢藥食云、食當作石。取療病義。故曰藥石。夫攻病曰藥。劫病曰石。古以砭石爲針也。全元起欲注素問。訪以砭石。王僧孺答曰、古人當以石爲針。必不用鐵。説文有此砭字。許愼云、以石刺病也。東山經高氏之山、多針石。郭璞云、可以爲砭針。春秋美疢（チン）、不如惡石。服子愼注云、石砭石也。季世無復佳石。故以鐵代之爾（ノミ）。又以服石子止饑。如高僧僧善傳、善疾篤將殛（ツキナント）。告弟子曰、吾患腹

中冷結者、昔在少年、山居服業。粮粒既斷。懶往追求。噉小石子、用充日夕。因覺爲病。死後可破腹看之。果如所言。愚竊詳二意。皆不然也。又神仙傳、或以藥煑石而食之。又非先聖之意。今叢林習以爲常。未有非之者焉。又況四果眞人、詎肯輒違佛制、來享非時之餐。雲門欲以誘接學者。而正言似反。後世或資以爲口實。豈不誤乎。疢音趁。熱病也。

⑥ 忠曰、竊惟、雲門示衆、不在定盤星。睦菴欲辨藥石。強言正言似反。可笑。是他時世、早有晩食耳。但藥食當作藥石。音近訛也。虎關和尚曰、中華二百年來、煮晩粥。今自虎關寂年、遡算雲門寂年、得三百九十八年。故知虎關只言煮粥而已。如餅餈爲藥石、雲門時已有之。

（荒木泰量）

【一三三三】送食

①忠曰、此方俗稱送膳者。

②敕修清規［下二ノ十三丈］、四節秉拂云、方丈請秉拂人藥石。免赴。當送往。

③ 忠曰、往者、遣藥石也。

（荒木泰量）

【一三三四】陪貼

①［又敕鈔六ノ廿八丈］忠曰、本飯本菜外、陪增貼附也。

② 正字通［酉中卅三丈］云、貼音帖依附、又增益贈人、又黏置。

③敕修清規［上二ノ廿八丈］尊宿遷化云、計會所遺衣鉢多少、默作三分。一分、准喪司孝服、諷經燈燭之費、一分、歸常住、陪貼供養、一分、俵大衆、看經并佛事、板帳等用。

（彦坂宗俊）

【一三三五】貼菜

①［敕鈔八ノ五十二丈］常住所飣菜外、自別貼附、表供養意、曰貼菜。

②日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云、如有菜滓、安鉢後屏處。

③ 素問［三ノ十六丈］藏氣法時論云、五穀爲養、五果爲助、五畜爲益、五菜爲充。氣味合而服之、以補精益氣。此五者、有辛酸甘苦鹹。各有所利。

④ 忠曰、按素問、五菜謂葵甘、韭酸、薤苦、藿鹹、葱辛。

⑤ 格致餘論［二ノ卅七丈］云、凡人饑則必食。彼粳米昔而淡者、土之徳也。物之屬陰、而最補者也。惟可與菜同進。經以菜爲充者、恐於饑時、頓食、或慮過多因致胃損。故以菜、助其充足。取其疏通而易化。此天地生物之仁也。

⑥ 禮記［注流二ノ卅四丈］曲禮云、羹之有菜者、用梜、其無菜者、不用梜。 註、梜猶箸也。

（彦坂宗俊）

【一三三六】再請

①［敕鈔十二ノ卅五丈］舊説曰、請受食也。再請者、兩受食也。
②忠曰、俗作再進訛。
③日用軌範［敕修下一ノ四十九丈］云、未再請、不得刷鉢盂。

（彦坂宗俊）

【一三三七】請折

①［敕鈔十二ノ卅五丈］舊説曰、請受食也。折韻會毀棄也。請折者、捨所受飯羹等餘殘也。
②日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云、隨量受食、不得請折。

（彦坂宗俊）

【一三三八】打飯

①鶴林玉露［十七ノ十二丈］云、陸象山家人、計口打飯。
②歐陽修［本集百廿六］歸田録［二ノ十八丈］云、今世俗、言語之訛、而擧世君子小人。皆同其繆者、惟打字爾。〈打丁雅反。〉其義、本謂考擊。故人相毆、以物相擊、皆謂之打。而工造金銀器、亦謂之打可矣。蓋有槌檛作擊之義也。至於造舟車者、曰打舩打車。網魚曰打魚。汲水曰打水。役夫餉飯、曰打飯。兵士給衣糧、曰打衣糧。從者執傘、曰打傘。以糊黏紙、曰打黏。以丈尺量地、曰打量。擧手試眼之昏明曰打試。至於名儒碩學語、皆如此。觸事皆謂之打、而徧檢字書、了無此語。〈丁雅反者。〉其義主考擊之打、自音謫。〈疑當作滴。〉耿、以字學言之。打字從手從丁。丁又擊物之聲、故音謫耿、爲是。不知因何轉爲丁雅也。
③俗呼小録云、俗牽連之辭。如指其人、至某人、物及某物。皆曰打。〈丁普公詩、所謂赤洪厓打白洪厓、是也。〉

（彦坂宗俊）

禪林象器箋巻第十七

神京妙心龍華沙懣道忠無著甫輯

○飲啖類下

【一三三九】煎點

①敕修清規［上二ノ十三丈］、受嗣法人煎點云、若法嗣到寺煎點。令帶行知事、到庫司、會計營辨合用錢物、送納。［下一ノ卅三丈］又遊方參請云、參頭云、某等重承煎點、特此拜

謝。

②［下一ノ四十丈］又方丈特爲新掛搭茶云、特爲人、謝茶云、某等此日、重蒙煎點、特此拜謝。

③忠曰、煎點者、謂煎熬煎熟食物、以點於心也。

④正字通［巳中廿丈］云、煎音箋、熬也。方言［七ノ二丈］有汁而乾。之曰煎今俗凡以水煮物、亦曰煎。

⑤［敕鈔十一ノ廿七丈〇又十四ノ卅八丈〇又五ノ卅一丈呈出］舊説曰、煎點者、但是謂點煎茶也。然日本以點心爲煎點、非也。縱有點心、亦以茶爲本。謂若請人進唯茶、則太簡故先進點心、次進茶矣。點心本爲茶。故稱點心、爲煎點、失辭。

⑥五燈會元［十四ノ卅四丈〇又正宗賛三］芙蓉楷禪師章云、新到相見、茶湯而已。更不煎點。〈詳米湯處。〉

⑦忠曰、凡進茶湯時、可有煎食果糍等之供。喫畢、方進茶湯矣。茶湯外、別有煎點、以芙蓉章、可爲證焉。故舊説言但點煎茶、爲煎點者、非也。

（彦坂宗俊）

【一三四〇】點心

①敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、庫司嚴設香燭備點心。［上二ノ四丈］又告香云、半齋請參頭維那侍者、點心。〈更半齋點心者多。詳節時類、半齋處。〉

②舊説［敕鈔一ノ廿三丈］曰、點心謂于空心也。早旦陰陽末分時、少喫食、此攝養法。

③文公家禮［？二丈］云、婦具農羞、俗謂點心。

④煎燈新話［四ノ十四丈太虚司法傳］註云、點心之點、與點茶之點、同義。蓋少食鎮心也。

⑤忠按點心之點、與點茶之點義別、點茶用茶筅點湯。又點冷水之義、見文公家禮。〈點茶處箋。〉點心以食點空腹耳。

⑥［鄂十七］宋呉會能改齋漫録［七丈］云、世俗例以早晨小食爲點心。自唐時、已有此語。按唐鄭儋、爲江淮留後、家人備夫人晨饌、夫人顧其弟曰、治妝未畢。我未及餐、爾且可點心。其弟擧甌已罄。俄而女僕、請飯庫鑰匙、備夫人點心。儋詬曰、適已給了。何得又請。

⑦輟耕録［十七ノ八丈］云、今以早飯前後、午前午後、哺前小食、爲點心。〈引鄭儋。〉此語唐時已然。

⑧俗呼小録［糸孚廿一ノ四丈］云、午前午後小食、謂上晝點心、下晝點心。〈唐鄭儋爲江淮留後。夫人曰、爾且點心。昭明太子別傳曰、京師穀貴、改常饌、爲小食、即點心之説也。〉

（彦坂宗俊）

【一三四一】糍果

①［敕鈔十四ノ廿九丈］舊説曰、糍果者、攪餅〈和語加爲毛知。〉之類。

②忠曰、本［？］木實曰果。然餅糍之類、亦通稱。故武林舊事［孚六十］市肆記中、果子

部、多列餳餅之名。

③敕修清規［下二ノ十一丈］、庫司四節、特爲首座大衆湯云、惟冬節湯罷行糍果、方行藥石。

（彦坂宗俊）

【一三四二】油糍

①［敕鈔十四ノ四十五丈］竺仙和尚出油糍之法。

②白雲端禪師録［頌古十三丈］、慧超問佛頌云、一文大光錢、買得箇油餈、喫向肚裏了、當下便不饑。

③忠曰、碧巖録［一ノ廿八丈］載之。作油糍、而韻書不收糍字。

④正字通［戌下卅六丈］云、餈才時切、音慈、説文稻餅也。周禮籩人、羞籩之實、糗餌粉餈。註、皆粉稻黍米、爲之餌言糗。餈言粉、互足其義也。合烝曰餌、餅之曰餈。疏云、今餈之名、出于此。

（彦坂宗俊）

【一三四三】湯果

①敕修清規［上一ノ卅八丈］、嗣法師忌、云諷經罷、備湯果。

②［敕鈔三ノ卅六丈〇又五ノ十四丈］解者曰、湯稱入麪、果稱果子。凡食有汁者、言湯也。［敕鈔八ノ廿六丈］又解湯藥侍者曰、湯藥者、湯果藥石也。湯果者、凡稱食有汁者。［敕鈔九ノ十丈］此方所謂入麪是也。

③忠曰、後説以湯果爲一物、蓋初説近是。

④敕修清規［上二ノ十一丈］、迎待尊宿云、湯罷藥石、又客頭詣客位請云、方丈請和尚。今晩湯果。［上二ノ十七丈］又西堂頭首受請云、晩請新命專使、特爲湯、藥石湯果。

（彦坂宗俊）

【一三四四】糟鷄

①忠曰、撮裂蒟蒻、澆淡醤汁煎者。日本禪林煎點用之。然未識所以名之。若以似在家糟藏鷄肉名之、則改換其目、可也。昔在玉泉皓和尚、責藥石、米麪假作驢腸膳、生羊骨、鱉臛、餵飼八萬四千戸蟲。〈［十九ノ廿四丈］通載。〉大通本禪師伊蒲塞饌、以魚胾名者、不食。〈［大冊十七丈］僧宝。〉誰不矜式耶。

（彦坂宗俊）

【一三四五】菖蒲茶

①敕修清規［下二ノ十六丈］月分須知云、五月端午日、早晨、知事僧堂内燒香。點菖蒲茶。
②忠曰、居家、此日飲菖蒲酒。僧家以茶代之、［敕鈔十四ノ四十三丈］準世禮也。
③［居家必備］瞿祐四時宜忌［廿三丈］云、五月五日、午時、飯菖蒲雄黄酒。辟除百疾、而禁百蟲。
④月令廣義［十ノ十七丈］五月令云、神農書曰、午日以菖蒲或縷或屑、泛酒、助陽氣延年。以山澗九節者、佳。笑談録、五日、菖蒲末、酒服、亦解酒、痛飲不醉。

（彦坂宗俊）

【一三四六】茱萸茶

①忠曰、世典、有九日佩茱萸、飲菊花酒之説。其點茱萸於茶、却見于禪策。
②敕修清規［下二ノ十七丈］月分須知云、九月重陽日、早晨、知事燒香、點茱萸茶。
③北磵簡禪師詩集［六ノ十二丈］九日詩云、瓦鼎松聲漲苦茶、替杯中物泛茱萸。白衣不識緇衣客、自擷寒英挿古壷。
④西巖慧禪師開善録［四丈］、重陽上堂云、孟嘉已前、淵明去後、誰家籬畔欠黄花。那箇盃中無白酒。重陽只是九月九。阿阿阿。始信茱萸茶苦澁、展眉人少皺眉多。
⑤南堂欲禪師靈嚴録［廿七丈］上堂云、今朝九月九、萬物隨時候、滿泛茱萸茶。何用菊華酒。畢竟醉兀兀、不似長醒醒。〈云云。〉
⑥鏡堂圓禪師建仁録［六丈］、重陽上堂云、紫萸滿泛趙州茶、清香直透頂門烈。
⑦西京雜記［三ノ五丈］云、戚夫人侍兒賈佩蘭、後出爲扶風人段儒妻。説、在宮内時、九月九日、佩茱萸食逢餌、飯菊花酒。令人長壽。
⑧瑯邪代醉編［二十ノ三丈］云、重陽佩茱萸囊、相傳費長房故事。然武帝宮人賈佩蘭、佩茱萸、食逢餌、飲菊花酒、則西漢時、已有此俗、不自長房始也。見西京雜記。

（彦坂宗俊）

【一三四七】茶末

①敕修清規［下一ノ四十九丈］、日用軌範云、不得包藏茶末。
②忠曰、細末茶也。言不可未行湯已前、包末茶、而懷之也。〈［敕鈔十二ノ卅六丈］舊解爲茶前果子可笑。〉
③文公家禮［一ノ注］云、古人飲茶用末。所謂點茶者、先置末茶于器中、然後投以滾湯。〈詳點茶處。〉
④雲門偃禪師録［下ノ十九丈］云、因園頭請師喫茶。師云、你若煎茶我有箇報答你處。園頭云、請師報答、師云多著水少著末。

（彦坂宗俊）

【一三四八】點茶

①敕修清規［上二ノ十七丈］、新命辭衆上堂、茶湯云、山門首、預釘掛帳設、中敷高座向内、首座向外攝、居主位。〈乃至。〉上首知事行禮、揖坐揖香、歸位點茶、收盞、再起燒香揖香、歸位點湯、湯罷、起謝、上轎。

②文公家禮［一卷目］云、主婦執茶筅、執事者、執湯瓶、隨之、點茶。蓋以神主櫝前、先設盞托、至是乃注湯于盞、用茶筅點之耳。古人飲茶用末、所謂點茶者、先置末茶于器中、然後投以滾湯、點以冷水、而用茶筅調之。今人燒湯煎葉茶、而此猶云點茶者、存舊也。

③［郛九十三　二丈］宋蔡襄茶録曰、點茶、茶少湯多、則雲脚散。湯少茶多、則粥面聚。〈建人謂之雲脚、粥面。〉鈔茶一錢七、先注湯、調令極勻、又添注入、環廻擊拂、湯上盞可四分則止、眎其面色、鮮白。著盞無水痕、爲絶佳。建安鬬試、以水痕先者爲負、耐久者爲勝。故較勝負之説曰、相去一水雨水。

④［郛九十三］宋徽宗大觀茶論曰、點茶不一、而調膏繼刻、以湯注之、手重筅輕、無粟文蟹眼者、謂之靜面點、蓋擊拂無力、茶不發立。水乳未浹。又復增湯、色澤不盡。英華淪散、茶無立作矣。有隨湯擊拂、手筅俱重、立文泛泛。謂之一發點。蓋用湯已、故指腕不圓。粥面未凝、茶力已盡、雲霧雖泛、水脚易生、妙于此者、量茶受湯、調如融膠、環注盞畔、勿使侵茶、勢不欲猛。先須攪動茶膏、漸加擊拂、手輕筅重、指遶腕旋、上下透徹、如酵糵之起麪、疎星皎月、燦然而生、則茶之根本立矣。第二湯、自茶面注之、周回一線、急注急上、茶面不動、擊拂既力、色澤漸開、珠璣磊落。三湯、多寡、如前擊拂、漸貴輕勻、周環旋復、表裏洞徹、粟文蟹眼、泛結雜起、茶之色十、已得其六七。四湯、尚嗇、筅欲轉稍寛而勿速、其清眞華彩、既已煥發、雲霧漸生。五湯、乃可少縱筅、欲輕勻而透達、如發立未盡則擊以作之。發立已過、則拂以斂之、結浚靄結凝雪、茶色盡矣。六湯、以觀立作乳點勃結、則以筅著居、緩遶拂動而已。七湯、以分輕清重濁、相稀稠得中、可欲則止、乳霧洶湧、溢盞而起、周回旋而不動、謂之咬盞、宜勻其輕清浮合者、飲之。

⑤桐居録曰、茗有餑飲之宜人、雖多不爲過也。

（水野隆道）

【一三四九】特爲茶

①［東福清規卅七丈特為湯］忠曰、特爲此人點、故曰特爲茶。

②敕修清規［下一ノ十六丈］、堂司特爲新舊侍者茶湯云、請新舊侍者特爲茶。

（水野隆道）

【一三五〇】普茶

①忠曰、點茶、普及一衆、故曰普茶。

②黄檗清規［十三丈］云、常住設普茶。

（水野隆道）

【一三五一】入寮茶

①忠曰、新入衆寮、爲衆點茶也。

②敕修清規［下二ノ二丈］、新掛搭人、點入寮茶云、新掛搭人、入寮後、照例、納陪寮錢若干。候寮元、輪排當在何日、掛點茶牌、報衆。〈云云。〉候點入寮茶畢、寮元逐日、依戒具名、點戒臘茶。

（水野隆道）

【一三五二】戒臘茶

①見入寮茶處。

②忠曰、寮元依衆戒臘、自上位、次第請于衆寮、點茶、蓋衆多、不可一時講、故遂日行之也。

（水野隆道）

【一三五三】米湯

①芙蓉楷禪師録［続宿二ノ五丈○普燈廿五ノ十二丈］云、示衆云、夫出家者、爲厭塵勞、求脱生死。〈乃至。〉山僧行業無取、忝主山門。豈可坐費常住、頓忘先聖付囑。今者輒欲効古人住持體例、與諸人議定、更不下山、不赴齋、不發化主。唯是本院莊課、一歳所得、均作三百六十分。日取一分用之。更不隨人添減、可以備飯、即作飯、作飯不足、即作粥、作粥不足、即作米湯。新到相見、茶湯而已、更不煎點、唯置一茶堂、自去取用、務要省縁、一向辨道。

②忠曰、與淫湯交看。

③醉菩提［十二回六丈］濟顛曰、王婆與我、喫粉湯。〈止此。〉亦是米湯。

（水野隆道）

【一三五四】淫湯

①［日用清規鈔上十七丈］舊説曰、或謂淫湯、飲之則能折薄淫心、故名。此義非也。淫當作飲。僧堂鳴開鉢槌時、唱飲湯而行之。

②忠曰、續字彙云、淫王粲七哀詩、何爲久滯淫、文選註留也。〈止此。〉蓋米粉點湯、混濁滯留、故言淫湯。即米湯也。

③［敕鈔十二ノ廿九丈］舊説曰、洞山价禪師、辭母出家、母愛惜、遺書不許。既而隨其志、告

曰、汝須如目連救母。後其母憶价不已、躬往尋求四方、遂斃于道路。洞山適知之。爲収遺骸、荼毘。母襄中、蓄米粒少許。山欲行大衆、結良縁。則米少而不及。便投之釜中以湯普進大衆、此淫湯之始也。

④ 林間録［下ノ六丈］云、叢林相傳、洞山悟本禪師、見母行乞、佯爲不識。母竟死於路旁。往視之、有米數合。爲投大衆粥鍋中。以薦冥福。悟本獨菴寒溪、百結最有年、至住新豐、已六十餘、自巖頭雪峯欽山三人、相尋而至、於是積衆。幾千人、則母蓋不翅八十歳矣、借使聞其子顯著、自東呉孤行來、不亦難乎、此直不情者、記之。以自藏、安知誣毀先徳。爲罪逆、必有任其咎者、不可不慎也。

⑤ 忠曰、依寂音之議、則淫湯、爲洞山事縁、妄矣。

（水野隆道）

【一三五五】七香湯

① 東福寺入寺記［瑞雪禾上ノ十六丈］云、五侍者交代。〈名小官代。〉除侍衣、餘四人、賓位立班。新命主位對立、各問訊。觸禮畢、坐〈此名胡亂坐。〉茶禮。復各立定、客頭取香案上目子、渡與新命、新命開讀之。客頭接之、安卓上、四人轉位、侍香植香歸班。新命答香、與四人對觸禮畢、復坐。入盞行七香湯、入湯瓶。喫畢、撤盞。各起小間訊、退。

② 七香湯方、　陳皮〈中〉茯苓中〈中〉地骨皮〈小〉肉桂〈小〉當歸〈小〉枳殼〈小〉甘草〈少〉

③ 敕修清規［下一ノ四丈］、知殿云、佛誕日、浴佛煎湯、供大衆。

④ 忠曰、蓋此亦七香湯之類歟。凡中華俗、早朝喫湯、如水滸傳宋江、五更從縣前過、遇賣湯藥王公趕早市、爲夜來傷酒。便進醒酒二陳湯、是也。律家有甘露湯。早朝喫之。居家必用［已集］、載湯藥法、自天香湯、至沃雪湯、凡有三十品。

⑤ 律家甘露湯、未知其方、［山林経牘ノ十］古杭高濂法製品、載甘露丸法云、百藥煎一兩、甘松訶子各一錢二分半、麝香半分、薄荷二兩、檀香一錢六分、甘草末一兩二錢五分、水撥凡晒乾、用甘草膏子入、麝香爲衣。

（水野隆道）

【一三五六】粗湯

① 忠曰、粗不精好也。爲人點湯、謙所稱也。

② 敕修清規［下二ノ十丈］、庫司四節、特爲首座大衆湯云、都寺行禮、初展云、此日粗湯。特沐慈悲降重。下情不勝感激之至。

（水野隆道）

【一三五七】點湯

① 見點茶處。

（水野隆道）

【一三五八】特爲湯

①［東福清規卅七丈］特爲義、見特爲茶處。

②敕修清規［上二ノ十丈］、迎待尊宿云、請客侍者、具状、詣客位。挿香、拜請特爲湯。

（水野隆道）

【一三五九】小座湯

①敕修清規［下二ノ四丈］衆寮、結解特爲衆湯云、鳴寮内小板、先講小座湯。亦設照牌、特爲寮主、副寮、楞嚴頭、行瓶盞人也。

②［敕鈔十四ノ十丈］解者曰、小座湯、名行藥。

③忠曰、行瓶盞人者、行瓶盞兄弟也。清規上文云、夏中行茶湯瓶盞圖註、兄弟結縁、隨意書名。

④東福清規［卅七丈］云、小座湯者、衆寮諷經時、先但爲夏中執役人、進湯也。寮元坐主位、寮頭坐位。

⑤敕修清規［下二ノ八丈］方丈小座湯云、東西堂・前堂・首座・都寺、係請客侍者、各詣寮、觸禮拜請。〈云云。〉餘頭首、辨事、名勝方丈客頭行者請。〈云云。〉

（水野隆道）

【一三六〇】大座湯

①忠曰、敕修清規［下二ノ九丈］、庫司四節、特爲首座大衆湯、是也。

②東福清規［七十七丈］云、四月十四日、大座湯、都寺所點、故都寺、自以榜、詣首座寮。又云、凡大座湯、則有揖坐・揖香・揖湯・三度巡堂。〈其規詳于彼。〉

③舊説曰、小座湯、長擊内板。大座湯、長擊外板。

（水野隆道）

【一三六一】三巡湯

①［敕鈔九ノ十五丈］舊説曰、四節湯、名三巡湯。

②忠曰、四節大小座湯、皆有三巡問訊。謂揖坐・揖香・揖湯也。故曰三巡湯。〈三巡問訊、見禮則類。〉

（水野隆道）

【一三六二】陪食

①敕修清規［上一ノ卅四丈］達磨忌云、次日早、住持上香禮拜、上湯上粥、座下側坐陪食。

②［勅鈔三ノ廿四丈］舊説曰、達磨忌、住持不赴僧堂粥、於法堂、與祖師相伴、喫粥。此曰陪食。蕭師、會遇達磨忌、伴祖喫粥曰、月中巖講此禮矣。義堂東漸住南禪、皆準敕修清規、行陪食焉。

（水野隆道）

【一三六三】品食

①備用清規［一ノ九丈］達磨祖師忌云、山門設供、無嘲、有品食三拜者、恐禮過成諂。

②　忠曰、品食、亦是陪食也。相陪如品字。故曰品食也。

（水野隆道）

【一三六四】伴眞湯

①敕修清規［上一ノ卅八丈］、嗣法師忌云、若講特爲伴眞湯、齋罷、方丈客頭、請西堂兩序、晩間對眞、相伴喫湯。排照牌位、列座右。住持揖就座、燒香上湯、并下相伴人湯、退身燒香展拜、起身問訊、謝相伴。鳴鼓三下、退座。

（水野隆道）

【一三六五】送湯

①備用清規［三ノ四丈］衆寮楞嚴云、寮元親送方丈湯、分送諸寮湯。

②　忠曰、日本僧家、有送飯果者。亦有所據。

（水野隆道）

【一三六六】羅齋

①忠曰、羅、猶如羅欲之羅也。品字箋［乙ノ九十九丈］云、包羅、若網羅之無不包。今羅齋、乞食于四方、無遺餘之義。

②破菴先禪師録［十五丈］、上堂、擧普化大悲院裏有齋云、者風顛漢、不妨令人疑著、及至被人窮詰將來、却只道得箇羅齋打供。也似熟處難忘。［廿八丈］又擧臨濟同普化赴齋、踢倒飯床因緣云、世諦門中、羅齋打供、則無可不可、若是少室門風、未夢見在。

③北磵簡禪師、散知識會頌云、朝來靈隱羅齋去、添得從前滿面慚。〈詳報禱類、知識會處。〉

④　有作囉者、韻書不見義。

⑤冷齋夜話［一ノ二丈］云、予往臨川景德寺、與謝無逸輩、升閣得禪月所畫十八應眞像甚奇、而失第五軸。予口占嘲之曰、十八聲聞解埵根、少叢林漢亂山門、不知何處囉齋去、不見雲堂第五尊。〈云云。〉

⑥　有作邏者、字彙邏巡也。〈止此。〉有次第乞食義。

⑦月江印和尚録、羅漢贊云、不爲自己邏齋供、只要衆生破吝慳。

⑧山菴雜録［上ノ十六丈］云、杭下天竺、鳳山儀法師、教門少有齟齬、必整理之。高麗駙馬瀋王、被旨、禮寶陀觀音、過杭就明慶寺、設齋。〈云云。〉師後至。竟趨座上。問王曰、今日齋會、爲何。王曰、齋諸山。師曰、大王既言齋諸山、主人今無位、而王自處尊位、諸山列兩廡。至有席地而坐者、與邏齋何異。於禮恐不然。王聞之惶愧、請謝、即下法座。

⑨貞和集［八ノ七丈］、葛無懷謝少林蒲鞋喝云、四稜踏地老無懷、正好重新買草鞋、成現送來雖著了、諸方無處可邏齋。

⑩　普菴蕭禪師録［上廿五丈］、訓行童云、三家村裏邏茶湯、十字街頭覓飯喫。［上ノ七十三丈］又示小師圓契語云、向野狐口邊、邏眥骨頭、喫了、又東顱西顱。

（水野隆道）

【一三六七】袈裟

①釋氏要覽［上ノ四十丈］云、袈裟者、蓋從色彰稱也。梵音、具云迦羅沙曳。此云不正色。四分律云、一切上色衣、不得畜。當壞作迦沙色。今略梵語也。又名壞色。業疏云、本作迦沙、至梁葛洪、撰字苑、下方添衣、言道服也。

丸毛俊宏

【一三六八】法衣

①敕修清規［上二ノ十丈］、受法衣云、專使送法衣至。〈云云〉。詞云、某人和尚法衣、表信。專此奉上。

②　忠曰、禪林所謂法衣者、金襴衣、而以表傳法之信也。但説法時、披此衣、故言法衣也。須是大衣。自九條、至二十五條矣。〈與傳衣交看〉

③　舊説［勅鈔五ノ十一丈］曰、凡法衣、上堂陞座可披之。如小參五參上堂、立地佛事、拈香、皆不可披之。達磨忌、百丈忌、開山忌拈香、猶不可披也。況在家拈香耶。

④飜譯名義集［七ノ十四丈］云、西域記』云、僧迦胝、舊訛云僧伽梨。此云合、又云重、謂割之合成。義淨云、僧迦胝、唐言重複衣。靈感傳云、每轉法輪、披僧伽梨。南山云、此三衣名、諸部無正翻。今以義譯、大衣名雜碎衣。以條數多故、若從用爲名、則曰入王宮聚落時衣。乞食説法時著。

⑤　忠曰、禪林金襴大衣、獨説法時著之、今靈感傳及南山所言、少通之。但我局金襴。又金襴、不用於乞食耳。

⑥　又曰、凡釋法衣、作可通三衣之義者、非禪林所謂法衣義、故今不取之。但暫録之、令識者擇焉。

⑦祖庭事苑［八ノ十五丈］云、法衣者、如法之衣也。
⑧　忠曰、三衣皆如法裁之。睦菴以此釋禪宗傳法之衣、恐失辭。
⑨釋氏要覽［上ノ卅九丈］云、西天出家者衣、律有制度、應法而作、故曰法衣。
⑩又［同上〇清規下一〇引■］云蓋法衣有三也。一僧伽梨。〈即大衣也〉。二欝多羅僧。〈即七條也〉。三安陀會。〈即五條也。此是三衣也。若呼七條偏衫裙、爲三衣者、誤之也〉。
⑪釋門章服儀［七丈］云、或經云法衣者、謂懷道者服之、名法衣也。
⑫應法記云、此就所學法、立號、指經云者、如雜含云。修四無量、服三法衣。業疏云、四分亦名三法衣。法是軌用之名、被則心行正法、頗同此釋也。
⑬業疏云、世稱福田衣、以法畦畔之相、世田用畦盛水、長嘉苗、養形命也。法衣之田、彌弘四利之益、增三善之心、養法身慧命也。
⑭　濟緣記云、四利即四等。〈慈悲喜捨、又名四無量心〉。三善、謂無貪瞋癡也。

丸毛俊宏

【一三七四】七條衣

①翻譯名義集［七ノ十四丈］云、鬱多羅僧、或郁多羅僧、此譯上著衣。即七條也。南山云、七條名中價衣。從用云入衆時衣、禮誦齋講時著。
②大寶積經菩薩藏會云、時長老阿難陀、既覩世尊微笑光明、以七條衣、覆左肩已、偏祖右肩、右膝著地、合掌禮足、以頌問。〈云云〉。
③雲門偃禪師録云、上堂、因聞鐘鳴。乃云、世界與麽廣濶。爲什麽鐘聲披七條。

加藤佳祐

【一三七五】五條衣

①日用軌範［敕修下一ノ五十一丈］云、開浴以五條、手巾、掛筅竿上。
②　忠曰、禪家稱掛絡。是五條衣也。
③大慧爲政信寺如山主普説［普説一ノ廿五丈］云、舊時佛光無礙禪師、一生袈裟、常不離身。若大小二事時、便摺疊放淨處、事畢、洗漱了、依前披在身上。唾時也須披箇五條就寢。
④空谷尚直編云、宋理宗時、靈隱癡絶沖禪師、令門下之僧、常衣直裰等服、晝夜不釋其身。臨睡則披五條袈裟、囊佩大衣而臥。

加藤佳祐

【一三七六】三事衲〈三衣同〉

①忠曰。五條、七條、九條、三種衲也。〈或爲袈裟、鉢、拄杖者、杜撰〉。
②傳燈録［廿六ノ卅丈］瑞鹿先禪師章。見色便見心。頌云、若是見色便見心、人來問著方難答。更求道理説多般、狐負平生三事衲。
③大慧杲禪師録［十二ノ十五丈］自讚云、身著如來三事衣。口中謗佛法僧寶。〈云云〉。

④世尊制但三衣緣。四分律［四十ノ十八丈］云。爾時世尊。在淨處思惟、心自念言。諸比丘、在道路行、多擔衣、有頭上載、有肩上擔、有帶著腰中。寧可爲制衣多少。時世尊、初夜在露地坐、著一衣。至中夜、覺身寒。即著第二衣。至後夜、覺身寒。著第三衣。世尊念、畜三衣足、夜過已。集比丘僧、告如上緣言、我聽諸比丘、畜三衣、不得過畜。〈略鈔〉。

⑤忠曰、［補忘九ノ十五丈］律家有糞掃一衣三衣諍論。資持記云。欲令節儉少欲省事。一衲之外、更無餘物。〈止此〉。三衣師曰、三衣各一衲、故云一衲。亦無相違。悲華經［第四］云、當出家時、即得成就糞掃三衣。常在樹下、獨坐思惟。〈止此〉。故糞掃三衣。不可復疑。

⑥緇門警訓［下ノ四十八丈］載。大智律師三衣賦云、吾有三衣。古聖眞規。粗疎麻苧。爲其體。獸毛蠶口、害命傷慈。青黒木蘭、壞其色。五正五間、涉俗生譏。其奉持也。如鳥兩翼。其敬護也。如身薄皮。信是恒沙諸佛之標幟。賢聖沙門之軌儀。九十六道。起信之首。二十五有植福之基。是以堅誓獸王。忍死而頻加稱嘆。蓮華色女、作戲而盡斷貪癡。弘誓甚重。至德難思。龍披免金翅之禍。人得息戰敵之危。末流浮薄。正教衰遲。競貿亂朱之服。率遭濫吹之嗤。壯大於貢高我慢。欺壓於碩德厖眉。習以成俗。愚不知非。汝當敬遵彝範。仰荷恩慈。時時自慶。歩歩勿離。潛神樂國兮。銖衣自被。垂形忍界兮。報服常隨。劫石可銷。想斯言而不泯。太空有盡。諒此志以難移。

加藤佳祐

【一三七七】掛絡

①敕修清規［下一ノ四十九丈］日用軌範披五條。註云、即掛絡也。

②舊説［敕鈔十二ノ卅八丈］曰、掛絡何義。謂掛而絡身也。或曰、上中下衣。皆掛而絡身。獨稱此何也。答曰唯絡子。通掛左右肩。故言掛絡。餘衣不然。曰若以通掛左右肩。則須名通絡也。若但稱掛絡。則可三衣通名矣。然今敕修清規、解五條。言掛絡也。則不可復名於餘衣。可以弭紛説矣。但此註、見于敕修清規。餘處未見也。

③又舊説［同上］曰、律家呵絡子曰、禪僧通肩、搭袈裟。此不如法也。〈通肩者、袈裟偏披左肩。然今通披左右肩。故云通肩〉。天台遵式曰、此掛絡不如法。須焚棄之。

④忠曰、昧者宇作掛羅。謂以羅謂紗造。又作掛落。謂掛而落胸前。皆杜説也。

⑤釋氏要覽［上ノ四十八丈］云、絡子、或呼掛子。蓋此先輩僧創之。後僧効之。又亡衣名見掛絡在身。故因之稱也。今南方禪僧、一切作務皆服。以相不如法。諸律無名。幾爲講流非之。予因讀根本百一羯磨第十卷云、五條有三品。上者竪三肘横五肘。下者減半。二内名中。又佛言、安陀會有二種。一者竪三肘横五肘。二者竪二肘横四肘。此謂守持衣。最後之量。限蓋三輪。〈上蓋臍下掩膝〉。因詳。頗是今絡子之量也。若作之。但五幅一長一短。或襵或貼。呼安陀會。即免謗。一切處著。合律。無過。實勝空身矣。〈今詳、律言肘。但用自肘。蓋度身而衣也。若用尺八之肘者。下文即無臂短不及之言也〉。

⑥祖庭事苑［八ノ十六丈］引之云、予毎觀此説益見法師之公議。而嗟乎叢林禪人凡所制作。未嘗取此爲則而又不更挂絡之名。復何意邪。世典尚云、必也正名。況釋氏乎。

加藤佳祐

【一三七八】掛子

①掛絡也。見掛絡處。

②傳燈録〔十一ノ廿一丈〕慧日大師章云、姓黄氏、生而有異。及長名文矩。謁萬歳塔譚空禪師。落髪。不披袈裟。不受具戒。唯以雜彩爲掛子。

③忠曰、慧日嗣長慶大安。唐乾寧中示滅。乾寧唐十九主、昭宗暦號。可知彼時。已有掛絡。

加藤佳祐

【一三七九】鉤紐

①忠曰、今時禪林、例代鉤以環。代紐以條。

②釋氏要覧〔上ノ四十六丈〕云。鉤紐。僧祇云紐緤。集要云、前面爲鉤背上名紐。先無此物。因佛制尼師壇。安左臂衣下。則肩上無鎮。衣不整齊。乞食時被風吹落。佛遂許安鉤紐。佛制一切金銀寶物。不得安鉤紐上。惟許牙骨香木之屬。

③四分律〔四十ノ十三丈〕云、舍利弗入白衣舍。患風吹割截衣墮肩。諸比丘白佛。佛言、聽角頭安鉤紐。

④毘奈耶雜事〔七ノ四丈〕云。佛在室羅伐城。時有苾芻、入城乞食。上衣墮落。置鉢于地。整理上衣。居士婆羅門。見已生嫌。佛言、爲護衣。應安●紐。於肩上安●。胸前綴紐。紐有三種。一如蔓荑子。二如葵子。三如棠梨子。應於縁後四指安●。應重作帖。以錐鑽穴。●出其内。繫作雙●。其紐可在胸前縁邊綴之。疊衣三襵。是安●紐處。〈音釋。蔓。伊盈切。荑於六切。蔓荑草名〉。

⑤舊説〔敕鈔十二ノ廿八条〕曰。觀唐王摩詰。畫僧形。其袈裟無條環。蓋唐時僧、猶不用條環。條者五代時、始有。環者宋朝始有。

加藤佳祐

【一三八〇】袈裟袋

①毘奈耶雜事〔十五ノ十三丈〕云、苾芻作三衣。在肩上。路行汗霑。佛言、應以袋盛。置肩而去。袋可長三肘。闊一肘半。其一肘半。中疊縫之。當中開口。安鉤紐。常用者。在上。非常用者在下。〈略鈔〉。

加藤佳祐

【一三八一】帽子

①敕修清規聖節云、欽遇聖節。粥罷上堂。〈乃至〉。佳持至法座前。行者攢近、知事後立。冬月則衆去帽問訊。

②四分律［四十ノ廿二丈］云。世尊、在舍衞國、爾時比丘、裹頭、至佛所白言、大德、此是頭陀端嚴法、願佛聽。佛言、比丘不得裹頭。是白衣法。若裹頭、如法治。時諸比丘、頭冷痛。白佛、佛言、聽以毳若結貝。作帽裹頭。

③西域亦脱帽爲禮。大比丘三千威儀［百廿一套十七丈］云、有五事。應相入室。一者當於外彈指。二者入當脱帽。三者當作禮。四者當正住人教坐。乃坐。五者不得妄持經入。［十九丈］又云、事師有五事。一者朝暮往問訊安否。二者往當著袈裟脱帽。三者。往至戸當三彈指。不得縱横入。四者當頭面著地作禮、前長跪、問消息。五者若師言、賢者某人來説。卿所作不如法。汝自知犯過不。設有、即當悔過言、某實愚癡。若無有、不得還語。〈云云〉。

④忠曰、著帽時、隨山有別。如南禪自十月五日著。相國、自九月晦日〈夢窓忌〉著。大德、有四重。前住自九月九日著。前堂自九月廿一日〈大燈宿忌〉著。後堂藏主、自十月朔日著。侍者自十月四日〈達磨宿忌〉著。妙心、前住自十月朔日著。前堂已下、自十月四日〈達磨宿忌〉著。［執弊ノ六丈ニ■■■］至大清僧、黄檗派下、常時著之、無復脱著之禮。大違清規、如清規、夏月不著帽。故無脱著禮。冬月著帽。有敬住持而脱去帽之禮矣。

⑤虎關濟北集［六ノ五丈］帽子頌云、六稜一貫一絲通。機事機心本不同。可惜眼中羅穀隔。又安頭上幾重重。

加藤佳祐

【一三八二】頭巾

①日本洞家帽子。名頭巾。其制異于濟家。〈如濟家行者所披者、忠謂、相傳。濟家六稜帽者、自夢窓國師始焉。然則夢窓已前、濟家帽、亦同今洞家帽而已〉。

②傳燈録［十七ノ廿二丈］疎山仁禪師章云、問如何是和尚家風。師日尺五頭巾。曰如何是尺五頭巾。師曰圓中取不得。

加藤佳祐

【一三八三】頭袖

①敕修清規［下一ノ四十四丈］、大坐參云、四鼓鳴、住持出。鐘鳴、首座出。以次頭首與大衆。暫從後門出、換衣換頭袖、抽解即歸守被位。

②禪苑清規［二ノ二丈］上堂云、大衆赴參、不得載帽子頭袖。〈住持人同〉。

③備用清規［一ノ二丈］聖節陞座云。行者列知事後。衆去頭袖問訊。

④忠曰、頭巾形。似衣袖。故言頭袖也。蓋即是帽子。故備用清規聖節頭袖。敕修清規作帽。或曰、與帽子別。故禪苑清規帽子頭袖並呼。餘謂、頭袖之目。本國一乎。

⑤徑山無準範禪師録［五ノ四十丈］、入内引對陞座云、唐代宗、嘗宣召本山國一祖師。每加禮敬。適遇天寒。代宗以銷金龍袖、覆其頂、後竟以龍袖、爲帽。至今祖師遺像、儼然猶存。

⑥西巖惠禪師録［偈頌一丈］國一見代宗來。起立。頌云。立在威儀外。全身在裹頭。重重賜龍袖。難掩面門羞。

⑦ 無門開禪師録頭袖頌云、四海英靈俱套下、銅頭鐵額總兜來。莫怪無門施毒手、揭翻腦蓋頂門開。

⑧ 教家有縹帽子。燕南紀談〔前上ノ廿四丈〕云、台家密家、有縹帽子。又名裹頭。宗鳳雜集云、隋煬帝請天台〈智顗〉大師、受菩薩戒。時祁寒。帝解御衣縹袖。令裹大師頭。又日本桓武帝請叡山傳教大師、受圓頓菩薩戒。帝準隋帝故事、賜縹帽。自此台家得其位者披之。未得位、則不得著之。

⑨ 忠曰、煬帝解衣袖、裹智者頭。中華記傳、未見所載。

加藤佳祐

【一三八四】禪巾

①忠曰、亦是頭巾、畫維摩所被者。

②大休念禪師録〔六ノ偈下八丈〕送禪巾越後守殿、仍擧文殊問疾話。偈云、頭載禪巾居丈室、當機一默坐千差。文殊擧衆同聲讃。天女空中雨寶花。

瀧瀬尚純

【一三八五】菩薩巾

①忠曰、菩薩巾、俗謂觀音帽子。

②法苑珠林〔百ノ十七丈〕云、慧振法師、於寺後山上、起頭陀屋二間。恆有善神衞護。乃至中大同元年二月五日、攝山神現形。著菩薩巾、披袈裟。形貌極端正。

瀧瀬尚純

【一三八六】偏衫

①忠曰、合祇支覆肩二物、名偏衫。資持記作褊衫。説文褊衣小也。

②釋氏要覽〔上ノ四十七丈〕〔敕修下一廿八丈〕云、偏衫、古僧、依律制、只有僧祇支。此名覆膊。亦名掩腋衣。此長覆左膊、及掩右掖、蓋襯三衣。故即天竺之儀也。竺道祖魏録云、魏宮人、見僧祖一肘、不以爲善。乃作偏祖。縫於僧祇支上、相從、因名偏衫。〈今開脊接領者、蓋遺魏制也。〉

③ 忠曰、偏祖、疑字訛。當作偏袖。

④六物圖〔■■生四ノ廿三丈〕云、此方往古竝服祇支。至後魏時、始加右袖。兩邊縫合、謂之偏衫。截領開裾、猶存本相。故知偏衫左肩、即本祇支。右邊即覆肩也。

⑤贊寧僧史略〔上ノ十五丈〕云、後魏宮人、見僧自恣、偏祖右肩、乃一施肩衣。號曰偏衫。全其兩扇衿袖。失祇支之體、自魏始也。

⑥ 忠曰、諸文説偏扇、有繆戾。惑人者、餘試論辨如下文。

⑦西域記〔二ノ五丈〕云、沙門法服、唯有三衣、及僧却崎、泥縛些桑箇反那。三衣裁製、部執不同。或緣有寬狹。或葉有小大。僧却崎、唐言掩腋。舊曰僧祇支訛也。覆左肩、掩兩腋。左開右合。長裁過腰。泥縛些那、唐言裙腋。舊曰涅槃僧訛也。既無帶襻。其將服也。集衣爲襵、束

帶以條。襵則諸部各異。色乃黄赤不同。〈忠曰、法苑珠林法服篇、出五部服色。襵、正字通、俗饗字、饗普玩切。音盼。衣饗衣下系也。〉

⑧唐義淨南海寄歸傳［二ノ十二丈］云、其僧脚崎衣。即是覆膊。更加一肘始合本儀。其披著法應出右肩。交搭左膊。房中恆著。唯此與裙。出外禮尊。任加餘服。又［十五丈］云。准檢梵本。無覆肩衣名。即是僧脚崎衣。此乃祇支之本號。即不道裙。多是傳譯參差。

⑨資持記［金本下一之一ノ卅丈］云、僧祇支、經音義［章応ノ十七ノ十八丈］翻爲掩腋衣。謂覆左腋、著帶繫右腋下。長七二、廣四尺五。次加覆肩。〈忠曰、覆右肩也。次文謂、褊衫右邊、即是覆肩、是。〉又云、但世人、不識褊衫即是祇支覆肩二物。故復於其上、重更覆耳。當知褊衫右邊、即是覆肩。但順此方、縫合兩袖。截領開裙。猶存本相。

⑩道宣律師章服儀［廿五丈］云、大聖本制三衣。西方但有此衣、餘無別服。故文云、但三衣也。後有覆肩、袴支之服。相亦叟方。故僧祇云長四肘、廣二肘、是也。元制所興、本唯尼衆。今僧服著、僣通下位。而袴支上狹下廣、壞絶淳源。元照應法記［卅四丈］云、覆肩、覆右膊也。袴支梵語、上有僧字。正［西域二ノ五丈右］云僧却跨、此飜掩腋衣。掩左腋、以襯袈裟。祇律約量、可驗叟方。元下示本制、尼弱故須。僧非所用。阿難美貌、女見心迷。故獨開耳。住法圖贊云、今僧服者、濫矣。即今褊袖、左是袴支、右是覆肩。二衣綴合、非本制耳。而下、別點袴支、相本叟方。而世謂是上狹下廣。故壞淳源也。然律云、得上狹下廣、聽作袴支。謂裁作耳。

⑪忠曰、元照在資持應法中、辨祇支覆肩、如此詳悉矣。或曰、元照云僧祇支覆左腋、著帶繫右腋下、以襯袈裟。語路未明。若言覆左腋、又繫右腋、則衣總不在左右肩上。豈得襯袈裟耶。故疑謂、左腋之腋字、恐膊字乎。膊音博、肩膊。〈篇海。〉乃是僧祇支覆左膊、著帶繫右腋下、則方得襯袈裟耳。余曰、不然。祇支覆左肩、則左腋亦隱。亦應言覆左腋也。非衣不在左肩之上也。祇支梵言、翻云掩腋。故元照言覆左腋、而解掩腋之義也。又按、西域記僧却崎、覆左肩、掩兩腋、左第右合。〈止此。〉其制可知、先覆左肩、出右肩、而繞掩右腋。著之、則自左腋亦掩。其開處。在左也。

⑫忠又曰、要覽云祇支覆左膊、掩右腋、足以大顯襯袈裟之義。或疑資持應法左腋、爲左膊者、蓋自此來矣。但要覽以覆膊、爲僧祇支飜名者訛矣。西域記及應法師音義僧祇支、唯翻掩腋衣。事鈔［下一之二ノ十一丈］從相、翻上狹下廣衣耳。六物圖［纂注四ノ廿二丈］云、覆肩華語未詳梵言。〈止此。〉夫覆膊肩也、而覆肩是別物、非掩腋衣矣。

⑬忠又按、古有謬爲僧祇支名覆膊、而搭右肩、覆右臂之説者。要覽不正此濫名。却隨同於其訛謬矣。根本百一羯磨［十ノ六丈］唐義淨三藏注云、僧脚欹迦、即是掩腋衣也。古名覆膊、長蓋右臂、定匪眞儀。向使掩右腋、而交搭左臂、即是全同佛制。

⑭虎關和尚直裰辨［済北九ノ十丈］云、律者來謁曰、禪拒律、律拒禪、如枘鑿之不相入。是大患也。予曰、相拒者、庸流也。眞僧不爾。曰、律家屡言形服。曰、形服何異之有。夫三衣者、兩家皆同。直裰偏衫、雖似異、亦一物耳。曰、忌其連綴而不合梵裁。曰子惑也。今之偏衫不必梵製矣。我今詳説所由。梵語僧祇支、此云覆腋衣。用覆右肩、右開左合。〈忠曰、西域記云、僧却崎、左開右合。與此反。〉是梵製也。然魏時、請梵僧、自恣於宮内。宮人、見僧偏袒體露、不以爲善、遂作此衣、〈忠曰、宮人所作、覆肩衣。非僧祇支。〉施僧。覆肩通著兩袖、是偏衫之起也。梵語涅槃僧、此云裙。衫裙亦二物也。連綴而稱直裰焉。變製相同、何贊彼毀此。

⑮忠曰、濟北祇支之翻、云覆腋衣。覆亦掩也。同西域記資持應法翻掩腋衣。但其云用覆

右肩者、謬矣。覆右肩者、覆肩衣也。非僧祇支。僧祇支、實覆左肩耳。辨寄歸傳如下。蓋濟北卒見資持應法等、祇支覆左腋之文、以爲衣覆左腋、則其掩肩之宜右也。終曰用覆右肩、不知陷以祇支覆肩、混爲一物之謬矣。又或見要覽以覆膊掩腋同爲祇支翻名、遂從其錯歟。又按、濟北語、自矛盾。夫梵僧偏袒者、左肩有袈裟、而偏露右肩耳。若祇支素覆右肩、則兩肩皆掩。宮人見何體露、而醜焉。故濟北語、自不成義。或曰、覆肩衣、若已在竺制、則魏宮梵僧、何不著之、而招露裸之惡耶。答、覆肩雖已在梵制、本是爲尼衆制。是故梵來比丘。不服也已。

⑯ 或救要覽云、僧祇支、此名覆膊衣者、依寄歸傳。傳〔二ノ十七丈〕云、其僧脚崎衣、即是覆膊。更加一肘、始合本儀。其披著法、應出右肩、交搭左膊。〈止此。〉所謂覆膊、即覆肩也。何謬之有。忠曰、寄歸云僧脚崎衣、即是覆膊者、謂覆左肩而已。故寄歸次文云、披著法、應出右肩、交搭左膊。又寄歸云即是覆膊者、非以覆膊、爲僧脚崎翻語。故寄歸傳〔二ノ十三丈〕言、準檢梵本、無覆肩衣名。〈止此。〉言未見有覆肩衣之梵語、如僧祇支泥洹僧等、定稱呼也。非謂未翻梵本中、不言覆肩衣事也。今已翻諸律中、皆有覆肩衣事。豈謂諸律中、無覆肩有衣事耶。僧脚崎、已翻掩腋衣、非翻覆肩矣。元照六物圖〔纂注四ノ廿二丈〕亦云、覆肩華語、未詳梵言。〈止此。〉若復覆膊。是僧脚崎翻名、則是爲覆肩衣有梵語也。義淨元照、豈浪言妄説哉。故要覽僧祇支、此名覆膊之■。不可救焉。直裰辨、祇支覆右肩之謬、不費彈斥而自破。

⑰ 昔教者難虎關曰、律談五衣、祇支・覆肩・五條・七條・九條也。然師直裰辨云、梵語僧祇支、此云覆腋衣。蓋祇支、覆腋二也。而今合爲一、如何。忠曰、當時早有疑僧祇支、覆右肩者。但難問、誤以覆腋、爲覆肩、而詰其翻物爲一。蓋僧祇支、翻掩腋衣、掩亦覆也。故此翻語、未必訛。祇支覆腋、名分梵漢、元是一物。是故教家、唯可唯他言僧祇支、覆右肩耳。關答曰、凡四分五分十誦摩訶僧祇諸律、其説非一途。或以祇支覆腋爲一。或以爲二。吾辨、只取大意、爲一物。〈忠曰、答話迂濶、欠分曉。祇支覆腋是一物。何律以爲二耶。蓋問者答者、皆以覆腋衣、謬爲覆肩衣、而交輥相難酬。若其覆肩衣、則何律以祇支覆肩、爲一物耶。正須明文引證、以斥他疑難焉。然但言諸律異説、吾取大意爲一。豈莫不飾過遁辭耶。四分律僧祇律等、皆僧祇支覆肩衣爲二物。如餘所引證。〉

⑱ 四分律〔廿七〕比丘尼戒中云、彼人當受戒人所語言、妹此是安陀會、此是欝多羅僧、此是僧伽梨、此是僧祇支、此是覆肩衣。

⑲ 忠嘗訪宗覺律師於久修園、質僧祇支。覺曰、僧祇支、三衣之襯也。先著之左肩、如著袈裟法。次加覆肩衣於右肩、爲左腋有僧祇支。不可遶著、故祇支左腋處、穿穴、而覆肩衣施紐、貫其穴、而結定、次著袈裟焉。覺又曰、有左衽右衽異義。先著僧祇支、後著訣肩、則爲左衽。左衽天竺儀相也。其右衽師、先著覆肩、後披僧祇支。右衽義、不過言順中華風俗耳矣。

⑳ 六物圖〔注四ノ廿二丈〕云、尼女報弱。故制祇支、披於左肩、以襯袈裟。又制覆肩、掩於右膊、用遮形醜。是故尼衆必持五衣。〈忠、前後引四分僧祇。皆明五衣。〉

㉑ 南海寄歸傳〔二ノ十四丈〕云、東夏諸尼、衣皆涉俗。所有著用。多竝乖儀。乃至。南海諸國尼衆、別著一衣。雖復制匪西方、共名僧脚崎服。長二肘、寬二肘、兩頭縫合、留一尺許。角頭刺著一寸、擧上穿膊貫頭、拔右肩、更無腰帶。掩腋蓋乳。下齋過膝、若欲此服、著亦無傷。線則唯費兩條。彌堪掩障形醜。若不樂者、即可。還須同大苾芻、著僧脚崎服。其寺内房中、俱蘇洛迦。及僧脚崎、兩事便足。〈准檢梵本、無覆肩衣名。即是僧脚崎衣、此乃祇支之本號。既不道裙、多是傳譯參差。〉應捨違法之服、著順教之衣。僧脚崎、取一幅

半、或絹或布、可長四肘五肘。如披五條、反搭肩上、即其儀也。尼衆露醜、佛製僧祇支・覆肩衣、緣。僧祇律〔三十八ノ二丈〕云、佛住舍衞城。比丘尼、年少端正、著衣道行、時兩乳現出。男子笑之。佛言、從今已後、比丘尼、應作僧祇支。乃至。長四修伽陀磔手、廣兩磔手。又〔四十ノ〕云、佛住舍衞城。爾時倫蘭難陀比丘尼、大乳、著一僧祇支、於閣上經行。俗人遥見言、是似如水上浮瓠。佛言、從今日後、當作覆肩衣。覆肩衣者、襞疊他、覆肩上。若不作不著、越毘尼罪。

㉒ 五分律〔廿九ノ九丈〕云、有諸貴姓女、出家。不著覆肩衣、諸白衣、見其肩臂、共調弄之。皆懷慚恥。諸比丘尼、以是白佛。佛言、聽著覆肩衣。

㉓ 忠曰、章服儀所謂、元制所興。本唯尼衆、〈前引。〉者是也。

㉔ 十誦律〔四十八ノ三丈〕比丘尼壇文、受持三衣、次云、覆肩衣、長四肘、廣二肘半、是覆肩衣、持。又〔四十九ノ一丈〕云、僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會、覆右肩衣、俱修羅。此文加右字。

㉕ 智度論〔三ノ三十一丈〕云、阿難端正清淨、如好明鏡。老少好醜、容貌顔狀、皆於身中現。其身明淨。女人見之、欲心即動。是故佛聽阿難。著覆肩衣。

㉖ 趙州諗禪師録〔古宿十四ノ二十六丈〕十二時歌云、鷄鳴丑、愁見起來還漏逗、裙子褊衫箇也無。袈裟形相些些有。裩無腰袴無口、頭上青灰三五斗。比望修行利濟人、誰知變作不卿溜。

瀧瀨尚純

【一三八七】裙子

① 釋氏要覽〔上ノ四十七丈。敕修下一ノ廿九丈引用〕云、裙此方之名、周文王制也。西域記云、泥縛些那、唐言裙。〈些字桑箇切〉根本百一羯磨云、梵語泥伐散那、唐言裙。諸律舊譯、或云涅槃僧、或云泥洹僧。或譯爲内衣、或云圖衣。〈圖音船、即貯米圓器似圖而無蓋、蓋知圓義。〉

② 西域記説、詳偏衫處。

③ 行事鈔〔下一ノ二ノ十二丈〕二衣總別篇云、十誦、作時、著小泥洹僧。三千云、泥洹著法一不持下著上。二使四邊等。三襞頭近左面。四結帶於右面。五當二繞不垂兩頭。

④ 南海寄歸傳〔二ノ十四丈〕云、準如律説、尼有五衣。一僧伽知、二●●羅僧伽、三安●婆娑、四僧脚崎、五裙。四衣儀軌。與大僧不殊、唯裙。片有別處。梵云俱蘇洛迦、譯爲箒衣。以其兩頭縫合、形如小箒也。長四肘、寬二肘、上可蓋臍、下至踝上四指。著時入内、擡使過臍。各蹙兩邊、雙排摩脊。繫條之法、量與僧同。胸腋之間、迴無擊抹。

⑤ 行事鈔〔十一ノ二ノ十三丈〕云、十誦云、泥洹僧破、應權作俱修羅。若軟體比丘、揩●、破下開五寸許、應受之。〈此似裙周縫合〉五分有著俱修羅衣者。俗人訶言、何異我等著貫頭衣。便不許著之。資持記云、俱修羅、經音義云、此翻爲圖。像其衣形、而立名也。〈謂如圖鄣〉若準註文、即周圓縫合、而無兩頭、名俱修羅耳。五分俗呵。則知俱修、本同俗服。故並權開。貫頭衣、古云、南海人、開衫竇著之。穿頭先出、次出兩袖、謂之貫頭。

蘆田太玄

【一三八八】直裰

① 忠曰、以偏衫與裙子、直綴合。故曰直裰。

敕修清規〔下二ノ廿九丈〕云、直裰、相傳前輩、見僧有偏衫、而無裙、有裙而無偏衫、遂

合二衣、爲直裰。然普化索本直裰、大陽傳革履布裰。古亦有矣。

② 虎關和尚直裰辨、見偏衫處。

③ 忠曰、敕修清規［上二ノ廿八丈］尊宿遷化孝服云、方丈行者、麻布巾裰。〈止此〉巾裰二物、頭巾直裰也。余謂、行者雖亦著直裰、其相須與僧直裰有異焉。何以知之。沙彌得度章［下一ノ廿一丈］云、聖僧案前、置袈裟直裰度牒於上。又云、拜父母、即更僧衣。〈止此〉此時未及披袈裟、故知僧衣、僧之直裰、而初置案上著。今脱行者裰、而更僧裰也。故余謂、行者裰相、須異僧裰焉。

④ 臨濟玄禅師録云、普化一日、於街市中、就人乞直裰。人皆與之。普化俱不要。師令院主、買棺一具。普化歸來。師云、我與汝做得箇直裰了也。普化便自憺去、繞街市叫云、臨濟與我、做直裰了也。我往東門遷化去。〈云云〉

⑤ 僧寶傳［十七四冊十三丈］浮山遠禪師傳云、至大陽機語。與明安延公相契。延嘆曰、吾老矣。洞上一宗、遂竟無人耶。以平生所著直裰皮履、示之。遠曰、當爲持此衣履、求人付之、如何。延許之曰、他日果得人、出吾偈爲證。偈曰、楊廣山前草、憑君待價焞。異苗翻茂處、深密固靈根。其尾云、得法者、潛衆十年、方可闡揚。遠拜受辭去。

⑥ 在家有著直裰者。談寶云、富鄭公致政、歸西都。嘗著布直裰、跨驢出郊。

⑦ 瑯邪代醉編［三十一ノ二十四丈］云、至如上衣下衣、各爲長短之制。衣纔至膝、裳乃裙也。今之祭服是也。後魏胡服、便於鞍馬。遂施裙於衣、爲横幅、而綴於下。謂之 欄、今之公裳、是也。則戎狄之服也。

⑧ 忠曰、今時明僧裙下、横綴一幅、左右作斜褶。此所謂、欄乎。

蘆田太玄

【一三八九】汗衫

① 日用軌範［敕下一ノ五十一丈］開浴云、取出浴具、放一邊、解上衣。

② 忠曰、中華人、上下二衣。上衣如此方羽蔽。爲汗衫。又名中單。下衣如此方前垂。是名裙也。

③ 慈受深禪師慧林録［廿六丈］壽春府檀越、就天清寺、散千僧汗衫陞座云、孃生袴子、脱體皆空、逍州布衫、更無樣度。袖頭打領、腋下剜襟。自然縫罅難尋、直是針鋒不露。然雖如是、説食終不飽、著衣方免寒。爭似者箇衫子。是檀越段時升、向清淨心中、流出布施、諸人正當恁麼時、一句作麼生道。良久云、一片信心清似水、滿天和氣暖如春。

④ 廣燈録［廿五ノ十五丈］林谿徹禪師章云、問、如何是祖師西來意。師云、著體汗衫。

⑤ 事文類聚［續ノ十九ノ二丈］引炙轂子云、燕朝、竟冕有白紗、中單有明衣、皆汗衫之象。以行祭接神。至漢與項羽交戰、汗透中單。改名汗衫、貴賤通服。

蘆田太玄

【一三九〇】衲衣

① 忠曰、文字雖出經論、禪僧常著之。故稱有衲僧。問有衲衣下事。

② 類書纂要［六］云、衲補縫也。

③ 衲、本作納。佛祖統記［六ノ十丈］慧思尊者傳云、平昔禦寒、唯一艾納。註、法華經、納衣在空間。律文、謂之五納衣。謂納受五種舊弊、以爲衣也。俗作衲字、失義。

④ 五納衣者、釋氏要覽［上ノ四十四丈］云、糞掃衣有五種。一道路弃衣、〈脱厄衣也〉二糞掃處衣、三河邊弃衣、四蟻穿破衣、五破碎衣。又有五種。一火燒衣、二水漬衣、三鼠咬衣、四牛嚼衣、五妳母弃衣。已上衣、天竺人、諱忌故、弃之、以不任用。義同糞掃、

故共納成衣、
名糞掃衣也。
⑤　又應法記云、五納、謂五色鬪成也、〈止此〉此亦一解異要覽。
⑥智度論［六十八ノ廿三丈。要覧上四十四丈■］云。佛意、欲令弟子隨道行、捨世樂故、讚十二頭陀。如轉法輪時、五比丘、初得道、白佛言、我等著何等衣。佛言、應著納衣。
⑦釋氏要覧［上ノ四十四丈］云、十誦云、若納衣、不貼田相、不許披入聚落。此衣有十利、一在鹿衣敷、二少所求索、三隨意可坐、四隨意可臥、五浣濯易、六少蟲壞、七染易、八難壞、九更不餘衣、十不失求道。又云。體是賤物、離自貪故、不爲盗所貪、常得資身故、少欲者、須濟形苦、故上士著之。
⑧諸善根經［第一。尊手ノ■名。■忘九ノ十五丈■。］云、世尊、告諸比丘、大迦葉、常修阿蘭若、行乞食、衲衣鹿弊三衣、邊外遠住。少欲知足、樂遠離行、於一切法、心不與合。聲聞功德、皆悉具足。
⑨傳燈録［十一ノ廿四丈］多福和尚章云、問如何是衲衣下事。師曰、大有人疑在。曰、爲什麼如此。師曰、月裡藏頭。

蘆田太玄

【一三九一】糞掃衣

①即衲衣也。〈又見衲衣處〉
行事鈔［下三ノ一ノ七丈］云、納衣者、四分云、捨檀越施衣、著糞掃衣、十住婆沙云、以有十利故、一慙愧、二障寒熱毒蟲、三表示沙門儀法、四一切天人、見法衣、尊敬如塔、五厭離心、著染衣非貪好、六隨順寂滅、非爲熾然煩惱、七由著法衣、有惡易見、　八更不須餘物莊嚴故、九隨八聖道故、十我當精進行道不以染汗心、於須臾間。
②四分律［三十九ノ十五丈］云、世尊在波羅奈國鹿苑中、時五比丘白佛、我等當持何等衣。佛言、聽持糞掃衣、及十種衣。拘舍衣、劫貝衣、欽跋羅衣、芻摩衣、又摩衣、舍■衣、麻衣、翅夷羅衣、拘攝羅衣、嚫羅鉢尼衣。如是十種衣、應染作袈裟色持。
③又云［三十九ノ十八丈］、糞掃衣、有十種、牛嚼衣、鼠嚙衣、火燒衣、月水衣、産婦衣、神廟中衣、若鳥銜風吹雜處者得取、家間衣、求願衣、受王職衣、往還衣、是謂十種糞掃衣。

蘆田太玄

【一三九二】磨衲

①六祖法寶壇經云、神龍元年、九月三日、有詔曰、朕積善餘慶、宿種善根、値師出世、頓悟上乘、感荷師恩、頂戴無已、并奉衲袈裟、及水晶鉢。
②東坡全集［廿二ノ十一丈］磨衲贊并序云、長老佛印大師了元、遊京師、天子聞其名、以高麗所貢磨衲、賜之。客有見、而歎曰、嗚呼善哉、未會有也。嘗試與子、攝其齋衽、循其鈎絡、擧而振之。則東盡嶋夷、西及昧谷、南被交趾、北屬幽都。紛然在吾箴孔綫蹊之中矣。佛印听然而笑曰、甚矣、子言之陋也。吾以法眼視之、一一箴孔、有無量世界、一一世界、滿中衆生、所有毛竅、所衣之衣。箴孔綫蹊、悉爲世界、如是展轉、經八十反、吾佛光明之所照、與吾君聖德之所被。如以大海注一毛竅、如以大地、塞一箴孔。會何嶋夷昧谷交趾幽都之足云乎。當知此衲、非大非小、非短非長、非重非輕、非薄非厚、非色非空。一切世間、折膠墮指、此衲不寒。爍石流金、此衲不熱、五濁流浪、此衲不垢。劫火洞然、此衲不壞。云何以有思惟心、生下劣想。於是蜀人蘇軾、聞而贊之曰、匣而藏之、見衲而不見師、衣而不匣、見師而不見衲。惟師與衲、非一非兩、眇而視之。■■龍

象。〈別本齋作被齋作放〉

③雞林志［■六十］云、高麗僧衣磨衲者、爲禪法師、衲甚精好。

【一三九三】紫衣

①忠曰、僧賜紫服。中華以唐法朗等爲始。日本以建仁寺榮西。永平寺道元。爲始。

②僧史略［下ノ五十六丈］云、古之所貴。名與器焉。賜人服章。極則朱紫緣●黄綬、乃爲降次。故曰、加紫綬必得金章。

③今僧但受其紫。而不金也。〈方袍非綬。〉尋諸史、僧赤黄黑青等色。不聞朱紫。

④案唐書、則天朝、有僧法朗等。重譯大雲經陳符命言、則天是彌勒下生、爲閻浮提主、唐氏合微。故由之。革命稱周、〈新大雲經曰終後生彌勒宮不言則天是彌勒〉法朗薛懷義九人、竝封縣公、賜物有差。皆賜紫袈裟、銀龜袋。其大雲經、頒於天下寺、各藏一本。令高座講説、賜紫自此始也。

⑤延寶傳燈録［一ノ十丈］建仁寺明菴榮西禪師章曰、建仁二年、金吾大將軍賴家源公、施地洛東、營大禪刹。先是平侍郎、奏賜紫衣。

⑥永平道元和尚行狀云、後嵯峨帝、聽師道譽、賜紫方袍號佛法上人禪師、師力辭不許。作偈奉謝曰、永平雖山淺敕命重重重、却被猿鶴笑。紫衣一老翁。

⑦僧史略［下五十八丈］云、東觀奏記曰、大中中、大安國寺。釋修會能詩。嘗應制、才思清拔。

⑧一日聞帝、乞紫衣、帝曰不。於汝吝耶、觀若相有缺然、故未賜也。及賜歸寺、暴疾而卒。

⑨資持記［●本下一之一ノ十二丈］云、今時沙門、多尚紫服。按唐紀、則天朝、薛懷義亂於宮庭。則天寵用。令參朝議、以僧衣色異。因令服紫袈裟、帶金龜袋、後僞撰大雲經。結十僧、作疏進上。復賜十僧紫衣龜袋。由此弊源一洩、于今不返、無知俗子。濫跡釋門、不務内修。唯誇外飾。矧乃輒預耆年之上、僭稱大聖之名。國家之所未詳、僧門之所不舉。致使貪婪禾薔●之輩、各逞奢華。少欲清淨之風、於茲墜滅。且儒宗人倫之教、則五正爲衣。釋門出世之儀、則正間俱離。故論語云、紅紫不以爲褻服。文中子云、君子非黄白不衣、尚非俗禮所許。豈是出世正儀。況律論明文。判爲非法。苟不信受、安則爲之。

⑩六物圖云、輕紗紫染、體色俱非。佛判俗服全乖道相何善之有。或云分宗途者。佛教但以三學分宗、而謂形服異者、未之聞矣。

⑪忠曰、則天何因以紫服爲貴、而賜法朗耶。杜預註在傳曰、紫衣君服、止此。即以君服色。寵之也。杜預註。見［杜注三十ノ十九丈］哀公十七年。

⑫而僧賜紫以此發揮者少。又僧殊意癡撰白河燕談［一ノ九丈］云、日本玄●道鏡、淨家然阿。賜紫始也。〈蓋言教宗賜紫耳〉

蘆田太玄

【一三九四】黄衣

①僧史略［上ノ十五丈］云、後周忌聞黑衣之■。悉屏黑色。著黄色衣。起於周也。

②山堂肆考［徴ノ三ノ十七丈］云、僧舊著黒衣。元文宗。寵愛僧欣笑隱。賜以黄衣。其徒。後皆衣黄。故歐陽原元。題僧墨菊詩。苾芻元是黒衣郎。當代深仁始賜黄。今日黄花翻溌墨。本來面目見馨香。按今制。禪僧衣褐。講僧衣紅。瑜伽僧衣葱白。瑜伽。今應赴僧也。

③忠曰、羣談採餘［二巻衣服ノ九丈］、堯山堂外紀亦載此事。然予按龍源清禪師録。有謝杭州賜黄衣師號上堂。源則元成宗〈第六主〉大徳年中人。此時已有賜黄衣。非始於文宗〈第十二主也〉。又天隱筠溪牧潛集［天隱文集一ノ十一丈。大心ノ該■■範引用］。初改黄衣詩云、宣詔亭前受牒還、御黄新賜滿城看。臣僧記得沙彌日、齋著青衣上戒壇。〈止此〉。至公［見三体詩序注］亦元世祖〈第五主〉成宗間人也。又按僧史略［前引］云、尋諸史。僧衣赤黄黒青等色。〈止此〉可知黄衣。非始於元朝。但元朝盛賜之耳。

④續文獻通考［百廿六世九丈］云、洪武十四年令。凡僧道服色禪僧。茶褐常服。青條。玉色袈裟。講僧。玉色常服。緣條。淺紅袈裟。教僧。皂常服。黒條。淺紅袈裟。僧官皆如之。道士常服青。法服朝服。皆用赤色。道官亦如之。惟僧録司録官袈裟。道録司官法服朝服。皆緣紋。飾以金。〈忠曰、教僧恐當作律僧〉。

⑤雲棲竹窓二筆［廿九丈］云、如吾郡則淨慈虎跑鐵佛等禪寺也。三天竺靈隱普福等講寺也。昭慶靈芝菩提六通等律寺也。衣則禪者褐色講者藍色。律者黒色。〈字彙褐黄黒色今修俗謂之茶褐色〉。

加藤佳祐

【一三九五】禪帶

①忠曰、修禪定時。以帶繞束腰。便於澄慮矣。

②五分律［二十ノ十八丈高麗蔵］云、諸比丘。廣作禪帶。以是白佛。佛言。不應過人八指。諸比丘。復狹作禪帶。以是白佛。佛言。不應減五指。諸比丘。復作雜色禪帶。以是白佛。佛言。應一種色作。若雜種色。應浣壞色。然後聽畜。

加藤佳祐

【一三九六】平江條

①日用軌範［勅修下一ノ四十九丈］抽脱法云、解條。繫笊竿上。

②解者［勅鈔十二ノ世九丈。碧古鈔九ノ十七丈］曰、條者。平江條也。

③篇海類編［十七ノ廿六丈］云、條他刀切。香滔。纓飾編絲繩。亦作縚絛。

④忠曰、條兩頭有総。繞條束腰。而總下垂右左腋下。名平江條。然支那書。未見平江條名。方輿勝覽［六十二巻］潼川府有平江縣。［廿九巻］湖北岳州有平江。大明一統志［八巻二丈］南京蘇州平江。［六十二巻世一丈］岳州平江縣。並無出條之説。

⑤忠按、臨安。亦平江。見湖海新聞［後八ノ七丈］余謂、禪林平江條。恐出於此。且何以言之。彼土五山。多在臨安府。府中平江。出此條。而日本渡唐禪人。取其樣式。而傳於斯乎。

⑥臥雲日件録［上ノ四十八丈］云、永安和尚。住相國寺時。勝定相公。賜金襴袈裟。平江條。

錢貳百貫。以助開堂之儀也。

⑦徹書記紀談［下ノ十八丈］云、前探題了俊。歳八十餘。嘗著墨色無裳衣。以平江帶總長者。束腰矣。

⑧有縣平江帶。以裝賓席者。太平記［卅九ノ十四丈］云、佐佐木道譽。拉衆客。遊大原野。賞花。掛平江帶於紫藤枝。炷雞舌香於螭頭爐。

⑨　忠曰、曾觀相國寺。修夢窓國師三百五十年忌。方丈室中。北壁。左右柱上。懸同心結兩條矣。

③毘奈耶雜事［七ノ五丈］云、佛在室羅伐城。苾芻乞食之時。下衣墮地。置鉢于地。整理下裙。〈乃至〉佛言。應用腰條。條有三種。一匾。二方。三圓。

【一三九七】坐具

加藤佳祐

①釋氏要覽［上ノ四十七丈。勅修下一ノ二十八丈引］云、梵云尼師壇。此云隨坐衣。根本毘奈耶云。尼師但那。唐言坐具。淨法師註云、文言坐具。此乃敷具。坐臥皆得。佛制者。本爲槻。替臥具。恐有所損。不擬餘用也。五分律［十ノ六丈右］云、爲護身護衣。護僧床褥。故蓄坐具。僧祇［二十下十三丈］云、若在道行。得長疊中疊。安衣囊中。至本處。當敷而坐。律應量作。長佛二搽手。廣一搽手半。〈佛一手長。二尺四寸。此合長四尺八寸。廣三尺六寸〉。律云、更增者。即向四邊各益。如今坐具。四緣有貼。即象也。不許單作。若新物作。當用故物貼中。蓋壞其好也。若自無故物。又無求處。不貼無過。記云、佛先許安左肩上鎮衣。因有外道。問一比丘曰。汝肩上片布。何名。何用。比丘。答云、名尼師壇。是坐具。又問、汝所披衣何名。有何功德。答忍辱衣。三宝之相。上制天魔。下降外道。又問、此衣。即有是功德可貴。豈得以所坐之布。居其上。若汝自爲。師何不教。若師教者。此法不足可尊。比丘白佛。佛因制。移安左臂衣下。〈衣即三衣也。以此證是觸不得淨用〉。

②慧琳一切經音義云、尼師壇。梵語略也。正梵音具足。應云、■史娜曩。唐譯爲敷具。今之坐具也。■音寧頂反。

③四分律［八ノ四丈］云、世尊。聽諸比丘。作新坐具。取故者。縱廣一磔手。貼新者上。以壞色故。又云、若故坐具未壞。未有穿穴。當取浣染治。牽挽令舒。裁割取縱廣一磔手。貼新者上。若貼邊若中央。壞色故。

④　忠曰、今於坐具四邊。別貼布或絹紗者。所謂貼邊之象乎。

⑤南山感通傳云、天承黄瓊云、元佛初度五人。及迦葉兄弟。並制袈裟左臂。坐具在袈裟下。後度諸衆。徒侶漸多。年少比丘。儀容端美。入城乞食。多爲女愛。由是製衣角。在左肩。後爲風飄。聽以尼師壇鎮上。後外道達摩多。問比丘。肩上片布。持将何用。答曰、擬將坐之。達摩多云、此衣既爲可貴。有大威霊豈得以所坐之布。而居其上。比丘白佛。由此佛製。還以衣角。居于左臂。坐具還在衣下。但不得垂尖角。如象鼻羊耳等相。

⑥南海寄歸傳［三ノ九丈］云、禮拜敷其坐具。五天所不見行。致敬起爲三禮。四部罔窺其事。凡爲禮者。拜數法式。如別章所陳。其坐具法。割截爲之。必須複作。制令安葉。度量不暇詳悉。其所須者。但擬眠臥之時。護他氈席。若用他物。新故並須安替。如其己物。故則不須。勿令汚染。虧損信施。非爲禮拜。南海諸僧人。持一布巾。長三五尺。疊若食巾。

禮拜用替膝頭。行時搭在肩上。西國苾蒭。來見。咸皆莞爾而笑也。

⑦湛堂律師。六物圖〔四ノ九丈〕依釋坐具下云、問、今每作禮。必敷者何。答壇經〔戒■ノ五丈〕明。阿難結集時。迦葉敷尼師壇。禮阿難等。則知。爲法中定式耳。

⑧關中創立戒壇圖經〔五丈〕〈南山道宣撰〉云、案別傳云、迦葉結集。來戒壇上。使小目連鳴鐘。召百億四天下。凡聖衆。〈乃至〉大迦葉從座而起。披麤布僧伽梨。捉尼師壇。至阿難前。敷尼師壇禮阿難已。右遶三帀。大梵天王。執大寶蓋。覆阿難上。忉利天主。進七寶案。置阿難前。〈乃至〉迦葉禮拜已至阿難前。問武起居。如世尊在時不異。〈廣說如彼〉。

⑨忠曰、祇園圖經〈亦是南山感靈出〉之說。大同此。法苑珠林〔二十ノ二丈〕七百結集部。所說亦同。

⑩忠又按、僧史略〔上ノ十八丈〕云。昔梵僧到此。皆展舒尼師壇。就上作禮。〈禮拜部兩展三禮處詳引〉乃合大迦葉禮阿難舊軌。然南海寄歸傳〔三ノ九丈〕云。禮拜敷其坐具。五天所不見行。〈止此〉。大不與上所援數說同。恐義淨疎漏耳。

⑪已下。錄坐具搭臂。及展開法。

⑫大鑑小清規云、坐具搭手。須在袈裟之下。坐具開展處。向外搭之。多見。誤以坐具背向外。又妄言。前輩一大尊宿。以坐具背向外。堅執此說。殊不知。初與客人相見時。便相背也。又展時。亦顛倒反逆。大非禮法。前輩。豈不知禮法如此。乃知作此說者。齊東之人也。坐具展時。須從衣袖內邊。拈起坐具角。展開。此爲順也。今時多從衣袖外邊。倒拈坐具。展開。此爲逆也。順則吉。逆則凶。知禮人。皆從吉也。

⑬村寺清規〔勅鈔二ノ十三丈〕云。禮佛。披大袈裟。展坐具。不得不具威儀。搭坐具摺口向外。拜則先以右手。拈起向裏一頭。略側身牽開。展拜。

⑭忠曰、觀自大清來僧。皆坐具背向外。日本從他者。例學之。可謂愚矣。

⑮已下。錄坐具不得令他人展開。

⑯釋氏要覽〔中ノ卅八丈〕云、凡禮佛。須自展尼師壇。不得令他人展。或至塔殿上。先有地蓆。便就上禮。先無。不得立佇布席。不得於低床上禮。須脫屣履。勿以無儀。自招深罪矣。

⑰釋門歸敬儀〔下ノ十五丈〕云、行事之時。既脫足已。可踐土地。應在坐具。尋討經律。無敷坐具之文。但云脫屣禮足。今據事用。理須坐具。故制坐具緣〔行事鈔下一之二ノ一丈引四分〕云、爲身爲衣。爲僧臥具。既爲身衣。明知前設。又坐具之目。本是坐時之具。所以禮拜之中。無文敷者。故如來將坐。如常自敷。準此比丘。自敷而坐。不合餘人爲敷。今見梵僧來至佛前禮者。必先褰裙。以膝拄地。合掌長跪。口讚於佛。然後頂禮。此乃遺風猶在。可準用之。無坐具明矣。比有行敬。在佛僧前。仍令侍者爲敷坐具。此乃行憍。未是致敬。又有要待設席。方始禮者。亦不可也。如見尊長。即須下拜。安待覓席耶。以事詳準。隨時設禮。不可待席。有則從席。無則從地。可也。如在清廟闕庭。公衞之所。何有設席。以此準例。則敬慢兩分。〈忠按、尋討經律已下全依法苑珠林致敬篇敷座部〉

⑱忠曰、此中如來自敷者。大般若經〔三丈〕第一。〔三丈〕第四百一。〔三丈〕第四百七十九。皆云、爾時世尊。於師子座上。自敷尼師壇。結跏趺坐。〈止此〉。夫三界獨尊。尚自敷矣。然今觀清國僧規。主者跨立佛前。令侍者展具。敢乃作禮。日本僧出於其下者。亦效尤矣。夫佛之所爲。而尚不爲。憍高自大。亦極焉。

④緇門警訓〔下ノ四十九丈〕載。大智律師坐具賦云、吾有坐具。裁量有據。其色相。則一類袈裟。其物體。則兩重疎布。長四廣三。壞新揲故。彼形之大者。可用開增。吾身之小兮。

從初制度。好大惡小。但責他非。反制爲開。焉知自誤。嘗聞比丘身者。五分之塔也。尼師壇者。四方之基也。是則道者所資。豈宜身之爲護。安禪講法。敷之喜失於威儀。入聚遊方。持之勿離於跬歩。不然諸律有違制刑科。一生無如法坐處。

加藤佳祐

【一三九八】襪

①釋名［五ノ五丈］云、襪末也。在脚末也。

②釋氏要覽［上ノ四十八丈］云、鈔云、襪亦是衣。四分律云。寒聽著襪。

③敕修清規［下一ノ卅一丈］裝包云、下裳鞋襪。有袋繫於後。

④日用軌範［勅修下一ノ五十丈］云、不得赤脚著僧鞋。

⑤忠曰、言須著襪。而方著皮鞋也。

⑥解者［勅鈔十二ノ四十五丈］曰、清規言可著襪之義。唯在此耳。凡著襪者。非爲禮也。蓋僧鞋皮造。若跣而著。則臭膩汚脚。故誡赤脚著鞋而已。非赤脚爲無禮。如天竺風俗。皆赤脚也。但日本國。以赤脚爲失禮。支那國。則士庶皆著襪裹足。蓋其俗據床垂足。故血下。令足大。故裹之。防其鄙醜。復非爲禮也。

⑦舊説［勅鈔十ノ卅八丈］曰、佛通寺愚中和尚。不帶坐具。不著襪子。

⑧馬縞中華古今注［卛十二］云、三代及周。著角襪。以帶繫於踝。至魏文帝。呉妃乃改様。以羅爲之。後加以綵繡畫。至今不易。至隋煬帝。宮人織成五色立鳳朱錦襪靺。

⑨羣談採餘［十ノ考証ノ廿丈］云、襪實録曰、自三代有之。謂之角襪。魏文帝呉妃。裁縫。以綾羅紬絹爲之。洛神賦云、羅襪生塵。是也。

⑤後漢［百三ノ六冊］崔駰集［十四丈］。襪銘云、襪衡建子。萬物含滋。黄鍾育化。以養元基。長履景福。至于億年。皇靈既祐祉禄來臻。本枝萬世。子子孫孫。

加藤佳祐

【一三九九】脚絣

①入衆日用云、寒月向火、不得炙鞋臭焙脚絣衣裳等。

②敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云、須留裝亡衣服、直裰挂絡、内外衣裳、數珠香合、脚絣鞋襪、淨髪巾、收骨綿子等。

③篇海類編［十七ノ二十四丈］云、絣補緋切、音崩、布名。

④祖庭事苑［八ノ十八丈］云、脚絣律所謂護腨衣也。僧祇云、我弟子、著三衣、足遮寒苦。若性不忍寒者、弊故衣、隨意重著。五五分云、三衣儀身衣。被衣、雨浴衣、護髀衣。護踝護腨衣等。皆禦寒。故許畜之。然此衣。最爲凡下。趣得不破足矣。

⑤今見禪人。行界細刺。動廢時序。而又煩暑如焚。高裙緊禮。自謂雅合禪規豈知佛爲禦寒而設。〈忠曰、緊禮之禮、必字訛。字典肉部云、腨、市充切、音踹。正字通俗曰脚肚。篇海云、腨又挂充切音篆又脛腨也。足肘也。忠曰、腨和訓、古武羅〉

（窪田顕脩）

【一四〇〇】行纏

①忠曰亦名行纏。禮記内則名偪。日本俗曰脚絆。

②聯燈會要［二十八ノ十七丈］雲居舜禪師章云、間脱襪打睡。早朝施繫行纏。

③東坡詩集［四ノ四十三丈］答寳覺詩云、芒鞵竹杖布行纏。又寄呉徳仁詩云。我遊蘭溪訪清泉。已辨布襪青行纏。

（窪田顕脩）

【一四〇一】打眠衣

①舊説［敕鈔十二ノ二十七丈］曰、夜間、須著打眠衣。到天曉。方換好衣。

②永平清規辨道法［五丈］云、若換直裰莫離被位在位而換。先將日裏者先蓋身上潛解打眠直裰之兩帶。脱肩袖而落于背後之與膝邊譬如遶蒲團。次結日裏者之兩帶。著定了。收打眠直裰窖在于被位之後。脱日裏者。著打眠衣。須準之而知。

③東福清規［十三丈］正月懺法云、期日維那者。先著打眠衣。赴方丈請導師等諸職。大悲咒畢。至一心時。歸寮改威儀。至觀音經。更赴方丈。

（窪田顕脩）

【一四〇二】被

①忠曰。臥息以蓋身。章服儀所謂被單。是也。

②馬縞中華古今注［中ノ十一丈］云、被。語云。必有寢衣。長一身有半。

③日用軌範［下一ノ四十七丈］云、摺被之法。先尋兩角。以手理伸。向前先摺一半。次摺身前一半。不得横占隣單。亦不得抖擻作聲。不得以被扇風。

④永平清規辨道法［六丈］云、摺被之法。因聞大靜以兩手。執被兩角而把合。縱折而作兩重。次又縱折。而作四重。次向内横折。而作四重。都計十六重也。以安眠單之奥頭。次疊斂眠單於被下。挿枕子於被裏。安被之時。有重之頭。向身以安之。

（窪田顕脩）

【一四〇三】紙被

①希叟曇禪師廣録［三ノ頌二十三丈］禪房十事紙被頌云、通身不挂寸絲。單明一色邊事。要知結角羅紋。徑問床子枕子。

（窪田顕脩）

【一四〇四】眠單

①舊説［敕鈔十ノ三十八丈］曰、臥時鋪之。或謂坐時鋪之。本是坐具也。

②忠曰、或［日用清規稗説上一ノ二十七丈左］以眠單。爲章服儀被單。非也。又和俗以眠單。稱蒲團。訛。蒲團造。與眠單不渉。

③日用軌範［敕修下一ノ四十六丈左］云、上被位。眠單。收一半坐定。

④祖庭事苑［八ノ十八丈］云、時佛在給孤園。有一比丘。赤體而睡。不護旃褥臥具。人皆譏嫌。佛言。宜令著臥具。即今禪家所用眠單。是矣。寄歸傳云、禮拜敷坐具。五天所不見行。其所須者。但擬眠護它旃席也。若用它物。新故竝須安替。不令汗染虧損信施。

⑤　禪苑清規［三ノ七丈○敕鈔八十七丈］首座云、堂司行者。打放參鐘。展單下帳罷。歸寮問訊

喫湯。隨意。如遇念誦。歸寮問訊。喫湯罷。然後入堂。展單下帳。昏鐘下窓簾。明即捲之。堂中大衆。未開靜前。不得令捲單疊被上帳。恐喧大衆。

⑥ 敕修清規［上三ノ七丈］令誦云、堂司行者。往首座前。覆云。放參。〈乃至〉供頭鳴堂前鐘三下。衆普同和南。各出全單而散。　又［下一ノ四十三丈］坐參云、堂司行者。候晩粥熟。覆首座云、放參。〈乃至〉衆下床。各出半單。

⑦ 忠曰此中言單。皆眠單也。

⑧ 舊説曰。凡出半單。爲坐禪矣。日用軌範云眠單收一半坐定。是也。初夜坐禪畢。出全單。爲偃息也。所謂單者可鋪而坐臥之物。要不損壞常住床席也。

⑨ 傳燈録［十七ノ二十二丈］白水仁禪師章云、鏡清行脚到。師謂之曰、時寒。道者。清糧不解。師曰。還有臥單得蓋否。曰設有。亦無展底功夫。師曰。直饒道者。滴水滴凍。亦不干他事。曰滴水冰生。不相涉。師曰是。

（窪田顕脩）

【一四〇五】浴具

① 日用軌範［敕修下一ノ五十一丈］云、如開。浴。浴具携右手。入下間門内

② 忠曰、浴裙脚布等。總稱浴具也。

（窪田顕脩）

【一四〇六】浴裙

① 日用軌範［敕修下一ノ五十一丈］云、以脚布園身。方可繫浴裙。

② 忠曰雖言裙。而非脚布類。但是浴衣耳。故軌範又云、以脚布。摺浴裙内。恐濕浴袱。止此。依此知。浴裙非濕水物也。繫者。掛之筅竿也。

③ 舊説［敕鈔十二ノ四十七丈］曰。浴裙。以單綿布造。浴衣也。

（窪田顕脩）

【一四〇七】脚布

① 見浴裙處、入衆日用作脚巾。

② 忠曰、脚布圍肚腰。入浴之具。與備用清規云知浴鋪脚布。者。別物也。〈見器物門脚布處〉故日用軌範云、以脚布。摺浴裙内。止此。可知。浴衆隨身者。而非浴主所鋪設矣。

③ 忠曰、此脚布。律稱洗裙者。毘那耶雜事［十五ノ一丈］云、苾芻洗已。濕體披衣。佛言。應畜拭身巾。無巾可得。洗已片時蹲地。以洗裙。拭體。然後披衣。義淨註。言洗裙者。可用。絹布一幅半。長六尺許。横繞腰髁。撒勿令脱。更不安帶。是西國法也。

（窪田顕脩）

【一四〇八】履

① 日用軌範［敕修下一ノ四十九丈］抽脱云、古云、入厠用籌分觸淨。出時脱履忌縱横。

② 行事鈔［下一之二ノ十八丈］二衣總別篇云、五百間云、淨潔靴鞋履。得著禮拜。四分聽爲護身護衣。護臥具故。在寺内。著一重革屐。

③ 歸敬儀［通真下ノ十四丈］云、此土羣臣。朝謁之儀。皆在殿庭。故履屐不脱。有時上殿。則劍履皆捨。此古法也。天竺國中。地多濕熱。以革爲屐。制令服之。如見上尊。即令脱却。

自餘寒國。隨有履之。行事之時。既脱足已。可踐土地。應在坐具。

④ 羣談採餘〔十ノ考証二十九丈〕云、履屬履者禮也。飾足以爲禮。履拘也。所以拘足也。草履曰屣。單底曰履。複底曰舄麻履謂之不借。言賤者易有。不相假借也。舄以木置履下。言乾腊。不畏泥洹也。黄帝臣于則作屣屨。魯國孔民。尚有仲尼車輿冠履。狼跋美周公曰。赤舄几几。

（窪田顕脩）

【一四〇九】鞋

① 日用軌範〔敕修下一ノ四十六丈〕云、不得拖鞋。咳嗽作聲。

② 敕修清規〔下ノ三十一丈〕裝包云、下裳鞋襪。有袋繫於後。

③ 羣談採餘〔十ノ考証二十九丈〕云、鞋。實録曰、夏商皆以草爲之。周以麻。普永嘉中。以絲。或云。唐馬周。始以麻爲之。名鞋也。

④ 馬縞〔郛十二〕古今注〔中ノ七丈〕云、麻鞋起自伊尹。以草爲之。草屩周文王。以麻爲之。名曰麻鞋。至秦以絲爲之。令宮人侍從著之。庶人不可。至東晉又加其好。公主及宮貴。皆絲爲之。

⑤ 祖庭事苑云、皮鞋。央掘經云。施主買施。不見殺故。如有施主。牛死。賣與屠生。轉買皮。令人作革屐。施許受用著。

（窪田顕脩）

【一四一〇】拖鞋

① 舊説〔十ノ考証二十九丈〇又十二ノ四十八丈〕曰、拖鞋。木鞋也。浴室及西淨。用之。

② 忠曰、拖鞋。鞋名。鞋首植一小椿。上開下狹。用將指第二指。挿持之。拖曳而得歩。故言拖鞋。

③ 敕修清規〔下一ノ三丈左〕知浴云、出面盆拖鞋脚布。

④ 日用軌範〔下一ノ五十一丈〕開浴云、其所脱衣。作一袱。覆轉。方換拖鞋。

⑤ 拖鞋。又名木舄。〈見殿堂門浴室處〉

（窪田顕脩）

【一四一一】衩衣

① 諸祖偈頌慈受深禪示衆云。衩衣登殿。草履遊山。莫踐法堂。回互耆舊。〈忠曰殿字恐訛當作厠〇入衆日用全引此〉

② 永平衆寮清規〔四丈〕云、寮中兄弟。在案頭之時。見他人來先下床立地。或著衣或衩衣。須隨來者之儀。或問訊。或觸禮。

③ 永平清規辨道法〔八丈〕云、後夜晡時。不掛袈裟。但坐禪耳。晡時衩衣入室。就單位。出蒲團。而用坐禪。未展單矣。或者有半展單之古法。脱衩衣疊安被上。而坐禪矣。

④ 篇海類編〔十七ノ十丈〕云、衩楚懈切。音瘥。衣衩也。博雅裀結襙。謂之褸衩。又丑亞切。音詫。注同。〈裀篇海音梢衣衽襙音登毛帶也褸音婁裳際也〉

⑤ 正字通〔甲下ノ十一丈〕云、衩舊註。楚懈切。音瘥。引博雅。裀結社。謂之褸衩又衣袒也。

按褻服。謂之衩衣。唐僖宗乾符元年。王凝崔彦昭。同擧進士。凝先及第。嘗衩衣見彦昭。宋太祖。召竇儀。入禁闈問事。儀行至屏障間。覘見上衩衣。因却退。中宮趣出見。儀曰。

聖上衩衣。必未知儀來。但奏云。宣到翰林學士竇儀。太祖聞之。起索衫帶著。後方召見之。據此說。衩在禡韻。讀若咤。舊本音訓。竝非。

⑥ 忠曰、衩衣義。自古欠分曉。近及正字通來。一掃舊濟矣。〈竇儀事見代醉編〉

⑦ 康熙字典［甲下十二丈］云、衩唐韻集韻韻會。竝楚懈切。差去聲。玉篇衣衩也。又篇海衣祖也。又類篇楚嫁切。音汊。義同。

③ 山堂肆考［羽ノ一の二十丈〇又類林一ノ二十二丈］云、宋帳文定公安道。平生未嘗不衣冠而食。嘗暑月。與其壻王鞏同飯。命褫帶。而已衫帽自如。鞏不敢。公曰吾自布衣諸生。遭遇。至此一飯。皆君賜也。享君之賜。敢不敬乎。子自食其之食。雖衩衣可也。〈衩音瘥〉

（窪田顕脩）

【一四一二】衩袒

① 衩衣。又言衩袒。

② 康熙字典云、袒音但。儀禮註。袒左免衣也。

③ 備用清規日用清規云、古云、衩袒不許登殿。草履莫踐法堂。

④ 日用軌範云、古云、衩袒登溷。草履遊山。莫踐法堂。回互耆舊。

⑤ 羣談採餘［五］清逸類［二丈］云、清晨燒香。食罷便可岸巾衩袒。

⑥ 舊說［敕鈔十二ノ四十四丈］曰、義堂信和尚。會觀唐畫人形。屏開衣衿於背後。曰。此所謂衩袒也。謂胸前襟迫吭。似叉字。亦有袒容。故曰衩袒。乃懶放之貌。俗言錢持頸。蓋懸錢於頸者。屏襟以膚受。防損衣也。

（窪田顕脩）

【一四一三】卸衣

① 忠曰、日本禪林僧。摺斂七條九條等。掛在左臂。此言卸衣。蓋卸下在肩衣也。或作叉衣者非也。又與衩衣。義不涉。

② 楊愼千里面譚［十六丈口糸孚三十四］云、詩有出于率易。而神妙者。如西子洗粧。巫娥卸服。固勝于羅紈綺繢也。

③ 字彙云、卸。司夜切。寫去聲。舍車解馬。脱衣解甲。皆曰卸。

（窪田顕脩）

【一四一四】孝服

② 忠曰、尊宿遷化、法眷會裏、著凶服也。

③ 敕修清規［上二ノ廿八丈］尊宿遷化、孝服云、侍者小師、麻布裰。兩序、苧布裰。主榮、及法眷尊長、生絹裰。勤舊辨事。鄉人法眷、諸山、生絹腰帛。檀越、生絹巾腰帛。方丈行者、麻布巾裰。衆行者、苧布巾。方丈人僕、作頭、麻布巾裰。甲幹莊客、諸僕、麻布巾。

③ 六祖壇經［下ノ卅三丈］云、師曰、吾滅度後、莫作世情、悲泣雨涙。受人弔問、身著孝服、非吾弟子。亦非正法。但識自本心、見自本性。

④ 六物圖云、今時縱怠、加復無知。反以如來正制之衣、用爲孝服、且僧無服制。何得妄

行。釋氏要覽輔教孝論、相循訛説。愼勿憑之。近見白布、爲頭經者、斯又可怪。法滅之相、代漸多。有識者、宜爲革之、則法得少留矣。

（東海宏德）

【一四一五】腰帛

⑥ 忠曰、尊宿遷化、孝服者、白帶圍腰、言腰帛〈見孝服處〉或作腰白。

⑦ 枯崖漫録［下ノ十丈］臣翁淳禪師語云、二月初一、好箇消息、桃花煞紅、李華煞白。劍池邊楊大伯、笑中打失攔腰白。直至如今尋不得。喝云、有甚交涉。

⑧ 三才圖會・文公家禮、有腰帛圖。

（東海宏德）

【一四一六】諸法器

⑥ 敕修清規［上二ノ廿丈］入院云、至時鳴大鐘、諸法器、大衆門迎。

⑦ 又法器章［下二ノ廿一丈］云、新住持入院、諸法器、一齋俱鳴。

⑧ 忠曰、舊説［勅鈔十五ノ九丈右］以之爲大開靜非也。大開靜、但鳴厨前諸堂版而已、不鳴鐘鼓。如今入院、接住持、則鐘板鼓一同鳴。故云諸法器也。

（東海宏德）

【一四一七】犍椎

② 敕修清規［下一ノ七丈］維那云、十誦律云、以僧坊中、無人知時打犍椎。〈乃至〉衆亂時、無人彈壓等、佛令立維那。

③ 忠曰、須知、叢林鳴器、維那掌之。

④ 玄應經音義［一ノ十二丈］云、犍椎、直追切、經中或作犍遲。案梵本、臂吒犍椎、臂吒此云打、犍椎此云所打之木。或檀或桐、此無正翻、以彼無鐘磬故也。但椎稚相濫。所以爲誤已久也。

⑤ 釋氏要覽［下ノ卅五丈］云、五分律云、隨有瓦木銅鐵鳴者、皆名揵稚。經音疏云、犍虔音、稚直利切。此云擊木聲。五分、比丘問、以何木作揵稚。佛言、除漆樹、餘木鳴者、聽作。智論云、迦葉於須彌山頂、撾銅揵稚。增一經云、阿難升講堂、擊揵稚者。此名如來信鼓也。今詳律但是鐘磬、石板、木板、木魚、砧槌、有聲能集衆者、皆名揵稚也。

⑥ 業疏［下ノ四丈］云、犍槌者、梵本聲論云、犍〈巨寒切〉地、此云磬。亦曰鐘也。乃金石二物耳。故五分云、隨鳴者作之、意取聞聲來集、召僧法也。

⑦ 行事鈔［二之四ノ四丈］集僧通局篇云、出要律儀、引聲論翻犍〈巨寒反〉稚〈音地〉此名磬也。亦名爲鐘。資持記［名義集七ノ六丈引用］云、若諸律論、並作犍槌、或作犍椎。如字而呼、乃是梵言訛轉。唯獨聲論、正其音耳。今須音槌爲地。又羯磨疏中、直云犍地。未見稚字呼爲地也。後世無知。因茲一誤、至於鈔文前後、以及一宗祖教、凡犍槌字、並改爲稚、直呼爲地。請尋古本寫鈔、及大藏經律、考之、方知其謬。但以稚椎相濫、容致妄改。今須依律論、並作犍槌。至呼召時、自從聲論。〈或作椎亦爾。世有不識梵語、云是打鐘之槌、

及砧槌等。此又不足議也。〉若準尼鈔云、西傳云、時至應臂吒犍槌。臂吒、此云打。犍槌、此云所打之木。或用檀桐木等、彼無鐘磬。故多打木集人。此則與今全乖。不可和會。且依鈔疏、鐘磬翻之。謂金石二物也。〈應法師經音義、大同尼鈔。然祇桓圖、多明鐘磬。而云彼無者、或恐少耳。〉音義又云、舊經云犍遲。亦梵言訛轉、宜作稚、直致反。〈明知、稚字不呼爲地、此迷久矣。故爲辨之。〉

⑧ 正字通［辰中ノ七十一丈］云、椎、俗作槌鎚。

⑨ 忠曰、元照意、須字从艸木之木、而其音地也。

⑩ 大比丘三千威儀［下ノ十五丈］云、揵稚有五事。一者常會時。二者旦食時。三者書飯時。四者暮投槃日。五者一切無常。復有七法。一者縣官。二者大火。三者大水。四者盜賊。五者會沙彌。六者會優婆塞。七者呼私兒。當復知十二時犍椎。常會時、先從小起、稍至大。大下擊二十、稍小二十一下、小小十下、復大三下。旦食大下八。晝食一通。投槃亦一通。無常者、隨視時。縣官、水火、盜賊、亦隨時。會沙彌、三下。會優婆塞、二下。呼私兒、一下。持一通至、比丘揵稚、無後音。

⑪ 教乘法數［五ノ四十三丈］、圖五事七法。〈七法易知、令畧之。〉

⑫ 一常會時 〈説四羯磨講法等集、五十四下、謂之一通。〉

⑬ 二旦食時 〈八下、即小食時也。〉

⑭ 三晝食時 〈同上一通、即中食時。〉

⑮ 四暮投盤時 〈同上一通、如今昏鐘、投盤、疑是梵語。〉

⑯ 五無常 〈多少隨時、謂人臨終聞鐘聲、生善。〉

⑰ 馬鳴菩薩傳［百八十套］云、比丘鳴犍椎。外道即問、今日何故打此木耶。

（東海宏德）

【一四一八】大鐘

⑦ 忠曰、禪刹鐘、有三。大鐘、殿鐘、堂鐘也。大鐘者、號令闔山諸堂者。

⑧ 敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云、鳴大鐘及僧堂前鐘。集衆、列殿上、向佛排立。又法器章［下二ノ十八丈］云、大鐘、叢林號令、資始也。曉擊、則破長夜、警睡眠。暮擊、則覺昏衢、疏冥昧。引杵宜緩。揚聲欲長。凡三通、各三十六下、總一百八下、起止三下、稍緊。鳴鐘行者、想念偈云、願此鐘聲超法界、鐵圍幽暗悉皆聞。聞塵清淨證圓通、一切衆生成正覺。仍稱觀世音菩薩名號。隨號扣擊、其利甚大。遇聖節、看經、上殿下殿、三八念誦、佛誕成道涅槃、建散楞嚴會、諷經、齋粥過堂、人定時、各一十八下。如接送官員、住持尊宿、不以數限。庫司主之。

⑨ 行事鈔［上一之四ノ三丈］集僧通局篇云、增一阿含云、阿難升講堂、擊揵稚者、此是如來信鼓也。

⑩ 續高僧傳［三十九ノ十六丈］釋智興傳云、亡者通夢其妻曰、不幸病死。生於地獄、賴蒙禪定寺僧智興、鳴鐘。響震地獄、同受苦者一時解脱。有問興、曰、何縁鳴鐘、乃感斯應。興曰、余無他術。見付法藏傳罽膩吒王劔輪停事、及增一阿含鐘聲功德、敬遵此轍、苦力行之。鳴鐘之始、願諸賢聖、同入道場。然後三下、將欲長打。如先致敬、願諸惡趣、聞此鐘聲、俱時離苦。如斯願行、志常奉修、豈唯微誠、遂能遠感、衆服其言。

⑪ 増壹阿含經［二十四ノ十一丈］曰、阿難即升講堂、手執揵椎、竝作是説。我今擊此如

來信鼓。諸有如來弟子衆者、蓋當普集。爾時復説此偈。　降伏魔力怨。除結無有餘。露地擊揵稚、比丘聞當集。諸欲聞法人、度流生死海。聞此妙響音、盡當雲集此。

（東海宏德）

【一四一九】百八鐘

⑤　忠曰、大鐘一百八下、昏曉鳴之。

⑥　敕修清規［下二ノ十八丈］云、大鐘、曉繫、則破長夜、警睡眠。暮擊、則覺昏衢。疏冥昧。引杵宜緩、揚聲欲長。凡三通、各三十六下、總一百八下、起止三下稍緊。

⑦　禪苑清規［六ノ八丈］云、打大鐘之法、先輕手擬鐘三下、慢十八聲、緊十八聲、三緊三慢、共一百八聲。

⑧　羣談採餘［十考証廿一丈］云、鐘聲、晨昏叩一百八聲者、一歲之義也。蓋年有十二月、有二十四氣、又有七十二候。正得此數。浙杭州歌曰、前發三十六、後發三十六、中發三十六聲急。通共一百八。越州歌曰、緊十八、緩十八、六遍湊成一百八。台州歌曰、前擊七、後擊七、中間十八徐徐發、更兼臨後擊三聲、三通湊成一百八。

⑨　劉氏鴻書［九ノ四丈］云、四季須知、五更鳴鐘。前十八緩、後十八急。緩急每三轉、共一百零八擊者、蓋應十二月、與二十四氣、七十二候之數。亦按陰陽也。

⑩　忠曰、俗説、佛寺朝幕百八鐘、醒百八煩惱睡。非也、天竺作相、本一百二十下。〈見事鈔［上一之四ノ六丈］及資持記〉未聞百八下。其百八數、出中華世典。所謂十二月、二十四氣、七十二候、合成百八。乃應知、覺百八煩惱眠者、擧燭燕説也。

⑪　或曰、慈照相公時、命京師五山、擊二十五點。其曉鐘先鳴九十下、遺十八下。及開靜時鳴之。〈詳二十五點處〉未知何據也。

⑫　百二十下附

⑬　道宣撰釋門集僧軌度圖經云、念三寶、存五衆。衆各八輩。故以四十爲差。三道乘之、則一百二十、爲節也。　資持記［上ノ一下廿三丈］引圖經注云、八輩、謂四果四向。三道謂三乘。

（東海宏德）

【一四二〇】殿鐘

⑤　忠曰、佛殿鐘也。

⑥　敕修清規［下二ノ五丈］楞嚴會云、鳴大鐘、僧堂鐘、殿鐘。住持至佛前燒香。　又［下二ノ十九丈］法器章云、殿鐘、住持朝暮行香時、鳴七下。凡集衆上殿、必與僧堂鐘、相應按擊之。知殿主之。

（東海宏德）

【一四二一】僧堂鐘

③　忠曰、僧堂前鐘、其製稍小、或單稱堂前鐘。

④　敕修清規［下一ノ十一丈］、謂立僧首座云、堂司行者、鳴僧堂鐘、大衆同送歸寮。

⑤　又［下二ノ十八丈］法器章云、僧堂鐘、凡集衆則擊之。遇住持每赴衆、入堂時、鳴七下。齋粥下堂時、放參時、且望巡堂、喫茶下床時、各三下。〈住持或不赴堂、或在假則不鳴。〉堂前念誦時、念佛一聲、輕鳴一下、末疊一下。堂司主之。

⑥　雲門偃禪師録［下ノ五丈］云、師在僧堂前、問僧、這箇鐘子是什麽物作。無對。師云、你問我。僧便問。師云、衲僧作。代但打鐘一下云、摩訶般若波羅蜜。又云、衆僧堂前。

（東海宏德）

【一四二二】集衆鐘

②　舊説［敕鈔十三ノ廿二丈〇又九ノ七丈ウ］曰、僧堂鐘、謂之集衆鐘。

③　敕修清規［上一ノ廿五丈］國忌云、至期、鳴僧堂鐘、集衆。又法器章云、僧堂鐘、凡集衆、則擊之。〈詳僧堂鐘處〉

④　首楞嚴經［三上ノ九丈］云、此祇陀園中、食辨擊鼓、衆集撞鐘。

⑤　釋氏要覽［下ノ卅六丈］云、揵稚、今詳律、但是鐘磬、石板、木板、木魚、砧槌、有聲、能集衆者。皆名揵稚也。

（東海宏德）

【一四二三】斂鐘

③　禪苑清規［二ノ二丈］念誦云、住持知事以下、上間立。首座以下、下間立。維那斂鐘念誦。

④　校定清規［上ノ十四丈］新住持入院云、挂搭之法、斂僧堂前鐘。大衆、先歸鉢位。云云。又［上ノ廿二丈］兩序進退云、首座領大衆人事、送出庫堂門。云云。又斂鐘、首座入寮、占西手、與住持人事。又［上ノ廿八丈］四節、堂中、三日點茶云、行者斂鐘七下、住持歸位。

⑤　備用清規［五ノ二丈］尊宿相訪云、若法眷尊長、即斂僧堂前鐘、隨至方丈人事。〈忠曰、謂住持人法拳也。〉

⑥　宗門統要［十五ノ廿丈］云、台州幽棲道幽禪師、一日斂鐘上堂、大衆纔集。乃問、什麽人打鐘。僧云維那。師云近前來。僧便近前。師遂打一掌。却歸方丈。〈忠曰、蓋是念誦斂鐘〉

⑦　教誡律儀［鈔中ノ廿五六丈］二時食法云、待斂鐘聲發、即如法夾巾把鉢、令匙柄向身。又云、入堂、未斂鐘聲、禮拜、且收坐具、上床坐。

⑧　［賛行鈔中ノ廿九丈］解者曰、食時、初後各鳴雲版。今斂鐘者、謂初雲版也。或曰、長板、是也。

⑨　泉涌［清訓四ノ八丈］開山〈俊仍〉作相式云、先三下鐘。〈撞鐘三下、大小食時、俱用此鐘。〉次三鼓。〈擊鼓三下〉次雲版。〈撾板三通、少急打之。〉次長板。〈三三連打、但後一緩打也。此時衆僧具儀、入堂、至所坐處、放巾置鉢、於牀前席、各展坐具、三拜已、即上床坐。〉次雲鼓。〈擊鼓三通、少急打之。此時長老入堂、衆從座起。〉次雲版。〈撾板三通、極急打之。諸僧同時、上床前席、各展坐具。〉次直日打靜。〈維那鳴槌。唱十佛名、衆僧隨唱、同禮佛名。禮已收具、上床而坐。〉次引唄。〈如來妙色身等〉次誦展鉢偈、開

鉢行飯。次誦此食色香味等偈、及作五觀、誦食偈等。次衆僧正食。食已行水、用盥漱口。次後唄。〈處世界如虛空等〉次食竟偈。次雲版。〈一通急打。此時衆僧下坐出堂。〉

⑩　敕修清規［上二ノ六丈］念誦云、大板鳴、方歸圖位。住持入堂、供頭鳴堂前鐘七下。又［下一ノ六丈］維那云、每日二時、赴堂、堂前鐘鳴、離位入堂、聖僧前、左手上香。又［下二ノ十丈］庫司四節、特爲首座大衆湯云、都寺從聖僧後、右出堂外、迎住持入堂。供頭緩鳴堂前鐘七下。送住持入位。　又［下二ノ十八丈］法器章云、僧堂鐘、遇住持每赴衆。入堂時、鳴七下。

⑪　［勅鈔四ノ廿六丈］解者曰、堂前七下鐘、此名斂鐘。［勅鈔十二ノ十六七丈］齋粥二時、住持將自外堂入僧堂、稍到明棲邊時、正鳴之。〈［勅鈔八ノ卅七丈］及入堂少緊打。〉與庫前下鉢鼓、同時交鳴。其實九下、起盡二下、疊鳴。此觸鐘而不與數。故言七下。［勅鈔十二ノ十六丈］斂收也。以其緊撞之也。

⑫　忠曰、舊說緊鳴爲斂義。〈二十五點圖、亦以斂爲緩反言。〉檢韻書、斂字無緊急訓。但律家、食前雲版急鳴。此云斂鐘。〈前引〉解者依之、以名於清規齋粥、住持入堂七下鐘。然清規却有云緩鳴堂前鐘七下者。〈此引〉則緊打義、不當也。不宜名斂鐘。仍知敕修清規、但言堂前鐘七下。而不言斂鐘。固有以也。

⑬　忠按、行事鈔［上一ノ四ノ六丈］集僧通局篇、說長打鐘法云、如是漸漸斂椎、漸稴漸小、乃至微未。〈止此〉資持記斂謂收聲。〈止此〉由是觀之、長打鐘。及漸斂收、乃緊其打。此云斂也。而今七下、亦緊鳴。故例長打之斂聲、而亦云斂鐘乎。

（東海宏德）

【一四二四】入堂鐘

①忠曰。堂者僧堂也。齋時大衆入僧堂時。鳴大鐘十八下。謂之入堂鐘。〈一說十八鐘。住持入堂。如下文。〉

②永平清規赴粥飯法［一丈］云。粥時。開靜已後。齋時。三鼓已前。先於食位就坐。齋時三鼓之後。鳴大鐘者。報齋時也。城隍先齋鐘。山林先三鼓。此時若面壁打坐者。須轉身。正面坐。若在堂外者。即須息務洗手令淨。具威儀赴堂。次鳴板三會。大衆一時入堂。〈已下。詳說入堂法。恐繁不録。〉

③　敕修清規［下二ノ十八丈］法器章云。大鐘。齋粥過堂。十八下。薩婆多毘尼毘婆沙［七ノ十七丈］云。若僧祇。食時。應作四種相。一打揵椎。二吹具。三打鼓。四唱令。令界內間知。此四種相。必使有常限。不得或時打揵椎。或復打鼓。或復吹具。令事相亂。無有定則。不成僧法。若不作四相。而食僧祇食者。不清淨。名爲盜食。

④　忠曰。今鳴鐘入僧堂。而食。出于佛制。

（德重寬道）

【一四二五】下堂鐘

①敕修清規［上二ノ一丈］上堂云。掛上堂牌。報衆。粥罷不鳴下堂鐘三下。

②　舊說［四ノ七丈右］曰。粥罷下堂鐘三下。是罷參之鐘也。尋常鳴之。若有祝聖。更復鳴之。若旦望上堂。則不鳴下堂三下。蓋有天大參。上堂故不可鳴罷參鐘也。

③永平清規赴粥飯法云。大坐茶湯罷。住持人。聖僧前問訊出。即打下堂鐘三下。如監院首座。入堂煎點。送住持人。出却來堂内。聖僧前。上下間問訊罷盞托出。方打下堂鐘三下。

（德重寛道）

【一四二六】粥罷鐘

①舊説［勅鈔十五ノ十七丈］曰。粥了後。打鐘三下。此名粥罷鐘。或曰。此是展單鐘也。非爲粥罷。

②　忠曰。此三下。但是下堂鐘也。

（德重寛道）

【一四二七】放早參鐘

①校定清規五參上堂［下ノ一丈］云。粥後。更不鳴下堂。放早參鐘。

②　舊説［勅鈔十五ノ四丈］曰。粥罷三下鐘。謂之放早參鐘。若旦望。五參上堂日。不鳴

③　忠曰。放早參鐘。即罷參鐘也。古法每日粥後。有早參。早參住持説法也。今亡之。故粥罷鳴鐘三下。此報無早參。猶如晩間放參鐘也。然今有上堂。故不鳴早放參鐘也。

（德重寛道）

【一四二八】小開靜

①或曰。開猶放也。靜靜慮也。開謂大衆。自四更一點。入入堂坐禪。到此放禪。故曰開靜矣。忠謹按。鳴庫前版。爲小開靜。行者齊起。固不關堂僧坐禪者。到大開靜。庫前板。諸堂板。一齊鳴。亦起闔寺大衆也。固不局堂僧坐禪者。故餘謂。開靜者。開覺靜睡也。開言發覺。靜是睡眠之婉辭也。

②瑩山清規［上ノ六丈］云。五更四點後。庫前版鳴三會。名小開靜。行者齊起也。卯時將終。五更五點後。鼓版擊動。長打三會也。名大開靜。大衆摺被。〈禪苑。大開靜。但一會。〉

③　忠曰。五更三點之後。鳴百八鐘。次戛鼓磉了。次鼓五聲。〈五更。〉版四下。〈四點。〉如此三反反。次開靜。打雲版三會也。次大開靜。先戛鼓磉。直打鼓五聲。〈五更。〉版五下。〈五點。〉次又戛鼓磉了。版鼓一時和鳴。自緩漸到急。如此三通。〈按禪苑清規大開靜長打一會。〉

④　古來相傳。二十五點圖。到百八鐘。但云。然後開靜鼓版俱鳴。〈止此。〉後得一圖。詳説如上。

⑤禪苑清規擊法。小靜二會。大靜一會。〈詳次下。〉異此。

（德重寛道）

【一四二九】開小靜

①小開靜。又稱開小靜。

②禪苑清規警衆［六ノ七丈〇日用清規注卅丈■。］云。凡聞鐘鼓魚板。須知所爲。五更鳴大鐘者。

警睡眠也。次厨前打小鐘子者。開小靜也。諸寮供過行者。及燈頭等。竝皆先起。次擊厨前雲板者開大靜也。衆僧齊起。方得摺疊單被。及上蚊厨。次打長板者。衆僧下鉢也。衆僧一時入堂。次打木魚。衆僧集定也。後至者。更不得入堂。三通鼓鳴者。住持人赴堂也。前小鐘子鳴者。衆僧下床祇候。問訊住持人也。又云。開小靜之法。先擊板三聲。漸漸高大。令聲調暢。從慢至緊。從重至輕。爲一會。至二會。殺聲。徐徐打三下。

③ 日用軌範〔勅下一ノ四十七丈〕云。開小靜。方摺被。拗枕子。

④ 忠曰。軌範所言。與敕修。大坐參。及禪苑永平瑩山諸規説相違焉。諸規皆以謂。開大靜摺被。然今云。開小靜摺被。餘謂。恐小字訛。當作大也。

⑤ 校定清規日用小清規開小靜註〔下ノ卅丈〕云。鐘絶後版。

⑥ 忠曰。摺被者。開大靜時也。此時。大鐘〈百八〉方絶矣。若開小靜。〈五更四。〉點則鐘未絶也。可知。小清規所謂。開小靜方摺被者。可作開大靜也。

⑦ 竺仙和尚〔勅鈔九ノ廿六丈〕曰。日本人。以下鉢長板。稱小開。非也。長擊三通者。當名小開靜而已。

⑧ 忠曰。下鉢長板者。火鼓後。長擊三通者也。〈大板。〉今竺仙所言。長擊三通者。五更四點。厨下小鐘三會者也。〈禪苑。爲二會。〉校定〔上ノ廿八丈〕下鉢長板。亦言長擊三通。故今當那厨下小鐘。四字。而揀其濫也。

⑨ 解日用軌範者〔鈔十二ノ廿九丈〕曰。開靜後。長擊板三三通。名長板。此謂開小靜。〈或爲大鑑語。或〔鈔十四ノ卅八〇又六ノ五丈〕爲竺仙語。皆是妄説。〉

⑩ 忠曰。是即竺仙所非。下鉢長板。稱開小靜者。全不可取之。若又依此説似。小開靜。在大開靜之後。太非也。

（徳重寛道）

【一四三〇】小靜

① 小開靜也。

② 校定清規進退兩班〔上ノ廿四丈〕云。次早五更。小靜鳴。堂司請舊首座都寺。喫湯。

（徳重寛道）

【一四三一】大開靜

① 忠曰。大開靜者。庫前鼓板。長打三會。〈禪苑一會。〉是也。此時諸堂前板。一齊鳴。起闔寺大衆。〈又見小開靜處。〉

② 或和俗。聞百八曉鐘。爲開靜鐘音鳴者。非也。然舊説曰。慈照相公命京師五山擊二十五點。及三更尋擊四更五更。次鳴鐘九十下。遺十八下。及開靜時。鳴之。〈詳二十五點處。〉此十八鐘。與開靜鼓版。同時鳴。故有此濫。

③ 禪苑清規云。次擊厨前雲板者。開大靜也。〈詳開小靜。〉

④ 又云。開大靜之法。如開小靜之法。但只長打一會也。

⑤ 勅修清規大坐參〔下一ノ四十四丈〕云。四鼓鳴。住持出鐘鳴。主座出。〈乃至。〉鐘絶開靜板鳴衆方摺被。　又赴飯齋粥〔下一ノ四十四丈〕云。早晨聞開靜板。後齋時候巡火板鳴。先歸鉢位。　又法器章〔下二ノ〕云。文庫司主座寮。及諸寮。各有小版開靜時。皆長擊之。

⑥　忠曰。勅修清規。不出大小名。所謂開靜者。皆大開靜也。擊法見小開靜處。

（德重寬道）

【一四三二】開大靜

①大開靜。又稱開大靜。見禪苑。〈開小靜引。〉

②永平清規辯道法［六丈］云。未開靜前。不得收單摺被。方候開大靜。所謂厨前雲板。及諸堂前板。一時俱擊。

（德重寬道）

【一四三三】放參鐘

①敕修清規晚參［上二ノ二丈］云。若住持至晚不參。則堂司行者稟命住持。覆首座。鳴僧堂鐘三下。謂放參鐘也。如住持入院。或官員檀越。入山。或受人特謂。或爲亡者開示。或四節臘。則移於昏鐘鳴。而謂之小參。然亦不鳴放參鐘。謂猶有參也。

（德重寬道）

【一四三四】昏鐘

①初更一點後。大鐘百八下。此名昏鐘。

②敕修清規大坐參［下一ノ四十三丈］云。每日如有緣故。不坐參時。供頭行者。代首座。出半單。與大衆同。至晚。衆寮前。鳴板三下。衆出寮。歸堂。昏鐘鳴。如居城市則候鼓鳴頭首入堂。首座待鐘鳴。入燒香巡堂。次住持入燒香巡堂。候定鐘鳴。住持出堂。次頭首出。

（德重寬道）

【一四三五】定鐘

①敕修清規云。候定鐘鳴。住持出堂。〈詳昏鐘處。〉　又法器章云。大鐘。人定十八下。〈忠日、人定亥時也。〉

②瑩山清規［上ノ五丈］云。打一更三點三遍。後鳴大鐘十八聲。是稱定鐘是時。主人出堂。

③　舊説［勅鈔一二ノ十四丈〇同四十七丈］曰。初更五點之後。經少時。鳴鐘十八下。此名定鐘。又名十八鐘。正當亥時。其後少時。打二更也。凡坐禪。到定鐘。而止。衆便出僧堂。〈今日本禪林。衆出僧堂。則鳴鼓一。板五畢。即時鳴十八鐘者。略規也。〉若欲更坐禪。則報言。定鐘坐禪。乃再入堂也。定鐘後鎖前門。衆皆自後門出入。

④　忠曰。舊説。言初更五點後。鳴定鐘。如二十五點圖。亦言初更五點後。然瑩山言。一更三點後。鳴定鐘也。蓋大鐘一通半。〈總五十四下。〉可經一點時。乃自第一點。打鐘五十四下。而至第二點。更鐘五十四下。而第三點。總一百八下畢。未到四點。直鳴定鐘也。又［東源］見一圖。有初更二點後。鳴定鐘者。蓋鐘百八下畢。次鳴定鐘。次打初更第三點也。蓋早打定鐘。懈怠之相。不可尚焉。〈餘又按。若初更打第三點。則可省第一點第二點。方合中華省點法。餘於二十五點處有辨之。〉

⑤義堂日工集［一ノ四十三丈］云。定鐘。乃今初夜坐禪鐘也。謂之坐鐘。
⑥ 忠曰。坐禪到定鐘而止。非定鐘鳴。方坐禪。或定鐘後坐禪者。陪修也。此名再請禪。〈見敕修。〉又曰。俗言初夜鐘者。正是定鐘也。
⑦舊説曰。大鑑竺仙。皆怒鳴定鐘之早。蓋定鐘鳴。則罷坐禪。故怒其早也。
⑧ 忠曰。舊説［鈔十二ノ十四丈］言。定鐘之制大半於大鐘。〈止此。〉此恐謂定鐘鳴堂前鐘。故作此説謬矣。敕修法器章［下一ノ四十四丈］云。大鐘。人定十八下。止此。瑩山云。鳴大鐘十八聲。是稱定鐘。〈止此。〉可知。定鐘。直鳴。非別設焉。亦非用堂前鐘。如堂前鐘。制小。見僧堂鐘處。

（徳重寛道）

【一四三六】觸鐘

①忠曰。凡鳴鐘法。其起止一聲。名觸鐘。〈見斂鐘處。〉

（徳重寛道）

【一四三七】法鼓

①舊説［勅鈔十二ノ十三丈］曰。法堂設二鼓。其東北角者。爲法鼓。西北角者。爲茶鼓。
②敕修清規法器章［下二ノ廿丈］云。法鼓。凡住持上堂。小參。普説。入室。竝擊之。擊鼓之法。上堂時。三通。先輕敲磉鼓三下。然後重手。徐徐擊之。使其緊慢相參。輕重相應。音聲暢。起復連環。隱隱轟轟。若春雷之震蟄。第一通。延聲長擊。少歇。轉第二通。連聲稍促。更不歇聲。就轉第三通。一向纏聲擊之。候住持登座畢。方歇聲。雙椎連打三下。小參一通。普説五下。入室三下。皆當緩擊。
③ 忠曰。纏聲者。一大二小。相交長擊。則如繩纏木。一顯一隱之狀。故言纏也。然昧者。妄改作緩。大失意義。
④續燈録偈頌門。甘露舒禪師法鼓頌［三十ノ十二丈］云。一擊隆隆徧九垓。雲奔雨驟盡趨來。須知不是尋常韻。惺得人天醉眼開。

（徳重寛道）

【一四三八】登座鼓

①敕修清規法鼓云。上堂。候住持登座畢。方歇聲。〈詳法鼓處。〉
② 忠曰。住持登須彌時。每蹈一階。鼓一聲。古徳［勅古鈔法鼓処］云。蹈鼓而登。〈止此。〉是也。餘謂此可得名節歩鼓也。
③ 慈恩三藏〈玄奘〉傳［五卷五丈］云。戒日王行時。每將金鼓數百。行一歩一聲擊。號爲節歩鼓。獨戒日王有此。餘王不得同也。

（徳重寛道）

【一四三九】茶鼓

①見法鼓處。
②敕修清規法器章［下二ノ廿丈］云。茶鼓。長擊一通。侍司圭之。
③　忠曰。祖忌。獻茶湯時。鳴之。又茶禮湯禮。鳴之。故言茶鼓。
④敕修清規迎待尊宿［上二ノ十一丈］云。請客侍者具状。詣客位。挿香拜請特爲湯。〈乃至。〉寢堂釘掛帳幕。排照牌。設特爲光伴位鳴鼓行體。　又專使特爲新命煎點［上二ノ十六丈］云。俟折水出。鳴鼓。　又山門特爲新命茶湯［上二ノ廿三丈］云。齋退鳴鼓集衆。知事揖住持。入堂。〈云云。〉　又方丈特爲新舊兩序湯［下一ノ十六丈］云。燒香侍者。預排照牌。至時鳴鼓。客集。
⑤　又方丈特爲新掛搭茶［下一ノ廿九丈］云。至日齋罷。鳴鼓集衆。侍者揖入。　又方丈小座湯［下二ノ八丈］云。寢堂釘掛。排位。秉燭裝香畢。客頭行者。覆侍者。次覆方丈。鳴鼓。
⑥　忠曰。所謂鳴鼓。皆是用茶鼓也。
⑦　舊説［勅鈔十二ノ十三丈］曰。頭首秉拂。得茶鼓以代法鼓。蓋恐濫住持上堂也。

（徳重寛道）

【一四四〇】齋鼓

①忠曰、齋鼓、在庫司前。
②備用清規［三ノ九丈］僧堂特爲湯云、鳴庫堂前齋鼓一通。
③敕修清規［下二ノ廿一丈］法器章云、齋鼓三通、如上堂時、但節會稍促而已。
④　忠曰、節會者、一通爲一會、節裁節也。言齋時鼓、不可如上堂鼓長久擊也。

丸毛俊宏

【一四四一】雲鼓

①忠曰、蓋齋鼓也。此鼓在庫前。
②瑩山清規［上三丈］云、午時魚鼓後、雲版長打一會、大衆下鉢。次庫前雲鼓三會。第三會、堂前小鐘合鳴。報主人入堂也。

丸毛俊宏

【一四四二】問訊鼓

①忠曰、鳴庫司前齋鼓、即瑩山謂雲鼓三會者。
②舊説曰、住持問訊鼓、可入堂。〈詳早晨鳴器、品次處。〉
③禪苑清規［六ノ七丈○開小静処■］警衆云、三通鼓鳴者、住持人赴堂也。堂前小鐘子鳴者、衆僧下床祇候、問訊住持人也。
④　忠曰、問訊鼓、蓋言此三通歟。依舊説、問訊鼓鳴、下鉢。問訊鼓際、鳴斂鐘。〈詳早晨鳴器、品次處。〉

【一四四三】下鉢鼓　　丸毛俊宏

①即問訊鼓也。見斂鐘處。

【一四四四】放參鼓　　丸毛俊宏

①首山念禪師廣教録［古宿八ノ十一丈］云、問如何是學人自己。師云、放參三下鼓、喫粥五更鐘。

【一四四五】昏鼓　　丸毛俊宏

①忠曰、初更一點已前、鳴鼓三通、此爲昏鼓。〈見二十五點處。〉

②敕修清規［下二ノ廿一丈］法器章云、鼓早晚平擊三通。

③舊説［三佛待鈔上虚白■処］曰、擊昏曉鼓法、先■鼓磉三通。每通一百二十■、三通、合三百六十■。

④次鳴鼓三通、復每通一百二十■。三通、合三百六十■。

⑤蓋表一歳日數矣。

⑥昏鼓、初大擊大聲、後漸小擊小聲、以象日沒。

⑦曉鼓反之、初小擊小聲、後漸大擊大聲、以象日出焉。

⑧陳繼儒書蕉云、■鼓、鼓三百三十三槌爲一通。鼓止、角動十二聲、爲一疊。

⑨昏鼓四通爲大■。夜半三通、爲晨戒。旦明三通爲發■。

⑩篇海云、■七迹切、音戚、夜戒守鼓者、禮昏鼓四通、爲大鼓、夜半三通爲■、晨旦三通爲發明、今作■。

⑪又云、■許御切、音■、日出温也。亦與■同。

【一四四六】曉鼓　　丸毛俊宏

①見昏鼓處。

【一四四七】更鼓　　丸毛俊宏

①詳二十五點處。
②周祈名義攷云、更鼓、鼓謂之更者、率更官名。師古曰、掌刻漏、故曰率更、以漏籌更易爲義。更鼓義。又祖此。
③敕修清規［下二ノ廿一丈］法器章云、更鼓、早晩平擊三通、餘隨更次擊、庫司主之。
④解者［鈔十五ノ八丈］曰、更鼓早晩平擊三通者、早者、大開靜。三通、與板同鳴。此時處處板、亦同時鳴也。晩者、昏鐘鳴之先、鼓三通、是也。
⑤江湖風月集［三ノ五十七丈］九峯昇和尚、■更鼓偈云、爛木頭邊釘釘著、死牛皮有活機關。須彌槌子輕拈出。撼動一天星斗寒。

丸毛俊宏

【一四四八】浴鼓

①敕修清規［下二ノ廿一丈］法器章云、浴鼓四通、次第候衆擊。〈某詳、見知浴章。〉知浴主之。

丸毛俊宏

【一四四九】普請鼓

①敕修清規［下二ノ廿一丈］法器章云、普請鼓。長擊一通。

丸毛俊宏

【一四五〇】火鼓

①校定清規［上ノ廿八丈〇大鑑廿二丈引］云、長板者、火鼓後、長擊三會者。〈詳長板處。〉

丸毛俊宏

【一四五一】鼓磉

①敕修清規云、輕敲鼓磉。〈見法鼓處。〉
②忠曰、現見■鼓兩耳、而磉、韻書但有柱礎之訓、與今全無交渉。
③余竊按、磉當作顙、或■。音近訛寫耳。鼓顙者、即鼓額也。引楞嚴證之。
④楞嚴經［四下廿丈］云、因名身體、如腰鼓顙。
⑤解蒙［三十二丈］云、熏聞云、顙或作■■蒼云、鼓■也。補遺顙息朗切、額也。■桑朗切、鼓匡也。字書鼓材也。
⑥字彙云、■音瓦、博雅鼓■謂之■。
⑦篇海［二十ノ卅六丈］云、■蘇郎切、音顙、鼓匡木。玉篇鼓材。

⑧瑩山清規［上ノ五丈］云、戌時、打鐘三會、終後、庫前打鼓三會。先以鼓槌、擬鼓脣三下、後以左槌小打、以右槌大打。緩聲三打、又以左槌小打、以右槌連打。如此三打後、自緩至緊、爲一會。

⑨如前三會終、又擬鼓脣、三下、一打名爲一更、打版爲一點。

丸毛俊宏

【一四五二】大板

①敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云、節内遇三八日、佛殿念誦。〈乃至〉參前、巡廊鳴板集衆、向佛排立。住持至、鳴大板三下。

②　雲章［敕鈔一ノ廿三丈］曰、庫司前板、言大板。以其製大於餘堂板也。

③板又作鈑。

④鏡堂圓禪師禪興録［廿八丈］擧善哉三下鈑、知識盡來參話、作鈑。

⑤　續字彙云、鈑與版同。莊子金鈑六■。

丸毛俊宏

【一四五三】雲版

①庫司大版、又稱雲版。

②雲章［敕鈔一ノ廿三丈〇又十四ノ廿九丈〇又四ノ廿六丈］曰、版形鑄作雲樣、故云雲版。

③瑩山清規［上ノ二丈］云、已香欲了時、聖僧侍者、問訊首座、是稟放禪也。即庫前雲版三下鳴。是稱火版。〈詳火版處。〉

④　俗事考［四丈］云、宋太祖以鼓多驚寢、遂易以鐵磬。此更鼓之變也。或謂之鉦、即今之雲板也。

⑤　三才圖會［器用十二巻廿三丈］云、雲板即今之更點擊鉦。

⑥　唐六典皆擊鐘也。大史門有典鐘。二百八十人。掌擊編鐘、即此是也。

丸毛俊宏

【一四五四】鐵板

①叢林盛事［卅五丈］云、廣教會和尚川人。嗣石頭回。初依此菴于護國、因行者幹鐵版、皆有頌送行。

②會曰、空奮雙擧與麽去。打成一片早回頭、歸來挂在三峯頂。惱亂春風卒未休。

③兄弟皆愛之。

丸毛俊宏

【一四五五】方丈版

①敕修清規［上ノ十九丈］聖節云、堂司行者報方丈客頭、先覆住持、次覆侍者、鳴方丈板三下、鳴鼓。
②又念誦［上二ノ六丈］云、先鳴方丈板、照堂板、次巡廊鳴板。
③又法器章［下二ノ十九丈］云。方丈庫司首座寮、及諸寮、各有小版。

丸毛俊宏

【一四五六】庫堂板

①此小板也。〈見方丈板處〉。與前庫堂大板異。
②敕修清規［下一ノ四十丈］、方丈特爲新掛搭茶云、次日庫司。〈云云〉。庫堂排位、首座光伴、鳴庫堂板、上首知事、與維那、行禮。

丸毛俊宏

【一四五七】照堂板

①敕修清規方丈特爲新掛搭茶云、次日、首座衆頭首、具狀請僉。〈乃至〉照堂排位、都寺光伴、鳴照堂板。〈云云〉。

丸毛俊宏

【一四五八】首座寮板

①敕修清規［下一ノ四十丈］坐禪云、鳴首座寮前板三聲、初聲出門、二聲約到半途、三聲入堂。
②又坐參［下一ノ四十丈］云、不鳴首座寮前板、若大坐參時、却鳴三下。
③又大坐參［下一ノ四十三丈］云、堂司行者鳴首座寮前板三下、大衆轉身向外坐。首座下地、從後門出、復轉從前門入、聖僧前燒香。

丸毛俊宏

【一四五九】衆寮前板

①敕修清規［上一ノ十九丈］聖節云、堂司行者、預鳴衆寮前板三下、集衆坐堂。

丸毛俊宏

【一四六〇】衆寮外板

①衆寮前板、稱外板。其［敕鈔九ノ卅丈］内板小、外板大也。
②敕修清規［下二ノ十九丈］法器章云、衆寮内外、各有版。外版毎日大衆問訊時、三下。坐禪坐參時、各三下。候衆歸堂、次第鳴之。
③點茶湯時、長擊之。
④内板、掛搭歸寮時三下。茶湯行盞二下、收盞一下、退座三下。
⑤小座湯、長擊之。

丸毛俊宏

【一四六一】衆寮中小板

①敕修清規［下一ノ十九丈］入寮出寮茶云、齋退鳴寮中小板、點茶人、門外右立、揖衆入。

丸毛俊宏

【一四六二】衆寮内板

①衆寮中小板、稱内板。〈詳衆寮外板處〉。
②敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云、行者引至衆寮、鳴内板三下。寮主相接入門。

丸毛俊宏

【一四六三】諸寮小板

①敕修清規［下二ノ十九丈］法器章云、方丈、庫司、首座寮、及諸寮各有小板。開靜時、皆長擊之。報衆時、各鳴三下。

丸毛俊宏

【一四六四】坐禪板

①敕修清規［下二ノ十七丈］月分須知云、六月初一日、隆暑、首座免鳴坐禪板。
②又法器章［下二ノ十九丈］云、衆寮外版、坐禪、坐參時、各三下。候衆歸堂、次第鳴之。〈見衆寮外版處〉。

丸毛俊宏

【一四六五】齋板

①忠曰、庫司大板、齋時鳴之。此名齋板。
②敕修清規［上二ノ十三丈］受嗣法人煎點云、厨司方鳴齋板、就行飯。

【一四六六】下鉢板　　丸毛俊宏

①忠曰、粥時長板、名下鉢板、齋時三下板、爲下鉢板。
②禪苑清規［六ノ七丈］云、開大靜。〈乃至〉次打長板者、衆僧下鉢也。衆僧一時入堂、次打木魚、衆僧集定也。〈打法、見長板處〉。
③　忠曰、下鉢板、有異説。禪苑清規校定清規、則以木魚已前、長擊三通、爲下鉢板。〈校定説見長板處〉。
④　入衆日用、敕修清規、則以木魚之後、三下疊疊者、爲下鉢板。如詳辨長板處。
⑤　又按禪苑下鉢板、粥時則以長擊三通板爲下鉢、齋時則以三下板、爲下鉢。〈但打三下、非三下■■〉。皆在木魚已前。
⑥禪苑清規［一ノ七丈］赴粥飯云、早晨開靜之後、齋時三下已前、先於食位就坐、候長板鳴、及打三下、即起身下鉢。
⑦　忠曰、禪苑粥飯雙説、謬解者多。
⑧　今言、早晨開靜之後、先於食位就坐、候長板鳴、即起身下鉢。此爲粥時也。
⑨　齋時三下板已前、先於食位就坐、及打三下、即起身下鉢。此爲齋時也。
⑩又禪苑清規［六ノ七丈］警衆云、齋前聞三下板鳴者、衆僧下鉢也。
⑪次鳴大鐘者、報齋時也。
⑫自餘長板魚鼓、堂前小鐘、維那打槌食畢、下堂、並同晨粥之法。
⑬　舊説［敕鈔十二ノ十七丈］曰、板方二下時、可下鉢。或曰、第三下、。可下鉢。
⑭　舊説［敕鈔九ノ廿六丈］曰、一説下鉢板七下、此或可然、何以言之。云第三下起身故。
⑮　忠曰、下鉢七下、何從得此説。蓋轉訛斂鐘七下而已。固不足論矣。
⑯　又第三下起身者、蓋謬解禪苑及打三下起身下鉢之語耳。彼所謂三下者、齋時板名、又非言第三下也。

【一四六七】長板　　丸毛俊宏

①忠曰、下鉢板、言長板。長擊三會、故名長板。日本俗、訛爲板通名、而稱鑄長板掛長板等。非也。其通名雲板也。
②舊説、以三下疊疊板、爲長板。其義［敕鈔十五ノ五丈〇九ノ廿六丈］曰、三下非但三擊。以三下爲一疊、疊疊擊之。及住持入僧堂、其擊之久長、故云長板。〈忠曰、此因擊得名。〉
③雲章、以齋時三下板、爲長板。令其聲長。故云長板。〈詳三下板處。忠曰、此因聲得名。〉
④　忠曰、長板異説、須以禪苑清規爲正。

⑤禪苑清規警衆［六ノ七丈］云、擊厨前雲板者、開大靜也。次打長板者、衆僧下鉢也。衆僧一時入堂、次打木魚、衆僧集定也。後到者、更不得入堂。又［六ノ八丈］云、打長板木魚之法、竝輕手引聲。漸漸高大。令音聲調暢、然後緊慢相參、輕重相應。凡至一會、略歇少時、所貴節會分明、令聽者不誤。至三會殺聲、徐打三下。

⑥校定清規［上ノ廿八丈］云、長版者、火鼓後、長擊三會者、是也。非木魚後三下者。今叢林、皆以三下板、爲長板、方行禮。今只隨時可也。〈忠曰、三下者、三下疊疊也。行禮者、下鉢也。隨時者、本當火鼓後板下鉢。然今時諸方、例訛、不得行獨。故但隨時世、以三下疊疊、爲下鉢而已。〉

⑦入衆日用云、木魚響、不得入堂。〈乃至〉聞長板鳴、下鉢。〈敕修清規［下一ノ四十七丈］日用軌範、作聞木魚後長板鳴下鉢。〉

⑧敕修清規法器章［下二ノ十九丈］云、大版、齋粥二時、長繫三通。木魚後、三下疊疊擊之。謂之長板。

⑨舊説［敕鈔六ノ五丈〇又十四ノ卅八丈］曰、齋粥二時、十八鐘後、所繫下鉢之板、此名長板。

⑩竺仙和尚曰、此説非也。開靜後、長擊三通者、名長板。

⑪忠曰。十八鐘後、鳴木魚、次鳴三下疊疊。故知、舊説、依入衆敕修。竺仙本禪苑及校定。蓋大開靜後、火鼓三下、次長擊板三通、衆僧下鉢、次鳴木魚。

⑫忠曰、如禪苑、以火鼓已後、十八鐘已前之、長擊三通者、名長板、下鉢。然壽無量時、叢林早訛。故入衆日用以木魚後、三下疊疊、爲長板。校定雖識其非、而循習難爲輒革。故只隨時焉。敕修亦以三下疊疊、爲長板。蓋同校定意。

⑬敕修清規山門特爲新命茶湯［上二ノ廿三丈］云、近時有齋時聞長板鳴、知事入堂、炷香展拜、巡堂一匝、請茶。又新首座。特爲後堂大衆茶［下一ノ十八丈］云、長板鳴、僧堂内、巡請茶。

瀧瀨尚純

【一四六八】長擊板

①忠曰、下鉢長板外、又有長擊者。雖可通名長板。餘長擊不受長板名。

②敕修清規法器章［下二ノ十九丈］云、方丈庫司、首座寮、及諸寮、各有小版。開靜時、皆長擊之。又云、衆寮内外、各有板。外板、點茶湯時。長擊之。内板。小座湯、長擊之。

瀧瀨尚純

【一四六九】三下板

①禪苑清規［一ノ七丈］云、齋時三下已前、先於食位、就坐、及打三下、即起身下鉢。又云、齋前聞三下板鳴者、衆僧下鉢也。

②雲章稱此三下板、爲長板。其説曰、每下令其擊聲長緩。蓋欲有少時刻、使衆遲速齋一。故云長板。

忠曰、早粥、本長擊三通下鉢。〈禪苑〉後訛、木魚後三下疊疊下鉢。餘竊推其轉謬源、如齋時、則單三下板、下鉢。是即三下板、下鉢也。終以三下名、訛爲三下疊疊之三下、至此下鉢歟。

③傳燈録般若啓柔禪師章［廿三ノ七丈〇聯灯廿六ノ廿丈］云、師上堂、聞三下板聲、大衆始集。

師因示一偈曰、妙哉、三下板。諸徳盡來參。既善分時節。今吾不再三。〈聯燈作知時節〉

④ 忠曰。上堂者、食時上僧堂也。凡板打三下者、皆當稱三下板、然特名齋時者、爲三下板矣。

瀧瀬尚純

【一四七〇】火板

①齋前三下板也。

②舊説［敕鈔十二ノ四十三丈］曰、火板掛在庫司竈上。及飯熟、飯頭打之三下、則火頭滅火。故名火版矣。［敕鈔五ノ廿丈］但今食前三鐘、蓋擬火板也。

③敕修清規［上二ノ十三丈］受嗣法人煎點云、火板鳴。大衆赴堂。

④日用軌範［敕修下一ノ五十丈］云、仍嚼楊枝、歸堂坐禪。火板未鳴、不得先歸寮。

⑤ 忠曰、及火板鳴、坐禪罷。今言火板未鳴者、坐禪未了也。若火板鳴後、則與長板有少時。此時須歸寮矣。

⑥瑩山清規［上ノ二丈］云、己香欲了時、聖僧侍者、問訊首座。是稟放禪也。即庫前雲版、三下鳴。是稱火板。是坐禪罷也。

瀧瀬尚純

【一四七一】巡火板

①舊説［敕修十二ノ十六丈］曰、掉火鈴、擊板、巡諸寮舍、而向僧堂。意報衆警火災也。

②敕修清規［下一ノ四十四丈］赴齋粥云、齋時候巡火板鳴。先歸鉢位。

③ 忠曰、蓋寮衆、赴僧堂齋粥。諸寮人少。故警之、令埋火愼災也。與火板也。須與火鈴交看。

④敕修清規法器章［下二ノ十九丈］云、版儆戒火燭、三下。

瀧瀬尚純

【一四七二】報廊板

①敕修清規聖節［上一ノ廿一丈］云、節内遇三八日。佛殿念誦。乃至參前巡廊鳴板。集衆。向佛排立。

② 雲章曰、巡廊鳴板者、先鳴方丈板、次鳴照堂板、次鳴衆寮、首座寮等板。謂之報廊板也。

③ 敕修清規念誦［上二ノ六丈］云、先鳴方丈板、照堂板、次巡廊鳴板。〈止此。〉解者曰、照堂在僧堂之後。亦可在衆寮之後。而今可言衆寮之照堂也。

④ 忠曰、但是僧堂之照堂也。不用復曲説。今見雲章所説、照堂板次、有衆寮板。可知雲章亦是爲僧堂之照堂也。又曰、巡廊鳴諸寮所掛板也。非持版巡諸寮鳴之。

⑤ 日用軌範入浴法［敕下一ノ五十一丈］云、古云、三通鼓響入堂時、觸淨須分上下衣。

⑥ 解者曰、浴時雖聽鼓聲、可有惑第幾浴者、故巡廊鳴板以報。浴之第一次、鳴板每一下、第二次、二下、第三次、三下、第四次、四下、名報廊板。

⑦ 忠曰、浴第一次、板一下等、又是一法。如敕修知浴中言、但是巡廊鳴板三下。〈止此。〉又云、鳴板三下徧。鳴鼓。止此。然舊解言。聽鼓後。方鳴板。恐謬説。

瀧瀬尚純

【一四七三】巡廊板

①即是報廊板也。

②敕修清規知浴［下一ノ三丈］云、次第巡廊鳴板三下徧、鳴鼓。

③ 解者［敕鈔八ノ十九丈］曰、諸餘清規、但鳴庫司板。今怕有不聞者。故巡諸寮而鳴板、此名巡廊板。亦云報廊板、毎寮鳴三下也。

④ 忠曰、徧于諸寮也。

瀧瀬尚純

【一四七四】浴室内小板

①敕修清規知浴［下一ノ四丈］云、室内掛小板。旁釘小牌書云、鳴板一聲添湯、二聲添水、三聲則止。以此爲節。

②備用清規知浴［七ノ八丈］云、室内小牌。白字一湯、二水、三滿。打小板。

【一四七五】洗脚板

①日用軌範［下一ノ八丈］云、洗脚板鳴、不得爭奪脚桶。〈其規詳彼〉

【一四七六】圓板

①學浪大師尊正規鐘板［下二十六丈］云、舊來鐘板、有横板直板、而方其式者。予茲獨以圓板、如滿月輪相。蓋以取諸從上圓相之儀。此圓相、不特潙仰家用。究其源來、自忠國師徒、六祖已上、遽相傳授。即五家亦何嘗不用。亦非曹洞寶鏡與五位有圓相也。世傳臨濟打板、則有一二三板之殊。打鐘則直是一槌、以表單行。曹洞則一板一鐘、二板二鐘、三板三鐘、以表兼帶。此亦世諦流布、無可不可也。雖然如是、祇如今以圓板、掛諸堂中、畢竟是箇甚麼意旨。■。

瀧瀬尚純

【一四七七】梆

①沙彌律儀入浴云。湯冷熱。依例擊梆。不得大喚。

② 忠曰。即是浴室内。小板也。三才圖會有梆圖。龍頭魚形。餘辨見木魚處。

③ 正字通［辰中五十一丈］云。梆博康切。音邦。梆木三尺許。背上穿直孔。今官衙設之。爲號召之節。或以竹截作筒兩頭留竹節旁鑿小孔。擊之有聲。亦曰梆。似古之用■。六書故因字从邦。謂聲邦邦肮。

④ 三才圖會［器用十二ノ卅三丈］云。梆即柝。易繫辨曰。重門擊柝。以待暴客。蓋取諸予。説文■夜行。令擊木爲聲。以待更籌者。是。俗曰蝦墓更■即柝。乃古今字耳。

瀧瀨尚純

【一四七八】椎

① 正字通［辰中七十一丈］云。椎直回切。音錘。擊物具。俗作槌鎚。集韻作棰。

② 北凉涅槃經［十三ノ十四丈］云。世法有五種名世。句世。縛世。法世。執著世。乃至何法世。如鳴椎集僧。嚴鼓誡兵。吹具知時。是名法世。

③ 敕修清規維那云、鐘鼓絶、鳴椎一下、衆展鉢。〈云云。〉又法器章［下二ノ廿丈］云、椎、齋粥二時、僧堂内、開鉢念佛、唱食遍食、施財白衆、皆鳴之。維那主之。下堂時、聖僧侍者鳴之。

④ 禪苑清規警衆［六ノ七丈］云、維那最初打槌一下者、衆僧開鉢也。〈隨槌聲白、念心經三卷。〉次打槌一下者、白設粥意也。〈或表歎讀疏。〉次打槌十下者、念十佛名也。次打槌一下者、首座施粥也。又打槌一下者、粥遍也。粥罷打槌一下者、衆僧下堂也。〈齋時、維那打槌、同晨粥之法。〉

⑤ 又赴粥飯［一ノ九丈］云、清淨法身等、下槌太疾、即打著佛脚。下槌太慢、則打著佛頭。

⑥ 聯燈會要鄧隱峯禪師章［五ノ二十四丈］云、師在襄州破威儀堂、只著襯衣、於砧槌邊立、拈起槌云、道得即不打。衆默然。師便打一下。

⑦ 正宗贊大通本禪師贊曰、沒巴鼻處、抛出入稜槌。

⑧ 解者曰、造槌爲八角、像須彌八方也。

⑨ 忠曰、有須彌爲椎之語。故作此説。

瀧瀨尚純

【一四七九】槌砧

① 舊説［敕鈔八ノ三十九丈。又十二ノ二十一丈］曰、承槌打之木。言槌砧。拈打小木。言槌矣。槌爲本器。爲槌而有砧。然交割簿。言椎砧附槌子。可笑。

② 敕修清規［下一ノ六丈］維那云、左手按砧。〈云云〉右手鳴椎。高不過五寸。聲絶方下椎。急緩合度。

③ 舊説［敕鈔八ノ三十九丈。又十二ノ三十一丈］曰、天竺那蘭陀寺。衆多堂廣。故七處設槌。方得其聲及衆。

④ 龍龕手鑑［七ノ六十丈］云、●砧通。正。陟林切。●衣石也。又●也。又鐵●等。忠曰、打椎言打靜。　行事鈔［上四●一ノ二十丈］説戒正儀篇云、維那。至上座前打靜處立。左手捉籌。右手捉打靜椎。其柄亦須香水淨已。〈乃至〉維那［二十三丈］打靜一下云〈云云〉。

⑤ 又諸雜要行篇［下四●一ノ二十七丈］云、打靜法。維那先戸外。具儀斂掌。傍門面入已。至打處立。合掌。右手取椎。擧起擬砧訖。然後打一聲。不得有重響。方乃臥椎。手從柄處將之。

⑥ 然後合掌。有所啓白、若有施與。咒願。唱告等得等。維那口陳其縁。

⑦ 不得打椎以爲事用。除爲衆亂等。　資持記云、傍門面者。隨左右頰而擧足也。擬砧使椎砧相當也。等得亦云等供。即大小食時。唱食平等。

⑧ 不下。制非法。準知。打椎。止爲白告靜衆。不同鐘磬。打爲事用也。

⑨ 舊説〔敕鈔八ノ三十九丈〕曰、槌砧。又名槌靜。

⑩ 忠曰、事鈔云打靜。聞律家言曰。靜有南北異義。北京曰。靜是能打。謂打椎靜衆之義。南都曰、靜是所打。謂靜即砧也。止此。按舊説是南都義也。

蘆田太玄

【一四八〇】槌●

①槌砧。又曰槌●。

②備用清規〔七ノ七丈〕維那云、至靜淨法身處。左手作蓋勢。側按槌●。右手打槌。高不過五寸〈詳如彼〉。

③正字通〔●中ノ四十一丈〕云、●音敦。平地有堆者。爾雅註。江東呼地高爲●。●同●。

蘆田太玄

【一四八一】遍粥椎

①校定清規〔敕鈔九ノ十三丈〕兩序進退云、堂中徧粥槌後。知事從後門入。都寺打槌一下。〈云云〉

蘆田太玄

【一四八二】遍食槌

①忠曰、通食名。通齋粥。

②舊説〔敕鈔一ノ十丈〕曰、遍食椎者。衆將揖上下肩。而喫三口食。已前。所擊一下。是也。

③禪苑清規〔六ノ七丈〕警衆云、十佛名。次打槌一下者。首座施粥也。又打槌一下者。粥遍也。

④敕修清規〔上一ノ十九丈〕聖節云、早粥遍食椎後。再鳴椎一下云。白大衆。〈云云。白啓建事〉又維那〔下一ノ六丈〕云。若施主齋僧行●。徧食椎後。從聖僧後。轉左邊。朝首座問訊。復鳴椎一下而出。爲請施財也。　又新戒參堂〔下一ノ二十七丈〕云、至期。早粥遍食椎後。新戒參頭。領衆入堂。聖僧前列問訊。

蘆田太玄

【一四八三】下堂椎

①禪苑清規〔六ノ七丈〕警衆云、粥罷打槌一下者。衆僧下堂也。住持人出堂。衆僧方可上鉢。〈齋時下堂、同晨粥之法。〉

②敕修清規〔下二ノ二十丈〕法器章云、椎下堂時。聖僧侍者鳴之。〈詳槌〉處

③解者〔敕鈔十五ノ六丈〕曰。維那鳴遍食椎後。出堂。故齋粥罷。衆下堂之椎。聖僧侍者擊之。

蘆田太玄

【一四八四】戒尺

①敕修清規〔上ノ七十三丈〕沙粥得度云、設戒師座几。與住持分手。几上安香燭手鑪戒尺。教苑清規〔上ノ七十三丈〕●髮儀云、几上安香燭花瓶戒尺。

②忠曰、兩小木。一仰一俯。仰者在下稍大。把上者擬下者。擊而鳴之。受戒專用之。故得戒尺之稱。

③余得古德受戒之具。其戒尺在下者。長七寸六分。厚六分。闊一寸一分餘。下面四邊。有縷面。

④在上者。長七寸四分。厚五分餘。闊一寸。上面四邊。有縷面。

⑤上木正中。竪安木鈕鈕長二寸五分。高七分。把鈕擊之。

【一四八五】尺　　蘆田太玄

①戒尺。或單稱尺。

②幻住清規［六十七丈］開甘露門法云、入座鳴尺一下。

③忠曰、傳大士。以尺揮●者。界尺也。見器物門界尺處。

【一四八六】磬　　蘆田太玄

①敕修清規［下一ノ二十一丈］沙粥得度云、作梵闍梨。鳴大磬作梵。又法器章［下二ノ二十丈］云。磬。大殿早暮。住持知事。行香時。大衆看誦經咒時。直殿者鳴之。

②唱衣時。維那鳴之。行者披剃時。作梵闍梨鳴之。

③祇園圖經［下ノ二十丈］云、佛衣服院。阿難所止。常護佛衣。有一銅磬。可受五升。磬子四邊。悉黄金。縷作過去佛弟子。又鼻上。以紫磨金。爲九龍形。背上立天人像。

④執玉槌。用擊磬。聞三千世界。音中。亦説諸佛教誡弟子法。磬是梵造之。及佛滅度。娑竭羅龍王收入海宮。

⑤石湖梅譜云、蝋梅凡三種。〈云云。〉經接北疎雖盛開。花常半含。名磬口梅。言似僧磬之口也。

⑥忠曰、僧磬與樂器磬。其形全別。樂器磬。板樣曲折。考工記［圖会器用三ノ十丈］所謂倨勾。一矩有半者。僧磬。如鉢形。祇園圖經云、可受五升。可知。天竺磬亦如鉢器矣。

⑦又梅譜。以梅花半含。比僧磬。支那僧磬之制。可知焉

⑧文獻通考［百三十四ノ二十三丈］云、銅磬。梁朝樂器也。後世因之。方響之制出焉。今釋氏所用銅鉢亦謂之磬。蓋妄名之耳。齋梁間文士。擊銅鉢賦詩。亦梵磬之類。胡人之音也。

⑨宋祁筆記云、樂石有磬。今浮屠。持銅鉢亦名磬。世人不識樂石。而儒者往往。不曉磬折義。故不獨不識磬。不能知鉢。

【一四八七】手磬　　蘆田太玄

①敕修清規［上一ノ三十四丈］達磨忌云、行者鳴手磬。維那出班。　又法器章［下二ノ二十丈］云、小手磬。堂司行者。常隨身。遇衆諷誦。鳴之。爲起止之節。

②解者［敕鈔三ノ二十三丈］曰、手磬日本禪林所謂鈴也。

③忠曰、小磬。手捧●鳴者。日本禪林。此名鈴矣。然鈴。本木舌内懸。倒掉鳴之。與所謂手磬全別。未知。手磬何因得鈴名耶。

【一四八八】引磬　　蘆田太玄

①忠曰、大清禪刹。小磬如桃大。底有竅。貫緒。連縛小竹枝。爲柄。以小鐵■擊之。名爲引磬。蓋因導導引衆故名。

②忠義水滸傳［九十ノ二丈］云、宋江參五臺山智眞長老。鳴鐘擊鼓。合寺衆僧。披袈裟坐具。到於法堂中坐下。宋江魯智深。并衆頭領。立於兩邊。

③引磬響。兩碗紅紗燈篭。引長老。上陞法座。

④忠曰、羅貫作此傳。是時有引磬目。

⑤敕修清規沙彌得度云、引請收坐具。起鳴手磬。引剃頭入入堂。　又亡僧［下一ノ五十七丈］云、齋粥。殿堂諷經罷。及放參罷。堂司行者。即鳴手磬。前引。首座領衆。至龕前。住持燒香畢。維那擧大悲咒。

⑥忠曰、敕修清規云、小手磬。行者常隨身。〈見手磬處〉其制似極小。已言鳴手磬前引。則即是可引磬矣。

蘆田太玄

【一四八九】鐃●

①敕修清規［下ノ二十丈］法器章云、鐃●。凡維那揖住持兩序。出班上香時。

②藏殿。祝贊轉輪時。

③行者鳴之。

④遇迎引送亡時。行者披剃。大衆行道。

⑤接新住持。入院時。皆鳴之。

⑥忠曰。清規鐃●非爲二物。

⑦然按杜氏通典文獻通考三才圖會［器用四ノ八丈］等。金鐃與銅■。全二物。諸韻書亦爾。到正字通初得鐃●爲一物之解。

⑧正字通［●上ノ八丈］云、●。蒲括切。音拔。銅今鐃●也。

⑨江湖紀聞后集［五ノ四丈］云、宋咸淳乙丑年。汀州苑宅。鑿畦爲沼。得鐃●一面。鈴杵無舌。方悟荒畦元廢寺也。

⑩杜氏通典［百四十四ノ六丈］云、銅●。亦謂之銅盤。出西戎及南蠻。其圓數寸。隱起如浮●。貫之以韋。相擊以和樂也。南蠻國大者。圓數尺。或謂齋穆王素所造。

⑪文獻通考［百三十四ノ十七丈］云、銅●。亦謂之銅盤。本南齋穆士素所造。其圓數寸。中間隆起。如浮●。出西戎南蠻扶南高昌疎勒之國。大者圓數尺。以韋貫之。相擊以和樂。

⑫唐之燕樂清曲。有銅●相和之樂。今浮屠氏清曲用之。蓋出於夷音。然有正與和。其大小清濁之辨歟。

⑬湖海新聞［後二ノ二丈］云、宋徽宗宣和元年。降手詔曰。按先天紀。●乃黃帝戰●尤之兵器。胡人之凶具。中國自不合用。云云。

⑭開封尹盛章奏。本府所納銅鐃●一萬六千六百三十六隻。計二萬六百二十斤一兩。

⑮忠曰、三才圖會有金鐃。其制大異銅●。今附録解惑。　圖會［器用四ノ八丈］云、金鐃。如火斗。有柄。以銅爲匡。疎其上。如鈴。中有丸。執其柄而搖之●其聲●●然。以止鼓。

⑯又曰、文獻通考有銅鐃。與金鐃制全別。其形如銅●小。

⑰日本名登比與字志者。巫●輩鳴之。大清來朝寺。用之。

⑱日本古禪刹。無此器。今亦附録。　通考［百三十四ノ十八丈］云、銅鐃。浮屠氏所用。浮●器小。而聲清。世俗謂之鐃。其名雖與四金之鐃同。其實固異矣。

⑲四言對有鐃圖。大似●。通考所謂銅鐃也。

蘆田太玄

【一四九〇】銅鑼

①忠曰、日本教家用之。●布帛以爲●。

②正字通［戌上五十七丈］云、鑼。郎何切。音羅。築銅爲之。形如盂。大者聲揚。小者聲殺。樂書有銅鑼。自後魏宣武。以後。好胡音。銅●沙羅。沙羅即鈔鑼。六書故曰。今之金聲。

用于軍旅者。亦以爲盥盆。按鑼非獨軍行用之。盥用鑼。尤迂泥。

蘆田太玄

【一四九一】火鈴

①忠曰、齋時振火鈴。〈見巡火板處。〉又二更一點。四更一點。並振火鈴。〈見二十五點處。〉儆戒火燭。故得火鈴名。

②瑩山清規［上ノ二丈］云、火版鳴。從庫下。諸寮前。遶寺。振火鈴。

③［上ノ五丈］又云、二更二點後。振火鈴。呼照願火燭。遶寺。自三門至方丈。還庫下。打二更三點。

④忠曰、瑩山云二點。與二十五點圖。少異矣。又照願火燭者。告衆警火之詞。

⑤破菴先禪師秀峯録［九丈］上堂云、開口即錯。擬心即差。倒攜蓆帽。飜著襴衫。看看。暮天欲雪。普請各宜照願。且道照願箇什麼。自云、照願火燭。

加藤佳祐

【一四九二】巡更鈴

①火鈴。又稱巡更鈴。

②普燈録［十三ノ十四丈］道宣知藏章云、久侍天衣。〈法聰〉無所契。衣叱之。宣忘寢食者月餘。一夕聞巡更鈴聲。忽猛省曰。住住。一聲直透青霄路。寒潭月皎有誰知。泥牛觸折珊瑚樹。衣聞。命職堂司。後住投子。凡有所問。以拂子。作搖鈴勢。

③忠按。巡更鈴。本官家。有傳夜鈴之法。而叢林擬之乎。史記［百九ノ二丈］李廣傳。刀斗註云、荀悅云、刀斗小鈴。如宮中傳夜鈴也。〈止此〉又文獻通考［百卅四ノ廿三丈］云、漢書舊儀。中宮衞宮城門。擊刀斗。纂文曰、刀斗。特時鈴也。〈止此〉又揚子方言［十三ノ九丈］云、無升謂之刀斗。註謂小鈴也。音貂。見漢書。

加藤佳祐

【一四九三】木魚

①日用軌範［敕修下一ノ四十七丈］云、木魚響。不得入堂。或令行者取鉢。堂外坐。

②敕修清規法器章云、木魚。齋粥二時。長擊二通。普請僧衆。長擊一通。普請行者。二通。

③宋孟元老東京夢華録［三ノ八丈］云、每日交五更。諸寺院行者。打鐵牌子或木魚。循門報曉。亦各分地方。日間求化。諸趨朝入市之人。聞此而起。

④忠曰、鐵牌子。蓋謂鐵板也。

⑤已下。録象魚義。

⑥敕修清規［下二ノ十九丈］法器章木魚云、相傳云、魚晝夜常醒。刻木象形。擊之。所以警昏惰也。

⑦釋氏要覽［下ノ卅六丈］云、今寺院木魚者。蓋古人不可以木朴擊之。故刻魚象也。又必取張華相［桐乎］魚之名。或取鯨魚一擊。蒲勞爲之大鳴也。

⑧劉斧摭遺［句府魚句］云、僧舍木魚者。魚晝夜不合目。修行者。忘寐修道。魚可化龍。凡可入聖。

⑨教苑清規［下ノ八十八丈］云、木魚婆沙云、有僧違師毀法。墮魚身。背上一樹。風涛搖擺。出血苦痛。本師渡海。魚遂遂作■云、汝不教我。致墮魚報。今欲報怨。師曰、汝

名甚麼。魚曰某甲。師令懺悔。復爲設水陸追拔。夜夢。魚曰、已脱魚身。可將我樹捨寺。以親三寶。師果見魚樹。刻魚形。懸掛警衆。

⑩又或。引玄奘指歸曲云、玄奘自天竺歸。經蜀道。有一長者。喪妻。有兒甫三歲。後母惡之。伺長者出獵。棲上擲兒。投水中。長者悲哀。爲設齋僧。適遇奘至。喜迎。請第一座。奘不食。語曰、我歷長途疲矣。欲得魚肉喫之。一座大驚。長者欲出買之。奘囑云、非大魚。不可也。長者如教。求獲而回。方上俎割之。所沒之兒。啼在魚腹中。長者大歡。奘曰、此兒夙世持不殺。故今雖被魚呑。不死。長者曰、如何報魚恩。奘曰、木雕魚形。懸之佛寺。齋時擊之。可以報魚德。今之木魚。是也。〈元本和語。忠今改綴。〉

⑪忠曰、余曾檢阿毘達磨大毘婆沙論二百卷。阿毘曇毘婆沙論八十卷。並無木魚緣。五百問經［上ノ十六丈］有師不教誡弟子。死墮龍中。害昔師。蓋妄漢。依託搆説。玄奘魚腹得兒事。慈恩傳不載。亦恐以薄拘羅事捏合。今故録。標其妄矣。

⑫三才圖會［器用三ノ四十五丈］云、木魚。刻木爲魚形。空其中。敲之有聲。釋氏謂、閻浮提乃巨鰲所戴。身常作癢。則鼓其鬐。川山爲之震動。故象其形。擊之。此荒唐之説。然今釋氏之贊。梵唄。皆用之。

⑬忠曰、巨鼇戴山。出乎列子〈湯問〉釋氏本無此説。釋氏説世界。有水輪。金輪。風輪而已。且道。何經律論。説鼇戴閻浮提哉。然則荒唐之咎。歸于汝矣。大抵腐儒。誣罔如此者不一。又按圖會木魚圖。魚頭尾自相接。其形團圞。今清國僧。稱木魚者。作龍二首一身。鱗背兩口相接。銜一枚珠之形。亦空肚團圞。蓋與圖會木魚同。諷唱時。專敲之。以成節。如粥飯所擊木魚。却非首尾團聚者。按圖會梆圖。龍頭魚身。形挺直。即是粥飯所擊。木魚也。余以謂、梆未見爲魚形之説。恐圖會以粥飯所用。庫堂木魚。誤成梆圖歟。今摸圖會二圖。令識者揀焉。

⑭三才圖會器用部木魚圖

⑮三才圖會器用部梆圖

⑯　已下略録機緣。

⑰傳燈録［九ノ五丈］潙山祐禪師章云、庫頭擊木魚。〈詳職位類火頭處。〉

⑱神鼎禪師録［古宿廿四ノ十五丈。会元十一ノ五十六丈。五灯不収。］云、官人指木魚問、這箇是什麼。師云、驚回多少瞌睡人。官云、洎不到此間。師云、無心打無心。

⑲雪巖欽禪師佛日録［上ノ九丈］云、佛殿脊金鴟。■跳上天。厨堂口木魚。走入滄海。

⑳　已下略録賦咏。

㉑聯燈會要［廿六ノ九丈］。智門寛禪師章云、師訪白兆。兆云、老僧有箇木魚頌。師云、請擧看。兆云、伏惟爛木一橛。佛與衆生不別。若以杖子擊著。直得聖凡路絶。師云、此頌有成褫。無成褫。兆云、無成褫。師云、佛與衆生不別。瀆。左右救云、有成褫。師云、直得聖凡路絶。瀆。當時白兆一衆。失色。

㉒葉縣省禪師録［古宿廿三ノ廿一丈］木魚謌云、木魚謌木魚謌。横身三界臥。擺頭掉尾瞬金鱗。凡聖縱横不奈何。老胡聞。聳耳聽。聲聲振動古佛心。逍遥自在無私曲。蕩蕩行時任騰騰。指日月。太山崩。踴踴躍躍魔軍驚。哮吼吟時雲隊隊。大洋海底霹靂聲。

㉓佛眼遠禪師録［古宿廿卷廿一丈］木魚頌云、無端擊此溝中斷。鐘鼓相參無雜亂。能聞所聞非二緣。以此及此通回換。凡夫何故作追攀。達士若爲成智觀。可憐流入薩婆若。醉眠尚爾排魚貫。

㉔東山外集［上ノ廿四丈］和壽山木魚韻。頌云、透出波瀾外。横身任探尋。只知打我腹。不

覺痛他心。香積晨炊熟。秋廊夜月深。重重報君道。千眼是觀音。

㉕ 東坡詩集［一ノ十一丈］宿蟠桃寺詩云、板閣獨眠驚旅枕。木魚曉動隨僧粥。

加藤佳祐

【一四九四】桐魚

①藏叟摘藁［下ノ三十三丈］崇福講經修兩廊兼化粮疏云、風鑾鳴檻。看兩行鐵鳳高飛。曉粥上鍋。聽三疊桐魚普説。

②晉書［列傳六ノ十五丈］張華傳云、呉郡臨平岸崩。出一石鼓。槌之無聲。帝以問華。華曰、可取蜀中桐材。刻爲魚形。扣之。則鳴矣。於是如其言。果聲聞數里。

加藤佳祐

【一四九五】魚鼓

①木魚。又名魚鼓。

②普燈録［一ノ十九丈］神鼎諲禪師章云、僧鼓未鳴時如何。曰看天看地。云鳴後如何。曰捧鉢上堂。

③ 已下略録賦咏。

④趙州諗禪師録［古宿十四ノ廿八丈］魚鼓頌云、四大猶來造化功。有聲全貴裏頭空。莫怪不與凡夫説。只爲宮商調不同。

⑤雪峯存禪師録［偈頌二丈］咏魚鼓頌云、我暫作魚鼓。懸頭爲衆苦。師僧喫茶飯。拈槌打我肚。身雖披鱗甲。心中一物無。鸕鷀横谿望。我誓不入湖。 又云、可憐魚鼓子。天生從地養。粥飯不能飧。空肚作聲響。時時驚僧睡。懶者煩惱長。住持鬧喧喧。不如打游漾。

加藤佳祐

【一四九六】石魚

①忠曰、佛寺又有石作魚鼓者。

②泰淮海集［後集一ノ四丈］石魚詩云、佛宮琢琳瑯。懸魚警群聰。緩扣集方袍。急拊趨百工。雖無荀虞器自協徵與宮。犂然當人心。邈有炎氏風。山泉自疎數。珮玉相玲瓏。朝昏間鐘鼓。清響傳無窮。惟有寶陀山。於音獲圓通。一聞如得解。石鞏亦投弓。

加藤佳祐

【一四九七】開枕

①日用軌範云、候首座開枕後。困重者。就寢。

②敕修清規［下一ノ四十四丈］大坐參云、聞首座開枕響。衆方偃息。在道兄弟。不以此拘。〈詳叢軌類。再請禪處。〉

③ 忠曰、言開者開闔之開也。開摺枕。備于臥用。首座示衆可安息之意。故展開枕。故令有響也。

④ 舊説［敕鈔十二ノ十四丈］曰、枕制令可摺。名橋枕。〈見器物類〉更深。住持亦出堂。故困重者。聞首座開枕。可少偃息耳。若其全身。在道中者。可不問時節。豎起脊梁骨。何必事臥息耶。

加藤佳祐

【一四九八】二十五點

①○鼓更 ●版點

白圈鼓、爲更、黑圈版、爲點。 點局更點。此爲準。

唐書百官志云、漏刻博士、更以擊鼓、爲節。點以擊鐘爲節。

●版更 □柝點

黑圈。版、爲更。白方、柝、爲點。 巡點更點、此爲準。

②初更

昏鼓三通。擊法、見昏鼓處。 次■鼓■三通。

一點○●。○●。○●。點局鼓板。庫司大鼓大版同、 已下例知、此三板、爲出寮板捲簾也、

●□。●□。●□。巡點版柝。堂前［三体詩鈔上］、首座寮、衆寮、方丈、巡廊合鼓板、擊之、

已下例知。

忠曰、餘觀日本更點之圖數本、竝打初更一點。今按謝擊■説、初更不打第一點、第二點、而自第三點發。

於此禁夜行人。五更到第三點而止。於此放行人。乃不打第四點第五點。余此圖之後、詳引、依此、則日本

更點打初更一點者、非也。

大鐘一通半。以三十六下、爲一通。一通半。實五十四下。其法、初十八緩打、次十八斂打。又次十八緩

打。都五十四下。候二點。若打二點、則可到此打二鼓板、然後鳴次下大鐘。然二點省不打、故直接此大

鐘。又鳴大鐘一通半。

又鳴大鐘一通半。合前三通、都一百八下也。

此名昏鐘。昏鐘鳴、點燈、鐘第一通。都寺、入佛殿燒香、鳴殿鐘三下、正面三拜、自庫司山門、至僧堂■

前、炷香歸位。

第三通時、住持入殿燒香。鳴殿鐘七下、蓋祖堂一下、普■一下、土地一下、三尊三下、正面禮拜一下。自

庫司山門、至僧堂■前、燒香、巡堂一■、歸位。 住持入堂時、昏鐘三通終。

首座聞住持燒香鐘、出寮入堂、■前燒香、歸位。

次■鼓■三通。

三點○●●●。○●●●。○●●●。

●□□□。●□□□。●□□□。

忠按、中華初更、省第一點第二點。與五更省四五二點、都二十一點矣。如日本二十五點圖、去五更四五同

中華。至初更、但去第二點。然則打者、二十二點。故敕修清規大坐參［十二ノ十四丈］舊解云、初更一點、

鼓一板一、如此三度。次初更二點間、鳴大鐘三通、總百八下。鐘絶、初更三點之後、鐘鼓不共鳴。去可鳴

大鐘一通半之頃、然後初更四點、鼓一板四、如此三度。又少時、初更五點、鼓一板五、如此三度、更經少

時、鳴鐘十八下、此謂定鐘。

四點○●●●。○●●●。○●●●。

●□□□。●□□□。●□□□。

五點○●●●。○●●●。○●●●。

●□□□。●□□□。●□□□。

南禪規式、版柝、但於初更五點、及四更五

點鳴之。餘不鳴版柝。

定鐘十八下。初更五點後、經少時、鳴之。坐禪於是止、又有少時、打二更。

瑩山清規云、一更三點之後、鳴定鐘。如前定鐘處辨。

③二更

一點○○●。○○●。○○●。
●●□。●●□。●●□。
鳴火鈴。呼照顧火燭、巡廊警火、點局行者、掌之。或云、鳴火鈴、在二更二點後、火鈴之後、諸寮收燈。
自次二點、至四更一點、庫司番頭者、主之、
二點○○●●。○○●●。○○●●。
●●□□。●●□□。●●□□。
三點○○●●。○○●●。○○●●。
●●□□。●●□□。●●□□。
四點○○●●。○○●●。○○●●。
●●□□。●●□□。●●□□。
五點○○●●。○○●●。○○●●。
●●□□。●●□□。●●□□。

④三更

一點○○○●。○○○●。○○○●。
●●●□。●●●□。●●●□。
二點○○○●。○○○●。○○○●。
●●●□□。●●●□□。●●●□□。
三點○○○●。○○○●。○○○●。
●●●□□。●●●□□。●●●□□。
四點○○○●。○○○●。○○○●。
●●●□□。●●●□□。●●●□□。
五點○○○●。○○○●。○○○●。
●●●□□。●●●□□。●●●□□。

⑤四更

一點○○○○○●。○○○○○●。
諸寮點燈。
■鼓■。收時、大疎七下。
都寺諸堂燒香、入堂■前燒香、歸位坐禪。
○○○○●。南禪規云、■鼓■畢、復打四更一點者一遍。
●●●●□。●●●●□。●●●●□。
鳴火鈴。警火也。點局行者掌之。
衆僧入僧堂坐禪。
大坐參云、次早三下板鳴、衆起。聖僧侍者、牽堂内手巾轆轤、驚酣眠者。起洗面、衆歸堂。
二點○○○○●●。○○○○●●。○○○○●●。
●●●●□□。●●●●□□。●●●●□□。
前堂首座入堂、住持隨後入堂。大坐參云、首座入燒香巡堂、次住持入燒香巡堂。
三點○○○○●●●。○○○○●●●。○○○○●●●。
三更五點後、報方丈首座寮都寺寮、以打四更之點。
●●●□□□。●●●□□□。●●●□□□。

●●●●□□□。●●●●□□□。●●●●□□□。

住持於二點三點前後、隨意入堂。　南禪規式云、住持入堂、■前燒香、巡堂歸位。

四點○○○○●●●。○○○○●●●。
○○○○●●●。
●●●●□□□。●●●●□□□。
●●●●□□□。

五點○○○○●●●●●。○○○○●●●●●。○○○○●●●●●。
●●●●□□□□□。●●●●□□□□□。●●●●□□□□□。

五點。住持出堂、次首座出堂、大衆隨意。　大坐參云、四鼓鳴、住持出。

⑥五更

一點○○○○○●。○○○○○●。
●●●●●□。●●●●●□。
二點○○○○○●●。○○○○○●●。
●●●●●□□。●●●●●□□。
三點○○○○○●●。○○○○○●●。

■鼓■。
○○○○○●●●。南禪規云、■鼓■復打。五更三點者一遍、
●●●●□□□。●●●●□□□。
●●●●□□□。

大鐘三通。每一通、三十六下。初十八緩、後十八斂。如是三通、合一百八下。然後鳴開靜。　大坐參云、鐘鳴、首座出。

南禪規式云、五更四點五點、不打鼓板。鳴大鐘配之。　忠曰、約大鐘一通半、到四點。復一通半、到五點。禪苑清規警衆云、五更鳴大鐘者、警睡眠也、

■鼓■。　次曉鼓三通。兼板同擊。　擊法、見曉鼓處。

⑦宋洪邁俗事考云、漢書斥候士百餘人、五分夜、擊■斗自守。師古曰、夜有五更。故分而持之。唐六典、太史門典鐘二百八十人。掌鐘漏。故詩云、促漏遥鐘動靜聞、其漏五五相遞。凡二十五、故李■詩云、二十五聲秋點長。韓退之詩、三號更五點。宋宮而及州縣更漏、皆去五更後二點。又■初更、去其二點、首尾止二十一點。至今仍之。故曰、一更三點、禁人行。五更三點、放人行。宋太祖以鼓多驚寢、遂易以鐵磬、此更鼓之變也。或謂之鉦。即今之雲板也。陳履常詩、殘點連聲殺五更。汪元量詩、亂點傳籌殺六更。今報更、■■、鼓將盡、則雲板連敲。謂之殺更。衞公兵法曰、鼓三百三十三槌、爲一通。角吹十二聲、爲一疊。鼓止角動也。司馬法曰、昏鼓四通、爲大■。夜半三通、爲晨戒。旦明三通、爲發餉。今早晚、各止三通也。其鐘聲、則一百八撞、以應十二月二十四氣、七十二候之數。

⑧楊升菴外集［九ノ七丈○又丹鉛三ノ五丈］云、夜漏、五五相遞、爲二十五。唐李郢詩、二十五聲秋點長。韓退之［集三ノ八丈］詩、鷄三號唐五點。是也。至宋世、國祚長短讖、有寒在五更頭之忌。宮掖及州縣更漏、皆去五更後二點。又并初更、去其二、以配之。首尾止二十一點、非古也。至今不改焉。

⑨品字箋［壬ノ九十三丈］云、宋時有寒在五更頭之讖。始絶去五更之後二點。因而又去初更之前二點、以配之。嗣後相沿。初更以三點起、五更以三點終。世遂有一更三點禁人行、

五更三點之説。

⑩ 琅邪代醉編［一ノ六十丈○■山四十二ノ一丈］云、宋祖匡胤、建隆庚申、受禪。後聞陳希夷只怕五更頭之言、命宮中、轉六更。方嚴鼓鳴鐘、殊不省庚與更同音也。至理宗景定元年、歷五庚申、越十七年。宋亡。而希夷五更頭之數、信矣。到元朝延祐七年庚申。而至正帝順帝生。帝乃宋少帝趙顯南宋孝恭子。我大明兵入燕都、遁去。當時人、只呼庚申帝。劉尚賓庚申帝大事記、是也。後方號順帝云。由是觀之、則宋祖命轉六更數、亦不爽。

⑪ 謝肇淛文海披沙［五ノ十八丈］云、入夜每更五點、遞爲二十五點。李郢詩、二十五聲秋點長。是也。今禁漏、首尾二更、去二點者、蓋昏鐘禁鼓一動、郎禁人行。初更二點、夜末深、後二點、天將曙。皆不宜禁者、故三點爲起止耳。今人不知、以爲起於宋太祖因五更頭之讖、遂去之。不知宋太祖、因此讖、令宮中皆轉六更。然後鳴鐘、又何嘗禁初更耶。

⑫ 代醉編［一ノ六丈］云、■精■云、宋内五更絶、■鼓遍作。謂之蝦■。更其時禁開、而百官入。所謂六更也。如方外之■點、即今之發擂耳。七修類纂。

⑬ 楊誠齋江東集［一ノ十六丈］詩、醉眠管得銀河鵲、天上歸來打六更。自注云、予庚戌考試、殿盧夜漏、殺五更之後、復打一更。問雞人、云宮漏有六更。

⑭ 忠曰、餘觀日本禪林二十五點圖數本、皆未得初更後更省點來由。或曰、五更四點五點、則混開靜聲。故聞之不分明。可笑。又除前後二點之義、至謝肇淛、初得其理焉。又如中華、初更省第一點第二點、此方但去第二點。又有以鐘十八下、爲一通者。竝非也。

⑮ 又舊説曰、昔慈照相公。命京師五山、令擊二十五點。而今已廢焉。但今略法、初更如常式。二更唯一點而止。及三更、相接擊四更五更。不管時辰、次相接鳴鐘九十下、遺十八下、及開靜鳴之、總一百八下也。止此。忠謂、敕修清規［下ノ四十四丈］大坐參云、鐘絶、開靜板鳴。止此。然則非鐘與開靜板同時鳴、可知之。

⑯ 因録天竺城門開閉。雜阿含經［廿二ノ十六丈］云、王家常法、待遠使命來往。至初夜盡、城門乃閉。中夜已盡、輒復開門。欲令行人早得往來。

⑰ 五更義。顔氏家訓［下ノ廿七丈］云、或問、一夜何故五更、更何所訓。答曰、漢魏以來、謂爲甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜。又云鼓。一鼓二鼓三鼓四鼓五鼓。亦云一更二更三更四更五更。皆以五爲節。西都賦亦云、衞以嚴更之署。所以爾者、假令正月建寅。斗柄夕則指寅。曉則指午矣。自寅至午、凡歷五辰。冬夏之月、雖復長短參差。然辰間遼闊、■不至六、縮不至四。進退常在五者之間。更歷也。經也。故曰五更爾。

瀧瀨尚純

【一四九九】早晨鳴器品次

① 五更三點後。百八鐘〈禪苑　南禪規〉

〈舊説曰、百八鐘、先九十下、遺十八下及大閉靜鳴之、忠曰、若然、十八下、可在小開靜後〉

② 戛鼓磉。曉鼓三通〈南禪〉

〈敕修云、更鼓、早晚平擊三通〉

③ 廚下小鐘三會。小開靜。〈禪苑［六ノ八丈］　瑩山〉

〈此候五更四點時

禪苑云、諸寮供過行者、及燈頭等、竝皆先起、日用軌範云、開小靜、摺被、蓋非也〉

④ 厨前雲版三通。大開靜〈瑩山　禪苑［七ノ八丈］爲一會〉

〈此候五更五點時衆僧齊起、
鼓版一時和鳴、自緩到急、此時處處板、亦同時鳴、
禪苑、永平瑩山、皆云、大開靜摺被、大坐參云、鐘絶開靜板鳴、摺被、此是大開靜、蓋百八鐘、經四點五點時到
此聲絶〉

⑤火鼓〈校定〉

⑥長擊版三通〈大版　禪苑　校定〉

〈禪苑此名長板方下鉢、
禪苑云、次打長板者、衆僧下鉢也、衆僧一時入堂、次打木魚衆僧集定也。
校定清規［上ノ二十八丈］云、長板者、火鼓後、長擊三會者、是也、非木魚後三下者今叢林、皆以三下板爲長板
方行禮、今只隨時可也
忠曰、禪苑長板、未言幾通到校定方言三會日用清規云、聞木魚後長板可知壽無量時、已謬以三下疊疊爲長板也、
校定所謂今叢林、皆以三下板爲長板者、是也
竺仙曰、開靜後、長擊三通者、此名長板
忠曰、竺仙説、合禪苑校定不合日用清規敕修清規也、如日用敕修以三下疊疊名長板且隨時訛耳、又竺仙時、敕
修清規未撥成〉

⑦十八鐘〈鳴大鐘　敕修〉

〈按敕修法器章十八鐘、在堂前鐘七下已前又赴齋粥云、近時諸方往持、大鐘鳴時、先入堂坐〉

⑧木魚三通〈長擊　禪苑〉

〈衆僧集定、舊説［敕鈔十五ノ六丈］曰、十八鐘後、鳴木魚禪苑云、次打木魚衆僧集定也〉

⑨版三下疊疊〈大板　敕修〉

〈日用、敕修、此名長板下鉢、
日用清規云、聞木魚後長板鳴下鉢、
敕修［下二ノ十九丈］云、木魚後、三下疊疊擊之、謂之長板
忠曰、敕修已前、日用清規時、已謬、校定亦只隨時、敕修亦從流傳乎
竺仙［鈔十四ノ三十八丈］曰、十八鐘後、三下板、名長板非也、
忠曰、竺仙説、合禪苑校定〉

⑩問訊鼓三通〈禪苑　此鼓在庫前　又名下鉢鼓〉

〈禪苑云、三通鼓鳴者、住持人赴堂也〉

⑪堂前鐘七下〈與問訊鼓同時鳴、禪苑敕修舊説、此名斂鐘〉

〈禪苑云、堂前小鐘子鳴者、衆僧下床、祇候問訊住持人也、敕修云、僧堂鐘、住持入堂時、鳴七下、瑩山云、庫前
雲鼓三會堂前小鐘同鳴、報主人入堂也〉

⑫舊説［敕鈔十二ノ十六丈十七丈］曰。竺仙曰。住持十八鐘可入堂。或曰。住持問訊鼓可入堂。
何故。曰十八鐘時未下鉢。〈忠曰此依〉〈敕修〉至問訊鼓方下鉢。爲鉢妨下床。且屏之。〈禪
苑云、放鉢、須當上肩〉及住持入堂。即下床迎住持。住持上床畢。衆却就座。安鉢正面。
按一説。住時問訊鼓入堂者。近理。蓋堂前斂鐘。與問訊鼓。同時鳴之。而清規每云堂
前鐘七下。住持入堂故。

⑬忠曰。敕修清規［下一ノ四十五丈右］赴齋粥云。近時諸方住持。大鐘鳴時。先入堂坐。
止此。乃知。竺仙謂十八鐘入堂者。諸方異規。何校是非。又或謂十八鐘未下鉢。只
依敕修三下疊疊下鉢也。然竺仙固主張開靜後。長擊三通板下鉢。故十八鐘已前。既
下鉢而已。

【一五〇〇】齋前鳴器　（窪田顕脩）

①巡火板

〈敕修［下一ノ四十四丈］赴齋粥云、齋時、候巡火板鳴先歸鉢位〉

②三下板〈禪苑［六ノ七丈］　衆僧下鉢、是名火板〉

〈忠曰、單三下也、日本此謂三鐘　按禪苑如晨粥時以長擊三通下鉢、齋時以三下板下鉢〉

③長板〈長擊三通〉

〈敕修法器章云、大版、齋粥二時、長擊三通〉

④大鐘〈十八下［南禅上ノ九十丈］、禪苑報齋時〉

⑤木魚〈二通〉

〈敕修木魚云、齋粥二時、長擊二通〉

⑥三下疊疊板

〈敕修云、大版、齋粥。云云。木魚後、三下疊疊〉

⑦問訊鼓。三通〈又名下鉢鼓〉

〈禪苑［六ノ七丈］云、三通鼓鳴者、住持人赴堂也、堂前小鐘子鳴者、衆僧下床、祇候問訊住持人也〉

⑧堂前小鐘

〈禪苑［六ノ七丈］云。齋前聞三下板鳴者。衆僧下鉢也。次鳴大鐘者。報齋時也。自餘長板魚鼓。堂前小鐘。維那打鎚。食畢下堂。竝同晨粥之法〉

（窪田顕脩）

第廿八類器物門

【一五〇一】常住物

①碧巖録［十ノ十九丈］云。洞山和尚。一生住院。土地神。覓他蹤迹。不見。一日厨前。抛撒米麪。洞山起心曰。常住物色。何得作踐如此。土地神。遂得一見。便禮拜。

②　忠曰。常住物。謂四方僧物也。

③釋氏要覽［下ノ二十九丈］云。律有四方僧物。鈔言十方常住。有師釋云。四則攝彼方隅。十則該乎凡聖。謂此一住處。所有之物。雖局一界。而體屬十方一切僧伽。又［下ノ三十一丈］云。鈔云。僧物有四種。一者常住常住。謂衆僧舍宇什物。樹木田園。僕畜米麥等物。以禮局當處。不通餘界。但得受用。不通分賣。故重言常住也。二者十方常住。謂如一寺中供僧。成熟飲食等。以體通十方。唯局本處。善見律云。不打鐘食。犯盜罪〈今諸寺同食、食既成熟、乃打鐘鼓者、此蓋召十方僧故、以此物、十方有分故〉三現前常住。此有二種。一物現前。二人現前。但此物。唯施此處現前僧故。四者十方現前常住。謂亡僧輕物。施體通十方。唯局本處現前僧得分故〈大毘婆沙論、問云、盜僧物於誰處得根本業道答若已作羯磨者、於羯磨衆處得、若未作羯磨者、普於一切善説法衆得、今詳分亡僧物十方來僧、在羯磨數即得、羯磨後來不得〉

④　忠曰。所援行事鈔［中ノ一巻二十九丈］在隨戒釋相篇要覽依彼文取意潤刪。太便於辨相。故今却引用。

⑤　又與區字類常住。交看。

⑥大實積經［百十三ノ十九丈］。寶梁聚會云。佛言。若所用物。所謂常住僧物。及與佛物。若招提僧物。彼營事比丘。應當分別。常住僧物。不應與招提僧。招提僧物。不應與常住僧。

常住僧物。不應與招提僧物共襍。招提僧物不應與常住僧物共襍。常住僧物。招提僧物。不與佛物共襍。佛物。不與常住僧物。招提僧物共襍。

⑦ 十誦律［三十五ノ四丈］云。佛迦尸國遊行。迦羅山諸比丘。聞之以僧房作四分避藏。諸客比丘。諸處立。待臥具分。佛告阿難。約舊比丘。言。此處僧房。作四分與四比丘。非是僧物。佛不聽分僧房〈略鈔〉

（窪田顕脩）

【一五〇二】什物

① 敕修清規［上二ノ十五丈］當代住持受請云。知客引專使。巡寮畢。次第呈納本寺須知。儀從什物。又［上二ノ二十五丈］交割砧其什物云。入院後。須會兩序勤舊茶。詳細詢問山門事務。砧其契書什物。逐一點對交割。

② 華嚴經［七十六ノ二十四丈］入法界品天主光女章云。我憶念過去。供養恆河沙數。諸佛。造僧伽藍。營辨什物。

③ 瑜伽師地論［二ノ十六丈○又四十ノ十丈］明十種身資具。第八云。什物之具。

④ 玄應一切經音義［二ノ十一丈○四ノ九丈同○又十五ノ中一丈同○又二十四三丈］云。什物。時立切。三蒼［名第集三ノ四十四丈引用］什十也。什聚［要覧中ノ七丈］也雜也。亦會數之名也。又謂資生之物也。今人言家産器物。猶云什物。物即器也。江南名什物。北土名五行。史記舜作什器於壽丘。漢書貧人賜田宅什器。竝是也。

⑤ 慧琳［十ノ八丈］一切經音義云。什物。音十。舊音義云。什衆也。雜也。會數之名也。資生之物。謂之什物也。字鏡云。物即萬物也。牛爲大物。天地之起牽牛故。物字從從牛勿聲也。

⑥ 史記［一ノ二十一丈○敕鈔六ノ十五丈白会ヲ引ク］五帝本紀云。舜作什器於壽丘。索隱云。什器。什數也。蓋人家常用之器非一。故以十爲數猶今云什物也。

⑦ 經國大典注解［後集上ノ五十六丈］云。什物。什數也。所用之物。非一。故曰什。擧成數也。猶言若干也。

⑧ 後漢書［傳ノ十七ノ一丈］宣秉傳云。秉性節約。常服布被。蔬食瓦器。帝見而歎。賜布帛帳帷什物。章懷注。軍法五人爲伍。二五爲什。則共其器物。故通謂生生之具。爲什物。〈忠曰、此本前漢［十二ノ二丈］平帝紀師古解什器字者也〉

⑨ 傳燈録［十ノ二十四丈］甘贄行者章云。有住菴僧。緑化什物。甘曰。若道得即施。乃書心字問。是什麽字。僧云。心字。又自問其妻。什麽字。妻云心字。甘云。某甲山妻。亦合住菴。其僧無語。甘亦無施。

⑩ 文中子［四ノ六丈周公篇］云。邳公好古物。鐘鼎什物珪璽錢。具不具。

（窪田顕脩）

【一五〇三】調度

① 傳燈録［三十ノ二十四丈○諸祖偈下？上ノ十三丈］蘇溪和尚牧護歌云。一條百納餅盂。便是生涯調度。

② 永平清規典座教訓［三十丈］云。盤桶。并什物調度。精誠淨潔洗潅。

③ 行事鈔［下二之三ノ一丈］鉢器制聽篇注云。房舍衆具。五行調度。

④ 資持記云。謂調養具度即衆物之通名。

⑤ 史記［一ノ二十一丈］五帝本紀云。舜作什器於壽丘。正義云。顔師古云。軍法伍人爲二伍爲什。則共器物。故爲生生之具。爲什器。亦猶從軍及作役者。十人爲火。共畜調度

也。

（窪田顕脩）

【一五〇四】道具

①忠曰、凡三衣什物、一切資助進道之身物具、名爲道具。則此目、齊于僧家。然和俗通稱度世器物、爲道具。失義遠矣。叢林諺語、亦名羅紗直裰爲道具衣。道具名、豈獨在茲哉。

②傳燈録［六ノ廿二丈］、禪門規式云、施櫃架、掛搭道具。〈詳櫃架處〉

③敕修清規［下一ノ廿八丈］辨道具云、將入叢林、先辨道具。

④清規所列、三衣、坐具、偏衫、裙、直裰、鉢、錫杖、拄杖、拂子、數珠、淨瓶、濾水囊、戒刀。

⑤華嚴經入法界品寶髻長者章云、如諸菩薩得不思議功德寶藏。〈乃至〉修無分別功德道具。又［六十八ノ十三丈］觀自在章云、善財、作如是念。善知識者、至一切智、助道之具。

⑥釋氏要覽［中ノ六丈○清規下一ノ廿八丈］云、道具、中阿含經云、所蓄物、可資身進道者、即是增長善法之具。菩薩戒經云、資生順道之具。

⑦摩訶僧祇律［三ノ九丈］云、隨物者、三衣、尼師壇、覆瘡衣、雨浴衣、鉢、大犍鎡、小犍鎡、鉢囊、浴囊、漉水囊、二種、腰帶、刀子、銅匙、鉢支、鍼筒、軍持、澡罐、盛油皮瓶、錫杖、革屐、傘蓋、及餘種種所應畜物、是名隨物。

⑧十八物者、一楊枝、二澡豆、三大衣、四七條衣、五五條衣、六瓶、七鉢、八坐具、九錫杖、十香爐、十一漉水囊、十二手巾、十三刀子、十四火燧、十五鑷子、十六繩床、十七經律、十八佛菩薩像。〈詳楊枝處〉

⑨百一物者、釋氏要覽［中ノ六丈］云、百一物、大槩之辭也。薩婆多論云、百物、各可蓄一也。

⑩行事鈔［下一之二ノ九丈］二衣総別篇云、薩婆多云、百一物、各得蓄一。百一之外、皆是長物。

⑪俱舍論［十一ノ七丈］遁麟記、解百一雜寶云、有餘云、百者、凡義、謂凡是諸物皆一。故言百一。

⑫傳燈録［二十ノ九丈］雲居道簡禪師章云、師久入雲居〈道膺〉之室、密受眞印。以臘高居堂中爲第一座。屬膺和尚、將臨順寂。主事僧問、誰當繼嗣。曰、堂中簡。主事僧、雖承言。而未曉其旨。謂之揀選、乃與衆僧僉議、擧第二座、為化主。然且備禮先請第一座。必若謙讓。即堅請第二座。焉、時簡師既密承師記。略不辭免。即自持道具、入方丈、攝衆演法。主事僧等、不愜素志、罔循規式、師登其情、乃棄院潛下山。其夜山神號泣。詰旦主事大衆、奔至麥莊悔過哀請、歸院。衆聞、山神連聲唱云、和尚來也。

（東海宏徳）

【一五〇五】公用

①忠曰、公界器具、不得私用者、曰公用也。非器別名。

②敕修清規［下一ノ五十八丈］亡僧估衣云、不許以公用爲名、分去物件。

③東都事略［七十六ノ九丈］祖無擇傳云、無擇與王安石、同為知制誥、時詞臣許受潤筆物。

安石因辭一人之饋。不獲義不受。以其物置舍人院梁上。安石既以母憂去。無擇取為本院公用。安石聞而惡之。以無擇為不廉。

（東海宏徳）

【一五〇六】刹竿

①忠曰、刹表居處。義近刹土。此方刹竿者、長竿上、有寶珠焰形。皆用金銅造、植之于寺前。蓋與塔上表刹異矣。如四天王殿前、樹刹柱。見大寶積經［百二十ノ十三丈］

②玄應經音義［一ノ三丈］云、梵言差多羅。此譯云土田。經中或言國、或云士者、同其義也。或作刹度者、存二音也。即刹帝利、名守田主者、亦是也。案刹、書無此字。即刹字略也。刹音初。一切浮圖名刹者、訛也。應言刺瑟胝。刺音力割切。此譯云竿。人以柱代之、名為刹柱。以安佛骨。義同土田、故名刹也。以彼西國墻、竿頭安舍利故也。

③止觀輔行［二之一廿七丈］云、言佛刹者、具存、應云刹摩。此云田也。即一佛所王土也。或云表刹者、以柱表刹。表所居處故也。

④聯燈會要［一ノ廿八丈］阿難尊者章云、祖問迦葉云、師兄、世尊傳金襴袈裟外、別傳箇甚麼。迦葉名阿難。祖應諾、迦葉云、倒却門前刹竿著。

⑤傳燈録［十三ノ六丈］資福邃禪師章云、師謂衆曰、隔江見資福刹竿便廻去、脚跟也好與三十棒、豈況過江來。

（東海宏徳）

【一五〇七】水磨

①佛祖通載［二十ノ九丈］云、牧菴忠禪師、聞佛眼遠禪師、居淮西龍門。於是出蜀、兼程至彼、造次不忘提撕其未至處、適縱步水磨。欻睹牌額、書法輪常轉。師於是礙膺之疑。泮然氷釋。遂説偈曰、轉大法輪。目前包囊。更問如何。水推石磨。而作圓相。呈佛眼、眼曰、其中事作麽生。師曰、澗下水長流。眼曰、必竟如何。師曰、水推石磨。眼曰、歸堂歇去。切不得擧著。後五日來、却向女道一句子、曰這一句子、也不消得。佛眼爲之解頤。師遂作禮。

②羅湖野録［上ノ八丈］云、馮給事濟川、嘗有請忠、住勝業疏。畧曰、佛眼磨頭、悟法輪之常轉。死心室内、容慧劍以相揮、世以爲實録云。〈慧劍事、詳彼。〉

③湛堂準和尚水磨記、見大慧武庫。

④江湖風月集［三ノ四十九丈］石橋思首座水碓磨頌云、得如飛雪下千巖、下處如流上未甘。劈箭一機能兩斷、磨推西北碓東南。

（東海宏徳）

【一五〇八】葛篭

①日本禪林、入寺視篆、納寺印器也。

（東海宏徳）

【一五〇九】經櫃

①舊説［勅鈔十四ノ十丈〇同十三ノ十六丈〇十二ノ四十三丈］曰、衆僧貯衣服道具之器。其在僧堂、曰函櫃。其在衆寮、曰經櫃。

②忠曰、衆寮是看經之所、故曰經櫃。

③備用清規［七ノ十二丈］寮主云、公界坐禪看經、看守經櫃、夜間同寮元、巡視經桉。

④敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧抄割衣鉢云、直病者、同執事人。收拾經櫃函櫃衣物、抄割具單。又［下二ノ四丈］衆寮結解特爲衆湯云、寮元依戒、排經櫃圖等。〈詳圖牌類、經櫃圖處。〉

（東海宏德）

【一五一〇】函櫃

①見經櫃處。

②舊説曰、函櫃、僧堂之衆、貯衣服等之器也。

③禪苑清規［一ノ三丈］裝包中、挂搭云、如堂中有函櫃、即收行李、安函櫃中、鎖之。笠子挂杖歸寮。如堂中無函櫃、收行李赴寮。

④日用軌範［勅鈔下一ノ五十丈］云、粥前齋前、放參後、不得開函櫃。如有急切、白主事人。寮中白寮主、僧堂白聖僧侍者。

⑤人天寶鑑［五十六丈］云、德山密禪師會下、有一禪者。用工甚鋭。看狗子無佛性話。久無所入。一日忽見狗頭、如日輪之大。張口、欲食之。禪者畏避席而走。鄰人問其故。禪者具陳。遂白德山。山曰、不必怖矣。但痛加精彩、待渠開口、撞入裏許。便了。禪者依教。坐至中夜。狗復見前。禪者以頭極力一撞。則在函櫃中。於是燿然契悟。後出世文殊、道法大振。即眞禪師也。

（東海宏德）

【一五一一】鑰匙

①敕修清規［下一ノ十二丈］兩序進退云、舊知事一班、詣方丈、挿香告稟、觸禮一拜、納庫記鑰匙而退。

（東海宏德）

【一五一二】寺印

①如［勅鈔五ノ四十一丈］天童有玲瓏巖主印。〈詳叢軌類、視篆處。〉日本禪刹、皆有某山印。住持人、不得爲私用。

②玲瓏巖主印　見備用雲外跋。

（東海宏德）

【一五一三】三寶印

①鐫佛法僧寶、四篆字。故名三寶印。
②忠曰、道場疏、使三寶印。其法、初南瞻部州行使三。一正一斜一正。第二行使一正。第三行使一正。自下每至紙接處、使一。正。〈接處、必有疏文一行〉至尾三寶證明行、使一。正。次諸天洞鑑行、使一。正。次年月日行、使三。一正。一斜。一正。可漏、亦使三。同疏中法。皆窮行上位使。〈使三法、正斜間關一字。斜正間關二字。可漏、皆但關一字。〉
③　○已下係莊嚴具。

（東海宏德）

【一五一四】厨子

①忠曰、安像櫃也。
②校定清規［勅鈔四ノ卅丈］云、暫到隨大衆後、巡半堂、至後門、對聖僧厨立。侍者接暫到後、巡堂、至聖僧厨後。

（東海宏德）

【一五一五】龕

①敕修清規［下二ノ十一丈］結制禮儀云。侍者暫到。巡半堂。侍者於聖僧龕後立。暫到向侍者立定。
②忠曰。安像之櫃。即厨子也。
③正字通［亥下ノ六十二丈］云。龕克憨切。音堪。增韻浮圖搭。廣韻塔下室。唐褚遂良書。久棄塵世。與彌勒同龕。
④東坡詩集［廿三ノ三十丈］自金山放船。至焦山詩云。老僧下山驚客至。迎笑喜作巴人談。自言久客忘鄉井。只有彌勒爲同龕。

（德重寛道）

【一五一六】花亭

①敕修清規［上一ノ廿七丈］佛降誕云。日庫司嚴設花亭。中置佛降生像。於香湯盆内。安二小杓佛前。
②忠曰。造小亭。以紅白衆花。交覆。學甍瓦之樣。寶蓋垂旛。亦皆累葩萼。巧成之。名爲花亭。
③義堂日工集［四ノ四十七丈］云。本寺〈時住南禪。〉每至佛生之辰。紀綱預命沙喝。裝花亭。一時沙喝行力。俱走山野。採衆色草花。而墩朱甍碧瓦之樣。擬華鬘旛蓋之莊嚴。各爭優劣。遂及鬪諍。雖似敬重供養。實末世荒本勤末之所到也。於是餘捨私貲。命工新造花亭。五色彩書。金碧光燿。繪蓋旛旛。寶珠瓔珞。不假生華。凡所可有者。悉備焉。乃歸之常住。以充每歲浴佛之設矣。自是諸刹。皆倣此。

（德重寛道）

【一五一七】毘藍園

①忠曰。花亭。亦名毘藍園。

②備用清規［一ノ六丈］如來降誕云。庫司。預令行者。嚴設毘藍園。內安太子銅像。

③律苑事規［五ノ七丈］如來降誕。所云。全同備用。

（徳重寛道）

【一五一八】毘藍園額

①忠曰。花亭當陽。掲額題毘藍園三字。

②大鑑小清規［十丈］浴佛云。幡四首。四柱。每柱一幡。額一。毘藍園。

（徳重寛道）

【一五一九】義成殿額

①花亭。或掲義成殿額。

②東福寺清規［卅二丈］佛誕生云。花堂額。義成殿也。

③翻譯名義集［一ノ十三丈］云。西域記云。薩婆曷刺他悉陀。唐言一切義成。舊云悉陀。訛也。此乃世尊小字耳。

（徳重寛道）

【一五二〇】旛

①觀心論灌頂法師疏［下ノ九丈〇止觀二之一ノ五十一丈］云。圓壇者。即實相不動地也。繪幡。即翻法界上迷。生動出之解。幡壇不相離。即動出不動出。不相離也。

②摩訶止觀輔行記［二之一ノ四十三丈］云。五色旛者。總舉五色。繡畫間色。亦應無在。字應作旛。旛者。旌旗之總名也。經中多作此旛。幡帑字耳。今佛法供具。相狀似彼。故云旛耳。凡造旛法。切不得安佛菩薩像。旛是供具。供於所供。如何復以形像爲之。

③忠按。幢幡不妨書法文。華嚴經［廿六ノ卅丈］十廻向品。菩薩。施上妙幢幡。廻向云。願一切衆生。常以寶繪。書寫正法。護持諸佛菩薩法藏。疏就幢幡。書字故。

④已下録薦亡旛。

⑤釋門正統［四ノ廿三］云。黄白旛者。釋氏類苑云。或薦亡黄旛者。灌頂經云。若四輩男女。若命終時。若已命過。於其亡日。造作黄旛。懸著刹上。使獲福德。離八難苦。得生十方諸佛淨土。旛蓋供養。隨心所願。至成菩提。旛隨風轉。破碎都盡。至成微塵。其福無量。旛一轉時。轉輪王位。乃至吹塵。小王之位。其報無量。諸經要集。問曰。何故經中。爲亡人。造作黄旛。掛於塚塔上者。答曰。雖未見經釋。可以義求。此五大色中。黄色居中。用表忠誠。盡心修福。爲引中陰。不入惡趣。莫生邊國。

⑥釋氏要覽［下ノ四十一丈］云。齋七幡子。北俗亡。累七齋日。皆令主齋僧。剪紙幡子一首。

隨紙化之。按正法念處經。有一十七種中有。謂死時。若生天者。即見中有。如白氎垂下。其人識神。見已。擧手攬之。便受天人中有身。故今七七日。是中有死生之日。以白紙幡子。勝幢之相。示之。故北人招魂帛。皆用白練。甚合經旨也。

（徳重寛道）

【一五二一】蓋

①摩訶止觀［二之一ノ五十一丈］云。五色蓋者。觀五陰。免子縛。起大慈悲。覆法界也。

②義楚六帖［廿三ノ十五丈］云。本行經云。摩納童子。以花供養定光佛。其花乃於上。化成華蓋。佛行即行。佛住即住。

（徳重寛道）

【一五二二】斗帳

①忠曰。帳形如覆斗。故名。其以組成飾。即是同心結也。〈隨書［傳一ノ五丈］。宣華夫人。陳氏傳云。太子。齎金合子署封。賜夫人。發見有同心結數枚。〉

②漢劉熙逸雅［六ノ一丈］云。帳張也。張施於床上也。小帳曰斗。形如覆斗也。

③三才圖會衣服部。結帛式云。【図】用白絹一匹。結如世俗所謂。同心結者。朱子所謂。結絹。蓋如此云。

④佛本行集經［十五ノ八丈〇九十一套］路逢死屍品云。作餅天子。化作一屍。臥在床上。衆人轝行。復以種種妙色劫衣。張施其上。作於斗帳。

⑤起世經［四ノ十六丈］云。婦女丈夫。命終。作種種斗帳幰蓋。而普周帀。

（徳重寛道）

【一五二三】卓圍

①見卓子處。

②忠曰。闘綵金襴等。周圍卓四面。到地者。言卓圍也。與卓袱不同。大鑑已言袱子。并卓圍。二物可知也。

③水滸傳［八十二ノ六丈］云。香車龍亭。擡放忠義堂上。中間設著三箇几案。都用黄羅龍鳳卓圍。圍著。正中設萬歳龍牌。將御書丹詔放在。

（徳重寛道）

【一五二四】卓袱

①忠曰。闘綵錦繡之類。縫合令方。而覆卓上。或覆時其角在正中與左右垂下。此言卓袱。

此物正在卓圍之上面。

② 字彙云。袱房六切。音伏。包袱。

③ 敕修清規〔上二ノ四丈〕告香云。請客侍者。預依戒次。具茶状。備卓袱筆硯。　又受嗣法人煎點云。至日。僧堂住持位。嚴設敷陳。及卓袱覿幣之具。

④ 備用清規〔二ノ六丈〕告香云。請客侍者。預日令客頭至。堂司具新到戒次。寫茶状。客頭備卓袱。

⑤ 和俗。用亡者衣物等。作佛祖位前。莊嚴卓袱斗帳等。亦有据。

⑥ 隨願往生十方淨土經〔灌頂経十一ノ五丈〕云。佛言。若以亡者嚴身之具。堂宇室宅。園林浴池。以施三寶。此福最多。功德力強。可得拔彼地獄之殃。以是因緣。便得解脱憂苦之忠。長得度脱。往生十方諸佛淨土。

（德重寛道）

○已下係供養具。

【一五二五】爐・瓶・燭臺

① 忠曰。香爐。華瓶。燭臺。三物也。

② 敕修清規〔下一ノ廿八丈〕謝掛搭云。法堂設住持位。排列香几。爐・瓶・燭臺。

③ 大鑑清規〔八丈〕達磨忌云。前列爐。瓶。燭臺。

④ 或問。佛經有列三器者耶。忠曰。陀羅尼集經〔三ノ廿一丈〇六十六套〕云。常設二十一種供養之具。作般若波羅蜜多法會。〈乃至。〉若不能具二十一種。五種亦得。何等爲五。一者香水。二者雜華。三者燒香。四者飲食。五者然燈。止此。此中具三物也。

（德重寛道）

【一五二六】四板頭香爐

① 見四板頭。香几處。

（德重寛道）

【一五二七】衆寮香爐

① 忠曰。衆寮行禮。安七箇香罏。〈見圖牌門、茶湯問訊圖處。〉

② 敕修清規〔下二ノ二丈〕新掛搭人。點入寮茶云。進中爐。上下間爐前。燒香。

（德重寛道）

【一五二八】手爐

①敕修清規［上一ノ廿丈］聖節云。知客跪進手爐。〈詳報涛門。跪爐處。〉

②又［下一ノ廿一丈］沙彌得度云。几上安香燭手爐戒尺。〈乃至。〉戒師秉爐白。

③幻住清規［六十五丈］開甘露門云。執手爐。戒香定香。云云。

④釋氏要覽［中ノ十丈］云。法苑［十八巻十三丈］云。天人黄瓊。説迦葉佛香爐。略云。前有十六師子白象。於二獣頭上。別起蓮華臺。以爲爐。後有師子蹲踞。頂上有九龍。繞承金華。華内有金臺寶子盛香。佛説法時。常執此爐。比觀今世手爐之製。少有倣法焉。

⑤虚堂愚和尚育王録［■十五丈］云。朱行軍。一日入南禪寺齋僧。行香次。以手爐搖曳云。直下是。直下是。時有僧云。直下是箇甚麽。行軍便喝。〈云云。〉〈廣燈・聯燈。此縁。無手爐字但云。有朱行軍設齋。入僧堂内顧視上下云。直下是。又作麽生。行香次。口不住道。云云。〉

（徳重寛道）

【一五二九】香盤

①希叟曇禪師廣録［三ノ廿四丈］禪房十事。香印頌云。要識分明古篆。一槌打得完全。燒炷旃檀牛糞。衲僧鼻孔校穿。

（徳重寛道）

【一五三〇】四板頭香几

①忠曰。僧堂内。首座板。後堂板。分手板。聖僧板。各安香几。行禮炷香。詳禮則門、四處問訊處。

②校定清規［勅鈔五ノ廿一丈］特爲住持煎點云。如就僧堂。上下間内外。不用設香爐。爲主者一人。大衆光伴也。如節臘朔望。設香案者。爲大衆故也。

（徳重寛道）

【一五三一】堂外香几

①忠曰。外堂。有二香几。在上下間。行禮炷香。〈詳禮則門、四處問訊處。〉

（徳重寛道）

【一五三二】香合

①敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云。維那用廣紙書疏。帶行僕。捧盤袱。爐燭合。上方丈。

請住持僉疏。又云。知客跪進手爐。侍者跪進香合。　又［上二ノ六丈］念誦云。燒香侍者。捧香合。

②　三才圖會［四ノ廿八丈］儀制門有圖。

（德重寛道）

【一五三三】大香合

①空谷尚直編［下ノ十一丈］云。虎丘行中仁禪師。凡得沈檀異香。則以小合貯之。置於大香合中。每旦持以行香。至世尊前。於小合中。別取好香一炷。進之。除外。不復他用。客至。惟爇常香而已。

②　忠曰。叢林。現有此法。而人不知祖行中矣。

（德重寛道）

【一五三四】小香合

①敕修清規［上二ノ三丈］告香云。衆集。依圖位立。各備小香合坐具。〈又見大香合處。〉

（德重寛道）

【一五三五】香

①增壹阿含經［廿二ノ十一丈］云。須摩提女。手執香火。上樓。向如來説偈。唯尊屈神。爾時香如雲。在空中。遍滿祇桓。住在如來前。阿難白世尊言。此是何等香。世尊曰。此香是佛使。滿富城中。須摩提女。所請。〈廣説如彼。〉

②僧史略［中ノ廿九丈］云。香也者。解穢流芬。令人樂聞也。香爲信心之使也。〈詳叢軌類。行香處。〉

③觀心論［七丈］云。燒香者。亦非世間有相之香。乃是無爲正法之香。薰諸臭穢。斷無明惡業。悉令消滅。其正法香有五種。一者戒香。所謂能斷諸惡。能修諸善。二者定香。所謂深信大乘。心無退轉。三者惠香。所謂常於身心。内外觀察。四者解脱香。所謂能斷一切無明結縛。五者解脱知見香。所謂學察常明。通達無礙。如是五香。名最上香。世間無比。佛在世日。令諸弟子。以智惠火。燒如是無價寶香。供養十方一切諸佛。今時衆生。愚癡鈍根。不解如來眞實之義。唯將外火。燒世間沈檀薰陸。質礙之香。希望福報。云何可得。

（德重寛道）

【一五三六】瓣香

①敕修清規［上一ノ廿六丈］祈雪疏云、庸致瓣香之誠、願集六花之瑞。

②祖庭事苑［八ノ十三丈］云、古今尊宿、拈香、多云一瓣。瓣皮莧切、瓜瓣也。以香似之、故稱焉。

③或作■、歩還切、片也。
④後世相襲、皆爲此言、何必爾也。當云一片一炷。庶免薄俗之譏。
⑤小補韻會［諫四十三丈］云、瓣皮莧切、説文瓜中實、从瓜辨聲。廣韻、瓜瓠瓣也。又薄閑切、瓜中實也。又片也。詩碩人註、瓠瓣。
⑥詩人有學禪者瓣香語者。
⑦陳后山詩集［三ノ三丈］觀袞文忠公家、六一堂圖書詩云、向來一瓣香、敬爲會南豐。
⑧註、諸方開堂、至第三瓣香、推本其得法所自、則云、此一瓣香、敬爲某人云云。會鞏子固建昌南豐人、於歐公、猶宗門中嫡子、而后山又師南豐。乃其孫也。
⑨楊誠齋朝天集［三ノ十五丈］雙峯定水璘老、送木犀香詩云、傳語、雙峯老、汝師是如來。如何一瓣香、却爲楊誠齋。
⑩又退休集［十三ノ一丈］祷雪響應詩云、老夫與雪亦久別。滕六參儂求普説。爲渠拈此一瓣香。今身胡姓前身黄。〈云云〉。
⑪忠曰、瓣香之製、上圓下方、表裏條條、竪雕畦。上如指頭然、蓋像枯■之状、以作文而已。
⑫然或處直雕造人之手、而指掌宛然、施爪甲。謂是形二祖斷臂之手也。予會在周州覩之、尤爲可笑也。

丸毛俊宏

【一五三七】大香

①瓣香曰大香也。
②敕修清規［上二ノ卅四丈］尊宿遷化、下遺書云、專使起、爐前謝茶、再挿大香一片。

丸毛俊宏

【一五三八】中香

①校定清規［敕鈔四ノ十五丈］告香云、一大二中。
②［敕鈔四ノ十五丈］解者曰、謂大香一片、中香二片也。

丸毛俊宏

【一五三九】箋香

①大鑑清規［五十七丈］末後事儀云、龕内、滿安箋香。
②忠曰、恐訛綫香。

丸毛俊宏

【一五四〇】線香

①忠曰、或言仙香、雜抹衆香、加糊粘、造之。其炷煙長久、故稱仙香、又云長壽香。其製纎長、如線、故稱線香。

②線又作綫。

丸毛俊宏

【一五四一】信香

①忠曰、開法出世、齎香寄師、通嗣法之信。此言信香。

②大慧杲禪師［書ノ八十七丈］答鼓山逮長老書云、專使來。收書并信香等。知開法出世、唱道於石門、不忘所從來、爲缶長老拈香、續楊岐宗派。

③忠曰、逮公於杲師、是師祖也。亦可通信。逮嗣蒙菴嶽、嶽嗣大慧杲。

④石門［古宿九ノ一丈］慈照禪師鳳巖集云、師開堂、拈香云、西天二十八祖、唐土六祖、過去聖人、盡得傳衣付法、至唐代。六祖之後、得道者、如稻麻竹葦、不傳其衣、只傳其法、皆以香爲信。今日一瓣香、爲什麼人通信、某甲雖不言、大衆已委悉。爇此一炷香也。〈慈照嗣首山念。〉

⑤祖庭事苑［八ノ十二丈］云、託香而表信。〈詳叢軌類、嗣法拈香處。〉

丸毛俊宏

【一五四二】長明燈

①敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云、夜點長明燈。

②觀心論［七丈］云、長明燈者、正覺心也。覺知明了、喩之爲燈。是故一切求解脱者、常以身爲燈臺。心爲燈盞、信爲燈炷。增諸戒行、以爲添油、智慧明達、喩如燈光常然。

③如是覺燈、炤破一切無明癡暗、能以此法。轉相開悟、即是一燈然百千燈、以燈續明。終終無盡故。故號長明。

④過去有佛、名曰然燈義亦如是。愚癡衆生、不會如來方便之説、專行虚妄、執著有爲、遂然世間蘇油之燈、以炤空室、乃稱依教。豈不謬乎。

⑤傳燈録［十八ノ十九丈］長慶稜禪師章云、有人問僧、點什麼燈。曰長明燈。曰什麼時點。曰去年點。曰長明何在。僧無語。

⑥師代云、若不如此、爭知公不受人謾。

⑦法眼別云、利動君子。

⑧本事詩［廿六丈〇秘九集四〇又堯山廿二ノ十七丈］云宋考功、遊靈隱寺。夜月極明、長廊吟行、且爲詩曰、鷲嶺鬱岩嶢、龍宮隱寂寥、第二聯搜奇思終不如意。有老僧、點長明燈、坐大禪床。問曰、少年夜夕久不寐、而吟諷甚苦。何耶。之問告故。僧曰、何不云樓觀滄海日、門聽浙江潮。之問愕然。寺僧有知者曰、此駱賓王也。

⑨隋唐嘉話云、江寧縣寺、有晉長明燈、歲久火色變青、而不熱。隋文帝平陳、已訝其古、

至今猶存。

⑩法苑珠林［四十八ノ十四丈］云、五百間事云、續佛光明、晝不得滅。佛無明闇、以本無言念齊限、故滅有罪。

⑪諸祖偈頌高邁長明燈序云、離婁之目、處闇室或不能覩。燈處之皎如也。澄公之掌、在玄夜、或不能照。燈在之了如也。

⑫故大雄氏、以方便力、救黒暗界、藉其光誘其人。佛所有燃燈明、法所有傳燈義。大抵長明燈、是其蘊乎。

⑬夫日主晝、太陽之精、中則呉、呉則沒。我長明燈不沒。月主夜、太陰之精。滿則虧、虧則盡。我長明燈不盡。日月尚彌。況小光小明哉。要自積苦爲海、擧足見溺。積邪爲山、擧足見礙。竟不能髣髴之、或髣髴之、不剋成就之、言之可爲長嘆。

⑭我邑中有俊傑、主此燃燈、精進成就於寶融寺經藏院。且夫蘭炷爇火。吾見其盛、未見其微也。鐵盆盛膏。吾見其增、未見其減也。一篭而四時長春、滿室而終歳不夜、人見之、一作禮、眼蒙利、再作禮、心蒙美。心眼自相炤了。内外由是洞徹、然則終日見燈、未嘗不見燈、終日不見燈、未嘗不見燃。夫達觀者、乃如是也。

⑮意者不獨於此、直上照一天二天、乃至三十三天、無門不闢。河沙善人、由茲而入。直下炤一地二地、乃至一十八地獄、有獄皆開。多劫罪人、由茲而出。若然者、四維上下虚空、可思量、而不可思量耶。我長明燈、實相功徳、亦復如是。

⑯邁之數年内願銘頌之間、迫賤事未構。一朝染目疾、朦朧不自審從何得也。遂夢、神人語邁曰、子於長明燈、其有負乎。邁應聲而悟。悟而起。起而作頌。明日目愈。頌曰、見外燈長明、見内燈長明。萬惡自光中滅、萬善自光中生。不見一燈百千萬億燈、乃至於無窮。不見一人百千萬億人、歸之於大同。空即是色、色即是空。弟子作頌、允執厥中。

丸毛俊宏

【一五四三】長命燈

①忠曰、長明燈也。太平廣記［九十一ノ七丈］引本事詩、載駱賓王事、作長命燈、必訛寫耳。

丸毛俊宏

【一五四四】無盡燈

①忠曰、晩近稱長明燈、爲無盡燈。

②廣燈録［廿四ノ十六丈］石門徹禪師章云、問如何是學人用心處。師云、晝夜常然無盡燈。

③續燈録［廿七ノ廿八丈］拈古門云、僧問投子、歴劫來來無盡燈、不會桃剔鎮長明、時如何。投子云、歴劫來來無盡燈、不會桃剔鎮長明。

④北礀文集［二ノ十六丈］瑞巖開田、然無盡燈記云、淨名大士、既授萬二千天女、無盡燈法門、從而諭之曰、冥者皆明、明終不盡。伊尹所謂、以先覺覺後覺也。

⑤後世焚膏繼晷、號無盡燈。非淨名心也。日夜相代、爲明者日月也。大廈既夕、風雨如晦、瞭然者將眊然。待燈而見、燈亦豈無待焉。惟有待故、運行於人。日月則運行於天、運之

之殊、不息則一也。

⑥瑞巖丹丘勝處、燈失常運。貨殖取贏、使此燈不夜、莫知幾興廢。

⑦住山道全、謀諸衆曰、貨殖取贏乎。墾土收穫乎。智紹曰、是或一道也。顧主之何如、主之有常、則皆永傳。不然、則勺海爲膏、伐山爲炬、徒爾爲也。僉曰善。紹則請命出山、旋淛絶淮、積錙累銖、閲四年而歸、僦工闢荒、眡歲入、爲無盡光明。茁霜蕭蕭、隻影婆娑。焦心勞思、恐蹈貨殖取贏之轍、求余記其成。爲將來之勤。

⑧維摩經［四ノ廿二丈］持世菩薩章云、維摩詰、語諸天女言、諸姉、有法門、名無盡燈。汝等當學。無盡燈者、譬如一燈然百千燈。冥者皆明、明終不盡。如是諸姉、夫一菩薩、開導百千衆生、令發阿耨多羅三藐三菩薩提心、於其道意、亦不滅盡。隨所説法、而自增益一切善法、是名無盡燈也。

⑨佛祖統紀［卅四ノ三丈］云、賢首法藏師、爲則天、以十鏡、置八隅、中安佛像、然燈照之、則鏡鏡現像。以表刹海重重無盡之意。

⑩忠曰、淨名約理、法藏顯事。悉是横無盡、亦兼竪無盡。

⑪眞歇了禪師［通載二十ノ十一丈○■祖偈下■上ノ卅二丈］佛燈［■祖偈下■下ノ一丈］明禪師、各著無盡燈記、而敍此鏡燈、重重無盡之旨、是也。

⑫然世呼長明燈、爲無盡燈、唯是竪無盡耳矣。非淨名康藏之義、然北磵時、已有此目、頗辯斥。可知由來復淹矣。

丸毛俊宏

【一五四五】桃燈

①敕修清規［上二ノ廿一丈］開堂祝壽云、鐃鈸旛花桃燈、迎引至法堂位前立。

②又［上二ノ卅一丈］尊宿出喪云、提調龕前傘椅、湯爐桃燈。

丸毛俊宏

【一五四六】燈籠

①毘奈耶雜事［十三ノ四丈］云、緣在室羅伐城、如世尊、言夜闇誦經者、彼誦經時、有蛇來至。少年見已、驚忙大喚。唱言、長脊長脊。凡夫苾芻、悉皆驚怖。遂令聽者、因斯廢闕。

②以緣白佛。佛言、當可然燈、以誦經典。

③苾芻夏月然燈、損蟲。佛言、應作燈籠。苾芻不知、云何應作。佛言、應以竹片爲籠。薄氈遮障。此若難求、用雲母片、此更難得。應作百目。

④苾芻不解、如何當作。佛言、令瓦師作、如燈籠形、傍邊、多穿小孔。

⑤普燈録［六ノ十二丈］保福權禪師章云、上堂擧寒山吾心似秋月偈云、老僧即不然。吾心似燈籠、點火内外紅。有物堪比倫、來朝日出東。傳者以爲笑。

⑥黄龍死心、見之歎曰、權兄提唱若此、誠不負先師所付囑也。

⑦葉縣省禪師録［古宿廿三ノ廿二丈］燈籠偈云、一盞金燈號玲瓏。四方八面不施工。照破乾坤黑暗處、山河大地是家風。

丸毛俊宏

【一五四七】長檠

①忠曰、長檠、高可五尺。上安木盞、植立鐵釘、而燃蠟燭。凡禪林、法堂佛殿等、用之。

②韓昌黎集［五ノ四十四丈］短燈檠歌云、長檠八尺空自長、短檠二尺便且光。

丸毛俊宏

【一五四八】罣罳

①舊説［敕鈔四ノ十五丈〇又十ノ廿八丈］曰。罣罳遮背後板屏。在椅子後者。

②篇海類編［十六ノ十四丈］云。罣古畫切。音卦。罣礙也。

③　或［敕鈔四ノ十五丈］曰。罣罳即法被也。忠曰。此蓋依蘇鶚以罘罳爲網之義。然今禪林。稱罣罳者。只是木屏耳。

④敕修清規［上二ノ三丈］告香云。至日。侍者令客頭於寢堂或法堂。鋪設罣罳椅子。　又［下二ノ十三丈］四節秉拂云。堂司行者。排辨法座左手。敷罣罳。設住持　位。

⑤　忠曰。敷者。排辨也。〈品字箋云、俗以排列謂之鋪設。〉非鋪展義。

⑥　又曰。韻書小説。但釋罘罳今且録之。

⑦　小補韻會［支ノ四十四丈〇敕鈔四ノ十五丈］云。説文罘罳屏也。从网思聲。博雅。罘罳謂之屏。又漢未央宮東闕罘罳災。師古曰。罘罳連闕曲閣也。以覆重刻垣墉之處。　其形罘罳然。釋名罘復也。罳思也。言臣將入請事。於此復思也。通作思。漢　五行志罘思。又考工記。宮隅城隅闕門。皆有之。禮記明堂位註疏云。以諸文參之。則　桴思。小樓也。唐蘇鶚曰。漢師古註。釋名所釋。罘罳二説。皆誤。按罘罳。从　网是形。不思是聲。罘浮也罳絲也。謂織絲之文。輕疎浮虛之貌。蓋宮殿簷戸之間也。　唐文宗實録。甘露之變。出殿北門。裂斷罘罳而去。温庭筠補陳武帝書。罘罳畫　捲。閶闔晨開。皆非曲閣屏障之意。相如子虛賦罘網彌山。此亦謂羅鳥之網。即罘罳　爲網不謬矣。

⑧　宋馬縞中華古今注［上ノ三丈〇續百ノ甲］云。罘罳屏。屏之遺象也。塾門外之舍也。臣來朝君。至門外。當就舍。更詳其所應應對之事也。塾之者言。塾也。行至門内屏外。復應思惟也。罘罳復思也。漢西京罘罳。合板爲之。亦築土爲之。每門闕殿舍。　皆有焉。如今郡國廳前。亦樹之也。

⑨陳繼儒［廣百ノ四］枕譚［七丈］云。段成式云。士林多稱雀網。爲罘罳。其誤如此。按漢書［文帝記］罘罳屏也。復也。臣朝君。至屏所奏之事于下。又按劉熙釋名曰。罘罳在　外門。罘復也。臣將入請事。于此復重思也。今之照墻也。

⑩　忠曰。罘罳板屏。而在廳前。今禪林罣罳亦板屏。制似罘罳。雖在椅後。亦受　罳之名。

（藤原良敬）

【一五四九】法被

①覆裹椅子之被也。

（藤原良敬）

【一五五〇】大法被

①忠曰。法堂座上。掛下大罣罳當面之被也。
②北磵續集［十五丈］趙郡主。施闘綵法被。薦女偈云。空王座上。一片如織。善哉命婦。巧思精究。勸化諸女。如出一手。

（藤原良敬）

【一五五一】僧堂帳

①禪苑清規［三ノ七丈〇敕鈔八ノ七丈引］首座云。行者於首座前問訊。低聲云。和尚放參。〈乃至〉打放參鐘。展單下帳。罷。歸寮問訊。
②　忠曰。展眠單。而下帳帷也。

（藤原良敬）

【一五五二】帳幕

①敕修清規［上二ノ十丈］迎待尊宿云。寢堂釘掛帳幕。
②正字通［寅中ノ五十一丈］云。帳知亮切。音障。帷幔通稱。又今人。以寢幄爲帳。東方朔造甲乙帳。程顥本傳。顥知扶溝縣。内侍王中正。按閲保甲。鄰邑競侈供帳。悦之。主史來請顥曰。吾邑貧。獨有令故青帳。可用耳。

（藤原良敬）

【一五五三】暖簾

①忠曰。綿布覆簾面。防風氣。故言暖簾。
②敕修清規［下二ノ十六丈］月分須知云。四月候天氣。僧堂内。下暖簾上凉簾。

（藤原良敬）

【一五五四】凉簾

①見暖簾處。
②江湖風月集［二ノ十四丈］率菴琮和尚。凉簾偈云。絲開渭水蒼龍骨。織就炎天片雪寒。六用門頭纔放下。節紋一點不相瞞。

（藤原良敬）

【一五五五】座頭屏風

①忠曰。或單呼座頭。小屏高可三尺。設戸口左右座首。
②太岳［予親聞之］清和尚曰。座頭小屏又是名隔板。
③舊説［敕鈔九ノ廿二丈］曰。座有四出六出八出等。如中華叢林。雖諸寮舍。制亦如僧堂衆寮。此方鎌倉叢林。隨處設座頭屏風。此日本樣也。其座頭。則唯特爲人。得坐之。其餘位。則縱但一人。亦只用曲盆。行盞。蓋爲異於特爲也。
④　忠曰。隔板。亦有所原。　後漢書［傳廿三ノ十丈〇事文続十一ノ五丈引］鄭弘傳云。弘爲太尉。時擧將第五倫爲司空。班次在下。每正朔朝見。弘曲躬而自卑。帝問知其故。遂聽置雲母屏風。分隔其間。由此以爲故事。

（藤原良敬）

【一五五六】香臺

①禪苑清規［一ノ十四丈〇敕鈔四ノ廿一丈引］入室云。侍者入方丈。當面問訊。轉身禪椅東邊。香臺後。面南立。

（藤原良敬）

【一五五七】供臺

①忠曰。大卓言供臺。

②東福清規［八十八丈］上堂節禮云。法堂觸禮畢。住持轉身。從安香爐。供臺東入南面立。受沙喝行者三拜。

③　敕修清規［上一ノ卅四丈］達磨忌云。嚴設祭筵。　解者［敕鈔三ノ廿二丈］曰。祭筵郎供臺也。又僧堂之外堂。有二供臺。〈如圖。〉

（藤原良敬）

【一五五八】卓子

①大鑑清規［五十三丈］接諡號儀式云。於山門爐前。安卓子。莊嚴袱子并卓圍。

（藤原良敬）

【一五五九】盤袱

①忠曰。盤與袱二物也。盤上鋪小袱。盛疏印等物。

②敕修清規［上一ノ十八丈］聖節云。維那書疏。帶行僕。捧盤袱爐燭香合。上方丈。請住持僉疏。　又［上二ノ十丈］受法衣云。以盤袱。托呈法衣信物。　又［上二ノ廿三丈］山門特爲新命茶湯云。庫司仍具請狀。備盤袱爐燭。詣方丈。挿香拜請。　又［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云。堂司行者。用盤袱。托度牒。

（藤原良敬）

【一五六〇】衣裓

①忠曰。僧家散花器名衣裓。其器小竹篭。以貯花而散之。蓋襲大通佛故事也。

②法華經［科注三ノ卅二丈］化城喩品云。大通智勝佛。得阿褥菩提。大光普照。爾時東方。五百萬億國土中。諸梵天王。與宮殿俱。各以衣裓盛諸天華。共詣西方。推尋是相。東南方。南方。西南方。乃至下方。亦復如是。

③　雪竇顯禪師祖英集［上ノ六丈］送暹首座詩云。我恐逃之逃不得。大方無外皆充塞。茫茫擾擾知何極。八面香風惹衣袱。

④　忠曰。此用法華事。祖庭事苑［三ノ十二丈］解云。裓古得切。衣前襟也。

⑤慧琳法華音義［經音義廿七ノ十四丈］云。衣裓。說文。宗廟奏戒衣。從衣戒聲。玉篇衣部。古來反。戒也。相傳。從衣戒。孤得反。襟也。今時女人。衣前裓。是也。天衣類同。未詳字所出也。

⑥小補韻會［職ノ卅九丈］云。裓訖得切。衣裙也。梵典有衣裓。

⑦　忠曰。韻會之梵典。指法華也。所謂衣裓者。諸天聚衆華。盛衣裾。以擬散佛上。今人摘果芽亦爲之。故范希文鬬茶歌［詩林廣記］云。終朝采掇未盈襜。唯求精粹不敢貪。〈止此。〉襜篇海音覘。韍也。衣蔽前。

（藤原良敬）

【一五六一】拜席

①敕修清規［上二ノ三丈］告香云。須用香几三隻。燭臺三對。當椅前。一字間列。外設小拜席。

②傳燈録［六ノ七丈○清拙南禪録卅四丈引之］百丈海禪師章云。馬祖上堂。大衆雲集。方陞座良久。師乃卷却面前禮拜席。祖便下堂。

（藤原良敬）

○已下係道具。

【一五六二】竹篦

①敕修清規［上二ノ卅一丈］尊宿出喪云。提調竹篦。柱杖。拂子。香合。法衣等物。

②　已下。略録事録。

③廣燈録［十六ノ七丈○大恵眼藏三上ノ廿六丈少異］葉縣省禪師章云。參見汝州省念禪師。師見來。豎起竹篦子。云。不得喚作篦子。喚作竹篦子。即觸。不喚作竹篦子。即背。喚作什麼。師近前掣得。擲向階下云。在什麼處。念云。瞎。師言下大悟。

④大慧杲禪師年譜［十八丈］云。師三十七歲。圓悟著臨濟正宗記以付之。分座訓徒。師乃炷香。爲誓曰。寧以此身。代衆生受地獄苦終不以佛法當人情。乃握竹篦。爲應機之器。於是聲譽藹著。　又本録［十ノ十九丈］云。師室中。常擧竹篦。問學者曰。喚作竹篦則觸。不喚作竹篦則背。衆下語。皆不契。因僧請益。復成五頌示之。頌云。雲門擧起竹篦。開口知君話墮。上方香積不餐。甘伏食人涕唾。一　雲門擧起竹篦。禪和切忌針錐。鸞鳳不棲荊棘。鷓鴣偏守空池。二　雲門擧起竹篦。通身帶水拖泥。奉報參玄上士。撒手　懸崖勿遲。三　雲門擧起竹篦。擬議知君亂統。直饒救得眼睛。當下失却鼻孔。四　雲門　擧起竹篦。露出心肝五臟。可憐猗死禪和。猶自魂飛膽喪。五

（藤原良敬）

【一五六三】禪鎮

①忠曰。坐禪睡具也。

②十誦律［四十一ノ五丈○百十套］云。有比丘。衆中睡。佛言。聽水洗頭。〈乃至〉若故睡不止。聽以麁擲。若故睡不止。佛言。聽用禪杖。取禪杖時。應生敬心。云何生敬心。言。以兩手捉杖。戴頂上。應起看餘睡者。以禪杖築。築已還坐。若無睡者。還以禪杖。著本處已坐。諸比丘。故睡。佛聽用禪鎮。作孔已。以繩貫孔中。繩頭施紐。掛耳。上去額前四指。著禪鎮時禪鎮墮。故睡。佛言。禪鎮墮者。應起行。行時來往相亂。佛言。應如鵝法次第行。〈略鈔。〉

③資持記［下二ノ三ノ十八丈］鉢器篇云。禪鎮。如笏。坐禪時鎮頂。須作孔施紐。串耳上。睡時即墮地。佛言。一墮聽舒一足。二墮舒二足。三墮應起經行。

④釋氏要覽［下ノ十一丈○止觀ノ補注十三ノ廿二丈全引］云。禪鎮。木版爲之。形量似笏。中作孔。施紐。串於耳下。頭戴。去額四指。坐禪人。若昏睡。頭傾。則墮。以自警。

⑤止觀證眞私記［四ノ四十五丈］云。四分抄批云。禪鎮者。用骨牙角者。可方一寸許。若有

睡者。放著頂上。頭若正時。則不落。若睡時頭動。則落膝上。

（藤原良敬）

【一五六四】禪帶

①釋氏要覽［下ノ十一丈］云。禪帶。此坐禪資具也。經云。用韋爲之。〈熟皮日韋。〉廣一尺長八尺。頭有鈎。從後轉向前。拘兩膝。令不動故爲乍習坐禪。易倦。用此檢身。助力故名善助。用罷屏處藏之。

（藤原良敬）

【一五六五】禪杖

①釋氏要覽［下ノ十一丈］云。禪杖。以竹葦爲之。用物包一頭。令下座執行。坐禪昏睡。以軟頭點之。

②十誦律説。見禪鎮處。

（廣田宗玄）

【一五六六】禪毹

①釋氏要覽云。禪毹。毛毬也。有睡者。擲之令覺。

②十誦律説。見禪鎮處。

③智度論［九十一ノ廿四丈］云。菩薩供給坐禪者。衣服飲食。醫藥。法杖。禪毬。禪鎮。令得好師教詔。令得好弟子受化。與骨人令觀。與禪經。令人爲説禪法。如是等。三十七助道法因縁。

（廣田宗玄）

【一五六七】禪板

①舊説［三角六十三丈］曰。禪板者。坐禪時安手。或靠身器也。

②臨濟録［行録］云。師一日辭黄檗。檗問。什麽處去。師云。不是江南。便歸河北。黄檗便打。師約住。與一掌。黄檗大笑。乃喚侍者。將百丈先師禪板机案來。師云。侍者將火來。黄檗云。雖然如是。汝但將去。已後坐却天下人舌頭去在。

③希叟曇禪師録［三巻偈十四丈］禪板頌云。要成片段工夫。須是全身倚靠。雖然只見一邊未許睦州擔荷。

④忠曰。禪板者。倚版也。上頭穿小圓穴。此名向上一竅。蓋此穴貫索。縛著繩床背後横繩。令板面斜。以靠身也。希叟頌意可見。然今時夏月。横安膝上。定印乎其上。或支頤。與助老同用而已復別有倚板。余於一古寺。見中峯和尚禪板之模。長壹尺七寸八分。濶壹寸九分餘。厚參分半。上有小竅。一面鐫萬法歸一一歸何處。乃峯親書之模也。別有小板。即所謂倚板。長壹尺八寸。濶三寸九分。厚三分餘。上下施竅。蓋是禪板本制。而其上下穴。一貫索。縛著床面横繩。一貫索。縛著床底横繩。其板之斜勢。令起倒得稱意焉。今之禪板。概濶不過貳寸。則不便安躬。但可手攜耳。

（廣田宗玄）

【一五六八】倚版

①釋氏要覽［下十一丈］云。倚版。今呼禪版。毘奈耶攝頌曰。倚版爲除勞僧私皆許畜。［僧即衆、私即已。］

②　忠曰。倚版坐繩床時。倚之所以安背也。餘曾獲之於古寺。其制斲版厚三分半。長一尺八寸。横三寸九分。上下穿小竅。用時以紐。縛定床之横繩而其斜之急不急。隨意而已［詳禪版處。］

（廣田宗玄）

【一五六九】數珠

①釋氏要覽［中ノ十丈］云。牟梨曼陀羅尼經云。梵語鉢塞莫。梁云數珠。此乃是引接下根。牽課修業之具也。木槵子經［九十三丈］云。昔有國王。名波流梨。白佛言。我國邊小。頻年寇疫。穀貴。民困。我常不安。法藏深廣。不得遍行。惟願垂示法要。佛言。大王。若欲滅煩惱。當貫木槵子一百八箇。常自隨身。志心稱南無佛陀。南無達磨。南無僧伽名。乃過一子。如是漸次。乃至千萬。能滿二十萬遍。身心不亂。除諂曲。捨命得生炎摩天。若滿百萬遍。當除百八結業。獲常樂果。王言。我當奉行。

②　百八結者。要覽云。小乘。見修合論。煩惱共有一百八數。且明見惑。三界四諦下煩惱共有八十八。謂苦下。具一切。即十使。貪瞋癡慢疑。身邊見邪見見取戒禁取也。集滅離三見。謂集滅二諦下。各除身邊邪三見也。道除於二見。謂道諦除身邊二見也。上界不行恚。謂上界四諦下。各除瞋一。已上三界四諦。共有八十八也。修道所斷惑。欲界有四。謂貪瞋癡慢。上二界。各除瞋。共有六。已上成十。計九十八也。更加十纏。謂無慙。無愧。昏沈。惡作。惱嫉。掉擧。睡眠。忿覆。合前都有一百八也。

④佛説校量數珠功德經［六十三丈］〈大唐實思惟譯〉云。曼殊室利。告大衆言汝等諦聽。受數珠校量功德差別。如是。若用鐵爲數珠者。誦掐一遍。得福五倍。若用赤銅。爲數珠者。誦掐一遍。得福十倍。若用眞珠珊瑚等。爲數珠者。誦掐一遍。得福百倍。若用木槵子。爲數珠者。誦掐一遍。得福千倍。若求往生諸佛淨土及天宮者。應受此珠。若用蓮子。爲數珠者。誦掐一遍。得福萬倍。若用因陁羅佉叉。爲數珠者。誦掐一遍。得福百萬倍。若用鳥盧陁羅佉叉爲數珠者。誦掐一遍。得福千萬倍。若用水精。爲數珠者。誦掐一遍。得福萬萬倍。若用菩提子。爲數珠者。或用掐念。或但手珠不能依法。誦佛名。算數難可拔。是諸善男子。若復有人。手持此珠。不能依法。念誦佛名。及陁羅尼。此善男子。但能手持隨身。行往坐臥。所出言語。若善若惡。斯由此人以持菩提子故。得福等同。如念諸佛誦咒無異。得福無量。其數珠者。要當須滿一百八顆。如其難得。或爲五十四顆。或二十七。或十四顆。亦皆得用。此即數珠法相差別。諸善男子。以何因緣。我今獨讚用菩提子獲益最勝。諸人善聽。我爲汝等重説。昔日過去有佛。出現於世。在此樹下。成等正覺時。一外道。信邪倒見。毀諦三寶。彼有一男。忽被非人打殺。外道念言。我今邪盛。未審諸佛。有何神力。如來既是在此樹下。成等正覺。若佛是聖。樹應有感。即將亡子。臥著菩提樹下。作如是言。佛樹若聖。我子必蘇。以經七日。誦爾佛名。其子即得重蘇。外道讚言。諸佛神力。我未曾見。佛成道樹。現此希奇。甚大威德。難可思議。諸外道等。悉皆捨邪歸正。相共發菩提心。信知。佛力不可思議。諸人咸號。爲延命樹。以是因緣。有其二名。應當知之。我爲汝等。現其所要。佛讚。善哉文殊如汝所説。爲異云耳。

⑤陁羅尼集經［二ノ卅四丈〇高麗藏効函〇北藏六十六套―二ノ廿九丈］云。佛説作數珠法云有其四種。

何者爲四。一者金。二者銀。三者赤銅。四者水精。其數皆滿一百八珠。或五十四。或四十二。或二十一。亦得中用。

⑥ 古今原始〔三十丈〕云。東漢章帝時。僧西域人。時作念珠。以象一年十二月。二十四氣。七十二候之義。共一百單八。

⑦ 忠曰。象十二月等。百八鐘也。〈詳百八鐘處。〉如念珠。經有明文。儒家不知之。作此妄説。

⑧ 忠按專念宗。用三十六珠者。三分於百八之一也。便易攜矣。近自支那來禪僧。用十八珠者。六分於百八之一也。掐六遍。而滿百八耳。

（廣田宗玄）

【一五七〇】數珠母珠

①陁羅尼集經〔二ノ卅四丈〕云。作是相珠一百八顆。造成珠已。又作一金珠。以爲母珠。又更別作十顆銀珠。以充記子。

（廣田宗玄）

【一五七一】數珠記子

①忠曰。百八顆外。有十顆小珠。爲記子。〈詳母珠處。〉

（廣田宗玄）

【一五七二】籌

①忠曰。算人數器。布薩等用之。宗覺律師曰。籌長周尺而臺尺八寸。〈周尺準今尺可寸參分許。〉其大如小指。

②行事鈔〔上四之一ノ九丈〕説戒正儀篇云。十誦云。行籌者。爲檀越問僧。不知數。佛令行籌。不知沙彌數。行籌數之。　又〔九丈〕云。五分籌極短並五指。極長拳一肘。極麁不過小指。極細不得減箸。有客來。不知。行籌收取。數之。一人行。一人收。乃至收已數之。知數已。唱言。比丘若干。沙彌若干。出家人。和合若干人。　資持記云。並五指者。謂中人五相。指相並當五寸也。拳一肘。謂尺八也。〈舒手則二尺故。〉然不明物體。今時多以竹木爲之。

③又行事鈔〔上四之一ノ十丈〕云。四分云。聽行舍羅。此云籌也。　資持記云。準聲論翻之。疏云舍羅草名。以爲籌計。

④釋氏要覽〔下ノ卅丈〕云。梵音舍羅。此云籌。律因有婆羅門。問比丘逝多林。現住幾人。比丘不知。佛言。應可行籌。

⑤ 祇園圖經〔下ノ十六丈〕云。最初成道。於鹿野苑中。度五拘倫。便説法。答戒壇初。上集佛。諸佛之中。須彌登王最爲長宿釋迦佛問。往古諸佛。何方法。教諸比丘。登壇布薩。用何作籌。往古諸佛。布薩之時。金剛爲籌。〈乃至〉籌相者。當用檀等諸香木作之。内外寶者。竹草中空。皆不可作。又不得畫繪。及以漆塗。爲損衆生迦之飾好。應以素函盛之。籌極長如佛一搩手半。短者一搩手。

⑥付法藏因縁傳〔四ノ十五丈〇敕鈔十二ノ四十一丈引〕云。憂波毱多。化度無量衆生。皆悉獲得阿羅漢果。其得道者。一人籌。籌長四寸。滿一石室。室高六丈。縱廣亦爾。於是名稱滿閣浮提世皆號爲無相好佛。〈乃至〉尊者。於無餘涅槃。而取滅度。以室中籌而用耶旬。

（廣田宗玄）

【一五七三】錫杖

①佛説得道梯隥錫杖經［九十三套〇要覧中八丈〇敕修下一ノ卅丈引］云、佛告比丘。汝等應受持錫杖。所以者何。過去未來現在諸佛、皆執故。又名智杖。彰顯聖智故。亦名德杖。行功德本故。聖人之表幟、賢士之明記。道法之正幢。迦葉白佛、何名錫杖。佛言、錫者輕也。倚依是杖、除煩惱。出三界故。錫明也。得智明故。錫醒也。醒悟苦空三界結使故。錫疏也。謂持者。與五欲疎斷故。〈經廣、説錫義、今略之。〉是杖有三錞。念三塗苦惱。則修戒定慧。念三灾老病死。則除三毒貧瞋癡。〈云云。〉。復有四股者、用斷四生。念四諦。修四等。入四禪。〈云云〉。通中高。五。用斷五道苦惱。修五根。〈云云。〉十二環者。用念十二因縁。通達無礙。修行十二門禪。〈云云。〉三重四股。以念如來。七覺意法。〈云云。〉通錞鑽。八。用念八正道。〈云云。〉或有二股。或有四股。環數無別。但我今用四股十二環。二股者、迦葉如來所制立也。今諸衆生、記念二諦。世諦第一義諦。以立其義。

②音釋錞徒對切。銅鐏也。

③彼經。更有持錫杖。二十五事。並説表相功德。

④毘奈耶雜事［卅四ノ三丈］曰、苾芻乞食。入人家。作聲警覺。拳打門扇。家人怪問。佛言、應作錫杖。苾芻不解。佛言、杖頭安鐶。圓如盞口。安小環子。揺動作聲。而爲警覺。狗便出吠。用錫杖打。佛言不應以杖打狗。應擧怖之。時有惡狗。怖時瞋劇。佛言、取一抄飯。擲地令食。至不信家。久揺錫時。遂生疲倦。而彼家人。竟無出問。佛言、不應多時揺動。可二三度揺。無人問時。即須行去。

⑤南海寄歸傳［四ノ十五丈］云、言錫杖者、梵云喫棄羅。即是鳴聲之義。古人譯爲錫者。意取錫作聲。鳴杖錫。任情稱。就目驗。西方所持錫杖。頭上唯有二股。鐵棬可容三二寸。安其錞管。長四五指。其竿用木。麁細隨時。高與眉齊。下安鐵纂可二寸許。其鐶或圓。或匾、屈合中間。可容大指。或六或八。穿安股上。銅鐵任情。元斯制意。爲乞食時。防其牛犬。何用辛苦擎奉。勞心。而復通身總鐵。頭上安四股。重滯將持。非常令澁。非本制也。

⑥忠曰、義淨説。似未讀錫杖經也。

⑦釋氏要覧［中の八丈〇名義七ノ九丈引］云、梵云隙弃羅。此云錫杖。由振時作錫聲故。十誦云聲杖。三千威儀經云、持錫不得入衆日中後。不得復持。〈日中即午。〉、不得擔於肩上。五百問云。持錫有多事。能警惡蟲毒獸故。

⑧忠曰。要覧［中八丈］云、二股六環。是迦葉佛製。〈止此。〉按錫杖經。無六環説。但言二股四股。環數無別。學者須知。

⑨四分律［五十三〇補忘ノ九ノ十八丈引］云、諸比丘道行。見蛇蛆蜈蚣百足。未離欲比丘。見皆怖。白佛。佛言、聽投錫杖揺。

⑩巳下。略録事縁。

⑪唐高僧傳［十九ノ十四丈］僧稠傳云、稠詣懷州西王屋山。修法。聞兩虎交鬪。咆響震巖。乃以錫杖中解。各散而去。

⑫六祖法寶壇經［下ノ十三丈］云、永嘉玄覺禪師來參。遶師三匝。振錫而立。〈詳如彼。〉

⑬傳燈録［七ノ五丈］章敬惲禪師章云、有一僧。來繞師三匝。振錫而立。師曰、是是。其僧

又到南泉。亦繞南泉三匝。振錫而立。南泉云、不是不是。此是風力所轉。始終成壞。僧云、章敬道是。和尚爲什麽道不是。南泉云、章敬即是。是汝不是。〈碧巖統要［四ノ廿六丈］等僧爲麻谷。〉

⑭傳燈録［八ノ十二丈］五臺隱峯禪師鄧氏章云、師以冬。居衡嶽。夏止清凉。唐元和中。荐登五臺。路出淮西。屬呉元濟阻兵。違拒王命。官軍與賊交鋒。未決勝負。師曰、吾當去解其患。乃擲錫空中。飛身而過。兩軍將士。仰觀。事符預夢。鬪心頓息。師既顯神異。慮成惑衆。遂入五臺。於金剛窟前、示滅。

（篠塚純海）

【一五七四】拄杖

①釋氏要覽［中ノ十一丈〇敕修下一ノ卅丈仝引］云、十誦律云、佛聽蓄杖。其殯用鐵。爲堅牢故。斯蓋行李之善助也。〈言殯用鐵、即小拄杖子、非今擔衣鉢大者。〉毘奈耶［六ノ四丈］云、佛聽蓄拄杖。有二因縁。一爲老瘦無力。二爲病苦嬰身故。隋煬帝在邸時。送法藏禪師。靈壽杖書云、每策此杖。時賜相憶。

②毘奈耶雜事［六ノ四丈］云、佛在鷲峯山、有老苾芻。登山上下脚跌倒地。佛言、應畜拄杖。聞佛許已。六衆即便以金銀雜綵等物。雕飾飾其杖。俗旅嫌賤。苾芻白佛。佛言、苾芻有二種縁。應畜拄杖。一爲老瘦無力。二爲病苦嬰身。〈略鈔。〉

③祖庭事苑［八ノ十七丈］引毘奈耶雜事文畢云、正如今禪家游山拄杖。或乗危涉險。爲扶力故。以杖尾細怯。遂存小枝許。串鐵汞者、是也。行脚高士。多攜麁重堅木。持以自衒。且曰、此足以禦冠防身。往往愚俗必謂。禪家流。固當若是。不薄吾佛之遺訓乎。

④已下略録事縁。

⑤續燈録［二ノ十八丈〇碧三ノ十五丈］蓮華峯祥菴主。臨示疾時。擧拄杖問衆云、汝道。古佛到遮裡爲什麽。不肯住。衆無對。師云、爲他途路不得力。復云、作麽生得力去。乃横肩拄杖云、榔樏横擔不顧人。却入千峯萬峯去。言畢圓寂。百丈以拄杖。拂子。付潙山。〈見拂子處。〉

⑥希叟曇禪師廣録［三ノ頌ノ廿四丈］禪房十事、拄杖頌云、格外叢林選出。生縁不在天台。雖然烏律卒地。力扶多少人來。

（篠塚純海）

【一五七五】拄杖觸頭淨頭

①禪苑清規［一ノ三丈〇敕鈔十一ノ三丈引］裝包云、拄杖之法。有枝者爲觸頭。無枝者爲淨頭。行時淨頭在前。右手携之。如下笠時。在左手内。路上逢人。如略問訊。仰左手把拄杖。仰右手下笠。斂杖笠當胸。

（篠塚純海）

【一五七六】探水

①忠曰、拄杖下頭。可二尺。別存小枝。撓纏繞本幹。向下。名爲探水。蓋路行遇水。則先

下杖驗之。水到小枝上下。而量其深淺。然後敢渡。故名探水。碧巖録云、玉將火試。金將石試。劍將毛試。水將杖試。〈止此。〉是也。然事苑云、以杖尾細怯。遂存小枝。〈見拄杖處。〉依此只爲護細弱也。無復探水之用。

② 已下。略録拄杖探水因縁。

③趙州諗禪師録〔古宿十四ノ十八丈〇会元四ノ十三丈〕云、師一日。將拄杖。上茱萸法堂上。東西來去。萸云、作什麽。師云探水。萸云、我者裏。一滴也無。探箇什麽。師將杖子。倚壁便下去。

④洞山初禪師録〔古宿三十八ノ四丈〕云、問如何是洞山圓鏡。師云、人將語試。水將杖試。

⑤續燈録〔五ノ九丈〕天衣在和禪師〈嗣雪竇明覺。〉章云、問祖祖相傳傳祖印。師今得法嗣何人。師云、人將語試。水將杖探。

⑥希叟曇禪師正宗贊〔四ノ法眼ノ十丈〕永明智覺禪師贊云、迅瀑千尋。不停纎粟。探水杖痕深。

⑦虚堂愚禪師淨慈後録〔八ノ卅八丈〕擧趙州斷却命話云、趙州過頭杖子。到處探水。當時者僧。若與本分草料。管取別甑炊香。

⑧古林茂禪師拾遺録〔五十丈〕、送敬上人偈云、參方須具參方眼。法戰須諳法戰機。探水烏藤好牢把。莫同趙老到茱萸。

（篠塚純海）

【一五七七】拂子

①毘奈耶雜事〔六ノ二丈〕云、佛在廣嚴城。獼猴池側。高閣堂中。時諸苾芻。爲蚊蟲所食。身體患痒。抓搔不息。俗人見已。問言、聖者何故如是。以事具答。彼言、聖者何故。不持拂蚊子物。答言、世尊不許。以縁白佛。佛言、我今聽諸苾芻、畜拂蚊子物。是時六衆、聞佛許已。便以衆寶作柄。犛牛尾爲其拂。俗人既見曰、此是何物。答言、佛令苾芻、畜拂蚊子物。是故我持。彼言聖者仁。雖剃髮。貪染未除。以縁白佛。佛言、有五種祛蚊子物。一者燃羊毛作。二用麻作。三細裂氎布。四用故破物。五用樹枝梢。若用寶物。得惡作罪。〈事苑〔八ノ十七丈〕引用。〉

②釋氏要覽〔中ノ九丈〕云、僧祇云。佛聽線拂。裂氎拂。芒拂。樹皮拂、制若犛牛尾。馬尾拂。并金銀裝柄者。皆不得執。

③三才圖會〔四ノ卅八丈〕儀制類有圖。

③ 已下。略録事縁。

④碧巖録〔七ノ十八丈〕云、百丈當時。以禪板蒲團。付黄檗。拄杖拂子付潙山。潙山、後付仰山。仰山既大肯三聖。聖一日辭去。仰山以拄杖拂子。付三聖。聖云、某甲已有師。仰山詰其由。乃臨濟的子也。

⑤希叟曇禪師廣録〔三ノ頌ノ卅四丈〕、禪房十事、拂子頌云、才得柄覇入手。便要呵佛罵祖。還他本色眞樫。不比尋常談塵。

（篠塚純海）

【一五七八】如意

①釋氏要覽〔中ノ九丈〕云。梵云阿那律。秦言如意。指歸云。古之爪杖也。或骨角竹木。刻

作人手指爪。柄可長三尺許。或脊有痒。手所不到。用以搔抓。如人之意。故曰如意。誠嘗問譯經三藏。通梵大師清沼。字學通慧大師雲勝。皆云。如意之制。蓋心之表也。故菩薩皆執之。狀如雲葉。又如此方篆書心字。故若局爪杖者。只如文殊。亦執之。豈欲搔痒也。又云。今講僧。尚執之。多私記節文祝辭。於柄。備於忽忘。要時手執目對。如人之意。故名如意。若俗官之手版。備於忽忘。名笏也。若齊高祖。賜隱士明僧紹。竹根如意。梁武帝賜昭明太子。木犀如意。石李倫王敦。皆執鐵如意。此必爪杖也。因斯而論。則有二如意。蓋名同而用異焉。

② 忠曰。如意之制。心之表也。如此方篆書心字〈止此。〉此義不通印度焉。又曰。文殊豈欲搔痒也〈止此。〉是亦不然。世尊。尚示有圍便疾病。既同凡。受五蘊色身。何無復背痒耶。余竊謂。凡佛菩薩所執器物。動有所表。蓋説法到人疑處。令彼能通曉。猶如爪杖搔痒處痛快。故執此表其相。若復依此義。則文殊雖執。亦何妨焉。

③ 義楚六帖［廿二ノ十四丈］云。淨名經義抄云。牛呵羅漢。説法時。以有口病。恐大衆生輕。龍現爪。以遮口。因作如意。猶象龍爪。

④ 佛祖統紀［六ノ十四丈］智者大師紀云。南岳造金字般若。命師代講。唯三三昧。及三觀智。用以咨審。餘悉自裁。南岳手持如意。臨席讚之曰。可謂法付法臣。法王無事。　又云。師有疾。口授遺書。略云。蓮華香鑪。犀角如意。是王所施。今以仰別。願德香遠聞。長保如意也。

⑤ 釋氏資鑑［五ノ四丈］云。周建德三年。五月武帝邕。惑於道士張賓等妖言。惡黒衣之讖。乃欲偏廢釋教。命沙門道士。辨其優劣。且云。長留短廢〈云云。〉襄城公何妥。自行如意。座首少林寺行禪師。發憤而起。諸僧止曰。師爲佛法大海。衆咸仰知。可令末座對揚。共推如意付智炫。安詳而起。徐升論座。坐定執如意。折張賓。理屈〈詳如彼。〉

⑥ 忠曰。論議執如意。可以證焉。

⑦ 三才圖會［十三ノ三十丈］器用部云。如意呉時。秣陵。有掘得銅匣。開之。得白玉如意。執處。皆刻彪蠅蟬等形。胡綜謂。秦始皇東遊。埋寶以當王氣。則此也。蓋如意之始。非周之舊。當戰國事爾。

⑧ 事物初略［廿四ノ十二丈］云。胡綜別傳曰。時有掘地得銅匣。長二尺七寸。開之。得白玉如意。所執處。皆刻螭蟬等形。時人莫知其由。呉大帝。以綜多識。乃問之。答云。昔秦始皇。東遊。以金陵有王者氣。乃鑿諸山崗起處埋寶物以當王者之氣此抑是乎則是如意。始于戰國。

⑩ 顧元慶十友圖贊［糸孚三十六ノ五丈］如意爲直友。曰。右如意。煉鐵爲之。長二尺有奇。上有銀錯。或隱或見。識者知其宣和舊物。平時以剛直自持。山房呼爲直友。

（並木泰淳）

【一五七九】癢和子

① 忠曰。如意言癢和子。

② 希叟曇禪師廣録［三ノ頌ノ廿四丈］禪房十事癢。和子頌云。既就良工雕琢。何妨出手扶持。抓著衲僧痒處。賞伊一枚荔枝。

（並木泰淳）

【一五八〇】印

①毘奈耶雜事〔一ノ八丈〕云。時有賊。來盜僧庫藏。并及私物。爲無記驗。苾芻不知何時失物。佛言。苾芻。可畜其印。應用五種物爲印。所謂鍮石。赤銅。白銅牙角。佛言。凡印有二種。一是大衆二是私物。若大衆印。可刻轉法輪像。或作髑髏形。欲令見時生厭離故。書元本造寺施主名字。若私印者。刻作骨鎖像。或作髑髏形。欲令見時生厭離故。

②輟耕録〔三十ノ一丈〕云。周禮璽節。鄭氏註云。璽節者。今之印章也。按許愼説文云。印執政所持信也。徐鍇曰。从爪手。以持信也。衛宏曰。秦以前。民皆以金玉爲印。龍虎鈕。惟其所好。然則秦以來。天子獨以印稱璽。獨又以王郡臣莫敢用也。七雄之時。臣下璽。始稱曰印。漢制諸侯王金璽。璽之言信也。古者印璽通名。漢舊儀云。諸侯王。黄金璽。橐佗鈕。又曰。璽謂刻曰某王之璽。列侯黄金印。龜鈕。文曰某侯之章。丞相太尉。與三公。前後左右將軍。黄金印。龜鈕。文曰章。中二千石。銀印。龜鈕。文曰章。千石。六百石。四百石。至二百石。以上皆銅印。鼻鈕。文曰印。建武元年詔。諸侯王。金印綟綬。公侯金印紫綬。中二千石以上。銀印青綬。千石至四百石以下。銅印黑綬。及黄綬。陳制。金章。或龜鈕貔鈕獸鈕豹鈕。銀章。或龜鈕熊鈕羆鈕羔鈕鹿鈕。銀印或珪鈕兎鈕。銅印率環鈕。吾衍云。漢有摹印篆。其法只是方正。篆法與隸相通。後人不識古印。妄意盤屈。且以爲法。大可笑也。多見古家。藏得漢印。字皆方正。近乎隸書。此即摹印篆也。玉球嘯堂集古録所載。古印。正與相合。凡屈曲盤回。唐篆始如此。今碑刻。有魯公官誥尚書省印。可考其説。漢晉印章。皆用白文。大不過寸許。朝爵。印文皆鑄。蓋擇日封拜。可綬者也。軍中印文多鑿。蓋急於行令。不可緩者也。古無押字。以印章爲官職信令。故如此耳。唐用朱文。古法漸廢。①至宋南渡。絶無知此者。故後宋印文皆大繆。白文印皆用漢篆。平正方直。字不可圓。縱有斜筆。亦當取巧寫過。三字印。右一邊一字。一邊兩字者。以兩字處。與一字處相等、不可兩字中斷。又不可十分相接。四字印。若前二字。交界有空。後二字無空。須當空一畫別之。字有有脚無脚。故言及此。不然一邊見分。一邊不分。非法度也。軒齋等印。古無此式。唯唐相李泌。有耑居堂白文玉印。或可照例。終是白文。非古法。不若只從朱文。朱文印。或用雜體篆。不可太怪。擇其近人情。免費辭説。白文印。用崔子玉寫張平子碑上字。及漢器上。并碑蓋印章等字。最爲第一。凡姓名表字。古有法式。不可用雜篆。及朱文。白文印。必逼於邊。不可有空。空便不古。朱文印。不可逼邊。須當以字中空白得中處爲相去。庶免印出。與邊相倚無意思耳。字宜細。四旁有出。筆皆帶邊。邊須細於字。邊若一體。印出時。四邊虚紙。皆昂起。未免邊肥於字也。非見印多。不能曉此。黏邊朱文。建業文房之法。多有人。依款識字式。作印此大不可。蓋漢時印法。不曾如此。三代時。却又無印。學者愼此。周禮雖有璽節及職金掌其微惡。揭而璽之之説。註曰。印其實手執之印也。正面刻字。如秦氏璽。而不可印。印則字皆反矣。古人以之表信不問字反。淳朴如此。若戰國時。蘇秦六印。制度未聞。淮南子人間訓曰。魯君召子貢授以大將軍印。劉安寓言。而先辭耳。道號唐人雖有。不曾有印。故不可以道號作印用也。三字屋扁。唐印有法。凡印文中。有一二字。忽有自然空缺。不可映帶者。聽其自空。古印多如此。凡印。僕有古人印式二冊。一爲官印。一爲私印。具列所以實爲甚詳。不若嘯堂集古録所載。只具音釋也。凡名印不可妄寫。或姓名相合。或加印章等字。或兼用印章字。曰姓某印章。不若只用印字。最爲正也。二名者。可回文寫姓下。著印字在右。二名在左是也。單名者。曰姓某之印。却不可回文寫。名印内。不得著氏字。表德可加氏字。宜審之。表字印。只用二字。此爲正式。近人或并姓氏於其上。

曰某氏某。若作姓某父。古雖有此稱。係他人美己。却不可入印。人多好古。不論其原。不爲俗亂。可也。漢人三字印。非複姓。及無印字者。皆非名印。蓋字印。不當用印字。以亂名。漢張安字幼君。有印曰。張幼君。〈右一字、左二字。〉、唐呂温字化光。有印。曰呂化光。此亦三字。表德式。諸印下有空處。懸之最佳。不可妄意伸開。或加屈曲。務欲填滿。若寫得。有道理。自然不覺空也。字多無空。不必問此。李陽冰曰。摹印之法。有四。功侔造化。冥受鬼神。謂之神筆。畫之外。得微妙法。謂之奇藝。精于一規矩方圓。謂之工。繁簡相參。布置不紊。謂之巧。趙彦衞云。古印文作白文。蓋用以印泥。紫泥封詔。是也。今之米印及倉敖印。近之矣。自有紙。始用朱字。間有爲白字者。通典云。北齊有木印。長一尺。廣二寸五分。背上爲鼻鈕。長九寸。厚一寸。廣七分。腹下隱起篆文。曰督攝萬幾。惟以印籍縫。今縫條印。蓋原於此。秦有八體書。三曰刻符。即古所謂繆篆。五曰摹印。蕭子良。以刻符摹印。合爲一體。徐鍇謂。符者竹而中刻之。字形半分。理應別爲一體。摹印屈曲填密。則秦璽文也。子良誤合之。宣和譜四卷。楊克一圖書譜一卷。〈又名集古印格。〉王厚之復齋印譜。顔叔夏古印譜二卷。姜夔集古印譜一卷。吾衍古印文二卷。趙孟頫印史二卷。

⑩ 正字通〔章孚注〕云。漢官儀。吏秩比二千石以上。銀印龜鈕。其文曰章。刻曰某官之章。二百石以上。銅印鼻鈕。其文曰印。刻曰某官之印。今士大夫。私用姓名圖記。曰某章某印。　又云〔識字注〕。刻之印章。則陽文曰朱文。陰文曰白文。蓋古今金石。同一例也。

⑪ 客窓隨筆〔五ノ十五丈〕云。古人印章。元自圓整。有殘缺處。乃沙土久蝕。而然。今人乃以新製者。故擊碎。而模糊之。以爲古。大非也。且以施於泛印。猶可。若自己姓字。必殘缺磨滅。而使之古。何爲者哉。

⑫ 忠曰。趙世顯。是論。最確矣。印名人見存。而其印却爲古物之状。違理之甚。

⑬ 明僧獨立。印章説云。印章之作。由國璽符篆而別士民得用。自漢而興。但紀姓名。無引首。別號表字。悉用銅鑄。在公者。用龜鈕。曰之印。大夫者。稱之章。私記者。用瓦鈕。曰私印。不刻朱文。概用小篆。白文。今稱漢白文焉。宋始興。齋居別號字氏。至我明國。人爭尚閒文詩句。遂分籀文小篆。繆篆署書。方朱圓朱。玉箸切玉。急就之體。井井不紊。取諸金玉凍石。以飾珍玩。成弘之際。由用犀象刻印。今鄙棄之。萬曆初。有何雪漁文三橋者。益新秦漢篆。法曰鑄體。曰鑿體。曰半鑄半鑿體。曰飛走流動體。中鋒正筆。鐵畫銀鈎。擧説文。應正用。其道始光。從元吾衍子説。以詳其制。予居關門。竺印師。以青田印石。索予篆字。奈何筆尖綿藐。畫不從心。脱稿于石。在鐵筆者。繩之正之。予昔曾與陳文叔鄭正叔梁千秋丁秋屏諸名公。校酬精覈。是得金石心傳。不與刊梨鐫棗。同工而語。但予情厭操刀。不及其好。是爾捐棄。今日本但曰刻印。不知配字合道。奏刀有訣。玄玄至理。豈是鹵莽滅裂。可爲是。特紀此數言。以付雕蟲者。作明眼。壬寅姤月。廿有四日。天間野衲獨立氏識。〈眞本在龍華。〉

（並木泰淳）

【一五八一】書剪

① 敕修清規尊宿遷化。下遺書云。行者備書剪。托書物。〈乃至〉住持熏爐。送與維那。行者度剪。開緘宣讀。

（荒川玄梁）

【一五八二】界尺

①忠曰。界尺文具。以畫界罫線。兼鎮紙幅。與戒尺不同。戒尺見唄器類。

②禪林類聚［一ノ六丈］云。梁武帝。請傅大士講經。大士陞座。以界尺。揮案一下。便下座。帝愕然。誌公問帝云。陛下會不。帝云不會。誌云。大士講經竟。

③聯燈會要［廿九ノ十五丈］但作尺。是界尺。可依類聚而知也。〈幻住菴清規、言尺戒尺也、見唄器類。〉

④北磵文集［六ノ七丈］界尺銘云。惡圓曲。尚方正。直而剛。重以填。

⑤輟耕録［廿七ノ十五丈］裱背十三科之一曰。界尺裁版桿帖。

⑥五代史［卅五ノ三丈］唐趙光逢傳云。趙光逢字延吉。在唐以文行知名。時人稱其方直温潤。謂之玉界尺

⑦三才圖會器用類［十二ノ十三丈］云。尺以鎮紙。錐以刺書。

（荒川玄梁）

【一五八三】針筒

①見戒刀處。

②世尊不聽作象牙骨角鍼筩。縁見于僧祇律［二十下ノ六丈］

③雲門偃禪師録［中ノ卅九丈］云。或云。佛法還有變易也無。代云。鉢盂鞋履。拄杖針筒。又［中四十八丈］云。紐半破三。針筒鼻孔裏。道將一句來。代云。海裏使風山上船。

④續燈録［五ノ六丈　○正宗賛四ノ廿一丈］天衣懷禪師章云。上堂云。須彌頂上不扣金鐘。畢鉢巖中。無人聚會。山僧倒騎佛殿。諸人反著草鞋。朝遊檀特。暮到羅浮。拄杖針筒。自家收取。

⑤佛果擊節録［下ノ十八丈］云。欽山將針線。行脚。到處與人做衣。〈詳雜行類、把針處。〉

（荒川玄梁）

【一五八四】鏡

①資持記云。坐禪處。多懸明鏡。以助心行〈詳靈像類、寫照處。〉

②釋氏要覽［中ノ十三丈］云。僧祇云。若病差。若新剃頭。若頭面有瘡。照無罪。若爲好故照者。得越毘尼罪。

③　已下。略録因縁。

④傳燈録［二ノ六丈］僧伽難提章云。一童子。持圓鑑。直造尊者前。師曰。汝手中者。當何所表。童曰。諸佛大圓鑑。内外無瑕翳。兩人同得見。心眼皆相似。尊者受具戒訖。名伽耶舍多。

⑤聯燈會要［八ノ五丈］仰山寂禪師章云。師住東平。溈山寄鏡子一面。并書。至。師陞堂。受書畢。提起鏡子。示衆云。大衆且道。是溈山鏡。是東平鏡。若道是東平鏡。又是溈山寄來。若道是溈山鏡又在東平手裏。若道得即留取。若道不得。即撲破去也。如是三説。

衆皆無對。師遂撲破。

（荒川玄梁）

【一五八五】剃刀

①敕修清規［下一ノ廿三丈］沙彌得度云。戒師用淨瓶灌頂。以指滴水於頂上。執刀剃頭。

②傳燈録［十二ノ卅六丈　○碧十ノ廿一丈］南院寳應和尚章云。思明和尚、未住西院時。到參禮拜後白曰。別無好物人事。從許州。買得一口江西剃刀來。獻和尚師曰。汝從許州來。什麽處得江西剃刀。明把師手。掐一下。師曰。侍者收取。明拂袖而去。師曰。阿刺刺。

（荒川玄梁）

【一五八六】戒刀

①敕修清規［下一ノ卅一丈］辨道具云。僧史略云。戒刀皆是道具。表斷一切惡故。

②僧史略［上ノ十五丈］云。及持澡罐漉囊錫杖戒刀。斧子針筒。此皆爲道具也。

③釋氏要覽［中ノ十一丈］云。戒刀。按律許蓄月頭刀子。爲割衣故。今比丘蓄刀名戒者。蓋佛不許斫截一切草木。壞鬼神村故。草木尚戒。況其它也。

④祖庭事苑［八ノ十七丈］云。戒刀根本雜事云。佛在室羅伐城。苾芻欲裁三衣。便以手裂。衣財損壞。佛言。可刀子裁。六衆。便以雜寳飾之加以太長。佛制不聽。此是大刀。不是刀子。汝等應知。有三種刀子。謂大中小。大者可長六指。小者四指。二内名中。其状有二。一如鳥羽曲。二似雞翎。不應尖直。

⑤五分律［廿六ノ十八丈］云。諸比丘無刀。用竹蘆片割衣。衣壞。佛言聽畜割截物刀。諸比丘。便作大刀。賊來。得以害比丘。佛言。不聽作大刀。犯者突吉羅。聽長一指。一邊作刃。以木作柄。除漆樹。

⑥梵網經十八物中。有刀子。〈見楊枝處。〉古迹記云。刀子割甲。

⑦行事鈔［下二ノ三ノ十八丈］鉢器制聽篇云。毘尼母。聽畜刀子。六種。一用割皮。剪甲。破瘡。裁衣。割衣上毛縷。六用淨果。乃至食時。種種須故。

⑧希叟曇禪師廣録［三ノ頌廿四丈］禪房十事戒刀頌云。惡鉗鎚下飜身。未必鋒芒發露。不惟斬得猫兒也解殺佛殺祖。

（荒川玄梁）

【一五八七】法瓶

①舊説［勅鈔十一ノ六丈］曰。布薩時所用瓶。名法瓶。乃盛香湯。及香水也。

②　又見濾水囊處。

（荒川玄梁）

【一五八八】淨瓶

①敕修清規［下一ノ卅一丈］辨道具云。淨瓶。梵語捃稚迦。此云餅。

②釋氏要覽［中ノ十一丈］云。淨瓶。梵語軍遲。此云瓶。常貯水隨身。用以淨手。寄歸傳云。軍持有二。若甕瓦者。是淨用。若銅鐵者。是觸用。

③ 忠曰。余曾問久修園宗覺律師曰。今律士。但携一瓶。未審是觸是淨。覺曰。一瓶貯淨水。觸淨兼用。

④義淨〔二百六套〕受用三水要行法云。舊律十誦五十九云。有淨澡罐。廁澡罐。四十一云。有淨水瓶。常水瓶。又新譯有部律文。淨瓶觸器極分明。此並金口親言。非是人造寧容唯一銅瓶。不分淨觸。雖同告語。不齒在心。豈可以習俗生常。故違聖教。

⑤祖庭事苑〔八ノ十七丈〕云。淨餅。四分律云。有比丘。遇無水處。水或有蟲。渴殺。佛知制戒。令持觸淨二餅。以護命故。

⑥ 傳燈録〔九ノ四丈〕潙山祐禪師章云。百丈召師入室。囑云。吾化縁在此。潙山勝境汝當居之。嗣續吾宗廣度後學。時華林聞之曰。某甲忝居上首。祐公何得住持。百丈云。若能對衆。下得一語出格。當與住持。即指淨瓶。問云。不得喚作淨瓶。汝喚作什麼。華林云。不可喚作木楔也。百丈不肯。乃問師。師踢倒淨瓶。百丈笑云。第一座。輸却山子也。遂遣師往潙山。

（荒川玄梁）

【一五八九】濾水嚢

①篇海類編〔二ノ卅一丈〕云。濾良據切。音慮。漉去滓也。

②敕修清規〔下一ノ卅一丈〇慈覚已上〇要覧中ノ十二丈文〕辨道具云。濾水嚢。増輝記云。爲器雖小。其功甚大。爲護生命故。中華僧。鮮有受持准律標示。根本百一羯磨云。水羅有五種。一方羅。〈用絹三尺、或二尺隨時大小作、絹須細密、不透蟲者若用疎絹薄紗紵布者、無護生之意。〉二法瓶。〈陰陽瓶也。〉三軍遲。〈以絹繫口、以繩懸、沈於水待滿引出。〉、四酌水羅。五衣角羅。〈言衣角者、非袈裟角也、但取密絹方一搩手或繫瓶口或安鉢盂中濾水用也。〉慈覺大師賾公集經律。凡三十一偈。文多不録。末謂。世云。濾羅難安多衆。宗賾。崇寧元年。於洪濟院厨前井邊。安大水檻。上近檻脣。別安小檻。穿角傍出。下安濾羅傾水之時。全無逆溢。亦乃大衆沾足。浴院後架。倣此。僧行東司。亦皆濾水。出家之本道也。後住長蘆。諸井濾水。二十餘處。常住若不濾水。罪歸主執之人。普冀勉而行之。

③行事鈔〔下一ノ二ノ六丈〕二衣総別篇云。漉水袋法。物雖輕小。所爲極大。出家慈濟。厥意在此。薩婆多。凡用水法。應清淨者。如法漉水。置一器中。足一日用。取上細氎一肘作嚢。令持戒審悉者。漉水竟。著淨器中。向日諦視看。四分作漉水袋。如杓形。若三角。若作宏槨。不得無漉袋。行半由旬。無者。僧伽梨角漉。此國多用絹作者。余親取已漉竟水。内黒色器中。微小細蟲無數。後取緻練作袋。漉之方盡。

④ 已下。略録事縁。

⑤傳燈録〔四ノ十二丈〇六学四ノ十六丈〕牛頭智巖禪師章云。師姓華氏。弱冠智勇過人。身長七尺六寸。隋大業中。爲郎將。常以弓挂一濾水嚢。隨行所至。汲用。累從大將征討。頻立戰功。唐武徳中。年四十。遂乞出家。

⑥六學僧傳〔十ノ廿八丈〕唐僧竭傳云。竭每以複帛。爲漉水嚢。日漉水。投蟲井中。井恆盈。未嘗涸。世因以護生井。目之。

⑦丹鉛総録〔二十一ノ五丈〕云。唐人白行簡。以濾水羅賦。得名。其警句。云焦螟之生必全。有以小爲貴者。江漢之流雖大。蓋可一以貫之。靈一詩曰。濾泉侵月起。掃徑避蟲行。濾水蓋僧家戒律有此。欲全水蟲之命。故濾而後飲。今蜀中深山古寺。猶有此規白居易送文

暢詩。山宿馴溪虎。江行濾水蟲。

（荒川玄梁）

【一五九〇】手巾

①忠曰。手巾二種。一隨身攜手者。一公界者。或在僧堂内。或在浴室内。或在後架。皆長丈二。掛之轆轤。令牽轉。就其乾處拭用。

②　已下。録隨身手巾。

③梵網經十八物中。有手巾。〈詳器物類、楊枝處。〉

④行事鈔［下一ノ二ノ十六丈］二衣總別篇云。又開鉢囊。革屣囊。針筩。禪帶。腰帶。帽拭脚巾。攝熱巾。裹革屣巾等。及拭面巾。拭身巾。捫淚巾。

⑤續燈録［四ノ十二丈］龍潭圓禪師章云。師辭汾陽。汾陽云。別無送路與子。一條拄杖。一條手巾。師云。手巾與和尚受用。拄杖不用得。昭云。但將去。有用處在。師便收。昭云又道不用。師喝一喝。便下去。昭云。已後不讓臨濟。師云正令已行。〈師嗣汾陽善昭。〉

⑥　事物紀原［八ノ九丈］云。禮浴用二巾。上絺下綌。雖上下異用。而無異名。此三代之制也。漢王莽之斥逐王閎也。閎伏泣。元后親以手巾拭之。於是始見手巾之目。其事雖出於三代。而制名。當自漢世也。

⑦　　已下。録公界手巾。

⑧大比丘三千威儀［下ノ十丈］云。當用手巾有五事。一者當拭上下頭。二者當用一頭拭手。以一頭拭面目。三者不得持拭鼻。四者以用拭膩汚。當即浣之。五者不得拭身體。若澡浴。各當自有巾。〈忠曰、若澡下、説隨身巾。〉

⑨敕修清規大坐參云。聖僧侍者。牽堂内手巾轆轤。驚酣眠者。

⑩日用軌範［敕下一ノ四十六丈］云。拭面不得爭扯手巾。不得以巾拭頭。用畢須攤掛或焙火上。

⑪永平［永眼ノ五ノ洗面］道元和尚曰。手巾。一幅布。長壹丈貳尺也。不可白色。〈已上僧堂巾。〉

⑫敕修清規［下一ノ三丈］知浴云。鋪設浴室。掛手巾。出面盆拖鞋脚布。

⑬日用軌範［下一ノ］開浴云。公界手巾。係著衣後。淨手拭之。以披五條也。〈已上浴室巾。〉

⑭緇門警訓［下ノ八十五丈］登廁規式云。後架手巾。須多備三兩條。頻頻洗換。莫令垢染。以汚淨手。人衆處。五日一洗。人少處。十日一洗。〈已上後架巾。〉

⑮　忠少時聞古老説。謂行脚人。以手巾束腰。其巾取一幅布長丈二。一頭豎折。横縫定其脣。若道路遇亡骸。則不空見過。便以巾縫首。納亡人一脚。自骸背過肩。負之於己背上。尋可瘞處。税下。葬之。諷誦而去。余按毛詩［小推小弁］云行有死人。尚有墐之。〈止此。〉仁儒秉心。猶若是。況爲度生大士乎。

（荒川玄梁）

【一五九一】淨巾

①舊説［敕鈔十二ノ卅九丈］曰、淨巾、即手巾也。

②日用軌範［敕下一ノ四十九丈］抽脱云、以淨巾、搭左手。

【一五九二】面盆

①敕修清規［下一ノ九丈］水頭云、手巾面盆、燈燭牙藥、毋令缺少。

【一五九三】枕子

①日用軌範［敕修下一ノ四十六丈］云、五更鐘未鳴。輕輕擡身、先起將枕子、安脚下。未要拗。恐驚隣單。

②祖庭事苑［八ノ十八丈］云、寄歸傳云、南海十島、西國五天、並皆不用木枕支頭。神洲獨有斯事。西方枕囊樣式、其類相似。或取帛或布。染色隨意、縫爲直袋。長一肘半、寬半肘、中間財者、隨處所出、或可塡毛、或盛麻緼、或蒲黄柳絮等、或決明麻豆、隨時冷熱、量意高下。斯乃取適安身。實無堅強之患。然爲木枕疎硬、頭下通風、致使時人、多苦頭疼。既而軟物除風、麻豆明目。且能有益。用實無爽。又爲寒鄉凍頂、多得傷風、冬月鼻流。斯其過也。今禪人、多畜木橋枕。蓋便於行脚。收拾易然。故利時之用。亦不可革也。

③法華文句記［五之二ノ廿七丈］云、南山注經音云、西方無木枕。皆以赤皮、内著綿毛、用倚臥也。

④靈源拾遺［日用別山鈔上ノ九丈引］云、昔哲侍者、夜半不睡。以圓木爲枕。小睡、時枕轉。覺而後、安坐如故。

⑤傳燈録［十一ノ八丈］仰山寂禪師章云、僧問、法身還解説法也無。師曰、我説不得。別有一人説得。曰説得底人、在什麼處。師推枕子出。潙山聞云、寂子用劍刃上事。

（白川邦與）

【一五九四】橋枕

①忠曰、橋枕、日本名摺枕者、其制兩小板。内安細木柱、兩頭有機、令可開闔。開則柱斜、撐起板一左一右、任安頭。摺則小柱臥、塡兩板凹處。太便于收藏。

②敕修清規大坐參中、再請禪云、更深住持出、聞首座開枕響、衆方偃息。〈止此。〉乃開枕、以備臥用也。

③祖庭事苑説、見枕子處。

（白川邦與）

【一五九五】扇

①釋氏要覽［中ノ十一丈］云、西天多用、如阿含經云、阿難羅云皆執扇侍佛。優波離、結集律藏時、波斯匿王、與象牙裝扇、令執誦律。古高僧慧榮、講時、執扇。隋煬帝賜高僧敬脱、大竹扇闊三尺、入内講經論。

②大慧爲如山主普説［一ノ廿五丈］云、我老和尚、〈圓悟〉曾説、五祖師翁、每於盛暑中、常披袈裟、禪床上坐。更不使扇。先師便問、和尚何不使扇。祖云、你理會不得。我是順時保愛。因問其故。祖云、天地之氣、既有四時、便有寒暑。既在寒暑中、須與他受些子。你若逃寒畏暑、便是逆其時候了也。這箇便是老僧、順時保愛。

③鹽官齊安禪師、索犀牛扇子。　見傳燈録［七ノ十一丈〇又碧十ノ一丈］。

④ 忠曰、中華所謂扇多是團扇而已。如此方言扇皆是摺疊扇也。

⑤ 春風堂隨筆［二丈〇糸孚二十］云、今世所用摺疊扇、亦名聚頭扇。吾鄉張東海先生、以爲貢於東夷。永樂間、始盛行於中國。予見南宋以來詩詞、咏聚扇者、頗多。予收得楊妹子所寫絹扇面、摺痕尚存。東坡謂高麗白松扇、展之廣尺餘、合之止兩指許、正今摺扇。蓋自北宋、以有之。倭人亦製爲泥金面、鳥竹骨、充貢。出自東夷、果然。

⑥ 徐氏筆精［八ノ十八丈］云、國朝〈大明〉不用團扇、用摺扇。

（白川邦與）

【一五九六】頭末紅扇

①忠曰、日本禪林兄弟者、所執金面中啓扇子、上頭繪深紅雲容。名言頭末紅扇子。

〇已下、係資身麁器。

（白川邦與）

【一五九七】法蓋

①忠曰、法蓋者、葫蘆［水滸十三ノ五丈左］頂。繡羅三簷大傘。新住持入院、行者、執而面覆之。

② 水滸傳［十三卷五丈左］云、梁中書、出堦前、坐定交椅。左右祇候兩行、喚打傘的。撐開那把、銀葫蘆頂、茶褐羅三簷凉傘來、蓋定在梁中書背後。

③ 忠曰、禪林法蓋之制、正是也。

④ 增壹阿含經云、世尊受須摩提女請、至滿富城。〈廣説乃至〉是時梵天王、在如來右、釋提桓因、在如來左、手執拂。密迹金剛力士、在如來後、手執金剛杵。毘沙門天王、手執七寶之蓋。處虛空中、在如來上。恐有塵土坌如來身。

⑤ 忠曰、蓋之用、在防塵穢、此文可爲證。

⑥ 釋氏要覽［中ノ十一丈］云、律云、跋難陀比丘、持大蓋行。〈似今凉傘也。〉諸居士、遥見、謂是官人、皆避道、及近、元是比丘。乃譏嫌之。佛乃制戒。不應持大蓋。若天雨即聽。

（白川邦與）

【一五九八】凉傘

①忠曰、日本禪林長老者、行路、執傘覆之遮日。製小於法蓋。以油紙造之。

② 餘冬序録［五十八ノ十二丈］云、按宋人私録、京城士人、舊通用青絹凉繖。大中祥符間、惟許親王用之。餘並禁止。後又許中書樞密院。依舊用繖。

③ 堯山堂外紀［四十四ノ十四丈］云、劉子儀〈名筠。〉侍郎、三入翰林。希望大用。意頗不懌。賦詩云、蟠桃三竊成何味。上盡鼇山迹轉孤、移疾不出。朝士問候者、繼至詢之云、虛熱上攻。石中立在坐云、只消一服清凉散。意謂、兩府始得用青凉傘也。

④ 忠曰、僧家凉傘、有所擬也。

（白川邦與）

【一五九九】笠

①敕修清規［上二ノ十九丈］入院云、古人腰包頂笠、到山門首、下笠入門、炷香、有法語。又［下一ノ卅一丈］裝包云、古者戴笠、笠内安經文・茶具之類。

②釋氏要覽［中ノ十一丈］云、蓋律有二種。一竹蓋、二葉蓋。寄歸傳云、西域僧、有持竹蓋、或持傘者。梁高僧惠韶、遇有請、則自攜杖笠也。今僧戴竹笠、櫻笠乃竹蓋之遺製。但去柄爾。今又加油絹於上。即唐馬周製。在蓆帽、以禦雨、故效之也。

③傳燈録［十一ノ廿六丈］金華山俱胝和尚章云、初住菴、有尼名實際。到菴戴笠子、執錫繞師三帀云、道得即拈下笠子。三問、師皆無對。尼便去。後天龍和尚到菴、竪一指。師當下大悟。

（白川邦與）

【一六〇〇】轎

①字彙云、轎渠妙切、橋去聲、肩行之車也。

②品字箋［戌下ノ六十五丈］云、轎肩輿也。漢淮南王安、諫擊閩越、輿轎踰嶺。註、今竹輿。嚴助傳註服虔曰、隘路車也。

③容齋四筆［九ノ六丈］云、漢書、淮南王安、諫武帝伐越書曰、輿轎而隃領。服虔曰、轎音橋、謂隘道輿車也。臣瓚曰、今竹輿車也。江表作竹輿、以行。項昭曰、陵絶水曰轎。音旗廟反。顔師古曰、服音瓚説、是也。項氏謬矣。此直言以轎過領耳。何云陵絶水乎。旗廟之音、無所依據。予謂、項音轎字、是也。而云陵絶水、則謬。

（白川邦與）

【一六〇一】蒲龕

①希叟曇禪師廣録［三ノ頌ノ廿三丈］、禪房十事蒲龕頌云、百匝千重包裹、未免黒山裏坐。古今多少生盲、引得全身入草。　蒲義、見蒲團處。

（白川邦與）

【一六〇二】温蒲

①蒲龕、又言温蒲。

②江湖集［下一ノ卅丈］月庭忠和尚温蒲頌云、業履人亡肉未寒、滿汀柔緑帶春煙。全身入草重扶起、門掩昭州二十年。

（白川邦與）

【一六〇三】蒲團

①忠曰、坐物以蒲編造、其形團圓、故言蒲團。和俗稱眠單、爲蒲團。大失義。

②埤雅〔十八ノ十二丈〕云、蒲水草也。似莞而褊。有脊、生於水厓。柔滑而温。可以爲席。
③永平清規辨道法〔八丈〕云、晡時衩衣入堂。就單位、出蒲團而用坐禪。未展單矣。
④　忠曰、單、謂眠單。可知蒲團眠單二物也。
⑤　大慧杲禪師書、答曾侍郎云、公既與竹椅蒲團爲侶。
⑥　希叟曇神師廣録〔三ノ頌ノ廿四丈〕禪房十事蒲團頌云、百草頭邊薦得。何妨打塊成團。直下千差坐斷。無心猶隔重關。
⑦　聯珠詩格〔六ノ一丈〕註云、蒲團、僧房坐具。東坡詩、後夜當獨來。不煩主與賓、蒲團坐紙帳、自要觀我身。

（白川邦與）

【一六〇四】椸架
①毘奈耶雜事〔十三ノ四丈〕云、緣在室羅伐城。苾芻、隨處而安衣服。便多垢膩、被蟲蟻穿。佛言、不應隨處、而置衣服。當作衣架。苾芻即便穿壁安衣、令壁損壞。佛言不得穿壁、初造寺時、應出木坎。上置衣竿。時諸苾芻、房内置竿、簷前不作。佛言簷前亦作。勿令闕事。
②正字通〔辰中ノ七十四丈〕云、椸音移、衣架、曲禮男女不同椸架。又方言榻前几、趙魏間、謂之椸。凡直植曰椸、横架曰桁。
③禪門規式〔傳灯六ノ廿二丈〕云、僧堂設長連床、施椸架、掛搭道具。〈詳叢軌類掛搭處。〉

（白川邦與）

【一六〇五】几案
①詳禪板處。
②正字通〔辰中四十四丈〕云、案几屬。

（白川邦與）

【一六〇六】經案
①敕修清規〔下一ノ卅二丈〕遊方參請云、古規、首到客司、相看。次往堂司掛搭、送單位。經案定、然後到侍司、通覆、詣方丈禮拜。
②　舊説曰、衆寮案位、言經案。蓋衆寮、是看經之處、故以名之。

（白川邦與）

【一六〇七】牀
①僧祇律〔二十下七丈〕云、佛住舍衞城、制戒不聽過量作牀。〈乃至〉作牀脚。應量作高修伽陀八指。〈乃至〉修伽陀者、如來應供正遍知。八指者、佛八指。
②　忠曰、飜譯集〔三ノ四十四丈〕曰、佛指濶二寸。〈止此。〉即八指一尺六寸也。

（白川邦與）

【一六〇八】繩床

①聯燈會要［四ノ十八丈○傳灯作禅床○会元三ノ七丈］百丈海禪師章云、師再參馬大師。侍立次、大師目顧繩床角拂子。師云、即此用。離此用。祖云、汝向後開兩片皮、將何爲人。師取拂子豎起。祖云、即此用。離此用。師挂拂子舊處、祖震威一喝。師直得三日耳聾。

②摩訶止觀［二之一ノ三丈］云、安一繩床、傍無餘座。

③五車妙選［六ノ四十一丈］云、杜詩、花影在繩床、注云、以繩穿爲坐具。即今之交椅也。一云胡床。隋惡胡改名交床、唐改繩床。

④事文類聚［続ノ十一ノ十三丈］云、今之交床、制本自虜來。始名胡床。桓伊下馬、踞胡床、取笛三弄、是也。隋以讖有胡、改名交床。胡瓜亦改黄瓜。唐柴紹擊西戎。據胡床、使兩女子舞、則唐史臣、追本語以書也。唐穆宗長慶二年、十二月、見群臣禮、紫宸殿御大繩床、則又名繩床矣。

⑤瑯邪代醉編［卅七ノ四丈］云、古者席地而坐。未嘗有椅。至晋乃有繩床。即今上馬交床之類、此用椅之漸也。

（白川邦與）

【一六〇九】椅子

①敕修清規［上二ノ三丈］告香云、鋪設罣罳椅子。〈見罣罳處。〉

②琅邪代醉編云、古未有椅。〈詳繩床處。〉

③正字通［辰中ノ六十九丈］云、椅音倚。借高坐具。後有倚者。今俗呼椅子。

④品字箋［戌云八十三丈］云、桌椅。桌几之高者。椅人所倚坐者。此後世之借用。非古音義。

⑤椅子、又作倚子。　傳燈録［廿一ノ三丈］羅漢琛禪師章云、玄沙嘗問曰、三界唯心、汝作麼生會。師指倚子曰、和尚喚這箇、作什麼。玄沙曰、倚子。曰、和尚不會三界唯心。玄沙曰、我喚這箇作竹木。汝喚作什麼。曰、桂琛、亦喚作竹木。玄沙曰、盡大地覓一箇會佛法底人、不可得。

（廣田宗玄）

【一六一〇】參椅

①忠曰、參椅者、交椅也。脚木乂字交加、令可折疊。參亦交也。或云、學者參問時、師家坐此椅故、云參椅也。

②敕修清規［下一ノ卅四丈］遊方參請云、凡寢堂中、必設參椅、示尊師道也。

③事物紀原［八ノ四丈］云、搜神記曰、胡床、戎翟之器也。風俗通曰、漢靈帝、好胡服。景師作胡床。此蓋其始也。今交椅是。

④三才圖會［四ノ卅六丈］儀制類、有交椅。及椅踏圖。

（廣田宗玄）

【一六一一】竹椅

①忠曰、以竹所造椅子也。

②大慧杲禪師書答曾侍郎云、公既與竹椅蒲團爲侶。不異善財見最寂靜婆羅門。

（廣田宗玄）

【一六一二】曲彔

①五祖演禪師録［古宿二十一ノ九丈］云、上堂云、行者不報來打鼓。曲彔木頭上、不免將　錯就錯。參。

②碧巖録評龍牙參臨濟話云、他致箇問端。不妨要見他曲彔木床上老漢。亦要明自己一段大事。

③普燈録［十九ノ十一丈］應菴華禪師章云、虎丘忌日拈香曰、平生沒興撞著這無意智老和尚、做盡伎倆、湊泊不得。從此卸却干戈、隨分著衣喫飯、二十年來、坐曲彔木、懸羊頭賣狗肉。他有甚憑據。雖然一年一度燒香日、千古令人恨轉深。

④虛堂愚和尚録［四ノ六丈］示如足首座法語云、以平等大心、待四方衲子、方可據曲彔床。

⑤雪巖欽禪師録普説云、凡遇五參、見曲彔床上箇漢、胡説亂道、何不也歷在耳根。

⑥篇海類編［二ノ一丈］云、彔、盧谷切。音祿。刻木也。

⑦正字通［寅下四十六丈］云、説文彔、別爲部。刻木彔彔也。象形、以篆形推之、與彑別。舊本附彑部非。

⑧忠曰、曲彔、蓋刻木屈曲貌、今交椅製。曲彔然。故異名曲彔木。遂省木、單稱曲彔也。

⑨又有作曲録者、依音同訛寫。碧巖録［四ノ一丈］云、古人行脚、徧歷叢林。直以事爲念。要辨他曲録木床上老和尚、具眼不具眼。

⑩又有作曲彔者、亦依音同訛。續燈録［八ノ七丈］興化仁嶽章云、問如何是和尚家風。師云、曲彔禪床。又上方日益章上堂［二十ノ十五丈］云、五葉芬芳、千燈續燄。向曲彔木裡、唱二作三。〈五燈會元作彔。〉

⑪晦菴光狀元録［糸宿ノ星］云、行到汝州葉縣、被一陣業風吹上。首山曲彔木床上、見箇老和尚。云云。

（廣田宗玄）

【一六一三】曲木

①忠曰、曲彔木床也。

②雲門偃禪師録［上ノ卅四丈　○事苑三ノ八丈引］云、上堂云、諸方老禿奴、曲木禪床上坐地、求名利、問佛答佛、問祖答祖。屙屎送尿也。三家村裏老婆、傳口令相似。識箇什麼好惡。総似這般底、水也難消。

③祖英集送勝因長老偈［上ノ三丈］云、韶陽間出多慷慨、權要雄雄、曾絶待。曲木據位、知幾何。利刀翦却、令人愛。

（廣田宗玄）

【一六一四】長連床

①見拖架處。

②傳燈録香林遠禪師章［廿二ノ廿九丈］云、問、如何是玄。師曰、今日來明日去。如何是玄中玄。師曰、長連床上。

③南海寄歸傳［三ノ八丈　○敕鈔十五ノ廿二丈引］云、西方房迮、居人復多。臥起之後、牀皆擧攝。或内置一邊、或移安戸外。牀闊二肘、長四肘半。褥席同然。又云、西國講堂食堂之内、元來不置大床、多設木拈并小牀子、聽講食時、用將踞坐。斯其本法矣。神州則大牀方坐、其事久之。雖可隨時設儀、而本末之源、須識。

（廣田宗玄）

【一六一五】踏床

①禪苑清規赴粥飯云、上床之法。〈云云。〉提面前袈裟。次併以左手提之、即踏床、近裡而坐、　然後棄鞋。

②保寧勇禪師録［廿一丈］上堂云、森羅及萬像、皆於鏡中現。以杖指云、北面是厨庫、南面是僧堂、中間是佛殿。直下指云、者裏是什麼。乃云、踏床子也不識。

③大慧武庫［卅二丈］云、張無盡至兜率、語及宗門事曰、疑香嚴獨脚頌、徳山托鉢因縁。悦曰、既於此有疑、其餘安得無耶。只如言末後句、是有耶、是無耶。無盡曰、有悦大笑、遂歸方丈、閉却門。無盡一夜睡不穩。至五更下牀、觸飜蹋床、忽然省得。

④　忠曰、踏床、椅子前承足小几也。又言脚凳。　竺原證道歌註［卅四丈］擧張無盡因縁云、至五更、起來踏飜脚凳、忽然大悟。

⑤踏牀、律名承易牀。　毘奈耶雜事［十四ノ十四丈］云、縁在室羅伐城。佛言、應誦經者、可昇高座。其人坐師子座、下垂雙足、致有勞倦。佛言、應作承足牀。苾芻不解佛言。若座不移動、應以甎作。若移轉者、可用版爲雖以版作。移擧時難。可於四角各安鐵鐶、隨意擎去。

⑥　僧祇律［二十ノ下八丈］作承足机。

（廣田宗玄）

【一六一六】凳子

①忠曰、椅子前、承脚小几也。

②大慧正法眼藏［一下ノ四十九丈］云、法眼指凳子云、識得凳子、周帀有餘。雲門云、識得凳子、天地懸殊。天衣云、識得凳子、桧楠木做。

③僧寶傳［四冊三十一丈］華嚴隆禪師傳云、乘侍者曰、禪門親見石門。如何却嗣廣慧。隆曰、我初見廣慧、渠方欲剃髮。使我擎橙子來。廣慧曰、道者我有橙子詩。聽取。詩曰、放下便平穩。我時便肯伊。

④　正字通［子下ノ卅九丈］云、凳舊註、丁鄧切、登去聲、牀凳。正韻橙几屬、字林作　凳。

⑤　品字箋［庚七十二丈］云、高而可凭者爲几、爲桌。低而可坐者爲椅、爲凳。

⑥ 三才圖會［器用十二ノ十六丈］云、机凳。皆胡床之別名。但机之制方。凳之制脩、皆後人以意爲之者。

（廣田宗玄）

【一六一七】卓凳

①忠曰、卓前之凳子也。或卓。凳二物也。

②敕修清規［下一ノ六十四丈］亡僧云、或勤舊、有田地米穀房舍床榻。卓凳、當盡歸常住。

（廣田宗玄）

【一六一八】脚凳

①踏床也。見踏床處。

（廣田宗玄）

【一六一九】脚踏

①忠曰、凳子也。

②備用清規［一ノ二丈］聖節陞座云、住持上脚踏問訊、斂衣趺坐。

（廣田宗玄）

○已下係行裝具。

【一六二〇】祠部筒

①敕修清規［下一ノ卅一丈］裝包云、衣被、束前後包、挿祠部筒戒刀。

②禪苑清規［一ノ二丈　○敕鈔十一ノ七丈］裝包云、先挿戒刀於右腋下、次挿祠部筒於左腋下。祠部袋、用條或帶、絡肩上。更用條帶一條、横繫腰間。如未打後包以前、繫掛定、倒飜起祠部筒。然後上爲包、更是便。

③ 舊説［敕鈔十一ノ七丈］曰、自唐已來、度牒外有祠部牒。〈見簿券類。〉牒以竹筒盛之、行脚人隨身。

（廣田宗玄）

【一六二一】複子

①臨濟玄禪師録云、大策子上、抄死老漢語、三重五重複子裹、不教人見、道是玄旨、以爲保重。

②圓悟心要［下ノ廿六丈］示圓上人語云、刻意息心、擇眞正具頂門宗眼知識、放下複子、靠取成辨。

③聯燈會要［二十ノ六丈　○碧一ノ十二丈］徳山鑑禪師章云、師到潙山、挾複子於法堂、從西過東、從東過西、顧視方丈。潙山不顧。師云、無無、便出去。

④　忠曰、複當作袱。字彙云、袱房六切。音伏、包袱。〈止此。〉又云、複方六切、音幅、重　也。説文重衣也。〈止此。〉非今義。蓋二字音同。袱字訛作複也。『敕修清規』［下一ノ卅一丈］　裝包云、裝包之法、用青布袱二條。〈止此。〉布袱即複子也。

（廣田宗玄）

【一六二二】油單

①敕修清規［下一ノ卅一丈］裝包云、頂包裝包之法、用青布袱二條、先以一條收拾衣被之屬。仍用油單、裹於外。復用一條、重包於外、四角結定、用小鎖鎖之。

②　忠曰。日本雲水僧、稱袱子爲油單。其實、油單、以桐油塗紙造之。如油衣之材。以防雨露浸犯。蓋油單包袱子、故呼袱子爲油單耳。

（廣田宗玄）

【一六二三】包

①裝包法、詳清規。〈又略見油單處。〉

②祖庭事苑［八ノ十六丈］云、打包、毘奈耶雜事云、時有苾芻、作三衣竟。置在肩上、隨路而行。遂被汗霑。并塵土汙。佛言、應以袋盛。其袋可長三肘、闊一肘半、所置之衣、常用者在上、非常用者在下。今禪人腰囊、雖裝束小異、亦乃承佛之制。游方之人、束囊之時、亦當念佛祖遺德之重、無自忽也。言肘者、準佛肘也。尺則用姫周尺。爲準人長八尺、佛長丈六。今言三肘、即六尺也。

（廣田宗玄）

【一六二四】包鉤

①敕修清規［下一ノ卅一丈］裝包云、包用小鎖鎖之。仍繫包鉤於上。

②　解者［敕鈔十一ノ七丈］曰、包上繫鉤者、到處若依住、則以鉤掛搭衣鉢袋也。

③　忠曰、包鉤者、蓋便裝包於身之具。非必掛搭之用也。

（廣田宗玄）

【一六二五】鉢

①玄應衆經音義［十五ノ十三丈］云。鉢盂。補沫切。鉢多羅。又云、波多羅。此云薄。謂治厚物令薄。而作此器也。鉢亦近。字下羽俱切。又説文云。飯器也。又律文作釪。

②敕修清規［下一ノ廿九丈至兼名要覧中七丈文］辨道具云。梵云、鉢多羅。此云、應量器。今略云鉢。又呼云鉢盂。即華梵兼名。佛本行集經［三十二ノ一丈］云。北天竺。有二商主。一名帝利富婆。二名跋利迦。奉世尊。麨酪蜜揣。世尊。思惟。往昔諸佛。悉皆受持鉢器。我今當以何器。受商主食。時四天王。疾共持四金鉢。奉上。世尊不受。以出家人。不合蓄此。彼四天王。更將四銀鉢。玻瓈鉢。瑠璃鉢。赤珠鉢。瑪瑙鉢。琿璪鉢。奉上。　悉皆

不受。時北方毘沙門天王。告三天王言。我念往昔。青色諸天。將四石器來。奉我等。可用受食。時別有一天子。名毘盧遮那。白言。仁等愼勿於此石器受食。但供養如塔。當有如來號釋迦牟尼出世。宜將此四石鉢奉彼如來。四天王。共將四石鉢奉佛。世尊。念。四天王。以信淨心。奉我四鉢。若我於一人邊受。餘各有恨。我今總受四鉢。持作一鉢。次第相重。安置左手。右手按下。合成一鉢。外有四脣。而說偈言。我昔功德諸果滿。以發哀愍清淨心。是故今四大天王。清淨牢固施我鉢。

③勝天王般若經［四ノ十四丈］云。或有衆生。見此菩薩。今始成道。或見菩薩。久遠成道或見一世界四天王。獻鉢。或見十方恆河沙世界。四天王獻鉢。菩薩爾時。度衆生故。即受衆鉢。重疊掌中。合而爲一。其諸天王。各不相見。皆謂。世尊獨用我鉢。菩薩摩訶薩。行般若波羅蜜。以方便力。示現此事。

④忠曰。三世佛法。得道時。皆四天王。上自然石鉢見大智度論［廿六ノ廿差四丈］。

⑤六物圖［纂注四ノ三丈○資持下二ノ三ノ一丈］云。梵云鉢多羅。此名應器。有云。體色量三。皆應法故。若準章服儀云。堪受供者。用之。名應器。故知。鉢是梵言。此方語簡。省下二字。明體者、律［事鈔下二ノ三ノ二丈］云。大要有二。泥及鐵也。五分律中。用木鉢。犯偸蘭罪。僧祇云。是外道標故。又受垢膩故。祖師云。今世中。有夾紵漆油等鉢。並是非法。義須毀。明色者。四分應熏作黑色赤色。僧祇熏作孔雀咽色。鴿色者。如法。善見。鐵鉢五熏。土鉢二熏。律中聽作熏鉢爐等。〈此間、多用竹煙色則易上。〉明量者。四分中。大鉢受三斗。〈姬周三斗、即今唐斗、一斗。〉小者受斗半。〈即今五升。〉中品可知。〈大小之間。〉

⑥宗覺律師纂註［四ノ十一丈］云。此方古德傳說。昔者南京有唐朝升。以日本弘安年中。所定升。計之。唐一升。即弘安六合五勺。仍量下品五升。正得參升貳合五勺。以弘安壹升。校今寬永年中。所定升。正是七合。即弘安參升貳合五勺。當寬永貳升貳合七勺五撮也。今時行事家。爲深防。故更增貳勺五撮。而以貳升參合。爲下品鉢量。加受之。

⑦行事鈔［下二ノ三ノ四丈］鉢器制聽篇云。四分大鉢受三斗。小者受斗半。中品可知。此斗升不定。此律姚秦時譯。彼國用姬周之斗。〈此斗通國準用、一定不改量法俗算有八圭抄撮勺合、升斗、斛謂因增法名也。〉準唐斗。上鉢受一斗。下者五升。資持記注。指俗法者。孫子算經。十粟爲圭爲抄。十抄爲撮。十撮爲勺。十勺爲合十合爲升。十升爲斗。十斗爲斛。相因增法。示可準據。〈云云。〉唐朝雜令。用姬周三斗。爲一斗。今此俗中。例用唐斗。宜準爲量。

⑧毘尼母論［八ノ十四丈］說鉢中云。齊量應者。升半已上。至二升半。是名應。不應者不滿升半。過二升半。是名不應

⑨希叟曇禪師廣録［三ノ偈廿四丈］禪房十事鉢盂頌云。做處全無滲漏。用時開口向天。盡大地人飫飽。只圖箇不知恩。

⑩緇門警訓［下四十八丈］載。大智律師鐵鉢賦云。吾有鐵鉢。裁製合轍斗半爲量。不大不小。

竹煙熏治。唯光唯潔。似二分之明珠。若將圓之皎月。清晨入聚。羣心發越。黄粢傾散。有若金沙。白浙高堆。宛如積雪。與香積之變現無殊。比自然之天供。何別。咨爾同舟。宜自檃括。不耕不耘。不鋤不割。有生之命。自何而活。且夫口腹無厭。貪源叵竭。正念微乖。羅刹已奪。嗜一時之甘美。爲萬劫之饑渴。萬金可受。保君未徹杯水難堪。聖教明説。是宜五觀無違。三匙有節。愼勿枉彼信施以養穢躯。會須籍此資緣。早求自脱。

已下。録禪律辨難。

⑪ 虎關濟北集［九ノ五丈］木鉢辨云。或問。禪家持木鉢。律輩多生謗。如何。答曰。禪門古德。知佛意。故不忌木鉢耳。曰佛意如何。曰佛制木鉢。有三意。一垢。二簡。三因。其垢者。木鉢用已。洗濯垢穢不除。木之性爾也。蓋印度俗。王臣貴族。用金玉寶器。賤庶之者。多用木器之不漆者。沙門法。棄寶器。若用不漆木器。垢不除。故薰瓦鐵二鉢。而用耳。雖瓦鐵。不薰有垢。薰即無垢。木鉢。不堪薰。故制焉。其簡者。天竺梵志種。古來用木器。如來後出。爲異也。故立瓦鐵。而爲簡也。其因者。佛在王舍城時。樹提居士客。從海還。持栴檀段。與之。居士作檀鉢。置高杙上。作是言。沙門婆羅門。不以梯杖。能得者取。時富樓那迦葉。尼犍陀等。諸外道。挑頭皆去。賓頭盧尊者。現神足取鉢。便示諸比丘言。汝等看。是鉢可愛。佛種種呵責。云。何一木鉢故。現過人法。汝不應此闇浮提住。賓頭盧自此到瞿耶尼。起僧坊。畜弟子。宣佛法。佛集比丘語。從今不聽畜八種鉢。金。銀。琉璃。摩尼。銅。白蠟。木。石。畜者突吉羅。聽二種。鐵。瓦鉢。是知佛制寶物。不必在木。以檀鉢寶木。併制衆木也。佛意。若嫌八種鉢。自鉢何用石耶。明知。制戒皆有事因。不啻木鉢。矣。唐朝禪門古德。以謂。支那無梵志種。不必欲簡異。木漆器。易洗無垢。亦非檀鉢三種制意。支那不干。況隨方毘尼。何有拘忌。支那本朝。木鉢賤於鐵鉢矣。言其易辨。而非寶者木鉢勝於鐵鉢矣。然此三義。且就三藏小教而言。大乘方廣。不必爾也。文殊師利根本儀軌經。第十曰。若是瓦鉢。洗已薰乾。其餘木鉢金銀等鉢。洗淨無垢。即得受用。又蘇婆呼童子經上曰。復次童子。念誦人。須持四種應器。木鐵瓦匏等鉢。極須團圓。細密無缺。勿使破漏。以此等而言。菩薩比丘。大乘正業。不必拘三藏偏軌也。禪門古德。不謾立規矣。梵網經云。袈裟皆使壞色。一切國人。所著衣服。比丘皆應與其俗服有異。是亦如來簡異之意也。非獨鉢也。服已無定色。鉢何拘木乎。是以禪家持木鉢。知佛意故耳矣。

⑫ 忠曰。大智海［又敕鈔十一ノ二丈］。〈無爲元公。〉辨木鉢。援蘇婆呼經。早在虎關前。義堂日工集［一ノ廿丈］云。前代律家。難禪宗木鉢曰。是外道制也。時有東福無爲和尚。稱博洽。答曰。大藏中有蘇婆呼童子經。聽比丘蓄鐵木瓦匏四鉢。今檢極樂寺藏中。有此經。爾後虎關和尚作木鉢辨。其謗遂止。余聞淨智芳庭和尚説云。近［六物纂注四ノ四丈］久修園院律師宗覺。覆破木鉢辨云。支那無梵志種。不必欲簡異矣。此言不然。既爲簡異外俗也。支那本朝。俱用木漆器。是方土風俗。今欲異於此者。何奚可畜木鉢乎。

⑬ 忠曰。覺之辨爽矣。夫世尊之簡異者。材兼形也。支那日本之俗。雖通用木器材。然未曾用其如佛制應器形者。汝若言不取形。唯取材者。彼章服田衣。豈非亦爲簡俗耶。俗服用布材綿材。而佛徒。亦著綿材布材。則何以爲簡異哉。但其簡異。在田相。與非田相而已。

⑭ 覺又云。虎關引二經。爲憑據。然此經中。唯是說持眞言行者律儀。則非出家之五衆通制。是則密乘不共之教典。自非修瑜伽者。孰敢依行。

⑮ 忠曰。吁覺公。何不見虎關能別語。曰禪家持木鉢。知佛意故。〈止此。〉是以禪家語。諫於汝也。又誰言。汝律家。自今當輟瓦鐵。而從吾木鉢耶。世尊既聽於修瑜伽者。夫到禪家專業。見性者。則劇於修瑜伽。律拘言迹。禪知佛意。復次世尊。豈教修密者。用不應律儀之器耶。此是佛之密意。固非博地容測矣。已二經聽木鉢而餘小乘律。不聽則濟北曰捨小乘偏軌。有何咎。

⑯ 覺又云。汝若棄捨三藏。別求菩薩具足律儀。請問何者是耶。

⑰ 忠曰。噫覺乎。我指桃。則汝罵李。又誰言大乘行者。詳細行事。當捨小乘律儀。而別求之耶。正今所論木鉢耳。謂須捨三藏制木鉢者。而依大乘聽木鉢者。則濟北所援二經。是也。又覺鼓怒於三藏偏軌之言廣明大小通戒之義。予別有辨。今不與木鉢。故不繁于此。

⑱ 忠曰。傳說。東福開山興法之日。泉涌寺差一僧。到慧峰詰曰。禪家用木鉢。何違佛制。請聞其說。一衆相顧。以爲雖酬。遂欲告聖一。時維那者。出衆曰。者般不足煩國師唇吻即對使曰。汝須回言東福維那。聊答來問禪家。十二時。以此事爲念。有何閒工夫。到噇合子邊。使回反命。聞者以爲得體。忠謂。雞胤部。引頌云。隨宜覆身。隨宜處住。隨宜飲食。疾斷煩惱。有三衣覆身。佛亦開許。無三衣覆身。佛亦許之。僧伽藍內住佛亦開許。界外亦許。時食佛隨許。非時午前食。佛亦許。故衣處食。皆名隨宜。唯言疾斷煩惱。〈止此。〉準此。教律家。若專證淨。則瓦鐵木鉢。應許隨宜。矧破相者耶。或徒人我是非。忘本競末。則恐扶律教教主。不以你餤乎瓦鐵。爲善住威儀焉。

⑲ 忠又曰。濟北和尚。辨木鉢。太有條理。唯其言佛意若嫌八種鉢。自鉢何用石耶。〈止此。〉者。失辭。夫佛自用石鉢。而不聽弟子畜石鉢。在大智度論問難決擇焉。北適遺之乎。

⑳ 又四分律［五十二ノ三丈］云。瓶沙王。以石鉢施諸比丘。比丘白佛。佛言。不應畜。此是如來法鉢。若畜得。偸蘭遮。

㉑ 又五分律云。若畜金銀。七寶。牙銅石鉢。皆突吉羅。若畜木鉢偸羅遮。已下。辨無底。

㉒ 雲門偃禪師録［下ノ七丈］云。師因喫茶次。云茶作麼生滋味。僧云。請和尚鑑。師云。鉢盂無底。尋常事。面上無鼻笑殺人。

㉓ 智門祚禪師録［古宿卅九ノ九丈］云。問如何是無底鉢盂。師云。挂向壁上。進云。未審將何齋粥。師云。瓦椀竹筋。

㉔普燈録［十七ノ十一丈］治父川禪師章云。上堂曰。群陰剥盡一陽生。草木園林盡發萌。唯有衲僧無底鉢。依前盛飯又盛羹。

㉕忠曰。律家。鉢無足云無底。〈禪語所請無底鉢者、底脱不可盛物也、與律家無底義別。〉章服儀［廿五丈］云。袈裟無領。標解脱之衣。鉢盂無底。表難量之器。　應法記云。相傳。是廬山遠師語。合云袈裟無領。非朝宗之服。鉢盂無足。非廊廟之器。今又易之。難量謂無盡也。〈止此。〉可知鉢制。本無底。今時禪家之鉢。多上濶下窄。而有環足。甚非法。好古之士。宜復其正矣。〈更鉢支處、詳辨。〉

㉖梁高僧傳［六ノ十一丈］廬山慧遠傳云。遠答桓玄書曰。袈裟。非朝宗之服。鉢盂。非廊廟之器。沙門塵外之人。不應致敬王者。

○傳無無領無足之字。

（廣田宗玄）

【一六二六】應量器

①鉢多羅。飜應器。詳鉢處。

②行事鈔［下二之三ノ一丈］鉢器制聽篇資持記云。準下加法。云應量受。則是應量之器。對法爲名。　又［七丈］云。言應量者。明合法也。體色少監。品量多乖。故特標之。

③忠曰。應義三。一對法。〈如此引。〉二對人。〈鉢處、引章服儀。〉三對食　資持記［下二ノ三ノ一丈］云。或處説云。量腹而食。故云應器。即對食爲名。

（荒川玄梁）

【一六二七】頭鉢

①忠曰應量器。又名頭鉢。

②日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云。不得將頭鉢盛濕食。

（荒川玄梁）

【一六二八】頭鎮

①第一鎮子。曰頭鎮。十誦名半鉢。四分名次鉢。〈詳鎮子處。〉

②日用軌範［敕下一ノ四十八丈］云。鉢刷。第二鎮子縫中。

③　舊説［敕鈔十二ノ卅二丈字誤］曰。第一鎮子。稱頭鎮。盛羹者。三箇鎮中。最大。　故名頭鎮。今以刷。安頭鎮。與第二鎮之間也。

（荒川玄梁）

【一六二九】鎮子

①忠［敕鈔十一ノ二丈ニモ此意アリ］曰。應量器内。累三箇小鉢。自大到小。総名鎮子。世尊成道。受四天王四鉢。重作一鉢。外有四脣。〈見鉢處。〉今鎮子三。與應器。重成四脣。蓋本世尊故事。

③　五分律［廿六ノ十丈］音釋云。犍瓷。梵語也。此云淺鐵鉢。今之鎮子也。犍渠焉切。

瓷。音茨。鐼音訓。

④釋氏要覧［中ノ八丈］云。鉢器。大小數。十誦律［廿八ノ十一丈］云。鉢。半鉢。大鍵鐥。〈鍵音虔。鐥音咨。經音疏云。鉢中之小鉢。助鉢用故。〉小鍵鐥。〈僧祇同。〉四分律［三十九ノ十二丈］云。鍵鐥入小鉢。小鉢入次鉢。次鉢入大鉢。〈此律言小鉢。即十誦大鍵鐥也。次鉢即半鉢也。准諸律。四事可見也。今呼爲鐼子。鐼音訓。切韻云。鐵類也。非器故。〉

⑤五分律〈廿六ノ九丈〉云。諸比丘。於鉢中歠粥。苦熱不可捉。佛言聽別作歠粥器。

⑥忠曰。如今粥受鐼子而歠。蓋當歠粥別器。

⑦子湖神力禪師録［古宿十二ノ廿九丈］云。問。法身還喫飯也無。師云。鉢盂鐼子。什麽人受持。〈云云。〉

⑧廣燈録［廿三ノ四丈］。洞山聰禪師章云。僧問學人進又不得。退又不得。時如何。師云。抱頭哭蒼天。學人無語。師又云。汝還知鉢盂鐼子落處麽。

⑨續燈録［廿ノ七丈］慈明圓禪師章。上堂云。鉢盂麁鐼子細。〈字脱。〉匙筯短長無一截。註鐼許運切。

⑩飜譯名義集［七ノ十一丈］云。鍵鐥經音疏云。鉢中之小鉢。今呼爲鐼〈音訓〉子。

⑪康熙字典云。鐼唐韻火運切。集韻。吁運切。立音訓。説文鐵屬。又集韻逋昆切。音奔。平木器。

（荒川玄梁）

【一六三〇】鍵鐥

①忠曰。大鍵鐥。即第二鐼子。小鍵鐥。第三鐼子。〈見鐼子處。〉

②雑阿含經［二ノ五丈］云。譬如一器。有一處人。名爲揵茨。有名鉢。有名匕匕羅。有名遮置。有名毘悉多。有名婆闍那。有名薩牢。如彼彼所知。我亦如是説。

③音釋［廿八丈］云。揵茨。梵語。亦云鍵鐥。母論譯爲淺鐵鉢。今呼爲鐼子。是也。揵。巨言切。茨。才資切。

④四分律［四十三ノ五丈］云。欲分粥。不知何器分。佛言。若以鍵鐥。若小鉢。若次鉢。若杓作分。

⑤又四分律［四十九ノ十九丈］云。乞食比丘。得飯乾飯麨等。并著一處。佛言。不應爾雑著一處。若是一鉢。應以物隔。若樹葉皮。若鍵鐥。若次鉢。若小鉢。麨應手巾裹。

⑦出要律儀［清訓拾要四ノ廿三丈］云。鍵鐥者。爲助食器。

⑧毘奈耶［敕鈔下二ノ三ノ十二丈同此］云。鍵鐥者。淺鐵鉢也。

⑨飜譯名義集［七ノ十一丈］云。鍵鐥。音虔咨。母論譯爲淺鐵鉢。或作揵茨。建鎡。並梵音輕重。

（荒川玄梁）

【一六三一】鉢支

①四分律［四十三ノ五丈〇要覧廿八丈引］云。鉢若不正。應作鉢支。

②五分律［廿六ノ十八丈］云、比丘。以鉢盛食。著地翻之。佛言。聽作鉢支。用銅鐵牙角瓦石竹木。除漆樹。乃至結草著下。亦聽。

③又作鉢枝。十誦律［六十一ノ十七丈］云。鉢枝法者。佛聽用鍮石銅鐵錫白鑞瓦作。應好掌護。莫令失。更求覓。妨行道。是名鉢枝法。

④又作鉢鈸。　僧祇律［廿八ノ十丈］云。雜物者。鉢。鉢鈸。匙。腰帶。刀子等。
⑤　蓋鉢支也。然字書不通支。　集韻鈸。語綺切。音蟹。玉篇釜也。
⑥又作鉢撦。　傳燈録［九ノ十七丈］衞國道禪師章云。師因疾。有人來問疾。師不出。其人云。久聆和尚道德。忽承法體違和。請和尚相見。師將鉢鐼盛鉢撦。令侍者擎出呈之。其人無對。
⑦　忠曰。近來禪家鉢。上濶下窄。底平有淺環足。本不傾動。又加以鉢支。已爲無用。余竊推之。古製下圓而無底。別有鉢支。停其轉動。後以鉢支形。直貼鉢底而造。〈今猶有直貼鉢支造。即於鉢支脣處。少輪起。而象鉢支者。〉若如今製。則鉢支。已貼本鉢。不用更造鉢支。承本鉢。展轉訛謬。有如此者。

（荒川玄梁）

【一六三二】楪

①日本禪家。稱鉢支爲楪。
②雲門偃禪師録云。師拈一楪果子。與一僧。其僧接得便去。
③　事始云。崔寧女。以金盞無儲。病其熨指。取楪子承盛之。〈詳托子處。〉

（荒川玄梁）

【一六三三】鉢單

①日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云。先展鉢單。仰左手。取鉢。安單上。
②　忠曰。鉢單之製。柿汁累合厚紙造之。横摺三之一。更竪三摺。如乙字。展鋪。以承鐼子。展時。垂短摺方。在床外。

（荒川玄梁）

【一六三四】匙

①南海寄歸傳［二ノ廿一丈］云。西方食法。唯用右手。必有病故。開聽畜匙。其筯則五天所不聞。四部亦未見。而獨東夏共有斯事。俗徒自是舊法。僧侶隨情用否。筯既不聽不遮。即是當乎略教。用時衆無譏議。東夏即可行焉。若執。俗有嗤嫌。西土元不合捉。略教之旨。斯其事焉。
②西域記［二ノ十一丈］云。食以一器。衆味相調。手指斟酌。略無匙箸。至於老病。乃用銅匙。
③永平清規［九丈］赴粥飯法云。遐尋西天竺之佛儀。如來及如來弟子。右手摶飯而食。未用匙筯。佛子須知矣。諸天子。及轉輪聖王。諸國王等。亦用手摶飯而食。當知是尊貴之法也。西天竺。病比丘用匙。其餘皆用手矣。筯未聞名。未見形矣。筯者。偏震旦以來。諸國見用而已。今用之。順土風方俗矣。既爲佛祖之兒孫。雖應順佛儀。而用手以飯。其儀久廢。無師温故。所以暫用匙筯。兼用鐼子矣。
④　事物紀原［八ノ十七丈］云。方言曰。匕謂之匙。説文曰。匕所以取飯。文王之贊易。至震曰。不喪匕鬯。大東之詩曰。有捄棘匕。注云。匕所以載鼎實。則匕三王之制也。
⑤　已下。録手摶食支竺法。
⑥五分律［十ノ廿一丈］云。諸比丘。以食手。捉淨飲器。肥膩汚穢。餘比丘。惡之。佛訶責告諸比丘。食時不應以右手捉淨飲器。應淨洗手捉飲器。

⑦　忠曰。可知右手摶食。故有肥膩。

⑧行事鈔［下之三ノ三ノ廿三丈］訃請設則篇云。僧祇。食時應護右手。當以左手受。　資持記云。彼國用手摶食。此土餅果。亦多用手。

⑨禮記曲禮云。共飯不澤手。　註［註疎二ノ廿八丈］。爲汗手不絜也。澤謂揉莎也。禮飯以手。〈正義曰。絜淨也。若澤手。手必汗生。則不絜淨。一本汗生不圭。圭絜也。言手澤汚䟦也。〉疏。共飯不澤手者。亦是共器盛飯也。澤謂光澤也。古之禮。飯不用箸。但用手。既與人共飯。手宜絜淨。不得臨食。始揉莎手。乃食。恐爲人穢也。

（荒川玄梁）

【一六三五】筯

①與匙交看。

②篇海類編［九ノ卅五丈］云。筯治據切。與箸同。

③事物紀原［八ノ十七丈］云。禮記曰。飯黍無以箸。韓子曰。紂爲象箸。觀之。明箸前有。商紂始以象爲之耳。

④筯淨頭　入衆日用［四丈］云。入則先匙。出則先筯。手把處。爲淨頭。向上肩。

（荒川玄梁）

【一六三六】匙筯袋

①日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云。鉢拭。摺令小。并匙筯袋。近身。横放。入則先匙。出則先筯。

（荒川玄梁）

【一六三七】匙筯籠

①匙筯袋。又名匙筯籠。

②拈八方珠玉集［中ノ二丈左］云。佛海云。雖則匙筯籠横。且圖得盌飯喫。

③普燈録［十八ノ十七丈］卍菴顔禪師章。上堂云。粥足飯足。俯仰隨時。筯籠不亂攙匙。老鼠不齧甑箪算。山家活計。淡薄長情。

（荒川玄梁）

【一六三八】鉢刷

①日用軌範［敕修下一ノ四十八丈］云。鉢刷。安第二鐼子縫中。出半寸許。盛生飯。

②　小補韻會［屑ノ四十九丈］云。刷所劣切。説文刮也。爾雅清也。

③　忠曰。刷者。小板。一頭圓形。漆髹。刷清鉢内粒粘之器。

（荒川玄梁）

【一六三九】楊枝

①忠曰、十八物之一也。

②梵網經［第卅七戒］云。若佛子。常應二時頭陁。冬夏坐禪。結夏安居。常用楊枝。澡豆。三衣。瓶。鉢坐具。錫杖。香爐。漉水囊。手巾。刀子。火燧鑷子。繩床。經律。佛像菩薩形像。而菩薩行頭陁時。及遊方時。行來百里千里。此十八種物。常隨其身頭陁者。從正月

十五日。至三月十五日。八月十五日。至十月十五日。是二時中。此十八種物。常隨其身。如鳥二翼。

③華嚴經［四十経十一ノ十五丈］普賢行願品。甘露火〈唐經作無厭足。〉章云。嚼楊枝具功德者。一銷宿食。二除痰癊。三解衆毒。四去齒垢。五發口香。六能明目。七澤潤咽喉。八脣無皺皺裂。九增益聲氣。十食不爽味。晨朝食後。皆嚼楊枝。諸苦辛物。以爲齒木。細心用之。具如是德。

④永平道元禪師［眼五ノ洗面九丈］曰。嚼楊枝。先右手。取楊枝。咒願。可誦華嚴淨行品偈云。手執楊枝。當願衆生。心得正法。自然清淨。及嚼。復誦偈云。晨嚼楊。當願衆生。得調伏牙。噬諸煩惱。楊枝長四指。或八。十二指。或十六指。摩訶僧祇律云。齒木應量用。極長十六指。極短四指。大如手小指。或更細無妨。形如手小指。一頭麁一頭纖。古云。如如來指形。嚼其麁頭。令如縷。須揩磨齒表裡。

④諸經要集［二十下ノ十丈〇百八十五套］云。十誦律云。佛言。嚼楊枝。有五利益。一口不苦。二口不臭。三除風。四除熱病。五除痰癊。復有五事利益。一除風。二除熱。三別味。四能食。五眼明。三千威儀云。用楊枝有五事。一斷。當如度。二破當如法。三嚼頭。不得過三分。四梳齒。當中三齒。五當汁澡自用。刮舌有五事。一不得過三反。二舌上血出當止。三不得大振手。汚僧伽梨若足。四棄楊枝。莫當人道。五當著屏處。

⑤十誦律［六十一ノ十七丈］云。佛聽嚙木。三種枝。上中下。上者尺二寸。下者六寸。餘者是中。是名齒木枝法。摘齒法者。不應用利物摘齒不應強摘不應破斷。是名摘齒法。刮舌法者。不應用利物刮。令傷舌。是名刮舌法。

⑥南海寄歸傳［一ノ十五丈］云。每日旦朝。須嚼齒木。揩齒刮舌。務令如法。盥漱清淨。方行敬禮。若其不然受禮禮他。悉皆得罪。其齒木者。梵云憚哆家瑟詫。憚多。譯之爲齒。家瑟詫。即是其木。長十二指。短不減八指。大如小指。一頭緩須熱嚼。良久淨刷牙關。若也逼近尊人宜將左手掩口用罷擘破。屈而刮舌。或可別用銅鐵。作刮舌之篦或取竹木薄片。如小指面許。一頭纖細。以剔斷牙。屈而刮舌。勿令傷損。亦既用罷即可俱洗棄之屏處。凡棄齒木。若口中吐水及以洟唾。皆須彈指經三。或時謦欬過兩如不爾者。棄便有罪。　又云。少壯者。任取嚼之。耆宿者。乃椎頭使碎。其木條以苦澀辛辣者爲佳嚼頭成絮者。爲最。麤胡菜根。極爲精也。〈即蒼耳、并截耳入地二寸。〉堅齒口香。消食去癊。用之半月。口氣頓除。牙疼齒憊。三旬即愈。要須熱嚼淨揩。令涎癊流出。多水淨漱。斯其法也。次後。若能鼻中飲水一抄。此是龍樹長年之術。必其鼻中不慣。口飲亦佳。久而用之。便少疾病。

⑦又云。齒木。名作楊枝。西國柳樹全稀。譯者輒傳斯號。佛齒木樹。實非楊柳。那爛陀寺。目自親觀。既不取信於他。聞者亦無勞致惑。檢涅槃經梵本。云嚼齒木時矣。

⑧釋氏要覽［上ノ七十丈］云。嚼楊枝。僧祇律［十六ノ廿三丈〇又卅四ノ廿三丈］名齒木。嚼一頭碎。用剔刷牙齒中滯食。若口有熱氣。及生瘡。應嚼楊枝咽汁。百一羯磨云。嚼楊枝。須在屏處。不得顯露。及往還潔淨處。或弃齒木。先以水洗。乃謦欬。戒彈指。警覺。方可棄於屏處。若其異者。得越法罪。

（廣田宗玄）

【一六四〇】鉢拭

①鉢巾也。

②日用軌範［敕修下一ノ四十丈］云。鉢拭。摺令小。并匙筯袋。近身横放。

③永平清規赴粥飯法［四丈］云。鉢拭。長壹尺貳寸。　註。布一幅也。

（廣田宗玄）

【一六四一】鉢袱

①日用軌範［敕修下一ノ四十七丈］云。展鉢之法。想念偈。然後解袱帕。展淨巾覆膝。帕摺轉三角。莫令出單外。

（廣田宗玄）

【一六四二】蓋膝巾

①日用軌範［敕修下一ノ四十九丈］喫食法云。不得先收蓋膝巾。不得以膝巾拭汗。

（廣田宗玄）

【一六四三】淨巾

①蓋膝巾。亦名淨巾。

②日用軌範［敕修下一ノ四十七丈］展鉢法云。展淨巾覆膝。

（廣田宗玄）

【一六四四】鉢囊

①毘奈耶雜事［四ノ十四丈］云。佛在江猪山施鹿林中。時有苾芻。手擎鉢去。在路脚跌。鉢墮遂破。因斯闕事。以縁白佛。佛言。苾芻不應手擎其鉢。便以衣角。裹鉢而去。廢闕同前。佛言。應作鉢袋盛去。苾芻手携。招過如上。佛言不應手持而去。應可作襻。掛膊持行。若異此者。得越法罪。〈音釋襻、普患切、衣系也、膊、伯各切肩膊也。〉

②又毘奈耶雜事［四ノ十六丈］云。鉢袋襻。應闊作内安甐。以線絡之。勿令卷縮。

③又毘奈耶雜事［三十三ノ十三丈］云。佛言。乞食。應持鉢絡。掩蓋而去。應作方尺布袋。提上兩角。置鉢在中。角施短襻。將行乞食。得遮塵土。復易擎持。　注。神州比來無此鉢袋。下留尖角。鉢不動搖。不同平巾轉動流溢。作時。應取布小尺二尺。宜便正方。傍邊剪却衣横襻。用時極理安穩也。

④四分律［五十二ノ七丈］云。手捉鉢。難護持。佛言。聽作鉢囊盛。不繫囊口鉢出。佛言。應繫。手捉鉢囊護持。佛言。應作帶絡肩。

⑤十誦律［三十九ノ十四丈］云。佛言。從今行時。不聽捉杖絡囊。犯者突吉羅。佛自恣後。人間遊行。有一羸瘦比丘。手捉鉢行。佛知故問。汝何以手捉鉢行。答言物可盛。佛言從今羸瘦老病比丘僧羯磨聽捉杖絡囊盛鉢行。

⑥碧巖録［三ノ十七丈］云。或若有箇漢。信得及。把得住。不受人瞞。祖佛言教。是什麽熱碗鳴聲。便請。高掛鉢囊。拗折柱杖。管取一員無事道人。有一般漢。受人商量。祖佛言教。如龍得水。似虎靠山。却須挑起鉢囊。横擔柱杖。亦是一員無事道人。

（廣田宗玄）

【一六四五】椀

①敕修清規［下二ノ十丈］庫司四節。特爲首座大衆湯云。頭首不下鉢。庫司備碗楪。

②　忠曰。碗字。韻書不出。蓋俗訛。

③　正字通云。椀與盌同。　又云。盌烏捲切。剜上聲。
④　説文小盂。俗作椀。
⑤　潙山警策［卅四丈］云。椀鉢作聲。食畢先起。去就乖角。僧體全無。
⑥禪林寶訓云。雪堂曰。高菴住雲居。用姪爲監寺。用姪處己雖儉。與人甚豐。叢林有用大碗之稱。
⑦　忠曰。蓋餉人。以大碗。無其悋食之意也。

（廣田宗玄）

【一六四六】楪子

②　忠曰。日本禪林椀具。有楪子。與鉢支稱楪者別。
②　敕修清規云。庫司備椀楪。〈見椀處。〉
③　文公家禮［一巻］祭器。有椀楪子。
④　忠曰。楪子字。韻書無器皿訓。於演繁露初得解。程大昌演繁露［卅三丈〇鄂十三］云。酉陽雜俎劉録事。食鱠數疊。今俗書楪字。誤。以其可疊故名爲疊也。然牒字乃疊札爲之則以疊爲楪。亦有理也。
⑤　忠曰。楪子。淺而底平。環足。便于纍疊也。
⑥　周祈名義考云。今俗言楪。以代籩豆也。楪本無此字。俗書也。
⑦碧巖録［廿八則ノ頌ノ下語］云。椀子落地。楪子成七八片。
⑧聯燈會要［八ノ廿三丈］睦州陳尊宿章云。衆云。裂開也在我。捏聚也在我。時有僧問。如何是裂開。師云。三九二十七。菩提涅槃。眞如解脱。即心即佛。我且與麽道。汝又作麽生。僧云。某甲不恁麽。師云。盞子落地。楪子成七片。
⑨　朝野僉載［五ノ七丈〇廣記百七十六丈引］云。婁師德。有鄉人姓婁者。爲屯官。犯贓。師德切責之曰。汝辭父孃。求覓官職。不能謹潔知復奈何。將一楪鎚餅。與之曰。噇却作箇飽死鬼去。

（廣田宗玄）

【一六四七】飯桌

①敕修清規［下一ノ十七丈］方丈管待新舊兩序云。燒香侍者。與請客侍者。巡揖坐畢。燒香進卓。侍者一班。列住持前。問訊入位。行湯下食畢。至行飯時。燒香侍者。離位燒香。下𨻶飯畢退卓。鳴鼓講茶禮。
②　忠曰。當作桌。韻書卓註。無器物訓。
③　正字通［辰中四十五丈］云。桌竹角切。音卓。俗呼几案。曰桌。
④四分律［三十九ノ十一丈］云。佛言。若爲和尚阿闍黎。有所取與。聽用銅槃。若案。若机。飲食所須之物。盡持置其上。一時授與。
⑤五分律［廿六ノ九丈］云。諸比丘。擎食患重。佛言。聽安机。
⑥　忠曰。机蓋今飯桌也。

（廣田宗玄）

【一六四八】果桌

①忠曰。安果餈之几也。

②聯燈會要［二十ノ廿四丈］洞山价禪師章云。師與泰首座。喫果子次。師問。有一物。上拄天下拄地。黑如漆。常在動用中。動用中收不得。你道。過在甚麼處。泰云。過在動用中。師便喝。掇却果卓。

（廣田宗玄）

【一六四九】和桌

①忠曰。和國樣之桌子也。排椀桌之案。日本俗呼曰膳。大德寺。此稱和桌。

（廣田宗玄）

【一六五〇】湯瓶

①忠曰。銅瓶盛滾湯。以爲點湯之用。

②敕修清規［上二ノ十六丈］專使特爲新命煎點云。行茶偏。瓶出。如前問訊。收住持盞。［下二ノ二丈］又新掛搭人。點入寮茶云。行茶遍。瓶須從穿堂入。

③　文公家禮云。執事者。執湯瓶。隨之點茶。〈詳飲啖門點茶處。〉

（廣田宗玄）

【一六五一】茶筅

①字彙云、筅同筊。筊蘇典切。音尠。筊箒。飯具。

②　正字通爲筅與筊別。〈止此。〉然則筅俗用。正作筊。

③文公家禮［一巻注］云、茶筅之制。不見於書傳惟元謝宗可有詠茶筅詩。味其所謂。此君一節瑩無瑕。夜聽松風漱玉華。萬縷引風歸蟹眼。半瓶飛雪起龍牙。之句。則其形狀。亦可彷彿見矣。或謂茶筅。即蔡氏［郛九十三］茶録［四丈］所謂茶匙。非是。

④陸羽茶經［下］有茶具十六事。其中有歸潔。註云。竹筅箒也。

⑤宋［郛九十三］徽宗大觀茶論［五丈］云、茶筅。以觔竹老者。爲之。身欲厚重。筅欲疎勁。本欲壯。而末必眇。當如劍瘠之狀。蓋身厚重。則操之有力。而易于運用。筅疎勁。如劒瘠。則擊拂雖過。而浮沫不生。

⑥　漁隱叢話［前ノ卅四ノ六丈〇玉屑十ノ十八丈引］云、韓子蒼。謝人寄茶筅子詩云。看君眉宇眞龍種。猶解横身戰雪濤。盧駿元亦有此詩云。到底此君高韻在。清風兩腋爲渠生。皆善賦詠者。然盧優於韓。

（篠塚純海）

【一六五二】建盞

①忠曰、中華建安所造茶盞。此方學製者。皆亦名建盞。

②宋蔡襄茶録云、茶色白。宜黑盞。建安所造者。紺黑。紋如兎毫。其杯微厚。熁之。久熱難冷。最爲要用。出他處者。或薄或色紫。皆不及也。其青白盞。闘試自不用。

③　約翁儉禪師録［下八丈］次西澗和尚。謝太守惠建盞韻頌云。提起玻瓈已再三。分明垂釣在深潭。舌頭若具通方眼。一啜方回苦口甘。

（篠塚純海）

【一六五三】空盞

①舊説［勅鈔十一ノ十六丈］曰、不盛茶湯之盞。曰空盞。非器通名。

②敕修清規［下一ノ卅五丈］大掛搭歸堂云。寮主相接入門。對觸禮一拜。敘寒温畢。分手坐。獻空盞。

（篠塚純海）

【一六五四】托子

①忠曰、托子。承茶盌器也。

②李濟翁資暇録［卅四丈孚十四］云、茶托子。始建中。蜀相崔寧之女。以茶盃無襯病其熨指。取楪子承之。既啜而盃傾。乃以蝋環楪子之央。其盃遂定。即命匠。以漆環代蝋。進於蜀相。蜀相奇之。爲製名。而話於賓親。人人爲便。用於代。是後傳者。更環其底。愈新其製。以至百状焉。〈貞元初、青鄆油禮爲荷葉形以襯茶椀別爲一家之楪今人多云托子始此、非也、蜀相、即今昇平崔家、訊則知矣〉。

③呂毖事物初畧［卅四ノ十丈］云、唐徳宗建初中。崔寧之女。以金盞啜茶。盞熱。痛其指。乃取楪子。承其盞。既啜而傾又以蝋環。楪子中坐之。盞遂定穩。不搖。因遣匠者以漆環易蝋。寧奇之。乃制爲托子。以行于世。此托子之始也。

④托子。亦作橐子。〈蓋假字非正。〉聯燈會要［五ノ卅九丈］松山和尚章云、師與龐居士喫茶次。士拈起橐子云、人人盡有分。因甚麼道不得。師云、只爲人人有分。所以道不得。〈云云。〉又趙州諗禪師［六ノ十八丈］章云、僧問。如何是佛法大意。師云、這橐子。是大王送來。

⑤五燈會元［二ノ七十六丈］扣冰澡先古佛章云、應閩主之召、延居内堂敬拜曰。謝師遠降。賜茶次。師提起橐子曰、大王會麼。曰不會。曰人王法王。各自照了。

（篠塚純海）

【一六五五】曲盆

①忠曰、大圓盆。盛茶盞數箇。日本禪林。此名曲盆。凡特爲之外。用此器。行茶盞也。

（篠塚純海）

【一六五六】圓盤

①忠曰、蓋曲盆也。

②大鑑清規［六十三丈］梅檀林須知曰、凡取點茶之湯。只沙彌喝食入。取茶盞及臺。并圓盤。盆湯瓶。係副寮管領。

（篠塚純海）

【一六五七】折水桶

①忠曰、棄鉢水餘殘器。名折水桶。蓋飲半棄半。故言折。減損之義。

②敕修清規［上二ノ一六丈］專使特爲新命煎點云、行食偏。燒香下住持賜次行大衆賜畢。歸位。伴齋。俟折水出。鳴鼓。

③日用軌範［勅修下一ノ四十九丈］云、未折鉢水。不得先收蓋膝巾。

④傳燈録［廿六ノ十七丈〇会元十ノ五十三丈］五雲山華嚴道場志逢大師〈嗣天台韶國師〉章云、一日因入普賢殿中宴坐。倏有一神人。跪膝于前。師問曰。汝其誰乎。曰護戒神也。師曰。吾患有宿愆未殄。汝知之乎。曰師有何罪。唯一小過耳。師曰何也。曰凡折鉢水。亦施主物。師每常傾棄。非所宜也。言訖而隱。師自此。洗鉢水。盡飲之。積久。因致脾胃疾。十載方愈。註云。凡折退飲食。及涕唾便利等。並宜鳴指黙念咒。發施心。而傾棄之

⑤僧祇律［廿二ノ十七丈］衆學法云。不得以鉢中殘食。棄地。應當學。
⑥小補韻會［屑ノ四十四丈］云、折之列切。毀棄也。
⑦戰國策［五ノ十五丈］云、戰折兵之半。　註云。折閱之折。減損也。食列反。
⑧優婆塞戒經［四ノ十四丈］雜品云、善男子。無財之人。自説無財。是義不然。何以故。一切水草。人無不有。雖是國主。不必能施雖是貧窮。非不能施。何以故。貧窮之人亦有食分。食已洗器。棄湯蕩滌汁。施應食者。亦得福德。

（篠塚純海）

【一六五八】飯巾
①雪峯在德山。作飯頭。曬飯巾。〈詳雜行類、托鉢處。〉
②忠曰、蓋掩飯桶上。布巾也。

（篠塚純海）

【一六五九】生盤
①忠曰、撒生飯器。
②禪林類聚［九ノ十一丈］云、南泉願禪師。一日因齋次。乃自將生盤。去首座前云、出生。咋。時杉山堅和尚。爲首座。乃云無生。師云無生。猶是未師纔行數歩。首座乃召云、長老長老。師回顧云、作麼。首座云、莫道是未。
③又生臺曰生盤。　宗鏡録［八十ノ十八丈］云、寶堅和尚云、我見老鴉在生槃上。廻頭轉腦。便全體見渠法身。

（篠塚純海）

【一六六〇】生臺
①忠曰、靜僻人稀處。設臺案。聚著大衆生飯。而恣禽蟲啄啄。此名生臺。又名生盤。〈見生盤處。〉
②石屋珙禪師録［下ノ三丈］山居詩云、烏來索飯生臺立。僧去化糧空鉢還。

（篠塚純海）

○已下係浴具。

【一六六一】浴室屏風
①敕修清規［下一ノ三丈］知浴云、第三通。行者入浴。此時住持方入。以屏風遮隔而浴。
又云、如住持有故。欲同頭首先浴。則不用設屏障。

（篠塚純海）

【一六六二】浴室笐竿
①日用軌範［勅修下一ノ五十一丈］開浴云、先以五條手巾。掛笐竿上。展浴袱。
②字彙云。笐同筦。筦曬衣竿。
③康熙字典云、笐、又集韻胡降切。音巷。挂衣架也。一曰竹列。

（篠塚純海）

【一六六三】浴室淨竿
①教誡律儀［賛行下ノ十一丈］入温室法云、入浴室内。脱淨衣。安淨竿上。脱觸衣。安觸竿上。

（篠塚純海）

【一六六四】浴室觸竿

①見浴室淨竿處。

（篠塚純海）

【一六六五】浴袱

①日用軌範［勅修下一ノ五十一丈○同鈔十二ノ四十七丈左］開浴云、展浴袱。取出浴具。放一邊。

（篠塚純海）

【一六六六】脚布

①舊説［勅鈔下一ノ五十一丈○同鈔十二ノ四十七丈左］曰、浴室之階鋪布。而防滑。此云脚布。〈與服章類、脚布不同。〉

②備用清規［七ノ八丈］知浴云、出面盆拖鞋。鋪脚布。

○已下係廁具。

（篠塚純海）

【一六六七】廁笊竿

①日用軌範［敕下一ノ四十九丈］抽脱云、解條。繫笊竿上。〈笊義、見浴室笊竿處。〉

（篠塚純海）

【一六六八】廁籌

①敕修清規［下一ノ八丈］淨頭云、換籌洗廁。燒湯添水。須是及時。

②日用軌範［勅修下一ノ四十九丈］云、不得多用籌子。古云、浴湯少使。籌子休拈。有者使了。以水洗之。安廁邊空處。

③諸經要集［二十下ノ三丈○百八十五套］云、毘尼母經云、若上廁。去時。應先取籌草。至戸前。三彈指作聲。若人非人。令得覺知。若無籌。不得壁上拭不得廁板梁杙上拭。不得用石。不得青草土塊。軟木皮。軟葉奇木。皆不得用。所應用者。木竹葦。作籌。度量法。極長一搩手。短者四指。已用者。不得振令汚淨者。不得著淨籌中。是名上廁用籌法。

④輟耕録［十二ノ五丈○必ノ九ノ九］云、今寺觀。削木爲籌。置溷圊中。名曰廁籌。北史齊文宣王嗜酒淫泆。肆行狂暴。雖以楊愔爲相。使進廁籌。然則愔所進者。豈即此與。

⑤正字通［子下ノ百十二丈］云、廁同厠厠七四切。雌去聲。清也。溷厠也。謂之清者。以其不潔。當除之也。釋名雜也。言人雜廁其上也。

（篠塚純海）

【一六六九】廁簡子

①廁籌。又名厠簡子。

②南唐書［廿六ノ一丈］浮屠傳云、南唐有國。蘭若精舍。漸盛於烈祖元宗之世。後主即位。好之彌篤。輒於禁中。崇建寺宇。延集僧尼。後主與周后頂僧伽帽。披袈裟。課誦佛經。跪拜頓顙。至爲瘤贅。親削僧徒厠簡。試之以頰。少有芒刺。則再加修治。

③江南野録［又集事漸海卅二ノ廿六丈］又云、李後主。親爲桑門。削作厠簡子。試之腮頰。少有澁滯者。再爲治之。

（篠塚純海）

【一六七〇】淨籌

①忠曰、已使厠籌。爲觸籌。未使厠籌。爲淨籌。

②日用軌範［敕修下一ノ四十九丈］云、古云入厠用籌分觸淨。

（篠塚純海）

【一六七一】觸籌

①宋濂護法録桐江大公行業碑銘序云。嘗患滯下疾。拭淨不忍用厠紙。摘菽葉充之。其刻苦。蓋人之所不能堪。

②胡應麟甲乙剩言云。有客謂余曰。嘗客安平。其俗如厠。男女皆用瓦礫代紙。殊爲嘔　穢。余笑曰。安平晋唐間爲博陵縣。鶯鶯。縣人也。爲柰何。客曰。彼大家閨秀當必與　俗自異余復笑曰請爲君盡厠中二事。北齊文宣帝如厠。令楊嘔執厠籌。是帝皇之尊。　用厠籌。而不用紙也。三藏律部。宣律師上厠法。見淨籌處。

（篠塚純海）

【一六七二】厠紙

①忠曰、天竺皆用籌。支那僧。依竺法。又有間用紙者。今引用紙數證。

②唐高僧傳［廿五ノ十三丈］惠寛傳云、綿竹宋尉云。我不信佛。唯信周孔。寛聞之。致書曉喩。宋曰、此道人徵異者。當試有靈不。取書名處。用拭大便。當即糞門裂。脚起不得。自唱我死即召寛來。雖悔過造經像。盈月便卒。

③東坡問答録［十七丈］云、東坡與佛印最厚。往來不常。一日去訪佛印。語言酬答。不覺坐久。東坡倉皇登厠。有一行者。會意便隨後。送些茅紙與之。東坡喜其會事。次日以一本度牒。捨與坡剃。一寺僧行。駭然。纔知其因送茅紙之有功也。

④眞臘風土記〈元周達觀撰。〉述眞臘國人風俗云、凡登溷既畢。必入池洗淨。止用左手。右手留以掌飯。見唐人登厠。用紙揩拭者。笑之。甚至不欲其登門。婦女亦有立而溺者。可笑可笑。

⑤宋濂護法録［三ノ廿四丈］桐江大公行業碑銘序云、嘗患滯下疾。拭淨不忍用厠紙。摘菽葉充之。其刻苦。蓋人之所不能堪。

⑥亦用厠籌。是比丘之淨。用厠籌。而不用紙。　觀此厠籌瓦礫均也。不能不爲鶯鶯要處掩鼻耳。客爲噴飯滿案。

（篠塚純海）

【一六七三】淨桶

①日用軌範［敕修下一ノ四十九丈］抽脱法云。安淨桶在前。鳴指三下。驚嗽。糞鬼。

②　舊説［敕鈔十二ノ卅九丈〇又四十一丈左］曰。淨桶。又名觸桶。元是觸器。却名淨桶者。凡厠是觸穢處。故令極淨潔。爲要。以西淨東淨爲名。是也。到器亦爾。故名淨桶〈又見殿堂類西淨處。〉

（並木泰淳）

【一六七四】觸桶

①淨桶。又名觸桶。見淨桶處。

（並木泰淳）

【一六七五】香木

①舊説曰。香木。出厠去穢之木。以香材造之。懸笊竿端。兩手摩擦爲淨。如今削作八角矣。或漆塗者。非也。

（並木泰淳）

【一六七六】後架手巾

①緇門警訓［下八十五丈］云。後架手巾。須多備三兩條〈詳資身細器中手巾處。〉

○已下係喪具。

（並木泰淳）

【一六七七】靈龕

①敕修清規［上二ノ廿七丈］尊宿入龕云。小師侍者。親隨人。安排洗浴。著衣淨髮入龕。

②龕義。見莊嚴具。龕處。　又入龕法。見喪薦類。

（並木泰淳）

【一六七八】浴舩

①忠曰。浴舩即浴槽之類。浴亡躯器也。

②敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云。如病僧瞑目。延壽堂主。即報維那。令堂司行者報燒湯。覆首座知客侍者。庫司差人。擡龕浴舩。安排浴亡。

（並木泰淳）

【一六七九】眞亭

①敕修清規［上二ノ卅丈］尊宿出喪云。庫司喪司。相關。提調喪儀。香亭眞亭。幢幡唄樂。龕前傘椅。湯爐挑燈。竹篦挂杖拂子。香合法衣等物。

②舊説［敕鈔七ノ一丈］曰。眞亭。掛亡尊宿眞影之器。

③忠曰。眞亭製。四柱四宇。其形如亭。四傍皆張薄紗。透視玲瓏。前擔扁眞亭兩字。而影前安牌。或眞影有贊辭。自書名。則不復用牌。喪赴化壇時、此器在龕前。扛而進發。

④續文獻通考［百三十一ノ卅九丈］皇后喪禮云。明穆宗隆慶元年。孝潔肅皇后。遷祔永陵儀。〈云云。〉執事官。進龍輴于享殿下。設眞亭神位。輿謚冊寶輿于殿前。

（並木泰淳）

【一六八〇】香亭

①見眞亭處。

②忠曰。器形如亭。四傍紗籠。前扁香亭兩字。大同眞亭製。［敕鈔七ノ一丈］内安大香爐。尊宿之喪。赴化壇時。香亭在眞亭前。舁而進前。

【一六八一】雪柳

①舊説［敕鈔十三ノ十七丈〇又六ノ卅一丈〇又七ノ二丈〇又東漸三ノ十八丈］曰。雪柳者。凡生人相別。折柳綰作環。而送其行。蓋寓期再還之意。如今送亡者。以雪柳。亦惜別之義也。因唱聖號。投之棺上。只喪禮事素。故雖有柳名。而不做青。乃截白紙。象枝葉。故云雪柳。

②敕修清規［下一ノ五十七丈］亡僧云。堂司行者。預造雪柳幡花。送亡云。大衆兩兩。次第合掌而出。各執雪柳。

③幻住菴清規［五十七丈］亡僧云。雪柳。兩瓶供養。

④東漸清規［三ノ十八丈］云、中巖曰。數所投棺中雪柳。知衆多少。後時依數俵賦。

⑤山堂肆考［宮ノ廿七ノ廿七丈］云。長安東灞陵有橋。漢時送行者。多至此折柳送別。又［徴廿八ノ廿八丈］云。折柳亭。在金陵城上。賞心亭下。宋張詠建。爲餞送之所。

⑥三體詩張喬寄維陽故人詩云。離別河邊綰柳條。千山萬水玉人遥。〈云云。〉解者曰。綰還也。取速還之義也。

⑦温庭筠折柳枝詞云。御陌青門拂地垂。千條金縷萬條絲。如今綰作同心結。贈與行人知不知。潛確類書［八十七ノ十七丈］云。李白詞。年年柳色灞陵傷別。又云。折柳贈行。折梅寄遠。見古今注。

（並木泰淳）

【一六八二】素花

①敕修清規［上二ノ廿九丈］尊宿移龕云。下間置龕。用麻布幃幙。前列几案爐瓶素花。香燭不絶

②忠曰。縷截白紙。纏柴枝。如花。今多用四枝。蓋可大於雪柳之製也。

（並木泰淳）

【一六八三】娑羅華

①釋氏要覽［下ノ四十九丈］云。若應之大師五杉集。頗合禮式。或堂有三間。即置龕於西間。面向南。前設一燈一香。而已中一間。用白幕。自南達北。金城柱而東洎南三面幃之。於中設繩床。掛眞影。香華供養。以時設食用白紙。作娑羅華八樹。以簇繩床。表雙林之相。牀西別設一儀牀。置平生道具之屬繩床後正北幕内。名子位。即是弟子受弔之位也。

（並木泰淳）

【一六八四】柴枝

①備用清規［九ノ五丈］尊宿出喪云。主喪領衆。兩兩排行。送喪。左右分雪柳柴枝。毋得挨肩交語。

②舊説［敕鈔七ノ二丈］曰。中巖曰。柴枝。助火化之義。

（並木泰淳）

【一六八五】遺物

①忠曰。亡人遺囑。以平居所蓄。器具書畫等。贈與親舊法眷。此言遺物。

②校定清規［敕鈔七ノ十五丈］云。通呈遺書。及送遺物。

○錢財類

（並木泰淳）

【一六八六】衣鉢

①敕修清規［上二ノ廿六丈］尊宿遷化云。示疾覺沈重。預請兩序勤舊。點對。封收衣鉢行李。就留方丈。差公謹行僕。看守。以俟估唱。

②忠曰。僧錢帛。総言衣鉢。蓋錢財元非僧可蓄者。故婉詞。言之衣鉢耳。

③解清規［敕鈔八ノ廿四丈］衣鉢侍者曰。衣鉢者。住持三衣一鉢也。又［已下ノ刊行ハ鈔ニアラズ］謂私財。此侍者司之。

④［敕鈔六ノ十九丈○又八ノ廿四丈引］圭峯盂蘭盆經疏［上ノ卅五丈○首書上ノ四十五丈］云。分減衣鉢。元照新記云。今世俗謂僧長物。以爲衣鉢。或恐疏主。隨俗爲言。

⑤寶積經［百十四ノ十三丈］梁聚會云。當來比丘。多畜衣鉢。多有諸物。

⑥忠曰。經謂畜數種衣。數種鉢乎。若復総稱僧財帛。則當以此經。爲二字本據也。

（並木泰淳）

【一六八七】免丁錢

①敕修清規［上一ノ廿一丈］聖節云。住時。僧道歳一供帳。納免丁錢。

②免丁義。詳簿券類。免丁由處。

③佛祖統記［四十八ノ九丈會要志］云。宋高宗紹興十五年。敕天下僧道。始令納丁錢。自十千。至一千三百。凡九等。謂之清閑錢。年六十已上。及殘疾者。聽免納。道法師致書於省部曰。大法東播。千有餘歳。其間。汚隆隨時。暫厄終舊。特未有如今日抑沮卑下之甚也。自紹興中年。僧道征免丁錢。大者十千。下至一千三百。國四其民。士農工商也。僧道舊籍仕版。而得與儒分鼎立之勢。非有經國理民之異。以其祖。大聖人。而垂化爲善故耳。至若天災流行。雨暘不時。命其徒。以祷之。則天地應。鬼神順。抑古今耳目。所常聞見者也。夫苟爲國家。禦菑而來福祥。亦宜稍異庸庶之等夷可也。若之何。遽以民賦。賦且數倍。今天下民丁之賦。多止緡錢三百。或土瘠民勞。而得類免者。爲僧。反不獲齒於齊民。以其不耕不蠶。而衣食於世也。夫耕而食。蠶而衣。未必僧道之外。人人耕且蠶也。〈云云。〉志盤述曰。目僧道。同丁夫。而出征賦。以免之。豈獨道之耻。亦國家。不知尊尚二教之耻也。今州家。征免丁。則必擧當年多額。以責之。而不顧僧之存亡去住。既又欲以虧額。均賦諸寺者。其爲患皆此類。嘗考郡志云。僧道免丁歳。無定額。官吏曾不省。此王荊公創新法。當年後世。誰不知爲民患。然今之爲政者。語安石則目之小人。追民賦。則仍用其立法。蓋利源一開。雖有聖人之治。所不能革。以人心好利者同然耳。然則爲利創法者。未嘗不爲後世患。悲夫。

④已下。録論增免丁錢。

⑤物初賸語［廿四ノ十五丈］。笑翁堪禪師行状云。延臣奏端嘉以後。牒廉僧雜。欲増免丁三分之一。荊湖總司。亦奏僧道買紫衣師號。且俾以衣號住持。師曰。審是。則主法者。徒以貨取。吾道委地矣。力言于廟堂。議遂寢。

⑥枯崖漫録［下ノ十五丈○敕鈔一ノ廿五丈引］云。雙杉元禪師。嘉熙間。乃石田堂中第一座。上丞相書。言朝廷新指揮。買師號金環象簡不便。書云。正月十三日。景徳靈隱禪寺前堂首座。前住持嘉興府天寧寺僧中元。謹熏沐。獻書樞使大丞相國公。竊以。爲佛老之教。救

世計也。其所以與儒道。相參於天地間。以能開悟性眞。不墮邪見。其功未易量也。我朝太宗皇帝。嘗曰。釋氏之道。有補教化。孝宗皇帝亦曰。以佛修心。以老治身。以儒治世。斯可也。張文定謂。儒道淡薄。一時聖賢。盡歸釋氏。而關洛諸公。亦必玩味釋氏之書。而後能接續沫泗不傳之秘。然教必有主。必有師。國家以度牒。許人承買。凡有僧者。各尋師。以爲依歸。師苟有道行。則可使迷者悟。塞者通。其裨助世教。要非小補。近世貨賂公行。求爲住持者。吾教之罪人。若以例傳。天下之賢者。必深藏遠遁而已。其肯出而爲師。夫師廢則正法微。正法微則邪法熾。以清淨之門。而爲利慾交征之地。非國家之福也。譬如家塾黨痒。不能無師。不求其能傳道解惑者。爲之。而惟賄是視。則弟子何以仰。孔門之教。亦幾乎熄。佛老之道。何以異是。若謂佛老之徒。身居大廈。日享膏腴。不蚕而衣。不耕而食。爲世所嫉。然天下之人。有無用於世。而坐享膏腴之奉者。尤衆。何特僧道。寺觀創立。常住供養。非官與之也。以衆人樂施。而與之也。寺觀有田。税賦尤倍。又有非泛不時之需。正與大家相似。今既買度牒以錢。免丁又增以錢。官府無絲毫之給。而徒重責其利於無窮。則僧道可謂不幸矣。國家愛惜。名器泛濫。何以勸勵天下。僧道若以賄。得金環象簡得諸處住持。則囂頑無賴之徒。皆以賄進。何以整齊風俗。況寺觀雖多。其常住闕乏者甚多。縱使此令一行。第能率斂寺觀之大者。其小者亦豈能應其求。如此則所得能幾。況僧道非能自出己財。求爲住持。必將取之寺觀。師徒相殘。常住必壞。所謂膏腴。將見蕪穢。所謂大廈。將見爲丘墟。所謂温飽。將見爲凍。餒部雖有牒。誰將請之。歲雖有丁。誰將輸之。今日軍需糴本。秤提諸券。無非鬻爵。鬻爵之者。或累於國牒之多者。無病於官。乃循一時不卹之事。斲喪千萬載之利源。殆非理財之長策也。伏覩近降旨揮。增錢鬻爵。識者病之。事不果行。総所今來陳請。正亦類此。伏望釣慈。詳酌利害。特有敷奏。盡行寢罷服號之命。令僧道不勝幸甚。伏惟釣慈。俯賜鑒念。不備。時江西璨無文亦有書。先是朝省。因總領岳珂奏。乞降紫衣師號二等。賜金環象簡并四字禪師法號。以住大寺觀。每賜服師號。綾紙出賣三百緡。仍附品官條制。非有官。不得差注。非有賜服。不得住持。此書上。事果寢。豈非秘護大法者之用情乎。

⑦ 瑩山清規〔下ノ四十一丈〕云。七月十八日。起單諸人。就維那寮。可請免丁抄小牓頭。式云。

某年　夏中
某甲　上座
能州洞谷安居

⑧ 忠曰。優免丁役。是朝省勾當。僧家何得僭行之。蓋洞谷所出于起單僧者。坐夏由耳。〈見簿券類〉元不識免丁義。強爲謬事。又抄〔正字通卯中廿丈〕與鈔通。錢鈔〔字彙〕也。免丁抄。即免丁錢也。又訛免丁由。益無義。

⑨ 因録民間丁錢。　鶴林玉露〔十七ノ十六丈〕云。廣右深僻之郡。有所謂丁錢。蓋計丁。輸錢于官。往往數歲之兒。即有之。有至死而不與除豁者。甚爲民病。故南人之謠曰。三歲孩兒便識丁。更從陰府役幽魂。讀之可爲洗涕。

（藤原良敬）

【一六八八】無盡財

① 忠曰。無盡財者。以金財假貸。逐利焉。本生息。息復爲本。故云無盡。

② 釋氏要覽〔下ノ卅六丈〕云。寺院長生錢。律云無盡財。蓋子母展轉無盡故。兩京記云。寺

中有無盡藏。又則天經序云。將二親之所蓄。用兩京之舊邸。莫不總結招提之宇。咸充無盡之藏。十誦律云。以佛塔物出息。佛聽之。僧祇云。供養佛華多。聽轉賣買香油。猶多者。轉賣。入佛無盡財中。〈詳諸律三寶皆有無盡財。〉

③　宋高僧傳。唐圓觀傳云。李源父憕。居守。天寶末。陷於賊中。遂將家業。捨入洛城北慧林寺。即憕之別墅也。以爲公用無盡財也。

（藤原良敬）

【一六八九】長生錢

①無盡財名長生錢。見無盡財。及庫質錢處。

②橘洲文集［六ノ一丈］寶雲院長生庫記云。住持瑩公。坐席未温。首斂巾盂。以估於衆。得錢一十萬。内外道俗。又得錢十萬。太師魏國史公捐國太夫人簪珥。以施之。合爲利益長生庫。以備歲時土木。鐘鼓無窮之須。後五年。建大講堂。半取其贏。以助工役。實其志也。

（藤原良敬）

【一六九〇】庫質錢

①老學菴筆記［六ノ二丈〇必十集六］云。今僧寺輒作庫質錢。取利。謂之長生庫。至爲鄙惡。予按。梁甄彬。嘗以束苧。就長沙寺庫質錢。後贖苧還。於苧束中。得金五兩。送還之。則此事亦已久矣。庸僧所爲。古今一揆。可設法嚴絶之也。

②　忠曰。陸游言。雖出於護法意。然不多讀經律。而致此臆斷。律有無盡財。事稍相類未可概爲庸僧之作。但防其鄙猥而可也。敕修清規首載。聖旨。所謂解典庫。亦是取典物貸財。而逐利以賑寺用也。

（藤原良敬）

【一六九一】陪寮錢

①敕修清規［下二ノ二丈］新掛搭人。點入寮茶云。新掛搭人。入寮後。照例納陪寮錢若干。候寮元。輪排當在何日。掛點茶牌。報衆。

②　舊説曰。僧堂掛搭之外。衆寮亦掛搭。故納陪寮錢。

（藤原良敬）

【一六九二】暖席錢

①忠曰。凡借他寺院房舍。或修法會。或辨齋供。則納暖席錢於本院。暖席字。出于文子。

②文子［選四十五ノ廿一丈ノ注引］云。墨子無黔突。孔子無煖席。

③瑯邪代醉編［二十ノ四丈］云。文子云。孔無暖席。墨無黔突。淮南子云。墨子無暖席。則席不暇暖。墨子亦然。

（藤原良敬）

【一六九三】謝掛搭香錢

①敕修清規［下一ノ卅八丈］謝掛搭云。堂司行者。具名數。率香錢。寫小榜云。〈新歸堂首座、各率錢若干買香謝掛搭　堂司行者、　某、取覆。〉貼衆寮前。收香錢足。交侍者。納方丈。

②教苑清規［上ノ九十二丈］謝掛搭云。令堂司行者。率各人香錢五伯文。煩侍者。到方丈。回香。

（藤原良敬）

【一六九四】抽分錢

①敕修清規［下一ノ六十四丈］亡僧板帳云、估唱得錢、必照板帳。支用外、其錢作三七、抽分、歸常住。〈百貫抽參拾貫、不滿百貫、則不抽分。〉餘則均俵僧資。

②忠曰、亡僧估唱、所得錢、除板帳支行外、拆作十分、十分中、抽三分、以歸常住。此名抽分錢。但不滿百貫、則不復抽分矣。餘七分、俵秉炬等嚫。

③居家必用［十六ノ六十一丈］云、抽分即解取其物也。

④已下、畧録外典抽分字。

⑤元史食貨志［志ノ四十三ノ］市舶云、至元二十年、遂定抽分之法。二十一年、設市舶都轉運司。於杭泉二州、官自具舩。給本選人、入蕃貿易、諸貨其所獲之息、以十分爲率。官取其七、所易人得其三。

⑥續文獻通考［廿九ノ一丈］征榷考云、太祖洪武二十六年、定凡龍江大勝港。俱設立抽分竹木局。〈有三分取一、三十分取一、十分取二等。〉

（白川邦與）

【一六九五】衆財

①人天寶鑑［十七丈］云、靈源清禪師、門牓、其略曰、惟清名曰住持、實同客寄。但以領徒弘法、仰助教風、爲職事爾。若其常住所管財物、既非己有。理不得專。一委知事、僧徒分局主執、明依公私合用支破。惟清止同衆僧齋襯、隨身餅鉢。任緣去住而已。伏想、四方君子、來有所須、顧寢食祇接之。餘別難供應。蓋以彼所管者、世法則屬官物、佛教則爲衆財。偸衆財、盜官物、以買悅人情、而取安己有、實非素志之所敢當。預具白聞。冀垂恕察。〈石刻在天章。〉

（白川邦與）

【一六九六】率財

①敕修清規［上一ノ廿七丈］佛降誕云、先期堂司率衆財。　又［下二ノ十七丈］月分須知云、七月預率衆財、辦斛食供養。

②居家必用［五十ノ廿八丈］云、制衆建議。謂之率。假如勢要之人、獨建計謀、妄托名目、斂衆人之物、或饋與人、或自入己之類、是名制衆建議率斂也。

③小補韻會［質ノ廿丈］云、率朔律切廣韻［敕鈔二ノ廿丈引］寡也。

④正字通［午上卅二丈］云、率山律切。音蟀、約數也。周禮太宰註、賦口率出錢、徐劉音類。焦氏云、督率之率。音朔、算法約數之率。音類。並非。

⑤舊説［敕鈔十一ノ廿一丈］曰、令大衆均出錢財、言率財也。或［敕鈔十一ノ廿一丈］曰、二祖、三佛會、率比丘衆財。每人五百錢、以辨香華燈燭供物。

（白川邦與）

【一六九七】率錢

①即率財也。

②敕修清規［上二ノ三丈］告香云、堂司行者、率衆錢、買香大小三片及紙、作圖之費、付參頭收。

③五代史補［類説節要ノ廿四］云、趙在禮在宋州、所爲不法、百姓苦之。一日制下、移鎮永興。百姓相賀曰、眼中拔却釘矣。可不快哉。在禮聞之、上表乞還鎮。朝廷許之。在禮每口率錢一千。號拔釘錢。遂獲百萬。

④○戴埴鼠璞云、唐宋遺史載。張崇帥廬州、不法。民苦之。既入覲、人謂渠伊必不來。崇計口率渠伊錢。再入覲、人不敢言、將鬚相慶。崇率將鬚錢。

⑤○續酉陽雜俎［二ノ十三丈］云、五娘死。其妨、率錢、葬之。

（白川邦與）

【一六九八】折錢

①敕修清規［上二ノ廿八丈］請喪司職事云、如無布絹、隨宜折錢俵之。

②舊説［敕鈔六ノ廿七丈］曰、以錢折中。當布絹之價、而俵之。此名折錢。

③月令廣義［一ノ十八丈］云、大明會典國初寶鈔、與銅錢兼使、每鈔一貫、折錢一千文、銀一兩。

（白川邦與）

【一六九九】収鈔

①忠曰、所収納之錢財也。

②敕修清規［上二ノ卅三丈］尊宿唱衣云、収鈔若干、係某件唱到。

③舊説［敕鈔十三ノ廿七丈］曰、鈔者、紙造、印天子印、以代錢。但價賤於銅賤。鈔壹貫文、當銅錢壹佰文。

④品字箋［戊七十四丈］云、鈔楮貨名。宋史紹興二十四年、徼外以銅少。循宋交子法、造鈔引。一貫二貫三貫五貫十貫、五等、謂之大鈔。一百二百三百五百七百、五等、謂之小鈔。與錢並用、以七年爲限。納舊易新。諸路置交鈔庫、官受之。每貫、取工墨錢十五文。公私便焉。明丘濬曰、元以來鈔制、始此。宗之交會、其制無考。金史交鈔之制、外爲闌、作花紋。其衡書貫列。外書禁條。闌下、備書經由交換之法。及印章花押。元承其舊。沿用之、中雖小異、大槩實同也。宋交會、猶與錢、相爲輕重、而有稱提之法。此後則錢自錢、鈔自鈔。各與物相爲輕重矣。

⑤大明會典［月令廣義一ノ十八丈］云、國初寶鈔、與銅錢兼使。每鈔一貫、折錢一千文、銀一兩。其等凡六、曰一貫、曰五百文、曰四百文、以至百文。每一百文以下、只用錢、其後不行。

⑥鄭所南大義略敘［三十四丈］云、寶祐丙辰、韃始僭年號、曰中統、次曰至元。襲亡金、僭效大宋楮幣之法、易名曰鈔、以通貿易。

（白川邦與）

【一七〇〇】支鈔

①忠曰、分支、所費用、錢財也。〈鈔義、見収鈔處。〉

②敕修清規［上二ノ卅三丈］、尊宿唱衣云、支鈔若干、係某項用度。
③　品宇箋云、支支取支給。謂取其所應取、給其所應給也。又度支、度其所宜支、而支給之也。

（白川邦與）

【一七〇一】見管鈔

①忠曰、現前所有錢財也。
②幻住菴清規［六十三丈］、亡僧唱衣云、除支外、見管無。
③　文獻通考市糴考云、浙東提舉朱熹言、熹請於府、得常平米六百石、賑貸、夏受粟於倉。冬則加二計息、以償。凡十有四年、得息米、以元數六百石還府。見管米、三千一百石、以爲社倉。
④　癸辛雜識［別集下ノ三丈］云、是歲積兩年祖米、未糶。見管五六十石。

（白川邦與）

【一七〇二】下嚫

①敕修清規［上一ノ廿七丈］、佛降誕云、住持上香下嚫點茶、又三拜。
②　舊説［敕鈔二ノ廿二丈］曰、下嚫者、用布施物、薫于爐上、安置佛祖前也。嚫或作嚫、或作擬。以手受所施、故从手。口發施事、故从口。所施錢寶類。故从貝。
③　忠曰、但从手義、見名義集［四ノ五十三丈］。餘未見據。
④　品字箋［丙ノ六十三丈］云、嚫齋嚫也。亦作嚫。
⑤　忠曰、下者、安下義。凡有所措辨、言下。敕修清規［上一ノ卅七丈］聖節云、就佛座前、下茶湯。歷代祖忌云、下食一位。碧巖録［二ノ八丈］云、陸亘入寺下祭。皆同此義。嚫義詳達嚫處。
⑥　備用清規［一ノ七丈］云、佛誕・涅槃・成道、常住設供、無嚫。
⑦　禪苑清規［敕鈔二ノ廿二丈］校定清規、同備用説。

（白川邦與）

【一七〇三】上嚫

①舊説［敕鈔二ノ廿二丈］曰、下嚫、又云上嚫、上下語、無深意。
②　忠曰、此説漫漶。上嚫者、獻上嚫財也。下嚫者、安下嚫財也。

（白川邦與）

【一七〇四】達嚫

①増壹阿含經［九ノ七丈］云、是時迦葉、從佛受教、往至梵志婦舍已、就座而坐。是時彼婆羅門婦、便供辦餚饌種種飲食、以奉迦葉。是時迦葉即受食、欲度人故、而向彼人、説此**噠**嚫。　祠祀火爲上、衆書頌爲最、王爲人中尊、衆流海爲上、衆星月爲首、照明日爲先。四維及上下、於諸方域境、天與世間人、佛爲最尊上。欲求其福者、當歸於三佛。是時、彼梵志婦、聞此語已、即歡喜踊躍。〈乃至〉得法眼淨。
②又増壹阿含經［廿五ノ十三丈］云、世尊告尸婆羅曰、汝今可受此長者、百千兩金、使蒙其福。此是宿緣之業。可受其報。尸婆羅對曰、如是世尊、是時尊者尸婆羅、即時而説噠嚫。

施衣及餘物、欲求其福德、往至天世人、五欲自娛樂。從天至人中、度有無疑難。涅槃無爲處、諸佛之所樂、施惠無難者、蒙此獲福祐。當起慈惠心、作福無有懈。

③悲華經［二ノ六丈］云、太子不眴、供養如來及比丘僧、竟三月、已所奉達嚫八萬四千、金龍頭瓔。　音釋云、達嚫梵語也。此云檀施、嚫初槿切。

④羅摩伽經［一ノ四丈］云、如來爲一切衆生、説功德嗟嚫三輪、化度一切衆生。

⑤玄應衆經音義［一ノ九丈〇又十五ノ廿五丈〇又十九ノ廿丈］云、達嚫差覲切。案尊婆須蜜論亦作檀嚫、此云財施。解言、報施之法、名曰達嚫。導引福地、亦名達嚫。復次割意所愛、成彼施度。於今所益、義是檀嚫。又西域記云、正言達嚫拏、或云馱器尼。以用右手、受他施爲其生福、故從之立名也。

⑥〇釋氏要覽［上ノ六十八丈］云、梵語達嚫拏、此云財施、今略達拏、但云嚫。五分律云、食後施衣物、名達嚫。轉輪五道經云、轉經不得倩人。乃至齋食、以達嚫爲常法、得福。

⑦〇飜譯名義集［四ノ五十三丈］云、達嚫、宇或從手。西域記（右側）［玄応十五ノ廿五丈］（左側）［探玄十八ノ十三丈引］正云達嚫拏者、古也。或云馱器尼。以用右手、受人所施、爲其生福故。

⑧行事鈔［下三ノ三ノ廿五丈］訃請設則篇云、大嚫法、五分、食後施衣物、名爲嗟嚫也。　資持記云、達嚫大嚫、梵言少異。亦云檀嚫。此翻財施。謂報施之法、名曰達嚫。文約施衣、準應不局。〈世謂以財襯食、故名嚫者、不識華梵。又召説法、爲施財者、並非。〉問爲召施物。爲目説法。答據名召物。今謂行施之時、必爲説法。因名説法、以爲達嚫。準理、具云達嚫説法。事義方全。問此與咒願何別。答約事似同。究義須別。咒願則別陳所爲、達嚫則通爲説法、今或營齋、事須雙用。

⑨玉耶經［七丈〇八十八套］云、佛告玉耶、當信布施、常得其福。後世當復生長者家。玉耶言諾。佛飯畢訖、達嚫、咒願、五十善神、擁護汝身。

⑩四分律［四十九ノ廿八丈］云、佛言、不應食已、默然而出。應爲檀越説大嚫。乃至爲説一偈。若爲利故施、此利必當得。若爲樂故施、後必得快樂。時人人皆説。佛言應令上座説。若上座不能説、應語能者説。

⑪愚丘宗禪師、答洪慶善問嚫金本據。〈見祭供類、齋僧處。〉

（白川邦與）

【一七〇五】賸資

①賸金也。

②敕修清規［上二ノ廿四丈］管待專使云、知事預稟住持、議專使宣疏帖、人賸資輕重。方丈備貼賸、須令合節。

（堀祥岳）

【一七〇六】俵賸

①敕修清規［上一ノ卅八丈］歴代祖忌云、擧大悲咒。〈乃至〉或有俵賸、則擧楞嚴咒。

②正字通［子中ノ四十一丈］云、俵悲廟切標去聲俵散。六書故、分畀也。

③品字箋［戊六十四丈］云、俵俵散也。以應得之物、而照人分散爲俵。

④又、印紙言俵子。見簿券門。

（堀祥岳）

【一七〇七】堂𨻶

①忠曰、施僧堂之𨻶金也。

②備用清規［四ノ四丈］煎點西堂頭首新命云、專使詣新命前議定。方丈𨻶施、引座謝禮、堂𨻶貼𨻶、宣疏帖人陪𨻶。

（堀祥岳）

【一七〇八】貼𨻶

①忠曰、修法會等、有特勞者加增其施物［敕鈔五ノ卅二丈〇四？十五丈］。此謂貼𨻶。

②　篇海類編［十五ノ廿五丈］云、貼天叶切音帖裨也。依附也。又粘置也。

③敕修清規［上二ノ十一丈］迎待尊宿云、請客侍者具状請特爲管待。山門置食備𨻶、方丈備貼𨻶。　又、專使特爲新命煎點云、專使先與新命。議定齋𨻶、輕重合宜。兩序勤　舊鄉人法眷、辨事貼𨻶。

（堀祥岳）

【一七〇九】陪𨻶

①忠曰、功勞非常者、一陪其𨻶也。見堂𨻶處。

②　篇海類編云、陪重也。貳也。加也。益也。

（堀祥岳）

【一七一〇】随年錢

①忠曰、蓋隨其人年數、多少施與錢也。

②聯燈會要［廿九ノ廿四丈］亡名尊宿章云、昔有施主、入寺行衆僧隨年錢。知事云、聖僧前著一分。施主云、聖僧年多少、僧無對。　法眼代云、心期滿處即知。

③虛堂愚和尚録［六ノ十五丈代別］云、代僧倒指示之。

④　十誦律［二十一ノ八丈］三歸五戒法云、爾時應問汝幾年隨年答、何時出家、冬春夏、有閏無閏。隨問應答。

（堀祥岳）

【一七一一】喪𨻶

①忠曰、送亡山頭𨻶言喪𨻶。日本俗稱野布施。

②敕修清規［上二ノ卅一丈］出喪掛眞云、喪司維那知客聖僧侍者俵行喪𨻶。

③　忠曰、布施之目六度之隨一。布者散也。鋪也。然日本豐州民俗、以爲布帛之布義。凡新喪則持麻布、而施于僧寺、故寺多檀主者、布匹倚疊。可笑。昔唐莊宗爲晉王時、擒滅劉守光、命書記王緘、草露布。緘不知故事、書之於布。遣人曳之。爲議者所笑。〈正

此〉謬解布字、復有類似矣。

（堀　祥岳）

【一七一二】賻儀

①忠曰、他家有新亡、則我贈錢財、助其喪。此謂賻儀。日本俗稱香奠。然香奠賻儀義別。

②　篇海類編［十五ノ廿一丈］云、賻符遇切音父。以貨財助喪。

③敕修清規［上二ノ卅丈］掛眞擧哀云、所有賻儀用餘、當歸常住、補犒諸山人從支費。

（堀　祥岳）

【一七一三】香奠

①翰墨大全［一之五ノ九丈］謝送香財状云、杖朞孫姓某奠儀如目。右某茲者某親、隨人改易喪亡、乃蒙奠慈、特賜香奠。焚帛外、下誠不勝哀感之至。謹具状申謝謹状。

②　壒囊鈔云、日本俗香錢字作香奠。非也。錢唐音近奠、故有此訛。

③　忠曰、香奠字出翰墨大全。但香錢香奠義意稍別。

2）文獻通考［八十九ノ四丈右］郊社考云、非時而祭曰奠。

（堀　祥岳）

【一七一四】紙錢

①忠曰、日本禪林祈祷及盂蘭盆會等、雕紙如錢形、數十相連。與繪馬心經共之、掛之堂柱。會畢、則設銅鉢、就内點火、焚化之。所以饗鬼神也。或以錫箔鍮箔粧紙、爲銀錢金錢、則滋慇重也。

②　順和名類聚［十三ノ七丈］云、紙錢〈俗云、加美勢迩一云勢迩加太〉。新樂府云、神之來兮風飄飄。紙錢動兮錦繖搖。

③釋門正統［四ノ八丈］云、今之施食。亦施財者。事祖廣記云、寓錢今楮鏹也。唐王璵傳云、玄宗時璵爲祠祭使。專以祠解。中帝意。有所禳祓。大抵類巫覡漢以來。葬者。皆有瘞錢。後世俚俗。稍以紙寓錢。爲鬼事。至是璵乃用之。則是喪祭之焚紙錢、起于漢世之瘞錢也。其祷神、而用寓錢、則自王璵始耳。今巫家。有焚羹禳謝之事、亦自此也。

④　忠曰、所授王璵傳即新唐書［傳卅四ノ九丈］也。

⑤佛祖統紀［卅四ノ十五丈］云、唐以前無紙錢爲用者。自王璵盛行此法。於是冥中。藏積緡鏹。金銀繒綵。與世間所用無少異。由心法之能變造故。天府冥關。亦隨人心而轉。世有用紙鏹寄庫者。有鬼神用紙鏹。入人間、買物者。有見泰山堆積蝋錢。無用、云人間化財。用油炷。度火爲汗者。此等顯驗不一。心生則種種法生。不特紙錢一法而已也。

⑥大慧〔一ノ五十八丈〕爲盧時用普説云、宣律師問韋馱天神、世人奉鬼神以紙錢。還可用否。曰用矣。蓋古時無紙錢。漢魏已前。多埋錢。冥冥之中。亦能享受。唐高宗已後。方有紙錢。後來有智之人。去藏教中。搜出化財雨寶眞言。使人持誦。能令一財。變無量財。

已下、録焚紙錢法。

⑦茅亭客話〔十ノ三丈〕云、孫處士名知微、字太古、眉州彭山人也。因師益部攻水墨僧令宗。俗姓丘氏。導江縣有一女巫。知微嘗問其鬼神形狀。欲資其畫。女巫曰、今見有王三郎。在冥中。足知鬼神之事。處士請自問之。知微曰、敢問三郎鬼神形狀。俄有應者。云云。知微曰、今欲酬君君欲希我何物。應者曰、望君濟我。資錢數百千貫。知微辭之。應者曰、所求者非世間銅錢爲者。乃楮貨爾。知微乃許之。應者曰、燒時愼勿使著地、可以薪艸薦藉之、向一處以火爇。不得攪剔。其錢則不破碎。一一可達也。遂依教。燔紙錢數百千貫。噫昔漢世以前。未知幽冥。以何爲賂遺之物爾。

已下、録焚紙錢自唐時。

⑧舊唐書〔傳八十ノ一丈〕王璵傳云、王璵少習禮學。博求祠祭儀注。以干。時開元末。玄宗方尊道術。靡神不宗。璵抗疏引古今祀典。請置春壇。祀青帝於國東郊。玄宗甚然之。因遷太常博士侍御史。充祠使。璵專以祀事希倖。每行祠祷。或焚紙錢祷祈福祐。近於巫覡由是過承恩遇。肅宗即位。累遷太常卿。以祠祷每多賜賚。

⑨新唐書〔傳卅四ノ九丈〕王璵傳云、王璵者方慶六世孫。少爲禮家學、玄宗在位久。推崇老子道。好神仙事。廣修祠祭。靡神不祈。璵上言。請築壇東郊祀青帝。天子入其言。擢太常博士侍御史。爲祠祭使。璵專以祠解。中帝意。有所禳祓大抵類巫覡漢以來。葬喪皆有瘞錢。後世里俗。稍以紙寓錢爲鬼事。至是璵乃用之。肅宗立。累遷太常卿又以祀祷見寵。

已下、證鬼用紙錢事。

⑩唐唐臨冥報記〔下ノ十七丈〕云、永徽二年六月九日、尚書都官令史王璹暴病死。經二日而蘇。自言、初死時見四人。來至其所云。官府追汝〈云云〉。大官謂璹曰、汝無罪放去。璹拜辭。〈云云。〉見向所云訊璹之吏。從門出來。謂璹曰、君尚能待我。甚善可乞我千錢璹不應。內自思曰、吾無罪。官放我來。何爲有賄吏乎。吏即謂曰、君不得無行。吾向若不早將汝過官令二日受縛豈不困頓。璹心然之。因媿謝曰、謹依命。吏曰吾不用汝銅錢。欲得白紙耳。期十五日來璹許諾。因問歸路。吏曰、但東行二百步、當見一故牆穿破見明。可推倒之。即至君家也。璹如其言。行至牆推。良久乃倒客人璹從倒處出。即至其所居隆政坊南門矣。於是歸家。家人哭泣。入戸而蘇。至十五日璹忘不與錢。明日復病困絶。見吏來。怒曰、君果無行。期與我錢。遂不與。今當復將汝去。因驅行出含光門。令入大坑璹拜謝百餘。并請作錢。乃放歸又蘇。璹告家人、買紙百張作錢、送之。明日璹又病困。復見吏。曰君幸能與我錢。而惡不好璹復辭謝。請更作。許之。又至二十一日璹令以六十錢。市紙百張。白紙作錢。并酒食。自於隆政坊西渠水上燒之。既而身體輕健遂愈。

⑪又冥報記〔中ノ十九丈〕云、左監門校尉馮翊李山龍。以武德中。暴病亡。而心上不冷。如掌許。家人未忍殯斂。至七日而蘇。自説云、當死時、被冥官收録、至一官曹〈云云〉。有三人。語山龍曰、王放君去。可不少多乞遺我等。山龍未言。吏謂山龍曰、王放君。不由

彼。三人者是前收録君使人。一是繩主。當以赤繩縛君者一是棒主。擊君頭者。一是袋主。吸君氣者。見君得還。故乞物耳。山龍惶懼。謝三人曰、愚不識公。請至家備物。但不知於何處送之。三人曰、於水邊若樹下。山龍許諾。辭吏歸家。見親眷正哭。經營殯具。山龍入至屍傍即蘇。後日剪紙作錢帛。並酒食。自送於水邊燒之。忽見三人來謝。曰、蒙君不失信。重相贈遺。媿荷。言畢不見。

⑫太平廣記〔三百卅六ノ四丈〕云、韓徹者、以乾元中、任隴州呉山令。進士宇文覿。辛稷。隨徹讀。覿稷掘令廳大槐樹孔。得塚。徹至。命佐史。收骨髮。以新棺。斂葬諸野。靈託巫語云、己是晋將軍契苾鍔。明府恩及幽壤。然創造此謀。是宇文七及辛四。幽魂珮戴。豈敢忘之。辛侯不久自當擢祿。足光其身。但宇文生。命薄無位且多戹難。我當救其三死。〈以至。〉會岐州土賊欲僭僞號。署置百官。覿有名被署中書舍人。賊尋被官兵所殺。覿等七十餘人。繫州獄十人。鍔復至覿妻所語云、七郎犯事。我在地中。大爲求請。然要三千貫錢妻辭。貧家實不能辦。鍔曰、地府所用。是人間紙錢。妻云、紙錢、當力辦之。焚畢。復至獄中。謂覿曰、我適於夫人。索三千貫爲君屬請。事亦解矣。有劉使君至者。即當得放。飽食無憂也。尋而詔。用劉晏爲隴州刺史。辭日奏曰、點汚名賢。曾未相見所由。但以爲逆所引。悉皆繫獄。臣至州日。請一切釋免。上可其奏。晏至州上畢悉召獄囚。宣敕放之〈廣異記〉。

已下録、成長史黄色塗錫作金。鬼用之。

⑬冥報記〔中ノ六丈〕云、眭仁蒨者、趙郡邯鄲人也。少有經學、不信鬼神。常欲試其有無。就見鬼人。學之十餘年。不能得見。後徒家向縣。於路見一人。如大官衣冠甚偉。乘好馬。從五十餘人騎。視仁蒨而不言後數見之。常如此。經十年凡數十相見。後忽駐馬呼蒨曰、比頻見君。情相眷慕。願與君交遊。蒨即拜之問、公何人耶。答吾是鬼耳。姓成名景。本弘農人。西晋時爲別駕。今任胡國長史。仁蒨問其國何在。王何姓名。答曰、黄河已北。總爲臨胡國。國都在樓煩西北。沙磧是也。其王是故趙武靈王。今統此國。總受太山控攝。毎月各使上相。朝於太山。是以數來過此。與君相遇也。〈以至。〉時大業初。江陵岑之象。爲邯鄲令。子文本。年未弱冠。之象請仁蒨於家。教文本書。蒨以此事。告文本。仍謂曰、成長史謂曰、我有一事。羞君不得道。既與君交。亦不能不告君。鬼神道中。亦有食。然不能飽。苦饑。若得人食。便得一年飽。衆鬼多偸竊人食。我既貴重。不能偸之。從君請一飡。蒨既告文本。文本即爲具饌。備設珍羞。蒨曰、鬼不欲入人屋。可於外邊張幕設席。陳酒食於上。文本如其言。至時仁蒨見景兩客來坐從百餘騎。既坐。文本向席再拜。謝以食之不精。亦傳意辭謝。初文本將設食。仁蒨請金帛。以贈之。文本問。是何等物。蒨云鬼所用物。皆與人異。唯黄金及絹。爲得通用。然亦不如假者。以黄色塗大錫。作金。以紙爲絹帛。最爲貴上。文本如言作之。及景食畢。令從騎更代坐食。文本以所作金錢絲絹。贈之。景深喜謝曰、因眭生煩郎君供給。郎君頗欲知壽命乎。文本辭曰、不願知也。景辭而去。

⑭法苑珠林鬼神部引之。

⑮釋氏要覽〔下ノ四十丈〕云、冥報記云、唐眭仁蒨爲鬼成景設酒食。復以錢綵爲好。辭曰、鬼所用錢即紙錢也。若綵絹亦紙爲之。銀即錫紙。金即黄塗之也。

⑮ 忠曰、要覽所言、多謬妄矣。釋門正統〔釈氏資鑑五ノ卅丈亦同〕一承要覽之謬。按冥報記眭仁蒨事中。但云、以黄色塗大錫作金。以紙爲絹帛。〈止此。〉未初言鬼所用即紙錢也。銀即錫紙等。亦非彼言、冥報記言鬼用紙錢。唯在彼王璹及李山龍記中耳。

⑯ 釋門正統〔四ノ八丈〕云、法苑珠林云、紙錢起于殷長史也。

⑰ 忠曰、珠林引冥報記載眭仁蒨事。但云成景爲胡國長史。初不言殷長史。予謂成上。殘欠下似殷字下畫。或填補者、誤作殷字。然自此妄一出。諸説舊雷同。以鬼用紙錢爲成景事。復訛成長史爲殷長史。儒家不能多覽釋典。遂有紙錢起於殷長史之説。實珠林無此説耳矣。

已下録、儒家辨紙錢。

⑱ 就日録〔説略庚集、六丈〕云、焚紙錢之説。唐王璵傳曰、漢以來葬者。皆有瘞錢。後世里俗。稍以紙寓錢爲鬼事。至是璵乃用爲禳祓。則是喪葬之焚紙錢起於漢世之瘞錢也。其祷神而用寓錢。則自王璵始矣。康節先生春秋祭祀。約古今禮行之。亦焚楮錢。程伊川怪問之。曰、冥器之義也。脱有益。非孝子順孫之心乎。徽廟朝。高峯廖用中奏。乞禁焚紙錢。有云、嘗怪世俗。鑿紙爲錢。焚之。以徼福於鬼神者。不知何所據依。非無荒唐不經之説。要皆下俚之所傳耳。使鬼神而有知。謂之慢神欺鬼可也。李珂松牕百記云、世既是妄。人死而爲鬼。其妄又可知。無身心耳目口鼻之實而六習常不斷。顛倒沈迷。豈復覺悟。方其具酒殽列冥器。鑿楮象錢。印繪車馬而焚之。以妄塞妄也。蓋嘗原其本初。恐瘞錢爲死者之禍。及世艱得錢。易以紙錢自後沿襲。至唐而焚之。其來久且遠而廖高峯。遽欲絶之以塞妄費。且夫子謂、死葬之以禮。又曰、敬鬼神而遠之。是夫子不欲遽絶而以有無之中。言之。惟邵康節云、脱有益。非非孝子順孫之心。最爲通議。

⑲ 忠曰、康節竊信釋氏輪廻鬼神之説者。故有此言、康節信輪廻。見于聞見前録〔十八ノ一丈〇必十五ノ十二〕

⑳ 戴埴鼠璞〔上ノ廿一丈〇孚十四〕云、法苑珠林載。紙錢。起於殷長史。唐王璵傳載。漢來。皆有瘞錢。後里俗稍以紙寓錢。王璵乃用於祠祭。今儒家。以爲釋氏法。於喪祭皆屏去。予謂不然。之死而致死之不仁。之死而致生之不知。謂之明器。神明之也。漢之瘞錢。近於之死而致生。以紙寓錢。亦明器也。與塗車芻靈何以異。俗謂。果資於冥塗。則可笑。

㉑ 忠曰。禮記〔一ノ四十一丈〕檀弓云、孔子曰、之死而致死。之不仁。而不可爲也。之死而致生。之不知。而不可爲也。〈止此。〉夢溪筆談〔三ノ六丈〕云。先王之於死者。以之爲無知。則不仁。以之爲有知。則不智。

㉒ 文公家禮〔七巻〕全載鼠璞説〈家禮爲晁氏説〉云、按此則用紙錢代幣帛。似亦無害。

㉓

宋葉愛日齋蔡抄［十七丈〇孚十七］云、事林廣記考論寓錢之始云、今楮鏹也。〈以至〉自王璵始耳。〈興前引釋門正統全同〉、法苑珠林云。紙錢起于殷長史也。按此則里俗以紙寓錢。璵始用之。非刱于璵矣。朱文公云紙錢起玄宗時王璵。蓋古人以王幣。後來易以錢。玄宗惑于王璵之術。而鬼神事繁。無許多錢來埋得。璵作紙錢易之。文字便是難理會。且如唐禮書載。范傳正言、唯顏魯公張司業家。祭不用紙錢易之。文字便是難理會。且如唐故衣冠效之。而國初言禮者、錯看。遂作紙衣冠而不用紙錢。不知衣冠紙錢。有何間別。近世戴氏鼠璞云、法苑珠林載。紙錢起于殷長史。〈以至〉謂果資于冥塗。則可笑。〈全同前引鼠璞〉是説雖異。亦有〈與乎〉文公紙衣冠。何別之。呂南公有錢。鄧公不燒楮鏹。頌有云、古用幣以禮神祇。後之罪士爲多。則假之。以請禳祷祈。假之不已。則飜楮代焉。而弗支。是故罪士滿世。而莫救其非。大抵深惡夫寓錢。以徼福者也予觀洪慶善杜詩辨證載。文宗備問云、南齊廢帝東昏侯。好鬼神之術。剪紙爲錢。以代束帛。至唐盛行其事。云有益幽冥。又牛僧孺云、楮錢。唐初剪紙爲之。此是以補事林廣記之未及。

已下、畧擧機縁。

㉔

大慧武庫［四丈］云、汾陽無徳禪師。一日謂衆曰、夜來夢亡父母。覓酒肉紙錢。不免徇俗置。以祀之。事辦於庫堂設位如俗間禮。酌酒行肉。化紙錢訖。令集知事頭首。散其餘盤。知事輩却之。無徳獨坐筵中。飲啖自若。衆僧數曰、酒肉僧。豈堪爲師法耶。腰包盡去。惟慈明大愚泉大道等。六七人在耳。無徳翌日上堂云、許多閑神野鬼。祗消一盤酒肉。兩陌紙錢。斷送去了也。法華經云、此衆無枝葉。唯有諸貞實下座。

（堀　祥岳）

【一七一五】陰錢

①紙錢。又名陰錢。

羣談採餘［四ノ幼聡五丈］云。王勃過長廬。爲神焚陰錢十萬。

（並木泰淳）

【一七一六】寓錢

①忠曰。紙錢言寓錢。謂鏤紙寓錢義也。見紙錢處。

（並木泰淳）

【一七一七】瘞錢

①唐書云。漢以來。葬喪。皆有瘞錢〈詳紙錢處。〉

②大慧普説云。漢魏已前。多埋錢。冥冥之中。亦能享受〈詳紙錢處。〉

③　忠曰。日本俗。送亡。柩内著銅錢六紋。名六道錢即瘞錢義也。

（並木泰淳）

【一七一八】寄庫錢

①忠曰。蓋漢魏瘞錢也。寄者。猶如託人寄物於他方。即託新亡人。寄錢於冥庫。請免亡者之罪也。

②佛祖統紀云。世有用紙錢。寄庫者〈紙錢處詳引。〉

③龍舒［四ノ十八丈］淨土文云。予遍覽藏經。即無陰府寄庫之説奉勸世人。以寄庫所費。請僧爲西方之供。一心西方。則必得往生。若不爲此。而爲陰府寄庫。則是志在陰府。死必入陰府矣。譬如有人。不爲君子之行。以交結賢人君子。乃寄錢於司理院獄子處。待其下獄。則用錢免罪。豈不謬哉。

④横川育王録［十二丈］施主寄庫上堂云。堅牢庫藏各各有。珍寶且非金與銀。今日婆婆須認取將來免得問他人。

（並木泰淳）

【一七一九】香錢

①敕修清規［下一ノ四丈］知殿云。施主香錢。不得互用。

②　忠曰。此即佛前。資助香費之錢也。余謂。與香奠義不同〈又見香奠處。〉

（並木泰淳）

【一七二〇】回祭

①敕修清規［下一ノ五十八丈］亡僧大夜念誦云。預報庫司。造祭食。差人鋪排祭筵。鄉人法眷。作祭文。納庫司錢。回祭。

②　解者曰。先報庫司。造祭食。後還其費用。此名回祭。

（並木泰淳）

【一七二一】回財

①舊説［敕鈔八ノ卅一丈］曰。施主就寺修薦。或未納支費見錢。且借常住財。營辦後時施主。如數償之。此言回財

②　忠曰。但是回祭。訛言回財耳。

禪林象器箋卷第二十　大尾

禪林象器箋全二十卷　校譌

寛保元年辛酉三月朔日資始

毎日二十紙　至五月廿六日

關功　八十九翁無著道忠識

印　印

（並木泰淳）